

MUGENと共に

アキ山

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

その身に宿すは、第三の『無限』^{MUGEN}
己が頼るは、幾多の死を乗り越えて掴み取った奥義・絶招。

この世界にラブコメは無い。

ハーレムも美少女も不要。

あるのは暴力と神々の謀略。

そして未だ癒えることなく、鮮血を垂れ流す遺恨のみ。

そんな世界で家族の身命を背負った男が、孤拳一つを掲げて吼える。

誰が呼んだか『ハイスクールD×D』改め『真女神転生・MUGEN』

着実に迫りくる終末の足音。

その時、男が求めるのは家族との安寧か

それとも破滅の果ての頂点か。

目次

序章	1
1話	7
2話	26
3話	45
4話	64
閑話『来ないで！ mugenの森』	83
5話	110
6話	125
7話	140
現時点におけるキャラクタープロフィール	165
8話	185
9話	208
閑話『とある1日』	234
10話	252
11話	270
12話	298
13話	323
14話	356
閑話『兵藤一誠救出作戦(序)』	378
閑話『兵藤一誠救出作戦(破)』	409
閑話『兵藤一誠救出作戦(急)』	435
閑話『兵藤一誠救出指令(結)(前編)』	464
閑話『兵藤一誠救出指令(結)(後編)』	502
15話	528

16話	17話	18話	19話	20話	現時点におけるキャラクタープロフィール	閑話『駒王神社業務日誌』	21話	22話	23話	小ネタ『無限の闘争連絡ノート』	24話	25話『姫島家冬木見聞録1』	26話『姫島家冬木見聞録2』	27話『姫島家冬木見聞録3』	28話『姫島家冬木見聞録4』	閑話『駒王神社業務日誌 7〜8月』	29話	30話	31話	32話	33話	34話	閑話『平行世界での話』	
551	573	599	628	650	678	715	728	755	775	801	815	845	866	898	917	960	976	995	1026	1043	1070	1094	1125	1143

閑話『精神と時の部屋・修行日記』

閑話『獅子王・地獄変(1)』

閑話『獅子王・地獄変(2)』

閑話『獅子王・地獄変(3)』

閑話『獅子王・地獄変(4)』

閑話『獅子王・地獄変(5)』

閑話『獅子王・地獄変(6)』

閑話『獅子王・地獄変(7)』

接続話『駒王神社業務日誌』(二学期)

35話

1419141013831361132212931265123612011168

序章

そこは白に支配された空間だった。

天も地平線もない、足がついているが地面を見ることもできない奇妙な世界。

そんな中、俺の前で仕立ての言い背広姿の老人が、高級そうな椅子に腰かけて豪華な机に置かれた俺のノートPCらしきものを起動させ、繋がったゲームパッドを弄っている。

画面に映っているのは、PCに入れていたゲームの中でひと際大きな容量を占めていた格闘ゲームエンジン『MUGEN』だった。

『MUGEN』とは、1999年ごろに開発されたフリーの2D格闘ゲームエンジンだ。

互換性の高いシステムと比較的手軽にキャラクターを作成できる事から、国内海外の有志によってカプコンやSNKはもちろん、マイナータイトルや同人ゲーム、漫画にアニメ、他のジャンルのゲームに完全オリジナルと数多のキャラが造られた。

そしてその多くがインターネットでアップされていた事から、個人でも時間と手間をかければ、参戦人数数千人という究極の格闘ゲームを創ることができる夢のツールだ。

俺も黎明期にその存在を知ってから、下火になった現在まで本体やキャラクターをアップグレードしながら延々と手を加えてきた。

「見事なものじゃな。ステージにBGMのセッティングは完璧。キャラもパラメータを調整して性能差があっても絶対勝てないモノはないようにしてある」

画面を見ながら呟かれた老人の感想に、俺は照れながら小さく笑みを浮かべた。

小学生の頃に『ストリートファイターII』を知って以来、青春をゲーセンの格ゲーと共に過ごした俺にとって、『MUGEN』はまさに夢のツールだった。

格闘ゲームのブームが下火になり、世間が忘れ去ろうとしても青春

をかけて覚えたキャラと技術でもう一度遊べる場所。

寂しいおっさんの懐古主義と言われても、俺にとって『MUGEN』は死ぬまで手放すことができないものだった。

そう、死ぬまで……

「そうだ。俺、旅行先の事故で死んだんだった」

「ようやく思い出したかね」

呆然としながら口から零れた言葉に、老人は皺だらけの顔を破顔させながら振り返る。

「お前さんは死んだ。じゃがこれは本来予定されておった死ではない」

「え……という事は俺は死ぬはずじゃなかったってことですか？」

「それでもあるし、それでもないと言える」

疑問譜を浮かべる俺に、老人はまあ聞けと言葉をかけ話を続ける。

「人の生とはな、それ自体が魂の修行なのじゃ。人はその生涯の中で多くの事を体験する。思わぬ幸運に喜ぶこともある、意中の者と結ばれ幸せを噛みしめる事も、理不尽に涙する事も、他者を妬み恨む事もあるじゃろう。そう言った喜怒哀楽全てが魂の糧となり、魂が成長すれば人は新たな舞台へと巣立っていく」

「しかし、中にはお主のように運命の急変故に修行の道半ばに、その生涯を閉じてしまう者もおる。普通は道半ばの者は再び現世に生を受けて修行を続けるのじゃが、お主は何故か現世との繋がりが薄くての。どうにも転生させることができないのじゃ」

下腹部まで伸びた髭を扱きながら思案顔になる老人の言葉に、俺は気の抜けた声しか出せなかった。正直、自分には手に余る類の話だ。

「そこで、お主は下位の世界の一つに転生させることにした。俗に言う創作物の世界という奴じゃが、生を得る以上現実に変わりはないから心するよ様に」

「はあ……」

「随分と気のない返事じゃの。まあ、現状に理解が追いついておらんじやろうから仕方ないか。あとは、あれじゃ。下位の世界はこちらとは違って危険も多いでな、保険として特殊能力を一つ与えておるの

じゃ。お主、何かリクエストはないかの？」

うん？　なんか壮大でイイ話だったのに、急に二次創作の神様転生ものの臭くなってきたぞ？

「えっと、お爺さんの話なら人生って生きることが修行なんですよね？　なら、特典なんて必要ないんじゃないですか」

「確かにそう言った。しかしな、生まれて大して何もせず死んでしまっただけは修行もなにもあったものではない。現世なら短い生も修行になるが、下位世界はそうはいかんのじゃ」

「つまり、現世と下位世界じゃ人生の経験値に差があるってことではないですか？」

「そう考えてもらってよい。それに下位世界はその成り立ちから現世に比べ、理不尽な危険が多い。それから自身の身を守り、しっかりと生きるための一助になればと思っただけの特典を与えるじゃ」

ふむ、理解はした。二次創作なんかよりよっぽど親身になった理由だ、これは安易なチートなんてふざけた選択肢は選べないぞ。

「ところで、僕の他にこんな事態になった人は、どんな選択肢を選んだんですか？」

「ふむ。大体は『王の財宝』や『写輪眼』。中には『無限の魔力』や『ニコポナデポ』などを求めた輩もおったな」

おおう、見事なテンプレ転生者ですね。今の説明を受けてそれを選んだ奴はある意味凄いぞ。

「そう言えば、お主の前に若い女子が来たが、変わった特典を求めておったぞ。確か『戦国奇譚妖刀伝』の香澄の綾女の末裔の血と忍術の才能、あと妖刀じやな」

おいおい、『戦国奇譚妖刀伝』って言ったら1980年代のオリジナルビデオアニメOVA黎明期の名作だぞ。

まあ、確か動画サイトとかで見る事は見れたはずだから、知ってる子がいても不思議じゃないが。今から30年以上前の作品特典に希望する女の子って、どんなだよ。

「……えらく渋い選択肢ですね。それ本当に若い女の子だったんですか？」

「おう。バスの事故で亡くなった15歳の女子高生じゃった」

……そんな女子高生嫌だなあ。

「それで、お主は何を望むんじや。相当な無茶でもない限り叶えてやるぞ」

老人の言葉を受け、頭の中に様々な選択肢が浮かんで消える。正直、どんな世界に生まれ変わるか分からない以上、どれを選んでもうまくいく自信がない。

煮詰まり始めたのをリセットしようと軽く頭を振った時、ふと机の上のPCで動いている『MUGEN』の画面が目に入った。

……これだ！

「お爺さん、俺の『MUGEN』のデータ。これを結界だか異界だかで現実に変換して、実際に闘えるようにできませんか」

「闘えるように、じゃと？ この中のキャラクターの能力を得るのではなくか？」

「はい。お爺さんは言いましたよね、人生は修行だと。なら、生きる為の力だつて安易に得るんじやなくて俺自身が流した血と汗で掴むのが筋だと思っんです。だから俺はそのための手段として、20年来の付き合いである俺自身が組み上げた『MUGEN』を使いたい。俺が子供の時から憧れ、時に画面越しとはいえ一緒に闘った格闘家達の手を借りて強くなりたいんです」

俺の今考えられる精一杯の言葉で紡いだ願いに、唸りながら老人は目を瞑った。

「特典とは危険な世界に生まれた際の保険じや。もしかしたら、まったく必要にならん世界に生まれる可能性もある。それでも良いのか？」

「はい」

「お主の『MUGEN』の中には邪悪な心根の者も多くおる。その者と拳を合わせればお主は死ぬかもしれない。死ななかつたとしても、その心に影響を受ける危険性もある。何より、お主自身が力に溺れるかもしれないぞ？」

「そういつた誘惑に打ち克つ事も修行の一つでしょう。それにその中

には邪悪なものと同じくらい正しい者もいます。そんな先達達がいれば、俺は大丈夫です」

「……よかろう。今までの者よりは十二分に真つ当な意見じゃ。これはお主の心象風景を具現化する能力として魂に刻み込んでやろう。そして、お主が一定の能力になるか対戦相手に勝つことで、その相手の技を習得出来る様にしてやるわ。それと、安全措置で負けても死なないようにもしておく。あとは……格ゲー仕様の物理現象の習得もオマケにつけてやるかの」

「えーと、なんかエライ特典になつてる気がするんですが……とりあえず、格ゲー仕様って何ですか？」

「あれじゃ。緊急回避時は投げ以外無効とか、ブロッキングでどんな攻撃も弾けるとか、あとは生身で武器をガード出来るようになるとかじゃな」

本当にエライチートでした。

与えられた特典のどんでもなさに驚いてると、視界が大きく歪みだした。老人の姿もゆっくりと歪なものとなり傍らの机も消える。そしてPCは光の粒子となって俺の身体に吸い込まれていった。

「ふむ。どうやら時間のようじゃの」

「え、もうですか」

「特典の付与も今すんだしの。ここは駅で言えば列車が来るまでの待合室のような物、長居するような場所ではない」

「……最後に質問なんです、前世記憶こゝって生まれる時に消えてしまふんでしょうか」

「わからん。下位世界に生まれる者は、下位世界の法則に従うようになっておる。そういった記憶がその際にどうなるのかは、ここからでは観測できんのじゃ」

「そうですか」

「心配するな。その記憶を失おうとお主はお主。新たな生を精一杯生きればよい」

「はー」

耳鳴りのような高音と共に視界は歪みを増し、意識がゆっくりと薄

れていく。いよいよ、この場所にいる時間は終わりらしい。

「さらばじゃ、◆◇●××。よき生をな」

「ありがとうございます」

薄れゆく意識の中で、俺は精一杯の感謝を込めて頭を下げた。身体
の感覚がほとんどないから、うまくできたかどうかは分からないが少
しでも伝わればいいな。

1話

微かに、誰かに呼ばれた気がした。

深い水の底から引き上げられるように意識が浮上する。

水面を抜け、紅く染まった光が目を焼いてようやく混濁した意識から抜け出した。

「やっと起きた。1年なのに授業サボるって、なに考えてるのさ」

やや重さが残る頭に活を入れながら腫れて塞がった瞼を開くと、女の顔がうつすらと映った。

腰まで伸ばした母親譲りの艶のある黒髪と薄い紅色の瞳。双子の妹の美朱だ。

「予習は済ませてるし、出席回数の計算もしてる。多少サボっても留年なんてヘマはしねえよ」

重い頭と軋む身体に活を入れて身体を起こすと、腫れて熱を持った頬を少し冷たくなった春の風が撫でていく。

傾き始めた太陽は俺たちのいる駒王学園の屋上を紅く染めている。

腕時計を見ると針が示すのは16時24分。

無限M U G E Nの闘争E Nの中で奴と闘り合ったのが昼休みだったから、随分と伸びていたことになる。

「まったく、また無限M U G E Nの闘争E Nで闘ってたんでしょ。いい加減にしないと身体壊すよ?」

「分かってるよ。今日はもう使わん」

「それで、私は朱姉と一緒にオカ研に行くけど、慎兄はどうするの?」

「ああ、なんか新入りが来るとか言ってたっけ。一応顔だけは出してく」

「だったら、怪我を治してから来てよ。そんな血まみれの顔を見せたら、心配かけるだけだよ」

呆れたのを隠そうともせず、屋上の入り口を指さす美朱。

その腰の後ろに差した小太刀に目が留まった。

古くとも上等な意匠を施された青紫色の柄に同色の鞘。

見ていると刃を収めているにも関わらず、身体を流れる墮天使の血

が警戒を示してしまおう。

この刀は『香澄^{かすみ}の妖刀』。

忍の祖と言われる影忍三派の一つ、信濃の香澄忍軍の中で伝わっていた御神刀で、他の二派に伝わる二振りの御神刀と合わされば魔を断つ力を発揮すると言われている。

お袋の母親が香澄の忍の末裔で、婆ちゃんからお袋、お袋から美朱へと受け継がれた代物、という事になっている。

「いいじゃねえか、このまま行つたつて。こういう顔も俺にとつちやあ勲章なんだよ」

「お馬鹿。そんなボコボコの顔見せたら朱姉がまた泣くでしょうが」

ふん、相変わらず男の美学がわからない奴だ。

だいたい、俺がボコボコになってるなんて日常茶飯事じゃないか。伸びている間にある程度はダメージが抜けたのか、多少痛む程度に回復した身体で立ち上がった俺は、自然体のままゆっくりと息を吐きだした。

丹田を意識した呼吸は息吹となり、急速に練り上げられた氣は経絡を通る中で増幅され、両掌に収束して蒼い炎を形作る。

十分な氣が収束すると同時に地面に両掌を叩き付けると、解放された氣は爆発的な衝撃波となって、周囲と天を薙ぎ払う。

「……レイジングストーム」

呆然と呟く美朱に俺は口角を吊り上げた。

本家に比べれば氣の精度がまだまだ甘いし無敵時間も無いが、形になつただけでもよしとすべきだろう。

「ちよつ、いつの間に習得したのさ!?!」

「見れるようになったのは今日だ。散々食らいまくつたんだから、この位はできなくちやな」

美朱に応えながら、氣を散し残心を終えた身体を軽く解す。

手をついた床が揺り鉢状に陥没しているが、見なかつたことにする。

うむ、妹よ。

そんな胡乱げな視線を兄に向けてはいけない。

お前は何も見なかったんだ、いいね。

「いいわけあるか！」

仕方ない、今度タイガーホールでお前の欲しい同人誌一冊買ってやるから、口を噤め。

「3冊は確定、あとグッズも付けろ。話はそれからだ」

ちっ、がめつい奴め。

「仮にも忍者を買収しようとするんだから、代償は高くなるに決まってるじゃない」

ふふん、と中程度の膨らみでしかない胸を張る美朱。

だがしかし、バスト三桁という巨強である朱乃姉に比べればまだまだ小粒と言わざるを得ない。

「朱姉と一緒にするな！ あのおっぱい魔人は異常！ 異常なの!! あんなのエロ同人くらいしか需要は無いんだから!!」

あ、朱乃姉。

「ヒイツ!? 今のは嘘ですう！ お姉さまの美しさは世界一！ だから電撃はやめて！ 新しい世界に目覚めちゃうッ！」

俺の軽いフリに階段室の隅で頭を抱えてガタガタと怯えだす美朱。

お前はいつたい朱乃姉に何をされてるんだ。

「慎兄は知らなくていい事だよ！ ううっ、チクショー！ 騙された！」

「仮にも忍者なら気配くらい読めよ。憧れの綾女様が草葉の陰で泣いてるぞ」

「うるさいな！ 朱姉は気配もなくいきなり背後を取る時があるんだよ！ 朱姉ネタにしてて、後ろから急に『あらあら、うふふ』って言われてみる！ チビるぞ！」

なにそれ、怖い。

「だから朱姉の話は止めよう、今背後取られたらチビる自信がある。それよりも、今から行くんだから顔ちゃんとして来なよ」

蒼い顔で情けない自信を披露した美朱は、目についた男子トイレを堂々とした仕草で指さした。

うむ、相変わらず残念な妹である。

「うっさい！ さっさと行く！」

「へいへい」

追い立てる為の蹴りを躲しながら、俺はトイレの中に入った。手洗いに備えられた鏡には、固まった赤黒い血を張り付け、顔中がパンパンに腫れた男の顔が映っている。

いつもながらの負け犬顔である。

だが、今回は手応えがあった。

もう少し対戦経験を積めば、通常のギース・ハワードは倒せそうだ。

「羅生門は体得できたし、次は阿修羅烈風拳でもパクってやるか」

腫れた瞼から覗く目をギラギラとながら、狼のような笑みを浮かべる鏡の中の己。

その凶相に思わず背筋を寒くした俺は、目を閉じた。

「神武不殺。相手を生かす拳こそ、真の拳。傷つけるだけの拳ならば、振るうに値せず……」

紡ぐのは、最初に武の基礎を覚えてくれた、生きる為にはぐれ悪魔の血に手を染めてから、師と呼ぶことが出来なくなった人の言葉だ。どの口でとは思いますが、実際役に立つのだから、恥を忍んで使わせてもらう。

俺の持つ無限の闘争は正邪表裏一体。

それは俺の身に着けた武、其の物でもある。

だからこそ、己を律しなければならぬ。

『殺める術を学ぶ事で、命の大切さを知る』

老年に達するとういうのに、筋骨隆々の身体を締め、白い髭を扱きながら教えてくれた、神武不殺の意味。

こんな賞金稼ぎ紛いのロクでなしでも、力に溺れて墮ちることのない為の、心支えになってるのだ。

改めて視線を戻した鏡には先程までの凶相の男はいなかった。

映るのは、傷だらけの未熟者のみ。

その事に軽く安堵の息を漏らして、俺は蛇口を捻り冷たい水を顔に叩き付けた。

多少傷は痛むがこれはいつもの事。

それ以上に熱を持つ顔に冷水は心地よく沁み渡る。

あらかた血の処理が済んだら今度は身体を中心に意識を向ける。

先ほどまでの氣を練る感覚とは違う形で、そこにある力を引き出してやると右手が薄っすらと緑色の光に包まれる。

俺の中にある治癒を司る神セイクリッド・ギア 器トワイライト・ヒーリング 聖母の微笑。

アザゼルのおっちゃん曰く、治療系セイクリッド・ギア 神 器ではトップクラスの希

少なものらしいが、俺に掛かれば修行用救急箱程度の認識しかない。

おっちゃんは勿体ないと嘆いていたが、気にはしていない。

無限MUGENの闘争とのコンボは永遠に修行ができるヴァーリに大好評なんだぞ。

閑話休題。

癒しの力が籠った右手を無造作に顔面に当てると、顔の晴れはみるみる内に退いていき、一分ほどで見れる面に戻った。

うむ、これでオカ研に行っても引かれることは無いだろう。

襟にはまだ赤い染みが点々としているが、これは仕方が無い。

美朱が待っている事だし、とつと便所から出る事にしよう。

さて、いい機会だしここで自己紹介をしておこう。

俺は姫島慎。

墮天使やら悪魔やらに縁のある、ちよつと変わった高校一年生だ。

◇

さて、オカ研のある旧校舎に着くまで、少し昔話をしよう。

あの老人が転生の待合室と言った空間から旅立ち、この世界に生まれ落ちた俺は、幸いにも前世の記憶を失わずに済んだ。

生を受けた姫島家は、神職をしている日本人の母と墮天使の父という、かなり変わった家庭だった。

それでも、2つ上の朱乃姉や美朱と共に過ごす日々は、確かに幸せだった。

しかし、それも長くは続かなかった。

5歳の時に墮天使に恨みを持つ一団が、親父と俺達兄弟の命を狙っ

て襲撃してきたのだ。

物心ついてから老人から貰った能力、無限の闘争^{M U G E N}で修練を続けていた俺は、当然迎撃に出た。

しかし、訓練された大人の集団相手にガキが敵うはずがなく、無様な刀傷を刻まれただけだった。

その襲撃でお袋は命を落とし、連中から墮天使の憎悪を刷り込まれた朱乃姉は、間に合わなかった親父と決別。

親父もお袋を護れなかった負い目から、俺達を引き取る事ができずに一家離散という結果になってしまった。

年齢一桁のガキ3人で生きていくなんて、今にしてみれば無謀の一言だ。

でも、当時の俺はお袋を護れなかった事から無限の闘争^{M U G E N}の中に入りびたっていた為、そんな事を考える余裕なんてなかった。

剛拳師匠にぶん殴られて、やっと現状に気付いたんだから、情けないうつたらない。

どこかに行つてはボロボロになって帰ってくる俺は姉妹達にえらく心配をかけていたらしく、無限の闘争^{M U G E N}の事を説明して実際に中に入れたら、朱乃姉がポロポロ泣きながら怒ってきたのには驚いた。

その後、無限の闘争^{M U G E N}が切っ掛けで美朱が記憶を保持した転生者。

しかも老人が言っていた『戦国奇譚妖刀伝』を特典にした女子高生だった事が判明した。

そうして現状の拙さを再確認した俺達は、朱乃姉に内緒で親父とコンタクトを取った。

こちらとしては兄妹全員を引き取ってもらうつもりだったのだが、親父は朱乃姉は自分を憎む事で心のバランスを取っているからと引き取るのを拒否。

お袋の一件で朱乃姉が精神的に脆くなっていたのは、俺達も気づいていたので何とか納得できた。

とはいえそんな重い事を、当時6歳のガキに話すのはどうなのか。

代案として、朱乃姉に分からない様に援助して貰う事で話を付き、俺達は朱乃姉について旅をする事になった。

その後、各地を転々としながらも成長した俺達は、リアス姉と知り合いグレモリー公爵家の庇護を受けて、今に至るわけだ。

さて、オカルト研究部。

通称オカ研は、普段人が立ち寄らない旧校舎の中にある。

もちろん伊達や酔狂でそんなところに部室を構えているわけではなく、オカ研はこの駒王学園を支配する悪魔の活動拠点の一つなのだ。

うん、漫画の読みすぎだつて？

そう思うのも仕方ないが、生憎とこれはマジな話。

この世界には天使や悪魔、堕天使に多神教の神々まで存在する。

で、こいつらは人間界に結構出張していて、場所によっては領土まで持っているのだ。

ちなみに、俺達が住む駒王町は悪魔の貴族の一つグレモリー家に管理を任されている。

何故管理となっているかというと、二次大戦後のドサクサで悪魔が実行支配していたところを、日本神話勢が支配権を取り上げた為だ。

その後両者の間で土地の所有は日本神話だが、管理権は悪魔に委託する事で話について、現在に至っているわけだ。

「ねえ、慎兄。今月の冥界側からのはぐれ悪魔討伐の報奨金って、もう届いてるよね？」

「確か、振り込み予定は昨日だった筈だな。もらつとくか？」

「うん。美朱ちゃん、このままじゃ干上がっちゃう」

「今月初まってまだ半月も経ってねえだろ、金使い荒すぎるぞ」

「私は趣味に生きる女なの。慎兄みたいな修行僧と一緒にしない」

「誰が修行僧だ、誰が」

「年がら年中無限の闘争使つてシバキ合ひしてる慎兄が」

「お前だつて昔は入り浸つてただらうが」

「あれは忍術の修行の為ですう」

馬鹿話をしながら木造の旧校舎を進んでいると、数分でオカ研の入り口に到着した。

古びた扉越しに感じる気配は6つ。

オカ研のメンツは俺と美朱を除けば5人だったので、新人君はもう到着しているらしい。

後ろから裾を引かれたので振り返ると、美朱が安物のサングラスとココアシガレットを手に、ワルい笑顔を浮かべている。

……ああ、今日は借金の取り立て風か。

「邪魔するでえ」

ドスの効いた関西弁と共にドアを開けると、部室内の目が一斉にこちらを向く。

視線の種類は、驚愕1に呆れが5。

新人君以外のリアクションは厳しいけど気にしない。

ミナミな帝王を意識しながらリアス姉の執務机の前に移動すると、掛けていたサングラスを外しココアシガレットを啜える。

「はあ……。慎に美朱、今日はどんな遊びなのかしら？」

「遊びとは人聞きの悪い。リアスはん、今日は取り立てに来ましたんや」

「取り立て？」

「そうです。今月のはぐれ討伐の報奨金、支払いは昨日でしたな。頂戴にきましたで」

「そう言えば、そうだったわね。大公から届いているわよ」

「そら結構。しかし、あんたも難儀なもんでんなあ」

「そや。ワイ等の口座に直接入金できるようにしたら、こんな手間掛けんですむのに」

「貴方達はまだ子供なんだから、こんな大金直接渡すなんてできないわよ。……あらっ」

子分役の美朱のセリフに、苦笑いを浮かべていたリアス姉の手が止まる。

「どないしましたんや、リアスはん」

「おかしいわね、ここに確かに入れておいたのに……。ねえ朱乃、私の机に入れてあった慎達への報奨金、知らないかしら？」

「それなら昨日届いた際に、私が部長から預かりましたわ」

「……そうだったかしら？」

「ええ」

リアス姉と朱乃姉のやり取りに、美朱がこの世の終わりのような表情を浮かべる。

朱乃姉の管理になったら、毎月の小遣をいをしっかり貰っている美朱には、金が渡る確率は非常に低くなるからだ。

破綻寸前のあいつの財布には致命的だろう。

「リアスはん、困った事を仕出かしてくれましたなあ」

「えつと……。ほら、大金をこんなところに仕舞っとくのは不用心だし、朱乃は家族だから渡しても問題ないかなって……」

目を逸らしながら段々と小さくなる弁明に、俺は啞えたココアシガレットを燻らせるふりをした。

「眠たい事ゆうてもうたらあきまへんな、リアスはん。金銭の支払いは本人に。世の中の常識でっせ」

「そうや！ あんたのお陰でワイ等オマンマの食い上げや！ こうなったら、あんたをトルコ風呂に沈めてでも……ヒイツ!?」

涙目になり始めたリアス姉を見て、凶に乗った美朱の不用意なセリフに電撃が飛んだ。

思わず放たれた方を見ると、そこには笑顔の朱乃姉の姿が。

「美朱、私の管理に何か問題でも？」

「御免なさい、調子に乗りました!!」

雖もみ三回転半捻りという、高難度すぎるジャンピング土下座を披露する美朱。

何という忍者の体術の無駄遣い。

あと、トルコ風呂って古いな、お前。

「まあ、冗談は置いといて。リアス姉、今度からは届いたら俺等に連絡くれよ。金で揉めたら面倒くさいんだから」

「ごめんなさい、次からはそうするわ」

「ちなみに今回の報酬って幾らだっけ？」

「先月は8体討伐だから、1200万円ね」

「母屋の耐震工事を依頼しようと思ってたので、丁度良かったですわ」「そんなあ！ 私の新作ゲームとラノベの費用があ!？」

「美朱、貴方には十分なお小遣いを渡してるわよね？」

「今月は新作ラッシュだから、全然足りない！ サブカル趣味は修羅の道なんだよ!!」

「あらあら、無駄遣いはいけないわ。これはお小遣いをカットしなくちゃならないかしら?」

「にやあああああ! 藪蛇ったあ!」

自ら地雷を踏み抜いて盛大に崩れ落ちる馬鹿1名。

主張の熱意は買うが、言う相手が悪いわ。

「うう……。レベツちゃんやシエムハザおじさんなら分かってくれるのに」

「美朱、貴族の娘を洗脳しないで。この前フェニックス卿から家にクレームが来てたわよ」

「同好の友達なだけだよ! そもそも、あそこは奥様が『ゴツドマーズ』で腐ってる時点で手遅れだから!!」

そうか、フェニックス夫人は貴腐人なのか。

知りたくない事実だった。

悪魔を腐海に落とすとは、日本のサブカルも業が深いな。

え、シエムハザさん?

よ。その馬鹿と、一緒に夏と冬の祭典の常連やってる時点でお察しだよ。

「朱乃姉、確かリフォーム費用って800万くらいだったろ。残りから5万くらい美朱にやってくれよ」

「高校生で2万円は、月のお小遣いとしては十分な額ですわ。それで足りないというのは、使いすぎだと思いの」

「それは同感だが、自分で稼いだ金を一銭も使えないってのはちよつとな」

「そ、そうそう! 労働のモチベーション維持には、ご褒美は必要だよ!!」

俺の言葉に即座に復活して、乗っかろうとする美朱。

け。こういうのは当事者が口を挟むと大概逆効果になるから、黙つと

「私としては、もう少し手を緩めてほしいのだけど？ 貴方達がここのはぐれ悪魔を根こそぎ狩るから、実戦経験を積む機会がないわ」
「俺等のオマンマが食い上げにならない程度に善処するよ。頼むわ、朱乃姉。俺の分の貯金減らしてもいいからさ」
「おお、おおお……!! 慎兄、貴方が神か!?!」
「オーバーすぎるわ。ほら、お前も朱乃姉に頼め」
「お姉さま……。どうか、どうか！ この愚かな妹にお慈悲をおおおお」

なんとという深い深い土下座。
そこまでしてグツズが欲しいか。

我が妹ながら残念すぎる。

籠った情念に、リアス姉や朱乃姉もドン引きである。

「まったく貴方達は……。わかりました、美朱にはちゃんとお金は渡します。これが最後だから無駄遣いはダメよ」

「やったあ！ 朱姉大好き!!」

土下座の体勢から、カエル飛びのように朱乃姉に抱き着く美朱。

豊かすぎる胸に顔を埋めるその表情は、至福の一言だ。

お前、いつもそこを怨念の籠った目で見てただろ。

「朱姉のおっぱいが羨ましいだけだ！ パフパフに罪はない!!」

いや、ドヤ顔でそんなカツコ悪い事豪語すんなよ。

見ろ。

騒ぎを見てた塔城が、残念な物を見る目で見てるじゃないか。

「……美朱がダメ人間なのはいつもの事ですから
なんかすまん。

祐斗兄、フォローよろしく。

「いや、そこは自分でやろうよ」

残念ながら、俺にはそんなスキルは無い。

出来るとしたら、餌付けして猫じやらしで遊んでやるのがせいぜいだ。

「……私を何だと思ってるんですか?」

何と聞かれれば、バキューム式大食漢ツンデレ猫娘と答えざるを得

ない。

「……ふんー」

「おっ……と!!」

我ながら的確な表現のどこが不満だったのか、殴りかかってきた塔城を当て身投げで床に転がす。

相手の攻撃を捌きながら体勢を崩し、足払いと共に顎を力チ上げた掌で後頭部から地面に叩き付けるのが本来の形だが、身内に掛けるならこれで十分だ。

自分が床に転がされているのが理解できなかったのだろう。

呆けた顔を浮かべていた塔城は、自身の状況に気付いて即座に距離を取る。

「塔城。お前、スピード鈍ったんじゃねえか？」

「……貴方の反応がまた速まつてるだけです。この化け物」

俺の問いかけに苦い表情で応える塔城。

言われてみれば、ギースに挑む前に当て身投げの慣熟として、ダツドリーや紅丸といったスピードタイプとばかり闘っていたな。

「確かに、今の慎の動きは僕でも目が追いつかなかった。また、むこうで随分と修練を積んだんだね」

「覚えた技の完熟とボス対策にな。それでもまだまだだ、今日もボコボコにノされたよ」

「ほどほどにしないと、また朱乃さんが泣くよ？」

「……それ、美朱にも言われた」

「はい、そこまで。今は新入部員に大事な話をしてるんだから、みんな静かに」

各自好き勝手やったせいで微妙になった空気を払うように、リアス姉が号令をかける。

茶番やってて気づかなかつたが、ソファに座っているのは駒王学園でも屈指の変態である、2年の兵藤一誠だ。

しかも、気配からするに奴さん悪魔に転生しているな。

「御免なさいね、イツセー。話の途中でヘンな事になっちゃって」
「アツハイ」

「朱乃姉、あのおっぱいマニアが新入りなの？」

「おっぱい……。美朱、初対面なのに失礼でしょ」

「でも、1年の間じゃ有名だよ。駒王学園の変態三銃士。スケベの1号、ロリコン2号、おっぱいマニアのV3って」

「何その綽名!? ちょっとカッコイイけど、訴訟物の侮辱だよね!」

「……その綽名、広めたの美朱じゃないですか」

「なんですと!?!」

「フツ、確かに黒幕は私だが、反省も後悔もしない。この美朱の座右の銘は『引かぬ! 媚びぬ! 省みぬ!!』だ!」

「いつも朱乃姉に甘えてる奴がどの口で。あと、お前は石ノ森先生と仮面ライダーに謝れ」

塔城の冷静なツツコミに、とつてもイイドヤ顔で胸を張る美朱。

少なくとも、金欲しさにガチ土下座した奴の座右の銘ではない。

まあ、反省も後悔もしない意味で『省みぬ』は合ってるので、そろそろ外部措置として朱乃姉に電撃の一つでもお見舞いしてもらおうべきか。

「おいやめろ」

お前も心を読むな。

「はいはい。話が進まないからお馬鹿な会話はここまでよ。慎、美朱。イツセーに自己紹介して」

「あく、1年の姫島慎つす。副部長の弟で横の馬鹿とは双子なんで、姉妹共々よろしく」

「1年の姫島美朱です。趣味はゲーム、アニメ、漫画全般。よろしくね、先輩」

「ああ。俺は2年の兵藤一誠だ。気軽にイツセーって呼んでくれ」

立ち上がって手を差し出してくるイツセー先輩と握手を交わす。

ふむ、男には辛辣と聞いていたが噂とは違うな。

「ところで、イツセー先輩はこの事どれくらい聞いた?」

「あく、この世に悪魔とか堕天使とかがいて、俺がリアス部長の下僕悪魔に成ったってこと。あとは上級悪魔になればハーレム王になれるってことくらいだ!」

ハーレム王の部分だけ、えらく気合を入れて答えてくれるイツセー先輩に、思わず苦笑が浮かぶ。

「噂に違わずエロいね、V3。でもハーレムとか、フィクションの世界だけのものだと思うよ?」

「そんなことは無い! 部長だつて保証してくれたんだぞ!! あと、その呼び方はやめてください!」

「えー。あれつて現実にはすごい厳しいらしいよ。金銭面の負担も凄いいし、複数の女性を囲ってる時点で外聞も悪いよね。それに持つてるのは大体権力者だから、子供ができたら後継者問題で揉めるだろうし、何よりセツ〇スつてフルマラソン並みに体力を使うつて聞くからなあ。複数人とヤツたら死ぬんじゃない? 確か腹上死だったっけ、そういう死に方。あとは、そのハーレムのメンツに刺されないといいね」

「人が夢見てんのに、嫌な事言うなよ!! それと嫁入り前の娘がセツ〇スなんて言ったらいけません!」

「……人の夢と書いて儂い」

「小猫ちゃんまで!?! くっそー! こうなったら絶対ハーレム王になって、みんなの目の前で女の子とイチヤイチャしてやるからな!」

「ははは、童貞乙」

「いやあああああッ!!」

美朱の止めに頭を抱えて床を転げまわるイツセー先輩。あいつも残念極まりないが女子高生の端くれ、童貞呼ばわりされるのはキツイらしい。あ、美朱が朱乃姉にシバかれた。

「うおお……。女の子に童貞呼ばわりされるのがこんなに辛いとは……」

「いたた……。酷いよ、朱姉」

「自業自得です、いい加減自重なさい」

「……まったく。貴女がいたらどうしていつも話が逸れるのかしら」
「てへぺろ(・ω<)」

呆れるリアス姉に小さく舌を出す美朱。うむ、清々しい位に反省の色がないな。そして、そのネタをリアス姉に使うのはご法度だ。

「ところで、なんでイツセー先輩は悪魔に転生したんだ？ リアス姉がスカウトしたわけじゃないんだろ」

「ああ。それは彼の中に眠る神セイクリッド・ギア器を危険視した墮天使に殺されかけてね。瀕死のところまで悪魔召喚のチラシで私を呼んだのよ。それでまだ生きたいという望みに応えて、悪魔の駒で眷属にしたの」

「墮天使が神セイクリッド・ギア器保持者を？」

「妙だ。神の子を見張る者では神セイクリッド・ギア器保持者の対応を殺害から保護に切り替えたって聞いた。しかも悪魔の領地で住人を手に掛けるなんて戦争の火種になりかねない。……探りを入れるべきか。」

携帯を取り出して、電話帳の墮天使フォルダの一番上の番号にコールする。

「はいはい。慎坊、久しぶりだね。美朱ちゃんたちは元気かい？」

数回の呼び出し音の後に、携帯から聞こえるイマイチ威厳の感じられない緩い感じの声。神の子を見張る者NO. 2で実務の大半を取り仕切っているシエムハザさんだ。

「シエムハザさん、ご無沙汰です。美朱も朱乃姉も元気ですよ」

「そりゃあよかった。バラキエルも一安心だね。それで、なにかあったのかい？」

俺がリアス姉から聞いた事を伝えようと、事態の重さを悟ったのだろう、シエムハザさんの声音が真剣みを帯びる。

「……情報提供ありがとうね。ウチではそんな指示は出してない。アザゼルの趣味もあって神セイクリッド・ギア器保持者はその人が置かれた環境にもよるけど、極力保護の方向に動いてるからね。この方針を徹底させる様に幹部はもちろん、支部の方にも通達済みだ」

「ということは末端による独断ってこと？」

「そうだと思う。こっちも早急に洗ってみるから、何かわかったら連絡してくれると助かる」

「わかった。それで、その墮天使がこっちにちよっかいをかけてきたら？」

「生け捕りにしてくれると嬉しいけど無理はしなくていい。君達を危険に曝してまで確保するほどのものじゃないからね」

「了解」

「グレモリーには、そつちで馬鹿やってる奴等はウチと関係ないから、見つけたら始末していいって伝えといて。あと、危険だと思ったら遠慮なくバラキエルを呼ぶように」

「美朱達にも伝えとくよ。けどなあ。俺等もいい歳だし、頼られても親父も困るんじゃないの?」

「親にとっては幾つになっても子供は子供、頼られれば嬉しいものだよ。それじゃ、美朱ちゃんに今度大阪で薄い本の即売会があるから、一緒に行こうって伝えといて」

「最後で台無しだよ! これ以上家の妹を汚染するのやめてくれませんかねえ!」

「ははは、何を言ってるんだい。美朱ちゃんの業の深さは、僕ごときが敵うものじゃないよ。あの魔界最強の貴腐人、リリースとネタを交わせるんだから」

「リリースも腐ってたのかよ!?!」

「うん。確かルシファアの命日には、毎年ルシファア×ミカエルで作系の薄い本を出してたはずだよ」

「旦那でしかも故人をネタにするとか、冒瀆するにも程があるだろ!!」
「僕もその本見たことあるけど、天界に知れたら戦争待ったなしだろうね」

「ちよつ!?!」

サーゼクス兄やセラフオル姉さんが必死に和平結ぼうとしているのに、そんな理由でおじやんになるなんて酷すぎる。

「それじゃ、この件でくれぐれも無茶はしないようにね」

「え!? ちよ、シエムハザさん!? その本ちゃんと始末したんだろうな、おい!?!」

俺の叫びに返ってきたのは、無情な通話終了の電子音だった。うああ……凄え疲れた。ノロノロと携帯を収めて、リアス姉の方に向き直る。

「慎、どうだったの?」

「神の子を見張る者のNO. 2、シエムハザさんに裏を取ったけど、む

こうは関係ないって言ってる。なんか末端の木っ端墮天使が独断でやってるらしい。見つけたらリアス姉達で始末していいってさ」

「そう。なら、次に見つけた時は遠慮なく消し飛ばしてあげましょう」
不敵に笑うリアス姉だが、俺に反応する余裕はない。リリス作のウ・ス・異本^{薄本}の話の所為で精神的に死にそうだ。本当にこんな事知りたくなかった。

「朱乃姉、俺帰るわ」

「あらもう?」

「慎兄、もう帰っちゃうの?」

「ああ、なんか疲れた。それで二人とも今日は遅いんだろ?」

「ええ。日付が変わる前には帰るつもりだけど」

「そんじゃあ、先に寝てるから。家の鍵は持つてるよな?」

「ええ。大丈夫よ」

「結構。じゃ、帰る時は一人じゃなくて美朱と一緒にな」

「心配性ね。貴方も私達が居ないからって無限^{MUGEN}の闘争^{TENSHOU}に入り浸るのは駄目よ」

「そんな気力無くなったよ。そんじゃイツセー先輩、祐斗先輩に塔城お先っす」

「ああ、お疲れ。これからよろしくな」

「……はい」

「お疲れ様。またね」

「慎。夕食は作り置きのカレーがあるから、それを食べなさいね」

各自の声に手を振って応え、俺はオカ研を後にした。

旧校舎を出ると辺りはすっかり夜の闇に覆われていた。

しかし、イツセー先輩の件が事実だとすれば、俺達は人外関連の事案が起きたのに気付かなかった事になる。

この頃、こつちに侵入してくるはぐれ悪魔が多かった所為で、手が回らなかったというのはあるけど、言い訳にはならない。

成り立ての今は、情報漏洩の危険があるから無理だけど、リアス姉の眷属として馴染んできたなら、ちゃんと謝らないとな。

月明かりと街灯に照らされた帰路を物思いに耽りながら歩いてい

ると、前方に人影が見えた。

腰まで届く黒髪に、胸元が大きく開いた黒のストーツに身を包んだ20代の女。しかし、纏う気配が人間のそれとは違う。オシメが取れる前から慣れ親しんだ悪魔とは別の人外の気配、墮天使だ。

「妙に悪魔臭い人間がいると思つたら、お前セイクリッド・ギア神器所持者だな」

どうやらこちらをただの人間と勘違いしているらしく、あからさまに見下した態度でこちらに近づいてくる墮天使。

俺と美朱は朱乃姉と違いお袋の血の方が濃い為、雷撃と光力は使えても、翼も無ければ気配も人間に近い。

目の前の馬鹿が間違えるのは仕方のない事だろう。しかし、相変わらずこいつらは他種族を過小評価する癖が抜けんな。

アザゼルのおつちやんやシエムハザさんには注意しといたんだが。

「いきなり何言つてんだ？ ラリるなら他人のいないところでやれよ、オバハン」

「……ッ、虫けらが。墮天使である私にそんな口の利き方をして、ただで済むと思つているのか」

「はいはい。黄色い救急車呼んでやるから、続きは鉄格子のついた病室の壁にでも聞かせてくれ、墮天使様。プツ……」

「貴様あッ!!」

軽くおちよくつてやると、墮天使は表情を般若に変えて踊りかかってくる。

まったく、こいつらは何でこう煽り耐性が無いのか。

光の槍を手に黒い羽根を撒き散らしながら間合いを詰める墮天使。だが、遅い。

手にした槍を振りかぶるよりも早く、俺は奴を撃ち落とす為飛び上がった。

憤怒から驚愕、そして一発目の膝に胸骨を砕かれた事で苦痛に変わった顔を、二発目の膝がカチ上げる。下顎が砕ける感覚を伝える膝を振り抜くと、墮天使は自ら噛み砕いた歯と血を撒き散らしながら、頭からアスファルトに叩き付けられた。

着地し、残心を取りながら目を走らせると、奴は白目をむき、ピカ

ソの絵の様に歪んだ顔面から血泡を吹きながら、ビクビクと痙攣を繰り返している。やり過ぎたような気がするが、生きているなら問題なかろう。

「まだまだいけるな。『ライジングジャガー』」

ライジングジャガー。ストリートファイターZEROシリーズのキャラである、アドンが持つ無敵対空の蹴り技である。強靱な下半身のバネを活かして斜めに飛び上がり、上昇の勢いを込めた膝二段蹴りで上空の相手を迎撃する。出が早く出かかりに無敵時間を備えているため、相手を引き付けなくても潰されることが少ない高性能対空技としてアドン使いに重宝されていた。

そして、俺が無^M限^Uの^G闘^E争^Nで最初に覚えた技でもある。対空はもちろん、連続技の締めに関手のラッシュに對する割り込みと、昇龍拳を覚えるまでは本当に重宝した。他の技に慣れるために近頃は御無沙汰だったが、やっぱり良い技だ。

しかし、早々に襲われるとは思わなかった。まあ、他の奴に行くよりは都合だけど。成りたてのイツセー先輩なんかじゃ殺られかねないしな。

幸か不幸か、判別は難しい問題に溜息を洩らしながら、俺は懐から携帯を取り出した。

取りあえず、こいつは番所に叩き込むとして、グリゴリには親父から言ってもらおう。

頬を掠める桃色の花卉に顔を上げると、舞い散る桜の花卉に紛れてこちらを見下ろす黄色い月が見える。

……良い月だ。うん、ついでだから久しぶりに親父と一杯やるか。

2話

半ばからへし折れたビル群に、ぶつ切りになった高速道路。

辺りは瓦礫と車や機械の残骸が小山を築き、まき散らされた建材や金属の粉末は、流れる水や吹き抜ける風さえも有毒なものに変える。

文明に墓場というものが有れば、こんな感じなのだろうか。

刻まれた名も解らない墓標の街の中を、俺は荒い息もそのままに走り続けていた。

粉塵混じりの空気のせいで喉は焼け付き、流れる汗は全身を濡らす。

肺は汚れていない新鮮な酸素を求めて胸を締め上げ、与えられた性能を超える程に脈打つ心臓はずっと悲鳴を上げ続けている。

身体の限界なんて、とつくに通り過ぎている。

もし、今倒れようものなら、立つことはおろか指一本動かす事もできないだろう。

それでも身体が動き続けるのは、解っているからだ。

心が、身体が、魂までもが『止まったら死ぬ』と。

この墓標を築き、街を蹂躪しつくした化け物がこちらを狙っている事を。

現状への苛立ちから、これを引き起こした馬鹿へ悪態をつこうとしたが、酸素が足りない脳味噌は気の利いた台詞を生み出す事もできない。

もつとも、諸悪の元凶たる白蜥蜴は真つ先に化け物の手によって、クレーターの中心に強制埋葬されているが。

何が白龍皇だ。言い出しつpegが0.1秒持たずにやられやがって。

「良かったぜい。坊主、生きてやが——アツ—!？」

雲に乗った甲冑姿のサルが、上空からこちらに近づこうとしたところで地上から放たれた黄緑色のエネルギー弾に飲み込まれて消えた。

瞬間、全方向から叩き付けられた殺意に全身が総毛立つ。

ヤバい、捕まった……!

ケツの穴に氷柱を突っ込まれたような悪寒に、俺は足を止めてし

まった。

働かない頭に絶望がよぎり、追い詰められたネズミそのままに忙しくなく辺りに目を走らせる。

俺の眼では奴の動きがまったく捉えられない以上、これが無駄な行いだとは理性では理解している。

だが、やらずにはいられない。

肉食獣に捕食された草食獣が、喰われながらも死ぬまで足掻くように、何もしないでいたら身体より先に心が先に死ぬのだ。

足を止めてどれほどの時間が経っただろう。

数秒、数分。もしかしたら数時間も過ぎていたのかもしれない。

悪足掻きに両手に渾身の氣を込めて、警戒していた俺はふと、言い知れないナニカを感じて腰を落とした。

次の瞬間、頭が根こそぎ持つて行かれる様な風圧が頭上を掠めていく。

見えたわけじゃない。

気配すら感じられなかった。

マグレ。偶然。存外の幸運。

いや、呼び名なんてどうでもいい。ただ、はつきりしているのは、今が千載一遇の好機と云う事！

「おおおおおおおっ!! レイジングストオオオオムッツ!!」

全身全霊を込めて叩き付けた氣は蒼い衝撃波となって、車も瓦礫も死に体のビルすらも消し飛ばし、荒れ狂う。

だが、そんな破壊の風すらも奴には何の痛痒も与えなかった。

頭を掴まれたと思ったら、万力のような力で引っ張り上げられた。あまりの激痛に声すら上げられず、無意識に頭を掴む手を引き離そうと両手を掛けるがビクともしない。

霞んだ視界に映るのは、噴き上がる金の炎のような氣を纏い金髪を逆立たせた筋骨隆々の大男。

「なんなんだあ、今のは」

奴は瞳の無くなった異形の視線で俺を捉えると、その顔に残忍な笑みを浮かべる。

あ、これは死んだ。

理屈ではない部分で理解するのと同時に男の気が爆発的に膨れ上がり、空いた手に黄緑色の光弾が形作られる。

「スローイング・ブラスター!!」

「アッー!?!」

断末魔と共に緑の極光は俺の全てを飲み込んだ。



「さて、弁明を聞こうか。白龍皇(笑)」

灰色の打ちっ放しのコンクリートで出来た殺風景な部屋。

其処に置かれた木製の円卓を囲む椅子に腰掛けながら、俺は眼前の男へ目を向けた。

レザーのジャケットとパンツに身を包んだ銀の髪に青い瞳を持つイケメン。

ヴァーリ・ルシファアはこちらの視線など気にならないという風に、不敵な表情を浮かべている。

『待て、なんだ(笑)というのはい?!』

「黙れ白蜥蜴! 0. 1秒でやられる奴なんざ(笑)で充分だ、ボケ!!」

ヴァーリの中から発せられた神セイクリッド・ギア器に封じられた天龍、アルビオンからの抗議をねじ伏せる。今回に関してはこいつ等に発言力は無いのだ。

「俺つちも、その辺は聞きたいぜい。あんな化け物を選んだんだ。さぞや立派な理由なんだろうなあ」

次いで口を開いたのは、ヴァーリのお目付役にて、闘戦勝仏の末裔である猿妖怪の美猴だ。余程あのエネルギー弾が堪えたのだろう、普段の飄々とした雰囲気はナリを潜め、冷え冷えとした眼光がヴァーリを射抜いている。

「あの化け物を選んだ理由か。強いて言うなら……」

「言うなら、なんでい」

「最強を体験してみたかった。反省も後悔もしていない!」

「死ねええい!!」

ヴァーリが浮かべた無駄に神経を逆撫でするドヤ顔に、俺の飛び膝が突き刺さる。

『DECOの世界最強のお兄ちゃん』こと『ファイターズヒストリー』のムエタイ戦士、サムチャイ・トムヤンクンから学んだ技『ティーカウコーン』だ。

発生が早くそして突進力ある膝蹴りで、こういった奇襲には打ってつけだ。

もんどり打って椅子から転げ落ちたヴァーリに駆け寄り、素早く両手足をロック、ロメロ・スペシャルの体勢を作り上げる。

「くっ、何をする!？」

「黙れ、愚か野郎！ 今からその緩い脳味噌を締め直してくれるわ！

ソリヤー!!」

「グワー!？」

ロメロ・スペシャルの体勢のまま前方に高速回転した俺は、ヴァーリの身体の前面を壁や床に叩き付けながら、室内を縦横無尽に駆け回る。

「どうだ！ これが悪魔將軍直伝『地獄風車』だー!!」

「ウギヤー!？」

『ヴァーリイイイ!？』

「あんなマンガみたいな技を使いこなすなんて……坊主、恐ろしい子!？」

俺の怒号に白い馬鹿二人の悲鳴、美猴の恐れの混じった声が混じり合い、室内は実にカオスな状況になっている。だが、この程度はいつもの事なので気にしてはいけない。

さて、ヴァーリの馬鹿をシメている間に、あの化け物『ブロリー』と闘う羽目になったのかを説明しよう。

◇

昨夜の墮天使の襲撃後、魔法陣で転移してきた親父を引き連れて、

俺は家へと帰った。

遠慮する親父を強引に風呂に入れて背中を流し、湯船に浸かりながら酒を飲む。

風呂からあがったら、晩酌に付き合いつつ親父の愚痴を聞いてやる。

アザゼルのおっちゃんをはじめ、個性豊かな変人が揃う神の子を見張る者の同僚の奇行に始まり、朱乃姉との縮まらない距離と自分の不甲斐なさ。

俺と美朱に苦勞をかけている事への謝罪ときて、最後にお袋の名前を呼びながら轟沈する。

俺が晩酌に付き合えるようになってから、定番になったやり取り。

ここまですぐ大体2時間程度。こっちが潰れないようにペース配分しながら聞き役に徹するのは大変だが、堅物で自分の内に溜め込みやすい親父の気持ちに楽になれば安いものだ。

迎えにきた部下の人と一緒に、神の子を見張る者の自室に寝かせて晩酌会は終了。

家に戻って晩酌の跡を片付けた俺は、酒の酔いもあって、早めに床についたわけだ。

そして今日、朝の鍛錬の締めに一戦交えようと無限の闘争を展開すると、先客がいた。

ヴァーリと美猴だ。

五年來の修行仲間であるこいつ等には無限の闘争へのアクセス権を貸し与えているので、こんな風に力チ合う事がちよくちよくある。

何時もは好き勝手に対戦をしているヤツらが、控え室で大人しくしている事に首を捻っていると、ヴァーリから思わぬ提案があった。

曰く、「二人で協力して強敵と当たらないか」

正直、俺はこの提案には乗り気ではなかった。

無限の闘争の鍛錬は、自身と同等もしくはある程度格上の相手と闘う事によって心身を鍛え、相手に勝つか自身の成長によって、新たな技を修得する事を基本としている。

自分と隔絶した強さの相手と闘っても、鍛錬としては効率が悪いの

だ。

この事は二人にも説明していたのだが、戦闘狂の白蜥蜴には理解できてなかったらしい。

渋る俺に業を煮やした馬鹿は、制御コンソールを勝手に操作して俺達三人を強制参加。

さらに、対戦相手として、ランク『神』に位置する伝説のスーパーサイヤ人、ブロリーを選びやがったのだ。

この無限の闘争に登録されている戦士にはランクが存在する。

最低のFに始まり、E、D、C、B、A、Sと来て『狂』『鬼』そして最上級の『神』だ。

あの老人が残したと思われる説明書には、『狂』クラスで無限の龍神オーフィスと同等、『鬼』で赤龍神帝グレートレッドと同じレベル。

そして『神』は一撃で星をも破壊し、加減を間違えただけで世界を滅ぼす化け物と書かれていた。

はつきり言って意味が解らない。というか、星を砕く奴の相手なんてどうしろと言うのか。

普通は自身のランクから1つ上までしか対戦相手を選べないのに、『神』だけはどのランクでも選べるという謎の仕様が災いし、俺達の地獄は始まった。

ランクCに上がったばかりの俺とDから抜け出せていない二人の即席チームなど、当然奴の相手にはならなかった。

開始早々ヴァーリが野菜王子よろしく瓦礫の中に消え、後の結果は冒頭語った通りである。

悪夢の蹂躞劇の後、対戦リザルトで開始1分で全滅、与えたダメージは0.00001%である事を知った時はその場に崩れ落ちてしまった。

渾身の必殺技が0.00001%とか……。

まあ、あの時奴の攻撃を躲して反撃できたこと自体マグレだし、どんな攻撃でも必ずダメージになるという無限の闘争の仕様がなければ、傷一つ付ける事も出来なかっただろうが。

ヴァーリが泡を吹いて気絶したので適当に投げ捨てると、美猴が制

御コンソールの前で難しい顔をしていた。

「どうした、サル」

「サル言うな。いや、あの化け物って実際どの位強いのかと思ってよう」

「俺等がミジンコみたいに叩き潰されるくらいだろ?」

「俺っち達を叩き潰すのならオフィスでもできるぜい。けど、『神』クラスってのはそれより強いんだろう?」

なるほど、蟻には象とサイの強さの差が解らないのと同じ理屈か。

「ふむ、調べてみるか」

美猴を退けて制御コンソールを操作する。こいつは無限の闘争の中枢に直結しており、対戦相手や設定の他にバトルステージの選定やデータベースの閲覧、各キャラへの鍛錬の依頼なんかの調整もできるのだ。その為こいつを完全に操作できるのは俺だけになっている。アクセス権を渡してる者が操作できるのは、対戦設定と対戦リザルトや自身のステータスの確認程度だ。

『神』ランクのブローリーを検索すると、画面には驚愕の事実が映し出された。

「ジーザス……」

「どうしたい?」

「あいつ、あの状態からまだ二回のパワーアップが残ってるらしい」

「フアツ……!?!」

驚愕に顔を蒼白にする美猴を無視して、コンソールに表示されたデータを読み進めていく。

どうやら、この無限の闘争に出てくる対戦相手は原点のMUGENで多くのクリエイターによって造りだされた同キャラを統合、調整した存在らしい。

つまり、Aという人間とBと言う人間が『ブローリー』というキャラを創ったとして、Aがスーパーサイヤ人1にしかねないとしてもBがスーパーサイヤ人2に変身できれば、統合された『ブローリー』は双方の特性を持ち、スーパーサイヤ人1、2双方への変身が可能になるということだ。

そして、原作でも大人気だったブロリーは、公式が発表する遙か以前からスーパーサイヤ人3、4へ変身したキャラが海外の有志によって作られていた。

そんな無数のブロリーが統合された結果、『超スピードで動いて常時ハイパーアーマー。超必殺技ゲージが自動充填される上に、追いつめられるとスーパーサイヤ人3、4へとパワーアップして体力も全快する』という化け物が誕生した。

うん、こんなん勝てんわ。

無限の闘争^{MUGEN}の深すぎる可能性に、思考を放棄する事で折り合いを付ける事を決めると、携帯のアラームが鳴った。

画面に映る時間は7:20。

学生は登校の準備を始める時間である。

「お、もうあがるのか?」

「ああ。こっちは健全な高校生なんでな。学校へ行かねばならん」

「健全な高校生は、朝っぱらからこんな所に入り浸らないと思うがねえ」

「言つてろ。ああ、帰る時は其処の馬鹿蜥蜴、回収していけよ」

「……なんか、ヴァーリの手足が曲がっちゃいけない方向に曲がってるんだけどよう」

「大丈夫、大丈夫。ヴァーリならそのくらい、三日あればくっ付くから。きつと、多分、メイビー」

「そりゃあ大丈夫って言わないんじゃないかねえかい?」

「細けえ事はいいんだよ。じゃあ任せた」

美猴に言い残して、控え室の出口を潜る。現実に戻ってきた俺を待っていたのは、朱乃姉のステキすぎる笑顔だった。



「うおお…。朝から酷い目にあつた」

「自業自得って言葉、知っている?」

教室の机に突っ伏す俺に、呆れの込もった声が降りかかる。雷撃地

獄に曝された兄に、何という冷たい態度。

妹よ、お兄ちゃんは悲しいぞ。

「茶番乙。慎兄が大人しく食らってれば、一発で済んだじゃん。それを雷撃全部ブロッキングで捌いちやうから、朱姉も意地なって雨霰と落とすんだよ」

お陰で母屋の玄関が無茶苦茶だ、と嘆く美朱。

弁明させてもらえば、悪気があったわけじゃない。ブロリーなんて化け物と闘ったせいで、緊張が抜けきらなかった身体が勝手に反応してしまったのだ。

「ブロリーって、『カカロットオオオオオ!!』が口癖の？」

「そう。そのブロリー」

「そんなのまでいるんだ、あそこ。で、結果は？」

「ヴァーリにサルの三人掛かりで瞬殺された」

「デスヨネー」

「けど、マグレで一発入れたぞ。掠り傷どころか、皮がむける程度のダメージにもならなかったけど」

「なに当てたのさ。ジャブ？」

「渾身の氣を込めたレイジングストーム」

「しよぼいって言ったらダメだよね」

「倒壊しかかったビルを、根こそぎ消し飛ばす威力でしたが、なにか？」

「……さすがブロリーと言わざるを得ない。ホント、無限の闘争に死亡防止機能があつてよかつたね」

「まったくだ。なかつたら、今ごろ塵も残さず消滅してるよ」

死亡防止機能は無限の闘争に備わった基本機能の一つだ。即死や致命傷、身体に障害が残るような重症を無効、または支障が無いレベルまで治癒するようになってる。

とは言え、傷を負った時には痛みは感じるし、死ぬようなダメージを受ければ全てが抜け落ちていく様な、死の喪失感を味わう事になる。

まあ、お陰で生きてる事の素晴らしさをちよくちよく再確認できる

のだが。

え、素晴らしいと思うなら、ポンポン臨死体験すんなって？ ご尤もです、はい。

「そう言えば、昨日パパが来てたでしょ？」

「ああ。昨日の墮天使の件で連絡する事があってな。ついでに一杯付き合わせたんだ」

「どうせまた、潰れるまで飲ませたんでしょ」

「ガス抜きだよ、ガス抜き。……あ」

「どしたの？」

「リアス姉に言わなきゃいけない事があった」

酒を入れたせいで忘れていた。また忘れない内に連絡しとくか。

携帯を取り出し、発信。

二度のコールでリアス姉は出てくれた。

『どうしたの。もうすぐ授業が始まるのに』

「悪い。昨日の件で、言わなきゃいけない事があってさ」

『昨日のって、墮天使の件よね。何かしら？』

「昨日の帰り、墮天使に襲われたんで、振り返ちにして番所に引き渡した」

『……はあ！ 襲われた!?!』

おお、驚いてる、驚いてる。けど、携帯越しに朱乃姉の怒りの声が聞こえるのは、気のせいデスヨネ。

『え、ちよ……あなた、大丈夫だったの!?!』

「大丈夫、大丈夫。相手は下級だったから、こっちに怪我はない」

『そう、よかったわ』

「あと、親父にもこの件伝えといたから。今頃はグリゴリに身柄は移ってると思う」

『そう。なら、こちらが手を下す必要はないわね』

うむ、理解が早くて結構。

「向こうで何かわかったら、俺か美朱に連絡が来るようにしてるから。」

「こっちはこっちで探りを入れとくわ」

『……わかったわ。それで今日は部屋に来るの?』

「今日は鍛錬の日なんで、俺は無し。美朱は……」

視線を向けた先には、漫画のチラシを指差しながら、首を横に振る愚妹の姿が。

「漫画の発売日だから行かないとき」

『そう、わかったわ。あと、朱乃から伝言よ。「貴様、いい加減にしろ」ですって。伝言を口にするとき、顔が世紀末な劇画調だったんだけど、貴方なにしたの?』

「あーあー! 聞こえない!! 通話終了、切るぞ!」

『ちよつ、現実逃避はダメ——!!』

流れるような動きで通話終了し、席に着く。俺は何も聞かなかつた。よって、問題はない。

「慎兄、何かあったの? 顔が真っ青だよ」

問題はないったらない!



さて、学校が何の問題もなく終わったので、楽しい鍛錬の時間である。

なに、本当に何もなかったのかだと?

問題は無い。昼休みに朱乃姉に呼び出されて、黒こげにされかかっても。

雷撃を緊急回避で避けまくったら、マジ泣きされたので土下座で謝ったとしても、何も問題は無いのだ。

午後の鍛錬は対戦では無く、無限の闘争^{MUGEN}に登録されている闘士を師事しての修行になる。

無限の闘争^{MUGEN}には自身の適正を元に複数の人物を師に選び、彼らの流派を基礎から学ぶことができる修行モードという機能がある。

実戦では補いきれない闘士としての地盤を固める為のもので、俺は実戦経験を積む傍ら、こうやって基礎トレーニングも積んできたのだ。

「身体に眠る力、『潜心力』を自分の意志で引き出す。それが『神極拳』

の真髓や」

修行場に選んだ雪山の山頂を模したステージに、渋みのある声響が響き渡る。

粉雪の舞う中使い古した空手着に身を包んだ俺は、視界を塞ぎ丹田を意識しながら白い吐息を空手の呼吸法である息吹に変える。

『潜心力』とは筋肉の普段使わない力、要するに火事場の馬鹿力の事だ。これを使うという事は脳のリミッターを意図的に外して、肉体の潜在能力を引き出すことに他ならない。

イメージするのは井戸。15年もの間、誰の目にも留まらずにその内で力を溜め続けた、強かな古井戸。

その中に釣瓶を落とし、ゆっくりと汲み上げるように、力を引き出す。

イメージを組み上げて閉じていた瞼を開くと、身を包む氣勢は不可視から紫電を纏った蒼い炎へと、その姿を変える。

引き出した潜心力は三割ほどだが、これでも身体能力や氣の出力は通常の2倍近くまで跳ね上がっている。

潜在能力を引き出す為、親父から受け継いだ雷が漏れるのが難点だが、これは制御の精度が上がれば治まるだろう。

潜心力を馴染ませながら、ゆっくりと身体を動かしていく。空手の型から始まり、太極拳、ムエタイ、古武術、果てはプロレスまで。無限の闘争^{MUGEN}で教えを受けた武術の基礎を再確認しつつ、徐々に引き出す潜心力の幅を広げていく。

「ええ感じやの。いきなり全開にしたせいで、身体中から水芸みたいに血吹いとつたのが嘘みたいや」

「勘弁してくださいよ。それ、二年も前の事じゃないですか」

「二年も、やなくてまだ二年や。こういうおいしいネタはしっかり使わんとな」

呵々と笑うのは、俺に空手と中国武術を教えてくれている高木義之先生だ。

イナズマカットと呼ばれる、独特の剃りが入ったパンチパーマがトレードマークの生粋の大阪人で、美朱との寸劇に使う関西弁のコーチ

までやってくれる愉快な人である。

「この調子やったら、今月中に『天地神明掌』を教える事もできるやろ。二年で神極拳を体得するやなんて、ワシも優秀な弟子持ったもんやで」

「優秀って……。その神極拳を一週間で覚えた人に言われてもなあ」

「ダホ。ワシはその期間で体得せなあかん状況やったから、無理やり覚えたんや。開祖の陳陳先生も促成栽培やゆうとったわ。それにお前は、他にもムエタイやら古武術やら習つとるやんけ。そんだけ寄り道しながら二年で覚えたら充分優秀やで」

「どうもっす」

習得した全ての型を終え、息吹と共に構えるのは二度目の空手の型。ここから引き出す潜在力は最大。気炎は膨れ上がり、纏う紫電は雷撃となつて周りの物を弾き始める。

「しかし、そのビリビリは無くならんのお」

「こればかりは血筋つすからねえ。力の制御が上げれば出なくなるんでしょうけど」

「お父ちゃんから貰ったんやったな。まあ、それもお前の奥にあった力や、無理に引つ込めることは無いやろ」

「いいんですか？」

「お前みたいな特殊な体質の奴に、教えた前例なんかないからな。無理に抑え込んで悪影響出たらアホみたいやんか。別に出てても不都合は無いんやろ？」

「ええ。身体にも特に違和感はありませんね」

「ならええ。そのまま全部の型やったら今日の稽古は終了や。型の一つ一つに気を張って潜在力を完全に使いこなしてみい」

「押忍ー」

この後1時間をかけてみっちり型稽古を終えた俺は、高木先生に礼を言つて修行場を後にした。

無限の闘争から出ると、大きく傾いた太陽が神社の鳥居をはじめ、辺りを紅く染めていた。

あと一時間ほどで、世間一般では夕食の時間帯になる。

昼間泣かせてしまった詫びに、今日は朱乃姉に代わって晩飯を作る事にしよう。

炊いておいた飯が全滅していたので米を炊き、冷蔵庫の中を確認する。

昨日出たトンカツが下拵えを終えた状態で残っていたので、献立をカツ丼に決めて油を用意。

井用の鍋に水、市販の丼出汁のモト、玉葱とネギを入れて煮ていると美朱が帰ってきた。

俺が台所に立つのは珍しい事ではないため、普通に献立を聞いてきたのでカツ丼と答えると、カロリーがなどと愚痴り始めた。

「育ち盛りのお前が多少高カロリーの物を食っても、そうそう腹の肉にはならん」と返してやるとデリカシーが無いと怒られた。……解せぬ。

結局付け合わせの味噌汁とお新香まで完食した美朱に、納得いかないナニカを感じながら後片づけをしていると朱乃姉も帰ってきた。

俺が台所に立っている事に驚いている朱乃姉に、昼間の詫びと言うと嬉しそうに茶の間に入っていったので二人分の飯を用意する。

茶の間に入ると美朱と朱乃姉が今日あったことで盛り上がっていた。何でも本屋の帰りにアーシアというシスターの少女と知り合ったので、イツセー先輩を巻き込んで遊び倒してきたらしい。

しかも、そのアーシアという娘は俺と同じ聖母トワイライト・ヒーリングの微笑の所持者だという。

慎兄のは聖母じゃなくて、悪鬼の嘲笑だろうだつて？ ふむ、そっちの方がドスが効いてていいな。

聖母なんてガラじゃないし、今度アザゼルのおっちゃんに改名できるか、聞いてみるか。

……む、なんだ二人して残念なモノを見るような目をむけて。

おい美朱、厨二病とかいうな。それはアザゼルのおっちゃん専用だ。

ふむ、横道に逸れたな。話を戻そう。

このアーシア嬢の一件は朱乃姉も知っていた。イツセー先輩がリ

アス姉に報告し、教会に近づかないようにと忠告を受けたらしい。

しかし、アーシア嬢と別れた教会が引つかかる。あそこは随分前に打ち捨てられて、今は使われていないはずだ。

朽ちた教会ははぐれ悪魔や堕天使の拠点になりやすい。

これは探りを入れたほうがいいかもしれん。

二人とも食い終わったので、洗い物をしながら思案していると、朱乃姉がまた出かける準備を始めた。

行き先を確認すると、リアス姉達とはぐれ悪魔討伐があるとの事。

む、俺等にはそんな情報は入っていない。

俺達の茶碗を取るとは、リアス姉もやるようになったものだ。これは『魔のシヨーグン・クロー』から『地獄の超特急』のコンボの出番か？

「リアスはあなたと違って壊れ物だから、乱暴はやめてあげてね」

酷いな朱乃姉よ、俺も一応壊れ物なんだが？

「貴方の場合は壊れ物だとしても、自己修復機能付きの超合金じゃないの。リアスと比べてはいけないわ」

なんとという評価。これはグレざるを得ない。

「え？ 慎兄がグレルって、今更でしょ」

おい、愚妹。お前は俺を何だと思っているのか。

「鍛錬中毒の修行僧型悪魔超人」

むう……何故か否定できない。

しかし、堕天使のハーフなのに悪魔超人呼ばわりとはこれいかに。

「悪魔將軍の弟子が何言ってるのさ。世が世なら立派な悪魔超人になる事間違いなしだよ、慎兄」

俺の姉妹からの評価が酷い件について。今月の目標に『地獄の九所封じ』の習得を挙げたのが間違いだっただか。

「あんなガチの殺人技、どこで使うのよ」

無論、リアス姉の初レーティングゲームで。

その時は謎のマスクマン、『バラキエル・ザ・グレート』として乱入するつもりだが。

「絶対やめてね」

アツハイ。

それから俺達の参加を「イツセー君の研修も兼ねているから」と断った朱乃姉は、討伐に出かけて行った。べつに俺達がいっても研修なら問題ないと思うのだが。

やはり、リアス姉はレーティングゲームを見据えて任務を受けているのか。

「なんか荒事に関しては、リーア姉も朱姉も私たちの事、妙に警戒してるよね」

ふむ……。やはりこの前の合同討伐でやった、開幕妖刀ブツパがいけなかったのではないか？

「ええ、あれがダメとかない。香澄の妖刀の本来の使い方なのに」

忍の祖とは何だったのか。しかも、あの所為ではぐれ悪魔が潜んでいた洋館が、標的ごと消し飛んだからな。

「その辺は必要経費だよ。妖刀使うの、凄い疲れるんだし」

でも、事後処理を任せた上に報奨金折半は拙いだろう。

「うーん。その辺は要反省かな」

まあ、あの放浪生活で金がない事の不便さは嫌と言うほど思い知ったからな。ドライになるのは仕方ない。

会話が途切れ、何気なしに電源を入れたテレビをぼろと見ていると、ふと美朱が口を開いた。

「朱姉達、心配だね」

「なら、見に行くか？」

場所の方は念のために朱乃姉に聞いておいた。家の麓にある廃屋、ここからなら数分で着く場所だ。

「そうだね。イツセー先輩もいるし、リーア姉ってどっか抜けてるところがあるから」

席を立った美朱は自分の部屋に駆け上がっていく。2階から何かを引っ掻き回す音が聞こえた後、1分足らずで太腿や二の腕にシースに収まった苦無を巻き付け、手甲などで武装した姿で降りてくる。

いつもながら、手早い奴だ。

「よし、じゃあ行くぞ」

「アイサーー！」

◇

俺達が件の廃屋に着くと、中から戦闘を思わせる轟音が響いていた。

開けっ放しになった入り口から中に入ると、両腕を失った巨獣に女の上半身が生えたはぐれ悪魔の胴体から脱出した塔城が、そいつを殴り飛ばしたところだった。

柱や家具を巻き込みながら吹っ飛ばはぐれ悪魔。朱乃姉へ追い打ちを加えるように指示を出し、余裕を見せるリアス姉。

俺達の目はリアス姉の後ろから襲い掛かろうとする、斬り飛ばされたはぐれ悪魔の腕を捉えていた。

瞬間、俺達は互いに別方向に駆けだしていた。

祐斗兄を超えるスピードでリアス姉の元に駆け付けた美朱は、リアス姉を抱えて後方へ飛びながら手にした苦無を腕に叩き込んだ。

8本の苦無を受けた腕は地面に叩き付けられて動きを止める。

「リアス姉、油断しすぎだよー！」

「あ……ありがとう」

地面に降ろされて尻餅をついたりリアス姉は、普段とは打って変わった鋭い視線をむける美朱に、小さく謝意を漏らす。

俺はと言うと、はぐれ悪魔の顔面を掴んで片腕で吊り上げていた。はぐれ悪魔はくぐもった悲鳴を上げながら、女の体に生えた手で必死に腕を外そうと足掻いているが、将軍様直伝の「魔のショードン・クロー」はびくともしない。

食い込んだ指から血が溢れ出すと、はぐれ悪魔の悲鳴はさらに大きくなる。

「リアス姉、怪我は無いか？」

「慎、あなたまで……」

素早くメンツに視線を走らせて、負傷の有無を確認する。

ふむ、誰も怪我は無いようで一安心だ。あとは、こいつを片づける

だけか。

吊り上げている腕に力を籠め、身体全体で回転しながらはぐれ悪魔を振り回す。

「おおおおおおおおおおお!!」

音が響く程の速度で振り回し、遠心力で浮き上がったはぐれ悪魔の身体を上空に放り投げる。

上空高く舞い上がるはぐれ悪魔を追って飛び上がり、空中で奴を追い抜いた俺は右足を奴の首筋に叩き込み、その体勢のまま落下を始める。

「げぼおおおあああつ!!」

この状態を崩そうと足掻き始めるはぐれ悪魔。

だが無駄だ。

『魔のショーグン・クロウ』で振り回された身体は、平衡感覚を失つてまともに動く事も出来ない。そして正確に首筋を捕らえた右足は首と頭を固定する事で、身体の動きを封じている。

後は、首を捕らえた右足と俺自身がギロチンの刃となって、地面に激突すると同時に奴の首を破壊する!!

「これが地獄の断頭台だー!!」

「ウギャー!!」

落下の加速と二人分の体重を一点集中した衝撃は、叩き付けられたはぐれ悪魔の首を中心にコンクリートの床に蜘蛛の巣状の陥没を作り上げた。

そして、断頭刑を受けた哀れな罪人は、大きく陥没した首と下顎を自身の血反吐で濡らしてピクリとも動かない。

ふむ、辛うじて生きているらしい。将軍様なら落下と同時に奴の首が千切れ飛んでいただろう。まだまだ未熟と言わざるを得ない。

「スツゲー……!」

「何て恐ろしい技なの……!」

「地獄の断頭台まで……。悪魔超人デビュー待ったなしだね、慎兄」

戦くりアス姉とイツセー先輩に、痛いツツコミを入れる美朱。

うん、俺は悪魔超人じゃないからね。断頭台もメツチャ未完成だ

し。スピン・ダブルアームしてなかったでしょ？

「慎、美朱。あなた達どうしてここに？」

「朱乃姉達が心配だったんでな」

「うん。リーア姉も油断してたし、来て正解だったね」

堂々と毒を吐く美朱にバツの悪そうな顔をするリーア姉。

「で、これどうすんの？」

半殺しどころか九割九分殺し状態のはぐれ悪魔を指さすと、みんなが痛ましい物を見るような顔になった。

「部長、楽にしてあげましょう。慎の悪魔を超えた凶悪な技で、苦しませておくのは可哀想ですわ」

「そうですね。あんな酷い殺人技を掛けられたら、命があっても地獄でしょうから」

「……墮天使の皮を被った、悪魔よりも邪悪なナニカ」

「そうだよな。あんなえげつない技食らったら、死んだ方がマシだよな」

「ええ。極悪非道な弟分の不始末は、私が着けないとね」

……なにこれ。助けに来たのに不始末とか言われてるんだけど。

「ボロクソだね、慎兄。まあ、悪魔超人期待の星だから仕方ないか」

……解せぬ。

この後、はぐれ悪魔はリーア姉が消滅させ、俺達は怪我もなく帰ることができた。

この一件が原因で、当分の間イツセー先輩から悪魔の中の悪魔と怯えられるようになったのは、まあどうでもいい話なのだろう。

3話

バイザーとかいうはぐれ悪魔討伐の翌日、学校を終えた俺と美朱は廃教会に足を運んでいた。

リアス姉がイツセー先輩に『教会には近づくな』と忠告してたらしいがそれは悪魔の都合、俺達なら問題は無い。

アーシア嬢に会えるからか、美朱のテンションが妙に高い。

聞けばアーシア嬢は俺達より1つ上だという。

末っ子で甘えた体質のこいつは、新たな甘えられる対象を見つけて昂っているのだろう。

「純真無垢なアーシア姉に、アニメやゲームの楽しさを教える……。これぞ愉悦！」

おいやめろ。

前にフェニックス卿から苦情が来てたことを忘れたか。

「だからあれは濡れ衣！ 私と知り合う前からレベツちゃんは夫人から英才教育を受けてたんだよ！」

そうやってフェニックス家は腐女子を生み出してるのか。嫌なことを聞いた。

「少なくとも2年前までは、レベツちゃんは腐ってなかったと思うけどな」

2年、嗜好を変えるのには十分すぎる。素養も考慮すれば望み薄だな。

「例え腐ったとしても、私達の友情は変わらないから大丈夫さ」

お前はいいいな。

けど、フェニックス家の男はそうはいかんだろう。

これでむこうの家に腐女子の系譜でも出来ようものなら、不死鳥なのにストレスで死ぬんじゃないだろうか。

適当に会話を交わしていると、教会の姿が見えてきた。

スタンダードなタイプの教会で、建物自体はかなりデカイ。それに敷地を囲むように立派な塀まである。

打ち捨てられたわりに、外観もそれほど老朽化しておらず、所々新

たに人の手が加えられた痕跡も見られる。

「アジア姉ー！ 遊ぼー!!」

閉ざされた入り口、身長よりも大きな扉にむけて美朱が大声で叫ぶ。

現地調査とはなんだったのか。あと子供か、お前は。

内部の気配を探りながら待つこと数分。明らかに居留守を使われていることに、目に見えて不機嫌になった美朱が先程よりも大きな声を扉に投げかける。

今度は蹴りつきで、だ。

おい、神への敬意はどこにいった。

「そんなの品切れ中に決まってんじやん。あと入荷予定も無くし」

バゴアバゴア、と謎の笑いを上げながらもストンピングの速度を速める美朱。

仮にも神職が言う台詞ではない。お前、いつか怒られるぞ。

美朱の誘い（物理）にドアの蝶番が悲鳴を上げ始めた頃、ようやく内側から扉が開かれた。

「神の家の門は足蹴にするものではありませんよ」

更なる蹴りを放とうとしていた美朱に、白のカソツクの上に黒の外套を纏った白髪の少年は、穏やかな笑顔で声をかける。

年の頃は俺達とそう変わらない。

一見すると善良そうに見えるが、身体に染みついた血の匂いは相当なものだ。

正体は異端狩りの悪魔祓いといったところか。

「これが私のノックだ。参ったか！」

ふんす、と鼻息荒く胸を張る美朱。どっから見てもただの馬鹿である。

「それで当教会にどのような御用ですか？」

「ここでシスターをやってる、アジア・アルジェントさんと遊びに来ましたー！」

「シスターのアシア・アルジェント、ですか？」

美朱の直球ど真ん中の言葉に、顎に手を当て思案するそぶりを見せ

るなんちやって神父。

「申し訳ありませんが、そのような者は当教会には在籍してませんね」
「え？ 昨日、本人に頼まれてここまで案内したんですけど。これからここで働くって」

「いいえ。昨日は此方に着任した者はありませんよ。信者の方と間違われたのでは？」

シラを切る神父に食い下がる美朱。

とは言え、話が『いる、いない』の水掛け論になってしまっただけは、それこそ教会内を探さない限り進展する事はないだろう。

事実はどうあれ、むこうが居ないと言っている以上、粘って警察でも呼ばれては面倒な事になる。

……これは一度出直すべきか。

「美朱、帰るぞ」

「えっ……！ 慎兄、でも……!?!」

「むこうが居ないって言うてるんだ、ゴネたって仕方ないだろ」
「むう……」

むくれながらも一步退いた美朱に、ほつと息を付く神父。どんな業界も、クレームの対応には体力を使うものだ。

「神父さん。こちらの勘違いだったようです。時間を取らせて申し訳ない」

「いいえ。こちらこそ、力になれないで、すみません」

お互いに頭を下げて、その場を後にする。

「なんで諦めちやうのかな。もう少しであの神父をやり込めたのに」
教会の敷地から出て外壁沿いの道路を歩いていると、ブーたれていた美朱が不満げな声を上げた。

「アホ。完全に水掛け論だったじゃねえか。あのまま粘っても、ポリを呼ばれて追い払われるのがオチだ」

「それで、どうするのさ」

「合法がダメなら非合法な手で行くしかないだろ。辺りが暗くなるのを待って、忍び込むぞ」

「おお！ 美朱ちゃんの本領発揮する時が来た！」

ひさびさにスキルが生かせる、と目を輝かせる我が家の忍者（笑）。（笑）などと言ったが、忍の祖である影忍の血を引き、無限の闘争^{MUGEN}で多くの流派の忍術を習得したこいつの能力は高い。

忍の手腕はあの服部半蔵に上忍と認められるほどである。

「そうと決まれば情報収集だね。周辺の地形、建物の情報、あとは出来れば人員の配置なんかも調べなくちゃ」

妙にウキウキとしながら「役所なら建物の見取り図があるかも」などと呟く美朱。教会の背面から、本道に出ようとして、俺達は足を止めた。

教会内部から背面の扉にある勝手口へ近づいてくる独特の気配、墮天使だ。

素早く勝手口から死角になる角に身を隠して様子を窺っていると、黒いゴスロリ服に金髪をツインテールにした十代前半の女の子が、パンパンに中身が詰まったゴミ袋を出している。

「あ…あれ、ミツちゃんだ」

少女の姿を見た美朱の口から、小さく言葉を漏れる。

「知り合いか？」

「シエムさんところで庶務やってた下級墮天使。私とシエムさんのコスプレ仲間でもある」

ああ、なんかわかるわ。グリゴリの女性陣って妙齢の美女ばかりだもんな。あいつは貴重なロリ枠ってことか。

ミツちゃんに向ける生暖かい視線に、イイ笑顔でサムズアップする美朱。

だから、さらりと心を読むな。

「墮天使のウチがゴミ出しとか……。悪魔祓い共のウチへの扱い、悪くないっすかねえ。」

二つ目のゴミ袋を引っ張り出しながら、ブツブツと愚痴り始めるミツちゃん。

なんかあの子、目が死んでるんだが。

「レイナー様もアホっす。こんなザルな作戦、悪魔の縄張りで行ったらバレルに決まってるじゃないっすか。万が一成功しても、たかだ

か神器一つ手に入れた程度で、あの変人たちの関心が向くかっての。だいたい、聖母の微笑なんて、美朱様のお兄様のダブリじゃん！ そんな神器オタクのアザゼル様でも拒否るわ!!」

早口でまくし立てながら、今度はゴミ袋を電柱に叩きつけた。袋が破れて中身が散乱するが、そのゴミまで足蹴にしている。

「どうやら、相当追い詰められているらしい。」

「ああああああ…。なんでウチ、レイナーレ様誘いに乗ったんだろ。昔の上下関係タテにされたからって断る方法あった筈なのに……。シエムハザ様の下にいたときは楽しかったなあ。グリゴリに戻りたいよお……」

愚痴って、暴れて、ついには泣き出した。うん、なんか物凄く居た堪れない。

後ろから裾を引かれたので視線を移すと、美朱が何か言いたげにこちらを見上げている。

軽く頷き返してやると角をトップスピードで飛び出し、あつという間にミツちゃんに抱きついた。

「ミツちゃあああああん!!」

「え……。美朱様!？」

「頑張ったね！ 辛かったね！ もう大丈夫だよ、私がシエムさんに言って、グリゴリに戻ってもいいようにしてもらおうから!」

ミツちゃんの頭を胸に抱えて涙声で捲し立てる美朱。突然の事に呆然としていたミツちゃんも、美朱の涙に誘われたのか、胸に顔を埋めて大声で泣き始める。

普段はおちやらけてるが、知り合って好意を持った者はことさら大事にするのがこいつの美点の一つだ。身内への愛情が深い姫島の女の血もあるのだろう。

とはいえ、一応ここは敵地。麗しい友情に、空気の読めない無粋な邪魔が入らないとも限らない。

と言うわけで、美朱。

「ぐすつ……。わかった」

鼻を吸りながら、刀印を結ぶ美朱。素早く九字を切れれば、周囲の霧

困気に変化が生じる。

「簡易の隠形結界を敷いたから、ちよつとの間なら私たちの姿が認識されることはないよ」

「苦勞。」

なら、こつからは事情聴取だ。美朱に癒されているところ悪いが、ミツちゃんには付き合ってもらおう。

「事情聴取っすか？」

「ああ。その前に、俺は姫島慎。美朱の兄貴だ」

「下級墮天使のミッテルトっす。お二人の事はシエムハザ様やバラキエル様から聞いてるっす。何でもグリゴリ期待の星って」

おや、いつの間にかグリゴリ所属にされてるんですが。

「え、違うんすか？」

あー、何か言いづらいな。俺達って、リアス姉が駒王町の管理の任期を終えて冥界に帰る間での間、期間限定で日本神話の監査官をしてるんだよ。

「うーん。今は事情があつて、日本神話に属してるんだよね」

「えっ!? そうなんすか!」

「この町を管理してた悪魔の前任者がポカしてな。グレモリーが管理を引き継ぐ際に、日本神話からクレームが付いたんだよ。そこからまあ色々あつて、グレモリー家に世話になつて俺達が日本神話に籍を置く事を条件に、悪魔の管理権が継続する事になつたんだ」

「どうして日本神話はお二人を？」

「ウチのママって、日本のオカルト界の中でもトップクラスの名家の出なんだ。多分、その関係

だと思う」

「え……と、なんか複雑なんすね」

「理解してくれて助かる。さてミッテルト、ここが独断で動いている墮天使のアジトなのは間違いないな」

俺の質問にミッテルトは固い表情で頷いた。

「首謀者は中級墮天使レイナール。共犯は下級墮天使三名、ウチとカラワーナ、ドーナシークっす」

カラワーナ。どつかで聞いた事がある名だな。……あ、あれだ。二日前に蹴り倒して番所に送った墮天使だ。って事は現状、むこうの墮天使は3名ってことか。

「ねえミツちゃん。その中級墮天使は、何をしようとしているの？」
「ウチが知ってるのは、教会から追放された聖母トワイライト・ヒーリングの微笑の所有者、アーシア・アルジエントから神セイグリッド・ギア器を抜き出して自分のものにすることつす」

ミッテルトが情報を口にした途端、周りの気温が下がったような錯覚に捕らわれた。横に目を向けると美朱が薄い笑みを張り付けながら、寒気がするほどの殺気を放っている。

「ふうん。アーシア姉の神セイグリッド・ギア器をねえ……。慎兄、その馬鹿の首刎ねてきていい？」

神セイグリッド・ギア器は、聖書の神が人間の血を引く者のみに与えたアイテムだ。魂の一部と同化していると言われており、引き剥がせば大抵は死に至る。

こんな計画を聞かされれば、アーシア嬢を気に入っている美朱が怒るのは当然か。

「落ち着け。シエムハザさんから出来れば殺すなって言われてるだろうが」

「できれば、でしょ。ブチ殺した後で、失敗しましたって言えばいいじゃん」

「意図的に殺つといて失敗しましたなんて言えるか、アホ。それで、ここにいる悪魔祓いの統括をしているのも、そのレイナーレなんだな」

「はい。神セイグリッド・ギア器を奪う際の護衛と、グレモリーが動いた際儀式完了までの時間稼ぎとして、領土内で騒ぎを起こしてかく乱するのを目的にレイナーレが集めたつす」

「悪魔祓いの総数はわかるか？」

「正確な数まではわからないっすけど、50人はいたと思うっす」

「ああ。それじゃあ、その墮天使を殺るワケにはいかないか」

ミッテルトの説明に纏っていた殺気を霧散させる美朱。

今頭であるレイナーレを消して、悪魔祓い達が暴走してテロにでも

走られたら、目も当てられないからな。

頭に血が昇っていても、冷静な判断が下せるところは相変わらずだな。

「人員の配置は教会の護衛に7、各地のかく乱要員が3つてどこか」「そんなものじゃないかな。ミツちゃん、悪魔祓いの連中が全員この教会に集まる事ってないの？ 例えば指示を受ける為の集会とかで」「うーん。いつもはそんな事はなかったっすけど、儀式の前ならもしかしたら。レイナーレは自分を『至高の墮天使』だと思ってるから、儀式を始める前なら部下を集めて演説くらいはするかもっす」「儀式の日はわかるか？」

「近日中とは言ってたけど、レイナーレはまだ決めてないみたいっす」
ふむ、不確定要素が多いのは気になるが、狙うなら儀式当日か。

「儀式までアーシア姉をそいつに預けるのは癪だけど、一網打尽にするならそれが一番確実かな。それでミツちゃん、お願いがあるんだけど」

「なんすか？」

「儀式決行の日まで、ここにおいてアーシア姉を守ってくれないかな」

「ウチがつすか？」

「うん。それにプラスしてミツちゃんがこつから情報をくれたら、私たちも動きやすいからさ」

美朱の頼みにミッテルトの表情が曇る。ここでの扱いはよくなさそうだし、いたくない気持ちは分かる。だが、受けてもらわんとこつちが困る。

「ううー、でもそれって危険じゃないっすか？」

「チチチツ……。心配ご無用、この美朱ちゃんに任せなさい!!」

不安そうなミッテルトに笑顔をむけた美朱は、刀印を結び空中に何かの印を書くとき、刀印の中心に氣を集中させ始めた。

「臨・兵・闘・者・皆・陣・列・在・前!!」

美朱が切る九字に合わせて氣は膨れ上がり、最後の印を組むと同時に光と共に氣が弾ける。

目を焼くような光が収まった後には、刀印を解く美朱とその足元に

立つ3体の小さな人影があった。

その人影は3体とも美朱を3等身の手乗りサイズにデフォルメした姿をしていた。

そいつらが身に纏っているのは『戦国奇譚妖刀伝』で、主人公『香澄の綾女』が身に着けていた赤のチャイナ服を思わせる上着に黒のスリムパンツだ。

「ふふん！　これが美朱忍法、式神召喚『ミニミニ美朱ちゃん』だよ!!」
三体のミニ美朱を掲げながら、ドヤつと胸を張る美朱。俺もミツテルトもド肝を抜かれて言葉が出ない。

「ミニサイズと侮ることなかれ！　この子達にはAI的術式を積んであるから、ある程度の自己判断が可能。威力は劣るけど私の術や技も使えるから、斥候や護衛に使えるのさ!!　この子がいれば、ミツちゃんもアーシア姉も安心だよ！」

ほー、それが本当なら確かに物凄い術だ。

トコトコとこちらの足元に歩いてきた1体を持ち上げてやると、手の上に立ったミニ美朱は何故か腕を組んだ仁王立ちの姿をとり、こちらを見下す様に『あるセリフ』を連呼し始めた。

こ、このセリフは……。

「妹よ。こつちにきたミニ美朱が、仁王立ちで腕を組んで『この戯け！』とひたすら言い続けてるんだが……。これってまさかMr師は――」

「兄上、それ以上はいけない」

上機嫌だった美朱の表情が一瞬で死んだ。

こちらを捉える光の消えた瞳から放たれる重圧に、出かかっていた言葉は押し潰されてしまった。

どうもこの話題については触れないほうがいいらしい。

ふとミニ美朱に向けると、黒のスリムパンツを穿いているはずの腰が、一部分だけブレて白の帯と藍色の布地が覗いている。

恐らくは『ナニカ』を上書きしたであろう術の綻びだ。先ほどの美朱の様子を考えるに、この謎は明らかに地雷。それも怒った朱乃姉に匹敵するほどの危険物だ。

しかし、このままでいいのだろうか？

美朱がこの術の参考にしたキャラに心当たりはある。

成程、mugen屈指のネタキャラであるあの漢を参考にしたなど、女性なら隠蔽したくもなるだろう。

だが、それは技を継承した事への冒瀆ではないだろうか。他者から継承した技をモノにする為に、自分なりにアレンジするのはいい。だが、受け継いだ技の痕跡を全て消し去るのは、技を生み出した人物自体を否定する事と同じ。それは断じて行ってはいけない事だ。

しばし悩んだ俺は、美朱自身の芯を正す為にも、この秘密を暴く事を決心した。

断じて、『どうやったらあのゴツイおっさんが、美朱みたいな女の子になるのか』という好奇心に負けたわけではない。

意を決し、ミニ美朱の腰の結びにゆつくりと手を伸ばす。

術に関して素人の俺ではほんの些細な力加減のミスでも、ミニ美朱自体を破壊してしまう可能性がある。作業は慎重かつ緻密に行わねば……。

緊張で震えが走る指に細心の注意を払い、結びに触れようとした瞬間、腕が物凄い力で掴み上げられた。

「……ナカには誰もいませんよ？」

顔を上げると、そこには穏やかな笑顔を浮かべた美朱の顔が。

朱乃姉にそっくりの美貌に浮かぶ笑顔は、一目で見た男を魅了する事ができる極上の物。だが、それも背後に背負ったドス黒い瘴気とハイライトが死に果てた目が全て台無しにしている。

……ッ!? なんとというプレッシャー！ 普段の美朱からは想像もできない邪悪さだ。だがしかし、こちらも覚悟は決めてある。ここまで来て引き下がるわけにはいかない。

万力に挟まれた様な圧力を感じる腕に力を込めて、ミニ美朱から引き離そうとする美朱を無理やりにねじ伏せる。

美朱も必死に抵抗するが、単純筋力では俺の方に分がある。

じりじりと近づいていく手に、美朱の表情に焦りの色が浮かぶ。

このまま行けば、俺の勝ち——

「そおいつ!!」

「危ねえっ!?!」

視界の隅の掠めた鋭い輝きに、俺は美朱の腕を振り払って大きく飛び退いた。

死んだ目でこちらを睨み付ける美朱の手には、蒼く光る妖刀の姿が。

間一髪で躲したおかげで怪我は無いが、振り下ろされた妖刀の切っ先には、無残にも胴を貫かれたミニ美朱が力無くぶら下がっている。

「おまつ、なにしやがる!?!」

「ナカの人などいないっ!!」

俺の抗議を一刀に斬り捨て、美朱は妖刀を振り払った。

串刺しから解放されたミニ美朱は、その外見には全く似合わない野太い男の声で、悲哀に満ちた断末魔を上げながらその姿を消した。

今の声はやはり……。

だが、これを指摘するのは危険すぎる。

ヘタをすれば美朱に機密保持として消されかねない。

しかし、原型が残らない位に改変されているというのに、最後の最後まで自己主張して消えていくとは……。やはり、中の人『凄』だ。

◇

春の日も落ちて闇が辺りを覆う頃、夕食を済ませた俺と美朱は居間でテレビを見ていた。

あの後、俺の携帯でシエムハザさんに連絡を取ったミツテルトは、残った二匹のミニ美朱を連れて、教会に戻っていった。

シエムハザさんに確認したところ、ミツテルトは内部告発の功績と中級墮天使であるレイナーレから協力を強要されていた事情を鑑みて、軽い減棒で済ませるらしい。

思ったより軽かった罰則に、美朱と二人で胸を撫で下ろしたものだ。

さて朱乃姉はオカ研で帰ってきていない為、テレビのチャンネル権は美朱のなすがままである。

「いや〜。録画を後でチェックするのもいいけど、時間通りにアニメを見るのもオツなものだよねえ」

はぐれ悪魔の討伐資金で引いた、ケーブルテレビのアニメチャンネルで懐かしのOVAを見ながら、上機嫌で言う美朱。

イモジャージに身を包み、ちゃぶ台に広げられた各種のお菓子とノンカロリーコーラに舌鼓を打つその姿は、とても華の女子高生とは思えない。

「見てるの『M・D・ガイスト』かよ。女が見る物じゃないだろ、それ」
この世界は「ドラゴンボール」や「ワンピース」等のメジャーなタイトルは、存在しないかよく似たパチモンになってるのに、マイナーな作品はそのままに存在している。

美朱は『戦国奇譚妖刀伝』を探していたが、無かつたらしく「メジャーと認められたのを喜ぶべきか、本物を見れない事を嘆くべきか……」と、パソコンの前で突っ伏していた。

「お前の特典で、影忍の存在が現実になってるんだから、作品として存在してるわけないだろ」というツツコミを入れなかった俺はきつと慈悲深いはずだ。

「黙っぷ。若くてカツコイイ御大の演技が見られる作品なんだよ。しかも数少ない主役なんだから見るのは当然じゃん」

漆黒のパワードスーツに身を包んだ主人公が、異様に気合が入った雄叫びと共に敵を倒す映像を指差しながら熱弁する美朱。

確かに松平のつつあんやブリタニア皇帝を演じていた時に比べて、声もいし迫力もあるな。無限の闘争^{MUGEN}でセルやイグニス総統にボロボコにされた経験があるので、素直に喜べないが。

え、バルバドスはどうしただつて？ 土下座してもジエノサイド・ブレイバーで消し飛ばされましたが、なにか？

まあ、音速丸に負けたサルよりはマシか。決まり手が『忍法エロモーション』だったから、見ていたヴァーリと一緒に腹筋崩壊したなあ。

そんな事を考えながら画面を見てみると、懐で着信音が鳴った。電話の主はリアス姉、家に帰ってるのに掛かってくるって事は厄介事だな。

携帯のスピーカー機能をONにして、俺は通話ボタンに指を掛けた。

「もしもし。どうした、リアス姉」

「慎ね。寛いでいるところ悪いのだけれど、繁華街の近くにあるマンションに向かってほしいの」

「なにかあったのか？」

「小猫の代わりに契約を取りに行ったイツセーから連絡が無いの。こちらから転移しようとしても、何者かが張った退魔結界に拒まれて術が発動しないし……。貴方が言っていた悪魔祓いに遭遇したのかも出来ないわ」

携帯から聞こえるリアス姉の声に、俺は軽く舌打ちを漏らした。

まったくタイミングが悪い。

成りたての下級悪魔とは言え、イツセー先輩は悪魔の次期公爵にして魔王の妹である、リアス姉の眷属だ。

墮天使に指揮された悪魔祓いがイツセー先輩を殺せば、戦争の火種になりかねない。

……件のマンションまでは本気で移動すれば、10分もかからない。

急げば間に合うかもしれない。

「了解、すぐに行く。そっちからは祐斗兄と塔城に現地に向かってもらってくれ。後の連中は結界解除と同時に転移で現場に行く方針で頼む」

「分かったわ。そちらもお願いね」

電話を切って美朱の方を見ると、イモジャージではなく胸元に鷹の顔の刺繍が入った藍色の忍衣装に着替えていた。

「急ごう、慎兄。イツセー先輩に何かあったら、ミっちゃん達にもとばっちりが行く」

気合十分の美朱に頷き、俺達は素早く自宅を後にした。



件のマンションには5分ほどで到着した。これほど短時間で着いたのは、俺はスーパージャンプ、美朱は忍者の体術を使って、建物を屋根から屋根へと飛び移ったお陰だ。

召喚主の部屋があるフロアに侵入すると、かすかに鉄錆の匂いと生臭さが鼻についた。

……最悪の事態を覚悟しないとイケないかもしれない。

苦虫を噛み潰しながら召喚主の部屋に乗り込むと、部屋の主と思われる惨殺死体とうつ伏せに倒れたイツセー先輩。

そして胸元を暴かれ壁に押し付けられた金髪のシスターと、そのシスターに無体を働こうとする昼間の白髪の神父もどきがいた。

「おやおやあく。昼間、アーシアちゃんを訪ねてきたバカむす——
—ブベツ!？」

ナニカを言い終わるより速く、美朱の飛び蹴りが神父もどきの顔面に突き刺さる。シスターから剥がされ、よろめく神父もどきの身体に空中で二発、三発と追撃の蹴りを放ち、止めとばかりに側頭部を蹴り抜いた美朱は、吹っ飛ぶ奴の身体を踏み台にトンボを切りながらシスターの傍に着地した。

『如月流忍術 体術の一、天馬脚』

無限M U G E Nの闘争にて、あいつが『龍虎の拳』に登場する如月流忍術の使い手『如月影二』から習得した技だ。

「アーシア姉、大丈夫!?! あの変態神父に変な事されてない!?!」

自身の忍衣装をシスターに羽織らせながら、ペタペタと身体を触って確認する美朱。どうやら、あれがアーシア・アルジェントらしい。

「イツセー先輩、大丈夫か?」

「痛つ……。慎に美朱ちゃん、どうしてここに……?」

「リアス姉から頼まれたんだよ。イツセー先輩からの連絡が無いから、見に行ってくれてな」

うつ伏せのイツセー先輩を助け起こしながら、負傷の程度を確認す

る。足に銃創らしき傷が一つに、背中に袈裟斬り状の傷。どちらも浅くは無いが、幸い致命傷には遠い。

トワイライト・ヒーリング
聖母の微笑で治療を行うと、驚いた表情でこちらを見てくる。

「これってアジアと同じ……」

「ああ、同種の神セイクリッド・ギア 器を俺も持つてるのさ。さて、動くなよ。傷は命に関わる程じゃないが浅くもない。しかも悪魔の弱点の光力による傷だから、しっかり対処しないと後遺症が残るかもしれん」

「ありがとう。でも、お前が聖母トワイライト・ヒーリングの微笑使うのって、なんか似合わねえな」

「俺もそう思うよ。けど、こればかりは籤運だからしゃあない。……ほれ、終わったぞ」

傷が癒着したのを確認して、俺はイツセー先輩から手を離す。

「……アジアより治すのが早い」

「12年間、テメエの傷を治し続けてきたからな。即死か重要な臓器が吹っ飛ばされないかぎり、大体は何とかなる」

「慎兄、イツセー先輩は大丈夫だった?」

イツセー先輩を立たせていると、後ろからアジア嬢を連れた美朱が声をかけてきた。

細い鎖帷子にタンクトップ状の布地というインナー姿の美朱を見た途端、煩惱に満ちた形相を浮かべるイツセー先輩。その視線の向かう先はもちろん美朱の胸だ。

「南無阿弥陀仏、南無阿弥陀仏、南無阿弥陀仏……」

「ぐあああああああああッ!?!」

煩惱退散に経を唱えながら『魔のシヨーン・クロー』で顔面を絞り上げてやると、歓喜の声を上げるイツセー先輩。

「イツセー先輩の怪我は治しといた。問題無い」

完全に脱力した先輩をワンハンドスラムで床に叩き付けてから、にこやかに答えると美朱は表情を引きつらせた。

「いや、今思いつきり叩き付けてたじゃん。なんか顔面に手形付けて、白目でヤバい痙攣してるんだけど……」

「ナニモ問題はないんだ、いいね?」

「アツハイ」

「あの……」

気を失ったイツセー先輩に治癒を掛けながら、アーシア嬢はこちらに声をかけてくる。

「ああ、失礼。俺は姫島慎、あんたの横にいる美朱の双子の兄貴だ」

「あ、私はアーシア・アルジェントと申します。何故イツセーさんこんな事を？」

「今のは日本に古来から伝わる修験道の修行法の一つで、顔を締め上げる事で色欲を退散させる荒行なんだよ」

「まあ！ そうだったんですか。すみません、私ずっと教会にいたので世間知らずで……」

「アーシア姉。騙されてる、騙されてるよ。世界のどこを探しても、失神するまでアイアンクロー極める修行なんてないから」

胸の前で両手を組んで感嘆の声を上げるアーシア嬢に、美朱のツツコミが入る。ちっ、上手く丸め込めるところだったのに、余計なことを。

「慎兄、悪い顔になってるよ。そんなだから悪魔超人って呼ばれるんだよ」

「悪魔超人……。美朱ちゃんや慎君も悪魔なんですか？」

「違うよ。普通の人間かって聞かれたら、少し困っちゃうけどね」

「まあ、少々ややこしい立場にいるって事さ」

苦笑いで誤魔化す俺達を見て、深く聞くべきではないと思ってくれたのか、アーシア嬢はわかりました、と追及の手を止めてくれた。

「人間じゃないなら、ぶっ殺すのを我慢する必要ありませんなあ！

まあ、人間でも我慢なんてしないんですがねえ!!」

俺達の会話を聞いていたのか、散乱した家具の裏から神父もどきが光の剣を手に飛び出してくる。こいつはアーシア嬢と違って空気が読めないらしい。

嗜虐に染まった顔で剣を振り上げる神父もどき。だが、その剣が振り下ろされることは無かった。

奴が飛び上がるのと同時により高く跳躍した美朱が、剣を振り下ろ

すよりも疾く肩車の様な体勢で乗りかかり、両足で奴の首を極めて全身を使って捻ったからだ。

ゴキリツ、という何とも言えない音がリビングに響き、死に体となった神父もどきは向いてはいけけない方向に首を捻りながら床に落下する。

「空気の読めない奴って、ホントに迷惑だよね」

音も無く着地し、パンパンと手を払いながら憤慨する美朱。

動かなくなった神父もどきと美朱を見ながらアーシア嬢は不安げな表情を浮かべる。

「あの、フリード神父は……」

「生きてるよ。頸椎を外したから、後遺症は残るかもしれないけど」

美朱の言葉を聞き、床に付したフリードとかいう神父を癒しはじめたアーシア嬢に、シエムハザさんが送ってきたアーシア嬢の経歴を思い返す。

癒しの力を持って敵味方なく命を救う少女、か。教会が好みそうな人間だ。だからこそ、悪魔を癒すというたった一度の過ちで切られたんだらうが。

アーシア嬢に気を取られていると、気絶しているイツセー先輩の前に紅い魔法陣が浮かび上がり、そこからリアス姉と朱乃姉が現れた。

イツセー先輩に気付いたリアス姉は、手形の付いた顔を胸に抱き寄せる。

「ああ、イツセー!! なんて姿に!？」

「顔面が醜く歪んでますわ、酷い事を……」

「リアス姉、それやったの慎兄だから。あと朱姉、イツセー先輩、それが素の顔。物凄い失礼な事言ってるからね?」

「慎、どうしてこんな事を?」

こちらに厳しい目をむけてくる姉二人。俺はそれを真つ向から受け止める。怯む必要はない、こっちには正当な理由があるのだ。

「イツセー先輩が美朱の胸を視姦してたから、煩惱を散らす為にやった。後悔も反省もしていない」

「なら仕方ありませんわね」

俺の言葉にあっさりと矛先を収める朱乃姉。だが、リアス姉はそれに不満らしい。

「そんな、美朱の未発達な胸を見たくらいで——」

「こやつめ！ ハハハ！」

「痛い、痛いわ！ 謝るっ！ 謝るから！ ごめんなさい！ お願いだから、もう頭グリグリしないでえ!？」

リアス姉の不用意な発言に、とてもイイ笑顔で背後からグリコを決める美朱。

昔っから、いらん事言つては美朱に泣かされてるのに、学ばんなこの人は。

あ、また朱乃姉の胸に顔を埋めてガチ泣きしてる。

年上としても眷属の王としても威厳／＼ZEROである。

「わかってないな。リア姉は残念美人だからこそ、可愛いのさ！」

「りーあ、ざんねんびじんじやないもん！」

「大丈夫よ、リア。美朱は後で私が怒っておくから、涙をかみましようね。はい、チーン」

「グズツ……。チーン！」

毎度のごとく、泣いたせいで幼児退行したリアス姉を慰める朱乃姉。これだから、身内からは密かに『雷の保姆』なんて呼ばれているのだ。

「部長、もうすぐここに堕天使が……って、またですか」

「……美朱、またリアスお姉様イジメた？」

「私の胸の事を言ったりリアス姉が悪い！ 自業自得だ、残念美人！」

「おい、そんな事言ったら、また……」

俺の懸念の通り、また朱乃姉に抱き着いてギャン泣きするリアス姉。これでは堕天使の相手もクソもない。

朱乃姉を促して転移用の魔方陣を展開してもらい、オカ研のメンツを押し込んでから、アシア嬢に声をかける。

「えーと、アシア嬢。堕天使がこっちに来るらしいから、俺達は退散する。困った事があつたら、ミッテルトつて堕天使に言いな」

「ミツちゃんには、私の友達つて言つたら良くしてくれるから。あと、

ちっちゃいやい私そつくりの人形を貰ったら、絶対無くしたら駄目だよ」
「はい。また会いましょうね」

こちらの奇行について行けずに呆けていたアーシア嬢は、俺達が帰る事だけは理解できたのか、にこやかに手を振ってくれた。

あのクソ神父の事を考えると、向こうに戻すのは不安があるが、そこはミツテルトとミニ美朱を信じよう。

この後、オカ研に帰ってからリアス姉の機嫌に戻すのは、あの神父を相手にするのより大変だった。

……19回もパシらせるとかありえねえ。

4話

こんにちわ、幼女に戻ったリーア姉の所為で、寝不足の美朱です。
自業自得？ 言うな。

1日の授業全てを睡眠学習に当てたお陰で何とか体調も回復したけど、眠気が抜けない。ホント、世話のかかる姉貴分を持つと苦労するよ。こみ上げる欠伸を噛み殺しながら、帰る準備をしていると、ミニミニ美朱ちゃんを通じてミツちゃんから連絡があった。

レイナーレがアーシア姉の神セイクリッド・ギア器を抜き取る儀式の決行を今夜に決めたとの事。

なんでも、昼間アーシア姉が脱走して転生悪魔と会っていた事から、グレモリー家が動くことを懸念して予定を早めたらしい。

まったく、部下も部下なら上司も空気が読めないのか。

予定外なのは、ドーナシークとミツちゃんにリーア姉達の足止めを依頼してきた点。

ミツちゃんは断ると言っていたが、保険は掛けておくべきだ。

まあ、悪魔になったイツセー先輩は微妙だけど、昨日のここの住人への殺傷行為は、日本神話の監査官として動くには十分すぎるから、連絡が一度で済んで好都合と考えよつと。

『美朱、どうしたの？』

「昨日話したはぐれ墮天使側にいる内通者から、連絡があったんだけど、今夜、例のシスターから神器を取り出すらしいんだ。それで、今から助けに行くから、リーア姉達は動かないでほしいの」

『……何故かしら。ここはグレモリー領内よ。其処で生きる者に無法を働いた輩を、領主の私が見逃す訳にはいかない事くらい、わかっているでしょう？』

数回のコール音を置いて、電話越しに出たリーア姉に、自身の要求を突きつけると、やはり返ってきた声音は不機嫌さを帯びていた。

リーア姉、それ勘違いしてるから。ここは原則日本の領土、グレモリー家は管理を任されてるだけ。

「リーア姉、ここは日本神話の領土だよ。あと、昨日のお得意様の男性

を殺害した時点で、私達が動く理由には十分。それにリーア姉達が墮天使と揉めたら、戦争の火種になるかもしれないじゃん」

ポンポンと理由を述べていくと、電話越しにリーア姉が押し黙るのがわかった。

あゝ、論破とか私のキャラじゃないのになあ……。

でも、ここでリーア姉の動きを止めとかなないと、ヘタに揉めたら主戦派のジイさま達がイラン事しそうだし。

まったく、十五の乙女が悩むことじゃないよね、これ。

数百年前に起きた天使、悪魔、墮天使の三つどもえの戦争。

各陣営共大きく数を減らした為、種の存続を考えて現在は休戦状態になっているが、そんな状態でも戦争を望む輩が各陣営に存在する。

そういった奴らは、小さな小競り合いも見逃さずに、事ある毎に過去の栄光だの、種族の優劣だのと主戦論を騒ぎ立てるのだ。

非戦派のアザゼルのおっちゃんやシエムさんからしてみれば、鬱陶しい事この上ない。

『む……。確かに、私達が墮天使と戦えば戦争再開の切欠になるかもしれない。でも、悪魔として、グレモリー家次期当主として、管理してる土地で勝手な事をされて黙ってるわけにはいかないわ』

「それは今回の事の処理が終わったら、シエムハザさんから謝罪してもらおうように伝えるつもりだよ。グリゴリのNo.2からの謝罪なら、面子は保てるでしょ」

『それならこちらから文句はないけど……。貴女と慎だけで大丈夫なの？ 墮天使が相手だと、さすがに心配だわ』

「大丈夫、大丈夫。私はともかく、慎兄はアザゼルのおっちゃん並みに強いから」

渋るリーア姉に言葉を返すと、電話の向こうから、諦めの籠もった溜め息が漏れてきた。

なんか涙をすすするような音もしたのだが、それは言わぬが華だろう。

……何を想像したんだ、この豆腐メンタルめ。

『……わかったわ。今回の件では動かないであげる。その代わり、二

人共、怪我無く帰ってくることにいい？」

「ありがとう、リーア姉。それと、無いようにするけど、もしかしたらそっちの足止めに、下級墮天使が行くかもしれないんだ。それで、その中にゴスロリ衣装を着た10代前半の娘がいたら、その子が内通者だから攻撃しないであげてね」

『わかったわ。朱乃にも伝えておく』

「うん、よろしく」

伝える事は全て伝えたので、電話を切る。

後は、悪魔祓いの動きが気になるけど、リーア姉と一緒に網を広げて風潰しにすれば、何とかなるだろう。

特製の手提げカバンから取り出した忍具を制服の下に身に着け、慎重に事情を説明すると今から教会に乗り込むことになった。

これで不測の事態でも無い限り、リーア姉は今回の件で動く事は無い。

生粋の貴族である彼女は、その血筋に誇りを持ち矜持を重んじているが、情愛の一族と言われるグレモリー家の中でも殊更にその傾向が強いが故に、身内を失う事をひどく恐れる。

だからこそ日本神話に就職しても、私達をいつも心配してるし、今回のように私達が日本神話として動くのも、快く思っていないはずだ。

冥界にいた頃、朱乃姉を眷属にした彼女は私達も強く勧誘していた。

初めての眷属の身内というのもあったのだろうが、ミリキヤス君という甥っ子がいても末っ子であった彼女にとって、自身を姉と慕っていた私たちが可愛くて仕方なかったのだろう。

だからこそ眷属悪魔という確かな絆を欲したのだ、私達が他の悪魔や墮天使の元に行つてしまわない様に。

普段は淑女で眷属の王を気取っている癖に、その中身はと言えば意地っ張りで恋に憧れる乙女。庶民の常識に疎いせいでどこか抜けていて、寂しがり屋で泣き虫なうえ、泣いたら幼児に戻る残念美人。

そんな愉快で可愛い私のもう一人のお姉ちゃん。リーア姉だから

こそ放つとけないのだ。

まあ、あの無駄に豊かな胸部装甲をひけらかすのは絶許だが。

見てろ、同盟仲間の小猫といつか、あの乳をもいでやる！

春の日の入りは思ったより早い。

学校を出た時は斜陽が辺りを赤く染めていたのに、教会に着く頃には夜の帳が降り始めていた。

市街地から離れた林の中に建てられた廃教会は、周辺に照明設備が無い為に濃さを増した闇に覆われていた。光源と呼べるのは教会の窓から洩れるオレンジ色の薄明りのみだ。

敷地内には見張りはいなかったもので、薄闇に紛れて侵入し、閉じられた入り口に手を当てて気配を窺う。

感じる気配は14人。それも一人、また一人と徐々に下へ移動している。

なる程、儀式とやらは地下で行うようだ。

背後で周囲を警戒している慎兄に目配せすると、小さくハンドサインを送る。

『地下に潜入するんで、陽動よろしく』

『1階で暴ればいいんだな』

『うい。慎兄が暴れてるのに紛れて、地下へのルートを確保するから』
『了解』

私に代わって入り口の前に立った慎兄は、無造作にドアを蹴りつける。

大して力も入っていないように見えた蹴りに、木製の重厚な扉は蝶番の部品を撒き散らしながら吹き飛んだ。

燭台に灯された蝋燭に薄く照らされた礼拝堂に屯しているのは、10人ほどのカソック姿の怪しい男達。

そのいずれも、突然の侵入者に狼狽している。

侵入者を前にして武装もしないとはとんだ素人だ。そして、私の兄はそんな隙を見逃すほど甘くは無い。

「阿呆……」

眩きは、疾風に流れ去った。男達が上げる誰何の声に応えずに突っ

込んだ慎兄は、まだ動けずにいた手近な男に狙いを付ける。

消えたと錯覚する様な踏み込みで懐に飛び込まれた男は、跳ね上がった右足刀にその喉を抉られ大きく宙を舞った。

ベンチをなぎ倒して吹き飛ぶ同朋に、男達が懐から得物を取り出すが、遅すぎる。

一人は手にした武器を向ける事もできずに、一足で間合いを消し去った慎兄の体当たり気味の肘を腹に喰らい、くの字に身体が折れ曲がって下がった顎を蒼い氣炎が籠もった掌で打ち抜かれ、血反吐を撒き散らしながら床を転がっていく。

剣を構えることができたもう一人も、振るう間も無く上段蹴りで弾き上げられ、反動で飛び上がり独楽の様に回転した慎兄の竜巻を思わせる連続蹴りに巻き込まれた。

漸く、残された悪魔祓い達が光弾を放つが、それらが目標を捉える事はない。

下方からの攻撃に気付いた慎兄は、力無く宙に浮かんでいた蹴りの犠牲者を踏み台にする事でそれを回避。

その反動で宙を駆けながら光弾の群をかいくぐり、奴等が最も密集している場所へ落下のスピードをそのままに氣炎を纏った両手を床に叩きつける。

瞬間、荒れ狂う氣の奔流が衝撃波となり、床や調度品ごと周囲の悪魔祓いを薙ぎ払った。

「……竜巻剛螺旋はともかく、どうも邪影拳がハードエッジみたいになるな。まだまだ修行が足りんかな、これは」

微塵に碎かれた破片とスタボロになった悪魔祓いが降る中、基礎が剥き出しになった床の上で自身のダメ出しをする慎兄。

うむ、相変わらざるの化け物っぷりである。ここにいた悪魔祓いを蹴散らすのに20秒かかってない。

慎兄が強すぎて、陽動の意味が無くなったでござる。

まったく、あの兄はどこまで強くなるつもりなのだろうか。

ぶっ壊れた身体能力とそこから繰り出される達人級の体術。握力測定で1500kgfなんて数値、どうやったら出せるというのか。

それに加え、全方位技の『レイジング・ストーム』を覚えたせいで、対多数の殲滅力が馬鹿上がりだ。

信じられるか、あの威力で本人は「練りが足らん」とか言って、不満に思ってるんだぜ？

その内「俺より強い奴に会いに行く」とか言って武者修行の旅にでも出るのではないだろうか。

ゴキゴキと首を鳴らしている我が兄に呆れの混じった視線を向けていると、十字架の下にあった演台が弾け飛んだ。

木片となった演台に紛れて飛び出した影は、光を固めた刀身を煌めかせて慎兄に躍りかかる。

だが、それに気づかない我が兄ではない。

踏み込みながら振り下ろされる光の剣を捌き、宙にいる影の襟とズボンの裾を捕えると、飛び掛かった勢いそのままに頭からコンクリートに叩き付けた。

ア・テ・ミ・投ゲ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・見事な・・・・・・・・・・。

つと、ネタに走っている場合じゃなかった。

「いつてええええええ!! 今の完全に不意を突いた場面ですよねえ! ギリギリ躲すならまだしも、カウンターで地面に投げ落とすとかどうなってるの、オタク!?!」

頭を押しえながらも間合いを取った影は、フリードとかいう変態神父だった。叩き付けられた時に割ったのであろう、白いはずの髪の毛は頭頂部から赤に染まっている。

「あれだけの『意』を放ってるのに気付くなっていう方が無理だろ、ドアホ」

『意』!? なんですか、その『意』って! 僕ちゃんそんな愉快なモノ出した覚えはないよ!?!」

『意』ってのは人間が行動を起こそうとする前に出る意思の事だ。それを読むのがとある武術の基本だな。『意』を消すか、それより疾く動かないと俺の不意は突けんぜ」

「はあっ?! どうやったらそんなもん感じ取れるんだよ?! 馬鹿な

の、死ぬの!? 正直ドン引きだよ!」

うん、その叫びには全く同感である。

家の兄はまたしても人外に近づいたらしい。

喚き散らしながらも、落とさずに済んだ剣と逆の手に拳銃を構え、慎兄と相對するフリード。その様子を見るに私に気づいてはいないようだ。

触台の光が届かない闇の中を駆け、演台があった場所を調べると、やはり地下に続く階段があった。

地下に降りる階段を降りながら、慎兄の方を一瞥する。ほんの少し不安が籠った視線に、慎兄はこちらが辛うじて分かる位の苦笑を浮かべる。

む……なにその「仕方ないな」って顔。その程度の相手に負けるとは思っていないけど、実戦なんだから心配するのは当然じゃん。

はいはい、わかったよ。余計な心配しないで、美朱ちゃんはとつとと自分の仕事をしてきますよつと。

慎兄達に背を向けて、舗装もされていない土がむき出しの階段を下る。随分と雑な造りだ、人間の持えたものじゃない。例の中級墮天使の仕業だろう。

階段を降りきり半開きになっている扉から中の様子を除くと、礼拝堂と同程度の空間に数十名の悪魔祓いが集まっているのが見えた。そして奥に設置された十字架付の祭壇周辺では、アーシア姉を抱えたミツちゃんが墮天使の男女と空中戦を繰り広げている。

「ミツテルト! まさかお前が裏切るとはね!」

「ウチはこんなザルな計画には最初から反対だったすよ! それをあんたが無理やり協力させたんじゃない!」

「時流も読めん愚か者め! レイナーレ様が至高の墮天使に至る計画の邪魔をするとは!」

「何が時流っすか、このボケ親父! 今回の件はシエムハザ様に報告済みっす! あんた達は命令無視と独断行動でグリゴリへ損害を与えた事で、除籍処分になってるっすよ!!」

「なんですって!?! 嘘よ! トワイライト・ヒーリング 聖母の微笑を手に入れて至高の墮天使

になる私を、アザゼル様達が切り捨てる筈がないわ!」

トワライト：ヒーリング
「聖母の微笑なんて慎様からデータを粗方取ってるから、アザゼル様は必要としてないっつーの! そんなもんの為に悪魔領で問題起こしたら切り捨てられて当然っすよ!!」

口論と共にドッグファイトを繰り広げる3名。アーシア姉を連れて脱出しようとするミツちゃんをレイナーレとドーナシック、そして地上の悪魔祓いが阻止する形になっている。

実力で劣る上にアーシア姉を抱えたミツちゃんが保っているのは、レイナーレ達がアーシア姉に当てない様に加減しているのもあるが、アーシア姉の手の上で槍や光弾を弾いているミニ美朱達の存在が大
きい。

とはいえ状況は不利の一言、早急な支援が必要だ。

「ミツちゃん、聞こえる?」

『え、美朱ちゃん?』

口寄せの術でミニ美朱を通して通信を試みると、返ってきたのはアーシア姉の声だった。

「うん、私。ミツちゃんに繋いでもらえるかな?」

『はい。ミツテルト様、美朱ちゃんから連絡です』

『え、マジッすか!?!』

『マジだよ。ミツちゃん、これから二人の脱出を支援するから、煙幕が発生したらそのまま出口の方に飛んでほしいの。できる?』

『悪魔祓いを黙らせてくれるなら、できるっす』

「わかった、そっちは任せて。それじゃ、よろしく」

『はいっす!』

通信を終えると私は腰のポーチから拳大の玉と、ベルトに吊っていた1ℓペットボトルを手取る。玉の方は衝撃で発動する煙玉、もう一つは今回の為に特別に調合したカクテルだ。

素早く扉を潜った私は、皆の視線が宙を向いている隙を付いて左手の煙玉を悪魔祓いの真ん中に落ちるように投げる。軽い炸裂音と共にもうもうと上がる煙に混乱する悪魔祓い達の声を聴きながら、今度は気配が密集する場所へキャップにつけた信管から落ちるように、

ペットボトルを投擲する。

瞬間、空気を振るわせる轟音と共に、黒煙に包まれた場所へ紅蓮の灼熱地獄が誕生した。

さっきのペットボトルには発火装置の他にガソリンと特殊な増粘剤を混合した液体が入っていた。分かりやすく言うと簡易ナーム弾だ。1ℓペットボトルに入る量なので建物を吹っ飛ばすような威力は無いが、このフロアに火の海を発生させるくらいは可能だ。

「なっ、なんだ!?!」

吹きあがった深紅の火柱に行く手を阻まれた堕天使二人が驚愕の声を上げる。狙い通り今の際でミツちゃん達は扉の向こうに脱出したようだし、あとは堕天使の片割れでも足止めしようか。

立ち昇る黒煙に身を隠し、両手に気を集中する。練られた氣と共に身体を紫電が走り、両手に集まった雷は私の意思に従って苦無の形を取る。

サムライスピリッツの『正義の忍者』ガルフオードから学んだ術、プラズマブレード。

『雷光』の娘である私と相性がいい上に、無料で創れるという素晴らしい利点があるので愛用の技の一つになっている。

そこ、ケチ臭いとかいうな。実際に使える忍具なんて全部オーダーメイドだから、すつごく高いんだぞ！ 祐斗兄に魔劍創造ソードパースで鍛冶を頼んだら朱姉に怒られるし、自分で工面するのは主にお小遣いの面で大変なのだ。

黒煙の切れ間から覗く標的を見据え、本来の物より一回り小さい紫電の苦無を、男の堕天使……えーとドーナシックだったか、へ放つ。「ちっ、小癩な真似を!」

煙を切り裂いて自身に迫る苦無に気付いたドーナシックは苛立ちを吐き捨てながら、手にした光の槍で弾き飛ばす。

だが、甘い。

次の瞬間、全く同じ軌道で飛翔する二本目は右肩を、三本目の苦無が左肩を食い破る。

苦無から本来の姿を取り戻した紫電に、身体を内部から焼かれた

ドーナシークは、糸が切れた操り人形の様に落下した。

今が私が受け継いだ数少ない香澄の忍術が一つ、『風薙』だ。急所は外しているし、生きてはいるだろう。

「ドーナシーク!? クツ、何者!? 隠れてないで出てきなさい!!」

空中で激しく視線を巡らせながら、狼狽した声を上げるレイナール。当然、そんな言葉に姿を見せる愚など侵さない。悪魔祓いの悲鳴と怒号が響く中、黒煙に紛れて走った私は出口を駆け抜けながら、置き土産としてフロアの中央と入り口の手前に残ったナパーム弾を投げつける。

再び巻き起こる爆音と悲鳴。これで、アジア姉とミツちゃんを逃がすだけの時間は稼げるだろう。

階段の中腹まで戻ると、私を待っていてくれたらしい二人と合流する事ができた。素早く負傷は無いかをチェックし、怪我一つない事に安堵する。

「ありがと、ミツちゃん。アジア姉を護ってくれたんだね」

「美朱様のお願いつすから。それに護れたのはミニ美朱のお陰だし。ウチ一人じゃとても護れなかったつすよ」

「そっか、役に立ってよかったよ。それで、アジア姉は怪我とかない？」

「はい、小さい美朱ちゃんが護ってくれましたから。この子達すごかったんですよ! 『りゅーえーじん』ってレイナー様の槍を跳ね返したり、叫びながら両手を上げて張ったバリアーでドーナシーク様を弾き飛ばしたり、大活躍でした!」

目を輝かせながら、ミニ美朱の活躍を語るアジア姉。その姿はとても可愛いが、それを聞いた私の心境は穏やかではなかった。ギギギ……と油の切れたロボットの様な動きでアジア姉の手の上でドヤッと胸を張るミニ美朱達に目をむける。

『流影陣』はまだいい。飛び道具対策であるあれが使える事を計算に入れて、ミツちゃん達の護衛に回したんだから。でも、『闘神翔』はないだろ! 相手を跳ね返す無敵技なら、半蔵正成さんの光龍破でもいいじゃん! というか、私『闘神翔』使えないし! 基本性能改変

してまで使うとか、そんなに元になった『凄い漢』が好きか!!

「美朱ちゃん、小さな美朱ちゃん達をイジメちゃダメですよ」

術を改良した時の労力と時間を無駄にされた恨みを込めて睨んでいると、アーシア姉に怒られた。くっそー、怯えたふりでアーシア姉に甘えよって、後で覚えてろよ!

のんびり長話をする状況でもないので、会話を切り上げて1階の礼拝堂に戻ると、慎兄の他にイツセー先輩と祐兄、小猫がいた。

「アーシアー!」

「イツセーさん!」

アーシア姉を見るなり、こちらに駆け寄ってくるイツセー先輩。おおう、なんか映画のワンシーンみたい到手と手を取り合ってるぞ。これは話しかけ辛い。仕方ないから祐兄に聞いてみるか。

「何で祐兄達がいるの?」

「兵藤君がどうしてもあのシスターを助けたいって、部長の反対を押し切って飛び出したんだ。それで彼一人じゃ危ないんで僕達も同行したんだよ」

へえ、イツセー先輩やるじゃん。ただのスケベじゃなかったんだね。

「ところで、その娘って墮天使だよね」

「ミツちゃんはこっちの協力者だよ。この一件が片付いたらグリゴリに復帰する予定」

「……他の墮天使はどうなったんですか?」

「墮天使、蒸し焼き、ナウ」

解り易いように短く纏めた言葉に、そこにいた全員が顔を顰めた。む、なにその反応。

「お前、なにやったんだ?」

「なにつて、ミツちゃん助けるのに煙幕炊いて手製の簡易ナパーム弾、放り投げてきただけ。別に変な事してないよ」

「いやいやいや! それ十分おかしいから! っていうか、簡易ナパーム弾って何!?!」

「ガソリンに色々な薬品を混ぜた増粘剤を加えて造った焼夷弾。製法

は秘密、良い子は真似すんな」

「……やはり、美朱も悪魔超人ですね。汚い、忍者汚い」

ぬう、火遁に破壊工作と忍者の基本を踏襲したら、悪魔超人呼ばわりされたでござる。

誰が慎兄と同じやねん！ オノレ、小猫め。今度オヤツにマタタビ仕込んでやる。

邪智暴虐極まりない、腹ペコ猫娘へ報復を誓っていると、階段の下から大きな破碎音が響いた。

皆が階段から離れる中、アーシア姉とイツセー先輩を護れる位置に陣取る。

風を巻いて現れたのは、レイナーレだった。

「薄汚い人間に悪魔風情が！ 至高の堕天使へと至るこの私に、よくもやってくれたな!!」

顔を般若のそれに変え、怒声と共に手にした槍を振り払うレイナーレ。

黒いボンテージ風の衣装に包んだ身体は、いたるところ煤けており、肌の露出した部分には所々赤い火膨れがみえる。

「ドーナシックはどうしたんすか？」

「始末したわ。闘えない堕天使に価値など無いもの」

ミツちゃんの問いに馬鹿を見る目を返すレイナーレ。

後で生け捕りにするために、わざと急所を外したのに、無駄に終わってしまったようだ。

「みんな。あいつの、レイナーレの相手は俺にさせてくれないか？」

決意の籠もった声に振り返ると、イツセー先輩が覚悟を決めた顔で、赤い籠手を嵌めた手を握り締めていた。

「俺を騙して殺したつてのもあるけど、何よりアーシアを危険な目に遭わせようとした。俺にはそれが許せねえ!!」

レイナーレを睨みつけながら、怒りを吐き出すイツセー先輩。そういえば、彼を手に掛けたのは、レイナーレだったか。自分よりアーシア姉の事で憤るなんて、本当にいい人だ。けど――

私はレイナーレにむかって踏み出そうとしていたイツセー先輩を、

彼に背を向けたまま押し留めた。

「ゴメンね、イツセー先輩。それは認められない」

「美朱ちゃん!？」

「今回の件は日本神話監査官の扱いになってるの。だから、悪魔の介入する余地は無い。ここの領主、リアス・グレモリーも納得してる事だよ」

「なんだよ、それ……」

不満、怒り、戸惑い。感情の入り混じった視線を背後に感じながら、私は言葉を紡ぐ。

「レイナーレは中級墮天使で、イツセー先輩は成りたての下級悪魔。神器があったとしても、ロクに実戦経験も無い先輩に勝ち目が薄い」
「そんなの、やってみなくちゃ解らないだろ！」

「そうかもしれない。でも、先輩は冥界の次期公爵、リアス・グレモリーの眷属だ。先輩がこのグレモリー領で、墮天使に殺されれば、それだけで戦争再開の火種になりかねないの」

自身の身にそれだけの価値が、あるとは思わなかったのだろう。イツセー先輩が息を飲むのが解った。

「先輩、私達兄妹は墮天使と人間のハーフなんだ。朱姉が悪魔になった関係で、グレモリー家にお世話になってるけど、パパは墮天使側にいるの。だから、戦争なんて起こさせるわけにはいかない」

これが私達の行動の指針のひとつ。世界がどうか、冥界がどうかかなんて関係ない。家族が、友達が争うのが、我慢出来ないから、戦争なんて起こさせない。日本神話に就職するまで曖昧な立場に居るのも、そのためなのだ。

まあ、朱姉がパパと和解してくれれば、苦労の大半は消えるんだけどね。

「……わかった。家族で争うなんて、たまらないもんな」

苦笑いを浮かべながら、神器であろう籠手を消したイツセー先輩は、再び後列に戻ってくれた。

「ありがとう、イツセー先輩。あと、私達がハーフだって聞いたこと、朱姉には内緒にしてね。朱姉にとってはデリケートな問題だから」

「おう」

ニカッと笑みを浮かべるイツセー先輩を一瞥して、私は腰の妖刀を引き抜いた。私の思念を感じ取ったミニ美朱達は、イツセー先輩とアーシア姉の護衛に回っている。

「お前がやるのか？」

一団の先頭に出ると、視線でレイナーレを威嚇していた慎兄が声をかけてくる。

「うん。慎兄に荒事を任せっきりにするのは悪いから」

「そうか。ヤバくなったら助けてやるから、安心して行つてこい」

「過保護感謝です。じゃ、行つてくる」

慎兄が一団の誰が狙われても対応できる位置に移動したのを確認して、私はレイナーレの前に歩を進める。こちらを見下ろすレイナーレの顔は、さっきまでの般若の相から青褪めたものに代わっていた。

『視殺』 古武道などで使われる技法のひとつで、肉食獣が獲物の動きを視線で封じる様に、殺気を込めた視線で相手を縛る技だ。

今まで慎兄の殺気を受け続けたのだ、さぞや堪えただろう。

「さて、中級墮天使レイナーレ。日本神話監査官として、日本人二名の殺人及び殺人教唆の罪で捕縛する。本来なら駆除するところだけど、シエムハザさんの頼みだから命だけは助けてやる。グリゴリから迎えが来るまで、国津神の番所で臭いメシでも食うんだね」

「人間がっ！ 舐めるな!!」

激昂したレイナーレは、怒声と共に光の短槍をこちらに放つ。

空を裂いて飛来する槍は三つ。逆上しているためか、そのどれもが精度が低い。

前方に踏み込みながら2本を掻い潜り、3本目は氣を込めた妖刀で弾き飛ばす。

弾かれた短槍は、空中でその穂先を己が主に向け、こちらに飛来したのと同じ速度で襲い掛かる。

これが対飛び道具用の如月流忍術、『流影陣』。慎兄曰く、流影陣は使い手によってモーションが違うらしいが、私が使っているのは幕末に生きた隠密、斬鉄から学んだものだ。

「くっ……！　またこの技なの!？」

吐き捨てながら、羽根を羽ばたかせて短槍を回避するレイナーレ。その間に間合いを詰めながら、手にした紫電の苦無を放つ。

死角から忍び寄る苦無を危なげな槍捌きで弾いたレイナーレは、こちらを補足しようと首を巡らせるが、その行動は遅すぎる。

トンボを切って宙を舞っているため、大きくスライドする視界でレイナーレを捕えた私は、急降下で間合いを詰めて彼女に掴み掛った。「なっ!?　上から!」

レイナーレは驚愕の表情を浮かべながらこちらを振り払おうとするが、それよりも疾く身体に腕を回すことで腕と羽根の動きを殺し、全身のバネを使って彼女ごと頭から地表に向けて落下する。

「百舌落とし、滅せよ!」

身動きを封じられたまま落下した経験などないのだろう、端正な顔を恐怖に凍り付かせて悲鳴を上げるレイナーレに眩き、二人分の体重に落下エネルギーを上乗せして地面に叩き付けた。

礼拝堂に響く轟音と立ち昇る土埃。激突の寸前に離脱した私が妖刀を構えながら近づくと、土埃が晴れた先には少し陥没したコンクリートに血溜りを作り、大の字に倒れるレイナーレの姿があった。

伊賀忍法『百舌落とし』　正成さんじゃない方の服部半蔵さんから教えられた体術で、本来なら地上の敵を捕獲して落下地点に火薬を仕込み、宙高く飛び上がって落下と同時に火薬を炸裂させるといふ殺人技である。

因みにこの技は結構使っているが、本家の様に落下地点に火薬を仕込んだ事は無い。ヘタしたら自分も巻き込まれる上に、上半身が吹っ飛んだグロ死体なんて見るのは御免である。というか、マジでやったら究極神拳並の技だよ、これ。

閑話休題。

確認したところ見事に気絶しているので、レイナーレを特殊ワイヤーで拘束する。

こら、イツセー先輩。エロい顔をするんじゃない。写メの撮影も禁止。言う事を聞かないと慎兄に頼んでまた『魔のショーグン・クロウ』

をかますよ。

熱血漢からいつもの変態にクラスチェンジしたイツセー先輩をけん制しながら、祐兄に頼んでおいた水の出る魔剣をレイナーレに向ける。

結構な勢いで切っ先から出る水をレイナーレの顔面に掛けてやると、気管にでも入ったのか激しくせき込みながら意識を取り戻した。

「……そう、負けたのね。いいわ、好きにしなさい」

拘束されている事に気付いたレイナーレは、どこか吹っ切れた表情で小さく呟いた。そんな諦観を漂わせる彼女に近づく者がいた。イツセー先輩とアーシア姉だ。

「あの、レイナーレ様。貴女に聞きたい事があるんです」

「俺もだ。しよつ引かれる前に答えてもらおうぜ」

「聞きたい事？ 何かしら」

「何故貴女は私の神器を必要としたのですか？」

「俺を殺す時、俺の持つ神器が危険だからって言ったよな。けど、墮天使は神器保有者を保護するようになってるらしいじゃねえか。なら、何で俺が殺される必要があったんだ」

二人の問いに考え込むような仕草を見せたレイナーレは、ポツリポツリと言葉を紡ぎ始める。

トワイライト・ヒーリング
「聖母の微笑を奪おうと思ったのはね。その力を手に入れば、今まで私を見下してきた奴らを見返してやれると考えたから。そして、万物を癒す事が出来る様になれば、アザゼル様やシエムハザ様も私を見てくれると思ったの」

その結果、見られるどころか切り捨てられたけどね、と自嘲するレイナーレにアーシア姉は、傍らにしゃがみ込んで頭部の傷の治療を始める。

「アーシア、貴女……」

「レイナーレ様の気持ち、少しは分かります。教会にいた頃は、誰もが私の事を聖女としてしか見ていませんでした。だから、欲しかった。私を聖女ではなく、アーシア・アルジエントとして見てくれる人が」

「……ありがとう。次は兵藤君を手に掛けた理由だったわね。これは

単純、上司から抹殺命令が下ったからよ」

「ちよつと待てよ、おかしいだろ！ だって——」

「私の知る限り、私の所属する支部に上層部から神器所有者の保護の方針を切り替えた、なんて通達はなかったわ。だから、今まで通り危険な神器所有者を排除しようとしたのよ」

「なんだよ、それ……」

力なくその場に膝をつくイツセー先輩。自分の死因が情報の伝達ミスではやりきれないだろう。

「イツセー先輩、ごめんなさい」

私と慎兄は俯いて小さく震えるイツセー先輩に頭を下げた。

私の声に上げられた先輩の顔には、いつもの快活さは見えず、そこにあるのは理不尽に対する嘆きだけだ。

「なんで、美朱ちゃんと慎が謝るんだよ？」

「俺達は日本神話に所属する監査官なんだ。俺達の役目は、この街の管理を任されたグレモリー家が、住民に害を与えずにその役目を果たしているか、その監査の他にもう一つある。それはオカルト関係の脅威から、この街の住民を守る事だ。本来ならもつと早く謝るべきだったんだが、悪魔になったばかりのイツセー先輩には、機密上言えなかつたんだ」

「私はイツセー先輩や昨日の人を守ることができなかつた。謝って済む事じゃないって解ってるけど……ごめんなさい」

私達はもう一度、深く頭を下げた。

こんな事で許されるワケはないのはわかつてる。罵倒はもちろん、殴り倒されても文句は言えない。

覚悟を決めていると、ふいに頭の上に手を置かれた。

顔を上げると、イツセー先輩がはにかんだ様な笑みを浮かべながら、私の頭を撫でていた。慎兄が放置なところが、イツセー先輩らしい。

「あーと、あんまり気にしないでくれよ。俺は殺されちゃったけど、悪魔になって楽しくやってるからさ。それに、俺や契約者の人はダメだったけど、アシアを、俺の友達を守ってくれたじゃんか。俺には

それで十分だよ」

「……………ありがとう」

イツセー先輩の言葉に慎兄はもう一度深く頭を下げ、私は俯きながら何とか、お礼を言うことができた。

ジーンときたせいでかなり鼻声になってたが、誤魔化せたと信じた
い。

エロいけど、イツセー先輩っていい人だ。

この後、通報を受けて駆けつけてきた警察と番所の自警団に寄つて、レイナーレと地下にいた悪魔祓い（なんと死者は0だった）は逮捕された。ミツちゃんは私達にお礼を言った後、転移で冥界に帰っていった。

報告の為にオカ研の部屋に帰った私達を待っていたのは、リーア姉の熱烈なハグ。こちらに任せると決めたが、不安で仕方なかったらしく、慈愛の抱擁と言うよりは、泣いてすがりつくといった有り様で、私達はギユウギユウと抱きしめられた。

ギリギリ幼児退行してなかったのは不幸中の幸いだろう。

私達に格好はつけたものの、落ち込んでいたイツセー先輩はリーア姉の胸に顔を埋めた瞬間に復活。

帰りの道中慰め続けていたアーシア姉から大いに不興を買った。

あとは、アーシア姉を眷属に勧誘して断られたリーア姉が、その豆腐メンタルを遺憾無く発揮してみんなに慰められたり、イツセー先輩の神器が神を滅する力を持つという十三種の神滅具ロンギヌスの一つ、赤龍帝の籠手ブーステッド・ギアであることが判明したり、ミニ美朱を見たリーア姉と朱姉が自分もと欲しがった為、もう一体追加した上に使い魔として契約したりと、日付が変わるまでドタバタと騒ぐことになった。

アーシア姉の処遇についてだが、眷属にはならなかったものの、リーア姉の責任でグレモリー家預かりとなり、駒王学園に通うことになった。もちろん、オカ研所属も確定。

謝罪と共にグリゴリから贈られた感謝料は、アーシア姉の学費と生活費に当てるそうだ。

現在は部屋に滞在しているが、時期に下宿先も決まるだろう。

開始早々に色々騒がしい高校生活だけど、楽しくなりそうだ。

閑話 『来ないで！ mugenの森』

「みんな、使い魔を捕まえないか？」

打ちっぱなしのコンクリートに囲まれた部屋。無造作に置かれている古臭いスチール製の縦長ロッカーに、所々に傷が目立つ木製の円テーブルを安物のパイプ椅子が囲み、ビン詰め飲料しか置いてない、栓抜き付のクラシックな自販機が鈍い稼働音をあげる。

ガラの悪い奴等の溜まり場にしか見えない無限の闘争の控え室に、声が響いた。

追っていた文字から目を放して視線を巡らせると、座面に足を乗せ背もたれに腰掛けていている行儀の悪い男が、妙案を口にしたとばかりにドヤ顔をうかべている。

この利用者の中でダントツの問題児、ヴァーリ・ルシファーだ。「相変わらず、突拍子の無い奴だねえ。そら、順を追って説明してみな」

保護者である美猴が円テーブルに突っ伏したまま、気だるそうに誘導する。

ヴァーリの発案という時点で嫌な予感しかしないが、話を聞いてやるだけなら無料だ。

「ああ。少し前に『このシーズンになると冥界の使い魔の森は、新たな眷属に使い魔を与えようとする集団でこった返す』というニュースを見たんだが」

ふむ、それで？

「そこで、俺は気づいてしまったんだ。自分に使い魔がない事に」

「それで、自分も使い魔の森に行つて、使い魔を捕まえようか？」

なんだか芝居かかったヴァーリの言葉に、口を開いたのはアーサー・ペンドラゴンだ。

ブリテンの騎士王の末裔で、祖先と同じ名を持つ。最近の趣味は無限の闘争の中に存在する、平行世界の先祖であるセイバー女史と剣を合わせる事だそう。あと、重度のシスコン。

「馬鹿だな、アーサー。俺があんなどころで取れる十把一絡げの使い

魔で、満足するとも?」

瞬間、アーサーの持っていたコーラのビンが爆砕した。隣に座っていた黒衣着物姿の女が、ガラスの破片とコーラを浴びて猫のような悲鳴をあげる。

「おや、何故か割れてしまいましたね。片付けをしなくては」

にこやかに呟いてビンの残骸の掃除を始めるアーサー。童話の王子様を思わせるイケメンスマイルなのに、目は全く笑っていない。

むしろ、憤怒の炎が巻き上がるように、ギラギラとした眼光を放っている。

馬鹿に馬鹿と言われたのが、相当ムカついたらしい。

さて、その馬鹿。使い魔が駄目ならどこで————つて、まさか……

「察しがいいな、慎。そうだ! この無限の闘争の中に住む屈強な生物こそ、俺の使い魔に相応しい!」

……馬鹿が予想を超えて馬鹿だった。無限の闘争に生み出された物は、理の差異からこの空間でしか存在できないのを忘れたか。

「なんだ、知らないのか? 最近無限の闘争に新モードが追加されたのを」

………なんですと!?

パイプ椅子から飛び降り、制御コンソールの前で手招きするヴァーリ。横からコンソールの画面を覗きこむと、モード選択画面で今までなかった『サバイバル・ツアー』という項目が追加されている。

ヴァーリに交代してもらい、新モードの説明に目を通す。

こいつは隠しモードらしく、ランク『神』のキャラと闘ってダメージを与える事が解放条件だったらしい。

墮天使のイザコザでブローリー戦から、あまりここを使用しなかったので、気が付かなかった。

さて、このモードだが、ツアーの名が示すとおり無限の闘争の世界を旅しながら、敵と闘うというものらしい。

その特徴は、闘争が従来の試合形式からエンカウントに変化したこと。

時や場所を問わず、遭遇したら即戦闘なので、常在戦場の覚悟で警戒を絶やさないとしなければならぬ。

また、エンカウント方式なので逃走も可能になっている。

そして、ツアーモード最大の目玉は、対戦リザルトの成績によってレアアイテムを入手したり、無限MUGENの闘争に登録された闘士を仲間にする事ができること。しかも、仲間になった闘士は現実世界に出る事も可能なのだ。

え、大丈夫なのか、これ。

ブローリーと闘ったからわかるけど、あんなの現実に解き放つたら、冥界天界問わず世界なんて速攻で吹っ飛ぶぞ。

……あ、Bランク以上の闘士は直接勝たなきゃ仲間にならないって書いてあるわ。

なら、俺等が上位の化け物共を解き放つのは当面無理だな。

「理解したようだな。ならば、行くぞ！ 闘争と冒険が俺達を待っている!!」

「ちよつと待て。俺たちは行くとは言つてねえぜ」

「私もです。興味はありますが、今日はルフエイと買い物に行く約束がある」

「いや、俺も学校あるから無理」

「と言うか、ここがどこかい加減説明するにや。いきなり連れてこられたと思ったら、あんた等は勝手にどっかに行つて、ボロボロで帰ってくるのを見せられただけなんだけど？」

不参加表明でテンションを上げるヴァーリの出鼻を挫く俺達。そういうえば、アーサーの横の女には見覚えがないな。

「この前ヴァーリがスカウトした、黒歌っていう悪魔だぜい。黒歌。ここはそこにいる姫島慎が持つてる修練用の空間さ」

黒歌といえは、確か塔城の姉貴でS級のはぐれ悪魔だったか。

ふむ。顔は何となく似てるような気がするが、腰まで届く髪は黒いし着崩した黒の着物から覗く成熟した女の肢体は、あのチンチクリンな塔城とは比べ物にならない。

「まな板猫娘の塔城とは全然違うな。お前ら本当に姉妹か？」

「いきなり人の身体ジロジロ見といて、言う事がそれか！ あと白音は発育不良になってるみたいだから、私も心配にや」

「あいつも苦労してるからな。お前さんが主殺ししてトンズラした所為で、上級悪魔共に虐待紛いを受けた上に処刑寸前までいったらしいし」

「そう言う割に、私に怒ってないみたいじゃない？」

面白い物を見つけたような黒歌の視線に、俺は小さく肩をすくめた。確かに、何も知らなければ文句の一つを言ったかもな。

「お前さんが主殺しをした件について調べる機会があつてな。あんな眷属を玩具としか思っただけなクズなら、殺されてもしいやあないわ」

サーゼクス兄からの依頼で裏を取ったけど、あれは酷かった。男は奴隷兼憂さ晴らしのサンドバック。女はみんなお手付きの上に性的虐待を繰り返していた。その上、そいつの子供を孕んだ眷属は殺した上に、遺体を家畜に喰わせて始末したつてんだから、救いようがない。「そんなクズを殺しても、お尋ね者になるのが今の悪魔社会なんだけどねー」

「この件については資料もサーゼクス兄に提出したし、むこうも何とか眷属悪魔の地位を向上させようと頑張ってるんだけどな。老害共の横やりの所為でうまくいって無いみたいだ」

なんでも、この件を持ち出した時は『爵位を持つ純血悪魔と転生悪魔を同列に扱うなど、無礼にもほどがある』とか老人からクレームの嵐だったらしい。

寿命が長すぎるせいで老人が権力握ったまま、世代交代しないってのは、悪魔社会の欠陥の一つだよな

「いっそのこと、姥捨て山でも造ったらいいにや。五千年以上生きてらそこに封印して俗世から隔離するとかで」

「妙案だけどそんな政策通したら、ソツコーで反乱起きて内戦確定だな」

「やれやれ、これじゃあ当分はお尋ね者は継続かにやあ。早く白音と一緒に暮らしたいんだけど」

「だったら手紙でも書いてやれよ。塔城の奴、お前さんの事がトラウマになって、かなり拗らせてるぞ」

「だって、今更どんな顔をして会えばいいか、わからないもん。事情を知ってるなら、あんたが白音の誤解を解いてくれると助かるにや」

媚びるような視線を向ける黒歌の頭に手刀を落とす。ドゴムツと小気味いい音が響き、黒歌は猫のような悲鳴を上げながら頭を押さえ、蹲った。

「ごつちも身内がややこしい事情を抱えてんだよ。それも解決してないのに他人のケツなんか拭けるか。自分でやれ、アホ」

恨めしそうにこちらを見上げる黒歌の視線を無視して、俺は傍にあったパイプ椅子に腰かけた。

そろそろヴァーリの相手をしてやらんと、またろくでもない事をし兼ねない。

「それでどうすんだ、ヴァーリ。誰も同行しないけど、お前ひとりで行くのか？」

「ああ、それなら問題ない。ここに居る全員が参加するように手続きしておいた」

———なんだと？

瞬間、室内にけたたましいアラーム音が響いた。

急に襲ってきた胴と太腿に締め上げられる感触に向けると、銀色の金属製のベルトによって拘束されている。

「ニヤツ!? 何これ、どうなってるにや!」

「うおおっ!? なんだこりやあ!?!」

「ヴァーリ、貴方はまた勝手なこと?!」

「馬鹿め! お前達に拒否権があるとでも思っていたのか!!」

身体を振りながら口々に悲鳴とヴァーリへの罵声を上げる俺達に、とてもイイ笑顔でパイプ椅子に戻るヴァーリ。

くそっ! 殴りたい、あの笑顔……!!

「てめえ! 覚えとけよ! 絶対ぶん殴ってやるからな!!」

「ふははははははっ!! 負け犬の遠吠えなど聞こえん! さあ行くぞ、冒険の旅に!!」

ヴァーリの号令に合わせる様にパイプ椅子がある部分の床が開き、強烈な浮遊感と共に妙にメカメカしい縦穴をパイプ椅子が猛スピードで滑り落ちていく。

こうして、俺達は狂気と理不尽と非常識に満ち満ちたデスツアーに強制参加するハメになったのだ。

……ちきしょう、とつとと帰つとけばよかった。

◇

「……………何これ」

眼下に広がる常軌を逸した光景に、思わず言葉が零れた。

周辺を見下ろせる岩山からの景色は、異様の一言だった。ある場所は緑豊かな密林、またある場所は謎の巨大生物の頭骨が鎮座した砂漠。その他にも上半身のみになった自由の女神が横たわる廃墟となった湾岸倉庫、煮えたぎる溶岩の流れる灼熱の火山帯、吹雪が吹き荒れる凍土、果ては謎の軍事基地や宇宙空間まで。それらがまるでパズルのピースを適当に合わせたように、グチャグチャに隣り合っているのだ。

原作 m u g e n の知識があるので、様々な格ゲーのステージが隣り合ってるのだと分かるが、実際に現実としてみるとインパクトが違う。

「……………これが無限の闘争内部の世界ですか。表現する言葉が浮かびませんね」

横に立つアーサーがメガネの位置を直しながら呟いた。異様な光景に口元が引きつっているが、薄いレンズ越しに見える碧の瞳は未知への興奮に輝いている。

「言葉の割に眼がギラギラしてるぜ。妹さんとの約束はいいのかわかる？」

「私も男の端くれですからね、この光景には冒険心を刺激されますよ。ルフエイとの約束を反故にしてみました。この景色を見れたことはヴァーリに感謝しましょう」

先ほどまで怒り狂っていたとは思えない穏やかな笑みを浮かべて、背後を振り返るアーサー。つられて視線を向けると、ズタボロになったヴァーリを美猴と黒歌が埋葬している姿が見える。

「二人とも。二度と出てこれない様に、しっかりと埋めてください。あれほど来たがっていた無限の闘争の土になれるのですから、ヴァーリも本望でしょう」

「おうよ。ご先祖がされたみたいに、埋めたら岩山で封印してやるぜい」

「当然にや。問答無用でこんな変な場所まで連れてきたんだから、落とし前はしっかりとつけるにや！」

あつと言う間にヴァーリは地中に姿を消し、その上に美猴が呼び出した人の2倍はある、岩がズシリと押し掛かる。仕上げとばかりにアーサーが卓越した剣捌きで岩肌に文字を刻む。

『愚か極まりない白龍皇、自業自得でここに眠る』と。では、出発しましょうか。出来れば今日中に出口を探したいので」

アーサーに促されて次々と岩山を降りていく俺達。誰も振り返らないあたり、ヴァーリの人徳の無さがわかるといふものだ。

岩山を降りて歩く事数刻。道無き道を踏破していた俺達の前に、深紅の溶岩が溢れる火山帯が立ちはだかった。

自然に冷えて固まったであろう黒い岩場が点在しているので、全く進めないわけではないのだが、危険地帯には変わりない。できれば、もう一つ、二つは保険がほしいところだが、どうするか。

「この程度の障害で立ち往生とは情けないぞ、お前達！」

アーサーにでも知恵を借りようかと思っていると、上から声が降ってきた。馴染のある、とうかさつきまで聞いてた声に視線を上げると、やはり白龍皇ディバイン・ディバイディンクの光翼を広げたヴァーリが腕を組みながらこちらを見下ろしている。

「ヴァーリ!? なんであんたがいるにや！」

「そうだ! あれだけ嚴重に固めた封印をどうやって解きやがった!!」

「あ、そうか。ここは無限の闘争の中だから、死んだり再起不能になっ

「たら、無効化されるんだ」

「その通りだ。目覚めたら目の前に自分の墓があったのには正直引いたが、それも冒険には付き物だろう！」

「いや、ねーよ。」

「で、何の用があつて戻ってきたんですか、死にぞこない」

「探検には勇敢なリーダーが必要だからな。不安に震えているであろうお前達の為に急いで合流したんだ。決して、起きたら誰もいなかったのが寂しかったわけじゃないぞ！」

相変わらず辛辣なアーサーの言葉を無視して、空中で胸をはるヴァーリ。というか、心情隠せてねーよ。ダダ漏れじゃねえか、アホの子め。

「さて、せっかく無限の闘争の世界に来たんだ。そろそろ一戦交えたところだが……」

そう言いながら獲物を狙う肉食獣の様に視線を巡らすヴァーリ。ややあつて何かを見つけたのだろう、その目に強い光を帯びる。

「ふむ、あれなんかはよさそうだな。お前ら、見ろ」

指をさされた方に目をむけると、溶岩の川の真ん中で仁王立ちしている生物らしき影が見えた。全身が赤の鱗に覆われ、側頭部に二本の白い角を持つリザードマンの様な姿——つて、ちよつと待て。

「おまつ!?! あれ、イフリートじゃねえか!!」

「イフリート、炎の魔人と言われる精霊か。この冒険の最初の獲物としては悪くない。そうだろう、アルビオン」

『ああ。だが気を付けろよ、ヴァーリ。精霊程度俺達の敵ではないが、ここは無限の闘争の中だ。奴も普通のイフリートではあるまい』

「分かっているさ。行くぞ、バランス・ブレイク禁手化!!」

気合の入った掛け声と共に純白の全身鎧を纏い、空を翔るヴァーリ。白の軌跡を残し矢のようなスピードで赤の魔獣に接敵した瞬間、世界が紅蓮に包まれた。

「ヌワーーーーーッ!?!」

『ヴァーリイイイイイッ!?!』

天を覆い尽くすほどの火の鳥の群れに、地上から次々と吹き上がる

巨大な火柱。そして、その中心で瞬く間に黒い消し炭になるヴァーリだったもの。……………これはひどい。

「……………オレハナニカサレタヨウダ」

コンマ1秒で敗北する事に定評のある白龍皇（笑）の今回の闘いに対するコメントである。

先ほど黒い炭の様なナニカから復活した馬鹿は、勘違いしていたようだが、さっきの紅い化け物は名前はイフリートでも、現実の精霊とはまったくの別物だ。

1991年に発売したスクエア作のRPG、『Romancing SaGa』に登場する最強クラスの鬼畜ボス。

この世全ての炎を操るモンスターと言われており、即死級の全体攻撃を連発する情け無用の化け物。

無限の闘争でもその能力と無慈悲さは遺憾無く発揮されており、その実力は『鬼』クラスに位置されている。

まあ、俺達が手の出せる相手じゃないってことだ。

「敗北したところ悪いが、ヴァーリよ。さっきの闘いの報酬つてのを見てみようか」

「報酬?」

「サバイバル・ツアーモードは、対戦リザルトの成績でアイテムや仲間を手に行けるって説明に書いてあったろ。リストバンドに付いた簡易コンソールを確認してみろ」

俺に言われるままに、右手首に着けた無限の闘争使用者のステータス管理を担っている簡易コンソールを操作するヴァーリ。興味があるのだろう、美猴とアーサーも投影型ディスプレイを横から覗き込んでいる。

「……………どうやら、今回の報酬は仲間らしい」

「へえ、名前は『しんのゆうしゃ』か。強そうだが、ヴァーリには似合わないねえ」

「確かに。まずは呼んでみるとしましょう」

「ああ、そうだな」

野郎二人に促されてヴァーリがコンソールを操作すると、淡い光と

共に現れたのはやけに荒いドット絵で描かれたゲームの画面だった。

「え……」

「にやに、これ」

状況が理解できない俺達を置き去りに、画面の中では軽快な音楽と共に『私』という人物の冒険が続く。そして、1分ほどが過ぎ左右が火の海に覆われた橋の前にたどり着いた時、『私』は突飛な行動に出た。何と「ホップ ステップ ジャンプ… かーるいす!!」と叫び声を上げながら火の海に飛び込んだのだ。当然『私』は炎に焼き尽くされ、『ぎんねん!! わたしのぼうけんは、これでおわってしまった!!』というメッセージと何故か疲れたように見える死神の横顔を残り、画面は消滅した。

「なんだったんだ、今の?」

「もしかして、今のが『しんのゆうしや』なんでしょうか?」

突然の事態に困惑していると、ディスプレイを見ていた美猴が驚きの声を上げた。

「ヴァーリ! お前さんの仲間、死んでおるぞ!!」

「なん……だと……っ!」

美猴を押しつけてディスプレイに目を走らせたヴァーリは、信じられないものを見た顔で呆然と言葉を零した。確認してみると『しんのゆうしや』の名前の横にしっかりと死亡の文字が刻まれている。

「んー、今のってあれじゃにやい? いわゆるハズレ」

「なるほど。コンマ一秒で負けたのに、いい仲間が来るはずありませんね」

「ふざけるな!!」

黒歌の言葉に当人を除いた面々が納得の声を上げていると、項垂れていたヴァーリが怒りの声を上げた。

「呼んだだけで死ぬような軟弱な奴を俺の使い魔などと認められるか! こうなったら、意地でも俺にふさわしい強者を使い魔にしてやるぞ!!」

自分の負けっぷりを棚に上げて天高く吼えるヴァーリに、俺達は小さくため息をついた。どうやら帰還への道は困難な物になりそうだ。



あれから5日が過ぎた。

数々の苦難を乗り越え、俺達は遂にこの世界の出口と思われる場所を見つけた事ができた。

思い返せば、この5日間ほんつとうにロクでもない事ばかりだった。

『うおおおおつ!? 追いつかれる!?』

『漕げっ! 死ぬ気で漕げええつ!!』

『なんで川にあんな巨大な鯨がいるんですか!?』

『あ……っ、ちよっ……ギヤアアアアアアッ!?』

『び……美猴が喰われたにや!?』

『振り向くな! 奴がサルに気を取られてる隙に、引き離すぞ!!』

『仲間を犠牲にして助かろうとは、この悪魔!!』

『やかましいっ! 悪魔はお前だろうが!』

火山帯を迂回しようと、置いてあったボートで川を降れば、鯨並みのデカさの鯨に襲われたり、

『ゴローとキンタロー、モタローに一休だどっ!?』

『奴らを知っているのか、慎!!』

『異世界にある魔界の住人達だ! 気を付けろよ、こいつらに負けたら——』

『FINISH HER!!』

『ミギヤアアアアアアアアアアアアッ!?』

『ああっ!? 黒歌が虎柄の化け物の踏み付けでミンチに!!』

『——ああなるぞ!』

『おいおいおい! 復活するからってシャレになってねえだろおつ! どうすりゃいいんだ!』

『狼狽えるな、美猴! ああなりたくなければ、負けなければいいだけの話だ!! 奴らを蹴散らすぞ!!』

『コンマ一秒で負けまくってる奴が言っても説得力ねえよお!!』

『ガタガタ抜かすなっ！ 心にトラウマ抱えたくなけりや死ぬ気で闘え!!』

負けたら『FATALITY』される化け物共に襲われたり、

『大竜巻落としッ!!』

『グワーツ!!』

『さすがゴンザレス。剣の間合いの外から投げ技に持つていくとは……!!』

『いや、おかしいだろ！ あのおっさん、剣の間合いどころか20メートルくらい瞬間移動して投げてるじゃねえか!!』

『あのアーサーが手も足も出ないとは……。あれが音に聞こえしジュードーの実力か』

『あれ柔道じゃなくて、ロシアのサンボな』

『そんなのどうでもいいにや。このままだとアーサーの腰が——』

『大竜巻落としッ!!』

『ウギヤーツ!?!』

『……もう手遅れだったにや』

格ゲー史上最悪の投げキャラと闘ったり、他にもオメガに遭遇しては波動砲で消滅させられるわ、宝箱を開けたら神龍が出てきてダイダルーエーブで流されるわと本当に地獄だった。

「やっど……。ほんとうにやっど、出口を見つける事ができましたね」

「ああ。黒歌は度重なる死の体験によるショックで猫から戻らなくなるし、一時はどうなるかと思っただぜい」

アーサーと黒猫を抱いた美猴が死んだ魚のような目で、『GOAL』とアーチの掛かった上空の黒い穴を見上げている。

黒く汚れた身体にボロ布となったトレーニングウェアを巻き付けた姿は、浮浪者と言われても仕方ないだろう。

かく言う俺も同じ姿をしているだろうが。

「あれが今回のゴールか。空中にあるとは奇妙なものだが、この世界を思えばそう驚く事でもないな」

ダイバイン・ダイバイング
白龍皇の光翼を広げて、宙で腕を組みながら頷くヴァーリ。あれ

から何回も擬死体験をしてるのに、馬鹿の空気の読めなさは平常運転である。思わずぶん殴りたい衝動に襲われるが、ここで争っても体力の無駄なので我慢する。

「楽しかった冒険もこれで終わりと思うと名残惜しいが仕方ない。有終の美を飾る意味でも俺がゴールテープを切らねばな」

何に納得してるのかブツブツと呟いていたかと思うと、ヴァーリは止める間もなくゴールに向けて飛び出した。青空に軌跡を残してグングンと加速する白い流星は、ゴール目前で突如として発生した紅い極光に飲まれてその姿を消した。

極光の発生源に目をむけると、そこには紫電を纏いながらその姿を現す空中戦艦の様なモノが見える。

「……まあ、こんなことたろうと思っただぜい」

「今までの旅路を考えれば、障害の一つや二つ用意していないわけがないですからね」

「それでどうするんだ、あのデカブツ」

「麓に軍事施設らしき建物が見えますから、そこを調べましょう。役に立つ物があるかもしれません」

ゴールの前に陣取った戦艦から視線を離し、俺達は軍事基地に向けて立っていた丘を降り始めた。

ん、ヴァーリ？ そのうち復活するだろ。

緑が疎らに生える荒野を抜けると、目的の建物はすぐに見つかった。

有刺鉄線を頂に掲げた鋼鉄製のフェンスに囲まれた広大な土地には装甲車や戦車と言った特殊車両が列をなし、長大な滑走路にはヘリや戦闘機が並んでいる。

建物の方も、倉庫や研究施設と思われるものの他に管制塔やレーダー設備を屋上に付けたものが設置されている。

フェンスをなぞるように外周を回り、車両用のゲートが付いた入り口の前にたどり着くと、監視用ブースから一人の女が出てきた。軍施設の職員の割に緑と黒のレオタードのような衣装を着たブロンドの女は、一通りこちらを観察すると俺達に一糸の乱れの無い敬礼を取っ

た。

「この基地に所属しているソニア・ブレイド中尉だ。挑戦者達よ、ここまでの道程ご苦労だった。この施設の責任者の元に案内するので、私に着いてきてほしい」

口上を終え、見事な回れ右で背を向けたソニアに俺は思わず顔を引き攣らせた。誰かと思ったら、モーコンのソニアかよ！ キヤラのチヨイスが濃すぎるわ！

ソニアの案内で連れてこられた司令室で俺達を待っていたのは、ライトグリーン軍服に身を包んだ金髪碧眼の中年将校だった。

各種コンソールやモニターに囲まれた室内の中央に備え付けられた椅子から降りたその男は、軍服と同色のベレー帽の位置を直すと猛禽類を思わせる鋭い視線をこちらに向けてくる。

「おいおい、何者だあのおっさん。もの凄え気迫だぜ」

「この威圧感に隙の無い所作。間違いなく達人クラスです」

「こんな強者がいるとは、やはりこの世界は素晴らしい」

「フギヤアアアッ!?!」

後ろの連中が好き勝手にしゃべってるが、俺には答える余裕はなかった。感じる力や覇気が半端じゃない。

相対するとはつきり解る。以前に闘ったブロリーほどではないが、感じる力の桁が違う。目の前の男には逆立ちしても勝てない。それどころか、ヘタをすれば攻撃をまともに当てる事も出来ないのではないだろうか。

それにこの容姿、もしかしてこいつは……

「挑戦者諸君、よくぞ此処まで辿り着いた。私の名はジェネラル。この基地の司令官であり君達のような挑戦者が最後の試練に挑むのを手助けする役目を負うものだ」

やっぱりジェネラルかよ！ さすが格ゲー史上最凶最悪のラスボス、現状では勝てる気が全くしないわけだ。

「初めまして、ジェネラル司令官。私はアーサー・ペンドラゴンといいます。それで、手助けとは？」

「うむ、これを見たまえ」

ジェネラルが下でコンソールを操作している下士官にハンドサインを送ると、中央の巨大なモニターに先ほど見た巨大空中戦艦が映し出される。

「こいつの名は対魂斗羅戦艦ドドリゲス。異星人の軍が、魂斗羅と呼ばれる伝説の兵士に対抗するため造り上げた空中戦艦である。ゴールを阻むこれを轟沈させるのが君達に課せられた最後の試練なわけだが……」

ジェネラルが口にした魂斗羅という単語に口元が引きつるのを止められなかった。魂斗羅って確か、魚雷に乗って水上スキーしたり、ヘリのメインローターの上をルームランナーみたいに走りながら闘う変態のことだったはずだ。

いかん、嫌な予感しかない。

「異星の技術で建造された奴の火力は絶大で、ヘリや航空機といった従来の手では近づく前に撃墜されてしまう。そこで、君達には——」

ジェネラルが言葉を切るのと同時に、モニターが切り替わった。次に映されたのは、ずらりと並んだミサイルランチャーの列だ。

「この基地から発射されたミサイルに乗って奴に接近、後続のミサイルを足場にして戦ってもらう」

……何を言っているのか、わかりませんね。

他の面子も俺と同じ感想を抱いたらしく（某白蜥蜴だけは妙に目を輝かせていたが、こいつは無視だ）呆然としている。

暴論なんて生易しいレベルじゃない。ミサイルに乗る？ なんだそれは!?! 狂気の沙汰じゃないか! どうしてこうなった!?!

「少々無茶な作戦であることはこちらも承知している。しかし、この程度の試練を乗り越えられなければ、強者の道を極めるなど夢のまた夢だと知るがいい。もし、どうしても受けられないというのなら——」

「いや、少々なんてレベルじゃなくて、人間には早すぎる難行じゃないだろうか。ともかく、こんな作戦に付き合ってもらえるか! 俺は代案の方を選ぶぞ!!」

「私と闘ってもらおう事になる」

「喜んで作戦に参加させてもらいます、Sir!!」

ジェネラルの処刑宣告に渾身の敬礼で参加を決めた。後ろの三人が白い目で見ているが、そんな事はどうでもいい。

ヘタレとかいうな。

勝算の無い闘いで心が折れるまでなぶり殺しにされるくらいなら、無茶だろうが何だろうが万に一つの可能性がある分、ミサイルの乗る方がマシだ。

「良い返事だ。他の者も同じ結論かね？」

「あんたと手合わせするのも魅力的だが、ミサイルに乗るほうがおもしろそうだ」

「勝てそうにない相手と闘るよりも、こちらの方が現実的ですか」

「ちよいと打つ飛んじやあいるが、筋斗雲みたいなものだろ」

「結構。では、シャワールームに着替えが用意してある。作戦前に身体を清めてくるといい」

「随分と用意がいいんですね」

「慣れだよ。ここに辿り着いた者は、大抵が浮浪者と見間違うような有様になっている。今の君達のようにね」

厳つい顔に人好きのする笑みを浮かべるジェネラルに口々に礼を言うと、俺達はソニアの案内でシャワールームを借りることになった。

檻褻切れになったトレーニングウェアをクズ籠に放り込んで、この旅で手に入れたプロテスリングや護りのルビーを取り外し、シャワールームに入る。

シャワーヘッドから流れる透明な湯は身体を通ると一気に黒く変色する。この5日間ろくに身体を洗っていなかったのだから仕方ないが、見ている気分がいいものじゃない。

備え付けられたボディソープで手早く身体を清め、バスタオルで水を拭きながら着替えを確認した俺は思わず目を疑った。

包装から取り出した着替えはパンツと靴下、そして軍用であろう迷彩柄のカーゴパンツしかなかったからだ。上半身に着る衣類は一切

用意されていない。

代わりの履物として置かれた軍用ブーツを見ながら考える。

うん、これはあれだ。

アメリカのアクション映画によくある、筋肉モリモリマッチョマン系の軍人ヒーロー。

いやいや。こういうのが似合うのはサイラオグの兄貴みたいなゴツイ系であって、俺みたいなアスリート系の細筋肉なガキがやっても貧相なだけだから。

実際に着て姿見を見ると、やはり筋肉のボリューム的に物足りない。これではヒーローではなくて途中で死ぬ脇役の新兵である。

とは言え、他に着替えがない以上は仕方がない。

少々気恥ずかしい気分です司令室に戻ると、他の三人も同じ服装で戻っていた。黒歌は未だに黒猫のままらしい。

「全員戻ったか。出来れば1日くらいは休息を与えてやりたいが、規則上そうはいかん。早速作戦を開始する。ソニア中尉、5人を専用のミサイルポッドへ」

「了解しました」

ソニア中尉に従って進むと、ひと際大きなミサイルポッドに案内された。外付けの梯子で上に上がって気づいたが、このポッドだけ他の物よりミサイルの外部へ出ている部分が多い。

「さて、諸君にはミサイル発射の際、露出している部分に掴まってもらうことになる。このポッドのミサイルには、特別に手足を掛ける用のグリップが用意してあるので、活用してほしい」

ソニア中尉の説明に嫌でも緊張が高まる。

了承したとは言え現物を見ると、自分たちの選択がいかにアホかというのがひしひしと伝わってくる。

だが、ここまできたら覚悟を決めなければならない。この旅を終わらせ、現実に帰るにはやるしかないのだ。

中尉から通信用インカムを渡された俺達は、四基並んだミサイルに一人ずつ乗っていく。抱き着くような形でしがみ付くとうまい具合にグリップがあるので、こいつを掴めば少々の事では落ちないだろ

う。

「作戦開始は1分後、開始前には司令部からカウントダウンがある。私が諸君に付き合うのはここまでだ。無茶な作戦だとは思いますが、健闘を祈る」

事務的な言葉を残してソニア中尉は去っていった。

誰も口を開こうとしない痛い位の静寂の中、俺はゆっくりと息を吐いて氣を練り始める。

今のうちに臨戦態勢を整えなければ、撃ち出されてからでは遅い。

『司令部より挑戦者各員へ。作戦開始10秒前、カウントダウン終了と同時に作戦開始となる。各員耐シヨック体勢を維持せよ』

インカムから流れる声を聴きながら、全身の経絡を巡る氣を研ぎ澄まし、内勁をさらに高める。

『5…4…3…2…1…作戦スタートです』

司令部オペレーターの通信と共に響く爆音。ミサイルに点火されたのを確認した次の瞬間、空気の壁が俺に襲い掛かってきた。

頭から押し潰されそうな圧力に、呼吸をする事すらできないほどの風圧。一瞬でも氣を抜けば引き剥がされるような暴力的な奔流に耐えながら、俺は口を開く。

この作戦に参加すると決めた時から言う決めていたセリフだ。普段の自分なら絶対にこんな事はしないだろうが、こんなふざけた状況ならばっちゃけてもいいだろう。というか、こうでもしなければやってられない。

「ふははははははははははははははははっ!! 筋斗雲より速ーいッ!!」

◇

『司令部より挑戦者各員へ、間もなく目標に接触します』

司令部からの通信に、俺は顔を上げた。風圧は相変わらず強烈で、頭を動かすだけで後ろへ持っていかれそうになるが、離陸するときに比べれば少しはマシになっていた。

風で歪む視界には黒い船体とこちらを睨む数多の砲門、そして船尾

で光の膜に覆われた紅い結晶体が映る。

『諸君、ドドリゲスの弱点は船尾にある紅いコアだ。だが、これは現在バリアで保護されている。まずはコアを上下に挟む形で設置された、バリア発生装置を破壊するのだ』

「司令官。俺達は武器の事を教えられてないんだが、どうやって攻撃したらいいんだ」

「うむ。武器はこちらで用意していない。君達の普段鍛えた技を存分に振るってほしい」

ジェネラルの言葉に俺は絶句した。素手で戦艦を墮とせつてのか、いくらなんでも無茶苦茶だ。

『ほう。君は自身の武術の腕を信じられないのかね？』

「いや、それとこれとは関係ないでしょう。常識で考えて無理ですつて」

『古人曰く、漢の最大の武器は己が信念を固く握りしめた拳である。己の拳を信じられない者が武術家とは嘆かわしい事だ』

「うぐ……ッ」

『構わんよ、撤退しても。拳も信じられん臆病者を戦士として送り出した私達の責任だ』

ちよつと待て、俺は常識的な事を意見しただけだよな。何でこんなボロクソに言われなきゃならない。そもそも、俺はこんな馬鹿げた旅に付き合うつもりなんてなかったんだ。それがヴァーリの馬鹿の暴走に巻き込まれてこのザマだ。この旅で擬死した回数なんて12回だぞ。扱いが悪いにもほどがあるだろ。

『どうしたのかね。遠慮することは無い、撤退したまえ。あの戦艦が怖いのだろうか？』

ジェネラルの言葉を聞いた瞬間、頭の中で何かがキレる音がした。多分、我慢とか堪忍袋の緒とかなんだらう。

足のフックを外して思い切りミサイルに叩き付けると、つま先が外壁を突き破って固定された。

もう一方の足も突き刺して身体を起こすと、今まで落ちるだの何だのど、みつともなくミサイルにしがみ付いていたのが馬鹿らしくなる

くらい、あつさりと立つ事ができた。

「やかましい!! もうてめえにはもう用はねえ! ハジキなんぞいるか!! あんな不細工な戦艦も怖かねえ! ……野郎、ぶっ潰してしてやるあああああつ!!」

声の限りに叫び、俺はミサイルの外装を蹴り碎きながら戦艦に飛び掛かった。こちらに喰らいつこうと飛来する対空迎撃の砲弾に、ブロッキングの要領で腕を叩き付けると予測通りにあらぬ方向に弾かれていく。

いけるっ! なんぢやない……ッ!!

むかつてくる砲弾を片っ端からブロッキングで弾き、竜巻剛螺旋で軌道を調整しながら接近した俺は、コアの上部にあるバリア発生装置に拳を叩き込んだ。

思ったよりも抵抗なく突き刺さった拳を支点に船体に取りついた俺は、もう一方の手を当てレイジングストームを放つ。

氣の奔流と衝撃波が機械の部品を撒き散らす中を離脱し、竜巻剛螺旋で軌道を調整、後続のミサイルに着地——

背中に衝撃、反転する視界と浮遊感。対空迎撃の砲弾を背中に喰らったと理解した時には遅かった。

大きく目測からズレた俺の身体はミサイルを通り過ぎ、虚空に放り出される。

とつさに手を伸ばすが、掌は何も掴むことができなかった。

風切り音と何かに吸い込まれるような感覚。青空と地面、そしてなおも続く戦場とグルグルと廻る視界が俺の最後に見た光景だった。

戦艦との戦いの場より少し上の虚空に転移された俺は、いつも通りに竜巻剛螺旋で軌道を調整。時より飛んでくる対空迎撃をブロッキングで弾きながら、何度目かのミサイル群の一つに着地した。

「随分と手慣れたじゃねえか。それならミサイルから振り落とされることもなさそうだねえ」

「10回も落ちれば、そりゃあ慣れるさ。今ならミサイルの間を八艘飛びができるぜ」

「お前さんは本当にタフだねえ。俺たちはあの転落死する時のふわっ

とする感覚に慣れなくてよ」

「俺もそつちは慣れたわけじゃねえよ。けど文句言ってもしやあねえからな。やるしかねえだろ」

筋斗雲を足場に別のミサイルに乗り移った美猴に言葉を返して、俺はドドリゲスに目をむける。

初コンタクトから2時間。当初はハリネズミのようだった対空迎撃用の砲門も動いている物は疎らになり、バリア発生装置は上下ともに完全に破壊。船尾の中央に備え付けれたコアも蜘蛛の巣のような亀裂が走っている。

ここまで来るまで本当に大変だった。対空迎撃で撃墜されたり、足を滑らせてミサイルから落ちたりして擬死した回数は全員10回超えだ。正直、猫の姿のまままで付き合わせている黒歌には悪いと思っっている。

「ふう、そろそろ終わりそうですね」

先ほどまで聖王剣コールブランドでコアを斬りつけていたアーサーが、愛剣を肩に抱えながら戻ってきた。こいつも何回も落ちた所為でミサイルに乗るのが上手くなっている。

ヴァーリは白龍皇デイベイン・デイベイキングの光翼で飛び回りながら砲門を壊し続けているが、数が減った砲台の他に船体に内蔵してあったビーム砲も目を覚ましたようで、手こずっているようだ。

どうも船体のダメージが増えるほど迎撃の勢いが強まっている気がする。

シューティングゲームでは、こういったボスはHPが少なくなると発狂モードと言われる圧倒的な弾幕で相手を押し潰す戦術にできるのだが、もしかしたらこいつもそんな状態になりつつあるのかもしれない。

これ以上時間をかけるのは拙いか。

「アーサー、確かご先祖ちゃんから風王結界パクってたよな」

「パクったって……せめて習得したと言ってください。それで、それがどうしたんですか？」

「ここからコアまで風王鉄槌で道を作れるか？」

「風の道ですか。おそらくは可能ですが、それでどうするんですか」
「これ以上奴さんに時間を与えるとヤバそうなんでな、一発デカいのをブチかます。その為に足場を作ってくれ」

「分かりました。3分、いえ1分ください」

「俺たちはどうするんだい？」

「ヴァーリのフォローを頼む。というか、お前は黒歌を連れてるんだから無茶すんなよ。これ以上擬死体験したらヤバいぞ」

「一応気を付けてはいるんだがねえ。まあ、この辺はしゃあねえさ。ともかく、了解だ」

コールブランドを正眼に構え、刀身に風を集め始めるアーサーを尻目に、俺も呼吸を整え潜心力を解放する準備に入る。ヴァーリの方を見れば、空中前転の動作で真空波を宿した踵を振り下ろして船体を切り裂き、そのまま両腕から連続で真空波を放ってレーザー発射口を次々と破壊していた。

ムーンサルトスラッシュにソニック・ブレイク。あいつ、いつの間にかナツシユの技を習得したんだ？

「慎、こちらは準備完了ですよー!」

アーサーの声に慌てて意識を戻し、俺も潜心力を引き出す。一気に全開にした為、目に見えるほどに高まった氣勢が蒼炎となり、紫電が辺りに渦巻いている。……これってミサイルに誘爆しないよな。

「こっちもOKだ。ぶっ放せ、アーサー!」

「了解。風よ、吼え上がりなさい!!」

気合と共に振り下ろされた見えざる刃と化したコールブランドの刀身から、暴風が吹き荒れた。本来巨大な鉄槌と化した風圧で相手を粉碎する技なのだが、アーサーがうまく調整してくれたのだろう、風の回廊となつてコアまで一直線の道を作っている。

発射の風圧に吹っ飛ばされて落ちたかと心配したが、さすがは騎士王の子孫というべきか、当人は反動を利用して後続のミサイルにうまく移ったようだ。

さて、お膳立ては完璧。あとは俺が仕事を熟すだけだ。風の回廊に足を掛け、一気に駆け抜けた俺はコアの目の前で正拳の構えを取る。

今から放つのは、単発なら現状で最も貫通力が高い技。その分反動もキツイので、潜在力を全開に撃てばどうなるかわからない。それでも、一撃でコアを砕くにはこれしかないだろう。

回廊を蹴る軸足の力を足首、膝、腰、背筋から肩で増幅しながら捻りを加え、放つ瞬間に全身で増幅した螺旋の力を拳に集束する。さすれば、そこからは放たれた拳は理を超え、巨岩をも粉碎する剛拳となる！　これが高木義之直伝の太極拳奥義――

「爆裂……発勁!!」

螺旋状の気炎と紫電を纏った右拳は、搦り鉢状の陥没を伴ってコアの中央を貫き、砕かれた紅い結晶体を辺りに撒き散らしてその光を消した。

インパクトの瞬間に妙な激痛が走った腕を引き抜くと、肘の下辺りから折れた骨が皮膚を貫いて顔を覗かせていた。

やっぱり、ただじゃすまなかったか。何とも貧弱なことである。これは鍛えなおしが必要だろう。

拳に異常がなかった事にほっとしながら、回廊から脱出した俺が後続のミサイルに飛び移ると、コアを失ったドドリゲスが船体を大きく傾け沈み始めた。

「やったなって、その右手はどうしたんでい」

「無茶して折れた。トワイライト・ヒーリング聖女の微笑で単純骨折くらいにまで戻すから問題ない」

「ふん、相変わらず人の悪い奴だ。まさか、あんなパワーアップを隠していたとはな」

「潜在力はまだ未完成なんだな、見ての通りヘタに使うと自爆しちまうんだ。お前こそナツシユの技なんていつの間に覚えたよ?」

「この前勝利した時にな。空中戦でも使えるから重宝しているよ」

「みなさん、のんびりしてる暇はないと思いますよ。このままでは我々も目標を失ったミサイルと一緒に木っ端微塵です」

アーサーの言葉に、ヴァーリはデイベイン・デイベイキング白龍皇の光翼を広げ、俺とアーサーは美猴の筋斗雲に乗ってミサイルを離れる。

うん、最初からミサイルなんか使わないでこうしとけって?　い

や、ドドリゲスの対空砲火がキツすぎてヴァーリはともかく、三人乗りの筋斗雲じや撃墜されるのが目に見えてたからさ。

『諸君、ドドリゲスの撃墜ご苦労だった。君達の雄姿は基地の人間すべてが見ていたぞ』

通信用インカムから流れた作戦中とは違い称賛の意思が籠った深みのある声に、我知らず笑みが浮かんだ。作戦前には無茶苦茶言われたが、今思えばあの言葉もありがたい物だった。

「ジエネラル司令官、支援ありがとうございます。貴方達の力添えがなかったら、俺達はゴールには辿り着けなかった」

『最初に言っただろう、君達を支援する事が私たちの役目だと。そしてドドリゲスを打ち砕いたのは紛れもなく君達の力だ。勇気ある挑戦者達よ、君達には【魂斗羅】の称号を与えよう』

……ジエネラルさん、お言葉はありがたいのですが最後の称号は嬉しくありません。なんかその称号持つてると、いつか禪一丁で宇宙遊泳させられるような気がするんですが。

「あー……。ありがとうございます。これで俺達は失礼しますけど、このインカムはどうしたらいいですか？」

『ふっ……。無限の闘争の法則を忘れたかね？ 現実に立ち戻ればそのインカムは自動的に消滅する。ああ、君達が着ている服はその限りではないから、安心したまえ。ともかく、我々との繋がりはこれで終わるが、君達の偉業と強者への道を一步駆け上がったという事実は、この世界の記録と私達の胸にいつまでも残り続ける。その事を誇りに思ってもらえれば、この作戦に参加した全ての者たちにとって最上の報酬だ。』

「……了解」

『ではさーらばだ、挑戦者諸君。またこの世界で会える時を楽しみにしているよ』

その言葉を最後にインカムは沈黙した。まったく、最後にジーンとくる台詞をかけてくるなんて、これだから最凶最悪のボスなのに紳士だって言われるんだ、あんたは。

「さて、これで本当に終わりだ。現実に帰ろうぜ」

「いろいろと苦労しましたが、悪くない経験でしたよ」

「……だな」

「さらば、無限の闘争の地よ。次に来る時は俺はさらに強くなっているぞ」

「ミヤア……」

口々に言葉を残して、俺達はゴールアーチを潜ったのだった。

◇

さて、こうして俺達の無限の闘争の旅は終わったわけだが、諸君は覚えているだろうか、この旅の真の目的を。

正直俺も忘れていたのだが、この旅の目的はヴァーリの使い魔を探すことだったのだ。

結果から言うとヴァーリがこの旅の成績から得た使い魔、というか仲間はゴンというテイラノサウルスの子供（？）だった。

呼び出して早々に美猴の足に咬みついてブンブンと振り回すというヤンチャぶりを発揮した為、ヴァーリはいたく気に入っていた。

ちなみに、美猴が呼び出したのは白湯パイタンというパンダ、アーサーはアイルーというしゃべる猫だった。アイルーは妹のルフエイに取られたいらしい。

あの後、家に帰った俺は精も根も尽き果てていた為、右腕にろくな手当もせずに自室のベッドに轟沈。

血塗れ状態で美朱に見つかることとなり、5日間行方不明だった事も踏まえて、右手が自然治癒するまで無限の闘争の使用禁止が朱乃姉から言い渡されるハメになった。

墮天使の血を引いているから、骨折くらいなら一週間あればくっ付くのでいいのだが、その間鍛錬も禁止というのはやり過ぎではないだろうか。

3日経った現在では単純骨折まで回復したが、右腕はギプスで固めて首から吊っている状態なので不便で仕方がない。

あと黒歌についてだが、ツアー中の精神的ショックに加えて呼び出

したモノがあんまりな代物だったためか、未だ猫状態から戻る気配がない。

困り果てた馬鹿三人衆から、唯一の肉親である塔城に会わせてほしいと頼まれた為、部室の前に連れてきてはいるのだが、完全に猫返りしている為こいつが黒歌だと気づくかどうかどうかが問題だ。

それと、俺達の後ろを付いてきているコレに関して何か。

とはいえ、黒歌がここまで壊れたのは俺にも責任がないわけでは無い。ここは一肌脱ぐべきだろう。

S級はぐれ悪魔の件はどうするって？

その辺はリアス姉をチョチョイと煙に巻くので問題ない。

黒歌をギプスの上に乗せて左手で扉を開くと、オカ研のメンバー勢ぞろいで出迎えてくれた。

アーシア嬢は俺の手を心配し、事情を知るリアス姉や祐斗兄は呆れ半分で苦言をくれた。朱乃姉と美朱はいつも通り、そして塔城はギプスの上の黒猫をガン見していた。

「すまん、塔城。知り合いから預かった猫が元気が無いんで見てほしいん——」

俺が言葉を終えるより速く、塔城を目にした黒歌はギプスを蹴って塔城の元へ駆けていった。そして塔城の前で人間形態に戻るとその薄い胸に飛び込んでギャン泣きし始めたのだ。

「白音、白音ええええええええっ!! お姉ちゃん怖かったよお!! 男4人に変な世界に拉致されたかと思ったら、ミンチにされたり火達磨にされたりして何回も死んで、拳句の果てにミサイルに乗って空中戦艦と闘って、気が狂うかと思っただの!! それだけして呼び出したのはへんな大砲だし……!! もう耐えられない!!」

泣き喚きながら無限の闘争ツアーと俺達への不満をぶちまける黒歌に、その身も世もない泣き方に戸惑う塔城をはじめとしたオカ研メンバー。

む、これは事実を説明しなければ拙いか。

「なあ、慎。一つ聞きたいんだが……」

身の危険を感じて口を開こうとすると、それより早く俺が来てから

沈黙を守っていたイツセイ先輩に声を掛けられた。

ふむ、なんだろうか先輩よ。

「あの黒い姉ちゃんの後ろにあるのって何？」

主人の後ろに鎮座しその砲身を隆々と天に向けている使い魔を指差し、恐る恐る聞いてくる先輩。何をそんなに狼狽しているのか分からないが、黒歌がこのザマである以上、俺が答えねばなるまい。

「黒歌の使い魔になったネオアームストロング・サイクロンジェット・アームストロング砲」

「え……これ、使い魔？ しかも大砲？ どう見ても穢れたバベルの塔にしか見えないこれが？ ていうかこれ生きてんの？ しかも今アームストロングって二回言ったよね？」

理解不能と言わんばかりの視線が部屋中からソレに注がれる。言いたい事は分かる。だが、現実是非情なのだ。

「ああ、ちゃんと生きてるぞ。どっかの星間戦争で使われた恐怖の兵器とか何とか説明書に書いてあったけど、真相は謎。あと、自律兵器じゃなかったのに、何でか自分の意思を持ったとも書いてあったな」俺の説明に合わせて砲身を上下に振って同意を示すそれ。うん、シャレにならんからその動きはやめろ。

「とりあえず、どうしてこうなったのか説明してください。一から全部……！」

異様な威圧感を背負った塔城に詰問されたので、隠し事無しで全部話したら部員全員から滅茶苦茶怒られた。

……あれ、俺今回悪くなくね？

5話

落ちつつある日差しに紅く染まった木造の廊下で、俺は欠伸を噛み殺した。

眠気を覚ます為に軽く伸びをすれば、ギプスに固められた右腕に引き攣れた痛みが走る。

成長期を終えていない身体なので、超回復を促すために緊急の場合を除いては、骨折程度なら聖母の微笑で治さないのだが、動く度に痛みのは少々鬱陶しい。

薄暗さを増していく旧校舎の中、痛みを無視して身体を解しながら進んでいくと、程なくして目的地であるオカ研の部室が見えてくる。

いつもなら美朱がテンション高く騒ぐのだが、あいつは数日前にアジア先輩が転校してきて以来、彼女にべったりだ。

無限の闘争から戻って、結構色々な事があった。

部室に滞在していたアジア先輩がイツセー先輩の家に下宿する事になったし、日本語が話せないアジア先輩の為に翻訳魔術の籠ったペンダントも造った。

猫返りを再発した黒歌が、塔城のもとでリハビリする事になったりもしたな。

これについては、塔城にマジで謝った。

全部俺が悪い訳ではないが、こちらを見る度に毛を逆立てて怯えられては、罪悪感も湧くというものだ。

ゆっくりとだが、症状が快方に向かっていると聞いた時は本当にホッとした。

起こった変化の大体は、良い方向へ転んでるので、こちらとしても喜ばしい。

あとは右腕が治って無限禁止令が解除されれば、言うことないのだが。

取り留めのないことを考えているうちにオカ研に着いたので、軽い挨拶と共にドアを潜ると、室内は微妙な雰囲気だった。

猫モードの黒歌を膝に乗せながら大福を食べる塔城に、美朱の耳掃

除をしている朱乃姉。

二年生組はまだ来てないらしいようだが、ここまではアットホームないつものオカ研だ。

この空気の原因は、執務席で窓の外を見ながら、憂鬱そうに溜め息をついているリアス姉だろう。

「どうした、リアス姉。なんか悩み事か？」

「キヤツ!? し、慎。来てたのね」

「さつき挨拶しながら入ったんだけどな。それで、辛気くさい顔してどうしたよ。解決できるかは分からんが、愚痴くらいなら聞かせ？」

「ありがとう。でも、遠慮するわ。実家に関わる事だから」

苦笑いを浮かべながら、首を横に振るリアス姉。

実家、グレモリー公爵家の問題か。リアス姉が実家絡みでこんな顔をするとしたら――

「……フェニックス家との婚約のことか」

思わず漏れた言葉に、リアス姉は少しだけ不満げな表情を浮かべる。

「どうやらビンゴらしい。」

「まったく、耳が広いわね。どこまで知っているのかしら」

「相手がフェニックスの三男坊で、婚約を条件にフェニックス家からグレモリー家へ、援助が行われる。俺が耳にしたのはこのくらいだな」

「殆ど全部じゃない。まったく」

「でも大丈夫なの、リア姉。レベツちゃんの話だと相手のライザーさん、かなり女癖悪いらしいよ。眷属は全員女性で、みんなお手つき……もう朱姉! くすぐったいよお」

「ふふつ、せっかく耳をキレイにしてるんだから、大人しくしてなさい」

耳掻きのボンボンで耳の中をくすぐられて、朱乃姉の太股の上で悶える美朱。

くすぐっている朱乃姉も楽しそうだ。

「……部長の婚約者って、どういう人なんですか？」

話の腰を折られて黙ってしまった俺達に、大福を食い終わった塔城が軌道修正をかけてくれた。

「ライザー・フェニックス。フェニックス家の三男で、レーティングゲームの若手プレイヤーの一人。ゲームの対戦成績は10戦中8勝2敗。その2敗も相手の家が格上だったので、勝ちを譲る形だな」

「ここだけ聞けば優秀な若手悪魔なんだが、問題は下半身がらみなんだよなあ。」

「また一流のプレイボーイで、眷属の他に冥界各地に現地妻がいるなんて噂が持ち上がる程女癖が悪い。一説によれば、子供がいるなんて話もある」

この噂、結構売れてる冥界のゴシップ誌に載ってたんだけど、ジオテイクス小父さんは知らんかったんかな？

あの超絶親バカなら、こんな噂が立つ相手をリアス姉の婿に選ぶはずないんだが。

やっぱ、フェニックス家からの援助が曲者か。

もしくは、古い人だから「家庭に入って子供を産むのが女の幸せだ」なんて考えているのかもな。

思考を巡らせながら、リアス姉が座る執務席の向かいにあるソファアーに腰を下ろす。

「……そんなだらしがない人と、部長が結婚するんですか」

「私はライザーと結婚なんてするつもりはないわ。私の結婚相手は私が決める」

「リアス姉。それ、ジオテイクス小父さんに言ったのか？」

「言っても無駄よ。お父様はこの件では私の言葉なんて聞いてくれるわけないもの」

「あの親バカ魔人なら、そんな事はないと思うけどな、それに、こんなところで言っても、小父さんに伝わってなかったらなんの役にも立たんだろ。なあ、グレイフィア姉さん」

部室内の闇に覆われた一角に声を投げると、メイド服を着た銀髪の女性が現れた。

女性として抜群の容姿に、冷たさを感じるほどの物静かな雰囲気

纏うこの女性は、グレイファイア・ルキフグス。

現魔王の一柱、サーゼクス・ルシファアの女王の眷属であると同時に奥方でもある。

とある理由でグレモリー家のメイドをしているが、リアス姉の義姉にあたる存在だ。

「グレイファイア姉、久し振り！」

「久し振りね、美朱。慎はまた怪我をしたのね」

右手のギプスを見つけて眉根を寄せるグレイファイア姉さん。無茶して右腕を折った事を伝えようと、呆れ顔で溜め息を吐かれた。

俺が怪我してるのなんて、いつもの事じゃないか。

「いつもの事だから、呆れているの。旦那様や奥様、サーゼクスやミリキヤスだって心配するんだから、もう少し自重しなさい」

姉さんの苦言に、俺は両手を上げて降参の意を示した。

こんなところで説教は勘弁してください。

グレイファイア姉さんとは、冥界のグレモリー家で知り合ってから6年ほどの付き合いになる。

当時から年上の女性に懐きやすかった美朱が、グレモリー家の中で夫人と並んでよく甘えたのが姉さんで、それが縁で色々と世話になってる。

自身の休日を除いてはメイドとしての態度を崩さない姉さんが、その例外としてくれているのは息子のミリキヤスを除けば俺達だけだ。

まあ、それもメイドモードの壁を感じさせる態度を嫌った美朱の甘えた攻勢（ベタベタ引つ付く、胸に頭グリグリ、むくれる、拗ねる、拳げ句ガチ泣き。あの時は愚妹がご迷惑をお掛けしました）のせいだったりするのだが。

「それで、姉さんはどうして人間界に？」

「リアスお嬢様の婚約の件を、眷属の方々に伝える立ち会いに来たのよ」

「……それもお父様の指示かしら？」

「はい。旦那様も先方も婚姻を急がれています。お嬢様に生涯仕える眷属の方々も、早めに知っておいたほうが良いと」

「相変わらず勝手だわ！ 大学卒業まで自由にさせてくれるという約束だったのに」

「お嬢様。旦那様もお嬢様の将来を心配しての事なのです。お父上の気持ちもお察し下さい」

「そうかなあ。小父様の事だから、何かでテンション上げた時に『二人目の孫が見たい』とか思いついて、また早まってるんじゃないの？」

さつきとは反対の方の耳掃除を受けている美朱が、朱乃姉の腹に顔を埋めながらダレた声で指摘する。ふむ、ジオテイクス小父さんの性格からすれば――

「あり得る。ミリキャスの誘拐防いだ時、勢い余って俺達を養子にしようとしたからな、あの人」

「そうそう。冗談だと思って断ったら、サーゼクス兄の方はどうかって真剣な目で聞かれたもん」

「そう言えばそんなこともあったわね。その話を聞いた時は心臓が止まるかと思っただわ」

「朱姉を放つてそんなの受ける訳ないじゃん。もし受けるとしても、朱姉も一緒じゃなきゃ絶対ヤダ」

「あらあら、美朱はいつまで経っても甘えん坊ね」

姉妹でキャツキャとじゃれ合う二人を他所に、俺達の会話に思い当たる節があるのか、姉さんとリアス姉は顔を引き攣らせる。

「なあ、リアス姉。一度冥界に帰ってサーゼクス兄や小父さん達と、しっかり話し合った方がいいんじゃないか？ 面向かって自分の気持ちや伝えないと、今みたいに小父さんの暴走でしたくもない相手と結婚するハメになるかもしれないぞ？」

「……そうね。グレイフィア、お父様達の予定はどうなってるかしら？」

「お待ちください……明後日ならばスケジュールに空きがありますね」

「なら、その日に実家に帰るわ。お父様達との夕食のセッティングを頼めるかしら」

「わかりました。しかし、婚約は両家の合意の上に結ばれたもの。お

嬢様がご自身の意思を伝えても、変更される可能性は少ないと思いませんが」

「それでもよ。今みたいに自分の気持ちも伝えもしない内から、将来を決められるなんて堪らないわ」

リアス姉は双眸に覚悟をたたえて、グレイファイア姉さんに見据える。自身を映すリアス姉の瞳に込められた意思を感じ取ったのか、姉さんはそれ以上言葉を続けなかった。

「という訳だから、慎と美朱も付き添いお願いね？」

……おや？

「えー。そこってリーア姉が一人で小父様達に意地を通すところじゃないの？ 展開的に」

「だって、一人でなんて心細いんだもの。朱乃達は眷属だから連れていけないけど、慎達ならお父様達も文句は言わないと思うし。だからお願いよおー！」

目に涙を溜めて、こちらを見るリアス姉に俺は小さくため息をついた。

少しは成長したかと思っただが、勘違いだったらしい。

そうだよな。

メンタル絹ごし豆腐のリアス姉が、小父さんやサーゼクス兄を相手に自分一人で意地を通すなんて、出来るわけないよなあ。

「わかった、わかった。俺達も一緒に行くから泣くなよ、リアス姉」

「……まあ、しゃあないか。リーア姉が望まない結婚する事になって、なんか嫌だしね」

「ありがとう、慎、美朱！ 二人とも大好きよ!!」

俺に抱き着き、耳掃除中の美朱の頭を撫でたリアス姉は、上機嫌で執務席に戻って鼻歌交じりで書類整理を始める。

うん。甘やかしてるのは分かってるから、そんな呆れた目で見ないでくれ、姉さん。

グダグダな空気の中、自分用のマグカップに珈琲を入れてるとイッセー先輩達二年生組が入ってきた。

面識が無いであろう、祐斗兄以外の二人へ姉さんの紹介が終わり、

リアス姉が婚約の話を持ち出した時、床に刻まれた魔方陣から炎が吹き上がった。

「フェニックス……」

炎の中に浮かび上がった紋様を読み取った祐斗兄が小さく呟く。
突然だが問題だ。

古い木造建築物とは言え、学舎であるここには火災対策として、スプリンクラー設備が設置してある。

そのスプリンクラーの真下で、天井に届かんばかりの火の手が上
がったらどうなるか？

—— 答えは、土砂降りの雨の様に頭上から降り注ぐ水だ。

「きやあつ！ 何ですのっ!?!」

「あわわっ!?! 水が耳に入っちゃうっ!?!」

「今の炎でスプリンクラーが起動したんだ。早く止めないと……!?!」

「フミヤアアアアアアアアアツ!?!」

「……姉様、落ち着いて」

『火事です！ 火事です！ 火災が発生しました。落ち着いて避難して下さい!?!』

「イツセーさん、何か避難しろって言ってますよ!?!」

「これって、避難訓練の時に流れる放送じゃねえか!?! どどど、どうすりゃいいんだ!?!」

「ユーベルーナ、早く部屋を出しましょう！ 貴女は身体を冷やしてはいけないわ!?!」

「ありがとうございます、レイヴエル様」

「来た途端に、水浸しにするとは、リアス！ これは何のまねだ!?!」

「私がやったわけじゃないわ！ ライザー、これは貴方の所為よ!!」

「何っ!?! 俺が何をやったっていうんだ、変な言いがかりはやめろ!?!」

「こんな時に喧嘩すんな！ 全員、早く外に出ろ!!」

俺の怒声にスプリンクラーと避難放送に混乱していた濡れ鼠達は、避難を開始。

部室から駆け出るメンツの中に見慣れない、金髪に赤いスーツを着崩したホスト崩れやケバい姉ちゃん。かたや見覚えのある金髪縦

ロールがいたがスルーだ。

この後、俺はオカ研部員に指示を出しながら、旧校舎の火災設備を復旧させていくことになったのだが、こんなところで前世に就いていた、ビルメンテナンズ設備員の知識が役に立つとは思わなかった。

慣れない建物や老朽化していた設備の所為で、スプリンクラーポンプと火災受信機を止めるのに手間取り、さらに魔法による部室の水損被害の修復という作業があった為、全てが終わった頃には時計の短針は10の位置を指していた。

「いや、本当にすまない。まさか、レイヴェルやユーベルーナまでシャワーを頂けるとは」

「気にしなくていいわ。貴方達だけ濡れ鼠のまま、放っておくわけにはいかないもの」

一応は元の姿を取り戻した部室の中、執務席の向かいのソファに座ったライザー・フェニックス氏はリアス姉に深々と頭を下げた。

部室から脱出した当初は、いきなり冷水を浴びせられた事もあり憤慨していたライザー氏だったが、スプリンクラーについて説明すると、自身に原因がある事を悟って即座に謝罪。復旧作業にも精力的に協力してくれた。

今こうやって部室が使えるのだから、彼とレイヴェル嬢が温風出して部屋の乾燥を早めてくれたお陰である。

「なあ、慎。あれって誰なんだ」

リアス姉達が座るメインではなく、部室の片隅にあるサブのソファの脇に立って様子を伺っていた俺に、イツセー先輩が今更な質問を投げかけてくる。

「彼はライザー・フェニックス氏。冥界の名門フェニックス家の三男で、リアス姉の婚約者だよ」

「部長の婚約者あ!?! あのホスト崩れがか!?!」
「声がデケえよ。あと、失礼な事言うな。三男とは言え、彼はリアス姉と同格の貴族だ。眷属の先輩が無礼を働いたら、それはリアス姉の恥になるんだからな」

驚いたとはいえ、大声で失礼な事を口にしたイツセー先輩に釘を刺

しておく。

グレモリー家でもう一度、婚約の事を話し合おうつてのに、先方ともめ事なんて起こしたら、それをタテに取られる可能性があるからな。

「ところでライザー。こんな時間に何の用なの」

リアス姉が問いかけると、ライザー氏は言いづらそうに二度三度口ごもっていたが、自身の隣に座るユーベルーナ女史の顔を見て、覚悟を決めた顔でリアス姉に視線を戻した。

「リアス……。いや、リアス・グレモリー殿。すまないが今回の婚約、無かったことにしてもらいたい」

お互いのソファアーの間に置かれた卓に手を付き、頭頂部が見えるほど深々と頭を下げるライザー氏。横のユーベルーナ女史は痛ましい顔でライザー氏の背に手を置いている。

「おおおおおっ、おい、慎！ 今あいつ言ったよな、婚約を無かったことにしてくれて！」

「うるせえよ！ 嬉しそうな顔して言うな！」

歓喜の咆哮を上げんばかりに喜色満面で、こちらに詰め寄ってくるイツセー先輩が、あまりにも空気が読めてないので頭を叩いておいた。

しかしこれは予想外だ、どういう風の吹き回しだろうか。

「ええと……。それは構わないのだけど、どうしてかしら？」

あまりにも突然の事に虚を突かれたのだろう、リアス姉はどこか挙動不審な感じで理由を問う。するとライザー氏はユーベルーナ女史を抱き寄せた。

「彼女はユーベルーナ、俺の眷属で女王を務めてもらっている。実は、彼女との間に子供ができたんだ」

さらなる爆弾投下である。さすがに予想の斜め上過ぎたのか、呆然と口を開くリアス姉。

隣を見れば、壁際に控えていたグレイフィア姉さんも似たような顔をしている。

リアス姉の眷属に婚約の事を説明しに来たのに、その相手から婚約

破棄を切り出され、挙句その理由がデキちゃったではああもなるか。「えつと、さ。レベツちゃん、フェニックスのお家的に、それって大丈夫なの？」

「まったく問題無いとは言えませんが、愚兄の婚約破棄はお父様の御意志でもあります。曰く『貴族の責任よりも男としての責任を取れ』との事ですね。今回の婚約破棄に関して、当家からグレモリー家に謝罪の意を示さねばなりません、それに対する費用もライザー兄様個人が負担する事になってますし、本人もそれを了承しています」

俺の横のソファで、水損被害の復旧で魔力を使い果たした朱乃姉の膝枕をしている美朱に、向かいのソファに座っていたレイヴェル嬢が、コーヒークップを片手に優雅に応える。

ふむ。フェニックス卿の意見には大いに同感ではあるが、これはこれで厄介な事になった。

貴族社会に限らず、婚約を破棄されるというのは醜聞だ。特に女性の場合は、相手の男に原因があったとしても、女性に何らかの悪評が付く可能性がある。

そして、貴族同士のネットワークにそういった悪評が流れると、その後の婚約等の足かせになってしまうのだ。

あの親バカなジオテイクス小父さんが、リアス姉がそうなるのをよしとするとは思えない。

場合によってはさらに拗れる可能性があるぞ。

「ところでライザー。この話は私の実家に伝わっているのかしら？」

「いや、まだだ。まず当事者の君に伝えて了承を貰ってから、グレモリー公爵様に謝罪に向かうつもりだった」

「そう、私に義理立てしてくれたのね。なら、こちらも礼を持って返しませう」

そう言つてソファから腰を上げ、ライザーの前に立つリアス姉。その気品に満ちた所作はまさに貴族、いつもの残念美人とはまるで別人である。

「ライザー・フェニックス殿。リアス・グレモリーの名において、この婚約破棄を受け入れます。……今までありがとう、ライザー。これか

らはユーベルーナさんとお腹の子をしつかり守ってあげてね」
「感謝する、リアス嬢。そして、こちらの都合に巻き込んで済まなかった」

「ありがとうございます、リアス様」

威厳に満ちた宣誓と心の籠った激励に、再び深く首を垂れるライザー氏とユーベルーナ女史。

これで個人としての決着はついたのだろう、ライザー氏は同行していた二人を連れて冥界に帰還。グレイフィア姉さんも小父さん達への報告の為に帰っていった。

オカ研部員も部室の復旧作業でクタクタだったためそのまま解散となり、俺も寝たままの朱乃姉を背負って美朱と共に帰路についた。部室を出ていく際に、リアス姉が婚約破棄を飛び上がって喜んでいたのは、見なかったことにしよう。



「ふんぐぎぎいいいいっ!!」

食いしばった歯の間から、ぐぐもった気合いが零れる。

チクチクと胸を掠る切っ先の感触に、必死で腕を伸ばそうとするが、酷使を重ねた筋肉はブルブルと痙攣するだけで、こちらの意志に応えようとしない。

「どうした!? 残りはこの一回だけだぞ! お前はゴールを目前に諦める負け犬か!」

竹刀がリングマットを叩く乾いた音と共に、道場内に怒号が響く。

キツイ言葉の激励を受け、俺は乱れた息を深呼吸で整えてもう一度腕に力を込める。

激励が効いたのか、震えながらも腕は上体はゆっくりと上がっている、木造の床に身体から流れた汗がボタボタと跡を付ける。

「うっしやああああああっ!!」

勢いをつけて腕を伸ばしきった俺は、身体を捻って胸の下に置かれていた剣山を避けるように床に転がった。

背中に括りつけられた超圧縮ウエイトの重石の上に乗る形になっているが、どうでもよかった。

とにかく休息が欲しい。

身体は内に火が着いたかのように熱く、汗が次から次へと流れていく。

先ほどまで苛め抜いた腕は細かい痙攣が止まらず、まるで力が入らない。

「随分と参っているな。病み上がりにゴールデンキャッスル名物『地獄の基礎練フルコース』は堪えたか」

黒塗の竹刀を肩に担ぎながらこちらを見下ろすのは、光沢のある銀の鎧のような身体にマスクを付けた悪魔将軍様だ。

地獄の基礎練フルコースというのは、重石を背負ったままランニング（遅いとローラーに潰される）20キロ、ショートダッシュ120本、スクワット500回、宙吊りで腹筋1000回、背筋1000回、腕立て（下に剣山を敷くサービス付）1000回をこなすというものだ。

今日はこれの前に、将軍様と寝技のスパーリングをやったので、さすがに精も根も尽き果てた。

将軍様はこっちが神器で治せるのをいいことに、極めた瞬間折りにかかるからな。

お陰で、骨折や筋の断裂なんて数十秒で治せるようになってしまった。

「この程度！　と言いたいところですが、さすがにキツかったです。重石を10トンに増やすのは早かったっすかね」

「減らす事は許さん。それを背負って基礎練をこなせるようになれば、貴様の身体は更に強靱になる」

「ウスツ」

「よし。では今日はこれまでだ。クールダウンを忘れるなよ」

「ありがとうございます」

道場の奥へ去っていく将軍様に礼を言って柔軟体操の準備をしていると、ギプスをしていた所為で少々細く見える右腕が目に入った。

朝起きてみると痛みも痺れも無くなっていたので、ギプスを外して鍛錬を行ったのだが、超人用のトレーニングといえど以前はここまでバテなかったのに、やはり鈍っている。

潜在力を全開にする度に自爆する訳にもいかんし、基礎から鍛え直す必要があるか。

入念にクールダウンの柔軟で身体を解して、一週間ぶりの無限の闘争の鍛錬を終えて自室に戻った俺は、トレーニングウェアを洗濯籠に放り込んだ。

クローゼットから制服一式を取り出すと、片隅に置かれたRPGに出てくるような赤い宝箱が目に入った。

蓋を開けると、中には貴金属用の箱が数十個、綺麗に詰められていた。

これらは無限の闘争ツアーで手に入れた、魔法の補助が掛かった装飾品達だ。

皆への土産にと持って帰ってきたが、そのまま渡すのもいやらしいかと思ひ、外装ケースを買ったもののそのまま忘れていたんだった。ふむ。ほつとくとまた忘れそうだし、いい機会だからみんなに渡すとするか。

冥界にいる知り合い以外の分を袋に入れて、自室を出る。

居間に向かうと、朱乃姉と美朱がちやぶ台を囲んで寛いでいた。

新しく朱乃姉の使い魔になったミニ美朱が、ちやぶ台の上で細かく砕かれたスナック菓子を懸命に食べている。

物が喰えたのか、それ。

「おはよう、二人とも」

「おはよう、慎」

「はよー！ どうしたの、その荷物」

「これはオカ研の面子への土産。用意してたけど渡すのを忘れてたんだ。はいこれ」

二人が囲んでいた卓の上に、手にしていた荷物の中からそれぞれの名前のタグが付いた箱を2つずつ乗せる。

コラ、チビ美朱。油まみれの手で触るんじゃない。

「なにかしら？　貴金属用の化粧箱みたいだけど」

「あー、戦利品みたいいなもんだな。この前、行方不明になってた時に手に入れたもんで。土産に持ってきてたんだよ」

「無限の闘争由来の品かあ。またぶっ飛んだ代物なんでしょ」

「普通に使える便利アイテムだよ」

美朱の疑念に苦笑混じりに応えてやると、二人は恐る恐るケースの蓋を開けた。

ケースの中身は、朱乃姉が精巧な意匠が施された純金の髪飾りと、中央に大きなルビーが嵌め込まれた金細工の腕輪。

美朱の方は朱乃姉と同じルビーの腕輪に、金と翡翠で造られた腕輪だ。

二人とも本格的な貴金属が入っていたとは思わなかったのか、目の前の品に感嘆の声を上げている。

「えーと。朱乃姉の方が『金の髪飾り』に『守りのルビー』、美朱が『守りのルビー』と『星ふる腕輪』な」

「星ふる腕輪あつ!? ドラクエのチートアイテムじゃん！　よくこんな手には入ったね」

「ああ、ゾーマ倒したら手には入ったぞ」

「ゾーマまでいるの!?　もう何でもアリだね、あそこ」

『『mugen』だからな』

「えつと…。よくわからないけど、その腕輪は貴重な物なの？」

朱乃姉の戸惑いを含んだ声に、俺は言葉を飲み込んだ。

「いかん、またやってしまった。」

mugenの元ネタの話題は美朱くらいしか分かる奴がいないから、朱乃姉を置いてけぼりにしてしまいがちになる。

気をつけているんだが、なかなか直らん。

「そうだよ、朱姉。これは着けた者の敏捷性を格段に跳ね上げる激レアアイテム。それで、慎兄がこれをブン盗ったのは、大魔王って呼ばれる強力なモンスターなんだ」

「大魔王…。そんなものと闘って、大丈夫だったの？」

「大怪我はしなかったな。強さも2年前にぶっ飛ばしたシャルバとか

いう旧魔王の子孫よりちよつと上程度だったし、大したことなかったさ」

「魔王クラスが大したことないとか、慎兄の認識が狂ってる件」

普通に感想を述べたら、妹に呆れられたでござる。

「まあ、それはいいや。朱乃姉に渡した分だけど、『金の髪飾り』には魔力消費を抑える術式が組み込まれてる。『守りのルビー』は着用者の身体を強力な加護で覆って、簡単な鎧と同等の防御力を与えるアクセサリーな」

俺の説明に目を丸くする朱乃姉。

朱乃姉曰く、渡したアイテムはこちらの最高級品よりも効果が上らしい。

「そんな強力なマジックアイテム、いいの？」

「いいって。どうせ俺は使わないし。皆に使われるほうが、有意義つてもんさ」

「慎兄使わないの？ こんな便利なもの」

「昔の人は言いました。『男なら、拳ひとつで勝負せんかいつ!!』と」

「……慎兄って、時々もの凄く馬鹿だよな」

……我が妹は結構失礼なり。

この後、受け取りを済る朱乃姉にアイテムを押し付け（美朱？ あいつの辞書に遠慮という文字は無い）軽く腹ごしらえをして、さあ出ようかと思ったら呼び鈴が鳴った。

参拝客がそんなに多くない神社なので早朝からの来客にも心当たりが無く、首を傾げながら玄関の扉を開けると、妙に気合の入った顔のリアス姉が立っていた。

「朱乃、お父様から連絡があったわ。ライザーとレーティングゲームをするわよ」

……なんですと？

6話

打ちっぱなしのコンクリートに囲まれた四方に、簡素なロッカーとパイプ椅子。中央には傷跡だらけの木製の丸テーブルが鎮座し、部屋の隅にはレトロな自販機が唸りを上げる。

俺にとっては自室と同じくらい馴染んだ無限の闘争の控え室だが、オカ研メンバーには珍しいようで、リアス姉とアジア先輩なんかはしきりに辺りを見回している。

「男性用更衣室はその左側の入り口、女性は右側な。シャワーも更衣室の中にあるから。何か解らない事があったら、俺か美朱に聞いてくれ」

「それじゃ、女の子組はこっちねー。荷物は更衣室のロッカーに入れておく事になるから、忘れないようにしてよー」

俺と美朱の先導で、男女に分かれて更衣室に入る。

後ろで、更衣室が男女別である事を嘆いているイツセー先輩を、後で男喰らいこと『阿部さん』に与える事を心に決めつつ、俺は無限の闘争始まって以来の、団体合宿をする事になった経緯を思い返した。

リアス姉の衝撃発言から半日。

部室に集められたオカ研メンバーを前に、執務席についたリアス姉は静かに語り始めた。

曰く、先日グレモリー家とフェニックス家の婚約破棄が正式に決まった。

破棄の理由を聞かされた時は小父さん達も憤慨したが、男としてケジメをつけようとするライザー氏の姿に免じて受け入れたらしい。

婚約破棄に関して両家の合意が得られ、話の焦点は賠償に関する事になった。

呈示された賠償金は両家の家格を鑑みても妥当であり、若手悪魔が背負うには重すぎる額だった。

瀕死の重傷もたちどころに癒やす霊薬、『フェニックスの涙』を精製できるライザー氏といえど、完済には数十年、ヘタをすれば百年は掛

かるだろう。

身内に苦役を強いたうえでそれだけのモノを用意されれば、グレモリー家としても怒りを収めざるをえない。

だが、小父さんとしては、このまま金銭だけで解決させては腹の虫が収まらない。

そこで小父さんは、一計を案じた。

リアス姉の夢であるレーティング・ゲームのタイトル制覇。

その経験を積むために、ライザー氏にリアス姉との試合を依頼したのだ。

成人前で、正式なレーティング・ゲームのデビューも果たしていないリアス姉なら、勝てば大金屋。

負けてもタイトル確実に言われている若手のホープとなら、恥にはならない。

小父さんは「ウチのリーアたんなら、婚約破棄したいけど好きないガキをへこましてくれるに違いない!!」と考えて話を振ったらしいが。

ともかく、小父さんの提案をライザー氏が承諾したことで、ライザー氏対リアス姉の練習試合兼エキシビジョンマッチが成立。

10日後、駒王学園で開始される運びになったそうだ。

因みにリアス姉の語りの中で小父さんの心情が妙に具体的だったのは、本人がリアス姉に直接伝えたかららしい。

小父さん……。家族に隠し事はしない主義は分かるが、自分の心情まで語って聞かせるのは、いくらなんでもやりすぎではなからうか。

普段は凄く有能なのに、家族が絡んだら途端にポンコツになるものな、あの人。

その後、リアス姉がトレーニングの為に山での合宿を提案するが、美朱の質問で具体的なプランがない事が露呈してしまう。

そもそも、公爵令嬢のリアス姉が修行の方法など知っている訳がなく、出されたプランもスポーツの延長、もしくは漫画の真似といったものだったのだ。

そこで、美朱が俺の持つ無限mの闘争uを修行gに使ってはどうか、と提案。

美朱に話を振られた時は、正直乗り気ではなかった。

実戦経験を積めると、本物の武術家から指導を受けられる点は、たとえ10日という短期間でも修行としては有効だ。

しかし、実戦で死なないにしても負傷の痛みや死を体験する事で、使用者にトラウマを植え付けかねない危険性があるからだ。

過去の修行で心が折れるまでボコボコにされた祐斗兄や姉の黒歌が廃猫同然にされた塔城、無限の闘争で俺が殺られるのを何度か見てしまっている朱乃姉が反対したが、他に有効な手段も無く、話し合った結果、難易度を下げてヤバくなったら、管理者権限で対戦を強制中止させるのを条件に、無限の闘争合宿が承認される事になったのだ。

一旦解散してから20分、着替えを終えたオカ研メンバーは控え室に集まっていた。

先輩達と塔城は学校指定の体操服で俺はいつも使っている空手着、美朱は紺色のオーソドックスな忍び装束だ。

「おおっ！ 慎と美朱ちゃんは本格的だな」

こちらを見て感嘆の声を上げるイツセー先輩。

言った後、一瞬でヘソが見えるほど体操服を持ち上げている、朱乃姉の巨大山脈に視線が釘付けになったので台無しだが。

あ、美朱の目潰しがまともに入った。

「さて、みんな集まったな。それじゃあ、男女分かれて二人一組で柔軟体操だ。身体を解するのが目的だから、無理しないようにな」

俺の指示で三年生コンビとアジア先輩、塔城ペアに分かれて柔軟を開始するのを後目に、俺は丸テーブルに掛けられていた『姫島』の名前が入った上着を手を取った。

珍妙な悲鳴を上げてのた打ち回ってるエロイ人が視界の隅に入るが、何も問題はない。

「イタタタッ!! 朱乃、無理！ これ以上は無理だからっ!!」

「あらあら。身体が固いわよ、リアス。しっかりと解しておかないと怪我をするわ。だから、もう少しだけ頑張っ」

「しまった!?! 朱乃がDSなこと忘れていたわ!?! いやあああつ、誰か助けて!?!」

「ふふふ。いい声ね、リアス。それじゃあ、次はもつと厳しめで行くわよ」

開脚状態の内股に足を入れた股関節の柔軟の体勢で、もの凄くイイ笑顔で嫌がるリアス姉の腕を引っ張る朱乃姉。

年頃の乙女が上げてはいけない類の悲鳴がリアス姉から響く中、手にした上着を朱乃姉に掛けてやるとリアス姉の手を離し、驚いた顔でこちらを見上げてきた。

「へソと胸元、見えてる。嫁入り前の娘がホイホイ肌を見せたらダメだろ」

「あらあら。心配してくれたのかしら」

「弟が姉貴を心配するのは当たり前だろ。美朱と朱乃姉が嫁に行くまでに何かあったら、お袋に申し訳が立たんからな」

「うふふ。まるで父親のセリフよ、それ」

「これでも姫島家唯一の男手なんぞな。責任は重大なのだよ」

コロコロと笑う声に肩をすくめると、道着の間から覗く胸元の傷に目をむけた朱乃姉の顔に悲しみが過る。

「……消えないわね、その傷」

「ああ。俺としてはその方がいいさ。あの時の馬鹿さ加減を忘れずにすむからな」

家族を護るためと言えば聞こえがいいが、2年鍛えた程度で慢心したら5歳のガキが自分の分も弁えずにイキがっただけだ。

その結果、腸を撒き散らしながらくたばるなんて、無様を家族に見せることになった。

あの時、都合よくトワイライト・ヒーリング聖女の微笑が目覚めて命を拾う事ができたが、あの姿を見たお袋達の絶望は如何程のものだったろうか。

拳句、護るはずだったお袋は殺され、暴走とは言え朱乃姉の手を汚させたのだから、笑い話にもならない。

俺がここで力を求めるのは、二度とあんな無様を晒さないためだ。相手がオーフィスだろうがグレートレッドだろうが、叩き潰せる力を手に入れるまで俺は止まる気はない。

「無理はしないでね。私は家族で暮らしていければそれでいいのだから」

ら」

「……わかつてるさ」

応えられない言葉と見透かすような視線に目を逸らすと、柔軟をしていたはずのアーシア先輩の胸に突撃して、泣きじやくっているリアス姉の姿が見えた。

戸惑っているのだろう、拙いながらアーシア先輩が慰めて、塔城が頭を撫でていると、身も世も無い風な泣き声は更に高まった。

あの容赦ないガチ泣き具合は、間違いない幼児退行している。

「……朱乃姉、やりすぎじゃね?」

「あらあら、うふふ」

笑って誤魔化そうとする朱乃姉に、取り敢えず軽めの拳骨を落としておきました。

「ほら、相手の動きを良く見る! 攻撃される時に目を瞑ってたら、防御なんてできないぞ!」

教えた通り半身に構えたイツセー先輩に、極力手加減した攻撃を加えながら激を飛ばす。

顔面に向けて拳を放てば、未だに目に怯えの光が走るものの前に出した左手でこちらの腕を払い除け、続く逆の手の上段突き、ボディ狙いの中段突きも手と肘で払い落とすが、最後のローキックには対応できずに、尻餅を突いてしまう。

「イツテーっ!? 最後に蹴りまであるのかよ!?!」

「キックやムエタイなんかじゃ、割とメジャーなコンビネーションなんだけどな。まあ、最初の三発を捌けるようになったんだから、充分進歩してるよ」

助け起こしながら賞賛の言葉を送ると、納得いつてないのかイツセー先輩の顔に不満げな色が浮かぶ。

「なあ、始まってから二時間くらいずっと防御の練習ばかりしてるけど、攻撃は練習しなくていいのかわよ」

「それは明日以降だ。それに、イツセー先輩の場合は防御がある意味攻撃になるからな」

「えっ、どういう事だ?」

「先輩の神器、赤龍帝の籠手ブーステッド・ギアは十秒ごとに所有者の力を倍化させる。それって、相手からすれば相当のプレッシャーなんだぜ。十秒ごとに相手が倍々計算で強くなるなんて、悪夢以外の何物でもないからな。そうだな……イツセー先輩はRPGゲームやった事あるか？」

「メジャーなタイトルは大体やったけど、それがどうしたんだ？」

「例えばだ。先輩があるRPGをプレイしてて、ボスマまで辿り着いたとする。そのボスは3ターン毎にステータスが大きく上昇という特徴を持っている。どう攻略する？」

「そりゃあ、パワーアップする前に倒すしかないだろ」

「そうだな。しかし、そいつのAIはずる賢くてな。パワーアップした時しか攻撃をしないで、それ以外は亀みたいに防御を固めるんだ。先輩がプレイヤーなら、どう思う？」

「なんだよ、このクソボスって思いながら焦る。多分」

「で、焦った所為で使う魔法間違ったり、攻撃のタイミングをしくつたりして負けるってのが、こういう状況に陥った奴のパターンなんだが、先輩が狙うのはこれだ」

「へ？」

「今のたとえばボスが先輩、プレイヤーが対戦相手なんだよ。先輩が倍化する為に亀みたいに防御を固めれば、相手は焦って倒そうとするだろう。そうしたら隙も生まれるだろうし、ミスを犯すかもしれない。先輩は倍化した力でその隙を突けばいいのさ」

「……なるほど」

「本来の赤龍帝の籠手ブーステッド・ギアの戦法は、攻勢に出ながら倍化しまくって押し潰すってところなんだろうが、先輩がそれをするには肉体的にも技術的にも無理があり過ぎる。10日じゃあ、鍛えるにしても時間が足りないしな」

「だから、亀戦法なのか」

「そういう事。プロボクサーだって完全に防御に回った素人を倒すのは難しいって言われている。今の先輩に必要なのは攻撃にビビらない胆力なんだ。防御の技術と合わせてそれも鍛えていくから、よろしくな」

「ああ。こつちこそよろしく頼むぜ」

お互いの軽く拳を当てて、俺達はまた訓練に戻る。明日には実戦形式の訓練をする事になるんだから、ガンガン行つとかないとな。

「イツセー先輩、玉葱の皮むき10個追加」

「あいよ」

無限の鬪争m u g e nに備え付けられた宿泊施設の厨房の中、火に掛かった特大サイズの寸胴鍋の横でまな板の上の玉葱に包丁を入れながら、後ろのイツセー先輩に声をかける。

すると1分掛からずにきれいに皮が剥けた玉葱が飛んできた。異様なまでのスピードで皮が剥けるのは、午後の訓練で朱乃姉に習った魔力を使っているからだとか。

何でも新しい必殺技の練習らしいのだが、いったいどんな技になるのか想像もつかない。

「祐斗兄、肉はどうだ？」

「丁度全部切り終えたところだよ」

隣を見ると魔剣創造ソード・パースで造った異様に光る包丁を手にした祐斗兄が、スライスされた肉の山の横で爽やかな笑顔を浮かべている。

なんとという魔剣の無駄使い。……後で一本貰つとくか。

煮立った寸胴に野菜と肉の山をぶち込んで十分ほど灰汁取り、市販のカレールーを適量入れれば出来上がり。後は飯が炊けるのを待つばかりだ。

うん、適当過ぎるだつて？ 男飯なんてこんなもんだ。見てくれは二の次、美味ければいいのである。

「そう言えば慎つて木場の事、祐斗兄つて呼ぶんだな」

飯が炊けるのを待っていると、イツセー先輩が声をかけてきた。

「かれこれ、7年くらいの付き合いになるからな。ガキの時の癖が抜けないんだ」

「そうだね。部長に助けられて、冥界に連れてこられて最初に出会ったのが姫島姉弟だったっけ。美朱ちゃんが纏わりついて来たり君は『勝負しろよ』とか言つて殴りかかつてきたりで、あの時は本当に驚いたよ」

「まあ、若気の至りって奴だな。そういった黒歴史はそつとしとくのがマナーだぞ、祐斗兄」

「お前って、ガキの時からこんなだったのか」

「こんなってなんだよ」

「美朱ちゃんの言葉を借りれば、鍛錬中毒の修行僧型悪魔超人」

「それに戦闘狂も着くね」

「酷え」

「ぶっちゃけ、今の慎ってどのくらい強いんだ？」

「んー、今のところ無限の闘争のCランクの中位くらいだから、魔王クラスかな。正面からのガチンコなら、セラ姉さんやファルビウム兄には勝てると思う。サーゼクス兄やアジユカさんみたいな超越者はまだ無理だけど」

俺の返答に先輩二人が凍りつく。

「魔王クラスって、マジかよ……」

「この頃、妙に腕が上がってる思ってたけど、そこまでだなんて……」
「そんなに驚くような事か？ 魔王クラスって言っても最上位でもないしさ。サーゼクス兄くらいにならないと、自慢にもならんだろ」

ぶっちゃけ、ここで修行していると魔王クラスって大したことないって実感するんだよな。

無限の闘争の闘士はBランクで上位魔王と互角、Aランクで各神話の軍神、超越者と同等。Sは主神クラス、凶でオーフィスと同じだ。ヴァーリの暴走でランク神や鬼と闘ったから、どうしてもそいつ等と比べてしまうのだ。

「なあ木場。慎の言ってる事って本当なのか？」

「そんな訳ないだろう。彼の認識は完全に狂ってる。悪魔の最上位が大したことないとか、どんな経験をすればそんな考えになるのかなんて想像もつかないよ」

厨房の隅で先輩達がなんか言ってるが、まあ気にする事じゃないだろう。さて、飯も炊き上がった事だし食堂で待っている欠食女子共に持って行ってやるか。

因みに、カレーの評価は上々。

『……大味ですが、まあ及第点を上げます』なんて上から目線のコメントを残しながら6杯もおかわりした、某暴食猫娘には奥義の『地獄のグリコ』をプレゼントしておいた。



二日目早朝。

昨日と同じくウォーミングアップを済ませ、昨日のおさらいとして軽い組み手を行った俺は、イツセー先輩に実戦を体験させることにした。

早いとは思うが、残りの期限が僅か9日しかない以上多少の無茶は通さなければならぬだろう。

控室のコンソールを操作し、戦闘スペースへの入場ゲートに立たせた先輩にステータスセンサーを掛ける。

このセンサーは無限の闘争に初参戦する者の登録装置であると同時に、その者のバイタルチェックを行い能力に応じたランク付けをするものだ。

さらに初回にのみ、ランダムで技を一つ覚える事ができるというオマケもある。

2回目以降は使用者のバイタルチェックがメインになるが。

さて、イツセー先輩の状態は……ランクは最下級のFか。転生悪魔になって身体能力が上がってると言え、実戦どころか喧嘩の経験もほとんどない事を思えば妥当なところだな。

投影ディスプレイに走る先輩のステータスを目で追っていた俺は、習得技能の欄に浮かんだ名前に思わず眉根を寄せた。

『皆殺しのトランペット』

シューティングゲームメーカーで名を馳せたゲームメーカー、『彩京』がリリースした格闘ゲーム『墮落天使』に登場するキャラ『壬生灰兎』が使用する技だ。

相手に背を向けて大きく振りかぶってからパンチを放つ突進技で、人間兵器開発の実験体にされた影響で痛覚を失ったというキャラ設

定を反映させてか、スーパーアーマー属性があり、モーションに入ったら投げ以外では止められない。

力を溜めることでダメージがアップ、最大まで溜めるとガード不能になり、体力の半分以上を奪う高威力になるという特性があるが、ガードされると反撃確定という使いどころの難しい技だ。

力を溜めて威力を上げるという面ではブーステッド・ギア赤龍帝の籠手と相性はいいんだろうが、ほとんど捨て身の一撃な事が不安を誘う。

「なあ、慎。変な機械にかけられたら、頭の中に知らない技の使い方が浮かんできたんだけど、大丈夫なのか」

「大丈夫だ。初回特典のサーブスで技を一つ覚えられる仕様になってるんだ。それよりもそのゲートを潜ったら実戦だからな、今覚えた技の撃ち方をしっかり確認しとけよ」

「実戦って、何と闘うんだよ。はぐれ悪魔みたいな化け物とか？」

「それは上級ランクになったら出るかもな。イツセー先輩は初心者だから、普通に人間の格闘家だよ」

「そっか。それなら何とか——って、普通、初心者なら最初は町のチンピラとかじゃね？」

「このチンピラは格闘家なみに強いから、どっちが相手でも大差はないぞ」

むしろ、バーディやジャック・ターナーなんかが出てきたら、イツセー先輩じゃ逆立ちしても勝てん。

不安げな様子でイツセー先輩がゲートを潜ると、観戦用空間デイスプレイが起動。

木造の簡素な道場で、所在なさげに佇むイツセー先輩を映し出す。

「先輩、対戦開始まで少し時間があるから、さつき覚えた技の素振りをして、頭の中のイメージと実際の動きに齟齬がないか確認するんだ」

「お、おう」

緊張で頭が回らなくなったのか、イツセー先輩は慌てて構えを取る。

腰を落とし、上半身を限界まで捻るように腕を振りかぶる独特の体勢。

「受けるか……このブロオオオオオオオオ!!!」

裂帛の気合いと共に床板を蹴った先輩は、身体全体を叩き付けるように拳を振り抜いた。

大きく空気を裂く音を置き去りに、身体全体を使って勢いを殺した先輩は、三度、四度と道場全体を使って素振りを続ける。

清々しいまでの一発狙い。しかも、撃つ前と撃つた後が隙だらけである。

まあ、下手なテクニックが無い分素人のイツセー先輩とは相性がいいかもしれないが。

「どうだ、先輩？」

「……なんか不思議な感じだ。こんな技知らないはずなのに、撃つ時は信じられないくらいに身体が滑らかに動いた。あと、なんか撃つとセリフを言っちゃうんだが……」

「仕様だ、慣れる。それよりももうすぐ時間だからな。気合を入れろよ」

「あ……ああっ！」

ブーステッド・ギア

赤龍帝の籠手呼び出し、教えた通りに顔の前に腕を上げて半身に構えた先輩の前に、青い光が集まりその中から一人の男が現れる。

逆立てた髪に額に巻いた紺色の鉢巻き、黒のインナーの上に白い空手着を着た男。糸のように細い目と特徴のない容貌は一般人と言われても違和感はない。

だが、この男こそmugenの始まり。mugenに携わった者から偉大なる父にして母と呼ばれ、mugenにある全てのキャラクターは彼を元に作られたと言われている。

mugenを手にした者全てが最初に出会う闘士。Mr. mugenと呼ぶべき漢、『カンフーマン』だ。

カンフーマンはイツセー先輩と5歩ほど間合いを空けた場所で一礼し、ゆつくりと構える。

人差し指と中指を揃えてのぼし、薬指小指を曲げてその指先を親指で押さえた剣指と呼ばれる型に固めた両手を顔の前に上げ、半身のまま左足の踵をあげた独特の構え。

それだけで、彼の纏う雰囲気但凡庸のそれから一流の格闘家のモノ

へと変わる。

相對している者に掛かる重圧は、一気に顔色を悪くしたイツセー先輩を見れば一目瞭然だ。

「イツセー先輩、相手に飲まれるな。まずは防御を固めて倍加の時間を稼ぐんだ！」

アドバイスを飛ばすがガチガチに固まった様子を見る限り、届いたとは思えない。

「う、あ……うおおおおおおおつ!!」

案の定、重圧に耐えられなくなったイツセー先輩は、『皆殺しのトランプペット』を繰り出した。

追いつめられたこの状態で、ただ殴りかかるのではなく技に頼ったのはいいが、今の状況では悪手でしかない。

全身でぶつかる様に繰り出された渾身の拳は、ブロッキングによっていなされ、死に体になったイツセー先輩の首を薙ぐようにカンフーマンの右手刀が叩き込まれる。

「~~~~ツ!?!」

痛みの為か、声も無く身体を折り曲げた先輩の顎を飛び膝蹴りで力チ上げ、宙に浮いたところにダメ押しの中段掌底突きを叩き込んだカンフーマンは、床に大の字で倒れて意識を手放した先輩に一礼をしてその姿を消した。

無限の闘争が対戦終了と判断した事により、控室に転送されてきたイツセー先輩の容態を確認すると、幸いなことに意識は無いものの、多少の打撲程度で済んでいた。この辺の加減具合がカンフーマンが無限の闘争の初心者用の対戦者に選ばれる由縁だろう。

気絶した先輩に治療を施し、邪魔にならないように部屋の隅に移動させる。

なに、ベッドだど? そんな上等なものはない。敗者は床に転がすのがこのルールである。

イツセー先輩が目を覚ますまでの間、トレーニングメニューを見直そうとテーブルに向かうことにした。

基礎体力の向上と、組み手で『皆殺しのトランプペット』を当てる為

の布石になる技を教える事まで考えていると、うめき声を上げてイツセー先輩が目を覚ました。

どこまで覚えているか確認したところ、膝でカチ上げられたところまでは覚えているそうだ。これで、一週間前後の記憶が無いなんて言われた日には、精密検査を受けさせなくてはならないところだった。

「それでどうだった、初めての实战の感想は？」

「……正直、訳がわからなかった。相手と向かい合った瞬間、凄い力に押さえ込まれたみたい息苦しくなつて……何とか抜け出そうつて覚えた技を撃つたらポコポコにされた。なあ、あれは何なんだ？」

まだ意識がハッキリしないのか、少々たどたどしい口調で話すイツセー先輩。

「あれは気当たりつて技だよ。相手に自分の気迫をぶつける事で重圧をかけ、相手の意識を狭める技法」

「……そんな技があるんだな」

「古武術とかなら珍しくも無い技だよ。まあ、一流の武術家ならどんな流派の奴も無意識に体得してるモノさ。あれを体験しただけでも今回の対戦は価値があると思うぜ」

「価値があるつて、なんでだよ？」

「あの手の技は、相手の心の隙を突いて掛けるものなんだよ。気に呑まれる感覚を覚えておけば、当然警戒するだろ。そうなれば、よほどの実戦差が無い限り技に掛かることはなくなるからさ」

「なるほど……」

「まあ、一回くらいじゃ掴みきれないと思うから、次の組み手からは俺も気当たりを使いながら相手するからな」

「げえ……!?!」

俺の言葉に露骨に表情を歪めるイツセー先輩。なんか、モチベーションが下がってきているみたいだな。このままやる気を無くされても困るし、なにか『飴』を与えるべきか。

「そう嫌そうな顔するなよ。ここの対戦相手は最初はカンフーマン固定だけど、勝てれば次は女性の闘士とだって闘えるんだからさ」

「マジでツ!? ……いやいや、騙されねえぞ。女の闘士ってアレだろ。冥界のウンディーネみたいな、筋骨隆々で殺し系なアマゾネスなんだろう!!」

「何言ってるんだよ、先輩。筋骨隆々な殺し系のウンディーネなんているわけないだろ」

「いたんだよ! 冥界の使い魔の森に!! ヘラクレスみたいな奴が!!!
俺達の目の前で、縄張り争いとかでガチに殴り合ってたんだ!!」

なにそれ、超見てえ!!

イツセー先輩の話がマジなら、下手な娯楽映画より面白そうじゃねえか! 今度冥界に行った時、撮影に行こうかな。

……おっと、話が逸れた。

「まあ、それは置いていてだ。この女性闘士はそんなイロモノは少ししかないって。なんなら、画像見てみるか?」

「少しはいるのかよ……。てか、画像見れんの?」

「見えるよ。ほれ」

コンソールを操作して投影ディスプレイに映すのは、SNKの『不知火舞』やDOAの『霞』といった巨乳枠の女性闘士だ。

「おお……。おおおおお!! けしからん、実にけしからん!! こんなナイスおっぱいが際どい衣装で闘うというのか!? いいぞ、もっとやれ!!」

さっきまでのダメージもなんのその。投影ディスプレイに頭を突っ込まんばかりの勢いでかぶりつくイツセー先輩。

その色欲に満ち満ちた顔は、通報どころか即逮捕モノである。

「どうだ? 満足いったか、エロい人」

「ああ!! このおっぱい達と触れ合えるなら、俺はどんな試練だって乗り越えられるぜ!!」

カツコイイようでその実最低な台詞を、気炎と共に吐き出すおっぱいマニアのV3。

その姿にまったく痺れもしないし、憧れる要素もない。

「いい気合いだ。そんじゃあ、基礎鍛錬やってから、組み手な」

「おう！ バッチ来い!!」

気合い十分なイツセー先輩を引き連れて、俺は控え室を後にした。

「あ……。確認だけど、実物は画像より3階級体重アップとかないよね?」

「ない。つうか、どこの場末の風俗店だよ、それ」

7話

さて、合宿が始まって6日が経った。

イツセー先輩は相変わらずカンフーマンに負け続けているが、組手と一緒に『ゴールデンキヤツスル式地獄の基礎練』を導入した成果か、2つ目の技を習得した。

手に入れたのは対戦相手のカンフーマンの技である『カンフー突き手』。

腕を振りかぶるのではなく、中国拳法のように腰の回転を利用して放つ掌底突きで、当たった時のノックバック（相手を押し出す力）が低くガードされると反撃確定だが、放つ速度が速い『皆殺しのトランペット』への布石となる技だ。

現在は防御の他に武器を持った相手対策の回避も取り入れた組手で、相手の攻撃を捌いた後に牽制のジャブ↓カンフー突き手↓皆殺しのトランペットという連続技の練習も行っている。

さらには、今朝の夢で赤龍帝の籠手ブーステッド・ギアに封じられている二天龍の一角、赤龍帝ドライグが目覚めて赤龍帝の籠手ブーステッド・ギアを介してコンタクトが取れるようになった。

ドライグのサポートの元、倍化のタイミングも精度が上がり、皆殺しのトランペットの更なる強化にも成功。実際、今朝のカンフーマン戦ではクリーンヒットはしなかったものの、ガードを弾き飛ばし、連続技を叩き込む為の切っ掛けを生み出す事ができた。

倍化皆殺しのトランペットでのガードクラッシュ狙いという、新たな戦術の可能性も芽吹いたし、イツセー先輩がカンフーマン越えする日も近い。

「よし、あのカンフー野郎にも攻撃が当たる様になってきたし、おっぱいなお姉さまとの対決も近いぜ！」

控室で、ボコボコに腫れた顔をアジア先輩に癒してもらいながら、イツセー先輩は嬉しそうに吼えた。というか、女の子が横にいるのにおっぱいとかがよく言えるな。

「デカい声でおっぱい言うな。あと、優勢な時こそ警戒心を強く持た

なきやダメだろ。今回だって、連続技が決まって相手が弱つてたのに、杜撰な攻撃の隙を突かれて逆転されてるじゃねえか。先輩はテンションが上がれば、それに乗って強くなるタイプみたいだから調子に乗るなどは言わんけど、優勢な状況でも頭の中に冷静な部分を確保しとかないと、今回みたいになしっぺ返しを食らうことになるぞ」

『その小僧の言う通りだ、宿主よ。あそこまで相手を追いつめておいて逆転を許すなど、情けないにもほどがある。……まあ、あの身体全体を使って拳を叩き込む技は悪くは無いがな。お前が更なる倍化に耐えられるようになれば、あの技も名前の通り麤の牙となるだろう』
「なんだよ、一人とも。せつかくいい勝負できるようになってきたのに、お小言とか勘弁だぜ」

「成長してるのは認めるさ。でも弟子が増長しない様に釘を刺すのも指導者の務めなんだよ。今回限定だとしてもな」

「ん、慎が教えてくれるのは今回だけなのか？」

「俺も修行中の身だからな。それに今回は10日で戦えるようにするのを主眼に置いたものだから、本気で強くなりたいたいなら、ちゃんとした指導者の下でしっかり修行するべきだよ」

「あく、それは分かるんだけどな。でも、それってあの馬鹿みたいにキツイ基礎練も続けなくちゃならないんだろ？ それを考えるとなあ……。
ブーステッド・ギア 赤龍帝の籠手を上手く使って楽に強くなる方法ってないかなあ」

「アホか、強くなるのに近道なんてねえよ。第一その赤龍帝の籠手を
ブーステッド・ギア 使いこなす為に基礎を鍛えなきやならんだろうが」

「そっか。……そうだよなあ」

この後控えている地獄の基礎練を思っつか、景気の悪い顔でガツクりと項垂れるイツセー先輩。

なぜ、こうも嫌がる様になったのかと言うと、2日目から参加させた『ゴールデンキャッスルス式地獄の基礎練』で、あんまりにも低い身体能力（断っておくがあくまで超人基準でのこと。転生悪魔としてみれば平均的である）と醜態に激怒した將軍様に『かわいがり』を受けたからだ。

クラブ活動等でのスポーツ経験も無いイツセー先輩に、この『かわいがり』は強烈だったらしく、今では將軍様を見るだけでひれ伏すようになってしまった。

「あの、イツセーさん。訓練はそんなに大変なのですか？」

「正直地獄としか言いようがない。あれを子供の頃からやってる憤は化け物だ」

「失礼な。イツセー先輩の負荷はまだ200kgなんだから、そんなにキツくないだろうに」

「その認識がおかしいんだよ！ 普通は200kgの重り背負って筋トレなんかしねえよ！ て言うか、お前は10tの重り背負ってる時点で十分化け物だから！」

「悪魔がなに情けない事言ってるんだ。そんなだから軽量級なんだよ、あんたの息子は」

「おまつ……!?!? こんなところで言うか、普通!!」

「なんだよ。おっぱいおっぱい言ってるから、下ネタOKかと思ったんだが、違ったか？」

「ぐぬぬ……。黒船サイズだからって調子に乗りおって……!!」

「こっちは親父似でな。まあハーフの特権って奴だ、あきらめろ」

問答無用の敗北感で心底悔しそうにするイツセー先輩を見下ろしながら、呵々と笑ってやる。

「いったい、何のお話なんでしょうか？」

漢の勝負です。アーシア先輩は知らないままでもいいような。

「こ、殺せ〜！ ひと思いに殺せ〜〜〜〜！」

生まれたての小鹿のように、足をプルプルと震えさせながら、イツセー先輩は潔いのかヤケツパチなのか分からん叫びを上げた。

「イツセーさん、トレーニングルームはこっちです！ そっちに行ったら戻っちゃいますよ！」

「……ボ、ボケじゃーい！」

「イツセーさん、私はこっちです！ 完全にダメージが目に出てるじゃないですか！」

壁にむかってサムズアップするイツセー先輩に、後ろから涙目で

ツッコむアーシア先輩。

どう見てもコントにしか見えないやり取りも、本人たちはいたってマジだ。

アーシア先輩に手を引かれて、再び歩き出すイツセー先輩だが、その足取りを一言でいえば、まさに腰くだけだろう。

酷使した足に力が入らないのか、踏み出した途端に内股になったりがに股になったりと、全く安定感がない。

かろうじて歩いてはいるが、その姿はまるで殺虫剤をかけられた死にかけのハエだ。

あの後、将軍様のいるゴールデンキャツスルに行き、基礎練を始めようとしたのだが、『3日もやれば慣れてくるはずだ。ならば、負荷を増やしても問題あるまい』という将軍様の鶴の一声により、イツセー先輩の負荷が300kgに増やされてしまった。

明らかにオーバーワークなため、将軍様に負荷を下げるように言ったのだが、『限界を超えるため』と聞き入れてもらえず、全てが終わった時には、この通り廃人寸前な有り様になってしまった。

俺も見かねて休めと言ったのだが、仲間の様子が気になるとイツセー先輩が聞かなかった為、アーシア先輩を介助に付けて、他のオカ研メンバーがいるトレーニングルームに向かっているわけだ。

そんな二人を引き連れてトレーニングルームに入ると、意外な人物の顔が見えた。

「おや、サイラオーグの兄貴」

「慎か。邪魔しているぞ」

部屋の隅で柔軟体操をしている巨漢は、俺を見ると彫りの深い顔に男くさい笑みを浮かべた。

彼はサイラオーグ・バアル。悪魔勢力を取り仕切る頂点の一角である、バアル大王家の跡取りでリアス姉の従兄だ。

黒いノースリーブのインナーに、肩口から袖が千切れた白の空手着という格好の兄貴は、柔軟が終わると緩やかな速度で空手の型をなぞり始める。

構えから始まり、受け、攻めと兄貴の動きは移って行き、グローブ

を思わせる程に肉厚な拳や丸太の様な足が振るわれる度に、空気を裂く音が室内に響く。

そうやって、額にうつすらと汗をかく程度で型稽古を終えた兄貴は、トレーニングルームに備え付けられたコンソールを手早く操作し、第二対戦ゲートへと姿を消した。

「ねえ、慎。あなた、サイラオグと知り合いだったの？」

サイラオグの兄貴が消えたゲートに目を向けていると、後ろからリアス姉が声を掛けてきた。

「ああ、冥界にいた時に仕事で知り合ったんだ。言っただけだったか？」
「聞いてないわよ。いきなり入ってきたと思ったら、挨拶もそこそこにトレーニングを始めて、彼に事情を聞こうにも話す暇も無かったわ」

その時の事を思い出しているのか、呆れを含んだため息をつくりアス姉。

「兄貴は鍛錬に妥協が無いからな、ここにいる間はあんまり無駄話をしないんだ。まあ、この対戦が終われば相手をしてくれるだろうさ」
「サイラオグもあなたも、まるで修行中毒ね。どうしてそこまで強くなるうとするのかしら？」

「そりゃあ、生きる為に必要だったって事もあるが、単純に楽しいんだよ、強くなるのはさ。ところで、他の面子はなにをしてんだ？」

「私と朱乃は魔力制御の復習、小猫と祐斗は美朱と組手をしてるわ。あの子達、美朱に随分とダメ出しをされていたみたいけどね」

美朱に扱かれている二人を憂うリアス姉の様子を横目に、俺は二人の現状を考察する。

塔城はルークの特性である剛力と耐久性を前面に押し出したごり押し戦法を主としている為、格闘戦主体に関わらず技術が無さすぎるし、祐斗兄は動きこそ素早いものの、その剣には虚実の虚が欠けている。

幾ら速いと言っても、フェイントも掛けない真っ直ぐな太刀筋では容易く読まれてしまう。

正直、現状の二人が通用するのは中堅下位まで。それ以上では実力

で封殺されて終わるだろう。

この合宿でこの欠点が少しは改善されればいいが……。

「ところで、イツセーの仕上がり具合は——」

一緒に入ってきたイツセー先輩の姿を求めて辺りを見まわしていたりアス姉は、室内の一点に目をむけて絶句した。

視線の先には、体操用のマットの上うつ伏せになって、妙に枯れて見える顔の穴という穴から、謎の汁を垂れ流しているイツセー先輩と、泣きそうな顔で必死に呼びかけながら、治癒を行っているアース先輩の姿が……。

……ああもう、だから休んどけって言ったのに。

「ちよっ!? イツセー!!」

悲鳴を上げながらイツセー先輩達の元に飛んでいくリアス姉を見ると、対戦の準備が整ったのだろう、部屋の中央に観戦用空間ディスプレイが現れた。

投影された画面は、昔のアメリカ映画に出てくる酒場とその前でたむろしている、これまた古臭いバイカー風の男達。

そして男達の輪の中心で瞠目しながら腕を組んで立っているサイラオーグの兄貴を映し出した。

周りから浴びせられるバイカー連中の罵詈雑言とエンジン音の中、眉一つ動かさずに不動の姿勢を続けていた兄貴が目を開くと同時に、周りの輪の中からひと際大きな影が現れた。

夜闇の中、バイクのヘッドライトの群れが照らし出したのは、青のバンドナに袖の無いジージャンを素肌で羽織り、ジーパンと脛を覆うレガースを付けた長髪の男。

背丈は兄貴より少々低い、横幅は大きく上回っている。

その横幅も一見ただの肥満体だが、よく観察すれば大きく突き出た腹や太い腕も含めて、その全てが筋肉の塊である事がわかる。

あの男の名はジャック・ターナー。

別次元のアメリカの一都市、サウスタウンで一大勢力を築いたバイカー集団『BLACK CATS』のリーダーで、12歳の時に襲いかかってきたサーカスの熊を振り返りにしたことから、『熊殺しの

マッスルデビル』を自称している。

バイカー達の輪から肩を怒らせながら歩いてきたジャックは、仁王立ちしている兄貴を下から覗き込むように睨み付け、噛んでいたチューインガムで風船を造って破裂させる。

「お前が今回の挑戦者か。あのカラテ野郎みたいなナリしやがつて……ぶっ飛ばされる覚悟はできてるんだろうな？」

「……無駄口を叩く趣味は無い。いいから掛かって来い」

「上等じゃねえかッ!!」

嘲りの表情を憤怒に変えたジャックは、激情のままにその丸太のような腕を振りかぶった。

まさに剛腕と言わんばかりのショートリアットを、素早く屈む事で切り抜けた兄貴は、返礼とばかりにフック気味の右拳をジャックの腹に叩き込む。だが、ヘヴィ級のパンチを思わせる拳を受けても、ジャックは平然とした顔で、先ほどとは反対の腕の腕を叩き付けた。咄嗟にガードが間に合った為ダウンはしていないものの、兄貴は数メートルもの距離を吹き飛ばされた。

「……なるほど。今の感触、氣を集中させて受けたという事か」

「伊達にこの街で不良をしてるわけじゃねえって事だ。この程度の芸なら朝飯前だぜ」

拳を受けた場所を軽く叩きながら、くぐもった笑い声を漏らすジャック。その姿を見据えながら、兄貴はゆっくりと構えを取った。

腰を落として両腕を前に突き出し、左腕を下に、右腕を上にも構える空手の天地上下の構えだ。

そして、深く息を吸い、空手特有の丹田呼吸法である息吹で吐き出すと、その雰囲気が一変する。

画面越しにでも感じる強烈な威圧感。練られた事により視認できるまでに高まった氣が、陽炎の様に兄貴の周囲の空間を歪ませる。

「極限流空手門弟、サイラオーグ・バアル、参る」

「極限流だどっ!?!」

「虎煌拳!!」

一瞬の溜めから右手の掌から放たれた氣弾が、驚愕で隙を晒した

ジャックの腹に炸裂する。巨大なハンマーで殴られた様に身体を『く』の字に曲げたジャックは、たたらを踏む様に2、3歩後退したものの地に伏せることなくガードを固めた。

だが、そのダメージが決して小さくない事は、腹部にくつきりと刻まれた青痣が雄弁に語っている。

「まさか、テメエも極限流カラテの使い手とはな……?!? あのカラテ野郎といい、相変わらずいけすかねえ流派だぜ！」

悪態と共に体勢を立て直したジャックは、巨体とは思えない速度で間合いを詰め、悪鬼の如き形相でオレンジ色の氣を纏った拳を兄貴に放った。

丸太のような腕から繰り出される氣を纏ったナツクルパート。凡百の格闘家なら喰らえばKO必至、下手をすれば死につながるその一撃を、兄貴は左腕を内旋させて払いのけ、がら空きになった顔面に

右の正拳を叩き込む。

「ぶば……ッ!?!」

衝撃で身体をのけ反らせたジャックに向けて、追撃の左手中段突き、下がった顎を掬い上げるようなアッパーを撃ち込んだ。

「暫烈拳!!」

裂帛の気合いと共に兄貴は、左の連打をジャックに浴びせる。

最初は軽い打撃だったそれは放つ度に速度と威力を増し、ジャブから直突きにそして拳の散弾と言うべき剛打の雨へとその姿を変え、その巨体を宙へと持ち上げて行く。

ジャック程度の巨漢を、一撃で吹き飛ばすのなら俺もできる。

だが、無数の連打を浴びせながら、相手を後ろに吹き飛ばさずに宙へ持ち上げるといふのは、如何なる技術の成せる業なのだろうか。

顔面、胸部、腹、肩口、そして股間と襲い来る拳の散弾を浴び続けたジャックの身体は痣だらけ。顔も、頬は瘤のように腫れ上がり、赤や蒼の痣や鼻血のせいで、変わってない場所が見つからない有り様だ。

拳の弾幕が止み、死に体のまま落下するジャック。

だが、その隙を見逃すほど、極限流は、サイラオーグ・バアルは甘

くはなかった。

重力のままに落下するその顎を、全身のバネを生かした駄目押しのアッパーが捉え、136キロの巨体が再び宙を舞う。

ジャックが背中から着地した場所は、奇しくも彼が現れた人の輪の前だった。

ギャラリーであるバイカー達の悲鳴とジャックへの声援の中、再び天地上下の構えをとった兄貴の視線の先で、ジャックは身体を起こし始めた。

周りの声援に応えるように立ち上がったジャックだが、やはりダメージが残っているようで、足元が覚束ない。

「飛燕疾風脚ッ!!」

練られた氣の内功によって、飛び足刀の体勢で放たれた矢のように疾る兄貴。

それに気付いたジャックは寸前で防ぐことができたが、飛燕疾風脚はこれだけでは終わらない。

ジャックの防御を土台にして兄貴の身体は旋回し、外回し蹴りが一撃目の衝撃で下がったジャックの頭を刈り取らんと放たれたのだ。

下がった視界の外から、振り下ろされる断頭の刃の如き踵。

一流の格闘家でも気付くのは困難なそれを、一介の不良でしかないジャックが察知する道理はない、そう思われた。

だが、その踵が獲物を捉える事はなかった。

蹴りが側頭部に食らいつく寸前で、ジャックはまるで見えているかの様に身体をさらにかがめて回避したのだ。

驚愕に目を見開くサイラオグの兄貴の顔に、腫れて半ば塞がったジャックの目が鋭利な光を宿す。

空振った蹴りが戻りきらない兄貴に、全身のバネを活かしたジャックのヘッドバットが炸裂。鼻から多量の血を撒き散らしながらも体勢を整えようとする兄貴に、こんどはナックルパートが放たれた。

助走と138kgの体重、さらに氣まで込められた拳を胸板に受けては、さしもの兄貴も耐えられずにその身体が宙を舞う。

吹き飛ぶ兄貴を視界に捉えながら、ジャックは大きく膝を屈める。

全身の氣を集中させた踏み切りは、アスファルトにクレーターのよ
うな陥没を残し、その巨体を文字通り『発射』した。

サイラオーグの兄貴の蹴りを矢なら、ジャックのそれは正に砲弾。
発射の為に込められた氣を利用したドロップキックは、宙にいた兄
貴に突き刺さり、その身体を人垣の向こうへと吹き飛ばした。

「サイラオーグッ!?!」

「何だよ、あのデブ！　とんでもねえドロップキック、ぶっ放したぞ
!?!」

突然の声に視線を回すと、そこにはミイラ状態から復活したイツ
セー先輩と兄貴の惨状に口を覆うリアス姉、その後ろで画面から目を
背けてしまっているアーシア先輩がいた。

「慎、対戦を強制終了しなさい！　危険と判断したらすぐに止める約
束でしょ!!」

「落ち着け、リアス姉。その約束はオカ研メンバーだけのものだ、サイ
ラオーグの兄貴には適応されない。それに——」

興奮して掴み掛ってくるリアス姉を宥めながらディスプレイに目
をやると、人の輪を押しつけてサイラオーグの兄貴が復帰する姿が見
えた。

鼻は曲がり口元から顎、そして道着の胸元まで血に塗れてはいる
が、その目は死んでいない。それどころか、対戦当初よりもさらにギ
ラついた光を発している。

「サイラオーグの兄貴はまだ負けてないぜ。ここで止めたら俺が兄貴
に殺される」

画面の中で睨み合いを展開する男達に、リアス姉は襟を掴んでいた
手から力を抜いた。

「ふん、少しは見えるツラになったじゃねえか」

「……お前程じゃない」

嘲りを含んだジャックの弁に軽口で返しながら、兄貴は自身の曲
がった鼻を撮むと無理やり元に戻した。

その光景がアップで映った為か、周りの喧騒で聞こえる筈のない、
軟骨や肉の軋む音を感じとった新たな観戦者たちは、一様に顔を顰め

させる。

再び対峙し構える両者。双方のダメージは五分に見えるが、逆転により流れを取り戻したジャックの氣勢は兄貴のそれを上回っている。

「なあ、どっちが優勢なんだ？」

「ジャック、あのデブだな。さっきの連撃で流れをひっくり返して、勢いに乗っているのもあるが、サイラオーグの兄貴は鼻が使えないのが痛い。呼吸は氣を生み出す最も重要な要素だ。自分で折れた鼻骨を矯正してたけど、今は腫れと鼻血で氣道が狭められて、まともに呼吸もできないだろう。これは氣の運用を極意とする極限流空手には重すぎる枷だ」

現に画面に映る兄貴が纏う氣は明らかに減少している。この状況で尚も、目に見えるほどの氣勢を維持しているのは流石と言うしかないが、今のままではそれが無くなるのも時間の問題だろう。

そんな俺の憂いを余所に、事態は新たな動きを見せる。

「Dynamite!!」

見かけに似合わない俊敏さで間合いを詰めたジャックが、氣が籠もった腕を力任せに叩きつけたのだ。

兄貴も空手で最も強固な防御と言われている、十字受けで豪腕を防ぐものの、ダメージが残っているのか、足の踏ん張りが効かずに体勢を崩してしまう。

それを好機と見たジャックは、兄貴の身体を掴むとボディスラムで強引にアスファルトへ叩きつけた。

「Hell Dive!!」

そして空中高く跳躍すると、なんと頭から垂直に仰向けに倒れた兄貴へ落下してきたのだ。

氣によって増幅された脚力で数メートルにまで上昇した奴の肉爆撃を受ければ、いくらサイラオーグの兄貴でも敗北は免れない。

立ち上がって防御しようとしても、高高度から落下する奴を防ぐのは不可能。

転がって回避するのも対空技で迎撃するのも、時間が足りない。

状況は限りなく詰みに近い。だが、身体を起こす兄貴の目は死んで

はいない。

地に足を付け、高速で落ちてくる肉爆弾を見据えた兄貴は、小さいながらも鋭く呼気を吐く。

そして、次の瞬間……俺は驚愕に目を見開いた。

防御不可能な突撃、それを兄貴は左腕一つで捌いたのだ。

「ぬうんッ!!」

ありえないと言わんばかりの表情を浮かべるジャック、その逆さになった顔に、氣が籠もった拳が突き刺さる。

さきに挙げた極限流『虎咆』昇竜拳と同じく、氣を込めた拳を振り上げるジャンピングアッパー。だが、空中で大きく体勢を崩したジャックを打ち上げた兄貴は、飛び上がらんとする自身の身体を内功で無理矢理に押さえつけた。

そして、腰を落とし両脚を地面にしつかりと噛ませると、全身の氣を両手に集中させる。

狙いは、死に体で宙を漂うジャック。

「霸王翔吼拳!!」

裂帛の気合いと共に放たれた1メートル半の巨大な気弾は、真っ直ぐに獲物に食らいついた。

着弾の轟音と共に、ジャックは錐揉み状に吹き飛び、激しくアスファルトに叩きつけられる。

砕けたアスファルトの中心に伏した巨体はうつ伏せのまま、ピクリとも動こうとしない。

——決着だ。

対戦終了のブザーが響くと、サイラオーグの兄貴が残心を解いた。氣が抜けたのだろう、グラリと身体がよろめくが、何とか持ち直すと背後に現れたゲートに姿を消した。

役目を終えた投影ディスプレイが消え、言葉にし難い余韻が残る室内で、途中から画面を食い入るように見ていたイツセー先輩が口を開いた。

「凄かったな、あの人。まさか、あの状況から逆転するなんて思わなかったぜ!」

「ああ。俺も投げからの連携を掛けられたら時は、負けたかと思った。しかも、そこから高等技術連発で逆転だからな。こんな見応えのある対戦は、なかなか無い」

興奮するイツセー先輩に同意しながら、俺はサイラオーグの兄貴が終盤に使った技術について思い返した。

ジャックに追い詰められた時に、兄貴が使った技術は二つ。

まず一つ目は『ジャスト・ディフェンス』

元はSNKの傑作格ゲー『餓狼MOW』に登場した防御システムで、この世界では相手の攻撃を上手くタイミングを合わせて防御する事により、相手の攻撃に込められた力を吸収もしくは受け流し、通常では防御できないような攻撃を防ぐ高等技術だ。

『ジャスト・ディフェンス』の特筆すべき点は、氣功術の化勁の技術を取り入れる事で、受けた攻撃に込められたスピードや筋力はもちろん、氣や魔力までもが使用者の体力にする事ができるということ。

そして吸収した力を使えば、防御した時に掛かる負荷を相殺して即座に反撃が行える、格ゲーで言うところの『ガードキャンセル』が可能と言うことだ。

氣を込めた拳足で相手の攻撃をその負荷ごと捌く『ブロッキング』を剛の技術とするならば、相手の力を利用する『ジャスト・ディフェンス』は柔の技術と言えるだろう。

もともと、防御と同時に化勁という氣功の高等技術を使わなければならぬため、その難易度から使う者は少ないのだが。

そしてもう一つは同じく『餓狼MOW』のシステムであった『ブレーキング』だ。

この技術は、自身の氣を操る事により特定の技のモーションを強制的に中断させるというものだ。

本来の技の流れを、内功で無理矢理ねじ曲げているので身体に負担がかかるが、モーションをキャンセルすることにより、連続技に繋がったり外した際の隙を打ち消したりと、メリットは多い。

サイラオーグの兄貴が持つ人並み外れた総量の氣のお陰で、モニター越しでも『ジャスト・ディフェンス』や『ブレーキング』の際の

経絡を辿る氣の動きを知ることができた。

しつかりとこの技術をモノにして、自分なりの運用方法を見つけないとな。

「まったく、私は分からない事だらけだわ。魔力が無いはずのサイラオーグが魔力弾を撃つたり、体術が得意とはいえあんな無茶苦茶な動きをしたり。慎、分かるなら教えてくれないかしら？」

「俺も武術家の端くれだから、他の流派の解説をするってのはちよつとな。知りたかったら、本人に聞いてくれ」

どこことなく疲れた仕草で肩を竦めるリアス姉の言葉に第二ゲートを指差すと、ちょうどそこからサイラオーグの兄貴が現れた。

対戦のダメージが残っているようで、ふらつきながらも備え付けられたベンチに腰を下ろした兄貴は、深く息を吐いて身体から力を抜いた。

「随分と派手にやられちゃったな。男前が台無しだ」

傍まで言つて声をかけると、兄貴はゆっくりと顔を上げる。乾き始めた血が鼻から下にこびり付いている上に、矯正はしたものの一度折れた鼻は内出血で青くなり大きく腫れていた。

「最初で流れを掴む事ができたから一気に行こうと思つたんだが、まさかあそこで疾風脚が躲されるとは思わなかった。こんな醜態、リヨウ師範が見ていたら大目玉では済まんな」

自虐的な苦笑いを浮かべる兄貴の顔の前に手をやり、トワイライト・ヒーリング聖母の微笑の癒しの波動を送つてやる。

「……すまんな」

「いいって。次期大王なのに鼻が曲がつてちやカツコがつかないもんな」

言つてる間に、鼻の内出血は小さくなつていき腫れも引いてきた。他人を癒すのはあんまり得意ではないが、この調子なら3分あれば治癒できるだろう。

これの他に胸骨に軽いヒビが入つてるようだが、こちらも顔の治療の余波で打撲程度にまで回復するはずだ。

「ところで、何故ここにリアスの眷属がいるんだ？」

「なんか今更だよな、その質問」

苦笑いを含ませながら事情を説明すると、兄貴は大きく顔を顰めた。

「婚約者のいる身でありながら眷属に手を出したのか。けしからんな、その男」

兄貴は身に籠った怒気と共に言葉を吐き出す。同じ眷属を従える王として軽率なライザー氏の醜聞に思うところがあるんだろう。

「まあ、婚約破棄に関するリスクを背負ってでも、男のケジメをつけようとしてるんだから、その辺の放蕩息子に比べれば十分マシだって」

「それもそうか。お陰で事情が呑み込めた。礼をいうぞ、慎」
「ああ」

会話が途切れてから、問題ない程度に回復させて兄貴の元を離れると、入れ替わるようにリアス姉がベンチに向かうのが見えた。

武術をしない相手に氣の事を理解させるのは骨が折れると思うが、頑張って説明してほしい。

しかし、他人の対戦なんて見るもんじゃないな。身体が疼いて仕方がない。

今はオカ研メンバーを指導する立場だから、対戦はしないようにしてるのに、全く困ったものだ。

とりあえず、イツセー先輩がオーバーワーク気味なので休憩を指示しておいて、高木先生に稽古をつけてもらうか。



合宿開始から七日目。

先日の高木先生との修行が神極拳の秘奥義伝授だった為、疲れが抜けずに半分寝ているような状態でトレーニングルームに来たのだが、対戦の光景を見て眠気が吹き飛んだ。

なんとイツセー先輩がカンフーマンの打倒に成功したのだ。

対戦開始からガードを固め、襲い来るカンフーマンの連撃を危なげながらも致命傷を負わない様に捌き続けたイツセー先輩は、倍化が限

界まで溜まると今までの様に牽制を放たずに相手の攻撃に合わせる様に皆殺しのトランペットを放ったのだ。

まだまだ素人の域を出ないイツセー先輩が測ったタイミングは良好とはいえず、こちらの攻撃が届く前に迎撃されるのは明らかだったのだが、ここで皆殺しのトランペットの特性が光った。この技には『スーパーアーマー』という特性が付与されており、構えから撃ち終わりの間、当人の体力が尽きるか技を中断しようとしないう限り、如何なる攻撃にも怯まずに放つことが出来るのだ。

カウンター気味に腹に受けたカンフー突き手ももろともせず放った拳は、カンフーマンの顔面に直撃。

大きく吹っ飛んだところに追撃の皆殺しのトランペットを叩き込む事で勝利をもぎ取ったのだ。

両膝を地につき、空を仰ぎながら大きくガッツポーズを取るイツセー先輩の姿は、某ケツを出して挑発するムエタイチャンプの勝利ポーズを彷彿とさせたが、ともかく弟子の勝利を祝わなくてはならないだろう。

「おめでどう、イツセー先輩。正直、この合宿の間にカンフーマンに勝つとは思わなかったよ」

「サンキュー。昨日、ボロボロになっても勝ったサイラオーグさんを見てさ、あの人みたいに諦めないで勝ちたいって思ったんだ。それで自分の技を見直してたら『スーパーアーマー』ってのがある事に気が付いてさ。ぶっつけ本番だったけど使ってみたんだよ」

「なるほど。サイラオーグの兄貴はマジで努力と根性の人だから、イツセー先輩が目標にするにはピッタリかもしれないな」

「そうなのか。なら、また会う事があったらあの人に闘い方を教えてもらおうかな」

腹と腕の打ち身を治療を受けながら、人懐っこい笑顔を浮かべるイツセー先輩。ふむ、今回の騒動が片付いたら極限流を紹介してもいいかもしれないな。

「ところで、カンフーマンに勝ったら新しい技を幾つか覚えたんだけど、これってなんなんだ？」

「ああ。この対戦のシステムで、対戦相手に勝ったら相手の技を覚える事ができるんだよ」

「そっか。でも、急に何個も技が増えても使いこなせるかどうか分からないな」

「その辺は慣れだよ。どうしても駄目ならコンソールを使えば忘れる事もできるから、挑戦してみなよ」

「おう」

駄弁りながらも進めていた治療を終えて、イツセー先輩をクールダウンさせていると、リアス姉を先頭にオカ研の面子が現れた。

ざっとメンバーを見たところ、成長の影が見えるのは祐斗兄と塔城。リアス姉と朱乃姉は変化が見れない。

まあ、王であるリアス姉は前線に出る必要はないし、朱乃姉は現在でも高位の魔法使いだからそんなホイホイ成長なんてしないか。

「さて、美朱よ。祐斗兄と塔城はどうよ？」

「うん、二人ともいい感じだよ。祐兄は魔剣創造ソードバースを利用したフェイントで戦術が増えたとし、小猫は真正面からのガチンコじゃなくて体術を教えて、スピードによるかく乱戦法が使えるようになった」

自慢気に胸を張る美朱と後ろで苦笑いを浮かべる祐斗兄、塔城は相変わらずの鉄面皮だがどことなく満足そうだ。

「そりゃ結構。こつちも今さつきイツセー先輩がカンフーマンに勝ったよ」

「へえ、イツセー先輩もやるじゃん。それで、朱姉達はどうかなの？」

話を振られると思っていなかった朱乃姉は、一瞬目を瞬かせたがすぐに元の様子を取り戻して笑みを浮かべる。

「ええ。私は魔力制御と術式が向上したし、リアスはレーティングゲームの戦術を研究していたわ」

やっぱり光力が使えるようになったとかは無いのね、まあ分かってたけど。

「あー、とりあえず各自成果が出てるなら後は詰めるだけだな。とりあえず、イツセー先輩。今回で対戦は終了だ。あとは基礎練と覚えた技の慣熟に努めてくれ」

「対戦が終わりだつて！ そんな殺生な!？」

いきなり絶望の表情を浮かべて床に崩れ落ちるイツセー先輩。あんまりにも突然だったので少し引いてしまった。

「え、本番まで時間も無いから怪我しない様にと思っただけど、なんか不都合でもあつたか？」

「ある！ まだけしからん格好のおっぱいなお姉さんと対戦してないじゃないか!! それに俺が開発した新必殺技も試していない!!」

OK、わかつたから涙ながらにおっぱいって力説すんな。塔城や美朱がガチでどん引きしてるじゃないか。

しかし、必殺技とは……。いつの間に開発していたのか分からんが、興味があるな。

「わかつた、わかつた。一回だけ挑戦させてやるから泣くな」

詰め寄ってくるイツセー先輩を対戦ゲートに押し込んで、俺はため息交じりにコンソールを操作する。カンフーマンを倒したことで、先輩のランクはFからEに上がっている。これならDの彼女との対戦も可能だ。

正直、あんまり気乗りはしないが本人たつての希望ならば仕方ない。さつき言つてた必殺技というのも気になるしな。

イツセー先輩が対戦相手に指定したのは、不知火舞。

SNKの大ヒット格闘ゲーム『餓狼伝説』シリーズのヒロインの一人で、スタイルバツグンの肢体を、扇情的な忍び装束に包んだくのいちだ。

因みに、同じ女性忍者（くのいちと呼ぶと怒られる）の美朱にあの衣装の感想を聞いたところ、返ってきた答えは「ショウジキナイワー」だった。

そうだよな。お前の忍び装束って肌の露出殆どないもんな。

え、潜入任務とか破壊工作とかするのに、肌を露出なんかするわけないって。

ごもつとも。

対戦相手を指定して数分。

準備が整い、部屋の中央に投影ディスプレイが出現する。

画面が映しだすのは、古城の石垣の下にできた広場。中央に聳える巨大なしだれ櫻の花弁が、月明かりの中を舞う幻想的な空間だ。

「はわく、綺麗です」

「ええ。こんな立派な夜桜なら、お花見をしたら、さぞや気持ち良いでしょうね」

「お花見、お弁当……」

「小猫、よだれ、よだれ」

「!? ……出てない?」

「引つかかったな! これぞ情報攪乱の術!!」

「嘘、大げさ、紛らわしい。虚偽の報告には死を……!」

「当たらなければどうという事はないっ!!」

「二人共、試合が始まるよ」

「まったく、あの子達は……。でも、花見の案はいいわね。今年はやる機会がなかったし、新入生歓迎会も兼ねて、この一件が終わったらやってみようかしら」

「了解。ここがそういう目的で使えるか、確認しとくよ」

いつも通りに騒がしいオカ研メンバーを後目に、画面はゲートを潜ったイツセー先輩が、物珍しそうに周囲を見回している様を映し出していた。

「ようこそ、私のステージへ。無謀な挑戦者さん」

突然投げかけられた鈴を転がすような声音に、イツセー先輩が石垣の上に目をやると、そこには月の光を浴びる美しい女が居た。

たわわに実った胸にキュツとくびれた腰、肉つきのいい臀部に太ももと、どんな男でも虜にしそうな肢体を蠱惑的な装束に包んだ女は、イツセー先輩を見下ろしながら妖艶な笑みを浮かべている。

……OK、少し落ち着こうか、女性陣の方々。彼女を対戦相手に選んだのはイツセー先輩で俺じゃない。だから、そんなゴミ虫を見るような視線を、こちらに向けるのはやめるんだ。

こちらが在らぬ疑いで精神的重圧を受けている間に、石垣から降りた女は、イツセー先輩の前でゆっくりと構えを取る。

ボウと相手を見ていた先輩は、その動きで、対戦である事を思い出

したのか、慌てて構えた。しかし、視線は相手の胸の谷間に釘付けなうえ、完全に鼻の下がのびている。

「……いやらしい顔」

塔城が呆れ顔でぽつりと漏らす、あの顔ではフォローは無理だ。「なんだか見とれていたみたいだけど、それは桜にかしら。それとも、私？」

「もちろん、その素晴らしいおっぱいです!!」

この男、即答である。

「……そ、そう。まあ、私を誉めてくれてるみたいだから、大怪我しないようには手加減してあげる」

顔を引きつらせながらも、言葉を繋げた女は、表情を引き締めると同時に雰囲気を一変させた。

猫科の猛獣を思わせるそれを感じとったイツセー先輩の表情も一気に険しいものに変わる。

「不知火舞、参ります!!」

宣誓と踏み込み。一瞬でイツセー先輩の背後を取った舞は、低い体勢から脾臓にむけて、肘を繰り出した。

だが、イツセー先輩も伊達にカンフーマンを倒してはいない。

肘がわき腹を抉る寸前で、腕を入れてガードに成功。

再び間合いを取って防御を固める。

そこからは、攻める舞と守る先輩の我慢比べとなった。

舞はスピードとトリッキーな動きで防御を崩そうとするが、ガツチリと固めた先輩の防御を攻めきれない。対する先輩も、カンフーマンとは違った虚を突く攻撃を完全には捌き切れず、急所は守ってはいるものの、クリーンヒットを何度か受けている。

そんな中でも倍化を絶やさないのでから、大したものである。

「ほら、どうしたの？ 少しは攻撃しないと、守ってばかりじゃ勝てないわよ」

「悪いが、その手には乗らないぜ。こうやってるのも作戦の内なんだからよ」

「あ、そ。なら、そのまま縮こまってなさいな。防御ごとなぎ倒してあ

げるから!!」

挑発に乗ってこない事に痺れを切らした舞は、さらにスピードを上げて襲いかかる。

上空からの刺すような飛び蹴りをいなす事が出来ずに、まともに防御した衝撃で、たたらを踏むように後退するイツセー先輩。

着地と同時に、低い姿勢で足元から跳ね上がるように襲い来る肘撃ちも十字受けて凌ぎ、

「いい加減、当たり前なさい！ 龍炎舞!!」

氣と焔を合わせることにより、発生する炎を纏わせた装束の帯の一撃は、受けるのではなく、腕で打ち払いながら間合いを取る。

「あちち……。マジで炎が出るとか、反則だろ」

払った腕が赤くなっているのを見て、イツセー先輩が毒づくのと同じ時に、現状の限界である3回目の倍化を知らせる電子音がなった。

間合いを詰めようと地を蹴る舞を見据えながら、皆殺しのトランペットの構えを取るイツセー先輩。

相手がとる初めての攻勢。

さらに素人丸出しの技巧も何も無い、身体まで捻って腕を振りかぶる全力パンチの体勢に油断したのか、舞は大振りにイツセー先輩の頭に扇を振り下ろす。

瞬間、イツセー先輩の目に鋭い光が走った。

全身のバネを全て使って放たれた拳は、顔面を打ち据える扇も物ともせずに、相手の左肩に叩き込まれた。

倍化の力は籠もっていなかったようだが、カウンター気味に入った事で体勢を崩して後退する舞。

この好機を逃さないと、倍化の力を解き放った先輩は、増幅された魔力を左手に集中させる。

筋力ではなく魔力を増幅する。

対戦前に言っていた新必殺技に何か関係があるのだろうか。

「よっしゃあ、準備は整った！ 行くぜ、ドライグ!!」

『……宿主よ、本当にやるのか？ 俺はあの一撃で吹き飛ばしたほうがいいと思うんだが』

「今更なに言ってるんだ！ この為にわざわざ対戦したんだぞ!!」
『くそ……。なんで俺がこんな事を……。』

異様にテンションの高いイツセー先輩に、やる気のないドライグ。
……なんか、嫌な予感がするぞ。

「食らえ、ドレス・ブレイク衣服破壊!!」

気合いと共に放たれる魔力を帯びた左手。

だが、それも体勢を立て直した舞により、腹部の装束を掠めるだけで終わってしまう。

「ふふつ、ご大層な必殺技も不発に終わったようね」

窮地を脱した事で余裕を取り戻したのか、口元を隠す扇越しに笑みを浮かべる舞。

だが、対するイツセー先輩は不敵な笑みを浮かべたままだ。

「不発？ 違うな、俺の目的は達成しているぜ！」

「どういう事かしら?」

「こういう事さ!!」

訝しげに眉を寄せる舞を後目に、イツセー先輩の指が、軽い音を立てた。

次の瞬間、舞の身につけていた装束が細切れの布切れになった。

………脱衣K Oはあったが、脱衣技は無かったな。なるほど、これは新しい。

………すまない。どうやら俺も混乱しているらしい。

「よっしゃあ!! ドレス・ブレイク完成だぜ!! 後、ナイスおっぱい、ありがとうございます!!」

呆然とする舞の前で、我が世の春とばかりに喜んだり、舞の胸にむかって拝んだりとやりたい放題のイツセー先輩。

画面では、全裸の美女とそれを見て喜ぶ変態という、どこぞのマニアックなAVみたいな絵面が映っているが、この状況で先ずやらねばならぬ事が一つ。

「祐斗兄、回れ右」

呆気にと取られていた為に、号令のまま俺と共に後ろを向く祐斗兄。そのまま俺はコンソールに向かい、画面操作で舞の身体に、モザイ

ク処理をかける。

これで俺達が画面を見ても問題は無いはずだ。

「なんか、モザイクがついてると余計にエロくない、これ」

戻るなりクレーンが一件。顔から下がモザイクになった舞を指差しながら、美朱が苦笑いを浮かべる。

「俺達の社会的生命を守る為だ、我慢してくれ」

俺達が馬鹿な会話をしていると、それに触発されたのか、他の面子も自分の調子を取り戻し始める。

「まったく、あの子ったら……」

リアス姉は、イツセー先輩のエロ根性に頭を抱え、

「あらあら、困った子ですわね」

朱乃姉はいつも通りの笑顔を浮かべ、

「……ドスケベ、最低です」

塔城はゴミ箱で蠢く黒いGを見るような視線を画面越しのイツセー先輩に向け、

「イツセーさん、エッチです」

アーシア先輩は涙目で恨めしそうに画面を見上げている。

まあ、総じて女性陣からのイツセー先輩の評価が下がったようだが、完全に自業自得である。

さて、後の問題はこの対戦をどうするかだが、相手がこんな状態では続ける事なんてできないし、仮に続行できたとしても見たくない。

やはり、強制中止するべきか。

ぐだぐだになった対戦の処理に頭を捻っていると、軽く肩を叩かれた。

顔を上げると、祐斗兄が青い顔で画面を指差していた。

「慎。イツセー君の冥福を祈ろう」

突然の言葉に、内心首を傾げながら画面に目を向けると、小躍りするイツセー先輩の後ろに、般若の形相を浮かべた舞の姿が……

あ、これアカン奴や。

目にも留まらぬ足払いでイツセー先輩を地面に倒すと、あつという間にマウントポジションを取った舞は、先輩を見下ろしながら、背筋

が凍るような笑みを浮かべた。

……ああ、これが『殺す笑み』と言うやつか。

「なにか言い残す事はあるかしら？」

「下から見上げるロケットおっぱいと、秘密の叢が最高です!!」

世にも恐ろしい笑みを真っ向から見ながら、最低な答えを返すイツセー先輩。

テンションが上がりすぎて空気が読めないのか、それとも敢えて読まないのかは知らないが、この状況でそんな言葉が吐けるのは、ある意味凄い。

まあ、それに痺れないし、憧れる事なんて天地がひっくり返っても無いが。

「そう……。なら、アンデイにも見せた事のないこの肢体、冥土の土産にするがイイワァー!!」

「ゴアアアアアアッ!? 殺さないで! 殺さないでツ!!」

鬼女さながらの凶相で、舞が雨霰と繰り出すマウントパンチによって、イツセー先輩の顔があつという間にブサイクに整形されていく。哀れだが、これも自業自得と言うものだろう。

「南無阿弥陀仏、南無阿弥陀仏」

とりあえず、祐斗兄と二人でイツセー先輩の冥福を祈っておく。

なに、祐斗兄は仏教じゃないだど？

細かい事はいいんだよ。

あとは、あのリンチがおわったら、イツセー先輩のドレス・ブレイクを封印せねばなるまい。

あんな変態アーツ、公式戦で使ったら社会的に抹殺される。

いや、今まさに抹殺されようとしている奴にかける心配ではないか。

画面が垂れ流す悲痛な叫び声と、時折聞こえる「成敗ツ! 成敗ツ!」という気合いに、俺は深い溜め息をついた。

あの後、当然のごとく敗北で戻ってきたイツセー先輩を治療したところ、顔面ピカソになりながらも、彼はやり遂げた漢の笑みを浮かべていた。

いや、本当にこの人のエロ根性は凄いわ。

まあ、一緒に治療に当たっていたアーシア先輩には、気持ち悪がら
れてたんですけどね。

現時点におけるキャラクタープロフィール

姫島慎

格闘スタイル

： 空手＋中国武術＋古武術

出身地

： 日本

職業

： 学生＋神職

誕生日

： 10月16日

身長

： 176cm

体重

： 75kg

血液型

： B型

好きな物

： 格闘ゲーム

趣味

： 釣り、修行、日曜大工

大切なもの

： 母の形見のお守り

家族

： 姉、妹、父（別居中）

好きな食べ物

： 太刀魚

嫌いな食べ物

： 菓子類（甘すぎなければ食べられる）

嫌いなもの

： 努力をしない奴

特技

： 料理

得意スポーツ

： 短距離走

来歴

本作品の主人公。

墮天使幹部『雷光のバラキエル』を父に、日本の五大宗家『姫島』に連なる神社の娘、姫島朱璃を母として生まれる。

兄弟は2歳年上の姉朱乃と双子の妹の美朱。

前世の記憶を保持した転生者だが、『ハイスクールD×D』は未読。身内に墮天使がいた事から、神魔の存在する世界である事も「こういうものか」と普通に受け入れた。

5歳の時に墮天使に恨みを持つ一団から襲撃を受け、母である朱璃は死亡。

自身も致命傷を負うが、その際に神器『トワイライト・ヒーリング聖母の微笑』が覚醒したことにより一命を取り留める。

朱乃の能力の暴走によって襲撃者を退けた後、遅れて来たバラキエルに襲撃者によって墮天使の嫌悪感を植え付けられた朱乃が反発。

危ういレベルまで精神的に追い詰められていた朱乃を案じたバラキエルが距離を置いた為に、一家は離散してしまふ。

この際、重傷だった慎をバラキエルは回収しようとしていたが、朱乃が必死に抵抗した事と聖母トワイライト・ヒーリングの微笑によって傷が治癒していた為に断念した。

事件後、生家を後にした慎は姉妹と共に現世や冥界を放浪しながら、賞金稼ぎ紛いの行動で生計を立てる生活を送る事になる。

そして9歳の時に朱乃がグレモリー家長女、リアス・グレモリーの眷属になった事から、グレモリー家の庇護に入った。

その後は安定した生活の中で、『無限の闘争無限の闘争』で自身の力を高めつつ、忍術を体得した美朱と共にフリーの何でも屋を経営。

この仕事を通じて、レイヴェル・フェニックスやサイラオーグ・バルと友誼を結ぶ。

また、グレモリー領で暮らす傍ら、バラキエルと連絡を取っており、父を通して墮天使の中心組織『神の子を見張る者』の上層部とも繋がりを持つことになった。

この行動にはグレモリー家の中でも非難の声が上がったが、元より自身のスタンスを表明していた事や「子供が父親と会って何が悪い」とバラキエルと接触した事を隠そうともしなかった事からスパイ行為ではないとされ、グレモリー家当主ジオテイクスの一声で不問にされた。

13歳になると朱乃が駒王学園に進学した為、それに付き合う形で活動拠点を人間界にシフト、中学に進学する。

その際、住居としたのが神社である事と弱った神霊を保護した事から、日本神話勢とも繋がりを持つようになり、中学在学中に神職の資格を取ることになった。

神職の身分と階位としては、三級の権正階ごんせいかい（村社、郷社の宮司になるために必要な階位）を持つ。

保護した神霊を自宅の神社に奉り、宮司職に就いて実務を取り仕

切っている為、原作のようななんちゃって神社ではない。

物心がついた時から転生特典である、『無限の闘争』で修行をしており、その実力は13歳にしてサーゼクスの戦車であるスルト・セカンドを下す程。

各勢力に対するスタンスは、少々墮天使や悪魔よりであるが、基本的に中立。

グレモリー家の縁で、サーゼクスからは弟分として可愛がられている。

勢力を跨いで家族や友人がいる事から戦争反対を表明し、何でも屋をしているのもそういった火消しに便利な為。

性格

性格は普段は趣味を優先しているが、ここぞという時はしっかりやるタイプ。

常に身内を最優先に考えているが、最近その身内自体が多くなってきた為、少々困っている。

それでも、『切り捨てる』という選択肢が無いあたり、お人よしと言うべきか。

容姿は姉弟と同じく黒髪に紅い瞳。

また、個人的にはジェイソン・ステイサムのような渋い男を目標としている為、姉妹と同じく母親似の女顔なのを密かに気にしている。

戦闘スタイル

最初の師は『ストリートファイター』の『剛拳』であったが、放浪中の生活費を稼ぐため賞金稼ぎを始める際に、その不殺の精神を守れない事から自ら破門を申し出て袂を別っている。

その後、『キン肉マン』の『悪魔将軍』『押忍!! 空手部』の『高木義之』『鬼哭街』の『孔 濤羅』に師事する。

本人は『打、投、極』のバランスの取れたトータルファイターを目指しているが、実際は打撃も出来る投げキャラと言った状態。

氣功の腕は高く、早くからブロッキングや身体強化、経絡に干渉した内部破壊などの高等技術を会得しているが、気弾等の飛び道具への

適性は壊滅的な為、体得できていない。

特殊技

ブロッキング

：相手の攻撃に合わせて↓

緊急回避

：小P+小K

両手掌底拳

：↓+大P

戴天流 臥龍尾

：↓+大K

必殺技

昇竜拳

：←↓↓+P

正拳四段突き

：↑溜め↓P

当て身投げ（上段）

：←↓↑+小P

当て身投げ（中段）

：←↓↑+中P

当て身投げ（下段）

：←↓↑+大P

魔の將軍クロー

：接近して↑↓←↓↓+P

地獄の超特急

：魔の將軍クロー中に←↓↑+

P

地獄風車

：地獄の超特急中に←↓↓+P

：倒れている相手に接近し←←

+P

ワンハンドスピソルト

：魔の將軍クロー中に←↓↓+

P

ダブルニークラッシュャー

：ワンハンドスピソルト中に

←↓↓+K

：当て身投げ（中段）中に←↓

↓+K

：ダブルアームスピソルト中

に←↓↓+K

地獄のシェイクハンド

：接近して↓↓←↓↑+P

大雪山落とし

：地獄のシェイクハンド中に↓

↓←↓↑+K

ダブルアームスピソルト

：地獄のシェイクハンド中に←

↓↓+P

兜割り
↓↑+P
： 地獄のシエイクハンド中に←

↑+P
： 当て身投げ（上段）中に←

ストマツククラッシュ
： 兜割り中に↑↓←↓↓+P

ライジングジャガー
： ←↓+K

邪影拳（不完全）
： ↑↓←↓↓+K

ティーカウコーン
： ←↓+K

竜巻剛螺旋
： ←↓↑+K

超必殺技

ゲージ1消費

爆裂発勁
： ←↓↓←↓↓+P

レイジングストーム
： ←↓↓↓↓←↑+P

潜心力解放
： ←↓↓←↓↓+K

ゲージ2消費

地獄の断頭台（未完成）
： ワンハンドスピンスルト中に←

↓↓←↓↓+K

天地神明掌（未完成）
： 潜心力解放中に←↑↑↑?←?

↓+P

技解説（格闘ゲームテイスト）

両刀掌底拳

高木義之より伝授された技。

下から搦り上げる様に両の掌底を放つ。

技の始動に上半身の無敵判定があるが、出が遅いので対空技に使用するのは少々不安が残る。

連続技に組み込むのが基本的な使い方である。

戴天流 臥龍尾

孔 濤羅より伝授された技。

大きく身体を旋回させながら、相手の頭部に向けて氣を込めた回し蹴りを放つ。

本来は刀術の技で、衣服の袖等で相手の目を晦ませて、その間に蹴

りを叩き込むという物。

発動すると下半身に無敵判定が発生するうえに二歩ほど前に踏み込むので、けん制や連続技の始動等に使える。

但し、当然のごとく上半身にはしつかりと当たり判定があるので、多用していると読まれた時に大打撃を食らうので注意。

昇竜拳

剛拳より伝授された技。

ご存じ元祖対空技。

屈んだ状態から拳を突き上げて跳び上がり、アッパーカットと膝で攻撃する。

基本的に1ヒットで、本家とは違い無敵判定が上半身にしか無く、時間が短い。

その為、下方向に強力なジャンプ攻撃を持つ相手には相討ちになる事もある。

対空性能としてはライジングジャガーの方が上。

連続技か咄嗟の割り込みに使いたい。

正拳四段突き

高木義之より伝授された技。

前方に移動しながら、相手の顔と胴に向けて正拳を四発繰り出す突進技。

移動距離の割に1発のノックバックが小さい為、防御されると相手に密着してしまい反撃が確定する。

初弾の出が速いので小で奇襲に使うか、連続技に使用するのが基本。

当て身投げ

ギース・ハワードとの対戦で体得した技。

相手の攻撃を防御するとそのまま投げに移行するギースの代名詞の一つ。

上段は襟と足の裾を掴んでの投げ落とし。

中段は足を払いながら顔面を掴んで地面へ叩き付ける。

下段は攻撃を掴んで宙に浮かし、掌底で弾き飛ばす。

ガードモーションに相手の攻撃が当たれば自動発動なので、対空や先読みの地上戦に使える。

上段と中段は派生の投げ技があるので、取れた際には繋いでいこう。

魔の將軍クロー

悪魔將軍より伝授された技。

相手の顔面を掴み、片手で吊り上げて超人的な握力で締め上げる技。

出も早く腕を伸ばして掴むので投げ間合いも広い、慎の生命線となる技の一つ。

モーション中に追加コマンドを入力する事で、複数のルートの投げコンボへ移行する。

地獄の超特急

悪魔將軍より伝授された技。

魔の將軍クローの体勢から相手を持ち上げ、ワンハンド・スラムで脳天を叩きつける技。

魔の將軍クローからの派生の投げ技の一つ。

地獄風車

悪魔將軍より伝授された技。

プロレス技のロメロ・スペシャルの体勢から前方に回転し、障害物に相手を叩き付ける荒業。

地獄の超特急からの派生技の他に、ダウンしている敵への追い打ち技としても使える。

追い打ち用は←←Pと簡単な為、他の技の暴発も少ないので積極的に使っていこう。

ワンハンドスピソルト

悪魔將軍より得られた技術をアレンジした慎のオリジナル技。

魔の將軍クローの体勢から相手を振り回し、上空高く放り投げる技。

ゲージ2の超必殺技、地獄の断頭台への布石になるので、ゲージが溜まっている時は狙い目。

ゲージが無くてもダブルニークラッシャーへの投げコンボや、放り上げた上空の相手を追撃できるので、連続技の選択肢としても使える。

ダブルニークラッシャー

悪魔將軍より伝授された技。

地獄の九所封じN.O. 4・5

バックドロップの様に相手の脇に首を通して抱え上げ、そのまま相手の両膝を固定した自身の膝に叩き付ける技。

ワンハンドスピンスルトや地獄のシェイクハンド、当て身投げ（中段）の追撃に対応しているので使用頻度は高い。

地獄のシェイクハンド

悪魔將軍より伝授された技。

地獄の九所封じN.O. 8

相手の手を掴み、ツボを押すことで力の流れを狂わせて無力化させる技。

腕を伸ばして掴むのは魔の將軍クローと同じだが、こちらは少々出が遅いうえにダメージも控えめ。

しかし、魔の將軍クローと同じように投げコンボの始動技な上に、決まると相手のゲージを減少させるといふ特徴がある。

余裕があるなら積極的に狙う価値は充分にある。

大雪山落とし

悪魔將軍より伝授された技。

地獄の九所封じN.O. 1

地獄のシェイクハンドから相手を上空に放り投げ、腹部に片足立ちの姿勢で乗り、首と足をロックして背中から地面に叩き付ける技。

地獄のシェイクハンドから派生する投げコンボの一つ。

地獄のシェイクハンドとは対照的に、ゲージの超必殺技並みのダメージを叩き出す高威力技。

ダブルアームスピンスルト

悪魔將軍より伝授された技。

地獄の九所封じN.O. 2・3

体を回転させながらダブルアーム・スープレックスを放ち、両腕の急所を封じる技。

地獄のシェイクハンドから派生する投げコンボの一つ。

ここからさらにダブルニークラッシュャーへとコンボを移行する事が可能。

兜割り

悪魔将軍より伝授された技。

地獄の九所封じNo. 6

相手の頭部を地面に打ちつけてしまうほどの威力を持ったフロント・スープレックス。

地獄のシェイクハンドから派生する投げコンボの一つ。

ここからさらにストマッククラッシュへとコンボを移行する事が可能。

ストマッククラッシュ

悪魔将軍より伝授された技。

地獄の九所封じNo. 7

キャンバスに突き刺さった相手にブリッジの体制を取らせ、コーナーポスト上段から相手の腹目掛けてヘッドバッドを叩き込む技。

兜割りから派生する投げコンボの一つ。

ライジングジャガー

『無限の闘争』初戦の特典として習得した技。

上昇しながら二段飛び膝蹴りを放つ対空技。

自身の才のお陰か、本家よりもあらゆる面で強化されており、全身無敵かつ横方向にも強く無敵時間も長い信頼できる対空技。

対空はもちろん、連続技や割り込みにも使える。

これがある所為で昇竜拳が空気になった。

邪影拳（不完全）

ギース・ハワードとの対戦で体得した技。

素早い踏み込みで、肘（強ならそこから掌底）を叩き込む突進技。

名前は邪影拳だが、鍛錬が足りない為、モーシヨンはロック・ハワードのハードエッジと同じ。

本家と違い、攻撃判定が弱く突進の後半部分で消えてしまう。弱で出すと隙が少なく、先端を当てる様にすれば奇襲にも使える。強は出が遅い上にガードされると反撃確定なので、使う場面は連続技くらいしかない。

ティーカウコーン

サムチャイ・トムヤンクンとの対戦で体得した技。

飛び膝蹴りの体勢で突っ込む突進技。

発生が早くそして突進力もあり、ヒット効果がダウン。但し、防御されると反撃確定。

主な使い方は連続技に組み込む事。

また、上手くタイミングが合えば、下段蹴りを飛び越えて攻撃する事も可能。

竜巻剛螺旋

剛拳より伝授された技。

上段蹴りで相手を蹴りあげ、空中で竜巻の様に回転しながら連続で蹴りを叩き込む技。

最初の上段蹴りは判定が強いが、無敵判定が無い為対空に使うには力不足。

運用方法は連続技に組み込むか、その判定の強さを活かしワンハンドスピソルトで放り投げた相手への追撃に使用する。

爆裂発勁

高木義之より伝授された技。

太極拳の秘奥義。踏み込みから発生した力を螺旋に練り上げて放つスクリューブロー。

連続技に組み込むほか、出かかりに全身無敵がある為、割り込みに十分使える。

但し判定自体はそれほど大きくないので、対空に使用するには十分に相手を引き付ける必要がある。

レイジングストーム

ギース・ハワードとの対戦で体得した技。

氣を込めた両手を交差するように地面に打ち付け、氣による衝撃波

を発生させる、ギース・ハワードの代名詞と言うべき技。

出かかりに無敵判定が無い為、対空として使うには不完全。

めくりからの連続技かワンハンドスピンスルトで放り投げた相手への追撃に使用すべきか。

潜心力解放

高木義之より伝授された技。

強烈な意思で自身の潜在能力を引き出す技。

発動すると攻撃力、防御力、素早さが上昇する。

但し、発動する際には結構な隙がある為、相手が吹っ飛ぶ攻撃でダウンを奪った隙に使うようにした方がいい。

地獄の断頭台（未完成）

悪魔将軍より伝授された技。

地獄の九所封じNo.9

空中に放り投げた相手の上を取り、断頭の刃に見立てた自身の右足で相手の首を捕えて、落下と全体重を持って首を叩き潰す殺人技。

本来なら、ダブルアームの体勢で回転し、相手の身体が垂直になる程の遠心力を与えた後に、上空に放り投げるといふプロセスを踏むのだが、慎はまだ未熟な為、そこまでの技量を持ち合わせていない。

ワンハンドスピンスルトからの投げコンボ。

単体で体力の5割を奪う威力があるので、ゲージが溜まっていると投げのコンボも含めて八割近いダメージになる。

天地神明掌（未完成）

高木義之より伝授された技。

神極拳秘奥義。潜心力と氣の全てを込めた必殺の一撃。

現状では未完成な為、撃てるのは一日一回なうえに身体への負担も強い。

爆裂発勁の上位互換と言える技。

全身無敵の時間や攻撃判定は爆裂発勁以上の為、対空技としても十分使用に耐える。

姫島美朱

格闘スタイル : 忍術
 出身地 : 日本
 職業 : 学生十神職見習い
 誕生日 : 10月16日
 身長 : 149cm
 体重 : 41kg
 3サイズ : B82、W56、H84
 血液型 : B型
 好きな物 : テレビゲーム、アニメ、ライトノベル

ル
 趣味 : ネットサーフィン、アニメ鑑賞、ゲーム

ム
 大切なもの : 母の形見の巫女装束
 家族 : 姉、兄、父(別居中)
 好きな食べ物 : お菓子類、ハンバーグ、コーラ
 嫌いな食べ物 : 辛い物
 嫌いなもの : 不潔なモノ、軟体動物
 特技 : 忍術全般
 得意スポーツ : 走り高跳び
 来歴 : 走り高跳び

本作品のオリキャラ2号。
 墮天使幹部『雷光のバラキエル』を父に、日本の五大宗家『姫島』に連なる神社の娘、姫島朱璃を母として生まれる。

兄弟は2歳年上の朱乃と双子の兄の慎。
 慎と同じく前世の記憶を保持した転生者。女子高生ながら結構なおタクであったが『ハイスクールD×D』は知らなかった。
 転生特典として『戦国奇譚妖刀伝』の主人公の一人、香澄の綾ノ介(綾女)の血縁と妖刀。そして忍者としての天賦の才を得る。
 基本的に軽い性格の為、裏の世界や自分が純粋な人間でない事も気にしていない。

一家離散後の放浪生活の中、姉や兄の負担を減らす為に、

『無限の闘争』を利用して忍術を極める事を決意。

転生特典の天賦の才と忍の源流たる影忍の血によって、8年で上忍クラスの實力を身に着ける。

その才と忍術の冴えは、服部半蔵にして『藤原千方の四鬼』の生まれ変わりと言わしめるほど。

グレモリー家の庇護に入ってからには、慎と共に何でも屋を営む傍ら前世と同じく日本のサブカルチャーに傾倒していた。

活動拠点を日本に移してからは、影忍の末裔という事から、忍者に縁がある妖怪等から接触される事が多い。

慎が神職の資格を取得する時に、引きずられて取らされた。

神職の身分と階位としては、四級の直階ちよっかい（神社の権禰宜に必要な、基礎的な階位）を持つ。

自宅の神社では役職には就いていないが、行事があれば宮司の慎を補佐している。

セラフオール・レヴィアタンとは同好の士として仲が良く、ちよくちよくコスプレイベントなどに行っては、ソーナ・シトリーに怒られている。

各勢力に対するスタンスは、兄と同じく親しいものがある勢力には距離が近くなるが、基本的に中立。

性格

性格は公私は分けるタイプ。普段は人懐っこく明るい性格だが、仕事に入る際は一転して冷徹な性格になる。

これは、『無限の闘争』の修行の中で服部半蔵によって、叩き込まれた忍の心構えによるもの。

また、前世今生共に末っ子だったために甘え癖があり、特に年上の女性にはその傾向が強い。

甘え上手で打算が無い為、甘えられた相手にも好かれる事が多い。

祖先

美朱の転生特典が反映された事で、姫島姉弟に発生した血脈。

日本諸国に散らばる忍の源流と言われる影三流、信濃の香澄、美濃の葉ヶ塊、加賀の日向の内、信濃の香澄の生き残りである香澄の綾女

の子孫。

影三流は戦国時代に織田信長の手によって滅ぼされており、現在に残る直系の子孫は姫島姉弟のみである。

姫島に嫁入りした朱璃の母親がその血脈であり、香澄の忍術を記した古文書と妖刀は祖母から朱璃、美朱へと受け継がれる事になった。妖刀に関しては姉弟の中で美朱が最も適性が高く、慎や朱乃が使った場合は刀身に破魔の力を宿すだけだが、美朱は破魔の力を波動として放つ事ができる。

戦闘スタイル

体術を活かした機動戦でのかく乱や、忍術による幻惑からの致命の一撃を狙うのが主な戦術。

妖刀の解放は自身の負担が大きい為、必要迫られない限り使用しない様にしている。

『無限の闘争』では『サムライスピリッツ』の『服部半蔵』、『ワールドヒーローズ』の『ハンゾウ（服部半蔵正成）』に師事する。

美朱も自身の祖先である香澄の綾女に則り『香澄流忍術』と名乗ってはいるが、その技の殆どは半蔵達から得た伊賀忍法のものである。

これは、信濃の香澄忍軍を始めとする影忍三派が織田信長によって滅ぼされた事に起因する。

香澄忍軍唯一の生き残りである綾女は、頭領の直系ではあったが継承者では無かった為に香澄流忍術を皆伝しておらず、子孫である美朱には僅かな技術しか伝わっていなかった。

その為、美朱は他の流派の技で伝わっていない技術を補填する必要がある、『無限の闘争』での修行の際、その指導役として服部半蔵が立候補した為である。

また、伊賀忍軍の頭領である二人の服部半蔵が師を買って出た理由は、美朱の転生特典によりこの世界では史実になった『戦国奇譚妖刀伝』で、『天正伊賀の乱』と呼ばれる織田信長と伊賀忍軍の戦争の際、綾女を始めとする影忍の生き残りが、伊賀忍軍に味方した事を知っていたからである。

特殊技

忍法 微塵隠れ

: ←→小P or 小K or 中P or 中

K or 大P or 大K

疾風の術

: 小P + 小K + 中P

イズナ斬り

: ← + 大P

三角飛び

: (ジャンプ中・壁際) ↓ or ↑

必殺技

忍法 爆炎龍

: ← ↓ ↑ + P

モズ落とし

: ← ↓ ↓ + K

忍法 身代わりの術 仏

: 相手の攻撃を食らった瞬間に小P

十小K

忍法 身代わりの術 鬼

: 相手の攻撃を食らった瞬間に中P

十中K

光龍破

: ← ↓ ↓ + P

プラズマブレード

: ← ↓ ↓ + P

香澄 風薙

: 空中で ← ↓ ↓ + P

忍法 車菱

: ← ← + 小P + 中P

疾風燕落とし

: ← ↓ ↓ + K

流影陣

: ↑ ↓ ← ↓ ↓ + P

天馬脚

: ↑ ← ↓ + K

飛燕

: ↑ ↓ ← ↓ ↓ + 強P

飛燕(裏)

: ↑ ↓ ← ↓ ↓ + 強K

超必殺技

ゲージ1消費

伊賀忍法奥義 梵天閃光陣

: ← ↓ ↑ ← ↓ ↑ + P

真・モズ落とし

: ← ↓ ↓ ← ↓ ↓ + P

香澄・風つむじ

: ← ↓ ↓ ← ↓ ↓ + K

ゲージ2消費

妖刀解放

: ← ↓ ↑ ↑ ↓ ← ↓ ↓ + P

技解説(格闘ゲームテイスト)

忍法 微塵隠れ

ハンゾウ（服部半蔵正成）より伝授された技。

一瞬で姿を消して別の場所に現れる、いわゆるワープ技。

Pだと地上、Kだと空中に現れる。

疾風の術

ハンゾウ（服部半蔵正成）より伝授された技。

ジャンプ攻撃以外の通常技を強制キャンセルする技。

攻撃判定を持つ前にもキャンセルが可能な為、フェイントや連続技に重宝する。

イズナ斬り

ハンゾウ（服部半蔵正成）より伝授された技。

空中で回転して妖刀を下方に構えて落下する技。

垂直落下するので2段ジャンプと組み合わせ使用と効果的。

空中で軌道を変更できるので、対空技を外したり奇襲に使える。

忍法 爆炎龍

服部半蔵より伝授された技。

地面を殴り、バウンドしながら前方に進む炎の塊を放つ飛び道具。

隙が非常に小さく弱の弾速が遅いため、牽制のほかにも並走してモズ落としと斬撃の二択を迫ったりと活躍の場は豊富。

モズ落とし

服部半蔵より伝授された技。

相手を掴んで跳び上がり、錐もみ回転を掛けながら落下し、相手を頭から地面に叩き付ける投げ技。

落下地点に火薬を仕込んでいる場合は、地面に激突した際に爆炎があがる。

ボタンの強さごとに性能の明確な差別化がなされており、基本的に弱は投げ間合いが広く、強は威力が高い。

忍法 身代わりの術 仏

服部半蔵より伝授された。

相手の攻撃を喰らった時に、自分のいた場所に切り株を残して消え、相手近くにテレポートして攻撃する技。

喰らった攻撃のダメージは受ける。

仏の場合は消えた後に相手の上空に現れ、武器を構えて回転しながら落下する。素手状態だと蹴り攻撃になる。

ガードされると前に撥ねる為、慣れた相手なら反撃されてしまう。

忍法 身代わりの術 鬼

服部半蔵より伝授された技。

相手の攻撃を喰らった時に、自分のいた場所に切り株を残して消え、相手近くにテレポートして攻撃する技。

喰らった攻撃のダメージは受ける。

鬼の場合は消えた後に相手の足元の影から現れて斬りつける。素手状態だと殴打になる。

やはり、こちらでもガードされた際の際は大い。

光龍破

ハンゾウ（服部半蔵正成）より伝授された技。

全身の気を妖刀に集め、アツパー気味に刀を持った手を突き上げながら、気を解放して飛び上がる対空技。

上昇する際には全身に光の龍を纏う事からこの名が付いた。

出がかりのみ全身無敵で、相手の空中ガードが可能な為、しっかり引き付けて使わないと反撃を受ける恐れがある。

プラズマブレード

ガルフオードとの対戦で体得した技。

氣と父親譲りの雷光を混ぜ合わせて苦無の形に成型し、相手に放つ技。

雷光と気を全身に纏ってから放つ為、放つまで若干の隙があり、速射には向かない。

香澄 風薙

香澄の綾女が残した資料から美朱が体得した技。

空中からタイミングをずらして3本の苦無を放つ技。

よく似た軌道で相手の反応を素早く読み取りながら投げるので、回避がし辛い。

忍法 車菱

服部半蔵より伝授された技。

後転しながら、マキビシを撒く。

マキビシ自体の威力は弱いので、足止め程度にしかない。

疾風燕落とし

ハンゾウ（服部半蔵正成）より伝授された技。

前方に飛びあがりながらの上段回し蹴り。

連続技用に使うのが普通だが、奇襲性能も高いので疾風の術と絡めて、固めている時にキャンセルから出すと当たりやすい。

流影陣

如月影二との対戦で体得した技。

氣を込めた妖刀を逆袈裟に振る事で目の前に刃状の光を生み出し、飛び道具を跳ね返す技。

如月影二は素手かつ両手で繰り出していた為、モーションは影二の祖先である斬鉄の『流影刃』に近い。

攻撃判定が消えるのは早いですが、上半身から頭上までをカバーするので、引き付ければ対空にも使える。

天馬脚

如月影二との対戦で体得した技。

山なりに跳んでから放つ連続蹴り。

技後の硬直は比較的短く、位置やタイトルにもよるが場合によっては着地からの連続技が入る。

飛び道具を回避しながら攻撃出来るので、主に奇襲に使うのが効果的。

飛燕

霞（DOA）との対戦で体得した技。

宙返りで相手の肩に足を掛け、太腿に相手の頭を挟んだ状態で、前方に回転し地面に頭を叩き付ける投げ技。

足で頭を挟む際、顔に股間を押し付けるような形になるので『幸せ投げ』とも呼ばれる。

宙返りという投げとは解りにくい始動なので、奇襲に使えば当たりやすい。

飛燕（裏）

飛燕を元に美朱が編み出した技。

背後から宙返りで相手の肩に乗り、足で首を極めてそのまま押し折る投げ技。

飛燕と同じく宙返り始動だが、こちらは決まると頭に手を置いて背後を取るというモーションがある。

宙返りという投げとは解りにくい始動なので、奇襲に使えば当たりやすい。

威力は（裏）の方が上だが、ジャンプがこちらの方が高いので迎撃されやすい。

伊賀忍法奥義 梵天閃光陣

ハンゾウ（服部半蔵正成）より伝授された技。

空中から妖刀を前に構えて急降下し、ヒットすると分身して全方位から斬撃を浴びせる。

その際、斬撃と共に梵字が現れる事からこの名が付いた。隙が少ないうえに見切られにくい。

相手の飛び道具対策にも使える。

真・モズ落とし

服部半蔵より伝授された技。

腹部への肘打ちから顔面へ裏拳、そこから右腕をへし折りモズ落としでめる。

投げの間合いが広い為、爆炎龍による固めから通常のモズ落としの代わりに狙える。

香澄・風つむじ

香澄の綾女が残した資料から美朱が体得した技。

相手の攻撃が当たる寸前に微塵隠れで回避し、目標を見失った旋風に閉じ込めて斬り捨てる技。

上中下全ての技に対応した当身技。ゲージが溜まっていけばラッシュ系の相手のブレーキになる。

妖刀解放

妖刀を青眼に構え、真上に振りかぶりながら前に小さくジャンプ、

そして振り下ろすと同時に刀身から光線を放つ技。

画面の半分を覆うゴン太ビームに目を奪われがちだが、出かかりから発射まで全身無敵があり、小ジャンプする際の振り上げに攻撃判定がある為、対空としても使える。

一方、小ジャンプを挟むため、ビーム出が遅く相手の飛び道具を相殺してダメージを与えるのには向かない。

8話

さて、イツセー先輩が逮捕モノのダイナミック不謹慎をカマしてから、あつと言う間に三日が過ぎた。

取り敢えず、あのドレス・ブレイクとかいうセクハラ技は公序良俗的にヤバすぎると、オカ研メンバーが満場一致で封印を決定。

しかし、イツセー先輩はそれに対し断固拒否の姿勢を取った。

迫る女性陣を前に泣いて縋って最後に土下座と、情けないを通り越して哀れに思えるような姿を晒すイツセー先輩。

正直言えば、イツセー先輩の気持ちも少しは分かる。

……いや、スケベ的な意味じゃなくて。

俺も自分で編み出した技を持つているから、それを生み出すまでの苦労や思い入れなんかも、理解できるのだ。

そんな自身の努力の結晶を使えなくなるとなれば、形振り構わずに守りたくもなるだろう。

とは言え、さすがにアレを認める気にはならなかったが。

結局、イツセー先輩の懇願に絆されたりアス姉が『レーティングゲームの様な、公衆の目がある場所では使用禁止』という妥協案を提示し、イツセー先輩がそれを飲んだ事で一応の決着を見たのだが、どうにも不安が残る。

そこで、俺も一つイツセー先輩に保険を掛けておいた。

それは『約束を破ったら、將軍様と24時間耐久スパーリングをさせる』というものだ。

合宿の基礎練で散々シゴかれた所為で、將軍様が天敵になったイツセー先輩にとって、これが実現すればまさに地獄の時間となるだろう。

目を見て俺がマジだと悟ったイツセー先輩は、絶望の表情でその場に崩れ落ちた。

根は善良なんだけど、エロ方面では信用ゼロだからな、この人。

まあ、その後は無理しない程度に訓練を重ねていると、修行最終日の九日目に赤龍帝ブーステッド・ギアの籠手が更なる力を発現させた。

それは『赤龍帝の重剛撃』という、通常なら一定時間持続する倍化能力を一撃に集約する事で、効果を跳ね上げる強力な能力だ。

通常の倍化は4倍が限界のイツセー先輩も、これを使えば一撃だけ8倍の強化が可能になる。

この事実を知った時、俺は思わず天を仰いだ。

こっちは身体能力を引き上げるだけでも、氣を操るだの潜在能力を引き出すだのと、才能と死ぬ程の修練が必要になる。

そのうえ打撃力を8倍にしようなんて思ったら、右手を犠牲にして、さらに地獄の筋肉痛まで覚悟しなければならぬのに、むしろはポンと神器を使うだけ。

なんとたるチート。理不尽、ここに極まれりである。

まあ、世の中そんな旨い話があるわけもなく、試しに8倍相当の皆殺しのトランペットを放ったイツセー先輩は、肉体が倍化した負荷に耐えきれずに、空振りしただけで肩と肘を脱臼してしまったのだが。

その後の検証で2倍相当である4倍化なら、負担は有るものの負傷無しで撃てる事が確認できたので、身体への負担も考えてこちらを切り札に運用する事になった。

さて、コンデイション調整の休日を挟んで試合当日である今日を迎えたわけだが、俺と美朱、アーシア先輩は駒王学園の旧校舎内に用意された貴賓室に居た。

ゲーム開始まであと20分。

参加者のオカ研メンバーは部室で最終の打ち合わせをしているはずだ。

本当なら始まる直前まで一緒に居たかったが、参加者はおろか悪魔ですらない俺達が場を同じくする事は許されなかった。

ならなんで俺達が貴賓室なんかにいるのかというと、

「初めまして、アーシア・アルジェント嬢。私はサーゼクス・ルシファー、リアスの兄だ」

気品ある仕草でアーシア先輩に挨拶をする、豪奢な鎧にリアス姉と同じ紅い髪をした美丈夫、サーゼクス兄に呼ばれたからだ。

「は、はじめまして！ アーシア・アルジェントでしゅー！」

座っていた椅子を倒す勢いで立ち上がったアーシア先輩は、油の切れたロボットの様な動きで、差し出されたサーゼクス兄の手に両手で握り返す。

少し落ち着こうか、アーシア先輩。セリフ、めっちゃ噛んでるから。「そんなに緊張しないでくれ。君にはいつも妹が世話になってるのだから」

「そんな、私の方こそリアス部長にはお世話になりっぱなしで……」
「あの娘は実家の所為で、眷属の皆の他に親しい友人が多くなくてね。君の様に身分に関係なく接してくれるだけで十分なんだよ」

「いやいや、サーゼクス兄よ。それじゃリアス姉がボツチみたいじゃないか。」

あれでも一応学園のアイドルだからな。

「そう言っていただけなら、これからも全力でお友達をさせていただきます!」

「ああ。そうしてくれるとリアスも喜ぶよ」

「はい!」

笑顔で答えるアーシア先輩を満足げに頷くと、サーゼクス兄は俺達の横の席に移動し、豪華なデザインの椅子に身体を預けた。

「久しぶり、サーゼ兄! ミリ君は元気?」

「久しぶりだね、二人とも。あの子は元気だよ。毎日、勉学の合間に慎から教わった空手を練習しているらしい」

「へえ、ちゃんとやってるんだな。地味な練習だから途中で飽きてると思っただけだ」

冥界から日本に移住する寸前で起きた誘拐騒ぎの後、ミリキヤスに乞われて空手の基本的な型と体力向上の筋トレを教えたのだが、真面目に続けてたとは……。

「ミリキヤスにとつて、君はヒーローだからね。教育係の魔力訓練より熱心に取り組んでるそうだよ」

「やめてくれ、ヒーローなんてガラじゃない。それより、俺なんか見本にさせないでくれよ。素行が悪くなったなんてグレイファイア姉さん達に文句言われたら堪らん」

肩を竦める俺を見てサーゼクス兄はさらに楽しそうに笑う。

魔王だなんだって肩書背負つても、根は俺等の兄貴分だった気のいいアンちゃんなんだよな、この人。

魔王家業で無理してるみたいだから、せめて身体を壊さなきゃいいけど……あ、そうだった。

「サーゼクス兄、これ土産。ミリキャスやグレイフィア姉さん、小父さん達の分もあるから、持って行つてくれ」

足元に置いていたスポーツバックを渡すと、サーゼクス兄は受け取りながら軽く首を傾げる。

「随分と強い魔力を感じるが、中身は何かな？」

「装飾品のマジックアイテムが20個ほど。ああ、あんまり乱暴にしないでくれな。化粧箱には入れているけど、壊れるかも知れないから」

「ふむ。この魔力量からすると全て一級品のようだが、どこでこれをして？」

「無限m u g e nの闘争で修行してる時に、たまたま拾ったんだ。元手はタダだから、遠慮しなくていいぜ。あと、中に個々の効果と、誰に何を渡すかの一覧が入ってるから」

「……グレモリー家だけじゃなく、セラフォルー達の分まであるのか」
「セラフォルー姉さんには何かと世話になってるからな。それに、サーゼクス兄達に渡してアジュカさん達に渡さないのは変だろ」

「まったく、そこまで気を使わなくてもいいだろうに」

「いいんだよ、俺がやりたいからやってるだけだし」

バックに入っていたリストを手に、苦笑を浮かべるサーゼクス兄に笑顔で返すと、室内に試合開始のアナウンスが流れた。

「今の声って、グレイフィア姉だよな？」

「ああ。彼女には今回の司会とジャッジを任せているんだ」

感嘆の声を上げる美朱を余所に、滑らかで聞き取りやすいアナウンスは続く。

グレイフィア姉さんの事前説明によると、今回のルールは相手の王、オカ研ならリアス姉、フェニックスチームならライザー氏を脱落させた方が勝ち。

異空間に魔術で生み出した駒王学園のレプリカが対戦の舞台で、オカ研の陣地は旧校舎、フェニックスチームは新校舎だ。

王を除く眷属は、相手の陣地に入ると、プロモーションというルールで能力を向上させる事ができる。

まあ、将棋で相手の陣地に入った『歩』が、『と金』になるのと同じ理屈だろう。

「イツセーさん達、勝てるでしようか……」

ルール説明も終わり、試合開始の合図を待つ中、不安げな表情を浮かべたアーシア先輩が呟く。

「ライザーチームの情報が無いからハッキリとした事は言えないけど、厳しいだろうな。レーティングゲーム初参加のリアス姉達に対して、有望若手ランカーのライザーチームは試合経験が豊富だ」

「それに、数も問題だね。リア姉達は5人、対するライザーさん達は16人。兵力差は三倍以上、赤龍帝の籠手や滅びの魔力があっても、容易に覆せるものじゃないかな」

俺と美朱の言葉に、アーシア先輩の顔はドンドン沈み、目尻には涙が溜まっていく。

「あらま、嘘でも元気付けるような事を言うべきだったか。」

「だが、そんな逆境も跳ね退ける力をあの娘達は持っている。それはすぐそばにいた君が、よくわかっているのではないかな?」

「はいー」

サーゼクス兄からの言葉で、曇っていたアーシア先輩の表情が晴れていく。

「さすがはサーゼクス兄。」

泣いている女の子を容易く笑顔に変えるとは、イケメンの面目躍如だ。

「まあ、勝負は水物。蓋を開けるまでは分からないって事だな」

多少強引な締めめの言葉のすぐ後に、試合開始のブザーが鳴り響いた。

貴賓席の窓ガラスをスクリーンにした映像には、体育館に向かうイツセー先輩と塔城の姿が映し出され、さらにスクリーンの左上に、

簡易地図と両チーム各員の位置と動きが、名前と白黒のチェスの駒で表されている。

「へえー、画面で戦闘の様子を観ながら、上の簡易地図で両チームの動きがチェックできるようになってるんだ」

「あつー！ 小猫ちゃんといっせーさんが、敵がいつぱいいる場所に入って行きますよー！」

美朱とアーシア先輩が声を上げる中、簡易地図に目を向けると、白のクイーンの駒、朱乃姉が体育館の上空付近に待機しているのが分かる。

朱乃姉は広域殲滅を得意とする魔導師タイプ、敵の手勢が4人固まっている体育館の上を抑えていると言うことは……

「兵藤君と小猫君が囷を行い、朱乃君の魔法で体育館を破壊、中にいる敵勢力を一網打尽にする作戦か。リアスの性格からして、サクリファイスは使わないだろうから、攻撃は兵藤君達が脱出した後。シビアなタイミングになるだろうね」

興味深そうな視線を、体育館に飛び込んでいくいっせー先輩に向けるサーゼクス兄。

塔城が体育館へと消えると、画面が切り替わり、照明が煌々と室内を照らす体育館内部を映し出す。

『いっせー先輩、油断しないでください』

『ああ、わかってる』

おお、向こうの会話も拾って音声で流れるのか。えらく高性能だな。

俺が観戦モニターの高性能さに感心している間に、遮蔽物のないバレエコートを進んでいた二人は、奥にある舞台の上に立つ4つの影にその足を止める。

『ようこそ、リアス様の眷属の方々。ここは我等がお相手いたしますわ』

壇上に立つのは4人の少女。口上を述べたチャイナ服の少女に何故かブルマに体操服姿の双子、棍を手にした和装の少女だ。

『おおっ!! 美少女が4人も!』

女だというだけで、テンションが上がるイツセー先輩とそれを冷ややかに見る5対の瞳。

空気読め、イツセー先輩。味方の塔城までゴミ虫を見る目で見てるぞ。

『あなた達はあの男の相手を。隣の娘は私がやるわ』

リーダー格らしきチャイナ娘の指示に他の少女達は頷くと、一斉に壇上から飛び降り、それぞれに構えを取る。

チャイナ娘は無手、和装は棍、そして双子はどこからか取り出したチェーンソーだ。

「あのチェーンソー持つてる子って、ギャグでやってるのかな？」

「そりゃそうだろ。あれって武器じゃなくて工具だし、あんなモンを振り回しても自爆するのがオチだ」

俺達が話している間にも試合は止まらない。チャイナ娘と塔城が交戦を始め、残りの三人がそれぞれの得物を手にイツセー先輩に襲い掛かる。

『バ〜ラバラ！ バ〜ラバラ！』

物騒な掛け声と共に、双子の片割れがイツセー先輩に大上段からチェーンソーを振り下ろす。

だが、盛大な排気音を撒き散らすデカブツがそうそう当たるわけが無く、イツセー先輩が軽く後ろに飛ぶだけで空を切った。

そして、外れたチェーンソーの先端が地面に接触した瞬間、悲劇が起きた。

高い金属音と共に刀身が跳ね返り、反動で自身を支える主の手を振り切ったチェーンソーが、持ち主に襲い掛かったのだ。

不意を突かれた少女に跳ね上がる刃を躲す術は無く、刀身はその細い二の腕に喰らいつく。

『うあああああああつ!?!』

高速で駆動するチェーンに付いた刃が、血と肉片を撒き散らしながら少女に食い込んでいく。

『イルッ!?!』

相方が慌てて駆け寄って抜いていたが、傷は腕の半ばまで達してお

り戦闘を出来る状態ではないだろう。

「あーあ、言わんこっちゃない」

「うわっ……グロツ」

「い、痛そうです……」

突然のスプラッターシーンに美朱は顔を顰め、アーシア先輩は涙目になっている。

俺？　あまりのアホさに呆れて物が言えませんが、なにか？

「ふむ……。彼女の武器が地面に当たると同時に跳ね返って制御不能になったようだが、どういう事かな」

「キックバックって現象だな。チェーンソーの先端部分に固いものにぶつかったりすると、回転してるチェーンが弾かれて、刀身が持ち主側に跳ね返るんだ。林業とかチェーンソーを使う現場での負傷や死亡事故の大きな原因の一つになってる」

「なるほど。威力重視の武器だからこそ、リスクもあるというわけか」
「いや、あれ武器じゃなくて工具……まあいいや」

相変わらずどつかズレてるサーゼクス兄にツツコミを入れるのを諦めた俺は、意識を試合に戻すことにした。

チャイナ娘と塔城の対戦だが、これは先ほどから塔城に天秤が傾いている。

相手は蹴りと掌の連撃を主体とした拳法を使うみたいだが、美朱との特訓でファイトスタイルを変えた塔城とは相性が悪いようだ。

今も放った回し蹴りを飛び越えられて、後頭部に蹴りを食らい、ヨロけたところにボディーへのストレートで吹っ飛ばされている。

猫魅のバネを活かした飛び技を主体にしたアクロバティックな戦法に、従来の戦車ルックの力を活かした剛打と虚実を交えた戦い方は、初見の相手には厄介だろう。

イツセー先輩の方は、負傷とそのフォローで動けない双子の代わりに棍使いが前に出てきていた。

『ネルとイルのところへは行かせない！』

気合と共にイツセー先輩の胴へ向けて連続突きを放つ棍使い。だが、仲間を襲ったトラブルの動揺が抜けていないのか、その攻撃は精

彩を欠いている。

『よっしゃ、こいつだあつ!!』

最初の数発をガードを固めて防いだイツセー先輩は、速度に陰りが見えた一撃を赤龍帝ブーステッド・ギアの籠手で弾き飛ばした。

『そんなつ!!』

『この程度の攻撃、カンフー野郎に比べたらどうって事ないぜ!!』

棍を弾かれた反動で体勢を崩した少女の懐に飛び込むと、腹部にカンフー突き手を叩きこむ。

『がッ……!?!』

強制的に肺の空気を吐かされて身体をくの字に折る棍使い。イツセー先輩は体勢を沈めながらさらに密着すると、音が響く程の震脚と共に肩と背を相手の胴に叩き付けた。

『ぎゃぶッ……!?!』

潰れた悲鳴と共に吹っ飛んだ棍使いは、数メートル離れた場所に落下し、そのままリタイアの光に包まれて姿を消す。

カンフー突き手で上体を下げてカンフー山靠で吹っ飛ばすか。イツセー先輩はカンフーマンから得た技を上手く使えているようだな。

『ふう……。やっぱ女の子に手を上げるのは後味悪いな。試合だから仕方ないってのは分かるんだけどさ』

バツの悪そうな顔で頭を掻くイツセー先輩が双子、イルとネルだったか、の方を向くと、無傷なネルは負傷したイルを庇う様にチェーンソーを構える。

『うわ。なんか俺、スツゲー悪役っぽいぞ。この状況であの子達を倒すのって精神的にキツすぎないか』

怯えを含んだ涙目の視線に晒されて、さらにテンションを下げるイツセー先輩。甘いというべきなんだろうが、俺も同じ状況に置かれたら確実にやる気を無くすだろうな。

双子とイツセー先輩が何とも言えないグダグダ感を漂わせていると、その間にチャイナ娘が吹っ飛んできた。

身体中に無数の打撃痕を残して地に伏せるチャイナ娘を、そのすぐ

傍に着地した無傷の塔城が冷やかに見下ろす。

子供が見ても勝敗が分かる絵面だ。

『雪蘭っ!?!』

『……ぬかった。彼女たちは私達が思っていたよりはるかに強力……っ』

『敵の戦車^{ルック}を完封かよ！ さっすが小猫ちゃん！』

『イツセー先輩も一人倒したんですね、見直しました』

戦果を称え合うオカ研二人と、絶望の表情を浮かべるライザーチーム。
ム。

明暗がはつきりと分かれた構図は、不意に終わりを告げる。

耳に付けたインカムからなんらかの指令を受けた先輩達が、ライザーチームの三人を置いて体育館の入口へ歩を進めたのだ。

背後から置き去りにされた者の罵声を浴びながら、体育館から脱出したイツセー先輩達が建物から距離を置いた次の瞬間、天から降り注いだ雷撃が体育館を爆砕する。

『ライザー様の兵士^{ボーン}三名、戦車^{ルック}一名、リタイア』

グレイフィア姉さんのアウンスが流れる中、映像が体育館があった場所の上空に移ると、そこには悪魔の黒い翼を広げ、帯電した右腕を天に翳した巫女装束の朱乃姉の姿が。

『朱乃先輩、スッゲー……』

『朱乃先輩の通り名は「雷の巫女」。その名前と力は知る人ぞ知る存在、だそうですね』

『「雷の巫女」か……。あんなのでお仕置きされたら、確実に死ぬな』

『あれ、朱姉の通り名って「雷の保母」じゃないの?』

『それは仲間内での綽名。世間的には塔城が言った方だよ』

『そうだった?』

『大体、リアス姉の幼児退行が外には漏れてないんだから、そんな名前流れる訳ないだろ』

『ああ、それもそうか』

美朱の疑問に答えている間もカメラは朱乃姉の姿を映し続けている。

朱乃姉よ、興奮してるのは分かったから、その顔はやめろ。
年頃の娘がはしたない。

『次の作戦は……』

『陸上競技のグラウンド付近で祐斗先輩と合流。そのまま敵を殲滅、
です』

インカムから次の指示が飛んだようで、塔城を先頭に移動しようとした瞬間、

『くっ!? 小猫ちゃん!!』

必死の形相でイツセー先輩が塔城を抱えて後ろに飛び退いた。

一瞬遅れて、塔城がいた場所に巨大な火球が着弾し、派手な火柱が上がる。

『やれやれ、ユーベルーナの様にはいきませんわね』

再び宙に視界を移動させたカメラが捉えたのは、炎の翼を広げる金髪縦ロールの令嬢。レイヴェル・フェニックス嬢だ。

『敵を倒し、油断している時が最大の狙い目と聞いていたのですが、こちらの殿方は随分と勘がよろしいようです』

『將軍様に油断の怖さと残心の大切さを身体に叩きこまれていてね。一度でもあばら骨をこじ開けられたら、油断なんてしなくなるさ』

軽口を叩いているのに、顔色を白を通り越して土色にするイツセー先輩。

あー、『かわいがり』受けてる時にそんな事もあったっけ。

まあ、あばら骨こじ開けられたって言っても、下の三対でイツセー先輩が気絶したから全部やられたわけじゃないんだけどな。

將軍様だって、敵に止めを刺さない事への危険性を分からせる為に、ワザとあんなキツツイ技を掛けたんだし。

というか、將軍様どこで【毒蛭 観音開き】なんて体得したんだらうか。

『あばら骨って……。貴方どんな体験をしましたの?』

『聞かないでください、心が折れちゃう』

ドン引きするレイヴェル嬢に敵前でさめざめと涙するイツセー先輩。

いや、その位で心折れてたら俺はどうなるんだよ。

地獄の九所封じ覚える時、全部喰らったんだぞ。それも一から順番に。

鍛錬モードで死んだのはあれが初めてだったわ。

しかも、將軍様もこれで無限mの闘争uの中じゃ死なない事知ったから、【死ななきや安い】ならぬ【死んでも安い】という意味不明な加減方法になるし、ヒヤツハーツ！ ゴールデンキヤツスルのシゴキは地獄だぜえ！

……失礼、少々取り乱してしまった。

気を取り直したレイヴェル嬢が、未だ涙を流し続けるイツセー先輩へ火球を放とうとするが、それより速く電撃が炎を宿していた右手を打ち抜く。

バランスを崩し、高度を下げたレイヴェル嬢が見上げた先には、紫電を手に宿したまま薄く微笑む朱乃姉がいた。

『彼女の相手は私がしますわ。イツセー君達は祐斗君と合流してください』

朱乃姉の指示にイツセー先輩達は、戸惑う素振りを見せていたが、振り切るように走り去って行く。

そして、炎と共に右手の再生を終えたレイヴェル嬢と対峙する。

『さすがは【雷の巫女】 姫島朱乃。噂に違わぬ電撃ですわ』

『うふふ…。お褒めにあずかり光栄、と言うべきかしら？』

『お好きなように。ですが、今の私はライザー兄様の女王、ユーベルーナの名代。甘く見ていると火傷ではすみませんわよ』

啖呵を切ると同時に魔力を放つレイヴェル嬢。解放された不死鳥の魔力は、炎に姿を変えて彼女を守るように、その周りで渦巻き始める。

『確かに、侮れる相手ではなさそうですわね』

その光景を見た朱乃姉も自身の魔力を解放。周囲の空気は帯電し、二人の直上には稲光を孕んだ黒雲が現れる。

「うわあ……。朱姉もレベルちやんもマジだね」

「す、凄いです……！」

「……驚いたな。体育館を吹き飛ばす一撃を放つても尚、朱乃君にここまで余力があるとは」

「二人共、嫁入り前の娘なんだから、痕が残るような怪我しなきゃいいんだが」

俺の眩きに美朱が呆れたような顔でこちらを見る。

……なんだよ、その『お前が言うな』的な視線は。

互いの魔力が干渉しあい、炎と紫電が渦巻く中、動いたのも両者同時だった。

二人共、後ろに下がる事で十分な間合いを確保し、レイヴエル嬢は猛禽を思わせる炎の鳥を、朱乃姉は落雷を天に翳した右手に受け、自身の魔力と織り交ぜた雷蛇を、相手に向けて放つ。

火の粉と紫電を撒き散らして飛翔する二つの魔獣が互いに牙を突き立てた瞬間、爆音と共に画面がホワイトアウト。

ノイズの砂嵐が映ったと思ったら、陸上競技のトラック付近で、騎士風の女性と対峙するイツセー先輩達の姿に切り替わる。

「あれ？ 朱姉とレベツちゃんの場合は？」

「どうやら、さっきの魔力のぶつかり合いの予波で、中継していたサーチャーが破壊されたらしい。今からスペアを向かわせるらしいから、少し待ってくれ」

試合のスタッフから念話受けたサーゼクス兄が苦笑いを浮かべる。

む、あんな場面で切られると余計に気になるのだが、アクセシブントなら仕方がない。復旧するまではイツセー先輩の方を見る事にしよう。

上手く祐斗兄と合流できたのはいいとして、なんか騎士風の女性と祐斗兄のタイマンになってるんだが。

「祐兄は変なところで真面目だからねー。一騎打ちを挑まれたら、リーア姉の騎士として断れないって思ったんじゃないのかな」

騎士、確かカーラマインとか名乗ってたな、は高速で立ち回りながら刀身に炎を纏った剣を祐斗兄の魔剣に打ち合わせている。

『速え……!?! あれが木場の本気なのか』

『いつもの祐斗先輩よりも速度が増しています。慎から貰った怪しげな

アイテムは、ちゃんと機能しているようですね』

あの暴食猫娘が失礼な事を言っているのは置いといて、祐斗兄のス
ピードアップの秘密は右腕に巻かれた虎柄のバンダナにある。

【疾風のバンダナ】ドラゴンクエストシリーズに登場する装飾品
で、生地の裏側に動作が俊敏になるルーンの紋様が織り込んである事
で、身に着けると疾風のように素早く動けるようになると言われてい
る。

無限m u g e nの闘争ツアーの土産に祐斗兄にあげたものだが、ちゃんと効果
が出てるようだなによりだ。

さて、祐斗兄とカーラマインの剣の腕は互角。

しかしスピードでは祐斗兄が勝っている為、一合、また一合と剣を
合わせる毎にカーラマインを追い込んでいく。

『よもや私以上の剣速を持つ相手に出会えるとは……嬉しいぞ、リア
ス・グレモリーの騎士よ!』

『速度に関してはちよつとしたトリックがあるから素直には喜べない
な。けど、だからといって手は抜かないよ!』

『上等!!』

守勢に回りながらも反撃の好機を探っていたのだろう、カーラマイ
ンは横薙ぎの一撃を防ぐと剣越しの体当たりで祐斗兄を吹き飛ばし、
体勢が整っていない相手に向けて大上段の一撃を放つ。

剣速も放つタイミングも十分、防御も回避も間に合わないはずの必
殺の一撃は、足元から吹き荒れる暴風と共に祐斗兄が消えた事で、そ
の血肉を食らうことなく空を切った。

『馬鹿なっ!?!』

勝利を予感していたカーラマインは、風を巻いて脇を駆け抜けた祐
斗兄の貫胸によって、鮮血を撒き散らしながらその姿を消す。

『ライザー様の騎士ナイト一名、リタイア』

『貴女は強かった。だからこちらも切り札を切らせてもらったよ』

消えゆく女騎士に敬意を表す様に目を閉じる祐斗兄。脛の半ばま
で裂けて風に揺れるズボンの裾から覗くのは、踝辺りに結び付けられ
た風が宿る緑の刀身を持つ小さな短剣だ。

「よしよし、魔剣創造式加速装置は上手く働いているみたいだね」

自身の教え子の成果に満足そうに頷く美朱。

風を操る魔剣を予め足に仕込んでおき、風によるブースト効果で使用者を加速させる仕組みか。

「魔剣を武器ではなく自身の補助に使うか。成程、よく考えたものだ」サーゼクス兄の称賛に益々得意げに胸を張る美朱。

あ、アーシア先輩。調子に乗るんで、その馬鹿の頭は撫でなくていいからね。

ライザー氏の騎士、カーラマインの敗北によって、グラウンドの戦況に更なる変化が起こる。

グラウンド周辺の林からライザー氏の眷属である女性が6名、イツセー先輩達を取り囲むように現れたのだ。

『見事だ、リアス・グレモリー様の眷属たちよ』

代表らしい顔の片方を覆う仮面をつけた女性が、集団から一歩前に出る。

『迂闊でした。いつの間に包围を……』

『君達がここに現れる少し前に気配遮断の結界を張ってな。カーラマインの馬鹿が一騎打ちがしたいと聞かないものだから、終わるまで身を潜めていたのだ』

仮面の女が浮かべた苦笑は、自身の矜持を曲げられない頑固な同僚へか、それともそんな同僚を止めなかった自分に向けての物か。

『さて、残念だが君達の活躍はここまでだ。全員リタイアしてもらおうぞ』

仮面の女の言葉と共に、六人は各々の得物を手に戦闘態勢に入る。『へっ、リタイアしろって言われて、はいそうですかって訳にはいくか！ そっちこそ全員返り討ちにしてやるぜっ！』

威勢のいい啖呵と共に赤龍帝の籠手を掲げるイツセー先輩。左手の深紅の籠手もそれに応える様に翡翠の宝玉が光を放つ。

祐斗兄や塔城がイツセー先輩の後ろに陣取って構えを取る。

……うん？ 今、祐斗兄がイツセー先輩達に耳打ちしたか？

「慎兄、今……」

「ああ。祐斗兄がなんか耳打ちしてたな」

さて、何を仕込む気か。

この2倍の戦力差を覆す奇策でも思いついたのかね。

この団体戦の戦端を開いたのは仮面の女だった。

右手で顎を守りつつ左手をだらりと下げた構えから、イツセー先輩へしなるような軌道で左拳を放つ。

迫りくる拳にイツセー先輩は顔を後方に逸らしてやり過ぎそうとするが、予想以上に伸びる一撃を喰らい、顔が大きく跳ね上がる。

間髪入れずに放たれる追撃の左拳を二発、三発と受けたイツセー先輩は堪らずに顔面のガードを固めるが、その間隙を突くような肝臓への一撃、さらにガードが下がったところへアッパーで顎を打ち上げられて崩れ落ちる。

おいおい、あの女、ボクサーにしても戦法がマニアックすぎるだろう。ヒットマンスタイルからのフリツカージャブって、間柴かお前は。

一方塔城の方は双子の猫の獣人を相手に苦戦していた。

双子ならではのコンビネーションで二身一体というべき戦法を取る猫娘達は、塔城の放った飛び蹴りを片方が腕と背を使った独特の防御法で止めると、塔城の上を取ったもう片方が旋風脚で撃ち落とす。

なんとか着地して旋風脚を放った方の着地を狙い拳を繰り出すも、やはりもう一方が防御に現れ、円を描くような腕捌きで攻撃を逸らされた塔城は無防備なまま胸に両の掌底を喰らい吹っ飛んだ。

「イツセーさん、小猫ちゃん!」

「慎兄、今の双子の動きって」

「太極拳だな。……旋風脚に抱虎帰山ほうこきざん、結構やるぞ、あいつ等」

塔城はともかく、イツセー先輩のほうはやばい。

あの仮面女、かなりの手練れだ。しかもフリツカージャブは見た目以上に射程が伸びるうえに、顔面の直前で跳ね上がるから軌道が読みづらい。

今のイツセー先輩じゃあ防御はできても回避や、棍使いの様に打ち払うなんてマネは難しいだろう。

ヘタをすればフリツカーで蜂の巣にされて、ガードが空いたところをKOされる可能性もある。

祐斗兄がフォローに入ってくればなんとか打開する機会があるかもしれないが、大剣を持った騎士を初めとした三人の相手をしている現状ではそれも難しいか。

しかし、祐斗兄の動きはなんなんだ。

三人の攻撃を掻い潜りながら、地面に何かを刺すような動作を続けているようだが……

「ねえ、慎兄」

祐斗兄の動きに気を取られていた俺が顔を上げると、美朱が怪訝そうな顔で画面右上のマップを指差した。

「なんかリアス姉が新校舎にいる表示になってるんだけど、どういうことだろう」

目をむけると、確かに新校舎に白と黒のキングの駒が表示されている。

「数の不利を覆す為に、リアス自らがライザー君を討ちに出たという事か。討ち取られた者を除けば、朱乃君と闘っているレイヴェル嬢と兵藤君達の前にいる6名で、ライザー君の眷属は全てだ。眷属の誰かから、ライザー君がフリーになったと報告を受けての行動だろうな」

「……あれ、ライザーさんの眷属ってあれで全部だったっけ？」

「えーと、今が六人に朱乃さんの相手をしている女の子が一人ですよね」

「で、倒したのは体育館の4人とさっきの騎士。女王のユーベルナ女史は不参加だから、ライザー氏を合わせて13人か。後三人足りないかないか？」

「それなら朱乃君が体育館を爆破するのと同時期に、祐斗君が兵士を三人倒しているよ。あの轟音の為にアナウンスは聞こえなかったようだけどね」

「なら計算が合うなって、そんな事はどうでもいいわ。リアス姉は何を考えてんだよ。いくら滅びの魔力があるからって、フェニックスとサシでやりあうのはキツイだろ」

「何か対策でもあるんでしょうか？」

「うーん。合宿中、朱乃姉とリア姉の修行はノータッチだったからなあ。その間に何か思いついたのかも」

答えの見えない考察を重ねていると、不意に新校舎の一角で爆炎が上がった。

立ち昇る黒煙の中から飛び出してくるのは、リアス姉とライザー氏だ。

新校舎の屋上に降り立ち対峙する二人。

無傷のライザー氏に対してリアス姉は目立った傷はないものの、制服の所々が煤け顔にも疲労の色が見える。

『随分と侮ってくれたものだな、リアス嬢。何の対策も無くフェニックスに挑むとは』

手の中の炎を握りつぶしながら、呆れた表情をリアス姉にむけるライザー氏。対するリアス姉は言葉を返すことも無く、滅びの魔力を弾丸にしてライザー氏に放つ。

放たれた深紅の魔力弾は、ライザー氏の頭部、右腕、脇腹に着弾し喰らいついた場所を消し飛ばすが、刻まれた傷は炎と共に瞬く間に再生される。

『たとえ滅びの魔力と言えど、肉体の一部が欠損する程度の威力ではフェニックスを倒すことはできん』

一步、二歩とゆっくりと前に進んだライザー氏が軽く腕を振るうと、屋上の上を爆炎が走った。

『くうっ……!?!』

咄嗟に張った結界の防御は間に合ったものの、炎の圧力に弾かれて空へと逃げる事を余儀なくされるリアス姉。

黒い翼を広げて宙に留まるリアス姉を、ライザー氏が放った炎弾が容赦なく襲う。

『数の不利を覆す為に王による王獲りを狙う策は悪くない。だが、討つべき王への対策を考えていなければ、それも片手落ちでしかない。リアス嬢、王と王の闘いは事実上の決戦だ。用心を重ねるならともかく、自身の才能を過信して挑むものではないぞ!』

苦言と共に密度を増す炎の弾幕。リアス姉も結界で弾き魔力弾で相殺するものの、徐々にその圧力に押されていく。

『部長!?!』

リアス姉の窮地に気付いたイツセー先輩が新校舎へ向かおうとするが、その前に仮面の女が立ちちはだかる。

『このままライザー様がリアス様を討ち取れば、ゲームは投了だ。行かせるわけにはいかん』

『……ッ！ 邪魔すんじゃねえッ!?!』

女の言葉に激昂して殴りかかるイツセー先輩。だが、そんなものが通用するはずもなく、フリツカーの連撃を顔面に浴びてたたらを踏んで後退する。

『もはやこのゲームの勝敗は決した。諦めろ、グレモリーの兵士^{ポーン}』

ヒットマンスタイルを維持したまま、降伏勧告ともとれる言葉を投げかける仮面の女。だが、それを受けてもなおイツセー先輩の目はさらにその光を増している。

『ふざけんな……。俺は部長と約束したんだ、最強の兵士になるって……っ！ その俺が、部長がピンチの時にこんなところで立ち止まってるかよおおおっ!!』

イツセー先輩の咆哮と共に、赤龍帝の籠手も吼える。

倍化の合図と共に足を大きく開き、身体ごと大きく腕を振りかぶる。

素人でもやらないであろう、一発狙いの構えを仮面の女は侮蔑の目で見るが、イツセー先輩はそれを一考だにせずに地を蹴った。

『一発逆転を狙った特攻か。愚かな……』

全身のバネの爆発力が叩き出す高速の踏み込みにも、顔色を変えずに迎撃のフリツカーを放つ仮面の女。

鞭のように空を裂く拳が猛進する相手の顔を捉えた瞬間、驚愕に目を見開いたのは、仮面の女だった。

イツセー先輩は顔面に突き刺さる拳を意も介さぬように、さらに加速したのだ。

『私の拳を物ともしないとは、貴様一体……!?!』

『確かに、あんたのジャブは避けづらいき。けどな、所詮はジャブなんだよ！ 覚悟さえ決めれば、耐えられるんだッ!!』

『くうっ……!?!』

被弾覚悟で突っ込んで来るイツセー先輩の気迫に押されて、仮面の女は腕を十字に交差させてガードを固める。

『受けるか、このブロおおおおおっ!!』

だが、龍のオーラを纏った真紅の一撃はその防御を容易く打ち砕く。

轟音と共に自身を護ろうとしていた両腕が大きく跳ね上げられ、死に体を晒す女。

皆殺しのトランペットの反動を殺さずに、身体を旋回させたイツセー先輩は、その勢いのまま、無防備な相手の顎にむけて拳を突き上げる。

『カンフースマッシュアッパアアアア!!』

『ぐあああああつ!!』

身体全体で突き上げるように放った一撃によって、建物の二階ほどの高さまで跳ね上げられた仮面の女は、地面に落ちる事無く、リタイアの光によって姿を消した。

『よし、倒した！ つと、喜んでいる場合じゃないか』

『イツセー君、リアス部長のところへ行くんだ！ そして僕達が行くまで部長を守ってくれ!!』

『木場……。わかった！ お前等も早く来いよ!!』

塔城と合流し、5人からの攻撃を捌きながら発した祐斗兄の言葉に、イツセー先輩が新校舎へ駆けていく。

そして、残った者たちが対峙する戦場では、祐斗兄が加速装置をフルに使って縦横無尽に駆け巡り、塔城がフォローに回る事で、5人の敵をこの場に縫い付けていた。

だが、数の差というのは大きく、果敢に攻めていた祐斗兄も、時間が経つと共に徐々に防戦を余儀なくされていく。

そして幾度目かの攻防の後、祐斗兄の足が止まった。

互いに数メートルの距離を置き、対峙する両者。

ライザー眷属達は、牽制とはいえ超高速の斬撃に晒されていた為に、無傷の者はいない。

一方、祐斗兄達は傷らしい傷は負ってないものの、斬撃や魔法の中をかい潜り続けた為か、二人共肩で息をするほど疲弊している。

『ここまでのおようね、グレモリーの皆さん』

ライザー眷属5人の中から、十二単を身につけた女が勝ち誇った様子で声を上げる。

『……せっかちな人だ。勝利宣言にはまだ早いんじゃないかな』

『無駄な抵抗はお止めなさいな。その有り様では、先程までのような高速戦闘は無理でしょう。貴方の足が止まったのがその証拠』

祐斗兄の言葉を憐い抵抗と考えた女は、さらに言葉を重ねる。

だが、それに返ってきたのは、彼女が考えていた強がりや不屈の言葉ではなく、押さえきれない笑い声だった。

『ふ、ふふ……』

『……何がおかしいのですか？』

『いや、失礼。君達が見当違いの考えをしているのがおかしくてね』

『見当違いですって？』

『そうさ。僕達の足は止まったんじゃない、止めたんだ。何故なら、これ以上動き回る必要が無いのだから』

普段の朗らかな笑顔とはまるで違う嘲りを含んだ冷笑に、十二単が思わず後退った。

その際にはためいた袖が、何もない筈なのに鋭利な刃物に触れたかのように切り落とされる。

今気づいたが、ライザー眷属が立っているのは、乱戦開始時に祐斗兄が何か仕込んでいた場所だ。

『燃え爆ぜろー！』

祐斗兄の叫びに呼応するかの様に、ライザー眷属の立っている場所で紅い魔力と共に複数の火柱が吹き上がった。

『そして、荒れ狂え!!』

次の声で火柱の周りを走った翡翠色の魔力は瞬く間に暴風となり、哀れな犠牲者を呑み込んだ深紅の大蛇と混ざり合ってその姿を巨大

な紅い竜巻に変える。

フェニックス眷属故に火に耐性があつたのだろう、火柱から脱出しようともがいていたライザーチームは、灼熱の烈風に巻き上げられながら次々とリタイアした。

『ふう、なんとか上手くいったか』

役目を終えた竜巻が姿を消すのを見届けた祐斗兄は、小さく息をつきながら胸を撫で下ろす。

『祐斗先輩、今のは何ですか？』

何が起るかを説明されてなかったのか、祐斗兄を見上げながら塔城が問いかける。

『大した事じゃないよ。戦闘中に不可視の属性を付けた炎の魔剣と風の魔剣を仕込んでおいて、彼女達を有効範囲におびき寄せたところで過剰魔力を送って自爆させたんだ。想定通りに火災旋風みたいになつてくれたお陰で、全員倒す事ができたようだね』

苦笑いと共に照れたように頭を掻く祐斗兄。

大した事じゃないとか言ってる割に、やらかしたこととんでもない。

【火災旋風】とは、災害や戦争などで都市部での広範囲の火災や山火事などによって、炎をとまなう旋風が発生しさらに大きな被害をもたらす現象だ。

発生メカニズムはまだ完全には解明されていないが、その内部は秒速百メートル以上に達する炎の旋風で温度は1000℃を超えるとさられ、輻射熱による被害も生じると言われている。

まったく、大人しい顔して祐斗兄も過激な真似をするもんだ。

【火災旋風】は燃烧によって酸素を消費しつづける特性上、空気のあるほうへ動いていくと言われている。

そこが魔力で造られた疑似空間じゃなかったら、校舎やその辺の雑木林なんかも巻き込んで焼き払う大災害になるところだ。

『さて、僕たちも部長のところに行こう。相手はフェニックスだ、人手は多いほうがいい』

『はっ』

二人が新校舎の方に走り去っていくのを見ながら、俺は小さく息をついた。

他人が闘ってるのを見るのってやっぱ疲れるわ。

隣を見ると、美朱やアーシア先輩も俺と同じように頭を下げながら大きく息を吐いている。

「二人とも大丈夫か？」

「は……はい、大丈夫です」

「うあ、他人の闘い見るのってこんなにキツいのかあ……」

「ふふ……。随分と疲れているようだね」

「そういうサーゼクス兄は余裕そうだな」

「立場上レーティングゲームを観戦する機会は多くてね。まあ、慣れという奴さ。とは言え身内の試合を見るのは初めてだ、いつもよりは疲れているよ」

そう言いながら肩に手をやりながら首を回すサーゼクス兄。そんなジジ臭い仕草すら優雅さを感じさせるとは、イケメンとはどうなっているのか。

「さて、ライザー君の眷属も残るはレイヴェル嬢のみ、リアス側に犠牲者はいないが、皆かなり疲弊している。ここからがこのゲームの最終局面になるだろう」

「ああ。ここまで来たら、最後まで見とどけてやるさ」

「はいー」

「おー！ でも、観戦するならポテチとコーラが欲しいかな」

美朱よ、お前は本当に締まらない奴だな。

あーもう、サーゼクス兄も用意させなくていいから！

9話

グラウンドの一戦が決着をむかえ、次にディスプレイが映し出したのは、闇夜の中を飛び回りながら、激しい攻防を繰り広げる朱乃姉とレイヴェル嬢だった。

黒く染まった空を無数の炎弾が紅く染め、その合間を紫電の蛇が身をくねらせながらすり抜ける。

炎と雷。貪欲にその牙をギラつかせる二つの力は、夜闇を裂きながら相手に食らいついた。

身体を駆け巡る電流に顔を歪めながら、体勢を崩すレイヴェル嬢。

一方、朱乃姉の方に飛んだ炎弾は、その身を捉える寸前、『りゅ〜え〜じん』という舌足らずな幼い声と共に弾かれ、次々と明後日の方へその姿を消す。

『くっ、また私の炎を……。なんなのですか、その美朱そっくりの小人は!?!』

『この子は朱美^{あけみ}。可愛い妹の分身にして、私の優秀な使い魔ですわ』

優秀と言われたのが嬉しいのか、朱乃姉の肩の上で、フンスツと胸を張るチビ美朱改め朱美。紹介する朱乃姉の顔も親バカならぬ、姉バカ丸出しである。

というか名前付けていいのか、あれ。

『分身って、あのニンジュツとかいう、怪しげな技ですよ!?!』

『ええ。見た目は小さいですが、元になったあの娘の術がある程度使えるうえに、おつむも優秀ですから偵察や護衛もできますの!』

『なんて高性能!?!』

シヨックを受けるレイヴェル嬢とノリノリで使い魔自慢をする朱乃姉。当の朱美は、朱乃姉から貰ったプチクッキーをかじっている。

完全に雰囲気グダグダである。

「美朱ちゃん、小さな美朱ちゃんが大活躍ですよ!」

「うん、そうだね。というか、流影陣の使い方なら私より上手いんじゃない、あの子」

チビ朱美の活躍にはしゃぐアーシア先輩と、思わぬ現実には遠い目で

画面を見る美朱。

まあ、分身に技の熟練度を超えられたら、ショックだわな。

『相変わらずの変人っぷりですわね、あの娘は……!!』

吐き捨てるように、レイヴェル嬢が腕を大きく振り抜いて、壁のよ
うな爆炎を朱乃姉へ放つ。

あと、横で「レベっちゃん、ヒドい!」と嘆いている美朱は無視だ。

先ほどまでとは違った点ではなく面での攻撃。

朱美の反射を危惧しての手なのだろうが、地上ならともかく空中戦
では悪手でしかない。

『あらあら、甘いですわね』

自身の姿が炎の壁に隠れる位置まで引きつけた朱乃姉は、壁の下を
潜ることで容易く突破し、レイヴェル嬢の直下から電撃を撃ち込ん
だ。

自身の放った炎で相手を見失ったのか、まともに電撃を受けたレイ
ヴェル嬢は下方に炎を撒き散らしながら距離を取ろうとする。

だが、朱乃姉は障壁や朱美の流影陣を使って強引に弾幕を突破。

高速でレイヴェル嬢に肉薄し、至近距離から電撃を撃ち込み、硬直
しているレイヴェル嬢を地面に蹴り落として離脱する。

錐揉みに回転しながら落下していたレイヴェル嬢だが、地面スレス
レで体勢を整える事に成功。

炎の翼から火の粉を散らせながら再び朱乃姉に襲いかかるが、火力
任せの大味な攻撃が朱乃姉に通じるはずはなく、そのことごとくを回
避されて次々に電撃を撃ち込まれている。

「しかし、レイヴェル嬢の戦い方は随分と粗あらが目立つな。あれじゃま
るで素人だ」

「まあ、ホントにずぶの素人だからねえ」

ポロリとこぼれた独り言を拾い上げた美朱の返答に思わず首を傾
げた。

「それはないだろ。レイヴェル嬢はライザー氏の僧侶として、何度も
レーティングゲームに出場してるんだぞ?」

「前にレベツちゃん言ってたよ。レーティングゲームは義理で参加してるだけ。戦うのはライザーさんの眷属の仕事で、自分はそんな野蛮なことはしないって」

「なんだそりゃ。そんな話よく相手チームが承知するな」

「そりゃあ、戦意のないフェニックスをワザワザ倒そうなんて、物好きがいなかったって事でしょ」

なるほど、そりゃそうだ。

納得した俺は、再びモニターに目を移す。

朱乃姉の巧みな誘導で高速のドッグファイトに誘い込まれたことにより、レイヴェル嬢の被弾率だけがさらに増えていく。

リアス姉の女王になってからは積極的に戦う事はなくなったが、放浪生活の中で俺と美朱がまともに戦えるようになるまで、荒事で先頭を張っていたのは朱乃姉だったのだ。

美朱の話が本当なら、レイヴェル嬢とは潜ってきた修羅場の数が違う。

そんな朱乃姉にレイヴェル嬢が追い縋れているのは、フェニックスの不死性を盾に被弾をものともせず突っ込んでいるからだろう。

そこまで思考を巡らせて、俺はある違和感に気付いた。

不死鳥の力を受け継ぐフェニックス一族。彼らは不死鳥は炎の中から新生するという言い伝えの通り、その身を再生する時は炎を巻き上げるといふ特性を持つ。

だが、今まで多くの電撃をその身に受けたレイヴェル嬢は、炎を巻き上げただろうか？

答えは否。

彼女が再生の炎を見せたのは、朱乃姉の初手を受けた際のたった一度だけ。

それ以降は全くと言っていいほど再生は行われていない。

それに気づくと電撃を食らった箇所衣服の焦げ付きが無いのも妙に見えてくる。

もしかして、朱乃姉は再生しない様にわざと威力を絞っているのか？
でも、どうしてそんな事を……？

朱乃姉の思惑に首を捻ってる間にも、鬨いの流れは変化していく。射撃戦の実力差を理解したのか、右手に爪の形に固定した炎を宿して襲い掛かるレイヴェル嬢。

だが強引な突撃の際に心臓付近に電撃を受けた瞬間、彼女は糸が切れたように地に落ちた。

レイヴェル嬢に意識はあるようで、うつ伏せになったまま必死に動こうとしているが、細かく痙攣を続ける身体はその意思に応えようとならない。

『ようやく、効いてくれたようですわね。自分の身体で試したから自信はありましたが、もし効いてくれないかと思うと、少々不安でしたわ』

『か、身体が……?! 貴女、いったい何をしましたの!』

自身の顔の前に立つ朱乃姉を睨み付けるレイヴェル嬢。対する朱乃姉は、火が出るような厳しい視線に晒されていても平然と微笑を浮かべている。

『大した事ではありません。高電圧で微弱な電流を電撃にして流し続けただけです』

『ぞ、それだけで動けなくなったというのですか?!』

『ご存知ですか? 悪魔や天使の身体の構造は、構成する物質の強度は違っていても、人間のそれに酷似してる事を。人間の身体は脳から各部への命令を電気信号によって行っています。当然、悪魔の身体も人間と同じ仕組みで動いています。さて、そんな身体に電気信号に酷似した電流を流すとどうなるでしょう?』

『ど、どうなるというのですか……』

『身体は脳からの電気信号と外部から入ってきた電流によって混乱し、正常な活動が出来なくなる。さらに、筋肉は電流によって強制的に収縮し、本人の意思とは無関係に動きを封じる訳です。今の貴女のように』

『……ッ!? 再生の力を持つフェニックスにそんな小細工が通用するはずがありませんわ!』

『現実には通用してません。それにこれは生理現象の一つ、肉体が損傷し

ていないのに再生能力が働くわけがないでしょう?』

『ですが……こんな方法で私達を……』

『レイヴェル様、私が誰の姉なのか、忘れたのですか?』

『……っ!?!』

いつも通りのドSな笑みを浮かべた朱乃姉の言葉に、レイヴェル嬢は息を飲んだ。

2年前、フェニックス家で起きたレイヴェル嬢誘拐未遂事件。

便利屋家業で知り合い、同好の士として美朱の友人になったレイヴェル嬢に日本で暮らす事を伝えにいった俺達は、運悪くこの事件に巻き込まれた。

当初、送られてきた脅迫状から身内の犯行と分かっていた為、フェニックス卿は内々に処理しようとしていたが、レイヴェル嬢を案じた夫人によつて居合わせた俺達も救出に動くことになった。

当時は俺達も便利屋家業でそこそこの名を知られる存在になっていたので、夫人もこちらに振ってきたのだろう。

結果だけ言えば、レイヴェル嬢は美朱によつて救出され、主犯でありレイヴェル嬢を人質にフェニックス家に乗っ取るうとした、分家のエドウィン・フェニックスは俺が倒した。

まあ、あの時は雷光を込めた浸透勁によつて氣脈を狂わせて、再生能力を封じたというタネがあるわけだが、フェニックス家にとつて分家とは言え不死の力を持つ身内が殴り倒されたというのはショッキングだったらしく、事件後関係者から問い詰められた記憶がある。

『2年前、貴女の誘拐未遂が解決した折、フェニックスをどうやって倒したのか尋ねた私に、弟がこう言いましたわ。「フェニックスの肉体を傷つけずに、その機能だけを止めればいい」と。この試合が決まった時にその言葉を思い出した私は、多くの文献を漁って人間が使うスタンガンの原理からこの方法を思いつきましたの』

「慎兄、そんな事言ったの?」

「あー、なんか言った覚えがあるかも。というか、よくそんなの思い出したな、朱乃姉」

「なるほど、肉体を破壊しなければ再生もしない、か。これはレーティ

ングゲームにおける、フェニックスの牙城を崩す一手になるかもしれないな」

「良く分かりませんが、朱乃先輩すごいです!」

俺達が観覧席で騒いでると、朱乃姉はレイヴェル嬢から視線を外し、虚空に向けて声を上げ始めた。

『さて、グレイフィア様。彼女にかかった麻痺は数分で回復しますが、それだけあれば戦闘不能にすることは容易い。ですが、今回のゲームは練習試合の意味合いを込めたモノと聞いています。ならば、動けない彼女に鞭打つような真似は控えるべきでしょう。どうかご判断を』
『ライザー様の僧侶一名、リタイヤ』

朱乃姉の訴えから待つこと少し、グレイフィア姉さんのアナウンスと共にレイヴェル嬢は退場した。姿が消える際、目に涙を浮かべながらライザー氏とユーベルーナ女史に謝罪していたのには心が痛んだが、これも勝負事の常だろう。

というわけだから泣くな、愚妹。ホントこういう事に涙腺緩いよな、お前。

俺の隣で慎みという言葉を投げ捨てる様に、アジア先輩からもらったティツシユで美朱が涙をかんでいると、モニターは最後の戦場を映し出した。

そこは新校舎の屋上。

身体のいたる所が煤けたリアス姉とイツセー先輩が、無傷のライザー氏と相対していた。涼しい顔で二人を見下ろすライザー氏に対して、先ほどよりも火傷が増え、肩で息をしているリアス姉。

そして、その身を盾にするようにリアス姉の前に立つイツセー先輩は、両腕やわき腹、太腿の部位の服は駆け焦げて露出した肌には大きな火傷れが出来ている。

『随分と頑張るな、リアス嬢の兵士よ。リアス嬢を護らんとするその忠誠心は見事だ、素直に称賛を送ろう』

眼前に敵がいるにも関わらず両手を打ち合わせるライザー氏に、二人は露骨に表情を歪める。

『馬鹿にして……っ。イツセー、貴方は大丈夫なの』

『キツいけどまだ行けます。でも、どうやってあいつを倒したらいいのか……』

『ええ。再生能力に爆炎、その上格闘技能まで高いなんて計算外だったわ。今までの試合では、あんな技術は使っていなかったのに……』
『公式戦では接近戦を主とする駒は、俺の前に立つ前にリタイヤしているからな。この技術を使う機会は無かったのさ。まあ、その点では兵士君には感謝しているよ。久々に実戦でこの技が振るえる』

『なめやがって、俺はサンドバック代わりかよ……』

『そんな失礼な事は言わんさ。少なくともスパーリングパートナー程度には役に立っているぞ』

『ぎげんじゃねえ!!』

『待ちなさい、イツセー!?!』

ライザー氏の挑発に、リアス姉の静止を振り切って突進するイツセー先輩。助走をつけて振り上げた拳を放とうとするが、それよりも速くライザー氏の右足がから空きになっていた脇腹に叩き込まれる。

『ぐ……え……』

まるで鞭で肉を打つような音と共に浮き上がるイツセー先輩のつま先。次の瞬間、蹴り足から爆炎が吹き上がりイツセー先輩を大きく吹き飛ばした。

『イツセー!?!』

『イツセーさん!?!』

屋上と貴賓室にリアス姉とアジア先輩の悲鳴が響く。なるほど、あれがイツセー先輩の奇妙な負傷の仕方の正体か。しかしさっきの中段蹴り、あのガニ股に足を上げてから、目標に向けて垂直に繰り出す蹴り方は――

「ねえ、慎兄。今の蹴りって……」

「ああ、あれはムエタイ特有の蹴り方だ」

「ムエタイというのはどういうモノなのかな?」

「タイっていう国の国技で、地上では立ち技最強の格闘技の一つに挙げられてる。さっきの蹴りを見る限り、ライザー氏はかなりやりこんでいるようだな」

修行で地力の増したイツセー先輩の突進にミドルを合わせるなんて、齧った程度の奴ができる事じゃない。

しかし、今のライザー氏って遠近共に攻守の揃った強敵じゃないか。これを崩すのは厳しいぞ。

モニターには屋上の右端まで吹っ飛ばされ、柵にもたれる様に座り込むイツセー先輩と、それを支えるリアス姉の姿が映っていた。

ライザー氏は余裕の表れなのだろう、手を出さずに二人を見ている。

『大丈夫、イツセー』

『……なんとか。慎と一緒に將軍様のシゴキを受けてなかったら、今ので終わってましたけど』

リアス姉に肩を借りながら、何とか立ち上がるイツセー先輩。今ので戦闘不能かと思っただが、まだやれるようだ。

『姫島慎か。なるほど、君達の訓練に彼が絡んでいるのなら、犠牲も無しに俺の眷属を倒したのも、成りたての兵士君がしぶといのも納得がいくな』

『随分とあの子を評価するのね』

『当然だろう。魔王でも超越者でもない、当時13歳の子供がフェニックスの血族を正面から倒した。しかもその方法が拳で殴り飛ばしたというのだから、警戒するなという方が無理な話さ。まあ、人間の武術の有用性を教えてくれたのには感謝するがね』

あれ、ライザー氏がムエタイ習ったのって、俺が原因？

「なんだ、また慎兄のせいかな」

「ふむ、高評価だね。兄貴分として私も鼻が高いよ」

待て妹よ、それは濡れ衣だ。当方は断固として無罪を主張する。

だから、アーシア先輩も涙目で睨まないでくれ。

あとサーゼクス兄、これって評価じゃなくて警戒だから。

俺が理不尽な責めを受けている間に、残りのメンバーが屋上に到着した。

『リアス、イツセー君！』

満身創痍のイツセー先輩を目にした朱乃姉が二人の元に飛び、祐斗

兄と塔城が警戒しながらもライザー氏を包囲する。

『私はリアスとイツセー君の治療を行います。祐斗君と小猫ちゃんはその時間を稼いでください！』

『はいっ!!』

朱乃姉の指示に祐斗兄は氷結の魔剣を創り出し、塔城は拳を構える。

『ようやく眷属全員が集まったか。これでこのゲームの第二の目的が果たせるな』

この状況で、スーツの胸ポケットから取り出した煙草を燻らせるライザー氏。その不遜な態度にオカ研メンバーは眉を顰める。

『目的ですって?』

『このゲームは、レーティングゲームに出た事のない君達に、試合経験を積ませるを第一としている。だからこそ、俺は始まる前に二つの指標を定めた。一つは俺の下僕たちを通して君達の実力を測る事。そしてもう一つは、下僕との戦いに生き残った者に俺自身がゲームの厳しさを教える事だ。こういったものは王にだけ叩きこんでも意味が無いからな』

『だから、部長を討たずに僕達が来るのを待っていたんですか?』

『ああ。まあ、その兵士君が存外^{ポーン}に頑張ったというのもあるがな。さて、おしゃべりはここまでだ。レッスンを始めよう』

言葉と共に煙草を吐き捨てたライザー氏はこの試合で初めて構えを取った。両腕を軽く曲げ掌が相手に半ば見える様に顔の前へ上げ、前に出した左足を軽く曲げてリズムを取るムエタイ特有の構えだ。

『……いきます』

初めに飛び出したのは塔城だった。スピードでかく乱する為にライザー氏を中心に円を描くように駆け回る。対するライザー氏は構えのまま微動だにしない。普通はこうも動きまわられたなら、動きを追う為に首を巡らせるくらいはするのだが。

廻り初めて数周、隙を定めた塔城は飛び上がり、背後からライザー氏の首に目がけて蹴りを放つ。

だが、虚を突かれたと思っていたライザー氏は塔城の方に向き直

り、蹴り足の脛を肘で迎撃したのだ。

肉体同士の激突とは思えない硬質な音が響き、コンクリート製の床に落下した塔城は右足を押さえて苦痛の声を上げた。

冷然とそれを見下ろすライザー氏。塔城を撃ち落とした右腕は力無く下がっていたが、それも数秒で炎と共に再生する。

『攪乱と虚撃を主体にする戦車か……。悪くはない。だが、襲いかかる前にこちらの手の内を聞いておくべきだったな。俺が格闘戦もできるを知っていたら、こうならない可能性もあったはずだ』

言葉と共に倒れた塔城に向けて右手を翳すライザー氏。祐斗兄が慌てて飛び出すが、それよりも速く右手から放たれた何かに吹き飛ばされた塔城は、階段室の壁に叩き付けられてリタイヤする。

『リアス嬢、あの戦車の脱落は君に責任がある。其処からでも口頭で制止や忠告はできたはずだ。情報の共有は眷属に関わらず組織運営の根幹を成す。それを怠る者には目指せんとぞ』

『……小猫になにをしたの？』

『熱風を放つただけだ。炎と再生能力ばかりを取り上げられるが、フェニックスとは元来火と風を司る悪魔。風を武器にする事も、センサーとして相手の動きを読む事もできるのさ』

リアス姉の刺すような視線に、ライザー氏は不敵な笑みと共に答えを返す。

『流石はフェニックス、随分と多芸な事だ。でも、これ以上はやらせないよ』

身体に風を纏わせながら、ライザー氏の前に出る祐斗兄。

氷結の魔剣を構えると、モニターに映る姿が一瞬ブレるほどのスピードでライザー氏に斬りかかった。

祐斗兄のスピードに目を見開いたライザー氏が咄嗟にガードを固めるが、超高速の斬撃によって身体中を切り刻まれる。

『予想以上のスピードだ。まさか、風を持ってしても読み切れんとは……!?!』

亀のように身を丸めて斬撃の嵐をやり過ぎそうとするライザー氏。防御に集中している為、思考が断ち切られるような致命傷や、肉体

が欠損する重傷は免れているが、魔剣の効果によって受けた傷口が凍結してしまい、再生に通常よりも時間がかかっている。

一方、攻めている祐斗兄も、ライザー氏が魔力まで全て防御に回しているために刃の通りが悪く、決定打が与えられないでいた。

攻め手と守り手。この場合、持久戦になれば有利なのは守り手の方だ。

一方的な攻撃が続くこと、数分。

剣速に陰りが見え始めた右肩への袈裟斬りに合わせて、ライザー氏は防御を捨てて大きく踏み込んだ。

振り下ろされた刃は、標的を鏝もとで捉えた為に肩口に食い込む程度で止まり、動きを止めた祐斗兄の首にライザー氏の手がかかる。

『ようやく捕まえたぞ』

血の代わりに霜を全身に纏わせたライザー氏は、抱えた祐斗兄の首を自分の身体に引き寄せながら、凄絶な笑みを浮かべる。

『ぐっ、なんて力だ!』

ムエタイで言う首相撲の体勢に捕らえられた祐斗兄は、なんとか脱出しようとするが、それよりも早く身体を振り回す事で体勢を崩され、がら空きの脇腹にライザー氏の膝が突き刺さる。

『がッ……!?!』

腹部を襲う衝撃に、身体をくの字に折り曲げて、肺に溜まった空気を吐き出す祐斗兄。だか、ライザー氏の攻めはこれで終わりではなかった。

先ほどのイツセー先輩と同じように、身体に打ち込まれた膝から爆発が起こり、押さええられたら首を支点にその身体が大きく浮き上がる。

爆炎が収まり、振り子のように元の位置に戻ってきた祐斗兄には抵抗する力は残っていなかった。

辛うじてリタイアはしていないものの、先ほどまで脱出しようとしていた首相撲に支えられなければ、立てないほどに消耗しているのだ。

『木場ああああつ!!』

死に体となった祐斗兄に止めの一撃を加えようとしていたライザー氏は、咆哮と共に突撃してくるイツセー先輩の姿に気付くと、即座に祐斗兄をイツセー先輩に投げつけた。

慌てて祐斗兄を受け止めようとして、絡み合いながら転倒するイツセー先輩。

その隙に2人を焼き払おうとしたライザー氏は、後方から放たれた雷撃と真紅の魔力弾に吹っ飛ばされる。

『イツセー！ 祐斗をこっちに連れてきて!!』

朱乃姉が雷撃の弾幕でライザー氏を押さえている間に、イツセー先輩から祐斗兄を受け取ったリアス姉は、傷の酷さに一瞬眉ひそめたものの、すぐさま治療を開始する。

『イツセー君、祐斗君のことはリアスに任せて、私達はライザーの足止めを!!』

『了解です、朱乃先輩!』

朱乃姉の指示に倍化を発動させて突っ込むイツセー先輩。

全身に刻まれた氷結の傷痕がようやく再生し始めたライザー氏だが、未だにその動きは本調子ではない様で、イツセー先輩の猛攻と圧倒的手数の雷撃に徐々に防戦に追い込まれていく。

見ていると、どうもライザー氏は朱乃姉の雷撃を強く警戒しているようで、イツセー先輩との格闘戦の中で何度かクリーンヒットを与える事があっても、フォローで飛んでくる朱乃姉の雷撃を回避する為に、追撃の爆炎を放てないでいるようだ。

『あらあら、フェニックスの血族ともあろう方が、随分と私の雷撃を恐れていますのね』

『レイヴェルを下した者の攻撃を無防備に食らうほど、脳天気ではないのでな!』

雷撃を捌きながらイツセー先輩を殴り飛ばしたライザー氏は、右手に生み出した火球を朱乃姉に放とうとするが、

『させるかアアアッ!!』

横合いから飛び出してきたイツセー先輩の拳を頬に喰らい、火球はあらぬ方向に飛んでいく。

『ぐっ……、しつこい男は嫌われるぞ、兵士君！』

『うるせえ!! リアス部長も朱乃先輩も俺が守る! テメエに手出しはさせねえ!』

啖呵を切りながらイツセー先輩は追撃の拳を振り上げるが、それよりも速くライザー氏の放った前蹴りを胸に受けて体勢を崩したところを、ハイキックを食らってその場に崩れ落ちる。

『イツセー君!?!』

朱乃姉が慌てて雷撃を放つがライザー氏の軽快な足運びによって回避され、バレーボール大の火球が放たれた。

必死に身体を起こそうとしているイツセー先輩へと迫る火球。

それは獲物に喰らいつく前に、横合いから走る青い剣閃によって姿を消した。

『大丈夫かい、イツセー君』

『木場!』

振り抜いた短剣サイズの氷結剣を下ろした祐斗兄は、少しフラつきながらもイツセー先輩に手を差し出した。

その手を取って立ち上がったイツセー先輩は、祐斗兄の腹部の傷を見て顔をしかめる。

傷を負った時のような黒こげでボロボロではないが、治癒魔法による再生した皮膚は完全ではないらしく、呼吸の度に腹部の所々で血を滲ませている。

『お前、大丈夫なのかよ?』

『あまり大丈夫とは言えないけど、そんな事を言っている場合じゃないからね。それより、倍化の準備をしてくれ。最大倍化に^{ヘヴィンブロー}重剛撃の威力を乗せれば、ライザーを倒せるかもしれない』

祐斗兄の提案に、イツセー先輩の顔に迷いが浮かぶ。

『確かにそうかもしれないけど、接近戦の腕は向こうの方が上だ。闇雲にぶっ放しても躲されちまう』

『それは大丈夫。当てるチャンスは僕が作って見せるから』

真っ直ぐに相手の顔を見ながら祐斗兄は言葉を紡いだ。その強い決意の籠った視線にイツセー先輩の顔から迷いが消えていく。

『わかった。頼むぜ、木場』

『ああ』

お互いの右拳を合わせ、前に出た二人は、それぞれに準備に入る。赤龍帝の籠手の倍化の声と共に、皆殺しのトランペットの構えを取るイツセー先輩。

そして、氷結の短剣を逆手に持ったまま右足を伸ばし、左足を折り曲げて身体を大きく沈める祐斗兄。

まるで地面に張り付くような祐斗兄の奇妙な構えは、そんな体勢にも関わらずしつかりと地面を踏みしめる足も相まって、獲物に襲いからんとする蜘蛛のようなイメージを抱かせる。

『行くよ、イツセー君！』

言葉と共に祐斗兄の身体は、画面から掻き消えた。

異様な構えから、たった一足で最高速に達した祐斗兄は、足止めの為に放たれた雷撃や紅い魔力の下を這うようにくぐり抜け、ライザー氏の足元へ到達する。

『斬!!』

裂帛の気合いと共に振るわれた短刀は、ライザー氏の両足首を捉え、魔剣の効果は斬られた場所から下を氷結させる事で、地面に縫い付ける。

『魔剣使いの騎士だどっ!? いつの間——ガッ!?』

『蹴り穿っ!!』

ライザー氏が下を向くのと同時に、跳ね上げられた右足はその顎を捉え、左手を地面に打ちつけた反動で飛び上がった身体は、後ろ蹴りの体勢のまま大きく首を撃ち上げる。

『今だ、イツセー君!!』

『応よー。行くぜ、ドライグ!!』

『Explosion!!』

倍化能力を解放すると同時に、床を踏み砕きながら飛び出すイツセー先輩。

紅いオーラを全身に纏いながら駆けるその姿は、通常よりも格段に速い。

『受けるか、このブロおおおおつ!!』

『Impact!!』

蹴りのダメージから復帰していない相手を射程圏に捉えたイツセー先輩は、勢いそのままに拳を放つ。

『ぐおあああつ!!?』

全ての力を四倍に高めた一撃は、食らいついた胸板を大きく陥没させ、縫い付けた両足を引き剥がす程の勢いでライザー氏を吹き飛ばす。

宙を舞うライザー氏は転落防止用の柵をブチ抜きながら、グラウンドの方角へとその姿を消した。

イツセー先輩は、ライザー氏を吹き飛ばしただけでは勢いが治まらず、クルクルと二回転ほど回転したのち、その場に座り込んだ。

『……やったね、イツセー君』

掛けられた声にイツセー先輩が目をむけると、同じように床にへたり込んだ祐斗兄が、肩で息をしながらも笑顔を浮かべている。

『ああ、なんとか上手くいったよ。これも木場や部長達がアシストしてくれたからだな。俺一人じゃ到底勝てなかった』

『それでいいのよ、イツセー。私達はチームなんだから、一人で出来ない事はみんなの力を合わせて成し遂げればいいの』

『部長、お疲れ様です』

『お疲れ様。祐斗、あなたも怪我を推してよくやってくれたわ』

『ありがとうございます』

お互いを労いながらイツセー先輩をリアス姉、祐斗兄を朱乃姉が治療を始める。

全員、服は煤けてところどころに火傷を負っているが、前衛の男二人に比べて朱乃姉達の負傷は軽い。

『しかし、木場の最後の技は凄かったよな。俺なんか全然見えなかったぜ』

『私達も驚いたわ。魔力弾の下を駆け抜けて行くんですもの。あの技はお兄様の騎士に教えてもらったものなのかしら?』

『いいえ。あれは無限の闘争で覚えた技です』

『この前の合宿でか?』

『いや、冥界にいた頃に利用する機会があつて、その時に覚えたんだ。最初のカンフーマンには勝てただけど、次に現れたのが初回特典で覚えた技の本来の使い手でね。そりゃあもう、こっぴどくやられたものさ。その時に運良くもう一つ技を手に入れる事ができたけれど、自分の未熟さを思い知った僕はそれ以来利用する事はなかったんだ』

『その思い出があるから、今まで使わなかったの?』

『いえ、単純に師匠に教えてもらったスタイルに合わなかっただけです。あの技、七夜の闘法は暗殺術に近いので』

暗殺術という言葉に若干引き気味になるリアス姉達と、それに苦笑いを浮かべる祐斗兄。

ボロボロかながらも和気あいあいとした雰囲気のおか研メンバーを見てみると、アーシア先輩がふと思いついたように声を上げる。

「あの、試合は終わったのでしょうか? もし終わったのなら、私も部長達の治療に行きたいのですが」

その言葉に俺と美朱は思わず顔を見合わせた。

今まで参加者が脱落すると、必ずアナウンスが流れた。

なのに、ライザー氏の脱落を知らせるものは流れていない。

ということとは――

それに気付くのと同時に、耳をつんざく爆音と共に画面が紅蓮に染まった。

先ほどまでおか研メンバーがいた場所には巨大な火柱が上がり、咄嗟に庇ったのだろう、リアス姉と彼女に覆い被さる形で倒れているイツセー先輩以外、人影は見えない。

『リアス様の女王1名、騎士1名リタイヤ』

『朱乃……祐斗……そんな……』

二人が呆然と天を衝く炎を見上げていると、その中から人影が歩み出てくる。

それは先ほど吹き飛ばされたライザー氏だ。

『試合が終わっていないのに仲間と歓談とは、随分と危機感が無いな、リアス嬢』

『ライザー……!!』

『先ほどの連携の一撃は効いたよ、一瞬意識が飛ぶほどにな。だが、そのまま放置するのはいただけない。あそこは追撃して勝負を決める場面だろう』

言葉の通り、ライザー氏の姿は酷いものだった。

トレードマークの深紅のスーツはボロボロで胸元には拳の形に凹み、口から襟元に掛けて自ら吐き出したであろう血で汚れている。

だが、纏った覇気に陰りは見えないし、歩みを進めるその足元はしつかりとしたものだ。

『うるせえ！ 不意打ちなんて卑怯な真似しやがって!!』

『何を言っている。俺は投了した覚えはないし、ジャツジもゲームが終了したと判断していない。ゲームが続いているのなら、敵を攻撃するのは当然だ。不意打ちになったのは君達が油断していたからだろう』

イツセー先輩の糾弾に大いに呆れながら答えを返すライザー氏。

ゲームが終わったと思っていた俺が言えた義理じゃないが、これはライザー氏が正しい。

『まさかゲームが終わったとでも勘違いしていたのか？ だとすれば、公式戦でそんな無様を晒す前に考えを改める事だな。騎士と女王という高い授業料を払ったんだ、得るモノが無ければ彼らも報われないだろう』

『……ッ！ ざけんなああああ!!』

こちらの胸も抉ってくれるライザー氏の弁に、頭に血を登らせたイツセー先輩が飛び掛かる。

しかし、イツセー先輩も沸点が低い。防御に徹しろとあれほど口を酸っぱくして教えたのに、まるで意味が無いじゃないか。

モニターがライザー氏とイツセー先輩の殴り合いを映していると、おもむろに美朱が席を立った。

「朱乃姉のところに行くのか。傷が酷かったら呼べよ」

普段とは違う憂いに満ちた表情に、心情を察して声をかけると、美朱は小さく頷く。

「美朱ちゃん、私も行きます。治療のお手伝いなら少しは役に立てると思いますから」

「負傷者を収容しているのは保健室だ。私の名前を言えば、通ることが出来るだろう」

「ありがと、サーゼ兄。アーシア姉、ちよつとゴメンね」

そう言うと、美朱はアーシア先輩を脇に抱えて、あつと言う間に姿を消した。

美朱はお袋を失ってから、身内が傷つくのを極端に嫌うからな。競技だといつても納得はできないのだろう。

まあ、これが切っ掛けで朱乃姉にレーティングゲームに出ないように言ってくれると、個人的には非常に助かる。

俺が言ったら、「お前が言うな」って返されるのがオチだし。

「ごめんな、サーゼクス兄。こここのスタッフの事を信用してないワケじゃないんだけどさ」

「気にしなくていい。例え安全が保証されていると言われても、身内が負傷すれば冷静でいるのは難しいものだ。それより、行かなくていいのか?」

「なにかあったら美朱から連絡が来るさ。それに一人くらい最後まで見届た奴がいないと、朱乃姉達も怒るだろ」

「そうか。なら、男同士で最後まで応援するのでしょうか」

「イツセー先輩は華がないって嘆きそうだけどな」

俺が我慢しているのを察してくれているのだろう、ワザと砕けた態度で接してくれる魔王様に軽口を返してモニターに目を向ける。

新校舎の屋上をリングとして、拳を交えるライザー氏とイツセー先輩。だが、両者ともにその動きには当初の鋭さはない。

イツセー先輩は単純にスタミナ切れ、ライザー氏は先ほどのダメージが抜けきっていないのだろう。

しかし、傷口が瞬時に再生するフェニックスの身体にダメージが残ると言うのは妙だ。

よく観察すると、先ほどの負傷に加えてイツセー先輩の攻撃によって新たにできた傷も再生していない。

「……もしかして、ライザー氏の再生能力は機能していないのか？」
「いや、完全には死んでいない。だが、極端にその力が落ちているのは確かだろう」

「しかし、なんで急に……」

「分からない。だが、可能性があるとすれば朱乃君の雷撃だろうな。ライザー君も警戒していたが、雷撃全てを躲す事は出来なかった。もしかしたら、その中にレイヴェル嬢を戦闘不能にしたような攻撃があったのかもしれない」

「それが、部分的とはいえ効いてきたという事か」

「恐らくはね」

『イツセー！ 何故か解らないけれど、ライザーの再生能力が働いていないわ！ 今のうちに畳みかけるわよ！』

『はい、部長!!』

リアス姉が後衛で滅びの魔力弾を放ち、それを縫う様に接近戦を挑むイツセー先輩。即席ながらも中々のコンビネーションを見せて二人に、ライザー氏の顔に焦りの表情が見える。

『舐めるな!!』

しかし、劣勢にあっても気炎を吐いたライザー氏は、殴りかかってくるイツセー先輩の足を払って倒すと、飛来する深紅の魔力弾を炎を宿した掌で払い除けた。

『滅びの力を素手で!?!』

驚愕で動きを止めるリアス姉。

『滅びの力は接触したモノを消滅させる。ならば、この炎のように肉体と力の間にクッションを挟めば対応は可能!』

その隙を突いて肉薄したライザー氏は、高角度に振り上げた膝をリアス姉の側頭部に叩きこむ。

『あぐあっ!?!』

砕けたコンクリートに倒れるリアス姉にライザー氏が追撃の炎を放とうとするが、背後からのイツセー先輩のタックルによって阻止される。

だが、ライザー氏もただでは起きない。

小さい火球でリアス姉を弾き飛ばすと、腰にしがみ付くイツセー先輩のズボンのベルトを手をかけて強引に正面に移動させ、そのまま首相撲の体勢に捕らえる。

『君ばかりに時間を割いてはいられんのでな。このまま決めさせてもらうぞー!』

言葉と共にライザー氏はイツセー先輩の脇腹に膝を叩きこみ始める。

『うがつ!? があつ!? こ…の…やろお!』

イツセー先輩も逃れようともがくが、膝に加えて首を支点に振り回される為に脱出の機会を得る事ができない。

しかし、先程から見ているとライザー氏は打撃がヒットしても爆炎による追い打ちを放っていない。

さっきのリアス姉への攻撃でそれを放っていたら、試合は終わっていたはずなのにどういふことなのか。

『イツセー!!』

体を起こして魔力の籠った手を向けているリアス姉を見たライザー氏は、咄嗟に迎撃しようと右手を相手の方に翳す。

『チイツ!? 炎まで……!』

だが、すぐに苦虫を噛み潰した様な表情で腕を戻し、イツセー先輩が盾になるように体勢を入れ替えた。

「サーゼクス兄、今の見たか?」

「ああ、恐らくライザー君は炎も使えなくなっただろう。打撃と炎の連携を使っていなかったのも、炎の制御が効かなくなってきたかと考えれば納得がいく」

イツセー先輩を巻き込む事を懸念したりアス姉が魔力弾を破棄するのを確認して、再開される膝地獄。

再生能力と炎、フェニックスを象徴すると言つてもいい能力を封じられたライザー氏だが、それにも拘らず攻めの姿勢は苛烈さを増している。

防御を固める腕を肘や組手の差し替えなどで、巧みにこじ開けては次々と腹部に膝を突き刺す。

その度に、イツセー先輩の身体は左右に振られ、時より覗くその顔には腹部への打撃しか受けていないにも関わらず、鼻血が垂れ始めている。

あれは内臓に達したダメージがその機能を阻害し始めた証拠だ。

普通のスポーツ格闘技ならばドクターストップがかかる症状にも関わらず、イツセー先輩の目はまだ死んでいない。

現状では防御も意味を為さないと理解したのか、ライザー氏に身体を密着させる様にしてそのわき腹に拳を叩き込んでいる。

しかし、首を抑えつけられて足の踏ん張りも効かない状態では本来の威力には程遠く、数発撃ち込む度に間合いを離されては膝を貰っていた。

このまま行けば数分と経たずにイツセー先輩は力尽きる。そして、現状を覆す術は彼には無い。

そう思っていた俺は、次に画面に映しだされた光景に目を見開く事になった。

効果のないはずの手打ちのパンチを食らったライザー氏の身体が、大きくくの字に折れたのだ。

『ぐおおおおおっ?! 貴様……!』

『……俺は部長に約束したんだ、最強の兵士ポーンになるって。だから、こんなところで負けるわけにはいくかよお!!』

『Explosion!!』

口に溜まっていた血を吐き捨て、ライザー氏を引き剥がそうと連打を放つイツセー先輩。

先の一撃程ではないが、威力の増した拳は少しずつライザー氏を後退させていく。

「なるほど。彼の攻撃力が増したのは赤龍帝の籠手ブーステッド・ギアの倍化を使ったからか」

「という事はさっきの一撃は重剛撃ハイ・ブローか。倍化の反動に身体が参らないといいけど」

俺が心配している間にもイツセー先輩の連撃は回転を増し、次々とライザー氏の腹を抉っている。

しかし、ライザー氏もただ黙ってやられているわけではない。ある程度食らったものの、連撃のスピードが緩んだのを狙ってカウンターの膝をイツセー先輩の腹に突き刺したのだ。

『ぐええ……っ!?!』

『……なるほど、それが貴様の背負う物か。だが、負けられない理由があるのは貴様だけではない!』

イツセー先輩の吐き出した血混じりの反吐が肩を汚すのを、気にも留めずにさらに膝を放つライザー氏。

『このゲームは、ユーベルーナも腹の子と共に見ている。これから生まれてくる子に、父親が敗北する無様な姿など見せるわけにはいかん! 例え、それがご機嫌取りの練習試合だったとしてもだ!!』

『うる……せえ!!』

抵抗が緩くなったのを好機と捉えたライザー氏は止めとばかりに大きく足を振りかぶるが、先ほどのお株を奪うかのようなカウンターの一撃がその腹に突き刺さる。

『ぐうおお……っ!?!』

『お前の事情なんか知るか……! 俺は負けねえ、最強の兵士に成る為に……負けるわけにはいかねえんだ!!』

腹を掻き回される衝撃で苦鳴を漏らすライザー氏に追撃を掛けようとするイツセー先輩。

『それは……こちらのセリフだ、赤龍帝!!』

だが、それもすぐさま切り返しの膝に阻まれる。

そこから再び膝と拳の応酬が始まる。

お互いの攻撃が突き刺さる度に双方が苦痛に顔を歪ませ、血と反吐が飛び散る凄惨な我慢比べ。

そこに格好良さなど存在しない。ライザー氏の貴族の優雅さなどとつくに剥がれ落ちているし、イツセー先輩は普段の明るく助平な面など、かなぐり捨てている。

あるのは、瞳をギラつかせながら自分を貫き通そうとする男の意地だけだ。

ピンと張り詰めた静寂に響く、肉を叩く鈍い音と男達の呻き声。

実際の時間では数分。

だが当人やそれを見守る者には長く感じさせる時間の中、互角だった天秤がゆっくりと傾き始める。

イツセー先輩を抑えていたライザー氏の腕が緩み、ゆっくりと押し始められたのだ。

千載一遇のチャンスを掴もうと、歯を食いしばりながらラツシユを掛けるイツセー先輩。

首相撲が解かれれば、滅びの魔力弾の的になると理解しているライザー氏は必死に食らいつくが、拳を受ける度に両手は力を失っていく。

『は、な、れ、ろおおおおっ!!』

胃液で灼かれた喉からの嘎れた叫びと共に放たれた神器の一撃によつて、遂にライザー氏の拘束は引きちぎられた。

『うおおあああああっ!!』

腹を押さえながらたたらを踏んで後退するライザー氏へ、咆哮と共に紅い魔力を宿した籠手が迫る。

イツセー先輩やリアス姉、観戦していた者達のほとんどが確信した大金星への一撃、それは相手を捉える事無く空を切った。

寸前で体勢を立て直したライザー氏が、迫る一撃を躲すと同時に身体を回転させ、遠心力を乗せた肘で相手のコメカミを抉ったのだ。

勝利の笑みを貼りつけたままうつ伏せに倒れるイツセー先輩と、息も絶え絶えながらも自分の足で立っているライザー氏。

計算された罫か、それとも咄嗟の閃きか。

起死回生の一撃がどちらだとしても、二人の明暗を分けたのは経験の差だろう。

『イツセー……?』

光に包まれて退場するイツセー先輩を呆然と見つめるリアス姉。

余程ショックだったのか、ライザー氏がすぐ傍まで近寄っているのに気付く様子がない。

『リアス嬢、これが最後の忠告だ。王たる者は如何なる事態にも冷徹であらねばならない。王が思考を放棄する事は、眷属にとって死を意

味する。君にレーティングゲームの舞台に立つ意志があるのなら、何事にも動じない強固な精神を身につけることだ』

ようやくライザー氏に気付いたリアス姉は、慌てて距離を取ろうとするが、先んじて放たれた蹴りを頭部に受けて糸が切れた人形のように倒れ伏した。

『……チエツクメイト』

消えゆくリアス姉から目を離したライザー氏は、身体に溜まった疲労を追い出すかのように盛大に息を吐き出し、歪んでしまった煙草をくわえながら呟く。

『リアス様のリタイアを確認。このゲームはライザー・フェニックス様の勝利です』

こうして、リアス姉達が挑んだ初のレーティングゲームは、敗北という形で幕を閉じたのだった。



試合終了後、来賓への挨拶を控えていたサーゼクス兄と別れた俺は、朱乃姉の見舞いに足を運んだ。

オカ研メンバーの傷は、最後まで戦ったイツセー先輩を除いて大した事はなく、二日ほど入院すれば大丈夫らしい。

これも最高の医療スタッフを用意したサーゼクス兄と、参加人数分の『フェニックスの涙』を寄贈したフェニックス卿のおかげだろう。敗戦に関してだが、本気で大物喰いを狙っていたリアス姉はともかく、他のメンバーはそれほど気にしていないらしい。

祐斗兄曰く「負けたのは悔しいが、持てる力を全て出し切ったので後悔は無い」との事だ。

まあ、ベソかいてブーたれていたリアス姉も含めて、公式戦デビューとなるであろう次の試合への意気込みは十分といったところか。

あと、ライザー氏の能力が時間差で使えなくなった事が気になったので、朱乃姉に尋ねてみると本人も初耳だったようで驚いていた。ただ、レイヴェル嬢に最も効果的だった電流と圧の組み合わせで電

撃を放っていた為、体格や性別、年齢が影響して効果が出るのが遅れたのではないかという推測が返ってきた。

しかし、雷撃を構成する電流や電圧まで操作できるとは、さすがは朱乃姉。親父の能力を最も受け継いでいるのは伊達じゃないな。

俺？ 飛ばない時点でお察しだよ。

ほどほどのところで歓談を切り上げた俺は、イツセー先輩の様子を見に行くことにした。

うん、美朱達はどうしたって？ 大部屋の空いたベッドで二人仲良く夢の中だったから、朱乃姉に任せて来たよ。

魔力で拡張された保健室の中を進むと、廊下に並ぶ重傷患者用の個室の中からイツセー先輩の名札が掛かった病室を見つける事ができた。

意識が戻っていないと聞いていたので、入室時に音を立てない様に注意を払っていた俺は、ドア越しに微かに漏れてくる声にノブに掛けた手を止めた。

聞こえてくるのは、堪え切れない嗚咽に途切れ途切れになったイツセー先輩の声だ。

後悔や不甲斐ない自分自身への怒り、そして敗北した事へのリアス姉に向けた謝罪。

時より混じるくぐもった軽い打撃音は、八つ当たりで枕でも殴っているのだろう。

俺はノブから離れた手で軽く頭を掻きながら、踵を返した。

こんなものを聞いというてノコノコと中に入る程、無粋ではないつもりだ。

しかし、悔し泣きとはイツセー先輩も熱いところがあるじゃないか。

なんとというか、もつと軽いノリのアンちゃん的なイメージだったんだがなあ。

まあ、負けてヘラヘラ笑ってる奴よりは好感が持てるけど。

さて、差し当たってすべきことは、リアス姉達を近づかせない事だろう。

説得のための言葉を何とか捻りだしながら、俺は来た道をゆっくりと戻り始めた。

閑話『とある一日』

ライザー氏とのレーティングゲームから二日が経った。

婚約破棄を言い出した側であるフェニックス家は、グレモリー家と結婚した際の特需や繋がりを期待した領内の有力者との調整で大騒ぎらしい。

利権やらなにやりに群がるのは、人間も悪魔も変わらないようだ。

まあ、あのライザー氏なら乗り越えていけるだろう。

さて、あのゲームで空中戦の重要性を再認識した俺は、鍛錬に新たな項目を加える事にした。

目的はズバリ、『舞空術』の習得。

翼を受け継がなかった俺が空中戦を行う方法はこれしかない。

幸いにも氣の制御には自信があるので、1カ月で空中戦を行えるようになるのが目標だ。

原作ではビーデルが一週間ほどで習得したから、この位が妥当なところだろう。

問題は誰を指導者に選ぶかだ。

無限の闘争の鍛錬モードは、初回時に割り振られたポイント内しか師事する闘士を選べないという制限がある。

現在、俺に残されたポイントは100。

コンソールを操作しドラゴンボールの項目を確認すると、悟空を初めとしたサイヤ人は700ポイント。

さすがは戦闘種族だ。将軍様と同じレベルの消費量なんて、現状ではとても手が出ない。

優れた戦士が優れた指導者とは限らない、と自分を慰めながら項目を下げていくが、他の者たちを招き入れるにもポイントが足りない。

本命だったピッコロが600、次点のクリリンが300、なんと亀仙人でも200だった。

おそらく、戦闘力と共に指導者としての資質も加味されているのだろう。

で、100ポイントで師事できるのはヤムチャとチャオズ、あとは

Mr. サタンの3人のみ。

……この選択肢の中ならヤムチャしかいないか。

ヤムチャにカーソルを合わせて決定を押した俺は、両手で一発頬を張って、頭にこびり付いたネガティブな思考を消し去った。

今から物を教えてもらうのに、その相手に不満なんか持っていたら失礼にもほどがある。

「よく俺を選んでくれたな。損はさせないから期待してくれ」

光のゲートから出てきたのは、二枚目と言える顔に人好きのする笑みを浮かべた30代の男。

お馴染みの橙色の亀仙流の道着を着ているものの、顔の傷に少し伸びた短髪という容貌から本編終盤の半ば引退した頃だと思われる。

「さて、俺は何を教えたらいんだ？」

握手と共に挨拶を交わすと、すぐにヤムチャさんが切り出してきたので、事情を説明して『舞空術』の指導をお願いする。

「なるほど。確かに飛んでる奴相手に地上にいたんじゃ手も足も出ないよな。分かった！　しっかり仕込んでやるから任せてくれ」

得意げに自らの胸を叩くヤムチャさんに続いて鍛錬場所へ続くゲートを潜ると、一面に続く青空と緑の絨毯を思わせる草原が目に入った。

ある程度草原を進むと、ヤムチャさんは俺と向かいあうように立ち止まった。

「さてと、今から始めるわけだが、シンは『気』を使えるのか？」

「ええ、一応心得はあります」

「そいつは手間が省けるな。じゃあ一度開放してみようか」

ヤムチャさんの指示に従って、俺は深く息を吸った。

息吹として吐き出される吐息と共に丹田で練り上げられた気は、経絡を通って身体を駆け巡り身体能力と感覚を研ぎ澄ましていく。

いつもの通り綺麗に内功は練れているのだが、こちらを見るヤムチャさんは首を捻っている。

「なあ、シン。本当に『気』を開放しているのか？　俺にはちっとも

『気』が高まっているようには見えないんだが」

戸惑いながら吐き出されたヤムチャさんの言葉に、今度はこつちが首を傾げてしまう。

これは一体どういうことか。俺は高木先生や濤羅師兄の教えの通りに氣を練っているのだが。

……さつきヤムチャさんは氣が感じられないと言っていた。

もしかして、氣を開放するというのは内功を練ることじゃなくて、経絡を走る氣の出力を高めて氣勢を上げることなのだろうか。

……よし、物は試しだ。やってみるか！

「はあっ!!」

氣合と共に氣勢を放つと、放出された氣の圧力が周囲の野草を土ごと吹き飛ばし、宙を舞うそれを漏れ出た紫電が打ち砕く。

……どうも潜在力を使うようになってから、電撃が漏れやすくなっているような氣がするな。

「おお、それだそれ。うんうん、なかなかの『氣』を持つてるじゃないか。サイヤ人と闘ってた時のクリリンくらいはあるぜ」

ほう、今の俺はサイヤ人戦のクリリン並みの力があるのか。思った以上の高評価、なんか嬉しいぞ。

「それだけ『氣』を操れば十分だ。それじゃあ、舞空術の説明に入ろう」

ヤムチャさんから一通り舞空術の説明を聞いた後、俺は草原の中央で目を瞑って神経を研ぎ澄ましていた。

ヤムチャさん曰く、舞空術は『氣』俺達で言うところの氣勢をコントロールすることにより、重力のくびきを断ち切る事から始まるのだという。

これさえ出来れば、高速飛行は氣勢を推力として利用するだけなので、体力は消費するが加速自体は簡単らしい。

ではどうやって重力を振り切るのかというと、『氣』を操作しつつそのようにイメージすればいいとの事だ。

……ヤムチャさんはさらりと言っているが、これってけっこう難しいぞ。

おそらくこの際の『氣』のコントロールって、俺がいつもやってる

ような内功としての体内への干渉ではなく、氣勢による外部干渉だ。高速飛行の際は氣勢を推力にするってところも、ここから来てるんだろう。

はたして、気弾の才能が皆無の俺にできるだろうか。

……まあグダグダ考えても仕方がない。こういう修業はチャレンジあるのみ、失敗して当たり前だから当たって砕けるだ。

身体から噴き出る氣勢をゆつくりと絞りながら、足元に集めるようにしていく。

頭に浮かべるのはホバー飛行機の離陸、高出力の空気を地面に放出しながら浮き上がるそれだ。

深く息を吐きながらイメージを鮮明にしていくと、身体の重みが薄れるような感覚とともに足元に感じていた地面の感覚が消える。

ゆつくりと目を開いて視線を下に落とすと、地面から少しだけ浮いた自分の足が見える。

「おおっ!? 浮いてる! マジかよー」

体の芯から湧き上がる喜悦感に思わずガッツポーズを取ると、バランスを崩した拍子に身体は地面についてしまった。

む、この程度で落ちてしまうとは……それになんか思った以上に疲れてるぞ。

「まさか、一回教えたらずぐに浮かび上がるなんてな。『気』の制御の腕はピッコロかクリリン並みか」

こちらを見ながら嬉しき半分呆れ半分といった表情を浮かべるヤムチャさん。

「何とか浮くのはできたみたいですけど、これでいいんですかね?」

「最初でそこまで出来るなら十分すぎるさ。あとは回数を熟していけば、自由に飛べるようになる」

ヤムチャさんのお墨付きをもらって、ホッと息を付く。

これで『オカ研飛べない同盟』から脱却の足掛かりはできたかね。

正直しやあない事なんだが、近接戦闘専門の身としては思うところがあったのだ。

そういえば、オカ研で思い出したがドラゴンボールには

ブーステッド・ギア
赤龍帝の籠手と同じ効果の技があったな。

興味もあるし聞いてみるか。

「そういえば、界王拳つて技ありましたよね。あれつてヤムチャさんも使えるんですか？」

俺の言葉を聞いたヤムチャさんは、バツが悪そうな顔で視線を逸らした。

うわ、なんかスツゲエ気まずい。聞かなきゃよかったかな。

「ああ、すまん。界王様から理論は説明してもらったんだが、いかにせん『気』のコントロールが難しくくてな。悟空以外は誰も使えなかつたんだ」

俺の顔に後悔が滲んだのに気付いたのか、ヤムチャさんは苦笑いをしながら答えてくれた。

その後、興味があるのならと理論を教えてもらった俺は、ダメ元でこちらもやってみることにした。

さて、界王拳とは『気』をコントロールする事により、スピード・防御・破壊力を増幅する技だ。

これだけならば、俺がいつも使っている中国拳法の内功、もしくは神極拳の潜在力に近い。

だが、両者の違いは増幅の幅にある。

内功や潜在力は、肉体の潜在能力を引き出す事を目的としている。その為、人間の通常のリミッターが世間一般で言われている様に30%であるならば、潜在能力の限界は通常時の3倍強という事になる。

しかし、界王拳は『気』をコントロールを誤らずに肉体が持てば、10倍以上の強化が可能だ。

ヤムチャさんから聞いた界王拳の理論によれば、内功のように丹田で練り上げた気を体内に巡らせるのではなく、ヤムチャさん達が『気』と呼ぶもの、即ち氣勢という普段なら体外に放出される純粋なエネルギーとしての気を経絡を通じて体内に取り込み、瞬間的に増幅させることによつて身体能力や耐久力を爆発的に強化するらしい。

正直、予想よりも遥かに危険な技だ。

内功という体内で生成される生命力ではなく、氣勢という純粋なエネルギーを体内に取り込む為、制御を誤ったり限界以上に強化すれば強化のための力が、肉体を内側から破壊してしまう。

とはいえ、やらずに諦めるなんて事は出来ない。この技を習得できれば、切り札として必ず役に立つはずだ。

覚悟を決めた俺は、深く息を吐きながら体外に放出している氣勢をゆっくりと取り込んでいく。

氣勢は格段に扱い辛いが、伊達に長年修行してきたワケじゃない。目を閉じ、意識を体内に向けて荒れ狂おうとする力を制御し、内功のように体内へ循環させる。

少しでも気を抜けば全てが崩れ去ってしまうような精密な操作を続けることしばし、気づけば身体の芯から噴き出すような強大な力の塊が宿っていることを感じた。

目を開くと、身体を包む氣勢が原作のように深紅に染まっているのが見える。

「嘘だろ……!?! あいつ、原理を聞いただけで界王拳を成功させやがった!?!」

驚愕に目を見開くヤムチャさんを尻目に、俺はゆっくりと構えを取った。

潜在力を制御する時のように、各流派の型をなぞりながら体の調子を確かめていく。

感覚的に何となくわかるが、今の倍率は1・1倍と普段とほぼ変わらない状態のようだ。

どうやら、身体の芯の部分に感じる力の塊に意識を向ける事で、倍率を上げることができらしい。

ただ、倍率を上げればその分体内の氣勢の制御の難易度が跳ね上がるので、これを調整しながら戦闘を行うとなれば慣れが必要になるだろう。

試しに1・2倍に引き上げて五分ほど動き回ってみたが、なんとか体力の減りが半端ない。

さて、こうやって少しは界王拳に慣れてくると別の疑問が首をもた

げてくる。この状態で潜心力を開放すればどうなるのか、だ。

無論、界王拳はおろか神極拳も極めていない状態で、そんな事をするのは危険なのだが、リスクは重々承知の上。

これが新たな可能性になるのなら、やってみる価値はある。

一度、動きを止めて呼吸を整え、今度は界王拳を維持したまま潜心力を引き出していく。

……経絡を巡る氣勢と内功の同時制御は予測以上に難しいし、身体への負担も半端ない。

一步も動いてないはずなのに、まるで力の限り全力疾走したかのようになり、全身から汗が吹き出し、息が切れる。

これ以上は無理だと判断した俺は、潜心力の解放を2割で留めて一歩踏み出そうとした。

その瞬間、左足首の辺りで何かが千切れる感覚がした。

足に灼けた鉄棒が突き刺さるような激痛が脳天を突き抜け、身体が前のめりに倒れていく。

息を詰まらせながらも身体を支えようと咄嗟に右手を伸ばしたが、地面に接触した瞬間、ありえない破碎音と共に今度は右手に激痛が走った。

頬に草の感触を感じながら顔をむけると、すり鉢状に陥没した地面の中心で、手首と肘の辺りが歪に曲がった自身の右腕が力なく横たわっているのが見える。

足の方は以前に何度か経験がある、これはアキレス腱が断裂した時の感覚だ。

「おい！ 大丈夫か!？」

駆け寄ってくるヤムチャさんの声を耳に入れながら、俺は思わず歯噛みする。

氣勢と内功の制御にミスは無かった。

こうなったのはおそらく、界王拳と潜心力によって増幅された力に肉体が耐えられなかったからだろう。

くそっ！ これじゃあ技術を学んでも宝の持ち腐れじゃないか。

苛立ちを紛らわせようと寝返りを打とうとして、寸でのところで思

いとどまる。

ヤバかった。発動したままの界王拳を収めないと、下手に動いたらどこがイカれるかわかったもんじゃやない。

激しい痛みを無視して意識を集中させ、界王拳を解除したところでようやく一息つく事ができた。

仰向けに寝がえりを打ちながらトワイライト・ヒーリング聖母の微笑で右手と左足の治療を始めると、ヤムチャさんが心配そうな顔で覗き込んできた。

心配ないと答えたが当然のごとく納得はしてもらえなかったので、事情を説明したところしこたま怒られた。

界王拳の危険性を解っていないながら無茶をした私が馬鹿でした、はい。

一分ほどで完治とはいかなくても通常動くには支障が無い程度に手足が回復したので、起き上がると奇異なモノを見る目をこちらに向けているヤムチャさんが目に入る。

ああ、腕やら足が完全にぶっ壊れてる奴が簡単に立ち上がったら、そんな目を向けるのも当然か。

取り敢えず、ヤムチャさんには神器の事は触れずに治癒能力があるだけ説明し、治ったばかりで凝り固まったアキレス腱を解していると、腕時計からアラームの音が鳴った。

液晶が示す時間は6：30、早朝の仕事をやる時間だ。

少々消化不良な感はあるものの、ヤムチャさんに礼を言って訓練スペースを出た俺は、手早く身支度を整えて制御コンソールでバイタルデータを更新する。

習得技能欄に界王拳と舞空術がある事を確認してコンソールをOFFにしようとしたとき、訓練スペースが更新している事に気が付いた。

項目を開いてみると、使用できる訓練スペースに重力制御ルームが追加されている。

詳細に目を通すと、これはドラゴンボールに登場する中でも荒行として知られる重力制御ルームを再現したもののようだ。

どうやら悟空が使用した宇宙船ではなく、ベジータが使っていた力

プセルコーポレーションに設置されたタイプのもので、最大300倍の重力負荷が掛けられるものらしい。

しかしまあ、相変わらず痒い所に手が届くシステムである。根本から鍛え直さなければと思っていたところだ。

今すぐ試せないのは残念だが、こればかりは仕方がない。

小さくため息をつきながら、俺は後ろ髪を引かれる思いで無限の闘争m u g e nを後にした。



季節は晩春。顔を出すのが早くなった日の光の中、白衣に着替えて本殿の埃を落とした俺は、起きて来た美朱と共に神社の境内に箒をかけていた。

入り口である鳥居の下から本殿回り、販売所や母屋と汚れているところを掃除し、後は目に見えるごみを取っていく。

本来なら境内全面をしつかり掃除しなければならないのだが、後のスケジュールを考えると少々時間が無い。

朝飯と弁当を作ってくれている朱乃姉に手伝わせる訳にもいかないし、しつかり掃除をするのは休日までお預けだ。

「慎兄、こっちは終わったよ」

俺と同じく白衣を纏った美朱が箒を片手に歩み寄ってくる。

「おっし。そんじゃ『朝拝』をするから本殿に行くぞ」

「了解。でも、スクナ様とマガミ様、どこに行つたのかな？」

「さてな。普段から日本中をチョコチョコ出歩いてる方だから、また出雲にでもいつてるじゃねえか」

「うーん、どこかで行き倒れてなければいいけど」

「大丈夫だろ。昔の駒王町こまおうまちとは違って、日本にいる限りどこでも地脈から力を得られるだし」

「そうだよな。なら、お土産楽しみにしとこつと」

さっきの心配はどこへやら、上機嫌で本殿に歩いていく美朱に苦笑いを浮かべながら、俺も後に続く。

さて、俺と美朱にはれつきとした本業が存在する。

それがこの神社の神職、要するに神主だ。

神主と言うのは俗称で、俺はこの神社の責任者である宮司、美朱は俺を補佐する禰宜という役職にある。

何故、俺達のようなケツの青いガキがそんな立場に就いているのかというと、話は俺達が日本に戻ってきた時に遡る。

日本に移住する話が出た際、朱乃姉は俺達の住居を神社にしたいという希望をグレモリー家に出していた。

ジオテイクス小父さんやリアス姉は首を傾げていたが、俺達はこれがお袋との思い出から出たものだと言いきり想像がついたので、特に反対しなかった。

そうして迎えた移住初日。

現地案内人が俺達に紹介したのは、人足が途絶えて久しいなんとも寂れた社だった。

想像と現実とのギャップに朱乃姉は呆然としていたが、放浪時代を思えば家があるだけマシだろう。

朱乃姉を置いて足を踏み入れた俺と美朱は、本堂で驚くほど衰弱した小人サイズの老人と白い犬を見つけた。

姫島の血のお陰か理屈抜きで彼等が神霊だと確信した俺達は、意識があつた老人――少彦名神様すくなびこなのみの指示に従って彼等を駒王町の外に連れ出した。

すると、少彦名様と白犬の身体が白い靄のようなモノに包まれて枯れ木の様な身体があつたという間に精気を取り戻したのだ。

半分ミイラだったものが、狩衣を着た老紳士と光る白い毛並みに紅色の隈取りが入った狼に変わったことに、呆気に取られる俺達。

少彦名様は好々爺然とした笑顔を浮かべて、助けてもらった礼と、何故自分達がああなっていたのかを語り初めた。

何でもあの神社は白い狼おわくちのまがみ、大口真神様を祀っていた場所だったらしい。

だが、二次大戦後のゴタゴタに乗じて駒王町を占拠した悪魔の結界によって土地との繋がりが絶たれ、地脈からの精と信仰心を得られな

くなつた事により、あの社と共に朽ちかけていたそうだ。

土着の神々の様子を確かめる為に日本全国を回っていた少彦名様も、大口真神と顔を合わせていたところ巻き込まれてしまったんだとか。

その後、少彦名様に何故あの社にいたのかと訊ねられたのでこちらの事情を説明すると、「悪魔に縁のある者が社に住むとはのう」と微妙な表情を浮かべた後、神社は神職に就いていないと住めないと言ってきた。

今思えば当たり前の事なのだが、当時の俺達には寝耳に水だった。さらに神職は国家資格である事、取得には特定の大学にある神道科を卒業しなければならぬ事。

そして特例として神職の家系ならば通信教育と試験で取得可能である事を説明された。

当時の俺達に全く該当しない条件の数々に「またしても家無しか!？」と頭を抱えていると、少彦名様はニカツと笑って任せておけと言う。

戸惑う間も無く高天原に連れて行かれた俺達は、あれよあれよという間に天照大神様との謁見の間へ連れ出された。

太陽の様な明るさと温かさを持つ女神は、畏まる俺達に優美な笑みを浮かべて楽にするようにと茶を勧めてくれた。

少彦名様を助けた事に対する礼から始まった謁見は、俺達の住居問題という何とも小さい事がメインで話し合われた。

その中で驚いたのは、天照様が俺達姉弟の事を知っていたということだろう。

なんでも、呪術の五大宗家である姫島家縁の娘が墮天使と結ばれたというのは、高天原でも結構な話題となっていたらしい。

件の襲撃事件の後、混血である俺達を高天原で保護しようとしていたが間に合わなかったとも言っていたが、この辺は話半分に聞いておくべきだろう。

それで本題だが、天照様曰くやはり神社に住む以上は神職がいなければならぬとの事。

とはいえ、家にはそれに就く資格のある者がいないのも事実。

そこで天照様が出した案は、今回の礼として天津神の方から国に推薦するので俺達が神職に就くというものだった。

これを聞いた時、俺達は答えに窮してしまった。

神職とは日本神道の神官である。それに就くというのは、日本神話勢力に属する事を意味する。

正式に籍を置いていないとはいえ、冥界から保護を受けている身としては受ける訳にはいかない話だ。

しかし、ここでの暮らしを楽しみにしていた朱乃姉の笑顔を思うと、突っぱねるのも心が痛む。

二人してうんうん唸っていると、天照様は義理固いうえに家族思いなのです、と笑顔で煌びやかな十二単の袖から携帯電話を取り出した。

心を読まれた事よりも神様も携帯を使う事に啞然としている俺達を余所に、天照様は軽やかに通話先に声をかける。

こちらに漏れている声を聞いていると、相手はサーゼクス兄のようだ。

駒王町の結界の事から始まり、少彦名様や大口真神様が消滅しかかったことやリアス姉の前任であるベリアル某の失踪とそれから十年の間管理者を置かなかった事を、まるで世間話でもするかのように責め立てる天照様。

電話の向こう側でサーゼクス兄は返す言葉がないのか、度々答えを急かすようなやり取りさえ聞こえてくる。

そうやって胃の痛くなるようなやり取りがしばらく続き、次に天照様が切り出したのは俺達が神職に就くことへの連絡だった。

俺達が日本神話に関わっているなど思ってもみなかったのか、声はなくても受話器越しから動揺している気配は感じ取れた。

サーゼクス兄は反対したようだが、先の不祥事を鑑みてリアス姉の管理には日本神話側から監査を派遣することと神職に就けるのを許可するなら監査員を俺達に任せるといふ、鞭と飴を見せられてあえなく陥落。

携帯を袖に仕舞いながら「これで気兼ね無く、神職に就けますね」と笑顔を向けてくる天照様に、俺達は顔を引きつらせる事しかできなかった。

まだ神職に就くとか決めてない、なんて言える雰囲気じゃねーよ。結局、俺達は断ることが出来ず、その後の宴に参加する事になった。そこで俺は天手力男神様と力比べと称した模擬戦をしたり（顔面に発勁を打ちこんだら、張り手で気絶させられた。）美朱が藤原千方の四鬼に忍術を見てもらったり（俺達の祖先に忍術を教えたのは彼等らしい）していたら、帰った時には日付が変わっていた。

その際、怒り心頭で俺達を待っていた朱乃姉が、少彦名様の姿を見て卒倒したのは余談である。

こうして凶らずも神職に就くことになった訳だが、大変なのはここからだった。

サーゼクス兄を初めとした冥界の関係者各位への事情説明と謝罪に始まり、中学と平行して通信教育で神道の勉強。

なんとか1年で資格を取ったと思ったら、今度は実地研修が待っている。

休みの度に出雲や伊勢、京都といった有名神社を回っては実務を覚えながら現地の神様に顔を出し、さらには今までやってきた何でも屋や駒王の監査の見習いについても疎かにしない。

一時期は本当に過労死するかと思うほどの忙しさだったのだ。

この時ばかりは全部投げ出してやろうかという思いが何度か頭を過ぎったが、楽しそうに家を修繕する朱乃姉や俺等の迂闊な行動が招いた事なのに、逆に頭を下げてくれたサーゼクス兄の事があつたお陰で何とか踏ん張れた。

そんな努力の甲斐があつて、中学卒業と共にごんせい権正階かいという村社、郷社の宮司になるために必要な階位を得ることができ、正式にこの神社を取り仕切る事になったのだ。

因みに、この神社は前と変わらず大口真神様を祀っており、何故か少彦名様も居座っている。

地脈の精や信仰心に関しては、俺がこの神社の神官として縁を刻ん

だ為、問題なく循環している。

少彦名様が言うには、この手の結界は術者の力を上回る者を地脈等のマーカーにすれば簡単に効力を失うそうだ。



さて、長々と回想に付き合ってくれてありがとう。

そろそろ俺も目の前の現実と戦うことにしよう。

『朝拝』すなわち、朝に1日の安全を願い、お祈りとお祓いを行う儀式のために本殿に入った俺達は、御神体の前に複数の影がある事に気付いた。

格子を影にして差し込む日の光に照らされたのは、朝っぱらからお猪口を片手にお神酒を飲む少彦名様にお供え物の桜餅をパクつく大口真神様。

そして真神様の横から桜餅をかつくらう黒いわんこ――

『オーカミだよ?』

……失礼、狼だった。

「おはようございます、お二方。ところで、そちらの方は何方どなたでしょう?」

『オレサマノツガイ』

『ボクのだんな様!』

白と黒の神狼が同時に胸を張る。うん、意味はわかるが話が見えん。少彦名様、詳細プリーズ。

「お主、段々儂の扱いが雑になるの」

「一緒に住んでるんですから、何時までもお堅いままだと疲れるじゃないですか」

「……まあええわい。その娘はハテイ殿。真神殿が北歐から娶ってきた神狼じゃ」

『ハテイ、アイサツスル』

『ボクはフェンリルの娘、ハテイ。今日からよろしく!』
パタパタと尻尾を振りながら、ワンと吼えるハテイ様。

北欧神話に名高い神喰狼の娘はボクっ娘だったらしい。

……OK、OK。落ち着け、まだ慌てる時間じゃない。

「いやなに、真神殿は以前からつがいが欲しいと言っておったのじやが、国内では真神殿に相応しい狼というのがおらんでな。そこで海外に足を伸ばしてみたんじや。そしたら、ハテイ殿とお会いしての」

『ピントキタ』

『ティンと来たんだ！』

「……という訳じや」

いや、と言う訳じやねえよ。なに無断で他の神話から嫁取ってんだ、わんこと爺さん。

「ねえ、スクナ様。むこうにお嫁に貰うって言ったの？」

「うむ。父親のフェンリル殿は真神殿を大層気に入ってな。娘を頼むと快く送り出してくれた。祖父のロキ殿は反対していたが、ハテイ殿の姉であるスコル殿が首を咬んで振り回したら大人しくなったわい」

「ちよっ!? それ説得（物理）!?!」

ロキ神の末路に顔を引き攣らせる美朱。さすが神とは言え獣、解決方法がワイルドすぎる。

「オーティン殿は『ピンと来てティンと来たなら仕方ないのう。ワシも恋路を邪魔して喰われたくないし』と諦めておったな」

対応しよっぱいな、おい。それでいいのか、北欧の主神。

「ねえ、慎兄どうするの？」

さすがに困惑の表情を隠せない美朱。まあ、神様が娶ると決めた以上、俺達に選択肢は無いけどな。

「とりあえずは天照様に連絡だな。ご神体が用意できるまでは真神様のを夫婦共用で使ってもらって、必要な物があれば随時補充ってところか」

呑気に朝拝なんてやってる場合じゃなくなったので天照様に連絡を取ろうと腰を上げると、ハテイ様が白衣の袖を啜えて来た。

「どうしました、ハテイ様？」

『このピンクのもっと欲しい！』

『オレモサクラモチ、モットクイタイ！』

ペロンと舌を出しておねだりする白黒わんこに俺は思わず頭を抱えた。

……なんてこった。真神様だけでも50個は軽く食うのに、それがもう一匹増えたらウチのエンゲル係数がマツハじやねえか。

取り敢えず、天照様の前に和菓子屋に注文だな

◇

さて、時間をすつ飛ばして放課後である。

もう五時前だというのにまだまだ明るいつ夕日の中、軽く伸びをする
と背筋あたりがバキバキと軽い音を立てる。

一日中座りっぱなしで身体は少々鈍っているが、朝の件がある程度
片付いたおかげで心は軽やかだ。

あの後「社の神力が増した!!」と騒いでいた朱乃姉に事情を説明し
たところ、またしても卒倒されたので家に寝かせて登校する事になっ
た。

注文した桜餅に関しては少彦名様に受け取りを任せた。あの爺様
も友人の嫁に喰われるのは御免だろうから、しっかり受け取ってくれ
るだろう。

嫁入りという事で神社に新たな神を迎え入れる事になるのだが、や
り方なんてわからないので報告ついでに天照様に丸投げすることにし
た。

むこうもこつちに任せろと言ってくれていたし、大丈夫だろう。

最後のリアス姉への報告も、帰りにオカ研へ顔を出して終了。

ここの管理者の自分がどうして一番遅いのかとブチブチ言ってい
たが、こつちに言われても困る。

親方日の丸の身としては上を蔑ろにはできないのである。

有事でなければ身内より職場を優先。これ、社会人の常識。

家に着くとパートさんに代わって朱乃姉が販売所に入っていた。

本堂や家に異常は無かったかを確認したところ、大量の桜餅を台車
に乗せた和菓子屋が来たのと黒犬が境内をうろついていた以外は何

もなかったとの事。

一安心して夕食の仕込みで母屋に入る前に本堂を覗いてみると、大量の桜餅を前にしたご神体の傍で白と黒の毛玉が寄り添いあつていた。

うむ、夫婦円満そうで何より。

帰ってきた美朱と共に一日の締めである『夕拝』を行い、晩飯を食った俺は再び無限の闘争に足を運んだ。

ゴールデンキャッスルで將軍様からリストバンドやシャツの形をした重石を借り受けた俺は、その上からトレーニングウェアに身を包みコンソールを使って重力制御ルームを呼び出す。

現れた重力制御ルームに足を踏み入れると中は下手な体育館以上の広さがあり、あるのは中央の支柱に備え付けられた操作パネルだけというシンプルな造りになっている。

「試しに10倍で行ってみるか」

コンソールを10Gに合わせて起動ボタンを押すと低い唸りと共に制御室に軽い振動が走り、まるで上から強烈な力で押さえつけられる様に身体が重くなる。

ふっひよおおおおおっ!? 重てえ!!

キツすぎて込み上げてくる変な笑いで口元が歪めながら、折れそうになる膝に喝をいれる。

身に着けたウエイトはもちろん、それ以外にも負荷が身体に満遍なく掛かるから、普段使っていない筋肉なんかにも強烈にクル。

だが、これは好都合。

潜在力、そして界王拳をモノにするには基礎から徹底的に鍛え直さなければならぬのだから、この位の困難はむしろ望むところだ。

まずはランニングと思っただが、なんと重すぎて走る事ができない。

仕方ないので極力走るのと同じフォームのまま、ウォーキングを行う。

油の切れたブリキ人形の様な動きでエツチラオツチラと歩いていたら一周廻るのに10分も掛かってしまった。しかも、それだけで肩で息をする始末。我ながら情けない。

え、ウエイト外せばいいって？ 界王様も言っていただろ、付けての方が修行になるって。

ランニングを十周こなして腕立て、腹筋とメニューを進めていくが、正直洒落にならない位にキツイ。

特に腕立ては本気で腕げるかと思っただくらいだ。

腕立て、腹筋、背筋を各10回5セットなんて中学生の部活メニューのような数を熟しただけで、俺は汗まみれで床の上に大の字になっただけ。

さすがはドラゴンボールの荒行、ここまでとは思わなかった。

けど……やれる。

重力を上げてでも潰れずに動けた。今はまだこんなザマだが、回数をこなしていけば必ず克服できる。

そうやって段階的に高重力を乗り越えていけば、界王拳や潜在力だつて十全に使える様になるはずだ。

悲鳴を上げている身体で重力を元に戻した俺は、小さいながらも確かな手応えを掴みながら、疲れた体を引きずる様に無限の闘争を後にした。

朝から色々あった一日だが、メが良ければ全て良しだ。

10話

「ある〜日〜、街中〜で〜、キ●ガ●に〜、出会〜つた〜」

即興の馬鹿歌を歌いながら、俺は日が遮られた薄暗い裏路地を歩いていた。

こちらが歩を進める度に片手に引きずったモノがズルリ、ズルリと汚れたアスファルトに跡を残すが気にする事はない。

たとえそれが顔面が原型を留めない位に腫れ上がり、両手足があらぬ方向に折れ曲がった白髪の男だったとしても、何の問題も無いのだ。

少なくとも、朝っぱらから段平片手に襲い掛かってくる狂人に対する慈悲など、俺は持ち合わせちゃいないのだから。

うむ、断じてこの頃仕事が忙しくて、鍛錬が進んでいない事への八つ当たりなどではない。

俺は男の襟首を掴むのとは逆の手に下げた西洋剣、この阿呆は鞘すら持つていなかったので着ていたカソツクを剥いで巻き付けたそれに目を向ける。

しかし、一応悪魔が管理するこの街で聖剣を振り回すとは穏やかではない。

まあ、聖剣だろうが鈍らなまくだろうが刃物を持っている時点で穏やかもへつたくれも無いのだが。

もしかして、近頃流行りの宗教テロなんだろうか。

なんかこのキ●ガ●はエクスカリバーだのラピッドリーだのと言っていたが、こんな三流の駄剣がエクスカリバーなわけがない。

無限m u g e nの闘争めうそうで見たご先祖ちゃんの物に比べれば、アイスのはずれ棒以下である。

となるとラピッドリーとかいうのはこいつの妄想の産物か。

キ●ガ●に厨二病を併発しているとは、救いようがないな。

健全な学生としては学校に遅れる訳にはいかないので、取り敢えずは国津神の皆さんが運営してくれている自衛団体の番所にも放り込んでおこう。

路地を抜けると土の香りと共に、比較的都会の駒王町には珍しい大きめの田畑が目に入る。

ウチの学校の運動場の3倍はある田畑の真ん中に建てられた少し小さめの平屋建ての一軒家。これが駒王町の番所だ。

「おや、誰かと思えば姫島の坊主ではないか。学び舎は良いのかね？」
畦道を歩いてみると、人影の見えない畑から呼び止められた。

声の方に目を向けると、畑の土が盛り上がり瞬く間に人の形になっていく。

数秒ほどで目の前には稲の髪に土の身体、首には立派は注連縄を下げた巨人の姿があった。

この方は久延毘古様。案山子が神格化した田畑の守り神で、少彦名様の古い友人だ。

「お早うございませ、久延毘古様。街で曲者に襲われましてね。そいつが聖剣なんて物騒なモノを持っていたんで、預けに来たんですよ」「その手に持った虫の息の異邦人か？」

「ええ、正当防衛として無力化させました」

「どう見ても過剰防衛としか思えんのだが。……まあいい。で、件の聖剣というのはそれか」

「ええ。感じる力から見ても三流の鈍らですけど」

「確かに大した力は感じぬ。とはいえ、この剣を民に振るわれる訳にはいかぬわな。……あい解った、そやつとその剣は預かろう」

「よろしく頼みます。それじゃ俺は学校がありますんで」

「うむ。勉強に励むがよい」

剣とキ●ガ●を掴み上げると、久延毘古様は豪快な足音を立てて番所へと歩み去っていく。

その後ろ姿を見送った俺は、通学路に戻るべく踵を返した。

今の時間は8時10分、走ればギリギリ間に合うはずだ。

20倍の重力にも慣れて来たし、ここらでガチッと克服した証を立ててみるか！

「と、いう事があったんだ」

「なんつうか……相変わらずヴァイオレンスな日々を送ってんな、

リーダー」

「慎君ってその手のトラブルの遭遇率、もの凄いよね。一度お祓い受けたほうがいいんじゃない？」

昼休みに持ち寄った弁当を広げながら今朝の出来事を話すと、ダチである望月晴矢と小山田耕太に思い切り呆れられた。

晴矢よ、俺はそんな生活なんて望んでないからな。あと耕太、それは俺が神主と知ってのセリフか。

さて、目の前にいる悪友二名を紹介しておこう。

晴矢はシエムハザさんと日本人の女性（職業は漫画家。シエムハザさんをヲタク道に引きずり込んだ張本人で諸芸上達・諸願成就の神やがわえひめのみこと矢川枝姫命の末裔）の息子。

耕太は信州の田舎からこちらに越して来た心優しい純朴な少年だ。『ビッグマグナム耕太先生』や『銀河エロス大王』なんて渾名がつけられているが、風評被害なので気にしてはいけない。

あ、ビッグマグナムは事実だった。

晴矢は神の子を見張る者の時からの幼なじみ、耕太とは中学からの付き合いと結構縁が長い。

神職試験の間は勉強や学校行事で色々とフォローしてもらったものだ。

晴矢は親父さんに似た灰金の髪に青い目をした細めのイケメン、耕太は148cmの小柄の身体に童顔、未だ声変わりもしていないという小学生といっても通る容姿をしている。

「まあ、一番災難なのはリーダーを襲った奴だろうけど」

「うん、そうだね。慎君、その人ちゃんと生きてる？」

「お前らは人をなんだと思ってるんだ」

二人のあんまりな態度に憤慨していると、昼食を終えた美朱がこちらに来るのが見えた。

「慎兄、リアス姉がたまには部室に顔を出しなさいって言ってたよ」

……そう言えば、本業と修行が忙しくてここ最近部室に顔を出していないな。

「そうだよ、球技大会もサボっちゃうし。まあ、今月末の『夏越の祓』

の準備で忙しいのは分かるけど、顔を出さないとみんな心配してるよ？」

リスのように頬を膨らませる美朱に俺は思わず言葉を詰まらせてしまう。

因みに『夏越の祓』というのは正式には『大祓』おちほらいえと呼ばれる行事で、1年のうち毎年6月末と大晦日に、天下万民の罪穢を祓うという意味を持つ儀式だ。

数日前に終わったハテイ様の輿入れから立て続けだったので、ここ二週間ほどは全く部屋に行く余裕はなかったのだ。

「……そうだな。そんじゃ今日の放課後は顔を出す事にするわ」

「うん。それじゃリーア姉に行くって伝えとくから。……あ、ごめんね。食べてる途中にうるさくしちやって」

「いって、いって」

「うん。気にしないで」

足早に去っていく美朱を見送り、俺達は改めて弁当の攻略に手を付ける。

3人そろって成長期の喰い盛りなので、弁当箱も大型だ。

かく言う俺も米とおかずの二段重ねだったりする。毎日この量を作ってくれる朱乃姉には感謝感謝である。

「しつつかし、リーダーも大変だよなあ。学校に加えて神社の仕事もしなきゃなんないんだろ。青春を満喫する暇なんてねえじゃんか」

「仕方ねえよ。経緯はどうあれ、任された以上はしっかりとやらんとな。手を抜いて氏子さんやご近所に迷惑をかけるわけにはいかんし」

「無理はしないでね。手が足りないなら僕や晴矢が手伝いに行くからさ」

「ありがとうな、持つべきものは友達だよ、ホント」

友情の温かさにむせび泣く男になりそうになっていると、今度は廊下からこちらにこちらに駆け寄ってくる気配がする。

まったく、飯時なのに千客万来な事である。

「耕太くくくん!!」

教室の扉が勢いよく開くと同時に飛び込んで来た人影は、箸を置い

た耕太に後ろから抱きつくつと、そのリアス姉並みに豊満な胸を押し付け始める。

「ちっ、千鶴さん!？」

「うふふ…耕太くんは暖かいねー」

後頭部を乳に埋めた耕太は、真つ赤な顔で弁当を手に離脱した俺達を、恨めしそうに見ている。

すまぬ、友よ。午後を乗り切る貴重な栄養源を、ラブコメで潰されるわけにはいかんだ。

「ねえ、耕太くん。お弁当、どうかな?」

「は、はい! 美味しいれふ!!」

「良かった。栄養のことも考えて頑張ったんだから、そう言ってもらえて嬉しい」

茹でダコ状態になった耕太のろれつの怪しい答えに満面の笑みを浮かべる女生徒。

さらに激しさを増したりバースパフパフや乳プレスに、耕太はパニック寸前だ。

心が汚れた俺達とは違って、田舎育ちの純朴なあいつには、少々刺激が強すぎるか。

というか、毎日やられてるんだからいい加減慣れる。

「栄養ってあれか。あいつの弁当に入ってたウナギに牡蠣、焼きニンニクとか。夜の養分ばっかじゃー」

「しっ…」

俺は小声で呟く晴矢を素早く制した。

付け加えればドリンクは赤مامシだったが、不用意にその手のツツコミを放てばこちらの墓穴を掘る事になる。

今はクラスの皆のように、何事も無かったように放置するのがベストだ。

さて、高校生の肉食系女生徒が小学生の男子に襲いかかるといいう、香ばしい光景が洒落で済む内に彼女の事を語っておこう。

え、助けないのかつて?

馬鹿だな。乙女(?)の恋路の邪魔なんかしたら命がいくつあって

も足りないじゃないか。

コホン、話を戻そう。今、耕太に抱きついているのは、三年生の源千鶴先輩。

腰まで届く黒髪にモデルも裸足で逃げだす程のスタイルを持つ美人で、俺達が入学するまではリアス姉や朱乃姉と並んで三大お姉様と言われていたらしい。

しかし、今年の入学式で耕太に一目惚れした彼女は周りがドン引くほどの強烈なアプローチを掛け始めた。

その結果、耕太の見た目の幼さとその容赦ない積極性から、今では『シヨタコンマスター』なんて異名を頂戴している。

まあ、本人はそんな事なんてどこ吹く風と、耕太にまとわりついているのだが。

因みに耕太自身も源先輩には好意を持っており、過度の接触やアプローチには戸惑うものの、内心まんざらでもないそうだ。

毎度の事だが、イツセー先輩が見れば憤死するほどの、男としては羨ましい光景が繰り広げられているのに、そういった感情がまったく起こらない。

心の中にあるのは耕太への哀れみだけだ。

「……なんでだろう。あれを見てたら生物で習った『カマキリの交尾』を思い出したんだけど」

目前で繰り広げられる甘い光景に、晴矢がポツリと呟く。

「行為の後に物理的に喰われるか、行為の最中に性的に喰われるかの違いはあるが、オスが捕食されるのは同じだからじゃないか？」

「……………哀れ、耕太。友達として俺等にできる事ってあるかな？」

「とりあえず、できちゃった退学にならないように祈っとくか」

俺達は侘しい気持ちのまま、揃って耕太に柏手を打った。

友よ、避妊は忘れるなよ。



時は流れて放課後である。

あの後、源先輩は自分のクラスに帰つたのを見計らつた晴矢が耕太に『お前のバスターキヤノンには役不足かも知れないが』と明るい家族計画を渡して、ガチギレした耕太に殴られるというハプニングがあつたが、概ね問題なく1日が過ぎた。

美朱に伝えた通り久々にオカ研に赴いた俺は、覚えのない2つの気配にドアに掛けた手を止めた。

気配は共に人間のもので、なにかしらの聖別された器物を身に付けているらしい。

一瞬リアス姉達を狙つた天界からの刺客かと思つたが、部室内からは争うような気配は感じない。

「ちわーす。ご無沙汰」

とりあえず入つてみると、何時もの面子に加えて黒い革製のレオタードに白のローブを身に着けた女二人が目に入った。

なんかコスプレみたいな格好だが、服装の趣味は人それぞれと言うし妙な指摘はするべきではないだろう。

「おや、お客さんか？」

「彼女達は教会から派遣された悪魔祓い。墮天使に奪われた三振りのエクスカリバーを奪還する為に、この街に来たそうよ」

気怠げなリアス姉からの言葉に、思わず首を傾げてしまう。

エクスカリバーが三振りあるとか、教会が聖剣を奪還するとか、ツツコミどころ満載である。

そういえば、朝の阿呆の駄剣もエクスカリバーとか言つてたな。

妙な縁でもできたかね？

「リアス・グレモリー。部外者に我々の任務を話さないでもらえるか」「部外者じゃないわ。彼は私がこの街を治めるにあたって、日本神話から派遣された監査官だもの」

青髪メツシユからの苦情に苦虫を噛んだような表情で反論するリアス姉。

一見すると、監察官を置かれている現状に不満を覚えてるように見えるけど、本当は俺達が日本神話に籍を置いている事が気に入らないんだよな。

「それは失礼した。私はゼノヴィア、あそこにいるのは相棒の紫藤イリナ。先ほどの説明通り、聖剣奪還の命を受けている」

「駒王神社宮司の姫島慎だ。グレモリー女史の説明通り、この街での日本神話の監査官をしている。二度手間になって申し訳ないが、そちらの事情を聞かせてくれないか？」

俺の要請に小さく頷くゼノヴィア嬢。それによると、数日前にカトリックとプロテスタントが保管していた6本のエクスカリバーの内、3本が墮天使により強奪されるという事件が起きた。

教会は悪魔祓いを追撃させたが、多大な犠牲を払いながらも奪還は失敗。

生き残りが持ち帰った『聖剣が駒王町に持ち込まれた』という情報により、聖剣に適性のある彼女達が残存していたエクスカリバーを手に、この街を訪れたらしい。

リアス姉と対面していたのは、聖剣奪還に際して悪魔側に横槍を入れさせないための牽制だそうだ。

なるほど、大体は理解した。

とりあえず浮かんだ感想はアザゼルのおっちゃん、仕事しろである。

まあ、他にも溜まりに溜まったツツコミがあるので、処理していくことにしようか。

「説明をありがとう、ゼノヴィア嬢。2、3質問があるんだが、いいだろうか？」

「ああ。私に答えられる物ならな」

「まず、聖剣を奪取した者の目星は付いているのか？」

「ああ。今回の首謀者はコカビエル、墮天使の幹部だ」

「コカビエル、墮天使勢力における主戦派の急先鋒だな。前大戦の結果に固執するあまり、聖書の勢力が置かれてる現状が見えていないイメージがある男だったな」

「随分と詳しいな。奴に面識でも？」

「仕事から色々なところにコネがあつてね」

意外そうな顔のゼノヴィア嬢の追及にお茶を濁しておく。本当は

親父の同僚で、事あるごとに『墮天使勢力に帰属しろ』と言ってくるウザさから覚えていたただけなんだが、言ったらややこしくなるので黙っておこう。

「次に、エクスカリバーが複数存在するように言っていたが、それは教会が開発したレプリカということなのかな？」

「いや。エクスカリバーは過去に起こった神と悪魔の大戦の際、破壊されてしまったんだ。大戦が痛み分けて終結した後、教会は破壊されたエクスカリバーを回収して砕けた刀身を核に、錬金術で七本の聖剣に再構成した。エクスカリバーが複数あるのはそのためだよ」

俺はゼノヴィア女史の説明を聞きながら、顔が引きつりそうになるのを必死に耐えていた。

「おいおい、なんで他神話の聖剣を聖書の勢力の内輪もめに使ってるんだよ。」

しかも、壊した上にその破片を改造したとか、嫌な予感しかしないんだが。

「なるほど。次に、何故エクスカリバーを教会が保管しているのかな？」

この質問にはゼノヴィア女史と相棒だけではなく、美朱を除いたオカ研メンバーも怪訝そうな顔をした。

「何故って、教会のものだからじゃないのかい？」

俺が入ってきてからずっと剣呑な雰囲気を出していた祐斗兄が口を開く。

さつきからゼノヴィア女史の持つ包みに殺気を飛ばしているのだが、なにかあったのだろうか？

「それは違う。エクスカリバーはケルト神話に登場するダーナ神族が創り出したものだ。聖書の勢力のものじゃない」

俺の言葉に部室内にざわめきか広がる。

「え、そうなの？ リアス」

「知らないわよ、聖剣の由来なんて考えた事も無いわ」

「聖剣というくらいですから、てっきり教会の物かと」

「そう言えば、ゲームなんかでよく出てくるけど、元の伝説と違って知

らないよなあ」

「Mr. 姫島、聖剣の正当な保有権は教会にある。憶測で物を言うのはやめてもらいたい」

「生憎と憶測ではないよ。では聞くが、聖書や教会の伝説にエクスカリバーの名前があつたかな？」

「……聖書には名前は無かつたと思う。ゼノヴィアは？」

「言われてみれば、教会から教わつた逸話にデュランダルやアスカロンの名はあつたが、エクスカリバーの名は無かつたはずだ」

「エクスカリバーはアーサー王伝説で初めて姿を表したが、その原型はウェールズの伝説に登場するカレドヴールフ、それと同一視されるケルト神話の英雄フェルグス・マッククローイが手にしていた魔剣、カラドボルグだと言われている。そもそもアーサー王伝説はケルト神話が根底を為すもので、聖書は関係ないんだ」

「……でも、アーサー王は伝説の終盤で、聖杯を求めていたと書いてありましたか？」

何気に読書好きな塔城が異を唱えてくる。聖杯探索はアーサー王伝説において、聖書と関わりを示す最も有力なものだからな。しかし、これにも事情があるのだ。

「それは文献を作つた者の記述間違いだ。原典ではアーサー王が求めていたのは、聖杯ではなく食器とされている。これはダーナ神族の最高神ダグザが持っていた、無限に食料が湧き出る魔法の大釜の事を差しているんだろう」

「……なんでそんな間違いが」

「ケルト民族が文字を持たない民だからだろうな。ケルトの神話や伝説は、ドルイドと呼ばれる賢人が口伝で伝えていたらしい。今ある書物はヨーロッパ本土からの渡来人が書き記した物だ。その中でケルト神話を知らない者が、神の器と聞いて聖杯と勘違いをしたんだろうさ」

因みに言っておくと、前世では架空の人物、器物とされていたアーサー王とエクスカリバーだが、この世界では実在している。

そういつた前世との差が楽しかったので、子孫であるアーサーに資

料とかを借りながら調べていた事があったのだ。

「なるほどな。礼を言うよ、Mr. 姫島。エクスカリバーの来歴は勉強になった。だが、経緯はどうあれ現在のエクスカリバーの正当な所有者は、我ら教会の悪魔祓いだ」

「そうよ、今まで聖剣を守ってきたのは私達なんだから!」

こちらを見据えながら不敵な表情を浮かべるゼノヴィア嬢と、その後ろで誇らしげに胸を張りながらウンウンと頷く紫藤嬢。

こっちとしては、疑問ついでにイツセー先輩をはじめとした裏方面の知識の浅いメンツが、間違った事を覚えないうちにウンチクを語っただけなのに、教会のエクスカリバー所有についてイチヤモンを付けたと思われているようだ。

別にそんな気は無かったんだが……まあ、いいか。

しかし、泉の乙女に返還されたはずのエクスカリバーが、教会の手に渡っていたうえにぶっ壊れていたとは。

ペンドラゴン家の資料に載っていたのは返還までで、その後の足取りはなかったから解らなかった。

アーサーはこの事を知ってるのか？

「ねえ、慎兄。どうしてそんなに詳しいの?」

「アーサーから聞いた。あと、昔やったゲームに女神転生という超絶罰当たりなのがあつて、その影響で世界の伝説や神話を調べた時期があつたんだ」

「ゲームかい?!」

「お前も人の事言えないだろ。しかし、教会はどうやって聖剣を手に入れたんだろうな……」

「たしか、アーサー王が倒れた後、侍従のベティヴィエールって騎士が泉の精霊に返すんだっけ」

「そう。だから、他の聖遺物みたいにどっかから発掘するなんて事は無いと思うんだが」

「でも、お話だとアーサー王は泉の精霊に認められて聖剣を貰ったんでしょ。教会にもアーサー王に負けないような立派な人がいたからじゃない?」

美朱と二人で首を捻っていると、紫藤嬢が口を開いた。自信満々なところ悪いのだが、そいつはありえないのだ。

「いや、それはない。たしか聖書の教えでは精霊や妖精って、排除あるいは忘れ去られた崇拜や畏怖の対象として捉えられることが多いんだろ？　ワザワザそんな対象に剣を貫いに行くと思うか？」

「……問題ない。例え妖精の手にあつたとしても、聖剣は人と神の教えを護るに足る力を有しているからな」

「そうよ。主の使徒である私達の手に使われた方が、穢れも落ちて本当の聖剣に近づけるといふものだよ」

俺の指摘に二人は一瞬言葉を詰まらせたが、ゼノヴィア嬢が持ち直す。紫藤嬢もそれに追従する。

「しつかしまあ、何とも傲慢極まりない言葉である。」

「随分な意見をどうも。これじゃヨーロッパの土着神や妖精、精霊にとつて、聖書の勢力が不倶戴天の敵になる訳だ」

「敵、ですか……？」

こちらの口から出た物騒な言葉に、困惑の表情を浮かべるアーシア先輩に小さく頷いて俺の話が続ける。

「神は人の信仰を糧にして存在し、その力を持って信者に様々な恩恵を与える。これは妖精や精霊も変わらない。しかし、聖書の教えが広まるに従って土着の神々は信者を失っていった。さらに、教会は土着信仰が根強い地域を未開の地、土着の神々を信じる者を蛮族や異教徒というレッテルを張り、あげくの果てに中世の魔女狩りで土着神や精霊の恩恵を得ていたドルイドや、魔術で人々の生活を支えていた者を次々と処刑した。これだけやられちゃあ恨まない方がどうかしてる」

比較的關係が薄いオカ研メンバーは難しい顔をしているだけだが、教会関係者だったアーシア先輩は顔を青くし、悪魔祓い二人組は不快げな顔でこちらを睨みつけている。

「Mr. 姫島。随分な言い様だが、貴方は我ら教会に偏見でも持っているのか？」

「別に。こちらは歴史を元にした事実を述べているだけだぞ？　魔女狩りや他の宗教への蔑視は実際にあつたことだろう」

「そんなの、主の教えに背を向けて異端の神を信じる人たちが悪いんじゃない！ 私達は間違いを正すために頑張ってるだけ!! 異教徒だからって変な言いがかりはやめてよ!!」

口調は静かだが脇に置いた長物に手を掛けるゼノヴィア嬢に、口から火を噴くような勢いでこちらに文句を言ってくる紫藤嬢。

……どうやら盛大に機嫌を損ねてしまったらしい。

煽ったつもりはなかったんだが、悪魔祓いなんて過激派の前で教会の非を解説するのは、少々配慮が足りなかったようだ。

まあ、地元の国教から派遣されている監査官を異教徒呼ばわりするむこうも、大概配慮に欠けているが。

「その結果、聖書の勢力は世界中の神話勢力から恨みを買ったわけだ。そもそも、聖書の勢力は土着の神々と致命的に相容れない部分があるから、仕方がないところなんだろうがな」

「……相容れない部分、ですか？」

頭の上にハテナマークが見えそうな顔で、塔城は首を傾げる。まあ、解らんだろうな。宗教に興味が無ければ普通はこんなこと考えないし。

「聖書が唯一神を信仰する一神教である事だよ。聖書の教えでは聖書の神が唯一絶対の神であると教えられている、そうだな？」

「そうだ。万物を創りたもうた主こそが、万物の基準であり唯一の神であり、絶対の『善』なのだ」

「聖書の神の絶対性の是非は置いておくとして、この『唯一の神』という部分が曲者なのさ」

「えつと……どういう事だよ」

話について行こうとしたのだろう、オーバーヒート気味の頭から湯気を出していたイツセー先輩が口を開く。

うん、解らんかったら解らんままでいいから、あんまり無理すんなよ。

「イツセー先輩、やおよろず八百万の神って言葉、聞いた事あるだろ？」

「ああ。なんか近所の婆ちゃんが昔言ってたような気がする」

よほどうろ覚えなのだろう、ウンウンと唸りながら頭を捻るイツ

セー先輩の姿に苦笑いが浮かぶ。

「日本では古くから、山の神様、田んぼの神様、トイレの神様(かわやがみ)、台所の神様など、米粒の中にも神様がいると考えられてきた。自然とそれが生み出した物への崇拜から、万物に神が宿っていると考えられ、そこから八百万の神という言葉が生まれたと言われているんだ。あ、八百万ってのは無数の、あるいは無限のって意味な。これは、日本だけの考え方じゃなくて世界中に広く分布している多神教、すなわち自然信仰から多くの神々を信仰する宗教ではありふれた考えなんだよ。自然から生まれその恩恵によって生きているのだから、万物全てとそこに宿る神に日々感謝を捧げようってな」

「素晴らしい考えだと思います。でも、何故それが私達の教えと相容れないのでしょうか？」

「簡単だよ。それは聖書の教えは唯一神、すなわち聖書の神以外を認めないからさ」

俺の答えに困惑気味だったアーシア先輩の表情が凍り付いた。

「聖書の勢力は他の宗教、神々について否定的だ。それは古代カナン地方、現在のシリア・パレスチナだな。そこで信仰されていたウガリット神話の主神であったバアル神と、その妻であり多産を司る豊穡の女神アスタルテを悪魔に堕とした事に現れている」

「えつと……ちよつと待ってくれ。神様って悪魔になるのか？」

「さつき神は信仰を糧にして生きるって言ったろ？ それは即ち、神は人間の信じるイメージの影響を受けるということなんだ。聖書の勢力は旧約聖書の中で崇高なるバアルバアル・ゼブブと呼ばれていたバアル神を、蠅のバアルバアル・ゼブブと呼んで嘲笑した。これが転じてベルゼブブの名の語源になったと言われている。その後、聖書やヨーロッパで流布した魔術書グリモワールで、この蔑称と共に悪魔とされた事が増加する聖書の信者に広まった事で、信者たちがバアル神がベルゼブブという悪魔だと信じた事により、彼の神は悪魔へと堕ちたんだ。アスタルテも同じく魔術書グリモワールの影響により、悪魔アスタロトに堕ちた」

「マジかよ……」

「少なくとも、多くの伝承や逸話ではそうなってるな。ところでイツ

セー先輩。主であるグレモリー女史を『糞山の王』と言われたらどう思う？」

俺の唐突な質問にイツセー先輩は呆気にとられた表情を浮かべたものの、言われた事を理解すると不機嫌そうに眉を顰める。

「そりゃあ……許せねえっていうか、言った奴見つけ出してぶっ飛ばすな」

「そうか。『糞山の王』ってのは、ベルゼブブのヘブライ語での意味だ。他にも『蠅の王』『糞の王』とも言われる。自身の信じる神を、自分が主と定めていた者を、そう貶められたウガリット神話の神や信者達は、そんな気分だったんだろうな。今挙げた様に、他神話の神や信者を否定しながら2000年もの間、勢力を拡大し続けた聖書の勢力は、世界中の神話勢力から嫌われている。その上、身内同士の戦争なんて自爆行為で勢力を衰えさせたから、あわよくばと報復の機会を狙ってることも結構多い。もし、どこかと揉めようものなら、他の恨みを持つ他神話の勢力が、徒党を組んで聖書の勢力を潰しに来るだろうな」

俺が言葉を切ると部室内に重い沈黙が降りた。現状を知っていた俺と美朱を除いて、他の者は顔色を青くしている。

悪魔祓いの二人が噛みついて来るかと思ったが、彼女達も青い顔を俯かせたままだ。

まあ、結構聖書の内容から引用して説明したからな。同じく聖書を知る者として、否定しきれなくて悩んでるといったところかな。

神職に就いてからこの2年間、三大勢力の外から現状を見る事ができた所為で、今の聖書の勢力がどれだけ詰んでいるかが良く分かった。

この現状に加えて、前大戦で主神にして聖書勢力唯一の神霊である聖書の神が死んでいる事を天照様から聞いた時は、日本神話に鞍替えしようかとガチに考えたものだ。

「ねえ、お兄様達はその事を知っているのかしら」

「ちゃんと把握してるよ。だからこそ、現ルシファーとレヴィアタンは平和外交に力を入れてるんだ」

死にそんな声に答えを返してやると、リアス姉の顔に少しだけ生気が戻った。

なんか『お兄様が動いているなら、大丈夫よね』とか小声で呟いては一人で納得している。

サーゼクス兄も大概だが、この人もブラコンだよな。

「ふむ、話を逸れてしまったな。最後に、君達の追っている聖剣にラピッドリーとかいう名前のものはあるかな？」

話が大きいに脱線していたので軌道修正しようと声をかけると、ゼノヴィア嬢は紙のような色になった顔を上げる。

「ああ。エクスカリバー・ラピッドリー天閃の聖剣、奪われた聖剣の一振りだ。Mr. 姫島は何か知っているのか？」

「今朝、こちらを襲ってきたカソック姿の白髪の男が、自身の聖剣をそう呼んでいた」

「その男はどこに？」

「両手足をへし折ってあばら骨をこじ開けてから、日本神話が運営している自警団の番所に叩き込んできた。自称聖剣もそつちに預けたぞ」

俺がそう口にした瞬間、またもや部室の空気が凍った。

「え、と……。そいつつてき、聖剣を持ってたんだよね？ 君も何か伝

説の武器を持っていたりするの？」

「いや、素手でボコっただけだが？」

「ちよつと待ってくれ。聖剣を、エクスカリバーを持っていたんだぞ。それを素手で倒すなんて……」

「いや、結構簡単だったぞ。ラピッドリーとか言ってる割には止まっ
て見えたし。まあ、対將軍様用に関節技を磨いてたところだから、実験
台には丁度良かったけど」

そう言うのと悪魔祓いの二人から信じられないモノを見るような視線を向けてきた。

やれやれ、あの駄剣がそんな大それたモノかね？

数日前から重力制御室に現れるようになった、將軍様のほうがよっぽどヤバいと思うんだがなあ。

人さんはどうする?」

「あ……いや……」

ソファから腰を上げながら、悪魔祓い二人に声をかけてみたが、彼女達はお互いに顔を見合わせるだけで、返事は返ってこない。

ふむ、さつきは少々イジメすぎたかね?

まあ、着いてこないのなら、それはそれで構わない。

むこうに行った際のトラブルのリスクと説明の手間が省けるだけだ。

軽く伸びをして移動しようと踵を返すと、携帯から軽快なメモディーが流れた。

画面を確認すると発信者の欄には久延毘古様の名が浮かんでいる。

農業主体の久延毘古様が携帯を掛けてくるとは珍しい。なにかあったのだろうか?

「はい、姫島です」

「おお、坊主か。急にすまん」

「いえ、どうかされたのですか?」

「ダーナ神族が聖書の勢力に戦争を仕掛ける事にしたらしい」

……は?

11話

……よし、落ち着け。

ここで俺が取り乱しても何にもならん。
状況を把握して冷静な判断を心がけろ。

coolだ、coolになるんだ。

「久延毘古様、なしてそげな事になったとですか？」

うん、無理！

『坊主、大丈夫か？ 口調がおかしくなっているが……』

「大丈夫です、問題ありません」

『それならよいが……。今朝、お主が持ってきた聖剣な、出所を調べる為あめのまひとつのかみに天目一箇神に預けてみたら、剣の核としてエクスカリバーと思われる刀身の破片が、使われていることが分かったのだ』

天目一箇神様は鍛冶を司る神だ。高天原の鍛冶を一手に引き受けているらしく、一本踏鞴いっぽんだたらという妖怪と共に、よく鍛冶場に籠もっている。

「その破片がエクスカリバーだって良く分かりましたね」

『むこうさんとは蝦夷を通して親交があつてな、かの剣の製造には我らも一枚噛んでおるのだ。エクスカリバーはうちの天羽々斬あめのはばきりをモデルに造られたのだぞ』

「えっ!? マジですか!」

衝撃の事実思わず声を上げてしまった。ということは、天羽々斬もご先祖ちゃんみたくビーム出るの!?

『びいむは出んが、振れば山を斬り飛ばす光の斬撃は飛ぶぞ』

「あー、カラドボルグ式なんですね」

因みにカラドボルグは、ケルト神話にあるクローリーの牛争いの戦争において、三つの丘の頂を切り落としたという伝説がある。

『うむ、あれがエクスカリバーの原型だから。しかし、我らは聖剣は所在不明になったとは聞いていたが、破壊されたという知らせはなかった。そこで天目一箇神が鍛冶仲間ゴブニユ殿に確認を取つてみると、むこうもこの件は知らなかったという。事情を確かめる為』

にウチの思兼神おもいかねのかみとオーティン殿の立ち合いの元、アリアンロッド殿が過去視を行ったところ、天使と教会の者がニミュエ殿を手に掛けて聖剣を奪った事が解ったのだ』

口から思わず乾いた笑いが漏れた。背中が汗でぐっしよりと濡れているのが解る。マジで何やってんだよ、天使と教会の奴等！ 泉の乙女を殺して聖剣強奪したとか最悪にもほどがあるだろ!!

「あの、ニミュエ様はどうなったんですか？」

『うむ。霊核は無事だったらしくてな、自身の守護する泉に漂っていたところを回収して、なんとか事なきを得たそうだ。しかし、存在自体が希薄になった為、ティル・ナ・ノグから出る事ができなくなっってしまったらしい』

久延毘古様の返答に、俺は小さく息をついた。ガチの死者が出てたら、事態の収拾なんて夢のまた夢になるところだ。

『話を戻すぞ。元々ダーナ神族は聖書の勢力を嫌っていた。信者を奪われた事は、何を信仰するかは人間次第な為に仕方ないとしても、魔女狩りによる庇護者の虐殺はやり過ぎだった。神や精霊が加護を与えるというのはな、その者に好意を持っている証なのだ。それを魔女だの悪魔崇拝者だのと、レッテルを張られて殺されたのだ。その心中、察するにあまりある』

同じ神として思うところがあるのだろう、久延毘古様の言に俺は口を開く事ができなかった。

『身を焦がす様な怒りがあったろう。心を引き裂く様な悲しみが、やり切れないさがあったろう。それでも、当時の彼等は魔女狩りから救い出したドルイドや魔術師達を護る為、なんの報復も行わずに妖精郷へと居を移した。身の内に全ての感情を飲み込んでな。そうまでしたにも関わらず、今回の一件だ。彼等の堪忍袋の緒が切れても仕方あるまいよ』

久延毘古様がいつものキセルを楽しんでいるのだろう。

電話越しに煙を吐く細い吐息が聞こえる。

何か口にせねばと考えるのだが、頭の中を巡る言葉はどれもこれも薄っぺらいものしか思えず、声にする事ができない。

久延毘古様の話から、事態を收拾する手掛かりでもと思っていたのに、なんて様だ……。

『む……話が随分と逸れてしまった、本題に戻らねばな。さて坊主、お主に電を送ったのは日本神話としての決定を伝える為だ』

「決定、ですか？」

『左様。坊主、いや姫島慎よ。駒王町監査の任に就く者として、彼の地の管理を担う悪魔グレモリーに冥界への退去を命ぜよ』

告げられた命令に俺は息を飲んだ。頬をイヤな汗が伝うのがわかる。

この件の知らせを受けてから色々ショックな事があったが、こいつは飛びつきりだ。

情報過多で茹だつた頭が、一周回って冷静になるくらいに。

「久延毘古様、それは何故でしょうか？」

『街と民を護る為よ。彼の管理者と友人は現魔王の身内と聞く。ダーナ神族が狙う可能性は高い』

久延毘古様の言う通りだ。リアス姉とソーナ会長という現魔王の妹がいるのに、その警護は未熟な自身の眷属だけ。

ダーナ神族にとって、これほどおいしい獲物は無いだろう。

『我らは聖書の勢力とダーナ神族の争いで、中ツ国やそこに住まう我らが民に被害を被るのを望まぬ。そちらの姫君も事が治まるまでは、警護が万全な冥界に居た方がよからう』

「……それは、事態が收拾すれば町の管理を再びグレモリーに委ねる、ということですか？」

『その時に、彼の者が無事であればな』

久延毘古様の返答に、俺は胸をなで下ろした。

こちらとしてもリアス姉達の避難には賛成だが、管理権の問題が引つかかっていたのだ。この言質が取れたのなら、安心してリアス姉達を逃がす事ができる。

あとは事態の收拾に全力を傾けるだけだ。

「了解しました。この件はグレモリー女史に、必ずや命じましょう。ところで、この件は冥界政府に伝わっているのでしょうか？」

『さてな。我等は天界に向けて布告したとしか聞いておらぬ』

「では、こちらから伝えても?」

『構わん。どうせ、じきに知れる事ゆえな』

「ありがとうございます」

『それと、この街に入り込んだ墮天使の処理は我らで行う事になる。分かったれた聖剣の回収もな』

「聖剣の回収、ですか?」

『うむ。ゴブニュ殿より復元するので、と協力要請があったのでな』

「今、聖剣を持った悪魔祓いが隣にいるんですけど、そつちも?」

『回収してくれば手間は省けるが、無理はせんでもよいぞ』

「はあ……」

『さて、其方での事を済ませた後は、真神殿の探査を元に捜索を頼むぞ』

「はい」

久延毘古様の指示に是と答え、俺は通話を切った。

まさか、朝の一件がこんな事態を引き起こすなんて、正直予想外にも程がある。

何とかしたい気持ちはあるが、日本神話所属とはいえ、非正規雇用の一地方都市の監査官でしかない俺が手を出すには話が大きすぎる。

今できる事はアザゼルのおっちゃんとサーゼクス兄に連絡して、何とか対処に動いてもらうだけだろう。

「ねえ、慎。今の電話は何なの? いい知らせじゃなさそうだけど……」

「悪い。立て込んでるから、ちよつと待ってくれ」

こちらに洩れた会話から異常事態である事を悟ったのだろう、硬い表情で発したリアス姉の言葉を俺は切って捨てた。

ある程度情報を纏めないと説明なんて出来ない。ヘタに教えて暴走なんてされたら、取り返しのつかない事になる。

携帯を操作し、まずはアザゼルのおっちゃんへコール。

『おう、慎か。珍しいな、お前が俺にかけてくるなんて』

二度の呼び出し音を挟んで電話に出たおっちゃんの陽気な声に、軽

くイラツときた。

……いかんいかん。こういう時にこそ冷静にならないと。

「おっちゃん、いきなりで悪いが緊急事態だ。ダーナ神族が聖書の勢力に宣戦布告した」

『……………はああっ!? なんだそりや! こっちは聞いてねえぞ!!』

受話器から飛び出した素っ頓狂な声に思わず携帯から離す。いきなりこんな事を言われたら、そんな反応になるわな。

「気持ちわかるが落ち着け。聞いた話だと、むこうは天界に告げたらしいぞ」

『ミカエルの野郎、情報止めてやがるのか! それで、どうしてそんな事になった!?!』

混乱するおっちゃんを宥めながら事情を説明する。こっちの話を聞いている内に気持ちを落ち着かせたのだろう、説明が終わると冷静さを取り戻したおっちゃんは盛大に溜息をついた。

『事情はわかった。コカビエルのアホに天界のクソツタレ共め……。それで、どうするつもりだ?』

「正直、こっちにできる事はほとんど無い。不法侵入で、コカビエルのおっさんをブチのめすくらいだよ」

『……………そうか。日本神話に借りを作っちゃう事になるが仲裁を依頼して、謝罪と賠償を土産に停戦に持つていくしかねえか』

「ごめん。せめて天照様には仲裁の件、こっちからも言っとくから」

『気にすんな。それで、この件は悪魔は知ってるのか?』

「今からサーゼクス兄に連絡する」

『そうか。なら、俺に連絡するように伝えてくれ。すぐにでも対策を練りたい』

「ああ」

『頼むな。あと、あんまり無茶はするなよ』

「善処するよ」

アザゼルのおっちゃんとの通話を切って、大きく息をつく。

漏れた言葉で事態を察しはじめたのだろう、周りからの視線が痛い
が、説明はまだだ。

物事には順序というものがある。

次に発信するのは、冥界の首都『ルシファード』の魔王執務室だ。サーゼクス兄はああ見えて結構おつちよこちよいなところがあり、携帯をよく忘れるのだ。

だから連絡を取るなら、執務室かグレイファイア姉さんに連絡したほうが確実だったりする。

『はい、魔王執務室』

電話に出たのはグレイファイア姉さんだった。ありがたい、他の職員なら手続きやら何やらで時間を食うところだった。

「グレイファイア姉さん、俺だ。サーゼクス兄はいるか？」

『え、慎なの？』

「ああ。悪いけど、時間が無い。ダーナ神族が聖書の勢力に宣戦布告した。だから、サーゼクス兄と至急連絡が取りたいんだ」

『……っ!? すぐに繋ぐわ』

グレイファイア姉さんの慌てた声と共に通話はすぐに保留に切り替わった。

耳障りの良いクラシックが1分ほど流れて、ようやくサーゼクス兄に繋がってくれた。

『慎、グレイファイアから話は聞いた。この情報に間違いはないんだね？』

「ソースは日本の神の石柱、久延毘古様だ。日本神話勢は古くからダーナ神族と親交があったらしいから、信用性は高い」

『そうか、よく伝えてくれた。天界や教会の主だった拠点を監視している者に確認したところ、むこうではまだ戦端は開かれていないらしい。もちろん冥界も大丈夫だ。今から早急に手を打てば、戦争は回避できるかもしれない』

「ホントか。それから、この件の対策を練るから、アザゼルのおつちやんが連絡くれって。あと、リアス姉達駒王町に住む悪魔に退去命令が出た。リアス姉達の身の安全の確保と街が戦火に巻き込まれないようにする為の措置だ。今から帰すから受け入れの準備、頼むな」

『わかった。父上に伝えておこう。それでリアスの駒王町に置ける管

理権については?』

「この件にカタがついて、悪魔側に問題がなければ、継続するらしい。久延毘古様から言質とったよ」

『それなら一安心だな。ところで君はどうするんだ?』

「俺は日本神話の職員として、不法侵入したコカビエルの対処に当たる。ここで俺まで冥界に逃げたら、契約不履行で管理権を剥奪されるからな。あとはアザゼルのおっちゃんか、日本神話勢を仲裁に立てるつもりらしいから、それについてもこつちからも声を掛けとく」

『……すまない。いつも苦勞をかける』

「いいよ。ミリキヤスの時にも言ったろ。身内なんだから、身体を張るのに理由はいらなくて。それより、外交頑張つてな。みんなが戦争に巻き込まれるなんて、勘弁だぜ」

『ああ、任せてくれ』

「それじゃあ、また」

『其方も気を付けて』

携帯が待ち受け画面に戻るのを確認して、最後の場所へと電話を掛ける。墮天使総督、魔王ときて最後は日本神話の主神である。こんなところに電話をかけるのなんて、世界広しと言えど俺くらいのもだろう。

『はい、天照です』

「突然、連絡して申し訳ありません。駒王町監査官の姫島です」

『気にする事はありません。夜間でなければ相談はもちろん、雑談などでも気軽に掛けてきてもいいのですよ』

「あ……ありがとうございます。実は、相談したい事がありました」
『皆までいう事はありません。墮天使総督が持ちかけてくる、ダーナ神族と聖書の勢力の仲裁の件ですね』

「その通りです。しかし、どうしてそれを?」

『私は太陽の化身。天に日が輝く限り、あしはらなかつくに葦原中国に私の知りえない事は無いのですよ』

クスクスと楽しそうに笑う天照様に俺は内心舌を巻いた。さすがは太陽神にして日本神話の主神だ。能力一つ取っても半端ない。

『ですが、その件については受ける訳にはいきません』

「……ツ!? なぜでしょうか?」

思わず荒げてしまいそうになる声を何とか抑えた俺は、電話越しに漏れない様に小さく息を吐いた。

ここで頭に血を上らせてどうする。

むこうの不興を買ったらそれで終わりなんだぞ。

落ち着いて、冷静に、冷静にだ。

『ふふつ、なかなか感情のコントロールが上手くなりましたね。3年前なら冷静でいられなかったでしょうに』

「そりゃあ、こんな分不相応な大役に就いていますからね、成長の一つでもしないと嘘でしょう」

『それは結構。さて、受けられない理由ですがこちらにメリットが無いからです』

「メリット、ですか」

『そうです。知つての通り、仲裁というのは上手く事を纏める事ができて、初めて評価される物。逆に失敗すれば周囲の評価を下げるだけでなく、仲裁の対象であった双方に恨まれるというリスクがあります』

携帯越しの天照様の言葉に思わず頷いてしまう。

『今回ですが、ダーナ神族を停戦の場に呼び出すには、聖書の勢力が余りにも恨みを買いきっています。千年以上もの間積み重なってきた怨嗟を覆すには、それこそかつてダーナ神族が支配していたイルランドからイギリス全域を、彼らに返還するくらいはしなくてはならないでしょう。アザゼル総督にそれだけの物を用意できると思いますか?』

天照様の問いに俺は返す言葉を持たなかった。あまりにも、あまりにも破格の代償だ。いかに戦争回避のためとはいえ、こんな条件を天界や教会の連中が飲むとは思えない。

万が一飲むことが出来たとしても、内部に不満を持つ者が必ず現れるだろう。そいつ等がテロなどを起こそうものなら、和平などその時点で吹っ飛ぶ。

悔しいが、現実的にはどう考えても不可能だ。

『もう一つ言えば、この仲裁を纏めたとしても、評価よりも多くの反感を得てしまう事ですね』

「反感って、なんで……!?!」

『此度の一件、非は聖書の勢力にあるとして、多くの神話勢はダーナ神族に同情的です。中でも、似たような境遇であるローマ神話や中東、アフリカの土着信仰からは、ダーナ神族に協力して聖書の勢力を倒すべきという声も挙がりました。ダーナ神族の動向を見るべく放った隠行鬼からの報告では、実際に同盟を持ち掛けた神話勢も複数あるようです。現状で双方被害無く停戦を結ばせれば、我々が聖書の勢力との在らぬ関係を疑われる危険があります』

天照様から突きつけられた現状に、俺は言葉がでなかった。

……甘かった。まさかこの短期間に同盟を組まれるほど、聖書の勢力が周りから敵意を持たれていたとは。

これでは、仲裁なんて誰も受けるはずがない。

『理解できたようですね。私も日本神話を束ねる身、不利益しか齎さない仲裁を引き受ける訳には参りません』

ぐうの音が出ない程の正論である。だが、こっちも大人しく引き下がるわけにはいかないのだ。

「天照様、そこを何とかありませんか？ 私にできる事なら何でもしますので、どうか……」

先程の天照様の言葉を信じて、俺は深く頭を下げた。我ながら情けないが交渉材料なんて存在しない。情に訴えるのが精々だ。

『ふむ……、何でもですか。ならば、今の様な期間限定の非正規ではなく、正式に日本神話に所属してもらいましょう』

「は……?」

今出した声がひどく間抜けだというのは、自分でもわかった。

『ふふふっ。どうしたのですか、酷い声ですよ?』

「あ、いや……すみません」

うん、これは恥ずかしい。正直、問答無用で突っぱねられるとばかり思っていたから、まさか条件を出されるとは考えていなかったの

だ。

「しかし、なぜそのような条件を？」

『不満ですか？』

「不満ではありません。ただ、疑問には思います」

そうだ。思えば、二年前に会った時から、天照様は俺と美朱を日本神話に入れたがっていた。

普通なら自陣の神が世話になったからと言って、13のガキを監査官になんてするはずがない。

最初は姫島の家関係かと思っていたが、それも本家に正当な当主である朱雀女史がいる以上、そこまでする必要はないはずだ。

親父の血も、雷撃ならば武御雷様や菅原道真公がいる以上、そこまですべて重要視されないだろう。

残る俺と美朱の特異な点と言えば、転生者である事と――

「まさか、影忍の血か？」

『中々の洞察力ですね。その通り、我々が貴方達姉弟を欲している理由は影三流。いいえ、異星の妖魔を討つ御神刀を使う事のできる者が必要だからです』

我知らず漏れた言葉に肯定の意を示す天照様。その理由に俺は思わず眉を顰めた。まさか妖刀伝が現実になった影響が、こんなところに出ようとは……。

「異星の妖魔というのは、綾女様の残した古文書にあつた朧衆おぼろしゅうと森蘭丸の事ですな」

『そうです。彼の者こそが平安時代に現れ、数百年を掛けてこの地に冥府魔道を開こうとした異星の妖魔の王。彼は我々が手出しをできない様に、高天原と中国なかつくにの接点を強力な結界で封じました。そして当時飛驒に居た刀匠頼正に、自分たちが封じられていたアレクサンダー彗星の隕鉄を与え、御神刀を打たせました』

「美朱が持つ妖刀の原型……」

『その通り。その後、妖魔に狙われた頼正は御神刀を三振りの刀に打ち直し、三人の息子に託して逃亡させました。三人は美濃、加賀、信濃へ落ち延び、各々が葉ヶ塊はがくれの里、日向ひゅうがの里、香澄かすみの里を開きました。

そして三つの里は、当時の朝廷との争いに敗れて落ち延びた、藤原千方に使役されていた四体の鬼を迎え入れ、その見返りに彼らの術を学びました。それが後に忍の源流と言われる影三流です』

氣付けば、俺は天照様の話に耳を傾けながら、その内容をメモに取っていた。これは妖刀伝の本編には出ていない情報……いや、この世界における忍の誕生秘話だったからだ。

『その後、戦国の世まで時代は過ぎ、妖魔の王は森蘭丸と名を変えて、当時尾張の弱小大名だった織田信長を天下人寸前にまで押し上げた。自身の配下である妖魔を臙衆という名の忍びに変え、暗躍させること
によって――』

この辺は妖刀伝の本編であり、祖先である綾女様の遺した古文書の内容に沿うモノだ。事実確認も含めて天照様の後を引き継いでみよう。

「しかし、その天下取りも奴の真の目的の隠れ蓑でしかなかった。妖魔の王の真の目的は、同胞が封じられているアレクサンダー彗星へと続く冥府魔道を開き、日本を奴らの新天地にする事。その為に、影三流の里を滅ぼし、信長を『黒の魔神』と呼ばれる化け物に造り替えた」
『……おや。その知識はどこで?』

「祖先の香澄の綾女様が遺した古文書からです。美朱が解読するのを手伝っていたものですから。事実と相違ありませんか?」

『ええ、大丈夫ですよ。彼の王の目的は果たされることはありませんでした。御神刀を継承した影忍の生き残り達が、安土城で信長と王を討ち果たしたのだから。その後、漸く結界を解除できた私達は安土城に残されていた日向の御神刀を回収し、影忍唯一の生き残りである香澄の綾女、彼女とその子孫を見守る事にしたのです。再び異星の妖魔が現れた時、対抗策である御神刀の使い手の血を絶やさぬ為に』

「天照様は、奴等が再び現れると思っっているのですか?」

『確証はありません。ですが、彼の凶星は未だに宇宙を彷徨っています。ならば、新たな臙の王が出現する可能性はあるでしょう。この世界に異星の来訪者との接触の記録は数あれど、明確な害意を持って侵略を受けたのはわが国だけです。だからこそ、対抗策を持ちたいと思

うのは当然ではありませんか?』

なるほど、俺と美朱に拘る理由がわかった。

実は朱乃姉は墮天使の血が濃い上に悪魔に転生した所為で、妖刀の力を引き出す事は出来ないのだ。

もつとも、俺も美朱ほど妖刀への適性は無く、刀身に破邪の力を宿すのが精一杯なんだが。(美朱は破邪の力を斬撃として飛ばしたり、収束させてビームにすることも出来る)

しかし、どうしたものか。

正式に日本神話に所属すれば、日本に根を降ろす事になるので、今までのように冥界へ行く事は出来なくなるだろう。

そして、個人的繋がりがあるといっても、1組織のトップであるアザゼルのおっちゃんやサーゼクス兄とも不用意に会えなくなる。

他勢力からの賄賂と取られかねない以上、グレモリー家や親父からの援助も受けられない。

何よりキツイのが、理由はどうあれ今まで世話になった冥界の人達を裏切ると云うことだ。

だが、それだけの代償を払っても、日本神話が仲裁に立つ効果が大きいのも事実。

八百万の神という言葉通り、日本神話は驚くほど多くの神話勢力と繋がりがある。

仏教を通して、インドのヒンズー教の神であるデーヴァ神族やアスラ神族。そして中国の道教。

真神様のように狼信仰から北欧のアース神族。

さらにはエジプト神話やダーナ神族、冥府と黄泉との交流からギリシャ神話のハーデスとも繋がりがある。

そんな日本神話が間に立つのなら、例え戦争が避けられなくても最悪の事態には至らないはずだ。

脳裏には聖書の勢力の知人の顔がぐるぐると巡っている。

それでも最善の手は出ている。

今の俺には迷う必要も、その為の時間もないのだ。

「……わかりました。今回の件で仲裁を行ってくださいるならば、俺は

日本神話に仕えましょう」

口の中に妙な渴きを覚えながら、俺は何とか言葉を吐き出した。『確かに聞きとどけました。ならば、私も全力で仲裁の役割を全うする事を誓いましょう』

天照様の宣誓と共に、何かがカチリと嵌まった感覚があった。

意志ある言葉には言霊が宿る。書面へのサインも契約の儀式も無いが、これで俺は正式な意味で日本神話の一員になったのだろう。

「ですが、天照様。俺は美朱ほど妖刀の適性はありませんよ?」

フワフワと所在の定まらない気分を紛らわす為に話題を振ってみると、返ってきたのは鈴を転がしたような笑い声だった。

『構いません。私達が貴方に求めるのは他の力ですから』

「他、ですか?」

『そうですね、種族の限界を超え、無限に成長する力といいたいでしょうか』

天照様の言葉に首を捻る。どう考えてもそんな力に覚えはない。

『自覚がありませんか。二年前、貴方は手力男たじからおに一手で敗北した。ですが、今では正面から挑んで打ち勝つ様になっている。たった二年で神を超える、それは異常な事なのですよ』

「まあ、必死に鍛えましたからねえ。そんな事もあるんじゃないですか?」

『あ・り・え・ま・せ・ん! 例え神滅具を使っても、2年という短期間で神を超えるなんて不可能なんです! ですが貴方はそれを成し遂げた。恐らく、貴方は生物が持つ種族的限界を超えてしまったんでしょう』

「だから、無限に強くなる?」

『恐らくは、ですが。生まれた種族以上の力を持つ者を一般には「超越者」と呼びますが、彼らの力は全て先天的に与えられた能力なんです。貴方のように後天的な修行で、限界を超えた者は見た事がありません。今貴方がやっている修行も、通常の人間や墮天使では到底耐えられないものなのですよ』

「そうですね」

『ええ。10tの重りを着て20倍の重力負荷を掛けるなんて、神や魔王でも無理です。その状況で普通に動くとか、どこの化け物ですか貴方は』

ええ、化け物って……。最初はキツかったけど、普通に適応できたんだがなあ。

『ともかく、私は貴方が【無限の龍神】と【真なる赤龍神帝】に続く第三の無限となると思っています。だからこそ、貴方が得られるのなら、今回の仲裁を受けてもいいと思っていますのですよ』

「はあ……」

なんとも気の抜けた声が出てしまったが、それも仕方ないだろう。

無限ねえ……。まあ、無限の闘争MUGENを持つ身としてはなじみが深い言葉だが、自分がそうだと言われても今一ピンとこない。

まあ、無限を超えたような強さの奴なら心当たりがあるんだが。

ブロリーとか伝説の超サイヤ人とかデデーンとか。

「えーと……それじゃあ、時間が押してるんで切りますね。仲裁の件よろしく願います」

『ええ、任せてください。そっちも駒王町の防備と墮天使の対処は任せましたよ』

天照様の言葉に是と答えて、通話を切った俺は深々と息を吐いた。

ああ、疲れた。

なんか人生において重要な選択をしてしまったが、こんな状況だから仕方がないだろう。

携帯を懐に仕舞いながら顔を上げると、部屋中の者全てが此方を注目していた。

特に俺の身売りに気付いているのだろう、美朱が物凄い目つきになっっている。

さて、どう説明したものか。

本来なら日本神話の監査官として格式ばった口上なんかを言うところなんだが、もうそんなんやってる余裕はない。

取り敢えずは美朱を説得した後で、支取会長と生徒会を呼び出さないとな。



天照様との通話を終えて数分後、俺達はオカ研の部室から生徒会室へと河岸を変えていた。

室内に集まっているのはオカ研メンバーと悪魔祓い二人組、そして駒王生徒会の面々だ。

あの後、みんなに内緒で美朱に天照様との契約の話をしたのだが、もう反応が凄かった。

さんざつぱらこつちを罵倒した挙句、『慎兄だけ置いとくなんてできないから、私もそつちに就職する』なんて言い出したので、慌てて止めた。

もう少し考えてから行動しろって言ったたら、『慎兄が言うな!!』と返されたが。

さっきの天照様の話を綴ったメモを賄賂にしたが、会議が始まる前に一応の説得が出来て胸を撫で下ろしている。

「おいおい、一年坊が何生徒会を呼び出してんだよ。姫島先輩の弟だからってちよつと調子に乗り過ぎじゃないのか?」

全員が席を着いて、さて話を始めようと言うときに、支取会長の眷属の席に座っている金髪の男からクレームが飛び出した。

あんな品の無いチンピラ、会長の眷属に居たっけ? 今は緊急事態だし、これ以上妨害するようなら対処を考えなければならぬか。まあ、顎の一つでも砕けば大人しくなるだろう。

「お止めなさい、匙。彼は日本神話から派遣された監査官。私達悪魔がこの地を管理できているかをチェックする役目を負っているのです」

「日本神話って、裏切り者じゃないですか!?!」

「私達が監査官になってなかったら管理権をはく奪されるか、もつと厳しい監査官が派遣されてるよ。そうだったら、日本で眷属を増やすなんて絶対無理だろうね。あ、その前に管理者でもないカイチヨは冥界に帰されてるか」

「ふざけんな！　ここは悪魔の領土だろ、そんな事になる訳——」

「ゴタゴタがあつて悪魔に管理権を委託してるけど、昔も今もここは日本の領土だよ。少しは勉強しなよ」

金髪君と言ひ合いを始めた美朱に、俺は頭を押さえた。

こんな時になにやっつてんだ、こいつ等は。

「支取会長。眷属への教育は事前に済ませてくれないと困るんですけど?」

「申し訳ありません。匙、いい加減にしなさい!!」

支取会長の叱責に、出かかつていた文句を呑み込む金髪君。こちらも軽く美朱に拳骨を落としておく。不満タラタラの顔で美朱を睨んでるところを見ると反省してないな、ありや。

さて、いきなり脱線してしまつたが、気にしてる場合じゃない。ちやつちやと通達事項を伝えるとしよう。

「コホン。本日はお集りいただきありがとうございます、俺はこの街で日本神話の監査官をしている姫島慎といいます。普段ならここで色々と前口上を述べるのですが、今回は緊急事態なので省略させていただきます。本日未明、ダーナ神族より聖書の勢力に宣戦布告がなされました」

瞬間、室内が騒然となつた。シトリー眷属達は各々に騒いでいるが、グレモリー眷属と悪魔祓い達は部室の話进行を思い出したのか、顔が蒼白になっている。

支取会長が自身の眷属を、何度か叱責してようやく治まつたので、話を続ける事にする。

「開戦の理由は、ブリテン島の統治者の証にして王権神授の象徴たるエクスカリバーを、泉の乙女ニユミエを殺害する事で強奪。聖書の勢力の内部抗争でこれを損壊し、さらにはその破片で劣化品を作成するなど大きく貶めた事に対する報復との事です。さて、我等日本神話勢は本件の対処として、聖書の勢力の一翼を担うあなた方悪魔へ冥界への退去を要請します。これは駒王町が戦火に曝されない為と、あなた方の身の安全を守る為の措置です。なお、現在そちらに委託している管理権ですが、この事態が収束するまでは一時凍結。事態が治まり、

グレモリー女史が業務に復帰できると確認した時点で、凍結解除ということになります」

全ての説明を終えると室内に沈黙が降りた。聞いていた者達は、余りの事に愕然とする者、急な事態に困惑する者、理解が追いつかない者、と反応は様々だ。

「Mr. 姫島、今の話は本当なのか？」

「残念ながらも。だが、宣戦布告はなされたものの、まだ戦闘は始まってはいないらしい」

「そんな、どうして……」

「理由は今言った通りだ。現在、天界を除く聖書の2勢力のトップは停戦に向けて動きだしている。あっちの思惑通りに進めば日本神話勢を仲裁に立てて、三勢力のトップの謝罪と賠償を手土産に停戦。そこからできれば和平、少なくとも相互不干渉は結ぼうというところだろう」

「そんなんっ!? ミカエル様が異端の神に頭を下げるなんて!!」

「聖書の勢力の現状は説明しただろ。そこを考えれば、トップが頭下げて、戦争が回避できれば安いもんさ」

黙したままのゼノヴィア嬢と、納得がいかないままに騒ぐ紫藤嬢は放っておいて、俺は悪魔側に目をむける。

グレモリー女史と朱乃姉は現状に困惑気味、祐斗兄は相変わらずゼノヴィア嬢の持つ長物を睨みつけてるし、塔城とアジア先輩はただ不安そうな顔をしている。支取会長は冷静な顔をしているが、額に汗が浮かんでいるところを見ると、眷属の手前無理やり動揺を抑え込んでいるだけのようだ。

黙ってこちらの様子を窺うだけなので、水をむけようとした瞬間、ゾクリと背中に悪寒が走った。

何者かがこちらに刺すような殺気を放っている。

場所は——窓の外からか！

「全員、窓から離れろ!!」

警告を発しながら床を蹴った俺は、一番窓に近い位置で困惑の表情を浮かべている女生徒、確か生徒会の副会長だったはずだ、の身体を

抱えると三角飛びの要領で離脱する。

腕の中から洩れる甲高い悲鳴に閉口しながらトンボを切って着地した次の瞬間、部屋の窓が壁ごと全て爆砕した。

咄嗟に副会長を庇いながら立ち込める黒煙に目を凝らすと、外から次々とこちらに飛び込んでくる影が見えた。

「嚙矢は放たれたというのにこんな所で会議とは、随分と呑気ではないか」

高貴さを感じさせる深みのある声と共に風が黒煙を払うと、そこには灰色の毛並みの馬に跨り、チエインメイルと金色の兜で武装した騎兵達がいた。

3階にある生徒会室に乗り込んだにも関わらず、一糸乱れない整列を見せる騎兵の中から歩み出る指揮官らしき男。

一目で一級品と判る白銀の鎧に兜で身を包んでいるが、一番目を引くのは右肩から生えた銀色の腕だ。

「お初にお目にかかる。私はダーナ神族が一柱、ヌアザ。魔王の妹君の身を頂きに参った」

男、ヌアザはその銀腕をこちらに向けながら、兜から覗く口元に不敵な笑みを浮かべる。

「ふざけんな！ お前らなんか部長を渡せるか!!」
「そうだ！ 会長は俺達が護る！」

血気はやるイツセー先輩と金髪君を抑えながら、俺は自身の見通しの甘さに歯噛みした。

まさか最初にここに襲撃を掛けてくるとは、天界や冥界が攻められていないかった事で油断していた。

しかも、その指揮官でヌアザなんて大物が来るなんて、予想外にも程がある。

ヌアザ神は、ダーナ神族がアイルランドに持ち込んだ四つの宝の一つ「不敗の剣」を持つ戦いの神で、トゥアハ・デ・ダナン（ダーナ神族）の王だ。ある戦いで片腕を失った際、スアザ・アガートラム 医術と技術の神デイアンから送られた銀の義手を着けていた事から、銀腕のヌアザと称される。

一説によると、ギリシャ神話の主神、ゼウスに匹敵すると言われるほどの強力な神だ。

はつきり言つて、会長とリアス姉の眷属が束になってかかっても、到底勝てる相手じゃない。

だが、ここで二人を渡すわけにはいかない。そうならば、停戦の芽が完全に潰れちまう。

「お待ちください、ヌアザ王」

浮足立つ悪魔達から一步前に出た俺は、ヌアザの前に跪いた。おい、後ろの奴等、こんな事で動揺するな。こんな状況とはいえ相手は貴人なんだから、礼を示すのは当然だろうが。

「ふむ、そなたは？」

「私は姫島慎。日本神話の命で、この街における悪魔の監査に就く者です。ヌアザ王、我等が主天照大神様は貴男方の戦争で、我等の国土や民が被害を受ける事を望んでいません。どうか、この場は兵を退いてはいただけませんか？」

「この国においては戦端は開くな、そう申すのだな？」

「左様でございます」

騎馬の上からこちらを見下ろしてくる碧眼を、真っ直ぐに見据えて言葉を返す。視線から感じる重圧はさすがは神々の王と言うべきものだが、この程度なら將軍様の方が威圧感がある。

お互いにしばしの間無言のまま視線を交わしていると、急にヌアザは呵々と笑い始める。

「我が視線を受けても眉一つ動かさないとは、人間でありながら中々の胆力だ。さすがは天照殿から監査の任を与えられる事はあるな」

「恐縮です」

「うむ、貴国の言は解った。他国同士の戦争で、自分の土地を荒らされるなど到底看過できるものではないな。だが、我々も子供の使いでここまで出向いているわけではない。敵国の王族を前にして、指を咥えてみているだけというわけにはいかんだ」

「では、戦闘を行うと？」

視線を強めると、ヌアザは苦笑いを浮かべながら両手を前にして

『静止』のジェスチャーを見せる。

「まあ待て、監査官殿。我々と貴国は我等が『常若の国』に籠った後も長い蜜月を保って来た。私としても尻の青い小娘程度で、それを崩すというのは遠慮したい。そこで、だ。一つ賭けをせぬか？」

「賭け、ですか？」

「そう構えずともよい。私とそなたが腕相撲で勝負をして、負けた方が相手に譲るというだけよ」

「つまり、貴男が勝てば私はここでの戦闘行為を見逃し、私が勝てばこちらは兵を退く、と云うことですね」

「然り。もちろん、戦闘の際には周りに被害が及ばぬように配慮はする。見たところ、悪魔諸君は姫君を含め尻に殻が付いたヒョッコばかり。仕損じることはあるまい」

「又アザの挑発に色めき立つ眷属達を、相手のヤバさが分かっている支取会長と美朱が宥めている。

正直、身内の関わる賭けなんてゴメンなんだが、今回ばかりはそうも言うてはいられない。

何としてでも勝って、穩便に退いてもらわねば。

「わかりました、お相手します」

「うむ。では準備といこう。……………その机を借りるぞ」

満足げに頷いて馬から降りた又アザは、部屋の中を見回して、腕相撲をするのに手頃な中程度の机に目を留めた。

部下に命じて、自身の前にその机を持って来させると、今度は騎兵隊の奥から魔術師風の男達が現れ、机に魔術を掛けて去っていく。

「さて、監査官殿。準備が整ったぞ」

兜を部下に預けた又アザは、銀腕を机に立てて、髪と同じく黄金の髭に隠れた口元に、不敵な笑みを浮かべる。

呼ばれるがままに、又アザの対面に立った俺は、魔術が掛けられたら割に、変化が見えない机に目を落とした。

「何の魔術を掛けたのですか？」

「硬化だ。我々が力を比べるのだ。只の机ではあつという間にめげてしまうからな。今のこの机は魔術の効果で、下手な魔法金属よりも頑

丈になっている。全力を出しても壊れる事はあるまい」

ヌアザが銀腕の肘で机を小突くと、木製の机から金属を打ち合わせるような音が鳴った。

納得がいったので、ヌアザと同じく腕相撲の体勢を取り、先に置かれた銀の手を握り締める。

「勝負を始める前に一つ、いいですか？」

「なにかな？」

「何故こんな事を？」

そう尋ねると、ヌアザはその精悍な顔に満面の笑みを浮かべた。

「それはな、そなたがあちら側で飛び抜けて強いからよ」

ヌアザの答えに思わず渋面を作ってしまう。

「私は戦士だ。戦士はより強き者と戦い、勝つことで誇りを満たす。此度のように、弱者を蹴散らして女を攫うなど、賊のやることよ」

「だから、俺と勝負するために、こんな事を」

「そうだ。本当は剣を合わせたいところだが、私の我が儘で日本との関係を悪化させるわけにはいかんからな」

そう言つて、カラカラと笑うヌアザ。

……なんか、思っていたのと違うなあ。伝承では、良き王つてなつてたから、理知的なイメージだったのに、実物はこんな脳筋万歳な方だったとは……。

「では、勝負をはじめよう。誰か、始まりの合図を出す者は居らぬか？」

おっと、惚けてる場合じゃない。リアス姉達の運命が賭かっているんだから、しつかりしないと。

「支取会長、合図をお願いします」

ヌアザの声に名乗り出る者がいないので、こっちで勝手に指名する。

因みに、支取会長を選んだのは何となくだ。

「えっと……。合図を担当させて、いただきます」

戸惑いながらも、組み合った俺達の手の上に自分の手を重ねる支取会長。

机を掴む左手、そして組み合った右手にゆっくりと力を込めながら、集中を高めていく。

張り詰めた空気の中、自分の心臓の音が五月蠅いほど、頭の中に響く。

集中だ、集中しろ。相手は神だ、生半可な小細工は通用しない。

初っぱなから全力でねじ伏せるのみ！

「レディ……………ゴー!!」

「ハイヤア!!」

「はああっ!!」

裂帛の気合いと共に、俺は渾身の力を右手に叩き込んだ。

中央で炸裂した力のぶつかり合いに、魔法金属よりも強固となった机が悲鳴を上げ、両者の右手の接地面からは摩擦で小さく煙が上がる。

にも関わらず、お互いの右手は細かく痙攣するだけで、ピクリとも動いていない。

眼前のヌアザには先ほどの余裕など微塵もなく、鬼の形相でこちらを睨みつけている。

向こうから見れば、俺も同じ顔をしているだろう。

机に噛んだ両者の肘が容赦なく天板を削り、机を掴む左手と踏ん張る両足はギチギチと軋みを上げる。

流星は神だ。重力トレーニングをしていなければ、とつくにねじ伏せられていただろう。

手首返しや体重移動なんてテクニクとは無縁の単純な力比べ。

なるほど、これは楽しい。

リアス姉達の身柄がかかっているのに不謹慎だとは思いますが、そう感じるのだから、仕方がない。

さつきヌアザを脳筋と言ったが、どうやら人の事は言えないようだ。

勝負が始まってどのくらい経ったのか。

息は荒く全身は汗で濡れ、力を込め続けた右腕は、意思に外れて痙攣が始まっている。

最初は戸惑い気味だったギャラリーも今では両者の名を叫び、声援を送っている。

そんな中でも、お互いの右腕は机の中央にそびえたままだ。

不意に、ヌアザから感じる力に緩みが生じた。

対面にいる相手に目をやると、汗に塗れた紅潮した顔で荒い息を吐いているものの、その目は獲物を狙う猛禽のそれだ。

相手はこのわずかなインターバルで、余力をかき集めて、勝負を仕掛けてくるつもりだ。

ならば、こっちの打つ手も一つだろう。

相手にならない、腕に込めた力を緩めて荒い息を整えると、こちらの意図に気づいたヌアザが、ニイツと男臭い笑みを浮かべた。

ホント、楽しそうだなこの神様。

お互いの意図を確認した俺達は、右手を握り直して全力が出せるように体勢を整える。

お互い、劣勢に立たされれば持ちこたえる体力は無い。

勝負は一瞬だ。

ギャラリーから放たれていた声援がピタリと止み、肌を切るような緊張感が場を支配する。

耳なりが起こりそうな静寂の中、俺はヌアザの目を真っ直ぐ見据える。

……まだか？

………まだか？

胃を締め上げるような緊張感と、燃え上がるような興奮に口元が大きくつり上がる。

そして、こちらを捉える碧眼に鋭い光が走ると同時に、俺は渾身の力を右腕に叩き込む。

その瞬間、ボゴンツと鈍い音を立てて机はバラバラに崩れ落ちた。魔法金属より強固だと言われた机も、俺達には付き合いきれなかったらしい。

木切れになった天板の欠片と、スチール製の足まわりの残骸が床を叩く中、俺達は右手を離した。

「引き分け、ですね」

「いや。そなたの勝ちだ」

こちらの言葉を否定したヌアザは、苦笑いと共に右手をこちらに掲げて見せる。

なんと、銀腕の手の部分が、俺が握った形にへこんでいた。

「人間と分けたうえに銀腕をこうまでされては、負けを認めぬわけにはいくまい」

「すみません、貴重な義手を」

「勝負での事だ、気にするな。しかし、デュナンの奴がこれを見たら、あの澄まし顔がどうなるかな」

少々動きが悪くなった銀の指を開閉させたヌアザは、含み笑いと共に自らの馬に跨がった。

「さて、勝負がついた以上、敗者は去るとしよう」

「ヌアザ王、本当によろしいのですか？」

「構わぬさ。その姫君達を抑える事など、嫌がらせ程度の価値しかないからな。日本神話に止められたと言えば、いくらでも言い訳は立つ。それに、今一族を率いているのはダグザ様だ。一介の戦士ではない私は、外交だの何だのといった面倒な事は考えなくていいのだよ」

施政者だった者としてと言ってはならん事を、とても清々しい顔でのたまうヌアザ。

……この神、本当は政務とか大嫌いだったのではなからうか？

「では、さらばだ諸君。監査官殿とは、いつか戦場で出会いたいものだな」

そう言い残し、ヌアザ達一団は風のように消え去った。

正に嵐のようなヤツらだったが、それに惚けている暇はない。

「朱乃姉、冥界への転移魔法陣を用意してくれ。新手が来る前に全員避難するんだ」

頷いて、即座に魔法陣を展開する朱乃姉。イツセー先輩や会長の眷属の幾人かは未だに戸惑っているが、もう付き合っている余裕はない。

次はあんな話がわかるのが来るとは限らないのだ。

「転移魔法陣の用意ができたわ」

「転移先は？」

「グレモリー家の前よ」

「サンキュー。みんな、魔法陣に入ってくれ！」

俺の指示によって生徒会のメンバーが魔法陣に入る。リアス姉達、オカ研組は何やら揉めているようだ。

こんな時にマジで勘弁してほしいのだが、今は文句を言う時間も惜しい。とりあえずは支取会長達だけでも脱出させよう。

「会長、時間が惜しい。先に行ってください」

「わかりました。姫島君、いえ姫島監査官。数々の配慮、感謝します」

「気にしないでください。今回の退去も半分はこちらの都合を押し付ける形なんですから。もし向こうで未登録の眷属の転移入国について問われたら、レヴィアタン陛下か実家に連絡してやむを得ない事情があったことを説明してください」

「わかりました。また、学校で会いましょう」

「ええ、必ず」

会長達が転移したのを確認して、俺は騒がしさが増したオカ研メンバーのところへ足をむける。

見たところ、祐斗兄が冥界に行く事を拒否してそれを皆で説得しているようだ。

「何やってんだよ、時間が無いつて言ってるだろ」

「慎、聖剣回収のに僕も連れて行ってくれ!!」

こつちの顔を見るなり祐斗兄が放ったとんでも発言に、俺は思わず啞然となった。

それはひよつとしてギャグで言っているのか？ と、頭の中に某有名ギャグマンガの迷台詞が流れたが、なんとかそれを口にするのは自重する。

正直、ギャグであってほしかったが。

「無理。俺にそんな権限ないから」

長引かせる時間も無いのでスッパリと答えると、何故か鼻白む祐斗

兄。

むしろ、何故断られないと思ったのか。

さっきの話を聞いてれば、そんな訳ないのわかるだろうに。

まさかとは思うが、ゼノヴィアの聖剣に気を取られて右から左だったんじゃないだろうな。

「僕は聖剣を破壊しないといけない！ その為に生きて来たんだ!! だから——」

「だから、この街を戦場にすするリスクを無視して連れてけ、か？ 無茶言うなよ。俺はともかく、リアス姉やグレモリー家まで破滅させるつもりか？」

猛烈な疲れを感じながらも口に出した言葉に、一同が凍り付く。

「は、破滅ってどういう事だよ!?!」

イツセー先輩が泡喰ってこちらに詰め寄ってくる。こんな少し考えれば分かる事……って、高校生の知識と政治感覚じゃキツイか。「どうもこうも、祐斗兄は日本神話からの退去命令を無視した上でこつちに残って、さらに戦闘までする気なんだろう、この街を戦場にとなれば、ダーナ神族に狙われる前に日本神話勢が祐斗兄を排除しに来る。実際、この退去の後に悪魔が残っていた場合、はぐれ悪魔と判断して日本神話勢の手で処理する事になってるしな」

「そんな、酷いです」

「何の為の事前告知だと思ってるんだ。自分が原因で戦場になるの解つてて、他人の土地に居座る方がよっぽど酷いだろ」

アーシア先輩がなんか頓珍漢な事を言っているので、軽くツッコんでおく。なに、辛辣？ 切羽詰まってる時にこんな騒ぎ起こされたら、誰だってこんな対応になるわ。

「でだ、祐斗兄が死ねば、当然身元が確認されてリアス姉の眷属だとバレル。となれば、責任の追及は主に行くわな。だが、神話間の問題なんて、未成年のリアス姉に責任が取れるわけがない。被るのは保護者であるグレモリー家だ。停戦交渉中に仲裁役への不祥事とあっては、共同で交渉に当たっている他の二勢力の手前、魔王の身内であっても軽い処置なんてできない。軽くて降格と領地没収、悪けりゃ取り潰し

になるだろうな」

俺が並べていく推測に、オカ研の面々は顔色を失う。リアス姉にいたってはその場にへたり込んでしまっている。

正直、俺もこんな事を言いたくはないが、祐斗兄の思いつめ方は普通じゃない。妙な行動に出られない様にするためには、この位は必要だろう。

言ってる事は脅しでもなんでもないしな。

「当然、身内であるサーゼクス兄にも責任は行く。あの人の性格なら魔王の座を辞任するしかないだろうな。さて、祐斗兄。アンタの師匠である沖田さんは、自分の弟子がやらかした事で主が王座を降りる事になったとして、平気な顔でいれる人だったか？」

もしそうなった場合、自分の師匠がどんな行動に出るのか思い至ったのだろう。先ほどの激情などすっかり失せた顔で、祐斗兄は地面に崩れ落ちた。

祐斗兄の師匠でサーゼクス兄の騎士ナイトである沖田総司さんなら、そんな事になれば間違いなく腹を切るだろう。

「祐斗兄。アンタと聖剣の間に何があったのかは知らんし、今更知る気も無い。でもな、聖剣は今回の神話間問題の中心になってる。もう個人の事情なんて入り込む余地はないんだ」

だから諦めろ、その言葉の最後と祐斗兄の上げる嗚咽が重なった。

ああもう……ホント後味悪いな、畜生。

「さて、大分時間を食っちゃったな。全員急いで魔法陣に入れ！ いっ敵が来るかわからねえぞ!!」

気まずい空気を振り払う為に、わざと大声でみんなを魔法陣に追い立てる。

リアス姉を朱乃姉が祐斗兄をイツセー先輩が支えて、全員が魔法陣に入るのを確認した俺は、朱乃姉に発動の合図を送る。

「朱乃姉、悪いけどアーシア先輩の事と祐斗兄のフォロー、頼むな」

「わかったわ。貴方と美朱も無茶はしないでね」

「イツセー先輩。むこうじゃ何も無いと思うが、もしもの時はみんなを頼むぜ」

「ああ、任せてくれ！」

魔法陣から上がる紅い燐光の中で言葉を交わしてすぐに、オカ研メ
ンバーは閃光と共に姿を消した。

「ねえ、慎兄。これからどうするの」

祐斗兄を説得する間、空気を読んで黙っていてくれた美朱の言葉
に、頭を巡らせる。

「まずは神社に戻って、真神様の鼻の探査を聞いてから番所の久延毘
古様と合流。あとは探査を元にコカビエルのおっさんの捜索だな。
とりあえず、お前は俺と一緒に行動すること」

「了解、了解」

そんじゃあ、家に帰るとしますかね。

「……すまない、Mr. 姫島。我々はどうしたらいいだろうか？」

こちらを呼び留める声に目を向けると、所在無さげに立つ悪魔祓い
の姿が。

あ、忘れてた。

12話

漆喰の自然な白が彩る土壁に木目を活かした柱。

そして入り口と窓には障子張りの引き戸が使われている華美な装飾は無いが、静かで落ち着いた部屋で私は来客を待っていた。

書院茶室を参考にした高天原の貴賓室は和の物で統一したお気に入りの部屋なのだが、惜しむらくは中央にある大きな机とそれを囲む椅子が雰囲気を損ねていることだろう。

個人的にはあそこに囲炉裏と座布団を置きたいのだが、ここには西洋の方が多く訪れるのを考えると、自重しなくてはならないのがツライところだ。

「天照大神様。聖書の勢力の方々がお着きになりました」

「そうですか。では、こちらにお通しなさい」

私の指示を受けた侍女は一礼をして、音を立てぬように障子戸を閉じる。

「ふん。奴らが来たようだな」

侍女の姿が消えると私の隣に腰掛けた男は、眼前に置かれた器の身を攻略していた匙を置いた。

私より頭3つほど高い筋骨隆々の身体を土色の鎧に包み、同色の兜を被ったこの御仁はダグザ神。

ダーナ神族の父神で、現在一族を率いている方だ。

「その様ですね。ところで、もうよいのですか？」

「ああ、馳走になった。やはり粥は貴国の米が一番だな」

刃物のような眼光を少し緩めて、ダグザ殿は満足げに兜から覗く口元を紙ナフキンで拭う。

遙か昔に麦粥に誘われて敵の罠に嵌ったことがあるのに、相変わらず粥には目がないらしい。

「しかし、宣戦布告から1日足らずであるの互いにいがみ合うしか出来ない者たちが、よく意見を纏めたものです」

「天界のハト共は知らんが、頻繁に地上に干渉していたコウモリとカラスは自分達の置かれている状況を掴んでいるはずだ。ならば形振

りなど構ってられんだろうよ」

腕を組みながら無然と言いつつダグザ殿。私もそうだが、彼も聖書の勢力を毛嫌いしている。こちらからの口添えが無ければ、交渉の席に着く事もなかっただろう。

まあ、私も彼との契約があるからこそ、こんな面倒な役を買って出たのだが。

「失礼します。天照大神様、サーゼクス・ルシファー様御一行をお連れしました」

「わかりました。入ってもらいなさい」

「承知しました。……室内は土足厳禁ですので、お履き物はここに置いて、お上がりください」

侍女の説明に複数の物音が重なり騒がしさが増した後、サーゼクス・ルシファーを先頭に聖書の3勢力の代表とその護衛が、室内に入ってきた。

向こうのメンバーはサーゼクスに冥界の外交担当であるセラフォル・レヴィアタンと護衛のグレイフィア・ルキフグス。墮天使は総督のアザゼルと幹部のバラキエル。そして天使は代表のミカエルと護衛として、権天使が二人だ。

他の者はもちろん、普段は魔王少女などとふざけているレヴィアタンも正装に身を包んでいるところを見ると、この会議の重要性は理解しているらしい。

「天照殿、この度は交渉の場を整えてくださったこと、感謝します」

「礼は結構。あなた方の為に行った訳ではありませんので。それよりもお掛けくださいな」

私の言葉に各代表者はこちらと向かい合う形で席に着き、護衛はその後ろに控える形で不動の姿勢を取る。

「では、全員揃った事なのでダーナ神族と聖書の勢力の交渉を始めます。アザゼル殿、そちらの要求はダーナ神族との停戦でよろしいですね?」

「そうだ。3勢力のトップである俺達の謝罪と教会が保有するエクスカリバーの返還。そして、損害賠償をもって今回の件を手打ちにして

もらいたい」

「……謝罪、か。一つ聞くが、貴様等はいったい何について謝罪をしようというのだ？ 我らの土地に入り込み信仰と土地を奪ったことか？ 魔女狩りと称して我らの庇護していたドルイドや魔術師を迫害した事か？ それとも、泉の貴婦人を手に掛け我等が聖剣を強奪し、弄んだことか？」

「天界と教会の馬鹿共がやらかしたエクスカリバーについて、だ。前の二つはもう時効だろう。大昔の事を持ち出されても困るぜ」

机に頬杖をつく不真面目な態度で、おどけて見せるアザゼル総督。こういう態度で相手に軽い挑発を行いつつ、感情を表した相手の隙を突くのが彼の交渉術なのだろうが、今回は相手が悪い。

アザゼル総督の言葉を聞いたダグザ殿は席を立ち、交渉の卓に背を向けた。

「どうなさいました、ダグザ殿？」

「今回の交渉は終わりだ。我々が受けた迫害を過去の事と笑う愚か者共と結ぶ手は、こちらにはない」

突然の行動に唾然としていた聖書の面々に代わって私が問うと、ダグザ殿は怒りを滲ませた声が返ってきた。

まあ、これは当然だろう。加害者には過ぎ去った事でも、被害者には終わる事のない忌まわしい記憶なのだ。

それを軽く扱ったアザゼル総督は完全に失言だった。

「天照殿、私はこれで失礼する。『常若の国』に戻って、同盟希望の勢力に返答せねばならぬのでな」

「……ッ!? お待ちください、ダグザ殿！ アザゼルの失言は謝罪します！ ですので、何卒交渉の席にお戻り願いたい!!」

同盟の言葉に顔を青くしたサーゼクスが必死に呼び止めるが、出口に向かうダグザ殿の歩みは緩まない。

個人的にはダグザ殿を止める気にはなれないのだが、仲裁役としてはもちろん、そして彼との約束を考えるとこのままというわけにはいかないだろう。

「ダグザ殿、ここは大目に見てはどうでしょうか。失言一つで目くじ

らを立てるのも大人げないですし、ここは貸しを一つということであちらを擁護する私の真意を確かめようとしてもしているのか、ダグザ殿はこちらをジツと見ているが、私が笑顔を崩さないのに根負けすると自身の席に再び腰を下ろした。

うん、この会談の後で彼との契約の話くらいは話しておくとしてしよう。

「まあよい。この場を整えた天照殿の顔を立てて、今の言葉は不問にしてやる。思えば、あの者の被造物である貴様等に、他者の気持ちを思いやれというのが無理というものだからな」

「……それはどういう意味ですか？」

「そのままの意味だ。貴様らの造物主が何をしたのか、忘れた訳ではあるまい。周りを慮る心があれば、あのような所業はできんさ」

主を悪し様に言われた事が許容できないミカエルの怒気もどこ吹く風で、ダグザ殿は眼前のお茶を音を立てて啜る。

言われてみれば、聖書の勢力が周りへの迷惑を考えないのはあの者にそっくりだ。

やはり、被造物は造物主に似るのだろうか。

小さく溜め息をつきながら、私は思考を過去へ遡らせた。

眼前にいる者達の主、聖書の神が犯した大罪について。

さて、人間の生誕は世間ではどのように考えられているのだろうか？

聞けば、ある学者が提唱した進化論という説が主流だとか。

猿が人間に進化すると考えるとはなかなか面白い話だと思うが、残念ながらそれは間違いだ。

人間は、世界各地に分布する神話の主神によって生み出されたのだ。

例をあげるなら、中国の民は女媧じよかと伏羲ふつき、北欧の民は始まりの巨人ユミル、そして大和の民は我が父母である伊邪那岐大神いざなぎのおおかみと伊邪那美大神いざなみのおおかみによって生み出された。

人間に多様な人種と言語があるのは、これが理由である。

多くの神々によって生み出された人間が世界各地でその生を懸命

に生きる中で、それを見守っていたとある主神はあるモノに気付いた。

それは次元の狭間に出来た魂の溜まり場と言うべきものだった。生を終えて地獄や黄泉、冥府で生前の功罪の清算を済ませた人の魂は、ひとりでそこに集まり再び生を得るのを待つ。

誰に言われることも無く自然に発生したそれを、各神話の主神達は魂の安息所と名付け、互いに手を出す事を禁じた。

その場を目にした全ての者は、それが人間の集合無意識の結晶であり、人という種の根幹を成す物だと理解したからだ。

しかし、聖書の神はその取り決めに破って魂の安息所に手を出した。

他に類を見ない一神教という性質故に他の主神よりも万能性に長けていた奴は、その力を使い魂の安息所に施されていた結界を解除。

そこに細工を施し、人の魂が再び生を受ける際にその魂に己が創り出した神器を宿すようにしたのだ。

さらに、仕込んだ神器システムの効果により、自身が生み出した民以外の人間も聖書の神に信仰を捧げるように仕向けたのである。

この絡繰りにより、当時中東の一地方神話でしかなかった聖書の勢力は爆発的に信者を増やし、世界中にその手を伸ばしていった。

我々がこの事に気づいた時には、多くの土着の神々が信仰を棄つ取られており、対処が出来たのは我が国やインド等、ごく僅かだった。

これが聖書の神が他の神々から嫌悪される最大の理由だ。神にとって、人は信仰を生み出す源であると同時に自身の産み落とした子同然だ。

父神である伊邪那岐大神からこの国を受け継いだ私は日本の民を生み出した訳ではないが、それでも彼等の事を弟妹と思ひ慈しんできた。

不完全であるが故にその短い生を懸命に生きる彼等を見守り、育んでいく。

自身の守護する地で次第に成長し、発展していく彼等の姿は永劫の時を生きる我々にとって、この上無い楽しみなのだ。

そんな宝物を汚され奪われたのだ、怒りを覚えない方がどうかしている。

しかし、当時の聖書の勢力は世界中の人々から集めた信仰によって肥大し、その力は我々を大きく上回っていた。

こちらに出来るのは自身の土地と民を守ると同時に、信仰を奪われて己が土地を捨てざるを得なかった他の勢力を援助しながら耐える事だけだった。

そんな雌伏の時代が続いたある時、聖書の勢力で大きな内乱が勃発した。

世界中に戦線を広げ、他神話の土地でも無遠慮に暴れまわる愚か者共には辟易したが、同時にこれはチャンスでもあった。

我々多神勢力はこの機に乗じて聖書の神を討つ事を決意した。

仕掛けたのは奴自らが陣頭指揮を取る最終決戦。

旧四魔王が奴に攻撃を仕掛けたと同時に、ギリシャ神話一の弓の名手アポロンがディーヴァ神族の破壊神シヴァの持つガンデーヴァに、我が至宝である天羽々矢あめのはばやを番えて聖書の神を射抜いたのだ。

多神勢力全ての民から借り受けた信仰とガンデーヴァの神力を束ねた天羽々矢は、弓の持つ神殺しの権能を限界まで増幅し、聖書の神をその霊核諸共に消滅させた。

その際、四魔王も巻き添えになって消滅したが、どうでもいいことだろう。

天使と悪魔の指導者を失った聖書の勢力は、我々の介入に気づく事も無く停戦を結び、その力を大幅に衰退させた。

彼等は衰退の理由を、個体数の減少や出生率の低下だと思っているようだが、それは大きな間違いだ。

彼等が衰退する原因、それは主神の座に就ける者が存在しないという点にある。

神話世界とは、主神を核にした大きな器のようなモノだ。

主神の生み出した大地という器に、神や動物や人が生まれ、彼らが生み出す信仰が主神に還る事により、そこに生きる者達への加護が生まれる。

が、その根幹である主神が失われれば、幾ら信仰を捧げようと、底に大穴の空いたバケツに水を注ぐが如く素通りしてしまう。

その結果、加護や恵みを失った神話世界は、そこに属する者も含めて衰退、滅亡の道を辿る事になる。

普通ならば、そうならないように主神の次に高い神格を持つ神が主神の座を引き継ぐのだが、聖書の勢力はそうはいかない。

聖書の勢力は一神教であるが故に他に神霊が居らず、そして、主神の座を継ぐ事が出来るのは神霊だけだからだ。

今は天界のセラフ達が作り出した『システム』で何とか帳尻を合わせようとしているようだが、あんな欠陥品では主神の力の億分の一も再現できていない。

装置自体も注がれる信仰に付いて行けてないようだし、自壊するの
も時間の問題だろう。

種族数にしても、聖書の神の手でよってしか誕生しない天使は奴が
消滅した事で増加方法を失った。その天使が堕ちる事で数を増やす
堕天使も同様だ。

悪魔は3勢力の中で唯一、同族間交配で数を増やす事ができるが、
長命な種族故に元々低かった出生率が主神の恩恵を失った影響でさ
らに低下。

報告によれば、魔力が全く備わっていない子供も産まれているとい
う。

このまま行けば出生率はさらに低くなり、いつかは生殖能力すらも
失うだろう。

そんな現状を打開する為に作られた悪魔イービル・ピースの駒で生まれた転生悪魔
も、貴族趣味を振りかざす古い悪魔達から『元異種族』と云うことで
見下され、差別されている。

そんな自身の境遇に耐えられずに転生悪魔が逃亡すれば、はぐれ悪
魔としてお尋ね者扱いだ。

種族保存の為の切り札にしては、対応が杜撰すぎると言わざるを得
ない。

これもあちらを取り巻く問題の一つに過ぎず、他にも仮想敵勢力の

多さや、勢力内における一部を除いた上層部の現状への無理解。悪魔に至っては、旧魔王の血縁による内乱の可能性もあるという。

この会談で停戦を取り付けても、彼等の未来は暗いだろう。

だとしても、彼等に対しての同情心はまったく無い。

今まで散々周りに煮え湯を飲ませてきたのが、巡り巡って自身に回ってきただけの話。

今回の交渉で彼等はさらにその力を失う事になるかもしれないが、それもツケの一環だ。

まあ、私としてはそれで一向に構わない。

私が彼と結んだ契約は停戦交渉の仲裁であって、聖書の勢力がどのような損失を受けるかまでは知った事ではないのだから。

「さて、改めて交渉を始めましょう。こうしている間に戦端が開かれては、元も子もありませんから」

こちらの意図を読ませないための笑みを顔に張り付けて、私は卓上で行われる戦の火蓋を切って落とした。

◇

はい、現場担当の姫島慎です。

……なんだろうか、急にこんなモノログを入れなければならない気分になった。

やはり、近頃のハードスケジュールで疲れているのだろうか。

この件が終わったら、どこか旅行にでも行つてリフレッシュした方がいいのかもしれない。

「どうしたの、慎兄？」

「あー、この頃忙しかったから、この件が終わったら旅行でも行こうかなって考えてた」

「ふーん。どこに行くつもり？」

「どこって……九州かな」

「何で九州？」

「いや、なんとなく」

「いいんじゃない。夏になったら忙しくなるんだし、その前のリフレッシュってことでさ。今までずっとリアス姉とかと一緒にだったから、今回は姫島の家族だけで行くのもありかもねー」

番所の待合室にあるベンチに座り上機嫌で鼻歌を口ずさむ美朱。

「というか、家族旅行になるのは決定済みなのね。」

「ふむ、九州か……。儂への土産はカラスミで頼む」

「俺は黒糖焼酎をリクエストするぜ」

「カステラ……」

俺達の会話に便乗してちやつかりお土産のリクエストをするのは、発言順から久延毘古様、甲賀三郎の兄貴、鎌鼬の旋風だ。

ここ、駒王町番所は久延毘古様を所長として、実働班の三郎の兄貴と旋風、あとは事務方の文車妖妃の文さんに地下牢兼番所の守衛である桃生のおっさん、医務官である天狗様の六名で運営している。

三郎の兄貴は元は諏訪地方で伝説になった龍で、普段の姿はは20代前半の黒髪のイケメンだが戦闘時になると全身スケイルメイルの様な鱗に覆われた龍人の姿になる。

俺達がこの街に来る前からはぐれ悪魔などを退治していた歴戦の勇士なのだが、町の人を護ると言う名目上人前で戦う事が多く、そのビジュアルも災いしてか、いつの間にか駒王町のご当地ヒーローになってしまっている。

旋風は長い黒髪を三つ編みにして背中に垂らした和装の女の子で、小学校低学年にしか見えない見た目とは裏腹に、両腕から出す鋭利な鎌とその俊敏さで実働班の切込み役を担っている。

また甘党の大食いで、みんなで食えという意味で渡したロールケーキを、その場で恵方巻のようにまるかぶりされた時はたまげたものだ。

今回のリクエストも一人で攻略するつもりだろう。

「久延毘古様、手続きは終わりましたんですか？」

「うむ。あのギヤスパークとかいう小僧は、緊急措置として一時的にこちらで預かる事になった。ただ、現状では客分としての扱いは難しいので、地下の座敷牢に入ってもらおう事になるがな」

「まあ、ダーナ神族もこちらの虜囚までちよっかいを掛けてくる事はないだろうって判断だな。あの坊やには窮屈な思いをさせるが、その辺は我慢してもらおうしかねえな」

「あの悪魔、男のくせに女の恰好してた。……変態？」

「ツムちゃん。その辺は個人の趣味だから、触れないであげようね？」
「ん……」

頭を撫でながら諭す美朱と素直に頷く旋風。

一見すると年の離れた姉妹に見えるが、生憎と二人は同じ年だったりする。

あの容姿で俺とタメとは、塔城を上回る合法ロリっぷりである。

さて、リアス姉達と別れた後、俺達が家の神社ではなく番所に足を運んだのには理由がある。

あのゴタゴタでリアス姉達に置き去りにされてしまった眷属の一人、ギヤスパ・ブラディと塔城の姉である黒歌を保護してもらっためだ。

因みに聖剣使いのシスター二人はダーナ神族が実際に襲撃してきたのを重く見たらしく、報告した上司から出た帰還命令に従って帰っていった。

その際、ダーナ神族からの襲撃の確率を下げる為に聖剣を預かろうかと打診したが、断られた。

まあ、ヌアザに伝えた事がダーナ神族に広まれば、むこうも日本国内での襲撃は控えるだろうし、聖剣に関しても教会に還ったところで、停戦の為に天界経由でダーナ神族に返還されるだろうから問題はないはずだ。

万が一襲撃を受けてしまったとしても、こちらとしては成仏しろと祈るくらいしかない。

所詮は別組織の人間だ。こちらに出来るのはそんなところだろう。さて、ギヤスパの話に戻ろう。

あいつは視界に捉えた物の時間を停止させる『フォービドゥン・バロール・ビュー停止世界の邪眼』という神器を持っているのだが、実は全く使いこなせていない。

心因的な問題で神器の制御が効かず、辺り構わず時間を止めてしま

う為に、サーゼクス兄の判断で旧校舎に幽閉されていたのだ。

本人も神器が暴走する影響で対人恐怖症になってしまっていた為に、幽閉生活に不満無く気ままな引きこもりライフを送っていたのだが、今回はそれが仇となってリアス姉達に置いていかれてしまった。

正直に言えば、美朱に指摘されるまで俺も忘れていたのだが。

まあ、思い出してしまえば、そのまま旧校舎に放置しておいて、やられてしまうのも寝覚めが悪い。そこで番所に連れて行き、保護してもらおう事にしたのだ。

引きこもりを部屋から引きずり出した際、猫の本能そのままに散歩していた黒歌も、ついでに捕獲しておいた。

まあ、ギヤスパーは旧校舎の封印された部屋に籠もっておけば大丈夫じゃないか、という考えはあったのだが、ダーナ神族が相手に暴走を続けるあいつの神器に『バロール』の名が着いている事を思えば、その考えは甘いと言わざるを得ないだろう。

バロールはケルト神話に登場するダーナ神族に圧制を敷いていたフォモール族の魔神で、『悪しき眼のバロール』という異名が示す通り、片方の目（左目だとも額の第三の目だともいわれる）に視線で相手を殺すことができる魔眼を持つ。

伝承では、彼は自身の娘とダーナ神族のキアンとの間に生まれた、光の神ルーによって命を奪われている。

ギヤスパーの神器とは視線の効力に差があるし、他神話の魔神の魂を聖書の神が手に入れて神器に組み込んだ、なんて事は考えにくい。二天龍の例もある。

万が一、ギヤスパーの神器に宿るのがバロールの魂だとしたら、ダーナ神族に反応して覚醒し、ギヤスパーの身体を乗っ取って闘いを挑むなんて可能性もありうるのだ。

ここならダーナ神族も日本神話との関係上手は出さないし、地下の座敷牢は悪魔や他神話の犯罪者対策として強大な退魔結界を張っている。

しかも、この結界は西洋で主流の魔力での術式ではなく東洋の氣を使った呪術を使用したものなので、構造の関係から西洋の神魔には殊

更に効果を發揮するようになっていた。

念には念を入れて、俺が氣を込めた封魔の呪符もギヤスパーの目に貼っているの、神器については大丈夫だろう。

「あとは黒い猫魅の方だが、あつちは少々難しいな」

「あつちの姉ちゃんは冥界のお尋ね者なんだろう？ そいつをウチで預かるのは拙い。ヘタをすれば匿ってたなんてイチャモンを着けられかねないからなあ」

ギヤスパーの方はどうにかなったが、もう一つの問題は旗色が悪いらしい。

黒歌は主殺しで指名手配になっているS級のはぐれ悪魔だ。事情はどうあれここで保護をすれば、三郎の兄貴が言う通りに後々冥界からクレームが出かねない。

番所のみんなにしてみれば、この事でせつかく日本に戻ってきたこの土地の実権が揺らぐのは避けたいのだろう。

しかし、俺としては知り合いの身内だし、なにより無限の闘争M U G E Nに関わった事で一時期廃猫にしまった負い目があるので、見捨てると言うのは勘弁してほしいのだ。

「ねえ、久延毘古様。それって黒歌ちゃんが悪魔だからいけないんだよね？」

「うむ。あ奴は元々猫又の希少種である猫魅だ、転生悪魔で無ければこちらでも喜んで保護しておるな」

「なら、悪魔じゃなくせばいいんだよ」

こちらがああでもないこうでもないと言っていると、美朱がトングデモない事を言い出した。

いやお前。今から鉄火場に飛び込むかもしれないって時に、あれをやらせる気かよ。

「いい考えだと思っただけだなあ。上手くいったら黒歌ちゃんとはぐれ悪魔じゃなくなるし、出て来た悪魔イービル・ピースの駒を使ってS級はぐれ悪魔を討伐したって言えば、冥界から討伐報酬もゲットできる。さらに妖怪に戻った黒歌ちゃんをここで雇ったら、番所の戦力増強にもなる。一石二鳥ならぬ一石三鳥だよ？」

「確かに、言われてみればおいしいのお……」

「同胞を助けるのに加えて、悪魔を騙して金をふんだくって美人の同僚もついでくる、か。いいねえ。こいつは乗るべき流れだぜ、慎坊」

美朱の出したメリットに乗り気になる久延毘古様と三郎の兄貴。旋風は我関せずといった様子で、尻尾を振りながら美朱から貰ったチヨコバットを三本いっぺんに啞え込んでいる。

「……あんた等、俺に掛かる負担を考えてねえだろ。それに、あの方法って日本神話の最高機密じゃなかったのかよ」

「その辺はあの猫魅に漏らさぬように誓わせればよからう。それに、あの方法は悪魔の身になった大和の民を救う為に造りだしたもので、使わぬ理由はあるまい」

「お前さんへの負担については、有り余る気合と根性で何とかなるだろう？」

俺の反論は男衆二人によって無にされてしまった。三郎の兄貴の言う通り、気合と根性でなんとかできてしまう我が身が恨めしい……。

「……わかったよ。ただし、やるのは本人の同意を得てからだぞ。勝手になんて絶対御免だからな」

「当たり前だろ。無理やり種族を変えるなんて外道な真似は、悪魔だけでたくさんだからな。そんじや善は急げだ、あの姉ちゃんの牢に行こうぜ」

テンシヨンの高い三郎の兄貴に急かされて地下に降りた俺達は、黒歌を仮受けしている座敷牢の前で足を止める。

中では塔城がないのに人型になった黒歌が部屋の隅で座りながらこちらを見ていた。

「あら、団体さんでござる苦労様。その様子じゃ私の処遇が決まったみたいだにや」

科しなを作って蠱惑的な笑みを浮かべる黒歌だが、その目は獲物を狙うそれだ。自分に不利な決定だった場合は、どんな手を使っても逃げる気だろう。

俺はアイコンタクトで、美朱に防音と認識阻害の結界を張らせる。

ここで話す事はギヤスパーに聞かせる訳にはいかない。

あいつの身の安全の為にも、だ。

「うむ。冥界の重犯罪者であるお主を保護する事はできぬというのが、こちらの決定だ」

「当然の判断ね。それで、外に出てダーナ神族か冥界の刺客に襲われればいいのか？ それともここで私を殺す？」

「そう慌てるでない、猫魅の娘よ。保護できぬのはお主がはぐれ悪魔であるが故、その悪魔たる身を捨てると言うのであれば話は別よ」

「悪魔の身を捨てるって、どういう意味よ？」

「解りやすく言えば、元の猫魅に戻ると言うことだ」

久延毘古様の言葉に黒歌は深々と溜め息をついた。こちらを映す瞳には呆れと侮蔑が染み付いている。

「冗談ならもう少しマシなのにしてくれない？ 転生悪魔を元に戻す

方法なんて聞いた事も無いわよ」

「当然だ、日本神話の最高機密だからな」

こちらの言葉を一笑に付そうとした黒歌は、俺達の間を見て嘲りの表情を真剣なものに変える。

「……本当にあるの？」

「我等とて無為に民を奪われ、はぐれ悪魔の侵入を許していた訳ではない。はぐれ悪魔の死体やそこから取り出した悪魔の駒イービル・ピースを研究し、か

の駒の力を断ち切る術式を開発したのだ」

「まあ、あれだな。技術大国日本を舐めるなってヤツだ」

久延毘古様の説明を、三郎の兄貴が漢臭い笑みで締める。

黒歌は出会った時のような人を食ったような態度を捨て、触れれば切れるような鋭い視線で俺達一人一人の目を覗き込む。

そして、誰一人動揺もせずに関心を見つめ返してくるのを確認すると、居住まいを正してこちらに頭を下げてきた。

「お願いいたします。どうか、お助け下さい」

着崩していた着物を直し、一心に額を床に着ける黒歌。

こちらを完全に信用した訳ではなく、藁をも掴む思いなのだろう。

それでも、短い言葉に込められた思いは本物だった。

「猫魅の娘よ、お主の願いは確かに聞き届けた。かの駒の楔を解き放ち、再び本来の姿に戻してやろう。が、その前に3つほど頼みたい事がある」

「頼みたい事、ですか？」

「うむ。一つはこれから行う術式の事を口外にせぬ事。これは神話勢の最高機密である為と同時に、悪魔という種の存続手段を否定するモノだ。むこうに知られれば騒動の火種になる。正面から来るなら対処のしようはあるが、術者を暗殺……されては目もあてられないからの」

説明しながらこちらに何とも言えない目を向ける久延毘古様。

「いやいや、俺だって暗殺くらいはされますよ。現に無限の闘争では、ゴルゴの狙撃かわせなかつたし。」

あとは濤羅師兄レベルの暗殺者なら、殺られるかもしれん。

だから、『こいつを暗殺なんて無理ゲーじゃね？』的な視線はやめてくれませんかね。

「二つ目は、排出された悪魔の駒を証拠として、冥界政府にはお主は討伐された事にする手筈になっておる。なので、ホトボリが冷めるまでは別人として暮らしてもらわなくてはならん」

「ああ、塔城には事情を説明するぞ。お前が死んだと思って暴走されたらかなわんし、間違つて機密に触れようものなら、俺等の手であいつを殺さなきゃならん。そんな胸クソ悪い事するくらいなら、説明してお前と一緒に機密漏洩防止の呪を受けさせたほうがマシだからな」

俺の補足を聞いて明らかに安堵の表情を浮かべる黒歌。あいつもこの懸念は思い当たっていたらしい。

「最後に、これはお主がよければだが、この番所で働いてもらえるなら助かる。前の二つは守ってもらわねばならんが、これは強制ではない。断つても遠野か京の妖怪の長を通じて、住処と生活の保証はするつもりだ」

少し悩む素振りを見せた後、黒歌は全てに是と答えた。

その答えを聞いた久延毘古様は、満足したように頷いて俺に合図を出す。

三郎の兄貴から借りた鍵で牢の中に入った俺を見た黒歌は、顔をひきつらせながら距離を取った。

「なんで、あんたが入ってくるにや」

「なんでって、悪魔の駒を取り除くためだが」

「取り除くって物理的な意味にやのか？ モツぶっこ抜きとか」

「んなワケあるか。ちゃんと術使ってたよ」

「あんた、術が使えたの!？」

「正式な神職なんだから当たり前だろうが。神道の術は一通り研修で体得したわ、失礼な」

「いや、空中戦艦を素手で沈めたりとか、『地獄の断頭台』とか言って生きた地蔵の首を千切ってた印象が強すぎて、あんたに術って言葉が結びつかなかったから」

それを言われると、こっちも言葉に詰まってしまう。

まあ、無限の闘争MUGENで必要なのは、だいたい術より技だもんな。

あと、あの地蔵、一休の件については首を飛ばさなければ、こっちが生首と内臓を残して身体を爆砕されたり、上半身吹っ飛ばされたりする危険性があつたのだ。

日本が産んだ狂気の和製モーコンにして、格ゲー界屈指のネタゲー『大江戸ファイト』のキャラを舐めてはいけない。

あと、俺は脳筋じゃないぞ。

「ともかく、こっちも時間が圧してるからチャツチャとやっちゃまうぞ。ほら、楽な姿勢で頭をこっちに出せ」

潜在力の解放と2倍界王拳を併用して手招きしたが、黒歌は逆に壁際まで逃げてしまった。

「待つにや! なんで術を使うだけなのに、そんなぶっ飛んだ氣を練ってるにや!？」

「なんでって、俺が楽を……ゲフンゲフンツ! 術の成功率を上げる為に決まってるだろ」

「今楽って言った!! いやにや! 信用ならないにや!! そんな魔王も裸足で逃げ出すような氣を使うなんて、私を殺す以外に有り得ないにや!!」

「アホか、助けるって言ったばかりだろうが。ざっくり説明すると、この術は氣脈を介して魂にアクセスして襖被いの要領で悪魔の駒を洗い流すって代物なんだよ。魂に寄生して肉体を悪魔化している駒を除去したら、次は解放された魂を中心に氣脈を通して浄化の氣を全身に巡らせる事で、悪魔化した肉体を元に戻すんだ。外部からの接触でそれだけの事をしようと思ったら、このくらいの氣は必要なんだよ」「それじゃあ、身体には悪影響はにやいの?」

「今まで述べ100件ほど施術したけど、目立った後遺症が出たケースはないな。まあ、どんな形であれ肉体を根本から変化させるから、身体に負担はかかるのは避けられないんだけど。それでも、だいたいは半月くらいのリハビリで回復してるぞ」

「そ……それなら安心にゃ」

「よっしゃ。誤解も解けたみたいだし、始めるとするか」

壁にもたれかかって座る黒歌に身体の力を抜くように指示して、俺は彼女の額に手を当てる。

「氣を全開にすると電気が漏れる体質なんだな。ビリツとくるかも知れないが、その時は勘弁してくれ」

こちらの言葉に黒歌が頷くのを確認して、目を閉じて意識を額に置いた手に集中させる。

日本神道の術は西洋の魔術の様に魔力を源泉とするものとは違い、体内や神羅万象の氣を使って様々な効果を生み出すものだ。

その形態から氣の総量や制御が肝要になる為、俺と驚くほどに相性がいい。

お陰で神職研修中に教えられた術の大半は、その日の内に使えるようになった。

俺がこの歳で宮司職に就いているのは、天照様の思惑の他にこういうところも評価されたからだろう。

当てた手から額に氣を流し込み、眉間にあるチャクラから氣脈を通して魂に接触すると、脳裏に球状の黒曜石のようなイメージが浮かび上がる。

これが黒歌の魂だ。さらにイメージをスライドさせて行くと、天辺

に台座を魂に埋め込むようにして立って立っている悪魔の駒も見て取れた。駒と魂の接点には葉脈のようなモノが蠢いており、これが魂に寄生している事がよくわかる。

初めて見た時は驚いたが、何十件もやっていると言っていると流石に慣れたものだ。

氣の触覚を魂の正面に伸ばして上手く繋がったのを確認した俺は、氣を送り込みながら祝詞を紡ぎ始める。

「高天原たかまがはらにに神留座かむつまります。神魯伎神魯美かむろぎかむろみの詔みことま以もちて。皇御祖神伊邪那岐大神すめみおやかむいざなぎのおおかみ。筑紫の日向の橘つくしひむがたちばなのをと阿波岐原あわぎはらに、御禊祓みそぎはらへ給たまひし時ときに生座あれませる祓戸はらひとの大神達おおかみたち。諸々の枉事罪穢もろもろまがごとつみげがれを拂はらひ賜たまへ清め賜たまへと申もうす事ことの由よしを、天津神あまつかみ、国津神くにつかみ、八百萬の神達やよろづかみたちとも共に聞食きこしめせと恐かしこみ恐かしこみ申まをす」

身滌大祓の祝詞を唱える事により氣に浄化の力が宿るのを感じた俺は、出力に細心の注意を払いながら、黒歌に向けて本格的に氣を送り込む。

触覚から流れ込む浄化の氣によって、黒光りしていた魂は本来の真珠色を取り戻し始め、それが全体に広がるにつれて、天辺の駒と葉脈が苦しげに蠢きだす。

長年悪魔側にいたから、悪魔から見たら悪魔の駒が必要なのはわかっているのだが、この光景を見ると悪魔の駒が邪悪なモノに見えてしまうな。

まあ、生まれ出た種族を書き換えるようなモノが、全うなワケがないか。

氣によって押し出されてもなお、台座から生えた数本の葉脈によって魂にしがみついている駒に、悪魔という種族のしぶとさを感じながらも駄目押しの氣を流すと、葉脈を千切られた駒は虚空へと墮ちていく。

少し間を置いて、黒歌の胸元の着物のあわせ目から転がり出た駒は、床に落ちて軽い音を立てた。

これで工程としては半分。

今まではこの時点で息切れをしていたのだが、界王拳でブーストし

ているおかげか、まだまだ余裕がある。

これなら施術後にバテて動けなくなるという事はなさそうだ。

一息ついて、今度は元の姿を取り戻した魂を経由して、全身に浄化の氣を巡らせていく。

これで魂に刻まれた起源情報を元に、悪魔に変じた身体は浄化、復元していくことになる。

時間にして二十分ほど氣を送り続けただろうか。

浄化と復元の為に滞り気味だった氣脈の流れがスムーズになったのを感じて、俺は黒歌の額から手を放した。

渡されたタオルで汗を拭いながら体内の氣を確認すると、七割程度残っていた。

どうやら氣の総量も増えていたらしい。

「調子はどうだ、黒歌？ 身体に違和感とかは無いか？」

「……身体にあまり力が入らない。でも、身体の中に魔力を感じないこの感覚。懐かしいわ」

「どうやら上手くいったらしいな。あと、身体は変質した影響で弱ってるから安静にしとけよ。ヘタに動いたら妙な後遺症が出る危険性があるからな」

「わかった。今までずっと逃亡生活だったから、しばらくは骨休めをさせてもらうにや」

この後、久延毘古様の指示を受けた三郎の兄貴に抱えられて黒歌は座敷牢を後にした。

まあ、医務室には天狗様がいるし、あの方が診ているのなら後は安心だろう。

「さて、これでようやくコカビエルのおっさんを探しに行けるな」

「けっこう手間がかかっちゃったね」

「うむ。必要な措置だったとはいえ、少々時を使いすぎたな。三郎が戻ってききたい、街に出るとしよう」

「ん……」

地下から上がり、待合室で黒歌を医務室に預けた三郎の兄貴と合流した俺達が玄関を出ると、そこには少彦名様を頭に乘せたハティ様が

お座りの体勢で待っていた。

「随分と時間がかかったのう。ハティ殿が痺れを切らせてしまったぞ」

『二人とも遅いよ！ 早くボク達の縄張りを荒らしてる奴等をやっつけに行こう!!』

尻尾を振りながら勇ましく吼えるハティ様。

いや、貴女が来たらオーバーキルじゃないでしょうか。

……まあいいや。

「取り敢えず、真神様の探知の結果はどうだったんですか？」

「うむ。この街に結構な数のカラス共が入り込んでいるようだな、親玉の居場所の特定は出来なかった。だが、それとは別に主神級の神氣を持つ者も現れたらしい。儂等がお主達を迎えに来たのはそれを確かめる為なのじゃ」

「主神級ということとは、ダーナ神族ですかね？」

「恐らくは、の。だがその神氣の主が誰であれ、この時期に日本を訪れた理由が見えぬ。一度接触するべきじゃろうな」

「うむ。それほどの神氣ならば、カラス共も気づいていようからな。彦名よ、主も来るのか？」

「おう。鉄火場に入る時は久延毘古よ、お主の身体を使わせてもらうからの」

「よかろう。その代り、術での援護を頼むぞ」

「おう、任せておけい！」

久延毘古様の肩に移った少彦名様と共に呵々と笑う久延毘古様。仲がいいようで何よりだ。

「それで少彦名様、その神氣の持ち主は今何処に？」

『今は散歩でいつも行ってる商店街に居るって、旦那様が言ってるよ！』

確か、狼の神格は群れの仲間と念話でコミュニケーションが取れるって、真神様が言ってたな。真神様の散歩コースで通る商店街なら、ここからそう離れていない。

「まずはこの目で確かめてみましょう。どう動くかはその場の状況

次第だ」

久延毘古様の言葉で全員が番所を後にする。

件の商店街は番所の続く裏通りを抜けてすぐにある。

駒王町には大型商業施設が進出していないお陰で多くの店が現役でいる古き良き商店街は、妖精らしきものを連れた女性と墮天使たちの追跡劇の舞台と化していた。

追われているのは緑の髪に白のサマードレスを纏った見目麗しい女性。

少彦名様が言っていた神氣の持ち主とは彼女の事だろう。

彼女につき従うのは手の平程の大きさの妖精と、ニツト帽を被った雪だるまという奇妙な二匹。

奇妙な護衛達は女性を庇いながら電撃と氷の弾丸で追手の墮天使を牽制しているが、如何せん力不足のようで墮天使達は物ともせず光の槍で攻撃を続けている。

彼らが未だに倒されていないのは、護っている女性が強大な防御障壁を張っているからだろう。

「むう、あれはダヌー殿ではないか」

「おお、まことじゃ。しかし、何故このような場所に……?」

爺様二人組の声を耳にした瞬間、舞空術で飛び出した。

のんびり驚いてる場合じゃねえよ！ ダヌーっていったら、ダーナ神族を率いているダグザ神をはじめとした一族の母神じゃねーか!!

彼女がこんな所で墮天使に傷でも付けられてみる。

！
停戦なんて跡形もなく吹っ飛ばし、日本だって責任を取らされるぞ

「スラッシュキイイイイック（偽）!!」

氣勢を放出して一気にトップスピードに持っていった俺は、勢いそのままに槍を振り上げていた墮天使の顔面に蹴りを叩きこんだ。

急角度で地面に突っ込んで、アスファルトを削りながら転がっていく一匹目。

「クラックシユウウウト（偽）!!」

それを見た他の墮天使達が投げってくる光の槍を上昇して躲し、手頃

な奴の脳天に落下のスピードを加えた踵を叩きつける。

「久延毘古様と少彦名様は彼女の保護を！ 三郎の兄貴達は地上の奴等の掃討を頼む！」

「よかろう。行くぞ、彦名よ」

「応ともよ」

「オイオイ、あいつ空を飛んでるぞ」

「慎兄め、ついに舞空術まで覚えたか」

「……私も飛びたい」

『人間は羽も無いのに空を飛ぶんだねえ』

口々にしゃべりながらも、地上に降りていた墮天使にむけて踊りかかる番所の面々。

「な……なんだ、貴様等は!?!」

「我等は古くからこの地に生き、守ってきたモノよ！」

「儂等の目が黒い内は、お主等カラス共の好きにはさせんわい！」

久延毘古様がその巨大な手で地面を叩けば、アスファルトは即座に剣山と化して墮天使達を貫き、少彦名様の呼んだ真空波がモズの早贄のようになった犠牲者を切り刻む。

「現地勢力だ?! 辺境の田舎者が我等墮天使に逆らうか！」

「誰が田舎者だ！ 他人様の土地で勝手に暴れてる奴が粹がつてんじゃねーよ！」

「ん……空気読む」

残像を残すほどの速度で踏み込んだ旋風が両腕の鎌で墮天使二人のアキレス腱を切り裂き、龍人の姿になった三郎の兄貴が刀の一閃で斬り伏せる。

「バラキエルの娘に……神喰狼だ?!」

「少しは自重してよ！ ウチのパパの評判まで悪くなるじゃん!!」

『ボク達の縄張りを荒らす奴は、お仕置きだ!!』

三角飛びですれ違いざまに喉を掻き斬る美朱と、目にも止まらない速度で喉笛を咬み千切るハティ様。

というかハティ様の場合、ぬいぐるみを啜えた犬みたいに喉笛を咬んだ獲物をブンブン振り回すから、えげつなさが半端ない。

地上は一方的蹂躪になっているので、こつちも自分の方に集中しよう。

「お前等、コカビエルのおっさんの部下だろ。奴は何処にいる?」

「……我等が答えると思うか?」

「思わんね。だから、身体に聴く事にするよ」

「ほぎけ、裏切り者がっ!!」

ハテイ様の織りなす惨劇に顔を青くしながらも、墮天使はこちらに光の槍を放ってきた。

さすがは武闘派で鳴らしたコカビエルの部下といったところだが、悲しい事に実力が伴っていない。

飛来する槍の横をすり抜けるようにして間合いを詰めた俺は、がら空きになった胴に拳を打ち込んで相手を吹っ飛ばすと同時に、足から放った氣勢を蹴る要領で加速。

身体をくの字に折りながら水平に飛ぶ男の背後に先回りし、その背中を蹴り上げる。

ここでようやく残りの一人がフォローの為にこちらへ槍を放つが、生憎と遅い。

槍が来る前に先ほどと同じ方法で加速した俺は、打ち上げられたら男の上を取ってオーバーヘッドキックの要領で地面に叩きつける。

ヤムチャさんとの空中戦の修行で食らったメテオスマッシュを真似てみたのだが、思った以上に上手くいった。

すり鉢状に陥没した地面に横たわる墮天使の姿に、不謹慎だが嬉しさがこみ上げてくる。

ヤムチャさんのアドバイス通り、空中戦のコツは氣勢を使って踏み込む為の足場を作る事にあるようだ。

踏み込みの有る無しでは、打撃の威力や機動力が段違いだからな。「さて、どうするんだ? 大人しく投降すれば痛い目を見ずにすむぞ」

「……ッ!? 嘗めるなあ!!」

親切心で投降を勧めてやったのに、唯一残った男はこちらにブンブンと槍を投げってくる。

うーむ。やはり、さっきの感覚を忘れない為にシャドウをしながら

呼びかけたのが悪かったか。

まあ、やってしまったことは仕方がない。次からは気をつけよう。次々と飛来する光の槍をかわしながら間合いを詰めた俺は、拳ではなく鉤爪のように大きく広げた手を男にむけて振り下ろす。

「ぐわあッ!？」

瞬間、男の苦悶の声と共に鮮血が舞った。

胴体を狙った一撃にギリギリで割り込ませた両腕、こちらの手と接触した左手首から右の二の腕にかけての肉が大きく削げている。

大きく口を開いて血を吐き出している傷に男の顔から色が退いていくのが見て取れたが、手を緩めるつもりはない。

「食らえー！ ヤムチャさん直伝、狼牙風風拳!!」

動きを止めた男に、俺は両掌の連撃を放つ。

男は身体を亀のように縮こませて凌ごうとするが、鍛え抜かれたうえに氣による強化がなされた十本の指が、狼の顎のように男の肉体を喰い千切っていく。

自身の出した血煙の中、肉を削がれる痛みには耐えかねた男が防御を捨てて逃げようとしたところで、もう一步間合いを詰めた俺は、双掌を放つ。

胴を捉えた一撃は、掌打による打撃と十指での肉を抉るダメージを与えて、男を吹き飛ばした。

ドラゴンボールではネタ技扱いの狼牙風風拳だが、実は打撃と十指貫手を合わせた恐ろしい技なのだ。

実際に食らったり使用してわかったが、原作ではペチペチと殴っているようにしか見えなかった技は、掌打の後間髪入れずに五指貫手による斬撃が来る二段構えの攻撃なのだ。

それ故、指を十二分に鍛えた者が使用すれば、狼に喰い千切られたかのように、捉えた箇所を肉を削ぎ落とす防御不能の技と化す。

何かとネタにされている足元の隙も、あれはヤムチャさんの攻め気が強すぎただけで技自体の欠点ではない。

手首から先の強さと速度が肝要なこの技なら、脚を払われる前に相手の股を抉る事もできるだろう。

欠点を挙げるとすれば、貫手故に指に血や肉片が付く事か。
現に俺の指は血と肉片がベツタリ付いてるし。

………やっぱ、グロいわ。普段はこの技、封印しとこう。

ハンカチで手を拭いながら地上に降りてみると、こちらも決着がついていた。

地上にいた墮天使は全て事切れていた。

最初に蹴り落とした奴も戦場に復帰していたらしく、見事に喉笛を咬み千切られていた。

ああ、せつかく情報を絞ろうと思っていたのに……。

まあ、終わった事は仕方がない。取りあえずダヌー様に話を聞こう。

ダヌー様のところには番所のみ人も集まっており、お供の雪だるまがハテイ様と旋風に顔を舐められて「やめてホー！ 舐めちやダメホー!! わんこの息がとんでもなく生臭いホー!」なんて叫びや「……甘くない」「味がしないね、アイスクリームじゃないみたい」なんてツツコミどころ満載の感想が聞こえてきたり、愚妹が妖精と何故かコスプレの話題で意気投合してたりと中々にカオスだったが、なんかもう気にしない事にした。

そんな面々の間を抜けて久延毘古様と話していたダヌー様のところへ行くと、こちらに気づいたダヌー様はにこやかな笑顔を浮かべる。

礼を示す為に跪こうとしたが、『公式の場ではないので、そこまでは不要』とむこうに止められたので立ち上がると、ダヌー様は優しくこちらの手を取ってきた。

「はじめまして、第三の無限を宿す少年よ。貴方に会えた事を喜ばしく思います」

………ナンデスト？

13話

『第三の無限』

ダヌー様の口から出たこの言葉に、俺はボケていた頭に喝を入れた。

天照様の口ぶりでは、俺がそうだというのは結構な機密のように思えた。

一見おっとりした女性に見えても、天照様は神世から一神話勢力を背負ってきた女傑だ。

そんな方が早々に機密情報を漏らすとは思えない。

だとすれば、ダヌー様は一体どこで知ったのだろうか？

「警戒する必要はありません。誰かに聞いたのではなく、私は夢であなただけの事を知ったのです」

……さりと心を読まれた事は置いてくとして、ダヌー様の言葉に俺はある程度警戒を解くことが出来た。

夢と聞けば、多くの人が胡散臭いと思うかもしれないが、神の見る夢というのは人間のそれとは全くの別物だ。

一説によると、主神クラスの神の無意識はアカシック・レコードに繋がっており、自身にとって必要な情報を夢に形を変えて受け取る事があると言う。

「なるほど。しかし、俺ごときの事がダヌー様の夢に出るものですか？」

『無限』とは創世からこの世界を支えてきた力。今まで二つの龍神以外には持ちえなかったそれを持つ者が現れたのです。私だけでなく多くの主神がそれを感じ取ったことでしょう」

ダヌー様はこう言うが、生憎と実感なんてさっぱりだ。

無限の闘争は生まれてからずっと共にあったのだ、今更『無限』だの何だのと言われたって困る。

「と言われても、実感がわかないものです。けど、生まれてからずっとこの力を使ってたのに、なんで今頃になって騒ぎだしたんでしょう？」

「それは生まれながらにして完成された他の二つとは違い、貴方が司どるのが無限の進化だからでしょう。強者に挑み、打ち倒す事で己が身を高める。その意志が折れぬ限り、無限の頂へ手が届く可能性を持つ者。それ故に今まで私達は、貴方の存在に気づかなかった」「つまり、俺が主神達に『無限』と感ずるくらい強くなつたから気づいた、と」

「正確に言えばその片鱗を見せたからでしょうね」

なるほど。というか、神様の夢すごいな。無限の闘争の事を、此処まで言い当てられるとは。

「いきなり自覚を持ってと言われても難しいでしょうね。ですが、これだけは心して下さい。これから望む望まざるに関わらず、貴方の行動は多くの者の注目を集める事になるでしょう。貴方の宿す『無限』という力は、それだけの価値があるのです」

「貴女のように、ですか？」

「ええ。私がここに来たのは、貴方という存在を見極めるためですから」

ニコリ、と見る者全ての心を解きほぐすような笑顔を浮かべるダヌー様。

しかしその目は笑っておらず、こちらの奥底を見抜かんと鋭い光を宿している。

……観察の結果しだいでは我が身を犠牲にしても俺を消す事も覚悟してるな、これは。

虫も殺さないような顔してるクセに恐ろしい方だ。

「それで、結果はどうですか？」

「今のところは何とも。ですが、貴方が日本神話に属しているのを見て安心しました。悪魔達が貴方の本質を知れば、その力をカサに再び蛮行を行いかねませんから」

あー、やっぱり悪魔はそういう認識なんスね。……知ってたけど。

擁護しても効果が無いのはわかっているので適当に会話を切り上げると、他のみんながこちらを注目しているのが目に入った。

「えーと、いまの聞いてた？」

『聞こえたー!』

「……ばつちり」

ハティ様とイタチの耳を出した旋風がピコピコと耳を動かしてアピールし、他のみんなも頷いている。

……しまったな、情報漏えいとか言われなければいいが。

番所の面子に関しては、みんな口々に『逆に納得がいった』だの『お前さんがおかしいのは今更』だのと失礼な事を言っていたので、皆の態度が変わると言ったことは無いようだ。

取り敢えず『機密っぽいから他では漏らさない様に』と注意を促している、不意に地面が揺れた。

……大気に含まれた気が大きく揺らいている、ただの地震じゃない。

「久延毘古様!」

「何者かが地脈に強く干渉しておるな。このままでは一刻を待たずして、大規模な地盤沈下で街は壊滅するぞ」

「レイ・ラインを通して聖剣の波動を感じます。どうやら術式の発動媒体に、エクスカリバーの欠片が使われているようですね」

巨体を屈めて地面に手を置いた久延毘古様とその傍らに立つダヌー様が、それぞれの見解を述べる。

「対策は?」

「もう始めておる。聖剣を媒体にしている為に術を返すことは出来ぬが、発動の邪魔をするのならば容易い」

「どのくらい時間を稼げそうじゃ?」

「うむ、ここで専念すれば半日は固いぞ」

久延毘古様と少彦名様のやりとり、俺達は一気に緊張が抜けてしまった。

30分足らずが半日って、時間的余裕が増え過ぎだ。

「随分と余裕がでちゃったなあ」

「……長老、がんばりすぎ」

『ごはん食べて、お休みしても大丈夫そう』

「流石は久延毘古様! 土の神は伊達じゃないね」

「呵々、我が身はこの地に根差す土地神ぞ。地脈に關しては遅れは取らぬわ」

みんなの称賛(?)を浴びて大笑する久延毘古様。

久延毘古様つて長老扱いされて現場に出ないから、こういつたりアクシヨンとかされないもんな。

「とはいえ、ノンビリしておるわけにもいかんじやろ。ダヌー殿、聖劍の波動の在処はわかりますかの?」

「はい。ここから西に行つたところにある、悪魔の結界のすぐ近くです」

久延毘古様の肩に乗つた少彦名様の問いに、ダヌー様は方角を指で示しながら答える。

「そつちで悪魔の結界があるのつて」

「駒王学園だな」

コカビエルのおっさんの事だ。リアス姉が街に居ると思つて、挑発のつもりでやらかしてゐるんだろう。

しかし、この街自体を的にかけやがるとは、元々ヤバかつた墮天使の評価が底値を割つちまうじゃねーか。

今まで積み上げてきた努力がバンバン消えていくのが理解できるというのは、ストレスが半端無い。

この代償は身体で支払つてもらうしかないだろう、主にサンドバツク的な意味で。

「皆の者、我と彦名はここで術の発動を抑える。お主らは元凶を叩くのだ」

「了解しました。ダヌー様、我々は戦場に向かいます。貴女は少彦名様の術で高天原へ」

「いいえ、私も行きます。日本神話が治める土地の崩壊に、我らの聖劍が使われているのを見過ごすわけにはいきません」

ダヌー様の言葉に思わず眉根が寄る。人数的にこちらには彼女に護衛を着ける余裕はない。

無礼は承知だが、敢えて苦言を言わせてもらおう。

「危険です。この地で貴女にもしもの事があれば、日本神話とダーナ

神族の不和に繋がるのですよ」

「それなら心配には及びません。じつは先程の襲撃の際、救援を手配していたのです。もう着くと思うのですが……」

ダヌー様がそう呟くのと同時に、俺達の数歩後ろで風が巻き起こった。

吹き上がる風がおさまると、そこには見覚えのある騎兵達が列を成している。

「母神様、遅参申し訳ありません。お怪我はありませんか？」

騎馬から降りてダヌー様に跪いたのは、夕方に出会ったヌアザ神だ。

「ええ、彼らのお陰で事なきを得ました。ですが、墮天使によって仕組まれたこの地を崩壊せんとする術式に、我らの聖剣が用いられようとしています。日本を友とする者として、この事態を看過はできません」

「承知しました。御身を護り、この地を荒らすカラス共を駆逐いたしましょう」

宣誓と共に鬨の声を上げる騎兵達。

「どうですか、これなら問題ありませんね？」

こちらに笑みをむけるダヌー様に、俺は苦笑いで両手を上げた。

ダーナ神族最強クラスの戦神なんて呼ばれたら、文句なんてつけられない。

俺達のやり取りを後目に立ち上がったヌアザ神は、こちらの前まで来ると深々と頭を下げた。

「皆様。我らが母神の窮地を救っていただいた事、感謝いたします」

「頭を上げられよ、ヌアザ殿。我等は古くからの盟友、この程度は当然の事だ」

久延毘古様が声を掛けるが、ヌアザ神は頭を下げてままだ。

「しかし……」

「借りと思うならば、儂や久延毘古の代わりにあやつ等を気にかけてやってくれ。三郎は兎も角、他の者は将来ウチを背負って立つかも知れん逸材じゃからな」

少彦名様の言葉に、頭を下げたままこちらを向いたヌアザ神は、納得の表情を浮かべて姿勢を戻した。

「承知しました。彼等を生きて帰す事を誓いましょう」

「ウム、頼み申す」

久延毘古様の言葉に一礼を返したヌアザ神は、今度は俺の前に立ち、ニヤリと笑みを浮かべる。

「また会ったな、監査官殿」

「ええ。『次は戦場で』というヌアザ様の言葉は当たったようですね」

「そのようだ。貴殿の力、期待させてもらおうぞ」

「こちらこそ」

目の前に差し出されたへコミの無い銀の手を、俺はしっかりと握りしめた。

◇

商店街を抜けて数分。

慣れ親しんだ通学路は今や戦場と化していた。

光の槍や魔術に呪術が飛び交う中、此方へ放たれた魔力弾を紙一重で躲した俺は、驚愕の表情を浮かべる中級悪魔を地面に蹴り落とし、こちらの隙を突こうと光の槍を手に躍りかかる天使を裏拳で叩き伏せる。

そう、天使と悪魔だ。

何故かは解らないがこちらに向かってくる敵の中には、コカビエル配下の墮天使に混じって天使や悪魔の姿があるのだ。

「慎坊、三勢力の奴等は停戦を望んでたんじゃなかったのか?」

「ああ。むこうの責任者から、天照様を通じてダーナ神族に停戦を申し込んでいるはずなんだが……」

「……だったら、こいつ等はなに?」

「悪魔についてなら二、三心当たりがあるけど、天使についてはさっぱりだ」

瞬きする間に10体の悪魔と墮天使を斬り伏せた三郎の兄貴と旋

風に、答えにならない言葉しか返せない。

これが下級天使や転生悪魔ならば、三勢力のはぐれ者を纏めたのかと思うが、遭遇する悪魔や天使は中級から上級ばかり。

悪魔は旧魔王派か現政権に既得権益を侵された貴族、もしくは現魔王に不満を持つ老害共といったところだろうが、天使の方はまったく解らない。

「下の手綱もまともに握れないとは、三勢力の首脳陣は随分と杜撰なのですね。ダグザが出ている停戦交渉も、これでは怪しいものです」
「ええ。停戦を結んでも、彼等の管理出来ていない別集団に襲われるのでは、意味がないですからな」

宙に召喚した巨大な火球によって、数十の敵を焼き尽くすダヌー様。

そして彼女を護りながら『不敗の剣』で天使達を斬り捨てるヌアザ様の漏らした会話に、頭を抱えなくなる。

こつちが戦争にならない様に必死になってるのに、なんでこう廻りが足を引っ張りまくるのか。

今まで世話になった人達に不義理かまして日本神話に所属したのも、リアス姉達が巻き添えにしない為に祐斗兄に嫌われる覚悟で送り返したのも、全部無駄だとしても言いたいのか、おい。

考えれば考える程に頭に血が上っていく。

邪悪だの異神だのとほざいている天使の顔面にヤクザキツクをかますと、力加減を間違えたのか上半身がバラバラになった。

一瞬の静寂の後、その時の仲間が口々に罵詈雑言を浴びせてくる。戦場に出たおいて、仲間が死んだくらいで何をガタガタと……。

そんな戯言をほざくくらいなら、こんな場所に首を突っ込まなければいいのだ。

「じゃかあしいわ、このクソつたれ共がああああつ!!」

沸騰しそうな頭でなんとか皆から離れた俺は、今までのストレスを込めて加減もへったくれも無しのリージングストームをぶっ放す。

無意識の内に潜心力を使っていた為か、それとも全力全開で放った所為か。

手を地面に叩き付けた瞬間に生じたのは、氣の暴風ではなく天から降り注ぐ雷の群れだった。

雨霰と降り注ぐ雷撃は敵陣の中央で荒れ狂い、恐慌状態に陥った天使や悪魔、墮天使達を次々と薙ぎ払っていく。

そして、技を終えた時には数百はいたであろう敵は全て地に伏せていた。

「やるじゃねえか、慎坊。お前さんもついに雷撃を放てるようになってたな」

「……雷撃（物理）じゃなくなった。おめでとー」

「よかったじゃん、慎兄もついに飛び道具が実装されたね」

今までの不遇さを知る番所のメンツからの祝福の声がちよっぴり目に染みる。

いや、今のは飛び道具じゃないんですけどね。

レイジングストームを撃ったつもりが、まさかサンダー・ブレイクに化けるとは思わなかった。

ともあれ、自分が潜在超必殺技使いの仲間入りを果たしたと思うと、胸が熱くなるか。

よし、次の目標はデッドリーレイブだ。

え、虚空烈風斬？

烈風拳すら体得できない俺にはいらぬ子ですね。

身内限定の寸劇はさておき、敵を排除してから駒王学園へは10分ほどで到着することが出来た。

校庭に足を踏み入れた俺達を迎えたのは、結界に閉じられた夜空を覆う、先程を倍する三勢力混合軍。

そして、その中心からこちらを見下ろすコカビエルと、鬼太郎みたいに前髪で片目を隠して黒い高そうな服を着た上級悪魔に両手に剣を携えた最上級天使。

さらには、校庭の中央で聖剣を手に立っている司祭姿のおっさんだ。

「ようこそ、劣等なる多神勢力と薄汚い雑種よ」

最上級天使のこちらを見下した台詞に、ダヌー様の護衛の幾人かが

いきり立つが、ヌアザ様の叱咤で大人しくなる。

俺達や番所の面子は、奴の言葉などどこ吹く風だ。

ああいう手合いは無視するに限る。

下手に構ってやるから、余計につけあがるのだ。

「グレモリーとシトリの妹の姿が見えんが、何処に行ったのだ？」

「リーア姉と会長なら冥界に帰ったよ。こんな状況でいつまでも地上に残すわけないじゃん」

「ふん。我が身可愛さに領地を捨てて逃げるとは、やはり偽りの魔王の血族だな。その卑しきは隠せんか」

「みんなが冥界に帰ったのは、日本神話が退去命令を出したからなんだけど」

「コカビエルのおっさんへ向けた美朱の答えに、さらに噛みつく上級悪魔。」

先程から、奴はこちらに殺気を飛ばし続けているのだが、憶えがない。

うーむ、何かで恨まれるような事をしただろうか？

あの大昔の少女漫画に出てくるようなクセ毛の鬼太郎へア、どっかで見た事のあるような気が……。

「おい！ 貴様、聞いているのか!？」

鬼太郎君（仮）の事を思い出そうと頭を捻っていると、当の本人から怒鳴られた。

「すまん、全く聞いてなかった。というか誰だ、あんた？」

「私はシャルバ・ベルゼブブだ!! 三年前に我が計画の邪魔をし、あれだけの屈辱を与えたというのに、覚えていないだ!？」

シャルバ・ベルゼブブ……、シャルバ・ベルゼブブ……、ベルゼブブで三年前の事？

いかん、全く思い出せん。

「慎兄、あれだよ。ミリ君誘拐の主犯格」

ミリキヤスの誘拐犯……、旧魔王……、関節技……

「……おおッ！ 小便漏らした上に泣きながら命乞いした旧魔王のボンボンか!!」

やっと思い出した。

そうだ。人間の武術などに手を出す愚物、とか言ってみ下してたから関節技の練習台にした兄ちゃんだ。

「慎坊。お前さん、あの兄さんに何したんだ？ ションベン漏らして命乞いなんて尋常じゃねえだろ」

「ん？ 世話になった人の息子誘拐しやがったから、両手足と背骨、肋骨をへし折った」

「それはまた随分と酷い仕打ちを……」

「ムゴイホー」

「スツゴいやりすぎって感じ。お兄さんって怖い人だったんだー」

「……げどー」

『そうかな？ 群れの仲間に出したのなら、そのくらいはするでしよ。生かしてやっただけ優しいと思うけど』

……弟分を浚われたなら正当防衛だと思っただが、解せぬ。

あと、ハティ様は家に帰ったら桜餅を追加で100個、食べて良し。

『やったー！』

「で、何の用だよ小便たれ。また泣かされに来たのなら、忙しいから後にしる」

挑発してやるとシャル……？ シャロ……？ もう鬼太郎君（仮）でいいや、が顔を真つ赤にして手から光線を放って来たので、ブロッキングで軽く捌いてやる。

確か、あの光線は触れた物を異次元に飛ばすって代物だったな。

まあ、問答無用で何でも転移させるわけじゃなく、自身より力の低い者しか飛ばせないと言う何ともしよっぱい技なんだが。

「貴様……ッ!？」

「下らん挑発に熱くなるな、ベルゼブブ。どうせ奴らは生きては帰れんのだ」

さらに攻撃を放とうとしていた鬼太郎君（仮）を嗜める最上級天使。もっともらしい事を口に出しているが、その目を見れば相手を見下しているのが丸わかりだ。

「はじめまして、諸君。私の名はアズラエル。天界に置ける主戦派の

代表と覚えておけばいい」

軍勢から一步前に出て、いんぎんぶれい慇懃無礼な態度で頭を下げるアズラエル。天界と墮天使の主戦派に旧魔王、嫌な予感しかしない取り合わせだ。

「さて、君達には我等『禍カオス・ブリゲードの団』初陣を飾る生け贄として、死んでもらう事になる。劣等なる君達が、我等の手に掛かる事を光榮に思うがいい」

自分に酔っているのが丸分かりの恍惚こうこうな表情で語るアズラエル。

『禍の団』ねえ。そんな厨二臭全開の香ばしい名前を名乗って、恥ずかしくないんだろうか。

「天使さんよ。主戦派名乗ってんのに、悪魔や墮天使と組むってのは、どういう見だい」

龍人の姿で腕を組む三郎の兄貴に目をやったアズラエルは、小さく鼻を鳴らした。

「野蛮な龍と話す趣味はないが、この国には冥土の土産という言葉もあるそうだからな。特別に答えてやろう」

傲慢な言い草と共に此方に向き直るアズラエル。その顔に浮かぶのは、先程までの道化じみた愉悦ではなく、憤怒と憎悪だ。

「不ふく倶くたい戴たい天てんの敵同士の我等が手を組んだのは、三大勢力間で和平を結ぶなどとホザく現政権を戦乱に陥れ、打ち倒すため！そして、我等の最終目標は再び三大勢力による大戦を起こし、真の決着をつける事だ!!」

瞬間、空気が凍った。

俺達のアズラエルに向ける視線が、一気に氷点下を超える。

これだけ他の勢力に迷惑をかけておいて目的は内輪揉めとか、どんだけアホなんだよコイツ等。

「えーと……、それなら何で俺達にチョツカイを掛けてきたんだ？お前さん等の目的とは関係無いだろうに」

「関係ならあるとも。現政権の愚か者共は、あろうことか貴様等多神勢力を怖れていた。いつ徒党を組まれて襲いかかられるか、とな。平和外交などと謳う冥界政府の負け犬外交を見ればその腰抜け具合は

明らか。だからこそ、我等は貴様等に手を出したのだ。貴様等を打ち倒し嘗てのように我等の足元に跪かせる事で、愚劣な現政権よりも我らのほうが優秀である事を示し、至高たる三大勢力が貴様等劣等種を怖れたという耐えがたい汚点を雪ぐ為にな」

なんとも傲慢で自分勝手な言い分に、こちらの面子の大半は眉根を寄せる。

「聖書の神に創り出された傀儡如きが大言を。貴方達だけで多神話勢力を相手にして、勝ち目があると思いませんか？」

「勿論だとも。こちらには天使と墮天使の主戦派、そして旧魔王の息子とそのシンパがいるのだ。腑抜けた現政権とは違う、大戦を見越して己を高め続けていた我々が戦線に立てば、劣等種である貴様等が破れるのは当然。あとは貴様等の屍の上で、今回こそ雌雄を決するするのだ！」

高らかに叫ぶアズラエルの言葉に、俺の口からは乾いた笑いしか出なかった。

……終わった。

頭の中にあるのは絶望の一言だ。

太陽が姿を消して久しいが、高天原は月読様か誰かの手で、こちらの様子をモニターしているだろう。

なら、停戦交渉に出た面々も目の前の馬鹿共の事を知ったはずだ。

天照様やダグザ神が、過激派同士の結託を許して世界中に喧嘩を売るような組織を生み出してしまった三勢力首脳と、条約を結ぶはずがない。

つまり、俺の今までの努力は全部無駄って事だ。

「さて、これから貴様等の処刑を始めるのだが、我々が手を下す前に、少し余興を楽しませてやろう」

こちらを見下ろしながら嫌な笑みを浮かべたコカビエルが軽く腕を振るうと、校庭に二つの魔法陣が浮かび上がり、そこから巨大な影が飛び出した。

三つ首それぞれの口から涎を垂らし、こちらにむけて唸っている二頭の魔獣。

それを見た瞬間に沸き起こる更なる頭痛と胃痛に、思わず呻き声を上げてしまう。

俺達の眼前に居るのは『ケルベロス』で間違いないだろう。

ハーデス様が支配する冥府の番犬。日本でもRPGやファンタジーのサブカルチャー全般で有名なモンスターである。

「……なあ、コカビエルのおっさん。コイツ等どっから持ってきた？」
キュツと縮む胃を押さえながら声を絞り出すと、コカビエルはこちらに聞こえるように鼻を鳴らした。

「冥府からに決まってるだろう。あの干からびた老いぼれではまともにも使う事も出来んようなのだな。俺が有効利用してやってるのだ」
……コイツ等、ダーナ神族だけじゃなくて、オリュンポスにまで喧嘩を売りよった。

冥府のハーデス様と言えば三勢力嫌いで有名なのに、どうやってフォローしたらいいんだよ、これ。

ネズミ算式に悪化する状況に、考えるのが嫌になってくる。
そもそも、なんで俺がここまで気を揉まなきゃならんのか。

こういうので頭を悩ますのは、シスコン魔王や厨二病のおっさんの仕事のはずだ。

というか、ここまで事態が悪化しているのは、だいたい向こうの不手際が原因じゃないか。

ああ、イライラする。

本当にイライラする。

そろそろ我慢の限界だぞ、オイ？

ゆつくりと顔を上げた俺の眼を見た途端、こちらに向けて唸っていたケルベロスが、尻尾を股に挟んで口々にキャンキャンと泣き始めた。

コカビエル達が懸命にけしかけようとしているが、当の二頭はその場に伏せて動こうとしない。

なんだか知らんが、これはありがたい。

こいつ等を傷つけたら聖書はもちろん、日本神話やダーナ神族までハーデス様に責任を追及される可能性がある。

何より犬派な俺の精神衛生の為に、動物虐待は勘弁願いたい。

「クツ、この役立たずの犬ツコロめ！　バルパー、統合したエクスカリパーと自らの手で強化したその肉体の力、ここで見せてみる!!」

「よかろう！　我らの手にあつた物と愚鈍な悪魔祓いから奪つた二本。四つの欠片を統合した聖剣の力と、適正者の身体を調べ上げて調整した我が肉体の冴えをとくと見るがいい!!」

いくら叱咤しても襲い掛かろうとしないケルベロスに痺れを切らしたコカビエルの声に、聖剣を手に神父らしき男が前に出る。

司教というよりも、行き過ぎたオタクのようなイメージを感じさせるおっさんは、こちらを見てニヤリと薄気味悪い笑みを浮かべる。

……キモいから止めろ。

才前モ俺ノストレスヲ増加サセルツモリカ。

「ふんはああっ!!」

聖剣を正眼に構えたおっさんが気合を入れると、それに呼応して全身が膨張し、瞬く間に分厚い筋肉に覆われた大男へとその姿を変える。

「ふははははははっ！　これが聖剣の担い手としての究極の肉体！

それに最強の聖剣であるエクスカリパーが加わればまさに絶対無敵！　最強の聖剣使いとなった私の手にかかる事を光栄に思うがいい!!」

聖剣を大上段に構え、高笑いを上げながら突っ込んでくる変態マツチヨ。

しかし、当人のビックマウスとは裏腹に、その突進速度は欠伸が出るほどに遅い。

「キョエエエエエツ!!」

珍妙な奇声と共に振り下ろされる刃。

聖なるオーラの軌跡を描いてこちらの肩口に吸い込まれたそれは、その輝きとは裏腹に制服の布地一枚も斬る事無くその動きを止めた。目の前にある驚愕に歪んだ不細工面と肩に置かれた鈍らを見比べて、ため息をつく。

究極の聖剣使いに最強の聖剣、ね。

ご先祖ちゃんの例もあるから硬氣功こうきこうを全開にしていたんだが、見掛け倒しも此処まで来ると笑いも出ない。

この茶番と三つ首ワンコが余興とか、人を舐めるのにも程がある。……いい加減、ブチキレてもいいよな。

肩口に乗っていた剣を払いのけ、踏み込みと共に裏拳を放つ。

一切手加減しなかった『不動殺活裏拳ふどうきつかつうらけん』は、マツチヨが咄嗟に盾にした聖剣の刀身を粉碎し、そのままの勢いでおっさんの頭を消し飛ばした。

頭部を失って崩れ落ちるおっさんを尻目に敵陣の中央まで駆け抜けた俺は、硬氣功に使用していた氣を全て攻撃の為の物に変換する。

イメージするのはさっきの感覚。

あの時は偶然だった技も今ならモノにできるような気がする。

「サンダアアアアアアアアアッ！ ブレイクッ!!」

練り上げた氣の全てを込めた両手を地面に叩き付けると、先ほど以上の密度の落雷が俺の周囲を荒れ狂う。

天から首こぶを垂れる紫電の大蛇達は、状況が理解できていない『禍の団』の構成員を次々と呑み込み、思うがままに蹂躪していく。

そして、技の効果が終わった頃には、天を覆っていた軍勢の半数が消滅していた。

「なんだ、今の雷撃の威力は!?!」

「誰だ! あの子は人間よりの出来損ないと言った奴は!?!」

「馬鹿なっ!?! 人間風情がここまでの力を持っていると言うのか!」

今の一撃で奴らは蜂の巣を突いたような騒ぎになっているが、そんな事は知った事じゃない。

舞空術で敵の中に突っ込んだ俺は、周りにいる奴等に片っ端から拳を叩き込む。

ボディを撃てば腹部が丸ごと吹き飛び、首筋に手刀を放てば頭が胴から離れ、回し蹴りは複数人の上半身を薙ぎ払う。

加減をする気が一切無い攻撃は、種族や階級の区別なく、次々と奴等を肉塊に変えていく。

「ふはははははははっ、どいつもこいつも死ねえええい!!」

我知らず普段なら言わないようなセリフが口を付くが、テンションが上がり過ぎて気にならない。

頭の中が沸騰しそうなほど熱いのに、思考はスーッと冷たい。

普段は頭の片隅に機能しているはずの常識のリミッターも、今はまったく働く気配を見せない。

この『どうにでもなれ』という感覚は本当に久しぶりだ。

今まで積み上げてきたモノを根こそぎ台無しにされたんだ。たまにはこの感覚に任せて暴れまわっても、バチは当たらんだろう。

「……これほどの雷撃を放てるとは、さすがはバラキエルの息子と
いったところか」

声の方を向くと防御の為か身体を覆っていた黒の羽を広げたコカ
ビエルと、躲しきれなかったのか身体の所々に焦げ目を作った鬼太郎
君（仮）とアズラエルの姿がある。

一匹くらいは死んでるかと思ったが、そうはいかないようだ。

「やってくれたな、小僧」

「騙し討ちとは、この下賤者め！」

感心しているのはコカビエルのおっさんだけで、他の二人はおか
むりらしい。

もつとも、ブチキレ具合ではこちらの方が数段上である。

「下賤だあ？　そういうセリフは鏡見て言えよ、小便たれが」

「貴様あつ！　一度ならず二度までも、このシャルバ・ベルゼブブを愚
弄するとは、万死に値するぞ!!」

「ベルゼブブつてのは、ヘブライ語で『糞の王』つて意味らしいじゃね
えか。シモの緩いお前にはお似合いの名前だな。で、そんな名前を名
乗るつて事は今度は小便だけじゃなく、糞も漏らすのか？」

「~~~~~ツツ!?　殺す！　殺してやるウウウツ!!」

こちらの罵倒に我慢が振り切れたのか、魔力弾と光線をやたらめつ
たらと撃ちまくる鬼太郎君（仮）。

こうも易々と挑発に乗るとは、底の浅い奴だ。

それにこの攻撃。

三年前と比べて、何も成長していない。

敗北と土の味を噛み締めても強くなろうとしないとは、まったく話にならん。

サクサクと躲していた回避運動を止めると、あっという間に光線と魔力弾が視界を埋め尽くす。

観念したと勘違いしたのか、鬼太郎君（仮）の顔が嗜虐に染まるのが見えた。

だが、この程度なら避けるまでも無い。

「かああツツ!!!」

目の前に放った気合によって、視界を覆っていた攻撃は煙の残滓を残して消滅する。

「な、なにが起きたのだ!？」

「バカな……」

「あの攻撃を気合だけで掻き消しただと……!？」

狼狽えるアズラエルと鬼太郎君（仮）に、事態をいち早く把握するコカビエルのおっさん。

この辺は実戦経験の差だろうが、そんな事はどうでもいい。

煙を裂いて接近する俺に、鬼太郎君（仮）が離脱しようとするが、遅い。

「つーかまえた」

右腕を獲られた事で三年前の事が頭を過ぎったのか、蒼白になった片目面に笑顔を返すと、俺はそのまま奴の手首を握り潰した。

「ぎゃああああああああつ!？」

さつきまでの余裕はどこへやら、情けない悲鳴を上げる鬼太郎君（仮）。

そのまま折れた手を引き寄せてチョーパンをかますと潰れた鼻から噴水のように血が噴き出した。

そこからさらに二発、三発と頭突きをかましてやると、イケメンの部類だった顔が潰れたイケてない面が変わる。

心情的には十発は殴りたいところだが、片づけなければならぬ奴はまだ残っているので、この辺で我慢すべきだろう。

俺は抵抗が薄まった鬼太郎君（仮）の背後を取ると、奴の身体を足

元に敷き顎と足首をホールドした。

そして、膝立ちになった両足を背骨と骨盤の位置に当てて固定すると、舞空術で地面に向けて加速する。

「うあああああああああああああつ!?!」

重力と氣勢による勢いで、急速に地面が迫ってくる光景に絶叫する鬼太郎君（仮）。

それも地面が間近に迫った事でこちらが両手を絞って、奴の身体をエビ反りの体勢を固定すると聞こえなくなる。

「じつくり味わえ。これが我流地獄の九所封じ、掟破りの裏大雪山落とした」

顎を掴む手をさらに絞り上げる事でこちらに向いた鬼太郎君（仮）に笑みを見せてやると、股間の方からジョロジョロと水音がした。

隕石もかくやといった勢いで地面に激突した俺達は、校庭にすり鉢状の大穴を作り出した。

クレータの中心で白目を剥きながら血泡を噴いている鬼太郎君（仮）から手を離すが、その身体はエビ反りのまま戻ろうとしない。

背骨に骨盤が全壊した上に、激突の衝撃で臓器の幾つかや生殖器まで逝かれただろうから、こうなっても仕方ない。

まあ、これでお漏らしの癖もすこしはよくなるだろう。

取り敢えず首謀者に死なれると厄介なので、命が繋がる程度に治療をしておく。

次の獲物を定めようと向けた視線の先には、こちらを驚愕の表情で見るコカビエルのおっさんとアズラエル。

そして、その背後で剣を振り上げるヌアザ様と三郎の兄貴の姿が。俺が目を見開くのに合わせる様に、振り下ろされる二つの刃。

「ぬううっ!?!」

「ぐおああああつ!?!」

コカビエルのおっさんは寸でのところで三郎の兄貴の斬撃を防いだが、アズラエルの方は『不敗の剣』により三対の翼の半分を斬りおとされた。

「今だ、美朱！ぶっ放せ!!」

「了解！ はあああああああつ!!」

着地しながらの三郎の兄貴の合図で放たれた妖刀の力の発露たる蒼い極光は、夜空を染めながら未だ混乱から立ち直らない敵陣を薙ぎ払い、その半分近くを削り取る。

「敵が浮足立った今が好機、突撃せよ！」

「私達も行こう、ワンコさん！」

「ハイヨーダホー！」

『ボクはオーカミだよ!』

美朱の妖刀の一撃で総崩れになった者達をダーナ神族の騎兵団が蹂躪し、ダメ押しと言わんばかりに何故か妖精と雪だるまを背に乗せたハテイ様が引き裂いていく。

突然始まった皆の攻勢に啞然としていると、足元に軽い衝撃を感じた。

目を向けると、そこには脛にローキックを当てている旋風の姿がある。

「……やりすぎ。みんな心配するから、無茶はダメ」

頬を膨らませてこちらを睨む旋風に、血が昇っていた頭が冷めていく。

思い返せば、確かにやり過ぎである。

いきなり仲間がブチキレて暴れまわれれば、誰だって心配するだろう。

「……すまん」

「ん。三郎お兄から伝言、後はこつちに任せて下がれって」

旋風の言葉に俺は大人しく従う事にした。

皆の事は気になるが、今の俺にはそれを言う権利は無いだろう。

死にかける鬼太郎君（仮）を引きずって後方に引っ込むと、最低限の護衛を残したダヌー様がいた。

「勝手に行動してしまい、申し訳ありませんでした」

「いいえ。ですが、何故あのように心を乱してしまったのですか？」

頭を下げる俺に怒るでもなく、こちらの事情を問うダヌー様。

情けない話なのであまり言いたくはなかったのだが、迷惑をかけて

しまったからには答えないわけにはいかない。

必要な部分を掻い摘んで説明すると、ダヌー様はややこしいモノを見るような視線をこちらに向けてくる。

「なるほど、事情はわかりました。貴方は一人で背負いすぎです。複雑な身の上でしょうから私達に相談できないのは解りますが、妹さんには話す事はできたのではないですか？」

確かにその通りなのですが、その辺は兄の威厳というものがですね……。

「限界までため込んで暴走されるよりはマシです」

……ごもつともです。

俺はもう一度、深く頭を下げた。

さて、一見のんきに会話を交えているようだが、別にサボっているわけではない。

口を動かしながらも前線を抜けてくる敵には、拳の素振りで生じた衝撃波をしっかりと見舞いしているのだ。

これはヤムチャさんから習った技で、元は神様やピッコロの流派の技らしい。

『ドラゴンボール』の読者には天下一武道会で悟空がチチを吹っ飛ばした技と言えはわかるだろうか。

俺の持つ技の中では唯一の遠距離攻撃なので、とつても重宝している。

少なくとも、覚えた時には小躍りして喜ぶくらいには。

これでもう、主人公のクセに投げキャラとか、某ハイパーボツ！

な人みたいに主人公（笑）になるんじゃないやね？ などと言われることはないはずだ。

ん、アレックスの事は好きだぞ。何気に打撃も投げもできるオールラウンダーだし、飛び道具がないところも親近感持てるしな。

なんてメタな発言は置いといて、ダヌー様の護衛と共に前線から抜けてくる敵を叩いていた俺の胸にはある懸念があった。

それは先ほど妖刀の力を解放した美朱の事だ。

持ち主の負の感情をエネルギー源とするという特性上、妖刀の力の

行使は身体に大きな負担をかける。

忍術習得の為に無限M U G E Nの闘争で修練に励んでいたところに比べて、この頃の美朱は修業をサボり気味だった。

今のあいつの体力では、妖刀を使った後も戦えるのだろうか。

美朱の気配を辿って目を凝らしてみると、案の定動きが鈍ってきていた。

額に玉の汗を浮かべながら荒い息を吐く様子を見るに、やはりバテているのだろう。

ダヌー様に美朱のフォローに回る事を言い捨てた俺は、地面を蹴ると同時に潜心力全開の舞空術で一気に加速する。

美朱の周りにいる敵の数は約10。

ベストコンディションのあいつならもの数ではないが、今の状態では少々手に余るだろう。

四方から放たれた複数の光の槍を美朱は後ろに跳んで回避するが、着地した途端に足がよろけてしまう。

その瞬間を狙い、三匹の悪魔が躍り掛かる。

一体は拳圧で消し飛ばしたが、位置的に残り二体が捉えきれない。

歯噛みしながら界王拳で更に速度を上げる俺の目の前で、美朱にむけて剣を振り上げる二体の悪魔。

だが、その刃が降ろされることは無かった。

悪魔の背後に現れた転移門から飛び出した鎌と何かによって、奴らの首は地に落ちたからだ。

「危なかったでやんすね、みーちゃん。怪我はないっすか？」

「ありがと、ベンちゃん。助かったよー」

転移門から現れた白いフード付きの上着にノースリーブのドレスを纏ったおさげの少女は、その場にへたり込む美朱を助け起こす。

よくわからんが、美朱は助かったらしい。

ホツと胸をなで下ろしていると、女の子が出てきた転移門から今度は道化の面を付けた死神が現れた。

「ベンニアの友人は無事なようですね。間に合ってよかった」

「あの、ありがとございませす。お陰で助かりました」

「いえいえ。怪我が無くてなによりです。貴女が傷つけば、この娘が悲しみますから」

ポンポンとベンニア嬢の頭を叩きながら、黒のローブに道化の仮面という出で立ちとは裏腹に明るい声で笑う死神さん。

どこかほんわかとした雰囲気の後ろには、光の槍を手にした天使共の姿が。

取り敢えず、挨拶の前に妹の恩人を狙う不屈き者を黙らせておこう。

槍を投擲しようとしていた天使共々にむけて手首を利かせて拳を振るうと、空気が弾ける音と共に衝撃波が奴等の頭を消し飛ばす。

「助太刀して下さってありがとうございます。貴方が手を貸してくれなければ、今頃私は穴だらけになっていたところですよ」

こちらに警戒して距離を取り始めた敵の中を突っ切って美朱達に合流すると、死神さんが深々と頭を下げて来た。

彼ほどの使い手なら、先程の攻撃には気づいていたはずなのに、そんな様子は少しも見せない。どうやら付けている道化の面は伊達じゃないらしい。

「頭を上げて下さい、貴方は妹の命の恩人ですから。礼を言わなければならぬのはこちらの方ですよ」

「では、お互い命を助けたのですから、お相子ということにしましょう。ああ、これは失礼をば。私はハーデス様の下で、死神の統括をしております、プルートの申します」

「これはご丁寧に。私は日本神話に所属し、この町の監査官を勤める姫島と申します」

流れるような動作でプルート氏が懐から名刺を出したので、こちらも慌てて名刺を取り出す。

「いやいや。プルートの小父さん、ここは名刺交換してる場面じゃないですよ」

「慎兄もだよ。ていうか、いつの間にか名刺なんか作ったのさ」

黙らっしゃい、小娘共。名刺交換は社会人の嗜みなの。

あと、職に就いてるのだから、名刺くらいは持つとるわ。

夏祭りとかに来る新規のテキ屋さんなんかには、ちゃんと配ってるんだぞ。

受け取る為に手を伸ばそうとしたところで、お互いの名刺を掠めるように通り過ぎる魔術の炎。

見れば、双方の名刺の半分が焼失している。

「貴様等、我々を愚弄するのもいい加減にしろ!!」

こちらを取り囲んでいる30体ほどの敵の中で、貴族の格好をした初老の悪魔が真っ赤な顔で喚いている。

さっきの炎の発生源はあれか。

わかつてはいたが、本当にマナーのなっていない奴らである。

「いや、戦場のド真ん中で名刺出してる慎兄達のほうが、非常識だと思うよ」

「これは敵に同情せざるを得ないでやんす」

シャラップ！ 社会に出たら、挨拶は大切にしろものなのだ。

「しかし、ベンニーア達の言葉にも一理あります。これは挨拶をするよりも先に、周りの相手をしてやるべきですね」

言葉と共にローブから所々金属板で補強された革手袋に包まれた手を引き出すプルートル氏。

だらりと腕を下げたまま、細かく動く指に呼応するように、何かが蠢く気配がする。

夜闇の所為で眼には映らないが、空気の振動や気配から感じ取れる、細く、鋭く、しなやかで、そして強いモノ。

これは……鋼糸か。

十指から伸びた極細の刀身は闇の中を音も無く疾りながら、次々と周りの敵の首を捉えていく。

恐ろしいのは、この鋼糸に誰一人気づいていないことだろう。

こちらが臨戦態勢になった事に気を取り直したのか、先ほどの貴族風悪魔が周りに攻撃の合図を出そうと手を挙げた瞬間、それよりも速く動いたプルートル氏の指によって、その首が落ちた。

頭のあった場所から赤い噴水を上げながら、崩れ落ちる悪魔の身体。

たがそれを見る部下達からは何の反応も無い。

何故なら悪魔の首につられるように、彼等の首も地に落ちたからだ。

「ようやく場が落ち着きましたね。これで安心して挨拶が交わせます」

最後の死体か地に伏したところで、再び名刺を出してくるプルート氏。

30体の首を刎ねておいて、キャラが全くブレていない。

死者を導き、亡者や時には生者を狩る彼等からすれば、この光景は日常茶飯事なのだろう。

なる程、これが死神というものか。

こちらにも名刺を出しながらも、心の中で唸ってしまう。

ああ、別に嫌悪や恐怖なんて一切無いぞ。

斬首云々の事を言ったら、こつちだって数百もの感電死体やミンチを作ってるんだから。

純粹に感心しただけだ。

「流石ですね。見事な斬糸術でした」

「お恥ずかしい。見えてしまいましたか」

「いいえ、目に捉える事はできませんでした。空気の流れやプルートさんからの気配を伝って、何とか把握できました」

「これは驚いた。そんな形で糸を見抜かれたのは初めてです。流石はハーデス様の仰られた『第三の少年』ですね」

「『第三の少年』ですか？」

「はい。貴方の宿す力は、みだりに口にするべきではないでしょう」
なじみのない言葉に首を傾げていると、プルート氏が意味を教えてくださいました。

うん、壁に耳あり障子に目ありと言うし、情報の管理は重要だな。

「なる程。しかし、ハーデス様もご存知なんですね」

「ハーデス様はゼウス様やポセイドン様も知っているだろう、とも仰ってましたよ」

プルート氏の言葉に思わず天を仰いでしまう。

オリュンポスの三大神全員が知っているのか。

そう言えば、ダヌー様は主神クラスは感づいていると言っていた。ということ、これからもこの手の接触は増えるのだろう。

できれば全力でお断りしたいが、無理なんだろうなあ……。

プルートの氏に気づかれられないようにため息をついていると、こちらを呼ぶベンニーア嬢の声が聞こえた。

視線を向けると、そこには先程のケルベロスにじやれつかれているベンニーア嬢の姿が。

「おお、見つかりましたか！ その子達に怪我はありませんか？」

「大丈夫。何か怖い目に会ったみたいだけど、怪我は無いでやんす」

「無理やり連れ去られたのです、怯えるのは仕方ないでしょう。とにかく、無事でよかったです」

……うん。本当は何に怯えていたのかは、言わぬが華だろう。

なんか今も俺を見ると尻尾を股に挟むし。

「お二人はあのケルベロスを迎えに来たんですね」

「ええ。あの子達は冥府の番犬の子供なのですが、数日前に誘拐されました。死神総出で探し回っていたところ、貴方の妹さんから連絡があったんです」

「美朱。お前、どうやってベンニーア嬢と知り合っただ？」

「オンラインゲーム。一緒にパーティーを組んでたのがきっかけで、オフ会しようって事になってき。その時にお互い人間とのハーフトで事で意気投合して、友達になったんだ」

……こいつの交友関係はどうなっているのか。なんか、その内世界中に友人がいるとか言いだしそうだぞ。

というか、冥府でもオンゲーあるんですね。

「冥府もハイテク化が進んでるでやんすよ、堕ちてくる亡者さんにもゲーオタとか結構いるし。それはさておき、こっちは子供がいなくなった所為で親ケルベロスが荒れて大変だったから、みーちゃんから連絡が来てホント助かったす。ねえ、プルート小父さん」

「まったくです。どこかのカラスの所為で冥府の門は半壊するわ、亡者や死神の負傷者は絶えないわ、と散々でしたよ」

それはまた、ご愁傷様です。

主犯のクラスはもうじき捕まりますんで、待つててくださいいな。苦笑いと共に向けた視線の先では、二組の男たちが激しくぶつかり合っていた。

一つはヌアザ様とアズラエル、もう一つは三郎の兄貴とコカビエルのおっさんだ。

空中でそれぞれの得物を構えて対峙するヌアザ様とアズラエル。

ヌアザ様のほうは鎧や兜に新たな傷が刻まれていること以外、目立った負傷は見受けられない。

一方、アズラエルは奇襲で失った片方の羽を初めとして、全身が刀傷や打撲痕に塗れている。

戦局がどちらに傾いているかなど、子供でも一目で解るだろう。

「グ……ッ!?! 信じられん、至高の天使たる私が下賤な異神ごときに……ッ!!」

「ふむ……。貴様はどうにも自分を過大評価するきらいがあるようだな。そのように慢心に満ちた性根では、自分以上の実力者に出会えばそうなるのは当然というモノだろう」

「ふざけるなよ……貴様が私より上だと!?! 私は全能たる主の祝福を受けて生み出された神の使徒だぞ! 貴様のようなところで生まれ落ちたかもしれない者に劣るなど、あつてたまるかああああつ!!」

激昂したアズラエルは怒声と共にガラスの様に透明な双剣を我武者羅に振るうが、その斬撃の悉くはヌアザ様の銀腕と左手の『不敗の剣』によつて打ち払われていく。

元々の実力差に加えて、頭に血が昇つた為に太刀筋が乱雑になつてしまつている事。

何より、『不敗の剣』はアズラエルの斬撃を防ぐだけではなく、触れた刀身を全て、熱したナイフでバターを切るように切断してしまつている。

アズラエルの双剣は自身の光の力を使って生み出した物なので、斬られた端から再生成して攻勢を維持できているが、これが普通の武器ならばとつくの昔に勝負は着いているだろう。

不敗の剣『クラウ・ソラス』

一度鞘から抜かれれば何人たりとも逃れる事ができないという剣は、伝説よりも遙かに強力なもののようなのだ。

教室で対峙した時に抜かれていたらと思うと、ゾツとする。

「全能の主か。確かにあの男は優秀だったが、生み出された者もそうとは限らんものだ。……このようにな！ 『モーター・ジハード!!』」

感情のままに打ち付けてくるアズラエルの猛攻を防ぎ続けていたヌアザ様は、瞬くほどの間刃を交差させた奴の双剣をクラウ・ソラスで両断し、がら空きになった腹に銀の拳を叩き込む。

インパクトの瞬間、砲弾を放つような重々しい音が響き、アズラエルは身体をくの字に折ったまま大きく弾き飛ばされる。

だが、ヌアザ様の放った銀腕の一撃も奴を討つには届かなかったのか、血反吐を零しながらもアズラエルは残された羽根で姿勢を整え、新たに生み出した光の剣を放つ。

高速回転をしながら飛翔する剣は銀腕に阻まれヌアザ様に届かなかったが、それでもアズラエルの眼から戦意は消えていない。

「ぐ……おあ……ツ!? 私……主の忠実な僕！ あの方の言葉に従い、墮天使や悪魔共を駆逐して地上に千年王国を築くのが我が使命！ 種族の滅亡などに怯えて主の言葉を違えたミカエル共ではなく、主の意思を胸に刻んだこの私こそが……！ その為ならば仇敵である墮天使や悪魔、そして『無限の龍神』とも手を組んでやる！ だからこそ、こんなところで躓くワケにはいかんだ!!」

気炎を吐きながら、羽と血を撒き散らして飛翔するアズラエル。

満身創痍にも拘らず精彩を取り戻した動きに、口元に凄絶な笑みを浮かべたヌアザ様もまた、クラウ・ソラスを両手に構えて加速する。

瞬きすら許さない刹那の攻防が終わり、両者は互いが背を向けた状態で動きを止める。

二人の間を一陣の風が吹き抜けると、アズラエルの首に朱の線が走り、ゆつくりと胴から頭が落ちる。

「天使アズラエル。その忠誠と信念、見事であった」

地に転がるアズラエルの首を拾い上げたヌアザ様は、語りかけなが

ら銀の手で見開いたままの眼を閉じてやる。

本来なら首級を掲げながら鬨の声を上げるのだろうが、相手への敬意とダーナの騎士達やハティ様の活躍で相手の軍がもはや数えられる程に減少している事から取りやめたのだろう。

ダヌー様の元へと足を踏み出したヌアザ様から目を離し、俺はもう一つの決戦である三郎の兄貴の方に視線を向ける。

「ふははははははっ！ 面白いぞ、極東の龍人よ！ 二天龍以外にここまで歯ごたえのある龍がいようとはな！」

「ご満足いただいてなによりつてな。けど、気を付けたほうがいいぜ。俺の鱗はちいとばかり固すぎるんでな、下手に噛みつくと歯が折れるからよ！」 『八相発破！』

コカビエルのおっさんが生み出した光の槍の雨を、三郎の兄貴は手にした双剣から繰り出す怒涛の連続突きで、次々と弾いていく。

「ヌルいぞ、龍人！」

自身に当たるであろう槍を全て撃ち落とした三郎の兄貴。しかし、その背後には先ほどの槍衾を目晦ましにして間合いを詰めたコカビエルのおっさんの姿。

裂帛の気合と共に、がら空きになった背後に振り下ろされる光の槍。

だが、それは軌道を予め知っていたかのように差し出された脇差によって、その動きを止める。

驚愕に目を見開くコカビエルのおっさん。

振り向きざまに放たれた斬り上げの太刀は、その一瞬の間を突いておっさんの纏った黒のスーツを切り裂き、浅くではあるがその身体に傷を刻む。

「貴様……ッ!?!」

『柳生心眼刀・相破』つてね。悪いが、俺がこの二刀を手にしている間はチャチな小細工は通じんぜ？」

飛んで距離を取るコカビエルのおっさんと、グラウンドに足を噛ませて双刀を構える三郎の兄貴。

「俺の手札を小細工とほざくか。よかろう、ならば正面から打ち砕い

てくれるわ！」

気炎を吐きながら光力で両手に槍を創り出し、猛スピードで突撃するコカビエルのおっさん。

迎え撃つ三郎の兄貴は先程のようにカウンターは取れないものの、相手の力を受け流す体捌きと刀身を小太刀と同程度の長さに変えた双刀を巧みに使って、全方位から襲い来る連撃をいなしていく。

三郎の兄貴が持つ双刀は、龍の牙を変化させたものなのだ。だから、ある程度は己の意思で姿を変える事ができるらしい。

「俺の全速にこうも容易ついて来るとは、貴様本当に無名の龍か？」

「おう、こちとら地域密着型の龍神様よ。まあ、ここまで強くなれたのはつい最近だから、お前さんが知らんのも無理はないがな」

1分足らずで互いに数百もの手を繰り出した両者は、刀と槍を鏝迫り合いのように噛み合わせながら、至近距離で睨みあう。

「強くなっただと？ 戯言を。俺達のような被造物や貴様等の様な神は、その能力を生まれた時から決められている。オーフィスの蛇などといった外的要因が無ければ、定められた限界を超える事など出来ん」

「それでもないんだな、これが。ウチの優秀な後輩が中々面白い空間を持つていてな。そこで修行すれば新しい能力や技が身につくから、俺達みたいな存在でも強くなれるのさ。———こんな風になっ！」

コカビエルのおっさんを蹴り剥がした三郎の兄貴は、刀身に氣を込めた右の太刀を切っ先が足元を掠るように振り抜いた。

すると刀身から放たれた氣は五行思想でいう水氣を纏い、衝撃波となつてコカビエルのおっさんに襲い掛かる。

「ぬっ、飛び道具まで……ッ！」

這うような軌道で疾る衝撃波を3対の黒い翼を羽ばたかせる事で回避したコカビエルのおっさんは、距離を取って油断なく兄貴の様子を伺う。

『喝咄かつとつ 水月刀すいげつとう』 こいつもそこで覚えた技だ。どうだい、面白いだろ」

二刀を肩に担いでカラカラと笑う三郎の兄貴。いや、あの人物凄い

勢いで機密漏えいしているぞ。

名前を出してないだけマシだけど、コカビエルのおっさんは墮天使の幹部だから、ヘタをしなくても兄貴が言ってるモノの所有者が俺だって行きつくくんじゃねえか？

「確かに興味深い。その話が本当ならば、そいつの重要性は聖剣など比べ物にならない。何としても我らの手に収めねばな！」

両手に持っていた槍を消したコカビエルのおっさんは、自身の身長を超えるほどの剛槍を生み出す。

「龍人よ、後が聞えているのでな、貴様との遊びはここまでにさせてもらおう」

「おいおい、そんなつれない事言わないで、もう少し遊んで行ってくれよ」

光の剛槍を腰だめに構えるコカビエルのおっさんに、三郎の兄貴は軽口を叩きながら刀を構えていた両手を下ろした。

別に兄貴は構えを解いたわけじゃない。あの棒立ちに見える体勢は『無形の位』むぎようのくらゐと呼ばれる、敵のいかなる攻撃に対しても千変万化・自由自在に対応できる構えなのだ。

そして、兄貴が体得した技の中で無形の位から入るものは一つしかない。

どうやら、お互いこれで勝負を決めるつもりらしい。

「そうはいかん、貴様の言う能力者も確保せねばならんのでな。だからこそ、貴様はここで死ねい!!」

気炎を吐きながら、腰だめの槍をそのままに猛烈な勢いで飛び出すコカビエルのおっさん。

最初の加速で最高速に達したその身体は、纏う空気を赤熱化させながら夜空に紅い軌跡を描いて、三郎の兄貴へと襲い掛かる。

必殺の突撃を前に相手とは対象にゆっくりとした動きを見せる三郎の兄貴は、もはや砲弾といってもいいほどの穂先を脇差で滑らせて僅かに逸らすと、流れる水のように無駄のない足捌きで相手の側面に回る。

瞬間、肉を断つ音が周囲に響き、鮮血が宙を舞った。

必殺の一撃を躲されたコカビエルのおっさんは、鱗谷と首、そして脇に刻まれた刀傷から赤熱化した空気とは違う、生命の紅をその軌跡に交えながら地面に堕ちた。

三郎の兄貴はその姿に目を向けたまま地面に降り立ち、血振りをした二刀を自身の鱗に収める。

「御庭番式小太刀二刀流 回かいてんけんぶ転剣舞。 ……カラスの大將よ。あんた、強かったぜ」

手向けの言葉を残し、こちらに歩いて来る三郎の兄貴。

俺達の前までくると龍人から人の姿に戻り、慣れた手つきで胸ポケットから出したヤニを吹かし始める。

「お疲れ、兄貴」

「おう。で、頭は冷えたかい、小僧？」

「……迷惑をかけて悪かった」

兄貴の言葉に謝罪すると、ポンと下げた頭を軽く叩かれた。

「反省してるとんなら、俺から言う事は無いさ。お前さんの今までの頑張りを思えば、キレるのもわかるからな。次からは、爆発させる前に俺か久延毘古の爺様に言うこつた。お前さんの愚痴くらいはいくらでも聞いてやるからよ」

「ああ、ありがとうな」

「おうよ。さて、後はどのくらい残ってた？」

「もう敵はいないみたいだよ」

「みんなオイラ達がたおしたホー」

『戦ったのはボクなんだけど……』

紫煙と共に吐き出された兄貴の呟きに答えたのは、ハテイ様達だ。どれほどの敵を倒したのか、夜闇から現れた3人(?)の姿は返り血で大変なことになっている。

黒毛のハテイ様は目立たないだけマシだが、妖精は全身に被った血が固まってホラー映画顔負けの有様だし、雪だるまにいたっては白かった部分が真っ赤に染まっている。

「あくあ、こりゃ酷い」

「……死神のあつしもこれにはちよつと引くやんす」

「これでは街中は歩けませんね。どこか血を濯^{ゆす}げる水場があればよいのですが」

上から美朱、ベンニア嬢、プルートのコメントである。

さすがに学園の水場を使うわけにはいかないのが、人祓いの結界と認識障害で誤魔化しながら番所まで連れて行かなければならないだろう。

「ところで、その嬢ちゃん達は誰だ？」

「私の友達のベンニアちゃんやんと保護者のプルートさん。ケルベロスの回収に来てくれたんだ」

「冥府所属の死神見習い、ベンニアでやんす」

「冥府でハーデス様にお仕えしているプルートと申します。以後お見知りおきを」

「あ、どうも。日本神話駒王町番所所属の甲賀三郎です。名刺は持っていないので、申し訳ないが挨拶だけで」

「……同じくつむじ」

「私はダヌー様のお側役をしているピクシーのマベルよ」

「オイラはジャックフロストのヒホーだホー」

『北欧からお嫁に来たハテイだよ』

「これは皆さんご丁寧に。ハテイ様もご結婚、おめでとうございます。もうこちらの生活には慣れましたか？」

『うん！ 旦那様は強くてカッコいいし、慎達も良くしてくれる。それに、さくらもちがとってもおいしいんだ！』

「おお、それはようございましたね」

日本の営業マンよろしく、初めての面子に名刺を配りまくるプルート氏に若干呆れていると、ダヌー様達が合流してきた。

ダヌー様と面識があったプルートの氏がベンニア嬢を紹介している間に、俺はヌアザ様と前線に出ていた騎士に謝罪をしておいた。

ヌアザ様達もダヌー様から俺の事情を聞いていたらしく、こちらの謝罪を快く受け取ってくれた。

久延毘古様に確認をとったところ、街を狙った術式の方も解除されているらしい。

まだまだ問題は山積みだが、聖剣から始まった一連の件で俺達ができる事はもうないだろう。

あとは、上の仕事だ。

停戦を結ぶ為のハードルは相当高くなってしまったとおもいますが、是非ともサーゼクス兄達には頑張っていたいただきたい。

出雲の方角に目をむけながら停戦交渉の行方を憂っていた俺は、不意に見知った気配が近づいて来る事を感じて思わず顔を顰めた。

……この人と悪魔と龍が混じったカオスな気配。

不本意ながら、俺はこの気配の主をよく知っている。

ぶり返してきた胃痛と頭痛に呻く俺を尻目に、気配はこの場に到着した。ご丁寧な学校に張られた結界をぶち壊して、だ。

「久しぶりだな、慎！ アザゼルのお使いのついでに遊びに来てやったぞ!!」

夜空を背に光の翼を広げて尊大な態度で腕を組む、白い鎧の大馬鹿野郎。

間違いなく、俺の知人の中でもブツちぎりの問題児兼アホの子であるヴァーリ・ルシファーだ。

というか、あの馬鹿。アザゼルのおっちゃんの手で動いているのをバラしやがった。

……頭の中に流れた三勢力終了のお知らせは、気のせいだと思いたい。

とりあえず、あいつぶん殴っていいですか？

14話

どうも皆さん。

現在進行形でストレスと胃痛がハンパない、姫島慎です。

前世はともかく、今は高校生なのに仕事によるストレス性胃炎とか、いくら労働大国日本の神話勢力に正式移籍したからって、初日では酷いのではなからうか。

まあ、原因の大半が身内のしくじりなんで、自業自得と言えなくもない……のか？

……うん、その辺は深く考えないでおこう。

「そんな所で見栄張ってないで降りてこい！ このままじゃ話もできないだろうが！」

こちらが声を張り上げると、禁手の兜の部分を解除して降り立つヴァーリ。

無限の闘争^{MUGEN}では『最速敗北記録ホルダー』だの『白龍皇(笑)』だのと散々なこいつも実力だけは達人級なので、その隙の無い所作にこちらの面々の多くは警戒を解こうとしない。

「すいません、皆さん。コイツはヴァーリ。今代の白龍皇で、俺の悪友です。敵だった場合は俺が責任をもってブチクロスなので、警戒を解いてもらえますか」

「いきなりヒドいな、ブチクロスなんて……」

「やかましい。ヒドイとか言うなら、その物騒な笑顔なんとかしろ。

……ほれ、お前も挨拶しろよ」

「白龍皇のヴァーリ・ルシファーだ」

「超人圧搾機いいいいツツ!!」

「ヌワー!?!」

早速口を滑らせた罰に背後から両足をホールドして、羽交い締めで両肩と首を絞め上げると、途端に情けない悲鳴を上げるヴァーリ。

超人圧搾機とは將軍様がキン肉マンとの死闘の中で、魔のシエイクハンドへの囮として使用した関節技だ。

劇中では簡単に外されてしまったが、いざ使用してみるとなかなか

に使える技だつたりする。

「人が気を利かせて姓を伏せてやったのに、あつさりバラしやがって、このアホ」

「挨拶はしつかりやれ、と俺に教えたのはお前だろう。それになんて俺の姓を隠さなければならぬんだ?」

「アザゼルのおっちゃんから何も聞いてないのか?」

「コカビエルが馬鹿な事をしているから、ブチのめして回収してこい、としか言われていないな」

技から解放されて身体を伸ばすヴァーリに、またしても頭を抱えてしまう。

なに考えてんだ、おっちゃん。

只でさえ無自覚に余計な事をする奴なのに、状況をちゃんと教えなかつたら『やらかす』に決まってるだろうが。

仕方ないので、今日起こつた事をヴァーリにも理解出来るように分かり易く纏めて説明すると、しばし考える素振りを見せたあと、

「なぜ、そんな面白いイベントに呼んでくれなかつたんだ!」

と、のたまつた。

奴のダメっぷりは平常運転らしい。

つたく、こんな時こそ出番だろうに、保護者のサルはなにしてんだ!

「楽しくねーよ。それよりお前、コカビエルのおっさんを回収しに来たんだろ。あつちに転がってるから持ってけよ」

指でコカビエルのおっさんが墜落した場所を示してやると、素直に飛んで行くヴァーリ。

現場に着くなり周囲をウロウロしたり墜落地点をこねくり回したり、と挙動不審になっている事に首を傾げていると、何故かヴァーリは手ぶらで帰ってきた。

「コカビエルの奴、死んでいたぞ」

「……なんだと?」

ヴァーリの言葉に美朱と旋風を連れて確認に行くと、確かに土に埋まっていたコカビエルは冷たくなっていた。

「死体が発見されました。一定の捜査時間の後、学級裁判をはじめます」

「おいやめろ」

青い猫型ロボットの連想させるダミ声で、不謹慎な事を言う美朱の頭を叩はたいておく。

確かにここは学校だけど、学級裁判もエクストリムなお仕置きもありません。

「ふむ、まさか死んでいるとはな」

「どうするんだよ？ 回収頼まれてたんだろ」

「生きたまま回収するように言われていたが、死んでしまった以上は仕方がない。だから——」

ヴァーリは一旦言葉を切ると、コカビエルの死体に魔力弾を放つた。

手から離れた魔力弾は、轟音と共にコカビエルの軀を黒い羽根一枚を残して消滅させる。

「これでも持つて帰るさ。アザゼルなら、これを見せれば奴がどうなったかは、解るはずだ」

地面に横たわる羽根を拾い上げたヴァーリは、それを神器の収納スペースに収める。

ヴァーリの用事も済み、みんなのいる場所へ帰る道すがら、俺は奴を生きて確保できなかった事に頭を悩ましていた。

「しかし困ったな。コカビエルは今回の主犯格で、『禍の団』の大事な情報源だったのに」

駒王町に対するテロに関しても、グリゴリへの当たりを弱める為に身柄を抑えたかったのに、死んでしまったのは大きな損失だ。

「でも、主犯格って悪魔側にも一人いたよね。えくと……、シヤ……、シヤ……、シヤア・アズナブルだっけ？」

「いや、墓場鬼はかばきたろう太郎だろ」

「そんな名前の旧魔王、いたかな？」

「……シャルバ・ベルゼブブ」

「ちっ、惜しいっ！」

「いや、少しも掠^{かす}ってないじゃないか」

印象が薄さから名前も思い出せない、鬼太郎君（仮）について話合っている、携帯からメールの受信音が鳴った。

確認すると、天照様の名前でダヌー様を高天原に護送するようにとの指示が出ていた。

やれやれ、一仕事終えたばかりだったのに人使いの荒い事だ。

「どうした」

「いや、なんか追加の仕事が入った」

画面を見ながら顔を顰^{しか}めていた俺を見て、ヴァーリが声を掛けてきたので答えを返しておく。

元の場所に戻ると、他のみんなはすでに撤収の準備を終えていた。

「おう、慎坊。白龍皇の用事は済んだのか？」

「ああ。コカビエルのおっさんは死んでたから、その証拠を回収してきた。みんなはこれからどうするんだ？」

「俺は番所に帰って一風呂浴びて、あとは祝杯として一杯呑^{のみ}むかな。お前さんは？」

「仕事だよ。ダヌー様達を高天原まで護送しろとき」

「そいつはご愁傷さまだな。まあ、アズラエルって奴の言ってた事もあるし、念には念を入れたいんだろうさ」

「たしか、無限の龍神ウロボロス・ドラゴンと手を組んだ云々だっけ」

「それな。奴さん本人が出張ってくるとは思えんが、旧魔王の残りなんてのが来る可能性がある。勝手に来たとはいえ、ダヌーの姐さん達に何かあつたら、御上おかみとしても事だからな」

だからお前さんが指名されたのさ、と三郎の兄貴は啜えた煙草を燻^{くゆ}らせる。

「話は分かるが、使われる方はたまんねえな」

「そう腐るなって。それも期待されてる証拠なんだからよ」

ポンポンとこちらの頭を軽く叩いて離れていく三郎の兄貴の背を見ながら、俺は軽いため息をついた。

まあ、愚痴つっても始まらんし、取り合えず番所に戻るか。

「そーいや、お前は どうするんだ、ヴァーリ？」

「帰るよ。用事も済んだし、お前とも遊べそうにないからな」
鎧姿で器用に肩をすくめるヴァーリ。

奴の遊ぶという言葉に、なんとなく興味を惹かれたので尋ねてみると、問われたヴァーリは無駄に不敵な笑みを浮かべた。

……ああ。またアホな事を考えてるな。

「もう一度『神』ランクに挑戦しようと思っていた。俺もお前も以前より強くなっていくからな。上手くいけば勝てるかもしれない」

……どうやら遊びとは、臨死体験のお誘いだっただようだ。

「念のため聞いとくが、何と闘うつもりなんだ？」

「あのラーグースという奴だ。どうせ挑戦するなら、相手は強い方がいいからな」

自信満々のヴァーリに、俺は意識が遠くに逝きそうになるのを必死に耐えた。

流星はアホの子。

発想の方向が760。ほどぶっ飛んでいる。

「愚か野郎。前にソイツと闘った時、相手が登場した余波で、俺達消されたじゃねえか」

衝撃的すぎて怒る気力も湧かなかったので、これ見よがしに深い深いため息をついてやる。

ラーグースへの挑戦は今思い返しても、異色の体験だった。

対戦場に転送された俺達は、どこまでも続く見通しの利かない真っ暗な空間に立っていた。

対戦相手の姿が見えないので、気配を探ったり逆にこちらの気配を消したりしていると、遠くから光のようなモノが見えて、次の瞬間には『ドワオ』という音のようなモノと共に、こちらの存在が消滅したのだ。

この消滅というのは奇妙なもので、死ぬ際に感じる、奈落へと墮ちていくような感覚とは全然違った。

ゆっくりりと、ゆっくりりと、自分という形が途方もなく大きなモノに溶けていく、と言えいいのか……。

それだけでもなんとも表現する言葉に困るのだが、さらに不思議な

事は自分が消えていくのに、ちつとも怖くないのだ。

むしろ、大きなものに包まれていく妙な安心感まであった。

多分、あの感覚が『虚無る』という奴なのだろう。

俺の他に転生という事象があるのだとしても『虚無る』なんて経験をしたのは、俺くらいのものだろう。

その状態からしつかり復活させてくれた、無限の闘争に備わった死亡防止機能の凄まじさには、頭が下がる。

「今考えたら、あれに比べたらオーフィスもグレートレッドも、ミジンコみたいなもんだよなあ」

なんせ奴は登場した際に生じる余波だけで、惑星を破壊する様な化け物だ。

無限と呼ばれても、所詮地球の生物でしかない龍二匹など、比較にならない。

「あの圧倒的すぎる存在感に比べたら、この世の全ての事は、ちつぽけなんだろうな。だが、そんなトンでもない奴だからこそ、挑み甲斐があるだろう?」

「そうだな。笑つちまうくらいに高すぎる目標なんだけど、不思議と届かないとは思わないだよなあ」

「なら、もっと強くないとな」

「差し当たっては、登場した時に、ちゃんとこつちが存在しとかないな」

『……お前等絶対おかしいよ』

俺とヴァーリの語らいはアルビオンの冷徹なツツコミで終わりを告げた。

まったく、男のロマンがわからん白トカゲだ。

◇

あれからヴァーリが帰ったり、通学路の裏路地に打ち捨てられていた例のシスター二人をハティ様が見つけ、息があつたので保護したりと色々あつたが、その辺の後始末は文^{ふみ}さんと久延毘古様に任せ、身支

度を整えた俺はダーナ神族一行と共に高天原に来ていた。

『行くならついでに』という訳で護送することになった捕虜の鬼太郎君（仮）は、術式阻害と封魔の結界が施された檻付きの荷車に揺られている。

荷車の牽引けんいんと囚人の監視に協力してくれている騎士団には感謝である。

さて、プライベートでの来訪ではないので、神職の正装に着替えているのだが、その姿が珍しいのか、視線が背中にプスプスと突き刺さる。

「変わった格好だな、監査官殿。この国の民族衣装かな？」

「いいえ、ヌアザ。あれは神官が纏う装束だったはずです。以前こちらに招待された時、見る機会がありました」

「なんと……。では、それを纏っていると云う事は、監査官殿は神官も勤めているのか？」

「ええ。まだまだ未熟者ですが」

「そなたのような腕の立つ者が神官を勤めているとは、日本は面白い国だな。我等なら間違いなく戦士として取り立てているがな」

「まあ、色々ありましたので」

この辺の経緯に突っ込まれると、面倒なので適当にお茶を濁しておく。

こんな感じに会話を交えながら、入り口で合流した女官の先導に従って高天原の中を進んでいく。

ススキや野草が生い茂る丘や緑豊かな森。

背丈ほどもあるキノコの群生地を抜けると、水田や茅葺き屋根の家が立ち並ぶ昔ながらの村落が見えてくる。

神々が住まう神殿はこの村の中央だ。

来客というものがあまりないのであろう、住人からダーナ神族一行に向けられた好奇の視線の中を歩く事、数分。

俺達が神殿に着くと、門の前には天照様と土色の鎧兜を纏った偉丈夫。

そしてサーゼクス兄をはじめとした聖書の勢力が集まっていた。

「天照大神様、ダヌー様ご一行がお着きになりました」

女官の報告に天照様と偉丈夫は、先程まで相手をしていた聖書の勢力を放ってこちらに駆け寄ってくる。

案の定というか何というか、三勢力の扱いが雑だな。

「ダヌー様、遠路お疲れ様です。駒王町の事件を追っていた際に、カラス達に襲われている貴女が遠見に映った時には、息が止まりそうでしたわ」

「その節はご心配をおかけしました。幸い、早期に日本神話の方々と合流できたので、大事には至らずにすみました」

「母上、夢見の確認の為とはいえ、無茶な行動は控えていただきたい。護衛が妖精二匹と知った時には、さすがに肝が冷えたぞ」

「ごめんなさい、ダグザ。この件はどうしても自分の目で見極めないといけなかったから」

言葉と共にダヌー様がこちらに目を向けると、つられるように偉丈夫、ダグザ神も刃物のように鋭い視線でこちらを捉える。

「この小僧がそうか。なる程、遠見で見ると骨がありそうだな」

しげしげとこちらを値踏みするような視線と共に、歩みよってくるダグザ様。

あまり良い印象を感じる態度ではないが、相手はダーナ神族の長老だ。

この程度で目くじらを立てるわけにもいかない。

「お初にお目にかかります。私は駒王町で監査官の任に就く、日本神話の姫島慎と――」

跪いて挨拶をしようとしていた俺の脳裏に、突然刺すような感覚が過ぎた。

顔を上げると、目の前には土色の籠手に包まれた拳が迫ってきている。

突然の事に追いつかない思考。

しかし、愚鈍になった頭を嘲笑うように身体は先に動いていた。

跪いた体勢から、膝を立てている足を地を這うような軌道で突き出して相手の軸足を払い、支えを失い相手の身体が泳いだところで、勢

いが殺された拳を捌いてその手首を捕る。

そのまま中国拳法の靠こうの要領で、立ち上がる勢いを利用して肩口を相手の腹部に叩き込み、浮き上がった軸足を捕らえて肩車のように、抱えた相手を投げ落とす。

頭から地面に突っ込んで呻く相手に残心を決めたところで、漸く思考が追いついた俺は、地面で呻いているのが誰かに気づいて顔が蒼白になった。

やべえ!? ダグザ様、投げちまった!

あんなパンチなんて食らうか防ぐかすればいいのに、条件反射で迎撃しおってマイボディめツ!?

これシヤレにならんわ!

どないしよ! コレほんまどないしよ!?

「む……う………。随分と綺麗に投げられてしまったな」

脳内絶賛大混乱の中、冷や汗を流しながら棒立ちになった俺の前で、頭を軽く振りながら立ち上がるダグザ様。

「すみませんっしたアアアアアアアッ!!」

そして、それを見て脊椎反射の如く全力全開の土下座をする俺。

今なら高木先生が言っていた、生物の反射を利用して超スピードを出す拳法『邪極拳』を体得できるかもしれない。

渾身の力で額を地面に叩きつけた為、とんでもない破碎音と共に顔面が土に埋もれ、手を付いていた地面が陥没したが、そんな事は気にしてられない。

ダグザ様の許しが出るまで、日本が誇る謝罪のベストオブベスト、土下座をするしかない。

「あー……取りあえず顔を上げろ、小僧。さっきの件でお前が頭を下げる必要はない。非は全て俺にある」

「まったくです。彼を試すにしても、もう少しやりようがあるでしょうに」

許しが出たので顔を上げると、バツが悪そうに顎髭をさするダグザ様と、呆れた様子のダヌー様が目に入った。

「俺は母上のように、貴様に関しての夢見を得てはいないのだ。今回

の事件は一部始終を遠見で見えていたが、これも俺自身の目で見たわけではない。そこで、手っ取り早く貴様の力を試す為に、ああいう手を打ったというわけだ」

……そういえば、ダグザ神は魔術と生死を司る神であると同時に、表に『生』裏に『死』の力が込められた棍棒を振るう武神の側面もあつたな。

こんな脳筋な試し方をしたのは、その側面からってことか。

「はあ……それで、私はどのような感じなのでしよう?」

「うむ。今で解つたのは、貴様は超一流の使い手であることだな。この試しは受けた者が未熟者なら、何も出来ずに顔面を砕かれて終わる。腕に覚えの在る者は、防ごうとして両腕をへし折られるだろう。一流の戦士ならば、防ぐような愚は犯さずに回避しようとするはずだ。だが、貴様は他のどれとも違った。あそこで攻勢に出て見事に俺に土を付けるなど、並大抵の者に出来る芸当ではない」

「お褒めに預かり、光栄です」

「事実を言つたまでだ。此度は武の腕だけだが、他の部分についてはおいおい知っていくとしよう。貴様が日本神話に属する以上、長い付き合いになるだろうからな」

「……宜しくお願ひします」

上機嫌な声と共に、獲物を狙う猛獣のような目でこちらを見るダグザ様。

なんかまた厄介な人に目を付けられた気がするなあ。

「ああ、そうだ。先ほどの謝罪は楽しめたぞ。頭を下げる際に額で地面を砕く事で己の謝意を示すとは、なかなかユニークではないか」

……天照様、この妙な誤解を解いといってください。

少し蒸し暑さが増してきた夜気と気の早い虫の音の中、俺は先ほど通つた神殿と高天原の入り口を繋ぐ道に再び歩を進めていた。

後ろには辛気くさい顔でこちらの後に続く、三勢力の首脳陣とその護衛の面々の姿がある。

あの騒動の後、ダヌー様の護衛も終わったので帰ろうとしたところを天照様に呼び止められた俺は、『ついでだから、あの面倒くさい奴らも

送って行け（意識）』と、三勢力一行の護送を押しつけられたのだ。初日からこのハードワークっぷり、さすがはブラック企業という言葉を生み出した国なだけはある。

まあ、『このメンツに限っては、明日の朝まで駒王町の滞在を許す』なんて言ってくれているあたり、今後冥界に行く事が激減する俺の為に、話す機会を作ってくれたのだろうか。

この辺はわかってても言わないのが、華だろう。

因みに、この時の扱いの適当さに天使の護衛から不満の声が出たが、当然の如く黙殺された。

自国の主戦派がテロ組織を作ったのを察知できなかったうえに、その組織が停戦交渉真つ最中に相手国のVIPを狙い、挙げ句の果てに仲裁国の一都市を吹き飛ばそうとしていたのだ。

その場で縄を打たれなかっただけでも、十二分に温情措置である。交渉が『禍の団』の大活躍の所為で上手くいかなかったのは容易に想像がつくが、こうもヘコまれてはオチオチ話もできない。

ここは一度河岸かしを変えて、仕切り直すべきだろう。

「なあ、親父。これからみんな飲みにはいかないか？」

振り返ってうなだれた親父に声をかけてやると、陰の差した顔に戸惑いが浮かぶ。

まあ、堅物の親父にこんなこと言っても、話がスムーズにいかないのは百も承知。釣るべき相手は別にいるのだ。

「悪くねえな。今回は嫌な事が多かったし、そういう気分を吹き飛ばす為にも、俺の店でパーツとやるか」

俺の意図を察したのか、それとただ飲みただけなのか、狙い通りにアザゼルのおっちゃんおっちゃんが釣れた。

「いや、おっちゃんの店って、おツパブじゃねーか。セラフオール姉さん姉さん達がいるのに、そんなところ行けるかよ」

「ああ？ ストレス解消なら、いい女とイチヤイチャするのが一番だろうが」

「そりやおっちゃんだけだ。高校生や嫁さん連れた男いんのに、なに言ってるんだ」

「下の毛も生え揃わねー前から酒かつくらつてた奴が、なあにが高校生だよ。バラキエルに似て妙なところは固いな、お前はよ」

「やかましいわ、文句だったらコミュ障の親父に言えよ」

「ねえ、慎ちゃん。おっパブってどういうところなの?」

アザゼルのおっちゃん和軽口を叩き合っていると、好奇心が刺激されたのかセラフオルー姉さんに肩を叩かれた。

あー、女の人に説明する場所じゃないんだけどな、あそこって。

あと、親父は事実を言われたくらいでへこむな。

「セラフオルー姉さんは知らなくていい場所だよ。まず一生縁のないだろうから」

「エツチいところ?」

「エツチいところ」

「それなら何故、貴方はそんな場所の事を知ってるのかしら?」

「去年のグリゴリの忘年会の会場に、そこのおっさんが指定したんだよ。俺等も店に入るまで知らなかったから、そうと判った時は死ぬほどびっくりしたわ。美朱とシエムハザさんの息子の晴矢はドン引きしてたし」

「……アザゼル、ちよつとこっちに来なさい」

「ちよつ、なにすんだグレイファイア!? サーゼクス! お前の嫁だろ、何とかしろ!」

「残念だがそれは無理だ。アザゼル、恨むなら自身の行いを恨むがいい」

護衛から姉モードになったグレイファイア姉さんに、草むらの奥に連行されるアザゼルのおっちゃん。

グレイファイア姉さんは、俺はともかく美朱には過保護だからな。

おっパブなんか連れて行ったと知られれば、こうなるのは当然だ。

これはざまあと言わざるを得ない。

「それで慎ちゃん、どこのお店に行くつもりなの?」

「ウチの氏子さんがやってる居酒屋。ちよつと狭いけど料理の腕は確かだし、裏の事も知ってるから込み入った話をして大丈夫だ。それ

で、どうする？」

「私とグレイフィアは参加させてもらう。慎とプライベートで飲む機会はなかったからね」

「サーゼクスちゃんが行くなら、私も行くかな。慎ちゃんに愚痴つちやうのは年上としてカツコ悪いけど、今回だけの特別つてことで」

「お……俺も行くぞー！ 今日のはしこたま呑んで、愚痴でもぶちまけねえとやってらんねえ!!」

「アザゼルが参加するなら私も参加しよう。泥酔した同僚の世話を、息子にさせるわけにはいかんからな」

サーゼクス兄を皮きりに、誘ったみんなから次々と色よい返事が返ってくる。

突然言い出した事なのに、全員参加してくれるとはありがたい限りだ。

「せっかくのお誘いですが、我々は欠席させていただきます。今後についでの打ち合わせもありますので」

「え……？」

「え……？」

店に予約の電話を入れようとしていた俺は、白のローブを纏った金髪イケメンの言葉に戸惑いの声を上げてしまった。

いや、アンタらを誘った覚えはない。

というかアンタ、誰？

「そ……そうですか、残念です。次の機会があれば、またお声かけしますので」

「はい。その時には是非、参加させていただきます」

思わず口をつきそうになる『誰』という言葉を読み込む俺に、なんとも爽やかな笑顔を返すイケメン。

いかん、もの凄く気まずいぞ。

その後、なんの問題もなく高天原の出口を潜って駒王町に転移すると、金髪イケメンは護衛二人と共に夜空へと去っていった。

さて、本人も消えたことだし、胸にこびり付いた疑問を解消するでしょう。

「なあ、親父。さっきの金髪の兄ちゃん、誰？」

「ん？ あれは天界を取り仕切っている天使長のミカエルだぞ。奴がどうかしたのか？」

「飲み会の話の時、誘ってもないのにすげえ笑顔で欠席って言うてきたからさ。あの自意識過剰な人、誰かなって思ってた」

そっかあ、ミカエルか。

と呟くと、背後で背後で吹き出す声が複数聞こえた。

見ればサーゼクス兄達が真っ赤な顔でうずくまって笑いを堪えており、アザゼルのおっちゃんにいたっては爆笑していた。

ふむ、何かおかしい事をいったらだろうか？



「すまない！朱璃、すまないいいいい……。私は子供に苦勞を掛ける事しかできない、ダメな父親だああ……。！」

テーブルに突っ伏しながら、手にした空のジョッキで天板を叩く親父。

店に入って約二時間。

順調に酔っ払い、いつものコースの終盤である『お袋への謝罪』を泣きながら繰り返す親父に、俺は小さく溜め息を漏らした。

背後では、焼酎や日本酒を一升瓶でラツパ飲みして早々にダウンしたサーゼクス兄が高斟を上げ、その横では無駄に酒豪っぷりを見せたセラフオルー姉さんとグレイファイア姉さんが、何を言ってるのか聞き取れないほどのガトリングトークで、天照様とダグザ様の愚痴を連ねている。

アザゼルのおっちゃんにいたっては、グレイファイア姉さんによって物理的に轟沈させられている。

これは全て、飲み会開始から30分ほどで訪れた狂乱の結果である。

最初の内はそうでもなかったが、酒が入り始めてからのみんなの乱れっぷりは凄かった。

日本酒の一升瓶を高々と突き上げて中身を一気に空にしたサーゼクス兄が、グレイフィア姉さんに抱きついて『魔王を辞めて、君やミリキヤスと一緒に隠居する！ ボクはもう疲れたんだ!!』とガチ泣きしたり。

『天照の陰険ババア！ 蜘蛛の巣（ピーー）!!』

と、酔った勢いで放送禁止用語をぶっ放したアザゼルのおっちゃん、天から降ってきたタライとグレイフィア姉さんのロシアン・フツクにKOされたり。

グレイフィア姉さんは姉さんで、酔いつぶれたサーゼクス兄の財布から札束を抜き出して、『これでありったけの酒とつまみをもってきやがれ!!』と、普段では考えられない口調で大将に札束をつきつけた。

セラフオルー姉さんは『魔王少女とかムリ。キャラづくりしんどい。行く先々で嫌味言われる仕事も、もうたくさん。私も引退してヒツキーになりたい』と、妙にヤサグレてたり。

とまあ、普段の姿を知ってる奴には絶対に見せられない姿だった。え、親父？ 親父は通常運転だぞ。

いまでも冥界のトップらしからぬ醜態を晒しているが、各々から愚痴として聞かされた会議の様子を思えば、これも仕方ないだろう。

みんなが臨んだ停戦交渉だが、開始から空気は最悪だったらしい。序盤、停戦の条件として謝罪を提示すれば、土地の奪取や魔女狩りの事を出してきたダグザ様から、何に対する謝罪かと問われた。

この際、アザゼルのおっちゃんの失言により交渉は頓挫しかけ、ダーナ神族と日本神話に一つ借りを作ることになった。

それからはことある毎に両者から指摘や嫌みを言われる、針の筵むしろのような時間を耐え忍びながら交渉を重ねる事、数時間。

事前に挙げていた謝罪、賠償金、エクスカリバーの返還に、アイルランドの譲渡を加えることで漸く締結しようとした交渉だが、会議室に入ってきた月読様の造り出した遠見の映像で、事態は一変した。

ダヌー様と妖精達を追い回す墮天使。

これを見たときは、さすがのアザゼルのおっちゃんも、気を失いそ

うになつたらしい。

この時点では、ダヌー様が俺達と合流して事なきを得たのと、事前にコカビエルが動いていた事が知られていたお陰で、『あの墮天使達は奴の部下であり三勢力には関係ない』という言い訳が通用した。

しかし、それも敵の中に天使や悪魔が現れた辺りから暗雲が立ち込め、三勢力の主戦派から『禍の団』の存在が語られた事で崩壊した。

駄目押しとばかりに、リアス姉への挑発行為として駒王町崩壊の術式が組まれている事や、『禍の団』による全多神勢力への宣戦布告と取れる発言が流れるに至つては、宗教が違うにも関わらず『諸行無常の悟り』を開きそうになつたらしい。

今回のテロに関しては、駒王町の現地勢力の手で鎮圧されて大きな被害は無かったが、それで三勢力の株の下落が収まるわけではない。当然の如く停戦交渉は失敗。

サーゼクス兄達による必死の外交努力も虚しく、イギリス全土を譲渡したうえに、ダーナ神族の領土には三勢力はもちろん教会の干渉をも禁止する条約を飲まされても、相互不干渉条約しか結ぶ事ができなかった。

この相互不干渉条約は停戦とは違い、三勢力とダーナ神族はもちろん、信者同士のイザコザも開戦の理由に成りかねない不安定極まりないものだ。

三勢力を構成する種族はこれを守るだろうが、新教の本拠地を奪われた教会信者、特に悪魔祓いを初めとした狂信者が大人しくしているとは思えない。

さらにダーナ神族が『禍の団』を三勢力と同様と見ている以上、こんな条約は砂上の楼閣ろうかくと言つても過言ではないだろう。

さらに、日本からも駒王町のテロに対する賠償を求められ、『駒王町を除く日本領土内の悪魔の実行支配地域の即時返還』『日本領土内における転生悪魔の生成の禁止』『墮天使による日本国民への干渉の禁止』『日本に侵入したはぐれ悪魔の処分に関する裁量の譲渡と干渉の禁止』『駒王町 of 管理権の譲渡を一年に短縮』という条件を飲まされたらしい。

天照様、ここぞとばかりに欲張りすぎである。

駒王町の管理権をリアス姉に残したのは、条約の横紙破りを嫌った事と、俺達への配慮だろう。

はぐれ……いや、逃亡した転生悪魔の裁量を筆り取ったということ
は、あの計画を実行に移すつもりか？

やれやれ、あれを使える術者の数はまだ足りてないのに、急ぎすぎ
じゃないのか。

俺の感想は置いといて、ここまでトンでもない条件である。

もちろんサーゼクス兄達は拒否しようとした。

しかし、天照様が『飲まなければ停戦交渉の仲裁を降りて、今回の
テロを理由に宣戦布告する』と脅してきたので、飲まざるを得なかつ
たらしい。

前にも言ったが、日本神話の他神話への繋がりには途轍もない。

もし日本と事を構えれば、ダーナ神族が組織しようとした同盟など
比較にならない大規模な多神連合が結成されるだろう。

かくして、交渉は聖書の勢力に大損害を与える結果でその幕を閉
じ、意気消沈した代表達はダヌー様と入れ替わる形で高天原を追い出
され、今に至ると云うわけだ。

そりやあ今日くらい、ハメを外したくもなるだろう。

まあ、お陰で俺の日本神話への正式移籍の事も、言いそびれちまっ
てるんだが。

「神主の坊主、もう暖簾のれんをたたむ時間だ。タクシー呼んでやったから、
連れの兄さん達を起こしな」

「ありがとうございます」

時計に目をやると、日付が変わって一時間以上経っていた。

大将に礼を言っつて、意識のある姉さん達からタクシーに乗せてい
く。

大将が気を利かせて大型のタクシーを呼んでくれたお陰で、酔っ払
い達は上手く後部座席に収まった。

「すみません、大将。〴〵迷惑をお掛けしました」

「お前さんも大変だな」

大将の言葉に苦笑いで会計を済ませた俺は、助手席に乗り込んで運転手に駒王神社に行くように指示を出す。

野郎3人が潰れてるし、姉さん達はベロベロ。

このザマで冥界に帰すというのは、皆の社会的立場を思えばマズ過ぎる。

今夜はウチに泊めるしかないだろう。

まずは、真神様に退魔結界を緩めてもらわないと。

懐から携帯を取り出し、美朱に掛ける。

こんな時間だからとつくに夢の中かと思つたが、幸い美朱はまだ起きてたので、事情を説明して真神様への伝言を頼む。

しかし、これだけの大事件が起きた日の最後が酔っ払いの介護とは、なんとも締まらない話である。

まあ、政治だのなんだのに比べたら、こつちの方が性に合ってるけど。

目的地に着いた事を伝える運転手に料金を支払って、俺は後部座席でくたばっている酔っ払いの一人目を担ぎ上げる。

サーゼクス兄にはじまりアザゼルのおっちゃん、グレイファイア姉さんときてセラフォル姉さん。

五十段ほどの階段を上り、美朱が母屋の客間に用意してくれた布団へ、順に放り込んでいく。

客間を障子戸で仕切って男女別に分けているので、雑魚寝でも文句を言われる事はないだろう。

4人の世話も済んで、あとは親父だけである。

待つていてくれたタクシーの運転手にチップを渡し、親父を背負って階段に足をかける。

俺より30cm近くタツパがあるので、上手く背負うのにはコツがいるが、この辺は慣れたものだ。

「……不思議なものだな、息子に背負われるのは」

薄ぼんやりとした月明かりの下、ゆっくりと階段を上っていると、背後から声がした。

「なんだ、起きたのか」

声をかけると、返事の代わりに小さく笑い声が返ってくる。何かと思つて振り返ると、赤ら顔の親父がで感慨深そうに笑っていた。

「？ 俺の顔に何か付いてるか」

「いや、すまん。すこし前までは美朱と一緒に片手で背負っていたお前が、私を背負うようになったのが妙に嬉しくてな」

「何を今更。親父なら二年も前から背負えてるよ」

「そ、そうか？」

「まあ、親父は酒が入るとなかなか起きないから、憶えてないのも仕方ないけど。背負い始めたころは、タツパの差があつて大変だったんだぜ。上半身が安定しないから、何度か落としそうになつたし」

「おいおい、それは勘弁してもらいたいな」

「落としてないし、どつかにぶつけた事もないから安心しろ。それに今は安定してるだろ」

「確かに居心地がいい。このままだとまた眠つてしまいそうだ」

「寝ていいぜ。上に美朱が布団を用意してくれてるから」

「美朱も起こしてしまつたか……。まつたく、お前達には苦勞を掛けてばかりだな。こんな様で父親などと、自分が恥ずかしくなる」

「どんどんテンションが下がっていく親父の声にため息が漏れてしまふ。

「たくもう、相変わらずメンタルが弱んだからよ。」

「馬鹿いうな、親父は十分に父親してるよ」

「慎……」

「確かに普通の家みたいと一緒に暮らしていないし、トラブルが起きてもあんまり傍にいなかったさ。けどな、俺等の事いつも心配してくれてるじゃねえか」

「……」

「姉弟の誕生日には毎年贈り物して、誰かが病気になれば職権乱用しまくつて、強引にグリゴリの最新医療を受けさせる。朱乃姉や美朱になにかあったと聞けば馬鹿みたいに電話を掛けてくるし、墮天使の大幹部でその気になれば女なんて選り取り見取りのくせに、お袋に操立てて10年経つても未だに独り身だ。これだけ家族の事を大事に

思ってるのに、何を恥ずかしがることがあるんだよ」

親父から返ってくる言葉はない。その代りに聞こえるのは押し殺した嗚咽と肩が濡れる感覚だ。

まったく、いつもながら涙もろい。

とはいえ、こういうのも家族を大事思っている証なんだろう。

その後、親父の様子を気づかないふりをした俺は、言葉を交わすことも無く母屋に入った。

客間まで移動して敷いていた最後の布団に父を降ろすと、一言「おやすみ」と言い残して扉を閉める。

酔っぱらう度にさんざっぱら泣くのでこちらとしては今更なんだが、むこうも親としての威厳やプライドがあるだろう。

居間で起きていた美朱に『もう寝なさい』と声をかけて自室に戻り、俺はベッドの上で頭を抱えた。

さっきの親父との会話だが……なに、あの問答。

酒が入ってたとはいえ、あの状況で本音トークなんて、どこの三流ドラマだという話だ。

言ったことは後悔してないが、思い返せばとっても恥ずかしい。

正直、迎え酒でもしてこの記憶を消去したいが、さすがに明日に影響を残す行為は拙い。

とりあえず、今日は色々あったんだから少し休もう。

やはり疲れていたのか、身体を横たえるとすぐに睡魔がやってくる。

明日は学校を休んで、今回の事後処理だ。まずは……

処理すべき問題を思い浮かべている内に、俺は深い眠りに落ちていった。



翌日、3時間ほどしか眠れなかったものの、何とか最低限の鍛錬と日常業務を終えた俺達は、揃って二日酔いで頭を抱える大人達と朝食の卓を囲んでいた。

昨日の酒が残ってグロッキー気味ながらも出された茶漬けに口を付ける面々に、昨日言いそびれた俺の日本神話への正式加入とその経緯、併せて影忍と日本神話が俺と美朱に固執する理由も説明する。

これが機密漏えいに当たるのは百も承知。だが、親父や世話になった人達にこの事を黙っているような不義理はしたくない。

咎められるようなら始末書でも謹慎でも甘んじて受けるつもりだ。まあ、経緯に関してはなんかチクってるような感じがして言いたくなかったのだが、さすがに個人的感情での黙秘や虚偽なんてできない。

話した結果はある意味予測通りと言うべきか。

アザゼルのおっちゃんとかサーゼクス兄はこっちに土下座しかねない勢いで謝ってくるし、グレイフィア姉さんと親父はそうまでして作ったチャンスを潰してしまったとガチにへコミ、セラフォル姉さんに至っては、この話を撤回させるため高天原に直談判に行こうとした。

大荒れになった場を宥めすかしてなんとか収めた俺は、アズラエルが言っていた三勢力内の和平について尋ねた。

別勢力に移籍したと言った舌の根の乾かぬうちに、相手の機密を聞き出そうとするのはどうかと思っただが、ぶっちゃけこれこそが『禍の団』を生み出す大きな要因だ。

これ如何によって奴らの動きは大きく変わってくる。

それに、三勢力には朱乃姉や場合によっては美朱も預ける事になるかもしれないのだ。

最悪のケースも考えて、この手の情報は極力掴んでおきたい。さて、この問いに対するアザゼルのおっちゃんの答えは是。

元々は三勢力の内部抗争による衰退を防止する目的だったらしいが、今回の件から多神勢力へのけん制と自衛という理由も付いたらしい。

近い内に三勢力首脳陣による会談を行い、そこで条約と同盟を締結させるつもりだそう。

まあ、今回の一件もある事だし、この会談とやらが駒王町で行われ

るというのはあるまい。

『禍の団』の事もあるので心配だが、もう冥界に助けに行くことはできない以上、無事終わるのを祈るしかないだろう。

こうして質素な朝食を終えた俺達は、酔いが醒めきらぬサーゼクス兄弟を男女の順で風呂に放り込み、各自最低限の身嗜みみだしなを整えさせて送り出すことに成功した。

サーゼクス兄弟には説明できたが、冥界には世話になった人がまだまだいる。

ケジメをつけるためにも、改めてあいさつ回りに行かなければならないだろう。

その前に当分は番所と神社で缶詰めになるであろう未来を思い出し、陰鬱な気分で息を吐いた。

初体験をする前に仕事で黄色い太陽は見るのは勘弁してほしいなあ。

閑話 『兵藤一誠救出作戦（序）』

「数々の御恩を受けた身でありながら、それを返す事も無くこのような結果になってしまい、誠に申し訳ございません」

華美な装飾は無いものの、一流の家具で占められた広い執務室の中で俺は深々と頭を下げる。

対面にある執務席に座る偉丈夫は、こちらに視線を向けると小さく溜め息を吐いた。

呆れているように感じたが、大きく取られた窓から差し込む冥界特有の赤い月の光を背にしている為、その表情を窺う事はできない。

「顔を上げなさい、慎」

偉丈夫、ジオテイクス・グレモリー公爵の言葉に顔を上げる。

月が雲に隠れたのか、薄れた紅い光の中から現れた彼の顔には、苦渋の色が深く刻まれている。

「今回の事情については、サーゼクスやグレイフィアから聞いている。お前が謝罪などする必要はない。頭を下げるべきは、周りからどう思われてるかも考えずに好き勝手に振る舞っていた、我々旧き悪魔だ」
そう呟いたジオテイクス小父さんは、リアス姉と同じ紅い髪を掻き上げながら深く息を吐いた。

その表情には普段の若々しきは無く、十は老け込んだ印象を受ける。

「まさか、私達の増長のツケを子供達が払う事になろうとは……。初代ルシファーに付き従い悪魔こそが至高と蛮勇を振るっていた、過去の自分を叩き殺したい気分だよ」

「ジオテイクス小父さん……」

「すまない、つまらない愚痴を聞かせてしまったな。ここには何時まで滞在できるのかね？」

「4日かな。こっちに来るまでに挨拶しなきゃいけない所は全部回ったから、向こうに帰るまではゆっくりさせてもらおうつもりだよ」

「そうか。なら、ミリキヤスに会ってやりなさい。お前達が帰ってくるのを、首を長くして待っていたのだからな」

「わかった」

話す事は全て口にしたので退室しようとして踵を返した俺は、こちらを呼び止めるジオティクス小父さんの声にドアノブに掛けた手を止める。

「慎、辛くなったらいつでも帰ってきなさい。ここはお前の家で、私達はお前の家族だ。お前が何処で何をしていても、グレモリー家はお前を拒みはしない。それを忘れないようにな」

「……ありがとう」

一言、小さく呟いた俺は、振り返る事無く部屋を後にした。

……やっべー、ひさびさにジーンときた。鼻声だったの、バレてないよな。

とりあえず、ミリキヤスに会う前に顔を洗おう。

兄貴分として、情けない顔は見せられないからな。

あの聖剣事件から早二週間、俺は冥界のグレモリー家にいる。

事件から一週間はひたすら事後処理に追われる日々だった。

付近一帯への隠蔽工作にはじまり、各種報告書作成。周辺被害の調査に被害額の計算。住民への被害の聞き取りと巻き込まれた者のケア。

そこにダーナ神族の復興支援という名目で、聖剣復元の材料集めが割り込んできて（破片は全て回収済みだったらしい）、挙げ句の果てには鬼太郎君（仮）の尋問までやった。

労働基準法？ ナニソレ、おいしいの？ を地で行くデスマーチをヤケクソに悪ノリ、深夜の無駄なハイテンションで乗り切った俺と美朱は、その甲斐あってようやく一週間の休暇を手にする事ができた。

学校の方は事後処理期間も含めて神職業務による公休にしてくれるそうなので、この機会を利用して知人への事情説明の為に、冥界へ行くことにしたのだ。

事後処理に忙殺されて完全に忘れていたが、ギヤスパアの事もあったし。

ゴメンよ、ギヤスパア。

そして文^{ふみ}さん。ギヤスパアの面倒見てくれてありがとうございま

す。

反対されると思っていた天照様からの許可もあつさり出て、術式符とオカ研の魔法陣を使って冥界に来た俺達は、グリゴリの幹部連中を皮切りにアジユカさんとファルビウムさん、サイラオーグの兄貴とミスラさんにシトリー家と縁の深い人々を巡り、今回の事件と俺の身の振り方を説明していった。

そして、たった今、最後の目的地であるグレモリー家当主のジオテイクス小父さんへの説明を終えた訳だ。

これで、3日間にも及んだ説明行脚も無事終了。

後は残りの4日間をのんびんだらりと過ごせば、冥界とは当分おさらばだ。

これからは冥界に自由に来れないのは寂しいが、自分の選んだことなので仕方がない。

取り敢えずは、美朱と遊んでいるであろう弟分のミリキヤスを構ってやることにしよう。

広大なグレモリー邸の中を慣れた足取りで進むと、数分でミリキヤスの部屋が見えてくる。

「おかえりなさい、慎兄様！」

ノックから入り口の扉を開けると、快活な声と共に小さな人影が飛び込んでくる。

遠慮なしに突っ込んでくる影を受け止めると、そこには記憶の中の姿とは見違えるほどに成長した紅毛の少年、ミリキヤスの姿があった。

「おつきくなったな、ミリキヤス。前あった時に比べたら別人だぞ」「僕ももう十歳ですから。それに、慎兄様だって前よりも背が大きくなりました」

確か、ミリキヤスと最後に顔を合わせたのは、年始の挨拶の時だから半年も経っている。

そりやあ大きくなるわけだ。

ちなみに俺はこの半年で身長が6cm伸びた。体重は重力トレーニングで絞り過ぎたのか、一時期は少々減ったが今は元に戻り始めて

いる。

親父の上背が2 m近いので、俺も出来れば180オーバーになりたいのだ。

がんばれ、俺の身体。あと4 cmだ。

「それに、慎兄様に教えてもらったカラテも毎日やってるんです。パンチやキックも上手く出せるようになったんですよ」

「そうかそうか。なら、後で組手でもするか」

「はい！」

元気良く応えるミリキヤスと軽く拳を合わせて部屋に入ると、携帯ゲーム機片手に寛いでいる美朱が目に入る。

「おかえり慎兄。小父様への説明、終わったんだ」

「まあな」

「そつか。じゃあやっと一息つけるね」

「ああ。ずっと働きづめだったんだ、ここにいる間はゆっくりしよう」「さんせー」

メイドさんが煎れてくれたお茶を飲みながら、日本であつた事などをミリキヤスに乞われるまま、面白おかしく語ってやる。

生粋のお坊ちゃんであるミリキヤスにとって俺達の様な庶民の生活は興味の対象らしく、特に美朱の語る特撮ヒーローの話は食い入るように聞いている。

時より菓子をつまみながら他愛のない事で笑う。

俺達が日本に行く前までは、毎日当たり前のようになんかやって過ごしていた。

これからはこういう時間も取れなくなるんだな……。

覚悟していたが、やはり寂しいものは寂しいな。

「大変よ、慎兄！」

ノックも無しにリアス姉が部屋に飛び込んできたのは、かぶりつきで聞き入るミリキヤスに気を良くした美朱の語りが最高潮に達しようとした時だった。

入り口から俺の姿を見つけ、大股でこちらに向かってくるリアス姉。

だが、その歩みは背後から彼女の肩に置かれた小さな手によって阻まれる事になる。

「リアス姉様。マナーについて、もう一度語り合いましたらどうか？」
年に似合わない地の底から這い出るような、ドスの利いた声を放つ
ミリキヤス。

その顔に張り付いた笑顔は、怒れる彼の母親にそっくりだった。

「それで、朱乃姉。なにがあつたんだよ」

あれから時計の長針が半周し、漸くミリキヤスの説教が終わったので、俺は向かい側のソファに座る姉に問いを投げる。

リアス姉？　いつもの通り、保母役であるウチの長女の胸に顔を埋めてるよ。

今回は長時間の説教に加えて、締めに言われた『リアス姉様って、身体が大きい妹みたいですね』という言葉がショックだったらしい。

まあ、キツイ言葉だとは思うが、ミリキヤスが五歳の頃からなんやかんやと説教されていたので、そう言われても仕方ないだろう。

「ミリ君、リアス姉は妹じゃなくて『残姉』なんだよ」

「残姉、ですか？」

「そ。残念な姉、略して残姉」

「なる程……。リアス姉様の『残姉』！」

愚妹が余計な事をミリキヤスに教えたせいで、またもや『ピギヤー』と泣き出すリアス姉。

まったく、これじゃ話が進まないだろうが。

「二人とも、リアス姉イジるのはその辺にしとけ。で、朱乃姉？」

「私も詳しい事は聞いていないの。慌てて部屋に飛び込んで来たリアスは『イツセー君が攫われた』と言っていたわ」

自信なさげな朱乃姉の言葉に、俺は眉根を寄せた。

攫われたとはまた穏やかじゃない。

イツセー先輩は神滅具ロンギヌスの一角たる赤龍帝の籠手の所持者だ。

神をも滅ぼせる神滅具、しかも二天龍と呼ばれる強力なドラゴンの魂を宿した赤龍帝の籠手は、言葉では言い表せない程の価値を持つ。

禍の団を初めとするテロリストや有能な眷属を求める貴族悪魔、墮

天使や天使に果ては他の神話勢力と容疑者を考えればキリがない。

しかし、だからと言って悪魔でも屈指の有力者であるグレモリー公爵家から攫うとなると、特定が難しい。

現時点では情報が足りなすぎるな。

「攫われた時の状況が分かる奴はいるか？」

「どう、リーア？」

「わかんない。リーアも、グズツ、あーしあにきいたただけ、ヒツク、だから」

しゃくり上げながらも何とか答えを返すリアス姉。

というか、いつまでガキのままにいるんだこの人は。

「アーシア先輩の滞在してる部屋ってどこだっけ？」

「確か、イツセー君の隣だったはずよ。でも、今はイツセー君の部屋にいるんじゃないかしら」

ともあれ、まずはアーシア先輩から話を聞くしかないか。

もしかしたら、彼女の勘違いという可能性もあるし。

部屋にいた面子を連れ立ってアーシア先輩の様子を見に行くと、^{くだん}件の先輩は真っ青な顔をしてイツセー先輩の部屋の隅で震えていた。

明らかに尋常な様子じゃない。これは思っていたよりも遥かに面倒な事になってるのかもしれない。

「アーシア先輩、大丈夫か？」

「慎君、美朱ちゃん……？！！ イツセーさんを、イツセーさんを助けてください！」

「ちよっ……!? 落ち着いてくれ、先輩」

こちらにしがみ付いて来る先輩を引き剥がして何とか落ち着かせた俺達は、未だに怯えが見えるアーシア先輩から事情を聞くことにした。

「いつものようにイツセーさんと一緒にお茶をしていたら、突然『我が道場の門を潜っておきながら、女にうつつを抜かし墮落した様、ド許せぬ！ 今一度、私自らが鍛え直してくれるわ!!』って声が聞こえて、そしたら……そしたら……!？」

その時の様子を思い出したのか、ブルブルと震えだすアーシア先輩。

これ以上問い詰めるのは拙いか？

だが、現状手がかりを持つているのは先輩しかない。

……いや、正直先輩が聞いたセリフには心当たりはあるのだが、もし犯人が俺の予想通りならイツセー先輩の救出は絶対に不可能だ。

そうでない事を確認する為にも、アーシア先輩の証言が欲しい。

「空間が割れて、そこから伸びてきた銀の腕がイツセーさんの首を掴んで、穴の中に連れ去ってしまったんです。早く、イツセーさんを助けてください！ あれは……あれは……！」

「分かっている、イツセー先輩の救出には全力を尽くすさ。だから、教えてくれ。……あれは？」

「……將軍様の腕でした！」

勇気を振り絞るように叫ぶアーシア先輩。

その声を聞いた俺は、震える肩に手を置いて幼子に言い聞かせるように、その目を見ながらゆっくりと言葉を紡ぐ。

「アーシア先輩、イツセー先輩はもう手遅れだよ」

「なにを言うの、慎！ そんな簡単に諦めてはダメよ！」

「いつせーは、りーあのけんぞくなの！ たすけてよ、しん!!」

驚愕に目を見開くアーシア先輩と、非難轟々の姉二人。

あんた等、俺に死ぬと申すか。

「朱姉、朱姉。今の言葉って慎兄に死ぬより辛い目に遭えって言ったのと同じなんだけど」

「え、どういう事なの？」

「將軍様つてさ、慎兄の使う地獄の断頭台の元祖で、悪魔超人の親玉なんだよ」

「いや、そんな事言われても朱乃姉達には意味わかんないだろ」

「ごめんなさい、美朱の言葉だと解らないの。ちゃんと説明してくれるかしら？」

「了解。今回イツセー先輩を連れ去ったのは、多分悪魔將軍つていう無限の闘争の住人なんだよ。その人は俺のレスリングの師匠で、悪

魔って名乗ってるけど元は超人という種族の闘神だった方。正直、十回闘ったら十回負けるくらい強い」

俺の返答に言葉を無くす朱乃姉。

もとかから居た面子に加えて、いつの間にか合流していたギヤスパー、塔城も驚愕の表情を浮かべている。

……やはり祐斗兄は来ていないか。

グレモリー家に来てからずっと引きこもっていると聞いていたが、この騒ぎでも出てこないとなると、かなりの重症だ。

こつちにいれる内に、なんとか話せればいいが。

暗くなりそうな思考を打ち切って現実に目を戻すと、みんなが黙り込む中で、美朱がこちらに哀れみの視線を向けていた。

え、なに、その悲痛な表情。

いや、ホント闘わないからな。

だから、こつちの胃壁とSAN値が削れるような、処理場に送られる豚を見る目はやめてください。SanityなのでSANです。

「またまた。フラグなんでしょ、そのセリフ」

フラグじゃねーよ、不吉な事抜かすな。

「そのひとが、どうしてリーあのいつせーをつれてったの？」

「ライザー戦の時に無限の闘争^{MUGEN}があっただろ？ その時にさ、体力作りとしてその人の道場で世話になったんだよ。ただ、将軍様は鍛錬を怠る奴が嫌いだし。イツセー先輩はあれからトレーニングをサボりがちだったから、その辺があの人逆鱗に触れたんだろうな」

「……じゃあ、イツセー先輩はあの不思議空間にいるんですね」

「恐らくな」

「なら、むかえにいこうよ」

「そうですね。イツセー君も無理やり修行なんてさせられたくないでしょうし」

さも気楽に言う姉二人に、俺は軽い頭痛を覚えた。

それができれば本当に苦労はしないんだよなあ。

「残念だがそう簡単にはいかないんだ、これがな。無限の闘争^{MUGEN}の中は入る時に決めた条件の行動しかとれないっていうルールがあつてな。

だから、前みたいに修行に設定して入ってもイツセー先輩は連れだせないんだ」

「えっと、じゃあどうすればいいの？」

「いい質問だ、ギヤスパー君。イツセー先輩を迎えに行こうと思ったら、最も自由に行動できる条件、即ちサバイバルツアーモードを選ぶしかない。ただ、これは修行や対戦と違って無限の闘争の世界を探検する危険なモードだ。少し前に俺が行方不明になって腕を折って帰ってきただろ？ その時に使ったのがこれ」

「……黒歌姉様が変になったあれですね？」

「そう。だから、行くなら俺一人で行くことになる」

とは言ったものの、正直なところ行きたくはない。

「だいたい、ようやくデスマーチから解放されたのに、今度は無限の闘争ツアーとか悪い冗談である。」

元を正せば、將軍様が現世に干渉するほどに修行をサボっていたイツセー先輩の自業自得なんだから、すっかり絞られればいいのだ。

とはいえ、無限の闘争を紹介してゴールデンキャッスルに連れて行ったのは俺なので、その責任は感じてるし、今回の件で先輩が泣いたり笑ったりできなくなるのはともかく、『悪魔超人 レッドスニゲーター』なんかに変貌しては、流星にこちらも寝覚めが悪い。

状況的にも心情的にも我儘を言う訳にはいかないみたいだ。

「まあ、そういう訳だから、みんなはここで待っていてくれ」

観念して無限の闘争の扉を潜ろうとする俺を、背後から伸びた手が引き止める。

振り返ると、そこには幼児退行から立ち直ったりアス姉の姿が。

「私達も行くわ。イツセーは私の眷属なもの、誰かに任せるなんてできなない」

「……ホント、都合のいいタイミングで元に戻ったな。もしかして、狙ってたか？」

「人聞きの悪い事を言わないでちょうだい。朱乃の献身のお陰よ」

「リアス、次からはベビーシッター料を貰いますわね」

「……………」

朱乃姉、リアス姉は豆腐メンタルなんだから、余計な事を言わない。ほら、また涙ぐんでるじゃないか。

「リアス姉。幼児化してたから理解できてないかもしれないが、今回はガチで危険なんだよ」

「話は聞いてたから知ってるわ。でも、死ぬことはないんでしょ?」
「ど阿呆。実際に死ななくても、死の痛みや喪失感はしつかり味わうんだよ。黒歌が廃猫化したのはそれが原因だ。だから、メンタルが弱い奴は連れていけねえよ」

「私の可愛い眷属達に、心の弱い者なんていないわよ」

「さっきまで幼児になってた奴が、どの口で言ってたんだ。王のリアス姉も含めて、片っ端から豆腐メンタルじゃねえか」

俺の言葉に、後ろにいた眷属の面々は不快感を露わにするが、撤回するつもりはない。

今回は合宿の時とは危険度が桁違いだ。

現地で誰かがダメになったからといって、俺に助けられる余裕があるとは限らない。

ヘタをすれば無限の闘争の中に閉じ込められる可能性もある。

少々言葉が過ぎるかもしれないが、ここで止めるべきだろう。

「……っ!? でも、イツセーは私の眷属なの。あの子が助けを求めているなら、私は主として行かなくちゃ」

「だから、リアス姉達が付いてきても二重遭難するだけだつて。俺もツアーモードだと助ける余裕ないしよ」

「こうやってリアス姉と『行く』『行かない』と押し問答をしていると、ミリキヤスを伴った美朱に割って入ってきた。

「ねえ、慎兄。そのツアーモードは制御コンソールから強制終了とかログアウトってできないの?」

美朱の思いも寄らない問いに、記憶を探ってみたが、そういった事は調べた覚えはない。

「前回行った時は、中にいた奴全員が参加したからなあ。あれ以来ツアーモードを弄ってなかったし」

「ならば、一度確認してみようよ。それでモニタリングと強制ログア

ウトができるのなら、使用权を貸した誰かにコンソール前で安全装置の役割をしてもらって、リアス姉達も参加。もし無かったら、慎兄一人でいく。これでどうかな？」

ふむ、妥協案としては悪くない。

というか、まず俺がその可能性に気づかなければならないのに、言われるまで思いつきもしないというのはどうなのか。

内心少しへコミながらも同意を示すと、リアス姉もこの案に飛びついたので、そこにいた全員で、無限の闘争の門を潜る事になった。

入り口を抜けていつもの控え室に入ると、そこには先客がいた。

ゴツツい身体を空手着に包んだ男、サイラオーグの兄貴だ。

「サイラオーグ！」

「リアス、それに美朱もか。慎はともかく、お前達がここに来るとは珍しいな」

どうかしたのか、と笑顔で問うサイラオーグの兄貴に、言葉を詰まらせるリアス姉。

まあ、事情が事情なので言いにくいのはわかるが、ここは話しておいたほうがいいだろう。

「実はリアス姉の眷属に赤龍帝がいるんだけど、こっちの住人に拉致られてな。いまからツアーモードで迎えに行くんだ」

後ろでピーピー騒ぐリアス姉を無視して事情を話すと、サイラオーグの兄貴の表情が険しいものになる。

「拉致とは穏やかではないな。そもそも、こここの住人が現世に干渉できるのか？」

「一定以上の力の持ち主ならできるらしい。ここまで直接的に動かれたのは初めてだけど」

「むう……。なら、俺もリョウ師範が来た時の事を考えなければならんか。ところで、何故赤龍帝は拉致されたのだ？」

「拉致したのは俺の師匠の一人でな、赤龍帝も一時教えを受けてたんだ。で、その師匠は鍛錬にも凄く厳しい人でさ。サボってた赤龍帝を見かねて、鍛え直すって引っ張っていったんだと」

こちらの言葉に、拍子抜けと言わんばかりに呆れた表情になるサイ

ラオーグの兄貴。

いや、その気持ちは痛いほど解る。

「なんだ、自業自得ではないか」

「それには同感だけど、リアス姉的に眷属を拉致されたのは一大事らしくてな。それで迎えに来たんだ。それで、サイラオーグの兄貴は？」

「お前が送ってくれた薬のお陰で母上の意識は戻り、病状も随分とよくなった。しかし、あの薬ではどうにも後一押し足らぬようだな、より効能のある薬を取りにきたのだ」

「ミスラ叔母様の意識が戻られたの？」

「ああ。リアス達にも会いたがっていた。暇があれば顔を見せてやってくれ」

なる程、この前訪ねた時にミスラさんがベッドにいた事から予想していたが、ファイナルファンタジーの万能薬でも快方に向かわせるだけで、根治はできなかったか。

「あれより強力な薬となると、世界樹の葉かエリクサー、ソーマにアムリタくらいか。どれも入手困難な激レアアイテムだぞ」

「手に入れる為ならば、如何なる困難も覚悟の上だ」

言葉と共に向けられた目に迷いは見られない。

「なら、俺達と一緒に行くか？ 兄貴はツアーモード初めてだろ。こっちは一度体験してるから、少しならアドバイスできるぜ」

「ふむ。ここの正当な所有者である、お前が来てくれるのならば心強い。頼めるか？」

「リアス姉もいいよな？」

「ええ。ミスラ叔母様の為ですもの、協力は惜しまないわ」

「すまん、リアス」

「いいのよ、気にしないで」

話は纏まったようなので、早速システムを確認する事にする。

制御コンソールでツアーモードを立ち上げ、管理者項目を確認すると確かにあった。

強制終了に個別ログアウト、さらには自動ログアウトの機能まで付

いている。

説明文に目を走らせると、強制終了と個別ログアウトは制御コンソールからしかできないようだ。

自動ログアウトは、その名の通りコンソールの操作なしで発動するが、その条件は擬死する事となかなか厳しい。

前回同様であれば、ツアーモードを死なずにクリアするのは、相当ハードルが高いと言える。

まあ、今回の目的を言えば、アイテム目当てであるサイラオーグの兄貴はともかく、リアス姉達には使用しても問題ないだろう。

あとは不具合の可能性を考慮して、誰かがここに残れば完璧か。問題は誰を残すかだが……。

頭を捻りながら自販機で買った飲み物を手に、雑談に興じる一団に目を向ける。

リアス姉はダメって言っても来るだろうし、朱乃姉も俺と美朱が参加するとなれば必ず来る。

アーシア先輩もイツセー先輩が絡んでるから引きそうにないし、となると残るは塔城とギヤスパー、そしてミリキヤス……

ん……ミリキヤスッ!?

「ちよつと待て！ ミリキヤス、お前なんでここにいるんだ!」

「え？ 慎兄様達についてきたからですけど」

もしかして、イツセー先輩の部屋からこっちに移動する時についてきちゃったのか？

イツセー先輩の拉致に気を取られて全く気付かなかった、我ながら迂闊過ぎる。

この子が無限の闘争M U G E Nに関わるのはまだ早い。

兎に角、外に出さないと。

「ミリキヤス、ここから先は危険なんだ。屋敷に戻ってくれるか？」

「ごめんなさい、兄様。僕は戻りません」

速攻で断られて、俺は思わず鼻白んでしまった。

「……何でだ？」

「イツセーさんはこの屋敷で攫われたと聞きました。なら、事の顛末

を見届けるのは次期グレモリー当主としての義務です。兄様は僕に教えてくれましたよね。男なら背負ったモノから逃げてはいけない、そして冒険のチャンスは逃すなと！」

誇らしげに胸を張るミリキヤス。

当の俺はというと、過去の過ちに白目を剥きそうだった。

確かに、小さかったミリキヤスにそんなことを言った覚えがある。

一緒に遊んでいた時のノリで言っただけなのに、まさかここで持つてこられるとは思わなかった。

「慎よ、いいのではないか？ 小さい頃の冒険や苦労は、必ず後の糧になる。そう思ったからこそ、お前もこの子にそういったのだろうか？」

いいえ、その場のノリでした。

「けどよ、サイラオーグの兄貴」

「もし、危険な事にあつたとしても、その時は俺達が護ってやればいい」

サイラオーグの兄貴の顔に浮かんだ男臭い笑みに、俺はため息をつくしかなかった。

ミリキヤスもサイラオーグの兄貴も妙に頑固だから、こうなったらテコでも動かないだろう。

まあ、自動ログアウトや強制ログアウトもある事だし、最悪の事態には至らないか。

「しようがない。ミリキヤス、ついて来るなら俺や美朱の言う事は絶対に聞く事、それと一人で行動しない事。いいな？」

「はいー」

元気に答えるミリキヤスを美朱に預けた俺は、塔城を安全装置要員として呼び寄せる。

首を傾げる塔城に、サブ管理者認証用のリストバンドを渡して、役割とコンソールの操作説明を行う。

この際に、俺とサイラオーグの兄貴以外のメンバーを自動ログアウトに登録しておく。

一通り作業も終わり、見落としが無いかチェックしていると、画面の端に『補助アイテム』という項目があるのに気づいた。

開いてみると医療キットや寝具一式、果てはホイポイカプセルに収納できる車や家までが並んでいた。

ヴァーリのアホめ。

こんな良いものが有ったんじゃねえか。

「へえー、役立ちそうな物が色々あるね。これってポイント引き換え制になってるけど、替えるだけのポイントあるの?」

前回味わった苦労が無駄だったという事実を目頭を押さえていると、横から画面を覗き込んでいた美朱が声をあげる。

「ああ。引き替え対象は、無限の闘争を使用すると加算される基礎ポイントだから、結構良いものが替えられるくらいは貯まってるぞ。お前もあるんじゃないか?」

促されるままに、手に着けたブレスレット型の簡易コンソールを弄る美朱。

「おおっ! あったあつた。40000ポイントだって。慎兄はどの位あるの?」

「五百二十万ポイントだな」

自身のステータス画面に書かれた額を読み上げると、美朱は半ば呆れたような目をこちらにむけてくる。

「うわあ、桁外れ。一番下の豪邸が入ったホイポイカプセル、十個は替えられるじゃん」

「んな勿体ない真似するか。馬鹿言ってるんで、お前も必要なものがあつたらもらつとけよ。簡易の方でも交換できるだろ」

美朱の目を自分のコンソールに向けさせて、俺は再びアイテムリストと睨めっこを開始する。

前は馬鹿と獣と人外だけだったので、野宿でも何でもバツチ来いだったが、坊ちゃん嬢ちゃんがいる今回は、それでは拙い。

やはりカプセルハウスの一つくらいは、替えておかなければならぬいなだろう。

あとは足が欲しいところだが、メンバーの中で誰一人免許を持っていないのがネックだ。

俺も前世では車の免許ぐらゐは持っていたが、なんせ生まれ変わっ

てから15年はハンドルを握っていないのだ。

正直、まともな運転できるかと聞かれれば自信は無い。

無限の闘争内が治外法権である事を利用して現場で練習するとう手もあるが、時間がかかる上に何らかのペナルティーがあったら困る。

ひとまず保留だな。

他に必要なのは着替えと食料、医療キットに空のホイホイカプセルが複数個とカプセル専用の蛇口。

水の濾過装置と調味料、調理具にあとは寝袋、と。

まあ、取りあえずはこんなところだろう。

全て現地調達した前回に比べて待遇は雲泥の差だが、これでも今回のメンバーでは不安が残るか。

他に必要な物はないかと頭を捻っていると、横から袖を引かれる感覚。

視線を向けると、何故かキラキラした目でこちらを見上げる美朱な姿があった。

「ねえ、慎兄。ポイントの貸し借りってできるのかな？ 欲しい物はあるんだけど、ポイントが足りなくて」

「……貸し借りは無理みたいだな。どれが欲しいのか言ってみるよ。あんまり高いのじゃなかったら、こつちで替えてやるから」

「さすが慎兄、太っ腹！ 私はこれが欲しいんだ」

こちらのコンソールを操作して、美朱が示したのはスクーター。

ピンクとメタルシルバーに塗装され、ホイホイカプセルに対応した優れもの。必要ポイントも50000とお手頃だが――

「……他にも面子いるのに、お前一人だけ乗るのか？」

「違う違う。これは現実で使う用だよ」

「……いや、普通に欲しかっただけかい。」

それ以前に、これって現実で使えるのか？

コンソール操作でQ&Aを開いて検索した結果、なんと現実で使える事が判明。

分類的には、前に持って帰ったマジックアイテムと同じく、サバイ

バルツアーモードの報酬ということになるらしい。

「……お前、免許持ってたっけ？」

「これが終わったら取るもん」

まあ、原チャリなら1日で取れるか。

交通事故とか懸念材料は多々あるが、高校生なんだから、原チャリの一つを持つていてもいい歳だろう。

「わかったよ。……ほれ」

交換を選ぶと、左手に車体と同じ色のホイポイカプセルが現れたので、美朱に渡してやる。

「やったー!! ありがと、慎兄。大事にするね！」

「あいよ」

飛び跳ねて喜びを露わにする美朱を見て、ふと思った。

一応、人数分は最低限の物資を用意した。だが、嗜好品や衣類なんかは、各自に選ばせた方がいいのではないか。

女性用の衣類なんかは、みんなフリーサイズのジャージだからなあ。

……うむ。ポイントにも余裕はあるし、事前に注意しとけば無茶なモノや不要物を交換したりしないだろう。

ここからはみんなに選ばせてみるか。

この後、三分の一以下に激減したポイントを見て、俺はこの判断を後悔する事になるのだった。



すったもんだとあったが、何とかツアーモードに入った俺達は、ゴールデンキヤツスルへの道を進んでいた。

普段ロードワークに使っているルートだが、鍛錬の時とは違って周囲からこちらを探る視線を複数感じる。

ツアーモードはエンカウント形式だ。

当然、対戦ではできない奇襲や狙撃などの戦術も、相手は遠慮なしに仕掛けてくる。

気を抜けば一気に刈り取られる、より実戦に即した世界と言える。そんな緊張感の中なのだが、俺は先ほどの事が頭を離れずに思わずため息をついてしまった。

まさかのポイント三百万消費。

まあ、ポイントなんて日々の修行で気づいたら貯まってた程度のモノなので未練はまったくないのだが、ああも無駄に使われてはさすがに精神的にクルムものがある。

アーシア先輩のロザリオや修道服は、まあいいとしよう。

塔城がリストの高級菓子を買い占めたのも、ギヤスパーが飛びついたアダマンチウム製の個人用シエルターも、百歩譲って目をつむるさ。

問題はリアス姉達の交換したモノだ。

目録を見たが、あれは本当にヒドかった。

朱乃姉。

振り袖や簪なんて今回いらないうな？

何気に和風建築のカプセルハウス交換してたけど、何に使うの？

あと、リアス姉と一緒に最高級化粧品を、根こそぎ交換するのはやり過ぎじゃないか？

次にリアス姉。

初っ端からリスト最高額の豪邸カプセルハウスに手を出すのは、どういう見か。

さらにはアクセサリーやドレスをコンプして、挙げ句家具まで揃えるとか。

俺は別荘を貰えなんて言った覚えはないぞ。

ちなみに、リアス姉の使用したポイントは百五十万以上。

全体消費額の約半分だ。

オモチャやゲームを交換したとはいえ、一万ポイント以内に抑えたミリキヤスとはエライ違いである。

なにより俺が呆れたのは、これだけ使っというて朱乃姉もリアス姉も、サバイバルに必要な水や食料を交換していないということだ。

事前に口を酸っぱくして注意したのにこの体たらく。

俺が二人に魔のショーグンクローをかましたのも仕方ないと言えるだろう。

そもそも、補助アイテムと銘打たれている中でサバイバルに全く役に立たない嗜好品がある事自体が罠なのに、ウチの駄姉達は物欲全開でももの見事にハマってしまった。

……情けなくて、涙も出ないや。

「慎君、大丈夫?」

リアス眷属首脳陣のあまりの残念さに頭痛を覚えてると、労りの言葉を掛けてくるモノが居た。

声が出た方に目を向けると、そこには鈍い銀色に光るサッカーボール程の大きさのカメの甲羅がホバーで自走している。

「……ギヤスパ、そこから出る。話はそれからだ」

「いやですうううっ?! ここは僕が辿り着いた最後の領地! 終つひの安息所! ここで生まれて、ここで死ぬんですう!」

「なにが生まれに領地だ、貰ってまだ一時間も経ってねえだろ。あと、CVジョージな最凶の吸血鬼みたいなセリフ吐いても、甲羅の中じゃ格好悪いだけだからな」

「格好悪くてもいいの、安全に勝るものなんてないんだから」

「まあ、お前がそんな中にいてくれた方が俺としても助かるけどさ。それより、その中ってどうなってるんだ? 容量的に明らかにおかしいんだけど」

「空間を弄ってるらしくて、中は大きな部屋くらいあるよ。水道も出るし空調も利いてるから思ったより快適だし」

見た目は踏まれたノコノコみたいなクセに、予想を遙かに超えて高性能だった。

「それ、ほかの奴は入れるのか?」

「3人までなら収容可能みたい」

「そうか。もし、誰かかヤバくなったら保護してやってくれや」

「うう、わかったよ……」

「そんな嫌そうにすんなよ」

「ゴメンナサイ。ところで、今はどの辺りかな?」

「それ、周りの様子が見えないのか？」

「うーんと、前面にカメラがあるんだけど、この高さだから」

申し訳なきようなギヤスパアの声に、俺は納得の声を上げた。

確かにサッカーボール程度の高さでは、周辺の様子など判らないだろう。

「もう少しで目的地のゴールデンキヤツスルだな」

「そこに兵藤先輩、だっけ。兵士の人がいるんだよね」

「多分な」

「むこうの一番偉い人って、慎君のお師匠様なんですよ。だったら、何もなく先輩は帰ってくるよね」

ギヤスパアの甘々な考えに、思わずため息が出る。

まったく、そうだったらどれだけ楽か。

「それはないな。將軍様は頑固なうえに、悪魔超人だから力こそが全体的なところあるし。確実に一戦仕掛けてくる」

「え!? どうするの。慎君、さつき勝てないって……」

「心配すんな。勝てないのは確かだけど、將軍様は負けてもそれなりの結果を出せば認めてくれる人だから。俺が死ぬ思いをすればなんとかなるさ」

「そんな事聞かされて、心配しない人はいないと思う」

「細かい事はいいんだよ。ほら、見えてきたぞ」

金色に輝く巨大な宮殿が見えてきたので、ギヤスパアのシエルターを胸元まで持ち上げてやる。

「うわあ…悪趣味……」

左右の柱に彫られた、筋肉モリモリのマッチョマンが山脈のような意匠の天板を支えるという、デザインの正門を見たギヤスパアの弁。

「超人は鍛え上げられた筋肉の勇猛さと美しさを好むらしいぞ。ま、文化の違いだな」

女性陣にすこぶる不評な門を潜ると、道場特有の熱気と汗の匂いが漂ってくる。

「うっ……!? 汗臭い」

「スゴい臭いね」

「そうなの？慎君」

「みたいだな、俺は慣れてるけど」

「俺もだ。極限流の道場もこんなものだからな」

みんなが鼻を摘まむ中、俺とサイラオーグの兄貴は悠々と中を進んでいく。

剣山腕立てに腹に鉄球を落としもつての腹筋、高圧電流の檻に追い立てられるシャトルランや下から火で炙られながらの背筋等々。

悲鳴や怒号が飛び交い、数々の過酷な修練が行われる訓練風景を左右に歩を進めながら、訓練生の中にイツセー先輩の姿を探すがその姿は見えない。

……妙だ。

ここで修行する者は一部の例外を除いて、みんな同じ訓練施設を使うはず。

それがいないとなると、考えられるのは2つ。

将軍様直々にシゴいているか、もしくはもう此処には居ないか、だ。どちらにせよ、将軍様に会わないとわからんか。

まんま地獄絵図の様な訓練施設を抜け、今までの泥臭い通路ではなく大理石で組まれた純白の廊下を進むと、目の前に黄金の巨大な扉が現れる。

「おつきい……」

「驚いたわ、これ全て純金よ」

こちらの身の丈を遥かに超える扉に、圧倒されているリアス姉達を後目に、俺は扉に手を付いてゆつくりと力を込めていく。

純金で創られた扉の重量は片方1トン。

これを自らの力で開く者のみが、将軍様との謁見が許されるのだ。

ここに来たばかりの頃はこれを開けるだけでヒーヒー言ってたが、今は慣れたモノ。

ある程度の力で押してやると扉は重い音を立てて観音開きを開き、扉の奥には大理石と黄金に彩られた見事な謁見の間と、その中央に置かれた四角い構造物が目に飛び込んでくる。

「ねえ、朱乃。あれって……」

「……プロレスのリング、ですわね」

部屋の中央にドカンと居座る違和感の塊のようなそれに、俺とサイラオーグの兄貴を除く面々は信じられないモノを見るような視線を送っている。

気持ちにはわからなくてもないが、それがここにあるのは正しい。

なぜなら――

「そのリングは我が決戦場。この地を訪れた外敵を打ち滅ぼす舞台として置いているのだ、招かざる来客たちよ」

部屋の最奥、玉座が置かれた場所から聞こえた威厳溢れる声に、身構える一同。

俺？ 俺は自然体のままだ。

あそこにいる人が本気だったら、今更警戒したところで遅いし。

「どうも。お邪魔してます、將軍様」

俺が声をかけると、悠然と玉座に腰かけた將軍様は鷹揚おうように頷いた。

「構わん。近頃はこの地を訪れていなかったが、衰えるどころかさう腕を上げたようだな」

「ははっ、ちよつとした技のコツをおぼえましてね」

「うむ、その調子で精進するがいい。常に克己こっきしん心を持ち、己の限界に挑み続ける事がこの門を潜った者の義務なのだからな。ところで、今日は修行では無いようだが、どのような目的でここを訪れたのだ？」

「あなたが連れ去った私の眷属を返してもらいに来たのよ」

実の無いやりとりに焦っていたのか、毅然とした態度で俺達の会話に割って入るリアス姉。

しかしそれも一瞬の事で、將軍様の眼力をまともに受けると俺を盾にするように、後ろの下がってしまう。

「いや、リアス姉。啖呵切るなら最後までやれよ」

「ムリ。なにあの人、怒ったお母さまより怖いわ……」

なんとというビビリ具合。ミリキヤスも見てんのにそれはないだろう。

「私が連れ去った、か。慎よ、その少女の眷属という者の名は？」

「はい、兵藤一誠といます。少しの間ここで鍛錬を積んでいた事が

あつたのですが、近頃は鍛錬を怠っていたが故に、將軍様の手によって連れ去られたと証言がありました」

「ふむ、その者には心当たりはある」

「教えてください、イツセーさんはどこにいるのですか!？」

アーシア先輩の声に応えずに玉座から腰を上げた將軍様は、その場で床を蹴ると一飛びで中央のリングへと降り立った。

うん、猛烈に嫌な予感がして来たぞ。

「このゴールデンキャツスルにはたった一つ、絶対的な法がある。この地で何かを得ようとするのであれば、己が力を示すというものだ。その兵藤一誠という者の事が知りたくば、私に貴様等の力を見せてみよう」

「そんな、イツセーを連れ去ったのは貴方ではないの!？」

「その通りだ。だが、その男が連れ去られたのは貴様が脆弱故のこと。それが気に入らぬと言うのなら、力で奪い返すのが道理であろう」

身につけていた真紅のマントを放りながら、さも当然のように言うてのける將軍様。

やはりそう来たか。うん、知ってた。

悪魔超人節全開な台詞に、思わず黄昏てしまった。

どうやら將軍様と戦わずに済むなんて、やはり夢物語らしい。

「あんたの言い分はわかった。その試し、俺が挑戦させてもらおう」

静かに死ぬよりも酷い目に遭う覚悟を固めようとしていると、先に地獄巡りにエントリーする者がいた。

サイラオーグの兄貴だ。

「待ってくれ、兄貴! ここは俺が——」

「いや、俺に行かせてくれ。ツアーモードは戦えば報奨が手に入るのだろう? なら、マスタークラスの格闘家と闘うチャンスを見逃すわけにはいかん。それに、試してみたいのだ。今の俺の力がどこまで通じるかを」

静かな口調とは裏腹に、全身に闘気を漲らせるサイラオーグの兄貴。

これでは止めても無駄だ。

「……気をつけてな。將軍様は打撃の速度で関節を極めてくる。組み付かれないように注意するんだ」

「ああ」

「こちらの忠告に短く応えて、サイラオーグの兄貴はリングに上がった。」

「よくぞ来た。名を聞こう、勇敢な挑戦者よ」

「極限流空手門弟、サイラオーグ・バアルだ」

「ほう……風の噂で極限流の『無敵の龍』が獅子を育て始めたと聞いていたが、貴様がそうか」

「獅子などと……そんな異名は未熟者の俺にはまだ早い」

感心したような將軍様の言葉に、頭を振るサイラオーグの兄貴。

「どうか、この無限の闘争の中で、噂とか伝わるコミュニティがあつたんだな。」

將軍様がサイラオーグの兄貴を知ってたことより、そっちの方がビックリだわ。

「慎、『無敵の龍』とは誰の事なの？」

「リョウ・サカザキっていう空手家だよ。サイラオーグの兄貴の師匠で、極限流空手の二代目師範。かつて無敗の格闘家と畏れられた『Mr. カラテ』を倒した事で伝説となった人だ」

興味本位なのだろう。

後ろでリングを見ていた朱乃姉が質問してきたので、答えてやる。

まあ、その『Mr. カラテ』は彼の父親で極限流空手の創始者なんだが、これは言う必要はないな。

「ふん、随分と謙虚ではないか。だが、闘争においては、その謙虚さを捨てねば二流止まりだぞ」

「その心配は無用だ。闘いの中では心に獣を宿せと教えられている」
ゆつくりと天地上下の構えをとるサイラオーグの兄貴。

それを見た將軍様は、腕組みしたまま、もたれていたコーナーポストから身体を離す。

「来るがいい。貴様が獅子か猫か、この私が確かめてやろう」

「行くぞ！ 虎煌拳!!」

闘いの火蓋を切ったのは、サイラオーグの兄貴が放った氣弾だった。

張り詰めた空気を裂いて飛ぶ赤い光弾。

中級悪魔程度なら一撃で打ち砕くほどの威力を宿したそれは、腕を組んだまま微動だにしない將軍様の腹に突き刺さる。

着弾と共に派手な打撃音が響き、粉塵が巻き上がる。

しかし、煙の中から現れた將軍様にダメージは見受けられず、その銀の鎧にはくすみすらない。

「どうした。この程度では、虚仮威しにもならんぞ」

腕を解かないまま、將軍様は悠然と言い放つが、その視界の先には兄貴の姿はない。

「油断大敵だ！ 飛燕龍神脚!!」

將軍様の頭上を押さえたサイラオーグの兄貴は、急降下しながら氣を込めた蹴りを放つ。

「愚か者、これは余裕というのだ！」

だが、頭を捉えるはずの蹴りを難なく躲し、すれ違いざまに相手の腕を取るとアームホイップでマットに叩きつけた。

「ぐっ……!!?」

空手家とは思えない見事な受け身で体勢を立て直した兄貴は、マットを蹴って一気に間合いを詰める。

その巨体からは想像もつかない速度で踏み込んだ兄貴は、迎撃で放たれた將軍様の拳を捌き、お返しとばかりに顔面への左右。続けざまに放った左の肝臓打ちを受けて下がった顎をアッパーで打ち上げた。

「食らえ、暫烈拳!!」

そして、極限流連舞拳と呼ばれるコンビネーションブローで宙に浮き上がった將軍様を、拳の散弾が襲う。

横殴りのスコールのごとき拳は、將軍様の身体を重力に従う事を許さず、地面を掘削するような無数の打撃音共に宙に張り付ける。

しかし、それだけの打撃を受けても將軍様は揺らがない。

さすがに腕は解いたものの、自然体のまま全ての打撃を受け、締めのアッパーを顎に食らっても軽やかに空中でトンボを切って着地す

る始末だ。

「ふふふっ、さすがは無敵の龍の弟子といったところか。誉めてやるぞ」

「あれだけの打撃を受けて、まるで堪えていないとは……なんというタフネスだ」

「タフさはレスラー、殊更我等超人レスラーにとっては必須項目。『受け』の技術では貴様等には負けんよ。さて、今度はこちらからいくぞ！」

宣言と共にマットを蹴った將軍様は、サイラオーグの兄貴に向けて錐揉み回転が掛かったドロップキックを放つ。

だが、相手は打撃の専門家。そんな大技がおいそれと通じるワケがなく、一本の矢となった將軍様の身体は素早く屈めた兄貴の頭上を通り抜ける。

「それで避けたつもりか、プラネットマンの宇宙的レスリング能力！」
しかし次の瞬間、言葉と共に將軍様は何もない空間を蹴って方向を変えたのだ。

「ぐおっ!？」

反撃に出ようとしていたサイラオーグの兄貴は、予想だにしなかったその動きに虚を突かれ、蹴りを胸板に受けて吹き飛んだ。

「まだまだ終わりではないぞ!!」

ドロップキックの反動で宙返りをした將軍様は、兄貴の飛ばされた方向へ高速で先廻りし、両脚で空中高く蹴り上げた。

そして自身も宙を飛び、死に体になっているサイラオーグの兄貴をロメロ・スペシャルに捕らえると、落下しながら高速で回転する。

「食らえ、地獄風車落としいいっ!!」

「グワーツ!？」

二人分の体重と落下スピード、さらに遠心力を加えて胸部を叩きつけられ、血を吐きながらマットに沈む兄貴。

「逃がしはせん！ 地獄のメリーゴーランド!!」

ダメージが抜けきらないのか、ダウンしたまま転がって距離を取ろうとする兄貴に、將軍様が身体を丸めて両腕を突き出した体勢で、高

速回転しながら突撃する。

この技は両の手の甲から生やした剣で斬りつけるのが本来の姿なのだが、その辺はさすがに自重してくれているようだ。

何で知ってるかって？

スパーリングで食らったからだよ。

將軍様、鍛錬だとガチに容赦って言葉を知らないからな。

あの時は久しぶりに自分のモツを見たわ。

しかし、訓練より試合の方が有情とは、なんたる理不尽。

俺は泣いていいのではないだろうか。

閑話休題。

サイラオーグの兄貴に迫る地獄のメリーゴーランド。

剣など無くても頭蓋を砕く威力を秘めた拳は、獲物を捉える寸前で相手の出した腕によって受け流された。

まだ体勢の整っていない膝立ちの状態で、あの勢いに乗った拳を捌く術。

あれはジャック戦で見せた高等技術、ジャスト・デイフェンスだ。

「ジャスト・デイフェンス!? このような技も修めておったか!」

「あの状態で受けられるかどうかは賭けだった……。この千載一遇せんさいいちぐうの好機、逃しはせん!!」

気炎を吐きながら、全身の氣を練り上げるサイラオーグの兄貴。

急速に大きくなるそれは、ジャスト・デイフェンスによって奪い取った將軍様の氣を取り込んで、両手の間で氣弾にその姿を変える。

「うおおおおおっ!! 霸王翔吼拳!!」

「ぬうううっ!?!」

サイラオーグの兄貴が放った自身の身長を超える巨大な氣弾は、舐めるようにリングの上を通り抜け、天井に風穴を開けてその姿を消した。

後ろにいたりアス姉達が歓声を上げているが、俺は樂觀視はしていなかった。

確かにさっきの霸王翔吼拳の威力は凄かったが、あの程度で將軍様が倒せるわけではない。

現に將軍様の氣はまだリングの中にある。

多少の手傷は負っているだろうが、戦闘不能までは至っていないはずだ。

粉塵と焦げ臭い臭いが充満するリングに目をこらすと、立ち上る煙を掻き分けて將軍様が現れる。

その姿は銀の鎧に多少焦げ目がついているだけで、他にはダメージらしきモノは見当たらない。

「見事だ、サイラオーグ・バアル。ほんの数歩とはいえ、私を退けた事は誉めてやる。だが、本当に私を倒したいのなら、『Mr. カラテ』や『無敵の龍』のように、今の三倍は氣を練らねばな」

「……ッ、化け物め」

鎧の焦げ目を払い落としながら、悠然と間合いを詰める將軍様。

相手が纏う強者のオーラに圧倒されながらも、サイラオーグの兄貴が拳を放つが、容易く躲かれて水車落としてマットに叩きつけられる。

「ぐあぁっ!?!」

あまりの速度に受け身を取ることも出来ず、頭をしたたかに打ちつけるサイラオーグの兄貴。

「どうした、小僧。この程度ならこの練習生でも受け身が取れるぞ」
悶絶する兄貴を髪の毛を掴んで無理やり立たせると、覚束ない相手の背後を取った將軍様は、瞬く間にスタンド状態のチキンウイング・フェースロックを極める。

「ぐおおおおおっ!?!」

右腕と首を捻り上げられながらも、脱出しようと藻掻くサイラオーグの兄貴。

しかし、ガツチリと極まった技はビクともしない。

「そりゃー!! チキンウイング・スープレックス!!」

チキンウイング・フェースロックの体勢のまま、そり投げを放つ將軍様。

轟音を立てて側頭部からマットに落ちたサイラオーグの兄貴は、うつ伏せのままピクリともしない。

ヤバいな。今、明らかにマズい角度で落ちたぞ。

「どうやらここまでのようだな、サイラオーグよ」

ブリッジの体勢から戻った將軍様は、倒れ伏したサイラオーグの兄貴を冷然と見下ろす。

その光景は正に勝者と敗者の構図だ。

とはいえ、こちらも惚けている場合ではない。

試合が終わったのなら、速やかに治療を行わなければ。

無限の闘争MUGENの中なので命を落とす事はないだろうが、だとしても放置は論外だ。

「アーシア先輩。サイラオーグの兄貴を下ろすから、治療の準備を」

「はいー」

アーシア先輩に声をかけて、怪我人の回収の為にリングに上がろうとしたその瞬間、先ほどまでピクリともしなかったサイラオーグの兄貴が身体を起こしたのが見えた。

リングサイドで呆気に取られる俺を後目に、覚束ない足取りで將軍様の前まで進んだサイラオーグの兄貴は、その銀の胸板にむけて拳を放つ。

先ほどとはまるで違う、直撃してもペチツと小さい音が鳴る程度の、蠅が止まるようなパンチ。

慌てて兄貴の顔に目を向けると、俯いているために目は前髪が邪魔で目は見えないが、その顔の色は蒼白を通り越して真っ白だ。

KOされた格闘家にままたるように、兄貴は今無意識に闘っているのかもしれない。

静寂を取り戻した室内に、至極軽い打撃音が響く。

気の抜けた拳に腰が入っていない蹴り。

頼りない足運びで放たれる攻撃とは呼べないような緩い打撃に潮時と思い改めた俺は、リングに入ろうとして視界に映った光景にその動きを止めた。

先程まで無防備で攻撃を受けていた將軍様が、サイラオーグの兄貴が放つ攻撃を捌いているのだ。

驚いて兄貴に目を向けると、彼の動きや放つ技は鋭さを取り戻し、

さらにその速度を上げていく。

「面白い男よ。この場面で奥義に目覚めるか」

油断なく攻撃を捌きながら、楽しそうな声を上げる將軍様。

今、將軍様は確かに奥義と言った。

極限流の奥義は霸王翔吼拳ともう一つ。

「もしかして、あれが龍虎乱舞なのか？」

呟いた俺の視線の先には、ベストコンディションを凌ぐスピードで連撃を放つ兄貴の姿があった。

龍虎乱舞、またの名を極限流十五連。

SNKが制作した対戦格闘ゲーム『龍虎の拳』に登場する、格闘ゲーム史上初の隠し超必殺技。

氣を溜めるモーシヨンの後に相手に突撃し、ヒットすると通常技を連続で叩き込んで最後は虎砲でやる。

これが龍虎の拳やKOFでよく知られる技の概要だ。

だが、龍虎乱舞にはもう一つの解釈がある。

それは今は無きゲームストに掲載されていたコミカライズにあつたもので、曰く『極限状態において研ぎ澄まされた闘争本能を解き放つ事によって一種のトランス状態になり、疲れや痛みを感じる事無く闘神の如く闘い続ける』というものだ。

この解釈の通り、劇中で龍虎乱舞を放つたりヨウは、右腕をへし折られても気にせずに戦い続け、若き日のギースに勝利していた。

まさか、無限の闘争で習得するのがそちらの方だったとは……。

こちらが頭の中で思考を巡らせている間にも、サイラオーグの兄貴の猛攻は止まらない。

鍛え上げられた肉体の限界を超えるほどの連撃に、さすがの將軍様も一歩、また一歩と後退していく。

だがしかし、その攻勢は唐突に終わりを告げた。

連撃の中の一つ、大振りの回し蹴りを捌いた將軍様が、フロントスープレックスで兄貴をマットに沈めたのだ。

相手を投げた後も油断無く残心を取っていた將軍様だが、龍虎乱舞のトランス状態を破られた兄貴が動く事は無く、対戦終了のゴングが

高らかに鳴らされた。

あの暴風のような連撃の中から、ほんの一瞬の隙を突いて投げを放つ。

相当な実力差と針の穴を通す精妙さが無ければ出来ない勝ち方だ。というか、将軍様はいつの間にブロッキングを覚えたのだろうか。ただでさえ頑丈なのに、デイフェンスまで強固になったら手の打ちようが無いんですが。

さて、サイラオーグの兄貴の健闘虚しくイツセー先輩の救出は失敗してしまった。

当方の二大戦力である兄貴が倒れた以上、断腸の思いだがここは撤退するしかないだろう。

すまない、イツセー先輩。

本当にすまない。

「慎よ、上がってくるがいい。次はお前の番だ」

……………ですよねー。

茶番で誤魔化してトンスラしようとしたが、やはりダメだったか。ならば、こちらも覚悟を決めるしかない。

将軍様の待つリングへの道が十三階段に見えて仕方がない。

もし、俺は護身を完成させていたら、目の前に閉じられた城門や荒れた海ではなく、煮えたぎる溶岩を溜めた火山の火口が見えるだろう。

そんな愚にもつかない事を考えていると、リングはもう目の前に迫っている。

この段に有ってはもはや逃れる事は不可能。

天国の母よ。今、逝くよ。

閑話 『兵藤一誠救出作戦（破）』

ゴールデンキヤツスル謁見の間。

その中央に備え付けられた、いつもは見上げるだけのリングの上で俺は入念に身体を解していた。

朱乃姉をはじめとしたギャラリィ達もサイラオーグの兄貴の敗戦に加えて、俺がリングに入ってから漂う異様な雰囲気呑まれてか、声を上げようとしなない。

ちなみに着ていたウエイトと重力制御装置は上着と共に外してある。

將軍様の相手をするのにハンデなんてもつてのほかだし、組技主体のレスラーを前にして上着を着ていると不利になるからだ。

まあ、上半身を晒した際に、ダメな紅髪の姉貴分や聖女な先輩の叫び声が聞こえた気がしたが、それは気にしない事にしよう。

「身体は錆び付いていないようだな。現世にいる間にどれだけパワーアップしたか、確かめてやろう」

「お手柔らかにお願いします、切実に」

「馬鹿を言うな。せっかくの弟子の成長を確かめる機会だぞ、全力で行くに決まっておろう」

「そう言うと思ったよ、チクショー!?!」

他愛もないやりとりを交えつつ、こちらは柔軟からウォーミングアップの型稽古に移行する。

常在戦場を旨むねとしている身として、準備を待ってもらうのは情けないと思うのだが、今回は相手が相手。

使えるものは片っ端から使うべきだ。

さて、間もなく自身の死刑執行の時間なのだが、悲しいかな、逃げようにもここはもう死刑台の上。

こうなってしまうたら將軍様のテンションが上がらない事を祈りつつ、決死の覚悟で足掻くしかないだろう。

もつとも、手加減すると言われても將軍様の場合はあまり信用ならないのだが。

あの人過去に二回、鍛錬中に俺を殺してるし。

因みに、3人の師匠の中で俺を殺した事があるのは將軍様だけだ。

死因は九所封じを实地じつち、要するに食らって覚える訓練で手加減を間違えた事と、スパarring中にテンションが上がった將軍様に断頭台を食らった事。

ん、なんでそんな目にあってるのに、離れないのかった？

あー、何て言えばいいんだろうな……

將軍様はさ、強さを求める事に凄い真摯しんしなんだよ。

だから門下になった奴が鍛錬をサボるのを許さないし、強くなろうとする奴がいたら、それがガキだろうと全力で鍛えてくれる。

俺を殺したのだから、指導に熱が入りすぎたのが原因だし。

死ぬほど不器用な人だから解りにくかったけど、遠回しでもちゃんと謝ってくれたんだぞ。

それに、お袋が死んで我武者羅がむしゃらに力を求めてた俺の無茶を諫めずに、気が済むまで鍛錬に付き合ってくれたのは、この人だけだった。

あの時、力に傾倒けいとうするのを止めてくれたのが剛拳師匠なら、力を求める心を肯定してくれたのは將軍様だったんだ。

その事が無かったら今の俺はいないし、お袋の事もっと引き摺っていたはずだ。

そんな恩人でもある師匠なんで、一回や二回殺された程度で離れるワケにはいかんのよ。

効率のいいトレーニングや鍛錬的な意味での肉体改造知識も凄いな。

さて、ひと通り型も終わつたし、現実逃避の回想に耽るのもここま

で。望み薄だが、生存の可能性を信じて全力を尽くすとしよう。

覚悟を決めてリング中央に出ると、逆のコーナーで待機していた將軍様も歩み出てくる。

「ふん、先程の戯言を言っていた時よりマシな顔になったな」

「肚はらは括くくつたんで。敵わないかもしれませんが、最後まで足掻かせてもらいますよ」

「そうではなくては面白くない。全力で来るがいい！」

その言葉と共に、俺たちは互いに構えを取る。

俺はいつもの身体を半身にしたの独自の構え、対する將軍様は両手を下げた自然体だ。

さて、格上の相手なんて前回のツアー以来だ。

普通なら様子見やら駆け引きやらと考えるのだが、將軍様相手にそんな余裕はない。

全力全開な上に玉砕覚悟で当たって初めて、同じ土俵に立てるレベルだからな

マットの中央に悠然と立つ將軍様を前に、俺は大きく息を吸った。そして鋭い呼気と共に潜心力を一気に全開まで引き出す。

「ほう……」

マットの上に渦巻く風と身に纏った紫電の弾ける音に混じって、將軍様の感嘆の声が聞こえる。

感心するのはまだ早い！　なんて言えたらいいなあ……。

……そこ、後ろ向きとか言うな！

目の前にしてるだけで泣きたくなくなるくらいの威圧感なんだよ、將軍様！

あれ絶対ガチだぞ！　スパーですら再起不能の危険が付きまとうのに、真剣勝負とか死ぬ未来しか見えないよ、天国のママン!!

覚悟を決めたとか言っつといて泣き入れ倒してるが、その辺は目を瞑ってくれ。

とは言え、このままでは罅が開かない。

というか、將軍様の威圧感で肉体の前に精神が死ぬ。

まずは一撃、こちらから手を出さなければ。

マットを挟りながら一足で間合いを詰めた俺は、將軍様の顔面目がけて左拳を放つ。

放った拳は容易く捌かれるが意に関せず右拳、左ボディ、右フックと放つ拳の回転を上げる。

こちらが放つ拳を危なげなく捌き、こちらに掌底を返す將軍様。

当然、こちらも食らってやるつもりはないので、片っ端から捌きな

がら拳を放ってやる。

見入っているのか、はたまた呆気にとられたか。

ギョラリーの声も無く静寂に包まれた室内の中、互いの打撃を捌く音だけが響く。

リングの中央で足を止めての打撃戦は互角。

打撃系格闘家も自認している身としてこの結果に思うところが無い

わけではないが、将軍様が相手では仕方ない。

とはいえ、全くの互角という訳ではない。

応酬の間を縫う様に突き刺さったこちらの左ボディを契機に、拮抗きつこうしていた天秤がこちらに傾いたのだ。

打撃を交えながらも一歩、また一歩と後退する将軍様。

さらに回転を上げると将軍様からの打撃が止まり、防御を固め始めた。

この時点で攻守の流れは完全にこちらに動いたと言える。

だが、あの将軍様が大人しく退くとは思えない、狙っているのはこちらの撃ち疲れだろう。

ならば――

こちらの打撃で後退を続けていた将軍様の足は、コーナーポストを背にした事によりその動きを止める。

このチャンスに一気に攻勢をかけるが敵も然る者、精度が増した捌きによって有効打が与えられない。

相手の防御の厚さに内心歯噛みしながらも手を出し続けていると、放った打撃に甘いものが混ざる。

「未熟者め、功を焦ったか！」

叱咤しったと共にその一撃に腕を絡めようとする将軍様。

このままでは、確実に腕の一本は破壊されるだろう。

だが、それは捕られれば、の話だ。

腕を引かれるままに懐に飛び込んだ俺は、銀の剛腕がこちらを極めるより先に逆にその手首を捕る。

そして、当て身投げの本来の形である合氣の合理で将軍様の体勢を崩し、アームホイップで投げ捨てた。

「ぬう……!?!」

驚きの声を上げながらも投げ飛ばされた將軍様は、それでも尚マツトに背を付けずにギリギリのところまで着地する。

正直、どんな反射神経をしているのかと問い詰めたくなるが、このレベルの実力者になれば理不尽なんてダースどころかグロス単位で持っている。

嘆くのも憤るのも時間の無駄、こちらがやるべき事は追撃の手を緩めない事だ。

先に起き上がった俺は、着地はしたものの体勢が整っていない將軍様に向けて蹴りを放つ。

下から顎を掬い上げるような軌道の蹴りを、グニヤリと音がなりそうなほどに背を反らして回避する將軍様。

上半身を直角に反らせるといふ常識外れの身体の柔らかさを見たが、その程度の芸当なら無限の闘争に出来る奴はいくらでもいる。

俺は外した蹴り足を更なる踏み込みにして、もう一方の足を跳ね上げる。

膝蹴りとなった足が狙うのは、姿勢を戻そうとしている將軍様の側頭部。

打ち上げの前蹴りを鼻先を掠めるように放つことによって、相手の意識を前面に固定し、そこに蹴り足を踏み込みに変えた上段狙いの膝を死角から叩き込む。

この蹴りの連携は、とある漫画に出ていたムエタイ使いの得意技で、名を『コブラソード』という。

意識と視野、双方にとつての死角から襲い掛かる一撃。だがそれは寸でのところで銀の腕に阻まれてしまった。

あの状況で容易く防いで見せた將軍様の手腕に舌を巻くが、足首を襲った激痛にすぐさま意識を入れ替える。

捕らえられれた蹴り足に掛けられようとしているのは、スタンドでのアキレス腱固め。

完璧に極まれば、瞬く間に俺のアキレス腱は断ち切られるだろう。將軍様が極めきるよりも早く、俺はもう一方の足を跳ね上げて足を

捉えている方の肩、その付け根にあるツボに蹴りを叩き込む。

俺が狙った箇所は人体の急所の一つで、ここにピンポイントで衝撃を加えられると、腕が痺れて力が入らなくなる。

それは、鎧を身体の代替にしている将軍様も例外じゃない。

狙い通り相手の力が一瞬緩んだ隙に技から脱出した俺は、マットに手をつけて後方宙返りで間合いを取ろうとする。

「ぐ……え……ッ!？」

だが着地の寸前、自動車で轢かれたかのような衝撃に襲われ、肚に溜まっていた空気を吐き出してしまった。

痛みで霞む視界に映るのは、俺を肩に担いだまま走る銀色の背中。

それで今のシヤレにならない衝撃が、将軍様のシヨルダータツクルだと理解した俺は何とか脱出しようと思っ掻くが、左足と胴をガツチリとホールドされている為に、まともに動く事もできない。

「足掻くのはよせ。一度極まった私のホールドからは逃れられんのは、貴様もよく知っていよう」

また無茶苦茶言うよ、この人はっ！

これからどんな殺人技掛けられるか分からないんだから、抵抗しないわけないだろうが!？」

もたついている隙にトップスピードに突入する将軍様。

ダンッ、ダンッ、と強烈な踏み込みの音が耳朶を打った直後、ゴールデンキヤツスルの天井が手の届く距離まで迫り、浮遊感と共に視界が反転した。

高つけえ……。この天井って何メートルだったっけ。

他人事のような感想が脳裏に浮かぶが、現実逃避している場合じゃない。

風切り音と吸い込まれるような落下の感覚の中、俺は息を吐いて体内の氣の流れを掌握する。

将軍様の言うとおり、このホールドの強さならならば全力で足掻こうと、逃れることはできないだろう。

だが、それは普段の俺だった場合だ。

口角を吊り上がるのを感じながら、俺は体内に取り込んだ氣勢を一

気に循環させる。

リスク無く上げられるのは4倍まで。

さらに將軍様に気取られないように、発動も一瞬だけだ。

技の発動と同時に、纏っていた氣が蒼から紅に変わり、全身に力が満ちるのを感じた俺は、そのままホールドされている右腕を力任せに引っこ抜いた。

「なにっ!？」

將軍様が驚嘆の声を上げるが、それに構っている余裕はない。

不完全になったとは言え、技はまだ生きてるし、地面はもう目の前だ。

俺は身体を丸めながら、ホールドされていない右腕で何とか受け身を取ろうとする。

衝撃、そして轟音。

背中全体から身体がバラバラになるような痛みを受けた俺はそのまま、マットに大の字に倒れた。

身体中が死ぬほど痛いし、腹の中で何かがグルグル回って気持ち悪い。

本音を言えばこのまま朝まで寝たい気分だが、それをすると將軍様の手によって永眠する事間違いない。

暗転しかける意識を必死に繋ぎ止めながら、身体を起こす。

コーナーポストを踏み台にして、天井近くまで跳び上がったの雪崩式ノーザンライトスープレックスとか、仕掛けてくる技がトンでもなさすぎる。

抵抗して大きく崩れたからよかったものの、あのまま頭から落とされたらヘタしなくてもあの世行きだった。

ダメージで思うように動かない身体で、なんとか四つん這いになった瞬間、腹で回っていたものがせり上がり、止める間もなく口からこぼれ落ちた。

口の中と鼻に生臭さと鉄サビの匂いが溢れ、白いマットに赤黒い粘ついた液体が歪な模様を造る。

だが、その事に何かを思う暇も無く、俺は両の手足を使ってその場

を飛び退く羽目になった。

「この私を相手にして、呑気に血反吐を吐くとは随分と余裕ではないか」

ギリギリと痛む身体を推して視線を走らせると、先ほどまで俺が這いつくばっていた場所に、手首をから生やした剣を突き立てる將軍様の姿がある。

血反吐を吐く暇も与えられないうえにサーベルまで使うとは、辛口対応すぎる!?

「さあ、行くぞ！ ナマスにされたくなければ、反撃してみるがいい!!」

「ちぎしよう、やってやらあ！ 後で吠え面かくなよ!!」

連続で振るわれる驚くほど澄んだ鉋石でできた刃を、俺は後ろに退がりながら捌いていく。

今は聖母トワイライト・ヒーリングの微笑の治癒エネルギーを氣脈を通して腹に循環させている。

全快とまではいなくても、動きに支障がないくらいに回復するまでは時間を稼がないと。

唐竹、袈裟、胴薙と次々に振るわれる斬撃だが、こちらが守りに集中しているお陰で全て躲こなす事が出来ている。

將軍様は全てが一流以上に熟こなせるトータルファイターだ。しかし、その万能さ故に一芸を突き詰める必要がない。

この斬撃も、ご先祖ちゃんや斎藤一といった本職に比べれば、一撃のキレや籠こめられた凄こみといった部分で一步劣るのだ。

「チョコマカと……！ だが、これならばどうだ！ 地獄のメリーゴラント!!」

焦じれてきたのか、ブレードを突き出し前方に高速回転しながら、こちらに突進してくる將軍様。

同時に、こちらの腹に重石のようにのし掛かっていた不快感も消えて無くなる。

ようやく腹の中が回復したらしい。

サイラオーグの兄貴に使ったものとは違う、ブレードを展開した完

全な地獄のメリーゴーランド。

守勢から攻勢にシフトを変えた俺は、高速回転する刃、それが生えた手首ではなく下腕部に手を当てて斬撃を捌き、そのまま腕と体育座りのように將軍様の懐で折り畳まれた足を捕らえると、回転の勢いを乗せて地面に叩きつけた。

「ぬうつ……!?!」

頭からマツトに激突した反動で浮き上がる將軍様。

「4倍界王拳!!」

その姿を視界に捉えながら、氣脈操作で技の後で硬直した身体を強引に動かした俺は、即座に界王拳を発動。

「サンダアアアアップブレイクツツ!!」

界王拳で倍化した氣を集中させた両手を地面に叩きつける。

「又オオオオオツ!!」

天井を突き破って降り注ぐ雷は、瞬く間だが空中で死に体を曝していた將軍様に襲いかかり、その身体を天高く跳ね上げていく。

当て身投げで相手を投げた後、硬直をスーパークャンセルで打ち消してレイジングストーム、もしくはサンダーブレイクで追撃する。

MUGENの原作にいた、とあるギースが得意としていた連携で、結構前から草案はあったものの、サンダーブレイクとスーパークャンセルがネックになって再現できなかった。

しかし、前の騒ぎでサンダーブレイクを習得した事と、合宿の折りにサイラオーグの兄貴が見せたブレイキングをアレンジしたスーパークャンセルを習得した事によって、今日初めて日の目を見たのだ。

この連携は魔王クラスでも一撃で葬れるだけの威力がある。

しかし、あの將軍様が魔王を倒せる程度の攻撃で参るワケがない。

だからこそ、この機にダメ押しを叩き込む!

サンダーブレイクの硬直をキャンセルした俺は、舞空術で雷撃で空中高く打ち上げられた將軍様を追う。

そして、体勢が整うより早く將軍様を『裏大雪山落とし』に捕らえる。

「これは……!?」

「大雪山落としを俺なりにアレンジした技です。威力は食らって確かめてくださいよ!」

将軍様の背骨に置いた足を起点に足と顎をフックした腕でエビ反りになるように絞り上げながら、俺は舞空術で地面に向けて急加速する。

しかし何故だろう。

技の体勢は完璧、両手のフックもしっかりして返される可能性はまったくないはずなのに、決まる予感が全くしない。

「ふふ……ふふふふふふ」

「ちよつ!? こんな状況で笑わんでください!!」

思いつきり背中を反らされながらも不気味に笑う将軍様に思わず抗議の声を上げてしまう。

不安が雪だるま式に増えるんで勘弁してください、マジで!

「そう情けない声を出すな。大雪山落としを裏返す事で、まったく別の技に昇華させる。このまま地面に叩き付けられれば、せきつい脊椎とけいつい頸椎、胸骨に内臓へのダメージは甚大だな」

機械のように冷静に、自身にかけられた技のダメージを計算する将軍様に、背筋に冷たいものが走る。

「見事だ。用途は違うが、よくぞ九所封じの可能性広げてみせた。ほうび褒美として、今よりワンランク上の攻防というものをレクチャーしてやろう!」

お断りします!!

「ふつ、そう遠慮するな。まずは技を掛けられた際の防御から……硬度ゼロ、スネークボディ!!」

将軍様の声と共に、しっかりと握っていたはずの手から、将軍様の足が蛇か鰻のようにスルリと抜け出てしまった。

支えの一端を失った俺は、咄嗟に将軍様の顎に掛けていた手に更なる力を込める。

「それは悪手だぞ、慎よ。……ロデオ・スキップツ!!」

まるで暴れ馬のように全身のバネで跳ね上がる将軍様。

その背から振り落とされた俺は、顎に掛けていた手が災いし、将軍様のすぐ近くで死に体を曝してしまう。

舞空術で離脱しようとするが、それよりも先に伸びてきた銀色の腕によって頭と足を捕らえられ、膝立ちになった将軍様の下敷きにされる。

この体勢は……や、ヤバい!?

「行くぞ！ 掟破りの返し手・大雪山落としいっ!!」

「……っ!?!」

一瞬の風切り音の後、腹と背中に何かが爆発したかのような衝撃と痛みが走った。

「ガハッ!?!」

呼吸と共に喉から飛び出した血反吐が雨のように降り注ぎ、俺と将軍様の身体に赤黒い斑点を付ける。

ノーザンライトスープレックスを食らった時は、途切れそうになる意識を繋ぎ止める事に必死だったが、今回は苦痛が強烈すぎて気絶する事もできない。

将軍様が技を解いた後、痛すぎて動かない身体に鞭打って、右手を腹に当てる。

背中感覚が無い上に、腹は中でミキサーの刃が暴れまわっているかのように、痛みと灼熱感が治まらない。

さっきの内傷ないしやうが癒えきってないところに、このダメージはヤバすぎる。

氣脈と手の二重治療じゃなきや追いつかないのを見ると、中身の一つや二つは破裂してるかもしれない。

「慎兄様ああああ！ 頑張れえええ!!」

「慎兄！ どうせ勝てないんだから、そのまま寝てろー!!」

痛みがキツすぎてぼやけてきた意識の中でも、しっかりと耳を打つ声援。

美朱よ、こっちが怪我をするのを見たくないのはわかるけど、もうちよつと言い方があるだろうに。

本音を言えば美朱のいう通りにしたいが、兄貴分としてミリキヤス

の前でカッコ悪い姿を見せられない

なんとか立ち上がった俺は、口に溜まっていた血反吐の残りを吐き捨てる。

界王拳込み込みの全力で治療に当たってるので、腹の痛みは治まってきたが、背中の方は依然感覚が死んだまま遅々として治癒が進まない。

これが九所封じの恐ろしいところだ。

食らった技に当て嵌まる箇所を氣脈ごと根刮こそぎ破壊する。

背中の傷は、今日一日は治ることはないだろう。

まあ、そのお陰で痛みに動きが阻害されないので、無茶すれば普段通りに動けるのがせめてもの救いだが。

後遺症やらなにやらについては知らん。そんなものは起きてから考えればいい。

今の問題は、理不尽ボディの將軍様をどう攻めるか、だ。

あのインチキ臭いスネークボディがあるので、絞め技も投げも通用しない。

となれば後は打撃しか無いわけだが、俺の記憶通りなら將軍様の肉体には硬度調節機能があつて、その気になればダイヤモンドと同じ堅さまで身体の硬度を上げられるはずだ。

さすがにダイヤモンド並みの身体を殴つて、拳が無事でいる自信は無い。

……あれ？ もう詰んでないか、俺。

いやいや、諦めるのはまだ早い。

抵抗を止めれば、今の將軍様のテンションの上がり具合だと九所封じフルコースもあり得る。

死刑執行中とはいえ、そんな死に方は御免被ごめんこうむる。

こうなつたら、もう……あれだ！

偉大なる先達であるキン肉マンに倣なつて、將軍様の硬度調節機能を破壊するしかない。

確か、原作なら鳩尾辺みぞおちりに強烈な打撃を与えれば壊れたはずだ。

腹の痛みも動きに支障がない程度に治まったので、構えを取るとそ

れに合わせて將軍様も腕組みを解く。

「すみませんね、お待たせしちやって」

「構わん。貴様の成長を計るのも、この試合の目的の一つだ。あそこ
で攻め潰しては意味が無かろう」

「そうですか……つと!!」

吐き捨てると共に、初手と同じ速度で踏み込んだ俺は、無防備に立
ち尽くす將軍様の脇腹に左拳を打ち込んだ。

だが、返ってきたのは先ほどまでの鎧をへこませる感覚ではなく、
途轍もなく硬いモノを殴った痺れるような痛み。

小さく血の糸を引く拳を戻しながら間合いを取ると、銀だった將軍
様の鎧がブレードと同じく恐ろしい程に澄んだ鉱石に化けているの
が目に入った。

「ふふふ……。どうだ、ダイヤモンドと同じ硬度10の我がボディを
殴った感想は？」

「いや、硬すぎますよ。一瞬、拳が砕けたかと思いましたがもん」
軽口を叩きながら、左手をプラプラと振ってみせる。

まあ、表面の肉はある程度削げただけで骨には異常はないのだが。

しかし、参ったな。

ダイヤモンドボディをこうも早く切ってくるとは思わなかった。

殴って確信したが、あの身体はシャレにならない。

ダイヤモンドは衝撃に弱いとよく聞くが、人間の胴体レベルになる
とワケが違うらしく、生半可な打撃は通用しないようだ。

一発、二発程度のなら殴つてもなんとかなるが、ラッシュなんてカ
マしたら本気で拳が砕けちまう。

「今度はこちらから行くぞ! この身体を見事乗り越えて見せよ!!」

気合増し増しで突進してくる將軍様を見ながら、俺は全身に氣を巡
らせる。

顔面目がけて飛んでくる微塵みじんの容赦も感じられない拳。

ダイヤモンドの塊という、まんま凶器のそれがこちらを捉える寸
前、手首を軽く弾いて逸らす。

左ジャブ、右ストレート、フックにアッパー。

次々と襲ってくる拳の群れは、力の流れに逆らわずに放たれる掌によつて、見当違いの方向へと導かれて不発に終わる。

疾さに勝る攻撃をいなす軽妙の技、これがタオロ濤羅師兄から学んだ戴天流の捌きの技法の一つ『波濤任權』だ。

ダイヤモンドになった腕とまともに付き合っているのは、こつちの身体がもたない。

しかし剣と拳の違いはあれども、生身で特殊装甲に覆われたサイバーアームの攻撃を捌けるこの技なら、リスクを最小限に対処ができる。

「ムエタイに合気、そして私が教えた超人レスリングときて今度は中国拳法か。次は何が出てくる？ 貴様の持てる全てを私に見せてみる！」

益々テンションが上がる將軍様に、思わず顔が引きつってしまふ。いや、そろそろ本気でネタ切れなんですけどね。

泣き事を胸中で呟きつつ、俺は將軍様のラツシュを捌きながらも、ダイヤモンドボディに隠された硬度調節機能の場所を探っていた。

攻撃を逸らす際に触れた手から氣を流していると、最初は感じられなかった反応が相手の動きが激しくなるに連れて身体の中央、ちょうど鳩尾辺りから感じるようになった。

『目の視境に有らずとも、紛れもなく敵はそこに在る』

タオロ濤羅師兄の言葉は間違いではなかったようだ。

漫画の知識の裏付けが取れたので、防御の為に循環させていた氣を氣勢に変えて右手に集中させる。

こちらにとつて都合な事に、当たらない事に業を煮やし始めた將軍様の打撃は、勢いを増すごとに大振りになってきている。

次に顔面への一撃が来たら、そいつを捌いて界王拳で強化した発勁を鳩尾に叩き込む。

狙い通りに行けば、硬度調節機能を破壊できるはずだ。

そうヤマを張って防御を続けていたところ、チャンスは思ったよりも早く来た。

「亀のように縮こまって何かを狙っているようだが、その前にその防

御を打ち壊してくれるわっ!!」

右のショートフックから左ボディというボクサー顔負けのコンビネーションからの右ストレート。

「待ってましたよ、そいつを!!」

前の二撃を油断無くないした俺は、本命を界王拳で倍化した力で弾くのと同時に、ガラ空きになった鳩尾へ発勁を放つ。

硬いものが碎ける甲高い音と、右腕から肩へと抜けていく衝撃。

放った拳の行き先を目にした俺は、顔から一気に血の気が引くのを感じた。

右拳は狙っていた鳩尾から外れ、無数の亀裂と共に將軍様の胸部に突き刺さっていたからだ。

「ふふふ……見事だ。このダイヤモンドボディを一撃で砕くとはな。しかしまだ甘い! ダイヤモンドダストオオ!!」

言葉と共に胸部の傷から亀裂が全身に走り、甲高い音を立てて砕ける將軍様の身体。

しかし、銀色の頭部に呼応して浮かび上がった身体を構成していた無数のダイヤモンド片がこちらを取り囲むと、高速で飛び回る礫となって襲いかかってくる。

「ぐうっ……!」

細かい破片が入らないように目を閉じた俺は、全身に何かが突き刺さるような痛みに呻き声を上げた。

腕が捕られてガードが間に合わず、咄嗟に使った硬氣功も鋭利な破片となったダイヤモンドには気休めにしかならない。

対抗策も思いつかず、ただ痛みに耐えてガードを固めていると、急に両腕が捻り上げられた。

咄嗟に目を開くと、そこにはこちらをリバースフルネンソンに捉える、上半身だけの將軍様の姿が……。

「我がダイヤモンドパワーは、こういった使い方も出来るのだ!」

クソツたれ! なんつーデタラメな身体してんだ!?

「ソリヤー!!」

「ぐあぁっ!?!」

逆羽交い締めはがの体勢で、自身が回転してこちらを振り回す將軍様の上半身しかないにも関わらず強力なその力は、抗う事も許さずに俺の足をマットから引き剥がす。

これは……また九所封じかよ!?

猛烈に回る視界の中で次に来る技を予見した俺は、固められている両腕に力を込めた。

「地獄の九所封じ、No. 2. 3! ダブルアームソルトオオオ!!」
両肘と肩に骨がズレる感覚と共に腕の力が抜け、一瞬遅れて景色が反転した。

回転の勢いそのまま背中からマットに叩きつけられた俺は、拘束していた力が緩むと同時に両腕を引き抜いて距離を取る。

詰まる息と揺れる視界を無視して再び腕に力を入れると、またしても骨がズレる感覚のあとで腕に力が戻ってくる。

「咄嗟かかに関節を外す事で九所封じから両腕を守ったか。いい判断だ」
呵々と笑う將軍様だが、こちらは荒い息を吐きながら睨み返すのが精一杯だ。

しかし、参った。

実力には差はあると分かっていたが、こうまでとは……。

こちらは内臓へのダメージに全身裂傷。

両肩と肘の靭帯も損傷してるし、背中の感覚は戻らないうえに肋骨も何本か逝っている。

対する將軍様には、ダメージらしいダメージは無い。

圧倒的というのは、こういうのを言うのだろう。

とは言え、まだ勝負は終わっていない。

こっちの引き出しはほぼ空っぽだが、全く手が無いワケではないのだ。

さっきのダブルアームで思い出した技が一つだけある。

ここで得た技じゃない。

練習をしたことが無ければ、当然成功もしたこともない。

あるのは、脳にこびり付く漫画で見た技の知識のみ。

こんなものに勝負を賭けるなんて自分でも阿呆らしいと思うが、相

手は常識外れの規格外だ。

この程度の無茶くらい通さねば、一矢報いることなどできはしない。

構えを取ろうとしてフラついた際に、身体からこぼれ落ちた血が、マットに紅い華を咲かす。

血は未だに止まらないが治療はしない。今から賭ける大穴博打のために、トワイライト・ヒーリング聖女の微笑に回す体力も惜しいからだ。

「その闘志は見事だ。だが、大勢が決した以上これ以上苦しめるのも不憫。ここは私の得意技でひと思いにマットに沈めてやるのが慈悲というものだろう」

死刑執行ですね、わかります。

「行くぞ、慎よ！ 心静かに最後を受け入れるがいい!!」

何故か殺る気満々で突っ込んでくる將軍様。

さて、博打の掛け金に自分の命が倍プッシュされてしまったが、こちらのやることは変わらない。

突進してくる將軍様と組み合った俺は、相手が技に入る前に身体を後ろに投げる。

勢い余って体勢を崩す將軍様の腕を引きながら、相手の腹に右足を当てる。

「この期に及んで巴投げなど、通用すると思っているのか!」

半ば技に掛かっていながらも、こちらの技を潰しにかかる將軍様。

普段ならここまで来ていれば相手が將軍様でも強引に投げに付けるのだが、現状のコンディションではそうはいかず、伸ばしていた腕は押し潰され、腹を捉えていた蹴り足も外されて膝を当てるだけになる。

しかし、ここまでは予定通り。

勝負の賭け時はもう間もなくだ。

一瞬の浮遊感と軽い衝撃、のしかかってくる將軍様を見据えながら、俺はそれを放つ。

瞬間、砲弾を撃つような轟音とガラスが砕けるような甲高い音が耳朶を打った。

こちらの上になったまま、動こうとしない將軍様。

その鳩尾には俺の膝が突き刺さり、ダイヤモンドボディに蜘蛛の巣状な亀裂を入れている。

「貴様……このような手を……」

「不破圓明流奥義、神威^{かむい}。イチかバチかの博打は俺の勝ちツスよ」

「グオオオアアアアッ!」

腹部を押さえて苦しみ始めた將軍様から距離を取った俺は、一度深い息をついた。

不破圓明流奥義、神威。

修羅の門という漫画に出て来る技で、甘めの巴投げをエサにして相手が潰しにきたところを両手と片足を拘束。

相手の腹に当たった膝から三トンもの衝撃を与える寸打を放つ事で、内臓を破壊する殺人技だ。

まあ、俺がやったのは正式なものではなく、シメの膝を寸打から寸勁と浸透勁に変えたものだ。

さらりと説明したが、膝から発勁を撃つ時点で超が付くほどの高等技術。

よくもまあぶっつけ本番で、將軍様に掛けられたものである。

もう一度やれと言われても絶対無理だ。

放っておくとぶっ倒れちまいそんな身体を支えながら將軍様に目を向けると、苦しみ藻掻く將軍様の身体がサファイア、ルビー、エメラルドと次々と変化していき、最後には元の銀の身体に変化した。

どうやら、上手く硬度調節機能を破壊することができたらしい。

ならば、やる事は一つ。

指一本動かすだけでビリビリ痛む身体に鞭打って、俺は將軍様へと突撃する。

さっきの神威で身体は限界を超えた。

この技の後は鼻をほじる力も残らないだろう。だからこそ、この一手はなんとしても決める。

間合いを詰めた俺は、未だに膝立ちになっている將軍様の顔に左右の回し蹴りを連続で叩き込み、宙に蹴り上げる。

そして、大きく浮き上がった將軍様の身体を空中でカナディアンバックブリーカーに捕らえ、コーナーポストに着地。

そのままコーナーポストを踏み台に天井近くまで跳躍した俺は、錐揉みに回転しながら將軍様を叩き付けんと、頭からマットにむけて落下する。

これがアストロとの対戦で習得した『D・D・D』ダイビング・デス・ドライブ

九所封じや断頭台を除いて、俺が使える投げの中で最も威力のある技だ。

硬度調節機能を失った状態で、これを食らえば將軍様でもただでは済まないはずだ。

「私の硬度調節機能を破壊するとは……：：：慎よ、よくぞここまで成長した。貴様の力への執念と克己心こつきしんを素直に賞賛しよう」

地面まで半分近くまで落下した時、唐突に將軍様が語りだした。

「だからこそ、見せておきたい。貴様がいる場所よりも更なる高みを、貴様が目指すべき先を……！」

熱が入り始めた語りに、俺は將軍様を捕らえている手を強めた。

硬度調節機能を破壊した以上、スネークボディは無いはず。

原作漫画を見たのは十五年以上前になるので、こんな細かい設定なんて自信はないが、技を仕掛けたからにはそれを信じるしかない。

地上まであと3分の1。

不安を掻き消す為に錐揉み回転きりもの勢いを上げた俺の耳に、將軍様の静かに呟く声が聞こえた。

「順逆自在じゆんぎやくざいの術」と。

次の瞬間、視界がブレたかと思ったら俺は、誰かに背骨を極められ、仰向けあおもむの状態あおもむで地面に向けて落下していたのだ。

この状況には覚えがある。

アストロとの対戦で『D・D・D』を掛けられた時と全く同じだ。

將軍様が使った『順逆自在の術』とは、キン肉マンに登場した超人の一人、ザ・ニンジャが使った技の攻守をそっくりそのまま入れ替える妙技だというのか!?

「自分が何をされたのか、わかったようだな」

「こんな無茶苦茶な技、理不尽だ……」

「そうだ、無茶苦茶で理不尽だ。だが、貴様も知つていよう。この無限の闘争で上を目指せば、立ちほだかるのは雲霞うんかのごとき理不尽の権化だということだ」

諭すように紡がれる將軍様の言葉に、俺は言葉を詰まらせる。

その通りだ。

無限の闘争のランクを上げていけば、待ち構えるのは、神オロチに鬼巫女、ブロリーやラールグースといった、物理法則すらもねじ曲げる狂気の化け物達なのだ。

この程度の理不尽で根を上げていては、そんな奴等の前に立つなど到底不可能だ。

「理解したか。ならば、師である私が成すべきは、その身に焼き付けることだ！ 理不尽の恐怖を！ 無茶苦茶な力の痛みを!! いつの日か貴様がそれを喰らい、飲み込み、踏破できるように!!」

気炎を吐くと共に、將軍様はバックブリーカーに捕らえていた俺の身体を地面に向けて投げ落とした。

回転しながら迫り来る地上を捉えていた視界がグルリと動き、今度は高速で流れゆく謁見の間の壁面を映す。

随分と無茶な扱いを受けているようだが、俺にはもう指一本動かす力も残っていない。

追いついてきた將軍様が、互いの膝を合わせるように足をフックしてこちらに全体重を掛けた事によって、落下スピードが更に加速する。

小さく視界を巡らせると、こちらを見上げて顔を青くするリアス姉達が見えた。

泣いているミリキヤスや美朱、朱乃姉の姿には心が痛む。

……すまん、みんな。

やっぱり勝てなかったわ。

「貴様が超えるべき力をその身に刻め！ 阿修羅飯綱あしゅらいずな落おとしいいっ

!!」

將軍様の怒号と頭部を襲う衝撃を最後に、俺の意識はブツリとス

イツチを切るように闇に落ちた。



どうも、負け犬の姫島慎です。

公開処刑と同義と言うべき將軍様との真剣勝負は、なんとか生き残る事ができた。

正直、ここで一回は死ぬものだどと覚悟していたのだが、自身の頑丈さには我ながらビックリである。

俺が目覚めた時には対戦から30分ほどが経過しており、一行は控え室に戻ってきていた。

目が覚めて最初に目に飛び込んできた鼻水まで出たアーシア先輩の泣き顔のどアップに、内心引いてしまったのは秘密である。

先輩、懸命に治療してくれたのにこんな酷い感想を浮かべてしまい、本当に申し訳ない。

さて、本題であるイツセー先輩の行方だが、結論から言えば先輩はゴールデンキャツスルには居なかったらしい。

約二話分かけて、俺とサイラオーグの兄貴が半殺しの目にあつたのはマルつと無駄だったようだ。

なんでも、怠け癖なまの付いた体と心を鍛え直そうと、ゴールデンキャツスル版『精神と時の部屋』というべき部屋で將軍様とマンツーマンの修行を行ったところ、イツセー先輩は二日で挫折。

本人から脱退を申し出た為、將軍様はそれを承諾してゴールデンキャツスルから放逐ほうちくし、後の行方は知らないとの事。

この事に、サイラオーグの兄貴はイツセー先輩に対して情けないと嘆息たんそくし、リアス姉は將軍様の対応が無責任だと憤慨ふんがいしていたが、俺はなんとも思わなかった。

イツセー先輩に関しては、当たり前としか言いようがない。

悪魔になったとはいえ、彼は運動部にも所属していなかった普通の高校生である。

いきなり拉致つて超人も裸足で逃げ出すようなシゴキを強しければ、

逃げ出しもするだろう。

合宿の時に耐えれたのは、レーティングゲームという目標もあり、後輩である俺の目もあった。

なにより、受けていたのが、ゴールデンキヤッスルではお客様コースと言うべき、軽いメニユーだったのが大きかったのだ。

あれで死にかけの状態だったのに、その5倍のキツさである本式メニユーに耐えられるワケがない。

將軍様の対応についても、間違つてるとは思わない。

彼の役目は弟子が強くなる事を助ける事であり、それを自ら放棄したイツセー先輩の世話を焼く理由はないのだ。

今回拉致を敢行かんこうしたのだから、本人の気質もあるだろうが、その役目の一環だと言えるだろう。

まあ、そもそもの原因は門下になったクセにサボり倒していたイツセー先輩にある。

紹介した俺だって、合宿の時にサボらないよう釘は刺したし、いつでも利用できるように無限の闘争のユーザー登録だつてしてやったのだ。

レーティングゲームが終わって燃え尽きたのかもしれないが、放置するのは拙ますいだろう。

まあ、何の益にもならない考察は置いておいて、本格的にヤバい事態になってしまった。

現在、イツセー先輩は無限の闘争の中で遭難してしまっている。

この理不尽、ネタ、悪ノリ、厨二病をまとめて非常識で煮込んだようなカオス空間では、死亡防止機能が付いているとはいえ、精神的な意味でイツセー先輩の命は風前の灯火だろう。

ドライグにしても、無限の闘争に潜む理不尽な化け物の前では、水ポケモンの群れを前にしたヒトカゲのように心許ない。

一刻も早く救助しなければ、『おっぱい』にしか反応しない廃人になっけていてもおかしくないのだ。

アーシア先輩と自前の治癒の重ね掛けで調子を取り戻した俺は、シャワーで全身にこびり付いた血糊を落とした後、塔城と入れ替わり

で制御コンソールの前に座る。

俺の敗戦がショックだったのか、俺から離れようとしないうミリキヤスの頭を撫でながら管理者権限を精査していくと、探していた項目が画面に浮かび上がる。

俺が求めていたのは、『カメラ制御機能』と『ユーザーの位置情報機能』だ。

無限の闘争では、ユーザーが自身の戦闘を確認できるように、各所にカメラが仕掛けられている。

今まではあまり使った事がなかったのだが、こいつを上手く利用すれば監視カメラのように、イツセー先輩の足取りを追えるかもしれないと思ったのだ。

もう一つは、無限の闘争内にいるユーザーの位置を、コンソールから確認する機能だ。

前回のサバイバルツアーモードに参加した際にあるんじゃないかと睨んでいたが、案の定ユーザーサポートの項目にあった。

初っ端からこれを使えばよかったのだが、あの時は將軍様に連れ去られたという先入観があった為に思い付かなかったのだ。

やはり人間、冷静になることが大切である。

取り敢えず、なんか雰囲気の暗い皆を呼んで見つけた二つの機能を動かしてみる。

さきに動いたのがカメラだったので、ゴールデンキャッスルから控え室までの画像を八分割にして画面に映す。

あとはイツセー先輩が連れ去られたと思われる時間に遡って再生すればOK。

「こんなものがあるのなら、最初から使えばよかったじゃない」

位置情報システムが立ち上がる間、カメラを確認していると朱乃姉からツッコミが入った。

「すまん。俺も管理者権限を把握しきってなかったから、思い付かんかった」

朱乃がまだ鼻声なのと心配をかけた事を合わせて素直に謝罪しておく。

こちらとしては、將軍様に負けるのはある意味予定通りなので、泣いたりへこまれたりしても困るのだが、負け方が悪かったのだろうか？

「自分の弟があれだけボロボロにされたら、ショックを受けるのは当たり前だよ」

「……あー、その辺は『武の道は惨く、そして厳しいモノと知れ』という事でひとつ。」

「……何故か雷撃と滅びの魔力、紫電のクナイが飛んできた。」

咄嗟にブロッキングで弾いたが、危うくコンソールに傷が付くところだった。

「どうやら女性に男の浪漫を察しろというのは、難しいようだ。」

「あ、誰か人影が映ってますよ」

こちらでアホな事をしてしていると、コンソールの横に置いた鈍色の亀甲羅からギヤスパークが声を上げた。

モニターを確認すると、トボトボと歩くその人影は、制服を着たイツセー先輩だった。

「おっしや！ やつと手掛かりが来た」

指を鳴らしながら画像を進めると、控え室のすぐ前まで来たイツセー先輩はある人物に出会い、足を止めた。

「黒い棺を担いだシスター、ですか？」

アーシア先輩の言うとおり、その人物は美しい銀髪に黒い法衣を身につけた修道女だった。

イツセー先輩の前を横切る修道女。

先輩の目は修道女の一点、大きくスリットが入って谷間が丸見えになった胸元に釘付けになっている。

「これはヒドい」

「……視姦は犯罪です。エロス先輩は死刑にすべきかと」

美朱と塔城、一年生女性コンビから厳しい声が飛んでいるが、あのだらしない顔では擁護もできない。

いやな予感を感じながら見ていると、案の定、修道女の後を追ってひよこひよここと控え室から離れていくイツセー先輩。

なんとか足取りを追おうとしたが、途中でカメラの空白地帯に入れた為に追跡は断念せざるを得なかった。

「兄様、彼は助けなくてもいいんじゃないですか？」

控え室に流れるなんとも白けた空気の中、ミリキヤスの言葉に、リアス姉とアーシア先輩を除く女性陣が頷く。

ミリキヤスよ、残念ながらそうはいかんだ。

女性陣の厳しい表情を敢えて無視した俺は、立ち上がってきた位置情報システムを表示させる。

画面に映る地図には、俺とサイラオーグの兄貴が固まって表示されている地点と、そこから少し離れた北側にイツセー先輩の名前の付いた点が表示されている。

幸い、馬鹿みたいに離れてはいないらしい。

大体の位置は掴めたので、引き続き塔城に安全装置とマップナビを任せて、俺達は再び救助の旅に出ることにした。

なお、女性陣のやる気が最底辺にまで落ちており、説得と激励にはひどく苦勞した事を追記しておく。

再び無限の闘争の世界に降りたった俺達は、先ほどの田舎道とは違った、古いながらも舗装された道路の上を歩いていた。

ときより目に付く標識に『くマイル』と書いてある事から、この辺はアメリカを模して造られたエリアなのだろう。

『あと一キロほど先の街に、エロ先輩はいるようです』

「了解。他にわかる事は？」

『……いえ、このソフトは位置確認だけを表示するようですから』

「OK、その辺はこっちで調査する。塔城はイツセー先輩とこっちの面子の反応を見失わないようにしてくれ」

『……はい』

耳につけたイヤホン型通信機から塔城の声に、指示を返して歩を進める。

それから10分ほど歩くと、荒地地ばかりの風景の後ろから大きなビル群の影が見えてきた。

どうやら思った以上にデカイ街らしい。

イツセー先輩を捜す妨げにならないといいが。

「ねえ、あれって街の看板じゃないかしら？」

「リーア姉、なんて書いてあるの？」

「えーと……ラクーンシティへようこそ、ですって」

瞬間、俺と美朱の目が死に絶えた。

どうやら、次回もまた地獄へ付き合わなければならぬらしい。

閑話 『兵藤一誠救出作戦（急）』

みなさん、お元気ですか？

現在、リアルでゾンビムービーの世界を体験している、姫島慎です。さて、MUGENを知らない諸兄は『バイオハザードのキャラでドット絵の格ゲー出てるのなんて、ジルだけだろ！』などと鼻で笑っているかも知れないが、それは大きな間違いだ。

MUGENのクリエイター諸氏は、貪欲かつ創作意欲に溢れている者が多い。

格ゲーはもちろん、ベルトアクションゲームや世界一有名な赤い配管工に代表されるアクションゲーム、果てはシューティングやシミュレーション、RPGのキャラまでも格ゲーキャラにする猛者がいるのだ。

MVC2のジルから抽出したデータからゾンビやゾンビ犬、タイラントを作成するのはもちろん、手書きのハンターや追跡者などを創る輩が現れてもそれは自然の流れと言えよう。

何が言いたいのかと言うと、俺達が入ったラクーンシティは原作さながらの再現度ということだ。

辺りを漂う鉄錆に似た乾いた血と腐臭、そして何かが燃える焦げ臭さ。

高層ビルやアメリカさながらの大きな邸宅が立ち並ぶメインストリートには、バリケード代わりに使われたであろう、道を塞ぐように停車されたパトカーや事故車両が放置され、辺りにまともな人影はない。

あるのは、生者の生肉を狙う動く半ば腐り落ちた生きる屍と、人為的に生み出された異形の怪物だけ。

MUGENの闘争さん、気合入りすぎである。

こんなところまで頑張って仕事しないでいいと思います。

言うまでもないと思うが、今だって襲われている最中で、朱乃姉や美朱、サイラオーグの兄貴が頑張って進路を確保してくれている。

かく言う俺はというと、

「ビヤツハー!! 汚物は粉碎だあああ!!」

將軍様との死闘から生還できた喜びからハイテンションで拳を振るい、衝撃波で並みいるゾンビ共を爆砕していたりする。

俺の放つ衝撃波は大砲レベルの威力があるので、一発放てばゾンビの人垣に大穴が開き、建物なんかもガンガンブツ潰れていく。

うん。なんと言うか、スツゲエ気持ちいい。

過去の俺ならば、あの生き腐れの中に飛び込んで、血と腐汁に塗れながら暴れていたはずだ。

しかし、今は違う。

拳も服も汚れないし、気持ち悪い肉も臭い汁も触らなくていいのだ。

ヤムチャさんは本当に良い技を教えてください。

もう彼には足を向けて眠れないな。

「ふはははははははははっ! 飛び道具サイコー!!」

「オロロロロロ……」

俺の隣で酸っぱいモノをぶちまけてるのは、リアス姉である。

どうも、モツや肉片が乱れ飛ぶ光景に耐えられなかったようだ。

まあ、悪魔といっても必ずしもグロ耐性があるわけではない、ということだろう。

いや、生粋のお嬢様であるリアス姉にそんなものを求めるのが間違ってるんだが。

しかし、残姉の次はゲロインか。

着々とマイナス方向に属性を盛もっていつてるな。

まあ、色々と今さらなので見る目が変わることはないが。

ん、俺は大丈夫なのかって?

この程度で参ってたら、モーコンキャラの相手なんてできませんぜ、ダンナ。

因みにミリキヤスとアーシア先輩はギヤスパアのシエルターに避難させている。

こんなゴア表現100%の街にいるのは、心の汚れた大人で十分である。

「塔城、イツセー先輩の反応はどこにある？」

『……ウツプ……街の中央にある一番大きなビルです』

「調子悪そうだな、大丈夫か？」

『……誰が原因だと思ってるんですか。ご飯時にあんな光景を見せるなんて、悪意しか感じません』

「ブラックホール級の食欲を持つ塔城でも、戻す時があるんだな」

ゲロインならぬゲロ猫か、新しいな。

『……情報支援を打ち切ります』

「正直すまんかった」

塔城が本気で怒っているようなので、素直に頭を下げておいた。

冗談はさておき、リアス姉の体調がすぐれないのは確かだ。

バイオハザードに関してはステージ設定なので、ウイルス感染は無
いとは思うが万が一という事もある。

「ギヤスパー、そのシエルターに集団感染対策の除染機能ってあるか
？」

「ちよつと待つて。………あるよ。使用者への滅菌処理機能付き
だって」

「そいつは重畳^{ちゅうじょう}。じゃあ、リアス姉を収容してくれ。滅菌処理を入念
にしてな」

「ウツ……！ 慎、私はまだ大丈夫よ」

住宅の角に手を置いて戻していたリアス姉が、少し唖れた声で抗議
を上げる。

気丈にこちらを向いているが、蒼白な顔は冷や汗塗れな上に戻した
際に出た涙と涎^{よだれ}で酷い有様だ。

「いや、全然大丈夫じゃねえから。街には入る前にウイルスの話はし
たよな？ 体調崩して感染したら動く死体の仲間入りだぞ。もしそ
うなったら、小父さんとサーゼクス兄になんて言えはいんだよ」

「でも、また貴方に頼ることになってしまいわ。……私は姉なのに」
そういうことは、幼児退行を治してから言ってください。

「それこそ気にする事じゃないさ。ここは俺の能力が繋いだ世界だか
ら、俺が矢面に立つのが一番効率的なんだよ。ほら、よく言うだろ『餅

は餅屋』つてき。リアス姉は自分の為べき事をやればいいんだよ」

「私のすべき事？」

「眷属の長として、イツセー先輩が戻ってきた時に暖かく迎えてやることさ」

俺の言葉にリアス姉は虚をつかれたように目を丸くする。

「……それだけでいいの？」

「ああ。先輩が安心して帰れる場所になる、王であるリアス姉以外に誰も出来ない重要な仕事だろ」

ポン、と頭に手を置いてやると、乾きかけていたエメラルドグリーン
の瞳がまた涙に濡れる。

ん、対応を間違えたかな。

「私、迷ってたの。次のグレモリー家当主を辞退しようかって」

「リアス姉……」

「だって……次期当主って言われてるのに、慎や美朱に手伝ってもらわなきゃ駒王町の管理もできない。それに聖剣事件の時も、何も出来ずに言われるままに冥界に逃げ帰るしかなかった。春の墮天使の件もそう。初めてのレーティングゲームもライザーに負けた。こんな私が当主になったらグレモリー領がおかしくなっちゃう」

涙と共に、心のため込んでいたものを吐き出し始めるリアス姉。

思い返せば、あの時の俺の態度は日本神話の構成員としてはともかく、グレモリー家の弟分では配慮が足りなすぎたのではないか。

俺としては危険な目にあってほしくない一心でみんなを冥界に送った。

しかし、それが管理者としてのリアス姉のプライドを傷つけたとしたら……

祐斗兄にしてもそうだ。

彼が聖剣に並々ならぬ執着を持っていたのはわかってた。

しかし、俺は公の都合であっさりとそれを切り捨てた。

あの時の対応は間違ってるとは思わないが、もう少しやりようがあったのではないだろうか。

なんにしても、この件が終わったら祐斗兄には謝らないとならんだ

ろう。

「ごめん、リアス姉。聖剣事件の時はっ、配慮がっ！ 足りなかった、ダラアッ!!」

顔を覆って泣くリアス姉に、見えないのはわかっていても俺は頭を下げた。

うん、謝罪のわりに声がおかしいって？

いや、ふざけてるわけじゃないぞ。こうしてる間にも黒光りするGみたいに四方から集まってくるんだよ、あの生き腐れ共。

片っ端から吹っ飛ばさないと、シエルター組はともかくリアス姉が危ないからな。

「慎?」

「リアス姉がッ！ そこまでッ！ 気にしてるとは…リヤアッ！ 気づかなかった。当主のことはッ！ わからないけどッ！ 自分が笑えなくなるとッ！ 思うならッ！ 辞めてもいいんじゃないかッ！

俺達が大事なのは、『リアス・グレモリー』じゃなくてッ！ リアス姉だからな。……しつこいぞ、くたばりぞこない共ッ！ テュホンレイジ（偽）!!」

「……慎」

「なんだ?」

「移動して話したほうがいいかしら?」

「そうしてくれると助かる」

空気が読める子は大好きです。

大暴れしたお陰で一時的に周辺のゾンビ共がいなくなったので、進路を確保してくれていた三人と合流した。

さつき胸の内をぶちまけたからか、リアス姉もシエルター入りに同意してくれたので、ギヤスパーに声をかけたのだが、どうも様子がおかしい。

「ギヤスパー。どうしたんだ、ギヤスパー」

シエルターの頭頂部を軽く叩きながら呼びかけると、暫くしてくぐもったギヤスパーの声が返ってきた。

「慎君、どうしよう!?! シエルターが電力不足で稼働を停止するって

アナウンスが流れてる！」

「はあ?」

寝耳に水な事態に驚いていると、シエルターから唸るような音が聞こえ、子供の拳程度の大きさの入り口からミリキヤス、アーシア先輩、ギヤスパアの順に飛び出してきた。

唾然あぜんとする一同を余所に、件のシエルターは役目を終えたと言わんばかりに自らの体を縮めていき、ついにはポケットに入るサイズにまで小さくなってしまうた。

「……どうなってるの、これ」

「僕にもなにがなんだか……」

地面に転がるシエルターを見ながら呟いた美朱に、ギヤスパアは白旗を上げる。

「これの取り扱い説明書はないのか?」

「は、はい。これですう」

人見知りが発動したのか、ギヤスパアがおずおずと差し出した紙束を受け取るサイラオグの兄貴。

「ふむ。これが原因ではないか?」

パラパラと走り読みしていた兄貴は、とあるページで手を止めて、みんなに見えるように説明書を出してきた。

一同が覗きこんだページには『購入時には最低限の電力しか備蓄されていません。使用前には必ず、発動機で原子力単三電池の発電を開始してください』との注意書きがあった。

原子力単三電池って魔界都市製かよ、このシエルター!

「少年、この発動機でというのに心当たりは?」

「えっと……、もらった時に大きな機械が付いてたんで、それじゃないかと」

「その機械はどこにいったの? シエルターの中?」

「重くて持てなかったから、控え室に置いてきちゃいました。……ご、ごめんなさいいいい!」

リアス姉の追求に、頭を抱えてうずくまるギヤスパア。

その姿に思わずため息が洩れる。

充電不足とは間抜けな理由だが、こちららも、アテにしながら『ギヤスパーのものだから』と詳細を確認しなかったのだから、迂闊うかつなのはお互い様だ。

「ともかく、こつからは全員歩きつて事だね。アーシア姉とミリ君は、みんなからはぐれないように気をつけて」

「は、はい」

「わかりました」

美朱に注意を受けて戸惑いぎみのアーシア先輩と、元気に答えを返すミリキヤス。

『……聞こえますか、皆さん。小猫です』

塔城から通信が入ったのは、街の中央のビルに移動を初めてすぐだった。

「どうしたの、小猫？」

『……あの、今コンソールに妙な文字が浮かんでるんですけど、そこらは大丈夫ですか？』

「妙な文字？」

「こつちはギヤスパーのシエルターが使用不能になった事以外は問題ない。コンソールには何て浮かんでる？」

首を傾かげるリアス姉を余所に問い合わせると、塔城はたどたどしくその文字を読んでいく。

『……登録者増加及びシステムリニューアルを記念し、サービスクエスト実施中。参加メンバーに脱落者なくツアーをクリアすると、参加者全員にツアーガシャ十連1回無料プレゼント、だそうです』

その通信を聞いた俺の顔は、さぞかし微妙なものだったろう。

え、なにこれ？

なんで、ウチの無限の闘争がソシャゲーみたいになってんの？

「えーと、塔城？」

『……なんですか？』

「登録者増加って書いてるけど、誰が増えたんだ？」

『……リストでは、リアス部長に朱乃先輩。アーシア先輩とミリキヤス君ですね』

今回の参加者じゃねーか！俺はした覚えはないぞ、なに勝手に登録してんだ!？」

「すまん。塔城、一度そっちに戻る」

『……無理みたいです。クエスト発動と同時に、ログアウト以外で控え室に戻る事は出来なくなつたと書いてますから』

「なんですとっ!？」

『……コンソールで見れる地図でも道が分断されているので、本当に帰れないみたいです』

「なんてこつた……」

しまった、完全に油断してた。

設定は変わっても、これが前回猛威を振るつた無限の闘争ツアーである事には変わりはなかつたんだ。

「塔城、今回のツアーの目的はどうなってる?」

『……爆撃される前にラクーンシティから脱出すること、だそうです』
「爆撃ですって!？」

『その街は生物兵器として開発されたウイルスが漏洩ろうえいしたことにより、大規模な生物災害が発生しているという設定なので、感染拡大を防ぐ為に核ミサイルで消し飛ばすそうです』

リアス姉を筆頭に動揺を隠せない皆に、冷静に説明を行う塔城。

ヤツパ、最後はゾンビ映画恒例の爆発オチか。

そんなところまで原作再現せんでもいいだろうに。

「そっちで爆撃までの時間とかわかるか?」

『コンソールには、20時間を示すタイマーが出てます』

それが今回のカウントダウンだとすれば、残り時間は1日を切つているという事にはなる。

その間にイツセー先輩を見つけ出して、脱出しなくてはならない。ノンビリしてるわけにはいかなかつたな。

「状況は理解した。そっちは引き続き情報支援を頼む」

『……わかりました』

塔城からの通信が切れるのを耳にした俺は、小さく息を吐いた。

ここからが無限の闘争ツアーの本番らしい。

制限時間があるのは痛い、準備等は前回とは比べものにならない程に充実している。

後は人員だが、こうなると非戦闘員は強制ログアウトすべきだろう。

「ねえねえ、慎兄」

誰を戻そうか頭を捻っていると、美朱が声を掛けてきた。

「なんだ」

「さっき小猫が言ってたガシャってなに？」

「ああ。このツアーモードは成績によつて、アイテムを貰つたり無限の闘争^{MUGEN}にいる闘士を仲間にできたりするんだよ。まあ、いつの間にかそのシステムがガシャになってて、俺も驚いてるんだが」

「へー。それでどんなのが出るの？」

「アイテムは装飾品か消耗品、武器は出なかったはずだ。闘士はCランクまでをランダムで。Bから上は直接勝たないと仲間にできんらしい」

「そうなんだ。それで慎兄はどんなの引いたの？」

答える度に質問をぶつけてくる美朱。

妙に食い付きがいいな、と視線を巡らせると、奴は妙にキラキラした目でこちらを見ている。

……なんかイヤな予感がするぞ。

「俺が当てたのは、お前等にやった装飾品とサイラオーグの兄貴に渡した薬。他の奴が引き当てたのは、ゴンつていうテイラノサウルスの子供に白湯つてパンダ。あとオトモアイルーか」

「スゴイ！ アイルーもいるんだ!!」

俺の話に飛び上がって喜ぶ美朱。

おいおい、なんかテンションがヤバくないか。

「滾^{たぎ}ってきた、滾^{たぎ}ってきましたよ!! この美朱ちゃん、ハマつて課金中毒になるのが怖くてソシャゲーには手を出さないと心に決めてました、このガシャは別!! なんと少しでも忍犬を、赤目^{あかめ}様のような忍犬を手に入れてみせますよ!!」

ゴーストタウンのど真ん中で、犬欲しさに吼える愚妹。

そのあんまりな姿に思わず目頭を押さえてしまう。

しかし、何故俺の周りにいる女性はこうなのだろうか。

というか、赤目つてまたレトロだな。『銀牙』なんて古いマンガ、憶えてる奴なんて少ないだろうに。

「美朱、この十連は無しだぞ。非戦闘員はこれから、強制ログアウトで引き上げてもらうつもりだからな」

「このチャンスを捨てるなんて、とんでもない!？」

「なにドラクエで、重要アイテムを売ろうとした時みたいなセリフ吐いてんだ。ここからはいつ闘士が襲ってくるかもわからんルナティックモードに入るみたいだからな。自分の身を守れない奴は連れて行けん」

「えー。でも、誰を帰らせるのさ」

ブーたれながらも返してきた美朱の言葉に、俺は候補者に目をむける。

まずはアーシア先輩……

「私は絶対についていきますから!!」

……わかったんで、血糊がベツタリな包丁を素振りするのはやめましょう。

先輩が浮かべるステキすぎる笑みのせいで、傍らに倒れてる頭を割られた生き腐れについてツツコミが入れられないんだが。

え、シメサバ丸さんがやってくれた？

シメサバ丸ってその包丁のこと？

あー。そういえば美神令子いたな、MUGENに。

しかし、シメサバ丸って持ち主を乗っ取って通り魔に変える妖刀だったはず。

どこで手に入れたの、そんな物騒なモノ。

なに、ポイント交換で貰った？

おかしいな、あのリストに武器なんて無かったはずなんだが。

調理道具で登録されてたの？

たしかに見た目は包丁だけど、いいのか、それ……。

なあ、先輩。その包丁持った時に変な感覚とか無かったか？

妖刀さんが話しかけてきたけど、説得したら大人しくなってくれたって？

マジか……、聖女パねえ。

……次、ミリキヤス。

「兄様！ 僕の冒険は終わってませんよ！」

なんか、サイラオーグの兄貴相手に打ち込み始めてるんですけど、あの子。

……あれ？

ミリキヤス君、その手足に纏わせてるのって、ひよつとして滅びの魔力かな？

「はい！ 兄様が以前教えてくれた内氣功を僕なりにアレンジしてみました！」

理屈を軽く教えただけに魔力で応用とか。

やだ！ この子、天才……！！

リーチのみじかさや経験の少なさに不安が残るけど、これなら自衛はできるかな。

「いい打ち込みだ！ 基礎がしっかりできているな。これなら、極限流に入門すればもつと強くなれるぞ」

そこ、ドサクサ紛れに勧誘しない!!

……さて、最後はギヤスパーか。

「こんな居心地のいい場所を追い出されるなんて、オレは御免ごめんだぜ。こうまで死と終末の匂いが濃い街なんてそうは無いからな」

高めのボーイソプラノに視線を巡らせると、そこには薄汚れたトラッシュボックスの上に腰掛けるギヤスパーがいた。

ヒラヒラとこちらに手を振るその姿に、俺は視線が細まるのを感じた。

たしかに見た目はギヤスパーだが、さっきの口調といい玉座の上のようにトラッシュボックスで足を組む姿から放たれる覇気といい、ヘタレで引き籠もりだった彼とはまったくの別物だ。

「ふむ、どなたかな？」

「ギヤスパー・ブラディーだよ、ただし裏のな。宿主の小僧が現状に耐

えられなくて目を回してるんでな、ちよいと入れ替わってやったのさ」

ナルホド、わからん。

「だれー！ ギャーに千年アイテム与えたの！ 女装シヨタの裏人格とか、あんまり需要無いよー！」

「美朱、ギヤスパー君が変わったのは、その千年アイテムが原因なの？」

「多分そうだと思うよ、朱姉。千年アイテムは古代エジプトで造られたもので、その中にフアラオをはじめとした有能な当時の権力者の魂が封じられているの。それで、魂はアイテムの封印を解いた者に移ってもう一つの人格として住み着いちゃうんだ」

「それがギヤスパー君が変貌した原因……」

「いやいや。オレはその千年なんかにかに封じられてたワケじゃないよー。というか、そんなアイテム初耳だし。俺はこいつが生まれた時から一緒にいるんだよ」

美朱と朱乃姉達の真に迫った的外れな意見に、すかさずツツコミを入れる裏ギヤスパー。

なかなかノリのいい奴である。

しかし、産まれた時からの付き合ひ、か。

「お前さん、もしかしてバロールか？」

「察しいいねえ。さすがは『第3の無限』なんて厄介なもんを背負ってるだけはあるわ」

おどけるように両手を広げるバロールに、俺は嘆息する。

まさか、聖剣事件で立てた予想が当たっていたとはな。

「くたばったとはいえ、フォモール族屈指の魔神だったあんただ。なんで知ってるなんて野暮な事は聞かない。ただ、『第三の無限』は機密事項なんぞな。濫りに口に出さないでくれるか？」

「嫌と言ったら？」

「正直困る。機密と言ってもこっちの都合だからな。強制的に従わせるってのは、また違うだろ」

頭を掻いて言葉を選ぶ俺を、おもしろいモノを見るように笑みを浮

かべるバロール。

奴の瞳が紅から血を固めたような紅黒い色に変化すると同時に、全身から力が抜ける感覚が襲ってきた。

ツ！ まさか、ギヤスパーとは視線の効果が変わってるとは……!!? 時間停止とタカを括って無防備だった自分の迂闊さに内心歯がみする。

『悪しき目のバロール』の異名に表される呪詛の視線、一度死んだくらいで衰えるものじゃないってことか。

萎えそうになる足に喝を入れて、俺は呼気と共に氣を体内に循環させる。

経絡けいらくを巡り内功に昇華した氣が体を満たすと、全身に活力が戻ってくる。

視線を合わせた瞬間に吸い取られるような感じがあったのでもしやと思ったが、やはり強力なドレイン系の呪いだっただか。

「ストップ！ 止めだ、止め」

吸われる量を遙はるかに超える氣を纏った俺を見て、ホールドアップで降参の意を示すバロール。

「で、どういうつもりだ？」

「人の夢に勝手に出てきた、無限様の力を見てやろうと思ったんだよ。しかし、今のドレインを平然と破るとはなあ。このナリじや逆立ちしたって勝てねえな、こりゃ」

ぼやきながら、ボリボリと頭を搔くバロール。

「どうやらこいつも夢見で俺の事を知ったクチらしい。」

「貴方、バロールと言ったわね。慎を無限と呼んでるけど、どういう意味なのかしら？」

剣呑なやり取りが終わったのを見計らったりアス姉が、厳しい表情でバロールに問いを投げかける。

対するバロールは、当たり前前の事を聞かれたかのように首をかしげる。

「そのままの意味さ。そのアンちゃんはオフィスやグレートレットに次いで、三つ目の無限の力を宿す個体なんだよ。というか、お前

「さん言っていないのか？」

「最初に機密だつて言っただろうが。なにバラしてんだ、このアホ」
「慎、どういう事なの？」

「機密事項だ。忘れてくれ」

有無も言わせぬ口調でバツサリと斬り捨てた俺の態度にリアス姉は不満げな表情を浮かべるが、それ以上何も言わなかった。

「それで、バロール。お前さん、どうするつもりだ？」

「さっきの試しの借りもあるしこの街も気に入った。ギヤスパーク坊やが目覚めるまで、お前達に手を貸してやるよ」

トラツシユボックスから降りてニカツと少年らしい笑みを浮かべるバロールに、俺は胡乱うろんげな視線を向ける。

「お前さんがメインで出て、ギヤスパークに影響はないんだろうな？」

「無問題。言っただろ、俺とこいつは産まれた時から一緒だつて」

「……ならいい。お前さんはミリキヤスとアールシア先輩の護衛に回ってくれ」

「随分と簡単に信用するじゃないか。オレがこの嬢ちゃん達を、さっきのドレインで喰くっちゃうとは思わないのか？」

「思わんね。もしお前さんがそんなゲスなら、態々わざわざこつちに顔を見せずにギヤスパークのフリしてるだろ。それに——」

軽く手を振るうと、退魔の力を存分に含んだ純白の稲妻が、バロールの数センチ横に轟音と共に着弾する。

大南流合気柔術秘奥義『狂雷迅撃掌』。

ギース・ハワードが意図して体得したのか、あるいは周防辰巳から学んだ大南流合気柔術が導いた偶然か。

自身の氣を外氣功によって拡散、操作する事によって破魔の雷光を生み出すサンダーブレイクは、この技と瓜二つだ。

無限の闘争の特性の一つに技を研けば研くほど、熟練度と共に技への造詣が深まって行くというのがある。

サンダーブレイクの熟練度が上がったことにより、こちらとの相性もあって技が本来の大南流奥義へと変化したのだろう。

その証拠に、今の俺なら技本来の退魔力に光力を上乘せして、他者

の体内に潜んだ悪霊だけを焼き尽くす事が可能だ。

「もし、そんな舐めた真似まねをしたら、その存在を滓も残さずに消滅させるだけだ」

「……信じられねえ。小源オドと大源マナをとんでもない純度で融合させて、身体に循環させてやがる。その年でどんな修業したら、そんな事ができんだよ」

「小源オドと大源マナ、内氣功と外氣功の事だな」

大仰に驚くバロールに疑問符を浮かべる周囲の為に、言葉を引き継いだサイラオーグの兄貴。

その視線を受けて、俺も口を開く。

「周囲から氣を取り込む外氣功の究極は、自然そして空間全ての支配にあり。そして、自身の内なる氣を操る内氣功の究極は、氣脈経絡そして髪の毛一本、細胞一つに至るまでを己がものとし、身体にある宇宙を完全に掌握する事にある」

「双方において極まった者を『真人』と呼び——」

「その者が生み出す力を『覇動』と称す、だったよな。俺はまだまだだけど、極限流総帥のリョウ師範はその域にいるんだっけ」

「ああ。師範は『真人』の域にその身を置き、『活殺合一』の理を悟らんと、日々修業に励んでおられる」

『活殺合一』

活人拳の中に殺人拳の理を宿す、活殺自在の拳。

対戦相手の生き死にも思うがままの、神の如き拳、か。

そんなとんでもない頂いただきを目指してる人なら、今俺がぶつかってる壁のヒントを持つてるかもな。

「兄貴、この件が終わったら、一度師範と会わせてもらえないか？」

「構わんが、なにか用があるのか？」

「打撃技でちよつと行き詰まってな。新しい刺激を受ければ、違ったアプローチも見えてくるかと思ってる」

「そういう事ならばいいだろう。今度道場に行った時に話は通しておこう」

「サンキュー、頼むよ」

話が脱線しまくったので元に戻そうとリアス姉達のほうを向くと、何故かみんな頭上にはてなマークが見えそうな表情で頭を抱えていた。

「どうした、みんな？」

「はい。二人がマニアックすぎて、なに言ってるのかほとんどわかりませーん」

みんなを代表して手を上げる美朱。

……氣功の奥義についての話が、マニアックの一言で片付けられてしまった。

女性には求道の浪漫はわからないんだなあ。



裏ギヤスパーあらためバロールの協力を得てから、俺達の進行速度は大幅に上がった。

というのも、バロールの『略奪の魔眼』（ドレイン・アイの事）がゾンビや生物兵器に靦面てきめんな効果を発揮したからだ。

なんでも、本来『略奪の魔眼』はアンデッドには効果が薄いのだが、あの生き腐れ共は死んだ身体をウイルスによって強制的に生かされているので、そのウイルスから活力を奪っているらしい。

塔城のナビに従い進む事、1時間ほど。

ミリキヤスやアーシア先輩の様子に疲れを見て取った俺達は、こちらで休憩する事にした。

「ふふ……私が手に入れた豪邸が日の目を見る時が来たようね。これを見れば、残虐手当てMAXな弟分も、私のことを浪費女なんて呼べないはずよ！」

「ねーよ」

豪邸が収納されたホイホイカプセルを掲げて大見得切ってるリアス姉を叩く。

誰が残虐手当てMAXやねん。

「痛いわね！ なにするのよ!?!」

「こんな障害物だらけの狭い通路に、どうやってそのバカでかい家出すつもりだよ」

「それは、私の滅びの魔力で邪魔なモノをチョチョイと……」

「アホか。サーゼクス兄ならともかく、リアス姉程度の魔力じゃ消してる途中でビルが倒壊してぺしゃんこになるのがオチだ。ここは俺のを使うからしまつとけ」

不満げに頬を膨らませる年の割に幼い姉貴分は置いといて、俺は肩に掛けたのは4次元リュックから茶色のホイポイカプセルを出した。

頭にあるスイッチを押して少し離れた場所に投げると、立ち上る煙の中から中程度のログハウスが姿を表す。

これが今回の宿として俺が購入した家だ。

オール電化の上にソーラーバッテリー式の自家発電装置付。

水道もホイポイカプセルを流用した100リットル貯水ポンベを3つ完備している優れ物だ。

「みんな、休憩だ。中で休んでくれ」

こちらの声に従ってゾロゾロと小屋に入って行く一行。

自分のカプセルハウスを使うと意気込んでいたリアス姉が先頭だったのは、ツツコまないでやろう。

念のためログハウスの周辺に認識障害の結界を張って中に入って空気清浄機を起動させていると、風呂に入ろうと盛り上がっている女子メンバーの声が聞こえた。

「ねえ、慎。貴方も一緒に入らない？」

イタズラ心満載といった表情で囁いてくるリアス姉に、これ見よがしに深い深い溜息をついてやる。

「シヨウジキナイワー」

感情を一切籠めずに棒読みしてやると、リアクションを期待していたであろう駄姉の顔が引きつる。

「あれ？ 朱姉ほどじゃないけどリーア姉もボンツ、キュツ、ボンツの凄い体だよ。ムラムラツてこない？」

「くるワケねーだろ。こっちは肥溜め嵌まって泣いたり、寝小便の罪をなすり付けようとしてるのを見て育ったんだぞ。劣情より先に心

配が沸くわ」

「私や朱姉も入るけど？」

「お前等に反応したら人としてダメだろ」

「アーシア姉は？」

「そういう対象として考えたことも無いから興味も沸かん」

「ギャー助？」

「あれは男だろーが。バカ言ってるんで、風呂入ってこい」

「ちえー、慎兄の恋愛感とか分かると思っただのにい」

プーと頬を膨らませて風呂場に向かう美朱を見送った俺は、二階に上がり窓から周囲を警戒する。

建てる時はいなかった生き腐れ共も、今では結構な数がロッジの周りを彷徨っている。

幸い、事前に張った認識障害の結界のお陰で、ロッジに向かってくる奴はいないが。

ウイルスも生物だ！ と、ダメ元で張ってみたがどうやらその発想はビンゴだったらしい。

このままいけば、しっかりとみんなを休ませられるかもしれない。小さく欠伸を漏らしつつ監視を続けていると、木製の階段を微かに軋ませながら男衆が上がってきた。

「なんだよ、下でゆっくりしてればいいのに」

「なんと言うか、湯浴みをしている女性と近くにいるのは落ち着かんなのでな」

「リアス姉様が一緒に入ろうって、下着姿で詰め寄ってくるので避難してきました」

「ギヤスパー坊やの身体じゃ妙な事をされかねんからな」

口々に理由を説明する男衆。

まあ、気持ちは解らんでもない。

「それでどうだ、外の様子は」

「今のところ問題無い。結界も上手く効果を發揮してるみたいだしな」

「そうか。女性陣は入浴を楽しんでいるようだからな、最後まで邪魔

が入らねばいいが」

「まったくだ」

まあ、この状況でも風呂に入れるのは、ある意味すごいとは思うが。「そういえば、慎よ。先ほど言っていた行き詰まっている技とは、何なのだ?」

下から聞こえてくる女性陣のはしゃぐ声を尻目に監視を続けていると、サイラオーグの兄貴が問いを投げかけてきた。

普通は他流の人間に技の事を聞かせるなんてしないんだが、兄貴にはリョウ師範を紹介してもらおう事になっている。

あの壁を超える手助けになるかもしれないのなら、さわり位を教えるくらいはいいか。

「俺が詰まっている技は天地神明掌てんちしんめいしょうといってな、神極拳の奥義なんだ」
なんでもないように出した言葉に、サイラオーグの兄貴は息を飲む。
む。

まあ、俺も兄貴も未熟とは言え、武術家の端くれだ。

いきなり奥義の話を持ち出されれば、こうもなるか。

「……いいのか。奥義の事を余人に話すなど」

「いいさ、全部を話すわけじゃないしな。でだ、この天地神明掌は潜心力を含む身体にある全ての力を、拳に集中させて相手に叩き込むって技なんだけど、俺の場合は氣の総量が多すぎて教えられた打ち方じゃ技の反動に拳が保たないんだよ」

神極拳の打法は、衝撃を体内に伝わるように平拳（指だけをたたみ、掌を伸ばした状態で造る特殊な拳）で打撃を放ち、インパクトの瞬間に平拳を潰して普通の拳にするというものだ。

ぶつちやけるなら、簡易版『二重の極み』である。

それゆえ、インパクトの際の衝撃を逃がす事が出来ずに威力が反動となつて拳を潰してしまうワケだ。

もちろん、こちらも考えつく限りの打ち方を試してみたのだが、結果は威力が激減するか拳が砕けるかのどちらかしかなかった。

色々やった結果、拳が砕けた回数は都合二十。

聖母の微笑が無かったら確実に右手が無くなっているとこらだ。

「高木先生も懸命に対策を考えてくれたんだけど、打開策は見つからなくてな。結局、俺自身で新しい撃ち方を編み出すしかないって結論になったんだ」

「それで師範の協力を得ようとしたのか」

「極限流空手は無限の闘争にある流派の中でも打撃の最高峰の一つだろ。その総帥と会えば、何かヒントが得られるかもって思ってたさ」

サイラオーグの兄貴に言葉を返した俺が窓の外に視線を戻す。

『……皆さん、緊急事態です』

事態が動いたのは、約半刻後。

下から風呂から上がった女性陣の声ができるようになってからだった。

「どうした、塔城」

『……イツセー先輩のマークが移動を開始しました』

塔城から告げられた言葉に、思わず眉根が寄る。

仮に捕らえられているとすれば、素人に毛が生えた程度であるイツセー先輩が自力で脱出したとは考えづらい。

どこか別の場所に移送されていると考えるのが自然だ。

そして、この仮説が正しければ、どういう事情であれ移動を開始している今が合流のチャンスだろう。

人質奪還は輸送時を狙うと、昔から相場は決まっているからな。

「塔城、先輩の現在位置をトレースできるか？」

『……可能です。現在はここから北に8 km先にあるラクーン総合病院の付近から、皆さんのいる方向に進んでいます』

「なら、こつちから迎えに行けば早めに合流できるってことか」

『……はい』

「了解した。今から移動するから、イツセー先輩と合流できるまでナビを頼む」

『……了解しました』

塔城からの通信が切り、室内に目を向けると男衆は既に立ち上がっていた。

「休憩は終わりですね、兄様」

「ああ。とつとつと、イツセー先輩を回収して帰ろう」

領き返してくれる皆を引き連れて下に降りると、女性陣も出立の準備を済ませていた。

手際が良くてなによりである。

「慎、こっちはいつでも出られるわよ」

「よし、ならすぐに出よう。イツセー先輩はこちらの方向に向かっているらしいから、邪魔が入らない様に俺達は空から移動する」

「私とアーシア姉はどうするの?」

「美朱は俺に、アーシア先輩はリアス姉に掴まってくれ。他に質問はあるか?」

言葉と共に視線を巡らせるが、口を開く者はいない。

「なければ出発する。外を出る際には十分に注意するように」

皆が頷くのを確認し、俺は出口に向かって足を踏み出した。



建物の3階程度の高度を維持して15分ほど飛行する。

視界の先には薄っすらと、病院らしきものが見えてきているが、肝心のイツセー先輩の姿は見えない。

もう少し高度を落として搜索すべきだろうか。

「塔城、先輩の位置は?」

『……………こちらの地図上ではその辺りにいる筈です』

ふむ、なら一度地上に降りるか。

「美朱、降りるから元の位置に戻れ」

「むう……………。乗り心地よかったのに……………」

いつの間にか、おんぶから背中の上で胡座をかいている美朱が不満げな声を上げる。

空を飛ぶなんてコイツからしたら稀有な経験だろうと気を遣って何も言わなかったのだが、後で拳骨でも落とすとくか。

「みんな、イツセー先輩の反応はこの辺にあるらしい。降りて搜索するぞ」

「それはいいんだけど……貴方、翼も無いのにどうやって飛んでいるの?」

こちらを見ながら、何とも不思議そうに首を傾げる朱乃姉。

さつきからチラチラ見てたと思っただら、それが聞きたかったのか。

「舞空術っていう氣を使った武術の技だよ」

「なんでも出来るのね、氣って」

「そうでもないんだけどな」

いくら氣功の才があっても先天的な資質がモノを言う、草薙や八神の炎は出せないからな。

それに相変わらず氣弾を撃つことはできんし。

いや、これについては考えるのはやめよう。

今の俺にはテュホン・レイジ（偽）があるじゃないか。

自分で自分を慰めて内心虚しくなっていると、病院の方から男のモノと思われる絶叫と轟音が聞こえた。

視線を向けると、住宅や店舗と言った障害物を突き抜けて爆走する、黒のゴスロリ姿をした小学生ほどの金髪の少女を抱いた赤い鎧姿の男と、それを追いかけるなぜか上半身裸のヒゲ面のおっさんが見えた。

「ここで会ったのも何かの縁！ 貴方に染みついた邪氣、私の愛で祓はらってあげましょう!!」

「ふっぎけんなあああああああつ!! てめえみたいなおっさんに掘られてたまるかああああああ!!」

「私の愛が氣に入らないのでしたら、貴方が私に愛を注いでもよいのですよ!!」

「具体的に何する気だよツ!」

「貴方が私を（パキユン!）（パキユン!）するのです!!」『先ほどの台詞に倫理上大変不適切な表現があったことを、お詫び申し上げます』
「イイイイイイヤアアアアアアアアアアアアアアアアアツ!」

騒々しい破碎音に紛れて、二人の大変聞き苦しい会話が聞こえてくる。

あのおっさん、蒼いツナギの某氏と同じ属性らしい。

というか、あのムサイ長髪とヒゲ面に下半身にたなびく緑の法衣。あれって『ワールドヒーローズ』一のネタキャラ、怪僧ラスプーチンじゃないか。

『……慎、イツセー先輩の反応はそちらに向けて高速で移動しています。距離、200m』

「ああ……、こつちも肉眼で確認した。案の定厄介事に巻き込まれているようだから、なんとかかしてみるわ」

コメカミ当たりで疼く痛みにも頭を押さえながら、俺は塔城に通信を返す。

さて、どうしたものか。

何とかすると言ったものの、あのマンイーターの同類とは関わり合いになりたくない。

しかし、このまま先輩を男として見殺しにするのは、人としてあんまりだ。

皆がドン引きして言葉も出せない中で何か使えるモノはないかと視線を巡らせると、道路の片隅で一昔前に一世を風靡した韓流スターに似たゾンビを見つけた。

ふむ、人道的には完全アウトだが、背に腹は代えられんか。

そのゾンビの背後に回った俺は襟首を引つ掴み、イツセー先輩？を追いかけるラスプーチンへ向けてポイと投げ入れた。

「はははははははははっ!!」

髭の中年と接触した瞬間、大笑と共に足元に現れた謎の薔薇園へ引きずり込まれるイケメンゾンビ。

その後の彼の様子に関しては、故人の名誉のためにコメントは差し控えさせてもらう。

さて、猛獣が獲物に引っかかっている間にこつちはすべき事をしようではないか。

事態の推移について行けてないリアス姉達を正気に戻し、俺は呆然と薔薇園の方を見ている鎧男に接触を試みる。

「あー、その紅い鎧の人。もしかして、イツセー先輩か？」

「あ……え……、慎？」

俺の声に振り向いた鎧男は、信じられないモノを見たかのような声で俺の名を口にした。

うむ、どうやら間違いはなさそうだ。

「イツセーなのね、ようやく見つけたわ」

「部長……」

目に涙を溜めて出て来たリアス姉の姿に、紅い兜の内から呆然とした声が漏れる。

その特撮ヒーロー染みた格好は何なのか、とか腕に抱いた女の子は誰なんだとか。

ツッコミどころは満載なんだが、今それを言うのは無粋だろう。

「うわあああああああん！　ぶちよおおおおおおおッ!!」

「ひゃあっ!!」

「あわっ!!」

「あつぶねえっ!!」

何かを耐える様にプルプルと震えていた鎧イツセー先輩(命名)は、腕に抱いていた少女を放り出し、一流のラガン顔負けのタツクルでリアス姉に飛びついた。

先輩の勢いに耐えられずに倒れるリアス姉を尻目に、俺は突然の事で反応も出来ずに宙を舞う少女を慌ててキャッチする。

さすがにこの扱いはないだろうと、文句の一つでも言おうかとイツセー先輩に視線を向けたが、リアス姉の胸に顔を埋めて号泣している姿に言葉を飲み込む。

男の先輩が人目に憚らず大泣きしているのだ、よほどの事があったのは想像に難くない。

まあ、ちやつかり兜を脱いでいる事や泣いている癖に微妙にエロイ表情だったことは、今回は見逃す事にしよう。

「それでイツセー、一体ここぞでなにがあったの？　鎧姿もそうだけど、さっきの貴方の様子は普通じゃなかったわ」

「それにこの娘の事もありますわ」

自身の胸で泣いていたイツセー先輩が落ち着いたのを見計らって、リアス姉と俺から渡された少女を保護した朱乃姉は問いかけた。

「それは――」

鎧姿から駒王学園のジャージに戻ったイツセー先輩は、まだ赤い目を擦りながらも戸惑う様に口を開く。

曰く、黒いシスターのけしからんバスト（先輩言）に誘われて彼女の水浴びを覗いていたところ、ヘタを打って見つかり背負った棺に飲み込まれて研究所のような場所に転送されたらしい。

この男はなにをナチュラルに覗きをしているのか。

というか、そんなカミングアウトいらんわ。

さて、突然ホラー映画さながらの研究所に送られた先輩は、施設内をゾンビやハンター等のクリーチャーから逃げ回っている最中にさきほどの少女と出会い、彼女を保護。

その後、紆余曲折を得て研究所を脱出して控室への道を探していると、あの怪僧に邪気に憑りつかれていると因縁を付けられて、半裸で追いかけられていたそうさ。

「それで、さっきの鎧姿は何なのだ？」

「ドライブは赤龍帝の籠手の禁手化だつて言つてたツス」

サイラオーグの兄貴の問いかけに、イツセー先輩は自信なさげに応える。

ああ、言われてみればヴァーリの禁手化とどこか似てるわ。

「そうだったの。禁手に覚醒するなんて、よっぽど危険な目にあつたのね……」

「いや……さっきのおっさんから逃げてるうちに、なんか出来る様になつたんで」

『あの時は流石に俺も驚いたぞ。男に貞操を奪われそうになつて覚醒する奴なんて、相棒が最初で最後だろうな』

気まずそうに語るイツセー先輩と呆れを隠さないドライブのやりとり、思わず哀れみの視線を向けてしまふ。

そりゃあ、そんな体験をすれば禁手の一つや二つ使えるようになるわ。

……何はともあれイツセー先輩と合流できたのだ、あとは脱出ルートを見つけるだけだな。

「塔城、聞こえるか？」

『……ふあい』

インカムで塔城を呼び出すと、返ってきたのは口にモノを詰めたようなくぐもった声だった。

『……失礼。小腹が空いていたもので』

「……いや、いいけど。それより、イツセー先輩と無事に合流できた。街から脱出したいんだが、そちらでルートは解るか？」

『……少し待ってください』

イヤホン越しにゴソゴソと音が、次いで拙いタイプ音が聞こえる。

その間にこちらを不思議そうに見ているイツセー先輩に事情を説明すると、なんだか妙に感謝されてしまった。

『……お待たせしました。確認してみました。やはりこちらには脱出経路に関する情報はありません』

「俺達が来た道が塞がれているのは確かなんだな？」

『……こちらに提示された情報では間違いありません』

「了解した。こっちは自分でルートを探してみる」

『……気を付けてください。残り時間は12時間を切っています』

塔城の言葉に小さく舌打ちが出る。八時間程度でイツセー先輩と合流できたのは上出来だが、こっから脱出経路を探すととなると半日足らずでは少々心許ない。

最悪、空を飛んで強行突破を図るという手もあるが、街中ならともかく脱出となれば迎撃される危険性も大きいだろう。

ここは無限の闘争が作り出したラクーンシティだ。

対空迎撃できる奴なんて腐るほどいるだろうし、追跡者に見つかつて下からロケットランチャーを撃ちこまれるなんて事は御免被りた
い。

「わかった。何かあったら連絡をくれ」

『……はい』

塔城との通信を終えた俺は、腕を組んで頭を捻る。

ここでバイオの知識があれば脱出ルートの一つでも思い出すのだろうか、生憎俺は未プレイである。

美朱もホラーは全般的にダメだと言っていたので、恐らくやっては
いないだろう。

かといって考えなしの風潰しでは時間がいくらあっても足りない
し、どうしたものだろうか。

「街の外に出る道、私知ってるよ」

さして良くもない頭が妙案を出さない事に唸うなっていると、救いの声
は思わぬところからかけられた。

「私のいた研究所の地下に特別製の列車があつたの。それに乗れば町
から出れると思う」

少女は朱乃姉の腕の中から紅玉のような瞳でこちらを見ている。

「本当なのか、フェイト?」

「うん。イツセーはこの街から出たいんだよね? イツセーはあの研
究所で私を怪物から助けてくれた。だから、私もイツセーを助ける」

イツセー先輩の確認の声に、フェイトと呼ばれた少女は意志の籠こもつ
た瞳で頷いた。

「偽りを口にしてしている目ではないな。赤龍帝、お前がいた研究所とや
らに案内してくれ」

自身を覗き込んでいるイツセー先輩の後ろから、頭一つ大きいサイ
ラオーグの兄貴が現れた事で身体を強張らせるフェイト嬢。

「サイラオーグ兄様、その子が怯えてますよ?」

「む……、すまん」

それを見とがめたミリキヤスに指摘されて、兄貴はスゴスゴと一団
の後ろに下がっていく。

「怖がらせてごめんね。でも、サイラオーグ兄様は見た目は怖いけど、
本当は優しい人なんだよ」

「うん」

「僕はミリキヤス・グレモリーっています。君はフェイトさんでい
いの?」

「うん、イツセーはそう呼んでるよ」

ふむ、子供同士仲良くなるのはいい事だ。フェイト嬢の言い方には
少し引つかかるものがあるが、今は置いておこう。

「みなさん、よければ私も同行させていただけませんか？」

いざ出発と足を踏み出したところ、突然掛けられた声に思わず足を止めてしまった。

声をした方を見ると、何も無い空間から激しくスピしながらラスプーチンが生えてきていた。

おい、試合開始デモと同じ登場の仕方すんな。

「ぎ……ぎやあああああああああああつ!!」

ラスプーチンを見た瞬間、悲鳴を上げながらリアス姉の背後に隠れるイツセー先輩。

「あら。イツセー先輩のトラウマが増えちゃった」

「どうして私の後ろに隠れてくれないんですかあ!」

美朱よ、そんな可哀想なモノを見る眼を向けるのはやめてやれ。

あと、アーシア先輩は手に持ったシメサバ丸を仕舞おうな。

「いきなりなんなんだよ、あんた」

「これは失礼を。私の名はラスプーチン、愛の伝道師です」

目の前で優雅に礼をするラスプーチン。

その仕草は冥界の貴族に対しても十分に通用するものだったが、怪しすぎる自己紹介の所為で台無しである。

「で、何であんたを連れて行かないやならないんだ？　そもそも、あん

たは俺等の連れを襲ってたじゃねえか」

痛む頭を押さえながらジトリとした視線を向けると、ラスプーチンはその髭面を引き締めてこちらを見据えてくる。

「それは誤解です。私はそちらの彼から邪な力を感じたので、それを祓わんが為に追っていたのですよ。そして貴方達に同行しようと思ったのは、彼が接触した邪気の正体が掴めるかもしれないと思ったからです」

先程の変態染みたキャラからは考えられない程に真剣な光を宿した目がこちらを射抜く。

どうやら、このおっさんが言っている事は嘘ではないらしい。

「どうして、その邪気とやらに拘るんだ？」

「私は宗教家にして神の使徒です。人に仇名すモノがいれば祓うのは

当然でしょう」

さも当然のように答えるラスプーチンに思わず頷いてしまう。

なんか、このおっさんイメージと違うな。ゲームではイロモノのイメージが強かったのに、これじゃまるでマジの僧侶だぞ。

「どうする、皆?」

判断に困ったのでみんなに振ってみると、返ってきたのは賛成4反対4のイーブンだった。

賛成はミリキヤス、サイラオーグの兄貴、美朱、アーシア先輩。

反対はリアス姉、朱乃姉、イツセー先輩、フェイト嬢だ。

真つ二つに割れてしまうとは思わなかったが、実は俺の意思は決まっていたりする。

「……わかった。一緒に来いよ、おっさん」

「おおっ! ありがとうございます!!」

「なんでだよっ!? そのオヤジが俺を狙ってたの見てただろ!!」

喜色満面のラスプーチンのおっさんと対称に、絶望の表情で声を荒げるイツセー先輩。

「悪い、イツセー先輩。なんつうか、このおっさんが嘘ついてるようには見えないんだよ。それに打算と成り行きでなったとはいえ、俺も神官の端くれだからさ。こういう理由の頼みは断りづらいんだわ」

「で、でもよ……!!」

「心配はいりませんぞ。貴方に纏わりついていた邪気は彼らと合流した事で消滅しましたから」

「だそうだ。さっき聞いた通り、このおっさんが先輩を襲ったのは除霊目的なんだから、もう大丈夫だろ」

それでも恐怖と不満を緇交ぜにしていたイツセー先輩は、万が一の時を護ってやると約束して黙らせた。

なんだかんだと遅れたが、こんな街からはおさらばしよう。

早くトンスラすれば、今回は死なずに済むような気がするし!!

閑話 『兵藤一誠救出指令（結）（前編）』

イツセー先輩達と合流してから約2時間。

ようやく、俺達は目的地である研究施設に辿り着く事ができた。しかし、まさか下水道を通った地下にあるとは思わなかった。

まあ、秘密研究所のお約束と言えばお約束だが、マジで造るなんて真似はアザゼルのおっちゃんでもやらんぞ。

……いや、あの厨二病ならいつかやらかすかもしれないが。

ともかく、フェイト嬢が道を憶えていてくれて、本当に助かった。

イツセー先輩は『逃げるのに必死でわかんねえ』とか言ってたし。

さて、警察署跡から地下に降りて下水道に入ったわけだが、その道行の間もクリーチャー達はワラワラと出てきた。

ゾンビやハンター、犬ゾンビといったバイオ定番のモンスターはもちろん、海外クリエーターが生み出した『貞子』こと『ELLA』に、世界的に有名なTRPGを題材にしたカプコンのベルトスクロールアクション『ダンジョンズ&ドラゴンズ』から一つ目の怪物『ビホルダー』、さらにはドラゴンボールのサイバイマンまで現れた。

もうバイオやTウイルス関係なくね？ というツツコミはご法度なのだろう。

ともかく、サイバイマンと出会った時には本当に肝が冷えた。

むこうが臨戦態勢に入る前に、『真空投げ』↓『サンダーブレイク』↓『雷鳴豪破投げ』というギーススペシャルコンボで倒したからよかったものの、まともに相手をしていたら間違いなく脱落者が出ていた事だろう。

また、ゾンビやハンター等の雑魚戦に限ってだが、ミリキヤスとアジア先輩が意外な活躍を見せた。

ミリキヤスはいつの間に仕込まれたのか、滅びの魔力を使って『虎煌拳』や『飛燕疾風脚』擬きを放ち、アジア先輩はシメサバ丸を巧みに操って次々と雑魚敵を仕留めていた。

まあ、処刑シスター的な勇姿にイツセー先輩がドン引きしていたのは、武士の情けとして伏せておいたが。

あと、サイラオーグの兄貴は後日グレモリー家の家族会議に参加するように。

主に謝罪的な意味で。

それから、ビホルダーはこちらの一存で朱乃姉とリアス姉に相手してもらった。

魔眼による魔法無効化能力を持つビホルダーは魔法使いスタイルの二人にとって相性最悪で、当然のごとく大苦戦。

リアス姉は何度もこちらに援護を求めていたが、俺はサイラオーグの兄貴と共に他の面子からの横槍よこやりをシャットアウトした。

リアス姉は魔法戦のオールラウンダーが本来のスタイルなのに、滅びの魔力への誇りと信頼が依存に近い形になってしまっている為、攻撃に傾倒する癖がある。

そして朱乃姉は例のトラウマに加えて、なまじ魔力操作に長けているために小手先の技に走って親父から受け継いだ光力を封印したまままだ。

今までならそれでも良かったが、三勢力を取り巻くきな臭い現状に加えて俺が離脱する事を思えば、ヘタをしても命に関わらないこの機会に悪癖を矯正するべきだと思ったのだ。

そうやって心を鬼にした甲斐もあり、戦闘はリアス姉が普段使おうとしなかった補助魔法での援護を行い、朱乃姉も魔法による雷撃ではなく俺達と同じ雷光を使った事で見事勝利した。

戦闘後、二人から詰め寄られたがこちらの考えを述べたうえで二人の戦闘スタイルの欠点を指摘してやると、苦虫を噛み潰したような顔で黙り込んだ。

特に朱乃姉は雷光を使った事がよっぽど腹に据えかねていたのか、ピリピリとした雰囲気を出していたがフォローはしなかった。

親父に対する複雑な気持ちはわかるが、あれからもう十年である。いい加減、トラウマの一つくらい自分で折り合いを付けてもらわないと困る。

俺や美朱だって、いつまでも一緒にいるわけではないのだ。

少しずつでも、俺達に甘え続ける現状は見直してもらわねば。

おっと、ウチの家庭事情を考えてる場合じゃなかったな、話を戻そう。

化け物達を切り抜けて漸く入った下水道の中も、お約束通り怪生物の巣窟だった。

下水道と言えば定番の住人である、蝙蝠が『悪魔城ドラキュラ』のジャイアントバット、ゴキブリが『テラフォーマー』に、そして雑草類は『バトルサーキット』の『エイリアン・グリーン』になっていた。

……地上でも思ったのだが、無限の闘争^{MUGEN}さんや。クリーチャーが足りないからといって、他作品のキャラで無理やり穴を埋めるのは如何なものか。

あと、エイリアン・グリーンは、容姿はアレでも正義の味方ですよ？

ともかく、次々に立ちはだかるそんな難敵達も、俺と愉快的仲間達の手によっておもしろおかしく打倒された。

その過程でイツセー先輩が禁手化したにも関わらず、エイリアン・グリーンの『ハイパーボツ！』でKOされたり、ラスプーチンのおっさんがテラフォーマーを薔薇の花園に引きずり込んで喰っちまうなど、些細なアクシデントはあったが記憶に留める必要な無いだろう。

知ってるか？ テラフォーマーは掘られると甲高く『じよおおおお』と鳴くんだけ。

……すまない、自分で言つてて気持ち悪くなった。話を戻そう。

度重なるグロい生物の襲撃に、フェイト嬢を除く女性陣の消耗は激しく、研究所の区画に侵入した途端に彼女たちはへたり込んでしまった。

敵地に身を置く現状でこの態度は褒められたものではないが、今までの道のりを思えば多めに見るべきだろう。

「いったん、ここで小休止だ。男衆は女性陣が復活するまで、周囲の警戒を怠るなよ」

「今サーチャーで確認してるけど、この辺には怪物はいないみたいだよ」

そう答えを返してきたのは、男衆に紛れて立っているフェイト嬢だ。

その姿は出会った時とは違い、黒のレオタード風のスーツに白いスカート、レオタードと同色のブーツにマント、とコスプレチックな衣装になっている。

そしてその手に持つのは、用途によって変形する喋る杖しゃべ（なんでもバルディッシュ・セカンドというらしい）

フェイト嬢曰く、彼女はとある魔導師のクローンであり、使う術式や杖もそいつのコピーなんだそうなの。

普通、こういった特殊な出生が絡む話は重いモノなんだが、本人はまるで気にしていないらしく世間話のように軽い調子で言われた為に、こちらも簡単に受け入れてしまった。

因みに、この話の際にリアス姉が『ウチの子にならない？』と眷属に勧誘していたので、チョップで止めておいた。

まったく、犬猫みたいに人間を飼おうとしおって、この駄姉は。

眷属になるって事は、レーティングゲームの選手になるのと同義だってわからんのか。

閑話休題。

フェイト嬢に頼んでバルディッシュ・セカンド、略してバル2に映像を出してもらおうと、壁のいたる所にバケツでぶちまけた様な血糊が付着した廊下には、動く影は無かった。

安堵する一方で、物足りなさが心の端を掠める。

……なんとというか、今回のツアーは随分と温いのだ。

敵とのエンカウント率も低いし、出てくるのも大半は十把一絡げの雑魚ばかり。

出会った闘士も、軒並みCランクと前回に比べたらやはり物足りない。

といっても、今回はメンバーがメンバーなので難易度が低いのはありがたいのだが。

どうせ参加するのなら歯ごたえを求めてしまうのは、武術家の性という奴だろう。

事前に將軍様とやりあったのにまだ足りないのか、だって？

將軍様は……あれだ。

齒ごたえあり過ぎて齒が折れたって感じだから。

もつとも、この手の流れでは不満に思っていると、とんでもない化け物が出るのがお約束だ。

ここは油断しないように気を引き締めるべきだろう。

時間にして十分ほどの小休止も終わり、ある程度女性陣も復活したのでフェイト嬢の案内で研究所内を進む。

辺りは相変わらず静かで、邪魔をする化け物の姿も無い。

……一つ訂正しよう。

正確には通路の中にはいない、だ。

拍子抜けするほどに順調な道程にみんなの警戒が薄れ始める中、俺は天井を視線を向け続けていた。

「気付いているようだな」

「当たり前だろ。奴さん、殺気隠す気ゼロじゃないか」

「まったく。餓えた獣でももう少し工夫するぜ」

サイラオーグの兄貴へ返す言葉に、バロールが呆れた顔を隠さずに頷く。

視界の端では朱乃姉と美朱、フェイト嬢も臨戦態勢で天井を睨んでいる。

「どうしたの、みんな。時間はまだあるけど、のんびりしているとタイムアップに間に合わ——」

先行していたリアス姉が、足を止めた俺達に注意しようとしたその瞬間、こちらを向く彼女の背後の天井が崩れ落ちた。

残骸から立ち上る土煙の中に見える影は一つ。

ゆっくりとした足取りで現れたのは、巨大な口と背に蝙蝠の羽を持つ寸詰まりの赤紫色をした獣だった。

「あら、かわいい」

朱乃姉の間の抜けた感想とは裏腹に、俺は自身の血の気が一気に下がっていくのを感じた。

「きゅ……、きゅうきよくキマイラ」

「■■■■■■■■!!」

思わず出た声に応えるような咆哮によって、周囲と奴の頭に陣取っているヒヨコがグラグラと揺れる。

……ヤバい、あれはヤバすぎる!!

「みんな、逃げるぞ!!」

「え、なに? あれってそんなにヤバ——ぐえっ!?!」

「言ってる場合か! あれに噛まれたら即死するんだよ!!」

状況が飲み込めていないリアス姉の襟首を引つ掴んで踵を返すのと同時に、きゆうきよくキマイラの前に黒い煙が立ち上る。

見れば、ミリキヤスを抱えて前を走る美朱の手に以前使った事のある煙幕玉が握られている。

「ナイス、美朱!」

「当然! こんなところで十連ガシヤをダメにされる訳にはいかないもんね!」

イツセー先輩がアーシア先輩を、サイラオーグの兄貴がフェイト嬢を担いで来た道を全力で走る。

高速で流れる無機質な廊下の中、背後から聞こえた破碎音に目をやると、天井を突き破って落ちてきたのであろう、円柱状のカプセルのようなものが床に生えていた。

白煙と共に中から現れたのは、右手の異常発達した爪と剥き出しの肥大化した心臓が特徴の禿頭とくとうの巨人。

バイオールのラスボス、タイラントだ。

視線に気付いたのか、はたまたただの偶然か。

白く濁った目でこちらを睨みながら、咆吼ほうこうを上げるタイラント。しかし、その叫びは長くは続かなかった。

こちらを追って通路を曲がったキマイラが、タイラントに迫っていたからだ。

キマイラの気配に気付いたタイラントは、猛スピードで突撃してくる赤紫の影に向けて巨大なかぎ爪を繰り出す。

瞬間、タイラントは粉碎された身体を残骸ごと壁に叩きつけられ、一面を彩る紅い染みになった。

言うまでもないが即死である。

「い……ッ、いやあああああつ!?!」

「……ッッ!?! 冗談じゃねえ!!」

脇に抱えたりアス姉の悲鳴をバックに、悪態あくたいをつきながら俺はスピードを上げる。

最悪だ、あれはシャレにならない。

タイラントを一撃で葬った攻撃力が、じゃない。

そっちははじめから解っている。

俺が脅威に感じているのは、激突の瞬間にこの目に映った光景だ。

あの時、確かにタイラントの爪はキマイラの顔面の中心を捉えていたのだ。

しかし、追いかけて来るキマイラには傷一つ見当たらない。

激突の瞬間から今まで目を離していないのに、治癒や回復の痕跡すらもだ。

あれはバリアーや超回復なんて、チャチな能力じゃない。

あの光景を引き起こしたのが俺の考え通りなら、特定条件以外では奴を倒す術は無いことになる。

「うわわっ! ミンチより酷い!?!」

「そんな……無茶苦茶ですわ」

「むうっ! あれはいけませんな。彼奴は黙示録もくしりよくの獣に匹敵する厄災やくさいと見ました! 皆様、ここは逃げの一手ですぞ!!」

「おっさん! いきなり服すその裾すそを捲するな!! ていうか、なんでそんな綺麗な足してんだよ!?!」

「いけませんかな? おみ足は教祖の顔の一つ、綺麗にするのは当然でしょう。それとも、兵藤殿は私のたなびくキューティクルなスネ毛を見たかったとでも?」

「んなわけあるか!?! おっさんみたいなムサイ男にスネ毛がないのが、納得いかねえんだよ!!」

「おお、何たる理不尽か!?! 主よ、これも私に対する試練なのでしようか」

「ぐわああ!?! なんでこんなおっさんの祈りでダメージが!!」

「イツセー、馬鹿言ってる場合じゃないよ！早く走らないと!!」

「フェイト嬢の言うとおりで、真面目にやれ!!」

「サーセン」

馬鹿と変態が下げた頭の上を、イツセー先輩の腕の中から脱したフェイト嬢の放った黄色の魔力弾が通り過ぎていく。

「というか、あの二人仲いいな。」

話が逸れた。

小さく帯電した魔力弾の数は四つ、各々が複雑な軌道を描いてキマイラに襲いかかるが、ただの一発も命中する事無く廊下を穿つてその姿を消した。

「外した!? 対誘専用のジャミングでもあるの?」

『I can not confirm』

「フェイト嬢、考えるのは後だ。牽制が通じないのなら、スピードで引き剥がすしかない」

動揺しそうになっていたフェイト嬢は、サイラオーグの兄貴に促されて魔力飛行で先頭に躍り出る。

フェイト嬢の牽制のおかげで確信が持てた。

奴の能力はやはりアレだ。

ならば、なおの事やり合うわけにはいかない。

とは言え、このまま闇雲に逃げ続けても事態は好転しない。

こちらの判断で勝手のわからない研究所内を進んでは、最悪道に迷って追いつかれる可能性もある。

「ここは『餅は餅屋』で行くべきだろう。」

「フェイト嬢！君が言っていた脱出ルートはどこにある!？」

「この通りを真っ直ぐ行って突き当たりを左！大きな扉の向こう側に物資輸送用の貨物列車があるから、その線路を辿れば街の外に出られるはずだよ!!」

先頭に行くフェイト嬢の答えに、俺達の足はさらなる加速を見せる。

「言われる前に先導してくれていたとは、機転の利く娘さんである。それで奴を留めるような物はあるのか?」

「入り口に特殊合金製の分厚い扉があるから、それなら少しは時間が稼げると思う。扉のパスコードはバルディッシュが知ってるよ」

『Please choose for me』

フェイト嬢が確認するかのようバルIIを掲げると、先端の機構にはめ込まれた黄色い宝玉から、男の声がした。

苦み走った中々に渋い声である。

付喪神にでもなれば、さぞかしダンディーな親父になるだろう。

そうこうしている内に長い直線も終わりを告げ、突き当たりのT字路を、フェイト嬢を先頭に前を走る面々は次々に左に曲がっていく。

殿である俺達の直前を走る朱乃姉が曲がろうとしたその時、事件は起きた。

朱乃姉が足を滑らせて、派手に転倒してしまったのだ。

「朱乃!？」

「大丈夫か、朱乃姉!？」

「大丈夫よ。それより急ぎ——痛ッ!？」

足を止めてしまった俺達の前で朱乃姉は慌てて立とうとするが、足首と肩を押さええて蹲うずくまってしまう。

「曲がろうとして足を捻ひねったな、それに倒れた時に肩も打ってる。骨には異常はないけど、走るのも飛ぶのも無理だ」

触診と氣の流れから朱乃姉の症状を調べて、出そうになった舌打ちを慌てて止める。

重度の怪我ではないので聖母トワイライト・ヒールングの微笑なら簡単に治せるが、追っかけているキマイラはそんな時間をくれないだろう。

……これは仕方ないか。

「リアス姉。俺が時間を稼ぐから、先行したみんなと協力して朱乃姉を連れて行ってくれ」

立ち上がり踵を返すと、背後から二人の息を飲む気配が伝わる。

「時間を稼ぐって……あんな化け物相手にどうするつもりなの!? あなたも見たでしょ! 噛まれた者がぐちゃぐちゃのミンチになるのを!？」

「そうよ! 私が走れば、貴方は朱乃を担いで逃げられるじゃない!!」

「見ろよ、奴はすぐそこまできてる。今から逃げても全員仲良くミンチになるのがオチだ」

「でも、触れるだけでやられるのに——」

「偉いの人はいいました、『当たらなければどうという事はない!!』つてな。俺の接近戦の腕前は知ってるだろ。本気になったら、あんな獣に髪の毛一本触れさせねえよ」

それだけ言い残して俺は床を蹴った。舞空術で来た道に戻る中、こちらへの悲鳴とも怒声ともつかない声が、風の音と共に耳を掠める。

少々強引だが、あの二人を説得している時間はないからな。

出るときにチラリと戻って来るイツセー先輩の姿も見えたし、向こうは任せておけば大丈夫だろう。

……問題はこいつだ。

二人から200メートルほど距離を取った場所で、俺は前方に見える赤紫の影を睨みつける。

朱乃姉達にはああ言ったが、タイラントを葬った際の加速を思うと躲し続けるのは相当キツイ。

距離を詰められる前に何とか出来ればいいのだが……。

俺は猛スピードでこちらに近づいてくるキマイラに、衝撃波を放つ。

空気を裂いて襲いかかったそれは、キマイラの身体を擦り抜けて背後の床を大きく抉るに終わる。

……やはり駄目か。

俺はその結果に小さく舌打ちを漏らす。

MUGENにおいて『きゆうきよくキマイラ』が凶クラスに位置づけられている要因は二つ。

一つは一部の特殊性能を除く、大半のキャラクターを一撃で葬る攻撃力。

もう一つは攻撃に対する食らい判定が無いことだ。

食らい判定とは、その名の通り相手の放った攻撃を受ける事が出来る場所と認識される要素の事だ。

これに相手の放つ技に付与された攻撃判定が当たって、初めて攻撃

を食らったという結果になる。

格闘ゲームによくある『全身無敵』とは、技の始動や攻撃判定発生時に食らい判定が一時的に消失する事を指す。

『昇龍拳』に代表される無敵対空技が一方的に相手に打ち勝つのは、食らい判定が消失している間に自身の技を相手に撃ち込んでいるからである。

さて眼前のキマイラだが、奴にはその食らい判定が無い。

それは即ち無敵という意味だ。

辺り一面をくまなく覆^{おお}う範囲攻撃も、どんな敵も打ち破る一撃必殺の奥義も、奴の前では等しく意味は無い。

放つ先から全て擦り抜けてしまうのだから。

そんな相手を前にして、深く息を吐きながら俺は構えをとる。

いつもの半身の構えではなく、足を肩幅に広げて全身の余分な力を抜き、腕は体側に沿わせて自然体に立つ。

ギース・ハワードが好んで使っていた『無形の構え』だ。

こちらを敵と認識したのか、追撃の足を止めると俺を睨みながら牙を剥き出しにするキマイラ。

さて、ここからは賭けだ。

奴の能力がMUGENと同じならば、今から打つ手は通用するだろう。

そうでなければ、マズそうなミンチが一つ増えることになる。

一つ……、二つ……。

呼吸が三つ目を数えようとした瞬間、キマイラの強靱な四肢が床を蹴った。

砲弾もかくやと言わんばかりに突っ込んでくるその様には思わず舌を巻くが、気圧されている場合じゃない。

俺は体側に垂らしていた腕をゆっくりと前に構える。

躲しはしない。

後ろに抜けられれば狙われるのは朱乃姉達だ。

そうさせないために、俺はここで身体を張っているのだから。

風を切りながら迫るキマイラは、空中で大きくその顎を開いた。

唾液で滑り光るこちらの上半分を容易く飲み込みそうな口には、鋭利な牙がビツシリと生えている。

気の弱い者なら卒倒するであろう光景を睨みつけながら、細く長い調息と共に氣を周天させる。

九所封じを食らった背中も経絡もようやく癒え始め、氣の流れに問題はない。

あとは、運と腕次第だ。

そして接触の瞬間、トラックに突っ込まれたされたような衝撃に身体が後方に押し出されるのに耐えると、赤紫の獣は構えた手の寸前で宙に浮いたままピタリとその動きを止めていた。

鋭く息を吐き出しながら顔の前に出していた手を左右に旋回させると、抵抗などまるで感じる事も無くキマイラの身体は回転。

「シイッツ!!」

「ギャブウツ!？」

無防備にこちらへと晒した腹を双掌で撃ち抜くと、短い悲鳴と共にキマイラは後方に弾け飛んだ。

数メートルを飛んで床に叩き付けられたキマイラの姿を見ながら、俺は手に残っている氣勢の残滓を振り払いつつ残心をとる。

だいなんりゆうあいきじゆうじゆうつ
大南流合氣柔術が一つ『竜巻捕縛』。

両の掌から放つ氣勢によって相手の攻撃を絡め捕り、相手に触れることなくその身体を吹き飛ばす。

その術理は通常の流派とは一線を画しており、大南流の使い手が『妖あやかしの者』『闇天狗』と称され、恐れられる由縁の一つとなった技だ。

また、ギースの使う『当て身投げ』の原型でもある。

『当て身投げ』の錬度を上げていく間にイメージとして頭の中にあつた技で、実戦で使うのは初めてだったのだが上手くいった。

「ドルルルルルッ!!」

立ち上がり、唸り声と共に四肢に力を漲らせるキマイラの姿に、技の成功で高揚していた氣を引き締める。

命がけの賭けに勝ったとはいえ、ここが死地である事は変わらないのだ。

俺がリアス姉達と別れたT字路についた時には、背後の通路は七割までが土砂に満たされていた。

その光景に気が抜けた俺は、思わず壁に背を預けて座り込んでしまふ。

……いや、キツかった。

最後、隙を突かれた時は本気でミンチを覚悟したからな。

あの時、周囲の光景がスローに見えたのは多分走馬灯に代表される『死に際の集中力』って奴なんだろうな。

あの化け物相手に時間稼ぎなんて、我ながらよくやったもんだ。

さて、キマイラとやり合う前に奴の能力について語ったのを憶えているだろうか。

『食らい判定』だの『無敵』だのと、さんざ並べ立てたにも拘らず結果的に簡単に捌けたわけだが、休憩がてらにその辺の事を説明しておこう。

奴の能力を知った時、俺は『特定条件以外では倒せない』と言った。

その特定条件と言うのは『神』ランクの持つ『即死当身』、キマイラと同じく食らい判定を持たない元論外キャラ『オメガ・トム・ハンクス』を倒す事ができる『OTHキラー』、そして『当て身投げ』だ。

前に上げた二つは『神』ランクのキャラしか所持していない、MUGENでは相手を構成するデータを書き換えるという反則技(無限の闘争で再現されれば、おそらく因果律操作になるだろう)だ。

当然、俺にはそんな愉快的機能は無いので使ったのは馴染み深い『当て身投げ』だ。

MUGENでキマイラを当て身投げで倒せる理由だが、詳しく説明するとキャラクター構成の話になるのでその辺は省略する。

要点だけ言うと、『当て身投げ』は打撃を捕った瞬間に相手の動きをロックし、特殊な処理で相手にダメージ判定を付与することが出来るということだ。

それ故に瞬間的に『食らい判定』が消失する無敵対空技を取った際も、問題なく相手を投げる事ができるわけである。

それはキマイラにも当てはまる現象の為、通常キャラが奴にダメー

ジを与えられる数少ない手になっている。

もつとも、これはゲームのMUGENの話で、この世界で適応されるという確証はなかったのだが。

命がけの賭けと言っていたのは、そういう理由からだ。

なんにせよ、ミンチにならずに済んだのだから、過ぎた事を話すのはここまでにしよう。

うん。もう二度としないぞ、こんなこと。



その後、扉を潜った俺を待っていたのは、同行者全員からお説教だった。

全員が口を揃えて『無茶すんな』『命大事に』と言って来たので、こちらも黙って頷いておく。

『あの状況で『命大事に』してたら全員ミンチだった』なんて内心思わなくも無いが、その辺は言わぬが花だろう。

さて、ようやく街からの脱出口である、貨物列車用プラットフォームに足を踏み入れたわけだが、随分とスツキリした場所だった。

あるのは貨物用コンテナから連結を外された先頭車両のみで、荷物や輸送用リフトなどは見当たらない。

「随分と寂しい所ね。駒王にあるウチの駅とは大違いだわ」
辺りを見回しながら呟くりアス姉。

因みにリアス姉の言う駅とは、駒王町の地下深くに建設された、グレモリー家のプライベート駅の事だ。

駒王町と冥界のグレモリー領の世界間を、列車で往復運行を行っている。

夏休みなどの長期休暇の里帰りには良く利用しているものだ。

まあ、あの駅もリアス姉の任期が終わると同時に解体するんですけどね。

「フェイト嬢、ここはいつもこういうのか？」

「私が前に入った時は大人の人達がいっぱいいたし、小さな車も荷物

を運んでたよ。研究所に怪物が出るようになってからは来てないから解らないけど……」

この中に血痕や死体が無いことや列車が使われてないところを見ると、ここが脱出に使われた可能性が低いことはすぐにわかる。

研究所がウイルス漏洩の最前線になった事を考えれば、生きてここまで来れた人間はいなかったのだろう。

そしてゾンビになってうろついていたところを、キマイラに狩られた、と。

「ここで話し合っても仕方がないだろう。まずは列車を調べてみるかい？」

サイラオーグの兄貴の提案によって、列車に乗り込む一同。

列車は随分と古い型らしく、木と鉄で組まれた車内はどこも年期が入っている。

操縦席と機関室しかないという硬派なデザインが幸いしてか、車内に化け物の姿はなかったが、同時に動力源の大型バッテリーも抜かれていた。

周辺を探そうという案も出たのだが、面子の中に機械に強い者がいない事もあり、トンネル内を飛んで脱出する事に落ち着いた。

方針も定まり、先頭のリアス姉が列車から降りようとすると、

「皆さん、注意なさい！ 邪悪なる者の気配がします!!」

車内に入ってから沈黙を守り続けていたラスプーチンのおっさんから厳しい声が飛んだ。

同時に列車の周囲から強烈な妖気が吹き出し、みるみる内に周りを被っていく。

舌打ちと共に素早く九字を切って簡易の浄化結界を張ると、こちらの結界の上にもう一層結界が現れる。

「いやはや見事な手腕ですな。格闘専門の方かと思っていました、私の目もまだまだのようです」

床に積もった埃で描いた陣の上で、ラスプーチンのおっさんはこやかに笑いかけてくる。

一見すれば変態の親父だが、術に関しては図抜けている。

咄嗟とつさに張った結界に自分のを被せるなんて、普通できないぞ。

「リアス、無事か？」

「ありがとう、サイラオーグ。助かったわ」

出口付近にいたリアス姉は寸すんでのところでサイラオーグの兄貴が室内に引き込んだおかげで、事無きを得たようだ。

結界の中から荒れ狂う妖気の状態を窺うかがっていると、ガタンと列車が大きく揺れた。

「お、おい！ この列車、動き始めてるぞ！」

イツセー先輩の声で覗き窓に目をやると、薄紫色のモヤに被われて外の様子はほとんど見えないが、景色が流れているのは分かった。

『この列車の次の行き先は魔次元、魔次元です』

ひび割れた声のアナウンスに合わせて、列車はさらに加速する。

外の妖気が薄くなったのを感じて機関室の扉を蹴り開けると、一変した光景が飛び込んでくる。

周囲を覆うモヤに遮られた淡い光の中を走る、車体に巨大な口と目を付けた列車。

その操縦席には車掌の制服をきた髑髏むくろが、パイプを咥えながら機器をいじくり回している。

この光景には見覚えがある。

確か、カプコンの格闘ゲーム『ヴァンパイア・セイヴァー』に登場するステージの一つだったはずだ。

ということは、ここに現れる敵も『ヴァンパイア』に因んだキャラかもしれない。

強大な力を有する真祖の吸血鬼『デミトリ・マキシモフ』か、それとも冥王『ジエダ・ドーマ』か。

もしかしたら、サキュバスの女王である『モリガン・アーンスランド』かもしれない。

もし、モリガンならイツセー先輩に注意が必要だ。

と言っても、誘惑されてアシア先輩の持つシメサバ丸で nice boatboatされない様に、だが。

さすがに身内間の刃傷沙汰は勘弁である。

そんな愚にもつかない事を考えていると目の前に魔法陣が展開され、立ち昇る光の中には何者かの影が現れる。

光と共に消えた魔法陣の代わりにいたのは、古びた法衣を纏った骸骨だった。

「ここまでの道程、実にご苦勞だった冒険者諸君。私の名はデイモス、君達の旅の最後の障害である」

ローブのフードを貫いて側頭部から左右に生える角に、右手には先端に髑髏の意匠が施された杖。

左手には強大な魔力が込められた水晶を持つデイモスと名乗った不死者は、慇懃無礼ながらもどこかユーモアのある口調で言葉を紡ぐ。

『デイモス』

俺の記憶が確かならば、ベルトスクロールアクション『ダンジョンズ&ドラゴンズ』の一作目『タワーオブドゥーム』のラスボスだったはずだ。

奴の種族であるリッチは、生前魔法使いだったものが不死とさらなる魔力を求めするために人間をやめた上級アンデッドで、魔法で死を超越したが故に「不死の王」とも呼ばれる。

「あんたが今回のラスボスでいいのか?」

「正確に言えば、代理という奴だな」

「代理?」

「うむ。本来、この立場を任せられた者が『興が冷めた』と降りてしまつてな。急ぎよ代打として私が呼ばれたのだ」

興が冷めた、とはまた辛辣しんちつな。

しかし、今回の内容がその元ボスのお眼鏡に適わなかったのなら仕方がない。

「いや、その辺は関係ない。事情を聞いたら、彼女は『女に興味のない朴念仁と、私の裸体を覗くだけで満足しているヘタレの相手は嫌』などと拗ねていたからな」

「『ブッフオ!?!』」

「あのおっぱいシスターがラスボスだったのかよ?!? とういか、ゴ

メンね！ 覗きで満足して!!」

どこか言い辛そうなデイモスの言葉に、頭を抱えて崩れ落ちるイツセー先輩。

「なあ、もしかして朴念仁って俺等のことか？」

「む……、別に女性に興味が無いわけではないのだがな。今は修行に手一杯なだけで」

「だよなあ」

不当な評価にサイラオーグの兄貴と愚痴ってしまう。

まったく失礼な話だ。

あと、横で盛大に吹いているウチの駄目姉妹と紅い浪費姫は、お仕置き決定である。

「さて、お喋りはここまで。そろそろ我が本分を果たすとしよう」

先ほどまでの緩い雰囲気を投げだして、膨大な魔力を纏うまとデイモス。

負けじとこちらも氣を練り始めると、デイモスは間違いを指摘するように水晶を持つ手の人差し指を左右に軽く振る。

「張り切っていると申し訳ないが、君とそっちの極限流の彼の。君の相手は私じゃない。」

「……なに？」

「こちらの事情になるが、今回のツアーは初心者向けに調整されたものでね。私も含めて君達の様な玄人の相手は想定していないのだよ」
「その割には『きゆうきよくキマイラ』なんて凶悪なモン仕込んでたじゃねえか。初心者にあれをけしかけ噴けたら、全滅しかないと思うがな」

「その辺は君達が参加した為に起きた、いわゆるサイレント修正という奴だ。おかげで、私が送り込んだアンデッドやこの街で生み出されたい感じの怪物が、全てオジャンになってしまったよ」

やれやれ、と言わんばかりにため息をつく動作をするデイモス。

さつきから思っていたのだが、このアンデッドは随分と人間臭くユーモラスだ。

原作でもこんな性格だったろうか？

「じゃあ、俺達の相手は誰なんだ？」

「そう慌てる必要はない、先方も到着したようだ」

デイモスの言葉と共に、モヤのむこうから床を裂いて襲い来る蒼い衝撃波と燈色の氣弾。

俺とサイラオーグの兄貴が、それぞれブロッキングとジャストデイフェンスで弾くと、俺の前には派手な刺繍が入った白の上着と柿色の袴に身を包んだ壮年の男が、サイラオーグの兄貴の前には天狗の面を付けた空手家がいた。

おいおい。俺の方は兎も角、向こうはヤバいだろ。

あの天狗、正体がまんまだったら、サイラオーグの兄貴にとって魔王以上に雲の上の人だぞ。

「虎煌拳を使うとは、貴様……何者だ!？」

「俺は空手道の極みを求めし天狗よ。小童！ 極限流の門下にあるならば、その力を見せてみるがいい!!」

豪快な啖呵たんかと共に氣を練り始める天狗面。

その身体から立ち昇る鬨氣きの大きさに、変質したはずの周囲の空間が音を立てて大きく軋よみ始める。

この馬鹿げた氣の質と量、天狗の正体はあの男に間違いなさそうだ。

「付いて来い、小童！ 俺の正体を知りたくば、その拳で確かめてみよ!!」

「……ッ!? 待て!!」

被った面そのままの身軽さで車両の後部へと跳躍する天狗に兄貴は慌てて追っていく。

何というか、歳も七十超えてるつてのにノリノリだな、あの爺さん。「ふん、老いぼれが年甲斐もなく張り切りおつて。見苦しい事、この上ないわ」

「あの爺さんの事は兎も角、あんたが出てくるとは思わなかったぜ、ギース・ハワード」

「何度叩き潰しても挑んでくる、貴様のしつこさには嫌気がさしたのだな、本当の意味で引導を渡してやろうと思ったのだ」

不敵な笑みを浮かべながら着ていた上着をもろ脱ぎにするギース。

その間にこちらでもウエイトと重力制御装置を外しておく。

「悪いな、みんな。俺達は手伝えそうにない。あのドクロの相手は任せる」

「……強いよね、あの人」

「将軍様ほどじゃないと思うけどな。正直、勝てるかどうか分からん」

こちらの様子から尋常な相手じゃないのが解ったのか、顔をこわばらせる朱乃姉。

安心させてやりたいが、嘘をついても仕方ない。

「そんな顔すんなって。一日に二回負けるほど、俺は間抜けじゃねえよ」

朱乃姉の肩を叩いた後、硬い表情のみんなに笑いかけて俺は一団から離れる。

ギースと闘うとなると周囲への被害が馬鹿にならない。

みんなを巻き込まないようにしないとな。

というか、車両の後方に消えた二人はその辺を分かっているのだろうか。

戦闘の舞台になる為か、普通だった時に比べると数倍に広がった列車を機関部を挟んだ反対側に移動し、同じく付いてきたギースと対峙する。

「最後の別れはすんだか？」

「まだって言っても待っててくれないんだろ？」

「フン、相変わらずふざけた小僧だ」

言葉と共に無形の位に構えるギース、こちらもいつもの構えを取る。

「You Can Not Escape From Death
……!!」

「さあて、そいつはどうかな……!!」

一瞬の視線の交差を交えて、地を蹴るのは互いに同じだった。

「邪影拳!!」

一瞬の間を詰めたギースは床を強く踏み込み、さらに速度を増してこちらの胴へ肩から突っ込んでくる。

腕を交差させた腕に伝わるハンマーで叩かれたような衝撃を歯を食いしばって耐えると、顔面に向けて飛んでくる蒼炎を思わせる氣を纏った掌が見えた。

ボクシングで言うところのヘッドスリップで掌を躲すと同時に腕を取り、脇固めに取ろうとする。

しかし、肘と肩の関節を極めようとした瞬間に視界が回転した。

腕を捕ったこちらの手に『当て身投げ』を仕掛けてきたか、しかし……!!

頭の上に抱えられると同時に、足を捕らえていた相手の手を引き剥がしてそのまま頭頂部に振り下ろす。

だがその蹴りも、寸前で割り込まれた相手の腕に阻まれる。

反動で襟に掛かった手を振り切った俺は、空中でトンボを切つて間合いを離そうとするが、敵も然るもの。

着地の瞬間を狙った強烈な中段廻し蹴りによって、ガードは間に合ったもののこちらの体勢は大きく崩れてしまう。

「死ねい！」

「チイツ!？」

大きく跳びあがり、こちらの脳天にむけて蒼く光る手刀を振り下ろそうとするギース。

奴の手がこちらに届くよりも早く、手から放った氣勢の網が空中で奴を絡め取る。

「ぬう、これは『竜巻捕縛』……!？」

「ご名答！ このまま吹っ飛んでもらうぜ!!」

「ふん、私の技から大南流に行き着いたか。だが甘い！ 疾風拳!!」

捕らえたギースを地に叩きつけようとしたが、それよりも早く手刀とは逆の手から放たれた氣弾によって、逆にこちらが吹き飛ばされてしまう。

咄嗟に身を捻って急所に当たるのは避けたが、右肩に食らった所為で腕に力が入りきらない。

『『竜巻捕縛』は氣勢をもつて相手の動きを封じる技、氣の流れまでは妨げる事はできん。技を使うならば、その本質を理解してからにする

のだな!!」

嘲るような指摘と共に、地を這う蒼い氣弾の群れがこちらに殺到する。

『虚空烈風斬』

烈風拳を連続して放ち、相手を圧殺する超必殺技だ。

床を扶^{えぐ}る事で生物となった魔次元列車を血肉をまき散らしながら迫り来る烈風拳の群れをガードを固めて耐えた俺は、締めの一撃であろう一際大きな烈風拳に向けて両手を翳す。

「高説どうも、つてなあ!!」

気合と共に放った鏡面のような氣勢に触れた瞬間、烈風拳は黄色い氣弾へと変化してギースに向かって跳ね返る。

大南流合氣柔術『合氣鏡殺』
あいききようざつ

『竜巻捕縛』から派生した鏡面の様な氣勢の壁を創り出し、相手の氣功波を跳ね返す高等技だ。

「……ッ!? 氣功反射の結果か!!」

驚愕の声を上げながらも、寸でのところでガードを滑り込ませるギース。

直撃はしなかったものの衝撃で大きく体勢を崩した奴に向けて間合いを詰めると、ギースは不安定な姿勢ながらも足払いを放つてくる。

しかし、それはこちらの想定内だ。

脚に籠められた触れば骨まで砕けるであろう剛力を、割り込ませた左手が合氣の術理で受け流し、返す刀で放った右掌が奴の胸元を捉える。

「ぐうっ!」

うめき声を上げて身体を宙に浮かせるギースを目で捉えながら、俺はさらに氣を練り上げる。

ようやく掴んだ攻勢のチャンスなのだ、この程度で終わらせるつもりはない。

「界王拳……! レイジングストオオオム!!」

増幅した氣で過程を無理やりすっ飛ばして放った紅い氣の嵐は、

ギースを飲み込んで周囲の物諸共吹き飛ばす。

木や鉄の破片に混じって落ちてきたギースは、地面すれすれで受身を取るとすぐさま立ち上がり間合いを確保した。

「ただの猿真似と思っていたが、まさかここまで真に迫るとはな」

額から流れる血を乱暴に拭いながら、こちらを見据えるギース。

その顔に浮かぶのは怒りでも憎悪でもなく、愉悦だ。

「盗んだ技を、よくもそこまで練り上げたものだ。その褒美ほうびとして貴様には氣功闘術、その極みの一端を見せてやろう」

先ほどまでの苛烈な攻めが嘘のような、静かな口調による宣誓。

直後、ギースの氣勢が爆発的に膨れ上がる。

暴風を伴って立ち上る蒼い氣柱。

中心にいるギースの氣を探ると、内から湧き出る氣と外から取り込む氣がとんでもなく高いレベルで融合しているのがわかる。

「これが秦しん 王龍おうりゆうが約2300年前に編み出した氣功闘術の頂点、内氣功と外氣功を極めたる者の姿だ」

「内外の氣功を極めたる者『真人』と称す、か……。噂には聞いていたが、実際に見る事になるとは思わなかったぜ」

「少しは学があるようだな。ならば、その力を実際に味うがいい!!」

言葉と共に、足元に蒼い闘氣の渦を纏ったギースは数メートルあった筈に間合いを一瞬で潰してきた。

先ほどとは比較にならない速度に咄嗟にガードを固めるが、その手を取られた瞬間に全身の力が抜けるのを感じた。

「しまっ——!?!」

「受け取れ、まずは手付けだ……!」

手首のツボを突かれた事に氣付いて弛緩しかけた身体を無理やり動かそうとするが、それよりも速く尋常じゃない力で空中に放り投げられる。

突かれたツボの効果か、身体を動かす事はおろか氣を練る事も阻害されたまま落ちていく。

下から立ち昇る強大な氣に焦りを憶えるが、打つ手が無い。

「ハアアアアアアアッ! 羅生モオオオオンっ!!」

裂帛の気合と共に撃ち出された双掌が突き刺さった瞬間、腹部で何かが爆発したような衝撃と共に、俺の身体は物凄い勢いでぶっ飛んだ。

途中、硬い物に激突したり臓物のような生臭い物の中を突き抜けたりしたが、列車から落ちる事はなかったらしい。

トラックに撥ねられてもこうなならないであろう、全身を襲う痛みに耐えていると、周りが妙に騒がしい。

重い^{まぶた}瞼を上げると、俺が突き破ったのだろう中心部が抉り取られた魔列車の機関部に、足を引つ掛けて仰向け^{あおむ}になっている自身の身体と、その横で同じく機関部に身体をめり込ませて倒れているサイラオーグの兄貴が見えた。

「……よう、ヒデえ恰好だな」

「……人の事は言えんだろう」

血塗れ傷塗れの割に、兄貴はハッキリとした声で答えを返してくる。

まあ、血の半分くらいは車輪が廻る度にビュービュー血を吹いている魔列車のものなんだが。

「い、生きてるのか、二人とも!? アーシア、来てくれ!! このままじゃ慎達が死んじゃまう!?!」

こちらの様子に血相を変えているのだろう、パニック寸前になったイツセー先輩の声が聞こえる。

首を巡らせれば様子が見えるのだが、今はそれすら億劫^{おっくう}だ。

ギースが来るまでに、少しでも体力を回復させたいというのものもあるが。

「慎、お前一体何を食らったんだ?」

「羅生門って超必殺技。そういう兄貴は?」

「霸王翔吼拳を撃つたら、同じ技で切り換えされた。あの男は何者なんだ? こっちの気弾が簡単に押し戻されたんだが」

「あの天狗はMr.カラテ。正体はタクマ・サカザキだよ」

「冗談はよせ、最高師範は齡七十を超える方だぞ。そんな歳の間人間があんな気弾を放てるわけが——」

「この世界の武術家は、歳を取れば取るほど化け物になってくんだよ。それに、その最高師範が現役復帰したって言ってたのは兄貴だろ」

「……そうだったな」

なんか凄く黄昏たそがれた目で、赤紫のモヤがかかった虚空を見る兄貴。タン老師や剛拳師匠にお種婆さんと、この業界のジジババは元気すぎるよな。

「あんたら、そんなズタボロの身体で平然と喋るの止めてくれ！ 普通に怖えよ!?」
「というか、慎はあの雷撃を食らってなんで平気なんだよ!?!」

こちらの視界に入ってきた鎧イツセー先輩が指さす方を見ると、デイモスがやたらめったらと雷撃を撃ちまくっている。

うーむ、多分吹っ飛んでる途中で偶然射線に入ってしまったんだろうが、覚えがないなあ。

それよりも、フェイト嬢の横にダボダボのYシャツをきた5歳くらいのミニフェイト嬢がいる事の方が、個人的に気になるんだが。

誰だ、あの子？

「……悪いな、イツセー先輩。身体中痛すぎて、食らったかどうかもわからないな——ゴフツ」

「おおあああああつ!?」
口から血がドバアツて!?
救急車、救急車ああ!!」

今頃になってせりあがってきた血反吐が零れたのを見て、さらに錯乱するイツセー先輩。

心配してくれるのはありがたいが、こうも騒々しいのは如何なものか。

某ストライダーなら『素人めいた台詞を吐くな』と言うところだ。

「落ち着けて、先輩。強敵と戦ってるんだから、血ヘッド吐くくらいフツーフツ」

「うむ、このくらいはいつもの事だな」

「今コップ一杯分くらい吐いてたじゃねえか！ 全然普通じゃねーよ!!」

「どういう神経してんだ、あんたら!?!」

口を拭いながらの俺のセリフに同意する兄貴を見て、信じられない

と言わんばかりに頭を抱えるイツセー先輩。

娑婆しゃぼつ気が抜けない人だな、まったく。

ほんとにこの業界でやっていけるのだろうか。

例のシスターの事を踏まえて、これからは『赤龍帝』じゃなくて『へたれドラゴン』とでも呼んでやるか。

右往左往するイツセー先輩に生温かい視線を送っていると、強烈な気配がこちらに向かって来るのを感じた。

……どうやらインターバルは終わりらしい。

ある程度回復した身体を起こすと、機関部の穴のむこうでギースが手招きしているのが見える。

傍らを見れば、サイラオーグの兄貴も身体を起こしてMr.カラテを見据えていた。

「とりあえず、お互い生きて帰る事を考えようか」

「そうだな」

互いに苦笑いで言葉を交わし、俺達はそれぞれの戦場へ戻る。

「追撃を掛けないなんて、優しいところがあるじゃないか」

「優しさだど？ 笑わせるな。今のは強者の余裕にすぎん」

こちらの言葉を鼻で笑うギースを見据えながら、俺は再び構えを取る。

身体中にダメージは残っているが、動きを妨げるほどじゃない。

これならば十分に闘えるだろう。

「その辺はなんだっていいさ。こっちが休憩できたのには変わりないからな」

「フン……。ならば、第二ラウンドだ。立つのは弁だけではないところを見せてみる」

「応よー。度肝を抜いてやるぜー！」

啖呵と共に俺の身体から真紅の氣勢が立ち上る。

床を抜くほどの踏み込みで間合いを殺して放った拳は、蒼い気が宿った相手の腕に阻まれる。

返す刀で飛んでくる掌打を防ぐものの、その圧に押されて一歩分足が後ろに下がってしまう。

「ハアアアアアアッ!!」

「オオオオオオオッ!!」

そこから始まる足を止めての乱打戦。

互いの繰り出す打撃は空振りもちろんは勿論、ヒットやガードされた際にも余波を生み出し、周りにあるモノを次々と破壊していく。

「感心したぞ、小僧。今の私に付いてくる術を持っているとはな!!」

「……ッツ!?!」

愉悦をにじませたギースの声に、俺は無言で拳を返す。

こちらに話をする余裕はない。

正直、氣功闘術を舐めてた。

虎の子の4倍界王拳だったのに、まさか競り負けるとは。

ナメツク星でフリーザと戦った悟空も、こんな気持ちだったのだらうか。

この状況は非常に拙い。

身体能力、技量、氣の総量、全てにおいて奴の方が上。

なんとか食らい付いてはいるが、それも急激に氣勢が上がったが故に殺氣のいんとく隠匿が甘くなって、攻撃を読みやすくなったからにすぎない。

とはいえ、最大強化の界王拳をいつまでも維持できない以上、このままでは押し潰されるだけだ。

状況を打開する為に何度か『当て身投げ』や『竜巻捕縛』を狙っているが、全て読まれてしまっている。

こちらの手数が減り押し込まれて行く中、焦りを抑えながら頭を回転させていると、不意に身体から力が抜けていく感覚を覚えた。

連戦に加えてキマイラ戦の無茶な界王拳の使い方が仇になったか、氣脈の巡りが悪くなっている。

「甘いぞ、小僧! 疾ッ!!」

界王拳維持の為、氣脈操作に集中しようとした刹那、至近距離から放たれたダブル烈風拳によって、ガードしていた両腕を大きく跳ね上げられた。

これはヤバい!?

「デッドリーレイブ!!」

氣が籠められたシオルダータツクルから、乱打戦のモノなど比較にならないくらいの連撃が叩き込まれる。

繰り出される打撃の回転速度に、躲す事はおろか防ぐこともできない。

こちらに出来たのは当たる瞬間に小さく動く事だけ。

「ハアアアアアアッ!!」

胴にめり込んだ双掌からの氣功波によって吹き飛ばされた俺は、屋根と壁をぶち破って運転席に飛び込んだ。

スクラップと化した計器類に身体をめり込ませて呻いていると、巻き添えを食った骸骨車掌が頭だけで飛び跳ねながら、こちらに抗議してくる。

「……すまんね、わざとじゃないんだ」

それだけ言って計器類に身体を預けると、外から『Die yobbob!!』と、ギースの勝ち台詞が聞こえてきた。

……あの用心深い男が、こちらの生死を確かめないとは珍しい。

それだけ、あの『デッドリーレイブ』に必殺の自信があるというところか。

ギリギリで小細工を聳したとはいえ、食らった当人も生きている事が不思議なんだから、然もありなんと言うやつだが。

兎も角、貴重な休憩は無駄に為すべきではない。今の内に現状を確認しよう。

こちらのコンディションは最悪の一言だ。

全身傷塗れな上に、さつきので肋と胸骨が逝った。

ゼロ距離からの氣功波を二度も受けた為に、内臓のダメージもヤバい。

氣脈の方はさつきの不調を省みて急ピッチで回復させているが、界王拳はあと一回が限界だろう。

体力も残っているのは雀の涙。

今ならリアス姉のビンタでも死ねる自信がある。

さて、ないない尽くしの散々な有様だが、実はまだ望みはあったり

する。

まあ、地獄に垂らされた蜘蛛の糸ほどに心許ないものだが、死ぬほど無茶をすればこの詰みかけた盤上をひっくり返すことが出来るはずだ。

軋む身体に力を込めて計器類から脱出すると、背中に刺さっていた破片と一緒に血の雫が床を汚す。

『デッドリーレイブ……。我等が秘拳、龍虎乱舞の模倣品だったな。少しは見れるようになったではないか』

『老人は古いものに固執するから始末に負えん。私のデッドリーレイブは、貴様等のカビ臭い龍虎乱舞などすでに超越している』

『戯け。技とはな、完成してからが肝要なのだ。実戦で磨き、何度も見直し、至らぬ点は改良する。薄皮を何層も貼り重ねていくような気の遠くなるほどの努力と研鑽けんさんの果てに、初めて技は必殺の威を宿すのだ。貴様の技など、まだまだナマクラにすぎぬわ!』

ダメージと貧血でかかった頭の霧を払っていると、ギースとMr.カラテの言い争う声が聞こえてくる。

まったく、あのおっさん共はなにをしているのか。

『口の減らん爺だ。今度は貴様が死んでみるか?』

『面白い。あの未熟者の相手も飽きてきたところよ、真の龍虎乱舞を見せてやろうぞ!』

『おいおい。仲が悪いのは勝手だがよ、喧嘩ならこっちの決着を点けてからにしてくれねえか』

車掌室から現れた俺の姿を見たギースは、崩れないと思っていた不遜ふそんな表情を驚きに変えている。

「貴様……生きていたのか」

「忘れたのか? しぶといのは俺の取り柄の一つだぜ」

ニツと笑いかけてやるとギースの顔から表情が消えた。

奴さん、デッドリーレイブで仕留められなかったのがよほど腹に据えかねているらしい。

「……貴様のゴキブリ並みの生き汚さを忘れていたわ。ならば、今度こそデッドリーレイブで叩き潰してやろう!!」

言い放つと同時に、周囲に旋風の渦を生み出しながら奴の気が爆発的に高まる。

ありがたい。

誘うまでもなく、狙い目に行っている技を使ってくれるらしい。

こつちはまともに競り合う力なんて残っていないのだ。

ここで普通に削られたら、手も足も出ないところだった。

「デッドリーレイブ!!」

全身に蒼い氣を纏って襲い来るギースの姿を見据えながら、俺は深く息を吸った。

同時にポンコツ寸前の経絡を身体に残った掛け無しの氣を巡り、叩き起こされた死にかけの身体から深紅の氣勢が立ち昇る。

界王拳の増幅率は限界を大きく上回る8倍。

事が終われば確実に身体がイカれるだろうが、その辺は無^M限^Uの闘^G争^ENの保護機能に期待だ。

「ハアアアアアアアアッ!!」

気合と共に放たれた左の上段突きを手首を払う事でいなし、続いて右の中段掌打、左中段蹴り、右中段掌打、左下段回し蹴りと次々に襲い来る攻撃を冷静に捌いていく。

簡単に言っているが奴の放つ打撃は、その一撃一撃が途^{とてつ}轍もなく速い。

キマイラの時に体験した『死に際の集中力』が無ければ、とても捌ききれないほどだ。

「馬鹿な……! 貴様の様な未熟者に、私の攻撃が見えているというのか!」

「見ちゃいない。だが、感じるのさ。あんたが攻撃を放つ前に、あふれ出る殺氣が軌跡になってな!」

「殺氣だと……!?!」

「そうだ! 普段のあんたなら隠し通したんだろうが、『真人』となつて氣が膨れ上がった所為で隠匿が甘くなった! さらにデッドリーレイブはオリジナルである龍虎乱舞と同じく、氣の操作で闘争本能を刺激して限界以上の力を引き出す技! その氣の運用に殺人拳であ

る大南流合気柔術を使用した^たが為に、それがさらに顕著^{けんちよ}になったのさ！
！ 今のあんたの攻撃は、他心通^{たしんつう}に長けた大南流を使う者には放つ前に全部筒抜けだ！
活人拳である極限流の龍虎乱舞ならこうはならなかった!!」

「ッ!? 黙れ!!」

激昂した声と共に放たれる右の掌底アッパー、しかしそれも事前に殺気が軌道を教えてくれているので問題なく捌く。

一度目は4倍界王拳でもスピードに付いて行けなかった為に打点をずらす事で精一杯だったが、今なら対処が可能だ。

もつとも、動く度に身体の中から何かが切れる音がしたり皮膚が空気で裂けたりしてるので、そう長くはもたないだろうが。

さらに襲い来る右の中段回し蹴りを躲し、胴狙いの双掌打を下から跳ね上げると、外れた奴の掌から放たれた強烈な氣功波が上空に立ち込めたモヤを大きく切り裂いた。

「デッドリーレイブ、捌き切ったぞ!!」

「おのれえ!」

ギースと視線が交差する中、俺は界王拳で高めた力を両の拳に集中させる。

いくら奴でもここまでの大技を撃った後ではフォローは効かない。

詰みになった盤を覆すならここしかない!!

「おおおおおおおおおおおつ! 天地神明掌!!」
てんちしんめいしょう

紅い氣勢が収束した右拳がギースの腹部に突き刺さり、奴の身体を大きく跳ね上げる。

「ぐうはあああああつ!」

目を見開き、血反吐を吐き出すギース。

インパクトの瞬間、折れた骨が手の甲から飛び出し、拳に激痛が走るが、意志の力で無理やりねじ伏せる。

吹き飛ばされて宙を舞いながらも、こちらを見下ろすギースの眼はまだ死んではない。

未完成だが、単発の技では最高の威力を誇る天地神明掌でも、奴の意識を刈り取る事は出来なかった。

ならば、必ず返しが来る……!!

「Die——」

「狂雷——」

奴が頭上に上げた両手に巨大な氣の塊を造り上げると同時に、俺は残った左手に雷撃を生み出す。

奴が放つのは変形の『レイジング・デッドエンド』

あれに対抗できる技は一つだけ、それにすべてを掛ける!!

「Forever!!」

「迅撃掌!!」

天に掲げた左手を握りしめると同時に、視界が蒼に染まった。

風が荒れ狂う唸り声と落雷の轟音が耳を打ち、こちらが生み出した雷を孕んだ暴風が身体を浚さらおうと周囲に吹き荒れる中を俺は齒を食いしばって耐える。

そうしてどのくらい時間がたったのか、風雷が止むと共に視界を覆っていた蒼の光が消えると、そこには全身傷だらけで膝を突くギースに姿があつた。

砕けた右手を押さえながら睨みつけていると、ゆっくりと立ち上がったギースは天に向けて大笑すると

「See You Next Nightmare……!!」

と言葉を残して、蒼い光と共に消えさった。

「……二度と御免だ、馬鹿野郎」

ギースの残滓となった光の欠片に悪態をついた俺は、全身の力が抜けるのに任せてその場に座り込んだ。

……さすがにもう限界だ。

出せるモノは全部出し尽くした、逆さに振ったつてもう鼻血も出ねえ。

周りでみんなが闘ってなければ、仰向けにブツ倒れてるところだ。一つ息をついて視線を車両後方に向けると、サイラオーグの兄貴とMr.カラテの闘いも終盤を迎えつつあった。

「儂の攻撃を……まで耐えるとは、タフネスと根性は及第点のようだな」

腕を組み、尊大に言い放つカラテに兄貴は荒い息を吐くだけで言葉を返す余裕はないようだ。

ほぼ無傷のカラテに対して兄貴の方は満身創痍、そうなくても仕方ないだろう。

「氣の練り、技の冴え、全てにおいて本来なら落第と言う他ないが、その根性に免じて最後の試しを用意してやろう」

「……押忍ー」

……対戦だったはずが、知らない内に極限流の試験みたいになっている。

まあ、相手は最高師範なんだからこんな形になるのも仕方ないか。

あの爺さんとマジで闘ったら俺も一方的にやられそうだし。

齢七十を超えてギースと同等の氣の量とか人外にも程がある。

二十歳そこらであれに勝ったりヨウ師範は、マジで化けモンである。

「試しの内容は単純じゃ。儂がこれから全力で霸王至高拳を貴様に放つ、それを霸王翔吼拳で相殺してみせよ!!」

いや、あんたの霸王至高拳は本気なら三連発じゃねーか。

兄貴はまだ単発しか撃てないのに、いくらなんでもそれは無茶だろ。

「押忍ー！ お願いします!!」

俺の心のツツコミも虚しく、フラフラながらも出せる声量の限りで答えた兄貴に、カラテは自身の氣を練り上げていく。

氣の高まりに比例して大氣が震え、放出される圧力に耐えかねた金属製の床が、カラテを中心に大きく陥没する。

……信じられねえ。一瞬とはいえ、さっきのギースの氣の量を上回りやがった。

あの爺さん、やつぱり化け物だ。

「ゆくぞー！ 霸王至高拳!!」

カラテの両腕から放たれた等身大の巨大な氣弾が風を巻いて兄貴に襲いかかる。

「うおおおおっ！ 霸王翔吼拳!!」

兄貴も練り上げた氣を放つが、その大きさは至高拳に比べて一回り小さい。

それでも尚押し返そうと、齒を食いしばって抗うサイラオーグの兄貴に、カラテは次弾を用意しながらも激を飛ばす。

「どうした、小童！ 貴様の力はその程度か!! そんな情けない様で、貴様と同じように生まれや才によって冷遇された者達を、支え導くなど片腹痛いわ!!」

「……ッ！ なぜそれを!?!」

「そのような些末事さまつごと、どうでもよいわ！ よいか、他者を導くのは容易い事ではない！ その者の過去や苦悩と向き合い、場合によっては人生をも背負わねばならん！ リョウ・サカザギが貴様にしたようにだ！ 小童、この程度の圧の前に屈しようとしている貴様に、かような真似ができるか!?!」

怒声と共に放たれた二撃目によって、兄貴の膝が地に付く。

しかし、窮地にあつてもその目は死んでおらず、ギラギラとその光を強めている。

……リョウ師範とユリ女史の育児をぶん投げた爺さんが言うな、というツツコミは空気を読んで控えておこう。

「……確かに、今の俺にはその力は無いのかも知れん」

兄貴の口からこぼれる諦めの言葉。しかし、それとは裏腹に膝を突いていた足は、再び地を噛み締めんとしている。

「だが、俺は諦めん！ 今が無理でも己を鍛えて、必ず皆を支えうる力を手に入れてみせる!! 師範は言っていた、『極限流は己の限界を超える拳だ』と！ ならば、俺も今ある限界を超えてみせる!!」

「咆えたな、小童！ ならば、我が至高拳、見事退けて見せいッ!!」

「おおっ!!」

裂帛の気合と共に萎えかけた両腕を突き出す兄貴。

その動きに後押しされるかのように、寸前まで押し込まれていた翔吼拳は二発分の至高拳をドンドン押し戻していく。

「……まではよし！ だが、最後の一押しが残っておるわ!!」

至高拳を巻き込んだまま、中間地点を超えて迫り来る翔吼拳に三発

目を放とうとするカラテ。

「おおおおおっ!!」

しかし、主の気合に勢いを増した翔吼拳は至高拳をも飲み込み、さらなる巨大な氣弾となってカラテに襲いかかる。

このタイミングでは三発目は間に合わない!!

「……!・チエストオオオオツツ!!」

身の丈を越す巨大な氣弾がその身を呑み込もうとした瞬間、『パコーン!!』という小気味よい音と共に、翔吼拳はカラテが放った神速の正拳によつてその姿を消した。

「なッ!・あの巨大な翔吼拳を拳一つで……!?!」

「虎煌破碎掌。氣を込めた拳によつて氣弾を砕く、極限流奥義の一つよ。覚えておけ」

先ほどの逆転で精魂尽き果てたのか、纏っていた氣が消失したサイラオーグの兄貴を見据えるカラテ。

むこうも大氣を震わせていた強大な氣は無く、よく見れば天狗の面の右眼部分が欠けている。

「フッ、この面に傷を付けたのならば、及第点をやらねばなるまいな」
「……最高師範」

先ほどまでの聞く者の心胆を縮み上がらせるものとはまったく別の、深みのある落ち着いた声を兄貴にかけるカラテ。

「サイラオーグ・バアルよ、肝に銘じておくがいい。今、お前が放ったものこそが真の霸王翔吼拳。いかなる氣功波をも貫き、敵を打ち砕く超必殺技よ」

「……ッ!? 押忍!」

思考が上手く働いていないのだろう、慌てて返事を返すサイラオーグの兄貴に軽く頷いたカラテは、ゆっくりと踵を返す。

「此度の試練、ご苦勞であった。次に見える時には更なる研鑽を期待する」

「押忍!・ありがとうございました!!」

兄貴の礼を背に床を蹴ったカラテの姿は、瞬く間にモヤの中に消えた。

それと同時に限界を超えていたサイラオーグの兄貴は、崩れ落ちるようにその場に座り込んだ。

「生きてるか、兄貴」

「大丈夫と言いたいところだが、こちらも限界だ。もう指一本、動かす力も無い」

「こつちも空ツ欠だ。リアス姉を助けてやりたいが、こりや無理だな」
「仕方ない、リアス達を信じるとしよう」

「ああ。美朱やイツセー先輩もいるし、何とかなるだろ」

俺達は互いに息を付きながら、リアス姉達が闘っている最後の戦場に目を向けた。

がんばれよ、みんな。

閑話 『兵藤一誠救出指令（結）（後編）』

日の光とは異なる謎の光源に照らされて赤紫色に染まるモヤの中を、傷だらけになった生ける機関車が血を撒き散らしながら疾走する。

車上で行われていた激しい戦闘も二つはその幕を閉じ、残るは魔の理により死を超越した不死者デイモスとリアス姉率いる眷属+αの闘いだけだ。

「いくぞ、F2！ あちきと合体攻撃だ!!」

「わかった、姉さん！」

「いけ、いけ！ らいこー!!」

『サンダー・スマツシャー!!』

ドクロの意匠が刻まれた魔杖から放たれる緑の弾幕を器用に躲しながら、宙を舞うフェイト嬢とミニフェイト。

二人の手にある機械的な黒い杖の先端から特大の電撃が放たれる。

「甘いぞ、幼子達よ」

しかし周囲のモヤを焼きながら死者の王に向けて疾る雷光は、その身に届く前に魔杖の一閃によって掻き消されてしまう。

「あゝ！ また消えた!!」

「……ッ!? やはり魔法無効化能力なの!？」

不満を隠そうともせず頬を膨らませるミニフェイトと、厳しい表情で杖を構えるフェイト嬢。

そんな二人を眼窩がんかに灯った赤い光で捉えたデイモスは、ゆつくりと手にした魔杖をそちらに向ける。

「では返礼だ。人の業の落とし子と我が軛くびきを断ちし蘇生者よ、この程度で落ちてくれるなよ。『Wall Of Fire』!!」

術の名と共に魔杖の先端から放たれた炎は、進路上に紅蓮の壁を築きながら少女たちへと牙をむく。

しかし、火の粉を上げながら地を這う紅き大蛇が二人を呑み込む寸前、疾風を纏った影がその身を奪い去る。

フェイト嬢達を脇に抱えながら宙を舞うのは、菖蒲色あやめの忍装束に身

を包んだ美朱だ。

「朱姉、合わせて！ プラズマブレイド!!」

「ええー！ 雷よ!!」

トンボを切りながら美朱は残る右手で紫電の苦無を投げ、同時に逆方向に陣取った巫女装束の朱乃姉も白雷を放つ。

「ぬう……ッ!?!」

デイモスは杖を構えて相殺しようとするが、魔法ではない二条の雷撃は消える事無くその身を弾き飛ばす。

「今よ、イツセー!!」

「はい、部長!」

リアス姉から敏捷強化の術式を受けたイツセー先輩が、背中からアフターバーナーのようにオーラを放出してデイモスに迫る。

「うおおおおおっ！ 食らえ、おとし漢のナツクル!!」

「まだまだ獲らせはせん、赤龍の戦士よ！ 『Rebirth Gravity』!!」

体勢が整わないままにデイモスが魔杖を天に掲げた瞬間、奴の周りに光の柱が立ち昇り、それに触れたイツセー先輩はまるで見えない手に引っ張り上げられるように天に向けて上昇していく。

「うわあああああああつ!!」

「さあ、墜ちるがいい!!」

魔杖を振り下ろすと同時に光の柱は消え失せ、空中に放り出されたイツセー先輩は受け身を捕る事も出来ずに床面に叩き付けられる。

「がはっ!?!」

「空中遊泳は楽しんでもらえたかな？ これはオマケだ、『Fire

Ball』!!」

「ぐああつ!?!」

まるで子供に語り掛けるような口調とともに、デイモスの頭上から放たれた火球が落下地点で蹲うずくまっているイツセー先輩を吹き飛ばす。

「むう、いけません！マジックファイア!!」

「チツ、使えねえな、あのヘタレ小僧はよッ！ 行けや、影の獣共!!」

イツセー先輩の窮地にラスプーチンは火球を、バロールは自身の影から飛び出て来た漆黒の狼に似た獣を放つ。

「やらせはせんよ、『Ice Storm』!!」

しかし、二人の攻撃はデイモスを守る様に渦巻く氷雪の嵐によって容易く凍り付き吹雪の一部となった。

そして、吹雪の中から飛び出した巨大な氷の礫^{れき}が二人を襲う。

「うぬう、小癩な……!」

「クソツッ! 野郎、へ々な上位ドルイドよりも腕が立ちやがる。坊やの身体で相手にするには骨が折れるぜ……!」

ラスプーチンは瞬時に自身の身体を石に変えて防ぎ、バロールは影から呼び出した熊型の獣を盾にしてやり過ごす。

「虎煌拳!!」

マシングンの掃射のような礫^{れき}も止みデイモスを包んでいた吹雪も薄れた瞬間、狙いすましたかのように紅い魔力弾が奴の胸元へ飛ぶ。

「むん!」

デイモスはすかさず魔杖で打ち消すが、同時に石のままだったラスプーチンを踏み台に跳躍した小さな影が頭上から躍りかかる。

「確か、飛燕龍王脚!!」

足に紅い滅びの魔力を宿した飛び足刀で急降下するのはミリキヤスだ。

「……龍王じゃない、龍神脚だ」

どこかムスツとしたサイラオーグの兄貴が発するツツコミに苦笑いが浮かぶ。

まあ、技名を間違えてるくらいはご愛敬だろう。

「これだけの魔力を持ちながら肉弾戦を好むか、なかなか面白い坊やだ。しかし……!」

「うわあ!」

仕掛ける機は悪くなかったが、氣、この場合は魔力の練りが悪い為、ミリキヤスの龍神脚は掲げた魔杖によってあっさり防がれた。

無効化の影響で滅びの魔力は消え、反動で跳ね返ったところをデイモスの放った魔力波によって大きく吹き飛ばされてしまう。

技の型はできているが、全体的な練度が足りなすぎる。

まあ、將軍様との戦いで兄貴が使ったのを見よう見まねでマスターした特異な才を思えば、練度不足なんてすぐに解決するだろうが。

吹き飛ばされながらも空中で器用に体勢を整えたミリキヤスは、残された機関部の先端を足場にして距離を取る。

「……ッ！　こうも攻めきれないなんて……」

「魔法の運用が上手すぎますわ。あの鉄壁と言うべき術理を何とかしなければ……」

「あの杖の魔法無効化も厄介だよ。あれがあると私も姉さんも何もできない」

「ブーブー！　ずっとこいぞー、ドクロのおっちゃん！　そんなにあちききを使い魔になるのはイヤか!!　使い魔になったらあちきに魔法のお勉強教えたり、抱き枕になったり、特典いっぱいなんだぞ!!」

「ふむ。幼女よ、それは特典ではなく労働と言うのではないか?」

「?　アンジェリアのお姉は、美少女に仕えるのはご褒美だと言ってたぞ。マールインだつて抱き枕とか武器にされても嫌そうな顔してなかったし。あと、裸Yシャツは乙女のいっすい張羅だつて」

「……憶えておきなさい。それは極めて特殊な趣味の者の話で、普通の人はそんな事ではあまり喜ばないのだよ。あと、裸Yシャツの事は忘れるように」

「そうなのか?　F2」

「……私も姉さんの恰好はどうかと思うよ?」

「(・ω・)」

なんだあれ。

敵味方の掛け合いのはずが、途中からミニフェイト嬢の情緒教育に変わったぞ。

フェイト嬢も姉と呼んでるし、ホント何者なんだ、あの娘。

「敵との漫才はその辺にしとけ、ガキ共。今からそのドクロ野郎の首を獲らなきゃならないんだからな」

言葉と共にラスプーチンと現れたのはバロールだ。

奴はどこで手に入れたのか、唾くわえた煙草から紫煙をくわらせながら深

紅に染まった瞳でデイモスを睥睨する。

「ほう。今、私の首を獲ると言ったかね？ 少年の身体に潜みし魔神よ」

「ああ、言っただぜ。幻聴でも何でもねえから安心しな」

「随分な大言だ。それだけの頭数で攻めながら、我が魔法に阻まれてまともな傷を負わせられなかった君がそれを言うかね」

「確かにお前さんの魔法の腕は大したもんだ。オレが生きていた時代でも、そこまでの腕を持った魔術師は片手に数えるほどしかいなかった。けどよ、そろそろだろ？」

「なに？」

ギヤスパアの顔でひどく酷薄な笑みを浮かべるバロールに、デイモスの眼窩に灯る紅光が戸惑う様に揺らぐ。

「魔法の矢や火球なんて基本的な魔術を初めとして、氷精召喚、重力制御、壁が出来るほどに強力な火炎放射に雷撃、そう言えば、毒霧の噴射なんかもあったよな。さて、それだけの大魔法をポンポン撃ったお前さんにはどれだけの魔力が残っているかな？」

その言葉に場にいた全員がデイモスの方に目を向ける。

言われてみれば、奴から立ち昇る魔力の勢いが弱まっている。

それに、杖とは逆の手に持った水晶球に込められた魔力も、かなり目減りしているのを感じる。

「……なるほど。それを狙っていたからこそ、君はその強力な魔眼ではなく影の獣を喉けていたという訳か」

「優れた魔術師を殺るには魔力切れ狙いが常套手段だからな。今回は頼りになりそうな連れが引き離された事もあって、念入りにさせてもらっただぜ？」

「ちよつと待て。じゃあ、俺達にひたすら攻めろって言ってたのって……!？」

「少しでも奴の魔力を削るために決まってるんだろ」

バロールが浮かべる見事なゲス顔に、ドン引くりアス姉達。

「さて、おしやべりはここまでだ。覚悟はいいか、ドクロ野郎」

「生憎だがそんな覚悟はできんよ。……来るがいい、魔術師の手腕とは『今ある魔力を如何に使うか』という事を教育してやろう」

ローブをはためかせて魔力を滾らせるデイモスに襲い掛かる一同。まあ、バロールを除く各人がどこか納得のいかない表情なのは仕方のない事だろう。

「なんか引つかかるけど気にしてる場合じゃねえよな！ 行くぜええええええツ!!」

初手を取ったのは紅い鎧に身を包んだイツセー先輩。

後方に控えている葉箱——もといアーシア先輩の治癒を受けた彼は元氣いっぱいに進軍する。

「今度こそ食らえ！ 漢のナツクル!!」

「せつかくだが遠慮させていただこう、『Project Image』!!」

杖を掲げて詠唱を終えると、デイモスが6体に増殖する。

「なんだそりや!?!」

驚きながらもイツセー先輩はその一体に身体ごと突っ込む勢いで拳を振るうが、インパクトの瞬間にそのデイモスは掻き消え、勢い余ってつんのめった先輩の背後に緑の魔力弾が突き刺さる。

「ぐあああああつ!?!」

「猪武者な龍の戦士はこれでいいとして、今度はいい加減目障りな後方を潰させてもらおうか、『Lightning Bolt』!!」

鎧の破片を撒き散らして吹き飛ばす先輩を尻目に、デイモスはリアス姉達に向けて雷撃を放つ。

「やらせませんわ! ……雷光よ!!」

しかし、その光の鞭は朱乃姉の雷光によって打ち消され、さらに紫電の苦無と深紅の魔力弾によって幻影の3体が消滅する。

というか、撃つたびにそんな嫌そうな顔しなくてもいいじゃねえか、朱乃姉。

「チイ………ツ!?!」

「へっ、漸くそのすまし顔が歪みやがったな」

「勝ち誇るにはまだ早いと思うがね、『Magic Missile』

!!

後方でドヤ顔を浮かべるバロールに放たれる緑の魔弾、だがそれも影から這い出た獣によって防がれてしまう。

「幻影を生んどいて墓穴を掘りやがったな、馬鹿が！ 忍者娘!!」

「了解！ フェイトちゃんズもよろしくね！」

「おう、おまかせだ！ F2!!」

「はい！ バルディッシュ、アークセイバー、セット！」

『Arc Saber』

「私もお供しましょう！ ライトニング!!」

バロールの号令によって上空に陣取ったフェイト姉妹、地上のラスプーチンから魔法が放たれ、その中を美朱が駆ける。

鎌型に変形したバル2達から発射された二本の黄色の刃と、なぜか天高く足を上げた状態で落雷を受け、レントゲンよろしく自分の骨格まで見せた上で放たれた雷球。

デイモスを挟み込むように飛来するアークセイバーが2体の幻影を打ち消し、本物に飛来した雷球は魔杖によって打ち消されたが、その間に美朱が奴の懐に飛び込んでいる。

「もらったよー！」

「そうはさせせん！ 『Wall Of Fire』!!」

咄嗟に突き出した魔杖の先端は下から逆袈裟に斬り上げようとしていた美朱の腹部を捉え、次いで放たれた炎がゼロ距離からその身体を呑み込んだ。

炎の奔流の中で瞬く間に消えていく人影、それを見ても仲間たちに悲嘆の表情は見えない。

何故ならば――

次の瞬間、デイモスの真上から流星のように降り注いだ美朱がデイモスの身体を袈裟斬りに切り裂いたからだ。

「な……ッ!?!」

「俺！ オンアピラウケンソッバカ
阿毘羅咩欠蘇婆訶!!」

「ぐおあああああつ!?!」

真言を唱えながら、分身と共に縦横無尽にデイモスに刃を走らせる

美朱。

前後から腹を薙ぐと同時にデイモスの身体が大きく吹っ飛んだ。

『伊賀忍法奥義 梵天閃光陣』
ぼんでんせんこうじん

今は無きADKのネオジオ用格闘ゲーム『ワールドヒーローズ』の主人公『ハンゾウ』こと『服部半蔵正成』が使う超必殺技である。

「見事……ッ!? しかし、詰めが甘いぞ!! 『Meteor Swarm』!!」

だが、デイモスも伊達にラスボスを任されているわけではない。

弾き飛ばされながらも魔杖を天に翳すと、次々と天に虫食いのような穴が開き、そこから真っ赤に焼けた隕石が飛び出してきた。

「なんて無茶苦茶な召喚魔法をッ!? 回避よ、みんな!!」

相手が放った魔法のスケールに度肝を抜かれながらも、全体へ敏捷強化の魔法を放つリアス姉。

魔法の効果で格段に動きが速まったみんなは、襲い来る隕石を躲していく。

だが、一人だけ動けない者がいた。

美朱だ。

奥義の撃ち終わりで発生した硬直は、敏捷強化の魔法を持ってしても美朱に自由を与える事はなかった。

そして、その頭上には赤熱化したバスケットボール大の岩が迫っている。

周りに降り注ぐ隕石に比べれば随分と小振りだが、頭に当たれば人の命を奪うには十分な威力を持つ。

それが美朱を捉えようとしたその時、

「させるかあああッ!!」

両手に過剰なまでの滅びの魔力を宿したミリキヤスが飛び込んできた。

「兄様、技を借ります! レイジング……ッ! ストオオオオム!!」

気合いと共に地面に手を打ちつけると、荒れ狂う真紅の嵐がミリキヤスと美朱を包み込み、その威に巻き込まれた隕石は欠片も残さず消滅する。

……威力も範囲も未熟だが、あれは紛れもなくレイジングストームだった。

なんか弟分がエライことになっているんだが。

「まさか、我が最大魔法を持ってしても一人も討ち取れんとは……?!
だが、まだ雌雄が決した訳では——」

「いいや、チエックメイトだ」

不屈の闘志で魔法を放とうとするデイモス。

しかし、手にある魔杖から魔力が放たれる事はない。

それどころか、宙を舞うデイモスの身体がまるで固定されたかのよう
に、その体勢のままピタリと止まってしまっている。

「これは……っ?!」

「これがお前さんがさつき口に使っていた魔眼の力だ。なかなかオツな
もんだろう?」

動く事も出来ないデイモスを視界に収めたバロールは、瞳に宿った
紅い光を一際強くする。

「見えてるか、ギヤスパーク坊や? これが俺の魔眼の正しい使い方だ。
一対の魔眼で効かないのなら効くまで数を増やせばいいのさ、こうい
う風に」

自分の身の内にいる相棒へのバロールの言葉に応える様に、周辺の
影から獣が次々と顔を出す。

百はくだらない獣の瞳。

その全てが深紅の眼光を称えており、視線はデイモスへ張り付いて
いる。

「まさか、使い魔にまで魔眼の力を譲渡できるとは……?!」

「覚えとけ、切り札つてのは絶対に成功する土台を作ってから切るも
んなんだよ。さて、トドメは任せるぜ、へたれドラゴン」

「誰がへたれドラゴンだ!?!」

視線をデイモスに向けたまま勝ち誇るバロールの言葉に抗議の声
を上げるイツセー先輩。

「んな事はどうでもいい。わかっているとかがしくじるじゃねえぞ。
これを逃したら次は無いんだからな」

「ああ！俺の最高の技で決めてやるぜ!!」

気合いの入った声と共に、左手を天に掲げスタンスを大きく広げるイツセー先輩。

腰だめにした右拳を中心に身体から立ち上る真紅のオーラが、貯め込まれた力の大きさを物語る。

「部長！この拳に俺の全てを賭けます!!」

さらに勢いを増したオーラが宙に異様なモノを浮かびあがらせる。

それは一枚絵を連続で映し出す形で表された、イツセー先輩のサクセスストーリー。

赤龍帝の力で強敵を打ち砕いて冥界の危機を救い、地位を手に入れるのし上がる。

何故か水着姿のオカ研女子と美朱をはせせらせ、豪華な椅子の上で高笑いするイツセー先輩の姿を締めとして映像は終わり、同時に背中から最大級のオーラを放出してその身体が加速する。

「食らえ!! イツセええええええつ！百うう年ツ！ナツクルツツ!!」

「ぬおおおおつ!!」

最大倍化の『皆殺しのトランプット』を遙かに上回るオーラを宿した拳は時間停止の網に絡め取られたデイモスの身体に突き刺さり、一撃でその身体を打ち砕く。

「……………燃え尽きたぜ」

破壊を免れたデイモスの頭蓋が地面に落ちると同時に、何故か大の字に倒れ込むイツセー先輩。

「というか、瀕死レベルで気が減ってるじゃねえか!?

「倒された私が言うのもなんだが、彼を放っておいていいのかね？半分魂が出かかってるんだが」

「葉箱先輩！イツセー先輩が死にかけてる！治療を早く!!」

「葉箱ってなんですか!!」

頭だけなのに妙に冷静なデイモスの言葉と俺の失言にツツコミながら、手にしたシメサバ丸を放り出してイツセー先輩の元へ向かうアーシア先輩。

鎧が消えてジャージ姿に戻った胸元に聖母の微笑の光が当たると、弱っていた氣の流れが少しづつ活力を取り戻していく。

これならイツセー先輩は大丈夫だろう。

「ふむ。これならば、死に囚われる事はあるまい」

「ドクロのおっちゃん、なんであのお兄ちゃんを助けてくれたの？」

割と余裕で言葉を紡ぐデイモスの頭を持ち上げたミニフェイト嬢は、その眼窩の光を覗き込みながら首をかしげる。

「なに、気紛れさ。敗者が生き残り勝者が命を落とすなど、結末としては締まらないだろう？」

「そんなものなのか？」

「そんなものさ」

イマイチ理解できないのかしきりに首をかしげるミニフェイト嬢と、その小さな腕の中でカタカタと笑うデイモス。

やっぱりこのドクロ、人間臭い。

しかし、技を当てると同時に自分もくたばるとは……。

それにあのセリフと演出、今のつて『陣内兵太』の『10年ナックル』をアレンジした技なのか？

「うわあ……」

思わず口をついた呆れとも憐憫とも付かない声と共に、俺は頭を抱えた。

『兵太10年ナックル』

成人ゲーム『大番長』の同人格闘ゲーム『Big Bang Beat』に登場するキャラクター『陣内兵太』最大の必殺技だ。

寿命を十年削って繰り出す超威力の拳で、原作『大番長』ではこれを使いすぎると兵太は超呆気なく死ぬ。

『Big Bang Beat』でも実装され単発で相手の体力を5割は削る事ができるが、使えば結果に関わらず体力が1ドットまで減ってさらに反撃確定という、博打100%のロマンとネタの双方を併せ持つ技となった。

そういえば、先輩は撃つ時に百年とか言ってた。

まさかと思うが、本当に一発で寿命を百年削ってるんじゃないやあるまい

な。

アーシア先輩の膝枕の上で、妙に緩んだ顔を見せているイツセー先輩にため息が出る。

空気の揺らぎを感じて視界を巡らせると、周りを覆っていたモヤが消えて空間が元に戻り始めているのが見えた。

どうやらこの騒動にも、ようやく終わりが見えてきたらしい。

……ああ、疲れた。



さて、あれから数時間。

核に吹っ飛ばされる前に街を脱出した俺達は、ラクーンシティから離れた分岐路にいた。

あの後、散々暴れた反動か現実に戻った途端に列車がスクラップになり、トンネル半ばでアシを失った俺達は徒歩で残りの道を歩かなければならなかった。

道自体は普通の線路で妨害なんかもなかったのだが、体力が空の上
に界王拳の反動で全身が極度の筋肉痛だった所為で死ぬほど辛かった。

そんな状態でも誰の手も借りずに歩き通したのは、一重に漢の矜持
の為せる業だ。

というか、女性陣に運ばれるなんて情けない真似、死んでもするか
かってんだ。

その道すがらミニフェイト嬢改めF1嬢の事を尋ねると、彼女と使
い魔契約を交わしたデイモスが、頭だけだというのに随分饒舌じょうぜつに説
明してくれた。

なんでもF1嬢は、フェイト嬢を作成するにあたって発生した失敗
作達の魂と、サンプルとして残っていた検体を用いてデイモスが作成
した不死人だったらしい。

しかし、デイモスが一時目を離した隙にアンジェリアという名の高
位存在と接触し、『妹大好きな姉に悪い奴はいない』という謎理論で蘇

生させられたそうだ。

なるほど、F1嬢がデイモスに固執していた理由は形はどうあれ生みの親だったからか。

因みにデイモスがF1嬢を創り出した理由は、終始一貫して『モノ』として扱われた彼女に哀れみを感じたから、だそうだ。

どこの『赤おじさん』だよ、お前。

あと、イツセー先輩の『100年ナツクル』だが、やはりと言うか何と言うか寿命が100年しつかり減っていた。

当人はその事を知らなかった為、知った時にはムンクの叫びのような表情になっていたが。

今回の教訓は技に限らず、何かを使うときは性質をしつかり把握するといったところか。

それと、この技は『ドレス・ブレイク』に続く封印指定技になったのは言うまでもないだろう。

そんな感じで色々あった旅路も終わりを迎え、フェイト嬢達と別れる時が来た。

「ありがとうな、フェイト嬢。色々世話になった」

「ううん。私こそ、イツセーやみんなに会わなかったらあの町で死んでいたから。それに、姉さんにも会えなかっただろうし」

「そう言えば、これからフェイト達はどうするんだ？」

思いついたかのようなイツセー先輩の言葉にフェイト嬢の顔にわずかに影が差す。

「そうか、クローンである彼女達には後ろ盾が何も無いんだっとな。」

「それなら心配はいりません。彼女たちは私が責任を持って面倒を見ましよう」

突然満面の笑顔で話に入ってきたラスプーチンに、フェイト嬢を含めた俺達全員の顔が引きつる。

「え……あんたが？ 大丈夫なのか、それ」

「こう見えても私、身寄りのない子供たちを保護する養護施設の経営も行っているのです。そこには私の孫のラスプーチコもいますので、友達にも不自由しませんぞ」

「え!? あんた孫いんの! 　というか、ホモじゃなかったのかよ!」

「両刀使いですがなにか?」

「余計悪いわ!! ホントに聖職者か!」

「聖職者だからこそ、ですな。性別によって愛が偏っては全ての人を受け入れる事など出来ません」

冴えるイツセー先輩のツツコミを笑い飛ばすラスプーチン。

まあ、そういう考え方もあるのかもしれないが、幼児教育を任せるには適切な人材とは言い難いのではなからうか。

「そう不安そうな顔をするな。あの怪僧がこの子たちに悪影響を与えぬように私も注意する」

そう口を開いたのは、F1嬢との使い魔契約によってデフォルメされたまんまるドクロに姿を変えたデイモスだ。

こんなナリでも習得した魔法は全て使用可能というのだから、恐れ入るといふか何というか。

「んー、ドクロさんがそう言うってくれるのなら少しは安心できるかな」「うむ、任せよ。我が姿に思うところは無いわけではないが、契約を結んだ以上マスターを悪影響から守るのも使い魔としての責務ゆえな」安堵の声を出す美朱に頷いているつもりなのだろう、空中でクルクルと縦回転をするデイモス。

件のマスターであるF1嬢に目を向けると、彼女は俯いて不満げに頬を膨らませている。

「どうした、マスター?」

「ヤダ……ヤダぞ! せつかくお友達になれたのにお別れだなんて!! みんなもこつちに住めばいいじゃないか!!」

手をバタつかせながら地団駄を踏むF1嬢の姿に、みんなの顔に苦笑いが浮かぶ。

「姉さん、イツセー達にも都合があるんだから。そんな我儘を言ったら、みんな困っちゃうよ?」

「にゆう……でも、寂しいじゃないか」

フェイト嬢に後ろから抱きしめられた事で癩癩は治まったものの、F1嬢の紅い目に溜まった涙は決壊寸前だ。

「心配はいりませんよ、ネージュ」

その項垂れた小さな頭をラスプーチンは優しくなでる。

「ネージュ？」

「ええ、貴方の新しい名前です。いつまでもF1などという記号では
いけませんからね。お気に召しませんか？」

「……ううん。今までのよりはいい」

「それはよかった。即興で考えた物ですが、我ながら良い名が浮かんだ
だと思っていたのです。話を戻しますが安心していいのですよ、ネー
ージュ。今回の旅で彼等と私達には縁が結ばれました。人の縁とは強
いもの。たとえ時空を隔^{へだ}てていても必要があればお互いを巡り合
わせるものなのです」

「んーと……またミリキヤスやみんなに会えるって事か？」

「ええ、きつと」

「そっか。だったら、寂しいけどあちきは我慢するぞ」

「よく言いました、偉いですよ」

向こうの駄々っ子も納得したところで、名残惜しいがそろそろ別
れの時間だ。

「それじゃあ俺達は行くな。二人とも達者で暮らせよ」

「デイモス、そのおっさんから目を離さない様にしろよ！ マジで!!」

「じゃあね、二人とも！ また会おうね」

「フェイトさん、ネージュちゃん！ 今度あったら一緒に遊ぼう！」

「世話になった。冥界に来る事があれば歓迎しよう」

「フェイトちゃんもネージュちゃんもお元気で。ラスプーチン様、
デイモスさん、二人の事をよろしくお願いします」

「皆さん、またお会いしましょう」

「今回は助かったわ。こっちに来ることがあれば、その時はお礼をさ
せてもらうわね」

「イツセー、みんな、ありがとう。きつとまた会えるよね」

「みんな、また会おうな！ 絶対の約束だ!!」

「さらばだ。最後の障害を務めた者として、この言葉を贈ろう。君達
はよい挑戦者だったよ」

「みなさん、一時の別れです。この後のイベントで私を召喚しても良いのですよっ。」

「お断りします」

ハハ

(。ε。)

／

((U)) ノ／つ／つ))

(┌(ノノ

ノノノノ

εニ≡ J

」

「お断りします」

ハハ

(。ε。)

((U)ノノつ))

(┌(ノノ

εニ≡)ノノノ

」

「お断りします」

お断りします

ハハハハ

(。ε。)。ε。)

／

((U)) ノ／つ／つ))

(┌(ノノ

ノノノノノノ

εニ≡ JノJ

」

「お断りします」

ハハ

(。ε。) つ日 ザバー

川

「○」 お断りします

—お—ハハ

—断—。3。）

—り—／／

「○」（（）

し）

「お断りします

ハハ

((U、(。3。) / ((())

< / \、 / \

(——— |

／／／／

／／／／

／／

／／

」

「(・・3・・)」

変態が最後に立てようとした妙なフラグを全力で押し折り、俺達は漸くの帰路に着いたのだった。



時間にして一日足らず。

しかし体感時間ではもつと長い間不在にしていた感がある控室に戻った俺達が最初に目にしたものは、山に積まれた高級菓子の空箱とリスのように頬を膨らませながらコンソールの前でもつきゅもつきゅと口を動かす塔城の姿だった。

「……おふぁえりなふぁい」

「口の中の物を始末してからしやべれよ」

なんとも間抜けな様子に全員で呆れた視線を向けてやると、そこで初めて塔城は居住まいを正した。

「……突然、みなさんをモニターできなくなったので心配していたんです。無事でよかったです」

「ま、色々あったんでな。ともかくご苦労さん、場所変わるわ」

塔城に変わってコンソールの前に座った俺は、コンソールに指を走らせながら、画面を流れる情報に目を通していく。

今画面に出てるのは今回のリザルトだ。

ほー、今回から参加選手に評価がつくようになったのか。
なにになに……。

MVPは俺。

敢闘賞はサイラオーグの兄貴。

新人賞はミリキャスとイツセー先輩。 おおっ！ アーシア先輩も入ってるな。

最後はナメてる奴で賞……って『くにおくんの大運動会』かよ。

これはリアス姉と朱乃姉がもらっちゃまったか。

初っ端のポイント浪費が効いたのかなあ、やっぱ。

それで個人評価の報奨だが、これはガチャの回数追加のようだ。

MVPで5回、新人賞と敢闘賞は3回増プラス、ナメてる奴で賞は2回マイナスか。

大盤振る舞いかケチ臭いのか、よくわからんな。

他には個人の診断書やら評価の詳細やら細々したもののようだし、これは後でいいや。

さて、そんじやあ皆さんお待ちかねのガチャタイムと行こう。

俺はコンソール席を立つと、思い思いにへたばっている面々に向き直る。

「みんな、今回のツアーご苦労さん。今回も色々ヤバイ場面があったけど、全員無事に帰ってこれて本当によかったと思ってる」

「私達はともかく、慎兄とサイラオーグ兄は無事と言うには程遠いけどね」

美朱のツツコミに他のみんなから小さく笑いが零れる。

やかましいわ。死にぞこないだったのは自覚してるし、今飲んだ『エクスポーション』のお陰で回復してるわい。

「チャチャ入れんな、美朱。さて、今回の報酬として今からみんなにはガチャを引いてもらう。知ってると思うがこのガチャは今回初めて導入されたもので、詳しい事は俺にも良く分からん。その辺も踏まえて、ヤバいと思う奴は辞退してくれ」

俺の言葉に手を上げる者はいない。

「まったく、この欲深な業突く張り共め。それじゃあ、誰から行くよ？」

「私から行くわ！」

デカイ胸を誇張しながら立ったのはリアス姉。

どうなるか分からんって言ってるのに、この姉は……。

まあいいや、この際だから人身御供になってもらおう。

「じゃあ行くわよ！ あれだけ危険な目に遭ったんだから、ドカンとデカイのを当てて見せるわ!!」

説明を聞き、コンソールに追加されたガチャボタンを気合と共に押し込むリアス姉。

その結果は……

やくそう×3 ハイポーション×2 地返し玉×2 アライグマ

ん……最後がおかしい？ いや、おかしくない。

リアス姉が引き当てたのは名作アニメ『あらいぐまラスカル』の主人公ラスカルなのだから。

因みに原作でもそうだったが、アライグマというのはとっても気性が荒く悪戯好きで、人間と同居するのに極めて不向きな動物だったりする。

それが無限の闘争の闘士となれば、言わずもがなである。

件のラスカルもその例に漏れず、見た目に騙されて抱き上げようとしたリアス姉を逆に抱え上げ、イズナ落としの様に空中から錐もみ回転を加えて頭から落とそうとする、なんて鮮烈なデビューをカマして

くれた。

その体躯の小ささとは裏腹に、奴は投げキャラだったのだ。

床に激突する前にラスカルごとリアス姉を受け止めたのでなんとか事無きを得たが、それからリアス姉はラスカルを怖がるようになってしまった。

せっかく呼んだのだから、害獣として処理なんて結末は無しにしてもらいたいものである。

さて、先程の不幸な事故は置いて、こっからはサクサク行こう。

二人目、朱乃姉。

その結果は……

どくけし草×3 傷薬×3 ロトの鎧×1 チョコボ

何気にロトの鎧が出てきたのにはビビったが、ロトの血なんぞ毛の先程も入っていない俺達には無用の長物である。

さて、問題のチョコボに関してだが、呼び出されたのは子犬サイズの幼生だった。

大きな目に涙を浮かべてこちらを見上げる仕草にあつと言う間に籠絡ろうらくされた朱乃姉は、速攻で猫可愛がりし始めた。

むこうも鳥の癖に豊満な母性の象徴に顔を埋めて幸せそうにしていたので、ファーストコンタクト的には問題ないのだろう。

まあ、いくら可愛くても相手は無限の闘争の闘士。

一癖くらいはあると考えるのが無難と思われる。

取り敢えずポイントでキザールの野菜を交換して、当面の餌として朱乃姉に渡しておいた。

三人目はアシア先輩。

引いたのは

エリクサー×1 賢者の石×1 光のドレス×1 ハイポーション×3 リボン×1 上やくそう×3 まんげつ草×2 ペプシマン

序盤の鬼の引きには驚いたが、最後にしつかりオチを付けてくれました。

ペプシマンは例のBGMと共に颯爽と現れたものの、ポーズをとつ

たところで床に落ちていた瓶を踏んで転倒。

強打した頭をアーシア先輩に癒してもらったことで、呆気なく懐いた。

因みにアーシア先輩はコーラを飲むのが初めてだったらしく、ペプシマンの出したペプシコーラを飲むときは、おっかなびっくりだった。

四人目はミリキヤス。

結果は

豪傑の腕輪×1 プロテスリング×1 リフレクトリング×1

アモールのみず×2 仙豆×瓶いっぱい 命の木の実×3 力の種

×3 フェイト嬢とネージユ嬢

まさかの召喚である。

むこうもこんな早く再会するとは思っていなかったらしく二人してワタワタと混乱していたが、デイモスのお陰でなんとか落ち着きを取り戻した。

その後こちらの事情を説明したところ、二人ともミリキヤスの力になる事を快諾。

その際、ミリキヤスには悪魔に転生する事に関しては本人の意思を尊重する事と、眷属は道具でも奴隷でもないので当人の人権を尊重する事を口を酸っぱくして教え込んだ。

二人は眷属候補兼ミリキヤスの友人としてグレモリー家でお世話になるらしい。

……日本に帰る前に小父さん達に一言言っておこう。

五人目はいつの間やら、バロールからバトンタッチしていたギヤスパ。

本人もあまり理解しないままに引いた結果は

エクスポーション×1 万能薬×1 金塊×3 水の羽衣×1

エルフの飲み薬×1 フェニックスの尾×1 スプー ゴレムス

アクシデント発生である。

驚きの闘士二重召喚だったのだが、片一方が最悪過ぎた。

『スプー』

巨大なかぼちやに歪んだ顔と白い触腕が生えた姿をした化け物。
好物は『子供の肉』

この邪悪な怪生物は召喚と同時にミリキヤス達へと襲い掛かろうとした為、俺の『狂雷迅撃掌』とサイラオーグの兄貴の『MAX霸王翔吼拳』で即座に抹殺した。

呼び出したギヤスパーはこの世の終わりの様な表情をしていたが、その後に現れたドラクエのゴーレムであるゴレムスに無言で慰められていた。

うん、こんなこともあろうかと臨戦態勢を取っていて本当に良かった。

ギヤスパーについては、イヤな事件だったとしか言いようがない。気を取り直して六人目はサイラオーグの兄貴。

叔母さんの治療薬を求めての参加だった為、ボタンを押す指にも相当気合が入っていたが結果は

ソーマ×1 ブラックベルト×1 稽古着×1 世界樹の葉×1
マダラ蜘蛛糸×4 すばやさの種×2 体力の香×2 マルコ・ロドリゲス

一念天に通ず、と言うべきか。

小母さんを完治させる可能性を持つソーマと世界樹の葉をゲットする事に成功した。

もっとも、本人はその後に現れた兄弟子に恐縮しっぱなしだったが。

まあ、あの様子からすれば眷属にしようなんて思わないだろう。

七人目は美朱。

『ワンコ、カモン!!』と気合を入れて引いた結果は

黒頭巾×1 黒装束×1 盗賊の腕輪×1 宝玉×2 サンゴの指輪×2 反魂香×1 やくそう×1 クー・フリーリン

ワンコはワンコでも克蘭の猛犬が来ました。

「ようー！ サーヴァントランサー、召喚に応じ参上した。まっ、気楽にやろうや、マスター」

と気さくに声をかけてくれたにも関わらず、召喚した瞬間に俺と美

朱は二人して崩れ落ちた。

美朱は忍犬の召喚に失敗した為。

そして俺は日本に帰った後に浮上する彼の戸籍についての手続きや、日本神族所属の美朱にケルト神話屈指の英雄が付く事に関してダーナ神族と調整しなければいけない事等々の厄介事を思っただけで胃が痛んだためだ。

ランサー（こう呼べと言われた）はその様子に「自分が来たのは不満なのか!？」と憤慨していたが、事情を説明すると微妙な顔で納得してくれた。

兄妹そろって無礼者ですみません。

八人目はイツセー先輩。

『ハーレム王に俺はなる!』なんてほざきながらのガシヤの結果は
竜の鱗×1 守りの指輪×1 特やくそう×3 魔石×4 傷薬
×2 反魂香×1 いろは

……この男、マジで引きよった。

「はじめまして、旦那様。私、いろはと申します」

と三つ指でお辞儀する露出過多なメイド服風の衣装を身に纏った美少女を見た瞬間、当の本人は両手を振り上げて天を仰ぐという渾身のガッツポーズで、

「おっばい!!」

と、雄叫びを上げていた。

どう控えめに言っても最低である。

お陰で女性陣からの評価はまた下降してしまった。

しかし、なんで彼女はイツセー先輩をご主人様認定しているのだろうか？

原作ゲーム『サムライスピリッツ 天下一剣客伝』では彼女の使うご主人様IIゲームのプレイヤーだった。

もしかして、その設定が生きていて召喚者IIご主人様って事になっ
てるのだろうか？

まあ、そうだとしても懸念すべきは不純異性交遊くらいなんだが。
それだつて『ヘタレドラゴン』の称号を持つイツセー先輩なら、覗

きはしても手を出すような度胸は無いだろう。

ま、差し当たっては彼女の戸籍云々について、こつちで世話をするくらいか。

だって、童話『鶴の恩返し』をモチーフにした鶴の変化だし、あの娘。

で、最後は俺。

特に欲しいものも無かったので、何も考えずに引いてみたところ、やくそう×5　どくけし草×3　ポーシヨン×2　傷薬×3　GSX―デスマドウス×1　玉藻の前　というとんでもない結果だった。

『玉藻の前』

日本三大妖怪に喩えられる大化生。

その正体は九尾の狐と言われている。

さて、そんな大妖怪を呼び出したとあって、こちらも身構えていたのだが、現れたのは狐耳と尻尾をつけて露出強（誤字にあらず）の改造着物に身を包んだ天照様だった。

「謂れはなくとも即参上、軒轅陵墓けんえんりょうぼから、良妻狐のデリバリーにやってきました！」

なんて口上と共にポーズを取った彼女は、俺の『なにしてるんですか、天照様』という言葉にビシリツと固まった。

こちらとしては彼女が現れた時点で、訳が判らないのだが。「もしかして、天照大神と知り合いなんですか？」

と、顔を引きつらせながら聞いてきたので『部下です』と答えると「ようやく、貴方様の前に出る事ができたのに!？」と嘆きながらその場に崩れ落ちてしまった。

ガチ泣きする玉藻女史をなだめて話を聞いたところ、

彼女は大妖と呼ばれているが、本来は人に仕える事を目的に分かれた天照様の分霊であり、宇迦之御魂神うかのみたまのかみ、要するに御稻荷様なのだという。

「この世界の住人は、外界から修行に来る者の事を見ることが出来ません。貴方様の事は幼少の時から見させていただけいました」

「俺の事を？」

「はい、私好みのイケ魂でしたので。本来ならもっと早くに出会いたかったのですが、私は呪術師。無手の武術を修めようとしているあなた様とは、師としても対戦相手としても縁を造る事は叶いませんでした」

「それで今回の召喚に応じてくれたのか」

「はい。千載一遇の好機と喜び勇んで来たのですが、まさか本体の元に仕えているとは……」

尻尾や耳をしおらせながら項垂れる彼女に『何故天照様と知り合いだといけないのか』と尋ねると、もの凄く意外そうな顔で、

「え？　だって本体ですよ、本体。腹黒くて残虐で、私もドン引きするくらいの謀略家で。そんなのを先に知られてたら、私にもいい感情なんて抱けないでしょう？」

と捲し立てられた。

天照様、エライ言われようである。

それはともかく、分霊とは言え彼女は玉藻女史であり天照様は別人であるという此方の所見を伝えると、いたく感動された上に

「さすがは私が見込んだイケ魂！　子供の時からロツクオンしていた甲斐がありました！　こうなればこのタマモ、誠心誠意任せさせていただきます!!」

さっきの消沈ぶりはどこへいったのかというくらいのハイテンションぶりで、従者宣言されてしまった。

まあ、ウチのお稲荷さんの社は空だし、そっちに入ってもらえれば受け入れもなんとかなるだろう。

もう一つのデカブツである『GSX―デスモドウス』だが、これは成人ゲーム『吸血殲鬼ヴェドゴニア』に登場するスズキのメガスポーツバイク『GSX1300R・ハヤブサ』を過剰改造した吸血鬼用武装バイクで、全面には防弾カウルとチタン製のドデカい刃が仕込まれており、車体の至る所に武器固定用のホルスターがある。

さらにはニトロターボで初速から数秒で時速300キロに到達するという、イカレたバイクだ。

せつかく引き当てた代物だが、俺はまだ二輪の免許は無いし過剰改造のせいで普通に乘れる代物でもないの、当分は倉庫で埃を被るだけだろう。

さて、これで全員が引き終えたわけだ。

各自、結果に関しては思うところがあるだろうが、その辺は各々で処理してほしい。

「今回の騒動はこれにて終了だ。家に帰るから、各自荷物纏めろよ」
こちらの指示でノロノロと動き始める面々を見ながら、俺は大きく伸びをした。

終わった、全ての厄介事が。

これで俺も晴れて怠惰の国の住人になれる。

今回のガシヤの所為で、日本に帰ったら新たなデスマーチか待ってるような気がするがその辺は考えないことにする。

というか、いい加減休まないと身体が保たん。

休暇の残りはあと三日。

その間は無限の闘争も封印して、まったり過ごすんだ。

……そんな儂い願いも、一日近くミリキヤスを連れ回した事に対するグレモリー家のお歴々からの追求や新規メンバー同士が巻き起す騒動で、あえなく消える事になる。

そのやるせなさを『地獄極楽落とし』という形で、イツセー先輩にぶつけた俺は悪くない。

15話

ベランダの窓から差し込む色とりどりのネオンの光が、闇に覆われた室内を薄く照らす。

欲望と快楽が入り混じった華やかな光を放つビル群の中、切り取られた様に立っている洋館。

その三階に設けられた繁華街を歩きかう人々を見下ろす事ができる位置にある応接室は、まるで嵐が通り過ぎたかのような惨状となっていた。

置かれていた高価な家具や調度品はその殆どがバラバラに砕け、絨毯張りの床にその破片を撒き散らしている。

そして、そんなガラクタに紛れるように転がっているのは、思い思いに武装したチンピラ風の男の集団だ。

床に伏した彼等に無事な者は誰一人いない。

ある者は顔面が陥没し、またある者は背中に突き立てられたナイフに自身の手を縫い付けられている。

他にも、腕や足があり得ない方向に曲がっていたり、腹にハンマーをメリ込ませていたり、どれもこれも即入院モノの重傷だ。

そんな鉄錆の匂いと呻き声が充満する鉄火場の中心で、俺は壁にもたれてへたり込む一団の長である男に目を向けた。

「も、もうやめてくれ……。言われた通りにここから出ていく。二度と地上には出てこねえ。だから、勘弁してくれ……!!」

原型がわからない程に腫れあがった顔を両手で庇う男。

そのみじめな姿からは悪魔の貴族、グラシヤラボラス家の後継ぎとしての誇りは微塵も感じられない。

ゼファードル・グラシヤラボラス。

『グラシヤラボラス家の凶兇』などと呼ばれ冥界で恐れられた男も、一皮?けばその辺のチンピラと大差ないということか。

「無様ですねえ。これが72柱の魔神の血を引く者とは、ソロモン王も草葉の陰で泣いていることでしょう」

縮こまって命乞いを続けるゼファードルを嘲る艶のある声に振り

返ると、普段の和装とは違う黒のスーツに身を包んだ玉藻がいた。

「ご主人様。下にいた女性達の対処、終わりました」

「お疲れさん。悪いな、嫌な役目を押し付けちゃって」

「いいえ、ご主人様から頼まれたことですから。それに、同じ女性として無体を働かれた人達を放っておく事はできませんし」

苦笑いを浮かべながら周囲を見回した玉藻は、倒れているゼファードル眷属の姿に身に纏っていた怒気を霧散させる。

「天誅を与えてやろうと思っていました、蛮行の報いはご主人様から十分に受けたようですね」

ふむ、こいつらが殺しや婦女暴行までやってるとは思ってたなかったので、殴り倒す拳にいつも以上に力が入ったのは確かだが、玉藻が納得するほどのモノだったろうか？

「はい。金属バットやゴルフクラブで顔をフルスイングなんて、さすがの私も少々引いてしまうほどの残虐ファイトでした」

……大妖怪に引かれるとか、やはりヒートアクションごっこはやりすぎだったようだ。

「お疲れさんやな、兄ちゃん」

背後から掛けられた声に振り返ると、オールバックに固めた黒髪に吊り上がった目を隠すグラサン、趣味の悪い赤紫のスーツに身を包んだ男が立っている。

どこからどう見ても筋者にしか見えないこの男、実はこの大阪新世界の番所を纏める神様『ビリケン様』だ。

「そのボケもええ感じにヤキ入れたみたいやし、後はワシ等に任せてもらおうで」

ビリケン様が背後に目配せをすると、これまた筋モノとしか見えな
いスキンヘッドにグラサンの白蔵主達はくぞうずが現れ、未だに怯えているゼファードルを拘束する。

「ええ、後はお任せします」

「ところで、この不埒者達はどうなるのですか？」

「お上からのお達しもあるからな、殺しはせんよ。けど、あいつ等がこの街で犯した強姦やら殺しの落とし前は、キツチリつけなあかん。そ

やから、むこうから『殺してくれ』泣いて頼むような目にはあってもらう事になるわな」

玉藻の質問にユーモアさを感じさせる下膨れの顔に、ゾツとする様な凶相を浮かべるビリケン様。

この顔を見たら、彼が通天閣のマスコットだなんて誰も思わないだろうな。

「それじゃあ、こっちは失礼させてもらいますよ。今からなら新幹線の最終に間に合いそうだ」

身に着けた黒のスーツの胸ポケットから取り出したスマホが示すのは21時。

これなら駒王町には日付が変わる前に帰ることが出来るだろう。

「なんや、もう帰るんかい。こんな時間に帰らんでも、宿やったら天王寺辺りに取るで?」

「いえ、明日は学校の試験があるんで」

「そう言えば、兄ちゃんは学生さんやったな。わかった、部下に新大阪まで送らせるわ。車廻すから家の前で待つといてんか?」

「すみません、甘えます。玉藻、行こうか」

「はい」

ビリケン様の気遣いに礼を言つて、俺は玉藻と共に洋館を後にした。

無駄にデカイ門を抜けると、車道を挟んだ向こう側に新世界の喧騒が見える。

夜も深まり行きかう人の姿は減ったが、それを補うように飲み屋やいかがわしい店の呼び込みは数を増してる為、賑やかさに変わりはない。

暗闇の中で浮かび上がるネオンの影をボンヤリと眺めていると、マナーモードにしていた携帯が短く振動した。

取り出して確認すると、メールが一通。

差出人は美朱だ。

『明日の期末テストは国語と理科。赤点とるなよ』

携帯の液晶に映る文字に、思わず指で顎を扱く。

やはり、持つべきものは妹である。

聖剣事件から一か月。

仕事にかまけてほとんど学校に行っていない俺が、留年しなくてすんでいるのはこうして学校の情報をくれる美朱や晴矢達のフオローあつての事だ。

缶コーヒーを煽りながら携帯を操作し、無限の闘争の個人倉庫に放り込んでいた教科書と耕太から借りたノートを転送する。

授業にブランクはあるが、帰りの道中で復習すれば赤点は免れるだろう。

「ご主人様、どうなさったのですか？」

「明日は学校の試験なんで、今から勉強をな」

玉藻に言葉を返しながら放った中身の無い缶が、屑籠の中で軽い音を立てる。

それと同時に、ハイビーム全開で黒塗りの車が俺達の前に停車した。

「お待ちせしました、お客人」

運転席から顔を出したグラサン装備の白蔵主とヤーさん趣味丸出しのベンツに内心呆れながら、俺は後部座席に身体を滑り込ませた。

革張りの無駄に高級そうなソファに身体を預けて教科書を開くと、反対側から入ってきた玉藻がこちらにもたれ掛かってくる。

「どうした？」

「えーと、タマモ的に少し疲れたのでご主人様分を補充しようかなあ、と。……テヘツ？」

こちらの肩に頭を置きながら、上目遣いで視線を向けてくる玉藻。よく分かんが、どうやら甘えたいらしい。

少々あざというように感じるが、こちらも前世から数えて精神年齢はアラフォーである。

これくらいはどーんと受け入れるべきだろう。

それに、日本に戻って来てからは俺に付き合っただハードワークな日々能耐えてくれたのだし、この程度の労いならバチは当たるまい。

俺は肩にあった玉藻の頭に手を添えて、ゆつくりと自分の腿の上に

乗せる。

「へ、え……ご、ご主人様!？」

「ん、嫌だったか？」

顔を真っ赤にして挙動不審な声を上げる玉藻の態度に、思わず首を傾げる。

「こんなご褒美、嫌なワケねーですッ！」

「ならいいや。ちよつと大人しくしてろよ」

片手で教科書をめくりながら、空いた手に聖母の微笑の力を込めてガチガチになつて玉藻の頭をゆつくり撫でてやる。

一月近くの付き合いで分かった事だが、玉藻は積極的にスキンシップを凶ろうとするわりにこつちが応じてやると腰が引けるところがある。

なので、この頃はこうやって水を向けてやる事で色んな意味で暴走しがちな彼女を抑えているのだ。

それに聖母の微笑の効能を上手く応用してやれば、治癒の他に肉体的疲労を取る効果も付与できるので少しはリラックスできるだろう。

「はう。このナゲナゲは反則です……」

「眠くなったら寝ていいからな。家までは連れて行ってやるから」

なんとも気持ち良さそうに目をつむる玉藻に言葉をかけて、俺は再び教科書に目を向ける。

さて、ここらで自己紹介をしておこう。

俺は姫島慎。

デスマーチと化した仕事と試験勉強に追われる多忙な15歳だ。



冥界行脚を終えて日本に帰った俺を待っていたのは、クーの兄貴ことクー・フリーンや玉藻についての日本神話勢からの呼び出しだった。

『神靈^{うかのみたまのかみ}宇迦之御魂神であり天照大神の分霊でもある玉藻が、『無限』で混血とはいえ人間である俺に付くのは如何なものか』と騒ぎ立てる他

の神々を前にして、玉藻は『自分が仕えたいから仕えるのだ』と自分の主張を展開。

一歩も退かない構えを見せた。

その後、あーだこーだと激論が繰り広げられたものの、最後は天照様の鶴の一声で彼女の希望通りに俺へ仕える事が許可された。

クーの兄貴に関しては、現代にほぼ完全な形で甦った英雄。

しかも本人がケルト版ヘラクレスと言われるほどの有名さを誇ることもあり、出身元のダーナ神族を交えての協議となった。

向こうの出席者はダグザ様、ヌアザ様、そして兄貴の父親である光の神ルー。

こちらは天照様、少彦名様、クーの兄貴、美朱、俺だった。

アイルランドを取り戻して日が無い向こうは、当然の如くクーの兄貴に戻るように要請したが兄貴は『こいつ等といった方が面白い』とこれを拒否。

これまた長い長い話し合いの末、月数回アイルランドで仕事を行う事を条件に兄貴の日本残留は許可された。

その代わり、クーの兄貴目当てであろう戦士や魔術師から美朱へ、縁談話が来るようになったが。

返事？

そんな俗物共に大事な妹は渡せないの、『俺より強い奴じゃないと妹はやらん!』という条件を出して物理的にお断りしましたが何か？

こんな感じで厄介事を乗り越えた俺は、これを機に生活を少し変えることにした。

日本神話に籍を置く形で自身の立ち位置が定まった事から、その足場固めの為に駒王町以外で起きた問題や依頼に積極的に関わるようにしたのだ。

その目的は三勢力に万が一の事態が起きた際、親父や朱乃姉はもちろん、リアス姉やミリキヤスなどの知人を保護する受け皿になると。

その為には地位や権力なんてものが必要になってくる。

だからこの一カ月、日本全国を駆けずり回って実績と人脈作りに没頭したのだ。

さて、クーの兄貴や玉藻の助力もあつて手掛けた事案は全て解決する事ができ、日本の裏での俺の評判は上昇した。

今では、駒王町の番所を通して日本全国から助っ人や対処の依頼が舞い込むほどだ。

スタミナンロイヤルとタフネスZZをガブ飲みしながら頑張った甲斐があつたというものである。

いや、一時期は本当にえげつなかつた。

ピーク時は北海道、広島、東京、沖縄を一日で回つたと言えば、わかつてくれるだろうか。

その強行軍についてきてくれた玉藻には本当に感謝している。

さて、『24時間戦えますか?』なんて標語を地で行く、全盛期のジャパニーズビジネスマンの如き生活を送っていた俺は、『夏越えの祓え』が終わった際にあることに気づいた。

こつちに帰つてから、学校に行つてないことだ。

『そう言えば美朱達が何か言っていたな』などと思いつつ、カレンダーを確認すると暦はもう七月の初め。

三週間以上登校していない事実には慌てて学校に問い合わせしてみると、神社庁が手を回してくれたお陰で公休扱いになっていた。

流石に悔い改めた俺は、美朱に学校行事の予定を聞いてそれを元に予定を再編。

耕太や晴矢の助けもあつて何とか期末試験も乗り超える事ができた。

まあ、試験が終わつたら終わったで、地鎮祭や夏祭りの屋台配置についてのテキ屋との会合等々、本業である宮司としての仕事が待っていたのだが。

さて、美朱に聞いたところによると本日は授業参観日らしい。

何とか本業の繁忙期を乗り越えて学校に行けるようになった俺は、いつものように鍛錬と朝拝を終えて玉藻と朱乃姉が作った朝食が並ぶ机を囲んでいた。

「いやあー、姉ちゃんが作る飯は美味いねえ」

「あらあら、ありがとうございます」

山と盛られた白飯が入った茶碗を片手に上機嫌で箸を進めるクールの兄貴に、いつもの笑顔を返す朱乃姉。

「どうですか、ご主人様。この卵焼き、私が作ったんですよ」

勧められるままに軽く焦げ目が付いただし巻き卵を口に入れると、適度な柔らかさと共に舌に出汁の味が広がる。

「うん、美味しい」

「きゃー、ありがとうございます！ ご主人様が全国を飛び回ってる間、ウズメちゃんのところでお料理をお浚いした甲斐がありました！」

歓声を上げて喜ぶ玉藻の独白に思わず顔を引き攣る。

……うん、あとであめのうずめのみこと天宇受賣命様にはお詫びの品を送ることにしよう。

「見る度に思うけど、慎兄にリア充とか死ぬほど似合わないよねえ」

朱乃姉の使い魔であるチビ美朱こと朱美とチョコボを左右にした美朱が、味噌汁を啜りながら白けた目をこちらに向ける。

どうでもいいけどお前の朝飯、左右のチビ共に喰われてるからな。

あと、誰がリア充やねん。

玉藻は神社の住み込み従業員じゃい。

「従業員って、じゃあそのベタベタした距離感は何なのさ？」

あん？ 一つ屋根の下で同じ釜の飯を食ってんだから、家族みたいなもんだらう。

グレモリーの家でもそうだったじゃねえか。

「あー、まあそうなんだけどさ……」

「坊主。嬢ちゃんが言いたいのは、その女狐に対して思うところはなにかかってこった」

言いよどむ美朱の代わりに、口に頬張っていた白米と紅鮭を飲み込んだクールの兄貴が口を開く。

横を見れば玉藻も期待を込めた目でこちらを見上げている。

まったく、周りの奴等は女性と仲良くするとすぐに『男女の仲』っ

て奴に見たがる。

そういう風に水を向けられたら萎えるってのが分からんのかね。

「仲間で家族だよ。今はまだ、な」

「今はまだ、ですか？」

「ああ。今はまだ、だ」

一端は落胆したものの、俺が言葉に込めた含みに気付いて表情に明るさが戻る。

俺は一目惚れとか一気に付き合うなんてガラじゃないからな、そういう関係になる女性とはしつかりと時間をかけて付き合いたいのだ。

実際に好きあつた時に『こんな人じゃなかった』なんて台詞を吐くなんて格好悪いじゃないか。

と言つても、ホントに好きになるかどうかは別問題だが。

さて、朝飯も粗方各々胃の中に納まりみんなが思い思いに茶を啜つていると、本殿から少彦名様が訪れた。

「スクナ様、どうしたの、ご飯ならさつき食べちゃったよ？」

「戯たわげ、儂はそこまで食い意地はつておらぬわ。慎よ、天照殿から呼び出しじゃ。今から高天原に行くぞ」

「へっ!? 俺、学校に行くつもりだったんですけど」

「緊急だそうじゃ、諦めい」

呆気にとられる俺の襟に取り付いた少彦名様は、逆の手に持った杖を一振りして転移陣を展開する。

「ちよつと待った！ 私も参ります！」

「ちよつ!? 美朱、悪い！」

「はいはい、学校遅れるんでしょ。先生には伝えとくから、安心して行ってらっしゃい」

陣の中心で飛び掛かってきた玉藻を受け止める俺の意を察したのか、呆れ顔でヒラヒラと手を振る美朱。

「頼んだ——」

言い終わる前に発動した陣が放つ光で視界がホワイトアウトする。

宙に浮くような感覚の後で光が退くと、俺達は高天原にある謁見の間に立っていた。

「頭が高いぞ、姫島。そして彦名殿、謁見の間への直接転移は控えるように言ったはずでしょう」

「失礼しました」

「すまんすまん、天照殿から急ぎと聞いたのでな」

玉座の脇に控えた黒い狩衣に黒の長髪のイケメンの咎める声に、素早く跪く俺とは裏腹に苦笑いを返すだけの少彦名様。

三貴子の一柱である月読様に悪びれる様子を見せないのは、流石は日本神話最古参の神と言うところか。

……あと、玉藻さんや。

むこうの言い分はもつともなので、こちらに見えないように月読様を威圧するのはやめましょう。

月読様、クールな美形なのに冷や汗ダラダラじゃないか。

「よいのです、月読。慎、面を上げなさい」
「はっ」

頭上からの声に伏せていた頭を上げると、玉座に座った天照様の姿が飛び込んでくる。

「毎日の務め、ご苦労様です。あなたの働きで悪魔達に占領されていく多くの国土を我が手に取り戻す事ができました」

「勿体ないお言葉です」

天照様の労いの言葉に俺は頭を下げる。

今、俺達が話しているのは、日本神話勢の中で『地上げ』と呼ばれている業務の事だ。

この一ヶ月、高天原や地方の依頼でメインを張っている大口の事業で、数日前の大阪出張もこれに当たる。

事の始まりは聖剣事件のおり、天照様が冥界政府に飲ませた『日本国内における悪魔の実効支配地域の即時返還』という条約。

これを受けて、事件後に冥界行政府から正式に退去命令が駒王町以外の日本に領土を主張する貴族に発布された。

しかし、それに応じたのは全体の一割にも満たなかった。

これは悪魔社会が中世の封建制度に習い貴族が自身の領地を領有・統治するという形が浸透しており、魔王とはいえ自身の領土に関して

口を挟むのを嫌ったためだ。

また、前魔王死去後の内戦で現体制に与した貴族の中に、当時は勝ち馬に乗る事を目的としただけで現魔王を敬わない輩が多くいる事も理由の一つだろう。

しかし、そんな悪魔の事情など日本には関係はない。

遅々として進まない退去に業を煮やした日本神話は、冥界政府に抗議。

四魔王連名による実力行使の許可証を出させたのだ。

(当初の草案はもつと過激で、退去させるのであれば『生死は問わず』というものだったらしい)

とはいえ、日本神話勢は外交的には多神勢力の中ではトップクラスだが、実質的な戦力ではそこまで優れてはいない。

しかし、実効支配地域に居座る悪魔はその全てが貴族やその子弟であり、レーティングゲームの為の眷属を所持していた。

東京をはじめとした大都市や京都のような呪術的に守護された都市ならばいざ知らず、地方の小町村に住む土着の精霊や妖怪が強行手段に出るには荷が重い相手だ。

そんな訳で天照様は武神や神と祀られた武芸者を助っ人として各地を回らせており、その白羽の矢が俺にも立ったわけだ。

今まで俺が奪還した実効支配地域は四十。

その中には以前までのお得意様であったアガレス大公の領地も含まれたりしている。

はぐれ悪魔討伐で散々金を搾り取っておいてこの仕打ち、マジで冥界の土は踏めそうにないな。

「さて、本題に入りましょう。昨日、墮天使総督アザゼルより『今から三日後に駒王町にて三勢力の和平会談を行う』と申し出がありました」

天照様の言葉に、俺は思わず我が耳を疑ってしまった。

……なに考えてんの、あの厨二病。

ちよつと前に散々やり込められたばかりだろ！

まさか、まだ罵倒され足りなかったとか言うつもりか。

「つうか、あれか？ あのおっさんもマゾなのか？ 親父といい姉貴といい、墮天使はDM集団なんですか、コノヤロウ!？」

「おや、その方は以前の事件で貴女に嫌というほど叩かれたと聞きましたが？ 懲りずにこの地に手を出すとか、特殊な性癖でもお持ちなんですかねえ」

「口を慎みなさい、藻女。^{みずくめ} 淑女たるもの、そのようなはしたない言葉を口にするものではありません」

「なあにが『淑女たるもの』ですか。腹の中が真つ黒な貴女に言われたくねーですよーだ！ あと、幼名で呼ばないでください！」

呆れを含んだ天照様の言葉に、舌を出して反論する玉藻。そのやり取りはまるで姉妹のそれだ。

「姉上、話が逸れています」

「……コホン。アザゼルはこの会談に私を初めとして、多くの多神勢力の主神を招待すると言っていました。かの者の狙いは、最近世界中で跳梁跋扈している『禍の団』の影響を鑑みて、三勢力が和平を結ぶ様を見せる事でこちらを牽制すること。そして来るであろう『禍の団』の襲撃を迎撃する事で、三勢力の身の潔白を証明する事と思われ
ます」

「随分とザルな企みですねえ。そんなモノ見せても、現状では三勢力と『禍の団』がグルだと思われて終わりじゃないですか？」

「その可能性は低くありません。ですが、このような策を講じてでも彼等は疑惑を晴らさねばならないのでしよう」

「このままでは本当に『禍の団』と一緒にされて、世界中から袋叩きじゃからのう」

「それに奴等が会談を襲撃すれば、列席した主神達も敵対勢力に見なされるだろう。そうなれば奴らのことだ、『共にテロと戦おう』などと耳障りの良い言葉で、同盟を持ちかけてくるに違いない」

「キリキリと締め付けるような胃痛に脂汗をながしながらも、残ったなけなしの理性で俺は現在の世界の現状についての情報を頭の中はんすうで反芻する。」

現在、『禍の団』の活動は世界中に展開しており、主に北欧のアース

神族とギリシヤのオリュンポス、そしてダーナ神族が標的になっているらしい。

構成員も三勢力の種族に加えて人間のはぐれ悪魔祓いや魔術師が参加しており、その中には英雄を自称する神器保有者もいるとの事だ。

お陰で俺も何度か海外にも出張したし、現地でヌアザ様やオーディン様、ハーデス様の愚痴を聞く羽目になった。

今ではアスガルドや冥府、常若の国の立派な常連だったりする。

こんな感じで『禍の団』が世界中の神話勢力にちよつかいをかけて三勢力のヘイトを集めている中、同時にダーナ神族が自らの土地を取り戻したのを見た同じ境遇の神達もまた失地回復に動き始めている。

最近ではシユメール神話やローマ神話の神達がイタリアや中東に降臨し、『禍の団』によるテロから住民を守ったという事案があった。

テロ自体は北欧等で頻発しているモノと同じ規模だったのだが、今回は場所が悪かった。

中東は形は違えど一神教の一大普及地であり、イタリアに至っては一神教正教の本拠地だ。

天使、堕天使、悪魔の3種族が協力して民衆を襲う光景に、一神教の信者達は黙示録の時が来たと錯覚。

敬虔な信者の中には無抵抗で裁きを受けようとした者もいたようだが、大半の人間は生きようと藻掻いた。

そこに現れたのが、古き神々だ。

彼等は現地住民を護りながら『禍の団』の軍勢を撃退。

戦闘が終われば被害者の治療や街の復興に、その権能を惜しげも無く使用したという。

一部の信者は一神教の神への冒瀆と憤慨していたが、救われた多くの民は古き神々を支持した。

さらには土地を奪われる際に、各々が保護していた信者の末裔が神々の事を語って回った事により、同地域では早くも旧多神教の信仰が息を吹き返し始めているらしい。

また、この一件はイタリアの現地メディアにテロの現場を世界中に

配信され、一神教の信仰に打撃を与えた。

『黙示録』とは人類滅亡の予言であり、それが起こるということは聖書の神が『現人類は墮落した種であり、生きる価値は無い』と判断したということだ。

神に見捨てられたという事実を前にしても尚、信仰を続ける事ができるのは、聖人が狂信者くらいのものである。

現にこの映像によって世界中の一神教信者はパニック状態であり、これを鎮める立場である一神教正教もテロによるダメージから立ち直っていない。

結果として、世界規模で一神教の信仰が大きく減少してしまったのだ。

正直、今回の中東とイタリアの一件には引つかかるものを感じるが、兎も角これから世界は大きく変わるだろう。

そして、それは三勢力にとっていいものになる可能性は低い。

だからこそ、取り返しつかない事態になる前に、俺は俺なりの方で皆を守る為に動いたのに、どうしてこうなるのか……。

「ご主人様！　ご主人様!!」

玉藻の声に我に返ると、跪いたまま我知らず腹を押さえている俺を皆が心配そうに見ている。

「ご主人様、大丈夫ですか？　顔色が紙のようなんですが」

「大丈夫、ちよつと胃に穴が開きかけてるだけだから。開いたら聖母の微笑で埋めるから気にしないでくれ」

「全然大丈夫じゃないですよね、それ!?!」

ドヤ顔で返した答えは玉藻に全力でツッコまれてしまった。

……うーむ。完璧な対処療法だと思っただが、何が不満なのか。「この件では本当に苦労してますね、貴方」

「わかつてるなら、今回の件は蹴つてくださいよ。『冗談は頭の中だけにしとけよ、この厨二病』とでも言つといたらイケるでしょうに」

胃痛の所為で少々言葉は乱暴になっているが、月読様からの指摘はない。

代わりに送られてくるのは同類を憐れむような視線だけだ。

月読様、そんな仲間を見るような眼で見ないでくださいよ。

俺はこの歳で胃痛同盟なんて、組む気はないですからね。

「生憎とそうはいかないのです。聖剣事件で結んだ条約では駒王町に関する悪魔の管理について期間の短縮はあっても、権利の制限は唱ってはいないのですよ」

「つまり、悪魔側は駒王町に関しては以前と変わらぬ権限を持つということだ。故に無闇にむこうの行動を制限しようとするれば、契りの呪がこちらに牙を向きかねん」

「ふむ……。今回の件とグレモリーの小娘が持つ管理者権限を照らし合わせれば、該当するのは管理地運営に措ける外部折衝の為の会談といったところか。理屈はわかったが、この件は話の規模からして当て嵌めるには無理があるじゃろ」

俺の肩の上で髭を扱く少彦名様に、天照様の眉がハの字に下がる。

「私達もそう思い調べたのですがどうも拡大解釈されているらしく、会議や交渉ならば話の大小に関わらず条約をすり抜けてしまうようなのです」

……それはなにか。

今の駒王町では会議や交渉と名がつけば、生徒会の会議から世界レベルのサミットまで制限無しで開催できるってことか!?

またしても軋みはじめた胃に押さえる手に力が籠もる。

「それはまたエライ解釈のしかたじゃのう。とはいえ、決まったものは仕方ない。そちらは機を見て正すとして、今はその和平会談をどうするかじゃな」

「ええ。……慎、貴方には番所の人員と共に今回の会談における駒王町の警護に就いてもらいます」

『禍の団』対策ですね。それで注意点は?」

「警護に関しては会談や来賓の安全よりも街と地域住民を重視してください。会談に参加する者は独自で護衛を付けているでしょうし、万が一負傷しても責任は主催者の三勢力に帰結しますから」

もの凄くイイ笑顔でエグイ事を口にする天照様。

……三勢力関連ではその笑顔が俺の胃に打撃を与えている事、気づ

いますよね？

「天照様、番所のメンツだけでは街を護るとなると手が足りませんよ」「それについてはこちらで手配します。貴方は番所の面々と協力して、土地にあった警護計画を作成してください」

「了解しました」

頭を垂れながら、俺は回りに気づかれないようにため息をつく。

またしても厄介な仕事が増えた。

今度見かけたら、アザゼルのおっちゃんも逆モヒカンにしてやろう。

あと、また天狗様に胃薬貰わないと……。

◆
あれから少彦名様や玉藻と共に番所へと戻った俺は、皆へと事情を説明した。

最初は事の大きさに圧倒されたり難色を示していた面々だが、伊達に場数は踏んでいない。

やると決まったら、久延毘古様を中心としてとんぱ子で警護計画の骨子を造ってしまった。

その先の肉付け云々に関しては、天照様が手配した応援の詳細がわからないと進める事が出来ないため、会議はそこでお開き。

時計の針は午後を指し示し初夏の日差しが天高くから降り注ぐ中、俺は学園へと重役出勤と相成ったわけだ。

校舎に入る際にすれ違った父兄らしき人に公開授業の事を思い出しつつ、教室に着いた時には5限目は終わりを迎えていた。

「ようリーダー。今日も重役出勤だな」

「テストが終わって一段落すると思ってたけど、まだまだみたいだね」「二人とも、テストの時はありがとうな。お陰でダブらずにすんだよ」

本日最後の休み時間を利用して、声を掛けてきた晴矢、耕太と雑談を交わす。

晴矢は聖剣事件の後で何度か両親と話し合った結果、人間として日本で生きる事を決めたらしい。

元々俺達と同じで墮天使よりも人間の血の方が濃い上に、先祖返りの気がある為に妖怪や道祖神から好かれやすいので、その方がいいだろう。

俺の計画を話すとは是非手伝いたいと言っていたので、機を見て番所に紹介しようと思っている。

そうこうしている内に休み時間は終わり、公開授業が幕を開けた。ウチのクラスが担当するのは日本史。

教師の解説の声とチョークが黒板を走る音だけが響く中、イマイチどころかイマサンで授業に身が入らないままに惰性でノートを取っている、背後から視線を感じた。

睡魔に瞼が半分下がったまま振り返ると、そこには父兄の集団から悪目立ちした、逆立てた黒い短髪に2メートルを超える巖のような身体を羽織袴に押し込めた厳ついマツチョなおっさんと、色鮮やかな和服を着た朱乃姉や美朱そっくりの黒髪美人がこちらに笑みを向けている。

全力で姿勢を戻したものの、頬を嫌な汗が伝う。

眠気なんて一瞬で吹っ飛んだ。

見れば、前の席で美朱も同じようなりアクションをしている。

なんで来てんだよ、爺ちゃん達！

朱乃姉の事があるから本家でしか会わないって約束してただろ!!

滅茶苦茶嬉しそうに高性能そうなカメラを構えているマツチョマンの姿に内心でツツコミながら、俺達は思わず頭を抱えてしまった。

そう、あそこにいるのは原●夫デザインなおっさんはひめじまがわう姫島牙鳳。

日本呪術界を統括する五代宗家の一つ、姫島家の先代当主にして俺達の母方の祖父だ。

そしてもう一人。

爺ちゃんの暴走を止めようともせず、コロコロと鈴のような声で笑う淑女はひめしまあやの姫島綾乃。

言っても信じないだろうが、俺達の婆ちゃんである。

「久しいな、慎！」

元祖ラオウによく似た声と共に、豪快にこちらの肩を叩く爺ちゃ

ん。

受けた瞬間に足元から木が割れる音がしたが、俺は何も見てはいない。

床板が押し折れたことなんて目の錯覚なのだ。

「どうしたんだよ、爺ちゃん。いきなりこんなところに来るなんて」

「なに、お前に話があったのでな、そのついでに授業参観も見ていこうと思っただのじゃ。綾乃もお前達に会いたがっていたしの」

「美朱、元気そうで何よりだわ。少し背が伸びたかしら？」

「ふあっ!? お婆ちゃん、抱っこはいいから！ みんな見てるよ!!」

「フフツ……。こうしてると、朱璃あかりが小学生だったことを思い出すわ」「せめて中学生って言うてよおおっ!」

綾乃婆ちゃんに抱き上げられ、顔を真っ赤にしながら魂の叫びを上げる美朱。

……そうだよな。お前、『もうすぐ150cmの大台に乗る!』って、この前の健康診断で小躍りしてたもんな。

因みに美朱は背は小さいが幼児体型ではない。

小柄ながらも出るところは出てるし、忍術の鍛錬のお陰で腰回りもしっかりくびれている。

いわゆる『トランジスタグラマー』と言う奴だ。

もつとも、回りにいたのが朱乃姉を筆頭として、グレイフィア姉さんにリアス姉とモデルも裸足で逃げだす女性ばかりなので、コンプレックスを持ってしまったわけだが。

まあ、ああやって身長170近い婆ちゃんに抱き上げられてるのを見たら、やっぱり小さいと思わざるを得ない。

……改めて婆ちゃんを見てみると、マジに朱乃姉や美朱そっくりだよなあ。

たしか朱雀さんもこれ系の顔だったはずだから、会った事のないがお袋の姉である瑠璃るり叔母さんも同じ顔なんだろう。

横に目をやると機嫌良さそうに笑みを浮かべる爺ちゃんのごツイ顔が見える。

まったく、ほんの10%でもいいからこの要素が俺に遺伝してくれ

れば、こんな女顔じゃなかったらうになあ。

「なんじゃ。人の顔を見て溜息なんぞ付きおつて」

「いや、婆ちゃんは二十代に若返ったのに、なんで爺ちゃんはおっさんなのかなって思ってたさ」

「仕方あるまい。変若水は飲んだ者の肉体を全盛期に固定する霊薬、綾乃の全盛期は二十代で儂は四十代だったということよ」

豊かな顎髭をさすりながら呵々と笑う爺ちゃん。

うん、約束を反故にした事を全く悪びれていないな。

「それで話つてのは何なんだよ？」

「うむ。御上からの御達しでな、この街で開かれる会談の護衛に儂等も一枚噛む事になった」

「儂等つてまさか、姫島一門の事か？」

鋭くなった俺の視線を受けながらも鷹揚に頷く爺ちゃん。

……なんかまた胃の辺りがキリキリしてきたぞ。

爺ちゃん達と知り合つて三年になるが、爺ちゃん達や従姉の朱雀さんはともかく、姫島家という括りで見れば俺達が受け入れられたとは言い難い。

お袋に刺客を放つた先々代当主である姫島朱凰をはじめとした国粹主義の急進派は、十年前に爺ちゃんによつて物理的にも政治的にも壊滅したと聞いている。

とは言え、俺達を『忌み子』扱いする人間が絶えた訳ではないのだ。

因みにこの姫島朱凰という人物。

爺ちゃんの実弟のだが、生粋の国粹主義者であり実姉である朱芭さん（爺ちゃんの妹に当たる人）を家から追い出した事が原因で永らく不仲だったらしい。

長男である爺ちゃんが当主を継いでからは目立った動きは見せなかつたそうなのだが、不治の病に罹つた婆ちゃんの治療のために当主を退いた際に次期当主に就任。

自分と同じ急進派を率いて姫島一門はもちろんのこと、国内の裏事情においても強引なやり方でその勢力を強めていった。

そんな折、朱凰は親父と駆け落ちしたお袋を発見の報を聞く。

幼い頃からお袋に目を掛けていた朱鳳は、墮天使との間に出来た子供（俺達のことだ）を廃しお袋を姫島家に連れ戻そうとしたが、当然の如くお袋はそれを拒否。

結果、朱鳳は一門の中でも墮天使に恨みを持つ者達を刺客として放ち、あの悲劇が起きた。

爺ちゃんが日本に伝わる伝説の若返りの霊薬『変若水』によって全快した婆ちゃんと共に姫島家の帰ったのは、お袋の件が起きたすぐ後だったらしい。

お袋の死と俺達を取り逃がした事で、浮足立つ姫島家で自身の子飼いの部下から事の次第を聞いた爺ちゃんは怒髪天を突いた。

お袋の訃報を聞いて気を失った婆ちゃんを部下に預けると、その足で朱鳳の元に殴り込み護衛や部下諸共朱鳳を撲殺したそうだ。

その後、お袋の死に続いて前当主による当主殺害という特大級の不祥事に揺れる姫島家を、当主に返り咲く事で治めた爺ちゃんはお袋の忘れ形見である俺達を保護しようとしたが、その時にはとつくに冥界に入っていた為に足取りを掴む事ができなかった。

そのまま延々と搜索を続ける事約十年。

天津神の推薦で神職になろうとしていた俺達にコンタクトを取り、色々会って今に至る訳だ。

「大丈夫なのかよ、それ。俺等への悪感情を現場に持ち込んで仕事に支障をきたす、なんて事態は勘弁してほしいんだけど？」

「心配いらん。今の姫島家にお前らに向けてそういった態度を露わにするような者はおらぬさ」

「爺ちゃんが黙らせたからだろ、物理で」

「それもある。じゃが、それ以上に朱雀の改革とお前がこの三年で積み上げた実績の方が大きいわい」

爺ちゃんの言葉に俺は思わず首を捻る。

爺ちゃんの後を継いだ従姉の朱雀さんは、事前に瑠璃叔母さんから俺達の事を聞いていた事や日本に来てからは実際に交流があった事もあって、爺ちゃんのやり残した姫島家内部の意識改革を精力的に押し進めているという。

その成果が出てるってのは解るのだが、俺の功績ってなんだっけ？
「なんじゃその顔は」

「いや、そんな言われるような事やったかなって思っただけ」

「日本における『禍の団』のテロの阻止を初めとして、悪魔における占領地の奪還やはぐれ悪魔討伐による被害軽減等々、いくらでもあるじやろうが」

『地上げ』の件は兎も角として、『禍の団』に関しては管理官の仕事上の成り行きだし、はぐれ悪魔討伐も生活費の確保の為にやってた事だからなあ……。功績とか言われてもピンとこねえよ」

「だめじゃこりゃ……。」

自覚が沸かない俺に、額に手を当てて天井を仰ぐ爺ちゃん。

何気に失礼だな、おい。

「慎兄の認識って世間とかなりズレてるからねえ。その辺は放っておいた方がいいと思うよ、お爺ちゃん」

「そうなの、美朱？」

「うん。今でも自分はまだまだ弱いとか言っただけ忙しくても鍛錬を欠かさないんだもん。クー・フーリン相手に素手で一本取れる人間が弱いはずないじゃん」

呆れに呆れた美朱が送ってくる視線に思わず慥然となってしまう。

「当たり前だろ。まだ刺し穿つ死棘の槍も躲せてないんだ、あれくらい躲せないで強いなんて言えるかよ」

「あ、それでクー兄が愚痴ってたよ。因果の逆転する槍なのに躲されかけたって。というか慎兄また無茶な訓練してるでしょ!? 至近距離で刺し穿つ死棘の槍を撃つ前に手を払おうとか!!」

ヤバい、藪蛇だった。

こちらにしがみ付いてキーキー騒ぐ美朱に、俺は先ほどの爺ちゃんよろしく額に手を当てる。

美朱が言っていた訓練とは『邪極拳』習得の為の鍛錬だ。

邪極拳は生物の持つ条件反射を武術に組み込んだ超高速の拳法であり、その修得には才能の他に極限レベルの集中力を必要とする。

高木先生は至近距離から襲い掛かってくる邪極拳修得者のナイフ

を躲すという鍛錬でこれを修得したそうなので、俺もそれに倣ってクーの兄貴に協力を求めたのだが駄目だったのだろうか？

なに、結果？

二十回ほど心臓挟られたけど、今は何とか肺に逸らす事ができるようになったぞ。

お陰で聖母の微笑の回復力がメキメキ上がった。

このまま行くとデンデの回復を超える日も遠くないかもしれん。

「あらあら。顔は朱璃に似ているのに、そういう荒々しいところはあなたそっくりですね」

「む、儂はここまで破天荒ではなかったと思うぞ」

「あら、私を娶る為に一人で伊賀忍軍をむこうに回した方の言葉とは思えませんわ」

「あ……あれは若気の至りという奴じゃ」

「では、私の病を治す為に変若水を護る建御名方様たけみなかたと殴り合った件は？」

「ぐ……むう……」

「お爺ちゃんすごい！」

「仕事の行く先々で俺が『暴れ姫島』の再来とか言われてたのって、爺ちゃんが原因かよ」

ニコニコと笑う婆ちゃんが詰め寄られて顔を真っ赤にして言葉に詰まる爺ちゃんのエピソードに、歓声を上げる美朱とは裏腹に俺は呆れた。

つうか、婆ちゃんが病気の時って爺ちゃん還暦過ぎてたはずだよな。

60超えて武神と殴り合ってるやあ、全国的に有名にもなるわ。

「取り敢えず、警護の件もあるし、話はここじゃなくて番所でしょうぜ」

「う……うむ、そうじゃな。今回の件はアザゼルが主導と聞く、儂等が関わるとなればむこうも鳶雄を呼ぶかもしれんから、その辺も考えねばの」

俺が水に向けた事で婆ちゃんから距離を取って襟元を正す爺ちゃ

ん。

「そつか、アザゼルのおっちゃんが来るのならトビ兄も来るかもしれないもんね。刃ちゃん元気かな？」

「幾瀬いくせとびお鳶とびお雄おさん。たしか朱芭しゅばさんのお孫さんでしたね」

「うむ、神滅具ロンギヌス ケイネス・リュカリオン『黒刃の狗神』の所持者でもある。今はグリゴリを主として依頼を受ける何でも屋を営んでいると聞く」

「あの人、アザゼルのおっちゃんの護衛とか請け負ってたはずだし、今回の件なら顔を出すかもな」

鳶雄兄か、去年の忘年会から会ってないけど元気だろうか。

あの時はおっパブを会場にしたアザゼルのおっちゃんに、蝶野ばりの喧嘩キツクをかましていたが。

鳶雄兄って大らかで良い人だから、グリゴリで知り合った俺とか美朱、晴矢やヴァーリまで弟妹みたいに可愛がってくれたんだよな。

あ、鳶雄兄で思い出したけど、忘年会の時に鳶雄兄の飼犬である刃が、俺を見るなり仰向けになって腹を見せたのはどういう意味なんだろうか。

犬派の俺としては、可愛がってきた刃にああいう態度を取られるとショックなんです。

あの時の切なげな刃の眼を思い出して、内心へこんでいると校舎のロビーで思わぬ人物と出会った。

サーゼクス兄とジオテイクス小父さんだ。

「やあ、慎」

にこやかに声を掛けてくるサーゼクス兄に俺は言葉を返せなかった。

俺の眼は一団の後ろ、リアス姉やイツセー先輩と肩を並べている朱乃姉に釘付けになっていたからだ。

綾乃婆ちゃんを見て『母様』とか呟いた後、般若もかくやという表情で爺ちゃんを睨んだところを見ると、俺達と一緒にいるのが誰か気づいてしまったのだろう。

へへッ、修羅場の予感しかしないや。

……………胃薬、どこだっけ。

16話

こんにちは、姫島慎です。

突然ですが、わが校の1階エントランスの空気が最悪です。

それというのも、こちらと向かい合う駒王町管理者と関係者御一行様に紛れた我が姉。

彼女がハイライトの無い憎しみの籠もった視線を、我が祖父にむけているのが原因です。

道行く堅気の皆さま。

授業参観の思い出を語りながら帰宅する場面で、身内がご迷惑をかけてしまい本当に申し訳ありません。

ハタから見れば、きつと死んだ魚のような目になっているであろう俺は、こちらを見ては距離を取る父兄の方々を見回した後で件の姉に目を向けた。

自身の周囲が帯電するほどの魔力を洩らしながら無表情でこちらを見る朱乃姉の姿は、身内からしても正直ヤバイ。

対するこちらは祖父母共に、まったく動揺せずに姉貴の視線を受け止めている。

爺ちゃん俺の隣で直立不動、婆ちゃんは顔を引き曇らせた美朱を後ろに庇う余裕も見せている。

俺？ 俺は懐から取り出した天狗印の胃薬を口に含んだところだ。

こちらのリクエストに応えて、水なしで飲めるタイプの物を作ってくれた天狗様には足を向けて眠れないわ、マジで。

しかし我ながら迂闊だった。

爺ちゃん達の来訪にテンパってたとはいえ、サーゼクス兄達の気配を読み違えるとは。

朱乃姉が一緒だとわかっていたら、裏口から帰ったのに……。

いやいや、今は後悔している場合じゃない。

なんとかしてこの修羅場を乗り切らねば。

『おい、慎！ 聞こえるか、慎!!』

無い知恵を絞り出そうと悪戦苦闘していると、脳裏に聞き覚えのあ

る声が響いた。

『イツセー先輩か？ いつの間に念話なんて覚えたんだよ』

『レーティングゲームで必要になるからって、部長に仕込まれたんだよ』

『偉そうにいうな、相棒。俺の補助が無かったらロクに発動もできんじゃないか』

『おお、ドライグ。久しぶり』

『オレの事はいいんだよ！ それよりも朱乃さん、どうしたんだよ？』

『なんかシャレにならないくらい怒ってるぞ』

『あー。家の事情だから詳しくは言えないんだけど、朱乃姉は俺の隣にいる人の事、スツゲー嫌ってんだよ』

『それって、お前の隣にいる妙にゴツイおっさんと、朱乃さんにそっくりな女の人の事だよな。もしかして、親戚なのか？』

『まあな。そんな事より朱乃姉が暴走しそうになったら止めてくれよ。この人達、日本呪術界の超VIPだから。そっちが原因で怪我でもさせたらエラい事になるぞ』

『……具体的には？』

『神様や妖怪だけじゃなく、坊さんや神主なんかの裏に関わる人間も三勢力の敵に回る』

『マジか!?!』

『マジだ。この人は日本の裏を牛耳る五つの旧家の先代当主。天津神だけじゃなくて天皇家にも繋がりがあるからな』

『なんでそんな人間がここに居んだよ!?!』

『俺等の授業参観に来たんだとき。リアス姉じゃねえけど、身内の愛の重さに泣きそうだよ』

『……わかった、もしもの時はなんとかかしてみろ。これって部長には言つといた方がいいよな?』

『リアス姉は知ってると思うけど、一応伝えといてくれ。切実にシャレにならないんで、よろしく頼みます』

『あ……ああ』

イツセー先輩の上ずった声を最後に念話は途絶えた。

場の空気を読んでくれたイツセー先輩には悪いが、今の念話はアールシア先輩を除いたメンツに筒抜けだったりする。

魔力が雀の涙なうえに操作がヘツタクソな先輩が、魔王だの五大宗家元当主だのを出し抜けるワケないんだな、これが。

とは言え、今のやり取りも朱乃姉への牽制くらいにはなるだろう。気を入れ替えて魔王様御一行と対峙すると、こちらの視線にサーゼクス兄が和やかな笑みを返してくる。

「……最近、随分と日本側で活躍しているようじゃないか。グレモリー家や私の方にも、アガレス大公やグラシヤラボラス家から苦情が来ているよ」

まあ、全てその日の可燃ゴミになったけどね、と割とシャレにならない事を笑顔で口にするサーゼクス兄。

俺にその話をするとか皮肉のつもりか、と勘繰りそうになったが、その前にツッコまなくてはならないことがある。

「いや、小父さんもサーゼクス兄もなんで此処にいんのよ？ 今の地上がどうなってるかくらい知ってるだろ」

「ああ、リーアたんの高校最後の授業参観なんでね。その姿をしつかり記録しておこうと思ったんだ」

「テロ騒ぎの事は耳にしているが、リーアたんや君がいる街だからな。問題ないと判断したのだよ」

「……シバくぞ？」

爽やかに笑う馬鹿親子の言葉に、つい舌が滑ってしまった。

あと、親子揃って『リーアたん』言うな。

後ろで本人が泣きそうになってるから。

ていうか、なんでこんなに危機意識薄いんだ、この人達は。

クソツ、また胃がキュウキュウ軋み始めた。

……かなり効果が強い薬を貰ってるのに、なんか日に日に薬の効きが悪くなってる気がするぞ。

そういえば、前に薬を補充しに行った時に天狗様から『しばらく休め』って言われたっけ。

「冗談だよ。本当は今度の会談の会場になる学園を視察に来たんだ。

リーアの公開授業はそのついでさ」

真顔になってしまったせいかな、苦笑いを浮かべて言葉を返すサーゼクス兄。

「マジで勘弁してくれよ。それより、ここに来てることを高天原は知ってるのか？」

「いや。お忍びだから、近しい者しか知らないよ」

シレッと返ってきたサーゼクス兄の答えに、俺は思わず腹に手を当てた。

ヤバイ。

痛み方が捻るから刺す感じに変わった。

慌てて薬を口に入れて噛み砕いて嚥下するが、痛みは一向に治まらない。

「あのなあ……サーゼクス兄も小父さんも『禍の団』からすれば一級のテロ対象なんだぞ。それが事前連絡も護衛も無しで他国に足を踏み入れるなんて、テロ活動^{ほうじょ}幫助^{ほうじょ}って思われても文句言えないんだぞ……」

「いや、彼等も日本を攻めたりはしないだろう。そんな事をすれば、多神勢力から袋叩きに遭うだけだろうし」

「……もう日本はテロの標的になってるだろうが。聖剣事件の事、忘れたのか」

あと、袋叩きになる時は三勢力も一緒くただ、と付け足してサーゼクス兄達の反論を潰す。

怒鳴りつけてやりたいところだが、口から出るのは絞り出すような声だけ。

押さえた手から周りに感づかれないように聖母の微笑の力を送るものの、病気とは相性が悪いらしく効果は気休め程度だ。

なんとか呼吸を整えて気を練り、内功に昇華させて鎮痛剤代わりにする。

濤羅^{タオロ}師兄から教わった内功での応急処置のお陰で何とか痛みはマシになった。

さすがは『紫電掌』で負った内傷の手当に使うだけがある。

「とにかく、用が済んだのなら帰ってくれ。今の状況でサーゼクス兄達を狙ったテロなんて起きたら最悪日本と戦争になる。そうなったら矢面に立つのは俺なんだぞ。サーゼクス兄や小父さんは、俺とリアス姉達に殺し合いをさせたいのかよ？」

畳みかけるようにキツイ言葉を吐いた俺は、押し黙る二人に大きく息をついた。

むこうは保護者二人やリアス姉はもちろん、イツセー先輩やアーシア先輩、さらには付き添いのグレイフィア姉さんまで顔色を失っている。

つうか、なんでこういう事まで考えが至らないのかね。

さて、場はいい感じにお通夜状態である。

普段ならもう少しオブラートに包んだ話し方をする俺がここまで言ったのは、この空気を欲したからだ。

いくら今の朱乃姉でも、これでは爺ちゃん達と揉める事はできない。

後のフォローを思うと色々頭が痛いけど、今はこの場を穏便に乗り切る方を優先しよう。

「行こうぜ、爺ちゃん。例の件について話を詰めるんだろ？」

静観していた爺ちゃん達を促して、俺達は魔王の一団の横を通り過ぎようとする。

今までの話をガン無視して爺ちゃんを睨んでいる朱乃姉が不安だが、ここまで来たら押し通すしかない。

正直なところ、こつちもいっぱいいっぱいなのだ。

この状態で爺ちゃんと朱乃姉で揉められたら胃が保たない。

「——待ちなさい」

祈るような気持ちで進み後列の美朱と婆ちゃんが一団を通り過ぎた瞬間、地を這うような低い女の声俺達を呼び止めた。

背後から聞こえる勢いの増したスパーク音に振り向くと、ハイライトの消えた眼で貼り付けたような笑みを浮かべる朱乃姉がいた。

「その子達を何処に連れて行こうというの？ 姫島の走狗が」

……姉上えええっ!?

ここでそう来るか、あんたあ!!

今の雰囲気、どう考えても身内の話なんて出来る状態じゃなかった
だろ!?

いつもはニコニコ笑いながら空気を読むのに、今日に限ってエア
リーディング能力、どこに捨ててきたんだ!?

あんたも半分は日本人なんだから、しつかりその辺の空気は読んで
くれよおツ!!

「走狗とはご挨拶よな。これでも元当主なんじゃが」

若くなつた分貫禄が落ちたか? と顎髭を摩る爺ちゃんの余裕の
態度がカンに障ったのか、朱乃姉の顔から笑顔が消えた。

「下らない事を言っていないで、質問に答えなさい」

「この街の番所じやよ。此奴とは詰めねばならぬ仕事の話があるで
な」

憎悪を剥き出しにこちらを睨む朱乃姉に、飄々と答える爺ちゃん。

その余裕と貫禄の差は、一目で役者が違う事を感じさせる。

「戯れ言を。どうせお前達にとつて『忌み子』であるその子達を殺す気
なんでしょう」

「戯言はそつちじゃ、阿呆。なぜ儂が可愛い孫を殺さねばならん。そ
れに此奴は天津神の覚えめでたい日本神話の次世代のエース。手に
掛ければ姫島が潰されるわ」

心底呆れたように返した爺ちゃんの答えに、むこうの高校生組は驚
愕の表情を浮かべる。

あれ、もしかして本当に祖父だつて気づかなかつたのか?

俺は何回か『爺ちゃん』つて呼んでたはずなんだが。

「孫、ですって?」

「そうじゃ。お前達の母、朱璃は儂等の娘よ」

「貴女とは『初めまして』になるわね、朱乃。私は姫島綾乃。貴女の祖
母です」

「儂は姫島牙凰。お前の祖父じゃ」

美朱から手を放して爺ちゃんの隣で上品に頭を下げる婆ちゃんど、
仁王立ちのままの爺ちゃん。

二人の自己紹介に朱乃姉は啞然とした表情を浮かべる。

お袋そつくりの婆ちゃんを見て姫島の縁者とアタリを付けていたようだが、さすがに祖父母とは思わなかったのだろう。

「お二人共随分若く見えますが、今の話本当なんですか？」

「なに、数年前にとある事情で飲んだ霊薬の影響で若返ってな。それから歳を取らなくなってしまったのよ」

カラカラと笑う爺ちゃんに戸惑うリアス姉。そんな彼女に声を掛けたのは、ジオテイクス小父さんだ。

「彼の話は本当だよ、リア。数年前、姫島家に朱乃君達への不干渉の約束を取り付ける為に会った時と、容姿が変わっていない」

「ふん、あの時は心底呆れたぞ。冥界の公爵ともあろう者が、あのような下らん話を持ってきおったのだからな」

「下らない、か。私は本気だったのだからね」

「だからこそじゃ。公爵よ、仮にお主が受ける側に立ったとして先の約定を飲んだかね？」

「……なるほど。確かに飲めんな」

爺ちゃんの返しに顎に手を当てながら呻く小父さん。

というか、小父さんはそんな話を姫島に振っていたのか。

「さて、あちらも納得したようだし行くとするか。例の件まで日は無いからの」

「いや、朱乃姉がほったらかしじゃねえか」

「今のあ奴は相手にするだけ時間の無駄じゃ。あののように憎しみに曇った目では、何を説いたところで意味は無かろう」

無言で俯く朱乃姉を一瞥して、踵を返す爺ちゃん。

次の瞬間、背後で魔力が膨れ上がり、俺達の進路を塞ぐように紫電が通り過ぎた。

「行かせないわ」

振り返るとそこには一団の先頭に立ち、帯電した右手を爺ちゃんに向けた朱乃姉の姿。

朱乃姉が雷撃を放つ様を見たのだろう、周りから聞こえるざわめきに一気に血の気が引いた。

「美朱——!!」

「うん！」

こちらの意図を察した美朱が張った認識障害の結界のお陰で、ざわめきや視線は感じなくなった。

しかし、どう誤魔化せばいいんだ、これ。

ロビーにいた人数は百は下らなかつたはずだ。

記憶操作とかで対処できる数じゃないぞ。

余計拗れると思つて口出ししなかつたけど、もうそんな呑気な事は言つてられない。

「落ち着け、朱乃姉。爺ちゃんに俺達をどうこうする気はねえよ」

爺ちゃん達を庇うような形で向かい合うと、朱乃姉の眉が益々つり上がる。

逆効果になるのはわかつていたが、間違つても二人に攻撃を通すわけにはいかん。

特に婆ちゃんは非戦闘員だから、軽い雷撃でも命取りになりかねない。

「そこを退きなさい」

「断る。朱乃姉、取り敢えず深呼吸でもして頭に上った血を下げろ。テンパつて周りが見えてないから」

「あなたこそ正気なの？ そいつ等は母様を殺め、私達の命をつけ狙っていた奴等の元締めなのよ」

憎々しげに言葉を吐く朱乃姉に思わず舌打ちが漏れる。

こう言うアレだが、俺にとってはお袋の件はもう過去の事なのだ。

もちろん忘れたわけじゃない。

悼みもするし墓参りにも行く。

命日になれば、仏壇を前に法事だつてするさ。

しかし、あの事件が起きてもう十年だ。

眼前の姉のように『坊主憎けりや袈裟まで憎し』と言わんばかりに、姫島の縁者を憎み続けるなんて出来やしない。

ん、もしかして俺って薄情な奴なのか？

……いやいや、そんな事はない。

朱乃姉が憎み続けているのは、事件の背景を知らないからだ。姫島側にあの事件にかかわった者がもういないと知れば、俺と同じく踏ん切りがつく……はずだ。

きつと、たぶん、メイビー。

「それは違うぜ、朱乃姉。爺ちゃん達はあの件に関わってねえ」

自身の知らない内面が見えそうになり内心戦々恐々としたが、気を取り直して朱乃姉の説得に当たることにする。

「何を証拠にそう言うのかしら？　まさか、そいつ等の言葉を鵜呑みにしてるのではないわよね」

「生憎とそっちの言う通りなんだよ、これがな。物証なんかもない。こつちが見せられたのは、爺ちゃん達の証言だけだ」

肩を竦めてみせる俺に、朱乃姉の視線がさらに鋭さを増す。

「話にならないわね」

「そう言わずに最後まで聞けよ。この話には『ただし』が付くんだぜ」
「……なら、その『ただし』の後は何が続くのかしら？」

「当然、後に続くのは証言が確固たる真実の証明になる話だ。『ただし』俺達が爺ちゃんにその話を聞いたのは、冥府にある閻魔王の間。そして十王様の前でだぜ」

こちらの放った切り札に、イツセー先輩とアーシア先輩を除くむここの面子は息を飲んだ。

よしよし。なんちやって巫女の朱乃姉も、あの方たちの事は知っていたらしいな。

お袋に神道のイロハを習っておいて知りませんなんて言おうものなら、『DM巫女モドキ』の称号を与えているところだ。

「あの、お話のところすみません。その十王様と言うのはなんなのでしょうか？」

話が止まった隙を突いておずおずと手を上げるアーシア先輩。

まあ、一神教徒の先輩が知らんのは当たり前か。後ろで頭の上にハテナマークを浮かべてるイツセー先輩の為にもレクチャーしてやろう。

「十王様は冥府でアジア地域を担当している死者の功罪を裁く十柱の神様だよ。アーシア先輩も閻魔大王様の名前は聞いたことくらいあるだろう?」

「はい。仏教の神様ですよね?」

「本来はインド神話に所属していた『ヤマ』っていう冥界の王だったらしい。十王様って一括りに呼んでるけど、正確には秦広王、初江王、宋帝王、五官王、閻魔王、変成王、泰山王、平等王、都市王、五道転輪王の十柱の神様がいます。彼の方たちは順番通りに十の裁判を開いて死んだ者達の功罪を裁いていく。その際に堕ちるべき地獄や転生先を決めていくんだ。イツセー先輩、遺族が亡くなった人の為に初七日や四十九日に法要を行うのは何で知ってるか?」

「いや……。というか、その初七日とか四十九日の意味も分かんねえ」
「初七日や四十九日っていうのは故人が亡くなってからの日数を指す。他にも百か日や一周忌、三周忌ってのもあるけどな。日本で故人が亡くなった後に何度も法要が行われるのは、冥府で行われる裁判の時期に合わせて、十王様に対して嘆願を行って死者の罪を軽減させるためののさ」

「へー、ただの風習と思ってたぜ。いや、そういう事知ってるところはさすが神主って感じだな」

「二応神職の看板を背負ってるんだから、この位はな。因みにこういう法要は追善供養っていうんだけどな、この時の遺族の態度も閻魔王様の裁きの際には個人の功罪の証拠になるんだとさ」

「ご遺族の態度、ですか?」

「遺された者の態度から故人がどの程度慕われていたか、なんていうのも功罪の基準の一つになるんだろうな。さて、話を戻すか。朱乃姉、俺と美朱が爺ちゃん達からさっきの話を聞いたのは、黄泉路の伊邪那美様の許可を得て降りた、冥府にある閻魔王様の裁きの間だ。さらに言えば、そこにあった浄玻璃鏡でもそれが事実だと確認している。これでもまだ爺ちゃん達を憎むのか?」

俺の言葉に黙り込む朱乃姉。

因みに浄玻璃鏡というのは、閻魔王様が亡者を裁く際に善悪の見き

わめに使用する鏡だ。

これには亡者の生前の一挙手一投足が映し出されるため、いかなる隠し事もできない。

さらに、これで映し出されるのは亡者自身の人生だけじゃない。

その人生が他人にどんな影響を及ぼしたか、またその者のことを他人がどんな風に考えていたか、といったことまでがわかるらしい。

まあ、あの時は天照様の口利きで、特別にお袋の事件と爺ちゃんの証言の真実を確認しただけだが。

思えば、俺達が爺ちゃんを信用し始めたのはこの件を切っ掛けだったな。

ガキ二匹の信用を得るためにここまでされては、さすがにこっただって意固地ではいられない。

「……なら、誰が母様を殺し、私達を狙ったというの？」

「姫島朱凰。二代前の姫島家当主であり、爺ちゃんの実弟だった男だ」

「その男は？」

「儂が殺した」

俺達のやり取りを無言で見っていた爺ちゃんが発した、鋼を思わせる硬質な言葉に朱乃姉は息を飲む。

前に出て朱乃姉に相對する爺ちゃんに、俺は無言で場所を譲る。

あの時、閻魔様の宮殿で俺達は件の場面を見る事はなかった。

当時の状況を克明に映しだしていた浄玻璃鏡も、その時だけはまるで電源が切れたテレビのように暗闇を湛えていただけだった。

爺ちゃん達は全てを伝える覚悟を固めていたのだろうが、あれはきつと身内の肉親殺しを見せまいとする閻魔王様の配慮だったのだろう。

「元当主として姫島家の長男として、それが不適切である事は自覚しておった。非は墮天使に心を奪われ家を捨てた娘にあり、一門の秘を守る為ならば討たれるのもやむを得ん事もな。じゃがな、親として娘を、そして孫を殺める指示を出した彼奴を許すことができなかった。それがたとえ血を分けた実の兄弟であったとしても」

真っ直ぐに朱乃姉を見据えながら当時の心境を口にする爺ちゃん。

思えば、この件では爺ちゃん達も被害者だ。

袂を分かったとはいえ理不尽に娘を奪われたその痛みは、俺達がお袋の死の際に感じたものに勝るとも劣らないだろう。

「……………」

真摯に語り掛ける爺ちゃん言葉に少しづつ顔を俯かせる朱乃姉。前髪に隠れてその表情をうかがい知ることはできない。

「虚け者と嘲笑ってもかまわんよ。じゃが、儂等はその子を愛している。そして、その忘れ形見であつたお前達もな」

自身の胸の内を語り終え、爺ちゃんが口を閉ざす。

誰もが言葉を告げられないまま、結界内を一時の沈黙が支配する。そんな中、口を開いたのは朱乃姉だつた。

「嘘よ……………」

ポツリと零れ出た呟きと共に上げた顔に張り付いた般若の相に、爺ちゃんの表情がほんの少しだけ曇る。

「そんなはずがない！ 私達を襲つた奴等は母様を憎んでいた、蔑んでいた！ 家を捨てた愚か者、墮天使に身体を許した売女だど！！ それが今になって母様を愛していたなど…………ふざけるなっ！！」

堰を切る様に溢れ出す憎悪に塗れた言葉。

それが朱乃姉自身に言い聞かせるような響きを持つように聞こえたのは、俺の気のせいだろうか。

「いい加減にしろよ、朱乃姉……………」

「うるさいっ！！ 信じられるものですか！ あの地獄を見せた奴等なんて！！」

朱乃姉が上げた血を吐くような叫びに、俺は思わず口に含んでいた言葉を飲み込んだ。

「腹を裂かれた貴方！ 狂つたように泣き叫ぶ美朱！ 血に染まつて動かなくなつた母様！！ そんな私達を『淫売』や『雑種』と嘲つた男達!!! あんな仕打ちを受けたのに、何故あなた達はそいつ等の言葉を信じられるの!?!」

「……………」

目に涙を溜めて激情のままに吐き出す言葉を前に、俺は返す言葉を

持たなかった。

あの時、真つ先に返り討ちにあつた俺は、朱乃姉の口にする光景を見ていない。

それが俺と朱乃姉のお袋に対する想いの差なのだろうか。

……いやいや、ちよつと待て。

それなら美朱はどうなる。

あいつだつてモロにあの光景を見てるはずなのだ。

なのに、普通にこつち側にいるじゃないか。

これはあれか？ 転生関係の弊害である精神年齢の差つて奴なのか。

……ハツ!?

いかんいかん。あんまりな事態に現実逃避していた。

兎に角、このままで良いわけがない。

俺の考えている日本に悪魔や墮天使の受け皿を作る計画は、姫島家の援助が無くては成立しないのだ。

なんとかしないと、計画が上手くいっても朱乃姉の居場所がなくなつちまう。

「もうよい。これ以上、何を言っても彼奴には馬の耳に念仏じゃわい。放つておけ」

尚も言葉を重ねようとする俺の肩に手を置いた爺ちゃんは、そのまま肩を抱くようにして俺をこの場から引き離そうとする。

その足元を再び雷撃が跳ねる。

「その子達は連れて行かせないと言つたわ」

「虚^{うつつ}けが。そうやってまた、お前は自分の都合で慎や美朱を振り回すつもりか?」

「……なんですつて?」

「自身が墮天使を嫌うが故に幼き時から父親との接触を断ち、さらには神社に住みたいという我儘の為に年端のいかない内からの労働を強いる。お前は考えた事があるのか? 公爵の保護下にあつたとはいえ、異なる種族に囲まれたこの子達の心細さを。そして学校に通う同輩達が遊びや部活を楽しむのを尻目に、厳しい神職の修行と勉強を

両立させねばならなかった苦勞が」

「それは……」

爺ちゃんの指摘に朱乃姉は先ほどの勢いを失って言い淀む。

「今回の事もじゃ。美朱は兎も角として、慎は己の行くべき道を決めた。この国の裏に通じて生きる以上、五大宗家に関わらぬ事はできません。お前が今やっておる事は慎の将来を潰す事と同じぞ」

「だからお前達に任せろと？ 冗談じゃないわ！ 百歩譲ってお前達の言う通りだとしても、他の者は私達を疎んじているはずよ」

「そ奴らが慎を殺すと？ 阿呆が、こ奴がそんな木っ端共に殺られるタマカ」

それだけで人が殺せそうな視線を向ける朱乃姉の懸念を、爺ちゃんは鼻で笑い飛ばす。

「そもそもお前の心配自体が的外れよ。姫島はおろか、五大宗家全てを見てもこ奴より強者はおらぬ。儂を含めたすべての当主が束になってかかってもこ奴には勝てん。そんな者をどうやって殺すというのじゃ」

……なんつうか、身も蓋も無いな。

というか、ここでもこういう扱いかよ。

「言われてみれば、確かに……」

おい、納得すんな朱乃姉。

「それに、婆さんは戦えんのじゃ。もしお前の言う通りならわざわざ連れてくるわけがなからう」

「……」

爺ちゃんの言葉に朱乃姉は答えを返さない。

しかし、渦巻いていた魔力が収まっていくところを見ると、こちらに危害を加える気はなくなっただけらしい。

「うむ、そちらも気が済んだようじゃな。ならば儂らは行かせてもらうぞ」

ようやく胃の痛くなる時間が終わったらしい。

両肩に押し掛かるような疲労感を感じながら安堵の溜息を吐いた俺は、爺ちゃん達に最後尾に付いて出口に向かう。

とにかくここを離れよう。

これ以上の身内の騒動は本気でご免だ。

未だにシクシクと痛む胃の辺りを抑える俺の足がロビーの入り口に差し掛かった時、爺ちゃんが夕日を背にして振り返った。

「朱乃よ、朱璃の事を悼むなどは言わぬ。じゃがそれに囚われて己が可能性を狭めるような事はするな。朱璃もお前の今の在り方を望んではいないはずじゃぞ」

爺ちゃんが告げた言葉の返しは、天井を突き抜けて降り立つ魔力を帯びた落雷だった。

舞い上がる粉塵がはれた先には、全身に紫電を纏い能面のような無表情でこちらを見据える朱乃姉の姿。

爺ちゃんめ、最後の最後で地雷を踏み抜きやがった……ッ！

「お前たちが……ッ！ その口であの人の事を語るなあッ!!」

ライザー氏とのレーティングゲームで放ったのと同じ全力の雷撃は、紫電の蛇を形作りながらこちらへと飛翔する。

宙を這う奴の狙いは、非戦闘員である婆ちゃん。

寸でのところで婆ちゃんと身体の位置を入れ替える事は出来たが、代わりに大きく顎を開いた雷蛇の牙を受けることになった。

紫電に戻った蛇が全身を覆い、全身をチクチクと刺すような感覚が襲う。

例えるなら、電気風呂に入っているようなビリビリ感か。

攻撃のエフェクトに対してダメージがとつてもシヨボいとか言うな。

断っておくが、朱乃姉の攻撃は見かけ倒しだったわけじゃないぞ。

この程度で済んだのは、親父の血による雷撃耐性と単純な実力差故だ。

並の悪魔ならあつと言う間に消し炭になっている。

こちらが身を挺して守ると思っていなかったのか、呆然としている朱乃姉に歩み寄った俺はその頬に向けて手を上げた。

結界内に響くパンツという軽い打撃音。

打たれて赤くなつた頬を押さえながら俯いた朱乃姉の姿に、叩いた

手と胸に痛みが走る。

クソツ、殴られた方より殴った手の方が痛いってのは本当だったんだな。

「慎……どうして」

「あ——」

俺に殴られた事にショックを受けているのか、酷く傷ついた表情を浮かべる朱乃姉に声を掛けようとした瞬間、腹の中でブチリという音が鳴った気がした。

拙いと思うよりも早く喉をせり上がった鉄サビ臭いそれは、止める間もなく言葉の代わりに口からこぼれ落ちる。

「え……う？」

こちらの襟元と大理石の床を点々と染める赤いシミ。

理解が追いついていない朱乃姉の惚けた声を尻目に、俺は腹部を襲う激痛に身体をくの字に折った。

クソツたれ……ツ!?

この場面で泣きを入れるとか、根性がないぞ我が胃袋よ。

内心で毒づきながら経絡に意識を集中したところ、穴が空いたのは胃の下側であることがわかった。

詰まりそうになる息をゆっくりと吐きながら、内容物が漏れないように身体操作で胃袋を異常収縮させて一時的に穴を塞ぎ、同時に腹に当てた手からトワイライト・ヒーリング聖母の微笑の波動を送って損傷箇所の治療を行う。

シャレにならないくらい痛い、ここは我慢だ。

胃の中のモノが漏れ出したら急性腹膜炎を併発する可能性がある。この身体がそんな事で死ぬとは思えないが、かか罹れば入院は確実。

今の時期にそれは非常に拙い。

「慎、大丈夫か!？」

「慎!？」

「もしかして、今の電撃でケガしたの!？」

こちらに駆けよってくる爺ちゃん達。

顔を上げると美朱の発言で蒼白になった朱乃姉が見えた。

これはフォローしとかなないと、新しいトラウマになりかねん。

「違う……ストレスで……胃に穴が空いただけ……。今……治療してるから……」

爺ちゃんに支えられながらなんとか返答を返す。

虫が鳴くような細かい声しか出ないのが、我ながら情けない。

朱乃姉に聞こえていけばいいのだが。

「それはいかん!? 婆さん、伊勢谷に連絡じゃ! 慎を病院に連れていくぞ!!」

「はいー!」

「こつちも結界を外すね!」

事態について行けていないグレモリー一行をそのままに、あつという間に撤収を始める我が身内。

いや、放つといったらダメな事あるだろ。

朱乃姉のことや雷撃を見た堅気の衆とか。

あと、天井ブチ抜いた落雷の人的被害の有無等々も。

「よいか慎よ。管理者というのは、任された場で起こった問題の責任を背負う為にある。そして、この地でその任に就くのはあそこにいるグレモリーだ。後はわかるな?」

このジジイ、面倒事を全部リアス姉に丸投げする気だ。

普段は管理なんて認めてないような発言してるくせに、なんてダーティな……!!

「憶えておくがいい。人の上に立つコツはな、味方には実入りの多い簡単な仕事を回し、敵対する者には益の少ない厄介事を押し付けることよ」

これが海千山千の老怪が犇めく五大宗家を統べた男の手腕……ツツ!?

汚い! ジジイ、汚い!!

「普段はお前に厄ネタを押し付けて、学生生活を謳歌しておるんじゃ。偶には仕事をしてもらわんとな」

それ偏見! リアス姉、日常業務はちゃんとやってるから!!

背負われた俺のツツコミにニヤリと笑みを返す爺ちゃん。

つうか、足速いな!

あの無駄に広い校庭の半分まで来てるんだけど。

「気にすんなよ、朱乃姉！俺の怪我は胃炎が原因だからな！さっきの電撃なんて、電気風呂程度しか効いてないし!!」

猛烈な勢いで遠ざかるロビーに、俺は今出せる限りの声を放った。

……あ、やべ。また血が出てきた。



初夏の日も半ば沈んだ午後七時。

日中の陽射しの残滓が蒸し暑さとなって色濃く残る道を、俺はトボトボと歩いていった。

仕事の話は病院で済ませたので爺ちゃん達は引き上げたし、一人になりたい気分だったので美朱は先に帰らせた。

しかし一人になってみると、さっきの騒ぎでの自身の至らなさが頭の中をグルグル回って気分は最悪。

テンションはだだ下がりである。

あの後、市内で一番大きい病院に連れて行かれた俺は、MRIから検便、採血に胃カメラまで色々な検査をたらい回しにされるハメになった。

その結果は重度の心因性胃潰瘍。

聖母の微笑で塞いだ穴も見つけられた為に、即入院するように言われた。

とはいえ、こちらも『はい、そうですか』とはいかない。

少なくとも三勢力の会談が無事に終わるまでは、呑気に病院のベッドで寝てられないのだ。

因みに、現在の俺の胃は胃壁を覆っているはずの繊毛が全て胃液で溶けてツルツルの状態らしい。

潰瘍の他になんか小さな腫瘍も幾つか出来てるらしく、このまま悪化すれば胃ガンになるかもしれないそうだ。

……俺、まだ十五だよね？

この歳からガンのリスクと戦わねばならんとか、どんだけ人生ハ

ドなのか。

いやまあ、胃が無くなっただくらいでは死なないのはわかっているの
で、いざとなればガンができた胃を捨てて、聖母の微笑で新しい胃を
造ればなんとかなるのだが。

それに朱乃姉とのこともある。

というか、何故あのタイミングで吐血したのか、俺。

あれではただ朱乃姉を叩いただけで、意味不明ではないか。

しかも吐血オチとか、締まらないにもほどがある。

まったく、橘右京か俺は……。

ああ、こんなザマでどのツラ下げて家に帰ればいいんだよ。

ふと立ち寄った公園のベンチに腰掛けて、俺は頭を抱え込む。

………いかんいかん。

また考えが悪い方向に行ってる。

医者もストレスは大敵だと言ってたじゃないか。

とはいえ、朱乃姉にも困ったものだ。

昔の事を何時まで引きずって——

いや、これに関しては俺が薄情なのかもしれない。

目の前で親が殺されたんだ、朱乃姉の態度こそが普通なのかもな。

今まで家族第一でできる限りの事をしてきたつもりだったんだが、

本当に朱乃姉達の事が見えてるのか、自信が無くなってきた。

「………なんか、疲れたなあ」

ため息と共に黒く染まった空を見上げようとして、俺は漸く辺りに

漂う霧に気がついた。

今日の天気は雲一つ無い見事な夏日だった。

空気中の水分が夜気に冷やされて靄へと戻る明け方ならともかく、
日が落ちたばかりのこの時間に視界を覆うような濃霧など普通はあ
りえない。

———どうやら、自分で思っていた以上に腑抜けていたらしい。

ベンチから立ち上がり周囲を探ると、こちらに近づいてくる三つの
気配がある。

二つは人間、もう一つは恐らく龍。

この異常なまでの氣のデカさからして、さぞかし名のある龍神なのだろうが……この氣配、どうも氣に入らない。

別に毒や不浄を撒き散らしているわけではないし、逆に聖氣や神氣を纏っているわけでもない。

なんと言うか、生理的に受け付けない。

氣配を感じるだけで虫酸が走るのだ。

「この『デイメンション・ロスト絶霧』の境界内で正確に俺達の氣配を探し当てるとは、さすがと言っておこうか『第三』殿」

パラパラとしたシヨボい拍手と共に霧の中から現れたのは、二人の男と一人の少女だった。

男二人は人間、龍の氣配がするのはあの少女だ。

ということは、あのナリも擬態の可能性が高いな。

「まずは自己紹介といこう。俺は曹操、魏王『曹猛徳』の子孫だ。隣にいるのがメフィストフェレスを使役したファウスト博士の子孫であるゲオルク・ファウスト。そして彼女がオーフィス。君も聞いたことくらいあるだろう、世界最強と言われる『無限の龍神』だ」

ドヤ顔で語りだす神氣を宿した槍を持ち漢服を肩に掛けた男。

……あれがオーフィスねえ。

膝まで伸びた黒髪に下着無しで前が全開なゴスロリ衣装を着るイカレたガキに目を向けると、むこうも敵意剥き出しな視線をこちらに放ってくる。

どうやら、異様な嫌悪感を感じているのはこちらだけでは無いようだ。

「それで、偉人の子孫様が俺に何の用だ？ 先祖の自慢話をするためにこの大層な結界を張ったわけじゃないよな」

「随分とせっかちなんだな。まあいい、本題——「我の手下になれ。断れば殺す」

芝居がかった曹操の言葉に、割り込む形で要求を突きつけるオーフィス。

なるほど、シンプルかつ分かりやすい。

なら、返答もシンプルな方が良いだろう。

「断る」

「死ぬ」

こちらが口を開いた時には、拳を振り上げた状態でオーフィスが懐に飛び込んでいた。

間髪入れずに奮われる、寸毫の容赦もない世界最強の拳。

余波だけで周りの物を容易く吹き飛ばすそれは、十字に交錯させた俺の腕に阻まれた。

防がれると思っていなかったのか、僅かに目を見開いたオーフィスの刹那の隙を突いた俺は、こちらの腕に食い込んだ拳を捕ると同時に掌を相手の顎に当てて、後頭部から地面に叩きつける。

確かな手応えと共に、叩きつけられた頭を中心にすり鉢状に陥没する地面。

しかしオーフィスはダメージなど無いと言わんばかりに、こちらの拘束を逃れて空中で二度三度とトンボを切りながら間合いを取る。

腕に残るビリビリとした力の残滓と吹き荒れる殺気に、口元が 뜨り上がるのが分かった。

先程の拳の威力は『きゆうきよくキマイラ』の突進と同等。

奇しくも『狂』ランクはオーフィス並、というランク基準を証明する形になったようだ。

まあ、あの化け物のようなインチキスキルは持つてはいないだろうが。

「おい、ファウストとやら。この結界は完璧なのか？」

「は……？」

「内側からの衝撃で破れたりしないのかって聞いてるんだよ」

「あ、ああ。この結界は『絶霧』の能力を最大限に活用している。誰であろうと破ることは出来ないはずだ」

オーフィスの殺気に当てられた所為で少々滑舌が怪しいながらも、太鼓判を押すファウスト。

「それを聞いて——」

しっかりと言質を取った俺は、潜心力を一気に全開にして地を蹴った。

全力の踏み込みは数十メートルあったオーフィスとの距離を一瞬で殺す。

「――安心した」

そして先ほどの返礼に放った右拳はオーフィスの腹部を捉え、たつぷりと氣を撃ち込みながら奴を霧のむこうへと吹き飛ばす。

「感謝するぜ、お前等」

「な……なに？」

「面倒事だらけでムシヤクシヤしてたところだったんだ。……おかげで何もかも忘れて大暴れできる!!」

霧の中から現れたオーフィスを視界に捉えながら、俺の身体を界王拳特有の紅い氣勢が覆う。

その倍率は現在の限界である10倍、ついにナメツク星の悟空に追いついた。

このひと月、地獄のようなスケジュールの中でもめげずに鍛錬を続けた甲斐があったというモノだ。

『『絶霧』の結界が軋むだ?!? な……なんだこの力は!?!』

「ゲオルク！ 奴は無限に目覚めたばかりの未熟者じゃなかったのか!?!」

氣勢の余波で揺れる地面の上でうろたえながら這いつくばる英雄の子孫とは違い、オーフィスはこちらを見据えたまま微動だにしない。

しかし、その赤い目はさきほどとは違い瞳孔が縦に割れた爬虫類の物になっており、身体に纏う氣も一段階上の物になっている。

「さて、やろうかクソ蛇。命を懸けた力比べをよお!!」

「殺す……!!」

蹴り足で粉碎した土煙を巻き上げながら迫るオーフィス、それを迎え撃つために俺もまた地面を蹴った。

17話

えくと、皆様お久しぶり。
久々登板の姫島美朱です。

今の時間は夜の10時、私は駒王学園に來ています。

慎兄が病院に担ぎ込まれた後、当人に促されて家に帰った私は、クー兄や玉藻さんと一緒に兄弟達の帰りを待っていた。

しかし、いくら待てども二人は帰ってこない。

末っ子気質な私は夜分に家族がいないと落ち着かないのだ。

理由がわかっていれば我慢もできるが、そうでなくては不安になる。

二人の携帯にかけても返答はなし。

聞けば朱姉はともかく、慎兄のほうは玉藻さんの呪術でも居場所が掴めないと言うではないか。

あの人間最終兵器な兄の事だからちよつとやそつとの事など笑顔で蹴散らすのだろうが、それでも心配になるのが家族というもの。

そこで私は玉藻さんと一緒に、慎兄を探しに行くことにしたのだ。

夜の街に繰り出した私達が最初に向かったのが駒王学園。

慎兄が来ていないかの確認と、オカ研にいる朱姉に夕方の騒ぎで話したい事があつたからだ。

部室に入るとロビーにいなかった小猫とギヤール助、祐兄以外のメンバーに微妙な顔をされた。

リビングに朱姉の姿が無かつたので訊ねると、夕方の事がショックだつたらしく客間に隠っているのだという。

お祖父様の事もそうだけど、慎兄に叩かれた事が尾を引いてるのだろう。

慎兄はふざけた場合のツツコミを除いて、今まで朱姉に手を上げた事はなかつたからなあ。

姉妹二人だけで話したかつたので、申し訳ないと思つたが玉藻さんにはここに残つてもらつた。

ノックのあとに客間の扉を開けると、小さなテーブルを挟んで向か

い合う革張りのソファのむこう。

部屋の隅で三角座りになって、膝の間に顔を埋めている朱姉の姿があった。

「朱姉？」

「……放っておいて」

傍に寄って掛けた声に帰ってきたのは、拒絶の意志。

でもね、朱姉。

そんな鼻声で言われたら、余計放っておけないよ。

「朱姉、夕方の事で聞いて欲しい事があるんだ。返事はしなくていいから、少しの間だけ時間をくれないかな？」

朱姉からの返事はない。

追い出されないだけマシ、と前向きに考えて私は言葉を紡ぎ始める。

「いきなりだけど、ごめんなさい」

「え……？」

頭を下げた私に、思わずといった感じで顔を上げる朱姉。

「お祖父様達の事、朱姉には黙ってたでしょ？ 今さらだけど謝りたかったんだ」

「……そう。貴方達は何時から姫島と会ってたの？」

「神職の修行を始めてすぐ、かな。ほら、この顔で姫島の姓を名乗ってたから、むこうはすぐにママの子供だってわかったみたい」

「……迂闊だったわ。偽名でも名乗らせておけばよかったかしら」

頭を抱える朱姉に私は思わず苦笑いを浮かべてしまった。

「むこうも五大宗家の一つだからね、その程度じゃ誤魔化されないと思うよ。それでね、慎兄が言ってたような事があって、お祖父様達と会うようになったんだけど、その時に私達は一つの約束をしたの」

「それは……？」

「お祖父様達をはじめとした姫島一門の人間は、朱姉に接触しないこと」

私の言葉に朱姉は大きく目を見開いた。

「どうしてそんな約束を？」

「私達の中で、ママの事で一番傷付いたのが朱姉だから、かな」

「貴女はどうなの？ あの時の事を見ていたでしょう？」

「実はね、あの時の事はあんまり覚えてないの。思い出そうとすると、頭に靄もやが掛かったみたいになっちゃうから」

少し困った風な表情を浮かべて言葉を紡ぐと、朱姉は体育座りを解いて私の頭を胸元に抱き寄せる。

「そうだったの。……そうね。あんな記憶、思い出さない方がいいわよね」

朱姉の胸に顔を埋めながら、一つ嘘をついたことを私は心の中で謝った。

……ゴメンね、朱姉。

本当はあの日の事は覚えてるんだ。

転生の影響で不相応に成長した意識は降りかかった理不尽に悲鳴を上げながらも、襲撃者達の洩らした言葉から拾い上げた事の概要にどこか納得してしまったのだ。

あの悲劇は起こるべくして起こった事であり、責任の所在は両親にあることを。

パパとママが出会わなければ、とは言わない。

しかし、駄げ落ちなどせずには姫島家と向き合っていれば。

もしくはママが姫島や日本の生活を完全に捨ててグリゴリの庇護下に入っていれば、あんな事にはならなかった。

だからこそ、私は墮天使や姫島家を心の奥底から憎むことはできないのだ。

「でも、そんな約束までして付き合わなくてもよかったんじゃないの？」

「この国で宗教や呪術に携わるなら、五大宗家と無関係じゃいられないよ。あの時って私達は天津神の推薦で神職研修を受けてたから、辞めるなんて言えなかったし。それに、朱姉だって神社で生活するの楽しみにしてたじゃん」

「……バカね。そんな事、気にしなくてもいいのに」

「します。朱姉が神社で暮らしたかったのって、ママとの思い出があ

るからでしょ？」

私の指摘に凶星を突かれたかのように、息を飲む朱姉。

いや、そんな秘密がばれた的なりアクションしなくても。

けっこうバレバレだったからね、これ。

「……ええ。私はもう一度あの暮らしを取り戻したかった。母様はもういないけど、貴方達がいればもう一度幼い頃のように穏やかに過ごせると思ったの」

押し黙る朱姉に私は小さく息をついた。

日頃からちよくちよく感じてた、慎兄と朱姉の認識の違いがなんとなくわかった気がする。

上手く言えないけど朱姉は過去を、慎兄は未来を見てるんだ。

ママの事件だって慎兄には過去の事でも、朱姉にとっては未だに胸を苛む忌まわしい事件なんだ。

修行に仕事と遮二無二に前へと進む慎兄と、ママと家族で幸せだったあの時に焦がれる朱姉。

ここまでスタンスが違うからこそ、今日の朱姉の頑なさを慎兄は理解できなかったのだろう。

「でもね、美朱。今はその自信がないの。……私には慎がわからない。あの子が何を考えているのかが理解できない」

精神的に弱っているのだろう。

普段なら漏らさない慎兄への弱音を吐く朱姉に、私は言葉を詰まらせた。

物事の視点が違う上に所属する組織も変わってしまった。

さらに慎兄は弱音なんて漏らさないし、何でも一人で背負って肝心な事はあまり話さない。

これで相手を理解しろと言うのは無茶だろう。

でも、それでも確実に言える事が一つだけある。

「慎兄は……お兄ちゃんは、いつも私達の事を考えてるよ」

「どうしてそう思うの？」

「だって、お兄ちゃんが世界中の神様から一目置かれるような力を手に入れたのは、私達の為だもん」

「私達の……？」

「そうだよ。趣味の部分も無いとは言わないけど、ああやって馬鹿みたいに鍛えてるのは自分の身内を護る力を得る為だから」

首元に力なく回された腕から抜け出した私は、先ほどとは逆に朱姉の頭を胸に優しく抱きしめる。

いつもリーア姉や私を抱いて慰めているのだ。

たまにはされる側に回ってもバチは当たらない。

「お兄ちゃんはある時の事を忘れてない。それどころかずっと悔やんでる。だから力を求めるの、誰が相手でも家族を護れるように」

小さな子をあやすようにポンポンと背中を叩いてあげると、押し殺した声と共にゆっくりと胸元が湿っていく。

「わかってるよ。お祖父様達のことよりも、お兄ちゃんに叩かれた事がショックだったんだよね？」

私の豊かな、豊かな（大事なことなので二度言った。決して小さくなどない!!）バストの中で小さく頷く朱姉。

「大丈夫。お兄ちゃんはお姉ちゃんのこと、嫌いになったりしてないから」

「ふ……………う……………っ!？」

嗚咽でまともな言葉になってないが、これでも私は妹道十五年のベテランだ。

朱姉の言わんとしている事くらいわかる。

「本当だよ。あの時はああでもしないとお姉ちゃんは止まらなかったでしょ？ だからお兄ちゃんも仕方なく手を上げたの。あのまま暴れ続けたら、グレモリーのみんなもお姉ちゃんに対して何らかの処分を下さないといけなくなってただろうしね」

「……………」

「お兄ちゃんってさ。正しいと思ったたら突っ走っちゃう人だけど、ちゃんと後悔や反省もするの。だから、今頃どこかでお姉ちゃんを叩いた事を悪いと思ってるはずだよ」

「……………慎はいいいの？」

あ、ヤベ。失言だった。

胸元からこちらを見上げる、弱々しいながらも年長者の目にはさすがに嘘はつけない。

仕方が無いので、私は学校を離れてからの事を朱姉に伝えることにした。

まあ、さすがに胃ガンについては伏せておいたが、それでも慎兄が即入院レベルの体調だった事はショックだったようだ。

「行くわよ、美朱。早く慎を見つけて病院に入れないと」

話が終わると同時に立ち上がった朱姉の顔には、先程までの弱々しさは感じられなかった。

「というか朱姉、入院うんぬんは本人が断ったからね。」

今度の会談が終わるまでは、休めないんだって。

「本当にあの子は……。どうして自分の身体を大事にしないのかしら」

頭を抱える朱姉。

まあ、慎兄だからその辺は仕方ない。

それよりも行こっか、朱姉。

「あ、美朱。ちよつと待って」

扉に掛けようとした手を引かれたと思った瞬間、顔に当たるマシユマロ感覚と良い匂い。

私はまたしても朱姉にハグされていた。

「貴方のおかげで気持ち became 楽になったわ。ありがとう」

「このくらいはお安い御用。美朱ちゃんセラピーは、このハグだけでお釣りがくるのです」

「あらあら。なら、これからも利用させてもらおうかしら」

「まいどあり?」

いつもの調子を取り戻した朱姉に満足しつつドアノブに手を伸ばした瞬間、轟音と共に周囲を激震が襲った。

「……ッ!? 朱姉!」

「こっちは大丈夫よ!!」

とつさに身を低くして揺れに耐えながら、私達はお互いに声を掛け合う。

これはただの地震じゃない。
地面だけじゃなく、まるで空間全体がもの凄い力で振り回されてる
ように感じる。

それにこの莫大な氣の氣配。

いったい何が起こっているの!?

いや、それを考えるのは後だ。

まずはここから脱出しないと。

這うようにして出口に近づいた私は、ドアノブを掴むと捻りながら
前に押し出した。

魔力による補強が建物を歪みから護ったのか、引つかかりも無く開
いたドアに安堵しながら客間から出ると、散らかった部室と床に四つ
ん這いになった皆の姿が目に入った。

「朱乃。美朱も無事だったのね」

「ええ。リアス、心配を掛けてごめんなさい」

「リーア姉、そっちは大丈夫なの?」

「部員は問題ないんだけど、玉藻の様子がおかしいみたいなの」

「みたい?」

「揺れが始まると同時に彼女から聖なる力が吹き出て、私達は近づけ
ないのよ」

リーア姉に促されて目を向けると、部室の一角に光と神氣に満ちた
空間が出来ていた。

なるほど。これは悪魔のリーア姉達では近寄れないだろう。

「おーい! 玉藻さーん! 大丈夫?」

「いや、美朱さんは神氣も浄化の力も影響ないんだから、そんな遠くか
ら声をかけなくてもいいでしょうに」

玉藻さんの身体から漏れ出す力の効果範囲外から呼びかけると、呆
れた声と共に一角を覆っていた光は収束し、中から玉藻さんが出てき
た。

「どうしたの、玉藻さん? 服が豪華になってるし、それに尻尾増えて
るよ」

思わず感嘆の声を上げながら、マジマジと玉藻さんの姿を見てしま

う。

いつものどこかエツチい和装ではなく、青を基調にした豪華な十二単を身に纏い、桃色の髪には金の簪。

手にはたわわに実ったススキを持ち、背後で立ち上がる狐の尾は三本に増えている。

「つい先程、ご主人様とのパスが繋がったのですが、とたんにとんでもない量の氣が流れてきたのです。おかげで尻尾が増えて権能を取り戻すわ、挙げ句の果てには着ていた礼装がパワーアップするわとびつくりです」

手にしたススキで自身の肩を叩く玉藻さん。

パスというのはよくわからないけど、とにかく慎兄が膨大な氣を使っている事は理解した。

あの兄がそんな事をするのは、十中八九荒事に巻き込まれた時だ。

「!? 皆さん、衝撃に備えてください！ 空間を破壊して何かが来ます!!」

玉藻さんの警告にみんなが身体を丸めた瞬間、窓の外から聞こえた凄まじい爆音と共に、強烈な震動が部室を襲った。

頭に残る揺れの余韻を振り払って窓の外に身を乗り出すと、月明かりに照らされた校庭の中央に立ち上る膨大な土煙が目に入った。

「なんだろう、あれ」

「煙だらけでなんも見えねえな……」

「何かが落下した跡みたいですが」

「あそこにあるのが、玉藻の言ってた『何か』なのかしら」

窓に集まったオカ研メンバーが口々に感想を言い合っていると、一陣の風が校庭を通り過ぎた。

薄れていく土煙のむこうから現れたのは、隕石の落下を思わせる巨大なクレーターの中央で、黒い龍を思わせる外骨格を纏った成人男性のような人型と睨み合う慎兄の姿だった。

「何だよ、あの黒い奴。赤龍帝の籠手の禁手に似てるけど……」

イツセー先輩の呟きに私は言葉を返せなかった。

あの人型を見ていると震えが止まらない。

理屈じゃ無く本能があれに怯えている。

確かに外見はイツセー先輩やヴァーリ君の禁手に似ている。

でも、アレはもつとヤバいモノだ。

『拙いぞ、相棒。あそこにいるのは最悪の化け物だ』

「ドライグ?」

一人でに現れた赤龍帝の籠手に驚くイツセー先輩。

籠手に宿る天龍ドライグは宿主の動揺をよそに言葉を紡ぐ。

『奴はオーフィス。』ウロボロス・ドラゴン『無限の龍神』と呼ばれる世界最強のドラゴンだ』

ドライグの言葉に部屋にいる全員が凍りついた。

『無限の龍神』の名は私も聞いたことがある。

世界に二柱存在する無限の一角で、いかなる勢力にも属さない赤龍神帝に並ぶ世界最強の存在。

全ての神話から『触れざる者』として扱われ、敵対する事は死を意味すると言われていた化け物だ。

「世界最強って……なんでそんなのと戦ってるんだよ、あいつ!」

「……冥界でイツセー君を助けに行った時、ギヤスパー君に潜む魔神が言っていましたわ。あの子は『第三の無限』だと。もしかしたら、それが関係しているのかも知れません」

朱姉の言うとおり、慎兄は各神話勢力からそう目されている。

でも、天照様やダヌー様はまだ未熟って言ってたはずなのに……。

『その話は本当かもしれないな。グレートレッドを除いて、オーフィスを龍の姿にした者はいない』

「じゃあ今の姿は……?」

『信じられんが、龍のそれだ』

ドライグの言に皆が固唾を飲む。

つまり、今の慎兄は世界最強が本気を出すほど強いという事なのか。

私達の思いをよそに睨み合う二人。

両者とも全身傷だらけだが戦意は衰えていないらしく、互いが放つ気によって周辺の空間が歪んで見えてしまう。

「どうした、クソ蛇。世界最強ってのは、この程度か!」

「A A a a a a a a a a a a ツ!!」

見たことのないような寧猛な笑みを浮かべる慎兄の挑発に、粉碎された地面を残してオーフィスの姿が消える。

「え……っ!?!」

「消えた!?!」

オーフィスの姿を捉えられた者はいないらしく、口々に騒ぐオ力研のみんな。

かく言う私も奴の姿は見えていない。

気配察知も全開にして、辛うじて動きが追えるくらいだ。

この一ヶ月、気持ちを入れ替えて無限の闘争で修行したのに、やっぱり世界最強は伊達じゃない。

「皆さん、落ち着いて下さい。奴は正面からご主人様に突撃しています」

取り乱す私達に凜とした声が響く。

声の先には、校庭に厳しい視線を向ける玉藻さんの姿が。

「玉藻。貴女、もしかして見えているの?」

「辛うじて、です。ご主人様の氣で靈基が上がってなかったら、到底捉えられません」

これも愛の絆が成せる業ですね!　なんてドヤ顔で言いきつてる玉藻さんは置いといて。

辺りに衝撃波を撒き散らしながら、次々と撃ち込まれる黒い魔拳。

慎兄は防いでいるように見えるのだが、ぶつかると血飛沫が上がるのは心臓が悪い。

「A a a a a a a a a a a a ツ!!」

オーフィスが上げる奇声と共に回転を増す拳。

防御を固めながらも徐々に押された慎兄は、気付けばクレーターの淵まで追いやられていた。

相手を壁際まで追いつめた事で、振るう拳に更なる力を込めるオーフィス。

そして放たれる必殺の一撃。

しかし次の瞬間、吹き飛んだのはオーフィスの方だった。

頭部から砕けた外骨格の破片とコールトールのような体液を撒き散らしつつも、なんとか踏み止まるオーフィス。

だが動こうとした途端、その腰が大きく落ちる。

……さすがは慎兄、今のは『はじめの一步』の宮田ばりの一撃だった。

さしもの龍神も今のは効いただろう。

「え……？」

「なにがあつたのでしょうか？」

「……慎がピンチ、だつたはず？」

「おい、ギヤスパー。今の見えたか？」

「ムリですう!! 使い魔の視界を使つても何が何だかわかりませんよお!!」

「大振りになつたあの黒スケの拳に坊主がカウンターを合わせたのさ。側頭部の急所をモロに抉つてたからな、あの化け物も少しは堪えたようだな」

背後からの声に振り返ると、そこにはクー兄を先頭に駒王番所の面々、少彦名様や晴矢君までもが顔を揃えていた。

「みんな、どうしてここに？」

「こんな大事が起こつておつては、おちおち晩酌もしてられんからの」
「何言つてんだ。爺さん、俺と神社で一杯やつてたじゃねえか」

久延毘古様の肩の上で徳利をかざして見せる少彦名様にクー兄のツツコミが入る。

「グレモリーよ。無断で貴様の住処に足を踏み入れたことは詫びよう。しかし今は非常事態、大目に見てもらおうぞ」

「貴方は日本の妖怪かしら？」

「リーア姉、見た目は怖いけど久延毘古様は神様だから。失礼な事言つたら、駒王町の農作物全部ダメにされちゃうよ？」

「戯け。ここは私の守護する土地ぞ、そんな小娘がいかな無礼を働こうとどのような真似はせぬ」

むう、なんで私が怒られるのさ。

「そんなこと言つてる場合じゃないつすよ！ 美朱ちゃん、オーフィ

スと闘ってるって本当にリーダーなのか!？」
息を切らせてこちらに駆けて来る晴矢君。
「そうだよね。」

晴矢君もシエムさんの息子なんだから、オーフィスの事くらい知ってるよね。」

「……うちの兄が心配かけてゴメンナサイ。」

「うん。っていうか、晴矢君はなんでここに?」

「え!? えーと、リーダーが病院に運ばれたって聞いたから神社に様子を見に行っただよ。そしたらそこのお兄さんにここまで連れてこられた」

「クー兄、なんで連れて来たのさ?」

「坊主のダチなんだろう、そいつ。だったら、のけ者にしたら可哀想じゃねえか」

悪びれる様子もなく応えるクー兄に思わず頭を抱える。

晴矢君は墮天使と人間のハーフだけど、私達と違って一般人として暮らしてたのに。

「こんな事に巻き込んだら、裏に関わる事になるじゃんか。」

「そんな事気にしてる場合じゃねえ! 神様、何か手助けする方法は無いんですか?」

「……生憎、そのようなモノはない。外で戦う二人とここに居る者達では隔絶した力の差がある。ぶっちゃけて言えば、僕ら全員で攻撃してもあの二人には傷一つ付けられんのじゃ」

「我らがここに来たのは、彼らの戦闘の余波からこの街と民を護る為なのだ」

「そんな!? どうにかならないんすか!」

「落ち着け、小僧」

久延毘古様達に詰め寄ろうとする晴矢君をクー兄が止める。

「落ち着いてられないっすよ! 親友が化け物と闘ってるってのに」

「だからこそ、だろうが。それとも、そうやって喚いていれば状況が好転するのか?」

「それは……」

クー兄の言葉に言い淀む晴矢君。

手にした朱槍のように鋭い視線でその様子を観察していたクー兄は、晴矢君の頭から血が下がったのを確認して再び口を開く。

「ダチが強敵と闘り合つて、テメエには援護をする手立てはない。なら、やる事は一つだ」

「俺にできる事、あるんすか?」

「信じて見とどけてやるんだよ。坊主がああ龍を仕留めて戻ってくるのをな」

「信じて……見とどける」

小さく呟いた晴矢君は、窓枠に手を置いて真つ直ぐに外を見据える。

脳裏に『そこに立たれると見えにくい』とか『あのトンでもバトル見えてるの?』なんて言葉が過ぎつつが、空気の読める私は口にはしない。

しかし、意外なのはクー兄である。

てつきり俺も混ぜろ的な事を言つて、あの戦いに乱入すると思つていたのだが。

「なんだ、嬢ちゃん?」

私の視線に気づいたのか、クー兄は外の景色が見える位置で壁に背中を預けたまま、気だるげにこちらを見る。

「いや、クー兄は戦いたいとか言わないんだね」

「一騎打ちにチャチャ入れるほど、俺は馬鹿じゃねえよ。まあ、あの坊主が世界の天辺獲つたのなら挑戦するのもアリか、とは思うけどな」

「……ウチの家族傷つけたら、呪いかけちゃうからね。『自害せよ、ラッサー』って」

「……なんでお前さんがその台詞を知つてんだよ」

「香辛料臭くて目が死んだ神父さんが、夢に出てきて教えてくれた。クー兄がいらぬ事したら使えって」

「いや、いい。わかった。わかったから絶対使うなよ、それ」

ふむ、妙に胡散臭い神父さんだったが呪いの効果はあるようだ。

さて、こちらが珍客と騒いでいる間にも、外では戦局は動いている。

視界の補助用に呼び出したミニ美朱4号を通じて得た、クー兄達の対応をしている間の状況を交えて解説しよう。

オーフィスが後退すると同時に攻勢に出る慎兄。ダメージが足に来ていいるオーフィスの懐に飛び込むと、氣の籠もった拳を連続で腹に打ち込み、最後は双掌で吹き飛ばす。

……なんか今のモーシヨン、どつかで見たような。界王拳を使っているのだろう、真紅の氣勢を纏いながらオーフィスを追い、更なるラッシュを叩き込んでいく。

多彩な打撃や細かいフェイントに翻弄された事で苦し紛れに大振りの一撃を放つが、それを逆手に取られて当て身投げで地面に叩きつけられるオーフィス。

受け身も取れずにバウンドするオーフィスを見据えた慎兄は、スタンスを広げた正拳の構えを取る。

「くらえっ！ 玄武金剛弾ッ!!」

拳から放たれた衝撃波は横向きの竜巻となって、周囲の物を削り取りながらオーフィスを飲み込み……

って、ちよつと待て!!

玄武金剛弾ってアレだよな！ スパロボに出るロボットの技だよね!?

どこで覚えたそんな技!?

いやまあ、こんな無茶苦茶な技覚えられるのって、無限の闘争しかないんだけど。

いくら無限の可能性だと言っても、スーパーロボットの技を人間？ に覚えさせるとか、無茶苦茶にもほどがあるだろう。

取り敢えずはあれだ。

慎兄の手が付いているのを確認しよう。

たしか、あの技はオリジナルがロケットパンチだったはず。

さすがに生身の身体で腕が飛ぶ事はないと思うけど……。

よかった、ちゃんと手が付いてた。

失礼、気を取り直して行こう。

さて、学園の敷地を出る前に天に向けて曲がった竜巻により、上空

高く舞い上がったオーフィスとそれを追って地を蹴った慎兄。

その姿が途中でブレたかと思うと、次の瞬間にはいくつも残像を残すようなスピードで、オーフィスの身体を切り刻み始めた。

うわあ……今度は『舞朱雀』かあ。

思わず遠い目をしそうになる中、締めの一撃を繰り出す為に腕を振り上げてオーフィスにむけて急降下する慎兄。

しかし、奴も伊達に世界最強と言われてはいない。

氣により下手な聖剣を上回る切れ味となった肘が脳天に突き刺さるよりも速く、体勢を入れ替えて蹴りを叩き込む。

カウンター気味に入った蹴りに、身体をくの字に曲げて上空高く吹き飛ぶ慎兄とそれを追うオーフィス。

追撃の拳が背中を捉える寸前、魔法のように慎兄の身体はかき消えてオーフィスの背後に現れる。

魔法や術の類じゃない、単純な超スピードによる回避だ。

虚空に拳を突き出したオーフィスの、がら空きの後頭部にむけて拳を振るう慎兄。

しかし、今度はオーフィスが同じ方法で攻撃を躲す。

攻守入り乱れるぶつかり合いの中、ドンドンスピードを上げていく両者。

ついにその速度は私の感知範囲を超え、二人の姿は消えた。

全員が啞然と見上げる夜空から降り注ぐのは、絶え間ない肉弾戦の音とぶつかった際に生じた衝撃波のみ。

……さて、一言いいだろうか。

ドラゴンボールかっ!?

私の魂のツツコミも虚しく、夜空を揺るがして加速する戦闘音。

そしてぶつかり合いが数百合を数えたその時、強烈な打撃音と共に猛スピードで何かが降ってきた。

隕石もかくやといった様子で降り注いだそれは、校庭を横切り本校舎に直撃した。

着弾の震動で部室の床がグラグラと揺れ、ほぼ中央に巨大なクレターを穿たれた本校舎がそこから連鎖的に崩壊していく。

あれって、慎兄がギースと闘ってた時に使った返し技だったはず……！

完全に虚を突かれた形ながらも、高速で天を駆け上がる氣弾を間一髪で回避するオーフィス。

だがしかし、その氣弾の後ろから現れた紅い影を捉える事は出来なかった。

「この一撃で極めるッ!!——でえりやあああッ!!」

『舞朱雀』の時とは比べ物にならない氣が込められた打ち上げの肘を受けたオーフィスは、袈裟斬りに刻まれた傷から体液を飛沫かせて大きく仰け反った。

うわっ……今、肘で斬り上げた後、勢いそのまま膝で顎をカチ上げた。

今のが『麒麟』だったとしたら、ある意味本家よりエグいよ。

「おいおい、おねんねにはまだ早いだろ。こつちにはまだ『取っておき』が残ってるんだからよお……!!」

凶悪な笑みを浮かべた慎兄は、リバースフルネソンの体勢に捕らえたオーフィスをふりまわし始める。

この体勢で出せる『取っておき』って、もしかして……!!

「いくぜえ!! 大判振る舞いの界王拳20倍だっ!!」

慎兄らしからぬテンションの上がった叫びと共に、紅い氣勢は出力を増し、回転の速度が上がっていく。

桁外れの氣勢が干渉したのか、渦巻く大気は慎兄から漏れ出た紫電を孕んで、巨大な竜巻に成長する。

「おーおー。凄え凄え」

「……素戔嗚尊様もびっくり」
すさのおのみこと

ツムちゃんを肩車した三郎兄が、窓の外を見ながら感心したように声を上げる。

いや、觀光名所に来た親子連れじゃないんだから……。

「ねえ、リアス。竜巻の間に雷が走ってるの、見える?」

「ええ。あれだけピカピカ光ってればね」

「軽く調べてみたんだけど、あれって私が本気で放つ雷撃の数十倍の

威力があるみたいなの。面白いでしょう？ 余波だけで私の数十倍。ふふ……雷の巫女って異名、返上しないと」

「……朱乃。こと戦闘で、あの子と何かを比較するのはやめなさい。

——心が折れるから」

閉じられた窓の外。

校庭にあるあらゆる物が乱れ飛ぶ光景を眼に映しながら、死んだ魚のような目をした朱姉と、なんだか悟りを開いたような表情のリーア姉が言葉を交わしている。

なんか朱姉のS A N値がヤバくなってるが、これは仕方が無いと思う。

いきなり、自分の身内が世界最強の生物とガチバトルしているのを見たら、ああもなるわ。

正直、私も妄想の世界に逃げ出したいくらいだ。

しかし、私まで現実逃避しても始まらない。

朱姉がりタイヤした以上、兄弟として最後まで見とどけなくては。

「おおおらあああああつ!!」

裂帛の気合と共に、天を突く柱となった竜巻の中心から人影が飛び出してくる。

外骨格の大半が剥がれて見る影もないが、それは紛れもなくオーフィスだった。

荒れ狂う大気の中、ぼつかりと空いた風一つ無いおだやかな目の上を力なく漂う傷付いた龍神。

しかし、その時間はすぐさま終わりを迎えた。

頭上からオーフィスに向かって突撃する紅い影。

オーフィスを投げると同時に自身もまた天高く上昇していた慎兄だ。

避けようと身じろぎするも、襲撃者から漏れ出た雷撃に絡め取られるオーフィス。

そして、振り落とされた右足が黒き龍神の頸を捉え、二体は猛スピードで竜巻の目に突入する。

そして次の瞬間、これを見ていた全ての者が驚愕する事になる。

「ゲツ、ゲエー!? 竜巻が慎の後ろに集まって、落下のスピードを倍加させているー!!」

ハイ、イツセー先輩。キン肉マン風のリアクション、ありがとうございます。

先輩の言を付け加えるならば、『竜巻は慎兄が通った場所から崩壊を始め、分解された大気が吹き下ろしの突風になって加速をブーストしている』だろう。

うん、なんだコレ。

状況がありえなさすぎて、笑いがでそうだ。

これはアレか。

使った技のせいで発動した『ゆで理論』か! 『ゆで理論』なのか!!
……すまない、脱線した。

纏った雷霆、背を押す嵐、そして大気との摩擦で赤熱する身体。

一つの巨大な弾丸と化した二人が落ちゆく先は、この地に現れた時に対峙していたクレーターの中央。

「これが悪魔將軍直伝——」

音速超えの衝撃波と共に最後の加速を見せる二人。

というか、あの状況でよく生きてるな。

「完璧! 地獄の断頭台いいツツ!!」

「G y a a a a a a a a a a a a a a a a ツツ!!」

着弾と共にこちらを襲う轟音と激震。

もうもうと立ち上る粉塵が晴れた先には断頭の刃となった右足で頸を捉えた慎兄と、裁きを受けた哀れな犠牲者の姿があった。

「ゴボ……ツツ!」

技を解くと同時に口に当たる部分から黒い体液を吐き出し、大の字に倒れるオーフィス。

その身体は黒い光に包まれると共にドンドン縮み、光が収まった後に残されたのは布きれにしか見えないボロボロの黒い服を身に着けた10歳程度の傷だらけの少女だった。

「な……なんだよ、あれ。あの子がオーフィスの正体だったのかよ!?」
『落ち着け、相棒。あれはオーフィスが擬態した姿の一つだ』

「擬態ってどういう事なの、ドライグ？」

『オーフィスは身に宿す力の巨大さの為に、長時間本来の姿に戻ることは出来ないと聞く。それ故に様々擬態となり、力を抑えて生きていくのだろう』

「じゃあ今のオーフィスは……」

『龍の身体を維持できないほどに弱っている、ということだ』

赤龍帝の話す事実には皆が固唾を飲む。

それはつまり、慎兄が世界最強に王手を掛けたということだ。

「つまらん。そのザマではお前も終わりだな、クソ蛇」

必死に起き上がろうとするオーフィスの上から、ゴミクズを見るような目を向ける慎兄。

その身体も改めて見ればボロボロだ。

上半身は裸、下は膝や腿が破れた駒王の制服。

全身痣と傷に塗れ。

さっきの気弾を撥ね返した影響だろう、両腕は特に酷い有様で裂けたような傷が無数に刻まれ、ところどころ骨まで届くほどに肉が抉れている。

まさに満身創痍といったところだ。

「……傷が……治らない……。力が……言う事を聞かない……。我になにをした……？」

「テメエの手の内を喋るバカがいると思うか？」

オーフィスの呟きに情の無い言葉を返し、慎兄は足を上げる。

「我……静寂に……帰る……。まだ……滅びたく……ない……」

「そうか。じゃあ、くたばれ」

冷酷に言い放った慎兄がオーフィスの頭を踏み潰そうとするのと同時に、オーフィスのまわりに突如霧が現れる。

舌打ちと共に振り下ろした足が当たる寸前、オーフィスの姿が薄れていき、そして風圧で霧が散らされた跡には何も残ってはいなかった。

「……逃がしたか。あのヘタレ魔術師、シヨボい結界しか張れねえクセに、こんなところだけは手が回りやがる」

血混じりのツバと共に苛立ちを吐き捨てる慎兄。

普段の兄らしからぬ態度に一抹の不安はあるが、取り敢えずは合流することにしよう。

「慎！」

「慎兄！」

「ご主人様！」

「リーダー！」

口々に呼びかけながら、慎兄の周りに集まるみんな。

こちらの姿に不可解そうな表情を浮かべた慎兄は、辺りを見廻して納得いったように感嘆の声を上げる。

「そういや学校に出たんだったな。こりやまた、派手にぶっ壊れたもんだ」

「壊したのはあなたじゃない。なにを他人事みたいに言ってるのよ」

「あ？ あのクソ蛇と闘り合うのに周りなんか気にしてられるかよ」

学校の惨状に食ってかかるリーア姉に、不機嫌さを隠さずに言い返す慎兄。

その姿に私は思わず首をかしげた。

慎兄は常識は大いにズレているが、良識のある人間だ。

自分のやった事には責任を取るし、悪いと思っただらしっかりと謝る。

普段ならあんな風に関き直らずに、リアス姉に謝っているだろう。

オーフィスと戦っていた時から思っていたが、もしかして……。

「ねえ、慎兄。もしかしてキレてる？」

私の指摘に慎兄は虚を突かれたように目をしばたたかせると、バツが悪そうに頭を掻いた。

「悪い、リアス姉。シャワーでも浴びて頭冷やしてくるわ。話はそれからしてくれ」

そう言い残して旧校舎へと踵を返す慎兄。

どうやら自覚がなかったらしい。

そのまま歩き出す慎兄を、こんどは朱姉が呼び止める。

「慎、身を清める前に病院に行きましょう」

「朱乃。傷ならアシアに任せた方が早いわよ?」

「はい。慎君ほど上手くいきませんが、頑張ります!」

「違うの、リアス。身体の傷もそうだけど、私が心配しているのはあの子の病気よ」

朱姉の言葉に皆が目を向いた。

「慎兄は殺しても死なないってイメージがあるから、番所みんなのリアクションは仕方ない。」

でも、なんでリーア姉達が驚くのか。

夕方、目の前で血を吐いて病院連れてかれたじゃん。

「あー……。美朱から聞いたのか?」

「ええ、重度の胃潰瘍なんですってね。慎、入院しましょう。仕事が大切なのは分かるけど、身体を壊したら元も子もないわ」

真っ直ぐに見つめる朱姉に、苦笑いを浮かべる慎兄。

「心配してくれてありがとうな、朱乃姉。でも今の闘いで治ったんだ、病気」

「」「」「え?」「」「」

「……………なにを言ってるのか、分かりませんね。」

「えーと、つまりだな——」

周りに乱れ飛ぶ疑問符に改めて口を開く慎兄。

その説明はこうだ。

ここに出てくるまで、神滅具『ディメンション・ロスト絶霧』が生み出した結界の中で闘いを行っていた両名。

その際に慎兄は腹部に強烈な打撃を数度食らっていたらしい。

普段のコンディションならば耐えうる程度の威力だったらしいが、すでに重度のダメージを負った胃はそれに耐えられず破裂。

普通ならばこの時点で戦闘不能になるのだが、そこは化け物っぷりに定評のある我が兄。

常軌を逸した精神力で激痛に耐え抜くと、その状態で戦闘を続行。

さらに界王拳で倍化した聖母の微笑の治癒エネルギーを、患部に集中させて高速治癒を試みる離れ業までやってのけた。

その結果、十倍の氣と治癒エネルギーを一気に浴びた胃は治癒では

なく再生してしまったのだという。

……うん、ツツコミどころしかない。

「傷にしか効かない聖母の微笑で病気を治すなんて、さすがは慎君です！ 私も見習わないと！」

「待て、アーシア！ そっちは修羅の国！ 行っちゃいけない方向だから!!」

顔の前で手を組んで感極まったように賞賛の声を上げるアーシア姉と、それを必死に止めるイツセー先輩。

瞳がおめめグルグル状態なのを見ると、やっぱり錯乱してるんだろ
うなあ。

「悪くなった部分は丸ごと造り直す、か。まあ、普通は考えつかんわな」

「……さすがは慎。駒王町ダントツ1位の化け物は伊達じゃない」

「おい、旋風^{つむじ}。誰が化け物やねん」

抗議したとたんに全員から指を射されて、慎兄は大いにたじろいだ。

うん、これはフォローできないわ。

「じゃ……じゃあ、身体の怪我をなんとかしましょう」

口元を引き攣らせながらも、なんとか話を続けようとする朱姉。

そんな朱姉に『大丈夫』と声を掛けると、慎兄はズボンのポケットから小さなケースを取り出した。

そして、手の上に転げ出た豆のような物を口に含む。

口の中でポリポリと軽い音が響かせて飲み込んだ次の瞬間、慎兄の身体中に刻まれた傷が嘘のように消え失せてしまった。

「怪我もこれで治った。今の俺は完全健康体だ」

呵々と高笑いする慎兄に啞然とする一同。

そんな中で私は、慎兄が口にした物の正体に目星を付けていた。

「慎兄、今の仙豆でしょ。ミリ君に貰ったの？」

「ああ、瓶^{かめ}いっぱいにあったからな。無理言って百粒ほど譲ってもらった」

やっぱりね。

「嬢ちゃん、その仙豆ってのはなんなんだ？」

「仙豆は仙人様が育てた特殊な豆のこと。一粒で十日は飢えを凌げるし、怪我人が食べればたちどころに傷が回復するんだ」

「ほー、そりゃ便利なもんだ」

私の説明に感心したように笑うクー兄。

非常食によし、傷の特効薬によし、さらに滋養強壮によし、とたしかに便利なんだよね、仙豆。

この際だからウチの境内で栽培してみようかな。

育成が難しいとか聞いた事があるけど、久延毘古様に頼めばなんとかなるだろうし。

上手く量産できたら一財産くらいは造れるかも……。

頭の中に浮かんだぼんやりとした思い付きから壮大なプロジェクトを組み立てていると、慎兄の前で俯いていた朱姉の前髪に隠れた目の辺りから雫が墜ちるのが見えた。

……あるえ？

「え、ちよつ……なんで泣くんだよ、朱乃姉!？」

「だつてえ……美朱に慰められて、これからは二人の姉として、しつかりやっていこうと思つてたのに……!?! あなたは好き勝手暴れて、一人で怪我也病気も治して……ッ。心配した私がバカみたい……!」

そのまま、さめざめと泣き始める朱姉。

どうやら、さつき泣いた所為で涙もろくなっているようだ。

精神的に崩れるとなかなか復帰しないのって、絶対パパ似だよね。

「なんだかよくわからんが、すみませんっした!!」

ボロボロと涙を流す朱姉の前で、土下座を返す慎兄。

世界最強になつても私達の涙に弱いところは変わらないらしい。

さて、場の空気もカオスになってきたし、そろそろ助け船を出しに行きますか。



「……よもや、あの龍神を下すとはな」

「この目で結果を見た後でも、正直信じられん。一月前に顔を会わせた時は、小僧はあれほどの力は持つてはいなかったはずだ」

「つまり、この短期間でオーフィスを超えたということか。『進化を司る無限』は伊達ではないようじゃの」

高天原の謁見の間。

その玉座に腰掛けた天照大神は、遠見の鏡越しに議論を交わす三柱の主神を見ながら溜息をついた。

現在、こちらに顔を出しているのは西洋地域の冥府を支配するハーデス、ダーナ神族の指導者ダグザ、北歐アスガルドの主神オーディンだ。

いずれもここ最近、姫島慎が縁を結んだ者達でそれ故に情報把握も早かったのだろう。

『無限の龍神』の敗北と新たな無限の台頭。

それが世界に及ぼす影響は、『禍の団』の引き起こすテロなど比較にならない。

そして天照大神が治める日本はその中心にあるのだ。

「それで天照殿、貴国はどのような方針をたてるのだ？」

冥府の闇を背に、それよりも深い黒の甲冑に身を包んだハーデスが、髑髏の意匠が施された兜の眼窩に紅い光を揺らめかせる。

「うむ。お主がああ坊を擁するのに同意したのは、目覚めたばかりのヒヨッコであると判断したが故。じゃが、オーフィスを超えたとすれば話は別よ」

オーディンは長く伸びた顎髭を扱きながら、隻眼を細める。

「現状世界最強となった小僧を手中に収め続けられれば、貴殿等は他の神話勢力から有らぬ疑いを掛けられることになるだろうな」

そしてダグザはその丸太のような腕を組んだまま、重みを込めた言葉を紡ぐ。

「例えば『日本は無限を使って、他の神話全てを自身の足元に跪かせようとしている』と？」

挑発めいた口調の天照大神に、三柱は表情を崩さない。

長き付き合いの中、共に辛酸を舐めた事もあるこの女傑が本気で無

いことが分かっているからだ。

「似合わない偽悪は止めておけ。お主が日本以外の土地に興味が無いことなど、ここにおける者は皆知っておるわ」

「だが、他の者はそうは思わん。聖書の勢力に追放されて復帰を果たした者、そして今からこの世界に舞い戻ろうとしている輩は特にな」
「三勢力の力が衰退し旧神が復権を始めた現状で、多神勢力の争いは避けねばならぬ。冥界と『禍の団』、そのどちらにも付け入る隙を与えないからな」

ハーデスの言葉を受けて、天照大神は思考を巡らせる。

予想外の事態で姫島慎を日本に留める事は不可能になった。

とは言え、ただ放逐する訳にはいかない。

そんな事をすれば、墮天使幹部である父親を初めとして縁者の多い三勢力に渡る可能性が高いからだ。

ならば――

「お三方。我が日本に所属していたとはいえ、今や彼は世界最強の存在。その処遇を決めるのは一神話勢力だけでは荷が重いでしょう。ですの――」

天照大神は一端言葉を切り、息をついた。

そして、湯呑みの中身を呷って口を湿らせた後、決意に満ちた視線を三柱に向ける。

「サミットを開きましよう」

18話

一話ぶりのご無沙汰でした、姫島慎です。
いやあ、オーフィスは強敵でしたね。

あ、どこぞの霧の人みたいなネタじゃなくてマジで。
幼女モードで10倍界王拳を使った俺とほぼ同等。

正体を現してからは、15倍に引き上げないと当たり前負けしたからな。

リョウ師範と手合わせしてまで完成させた『天地神明掌』も奴を第二形態にただけで終わるし、こんなに苦戦するとは思わなかった。
世界最強相手にこんな台詞を吐くが、ビックマウスと思うことな
れ。

力を同格まで引き上げれば、技量はこちらが上。

さらに奴の『無限』の属性を攻略可能とくれば、あんなのが相手でも勝ち筋だつて見えるもんだ。

因みに奴の『無限』の属性だが、それはウロボロスの名が示す通り『円環する死と再生』即ち『無尽蔵の生命力』に他ならない。

ぶっちゃければ、不老不死の存在という事だ。

聞いただけなら『こんなチート、どうやって勝つねん!?』と思うだろうが、実はそれ程難しくなかったりする。

まず最初に、奴は無尽蔵の生命力を持つがその能力自体はぶっ飛んでいるわけじゃない。

奴が一撃で破壊出来るのは一都市、よくて小国一つ程度。

氣弾一つで星を吹っ飛ばす某戦闘民族に比べたら可愛いものだ。

身体能力も『狂ランク』底位でしかないし、ある程度の知恵はあつても戦闘スタイルは獣と同じなので、テクニクもない。

これならば上手く技で抑えれば『Sランク』相当の力しかない俺でも十分相手ができる。

問題の無限の生命力だが、これは力を伝えるバイパスを破壊、もしくは封印してやればいい。

それが可能な技は北斗神拳の『醒銳孔』や神樂ちずるの『零技の礎』、

元の『死点咒』か。

俺はリヨウ師範と手合わせした時にパクった『極限流死兆拳』しちようけんを使った。

これは正拳で相手の体内に氣を送り込み、内氣功を封じる技だ。

内氣功というのは、自身の体内で生み出した氣、生命力を使って身体を制御したりリフレッシュしたりする技術だ。

力の大小は有れど、全ての生命が無意識に行っている生命活動も内氣功の延長といえる。

それを阻害するこの技は、古武術に伝わる『三年殺し』と呼ばれる技である。

リヨウ師範から初めて食らった時は本当にキツかった。

内氣功を封じられて聖母の微笑も使えずに、三日間もがき苦しんだからなあ。

まあ、お陰で外氣功の腕が上がって、ギースが使っていた『真人』への足がかりになったのだが。

話を戻そう。

これで厄介な再生を封じれば、後はガチンコ勝負に持ち込むのみ。

これには『狂ランク千人組み手』の経験が活きた。

修業に時間が取れない事への苦肉の策だったのだが、その効果は今までの鍛錬の群を抜く。

一日一回、ほんの数分間の試合だがその中身は濃密そのものだ。

放たれる攻撃は全て必殺。

それがこちらの捉えられない超スピードで、360度全方位から飛んでくる。

さらには時間停止や広範囲攻撃、ガード不能技に一撃当たれば死亡確定な10割コンボ。

果ては因果律操作による攻撃無効まで。

カオスと理不尽を煮詰めたような狂気のオンパレードを乗り越えた俺は、気付けばSランクにまで上がっていた。

三途の川をメドレーリレーして、脱衣婆と茶飲み友達になった甲斐があったというものである。

この経験があつたからこそ、オフィスを前にしても平然と戦えたのだ。

そも『無限の龍神』だの何だのと大層な看板を持つてはいるが、奴なんてルガル運送社長やエルクウ門番役、そして剛の拳よりストロングな病人に世紀末覇者、東方先生に比べたらまだまだである。

俺に負ける程度で世界最強なんて名乗っていては、彼らが聞けばヘソで茶を沸かすだろう。

奴が放った氣弾なんかより、東方先生に『ぶあくはつ!!』される方がよっぽど効いたし。

まあ、こんな体験をしたお陰で周りから地上最強なんて言われても、実感はまったく湧かないわけだ。

黒星街道を爆進中の身としては、こんな称号（笑）は早く返上したい。

……言われても恥ずかしいだけだし。

さて、過ぎた事を話すのはここまで。

突然だが諸兄には悲報を伝えねばならない。

私、この度日本神話を解雇されました。

理由はもちろんオフィスとの大喧嘩である。

嫁入り前の娘を2人も抱えた身にこの仕打ち。

これが不況の煽りあおと云う奴か。

世間の冷たさが身に染みる。

「我々としても、貴方を手放すのは不本意ですが、地上最強になった貴方が一神話勢力に属するのは、外交的に周りを刺激してしまうのです。ですので、貴方には日本神話勢から外れてもらいます」

朱乃姉に土下座つてたところを、問答無用で高天原の謁見の間に転移させられた俺に掛けられた言葉がこれである。

原因はこちらにあるとしても、世知辛いにもほどがある。

こんなところまで人間社会を真似なくていいんですよ、天照様。

「それで、俺はどうすりゃいいんですか?」

「二日後の三勢力和平会談の後、多神勢力でサミットを開きます。そこで貴方の処遇を話し合うので、それまでは何処にも属さずに大人し

くしていて下さい」

お互いに深々と溜息をついてしまう。

うん、天照様の言わんとしている事はわかる。

しかし、こちらも『はい、そうですか』と飲むワケにはいかない。

日本神話の依頼は我が家の収入を大きく占めているのだ。

朱乃姉や美朱の大学入学や結婚等々の重大イベントが控えている中で、これを失うのは痛すぎる。

なんとかしなければなるまい。

「ちよつと待つてください、天照様。いきなりクビにされても困りますよ、こつちにも収入の問題があるんですから」

「神職の給金では足りませんか？」

「もちろん貯蓄はしてますが、これからの事を考えると厳しいです」

ガチに今後の生活に直結するので、こちらも直球である。

こちらの弁を受けて玉座の上で腕組みをした天照様は、妙案を思いついたので、閉じていた^{まぶた}瞼をゆつくりと開く。

「確か、貴方は以前に万屋を開いていましたね。それを復活させてはどうでしょう」

……ふむ。

そういえば、日本に来てからは万屋稼業を疎かにしていたな。

「いいんですか？ サミットまで大人しくしてなくちゃならないって言ってたのに」

「構いません。そも、日本神話を離れた以上、私に貴方の行動を縛る権利は無いわけです。それに貴方のその力が有用である事を示せば、今後後ろ盾になってくれる神話勢力も増えるかもしれませんから」

「後ろ盾、ですか？」

「皆が距離を置こうとしているのは、貴方がどのような存在かが分からないからです。他の二つとは違い、社会の営みの中で生まれ育った『無限』。それが何を思いどのような動こうとしているのかを示せば、味方になってくれる者も現れるでしょう」

ふむ、天照様のいう事も一理あるか。

ならば、ここは発案者の天照様にも、一肌脱いでもらおう。

「そちらの意図は理解しました。なら、天照様の知り合いにも万屋の事を宣伝してくれませんか？」

「……そうですね。私の知己から理解者を増やしていくのも良いかもしれませぬ」

快く承諾してくれた天照様に礼を言った俺は、他に連絡事項が無いことを確認して高天原を後にした。

いや、このズタバロの恰好であそこにいるのは度胸がいるんだわ。

なんたつて、上は裸に下は裾すそが膝下から吹っ飛んだボロボロの学生ズボンだからな。

やむを得ない事情があったとはいえ、どう考えても一国の主神の前に出る恰好ではない。

世が世なら即打ち首ですよ、コレ。

溜息交じりで学校に戻った俺を待っていたのは、またしても泣いた朱乃姉と何故か色々豪華になった玉藻によるツインタックルだった。



あれから一夜過ぎて翌日。

早くも俺は昨日の言動（主に万屋関係）を後悔していた。

まさか再開1発目から、こんな濃いネタがこようとは誰が予測できただろうか。

俺はもちろん、アシスタントを買って出てくれた隣の玉藻、学校を休んで付き合っている朱乃姉達の目も死んでいる。

その原因は天照様が連れて来た涙を流す褐色のオリエンタル美女と、その前に横たわる蛇の尾が生えた梟ふくろうと狼と人が三身合体したような化け物。

これがソロモン72柱の魔神の一翼アモンにしてエジプトの太陽神アメン・ラーだなんて、言われなければ絶対にわからないだろう。

事の経緯はこうだ。

朝飯を食っていると、突然境内に巨大な神気が立ち上った。

慌てて見に行くと、そこにいたのは天照様と件の化け物を背負った褐色美女。

彼女はこちらを見るなり、涙ながらにこちらへ助けを求めてくる。事情は分からんが、このまま放っておくわけにもいかない。

とりあえず本堂に上げて話を聞いてみると、褐色美女はエジプトの地母神ムトを名乗り、化け物の事を夫であるアメン・ラーだと言う。

天照様が直々に連れてきている事を考えれば、彼女の言に嘘はないのだろう。

そこで天照様にアモンの異変について聞いたところ、なんとはぐれ悪魔によく似た形で存在を歪められているのだと言う。

ムト

様曰く、遙かな昔に聖書の神によって存在を貶められたアメン・ラーは、悪魔アモンとして冥界に墜ちてしまったそうだ。

しかし、愛する夫を諦められなかったムト様は、さきの三勢力の大戦の折に魔王を討たれて動揺するアモンを捕獲。

今までエジプト神話勢で保護していたのだという。

自陣営にいる間、友好的な態度を示さないアモンにもめげずに、彼を神に立ち戻らせようとするムト様。

エジプト神話に限らず友好を結んだ他の神話の助けを借りて様々な手を用いたが、その尽くが失敗に終わった。

それでも諦めずに頑張っていたところ、突如アモンにアメン・ラーとしての記憶と人格が戻った。

ムト様は大層喜び、数千年ぶりの夫婦の語らいを楽しんでいたのだが、その最中にアモンが苦しみ始め、今の姿になってしまったらしい。

内面がアメン・ラーへ立ち戻った時期がバチカンへの『禍の団』のテロと一致することを考えると、一神教の信仰の衰退が関係しているのだろう。

事情はわかった。

なんでそれを俺にとって、まさか……

「天照様、もしかして俺にアメン・ラー様をなんとかしろって言うつもりですか?」

「その通りです」

ハイ、無茶ぶりキター!!

思わず白目を剥いたものの卒倒するのは何とか回避できた。

「なんとかって、脳筋デンジャー野郎な慎兄がどうやったら、こんな状態の神様治せるのさ?」

「おいコラ」

妹よ、さらりと兄をデイスるのは感心できんぞ。

というか、俺はクビになったけどお前にとってはまだ上司なんだから、もう少しちゃんとした態度を示しなさい。

「そうです。慎は戦闘能力に関しては常軌を逸していますが、術に関しては普通だったはずですよ」

「姫島朱乃。貴女が何故ここに?」

「俺が呼んだんですよ。家族に秘密を抱えるのはやめたんで。まあ、顧客のプライバシーに関してには営業時間前に突撃してきた分と相殺ってことで」

転生悪魔である朱乃姉がこの場にいる事に難色を示す天照様に軽い調子ながらも釘を刺しておく。

昨日高天原から帰ると、美朱によって強引に朱乃姉と話し合う様に仕向けられた。

そこでお互いの思いや考え方を半ば言い合いになりながらも話し合った俺達は、立場上どうしようもない場合を除いて隠し事はしないように約束したのだ。

俺が日本神話に所属したままなら今回の件に参加させるわけにはいかなかったが、フリーランスになったのならそれは適応されない。

まあ、三勢力への情報漏えいを防ぐために、最低限の守秘義務は守ってもらうつもりだが。

「それよりもどうするんですか? 俺の手持ちの術で通用しそうなものは思いつかないんですけど」

「いいえ。ご主人様の桁外れの氣ならば、駒落としての祝詞で何とかなるかも知れませんよ」

俺の疑問に答えたのは横に控えていた玉藻だ。

彼女は床に寝そべり何の反応も示さないアメン・ラー様を術で精査しながら、上がってくる情報を見落とさない様に真剣な眼差しを向け

ている。

「駒落とし?」

「日本神話の秘術の一つ。詳細は守秘義務があるから話せないけど、まあ堕ちた存在を元に戻す術と思ってくれ」

首を傾げる朱乃姉に当たり障りのないように説明しておく。

さすがに転生悪魔を元に戻すなんて言う訳にはいかないからな。

「しかしマジなのか、玉藻。今のアメン・ラー様ってアレで変異してないのには、はぐれ悪魔と同じ状態なんだろう? それで駒落としが通用するの?」

「駒落としの真髄は経絡を通して魂魄へと繋がり、外部からの氣によって魂の浄化再生を促すことにある。アレが原因でなくても、外的要因で魂魄が変質しているならば対処は可能なはずじゃわい」

美朱の肩に留まっている少彦名様の説明に、俺達は思わず感嘆の声を漏らす。

自身の使う術の本質が見えていなかったとは、俺もまだまだ未熟という事か。

これからは武だけでなく術の鍛錬もしっかりやる事にしよう。

あと、悪魔の駒の事を伏せてくれてありがとうございます。

「少彦名殿はともかく、貴女がこちらの肩を持つなんて珍しいですね、藻女」

「そんな気はありません。ただ今後のご主人様の立場を考えれば、ここで日本とエジプトに恩を売っておくのも悪くないと思っただからです」

天照様の微笑にそつぽを向く玉藻。

相変わらず天照様には素直じゃない。

『それじゃあこの神様は助かるの?』

『ソナンニ簡単ジャナイゾ、ハティ。コノ者ハ大神。ソノ穢レヲ祓ウノハ容易デハアルマイ』

アメン・ラー様の膝の辺りに仲良く並んでいた真神様とハティ様が、念話で話しながら小さく唸り声を上げる。

「真神殿のいう通りです。神を浄化再生するとなれば、魔に堕ちた哀

れな人間を相手にするのは比較にならないほどの気が必要となります。それにアメン・ラー殿が墜ちたのは人々の信仰故。聖書の勢力への信仰に翳^{かげ}りが見えていたとはいえ、それを覆そうとすればご主人様への負担は莫大なものになるでしょう」

「ふむ……」

姉妹二人からこちらを気遣う視線を受けながら、俺は腕を組む。

さてシンキングタイムだ、我が頭脳。

玉藻の言う事が事実なら今回の案件はかなりヤバイ。

氣、すなわち生命エネルギーの枯渇はイコール死である。

エジプト神話とは縁もゆかりもない以上、普通ならそんなリスクを背負う理由なんてない。

しかし、昨日の弁を考えれば今回の件は天照様がこちらを思っ
持って来た依頼だ。

少々というには色々^{とが}と尖^{とが}ってはいるが、将来のメリットを思えば簡単に蹴る訳にもいかない。

なにより……

「姫島慎殿、新たな無限を宿す少年よ。どうか、夫をお助け下さい。私達には貴方の助力が必要なのです」

話が始まってから土下座したまま動こうとしないムト様に、思わずため息が漏れる。

「女にそんな真似までさせて断るなんてしねえよな、坊主」

壁に背を預けて不敵な笑みを浮かべるクーの兄貴に、俺はしっかりと頷いて見せる。

ま、そういうことだ。

「ムト様。俺にどれだけの事ができるかはわかりませんが、全力を尽くしましょう」

「ああ……！　ありがとうございます!!」

涙ながらに俺の手に縋^{すが}るムト様を天照様に任せた俺は、横たわるアメン・ラー様の梟と人間がごちゃ混ぜになった顔を見据えながらその額に手を置いた。

「お待ち下さい、ご主人様」

氣を送ろうとしたところで掛けられた声に振り返ると、巫女服から礼装である青い着物に姿を変えた玉藻が自身の神鏡を手に佇んでいる。

「どうした、玉藻？」

「私もお手伝いしますので、お時間を頂けますか？」

「そうしてくれるのはありがたいけど、あんまり無理すんなよ？」

「はい」

一緒に氣を送り込むと思った俺の忠告にニコリと笑みを返した玉藻は、手にした鏡を胸に抱きながらゆつくりと祝詞を紡ぎ始める。

「ここは我が国、神の国。水は潤い、実り豊かな中津国」

淡い燐光が鏡を包むと同時に玉藻の袖から呪符が一人で飛び出す。

「国がうつほに水注ぎ、高天巡り、黄泉巡り。巡り巡りて水天日光」

それは本殿の壁面に規則正しく張り付くと同時に鳥居を映し出し、そして鏡を中心とした呪力は室内に強力な結界を作り出す。

「我が照らす、豊葦原瑞穂国、八尋の輪に輪をかけて、これぞ九重、天照……！ 水天日光天照八野鎮石」

呪符から集約した呪力によって天高く浮かび上がった鏡を玉藻が地面に投げつけると、結界内に呪力が広がると同時に身体の内から力が湧き出てくる。

「これは……氣脈が活性化しているのか？」

「こりやたまげたわい。不完全とは言え静石の力を解放したのか……！」

「ふわあ……なにこれ。身体から力が沸いてくるみたい」

「凄い、生成できる魔力の量が格段に増えているわ」

「身体がポカポカだよ！ 旦那様、狩りに行こう!!」

『オチツケ、ハティ』

「自身が味方と認識した者にブーストを掛ける宝具か。こいつは合戦だと重宝しそうだ」

各々が自身に起きた変化に驚きの声を上げる中、此方の視線に気づいた玉藻はこれでもかと言わんばかりのドヤ顔を浮かべる。

「これが私の宝具『水天日光天照八野鎮石』の効力です。本来なら死者を蘇らせることも可能なのですが、今は魂と生命力を活性化させるのが精一杯のようです」

「いいや、十分スゲエよ。これなら30倍界王拳でも耐えられそうだし。施術にどれだけの気が必要か解らない中で、この援護はありがたい。」

呼吸を整えた俺は、ゆっくりと氣を送り始める。

閉じた瞼の奥に移るのは全てを飲み込むような深い闇。

はぐれ悪魔など比較にならないその黒さに内心舌打ちをしながらも、額に置いた手からアメン・ラー様の経絡に氣の道を繋げた俺は額に浮かんだ汗を乱暴に拭った。

まだまだ術式は序盤だというのに、通常の駒落としよりも数倍の氣を食われた。

さすがは神と言うところか。

悔しいが、素の能力では最後まで乗り切れそうにないな。

「フツ……!!」

鋭く呼吸を放つと同時に10倍界王拳で送り込む氣を引き上げると、萎えかけていた氣は先ほどとは比較にならない速度で経絡を駆け巡り、身体を中心である魂魄へと到達する。

「これは……!?!」

魂魄の間に到達した俺は、脳裏に浮かぶ光景に息を飲んだ。

闇に包まれた間の中心にはそれを上回る漆黒の輝きを放つ魂魄があり、それには間の四方に伸びる三本の漆黒の鎖によつて拘束されていた。

それぞれの鎖に『狼』『梟』『蛇』の意匠が付いている事から、これがアメン・ラー様を貶め^{おとし}ている信仰の象徴。

すなわち、はぐれ悪魔における悪魔の駒と同じ働きをしているのだろう。

この光景に少々気圧されはしたが、それが分かればやる事は一つだ。

経絡から伸びた氣の道を魂に繋ぎ、出力をさらに跳ね上げる。

「高天原たかまがはらに神留座かむつまります。神魯伎神魯美かむろぎかむろみの詔みことま以て。皇御祖神伊邪那岐大神すめみおやかむいざなぎのおおかみ。筑紫日向の橘つくしひむがたちばなの小戸をの阿波岐原あわぎはらに、御禊祓みそぎはらへ給たまひし時に生座あれませる祓戸はらひとの大神達おおかみたち。諸々の枉事罪穢もろもろまがごとつみげがれを拂はらひ賜たまへ清め賜たまへと申す事の由よしを、天津神あまつかみ、国津神くにつかみ、八百萬の神達かみたちども共に聞食きこしめせと恐かしこみ恐かしこみ申す」

身滌大祓の祝詞で氣に浄化の力を込めると、漆黒だった魂は太陽を思わせる黄金の輝きを取り戻し始め、同時に三本の鎖が軋み始める。

施術は順調と言えるが、如何せんかかる氣の量が半端ない。

10倍界王拳でも少々心許なくなってきた。

玉藻の張ってくれた結界の中なら30倍までは上げられそうだが、その状態で駒落としに必要な繊細な操作を行うとなると正直厳しい。

15……いや、20倍で何とかしなければ。

「……ッ!？」

頭の隅に燻る不安を抑えながら氣を送り込んでいると、突然右腕に激痛が走った。

一瞬途切れそうになった集中力を立て直しながら意識を向けると、室内の四方から例の鎖が伸びて氣のラインに絡みついている。

しかもこの鎖、自身から放たれる瘴氣によってこちらの放つ氣を汚染しようとしてやがる。

このまま放置すれば、経絡を遡って俺まで汚染されるだろう。

さすが神様を墮とす代物、自己防衛機構付きとは恐れ入る。

引き剥がそうと氣脈を通じてアクセスしようとした瞬間、脳裏を多くの人の声がよぎった。

それは『唯一神あがを崇める声』

それは『他の神を認めぬ意志』

それは『他者の信仰を貶める悪意』

それは『墮ちたる者への嘲笑』

それは、それは、それは………!!

……ッ!! なるほど、今更ながらこれがどういったモノかを改めて理解した。

こいつは信仰心によって編まれた、人が神へ向けた悪意そのものだ。

この方は数千年もの間、魂で直にこんな声を受け続けたつてのか。これが神を墮とすつて事ならば、エゲツないにもほどがある。

やった本人がこの世にないとしても身内がこんな仕打ちを受けては、三勢力に対する憎しみなど消える訳がない。

「なにこれ!? 慎兄の腕に黒い鎖の痣が出てきてる! それに周りの肌も黒く染まっていつてるよ!!」

「美朱様、触れてはいけません! これは強力な呪詛です!」

「この気配は……あの者の、聖書の神の仕業ですか!」

「天照殿、ムト殿を連れて下がれ! この呪いは神を墮とす事を目的に編まれたモノじゃ! 厄介な事に信者の信仰心を利用して効果の増幅もしておる! 太陽神であるアメン殿に巣くっていた以上、掴まればお主もただでは済まんぞ!」

『ハティ!!』

『わかってる。ヒドイ臭い、鼻が曲がりそうだよ』

「そんなっ!?! あの子は……慎はどうなるんですか!!」

「わからん。じゃが、いかにあ奴が『無限』の力を有していようとも、ここまでの呪詛を受けてはただではすまん。最悪、悪魔に墮ちるやもしれぬ」

「そいつはどうかね。あの坊主の事だからポンと覆くつがえしそうな気がするけどな」

周りの声を聴くに、なんか娑婆しやばがエライ騒さわぎになっているみたいだ。

あと、クーの兄貴正解。

実は呪詛の浸食なんてとづくに止めて、浄化ももうすぐ終わりそうだよなあ。

いや、痛み自体は大した事なかったんだが、頭の中で延々とアメン様の悪口が響くのがどうにもうっとおしくてさ。

施術用の氣を何割かこつちに回して処置しちゃったんだよ、これがな。

しかし、こつちは氣脈を侵食されているのだけど、現実じゃあアメン様の接点になつて右腕に影響が出るんだな。

精神的、もしくは靈的な影響が身体に出るのは知っていたが自分で受けるの初めてだ。

うむ、中々に興味深い。

術の検証も兼ねてもう少し様子を見たい気もするが、あんまりみんなを心配させるのも悪い。

という訳で、ここはサクツと片づけるか。

「滅菌、てなアツ!!」

頭に過つた台詞と共に界王拳を一気に20倍にまで引き上げた俺は、魂魄への供給を完全にカットしてこちらに絡みついた鎖に氣を叩き込む。

一切の容赦のない氣の奔流を受けた鎖は、激しく軋みを上げると甲高い金属音を上げてバラバラに砕けた。

一時的に施術を中断して対処に当たったおかげで、伸ばした氣脈への被害は軽微。

穢れのほうも今の氣で完全に押し流す事ができた。

しかも、こちらに来ていた枝だけでなく、魂魄を拘束していた本体にも大ダメージが行くというオマケ付きでだ。

おかげで魂魄への氣の通りを妨げてた詰まりみたいなのも消えて、先ほどよりも断然スムーズに通るようになった。

ま、一時中断の所為で施術の再開には更なる細やかさが必要になるだろうが、それを補って余りある成果だろう。

「なんか慎兄の氣が膨れ上がったと思つたら、腕の肌の色が元に戻つただけど……」

「何とも呆れた奴じゃ。自身に罹つた呪詛を力づくで根こそぎ吹き飛ばしおつたわ」

「ええと、主神たる夫を貶めた呪い……なんですよね、アレ」

「あー、あれですよ。ご主人様つてオーフィスに勝っちゃいましたし」

「なんつうか、心配のしがいの無い奴だよな」

「弟が良く分からないナニカになっていく……」

人がしやべらないからって言いたい放題だな、オイ。

一応、危険な作業やつてんですがね、こっちは。

まあ、別にいいんだけどさ。

軽く息を整えた俺は、界王拳の倍率を1.5に落として再び魂魄へ氣を送り込む。

しかし、便利だからと放っておいたが、俺の身体はいつたいどうなっているのか。

昔から擬死や瀕死の重傷から回復すると、耐久性や身体能力が跳ね上がってるんだが。

直近で言えばギース戦や狂ランクとの連戦、この間のオーフィスとのドンパチもそうだ。

おかげで一月前までは4倍が限度だったのに、今では20倍まではリスク無しに使えるようになってる。

いくらなんでもこれは異常だろう。

……ムムツ。

今までは氣に掛ける事も無かったが、一度氣付くと頭から離れない。

つうか、瀕死から復活すると強くなるっていったいどこの戦闘民族だよ。

俺にはサルの尻尾なんてないんだが。

明日はフリーだから、一度本格的に調べてみるか。

健康診断はいつもグリゴリで受けてたから、親父に頼めばなんとかなるだろ。

……おっと、雑念が入ったな。

今は作業に集中しないと。

氣を取り直して氣を送り込むことしばし、魂魄に絡みついていた縛鎖も『蛇』に続いて『狼』も音を立てて砕けた。

「ああっ！ アメン様の身体が……」

「人型に戻ってる……」

「かの者を『魔』に至らしめている要素は残り一つ。ここが正念場じやな」

『がんばれ、シン！』

『アトハ顔ノ梟ダケダ』

周りから聞こえるみんなの声で、アメン様の状態がわかるのはありがたい。

ならば、こちらもラストスパートとしやれ込もう。

再び界王拳を20倍に引き上げて送る氣の勢いを高めると、『梟』の意匠を持つ魂を縛る最後の鎖が大きく軋み、その黒鋼の身に亀裂が入る。

ようやくラストも片付きそうだ。

こんな胸糞の悪いモンはぶっ潰すに限るからな。

「天清浄地清浄内外清浄六根清浄と祓給う。天清浄とは天の七曜九曜二十八宿を清め、地清浄とは地の神三十六神を清め、内外清浄とは家内三寶大荒神を清め、六根清浄とは其身其體の穢れを祓給い清め給ふ事の由を、八百万の神等諸共に小男鹿の八の御耳を振立てて聞き食と申す」

ダメ押しに天地一切清浄祓の祝詞で練り上げた祓いの力を氣に乗せしてやると、最後の鎖は甲高い金属音と共に砕け散った。

天地一切清浄祓とは、その名の通り天と地と内外（人）を浄化し清める術。

太陽を司る神であるアメン様には効果覲面だろう。

しかし、鬱陶しい代物だった。

延々と他人への罵詈雑言を脳内に垂れ流すとか、どういう脳味噌してたら思いつくんだよ。

噂を信じる趣味はないが、聖書の神つてのはやっぱりアレだったのかね。

邪魔するモノも無くなつた魂魄はこちらの氣を受けて、徐々に本来の姿を取り戻していく。

いや、解っていた事なんだけど本当に氣の消費がヒドい。

20倍でギリギリのラインって、こんなの普通の駒落としなら術者が何人いても足りないんじゃないか？

非常時に備えて常に仙豆を忍ばせてるから何とかなるだろうが、

久々にガス欠になるまで氣を酷使するハメになりそうだ。

……アメン様の魂魄が太陽さながらの姿を取り戻してから、どのくらいの時間が経っただろうか。

界王拳の維持と氣の消費にそろそろ限界が見えて来たところで、ようやく施術が完了した。

アメン様の額から手を放してその内面から意識を戻すと、本堂の窓から夕陽の光が差し込んでいるのが見えた。

術を始めていた時に居たメンツも、今はムト様と玉藻の姿しかない。

まあ、これだけ時間が経っているのなら仕方ないけど。

こつちも一日仕事になるとは予想もしてなかったし。

「礼を言うぞ、『無限』の少年よ。そなたの献身で我は再び神に立ち戻る事ができた」

掛けられた声に振り返ると、そこには黒絹のような髪に褐色の肌、そして黄金の瞳を持ったイケメンが横たわっていた。

これがアメン・ラー様の本当の姿なのか。

さつきまでの化け物とはエライ違いである。

「あなた、意識が戻られたのですね！」

「すまなかつたな、ムトよ。我が不甲斐ないばかりに長きにわたって苦勞を掛けた」

「いいえ……いいえッ！ あなたが受けた辛苦に比べれば、この程度……ッ!!」

アメン様の上体を支えながら感極まって涙を流すムト様。

その頬を伝う涙をアメン様は優しく拭っている。

「無理はなさらず安静にしてください、アメン・ラー様。今回行った術は魂を基点として肉体を作り替えたようなもの。今の肉体が安定するまでには少々時間がかかりますので」

下着が重く感じるくらい汗だくだだったので玉藻の用意してくれた桶の水で顔を洗った俺は、立ち上がるうとしていたアメン様へ釘を刺しておく。

転生悪魔の症例は多くあるが、神に対しては今回が初めてだ。

用心はし過ぎるくらいがちょうどいいだろう。

「なんと、それほどの大秘術であったか……！　ならば、それを見事に成功させた其方そなたには相応の礼をせねばならぬな。何か望みがあるなら申してみよ。我が名において叶えてみせよう」

寝たままでもカリスマたつぷりなアメン様の言葉に、思わず呆気に取られてしまう。

急に望みと言われてもなあ……。

今回の報酬だって、100万くらいで手を打つつもりだったし。

「どうした？　他の2体とは違い、其方は人の子だ。何の望みも持たんという訳ではあるまい」

確かに望みはあるが、報酬として臨むのは少々凶々しいものだ。なので、今回はこう返すとしよう。

「そうですね……。でしたら、神話勢力の間で私に何かがあった場合、一度だけご助力願えませんか？」

「ほう、随分と抽象的な願いよな」

「少し前に問題を起こしてしまいました、今の私は世界から腫物扱いなんですよ」

「気になるな。何をしでかしたのだ？」

「この方はオーフィスを一騎打ちで倒してしまわれたのですわ」

ムト様の説明に面食らった顔をした後、本堂に響き渡る程の声で爆笑するアメン様。

いや、そんなウケルような話じゃないと思うんだが。

「あの『無限の龍神』を下したか！　何とも豪気なものだな、少年。ならば、我も断るわけにはいかん。なにせ、世界最強の男の頼み故な！　だから、恥ずかしいんでそう呼ぶのは勘弁してください。」

「慎兄、術は終わった!?!」

呵々かかたいししょう大笑するアメン様を前に頭を抱えていると、本堂に美朱が駆けこんできた。

「終わってるぞ。どうした？」

「入り口で天使と朱姉が揉めてるの！　一緒に来て!!」

その言葉に本堂を飛び出して入り口に向かうと、階段の下で問答を

している巫女服姿の朱乃姉と学校帰りなのか制服を着たイツセー先輩、そして鎧姿の金髪ロン毛な天使の姿が見えた。

あれって確か、ミカエルだったよな。

「何度も言いますが、ここは弟が任された日本神話の神域です！ そのような物の取引に使用するなんて認める訳にはいきません！」

「それは先ほど伺いました。ですが、この地はグレモリーの領地であり、この件は貴女の主が承認した事です。それに何もこの地を奪うと言っている訳ではありません。アスカロンを赤龍帝に譲渡する儀式に、レイラインを使わせてほしいと言っているのですよ」

「だから、俺はそんなモン要らないって、何回も言ってるじゃないですか！ それに今の三大勢力って立場がヤバいんでしよう!? ここであいつと揉めたら、それこそ他の神話から袋叩きにされますって!!」

「心配いりませんよ、赤龍帝。 姫島慎君とは以前に一度会いましたが、礼儀正しい好青年でした。それに彼が日本神話に身を置いているのは家族の為であり、信仰があるわけではないと聞いています。ならば、主の名の元に私が頼めば、快くこの場を貸してくれるでしょう」

……階段を降りる最中、頭痛がしそうな会話が耳に入ってくる。

何をトチ狂ってんだ、あの大天使様は。

日本神話との関係はその通りだけど、だからと言ってそんな理由で貸すわけないだろうが。

つうか、聖剣事件の時に交渉の場にお前居たんじゃないのか。

あんなだけ悪意をバンバン受けたのに、なんでそんな考えになるんだよ。

「随分と騒がしいですが何用でしょうか？ ここは神が住まう社、静粛せいじゆくに願ねがいたいのですが」

声を掛けると朱乃姉とイツセー先輩の顔に安堵が浮かび、対するミカエルは穏やかな微笑を此方に向ける。

「お久しぶりですね、 姫島慎殿」

「ええ、ひと月ぶりですか。それでどのような御用なのでしょうか、ミカエル殿」

「はい。この度、我々三大勢力間で和平を結ぶことになりましたね。

その証として我々から悪魔に属する赤龍帝に、聖剣アスカロンを譲渡する事になったのです」

さもめでたい事のように舌を振るうミカエルの横で、心底嫌そうな顔をするイツセー先輩。

さっきのやり取りを見ていれば、良い印象なんて抱くわけないわな。

それよりも龍の神器を宿した人間に『竜殺し』の聖剣を渡すつてのはどうなんだ？

普通に考えても嫌がらせとしか思えないのだが。

もしかして白龍皇対策のつもりなのだろうか。

「成程、それで何故我が社へ？」

「はい。ここがこの街でレイラインの力が最も集まる場所のようですので、譲渡の儀式に貸してもらいたいのです」

おいおい。なんの躊躇ちゆうちゆうもなく言いやがりましたよ、この人。

俺はちゃんと『ここは神の住処だ』っていったんだが。

なのに武器渡すのに使わせるとか、本当になに考えてんだ。

そもそも、この国の龍脈は日本のもんだつづうの。

そういう事をするんなら、持ち主である高天原に許可を取らんかい。

「ミカエル殿、その事は天照様に伝えているのですか？」

「いいえ。ここは三大勢力の一つである悪魔の領土です、日本に伝える必要はないでしょう」

……なんでみんなこの街の事を勘違いしてんだろいうな。

あれか？ 極東の一地方都市だから眼中にないのか？

というか、あれだけ事件が起きてんだから、普通は細部まで調べるもんだと思うんだが。

三勢力つて諜報関係はまるつきりダメだったりするのか？

「ミカエル殿。ここは日本の領地で、悪魔は管理を任されているだけにすぎません。前回の交渉の場にいた身ならば、この程度的事实を把握していないのは問題だと思いますが？」

こちらが間違いを指摘すると、顔に浮かべていた笑みが消えた。

カドが立たないよう穏便に言っただつもりなのだが、どうやら気分を害してしまつたらしい。

なに、言い方がキツイ？

むこうの無茶ぶりを考えたら十二分に丁寧だと思うがね。

「お引き取りください、ミカエル殿。ここは神聖な神の住処。そのよ
うな目的に使用するなど、神職に就く者として認めるわけにはいきま
せん」

「この儀式は三大勢力の和平の先触れ、しいては貴方の父であるバラ
キエルの今後にも影響するものです。それでも貸してはくれませんか？」

「生憎ですが、私は仕事に関しては公私を分ける事になっています。こ
れが父に影響のある事柄だとしても答えは変わりません」

「信仰を持たぬ身で神官を気取るですか。極東の教えは随分と緩いよ
うで」

「この国は神と人の垣根が低いのが売りでしてね、我々神職者は信仰
でなく親愛を持って仕えているんです。とつくにこの世から去つた
神の遺影を、後生大事に拝んでいるどこぞの宗教とは違うんですわ」
「あなたは……ッ」

俺の言葉にミカエルの目が一気に鋭くなる。

思わず口が滑つてしまつて、言つてはならない事を言つてしまつた
らしい。

まあ、所詮は売り言葉に買い言葉。

ここは水に流してもらおうとしよう。

「ミカエル殿、もう一度言います。お引き取りを。この場でいくら粘
ろうとも、私が首を縦に振る事はありませんので」

「……わかりました。残念ですが、この件は諦める事にしましょう」

そう言い残して、背中の羽を羽ばたかせて飛び去るミカエル。

いや、こんな日の高い内から飛んでいくなよ。

誰かに見られたらどうすんだ、まったく。

「やれやれ、何をトチ狂つてんだよあの大将は。朱乃姉とイツセー先
輩はありがとうな。あいつを抑えてくれて」

「いいのよ。いくら大天使長とはいえ、私達の家であんな事をされるのは嫌だもの」

「こつちも気にしないでくれ。俺がここまで連れて来ちまったようなもんだし。あと、部長がここを使うの認めたって事なんだけど……」
「わかってるよ。これから和平を結ぶ一派の長の言葉だもんな。リアス姉の立場じゃ突っぱねるなんてできないさ」

「すまん。部長も謝つといってくれって言ってたよ」

「あいよ。リアス姉には類るいが及およばないようにしとく」

片手を軽く振りながら俺は踵かかとを返す。

慌ててたから思わずアメン様達を放って出ちまったけど、ヘソ曲げたりしてないだろうな。

「なあ、慎」

石段の手前で掛けられた声に俺は足を止めた。

振り返るといつもとは違う真剣な表情をしたイツセー先輩がこちらを見つめている。

その顔に陰が浮かんでいるのは、射しこむ夕日の所為ではないだろう。

「どうした、イツセー先輩？」

問いを返すと、イツセー先輩はチラリと朱乃姉に視線を送る。

ふむ、なにやら込み入った話のようだ。

「朱乃姉。悪いけど、先に帰って美朱と一緒にアメン様達の相手をしてってくれるか？」

「わかったわ。でも、私達じゃそんなに間が持たないだろうから、早めに来てちょうだいね」

イツセー先輩からの視線に気付いていたのだろう、朱乃姉は微笑みながら境内に姿を消した。

うん、こういうところで気が利くのは本当にありがたいよなあ。

「さて、イツセー先輩。話を聞こうか」

「あ、あのさ……今、悪魔ってどれだけヤバいのかな？」

「どれだけ、とは？」

「こつちに戻って来てから俺なりに悪魔の世界的地位つてのを調べよ

うとしたんだ。でも、世界でテロが起こってるくらいしか分からなくてさ」

「それで、俺に具体的な裏の世界情勢を聞こうって訳か」

「うん。教えてくれるか？」

イツセー先輩のまっすぐな視線を受けながら、俺は内心でイツセー先輩の株を上げていた。

一番こういう事とは縁遠いと思っていたのに、先輩も将来の事とか真剣に考えてるんだな。

「いいだろう。その前に、立ち話もなんだから河岸かしを変えるか」

「河岸を変える？」

「場所を変えて喫茶店でも行こうかって事。本来は飲食や遊びの場所を変えるのに使う言葉でな、もともとは江戸時代の遊女が抱え主や働き場所を変えることで、そこから転じて、そういう意味になったんだ」

「なんつうか、お前って古い言葉とか言い回しを使うよな」

「親父臭いつてか？ まあ、職業病だと思ってくれや」

軽口を叩きながら向かった先は、近所にある馴染の喫茶店。

ドアベルを鳴らしながら中に入ると、染みついたコーヒーの香りと共に昭和を思わせるレトロチックな店内の姿が目飛び込んでくる。

カウンターでグラスを磨いているマスターにコーヒーを二つ注文した俺達は、店の奥の席に腰かけた。

「さて、さっきの話の続きだな」

「ああ」

「まず、現状における悪魔、というか聖書の勢力についてだが」

「ええと、ちよつと待ってくれ。聖書の勢力ってなんなんだ。俺達って三大勢力の人間じゃなかったッけ？」

「そこからか。聖書の勢力ってのは三大勢力の正式名称だ。由来は説明するまでもないだろうが十字教な。一応、中東を中心に普及している一神教も同じカテゴリーに入るけど、この辺はややこしいんで今回は説明を省く。あと、『三大勢力』なんて言ってるのは聖書の勢力内だけで、他では『聖書の勢力』もしくは『三勢力』で通ってるから間違えないようにな。ここまではいいか？」

「お、おう」

しどろもどろになりながらも答えを返すイツセー先輩を一瞥して、俺は説明を再開する。

しかしメモを取ろうとしているとは、知りたいと思っっているのはマジらしいな。

「話を戻すが、現状の三勢力の立場はすこぶる悪い。現政府から離反した三勢力の過激派を中心に構成されたテロ集団『禍の団』が世界各地で破壊活動をやらかしててるせいで、元々低かった三勢力の株価が絶賛大暴落中だ」

「え、でも悪さをしているのはその『禍の団』なんだろう、？なんで三大勢力まで悪くみられるんだよ？」

「そりゃあ三勢力の指導者がしつかりと管理してれば、『禍の団』なんて生まれなかったからな。指導者達の方針は平和を目標にした融和だったけど、それに反対する主戦派や過激派がいるのも彼等は承知していたんだ。そいつらを放置した挙句に結託してテロに走られたんじゃ、責任を問われても仕方がない。他の神話勢力の中には『禍の団』は三勢力の尖兵せんべいだと思っっている輩もいるくらいだからな」

「なんだよ、それ!? 俺達は他の奴等に迷惑がかかる事なんて——」
「してるんだよ。過去の事だけじゃなく、現在進行形で」

「俺達がいったい何をしたっていうんだよ？」
「まずは冥界があるにも関わらず、各国の土地を領地と詐称して無許可で占拠してる事。次に信者国民を誘惑して転生悪魔にする事。さらには、堕天使による神器所有者の殺害や悪魔祓いによる民への殺傷もそうだな」

「転生悪魔も悪いのかよ!? 俺達は自分の意志でなったんだぞ！」
「他の神話勢力から見れば、自分の民を勧誘する事自体が悪なんだよ。それにイツセー先輩はそうかも知れないが、力づくで眷属にされたケースも多いんだ。殺された後、転生悪魔として復活させられたりな」

「そんな……」

「サーゼクス兄やリアス姉、ウチの親父みたいな例外はあるが、基本的

に三勢力全てにおいて人間の価値は低い。天使、墮天使、悪魔。どの種族もだいたい人間を下等生物として見下してる。ここも他の神話からは悪印象みたいだな」

「それはレイナーレを見てて感じた。けど、天使や悪魔もそうなのかなよ」

「天使は基本的に信仰を集める道具兼手駒、悪魔は契約によって糧を得る対象。あとは転生悪魔の素体ってとこだな」

実はこの辺は俺も引つかかるところだ。

他の神話と関わるようになってわかった事だが、彼等は自分の土地の人間を本当に大事にする。

信仰心が薄い奴や他の神を信じてる者でも助けようとするし、その神話の悪神や現地の魔物が人を殺めても、魂はしっかりと保護されて冥府へ送られる。

不思議に思って天照様に聞いた事があったが、その時に返ってきた『人はその地を治める神が生み出したモノ。いわば神にとって人は子と同じなのだ』という答えには納得したものだ。

もしかすると、三勢力の人間に対する認識が悪いのは、これが原因なのではないだろうか。

「後は『禍の団』のテロで三勢力の信仰が落ちた事から、徐々に古の神々が復権してるのもヤバイか」

「えくと……すまん、解説お願いします」

「以前、三勢力が他の神話の信仰を奪った話はしただろ。今度は逆の事が起こってるんだ」

「逆って、追い出された神様が土地と信者を奪い返してるってことかな？ なんだってそんなことに」

『禍の団』がイタリアを襲った時にな、奴等は天使、悪魔、墮天使の三つの種族を使ったんだ。イタリアは一神教の総本山。そこを手を取り合うはずのない三つの種族が仲良くテロったものだから、被害にあった信者は黙示録の時が来たと勘違いしたのさ」

「黙示録って？」

「聖書にある滅びの予言だよ。ザックリ説明したら、墮落した人類に

絶望した聖書の神が今ある世界を滅ぼしてリセットするって話。滅びを受け入れた敬虔な信者もいたらしいが、大半の者はパニックになりながらも生き延びようとした。その時、ローマ神話の神々が降りたって人々を護りながら『禍の団』を撃退。さらには街に復興にまで手を貸したらしくて、現地住民のなかで鞍替えする者が続出しているらしい。これと同じことが中東でも起きてるせいで、世界的な三勢力への信仰はダダ下がりだ」

「でも、そのどこがヤバいんだ？　どんな神様を信じるかなんて個人の自由だろ」

「信仰するのは神話勢力にとって活動を維持するためのエネルギーみたいなものだ。前に言っただろ、神は人の信仰の影響を受けるって。で、信仰が減れば当然その神話勢力は衰退する。具体的にどんな影響が出るかまでは俺も分からないけど、三勢力の場合は神器の効果が減衰したりするかもな」

「げっ!?　マジかよ」

顔を引き攣らせながら自身の左手をマジマジと見るイツセー先輩。

これに関してはこっちも皆目見当がつかない。ただでさえ唯一の神霊がない状態なのだ、下手をすれば天界や冥界が減ぶことだってありえるんじゃないか？

「それよりも問題は復権した神話勢力による三勢力への報復だろうな。日本やギリシャみたいに地上にいる神話勢力は嫌悪感はある程度もある程度の折り合いを付けてるけど、帰還してきた者達は恨み骨髄だろうからな。『禍の団』の事で難癖なんくせをつけて戦争を吹っかけてきかねん」

「なんだよ、本気で崖っぷちじゃないか……」

「ホントに頭の痛い問題だよ。でも、どうしてそんな事を知ろうと思っただけだ？　イツセー先輩ってそういう事には興味は無いと思っただけだ」

「……この前、中東のテロの事がニュースでやってたんだ。関係のない一般人の被害者が何十人も出た酷いものでさ。それを見た時に前の事件の事が頭を過ぎった。あの時は慎達が解決してくれたけど、も

しかしたらこの街でも同じような事が起こったかもしれないって」「成る程。それを見て悪魔から足抜けしたくなかったか?」

「……俺、部長には本当に感謝してるんだ。だから悪魔になったのは後悔してないし、部長にも本気で仕えようと思ってる。でも、そのせいで父さんと母さんが危険に巻き込まれるっていうのなら。俺の所為であんなテロの被害者みたいになるっていうのなら……」

思いつめた顔で俯くイツセー先輩に俺はため息をついた。

前の事件ではここがテロの標的になったのだ、そういった最悪の事態を考えるのも当然だろう。

それに二天龍の神器は戦乱を呼ぶと言われているなんて話も聞いた事がある。

それが本当なら悪魔であるなしに関わらず、イツセー先輩は厄介事に付きまとわれることになる。

まったくもって難儀なんぎな事だ。

「わかった。もし本当に足抜けする覚悟が出来たなら俺のところに来てくれ。リアス姉にケジメをつけるのにも付き合っつてやるし、その後も何とかしてやる」

俺の言葉にイツセー先輩は顔を上げる。

赤龍帝の籠手の所持者であるイツセー先輩が足抜けするのは簡単ではないだろうが、本気で辞めると決めたなら多少強引な手を使っつてもケツは持っつてやるつもりだ。

家族を護る為に身を引くのはきつと間違っつてないはずだから。

「いいのか? いや、まだ悪魔を辞めるっつて決めたわけじゃないけど。お前っつて、日本神話所属なのに」

「いいんだよ。それなら今朝クビになっつたし」

「クビイイツ!?!」

テーブルを揺らしながらのけ反る先輩に、まだカップの半ばほど残っつているコーヒーを保護する。

まったく、オーバーすぎるわ。

「え、クビっつて、なんで!?!」

「どうもオーフィスに勝っつたのが原因らしくてな。俺が一神話勢力に

所属しているのは、外交的に拙いんだと」

「そっか。地上最強なんてのがいたら、そこが一人勝ちしちゃうもんな」

「概ねそんなところ。所属して一か月で解雇とかどこのダメ社員だった話だよ。まあ、普通の会社でも公衆の面前で喧嘩なんかしたらクビなんだけどさ」

「じゃあ、神主もクビになるのか?」

「あつちは神様じゃなくて日本政府の認定だから別。それまで無くなったら本気で路頭に迷っちゃう」

「……なんつうか世知辛いな」

「まったくだ。社会の厳しさを再確認してるよ」

お互いのため息をついた俺達は、申し合わせたように温くなってしまったコーヒーをいっきに呷^{あお}った。

「そろそろ行くか」

「ああ。コーヒー幾らだっけ?」

「俺が出すよ。店にさそつたのはこっちだから」

財布を出そうとするイツセー先輩を留めた俺は、向こうが何か言うより早く伝票を片手にカウンターに向かう。

「ありがとうな。相談に乗ってもらった上にコーヒーまで」

「気にすんなって。住人の悩みを聞くのも神職の務めの内さ」

店から出ると日の光はその姿を消し、辺りには夜の帳が降り始めていた。

「これからどうするんだ?」

「部室に戻るよ。ミカエル様の事も部長に言わなきゃならないし」

「そっか。さっきの話だけど、どっちを選ぶとしても後悔の無いようによく考えてな」

「わかつてる。サンキューな」

こちらを一瞥して去っていくイツセー先輩を見送った俺は、社に向けて歩きます。

これから戻ってアメン様達の相手をして、その後で親父に身体検査を頼んで、明日は警備の最終点検があったか。

クビになった俺が関わっていいのかわからんが、外されるとしても次の責任者への引き継ぎだけはしとかないと。
身が休まる暇もないな、まったく。

19話

夏の日差しも姿を顰め夜の帳が降りた頃、俺は駒王学園の本校舎の職員会議室の扉を潜った。

そこには学校の一室に似合わない豪華絢爛な円卓が中央を占め、その後ろには同程度の机と椅子が並べられている。

分けられた区画毎まいに神話勢力の名が書かれたプレートが立っている事から、ここが来賓席らいひんなんだろう。

「各神話の主神を迎えるには、随分とみすばらしい場所ですねえ」俺の後から室内に入った玉藻が、呆れたようにため息をつく。

たしかに言う通りなのだが、ただの学校に華美を求めるのは酷というモノだろう。

個人的にはそんな場所よりもこっちのほうが落ち着けるし。

今回俺の席はこの来賓のはずなので、自身の名前が付いた机を探している、金の冠と仏僧衣ぶつそくいを身に纏った男が現れた。

アメン様や天照様によく似たこの感じ、もしかしてこの方は……

「初めまして、大日如来様。私は姫島慎と申します」

「……驚いたな。一目見て私の名を看破するとは」

「太陽を司る神仏に縁がありまして。その方々と同じ気配と仏僧衣から推測しました」

「鋭いな。さすがは『無限』の力の保有者というところか。名乗りが遅れて失礼した、私は大日如来。仏法において責任を担う立場にいる者だ」

「よろしくお願ひします」

差し出された手を握り返すと、大日如来様は感心したように声を上げる。

「なるほど……よく鍛えている。『無限の龍神』を下したのは単純な力だけではないようだ」

「力だけならあちらの方が上でしたよ。俺が勝ったのは人が編み出した武術によるものです」

「そうか。人の理を持ってあの龍神を退けるとは、さすがは人中の『無

限』よな。其方とは良き関係を結びたいものだ」

「恐縮です」

「ここで俺は駒王監査官の業務で、仏教関係者に頼みたい案件がある事を思い出した。

「大日如来様。会って早々で不躰ぶしつけなのですが、お願いしたいことがあるのです」

「ふむ、聞こう」

「私が監査役を務める日本の領土で、転生悪魔を一名保護しました。彼は私達が発見した時には異形と化しており、それまでに人を一人殺めていたのです」

「俗に言う『はぐれ悪魔』というモノだな」

「ええ。人に戻った彼はその事を心底悔いており、遺族への謝罪を終えた後でも仏門に入って生涯を掛けて被害者を弔いたいと申ししております。ですが、経歴が経歴ですので神職者である私達の口添えだけでは、仏門を叩くには心許こころもとないと思ひまして」

「それで我に取り成してほしいという訳か」

「はい。お願いできないでしょうか？」

「よかろう。では、真言密教の総本山たる金剛山へ筆を取ることにしよう」

「ありがとうございます」

「考えるそぶりも見せずに快諾する大日如来様に、少々面くらいなながらも俺は頭を下げる。

「礼はいらぬ、迷える者を導くのが我が勤め。その者が仏の道に入り被害者の菩提ぼだいを弔うならば、殺められた側は元よりその者自身への救いの道も見えてくるであろう。しかし、良かったのか？ そなたは今日本には転生悪魔を人に戻す術があると言ったようなものなのだぞ」

「構いません。今は日本の秘ではありますが、いずれ他の神話の方々に教えねばならない事です。この件で責任が問われるのならば、私はその咎とがを受けましょう」

「その決意、なにか辛いものを見たのだな。……あい解った、我はこれ以上の事は聞かぬ。その者の仏門への帰依きえについては任せるがいい」

そう言い残して自身に割り当てられた席へと戻る大日如来様に俺はもう一度頭を下げた。

……これで俺の日本神話での最後の仕事は片が付いたわけだ。

大日如来様の推薦だなんてあのおっさんも相当なプレッシャーになるだろうが、その辺は頑張ってもらうしかない。

しかし、緊張したな。

あんなメジャーどころの相手なんて心の準備なしにはキツイぞ、まったたく。

もしかして、こんなのがずっと続くんじゃないだろうな。

悲しいかな、こういつた時の嫌な予感と言うのは大概当たるものである。

この後もダグザ様、オーデイン様、ハーデス様といういつもの面子はもちろん、一昨日交流があったアメン様とムト様にシヴァ神とその妻であるパールヴァティ様。

最近土地を取り戻したシユメール神話の主神アヌ様とローマ神話のユピテル様。

アステカ神話のケツアルコアトル様に、さらには中国道教の天帝様まで。

次から次へと声を掛けられて、自分の席を見つけた時には会議が始まってもないのに精神的疲労でへ口へ口になってしまった。

「ふむ、貴様が第三の『無限』を持つ男か」

椅子の手前で掛けられた声に振り向くと、そこには絹で出来ているのか、光沢のある純白のドレスを身に着けた美女が立っていた。

外見はほぼ人間と同じだが身体に纏う神氣と濃密な血の匂い、そして黒髪を押しつけて生えている一対のヤギの角がそうでない事を雄弁に物語っている。

「はじめまして、姫島慎と申します」

「うむ。私の名はアナトという」

会釈をするこちらに返した名乗りに、ボケかけていた思考が一気に引き締まった。

女神アナト。

カナン（現在のシリア西部に存在した文明）に伝わるウガリット神話の主神バアルの妹にして妻とされる、愛と戦いの女神。

バアル神が悪魔に堕ちてからは、カナンを手放して公には姿を見せていないと聞いていたのだが、何故この場に？

つうか、この方が神話通りの性格だったら、本気でヤバイ。

無茶苦茶気性が荒いうえに、兄であり夫でもあるバアル神にぞつこんだ。

その愛の深さは、

『死神モトに殺されたバアルの亡骸を見つけると、嘆き悲しみながらも彼の肉を食べ、その血を飲んだ』

『バアル神を殺めた冥府の神モトを斬り刻んでミンチにしたうえに、それを焼いて臼で引いたあげく、畑に撒いた』

等々の説話を見れば分かる。

そんな世紀末とヤンデレが二身合体したようなトンデモない方なので、愛してやまないバアル神を悪魔に堕としたと言われる聖書の勢力を前にしたら、本気で何やらかすかわからない。

これは警戒レベルを最大にしとくべきだな。

「ムト殿から聞いたぞ、其方がアメン殿を神に立ち戻らせたと。その手腕、いずれわらわも借りる時がこよう。その時はよろしく頼むぞ」

「ええ、その時はお声かけ下さい。格安でお引き受けいたします」

「ふむ、因みに相場は幾らだ？」

「今は100万円位を考えています」

現状の価格設定を告げると、アナト様は何故か不機嫌な顔をする。

「……安すぎる。其方が成した事は、聖書の虚け共の策略に嵌った神を救う偉業なのだぞ。それをそのようなはした金で行うなど、これまで努力してきた神々に対する侮辱だ」

むう、安くて文句を言われるとは思わなかった。

これがセレブというものなのか？

「では、どのくらいにすればよいのでしょうか？」

「最低でもその千倍は取るがいい。多くの神々が成しえなかった悲願なのだから」

おお、10億とな。

こんなにぼったくつていいのだろうか。

アメン様にも金を請求してないのに次から実費とか、さすがに気が引けるのだが。

「いいんじゃないですか。アメン殿は臨床試験だったという事にすれば」

いや、それはそれで失礼だろ。

「時^{いた}至らば再び其方の元に赴こう。その時は頼むぞ、姫島慎よ」

なんかウダウダしている内にアナト様は行ってしまった。

成り行きで成功させてしまったモノなのでイマイチ実感はないのだが、この神救いの法（仮称）って凄い事だったんだなあ。

「一回10億かあ……。聖書の神の所業を考えれば、需要は尽きないはず。このまま行けばご主人様は資産家になる事間違いないでしょう。そうなれば、私もすこし贅沢をしても許されるかも……。はっ！鎮まれえ、私の沢山ある尻尾。今回は良妻モードです、贅沢できるからって傾国モード無しですからね」

……なんだろう、ウチの助手がもの凄い勢いで自己暗示してるのだが。

「なあ、坊主。この女狐との契約、切った方がいいんじゃないか」

残念なものを見るような目を向けるクーの兄貴の顔面に、玉藻の鏡が突き刺さる。

「ツてーな！ 何しやがる!?!」

「ご主人様に妙な事を吹き込まないでくださいまし！ 去勢しますよ、駄犬!!」

「イヌ言うな!?!」

なんかヤイヤイ言い争っている二人を尻目に、俺は妙に座り心地の良い椅子に身体を預けた。

つうか、この世界の神様ツツコミどころ満載なんだが。

まずインドのシヴァ夫妻は『3×3 EYES』の正気な頃の鬼眼王^{カイヤンワン}と三只眼^{さんしやん}だったし。

ケツアルコアトル様が女性でいきなりルチャの試合を挑まれたし。

というか、なんで俺が超人レスリング使うの知ってるんだよ。

さらに言ったら、天帝様の横にいた北斗星君様。

あれって明らかに『閻王』だよな？ 霞拳志郎だよな？

なに、なんなの？ あの人も北斗神拳使ってるの？

……いや、それは無いか。

あんなトンデモ拳法使える人いたら、オーフィスなんて瞬殺だろうし。

『ナギツ！』とか『有情断迅拳!!』とか『有情破顔拳!!』とか

『北斗剛掌波!!』とかされたら、『無限』ごときじゃ勝てる気がしない

んですが!?

「ご主人様、本当に大丈夫なんですか!? なんか顔色が悪いうえに、尋常じゃなくらい汗をかいてるんですけど!!」

「大丈夫……大丈夫だ……、命は投げ捨てるものではない」

玉藻のこちらを気遣う声に額の汗を拭いながら答える。

OK、落ち着け。俺はまだ大丈夫だ、秘孔を突かれたわけでもなければ、身体が膨れたり変形したりしてるわけじゃない。

けっして象のような巨馬に乗った精悍な男や、白髪空飛ぶ病人に会った訳でもない。

あれは偶然の一致、偶然の一致なんだ。

取り敢えず、自己暗示でなんとか平静を取り戻すことが出来た俺は、昨日のグリゴリで行われた検査の事を思い返した。

……うん、自覚はあるから現実逃避とかツツコむのは無しの方角でお願いします。

さて、グリゴリで行われた検査は身体測定から体力テスト、神器の稼働状況からその効果と多岐に渡った。

結果を言うと、まず身体能力は高校入学直後に測定した時に比べて、約50倍の数値を叩き出した。

これには検査スタッフを始めついてきていた美朱と朱乃姉、なにより俺自身が驚いた。

幾らなんでも跳ね上がり過ぎである。

体力テストの様子を、美朱は引き攣った笑い顔でこう表した。

『リアルサイタマを見た』と。

妹よ、兄はまだワンパンマンの域には到達していないぞ？

さて、こうまで能力が跳ね上がった原因についてだが、これを探るのには随分と骨が折れた。

比喩ではなくそのままの意味で。

体力テストの次は、俺の神器である『トワイライト・ヒーリング聖母の微笑』の稼働状態の検査だったわけだが、結果はこちらの方は以前のデータと差異は見られなかった。

同じ神器を持つアシア先輩との回復性能の差も、熟練度と人体への知識による物と判断された。

原因はこれにあると当たりを付けていたので正直肩透かしを食った気分だったのだが、ここでふと一つの事が頭に浮かんだ。

それは瀕死、重傷から回復した際に身体能力が跳ね上がるという事例だ。

俺の勘が正しいのならばそういう状況を作り出せば、通常とは違う反応をみせるかもしれない。

そう考えた俺は、思い立ったが吉日とばかりに『無限の闘争』に飛び込んで『狂ランク』と一戦交えた。

現れたのはなんと仮面ライダーの一人。

キックホップパーという名に聞き覚えはなかったが、それでもライダーの名を冠する者。

強化スーツの能力を駆使して繰り出される多彩な蹴りに強力なライイダーキック。

さらには拳撃主体である色違いの仲間とのコンビネーションと、その強さはオーフィスを上回るほどだった。

今回は勝つことが出来たが、次に闘ったら負けるかもしれないな。

しかし、勝利ボーナスとして技の代わりにベルトとバツクル代わりに嵌めていた機械仕掛けのバツタを貰ったのだが、いったいどうすればいいんだろうか。

閑話休題

さて、闘いを終えて現実に戻った俺の身体はいい具合にポロポロ

だった。

肋骨3本骨折に胸骨亀裂骨折。

肺は砕けた骨の破片で損傷し左腕はライダーキックを防いだために、肘のすぐ下を筋肉ごと骨まで潰されている。

うん、これで死亡防止措置が起動しないのはどうなのか。

ひよつとしてあれか？ この程度なら俺は死なないし後遺症も残らないと判断されているのか？

まあ『聖母の微笑』を使えば残らないだけだよ。

こんな恰好で戻ったものだから、当然みんなは大騒ぎ。

こちらが何をやったかを察した美朱には呆れられ、朱乃姉の涙ながらの説教を食らう羽目になってしまった。

しかし、その甲斐あって『聖母の微笑』の異常性も知ることが出来たので、まあ結果オーライだろう。

それで詳細なのだが、なんと俺の『聖母の微笑』は禁手化していた。何故それに気付かなかったのかというと、無意識の内に24時間365日禁手化しっぱなしだった為に、それが当たり前になって違和感を感じなかったかららしい。

これについては、神器研究の第一人者であるアザゼルのおっちゃんから『イカレてやがる……』というコメントをいただいた。

まあ、言った直後に朱乃姉の雷撃を食らってたが。

肝心の能力だが、やはり異常な身体能力の伸びの原因の一端はこれにあつた。

それは耐性を織り込んだ超回復。

ザックリ説明するのなら、内外に関わらず肉体が損傷するとその要因となった刺激に対して、耐性を生み出すと同時に肉体を強化修復しているのだ。

つまり、戦闘による怪我も鍛錬による肉体疲労も全てが強化修復の対象となると言うことだ。

これならば、この短期間での伸びも納得がいく。

重力トレーニングと界王拳の過剰強化、そして『狂ランク千人組み手』。

これらによつて絶え間なく肉体に負荷が掛けられ続けた事、それが種族限界を突破した身体との相乗効果で爆発的に強くなったのだ。

……しかしまあ、なんと言うか我ながらとんでもない身体である。自重しない変人の集まりであるグリゴリの中で、アザゼルのおっちゃんおっちゃんと双璧を成すMAD科学者であるサハリエルさんですらこの結果にドン引きしていたと言え、どれだけはお分かりいただけるだろう。

因みに、禁手化した神器の名前は『聖母の微笑ACT2』にした。みんなには面白くないと不評だったが、こんなもんは大そうな名前なんていらんだろうに。

正直、『聖母の微笑』という名前も『ホイミ』または『薬箱』に変更したいくらいなのだ。

特にアザゼルのおっちゃんおっちゃんは熱心に改名を要求していたが、こんなどうでもいいところに拘るから厨二病なんて言われると思うんだけどなあ。

この後、解剖させると迫るサハリエルさんを躲した俺は、美朱や晴矢はれるやと一緒に久々にハーフ組と久ぶりに顔を合わせた。

あ、ハーフ組というのはグリゴリにいる混血児達のグループだ。

元はシエムハザさんや親父が保護した子供達で、メンバーの殆どとはガキの頃からの付き合いである。

グリゴリにいた頃は晴矢はもちろん、少々出自は違うがヴァーリもこのグループに属していた。

出会った当初は、その生まれから親父やシエムハザさんの目を盗んだ下っ端共からちよつかいちよつかいを掛けられていたのだが、俺と『無限の闘争』ダイバイン・ダイバインで白龍皇の光翼光翼を使いこなせるようになったヴァーリで返り討ちにしてからはそういった動きも鳴りを潜め、今ではグリゴリの中でも一部署を任されるほどになっている。

晴矢が俺の事を『リーダー』と呼ぶのはその時の名残なのだ。

久しぶりという事で随分と会話が盛り上がり、地上に戻った頃には辺りは夕陽で赤く染まっていた。

お陰で、俺の代わりに警備責任者になっていた爺ちゃんとの引継ぎ

が夜になったんだよなあ。

まあ、和平交渉自体が夜に行われるので寝不足にはならなかったんだけど。

ゴメンよ、爺ちゃん。

さて、そろそろ意識を現実に戻そうか。

来賓の神々が揃った後半刻ほど時間をおいて、三勢力の代表が会議室に姿を現した。

賓客より遅れて現れるってどうなのか、と内心思ったが敢えて口には出さなかった。

しかし、神々の中には不快感を表す方もいらっしやるので、俺と同じ考えを持つ者が少なからずいる事は間違いないだろう。

各々の代表が円卓に着くと、サーゼクス兄の指示で悪魔側の護衛兼この会議の給仕係であるグレイフィア姉さんが、円卓の連中にお茶を煎れ始める。

「いや、だから先に来賓に配れって！ 客をほっという自分たちの茶を煎れるのは普通に失礼だから!! あ……」

ヤベツ、思わずツツコミが口に出てしまった。

「ほう、新たな『無限』殿は礼儀が解っているようだ」

「聞けばまだ齡15だとか。そのような若輩に理解できる事も分からん者が一勢力の代表を名乗るとは、呆れて物が言えぬわ」

そう言いながら自前の飲み物を口にする来賓席の神々。

予め飲食物用意しているとか、まったく三勢力を信用していないじゃないですかヤダー!!

「ご主人様、お茶です。こちらは私が家で淹れてきたきたモノなので、心配ありませんよ」

……あ、ウチも人の事言えないや。

ジェスチャーでこちらの謝意を向こうに伝えると、墮天使と悪魔サイドからは苦笑い、天使側からは敵意の籠った視線が返ってきた。

ふむ、どうやらミカエル大天使長は一昨日の事まだ根に持っているらしい。

それから少しすると今度はリアス姉を始めとして眷属一同にア―

シア先輩、そしてソーナ会長と生徒会役員が入ってくる。

うん？ リアス姉達はオーフィス戦の時に居たからわかるとして、なんでソーナ会長達も来てるんだ？

もしかして、俺が気づかなかっただけで、あの時いたのか？

「私とレヴィアタンの妹、そしてその眷属です」

サーゼクス兄が他の勢力にリアス姉達の紹介をする。

それに合わせて両主とその眷属は来賓に向けて会釈をする。

いや、そうじゃない。そうじゃないよ、サーゼクス兄。

家も継いでない一貴族令嬢がなんでこの会議に参加してんの？

これって人間に例えたら国際首脳会議だろ？

そんなものに身内だからって学生参加させるなんて、意味不明じゃないか。

その辺を説明しないと、また来賓の皆さんが悪印象受けるって。

「彼女達は例の案件の目撃者です。その為、この会議に出席させました」

ワンテンポ遅れた説明に、思わずため息が出る。

むこうと関係がある俺にしてみたら、ある意味ここって針の筵むしろうなんですけど。

なにやっても悪く取られかねない空気って厳しいな、おい。

「皆さまの席はあちらになります」

グレイフィア姉さんに促されて、此方こちらとは別の窓際に用意された席に座るリアス姉達。

「出席者が全員揃ったところで会談を開始しよう」

リアス姉達が席についたところで、サーゼクス兄から開始の宣言が放たれた。

さて、ここでもう一度今回の参加メンバーを確認しよう。

まずは三勢力。

悪魔側はサーゼクス兄とセラフォル姉さん、リアス姉と朱乃姉にイツセー先輩、祐斗兄ときてアーシア先輩、後はソーナ会長と生徒会メンバーだ。

墮天使側はアザゼルのおっちゃんに親父とヴァーリ、あとやつぱり

鳶雄とびお兄さんとラヴィニア姉さんも来ていた。

天使側はミカエルと補佐と思われる女性の天使が一人、あとは護衛の武装天使が三名だ。

因みに美朱とクールの兄貴は今回俺の傍そばに付いている。

本来は囑託しよくたく……もとい非正規雇用の日本勢力なのだが、公平をきす為に天照様の護衛ではなくこちらに付けたらしい。

え、朱乃姉や親父はいいのかって？

多神勢力に顔が売れているのは、聖剣事件に関わった美朱だけなので問題ないとの事だ。

「さて、今回の会談は先の聖剣強奪事件に端を発したダーナ神族との確執。そしてテロ集団『禍の団』の台頭によって、我等三つの勢力が一丸とならねば生き抜く事ができないと判断した為のものだ。相違ないな？」

「ああ。テロをかました主戦派の馬鹿共もそうだが、多神勢力の連中もあわよくばとこっちの首を狙ってやがる。こんな中で内輪もめなんざ自殺行為だからな」

「この現状に主も心を痛めておいでです。ですが理由はどうあれ、長きに渡り争っていた我等三種族が手を取り合うのは喜ばしい事だともおっしゃっていました」

張り付けた様な笑顔で紡いだミカエルの言葉に、アザゼルのおつちゃんは苛ただしげに舌打ちをする。

まあ、リアス姉達がいる所為で聖書の神が健在だなんて、三文芝居に付き合わなくてはならないのだ。

ため息の一つも付きたくなるだろう。

「そうか。ならば、和平条約の調印を行いたいと思う。三者三様に含むモノがあるだろうが、そこは互いの将来の為に譲歩してほしい」

サーゼクス兄の言葉で代表者三名の前に一枚の書類が配られる。

あれが和平の調印文章なのだろう。

「待ちな、サーゼクス。こいつにサインする前にお前に確認したい事がある」

「何かな、アザゼル？」

「お前等現職魔王は、前魔王の腰巾着だった老害共を抑えられるんだろうな？　主戦派の大半は『禍の団』に移ったとはいえ、あの大战に關係していた奴はこっちへの恨みは有り余ってたんだ。調印後に後ろから撃たれるなんて事になったら、こっちも堪らんからな」

「それを言う権利は無いと思いますがね、主戦派を抑えられず『禍の団』を生み出してしまった我々には。それに、そういった者が残っているのは悪魔側だけではないでしょうし」

「そうだな。堕天使にも、お前等天使の側にもいるだろうさ。けどな、俺達の場合はいたとしても部下だ。こっちが本気で取り締まれば抑える事はできる。だが、悪魔側は貴族主義の影響で諸侯が独自の権力と兵を持ってんだよ。ゼクラム・バアルを頭にした大王派なんてのはその典型だ。そうだろ？」

やる気のない口調だが、アザゼルのおっちゃんがサーゼクス兄達に向ける視線は針のように鋭い。

嘘や誤魔化しは認めないという固い意志が、悪魔側を縫い付けている。

普段は厨二病で戦友の息子から風俗代10万を借りる『まるで駄目なおっさん』略してマダオでも、さすがは堕天使のトップと言ったところか。

「アザゼル総督の懸念は尤もですが、それは無いと断言いたしましたよ。我々悪魔側もこの危機的状况に関して覚悟を決めています。先日、魔王政府から冥界悪魔領全土に対して非常事態法令を発布しました。それには現政府への諸侯の協力の義務化と政府監査官の設置、そして違反した場合の厳罰が定められています」

「なるほど、それなりの対策は講じているのですね。ならばこちらは調印させていただきますでしょう」

「……イマイチ不安だが和平は不可欠だな。これ以上ゴネてもしやあねえか」

真面目モードのセラフォル姉さんから出された対応策に、満足そうに調印するミカエルとそれとは対照的に渋々筆を走らせるアザゼルのおっちゃん。

その監査官が買収されたり、そういった職に就く政府高官がすでに大王派の息が掛かっていた場合はどうするのか？ という心配が過ぎったが心の内に留めておいた。

俺がそれを指摘したら余計ややこしい事になりそうだし。

「悪魔側の対応は抜けてますねえ。聞けば大王派は貴族の過半数を手中にしているとか。監査官を置くにしても、それを選出する政府の中樞に彼の手が伸びていない訳ないと思うんですけど」

呆れたように愚痴を吐き出す玉藻。

うん、やっぱそう思うよね。

でも、下手に強硬手段を取って大王派を中心として貴族に結託でもされたら、内戦間違いなしだからなあ。

現状では、この辺でお茶を濁すくらいしかできないのだろう。

正直猛烈に嫌な予感がするが、ここはサーゼクス兄達がつかりしてくれるのを祈るしかない。

「さて、これで和平は締結だ。アザゼル総督とミカエル大天使長には感謝の意を表したい」

「いえ、こちらこそ冥界側の理解ある対応に主に代わってお礼申し上げます」

「何を呑気な事を言ってるやがる。これから和平なんて比でもないくらい面倒な事を、そこにいる厄介な連中と話さなきゃいけないんだぞ」

喜ぶ二陣営の代表をよそに、アザゼルのおっちゃんはウンザリした顔で来賓席を指差した。

うん、俺の事ですな。

「アザゼル、貴方は何を言っているのですか？ あそこにいる来賓の者達は我々の和平締結の立ち合いにきたのでしよう」

「なにボケた事言ってるんだ！ あそここの連中にとっちゃあ、俺等の和平なんて前座でしかねえんだよ。あいつらは地上最強になっちゃった戦闘狂のクソガキについて話に来たんだ！」

おやおや、サラリとこちらを罵倒してくれましたよ、あのマダオ。

「誰が戦闘狂のクソガキだよ、この色ボケ厨二病が。風俗代で貸した10万、いい加減返せっつーの」

「おまつ!?! こんなところで言わなくてもいいだろうが! TPO弁えろよ、TPOを!!」

「年始のクソ忙しい時に、にズボン半脱ぎで友人の息子に金借りに来たくせに、なにがTPOだよ。しかも直球で風俗代って言いやがつて、テメエが常識を弁えろつてんだ」

「仕方ねえだろうが! フィニッシュ決めた後で財布落としたのに気づいたんだから!! 『女の前ではカッコよく』が俺のポリシーなんだよ! お前も男なら快く協力しろよ!」

「アホか。金も払わないままズボン引きずつたまま逃げた時点で、この上なくカッコ悪いわ。あと、フィニッシュ言うな」

「その辺にしなよ、慎兄。皆さん見てるよ?」

美朱のツツコミに我に返った俺が周りを見渡すと、多神教の代表の皆々様の視線が全てこつちに向いていた。

おおう、やってもうた。

声を荒げなくても言い合いはNGですよね。

「……失礼しました」

「まったく、こんなところで風俗云々なんて言いやがつて。聞いているこつちが恥ずかしいぜ」

呆れた風のため息をつくクーの兄貴。

だが、俺は知っている。

初給料をもらったこの男がピンク街に姿を消したことを。

同性のよしみで黙ってやっていたが、これは美朱に報告せねばならんか。

『去勢せよ、ランサー』なんて言われねばよいがねえ。

因みにアザゼルのおつちゃんは、鳶雄兄さんとラヴィニア姉さんからゴキブリを見るような目を向けられ、護衛のはずの親父に頭を殴られていた。

親父よ、拳と一緒に出た言葉が『俺の息子から金を借りるな』というのはどうなのか。

そこは『墮天使の恥を振り撒くな』が正解だと思っただが。

「さて、墮天使総督の聞くに堪えん醜聞も終わったようじゃし、各々方

本題に入るとしよう」

そう言つてオーディン様が手にしたグングニルを振ろうとした瞬間、世界が軋きしんだ。

うん、この感覚は時間停止か。

なんで分かるかつて？

いや、無限の闘争じゃ割とポピュラーな能力だからな。

どこぞのメイド長やD I O様に比べたら『貧弱、貧弱う!!』な効果とヒツキー吸血鬼の姿が無いところを見れば、大体の原因は察しが付く。

バロールがやったなら、この程度じゃすまないだろうしな。

室内を見渡してみれば、効果を受けている人数の方が少ないようだ。

流星は世界最強クラスが集まる会議だけはある。

影響を受けたのは朱乃姉と祐斗兄、アジア先輩にソーナ会長を除く生徒会役員ときて……あ、天使側の護衛もダメみたいだ。

他のメンツはまだしも、朱乃姉が止まったままなのはいただけない。

いっちょよ、この結界を片づけますか。

「神火清明、神水清明、神風清明。神火清明、神水清明、神風清明。神

火清明、神水清明、神風清明」

祝詞を紡いだ後に氣を込めた息吹を左、右、左と吹きかけると、教室内を覆っていた時間停止の効果は跡形も無く消え去った。

「邪氣祓じやくきはらいですか！ お見事です、ご主人様!!」

玉藻の歓声を耳にしながら朱乃姉に目を向けると、何が起こったかわからないという様に、しきりに辺りを見回している。

うむ、問題はなさそうだな。

因みに今のは神道に伝わる邪氣祓の法である。

通常は盛り塩なんかを置く際に部屋や家にある悪い氣を祓うのに使われるのだが、上手く使えば悪意のある結界なんかを解除する事も出来るのだ。

唱える際には、その場にある邪念や悪意が「神の火に焼き尽くされ、

神の水に洗い流され、神の風に吹き払われる」とイメージするのがコツだな。

「見事。やはり其方は優れた術者のようだな」

「今の結界はバロールの気配がしたな。小僧、なにか心当たりは無いか？」

騒めく周囲を他所に、上機嫌でこちらを称賛するアメン様に訝しげに周囲を見渡すダグザ様。

すんません、ダグザ様。

その質問にはちよつと答えられませんわ。

しかし困った。

リアス姉にギヤスパアの居場所を聞こうと思ったのだが、この状況ではそれも叶わない。

ヘタをすれば、ギヤスパアが原因でダーナ神族との停戦が消し飛んじまうからな。

……やむを得ん、アレを使うか。

『原因を片づけてきます』と二柱の神に断った俺は、伸ばした右の人差し指と中指を額に当てて目を閉じる。

精神を研ぎ澄まして探るのは、学校内にあるギヤスパアの気配だ。

ゆっくりと息を吐きながら探索の範囲を広げていくと、旧校舎の部室内に目標を見つける事が出来た。

周りに20程度の人間の気配がある所を見ると、やはりあいつは敵の手に落ちたと考えた方がみたいだな。

それじゃ、ちやつちやつと助ける事にしよう。

ギヤスパアの気配に意識を固定したまま、それを目印に跳ぶイメージで氣を解放すると、一瞬の浮遊感を挟んで見慣れた才力研の部室が目に飛び込んでくる。

うむ、どうやら成功したようだ。

『貴様どこから云々』などと混乱している魔女風の不審者達を男女平等パンチで沈めた俺は、クモの巣状の結界で捕らえられていたギヤスパアと塔城を助け出した。

「女の人相手に容赦なく顔面パンチ……。ヒドいですう」

「さすがは慎。鬼畜外道ですね」

黙らっしやい。

「でも、慎君。どうやってここまで来たの？ 僕には突然現れたように見えたんだけど……」

「……魔力も感じませんでしたから、魔方陣を使った転移でもキャスリングでもないですよね？」

「どうやってって、自前で瞬間移動しただけだぞ」

そう言うのとギヤスパーと塔城の動きがピタリと止まった。

「どうしよう、小猫ちゃん。慎君がまたおかしくなっちゃった」

「……魔力無しで転移とか、また化け物っぷりに磨きが掛かってきましたね。世界最強にもなったしもう何でもありなんじゃないですか、あの人外」

「聞こえてるぞ、チビ共」

さて、好き放題言われているが、この瞬間移動。

出所はもちろん、みんなが大好き『ドラゴンボール』の主人公『孫悟空』だ。

少し前まで海外を含めて長距離出張が多かった俺は、身内に何かあった際にすぐ駆け付けけるための手段を欲していた。

そんな時『狂ランク千人組手』でたまたま悟空と当たったので、渡りに船と試合後にやり方を教わったのだ。

え、試合結果？

むこうはいきなり超サイヤ人3だったんだぞ、あとは聞かなくても分かるだろ。

試合後の『おめえ、もつと修行した方がいいぞ』というコメントは、精神的にとつてもクルものがあった。

すみません、悟空さん。もつと精進します……。

おつと、回想に浸っている場合じゃなかった。

「しかし、お前等随分と簡単に捕まってたな。ゴレムスどうした？ あれを睨けたら、こんな魔女なんかメジヤなかっただろうに」

「ゴツ君は目立つから連れ回すわけにはいかないでしょ？ だから僕の部屋を護ってもらってたんだ」

「あー……そりやそうだわ。なら、塔城と一緒にお前の部屋に籠って
てくれ。それならゴレムスに護ってもらえるだろ」

「……部長達のところ连接到行つては駄目なんですか?」

「今、向こうにはダーナ神族の長がいる。ダーナ神族はギヤスパーの
中に居るバロールとは不倶戴天の敵同士でな、ギヤスパーが宿してる
のがバレたら停戦なんて吹っ飛んじまう」

「……なるほど。なら、仕方ありませんね」

「うう……。もう一人の僕が迷惑をかけてゴメンなさい」

「別にお前がなんかしたわけじゃねえんだから、責任なんて感じる事
はねえだろ。堂々と顔を上げとけ」

なんか妙にへこんでるギヤスパーの頭をワシワシと撫でてやる。

うーむ、どうもギヤスパーを相手にするとミリキヤスと似たような
接し方になるな。

一応、こいつとはタメなんだが……。

「今日は慎君がスーツ姿だから、余計にお兄ちゃんって感じがする
……」

だから、俺とお前はタメだつーの。

その後、魔女たちを経絡けいらくから氣を操作して身体麻痺状態にした後
で、三人でギヤスパーの部屋にまで移動。

中で待機していたゴレムスにギヤスパーを引き渡した。

「さて、俺はそろそろ会議室に戻る。悪いが、塔城もギヤスパーについ
てやってくれ」

「……わかりました」

「ギヤスパー、なんかあったら俺の携帯に連絡しろ。すぐに行くから」
「うん、ありがとう」

部屋のドアが施錠されるのを確認してから瞬間移動で会議室に
戻ってみると、円卓の前で褐色の肌せんじょうに黒の煽情的なドレスを着た女
悪魔黒ずくめの男悪魔が、サーゼクス兄達の前で、自分に酔ったよう
な感じで語りをブチかましていた。

窓の外では禁手化したヴァーリが魔法使い風の人間たちを蹴散ら
してるし、どういう訳かは解らんが来賓の前ではなくリアス姉とソー

十会長達にだけ、あの男女の部下であろう8人の上級悪魔が配置されている。

間違いない、こいつらもギヤスパーに手を出した奴等の仲間だろう。

となれば、サーゼクス兄達や外のヴァーリは自分でなんとかするだろうから、優先的に始末するのはリアス姉達を警戒している連中だな。

連中に気付かれていない事を確認した俺は、気配を殺しながらリアス姉達の方に移動すると即座に氣を練り上げた。

そして、リアス姉達がこちらに気付くと同時に、鋭い呼気と共に床を蹴った。

一瞬で最高速度に達した俺は、影さえも置き去りにして武器を手にした悪魔達の脇を通り抜け、リアス姉達の前で停止する。

「え、慎？ あなたいつの間にな……」

「……北斗有情断迅拳」

リアス姉の眩きを尻目に後ろへ目を向けると、そこには視界には武器を構えたままゆつくりと身体を変形させていく悪魔達と、こちらに駆けてくる美朱の姿。

「その動きは……トキッ！」

その通りだ、美朱君

オリジナルの病人にはまだまだ勝てないが、伊達に何回も爆発させられてるワケではないのだよ。

技の一つくらいはこの通り――

「ギヤアアアア……あわばっ!？」

「いでッ! いででで……いってればっ!？」

「助け、助けてええええ……えろばっ!？」

「にら……にら……にらればあっ!？」

「ねえ……え……えんではあっ!？」

「お、お前……おく? お……おらばっ!？」

……おや?

「ねえ、兄者」

何かね、妹よ。

「今のつて、有情つて言うより無情断迅拳だよ。腑^ふ抜けたか、兄者」

「……ん、間違ったかな？」

「なんだ、ただのアミバか」

さも呆れたかのように呟く美朱の声を聞きながら、俺は頭を掻いた。

うーん、どこが悪かったのだろう。

やっぱり擦れ違いざまに突いたから、秘孔がずれたのかな。

いやはや、さすがは北斗神拳。

技一つとっても難易度がハンパない。

ああ、今の奴等は殺してないぞ。

というか、俺まだ致命の秘孔なんて突けないし。

せいぜい、両手足があり得ない方向にひん曲がっただけだ。

因みにパクった事に関しては反省も後悔もしていない。

拳王様も言っていたではないか、『北斗神拳は一子相伝。教える事は出来ぬ、盗め!!』と。

「ねえ、リアス」

「なにかしら、ソーナ」

「彼はいつもこんな感じなのですか？」

「ええ。着々と非常識な方向に進化してるわよ」

「失礼な。俺は日ごろから常識を弁えて品行方正に生きてるじゃないか」

「どこがよ！ 魔力も無しに瞬間移動はする！ 現れたと思ったら十人近くいた上級悪魔を一瞬で再起不能にする！ ていうか何なの、今の?! 身体が自動的に変な方向へ捻じ曲がるとかホラーじゃないの!! 思わずちびりそうになっただわよ!?!」

「いや、本当なら身体が爆発するんだけどな。俺はまだ未熟だからあんな風にしかならなかつたんだ」

「爆発！ 爆発って言った!? ありえないわ、あなたの常識は絶対おかしいわよおおおっ!?!」

むう、なぜヒステリーを起こす？

俺はただ技を放っただけではないか。

「ソーナ会長、俺はおかしくないですよね?」

「……貴方を犯人です」

眼鏡で蛍光灯の光を反射させながら、こちらを指差すソーナ会長。

なんか、文法おかしくないですか?

「会長! 大丈夫ですか、会長!」

「ダメ! 目がグルグルしてるわ!」

「衛生兵! ていうか、アジアさん! 会長を助けて!」

「は、はいっ!」

「……なにが悪かったのだろう?」

目の前に突然発生した修羅場に思わず唖ってしまう。

「やっぱり北斗神拳が拙かったんじゃない? ほら、初見じゃインパクト凄いいし」

「そういう問題じゃねー! 全部だよ、全部!!」

イツセー先輩の渾身のツツコミに俺と美朱は二人して首を傾げるのだった。

20話

えくと、皆さんこんばんは。

姫島美朱です。

突然ですが、我が兄が人間はおろか神魔の限界すらもぶつちぎっている件。

『いきなり何を言ってるのか』と混乱する人もいるだろうけど、瞬間移動なんてやられたらそれも仕方がないと思うんだ。

話は少し前、三勢力の和平締結した直後にまで遡る。

オーデイン様が話題を変える為に声を上げると同時に、議会場である職員会議室でギャー助の神器『フォレビトウン・パロール・レュー停止世界の邪眼』の結界が発動した。

視界内のモノにしか効果が無いはずの時間停止がギャー助の目が届かないここまで影響している事に『何者かが意図的に暴走させたのでは』と当たりを付ける、自称『神器研究の第一人者』のアザゼルのおっちゃん。

まあ、直後に慎兄の邪氣祓じやきはらいで時間停止は呆気なく解除されたんだけど。

今更だが我が兄よ、その使い方はおかしい。

それって新築の家とか改築する前の家を清めたりする、生活密着型のお呪まじないだから。

神器の結界吹っ飛ばす効能なんて無いからね。

いとも容易く行われたえげつない行為に周囲が騒ざわめく中、またまた妙な氣の流れを感じて慎兄に目を向けてみると、我が兄の姿が『ピシユンツ』という音と共に掻き消えてしまった。

一緒に見ていた玉藻さんとクー兄が啞然とする中、今の怪現象に心当たりがあつた私は戦慄を憶えていた。

あの兄貴、ついに『ドラゴンボール』の瞬間移動まで覚えよつた!? あの額に指を当てる仕草とアニメさながらの擬音からして間違いはないはず。

という事はあれか。慎兄は日本が誇るアニメの主人公『孫悟空』と

闘ったという事なのか？

『無限の闘争』の性質上、いつかは訪れるものと覚悟はしていたが、現実になるとやっぱインパクトが違う。

ついに強きのインフレワールドに足を踏み入れた兄に顔を引き攣らせていると、窓から射しこむ色とりどりの閃光。

外に目を向ければ空には無数の魔法使い風の人間が浮かんでおり、私達がいる校舎に向けて多種多様な魔法攻撃を掛けている。

もつとも、その攻撃の全てが張られた結界に阻まれてまったく届いてはいないんだな、これが。

リーア姉とソーナ会長が手掛けた元々の結界なら耐えられなかったかもしれないけど、今回の会議は各神話のVIPが集う事になっている。

当然ながら警備は強化されており、今ここに張られているのはあの慎兄が有り余る氣を込めて造った凶悪結界である。

製作者曰く『大陸弾道弾の直撃にも耐える』とのことなので、あんなしよぼい魔法では傷一つつかない。

状況の把握の為にアザゼルのおっちゃんに詰め寄るリーア姉とイツセー先輩。

イツセー先輩はともかく、リーア姉はギヤー助がテロの道具に使われているのが気に入らないようで、憤怒の表情で全身から赤い魔力を迸らせていた。

……しかし、リーア姉の魔力ってあんなに少なかったかな。

なんか、この前『無限の闘争』で戦った『ドラゴンクエスト5主人公の娘』こと、タバサちゃんの方が凄かったんだけど。

まあ、あつちは腐っても天空の勇者と双子の兄妹だし、公爵家令嬢とは言え普通の悪魔のリーア姉と比べちゃダメだよな。

でもって、リーア姉と首脳陣との協議の結果、襲撃の主犯を特定するためうごけない首脳陣に代わって、リーア姉達がギヤー助を助けるという事が決定。

しかし、その判断は遅きに逸していた。

この時点で旧校舎に慎兄の気配があったのだ。

キャスリングがどうのと息巻くりーア姉にこの事を知らせると、何か言いたそうに口を開こうとした後、肩を落としてイツセー先輩と共に元の場所に帰っていった。

リーア姉、ウチの兄がすまぬ……本当にすまぬ……。

イツセー先輩共々ただでさえ影が薄いのに、活躍の場を奪ってしまった。

しかし、フリーになったせいかな行動に躊躇が無くなったよね、あの兄貴。

さて、微妙な雰囲気の中で対応に追われる三勢力を見ていると、アザベルのおっちゃんやんがヴァーリ君に外の魔法使いたちを蹴散らしてこいと命令を出した。

もの凄く暇そうにしていたヴァーリ君はこれ幸いと窓から飛び出したのだが、壁に投げ付けられたスーパースポールよろしく結界に跳ね返されて戻ってきた。

目を白黒させる彼に結界の事を教えると、何故か闘志を漲らせながらバランスブレイク禁手化。

「この結界があいつの手による物なら、これを破れば地上最強に挑戦する権利を得られるという事だろうっ!!」

などと口走りながら、結界をブチ抜いて外に出てしまった。

破れた場所から破片を撒き散らし、ゆつくりとその姿を消していく結界と、それを目の当たりにして頭を抱える三勢力首脳陣。

そしてそれを冷やかな目でみる来賓席の神様達。

ぐだぐだだった空気が一瞬で氷河期になったわけだが、世の中と言うのは悪いことが重なるモノである。

なんとも居た堪れない空気の中で誰も声を上げられないでいると、閃光を伴ってしもな円卓の前に魔法陣が浮かび上がった。

「——レヴィアアタンの魔法陣」

心っ底嫌そうな顔で呟くサーゼ兄。

こっちは魔法陣を見分ける知識なんてないのでポケっと見ていると、魔法陣から褐色の肌に胸元が大きく開いた大胆な黒いドレスを着た女性と、黒髪を後頭部で一本に結った黒ずくめの男が現れた

同時にリーア姉達の前にも数名の上級悪魔が転移で姿を現し、各々が武器を構えて威嚇いかくを始める。

「ごきげんよう、現魔王サーゼクス殿」

「此度の会談の為に随分と強力な結界を施していたようだな。ここま
で来るには少々骨が折れたぞ」

女性の方は眼鏡をかけた知的美人って顔に不敵な笑みを浮かべ、男
は臆病者を見るかのように蔑みの目を向ける。

その態度にサーゼ兄とセラ姉の顔がどんどん不機嫌になり、アザゼ
ルのおっちゃんの顔は紙のように白くなった。

ていうか、和平締結前に来れなかったのって、慎兄の結界を突破で
きなかつたからなのね。

それとドンマイだ、おっちゃん。

「先代魔王の血族、カテレア・レヴィアアタンとクルゼレイ・アスモデウ
スカ。これはどういうつもりだ？」

……そういえば、聞いた事がある。

セラ姉のレヴィアアタンって名前、あれって歌舞伎かぶきでいうところの
『何代目●●●』みたいに受け継いだ芸名のようなモノだつて。

なんでも初代の魔王を尊敬して云々って話だけど、私には関係な
いって思ってたからよく覚えてないや。

「旧魔王派の者達の殆どが『禍カオス・フリゲードの団』に協力することを決意しまし
た」

言葉と共にもの凄いドヤ顔を決めるカテレアという女性。

うん、知ってた。

とうるか、前の聖剣事件で旧ベルゼブブとかいう鬼太郎君（仮）が
いたじゃん。

『禍の団』の悪魔って仲間の行動も把握してないの？

「このメンドクサイ状況で何言ってるんだ、あのクソアマ……！ 死ね
……！ 氏ねじゃなくてマジで死ね……!!」

いつもの能天気はどこへやら。

濁り切った目でカテレアを睨みつけながら、ブツブツと呪詛じゆそを呟つぶやく
セラ姉。

うわっ……完全にキャラ崩壊してるよ。

「君達が『禍の団』に所属しているのはこちらでも把握している。だが、ここでそれを公言するということは、現政府への宣戦布告という事で構わないのだな？」

「その通りだ。偽りの魔王とその下で墮落した腑抜け共。その全てを粛清し、我々真なる魔王が悪魔を本来の姿に立ち戻らせるのだ」

……なんか恍惚とした表情で語り始めたんだけど、あの男の人。

「御大層なお題目はけっこうだがな、もう少し現実を見ろってんだ。ウチもお前らも関係なしに三勢力は他の神話に嫌われてんだ。そんな状況で世界中でテロを起こしまくりやがって、このままだと悪魔政府をどうこうする前にお前らが潰されるぞ」

「ふん、有象無象の神話勢力に恐れをなすとは、墮天使総督もヤキが回ったものですわね」

もしもーし。

おばさん、目はちゃんと見えてますか？

貴方の後ろのいる方々、その神話勢力の責任者なんですけど。

皆さん、不機嫌そうにそっち見てるんですけど。

「ねえ、パパ。昔の魔王ってどんなだったの？ 出てくる自称子孫がみんな残念なんだけど」

ふと疑問に思ったので、みんなの目を盗んでパパの元に行ってみる。

「うむ、私の知る限りではみんな真面だったな。少なくとも、己に酔って自身を取り巻く状況が見えないような愚か者ではなかったはずだ」
「ふーん。旧魔王家って没落したって聞くし、ちゃんとした教育受けてないのかもね」

「かもしれないな。まったく、お前達とは大違いだよ」

「はわっ、急に抱っこしないでよお!!」

もの凄く嬉しそうに笑いながら私を抱き上げるパパ。

頬ずりするのはいいんだけど、チクチクするからお髭剃って欲しいかな。

「そこー！ 真面目な話やってんのに、トロケ顔ではのぼのぼしてんじや

ねえよ!!」

「別にいいではないか。ムサイお前に付き合っただけで、可愛い娘との触れ合いが不足してるんだ。ここらで娘分を補給しなければ、私は死んでしまう」

アザゼルのおっちゃんのツツコミをモノとせず私を抱きしめるパパ。

鳶兄やラヴィ姉以外の三勢力の面々が信じられない顔で見てるけど、私と会うときのパパっていつもこうだよ。

たまに『朱乃もこうやって抱っこしたいなあ』と言って泣くし。離れて暮らしても私がパパの事嫌いにならないのって、こうやって会えば全力で愛情を表現してくれるからだもん。

この歳の娘に対するスキンシップとしては『それはどうだろう』と思うときもあるけど、関心を持たれないよりはずっといいよね。

「……墮天使総督だけではなく『雷光』と恐れられたバラキエルすらこの体たらくか。もはや墮天使は恐れるに足らずだな」

「何とでも言うがいい。娘と過ごせるならお前達に見損なわれる程度、バッチ来いだ!!」

クルゼディだったっけ? の蔑^{さげす}みの視線にドヤ顔でビシッとサムズアップするパパエ……。

はっちゃけるのはいいけど、そろそろ降ろしてね。

朱姉が凄い目で見てるから。

パパの所為で張りつめた空気が弛^{しかん}緩したところで氣の揺らぎを感じて目を向けると、消えた時と同じ音を立てて慎兄が現れた。

突然の事で度肝を抜かれる一同をよそに、慎兄は氣を高めると上級悪魔達の間を縫って超スピードでリーア姉の前に移動する。

「……北斗有情断迅拳」

ハイ、またトンデモない台詞キター!!

『キン肉マン』に飽き足らず、『ドラゴンボール』の次は『北斗の拳』とか!

ジャンプか! ジャンプ黄金期攻めなのか!?

正直ブツたまげたけど、私も前世では少年漫画も嗜^{たしな}んだ身。

ネタを振られたのならば、返すのが礼儀であろう。

「その動きは……トキッ！」

うん、本当は速過ぎて動きなんて見えませんでしたけどね。

こちらの返しにドヤ顔で振り向く慎兄。

それに一拍子置いて、上級悪魔達の身体の身体がアニメと全く同じ効果音を上げて変形していく。

あ、本当に『ピーリー』って鳴るんだ、北斗神拳。

さて、本編と効果が同じならあの上級悪魔達は快樂の中、恍惚とした表情と共に爆発するワケだが……いや、そんなゴア表現なんて絶対見たくないけど。

朱姉達へ向かっていた足を止めて上がるであろう血飛沫が上がらない位置まで距離を取ったところ、次々と苦悶の声と例の珍妙な断末魔を上げる被害者達。

……おい、有情は何処に行った。

「今のつて、有情って言うより無情断迅拳だよ。腑抜けたか、兄者」私のツツコミに原先生ばりの劇画調な悪い顔になる慎兄。

「……ん、間違ったかな？」

「なんだ、ただのアミバか」

いや、声まで真似なくていいから。

ていうか、上手いな初代アミバの真似。

慎兄の繰り出した『アミバ流北斗神拳』によって、リーア姉達を牽制けんせいしていた悪魔が二目と見れない姿になったわけだが……ホントにグロいわ。

なんか両手足の関節が十個くらい増えてるし。

ここまで破壊されたら、『フェニックスの涙』でも治らないだろう。

巷ちまたではよく勘違いされているけど、『フェニックスの涙』って万能じゃないのだ。

あれはフェニックスの再生能力の下位互換と言うべき、即効性の外傷治療薬だ。

だからフェニックスのような出鱈目でたらめな再生能力は無く、治癒可能範囲内の傷にしか効かない。

要するに、ミンチとか消滅といったどう考えても元に戻らない傷は治らないということだね。

今回もあれだけ複雑怪奇にひん曲がれば、骨折はもとより神経や筋肉、健に至るまで修復不能なダメージが行っているはず。

これでは自然治癒だと、まず元には戻らない。

それって治癒力を促進する魔法や『フェニックスの涙』では対処できないという事なんだ。

もし動かせるようにしようと思うなら、外科医師による整形手術が必要になる。

もつとも、あれを元に戻すには『ブラックジャック先生』か『ドクターK』レベルの腕がいるだろうけど。

少々可哀想とは思うけど、ウチのお姉たちに手を出そうとしてたんだから自業自得だよな。

あと、リーア姉とソーナ先輩が錯乱してるけど、どうしたのだろう。北斗神拳には驚いたけど、慎兄がトンデモ武術を仕入れてくるのは、いつもの事じゃん。

1年、2年の付き合いじゃないんだから、いい加減に慣れてもらいたいもんだ。

「美朱、こいつ等って旧校舎を襲った奴等の仲間でいいんだよな？」

「うん。っていうか、その辺は確認してから動こうよ」

「細けえ事はいいんだよ」

細かくない、細かくない。

「ご主人様、どちらへ行行ってらっしゃいますか？」

「ああ、塔城とギヤスパアの奴が捕まってたんだ。ちよつと助けに行ってた」

玉藻さんに慎兄が説明を返していると、先程の旧魔王二人組が歩み寄って来た。

「『第三の無限』 姫島慎ですね？」

愛想というには妙に妖艶ようえんな笑みを浮かべるカテレアに、三つの尻尾を膨らませて威嚇する玉藻さん。

「うん、そんなに警戒する必要はないと思うよ。」

むこうもそんな気はないだろうし、なにより慎兄にハニートラップ
通用しないから。

あと、向こうでアザゼルのおっちゃん達が『第三の無限』ってどう
いう事だ!? とか騒いでるんだけど、知らなかったのかな？

あ、慎兄がリーア姉に口止めしてたんだっけ。

「そうだが、あんた等は？」

「私はカテレア・レヴィアタン、そしてこちらがクルゼレイ・アスモデ
ウス。共に初代魔王の血を引く者にして、真なる魔王です」

「先代魔王の血族、ね。それで俺に何の用だ？」

「この誤った世界を変革する為に、貴様の力がほしい。我らに降れ」
「変革ねえ。そんな大言たいげんを口にするって事は、あんた等も『禍の団』の
一員って事か」

「ええ。聖書の神が死に絶え、天使と悪魔、そして堕天使が手を取り合
う歪な世界。それを破壊して、世界をあるべき姿に戻すのです！」

「ふーん。やだ」

「……は？」

そりやあもうスツパリと断った慎兄に、間抜けな声を上げる二人。

「あんた等が槍玉にあげてる内の堕天使と悪魔の中に、俺の親父と姉
貴がいるんだわ。あと、幼馴染みに恩人もな。そっちに手を貸すのっ
てその人達を裏切る事になるんだけど、その辺は考えてるか？」

「しかしっ！ この歪んだ世界は正さねばならないのです！ その為
には必要な犠牲——」

「俺って生まれも育ちも小市民だからさ、世界がどうこうとか興味
ねーの。現魔王に兄貴分と姉貴分がいるから手を貸してるけど、ぶっ
ちやけ家族と知人がしつかり暮らせれば誰が頭でも文句はないし。
あと、あんた等オーフィスを神輿みこしに担いでんだろ。俺に声かけてるけ
ど、あいつはどうすんの？」

「問題ない！ 貴様がこちらに降るのならば、我等もオーフィス討伐
に手を貸そう!!」

「それって、俺も負けたらポイ捨てされるってことじゃん。やっぱな
いわー」

うわー、あの二人、口を開く度にバンバン墓穴掘ってるよ。

まあ、元から協力する気無いのに話聞くふりしてる慎兄も結構酷いんだけどさ。

というか、男の方が話しながらこっさり右手に魔力集めてるんだけど、バレてないと思ってるのかな？

「……っ、どうあつてもこちらに協力する気はないのだな？」

「沈没寸前で船体の先っぽしか浮かんでない船に乗る程、マゾじゃないんで」

「我らの崇高な理想すうこうを理解できないとは、所詮しよせんは下等な人間との混ざり物か。ならば……死ね!!」

言葉と共に至近距離で魔力弾を放つクルゼレイ。

しかし、戦闘に置いて私が感づく事に慎兄が気づかないワケがなく、彼の渾身の力が籠かこっているであろう魔力弾は、

「えい」

無造作に放たれた慎兄のデコピンであえなく消滅した。

「……へ？」

「虎煌破碎掌こおうはさいししょう・デコピンバージョン。Mr. カラテが使ってたのを真似まねしてみたんだが、うまくいったな」

シユツシユツとデコピンを放ちながら満足げに頷く慎兄。

Mr. カラテって、サイラオーグ兄の霸王翔吼拳をパンチで『パコーン』と消していたあれか！

「うむ、実験台ご苦労。先に手を出してきたのはそっちだからな、これは正当防衛ということだ……!!」

魔力弾を予想外すぎる対処法で返され、呆然としている隙にクルゼレイの懐に入る慎兄。

その手にはどこから取り出したのか、木製のバットが握られている。

そして野球なんてやった事なくせにえらく綺麗なフォームでスイングされたバットは、クルゼレイのどてっ腹を捉えて彼を吹き飛ばす。

……って、ちよつと待って。

なんでインパクトの瞬間から『ドカベン』のオープニングゲームが流れてるの!?

なんか、打たれた衝撃で『見せられないよ!!』状態になってるクルゼレイの身体に『ドカベン』のオープニング画像がモザイクみたいに張り付いてるし!

「うくん、ナイバツティン……ッ!!」

星になったクルゼレイだったモノを見送った後、吹っ飛んでった際に空いた穴から外に出てグラウンドを回り始める慎兄。

って、なにやってんの、あれ?

『なにをしているんだ、慎?』

『見てわかんねーか? ホームラン打ったからベース廻ってんだよ』

『ホームランというのは、さつき飛んで行ったミンチよりヒドい肉塊にくかひの事か?』

『ああ。クル……なんとかっていう旧魔王の家の奴』

『なるほど。これが俗ぞくに言う『野球やろうぜ! お前、ボールな!!』という奴か』

『まあ、そんなもんだ』

ヴァーリ君との聞いているだけで頭が悪くなりそうな会話を終えて、会議室に戻ってくる我が兄。

ツツコミどころは山ほどあるが、とりあえず一番疑問に思っている事をぶつけてみよう。

「ねえ、慎兄。今のってどうせ『無限の闘争』で覚えた技なんでしょ。なんて技なのさ?」

「うん? 『やーまだたーろうー』って技だぞ」

「えっ!? なにそれ! ホントにそんな名前なの!？」

「ああ。覚えた時の対戦相手も文字だったし」

「文字い!？」

「文字っていうかロゴだな。ほら『ドカベン』の表題に使われてるヤツ」

「いやいやいや……!? ログって、そんなのどうやって闘うのさ?」

「ボールが飛んできたりキャッチャーミットが出てきて投げられた

り、他には地面から『山田太郎』が生えてきたりもしたな」

「カオスすぎる!?!」

なんじゃそりゃ!?! あまりにも意味不明すぎて想像もできないよっ!!

「まあ、あれだな。『無限の闘争』じゃよくある事だ」

「こんな滅茶苦茶な事がよくあつてたまるかあっ!?!」

リーア姉、ソーナ会長、ナマ言つてゴメンナサイ。

私もまだまだ慎兄にはついて行けないみたいです。

「おのれ……おのれっ! よくもクルゼレイをおおおっ!?!」

同僚のあんまりな最後に呆然としていたカテレアが、憤怒の表情で魔力を展開する。

わかる、その理不尽に怒る気持ちはよく分かる。

しかし、それをさせる訳にはいかない。

右手に宿した魔力を慎兄に放つよりも速く懐に潜り込んだ私は、振り下ろそうとしていた腕を掴んで固定し、右拳を脇に添えて体重移動と共に氣を解き放つ。

重い打撃音と共に吹き飛び、床を二転三転して慎兄の開けた穴から外に落ちていくカテレア。

それを追いかけて宙に身を躍らせた私は、カテレアが地面に叩き付けられると同時にグラウンドに降り立った。

うん、なんか今のつて、DOAの吹っ飛ばしでステージ変更した時の演出みたいだったなあ。

受け身も取れずに落ちて来たカテレアも含めて。

「おのれ小娘……ッ! 混ざり物の分際で私の邪魔をするか!?!」

うつ伏せから顔を上げてこちらを睨みつけるカテレアに、私はあえて不敵な笑みを浮かべて見せる。

「とーぜん。あんな理不尽の権化みたいななのでも、私のお兄ちゃんだからねえ」

「なんだ。さつき慎が出てきたと思つたら、こんどはお前か、美朱」

風を感じて目を向けると、純白の鎧姿のヴァーリ君が横に降りて来た。

「おや、ヴァーリ君。襲撃者の掃討はすんだの？」

「とつくに終わっている。まったく歯ごたえの無い連中だった」

不機嫌丸出しの声音で肩を竦めるヴァーリ君。どうやら不完全燃焼だったようだ。

「白龍皇！ 我々と同じ高貴な血を持ちながら、そのような下賤げせんの者と馴れ合うのですか!？」

打たれた脇腹を庇かばいながら立ち上がったカテレアの言葉を、ヴァーリ君は鼻で笑う。

「高貴な血だと？ 俺はあのクソ共から押し付けられたモノを誇りに思った事など一度も無い。俺が誇るのは母から貰った人間の血と、己の手で鍛え上げた力だけだ」

「魔王筆頭であるルシファアの血を持つ者が、このような愚か者だとは……!!? 貴様に真なる魔王たる資格は無いツ!!」

「馬鹿が。そんなモノは熨斗を付けてくれてやる。俺が目指すのは魔王程度のちっぽけなモノではない、『無限』を超えた『白龍神皇』なのだから!!」

憎しみに満ち満ちたカテレアの視線を受けながら、高々に宣言するヴァーリ君。

きつと兜の下の顔にはこの上ないほどのドヤ顔が浮かんでいるのだろう。

この子も育ての親に似たのか、けっこうな厨二病だからなあ。

さて、喧嘩を売った身としてはこのままカヤの外にいる訳にはいかない。

そろそろ、事の主導権を取り戻さないとね。

「はい、そこまで。ヴァーリ君、悪いけどこれは私が売った喧嘩なの。横取りは駄目だよ」

前に出てヴァーリ君とカテレアに割り込むと、ヴァーリ君は何故か感心したように声を上げる。

「珍しいな、美朱。仕事絡みではないのに、お前が荒事に積極的なのは」

「身内が地上最強になっちゃうと色々大変なんだよ、下心丸出しで私

達に近づいてくる奴がいたりしてさ。だから、この会議で各神話の皆さんに見せつけようと思ったの」

「何をだ？」

『私に当たると痛えぞ！』って事」

私は言葉と共に、腰に下げていた御神刀をヴァーリ君に投げる。

「おい」

「ちよっと預かってて。あの程度の相手に表道具おもてどうぐはいらないから」

不意を突いたわりに危なげなくキャッチするヴァーリ君を尻目に、ゆつくりと息吹を発しながら構えを取る。

相手を侮あなとっているつもりはない。

慎兄ほど無茶苦茶じゃないけど、私も冥界から帰ってずっと『無限の闘争』で修練を積んだのだ。

不意を突いたとはいえ『雷打らいだ』も躲せない程度の相手だ。

無手で倒せなければ、ここの連中に脅威を印象付けるのは難しいだろう。

「下賤者がっ！ この魔王レヴィアタンを愚弄するか!!」

憤怒を通り越して般若はんにやの形相を浮かべたカテレアは、全身に魔力を漲みなぎらせながら飛び掛かろうとする。

しかし、それはカテレアの背後に現れた女によって止められた。

次いで先ほどと同じく旧レヴィアタンの魔法陣が浮かび上がり、そこから6人の上級悪魔の男性が現れる。

「気をお鎮めください、姫様。敵の挑発に乗るなど、貴女らしくありませんよ」

「イリーナ……」

「鴉との混じり物の小娘など、姫様が手を下すまでもありません。貴女の眷属たる我等にお任せを」

カテレアの前に出ながら両手に着けた黒革の手袋を引き絞る執事姿の女。

拳闘、それもかなりの腕前だ。

「眷属ねえ、その割には随分数が少ないじゃん。後の8人はどうしたの？」

「白々しい事をつ!? 貴様の兄が二目と見られぬ姿にしたのではないか!!」

ああ、『アミバ流北斗神拳』の犠牲者だったのか。

「ふーん。で、あんた達だけでいいの? こっちは全員でがかって来ても構わないんだけど」

「ほざけ。貴様のような小娘は我々だけで十分だ」

「———そうはいきませんわ」

言葉と共に、私とイリーナと呼ばれた女王を隔^{へだ}てるように雷が降り注ぐ。

見上げるとそこには黒の翼を羽ばたかせる巫女装束を纏った朱姉と、鎧を着込み戦闘モードのパパの姿が。

『雷光』のバラキエル!! それにグレモリーの小娘の眷属か!」

「私の娘に手を出すとは……んんん、許るさーんツ!!」

全身を帯電させながら荒ぶるパパ。

うん、ちよつと落ち着こうか。

なんかセリフが『餓狼伝説』にあった、ギースの誤植みたいになってるから。

「ええ。私はリアス・グレモリーの女王、姫島朱乃。ですが、この場においてはその娘と『第三の無限』の姉として起たせてもらいます」

怒りのパパを尻目に、イリーナを見据えながら私の傍^{そば}に降り立つ朱乃姉。

相変わらずの塩対応。

朱姉、もう少しパパに優しくなろうよ。

「美朱。眷属は私が抑^{おさ}えるから、貴女はカテレアをお願い」

「いいの? テロリストっていつても冥界には旧魔王の支持者が多いはずだよ。手を出したらリーア姉や眷属のみんなの立場が悪くなるんじゃない……」

心配になったので言葉を掛けると、朱姉に笑顔で頭を撫^なでられた。「いいのよ、そこはリアスも覚悟の上だから。それに———」

こちらから視線を外してイリーナを見すえる朱姉。

その視線はいつものなんちゃってSではなく、ママが亡くなって日

本や冥界を放浪していた時のような、刃物の如き鋭さを宿している。「貴女の言う通り、慎あしでまとの足手纏まといにならない為に力を示さないといけないでしょう」

言葉と共に練り上げた魔力を纏まとう朱姉。

「ほう……」

その姿に私は思わず息を飲み、ヴァーリ君は感嘆かんだんの声を上げる。

纏った魔力が以前とは比較にならない程に増大しているのもそうだが、注目すべきはその制御の高さだ。

ひと月前、『無限の闘争』の中で見た時は今の十分の一の量でも雷撃として周囲に漏れていたのに、今は氣の様に体内を巡るだけでまったく漏れ出していない。

「どうやら相当な修練を積んだようだな。以前見た時とはまるで別人だ」

何故か嬉しそうな声で何度も頷くヴァーリ君。

もしかして朱姉と闘おうなんて考えてないよね？

もしそうなら、禁じ手の『恥骨割ちこつり』かましちやうからね。

「ならば、朱乃は女王を叩くがいい。私は他の有象無象の相手をしよう」

私達の前に降り立ち、仁王立ちで腕を組むパパ。

それを朱姉は忌まわしそうに睨み付ける。

「貴方の言葉なんか聞きたくないけど、今回は特別よ。私達の足を引っ張らないでね」

「今はそれでいい。お前も油断しないようにな」

「気を付けてね、二人とも。危なくなったら慎兄が助けに来ると思うけど、それでも危ないのは変わらないから」

「心配いらん。パパの強さを信じなさい」

「大丈夫よ、私だってこのひと月遊んでいた訳じゃないから。それに、これ以上あの子の奇行を晒すわけにはいかないでしょう？」

「き、奇行って……」

「まったく、何処の世界に闘っている相手をバットでホームランする人がいるのよ。しかもご丁寧にダイヤモンド一周までして。あれを

見た所為で、リアスとソーナ会長が寝込んじやったのよ」
「うわあ……」

プリプリと怒る朱姉の言葉に私は顔を引き攣らせる。
そっかあ、リーア姉達寝込んじやったのかあ……。

きつと『北斗』から『ドカベン』のコンボがキツかったんだろいなあ。
うん、まったく擁護できない。

「この後にあの子の処遇しよくうを決める会議があるんだから、これ以上戦わ
せては駄目。あっちは私達で片づけるわよ」

「はいはい」

緊張をほぐす為に軽い感じで応えると同時にカテレア側も動き出
す。

野郎衆6人を前面に出してカテレアが指揮、女王は彼女の護衛とい
う布陣のようだ。

「バラキエルさえ倒れば、あとは小娘二人だけ。イリーナ以外の
面々は協力してバラキエルを叩きなさい！」

「……応ッ!!」

カテレアの命令で武器を手にこちらに突進する男達。

迎え撃つウチのパパは眼前で腕を十字に組む独特の構えを取る。

……あれ？

パパってこんなどっしりとした戦い方だったっけ？

前に見た時は相手が近寄ってくる前に落雷で迎撃していたような
気が……。

「娘たちの戦いがあるのでな、貴様等ごときに時間は掛けてられん！
我が奥義で一気に葬ってくれる!!」

向かってくる男達に、妙なオーバーアクションで指を突き付けるパ
パ。

なんか背中に『ドギヤーンッ!!』とか擬音が見えたような気がした
が、きつと気のせいだろう。

「食らってくれたばれい！ バラキエル・ブレイク・ダークサンダーッ
!!」

気合一閃、奇妙なポーズと共に全身から男達に向けて雷撃を放つパ

パ。

「ちよつ、バオーかよッ!?」

思わずツツコミを入れた私は、パパの姿を見て咄嗟に口を押えた。チラツと見えた限りでは墮天使ナンバー3の実力は伊達ではなく、迅る雷は男達を次々と撃破していた。

それはいい。

問題は予想外のところにあつた。

ヤバイ……ッ!?

耐えろ……耐えろ、私ッ!!

気を抜けば漏れそうになる笑いの衝動と、ねじ切れそうになる腹筋を必死になつて堪える。

朱姉が奇妙な物を見るような目を向けてくるが、かまっている余裕はない。

我慢だ、パパは真剣に助けに来てくれたんだ。

ここで笑つたら失礼にもほどがあるだろ……ッ!?

自然と『くの字』に折れる身体を支えながら、必死に自己暗示をかける。

ああ、わかっている……わかっているとも!

こんな事をしている場合じゃないのは百も承知だ。

しかし、あの絵面は強烈すぎた。

自分の父親がノリノリでジョジョ立ちしながら、全身を光らせて雷撃を放つてるんだぞ。

あんなん見たら誰でも笑うわ!

雷撃が炸裂する轟音に紛れて、校舎の方から笑い声が聞こえる。視線を向けると、腹筋崩壊した慎兄が腹を抱えて爆笑していた。

くっそー!?! あのヤロー、楽しそうに笑いやがって!!

こっちは地獄の苦しみを味わってるっていうのに……!?!

あの薄情な愚兄に呪いあれ……ッ!!

兄への怒りでなんとか笑いを噛み殺した私は、気を取り直して忍者の体術によって一度の跳躍で女王の頭上を越えた。

「チイツ!?! しまった……ッ!!」

抜かれた事に舌打ちをしながらこちらを迎撃しようとするイリーナ。

しかし――
「迂闊ですわよ」

今の朱姉がその隙を見逃すほど甘くはない。

雷撃を放つ……のではなく、目を見張る程に鋭い踏み込みでイリーナの懐に潜り込むと、右腕を捕って己を軸にしての振り回し、遠心力も加味した勢いのまま地面に投げ落とした。

あれって合気道……違う、柔術だ。

「ぐはっ!？」

受け身を取る事も出来ずに仰向けあおむに地面へ叩き付けられ、肺の空気を吐き出すイリーナ。

しかし、追撃に放たれた首への手刀は辛うじて回避し、捕られた腕を振り払って間合いを取ることに成功。

朱姉もまた足を前後肩幅に開き、手刀にした両手を胸の前に置く空手の『前羽の構え』に似た構えを取る。

『魔導士』ウイザードスタイルと思わせておいて、その実は接近戦主体の『格闘士』グラップラースタイルとは……やってくれるなッ!」

「あら、私は『魔導士』スタイルで間違っていますわよ。こんな風に」
今までのような大振りではなく、ジャブを撃つような感じで雷撃を放つ朱姉。

しかし、敵も然る者。

顔面に向けて迅はじるそれをダッキングで躲かわすと、一気に間合いを詰めてラッシュをかける。

顔面、腹部と角度を変えて放たれる拳の連打。

そのどれもが一流の鋭さにも拘かかわらず、巧みな足捌さばきによつて躲さ
れ、あるいは力に逆らわない柔の防御でいなされて朱姉を捉とらえる事は
できない。

これには本当に驚いた。

朱姉はいつの間にあんな接近戦のテクニックを身に着けたのか。

……ととつ。

むこうに見入ってる場合じゃない、こっちはこっちで集中しないと。

「私を前にして他に気を取られるとは、とことん馬鹿にしてくれますね……!!」

「いやあ、ゴメンね。ウチのお姉ちゃんが予想以上のパワーアップをしてきて、つい」

「舐めるな、ガキがあっ!!」

鬼女さながらの顔芸でこちらに魔力弾を放つカテレア。

うんうん、安い挑発だったのにガッツリ乗ってくれちゃって。

某木星帰りの男も言ってたじゃないか。

『生の感情丸出しで戦うなど、これでは人に品性を求めるなど絶望的だ』と。

怒りによつて照準が定まっていない魔力弾の下を掻い潜った私は、低い体勢からの掌底アツパーでカテレアの顎をカチ上げた。

脳を下から揺さぶられて棒立ちになったカテレアに、背後を向けた状態からの振り向きざまの手刀二発に再び掬い上げの掌底。

そして足を蹴り払って尻もちをついたところで錐もみ回転を加えたドロップキックを顔面に叩き込む。

地面を転がりながら大きく吹き飛び、樹に背中を預けて座り込む形で止まるカテレア。

『羅刃昇破』らじんしょうはから水面蹴りを得て『幻夢槍』げんむそうでしめと。
うん、結構つかえるじゃん『霧幻天神流忍術覇神門』むげんてんしんりゅうにんじゆつはじんもん

あのワガママボディを見せつけられながらも、がんばってあやねちゃんを倒した甲斐があるってものだ。

チラリと朱姉に視線を向けると、先程よりスピードが落ちたイリーナの拳を捕ると同時に、空中に放り投げているところだった。

縦回転しながら宙を舞い、顔面から地面に突っ込むイリーナに思わずしかめっ面になってしまう。

あれって絶対、前歯か鼻が逝ってると思う。

しかし、朱姉の動きは見事なものだ。

柔術は『無限の闘争』で習得したんだろうけど、あの打撃に関する

防御勘はどうやって身に着けたんだろう。

今のやり取りで気づいたけど、捌きや相手の身体を捕った際に雷光を流し込む余裕まである。

ああいった勘は経験によって培つちかっていくもので、短期間でモノになんてできないはずだけど。

思考に陥おちいろうとした私は、殺気と共に高まる魔力を感じて顔を反らせた。

次の瞬間、鼻先を紫色の魔力弾が掠かすめていく。

放たれた方を見れば、鼻梁びりょうが曲がり顔の下を血で濡らしたカテレアが、樹に座り込んだまま血走った目でこちらを睨にらんでいる。

さすがは腐つても魔王の血族、あの程度ではやられないか。

「ああああああつ!! 死ね、死ね、死ね、死ねえツ!!」

憎悪に塗れた絶叫と共に狂ったように魔力弾を撃ちまくるカテレア。

悪魔の貴族連中が接近戦を好まないのは知ってるけど、こうまで射撃特化だとは。

真の魔王を自称するなら接近戦も一流なところをみせてほしいもんだ、まったく。

とは言え、今や放たれた魔力弾は視界を埋め尽くすほどの弾幕を成なしている。

流星にこれを馬鹿正直に掻い潜るのは骨だ。

だったら、忍者らしくいこうじゃないか。

呼吸を整え氣を練り上げながら駆けだした私は、剣指で九字を切りながら弾幕の渦中に飛び込んだ。

迫りくる魔力弾の壁の前に、ミニ美朱を生み出す術式をアレンジして発動。

生み出すのはミニサイズではなく、私と寸分違わない分身一つ。

思考AIの代わりに火遁術式かとんを仕込んだそれを盾にして飛び退くと、無数の弾幕に貫かれた分身は周囲の魔力弾を巻き込んで盛大に爆炎を上げる。

巻き起こる紅蓮の炎の中を駆け抜けた私は、此方こちらの姿に驚愕の表情

を浮かべるカテレアの腕を捕り右掌を胸元に当てる。

先ほどの『雷打』とよく似た体勢だが、今から放つのはそれほど優しくはない。

「はあぁっ!!」

振りではなく体重移動を威力に変える寸打の要領で掌を撃ちこんだ私は、そのまま練り上げた氣と雷光をカテレアの体内に叩き込む。

寸打で『くの字』に折れたカテレアの身体は勁と電撃が走る度に大きく跳ね上がり、背後の樹はカテレアの身体を突き抜けた衝撃によって碎け散った。

氣を放ち終えて身体を放すと、血塊を吐き出したカテレアは前のめに崩れ落ちる。

これぞ秘技『鎧通し』

戦場で甲冑を付けた相手を素手で葬る為に生み出された必殺の奥義だ。

「カテレア様ッ!?!」

一歩間合いを取って残心を留めていると、悲痛な声が響いた。

視線を向けると、そこには朱姉に背中を向けてカテレアに駆けよろうとするイリーナの姿。

しかし、その行動は迂闊に過ぎる。

「あらあら、私に後ろを見せてどうしようというのです?」

にこやかな口調とは裏腹に一瞬で奥襟おくえりと右手を捕らえる朱姉。

そして次の瞬間――

「エレクトリックッ!」

両手から流し込まれた高圧電流にイリーナは声も無く悶絶し、余剰となった雷撃はその身体を突き抜けて天を焦がす。

しかし、朱姉の攻撃はまだ終わらない。

全身から黒い煙を脱力するイリーナを自分を軸にブンブンと振り回して上空に放り投げると、全身に雷光を宿しながら地を蹴り、空中で縦回転するイリーナの顔面を両膝で捕らえて頭から全体重と共に地面に叩き付けた。

地響きと共に何かが碎ける鈍い音が響き、頭部へのダメージと雷撃

のダブルパンチを食らったイリーナの身体は、一度痙攣けいれんするとその動きを止めた。

……えーと、なにあの連続技。

人の事言えた義理じゃないけどエグ過ぎやしませんかね。

「ふう……。なんとかなったけど、『極楽鳥』は使うと足が痛いわね」

小さく愚痴りながら、緋袴ひばかまの上から膝をさする朱姉。

技は憶えても武術用に身体を造っているわけじゃなさそうだから、痛めるのも仕方ないよね。

ともかく、これでテロリストの掃討は終了。

少々地味だったかもしれないけど私達の力も見せられたし、誰も大きな怪我をしなかったから万々歳かな。

こちらに向かつて歩いてくるパパと朱姉の姿にホッと息をついたこの瞬間、私の左腕が何かに絡め捕られた。

凶悪な力で締め付けられる痛みに顔を顰しかめながら目をやると、そこには幽鬼のような表情のカテレアが触手に変化した右腕を私に巻きつけている。

「——ただでは死なない。小娘、お前も一緒に来てもらうぞ」

言葉と同時にカテレアの身体に浮かび上がる術式の紋様。

あいつのいう通りなら、おそらくあれは自爆用の術式だろう。

触手を振りほどこうとしてみるが、骨が軋む程に締め付ける拘束は片腕では外れそうにない。

舌打ちをしながら、触手へ雷撃を流し込もうとすると、

「無駄だ。今、私とお前は絡みついた手の一部が同化し繋がっている。この状態で私が死ねば、呪詛によつて貴様の命も尽きる事になるぞ」

言葉と共に死相が浮かんだ顔を醜悪に歪めるカテレア。

「美朱ー」

「待っている、今助ける!!」

「来ないでー」

こちらに駆けよろうとする朱姉とパパを制止した私は、不敵な笑みを顔に張り付けてカテレアを睨み返す。

「ふん、いいのか？ 家族の手を借りなくて。もしかしたら助かるか

もしれんぞ?」

「そうだったらパパ達が来た瞬間に、術式を暴走させて自爆するつもりのかせに。そんな手に乗るわけないじゃん」

「可愛げのないガキだ。ならば、このまま私と共に死ぬがいい」

「生憎だけどそれもパス。あの世にはあんただけで逝きなよ」

言葉と共に私は大きく息を吸う。

息吹を放って呼び覚ますのは、経絡よりももっと深いモノ。

『無限の闘争』で戦った羅将神ろしょうじんミヅキに殺されかけた時に感じた、私の血の中に眠る力。

すなわち、姫島が代々受け継いできた南方を守護せし四神『朱雀』すざくの炎!

「ぎゃああああああ……ッ!?!」

目を見開くと同時に布を裂くようなカテレアの悲鳴が響く。

見れば、私と繋がっていた奴の右腕は肘から下が炭化して消滅し、代わりに私の右腕には煌々と燃え上がる紅蓮の炎が宿っている。

「ぎいい……ッ!?! 同化していたはずの細胞を私のモノだけ焼き払うとは……なんだ、なんなのだ! その炎は?」

「これは四神『朱雀』の聖炎。この炎の前では邪悪の一切が焼滅しょうめつし無に還る」

「朱雀だとツ!?! 馬鹿な、そんな強力な神獣の力をただの混ざり物に制御できるはずが……ッ!?!」

「死に逝くあんたに語る必要はない。消えなよ『星火燎原』!!」

「……ッツ!?!」

大きく右手を振り抜くと大地を舐めるように炎が迅り、紅蓮の波に飲み込まれたカテレアの身体は一瞬で消滅した。

カテレアと共に炎が消えると、襲ってくる脱力感によって私はその場にへたり込んでしまう。

荒くなつた息を整えながら額を拭うと、手にべったりと汗が付いている。

この一気に押し寄せる疲労感は何と説明すればのいいだろう。

例えるなら、校内マラソンのスタートからゴールまでの疲労を一瞬

で味わうと言えばいいか。

やっぱり『朱雀』の力は制御が難しい。

通常の必殺技で5回、超必殺技だと1回撃ったらガス欠だ。

こんな有様では、怖くてとても実戦では使えない。

使いこなせるようになるのはまだまだ先かな、これは。

「美朱、大丈夫か!？」

「怪我は無い?」

駆けよって来たパパと朱姉に、フラフラ右手を振って無事をアピールする。

「身体はなんともないけど、力を使いすぎて動けない。パパ、会議室まで運んでもらっていいかな?」

「お安い御用だ。さ、掴まりなさい」

片手でヒョイと抱き上げられた私は、落ちないようにパパの首に手を回す。

パパ、そんなに顔がユルンでると朱姉に呆れられちゃうよ?」

「美朱、さっきの炎なんだけど、本当に『朱雀』の物なの?」

「うん。『無限の闘争』での修業中に使えるようになったんだ。燃費がもの凄く悪いから、すぐにガス欠になっちゃうけど」

「身体への負担はどうなのだ。悪影響は無いのか?」

「体力的にへろへろになる他は特に何も。それより朱姉はどこでの柔術覚えたのさ? 私はそっちの方がびっくりしたよ」

「貴女と同じ『無限の闘争』でね、かなえにい鼎二尉っていう女性自衛官の方に教えてもらったのよ」

鼎二尉……? 知らない名前だな。

慎兄に聞けば詳細がわかるかも。

「じゃあ、あの防御勘は? あれって相当上級……ていうか、私とトンくらいに見えたけど」

「あれはね、別に勘や経験で躲している訳じゃないのよ」

「え? じゃあどうやって」

「それは体の周りに魔力で微弱な電波の結界を張っていて、その変化で相手の攻撃を感じ取っていたのよ。レーダーみたいだね」

笑顔で説明する朱姉の顔を見ながら、私は呆然となつてしまった。急、それつてもしかして『テラフォーマーズ』のアドルフさんの能力と同じ原理じゃね？

「たまたま見たテレビの番組で電気ウナギの事が特集していてね。その感覚器の原理をマネられるじゃないかなって、やってみたら上手くいったのよ」

「やっぱり電気ウナギか！」

テレビで見ただけで再現するとか、地味に朱姉の才能もチートがかつてるじゃん。

もしかして、姉弟で一番弱いのが私だったりするのかな……。

内心へコミながらもパパに抱かれて入った会議室は、その様相をがらりと変えていた。

中央に会った円卓は撤去され、代わりに来賓用の机と椅子が普通の教室の様に順序良く置かれている。

そして、それに相對する教卓の位置には慎兄の席が用意されていた。

これが天照様が言っていたサミットの会場なのだろう。

しかし慎兄と玉藻さんの姿が見えないのだが、何処にいったのだろうか。

「ふむ、我々の席はどこにあるのかな？」

パパの言葉に視線を巡らしてみると、リア姉達の席があつた三勢力の席は教室の外れに用意されていた。

はい、安定のディスプレイようですね。

「もし、少し良いか？」

親子三人ため息をつきながら三勢力の席に行こうとすると、横から声を掛けられた。

見ればそこには中華風の豪華な衣装に身を包んだ男性が立っている。

たしかこの方は道教の最高神である天帝様だったっけ。

「このような姿で申し訳ありません。パパ、降ろして」

「よい。声を掛けたのは朕ちんの方だ。それに身体が本調子では無いのだ

ろう？ 気にせずには楽にするがよい」

人を安心させる笑顔で天帝様はそうおっしゃると、私の方に手を向けて頭から足までなぞる様に動かした。

「ふむ。やはり朱雀の力を感ずるな。盟約を結んだ血族とはいえ術式も無しに彼奴が力を貸すとは、よほど其方そのほうの事を好いているようだ」私に向けていた手を降ろし、納得したように頷く天帝様。

そう言えば、朱雀を始めとした四神、麒麟きりんや応龍なんかの瑞獸ずいじゆうって天帝様の僕しもなんだっけ。

「娘よ。人外の血を持つとはいえ、人の身で朱雀の力を振るうのは難儀なんぎであろう。しかし、奴を忌避きひしないでほしい。あれが其方に貸し与えている浄炎は、必ずや助けとなるであろうからな」

「ありがとうございます」

「うむ。もうすぐ会議も始まる、其方らも席につくがよい」

そう言い残して天帝様は立ち去って行った。

何と言うか主神の皆様って普通にいい方が多いよね。

悪評がすんごいゼウス様とかには会った事が無いから、そう思うのかもしれないけどさ。

各々に散っていた主神の皆さまが席につき始めたので、私達も用意された席に腰かける。

といっても、私は未だに動くことが出来ないのでパパの膝の上に座らされているのだが。

その際、朱姉とどっちの膝の上に乗せるかでひと悶着あったのだが、それは割愛しておく。

あと、クー兄は普通に私の後ろに椅子を持ってきて座っている。

「そう言えば、クー兄ってなんでさっきの鬪いに参加しなかったの？」

「ありやあ、お前等の家族の戦だろ。そこに首を突っ込む程、俺は無粋じゃねえよ」

ふむ、どうやら気を使ってくれたらしい。

「ありがと。駒王神社の上司として、この事を査定に加味するように慎兄に言っというてあげるね」

「頼むわ。そろそろ懐が心許ないからな、ここらで賞与なんてくれる

と助かる」

「残念ですが、賞与は勤続半年以上ではないと発生しません」

「……世知辛え」

シヤラツプ、賞与が出る事が約束されているだけでも破格の待遇と
思いなさい。

パパがチラチラとクー兄に疑わしげな視線を送る中、他愛もない会
話を続けていると、職員室の扉が開いて慎兄と玉藻さんが入ってき
た。

ようやく会議が始まるようだ。

今更だけど、無事で終わりますように……。

現時点におけるキャラクタープロフィール

予備知識 【無限の闘争内ランク目安】

『F』《ネタキヤラ》

カナディアンマン（キン肉マン）

ン）しんのゆうしや（シャドウゲイト）他

『E』《紙装甲・HP1》

ウルトラマグナス（コンボイの

謎）スペランカー先生（スペランカー）他

『D』《格闘ゲーム下位〜中位》

ダン（ストリートファイター）

矢吹慎吾（ザ・キングオブファイターズ）他

『C』《格闘ゲーム中位》

ブランカ（ストリートファイ

ター）二階堂紅丸（ザ・キングオブファイターズ）他

『B』《格闘ゲーム中位〜上位》

ガイル（ストリートファイ

ター）ラルフ・ジヨーンズ（ザ・キングオブファイターズ）他

『A』《主人公・ライバルキヤラ》リュウ（ストリートファイター）

草薙京（ザ・キングオブファイターズ）他

『S』《ボスキヤラ》

ギースⅡハワード（餓狼伝説）

ベガ（ストリートファイター）他

『狂』《裏ボス枠・凶悪キヤラ》

孫悟空（ドラゴンボール）バ

ルバトス・ゲイティア（テイルズ）他

『鬼』《論外キヤラ》

オメガ（ファイナルファンタ

ジー）ゴジラ（ゴジラ）他

『神』《もう格ゲーじゃねえ》

ラ・グース（虚無戦記）ブロ

リー（ドラゴンボール）他

姫島慎

格闘スタイル

： 空手＋中国武術＋古武術

出身地

： 日本

職業

： 学生＋神職

誕生日

： 10月16日

身長

： 176cm

体重

： 75kg

血液型	:	B型
好きな物	:	格闘ゲーム
趣味	:	釣り、修行、日曜大工
大切なもの	:	母の形見のお守り
家族	:	姉、妹、父（別居中）
好きな食べ物	:	太刀魚
嫌いな食べ物	:	菓子類（甘すぎなければ食べられる）
嫌いなもの	:	努力をしない奴
特技	:	料理
得意スポーツ	:	短距離走
来歴		

本作品の主人公にして、世界に3つしかない『無限』の力の持ち主。

特殊領域『無限の闘争』を所持し、日夜異なる次元の兵達と切磋琢磨している。

とは言え一から十まで修行漬けという訳ではなく、強さを求めるのはあくまで趣味と実益の為。

本当の目的は家族の平穏であるのだが、多くの人は信じてくれない。

日本神話から放逐されたが神職は続けており、駒王町をテリトリーとしている。

主な財源であった日本神話からの特務が無くなったために、新たな収入源として過去に営んでいた万屋よろずやを再開。

友人である望月晴矢もちずきはれるやからは『脱サラ』と揶揄やゆされた。

三兄弟で唯一神器を所持しており、彼が強大な力を手に入れたのは『無限の闘争』と『神器』の効果が大きい。

実は姫島三姉弟の中では最も異能の才に乏しく、元々の身体能力も劣っていた。

これは雷撃や氣弾系といった、遠距離攻撃と絶望的に相性が悪い事からもその片鱗へんりんが見られる。

とある平行世界では『無限の闘争』と前世の記憶を持たず、姉妹よ

り劣る身体能力から『武』の道に進まなかった為に、医学を志すヒーローで中性的な男子となっている。

性格

基本的に義理堅く、受けた恩には極力報いようとする。

この律義さが災いして、三勢力と多神勢力の間で板挟みになっていたが、オーフィスを打倒した事でフリーの地位を手に入れた為、軋轢あつれきは解消した。

身の回りの者、特に家族を大事にしており、手を出す者には一切の容赦も無く苛烈な反撃を行う。

また、問題や不満等々のストレスを一人で内にため込むタイプであり、人の相談せずに一人で解決しようとする悪癖もある。

そしてそうやって溜めたストレスが爆発すると、人が変わったように粗野な性格になる。

この状態では自身の力を容赦なく振るう為、本気でシヤレにならないと判断した駒王番所では『慎をキレさせてはならない』という不文律が出来ている。

能力

常識外れに強靱な身体と桁外れの筋力、比類なき量の氣を持つ。

素手の武術と氣功術に関して天賦の才があり、対戦・観戦に問わず優れた観察眼で筋肉の動きと氣の流れを見抜く為、相手の行動予測や見取り稽古よる技の解析に絶大な効果をもたらす。

その才は生命力である氣を根源とする日本の呪いや術にも適応され、神道の術の大半をたった三年で修めた。

多大な氣を消費する『駒落としの祝詞』を、儀式や他者の補助も無く単独で使用できるのは、日本でも慎だけである。

戦闘スタイル

中国拳法、空手、超人レスリングに古武術をミックスした独自の格闘術を使用する。

現在、好んで使用するのは超人レスリングと大南流合氣柔術、そして神極拳。

空手と神極拳を合わせた剛打に『当て身投げ』を始めとした大南流の返し、そして悪魔將軍仕込みのレスリングと『投』『極』『打』の全てが揃った総合格闘家として、高いレベルで完成していると言える。さらに潜心力に界王拳と身体能力上昇の技も揃っており、接近戦では無類の強さを発揮する。

氣弾や放出系の技の才能は壊滅的だが、『ドラゴンボール』に登場した拳から放つ衝撃波やそれを発展させた『玄武剛弾』『玄武金剛弾』を修得した為に、遠距離戦にも対応可能。

さらには舞空術で空中戦も可能になった為、本当の意味で死角がなくなつたと言える。

神器

トワイライト・ヒーリング
『聖母の微笑』

あらゆる種族の傷を癒すとされる治療系最高峰の神器。

5歳の時、姫島宗家からの刺客との戦闘で致命傷を負った際に覚醒。

その後、『無限の闘争』に入り浸る生傷の絶えない日々の中、本人の自覚が無いままに禁手化した。

『聖母の微笑ACT2』

『聖母の微笑』が禁手化した状態。

効果は所有者の身体の修復に特化しており、本来ならば対処できない欠損等も治療する事が可能。

これは能力が治療から再生へとランクアップした為である。

この状態での自身への治療は肉体の強化再構築というべき超回復であり、さらに損傷を与えた原因に対しての耐性も付与する。

治癒速度も大幅に向上しており、自身の回復に関しては通常の10倍の効果を発揮する。

但しこれらの効果は全て当人のみとなっており、他者に使用する際には通常の『聖母の微笑』の効果と変わらない。

他者を癒すという『聖母の微笑』の基本コンセプトから全力で逆行している為、当然禁手としては亜種である。

『神器研究の第一人者』を自称するアザゼルは、致命傷を負った所有

者の回復の為に覚醒し、その後もひたすらに己の身体を回復させ続けた事。

そして、所有者の強さへの渴望がこの禁手へと導いたのではないかと推測している。

ステータス (F a t e 風)

(※各パラメータの横についている○は無限の闘争内のランクに変換した数値である)

筋力 E X (通常は『狂』底位 界王拳最大倍化時は『狂』中位)

耐久 E X (通常は『S』 界王拳最大倍化時は『狂』下位)

敏捷 E X (通常は『S』 界王拳最大倍化時は『狂』底位)

魔力 (氣) E X (通常は『狂』底位 界王拳最大倍化時は『狂』中位)

幸運 D (全状態通して『D』)

宝具 無し

スキル

気配察知：E X

周囲の気配を察知する能力。

E Xならば、気配や敵意、殺気はもちろん、相手が行動を起こそうとする時に生じる意識『意』すらも読み取れる。

気配遮断：A

孔 濤羅を師事し戴天流剣法の氣功術を修得した事で、気配を完全に殺す『氣殺の法』に至った。

このレベルになると、並の人間には目撃されても認識されることは無く、達人であっても気配を掴むのは困難を極める。

強化再生：E X

禁手化した神器『聖母の微笑ACT2』の効力。

内外に関わらず、何らかの要因によつて身体が破壊された場合、治癒する際にその要因に対する耐性を伴って強化再生される。

この能力の真価は受けた肉体のダメージに応じて強化度が増す点であり、重傷はもちろん瀕死や死(『無限の闘争』における擬死も含む)から再生した場合、身体能力や耐久度が爆発的に跳ね上がる。

また毒物や呪詛、病も耐性付与の対象となっている。

ラーニング（格闘）：EX

優れた観察眼と氣の察知能力によって相手の体術を解析し、見るだけで相手の技を模倣する能力。

観戦する際は元より、対戦中でもこれによって技を修得する事が可能。

しかし、これで得た技は模倣にすぎず、本当の意味で習得するには修練が必要になる。

心眼（真）：A

幾多の戦闘経験によって、状況打開の為の最適手を導き出す技術。

『無限の闘争』を使用する事により、12年間365日休まずに積み重ねて来た対戦の賜物。

呪術：EX

氣の制御の才と人並み外れた氣の総量を下地にした神道呪術。

EXとなれば神霊レベルの精度と効果を誇る。

元来神道の術式は人が使用する事を基準とした術式なのでここまでの効果を発揮することは無いのだが、桁外れの氣の出力を持って神霊レベルにまで引き上げている。

氣脈制御：EX

体内にある経絡、氣脈に流れる氣を制御する技術。

Aとなれば自身のもののみならず、触れられれば他者の氣脈すらも操作が可能。

早期に潜心力、界王拳の修得が可能だったのはこのスキルの賜物である。

肉体制御：A

自身の肉体を制御・操作する技術。

Aとなれば骨格筋・内臓筋はもとより、自律神経で動いている心筋等も己の意志で操作する事が可能。

その氣になれば、筋肉の収縮だけで関節の骨を外す事や脱臼した骨を嵌め直す事も出来る。

主な用途は関節技への対策。

頑強：EX

常識外れの猛者達との闘いと過酷な修練によつて造り上げた鋼の肉体。

EXになると気を込めるだけで刀剣は歯が立たず、通常の弾丸は皮膚を貫くことは無い。

氣功術の一つである硬氣功と併用すれば、中位の聖劍や魔劍も無傷で受け止める事が可能になる。

瞬間移動：B

目的とした人物・生物の気を目印にして一瞬でその場所に転移する技術。

あくまで気を使用した技術であるため、魔法による転移が通用しない場所や結界の中でも問題なく移動できる。

氣の察知範囲や技術の精度に少々難がある為にランクはB。(惑星間・異世界をも行き来できる孫悟空はEX)

特殊技

ブロッキング(出典 ストリートファイターIII)

腕に気を収束させて攻撃を捌く技術。

元は『ストリートファイターIII』のシステムを現実世界に対応させた物。

氣で腕を覆っている為に、刀剣はもちろん触れるだけで肉体に害を及ぼす攻撃も防ぐことが出来る。

また、極めれば腕を振るう事で空間を隔絶させて安全圏を築く事も可能となり、範囲攻撃をも無傷で対処する事も可能になる。

弱点は投げ技やブロッキング不能な一部の打撃投げである。

緊急回避(出典 ザ・キングオブファイターズ)

前転後転、または特殊な歩法で相手の攻撃を回避する技術。

元は『ザ・キングオブファイターズ』のシステムを現実世界に対応させた物。

両手掌底拳(出典 漫画『押忍!! 空手部』)

高木義之より伝授された技。

下から掬い上げる様に両の掌底を放つ。

元々は高木の先輩であり、二代目大阪魂（大阪の不良・暴走族の総代）である森上慎吾の必殺技。

戴天流 臥龍尾（出典 鬼哭街）

孔 濤羅より伝授された技。

大きく身体を旋回させながら、相手の頭部に向けて氣を込めた回し蹴りを放つ。

本来は刀術における斬撃の繋ぎの技で、衣服の袖等で相手の目を晦ませて、その間に蹴りを叩き込むのが主な使い方。

虎煌破碎掌（出典 漫画『龍虎の拳』）

Mr.カラテとサイラオーグ・バアルの対戦から見取った技。

氣を込めた掌で相手の飛び道具を相殺する技術。

これを打撃に転用すれば虎煌拳（打撃）になる。

スーパークャンセル（出典 格闘ゲーム）

数々の格闘ゲームで適応されているシステムを現実世界に対応させた物。

体内を巡る氣を増幅強化させ、技の撃ち終わり動作を強制的にストップして次の技を放つ技術。

肉体・氣脈双方を酷使する為に多用は出来ず、術後の負担も大きい。

サイラオーグ・バアルがジャック・ターナー戦で使用したブレーキングを元に考案した。

必殺技

昇竜拳（出典 ストリートファイター）

剛拳より伝授された、ご存じ元祖対空技。

屈んだ状態から拳を突き上げて跳び上がり、アッパーカットと膝で攻撃する。

剛拳の流派において重要な位置を占める技とされ、『天に拳を向ける』という性質上からも一種の禁じ手に近い扱いを受けている。

正拳四段突き（出典 漫画『押忍!! 空手部』）

高木義之より伝授された技。

前方に移動しながら、相手の顔と胴に向けて正拳を四発繰り出す。

当て身投げ（出典 餓狼伝説）

ギース・ハワードとの対戦で体得した技。

相手の攻撃を防御するとそのまま投げに移行するギースの代名詞の一つ。

上段は襟と足の裾を掴んでの投げ落とし。

中段は足を払いながら顔面を掴んで地面へ叩き付ける。

下段は攻撃を掴んで宙に浮かし、掌底で弾き飛ばす。

竜巻捕縛（出典 餓狼伝説 WILD AMBITION）

当て身投げの熟練度が増した事で習得した技。

餓狼伝説の世界の日本において幻の古武術と言われた大南流合気柔術の技の一つ。

両手から放つ強力な氣勢によって相手を絡め取り、触れずして投げる事を極意とする。

通常の格闘技とは一線を画すこの技術の為に、大南流の使用者は『妖の者』『闇天狗』と呼ばれて恐れられていた。

また、ギースの使用する当て身投げの原型となった技である。

合気鏡殺（出典 餓狼伝説 WILD AMBITION）

大南流合気柔術の技の一つ。

両手を突き出して気の壁を発生させ、飛び道具を吸収し自らの気と合わせて反撃する技。

ギースは気功反射の結界と称した。

その汎用性は高く、気功波のみならず魔力による遠距離攻撃にも対応可能。

雷鳴豪破投げ（出典 餓狼伝説）

ギース・ハワードとの対戦で体得した技。

倒れた相手の首を締め上げて叩きつけるダウン追撃専用技。

掴んだ際に雷光を叩き込む為に、地面に激突した瞬間は落雷が生じたように見える。

黒手烈震破（出典 鬼哭街）

内家戴天流剣法の内功掌法の一つ

所謂浸透勁の一種で相手の身体に手を当て、そこから勁を送り込む

事で内臓器官にダメージを与える技。

達人が放てば一撃で五臓六腑を破裂させることが出来、喰らった相手には、黒い掌の跡が残る。

魔のシヨグン・クロー（出典 キン肉マン）

悪魔將軍から伝授された技。

強烈な握力で相手の顔面を締め上げるアイアンクロー。

これを行うには顔面を掴んだまま片腕で相手を吊り上げる腕力が必要。

地獄の超特急（出典 キン肉マン）

悪魔將軍から伝授された技。

魔のシヨグン・クローからの派生技。

シヨグン・クローで吊り上げた相手をワンハンドスピンスラムでリングに激突させる。

地獄風車（出典 キン肉マン）

悪魔將軍から伝授された技。

プロレスの複合間接技、ロメロ・スペシャルの体勢から前方に回転。加速をつけたところで、相手を頭からコーナーポストに投げ付ける技。

四肢、背骨を締め上げた状態で回転を行う為、相手の身体には重大なダメージが及ぶ。

また、空中で相手をこの技に捕らえ、回転と落下速度を加えて地面に叩き付けるバージョンもある。

ワンハンドスピンスルト（出典 オリジナル）

姫島慎オリジナル。

魔のシヨグン・クローからの派生技。

シヨグン・クローで吊り上げた相手を振り回し空中に放り投げる。

ここから地獄の断頭台に繋げる事が可能。

本来の断頭台のプロセスを修得していない時に慎自身が考え出した、曰く『苦肉の策』

ダブルニークラッシュャー（出典 キン肉マン）

悪魔將軍から伝授された技。

地獄の九所封じその4・5

相手を抱え上げ、その両膝を自身の両膝に叩き付ける技。
両足を封じる事を目的としている。

地獄のシエイクハンド（出典 キン肉マン）

悪魔將軍から伝授された技。

地獄の九所封じその8

相手の手を取り、握手すると見せかけてツボを突く事で全身の力と
思考力を封じる。

大雪山落とし（出典 キン肉マン）

悪魔將軍から伝授された技。

地獄の九所封じその1

相手を空中に投げ、仰向けになつた相手の上に乗る首と左足を掴ん
だ体勢で、背中を地面に激突させる。

背中 of 急所を封じる技。

大雪山落とし（裏）（出典 オリジナル（キン肉マン））

大雪山おろしを慎がアレンジした技。

オリジナルと違い、空中でうつ伏せなつた相手の上に乗る首と左足
を掴んだ体勢で、背中を地面に激突させる。

頸骨と背骨、そして胸骨と内臓へ一気にダメージを与える殺人技。

スピン・ダブルアーム・ソルト（出典 キン肉マン）

悪魔將軍から伝授された技。

地獄の九所封じその2・3

両腕の関節を極めた状態で回転し、ダブルアームスープレックスで
地面に叩き付ける。

背中 of 両腕を封じる技。

兜割り（出典 キン肉マン）

悪魔將軍から伝授された技。

地獄の九所封じその6

相手の頭部が地面に突き刺さるほどの威力を持ったフロント・スー
プレックス。

脳天の急所を封じる技。

ストマッククラッシュ（出典 キン肉マン）

悪魔將軍から伝授された技。

地獄の九所封じその7

地面に突き刺さった相手の足を固定してブリッジの体制を取らせ、高高度から相手の腹部へダイビングヘッドバッドを叩き込む。

腹の急所を封じる技。

ライジングジャガー（出典 ストリートファイター）

慎が『無限の闘争』を使用した際に、システムの初回特典で修得した技。

元はアドンというムエタイ使いの必殺技で、飛び上がりながら空中の敵に二段膝蹴りを放つ。

主に空中から襲い掛かってくる相手への対空技として使用する。

邪影拳（出典 餓狼伝説）

ギース・ハワードとの対戦で体得した技。

全身に氣を纏いながら突進し、体当たり、左掌底、双掌打を連続で叩き込む。

初期は未完成で、肘打ちから右掌底という『ロック・ハワード』の『ハードエッジ』に近い技だったが、ギースに勝利する事で完熟を見た。

ティーカウコーン（出典 ファイターズ・ヒストリー）

サムチャイ・トムヤンクンとの対戦で修得した技。

氣を纏った飛び膝蹴り。

前方に突進するバージョンと斜め上に跳ね上がる対空バージョンがある。

竜巻剛螺旋（出典 ストリートファイター）

嘗ての師である剛拳より伝授された技。

上段蹴りで相手を蹴り上げ、空中で旋風脚を連続で叩き込む技。

竜巻旋風脚の原型もしくは派生技と思われる。

毒蛭（出典 漫画『高校鉄拳伝タフ』）

悪魔将軍が一誠に使っているのを見て修得した技。

本来は『高校鉄拳伝タフ』に登場する総合格闘家『朝昇』の使う関節技。

うつ伏せの相手の背後を捕り、腹腔へ指を射し入れて肋骨を一本ずつ折っていく。

派生として、折れた骨が身体の外側に突き出るように肋骨を折っていく『毒蛭観音開き』がある。

コブラ・ソード（出典 漫画『高校鉄拳伝タフ』）

慎が前世で見た漫画の知識を再現した技。

本来は『高校鉄拳伝タフ』に登場するムエタイ使い『ギャルアツド』の使う蹴りのコンビネーション。

相手の鼻先を掠めるように前蹴りを放ち、上体を反らしたところで前蹴りを放った足で踏み込み、上段膝蹴りをコマカミに叩き込む。

前蹴りで注意を集めると同時に相手の上体を上げる事で、追撃の膝が視界に捉えられない様にしている。

界王拳（出典 ドラゴンボール）

ヤムチャから伝授された技。

氣のコントロールにより、自身の能力を段階的に倍化させる。

その効果は絶大だが身体に大きな負担がかかる為、制御を誤ったり限界以上の倍化を行うと身体が破壊されるというリスクがある。

潜在力解放（出典 漫画『押忍!! 空手部』）

高木義之から伝授された技。

自己暗示により肉体の能力を限界まで引き出す神極拳の奥義。

界王拳と併用する事により、更なる効果を得ることが出来る。

北斗有情断迅拳（不完全）（出典 北斗の拳）

慎がトキとの対戦で修得した技。

目にも止まらない踏み込みですれ違いざまに秘孔を突く対多人数戦用の技。

本来ならば秘孔の作用により、肉体崩壊時には痛みではなく快楽を得るのだが、慎がまだ未熟な為痛みを捕る事は出来ない。

また、致命の秘孔を突けないため殺傷能力も本家には大きく劣る。

白虎咬（出典 スーパーロボット大戦OG）

慎がソウルゲインとの対戦で修得した技。

相手の懐に飛び込んで氣（ソウルゲインの場合は機体エネルギー）を集中させた掌打を連続で叩き込み、最後は双掌打と共にエネルギーをゼロ距離で炸裂させる。

衝撃波（出典 ドラゴンボール）

ヤムチャから伝授された技。

本来は『ドラゴンボール』の地球の神と初代ピッコロ大魔王が使っていた物を伝授されたもの。

拳を超高速で放つことにより、衝撃波を発生させ相手を吹き飛ばす。

氣弾や魔術による飛び道具に才能が無い慎にとって、数少ない遠距離手段である。

玄武剛弾（出典 スーパーロボット大戦OG）

慎がソウルゲインとの対戦で修得した技。

正拳突きของ構えから拳と共に螺旋状の衝撃波を前方に放つ。

本来は特殊流体金属で造られた両肘のブレードを回転させ、螺旋状の衝撃波と共に腕を射出するロケットパンチ系の武装なのだが、当然腕は飛ばない。

慎が持つ数少ない飛び道具の一つ。

超必殺技

ゲージ1消費

爆裂発勁（出典 漫画『押忍!! 空手部』）

高木義之より伝授された技。

『押忍!! 空手部』の世界において、天才拳法家と言われた黄天昇の3人の息子の一人、黄流雲が編み出した黄家太極拳の奥義。

正拳突きの構えを取り、つま先から膝、腰、肩と螺旋状に力を溜めていき、最後に拳にすべての力を集中させて相手に叩き込む。

所謂コークスクリューブローであるが、極める事が出来れば一撃で巨岩を粉碎するほどの威力になる。

レイジングストーム（出典 餓狼伝説）

ギース・ハワードとの対戦で体得した技。

両手に氣を集中させ、腕を交差せながら掌を地面に叩き付ける事によって、自分を中心とした衝撃波を巻き起こす。

玄武金剛弾（出典 スーパーロボット大戦OG）

慎がソウルゲインとの対戦で修得した技。

玄武剛弾の強化版で、正拳突き構えから拳と共に横向き竜巻を前方に放つ。

主に界王拳使用時に使われる。

慎が持つ数少ない飛び道具の一つ。

舞朱雀（出典 スーパーロボット大戦OG）

慎がソウルゲインとの対戦で修得した技。

視認できないほどの超高速で相手に近寄り、氣を込めた肘で縦横無尽に斬り刻む。

攻撃の際、あまりにも速く動く為に複数の残像が発生し、あたかも多人数で襲い掛かっているように見える事がある。

神威（出典 漫画『修羅の門』）

慎が前世で見た漫画の知識を再現した技。

本来は『修羅の門』に登場する不破圓明流古武術の伝承者『不破北斗』の使用する奥義。

あえて相手が潰しやすいように巴投げを仕掛け、相手が潰しに来たところで右膝を相手のみぞおちに当て、3tもの衝撃に匹敵する寸打を叩き込む。

完全な初見殺しの技で、掛けられたものは両手と片足を封じられたまま、無防備で技を食らうしかない。

慎は本来の寸打の代わりに浸透勁を使っている。

ゲージ2消費

地獄の断頭台（出典 キン肉マン）

悪魔將軍から伝授された技。

地獄の九所封じラストワン

スピン・ダブルアームの体勢で高速回転して相手が垂直になったところ上空に投げ飛ばし、逆さになった相手の首に自分の膝を撃ち込ん

でそのまま地面に叩き付ける技。

地獄の九所封じの×を飾るほか、単体で使用する機会も多い悪魔將軍の代名詞と言える技。

現在の慎では放つのに界王拳20倍で能力を高める必要がある。

因みに完璧版を放ったのはオーフィス戦が初。

悪魔將軍からの評価は60点だった。(スピン・ダブルアーム時のエネルギーのロス、首に当たった膝の位置、フィニッシュの時の体重移動等に物言いがあった)

天地神明掌 (出典 漫画『押忍!! 空手部』)

高木義之より伝授された技。

『押忍!! 空手部』の世界において、天才拳法家と言われた黄天昇の3人の息子の一人、黄珍珍が編み出した神極拳の奥義。

正拳突き of 構えを取り、潜心力によって引き出した力を拳の一点に集めて相手に叩き込む。

サンダーブレイク (出典 餓狼伝説)

聖剣事件の際に開眼した技。

両手に気を集中させ、腕を交差せながら掌を地面に叩き付ける事によって、自分を中心に周囲へ落雷を降らせる技。

『禍の団』への怒りのままに、レイジングストームへ過剰に気を送り込んだ事によって、技が変化。

初使用の際に流し込む氣の量を憶えたのか、二度目からは使い分けができるようになっていた。

麒麟 (出典 スーパーロボット大戦OG)

慎がソウルゲインとの対戦で修得した技。

肘(ソウルゲインは特殊流体金属製のブレード)にエネルギーを集中させて突貫。

乱打を浴びせた後に昇竜拳の様な打ち上げの肘で相手を切り裂く。本来なら突貫前に拡散式のビームで牽制するのだが、慎は飛び道具が使えない為に踏み込みの速度をさらに引き上げる事で対応している。

また、乱打を挟まずに肘による斬り上げのみを狙った、一撃必殺の

バージョンもある。

ゲージ3消費

狂雷迅撃掌（出典 餓狼伝説（MUGEN動画『餓狼・SPECI AL』））

サンダーブレイクの熟練度が増した事で修得した大南流合気柔術の奥義。

サンダーブレイクの本来の姿というべき技で、地面に手を打ち付けて雷を落とすのではなく、天に掲げた右手から気を放ち雷の群を呼ぶ。

大南流合気柔術においてこの技は人ではなく魑魅魍魎を祓う為の技とされていた。

ギース・ハワードはこの技を持って、秦の秘伝書に潜んでいた秦天龍の魂を滅している。

デッドリー・レイブ（出典 餓狼伝説）

ギース・ハワードとの対戦で体得した技。

全身に気を纏いながら突進し、連続で打撃を叩き込んだ後に、双掌打からゼロ距離で気を炸裂させる。

極限流空手の究極奥義『龍虎乱舞』をギースがアレンジしたもの。

技に必要な気功術が活人拳の極限流ではなく殺人拳の大南流のモノであるため殺傷力は上がっているが、殺気が漏れやすく他心通に長けた者には攻撃が読まれやすいという欠点がある。

また、肉体にかかる負担も『龍虎乱舞』より大きい。

一撃必殺技

ヤーまだたーろー（出典 MUGEN）

『ドカベン』との対戦で修得した技。

どこからともなく取り出したバットで相手をホームランする。

当たると何故かドカベンの主題歌が流れ、放送コードに引つかかるレベルのグロ画像になった対戦相手はOP映像によって隠される。

なお、この技をヒットした場合は必ずダイヤモンドを一周しなくてはならない。

確率によつては、ドカベンの主題歌ではなく別の曲が掛かる時があ

る。(最後のメは何故か『やーまだたーろー』だが)

地獄の九所封じ・死のフルコース(出典 キン肉マン)

悪魔將軍から伝授された技。

地獄の九所封じを1から9まで連続で叩き込む大技。

食らえば人間よりはるかに強靱な肉体を持つ超人でも、即死は免れない

姫島美朱

格闘スタイル

: 忍術

出身地

: 日本

職業

: 学生+神職

誕生日

: 10月16日

身長

: 149cm

体重

: 41kg

3サイズ

: B84、W53、H85

血液型

: B型

好きな物

: テレビゲーム、アニメ、ライトノベル

趣味

: ネットサーフィン、アニメ鑑賞、ゲーム

大切なもの

: 母の形見の巫女装束

家族

: 姉、兄、父(別居中)

好きな食べ物

: お菓子類、ハンバーグ、コーラ

嫌いな食べ物

: 辛い物

嫌いなもの

: 不潔なモノ、軟体動物

特技

: 忍術全般

得意スポーツ

: 走り高跳び

来歴

姫島慎の妹にして、忍者、巫女、アニヲタと設定詰めすぎな少女。

『忍者の源流』と言われる影三流が一派『香澄』の後継者であり、その証である御神刀を受け継いでいる。

驚くほどに手広い人脈を築いており、伊賀・甲賀・風魔・藤原の四鬼と国内の忍び関係は元より、墮天使、悪魔、ギリシャ神話の冥府に北欧神話、ケルト神話と交友関係は多岐に渡る。

その大半がネットゲームかヲタク関係のイベントを通して知り合ったのは言わぬが花であろう。

現在の立場は悪魔グレモリー家の客分であり日本神話非正規雇用職員、そして駒王神社禰宜とややこしい。

本人は兄を被保護者にして、フリーランスになろうと画策したりしている。

実は本人の知らないところで3度縁談が持ち込まれているのだが、全て兄と祖父によってシャットアウトされている。

三姉弟の中で最も異能の才に溢れており、本人すらも気づいていないが『姫島』と『香澄』の最高傑作というべき存在。

その才能は年若くして伊賀上忍に匹敵する忍術の腕や、現当主がいるにも拘らず儀式も無しに『朱雀』の力を行使した事からもうかがえる。

将来の夢は一家全員で暮らす事。

性格

明るく人懐っこい性格で、年上の女性に対しては甘え癖がある。

しかし、仕事や戦闘中は忍の修練で培った冷徹さを見せ、敵対した者には容赦しない。

自身のプロポーションや身長についてコンプレックスがあり、特に背の事を馬鹿にされると顔を真っ赤にして怒り出す。

体格的には149cmと小柄だが、体つきの方は母親の血によって女性として出るところは出て、引っ込むところは引っ込んだトランジスタグラマーである。

しかし、幼少期から実姉の朱乃や姉貴分のリアスのようなスーパーグラマラスな女性と寝食を共にしている為、自信が持ていない模様。

戦闘スタイル

体術を活かした機動戦でのかく乱や、忍術による幻惑からの致命の一撃を狙うのが主な戦術。

冥界でサバイバルモードを体験してからは、自身の火力不足を実感した為に徒手の格闘と体術に磨きを掛けるようになった。

また、『無限の闘争』において羅将神ミツキと対戦した際に『朱雀』の力に覚醒。

現在は『月下の剣士』の登場人物であり、平行世界の幕末に生きた朱雀の守護者である『嘉神慎之助』より朱雀の力の手ほどきを受けている。

妖刀（出典 戦国奇譚妖刀伝）

母方の祖母の家系に面々と受け継がれていた御神刀。

平安時代にとある刀匠が隕鉄を元に打った物で『小太刀』『太刀』『槍』の三本があり、『影三流』の各派の宗家が一本づつ所持していた。

その効果は『怒り』『嘆き』『憎悪』『絶望』といった人間の負の感情を糧に強大な破壊力を示す妖刀であり、織田信長を討つたとされている。

『影三流』の直系の血を持つ者のみが真の力を引き出す事ができ、力の発動の第一段階は刀身に破邪の力が宿り、刀身が蒼く発光する。

第二段階は刀身から破邪の力を籠った光を放つことが出来るようになる。

その威力は最大効果ならば一撃で城砦を消滅させ、体長10メートルもの妖魔をも葬る。

美朱が受け継いだのは『小太刀』であり、『槍』は織田信長との戦いで消失。

『太刀』は担い手の血が絶えた為に天津神によって管理されている。

ステータス (F a t e 風)

(※各パラメータの横についている○は無限の闘争内のランクに変換した数値である)

筋力 C (『D』上位)

耐久 D (『D』下位)

敏捷 A (『A』中位)

魔力 B (『A』底位)

幸運 A (『A』下位)

宝具 A (『A』下位)

スキル

気配察知：B

周囲の気配を察知する能力。

Bならば、暗殺者や間者等の隠形に長けた者の気配を探り出すことができる。

気配遮断：B

忍者の基本スキル。

このレベルになると、達人や同業の者でなければ見つけ出すことはできない。

忍術：A

忍者が修得する体術や術、器械の取り扱いの知識。

Aならば、どの流派でも上忍の地位を得るだけの腕前。

気配察知：B

周囲の気配を察知する能力。

Bならば、暗殺者や間者等の隠形に長けた者の気配を探り出すことができる。

神獣の加護：A

神獣『朱雀』による加護を得る。

Aならば、儀式や契約無しに朱雀の浄炎を放つことが可能。
また、呪詛や毒等を防ぐ防壁が常時展開される。

特殊技

忍法 微塵隠れ (出典 ワールドヒーローズ)

ハンゾウ (服部半蔵正成) より伝授された技。

煙玉を焚き姿を消して別の場所に現れる。

疾風の術 (出典 ワールドヒーローズ)

ハンゾウ (服部半蔵正成) より伝授された技。

氣の制御により、打撃を放った際に出る隙を強制的に中断させて次の行動に移る技能。

大技を使った場合は使用できないため、慎の使うスーパーキャンセル

ルの下位互換といえる。

イズナ斬り（出典 ワールドヒーローズ）

ハンゾウ（服部半蔵正成）より伝授された技。

空中で回転して妖刀を下方に構えて落下する。

奇襲や空中における姿勢制御に使用する。

必殺技

忍法 爆炎龍（出典 サムライスピリッツ）

服部半蔵より伝授された技。

火遁と氣の融合技で、地面に拳を打ち付ける動作によって炎の塊を放つ。

この炎を地面を跳ねながら進み、相手を捕らえると火柱に変化する。

モズ落とし（出典 サムライスピリッツ）

服部半蔵より伝授された技。

相手を掴んで跳び上がり、錐もみ回転を掛けながら落下。

相手を頭から地面に叩き付ける投げ技。

落下地点に火薬を仕込んでいる場合は、地面に激突した際に爆炎があがる。

忍法 身代わりの術 仏（出典 サムライスピリッツ）

服部半蔵より伝授された技。

相手の攻撃を変わり身（人形、丸太）で受けると同時に跳躍。

相手が変わり身に気を取られている内に、頭上から奇襲をかける。

忍法 身代わりの術 鬼（出典 サムライスピリッツ）

服部半蔵より伝授された技。

相手の攻撃を変わり身（人形、丸太）で受けると同時に影に潜み、相手が変わり身に気を取られている内に相手の影から現れて足を狙って攻撃を仕掛ける。

光龍破（出典 ワールドヒーローズ）

ハンゾウ（服部半蔵正成）より伝授された技。

全身の気を妖刀に集め、アッパー気味に刀を持った手を突き上げながら飛び上がる技。

上昇する際には全身に光の龍の形をした氣を纏う事からこの名が付いた。

プラズマブレード（出典 サムライスピリッツ）
ガルフォードとの対戦で体得した技。

氣と父親譲りの雷光を混ぜ合わせて苦無の形に成型し、相手に放つ技。

本家は巨大な苦無の形でしか使用できないが、美朱は通常の苦無のサイズ作り出すことが出来、一定の間なら形を維持できる。

その為、本物の苦無の代わりとして使う事もしばしば。

香澄 風薙（出典 戦国奇譚妖刀伝）

香澄の綾女が残した資料から美朱が体得した技。

空中からタイミングをずらして3本の苦無を放つ技。

よく似た軌道で相手の反応を素早く読み取りながら投げるので、回避がし辛い。

忍法 車菱（出典 サムライスピリッツ）

服部半蔵より伝授された技。

後転しながら、マキビシを撒く。

マキビシ自体の威力は弱いので、足止め程度にしかならない。

疾風燕落とし（出典 ワールドヒーローズ）

ハンゾウ（服部半蔵正成）より伝授された技。

前方に飛びあがりながらの上段回し蹴りを放ち、それが当たれば空中で連続蹴りを放つ。

流影陣（出典 龍虎の拳）

如月影二との対戦で体得した技。

氣を込めた妖刀を逆袈裟に振る事で目の前に刃状の光を生み出し、飛び道具を跳ね返す技。

如月影二は素手かつ両手で繰り出していた為、モーションは影二の祖先である斬鉄の『流影刃』に近い。

天馬脚（出典 龍虎の拳）

如月影二との対戦で体得した技。

相手に向かって跳躍し、無数の飛び蹴りを放つ。

飛燕（出典 Dead or Arrive）

霞（DOA）との対戦で体得した技。

宙返りで相手の肩に足を掛け、太腿に相手の頭を挟んだ状態で、前方に回転し地面に頭を叩き付ける。

飛燕（裏）（出典 オリジナル（Dead or Arrive）

飛燕を元に美朱が編み出した技。

背後から宙返りで相手の肩に乗って足で首を極めると同時に押し折り、頭から地面に投げ落とす。

羅刃昇破（出典 Dead or Arrive）

あやねとの対戦で体得した技。

霧幻天神流忍術覇神門の一つで、敵に背中を向けた状態から振り向きざまの手刀を二撃放ち、最後に掌底で撃ち上げる。

幻夢槍（出典 Dead or Arrive）

あやねとの対戦で体得した技。

霧幻天神流忍術覇神門の一つで、相手に向かって跳躍し、錐もみ回転を加えた両足飛び蹴りを放つ。

雷打（出典 ストリートファイター）

いぶきとの対戦で修得した技。

相手の懐に飛び込むと同時に腕を捕り、脇腹に拳を添えて寸打で吹き飛ばす。

超必殺技

ゲージ1消費

伊賀忍法奥義 梵天閃光陣（出典 ワールドヒーローズ）

ハンゾウ（服部半蔵正成）より伝授された技。

高高度まで跳躍し、妖刀を前に構えて相手に襲い掛かる。

初撃が当たると同時に『大日如来真言』を唱えながら、生み出した分身と共に連続で斬撃を叩き込む。

敵を斬る際に梵字が現れる事からこの名が付いた。

真・モズ落とし（出典 サムライスピリッツ）

服部半蔵より伝授された技。

相手の懐に入ると同時に腕を捕り腹部へ肘鉄、顔面へ裏拳を叩き込んだ後で捕った腕を折り、モズ落としを掛ける。

熟練した者ならもず落としの落下中に胸骨と肋骨、骨盤を砕く事が可能。

香澄・風つむじ（出典 戦国奇譚妖刀伝）

香澄の綾女が残した資料から美朱が体得した技。

相手の攻撃が当たる寸前に微塵隠れで回避し、目標を見失った相手を旋風を纏いながら斬り捨てる。

鎧通し（出典 ストリートファイター）

いぶきとの対戦で修得した技。

相手の懐に飛び込むと同時に腕を捕り、胸元に寸打を打ちこむと同時に氣を放つ。

戦場で甲冑を付けた相手を撲殺する為に技なので、放った氣は衝撃となって後ろに突き抜ける。

星火燎原（出典 幕末浪漫 月下の剣士）

嘉神慎之助から伝授された技。

右手を下から掬い上げる動作で放った朱雀の炎で、相手を薙ぎ払う。

ゲージ2消費

妖刀解放（出典 戦国奇譚妖刀伝）

青眼に構えた妖刀を真上に振りかぶりながら跳躍し、大上段から振り下ろすと同時に刀身から光線を放つ技。

放った光は破邪の力が籠っており、伝説では体長が十メートル以上はある三つ首の化け物を一撃で消し去ったという。

望月晴矢

格闘スタイル : 無し

出身地 : 日本

職業 : 学生

誕生日 : 8月15日

身長 : 171cm

体重 : 58kg

血液型	:	A型
好きな物	:	聖獣チロンヌプ（通称チロ）
趣味	:	旧跡巡り
大切なもの	:	慎から貰った厄払いのお守り
家族	:	父、母
好きな食べ物	:	牛丼、ラーメン
嫌いな食べ物	:	ピーマン
嫌いなもの	:	こちらを見下す墮天使
特技	:	魔獣、妖怪に好かれやすい
得意スポーツ	:	野球
来歴		

墮天使幹部シエムハザと日本人望月晴奈の間に生まれた混血児。

シエムハザの立場上の関係で8歳まで母と共に育っていたが、父に会う為にグリゴリに足を踏み入れた時に、バラキエルに会いに来た慎達に出会い友達になる。

その後は慎達やヴァーリと共にハーフ組の中樞を担う一人として、差別主義の墮天使達と暗闘を繰り広げた。

中学では現世に移住してきた慎達の他に小山田耕太と親友になり、神職の修行に忙殺される慎を共にサポートした。

父親であるシエムハザとの仲は良好であり、追いつめられつつある三勢力の現状を憂いている。

シエムハザの血を引くので潜在魔力は高いが、本人に戦闘力は無い。

その代わりというべきか妖怪や魔獣に大変好かれやすく、頻繁に向こうからコンタクトを取られる。

その体質から幼少期に知り合った聖獣チロンヌプを相棒にしている。



【原作キャラ】

姫島朱乃

原作との違い

慎という弟がいる為に男性不信は無い。

実は重度のブラコン・シスコン。

これは幼少期に母親を失った事から『もう二度と家族を失いたくない』という思いが根本にあるから。

その為、常に傷だらけになって強さを求める慎に心を痛めているし、それを助長する『無限の闘争』にいい感情を持つてはいない。

精神的な脆さはあるものの、心の拠り所とする依存対象が弟妹になっっている為、一誠に一目惚れはしていない。

日本に来たことで弟妹に多くの物を背負わせてしまった事を申し訳なく思う反面、機密と理解していても隠し事をされている事に疎外感を感じていた。

しかし、オーフィス戦後の家族会議で慎の口から隠し事の大半を聞く事ができたので、この蟠りは解消している。(転生については知らない)

リアスやグレモリー家に対して感謝しているが、重要度では弟妹が勝る。

そのため、慎から三勢力に最悪の事態が生じた時は悪魔の駒を抽出する事を提案された際はそれを承諾している。

SとMの気質があることは変わらないが、弟妹を気にしてか原作のようにみだりに肌を晒したりはしない。

父バラキエルに対する気持ちは複雑で、美朱や慎の説得により母を失ったのは父のせいではないと解ってはいるが、長年自分が取ってきた態度もあって素直になれない。

冥界での『無限の闘争ツアー』にて、慎が『第三の無限』の力を所持している事を知り、慎や美朱との明確な力の差に気付いた事で一念発起。

弟の足手纏いにならない為に、己を鍛え始めた。

三姉弟の中では最も墮天使の血を色濃く受け継ぎ、唯一黒い翼をもつ。

その為、生まれながらに強大な魔力を所持する反面、香澄の妖刀や姫島の『火』には適正は無い。

異能の才能に関しては2番目、生まれつきの身体能力は最も高かった。

戦闘スタイル

冥界では『雷の巫女』と呼ばれているが、本来は全ての魔法に長けたオールラウンダーである。

とはいえ、父親から受け継いだ血により雷撃系と最も相性が良い為、そちらを好んで使用する。

当初は堕天使の力である『光力』や父から受け継いだ『雷光』を忌避していたが、『無限の闘争ツアー』の際に慎によって矯正され、現在では使用に戸惑いは無い。

鼎二尉を師事した事により、接近戦では合気柔術を主体に闘う。

この際、自身の接近戦での経験不足を補うために、相手の攻撃を探知する特殊な電波結界を形成している。

慎の格闘術を参考に掴み、投げ、捌きといった相手に触れる瞬間には雷撃を流し込むという戦法もとっている。

ステータス (Fate風)

(※各パラメータの横についている○は無限の闘争内のランクに変換した数値である)

筋力 D (『D』下位)

耐久 D (『D』下位)

敏捷 C (『C』下位)

魔力 A (『A』上位)

幸運 B (『B』中位)

宝具 無し

スキル

魔力察知：B

周囲の魔力を察知する能力。

Bならば魔法の使用や魔力溜り、儀式を行っている場所を探知でき

る。

雷光：A

バラキエルから受け継いだ能力。

Aランクになると上級悪魔をも葬る事が可能。

魔法：A

魔力を運用した術式の知識と手腕。

Aならば天候を操作する事が可能。

人間であれば『大魔導士』の称号を得るであろう腕前。

電波結界：C

自身の身体の周辺に特殊な電波による結界を張り、物理攻撃を事前に察知する能力。

Cならば、一流の武術家の攻撃を察知できる。

必殺技

極楽鳥（出典 アカツキ電光戦記）

鼎二尉より伝授された技。

飛び上がり相手を掴み、空中で相手の顔に膝を当てて頭から地面に叩き付ける。

単発でも機能するが四方投げからの連携にも使用できる。

朱乃は膝に雷撃を集中させるため、さらに威力が増す。

螺旋四方投げ（出典 アカツキ電光戦記）

鼎二尉より伝授された技。

相手の腕を捕って自身を中心に振り回し、体勢が崩れたところを空中に放り投げる。

ここから空中に飛んだ敵に極楽鳥で追撃するのが基本パターン。

呼吸投げ（出典 アカツキ電光戦記）

鼎二尉より伝授された技。

相手の攻撃を受け流すと同時に腕を捕り投げ落とす。

当て身投げと同じく返し技であり、打撃が得意でない朱乃の生命線となっている。

超必殺技

ゲージ1消費

エレクトリツガー（出典 ザ・キングオブファイターズ）

二階堂紅丸との対戦で修得した技。

相手を掴んで、天に逆流するほどの高圧電流を流し込む。

これで相手の動きを止めたところで螺旋四方投げに繋り、極楽鳥で
めるのが朱乃の必勝パターンである。

兵藤一誠

原作との違い

原作とは三勢力を取り巻く環境が大きく違う為、将来に不安を感じ
ている。

これは聖剣事件の折にダーナ神族の襲撃を目の当たりにした事、そ
して自身の住む駒王町で実際にテロが起きた事に起因する。

また、それらの事件に慎から聞かされた三勢力の現状が重なり、悪
魔社会に信用を置けなくなってきた為である。

自身の能力についても、ライザー・フェニックスでの敗北と聖剣事
件でただ避難するしかなかった事から自信が持てていない。

その為、色欲に惑わされることは少なくなり、自身を取り巻く情勢
の変化を察知し、より良い道を選ぶようにとする意志が芽生えている。

主であるリアス・グレモリーに対しては色香を抜きにして感謝して
おり、生涯を通じて仕えたいと思っている。

しかし、それ（自分が悪魔である事）によって自身の家族が不利益
を被るのを恐れており、その事が大きな悩みとなっている。

『赤龍帝の籠手』に関しては、悪魔将軍に代表される『無限の闘争』
の猛者を見ている為に、原作ほどその価値を認めていない。

戦闘スタイル

数か月前まで完全な素人だったことに加え、『無限の闘争』で憶えた
技の殆どが自己流の捨て身技ばかりな為、闘い方は撃たれながら殴り
返す喧嘩屋のようなスタイルになっている。

しかし、防御を捨てた捨て身の一撃だからこそその威力と『赤龍帝の
籠手』の倍化が噛みあえば、ジャイアントキリングも十分狙える爆発

力を持つ。

回避に関してはまだまだ素人同然、防御に関してはライザー戦に向けた合宿で慎に鍛えられたので、それなりに熟すことが出来る。

亀のように防御を固め、『赤龍帝の籠手』の倍化が溜まったら、相討ち覚悟で一撃を叩き込むのが基本戦術である。

ステータス (F a t e 風)

(※各パラメータの横についている○は無限の闘争内のランクに変換した数値である)

筋力 C (『C』中位)

耐久 B (『B』底位)

敏捷 D (『D』中位)

魔力 E (『E』下位)

幸運 C (『C』中位)

宝具 無し

スキル

龍のオーラ：D

赤龍帝ドライグの氣を纏う事ができる能力。

Dならば肉体の筋力、耐久力を強化する。

また、このレベルであれば周囲への影響はない。

痛覚抑制：D

『無限の闘争』初回特典『皆殺しのトランプット』の副作用。

相手の攻撃を物ともせず、に打撃を叩き込むという技の特性からくる副次効果。

Dならば、本来感じる痛みの2割を軽減する事ができる。

赤龍帝の重剛撃：A

『赤龍帝の籠手』の倍化能力を一撃に集約する事により、通常の倍化を上回る効果を生み出す技能。

Aならば、通常倍化の2倍(2倍で使用した場合は4倍。4倍で使用した場合は8倍)に相当する一撃を放つことが出来る。

しかし、限界を超えるような倍化で使用した場合、反動により肉体が損傷・崩壊する可能性がある。

必殺技

皆殺しのトランペット（出典 墮落天使）

『無限の闘争』初回特典で修得した技。

本来は壬生灰児という痛覚神経がマヒした用心棒のもの。

大きく足を広げ、相手に背中が見えるほどに振りかぶった右拳を強烈な突進と共に叩き付ける捨て身の一撃。

使用時は使用者の体力が尽きるか、投げられて両足が地面を離れない限り、攻撃を受けても止まらない。

カンフー山靠（出典 MUGEN）

カンフーマンとの対戦で修得した技。

相手の懐深く踏み込み、低い体勢から全身のバネを使って肩と背中を叩き付ける『靠』と呼ばれる中国拳法の体当たり。

カンフー突き手（出典 MUGEN）

カンフーマンとの対戦で修得した技。

振りかぶることなく、腰の回転を活かして放つ中段掌底。

漢のナツクル（出典 BIGBANG BEAT）

陣内兵太との対戦で修得した技。

一度天に手を翳したのちに、素早い踏み込みと共に拳を放つ

漢対空（出典 BIGBANG BEAT）

陣内兵太との対戦で修得した技。

拳を天に突き上げて螺旋状に飛び上がる。

昇竜拳によく似ているが拳を自分の真上に突き出している為、有効範囲はさらに小さい。

イツセーキック（出典 BIGBANG BEAT）

陣内兵太との対戦で修得した技。

正式名称は『兵太キック』

ポーズを決めた後、空中に飛びあがりながら身体の捻りを活かしたサイドキックを放つ。

超必殺技

カンフースマッシュアッパー（出典 MUGEN）

カンフーマンとの対戦で修得した技。

右拳に力を溜めて、全身のバネを活かして放つアツパーカット。
食らうと相手は大きく空中に吹き飛ばす。

ゲージ3消費

イツセー百年ナツクル（出典 BIG BANG BEAT）

陣内兵太との対戦で修得した技。

本来の名は『兵太十年ナツクル』

自身の寿命が百年縮む程の力を込めた右拳を放つ技。

使用の際、何故か本人の背後に自身のサクセスストーリーがダイ
ジエストの様に浮かび上がる。

また、使用すればその反動で肉体は瀕死にまで追いやられるので、
仲間の看護がない状態で使うのは自殺行為。

サイラオーグ・バアル

原作との違い

原作では我流の喧嘩殺法だったが、『無限の闘争』でリョウ・サカザ
キを師事し『極限流空手』に入門している。

魔力を持たず、母親共々冷遇されているのは原作と同じ。

家族や家臣たちが魔力のみを見る中で自身の肉体と才覚を評価し、
時に厳しくも優しく成長を見守ってくれたリョウを父の様に慕い尊
敬している。

これは父親がサイラオーグとその母に、全くと言っていいほど関心
を持たなかったことの反動でもある。

その為、バアル家への関心も情も薄く、家族と呼べるのは自身の眷
属と母親だけと考えている。

また、能力が評価されずに虐げられてきた眷属と自身の経験から、
冥界や悪魔社会に嫌気がさしており、家族を養っていけるのなら別の
場所で生きてもいいと考えている。

当然のことながら爵位や魔王の地位には興味は無いし、冥界の改革
など考えていない。

その為、母の病が回復した現在では他の神話や地上への亡命も視野

に入れている。

現在の夢は眷属と共に極限流空手をこの世界に普及させる事。

そして、その活動を通じて自分のような境遇の子供達の助けになればと考えている。

戦闘スタイル

リョウ・サカザキから伝授された正統派極限流空手を使う。

『無限の闘争』の経験も長く対戦経歴も多岐にわかるが、対戦相手から得た技をそのまま使用することは無い。

使えると思った技は、必ず極限流にアレンジして使用している。

なお、空手家としての誇りからレグルスは使用しない。

恵まれた体格と豊富な氣、そしてぶ厚い拳から放たれる極限流の技はその全てが必殺の威力を秘めており、我流で磨いていた原作よりも総合的に力は増している。

ステータス (F a t e 風)

(※各パラメータの横についている○は無限の闘争内のランクに変換した数値である)

筋力 A (『A』中位)

耐久 A (『A』底位)

敏捷 B (『B』中位)

魔力 (氣) A (『A』中位)

幸運 D (『D』中位)

宝具 無し

スキル

頑強：A

日々の弛まぬ鍛錬で鍛え抜かれた鋼の肉体。

Aならば氣を通せば生身で刀剣を受け、銃弾は皮膚を通さない天然の鎧と化す。

氣功闘術：A

始皇帝の時代、秦の將軍『秦王龍』によつて創始された氣を使った武術。

『龍虎の拳』『餓狼伝説』の世界にある氣を使用する流派は、いずれ

もこの氣功闘術の流れを汲む。

氣を制御する事によつて超人的な身体能力を生み出す他、氣を収束し放つことが出来る。

Aならば達人級の使い手である。

特殊技

ジャストデイフェンス（出典 餓狼MOW）

腕に氣を収束させて攻撃を捌く技術。

元は『餓狼MOW』のシステムを現実世界に対応させた物。

技を捌くと同時に、氣の流れを調節して、その威力を自身の氣として吸収する。

成功すればガードのダメージはなく、取り込んだ氣の効果で体力も回復する。

中国の氣功術で言うところの化勁の一種といえる。

ブレイキング（出典 餓狼MOW）

体内の氣を調整して、特定の必殺技の撃ち終わりの隙を強制的に打ち消す技術。

元は『餓狼MOW』のシステムを現実世界に対応させた物。

サイラオーグの場合は虎砲が対応しており、使えば宙高く飛び上がるのを踏み留まる事ができる。

必殺技

虎煌拳（出典 龍虎の拳）

リョウ・サカザキより伝授された極限流の奥義。

大きく振りかぶりながら右手に氣を集中し、放つ技。

極限流の基礎といふべき技であり、その名には『虎（ライバル）を敬う』という意味がある。

飛燕疾風脚（出典 龍虎の拳）

リョウ・サカザキより伝授された極限流の奥義。

その場でしゃがみ込むような動作の後、氣で強化した脚力を使って腹部へ向けて飛び足刀蹴りを放つ。

そして足刀蹴りが入ると同時に、蹴り足を軸にしてもう一方の足で相手のコマカミを刈り取る。

斬烈拳（出典 龍虎の拳）

リヨウ・サカザキより伝授された極限流の奥義。

無数の拳を散弾の様に放つことで相手を宙に打ち上げ、落ちてくるところにメのアツパーを叩き込む。

飛燕龍神脚（出典 龍虎の拳）

サイラオーグが自身の得た技をアレンジして修得した技。

師のライバルであるバート・ガルシアと同名の技であるが、同氏から伝授されたモノではない。

リヨウから伝え聞いた話を元に、サイラオーグが『無限の闘争』で得た技をアレンジしたものである。

オリジナルとは違い、斜めに急降下する氣が籠った足刀が当たると逆の足で回し蹴りをはなつ。

虎砲（出典 龍虎の拳）

リヨウ・サカザキより伝授された極限流の奥義。

氣を込めたアツパーを放ち、振り抜くと同時に天へ飛び上がる。

超必殺技

ゲージ1消費

霸王翔吼拳（出典 龍虎の拳）

リヨウ・サカザキより伝授された極限流の奥義。

全身の氣を両腕に集中し、自身の身の丈ほどの巨大な氣弾を放つ。込められた氣の強さから、生半可な飛び道具は全て貫通して相手に襲い掛かる。

ゲージ2消費

真・霸王翔吼拳（出典 龍虎の拳）

Mr. カラテとの対戦の際により開眼した極限流の奥義。

いわゆるMAX版霸王翔吼拳。

自身の込められる限界まで氣を注ぎ込んで放つ巨大な氣弾。

その威力と密度は、Mr. カラテの放った霸王至高拳を二発も貫通した。

ゲージ3消費

龍虎乱舞（出典 龍虎の拳）

サイラオーグが悪魔将軍との対戦で開眼した究極奥義。

極限状態において研ぎ澄まされた闘争本能を解き放つ事によって一種のトランス状態になり、疲れや痛みを感じる事無く闘神の如く闘い続ける極限流の究極の境地。

しかし、サイラオーグはまだ未熟であり、己の意志でトランス状態の入切が出来ない。

その為、一度発動すれば相手を倒しきるか自身が倒されるかしなければ、止まることが出来ない。

閑話 『駒王神社業務日誌』

駒王神社の社務所の机に、使い込まれた日記帳が一つ。
表題には『駒王神社業務日誌』と記されている。

◇

6月●日（晴）

頭が痛いし胃も痛い。

今日、出張を終えて帰って来ると、鳥居のところうすくまで蹲うすくまっている身重の悪魔を発見した。

黒髪に十二分に美人と言える東洋人風の風貌、巫女服を着ている事から転生悪魔とは当たりを付けたが、はぐれ悪魔である可能性も否めない。

万が一の事も考えて警戒しながら進んでいると、こちらを発見した相手に土下座で命乞いされた。

不審者とは言え身重の女にここまでされては流石に手は出せず、取り敢えず社務所で事情を聞く事に。

正直、ここで手を出さなかったのは本当に正解だったと思う。

彼女の名はくしはしせいな櫛橋青奈。

五大宗家が一つ、東の守護を司る神獣『青龍』の力を受け継ぐ櫛橋家。

その宗家直系の令嬢だったらしい。

何故過去形なのかというと、旧七十二柱30位フォルネウス家の次期当主ゼーロス・フォルネウスに誘惑され、転生悪魔になったからだ。

なんでも呪術への高い適性があったものの、当主候補である他の兄弟に比べて能力が劣っていた彼女は、いつ見込み無しの烙印を押されて家から捨てられるかと常に怯えていたらしい。

そんな中でゼーロス・フォルネウスと偶然出会い、彼に惹かれた青奈女史は悪魔の駒を受け入れて櫛橋家を出奔しゅつぽん。

しかし、神器も持たず呪術の修行も中途半端だった彼女は、与えら

れた『僧侶』としての役割を十全にこなすことが出来なかった。

レーティングゲームの中で捨て駒として囚せつこうや斥候せつこうを命じられる一方、ゼーロスの情婦でもあった彼女は彼の子を身籠みこもってしまう。

ゼーロスを愛していた青奈女史は喜びと共に奴にこの事を伝える。しかし、返つて来たのは嫌悪の表情浮かべたゼーロスの『墮胎だたいしろ』という命令だった。

この一言でゼーロスが己を愛していない事を悟った青奈女史は、万が一の為に隠し持っていた転移符を使ってフォルネウス家を脱出。偶然、駒王町に転移した彼女は櫛橋家に帰る事も出来ず、ウチの前で途方に暮れているところを俺に見つかつたらしい。

拾つた女性は核弾頭付きの地雷だつたでござる。

日本から立ち退かない不法滞在悪魔やはぐれ悪魔問題でガツツリ悪魔へのヘイトが溜まつているのに、なんでこんな不祥事が起きるのか……。

天照様に報告したら、爺ちゃんに相談しよう。

6月■日（雨）

爺ちゃんが青奈女史と顔見知りだつた件。

昨日、爺ちゃんに連絡したところ、明日（今日の事だ）朝一で迎えを超越すから、青奈女史を連れてこいと返答があつた。

とはいえ、鍛錬を休まず行う。

日々の積み重ねこそが強さに繋がるのだ。

まあ、時間が無いので今日も『狂ランク千人組み手』なんだから、本日の戦果。

対戦相手：ベジータ

ノーマルモード相手に10倍界王拳で必死に食らいつく。？ ベジータの忍耐が限界突破？ これがスーパーベジータだああ!!? ワンパンであべしつ!?

うーむ、まだまだ戦闘民族の域には達していないらしい。

超サイヤ人相手とはいえ、一撃死とは格好が悪すぎる。

精進せねば……。

シャワーで血とか体の中の内容物を洗い流し、身支度を整えたところ

ろで爺ちやんの使いが到着。

姫島の別荘に着いた俺達を迎えたのは爺ちやんと婆ちやん、当主の朱雀さんすざくだった。

聞けば、青奈女史と朱雀さんは幼馴染の親友という間柄だそう。涙ながらに再会を喜ぶ二人を他所に、爺ちやんと青奈女史の今後について話し合った。

俺の相談を受けた後、爺ちやんは青奈女史と櫛橋家について調べたそうなんだが、なんと数年前に青奈女史の死亡届が出されていたらしい。

勘当かんどうを通り越して死亡届とか、旧家って怖え。

しかし、これには参った。

青奈女史は公的には死人という事になる。

腹の中に子供がいるのに、現状では病院に掛かる事も出来やしない。

内心頭を抱えながらも青奈女史の意見を聞いてみると、彼女は冥界に帰らずに日本で暮らしたいらしい。

五大宗家同士のしがらみで姫島では青奈女史は預かれなないので、取り敢えず爺ちやんが死亡届の取り消しと戸籍回復の法的手続きを行い、その間は俺のところに来てもらう事になった。

まあ、ウチは表向きには姫島と関係ないしフォルネウス家が追手を差し向けてきた場合、こちらで保護したほうが安全だろう。

帰り際に朱雀さんから迷惑をかけて申し訳ないと頭を下げられたので、気にするなど言っておいた。

巻き込んだのはこちらなんだし、この程度は請け負わねばなるまい。

6月●×日（晴）

本日の千人組み手。

対戦相手：キングギドラ

12倍に限界が上がった界王拳をフルに使って狂雷迅撃掌を放つが、首の鱗が2、3枚剥がれただけで終了。

奴さんは痒そうに隣の首でカリカリ搔いてました。

秘奥義とはいったい……。

その後、真ん中の首に噛みつきからのゼロ距離引力光線でティウンティウンした。

うん、体格差って偉大だよな。

対抗するにはサイズ補正無視が必要みたいだ。

スパロボのキャラクターなら持つてるかもしれないので、当たってみるか。

先日からウチの居候になった青奈女史。

その境遇と五大宗家の事を伏せているお陰で、ウチの女性陣との仲は良好である。

黙っておくわけにもいかなないのでリアス姉にこの事を報告したところ、自分が対処するから引き渡せと言ってきたが拒否した。

リアス姉、聖剣事件の時に交わした条約で、日本にいる転生悪魔の処遇は日本神話が管理することになっていてるのだよ。

青奈女史に関してだが、日本で生きていく以上『駒落とし』で人間に戻るべきなのだが、生憎と彼女は身重の体である。

一から肉体を再構成するあの術式を、何の準備も無しに妊婦に掛けるのは危険が大きすぎる。

ある程度目途が立つまでは保留すべきだろう。

6月●■日(曇り)

本日の千人組み手。

対戦相手：トキ

ジョインジョイントキイデデデデ ザタイムオブレットビューション
バトローワンデツサイダデステニー

ナギツペシペシナギツペシペシハアーンナギツハアーンテン
シヨールヒヤクレッツナギツカクゴオ

ゲキリユウデハカテナギツナギツゲキリユウニゲキリユウニミ
ヲマカセドウカナギツカクゴールハアーンテンシヨウヒヤクレッツケン
ナギツハアアアキーン

テールッテールホクトウジョールハガンケンハアーンFATAL K.

O. セメテイタミヲシラスニヤスラカニシヌガヨイ ウィーント

キイ (パーフェクト)

……何が何だか分からん内にボコボコにされたうえ、最後は有情破顔拳で『チニヤツ!』ってなった。

あれが北斗神拳。

あれだけ攻撃しといて気配を全く感じないとか、理不尽にも程があるだろ。

ていうかアへ顔晒して爆死とかナイワー。

秘孔には氣脈も関連しているようだし、早いところ秘孔封じの方法を考えねば……。

明日から地上げの為に遠野へ出張である。

なんでも悪魔に座敷童ざしきわらしが囚とらわれているとか。

こつちの事もあるし、早急にかたをつかねばなるまい。

青奈女史に関しては玉藻と美朱に任せておいたので心配ないと思う。

あと、黒歌からはぐれ悪魔になった際の情報を聞いとかなきゃな。

6月●◇日(雨)

緊急の呼び出しの為、日誌は記載できず。

詳細は事が落ち着いてから。

6月●☆日(雨)

本日の千人組み手。

対戦相手：ARCHETYPE：EARTH

良い子のみんな。

生き物をいきなり真空状態に放り込むと、その健康に多大な悪影響を及ぼしてしまうから、絶対にやってはいけない。

お兄さんとの約束だ!

接近戦を挑もうとしたら、いきなり目の前に真空の断層が出てきたでござる。

さすがの俺も、生身で宇宙空間と同じ環境では生きられない。

前回のトキと同じく爆発オチなんてサイテー!

ていうか、アーキタイプ・アースって誰だよ!?

愚痴はこの辺にして先日起こった事を纏めよう。

遠野への出張は特に問題なかった。

座敷童の能力はその家に富と幸運を与える事だ。

戦闘に関する付加は無かったので、舞空術で不法滞在している悪魔のヤサまで行って頭上から強襲。

相手がアクションを起こす前に叩き潰した。

助けた座敷童から『礼としてお主の家に憑いてやろうか?』と言われたが、故郷から引き離すのも悪いしこちらだと荒事に巻き込まれるので、やんわりと辞退しておいた。

で、駒王町に帰って来るとすぐに少彦名様すくなひこなに番所に来るように言われた。

なんでも高天原の指示ではぐれ悪魔を捕まえているので、そいつに駒落としをかけてほしいとの事。

少彦名様を伴って番所の地下牢に行くと、蟻人間ありみたいなのが鎖につながれていた。

相手が抵抗しない様に魔のシヨーグン・クローを掛けつつ『駒落とし』開始。

この件は高天原が計画している『転生悪魔救済策』の一環なんだろう。

しかし、ここまで変質した者が元に戻るのかと疑問に思っていたが、そんな懸念は無用とばかりに施術は成功。

蟻人間は30代くらいの平凡な日本人の男性へと戻った。

男は初めは何が起こったのか理解できない様だったが、自身の状態を認識すると傍らかたわに落ちていた兵士の駒を思い切り踏み付けた。

鬼気迫る表情で自身の主だった悪魔や同僚への罵倒を叫びながら、親の仇の様に何度も何度も悪魔の駒を踏みつける男。

駒が耐えられずに壊れると、彼はその場に崩れ落ちて地下牢全体に響く程の大声で号泣し始めた。

その様子によほどの事情があるのだろうと判断した俺達は、彼が落ち着くのを待つて事情を聞くことにした。

応接室で彼から聞いた話はこうだ。

男性は東京に住む普通のサラリーマンだったが、ある時巻き込まれ

た交通事故で致命傷を負った。

自身の死を自覚していた彼は観念して意識を手放したのだが、次に目覚めると石造りの牢屋の中だった。

状況の理解できない男にウアプラという家名の悪魔を名乗る女は、彼が悪魔に転生した事を伝えて下僕となる事を強要してきた。

男性は当初拒否していたのだが、女とその部下から与えられる私刑に耐えられずに嫌々ながら承諾。

牢から出たと思ったら、今度は自身に神器がある事を教えられ、それを覚醒させるために無茶な訓練を強いられた。

命からがら神器『闇夜の大神』ナイト・リフレクションに目覚めてみれば、防御系の神器という事でレーティングゲームでは前線の弾除け扱い。

あげく新参者という理由で主や眷属仲間からはもちろん、ウアプラ家の家臣からも虐げられる日々。

そんな扱いに耐えかねてウアプラ家を脱走した男性は、死ぬ思いで日本へ帰りつくことが出来た。

しかし、彼の不幸はそこで終わりではなかった。
地上に辿り着いてすぐ、男性は自身の異常に気が付いた。

身体は指先から肘までが甲殻に覆われたおぞましいモノに変化し、道行く人を見る度に異常なまでの食欲が湧くようになっていたのだ。

襲い来る体と心の変化に怯えながら各地を転々する男性。

だが、ホームレス同然の日々と異形の者へと近づいていく身体に、耐えようとする理性も擦り切れていき、駒王町に着いたのを最後に身も心も化け物になり果ててしまったそうさ。

ここまで語り終えた男性は久延毘古様くえびこと少彦名様に首を垂れ、懺悔をするかのように言葉を絞り出した。

『化け物になってから、女の子を一人殺めてしまった』と。

涙ながらの言葉と共に差し出した物は小学生の着ける名札。

そして、この子の両親に謝罪をして然るべき場所で罪を償いたいと慟哭する男に、俺を含めた番所の面子はかける言葉を持たなかった。

その後、文ふみさんの情報検索によって被害者の自宅が分かったので、俺と少彦名様、久延毘古様は男の謝罪に同行した。

今までもこういうった事はあつたのだが『子供は見る必要はない』と、付いて行くことは許可されなかつたのだ。

ただ、むこうで見た物はそれはもう酷いモノだった。

娘さんの名前を呼びながら半狂乱で泣き叫ぶ母親に、土下座していた男に馬乗りになつて、涙と共に殴り続ける父親。

普通なら信じない裏の世界の荒唐無稽ことうむげいな話も、久延毘古様達の異様が証拠となつて受け入れられてしまった。

俺も父親を止めようとした時と、監査官として謝罪した時に殴られた。

肉体的には全く効かないはずなのに、あの拳は酷く痛かつた。

久延毘古様達が俺等年少組を連れて行かなかつた理由が解つたよ
うな気がした。

その後、被害者宅を離れた男は腫れ上がった顔のまま警察署に足を運んだ。

少彦名様が言うには、裏の事件なので立件は難しいらしい。

それを聞いた男は、有罪無罪に関わらず出家して生涯被害者を弔うつもりだと言つていた。

本当に、後味が悪い事件だった。

6月●@日（晴）

本日の千人組み手。

対戦相手：バルバトス・ゲートイア

昨日の事を引きずつて凹んでいたメンタルごと、三連殺からワールド・デストロイヤーで吹っ飛ばされました。

ありがとうございます、CV若本。

お陰で素早く立ち直ることが出来ました。

少年誌の不良漫画にボコボコにされて立ち直るつてシチュエーションがあるが、自分が体験するとは思わなかつた。

まあ、こっちはボコボコどころか塵も残さず消し飛ばされたんですが。

さて、今日は朝一で番所に足を運んだ。

理由は黒歌からはぐれ悪魔についての情報を得るためだ。

昨日は聞く機会がなかったが、男の話を聞いて一つ疑問に思う事があった。

それは『同じはぐれ悪魔なのに、何故黒歌は異形にならなかったのか』だ。

猫？^{ねこしやう}の持つ種族故の特性か、もしくはあいつが仙術と呼んでいる氣功術の賜物^{たまもの}か。

恐らくはこのどちらかだろう。

さて、件の黒歌（現在の偽名は美依^{みい}）に問いただしたところ、答えはやはり氣功術だった。

黒歌曰く、悪魔の駒には受領する際に所有者の魔力が登録されており、眷属の体内に埋め込んだ後も所有者と駒は魔力で繋が^{つな}がっているらしい。

そして所有者の魔力が途切れると駒の内部にある術式が起動し、宿主の体を侵食して化け物に変えてしまうらしい。

黒歌は内氣功の効果によって浸食を抑えながら逃亡生活を続け、駒を摘出する手段を探していたらしい。

ちなみにこの情報は、駒を解析していた墮天使の施設から仕入れたものらしい。

なるほど。

『駒落とし』の源も氣である事を思えば、関係があるのかもしれない。

黒歌の話が本当ならば、青奈女史の中にある悪魔の駒を放っておくわけにはいかない。

異形化が始まって『偽典^{ぎてん}・女神転生』屈指のトラウマである母子合体悪魔みたいなものになられたら、こっちの精神がマツハだ。

とはいえ、このまま取り出せば青奈女史はともかく、魂と肉体の形が決定していないお腹の子の命が保証できない。

……これは天照様に一肌脱いでもらう必要があるか。

ここ最近ブラック企業も真っ青なこき使い方をしてくれているのだ、嫌とは言わせん……!!

本日の千人組み手。

対戦相手：拳王様

『世紀末小パン王』とか嘘でした。

向かって行った途端に風のヒューイの如く拳の一撃で体力はレツドゾーン。

体勢を立て直す暇も無く、てんしょうほんれつ天将奔烈で『あろっ!?』と逝きました。……なんかこの業務日誌が俺の修行のDIEジエストになっている気がする。

こうまで連敗記録を伸ばすとは、俺もまだまだ弱者という事だろう。

強者への道は長く険しい。

さて、先日の続きである。

いつものように地上げを熟して高天原に乗り込んだ俺は、天照様の伝で強力な助っ人を用意してもらった。

このはなさくやひめ木花咲耶姫様ときくりひめ菊理姫様が来てくれたのだ。

この二柱は共に安産を司る女神様、施術の際にお腹の子に何かあった時は護ってくれるだろう。

さて、これに薬学・医学に明るい少彦名様がいれば備えは万全だ。

これから本人に説明するから、準備等の時間を考えれば施術は明日の夕方になるだろう。

よっしゃ、気合をいれねば!!

6月●%日(雨)

患者の容態が急変。

これより緊急の施術を開始する。

詳細は後ほど。

6月●π日(雨)

本日の千人組み手。

対戦相手：デスIIアダー

名作アクションゲーム『ゴールデンアックス』のラスボスである。

相手は右手に斧、左手に盾を持った巨漢なのでクロスレンジでの勝負を仕掛けたら、鬼のようなブロッキングで捌きまくられた。

そして、攻撃を当てても謎の『食らいキャンセル』で背後に回られてボコボコに。

最後は『ダンジョン&ドラゴンズ』のラスボスそっくりの竜を呼びだされて、ブレスでこんがり上手に焼かれてしまった。

……ブロッキングを使っている身でいうのはなんだが、現実で『食らいキャンセル』とか卑怯だと思うの。

いや、この理不尽さこそがMUGENの醍醐味だいごみ、乗り越え甲斐があると考えよう。

さて、恒例のDIEジエストも終わった事だし、本来の業務日誌に戻るとしよう。

昨日の昼に青奈女史の容態が急変した。

彼女が足に激しい痛みを訴えて来たので確認してみると、脚部が一つに融合し、蛇のように鱗が現れ始めたのだ。

黒歌や男の言っていた異形への変態が始まった事から、俺は悪魔の駒を摘出する事を決断。

青奈女史を本堂に運び、木花咲耶姫様と菊理姫様を呼んで施術開始。

こっちは『駒落とし』に集中しなくてはならない為、お腹の子に關してはお二人にお任せした。

結果から言うと施術は成功。

青奈女史は異形になる前に人間に戻る事が出来た。

お腹の子も一時は危なかったが、姫神のお二方の力で何とか一命を取り留めた。

ただ、術の影響で父親の遺伝子が消えた為に、青奈女史のクローンに近い形で生まれてくるとの事。

シヨックを受けるかと思っていた青奈女史は、この子が元気で生まれてくるならそれでいいと涙を流していた。

空気が読めないのは重々承知で父親について訊いてみると『あんな下種の事はもうどうでもいい。むしろ、この子に奴の影響が無くなつてせいせいした』という答えが返ってきた。

まあ、お腹の子を『降ろせ』なんて言われれば、千年の恋も醒める

か。

姫神様二人をお見送りした後で念のために青奈女史を産婦人科に連れて行ったところ、母体の血圧がかなり高くなっていたらしくそのまま入院と相成った。

入院の手続きをして、必要な物を美朱に必要な物を見繕って持つてくるように伝えた後、爺ちゃんに報告。

悪魔の駒の副次効果には肝を冷やしたみたいだが、施術の成功と母子共に命に別状はない事を伝えたと、ホッと胸を撫で下ろしていた。

青奈女史が入院した旨を伝えたと、健康保険証が無い事を気にしたのか費用は後で返すと言われた。

事の発端はこっちなので出すつもりだったのだが、断るのは失礼と思ったので言葉に甘えることにした。

この件に関して俺の出来る事はここまでだろう。

青奈女史の今後については爺ちゃんと朱雀さんにおまかせだ。

6月●√日(晴)

本日の千人組み手。

対戦相手：さいごのスターマン

今回の相手は懐かしの名作RPG『MOTHER2』の極悪敵キャラである。

何が極悪かって、シールドβ(打撃と投げのダメージをそのまま跳ね返す)とサイコシールドβ(飛び道具反射)を張りまくる上に、辺り一面に星形のエネルギーを雨霰と降らせるのだ。

さらに、謎の仲間を呼びまくって弾幕を張るわ、それに混じってこっちが無防備になる精神攻撃を仕掛けてくるわとやりたい放題。

拳句、即死級のエネルギー弾で面制圧とかどうしろと……？

今回は相手に触れる事無く敗北してしまった。

やっぱり、俺ってまだまだ弱いなあ。

今日も今日とてお仕事である。

出張の準備を終えて出ようとしたら、リアス姉から連絡が来た。

なんでもフォルネウス家の使いが部室に来ているので、事情を説明してほしいとの事。

出張先の飛行機の時間には余裕があつたし、今後もちよつかいを掛けられるのは面倒なので話を付けに行くことに。

部室の応接室に入るとリアス姉の他に初老の執事が一人。

執事は何やらごちやごちやと話していたが、要するに『青奈女史はウチが出したはぐれ悪魔だからこちらで始末する。黙って身柄をよこせ』と言いたいらしい。

色々言いたい事はあつたが揉めても時間の無駄なので、青奈女史から取り出した僧侶の駒を渡して『化け物に変質したから始末した』と伝えた。

『駒落とし』を除いて、悪魔の駒は宿した者が死なない限り、取り出すことはできない。

あの駒は青奈女史が死んだことを示す何よりの証拠という訳だ。

駒が本物であることを確認した執事は、リアス姉に礼を言つて冥界に帰つていった。

これでもう青奈女史に追手が掛かる事はないだろう。

万が一向こうが手を出そうとしても、今や青奈女史も生まれてくる子も人間だ。

こつちも大手を振つて叩き潰すことが出来る。

リアス姉は何か言いたそうにしていたが、飛行機の時間を理由に部屋を後にした。

少しばかり不義理だとは思つたが、『駒落とし』は日本の最高機密だ。

こればかりは仕方がない。

さて、出張先の終わった事だし明日は久々のオフだ。気分を変えて長崎観光としゃれこむでしょう。



日誌の記述はここで終わっている。

21話

「では、これより各神話勢力合同サミットを開催いたします」
各神話の主神が集まった席の中央に立つ日本の主神、天照大神様あまてらすおおみかみの発した号令が会議室に響き渡る。

先ほどまでとは違う引き締まった空気の中、教室の隅に用意された三勢力用の椅子に腰かけながら俺は深々と溜息を吐いた。

スッゲー居心地が悪い……。

しかし、なんで俺ここにいるんだろうか。

俺って悪魔歴3カ月の駆け出しの下っ端ですよ？
神滅具ロンギヌスとかい

うチートアイテム持っても指先一つで死んじゃう超クソザコですよ？

そのチートアイテムにしても、後輩のパワーアップが『ドラグ・ソ
ボール』の空孫悟そらまご並みにインフレしてて役に立たないし。

というか、アイテムの中に住んでるドラゴンが『あいつに勝つの無理』って白旗挙あげましたから。

《相棒、事実でもそんな事は言わないでくれ。虚しくなる》

……ああ、名乗りが遅れてすみません。

俺、兵藤一誠って言います。

駒王学園の高校2年、オカ研所属の悪魔です。

あと、さっきの声は今言ったアイテム『赤龍帝ブーステッド・ギアの籠手』に住んでるドラゴンのドライグ。

俺共々ともどもまるでダメな男、略してマダオです。

《その呼び名はやめろ。何故か心にグサツとくる》

はいはい、やめますよ。

……え、普段よりテンション低いって？

そりゃあこんな場違いな所にいたら大人しくもなりますって。

いや、理由は解と解とっているんですよ。

今、壇上だんじょうで座まっている部活の後輩、姫島慎ひめじまが世界最強の龍をソロで狩る現場を見ちゃったからなんスけどね。

とは言え、俺は主であるリアス部長のお供でしかないし、それ以前

に所属している団体が強烈にハブられてるから話に混じることが出来ない。

やる事と言えば、

「嘘です……主が失われたなんて……。あんなの、何かの間違いに決まっています……」

カテレアとかいう女悪魔がポロリと漏らした『聖書の神の死』にシヨックを受けているアーシアを撫でてやる事と、

「……………」

後輩のあまりの非常識さに屍状態になつたりアス部長の看病からいだ。

「会長！ しつかりしてください、会長!!」

「明訓……甲子園……ホームラン……殿馬、野球の練習を……」

「殿馬って誰なんすか!?!」

部長と同じくダウンした支取会長を看病している、会長眷属の兵士である匙の声が聞こえる。

匙よ、お互い苦勞するよな……。

正直、部長達の気持ちはわかる、超わかる。

対戦相手をバットで『シユウウーツ!! 超！ エキサイティン!!』するのはまだいい。

バットを武器にする奴だって、世界のどこかにいるだろうから。

けど、アニメのオープニングが流れるってのは、どういう事だよ!! あれを見た瞬間、俺達はもちろん、会場内の神様達も『どういうことなの?』状態だったんだぞ!

しかも、やった本人はゆうゆうとダイヤモンド一周してるし。

あんな、どう見てもギャグにしか見えない技でやられたクル……なんとかさんは、マジに気の毒でならない。

《あれにはさすがの俺もたまげた。一応言っておくが、お前も食らつたら一撃死だからな》

やめろよ！ あんな死に方、絶対嫌だぞ!!

死ぬときはでかいおっぱいに埋もれながら、と決めてるんだ。

《お前が見ていたアニメで、それと似たようなセリフを吐いてた奴が

死んだな。タイトルは『鉄血のなんとか』といったか》

……ドライブ、お前は俺に恨みでもあるのか。

《それよりもお前、聖書の神が死んだと聞いたのにショックを受けてないな》

ん？ 俺って元々神様信じてないし。

そりゃあ驚きはしたけど、それに関しては何しろ納得がいったって感じた。

《納得だど？》

ああ。

そもそも、聖書の勢力がここまで拙い状態になってるのに顔を出さない時点で不自然だし、俺やアジアみたいな悪魔や墮天使のせいで不幸になる人がいるのに、助け舟の一つも出ないのも妙だ。

聖書の神がいたとしたら、神に興味なんてなかった俺はともかく、敬虔な信徒であるアジアに救いの手が伸びなくちゃおかしいだろ。《まあ、奴が生きていたとしても、信者一人に手を差し伸べることはないだろうがな》

マジかよ……。

何か聖書の神って悪評ばっかだな。

「では、『第三の無限』である姫島慎に挨拶をしていただきましょう」司会進行役の天照様が慎を呼んだ。

ホワイトボードを背に、みんなより一段高い位置に置かれた席から腰を上げる慎。

背広姿だからか、その姿からは普段よりも貫禄かんろくを感じる。

思えばあいつって、年下とは思えないくらい大人びてるんだよなあ。

あの年で一家の大黒柱やって、姉妹の学費と生活費稼いで、しかも仕事は神主だ。

っていうか、ライザーの時といいこの前といい、俺ってあいつに教えてもらってばかりで、先輩らしいこと何もしたことねえじゃんか。

「ただ今ま紹介にあずかりました、姫島慎と申します。各神話を束ねる偉大なる主神の方々と見まえられたことを誇りに思います」

名だたる神々を前にスラスラと挨拶あいさつをする慎。

あいつ、本当に俺より年下なのか？

実は二十歳越えてるって言われても信じられそうな雰囲気を出してるんだが。

《奴を常人と一緒にするな。世界最強の『無限』だぞ》

いや、それは関係ないだろ。

「諸事情が重なった結果、私は『無限の龍神』ウロボロス・ドラゴンオーフィスを打倒いたしました。勿論、それ自体はむこうが仕掛けてきたのを迎え撃つただけですので、誰はばかる事はありません。ですが、この結果が世界に混乱をもたらし、各神話の皆様方に多大なご迷惑をおかけしたこともまた事実。その事に関してつつし謹んでお詫び申し上げます」

机の後ろから出て、皆の見える位置で頭を下げる慎。

その姿に神様達から騒めきが起こる。

つうか、随分と腰が低いな。

地上最強っていうくらいなら、もっと威張ってるもんだと思ったんだけど。

「さて、各神話の神々をして『触れ得ざる者』と言わしめたオーフィスを倒した私を、皆様は警戒なさっている事と思います。そこで私が『何を求め、どう動くつもりなのか』をこれからお話ししたいと思いません」

そこまで言うと、慎は机の上に置いてあったコップから一口、茶を喉に流し込んだ。

「まず、私が求めるのは家族や知人との平穏な暮らしです。それさえ保たれているのならば、現状の世界で何かを変えようとは思いません」

慎の言葉に多くの神様達が意外そうな顔を擦る中、鎧を着こんだいか厳つい神様が手を上げる。

なんだろう。あの人を見ていると、寒気が止まらないんだが。

《あの神、龍殺しだな。気を付けろよ、相棒。俺を宿している以上、お前の体にも龍の特性が付与されているからな》

マジかよ!?! そう言えば、このまえアスカロンを見た時も寒気が

したよな。

弱点まで受け継ぐとか堪たまらんぞ、オイ!?

「アルメニア神話代表のヴァハグンだ、話の途中だが、無礼を承知で発言をさせていただきたい」

「ヴァハグン様。アルメニアが誇る龍殺しの英雄神ですね、お会いできて光栄です。どうぞ、遠慮なさらずお話しください」

「姫島慎殿、貴殿はそれだけしか求めないのか？ その力があれば、新たな勢力を築き世界に覇を唱える事も不可能ではないのだぞ？」

「質問にお答えします。ヴァハグン様がおっしゃった様な事をする気はありません。先ほどの旧魔王達にも言いましたが、私は生まれも育ちも小市民です。権力を得ても困るだけですし、富も普通に働いて稼ぐ分で事足りません」

慎の身も蓋も無い答えに、唾然とするヴァハグンや他の神様。

まあ、あれだよな。

神様に一般市民の気持ちをわかれっるのが無理だよなあ。

俺？ 俺はあいつの気持ちスツゲー分かるよ。

俺だっけ偉くなりたいし金も大事だけど、それって戦争してまで欲しいもんじゃないし。

まあ、『夢はハーレム』とか言ってる奴の台詞じゃないのはわかってるけどさ。

けど、改めて考えれば、悪魔社会で立身出世するって闘っての上がるって事なんだよなあ。

ハーレムは欲しいけど、やっぱり小市民にはキツイわ。

俺みたいな奴は綺麗でおっぱいのデカイ嫁さん貰って、普通に暮らすのが一番なのかなあ……。

いや、嫁候補なんていませんけどね。

ああ、いろはに言ったら付き合ってくれたりすんのかなあ。

《ふん。俺のオーラを使いこなすことが出来れば、雌などすぐに寄り付いてくるぞ》

ふざけんな！ お前の力で好きになられてどうすんだ。

俺自身の力で惚れてもらわなきゃ、意味無いだろうが！

《どうせやる事は同じだろうが。分からん奴だ》

うつせ!

「なるほど。其方そなたとその身内に手出しさえしなければ、敵対することは無いという事か」

「ならば、オーフィスと変わらんか。いや、社会というものを理解し交渉が出来るだけ、あ奴よりマシかもしれない」

神様達の騒めきと共に張りつめていた空気がゆつくりと緩くなつていく。

だが、それに水を差す者がいた。

「ふむ。逆に言えば、その身内に手を出せば我等に牙をむくという事になるのう。そして彼かの者の父親は墮天使の幹部、姉は転生悪魔。他にも三勢力に知人が山とおる。彼奴等を仮想的勢力としておる我々には、ちいとばかり都合が悪い話じゃわい」

腹の辺りまで伸びた白い髭しごを扱しきながら不穏な事を言い始める爺さん。

あれつて確か、RPGとかによく出るオーデインとかいう神様だったな。

せつかく無難に纏まとまりかけてたのに、空気読んでくれよ!

「ふん、確かにな。その辺をはつきりさせるには、ちようどいい機会だ。小僧、お前は有事の際は三勢力に与くみする気か?」

今度は黄土色の鎧を着たゴツイ神様が慎へ質問を投げかける。

ちよつ!? あんたその質問はダメだろう!

《まあ当然だな。奴らは聖書の勢力を目の敵にしている。あの小僧が付くかどうかで、これからの戦略が大きくかわるだろうからな》

「また厳しい質問ですね、ダグザ様。とは言え、お茶を濁しても皆様は納得しないでしよう」

苦笑いを浮かべていた慎は、一度、二度と呼吸を整えると真剣な顔で眼前の神様達を見据える。

「……方が一、皆様方が聖書の三勢力と戦端を開いた時は、私は彼等に与します」

瞬間、会議室の空気が凍った。

先ほどまでの穏やかな空気から一転して、肌が引き攣れるような張りつめた気配が会場を満たす。

それは目の前の神々が発する威圧なのだろう。

慎へ向けられた余波だけでも、正直腰が抜けそうだ。

《この程度の威圧で情けない奴だ。少しはあの小僧や白いのの相棒を見習え》

うるへー、俺は一般ピーポーなんだよ!!

「言い切ったな、小僧。それが我等全てを敵に回すのと同義である事はわかっているのだな?」

「正直、遠慮したいですけどね。厄介な事に恩人や知り合いが軒並み三勢力の要職に就いてるものでして、『身内だけ囲って三勢力とはおさらば』という訳にはいかんですよ。とはいえ、こちらは無条件で付くつもりはありません」

ダグザと呼ばれた神が兜の奥から放つ眼光を苦笑いで受けた慎は、いったん言葉を切ってこちらを向いた。

その目はいつも俺達に向けているモノとは打って変わって、此方を貫くような鋭い光を湛えている。

「三勢力各位には今から出す条件を飲んでもらう。これを拒否するのなら、俺は今後一切三勢力に助力するつもりは無い」

「……その条件とは?」

普段とは全く違う慎の様子に若干気圧されながらも、サーゼクス様が問いを返す。

それを受けて、慎はゆっくりと息を吸うと意を決したように言葉を紡ぎ始める。

「まずは天界から。天界および下部組織の教会には、今まで各神話から奪った宝物や武器を即時返還。また現在も行われている『聖剣計画』をはじめとした人体改造及び実験を停止してもらおう」

慎が提示した条件に、天使たちの顔色が変わった。

隣で固いモノが軋む音がしたので見れば、木場が怒りの表情で天使達を睨んでいる。

つうか、あいつ等まだ『聖剣計画』やってたのかよ!?

「随分とふざけた事を言いますね。こんな内政干渉も甚だしい条件を飲めるとでも?」

「飲めないなら構わんさ、何かあつても俺はそつちに付かないだけだ」
「言いがかりはお止めなさい! 我々の所有物の中には他の神話から奪った物などありませんわ!!」

不敵な笑みを浮かべる慎にミカエルの横に控えていた天使の女性が反論する。

「ていうか、おっぱいスゲエなあの人! 朱乃さんに匹敵するんじゃないか。」

話すだけでプルプル揺れて……眼福です、ありがとうございます!」
「お前という奴は……」

「あんた、時と場所を選んで発言した方がいいぞ。公の場で口にする以上、しっかりと裏は取ってるんだよ。北欧神話のシグルスが振るつた『魔剣グラム』をはじめとして、スウアフルラーメ王の『魔剣ティルヴィング』にヘグニの『魔剣ダインスレイブ』。さらに日本の三種の神器の一つ、『天叢雲剣』も持つてるよな。なんなら、保管しているブツの目録を出してやろうか?」

「なっ!? 我等が至宝の一つにまで、手を出しているのですか!!」

慎の言葉で天照大神様が椅子を激昂しながら立ち上がり、神々が騒めく中で顔色を無くす天使たち。

「こちらの魔剣を三振りも持ち出していたとはのう。慎殿、その目録を見せてもらえんかの?」

「ええ。玉藻、頼む」

「承知しました、ご主人様」

玉藻さんが傍らに置いていた鞆から取り出した書類を神様達の席に配ると、その騒めきが大きくなる。

「ところどころから『これは私の宝剣だ!』だの『これは我々の宝物!』だの『近頃は老眼が進んで見えにくいわい』なんて声が聞こえてくるんだが、あいつ等いったいどれだけの物を奪ってたんだよ。」

《前に姫島慎も話していたが、聖書の勢力は世界中の多神勢力を押しつけて信仰を広げて来た。奴らは意地汚いからな、その際の戦利品な

ど数多^{あまた}とあるだろうよ》

「聖剣事件があつたんで同じ事が起きるかもと探りを入れたんだが、ビンゴなんてもんじゃなかったな。まったく、いくら貯め込んでんだよ」

「よもやバル神の戦槌『ヤグルシ』もあるとはな。『無限』殿、どうやってこれを手に入れたのだ？」

「アスガルドに出張に行った帰りに、イタリアの協会本部と天界に寄って拝借してきたんですよ。これでも忍者の始祖の血を引いてるんで」

なんかエジプトっぽい金目のイケメンの質問に答える慎。

《あれはアメン・ラー。エジプトの太陽神にして主神だ》

ドライグ、解説ご苦労。

そう言えば、あいつ等ってそういう家系だつて言ってたって——
——うおっ!?

トンデモない寒気を感じて目を向けると、女神様の一人なのだろうヤギみたいな角を生やした女の人が、怒り心頭つて感じで会議室から出て行った。

今の人、スツゲー怖かつたんですけど。

物凄い美人なのに般若^{はんげ}みみたいな顔をして……正直、目が合ったら殺されると思った。

《その予感^{よかん}は正解だ。あれはウリガット神話の主神バルの妻にして、殺戮の地母神アナトという》

殺戮つて、なにその物騒な名前!?

《恐ろしいほどに気性の荒い女でな。戦争の祝勝会^{たかぶ}で気が昂つたと自軍の兵士を殺戮して、会場を血の海にしたという逸話があるくらいだ》

なにそれ、怖い!?

でも、バルつて慎の話に出て来たベルゼブブに墮とされた神様だよな。

奥さんの名前つて『アスなんとか』じゃなかったか？

《……アスタルテだ。古代の神は大体が一夫多妻制だからな、さつき

の女もバアル神の妻なのだ》

おおぅ……!! なんと羨ま……しくないな。

《どうした？ いつもハーレムがどうこうと騒いでいるではないか》

え、ヴァイオレンスな方はちよつと……。

「皆様方。話は少し横道に逸れますが、私は万屋という失せ物探しから揉め事の解決まで、数多の事を依頼により代行する商いを営んでいるのです。もしよろしければ、彼等から宝物を取り戻すお手伝いをさせていただきますよ」

天使たちが答えを洩る中、慎が煽ると神様達が『俺も』『私も』と手を上げ始める。

おいおい、あのままじゃ天界が多神勢力に袋叩きにされちまうぞ。

「——わかりました。宝物は順次返却しましょう」

「最初からそう言え。で、次の件は？」

「その前に一つ質問を。何故こんな条件を付けるのです？ 貴方には関係がない事と思いませんか」

「関係はあるさ。俺の知り合いが『聖剣計画』の被害者だったからな。そうだろう、祐斗兄」

「え……？」

突然話を振られた事で、木場の口から間抜けな声が漏れる。

「祐斗兄。聖剣事件の後、俺も独自のルートで教会や天界が実行した『聖剣計画』を始めとする人体実験を知ったんだ。……あんたが被験者の生き残りであることもな。あの時、あんたを冥界に避難させた事は間違っているとは思わない。でも、知らなかったとはいえ祐斗兄の復讐の機会を奪った事。そしてあんたへの配慮が欠けていた為に嫌な思いをさせてしまったことを、この場を借りて詫びたい」

謝罪の言葉と共に木場に向けて頭を下げる慎。

そう言えば、あれから今まで木場とあいつが話しているのを見た事が無かった。

あいつ、ずっとあの事を気にしてたのか……。

「木場。むこうは頭を下げたんだ、なんか言ってやれよ」

隣で呆けている木場の背中を思い切り平手で叩いてやると、ようや漸く事の次第が呑み込めたのか、木場は席を立つと真っ直ぐに慎を見つめる。

「頭を上げてくれ、慎。僕の方こそ未練がましく引きずっていて、すまなかった。あの時の君の判断は正しかった。でも、エクスカリバーへの復讐心から僕はそれを認めることが出来なかったんだ。……本当にごめん」

慎が頭を上げるのに入れ替わるように謝罪する木場。

「なるほど、だからこそその条件ですか。ですが、『聖剣計画』は発足から今まで信者の自主的な志願によって成されてきました。その過程で背信者による不幸な事件もありましたが、その魂は『主』の元に召され穏やかに暮らしているはずです」

「祐斗兄、本当にそうか？」

慎の問いに顔を上げた木場は、ミカエルに刺すような鋭い視線を向ける。

「いいや、僕も他の『聖剣計画』の被験者も同意なんてしていない。孤児として拾われた僕たちは司教の言葉を疑わない様に教育された。奴らはそこに付け込んで僕達をモルモットにし、そして不要となれば虫けらのように毒ガスで皆殺しにしたんだ」

「それは背教者パール・ガリレイが勝手にやった事。主はそのような非道はお認めになっていません」

「けど、あんたの言っていた『全ての信者が同意し志願した』ってのは嘘だったな」

木場の言葉に反論するミカエルを、さらに慎が切り返す。

「なかなか冗談が上手いではないか、ミカエルよ。とつくに消滅した聖書の神が『認めていない』とはな。死者の声が聞こえるなど、貴様は何時から死神に宗旨しゅうしう替えしたのだ？」

「貴様……ッ!？」

ダグザの真っ黒い冗談に、憤怒の表情で顔を赤くするミカエル。

やっぱ聖書の神は死んでたのか。

思えば神社の時にだって、慎はチラツと言ってたしな。

隣を見れば、シヨックで気を失ったアジアが力なく椅子にもたれ掛かっていた。

クソツ、こんな事なら参加させなければよかった。

「ふん。その赤龍帝の主という小娘たちに隠すために三文芝居を打っていたようだが、そんなものを俺達の前で見せるな。不愉快だ」
兜の奥から物凄い眼光でミカエルを黙らせた後、ダグザは顎あごで慎に続きを促す。

「さて、話が横道に逸れちまったな。じゃあそっちの疑問も消えた事だし、答えをもらおうか」

「……その条件を飲む」

怒りで真っ赤に染まった顔を歪めながら、食いしばった歯の隙間から絞り出すような答えに慎は鼻を鳴らす。

《ふん。ミカエルめ、いい気味だ》

お前、封印されたからってそれは無いと思うぞ。

「さて、次は堕天使だな。神器所有者の抹殺は、グリゴリ上層部ですでに中止が決定しているけど、それが末端にまで浸透していない。まずはそれを徹底させる事と、研究の為の神器の摘出と人体実験を辞めてもらおうか」

「……了解だ。その程度ならウチには大して被害はいかねえからな。蹴ったらバラキエルにハーフ組、他にどれだけの人材が抜けるかわからねえし、そっちの方が被害は甚大じんだいだ。一つ確認しとくが、既存きぞんの神器研究はいいんだろ？」

「他の種族、特に人間に迷惑を掛けないんならな」

堕天使側はスムーズに話が終わった。

慎の奴、俺がレイナーレに殺された時の事、まだ憶えててくれたんだな。

「最後は悪魔側だが、そっちの条件は『悪魔の駒イービル・ピース』による転生悪魔の作成禁止と、残留希望者以外の転生悪魔の解放だ」

「ふざけないで!? 慎、あなた何を言ってるのよ!!」

思わず立ち上がって声を荒げる部長。

魔王様二人も信じられないって顔してるし、匙をはじめとする支取

会長の眷属も慎を睨みつけている。

慎に悪感情をぶつけていないのは俺と朱乃さん、木場だけだ。

少し前なら、俺も部長の尻馬に乗って慎に詰め寄っていたんだろうが、あの話を聞いた後だとそんな気は起きない。

《ほう、少しは賢くなったではないか》

うっせーや。

「座れ、リアス・グレモリー。一介の貴族令嬢が口を挟める話じゃない事くらい、わかるだろ」

「……ッ!？」

「彼の言う通りだ。座りなさい、リアス」

慎から冷たい視線と言葉を向けられた部長は、サーゼクス様に促されて言葉も無く座り込む。

弟分から向けられた態度がショックだったのだろう、俯うつむいたまま『どうして……』とつぶやく部長の手を、俺は少しでも慰めになればという思いを込めて握りしめる。

間違つても柔らかいかとか、良い匂いだなんて思つてはいない。

《まったく締まらん、お前は》

仕方がないの、思春期の男の子だから！

「先ほどのミカエルではないが、返答する前に何故そんな事を条件にするのかを聞いてもいいだろうか？」

慎の方を見据えながら問い返すサーゼクス様。

「あんた等の人間蔑視べっしと扱いが、多神勢力の神々が三勢力を嫌う大きな理由の一つだからだよ」

放たれた答えに三勢力の全員が言葉を発せられなかった。

……これって、喫茶店で言つた話だよな。

「おい、慎。そりやどういうこつた？」

「おつちゃん。ここにいらつしやる多神勢力の神々はな、自らの生み出した人間を我が子同然に愛しているんだよ。だからこそ、その人間を見下し粗末に扱うあんた等を許せないのさ。サーゼクス兄、グレイファイア姉さん」

声を掛けられたサーゼクス様とグレイファイアさんが顔を上げた。

サーゼクス様はともかくグレイファイアさんは、突然の指名に戸惑いを隠せないようだ。

「ミリキヤスが日本の鬼に攫われて奴隷のように扱あつかわれた挙句、化け物になって戻ってきたら、貴方達は許せるか？」

「……無理だ、許せるわけがない」

「……間違いなく攫った相手を八つ裂きにするでしょうね」

「じゃあ、親父。仮に俺が殺されたとして、殺した相手が『あなたの息子さんは我々にとって危険な力を持っていたから始末しました。分かってくれますよね』と友好の手を差し伸べてきたら、それを取るか？」

「取る訳がないだろう!!」

慎のえげつない例えにサーゼクス様とグレイファイアさんは不快感をあらわにし、慎の親父さんは憤怒の表情で拳を机に叩き付ける。

みんなが怒るのは当たり前だけど、これって墮天使や悪魔が人間にしてきた事なんだよな。

「三勢力は、今までそれと同じことを他の神話勢力に強してきたんだよ。サーゼクス兄やセラフォル姉さんは和平路線で手を差し伸べていたみたいだが、並行してそんな真似をされたら誰も応じるわけねえよ」

慎の放った冷たい言葉にこちらは誰も口を開けない。

「いまいち自覚が足りないみたいだから、改めて挙げて行こうか。あんた等三勢力は一部を除いて人間を下等生物と見下している。墮天使は危険という理由で神器保有者を抹殺するほか、有用な神器の摘出や研究の為の人体実験。天使は『聖剣計画』に代表されるように自身を信仰する者を兵力にするために人体改造を行い、教会の悪魔祓いと共に他の宗教の信者を邪教崇拜者すうはいと一方的に殺害している。悪魔も『悪魔の駒』で生み出される転生悪魔を『次世代の担い手』と称している割に、その扱いは酷くぞんざいだ。蔓延まんえんした貴族主義の所為で転生悪魔は純血悪魔より下等とされ、『悪魔の駒』を所有する貴族の殆どはレーティングゲームの駒が自身のステータスを飾るファツシヨンの一部。酷い場合は情婦や性のはけ口とされる場合もある。さらに、そ

の劣悪な環境により反逆した者や逃げ出した者は『はぐれ悪魔』のレットルを貼られて討伐対象にされ、よしんば追手から逃げおおせたとしても『悪魔の駒』に刻まれた術式により身も心も化け物になる。異形となった彼らがどんな被害を及ぼすかは、言うまでもないな」

……アカン、これはアカン。

もうこの時点でウチはお通夜モードだ。

俺達眷属のテンションも最低だが、部長や支取会長、両陛下は顔色が紙みたいになってる。

というか、改めて並べられると強烈すぎる。

そりゃあ神様達も怒るワケだ。

「この前も日本の五大宗家直系の女性を、フォルネウス家のバカボンが転生悪魔にしゃがった。しかもその女性と関係を持つておきながら、子供が出来たら墮胎を強要。逃げたらはぐれ悪魔扱いで刺客を放ちやがった。他にも神器持ちの日本人が事故ったのをいいことに、本人の承諾も無しに悪魔に転生させて奴隷扱いし、神器が防御系と分かればレーティングゲームで前線の弾除けにしたウアプラ家のクソ女も居たな。その人は、そんな生活に耐えかねて脱走したけど、『悪魔の駒』に込められた術式の所為で化け物になって、駒王町に住む小学生の女の子が犠牲になっちゃった」

出された事例が生々しすぎて言葉も出ない。

俺達と扱いが天と地以上にあるじゃないか。

部長も心当たりがあるのか『あの時の』って口を押えているし。

「知ってるか？ 駒王番所の人間は、はぐれ悪魔をはじめとした裏の事件の被害者の家を説明して回ってるんだよ。はぐれ悪魔に喰われると死体が出ないから、犠牲者は行方不明という扱いになる。そうすると遺族は待ち続けちゃうんだ、永久に帰ってこない被害者を。だから、故人が亡くなった事の説明と、護れなかった事を詫びに行くのさ」
穏やかな口調とは裏腹にその内容は酷く重かった。

じゃあ、レイナーレに殺されて悪魔にならなかつたら、父さんや母さんは死んだ俺を待ち続けたってのか？

帰ってくる事のない俺を待ち続ける二人の姿が頭に浮かんだ途端、

吐き気がして思わず口を押えた。

なんだよ、それ！ 酷すぎるだろ!!

《落ち着け、相棒。奴の挙げている事もお前の事も、別に珍しくない世界中で起きている事だ。気にしてはキリがないぞ》

ふざけんよ、人間は玩具おもちゃじゃないんだぞ……。

「殺された女の子の事だけだな。その子の遺族に会いに行く時に俺も初めて同行したんだ。……本当に修羅場だったよ」

その時の事を思い出しているのか、慎の顔が苦々しく歪む。

「母親は半狂乱で娘の名を叫んで、父親は涙を流しながら俺達に殴りかかってきた。……痛かったよ、相手はどこにでもいるサラリーマンだったのに。あれは娘を失ったあの人の痛みなんだろうな」

そこまで言つて、くたびれたようにため息をつく慎。

その話が俺の両親に重なって耳を塞ふさぎたくなつたが、必死に耐えた。

悪魔になつた以上、俺も無関係じゃないんだ。

逃げるわけにはいかないよな。

《ふん……》

俺達は元よりアザゼル総督やセラフオール様も言葉を発つせない中、サーゼクス様がどこか戸惑いながらも口を開いた。

「君の言いたい事は良く分かつた。しかし、『悪魔の駒』も転生悪魔も我々の種族の生存の為に不可欠な物なのは、君も承知しているはずだ」

「ああ。俺が挙げたような事は、世界中で起きてる珍しくもない事件だつてこともな。けどよ、サーゼクス兄がそれを悪魔の生存の為に放置するつていうなら、俺も人間の生存の為に多神勢力が悪魔を滅ぼすのを見逃してもいいよな？」

今度こそ、サーゼクス様は言葉を出せなかつた。

こつちに向いた目を見ればわかる。

——あいつはマジだ。

「勘違いしてる奴が多いけどな、俺の半分は人間なんだぞ。目の前でそんな真似されて平気な面してると思うのか？」

そう言いながら威圧を掛けていた慎だが、こちらの意気が完全に消沈したのを確認すると、小さく息を付いて厳しかった表情を少し緩める。

「そもそも、転生悪魔の運用方法が根本的に間違ってたんだよ」

「どういう事かな？」

「転生悪魔は悪魔という種族の個体減少の対抗策なんだろう？ だってらなんて純血悪魔の下僕とか、レーティングゲームの駒なんてさせてんだよ。普通に種族増加にさえよ」

「だから我々は転生悪魔の数を増やす事で、悪魔の総数を増やそうとしているのだが」

「それだったら人間に寄生してんのも同然じゃねーか。それが多神勢力の不興を買ってるって今言ったところだろ。そうじゃなくて、悪魔の伴侶になってもいいって人間に『悪魔の駒』を使って、そいつとの間に子供を作ったらいいんだよ」

えっと、伴侶って結婚相手って意味だよな。

て事はあれか？ 部長みたいな悪魔の貴族の結婚相手に眷属を使えって言うてののか!？」

「慎君。それって、悪魔と人間が恋をしてって事だよな？」

「当たり前だろ。産む機械とか種馬なんて扱いにしたら、今なんて比じゃないくらい反発が来るわ。まあ、出会いのチャンスなんてそうそうないだろうから、有志募^のってお見合いみたいになるだろうけど。それで上手くいけば本人も合意の上だし、夫婦なんだから転生悪魔が蔑ろにされる事もない。さっきの事件を例に挙げるのは不謹慎だけど、出生率だって悪魔同士で作るよりよっぽど高いはずだから、少子化問題も解決だ」

おおっ！ あいつ、転生悪魔の問題を一気に解決させやがった!!

これが天才か!!

「でもさ、そう簡単に行くかな？ 人間と悪魔なんて恋愛できなささささうだけど……」

「セラフオール姉さん、誰を前にして言うてんだよ。俺と美朱は墮天使とのハーフで、見ての通り親父は超子煩惱だぞ。フェニックスの三

男のライザー氏だって、眷属のユーベルーナ女史と結婚する事になつてるし」

会場の全員の視線が、美朱ちゃんを膝の上に乗せた親父さんに向く。

「こつちみんな!!」

顔を真っ赤にしてガーツと喚く美朱ちゃんと、表情を緩ませてその頭を撫でる親父さん

場違い感が凄いけど、この上ないほどに説得力あるわ。

あと、ライザーはできちゃった婚だろ。

それって人間社会じゃあ最悪の方法だからな。

そう言えば、匙も会長とそれを狙ってるって言ってたけど、やらかしたらセラフオール様に殺されるんじゃないか、あいつ。

「なるほど、確かに一理ある。しかし、残念ながらそれは今の悪魔社会では難しい。貴族の殆どは自身が純血悪魔である事を誇りとしている。だからこそ転生悪魔をそういった対象に見ようとしないうし、一時の火遊びで子供が出来たとしてもそれを認知しようとはしない」

「そうかい。思い付きの案だからどう受け取るかはそつちの勝手だが、だからと言って条件を変えるつもりはないぞ」

「ねえ、本当にこの条件じゃないと駄目なの？ 禁止じゃなくて段階的に減らしていくとかさ、少し緩めてくれるとこつちも飲めるんだけど」

「駄目だ。理由はさつき言っただろ」

「でも、こんな条件を実行に移したら、絶対に他の貴族が反発しちゃうわ。レーティングゲームだって機能しなくなるし、冥界の政治が立ち行かなくなっちゃう！」

「それをなんとかするのが、あんた等の仕事だろ。それとも、条件を蹴って多神連合と殺り合うか？」

甘ったるい声で継すがろうとするセラフオール様に、慎の声が一気に低くなる。

「俺の後ろをしてみる。あそこにいる神様方はな、みんなあんた等の首を掻つ切りたいと思ってる。この会議の結果如何いかんじゃあ、明日にで

も連合組んで冥界にカチコミ掛ける可能性だってあるんだ」

「明日まで悠長に待つか、虚け。お主が加勢せぬなら、日が昇る前に悪魔領の首都を落としてくれるわ」

「だとか」

猛獣みたいな笑みを浮かべたアナトとかいう女神の声に、他人事のように肩をすくめる慎。

しかし、今日はマジに辛辣しんらつだな、あいつ。

もしかして、他の神様の目を気にしてるせいなのかな？

《それもあるだろうが半分は奴の本心だろう。気を付けろよ、相棒。このままだと三勢力は奴に見限られるぞ》

しゃ、シャレになつてねえ……。

「どうして待っててくれないの!? 貴方の言う通り、不遇な扱いを受けてる転生悪魔がいるのは知ってる。私達もそれを変えようとがんばってるけど、古い貴族たちの考えを変えるのは時間がかかるの!」

「その間にまた貴族共がバカやらかしたりはぐれ悪魔が暴れる所為で、人間達や他の勢力に迷惑をかけるのか? 当然、天使や墮天使も今まで通りに地上で好き放題するんだろうな。それで、その尻拭いで俺が走り回るハメになるわけだ」

皮肉げに口元を歪めた慎の全く笑っていない目に、セラフオール様は言葉を飲み込む。

「いい加減にしてくれよ、マジで。俺がこの一か月、どれだけ三勢力のケツを拭いて回ったと思ってるんだ。悪魔による他者の領土の不法占拠に、英国を追われて北欧に逃げた新教の信者による現地信仰への虐殺。墮天使は神器欲しさに村一つ壊滅させるし、行く先々ではぐれ悪魔が人間を襲ってる……!」

当時の苦労を思い出しているのか、話す度に慎の放つプレッシャーが増していく。

「おい、クソ天使共」

「クソ……ッ!? 神の使徒たる私達へ冒瀆にも程があります! 撤回なさい!!」

「やかましい。その綺麗な面がピカソにされなくなかったら、下らね

えペラ回すんじゃねえ」

抗議の声を上げるおっぱい天使さんを、一喝で黙らせる慎。

なんかガラが悪くなってるぞ、あいつ。

「テメエらのクソ信者共が現地の信者を殺りやがった所為でな、地域の安全を守る道祖神どうそじんが祟り神たたに化けちまったんだよ。そいつが周辺に疫病と呪いを振り撒いたお陰で、地域住民に数千人単位で犠牲者が出たし、土地は呪詛に汚染されて異界に堕ちる寸前だった。鎮めて浄化するのに、どんだけ手間がかかったと思ってるやがる」

「あの時は本当に助かったわい。並の神では呪詛に汚染されて堕ちてしまうからの。それに日本神道の浄化法を見る事も出来たしな」

「……教会の信者はどうなったのですか？」

「これだけの迷惑をかけておいて、自分の信者の心配か。皆、地獄の女王であるヘルの元に行ったわ。今ごろガルムの餌にでもなつとるんじやろ」

髭を扱きながら笑うオーデインを睨む天使達。

いや、あんた等が悪い、これはあんた等が悪いぞお!!

「次に墮天使。テメエ等が下の手綱握ってないせいで、下級のアホがインドの農村一つ消したんだよ。しかも死体の処理もしないで消えやがって。こつちが着いた時には殺された人の怨霊が神器を核に集まって、レギオンに成長してたんだぞ。現地の僧侶さんも何人か呪われたし、祓はらうのに滅茶苦茶苦労したわ」

「うむ。感謝するぞ、小僧」

「あの時は世話を掛けた。其方がいなければ、我らが地上に降り立たねばならぬところであつた」

「……すまん。マジで末端まで指示を徹底させる。あと当面の間、下の奴は地上には出さない」

14歳くらいの態度しな女の子を横に座らせたイケメンが二人して慎に声を掛け、アザゼル総督が頭を下げる。

あれってインドの神様なのか？

《シヴァとパールヴァティだな。シヴァは破壊神であり、サーゼクスを上回る程の強者だ》

……破壊神っすか。

イケメン滅びろって思ったのがバレてませんように。

「最後に悪魔。不法占拠やはぐれ悪魔もそうだけど、ちよつと貴族の動きを監視しとけよ。ガミジン家の馬鹿が、アルケイデスの転生体の嫁を無理やり悪魔にしようとしたんだぞ。しかもその嫁さんがメガラの転生だったからアルケイデスのブチキレ方がトンデモ無くて、その馬鹿を殴り殺した後も住んでた山を更地になるまで暴れてるしよ。嫁さんの浄化が失敗してたら、あの人ハーデス様のところを通って冥界にカチ込んでたぞ」

「あの時はご苦労であった。あ奴は前世で最初の妻と悲劇的な別れをしているからな。神の部分と一緒に弟から受け継いだ色ボケがオリュンポスに昇った今生こそは、幸せになつて欲しいと思つて居つたのだ」

めつちやおつかかないドクロの人が、目の穴をピカピカさせながら慎みにねぎらいの言葉を掛けてる。

ところで、アルケイデスって誰？

《ヘラクレスの事だ。アルケイデスは奴の幼名だな》

ヘラクレス!? 超メジャーな英雄じゃねえか!

そんなんが冥界に来たらお手上げだわ、さすがに沖田総司じゃヘラクレスに勝てんだろうし。

つうか、本当にイラン事しかしてないな、ウチの勢力。

けど、なんで慎ばっかりが後始末してんだ？

こつちの責任者に言えば、誰か派遣しただろうに。

《他の神話の奴等は、三勢力の者を領地に入れたくなかつたんだろうな。姫島慎が動いた事に関しては、日本神話の外交戦略と三勢力のイメージダウンを嫌う奴の思惑が噛みあつた結果だろう》

……もう言葉もねえよ。

そりゃあ、こんな無茶な要求するわ。

「そろそろ答えを聞こうか。条件を飲むのか、飲まないのか？」

「……」

決断を迫る慎に、サーゼクス様は顔を俯かせて答えを返さない。

「サーゼクス。こいつはお前だけじゃなくて、三勢力全体に関わる事なんだぞ。蹴るわけにはいかねえだろ」

「こつちも相応の条件を飲むのです。そちらの態度でこの話が流れるのなら、同盟は破棄させてもらいますよ」

「……わかった。こちらも条件を飲ませてもらう」

慎に加えて天使・墮天使のトップからも迫られたサーゼクス様は、言葉の端に苦渋を滲ませながら同意した。

「さて、少々強引なところはあったがこれで全ての合意が得られたわけだ」

いや、少々どころじゃねーよ。

ほとんど脅しだったじゃねえか。

気持ちとは分からんでもないが、キツツイ追い込みだったと思うぞ。皆様、お待たせしました。思ったよりあちらの決断が遅かったもので、お時間を取らせてしまい申し訳ありません」

「構わん。思ったよりも面白いモノが見れたからな」

「左様。奪われた宝物の件もそうだが、民について我らの言いたい事を言ってくれたのだ。奴らのしかめっ面を見れて溜飲が下がる思いであったぞ」

「ありがとうございます。ところで、彼らが条件を飲む事で私は有事の際にはむこうに付く事になったのですが、本心を言わせてもらえば戦争なんて御免です。そこで、私としてはここにいらつしやる多神勢力の皆様には『禍の団』への対処が終わるまで、三勢力への干渉をお願いしたいのです」

再び会場の空気が凍った。

俺達もそうだが、神様達の方にも困惑の色が見える。

それはそうだ。

さつきまであれほど三勢力に厳しい言葉をぶつけ、自身の要求を飲ませてきた慎が今度は俺達を庇うような事を言ってるんだから。

俺が向こうでも『なに考えてんだ!』って思うだろう。

「ふむ。お主らしからぬ態度から何かあると思っただが、こう来たか」

「さすがはオーデイン様。お見通しでしたか」

「当たり前じゃ。20も生きとらん小僧に化かし合いで負けるほど
耄碌もろうくしとらんわ。」

「先ほどの三勢力への態度も我々に利の有る条件を飲ませたのも、す
べてはこの為か」

「仕方あるまい。お主が慎殿に決断を迫った時点で、答えはどうあれ
我等は戦に向けて動かねばならない状況になったのじゃ。それを避け
る提案など、向こうに相応の痛みを強いてからでなければ挙げる事も
出来まい」

「不細工な真似を見せて申し訳ありません、ダグザ様。ですが、この足
りない頭では戦争を回避する方法は、この位しか思いつかなかったも
ので」

ちよつと待て！

じゃあ、さつきまでのキツイ態度は全部フリだったって事かよ!?

いやいや、落ち着け。

さつきドライブが半分本気って言ってたじゃねえか。

「して、不干渉の手土産は彼奴等に飲ませた条件だけかな?」

「いいえ。皆様の怒りを思えば、あれだけでは足りないでしょう」

アメン・ラーの言葉を首を振って否定すると、慎は自分の席に戻つ
て神様達を見据えた。

「ですので、私の提案に応じてくださる方にはその地域への対『禍の
団』の応援と、オーフィス出現時の対処をお約束します。あと、帰還
するであろう転生悪魔の対処も請け負わせていただきます」

慎の言葉に神様側が大きく騒めく。

これって『禍の団』関係に限って、慎があそこの神様の助っ人にな
るって事だよな。

《破格の条件だな。世界最強の男が増援に来ることもそうだが、一度
オーフィスを下した奴がつく事で、どれだけ優勢になった場合でも、
かの龍神の影を警戒して手を緩める必要が無い》

でも、あそこにいる神様ってかなりの数だぞ。

大丈夫かよ、あいつ、また世界を飛び回る事になるんじゃないか?

「あの子ったら、またあんな無茶を……」

「仕方ないよ、慎兄だもん」

「慎……すまん」

声の方を見れば、朱乃さんと美朱ちゃんは頭を抱えて親父さんは涙ながらに謝ってた。

……そうだよな、家族からしたら堪らんよな。

聖剣事件の時もそうだけど、三勢力ってあいつに助けてもらってばっかりじゃねえか？

なんかこの頃、魔王様への尊敬の気持ちがどんどん目減りしてるんだけど。

《奴等は戦闘力を買われて魔王の座を継承したからな、政治力はそれほどでもないぞ》

マジか！ それってこの状況だと最悪なのは……。

こりゃあ、これからも世界情勢に目を光らせとかなないとヤバいな。気づけば滅亡ルートに乗ってました、なんてシャレにならない。

「ところで転生悪魔の対処と言ったが、どのように対応をするつもりかな？」

「その件につきましては日本神話の機密も関係しますので、詳細は後ほど天照様にご確認ください。なお、私が対処の際に使う方法は日本神話が生み出した物ですので、処置を受けられた際は天照様に一言お礼を言っていたけると助かります」

「応援と言ったが、襲撃があつてからお主に連絡を取っても間に合わんのではないか？」

「大丈夫です。私は瞬間移動を修得していますので、連絡があればすぐに参上いたしますよ」

おいおい、なんかまたトンデモない事を言い始めたぞ、あいつ。

「瞬間移動？ 転移ではないのかね？」

「ええ。氣を利用した、術というよりは技ですね。ですので、転移阻害の结界等が張られた場所でも問題なく移動できます」

『では、一つ実践を』と言いながら額に指を当てると、いきなり慎の姿は消えた。

突然の事にみんなが唾然とする中、再び現れる慎。

その手には先程まではなかった荷物が乗っている。

「オーデイン様、ロスヴァイセ女史からルーペを受け取ってまいりました。ダグザ様にはダヌー様より夜食の粥を、ハーデス様には奥方様からのお土産希望リストです」

「むう……、確かにこれは儂のルーペじゃわい」

「母上、何故これを小僧に持たせたのだ……」

「ペルセポネよ……」

手渡された荷物に三者三様のリアクションを示す神様達。

まさか、あの神様達の本拠地に行ってきたのか!?

「まったく、『無限』殿には驚かされてばかりだな。其方には大きな恩がある以上、我はその提案を飲んでも良いと思っっている。しかし、その前に一つ聞かせてほしい」

「何ででしょうか、アメン様」

「三勢力に飲ませた条件、今のままでは口約束にすぎん。奴らが約定を破った際にはどうする?」

「その時は……俺の手で三勢力を潰します」

エジプトの主神の太陽色の瞳を見つめ返しながら、慎は静かな口調ではつきりとその言葉を口にした。

「其方が身を挺して守ろうとしてきた者達、それを己が手で討つというのか?」

「はい。今回、俺は各勢力の皆さんに相当な無茶を要求しています。天照様やオーデイン様の様に自領を護る為に機を狙っている方も、アメン様やアナト様の様に三勢力に多大な恨みを持つ方もいるでしょう。そんな方々にこちらの都合で時間をよこせと言っているのです。その条件で義理を欠くような真似をするのなら、俺の手でケジメを付けます」

慎とアメン・ラーの対話に、俺達は言葉を出すことが出来なかった。威圧なんて一切感じなかったけど、あいつの背中からは本気なんだって言うのは痛い位に分かる何かを感じた。

《あれが覚悟というものだ。公言までしたという事は、三勢力の内一つでも条件を反故にしたら奴は本気で潰しにかかるな》

あそこまで身体を張ってくれてるあいつの為にも、そうならない事を祈るわ、マジで。

「——いいだろう。我々エジプト神話は貴殿の案を受け入れよう」
「我等アース神族もお主の話に乗ろう。『禍の団』の問題がある以上、お主を敵に回して二面戦争などやってられんからの」

「我々ダーナ神族も乗ってやる。だが、奴らが妙な真似をすれば即座に破棄させてもらうぞ」

アメン・ラーが慎の話に同意すると、オーデインを初め他の神々も声を上げる。

その光景に俺は全身の力が抜けるのを感じた。

つうか、三勢力の同盟会談だったのに、どうしてこんな話になったんだよ。

《ダグザが奴に三勢力に与するか否かを聞いたからだろうな》

……そうだったなあ。

あれって、YESでもNOでも三勢力を責める理由になったんだよなあ。

《そうだな。付くのなら奴の存在が危機感をあおって多神勢力は連合を作るだろうし、付かなければ恨みを持つ奴等がこれ幸いと攻めて来ただろう》

詰んでるじゃないですかやだー!!

《ダーナ神族は聖剣事件の時から、お前らの首を虎視眈々と狙っているからな。意図的なのところもあったのかもしれない》

うわ、俺達の陣営恨み買いすぎ……。

ともあれ、これで話も終わりだ。

もう金輪際こんな会議には参加せんぞ。

《まあ、お前は今後の身の振り方でも考えておけ。迷いを抱えたままやっていけるほど、この世界は甘くないぞ》

わかってるよ。

ちやうど学校も夏休みに入るし、ゆっくり考える事にするわ。

会場内の空気も緩まり、流れ解散になったのかアナトというおつかない女神が出て行くのが見えた。

こちらは部長の指示が無ければ引き上げる事が出来ないので眠っているアーシアの様子を見てみると、視界の隅に慎が銀髪のイケメンと向き合っているのを見た。

……堕天使側の関係者だったと思うが、誰だったわけ？

《奴は今代の白龍皇だ。お前のライバルになる男なんだから、顔ぐらい覚えておけ》

知らんがな。

俺に必要なのは女の恋人であって、断じて男のライバルではない。

《畜生……。何でこんな奴が俺の相棒なんだ》

黙らっしやい。

巡り合わせに不満があるのはお互い様じゃい。

俺だってお前を宿してなかったら、殺される事も無く平穩無事に暮らしていったんだ。

《その場合、そのシスターやメイドとは知り合わなかったがな》

うおお……。何というジレンマ。

「俺と闘え、慎!!」

突然響いた声に目を向けると、部屋の中央で慎を指差してドヤ顔を浮かべる、白龍皇とかいうイケメンの姿が。

……。何事？

22話

えー、どうも。

現在メンタル状態最悪な姫島慎です。

原因は言うまでも無いと思うが、先ほどの会議で行った三勢力への追及と言葉攻めだ。

覚悟はしていたが、身内にキツイ事を言うのは滅茶苦茶辛い。

正直、サーゼクス兄やセラフオール姉さんに言うときは内心泣きそうだった。

天使に関しても、ミカエル氏は神社の一件と祐斗兄の事で当たりが強くなってしまったし、女性天使の方には暴言まで吐いてしまった。

これはもう裏切り者とか言われても言い訳できないだろう。けどさ、あの状況じゃあ仕方ないのよ。

オーデイン様も言ってたけど、ダグザ様の『俺が三勢力に付くのか』って質問が来た時点で、戦争はほぼ不可避だったんだ。

YESなら多神連合結成されて戦力を整えたうえで攻め込まれるし、NOでも血気逸った陣営が戦端を開くのを切っ掛けに周りを巻き込んでの泥沼だ。

それを回避しようと無い知恵を絞った結果があれなんだ。

むこうにアナト様がいる時点で、武力をチラつかせて強引に和平を迫るなんて悪手以外の何物でもない。

言い伝え通りならば、あの方が暴発した時点で会議場は血みどろの鉄火場に化ける。

だから、みんなの前で三勢力をやり込める事で神様達の留飲を下げさせた。

そして、多神勢力に有利な条件を飲ませた上で、俺の傭兵契約+『駒落とし』による転生悪魔の浄化も付けて、不干渉を提示したんだ。

欲を言えば和平、もしくは不干渉に期限無しをつけたかったが、蹴られる可能性を考慮して『禍の団』の対処が終了するまでと期限を付けた。

『腰が低い』とか『譲歩しすぎ』なんて思われるかもしれないが、こつ

ちは戦争回避に必死だったのだ。

ぶつちやけ、ドンパチになったら負ける。

地上最強（笑）なんて言われてるけど、俺はただケンカの強いガキでしかない。

戦略や戦術の知識なんて無いし、オーフィスみたいに一都市吹っ飛ばすみたいな広域殲滅技も持っていない。

倒す事は出来なくても封殺する事は、そう難しくないのだ。

主要施設から離れた場所に多重結界を張って、各勢力の武神や闘神なんかを集めて襲えば、少なくとも足止めにはなる。

その間にむこうの主力に冥界を責められたら、三勢力はOUTである。

多分、神様達はその事に気づいてる。

なのに何故強引に攻めないのかと言うと、三勢力を壊滅させた後の俺の報復を恐れているからだ。

親父や朱乃姉達を失えば、間違はなく俺はなりふり構わず復讐に走るだろう。

そうなれば世界最強クラスの戦闘力を持ったテロリストの誕生だ。そんな物騒極まりない奴に狙われるなんて、向こうからしてみれば

悪夢以外の何物でもないだろう。

けど、それじゃあ意味が無い。

俺にとっては身内が殺られた時点で負けなのだ。

だから不干渉条約を迫った時、瞬間移動という手札を切った。

『封殺、足止めは通用しない』事、そして『俺を敵に回せば、逃げ場所など無い』という事。

この二つを強く印象付けさせれば、神々は俺に対する警戒度をもう一段階引き上げるだろう。

そうなれば、抑止力としての価値はさらに上がる。

後は、俺という重石が作用している間に、三勢力が改善してくれれば和平の希望も見えてくるだろう。

……………そうなれば、いいなあ。

……さて、空想に逃げるのはここまでだ。

恒例の辛い辛い現実の時間である。

まずは目の前でドヤ顔を浮かべながら指を突き付けている、大馬鹿野郎をなんとかしようか。

「おい馬鹿」

「誰が馬鹿だ!？」

公の場でこんな発言する奴が、馬鹿以外のなんだってんだ。

隣を見ろ、アザゼルのおつちゃんは今にも死にそうな顔で胸を抑えてるじゃねえか。

「なんでいきなりこんな事を言いだすんだ？」

「それはお前がオーフィスを倒したからだ！」

「うん？」

ヴァーリの言葉に思わず首を捻ってしまふ。

相変わらず意味が分からん。

……いや、待て待て。

奴はアレだが一応は付き合いの長い友人だ、理解しようとする心を捨ててはいけない。

確かに俺はオーフィスに勝った。

それは『無限の闘争』で言うところの『狂』ランクレベルの力を持つことになる。

さらにこの世界ではオーフィスは赤龍神帝グレートレッドに次ぐ強さを持つ。

日頃から『白龍神皇』になると公言して憚はばからない奴にとって、オーフィスは超えるべき壁だったのだろう。

だからこそ、それより強い俺を倒す事で己が野望のジャンプ台にしたい……。

ふむ、こんなところか？

「つまり、力試しと売名の為に俺を踏み台にしたいと？」

「そうじゃない!!」

違ったらしい。

手前味噌ながら中々の推理だと思ったのだが、やはり相互理解とい

うのは難しい。

奴との対話を成功させるには、『GN先行者』に勝ってイノベイターになる必要があるのかもしれない。

しかし奴に勝つと漏れなく『中華キャノン』を修得してしまうような気がする。

あの兵器は『メンズビーム』に匹敵する禁忌の技だ。

……却下だな、うん。

「じゃあ、なんでだよ」

「お前は俺のライバルだ！ だからこそ、その風下に立ちつわけにはいかん！ 俺と立ち合え、慎!!」

ライ……バル……?」

そうだったっけか？

そんな事実はなかったような気がするのだが、言ったら多分泣くよなあ。

こいつってなんだか言って涙もろいし。

「ヴァーくん。ちゃんと言葉にしないと、思いは伝わらないわよ。子供の頃から慎くんはあなたの憧れあこがだったんだって」

「ラヴィニアア！ 余計な事は言うな!!」

俺達の様子を見かねたのか、墮天使側からラヴィニア姉さんが歩み寄ってくる。

ガキの頃からヴァーリやハーフ組の姉代わりだった彼女ならあいつの真意を汲んでくれるだろう。

しかし、憧れってどういう事だ？ お前にそんなもん持たれる事なんてした覚えはないのだが。

とはいえ、こんなところでそれを聞く気はない。

友人を公開処刑に掛けるほど、こっちは非情ではないのだ。

「……ラヴィニアの言う通りだ。俺はお前に憧れている」

顔を真っ赤にして語り始めるヴァーリ。

後ろではラヴィニア姉さんが小さな子を見守るような目で俺達を見ているし、なんとも締まらない絵面である。

つーか、俺の気遣いエ……。

「俺がルシファア家で虐待を受けていた事は知っているな？」

「ああ、お袋さんを守れなかったらしいな」

「そうだ。あの時の俺は、母を犠牲にして無様に逃げ出す事しかできなかった。路上で底辺の生活をしているところをアザゼルに拾われたが、新たな家と迎えられたグリゴリでも状況は変わらなかった」

当時の事を思い出しているのか、ヴァーリは険しい顔で拳を握り締める。

墮天使の方を見れば、アザゼルのおっちゃんや親父は苦渋の表情のまま顔を俯かせている。

「上層部やラヴィニア達は良くしてくれたが、中・下級の墮天使達は俺やハーフ組を蔑み、幹部たちの目を盗んでは虐待を行っていた。投げ付けられる言葉はあのクソ溜めにいた頃と変わらない。『薄汚い混ざり物』『下等な人間の血を持つ出来損ない』だ。弱い者いじめしかできないクズ共が、悪魔から身を挺して俺を護ってくれた母の血を『下等』と笑うんだ。……自身の無力を悔やんだのは、母を置いて逃げた時以来だった」

ヴァーリの言葉に、会場にいる誰もが声を上げる事ができなかった。

手を下していた墮天使、父親である悪魔、理不尽なこの世界、何より無力な自分への焼き付くような怒りが、奴の独白には込められていた。

そしてそれは、俺の中にもある物だ。

母を護れずに無様に斬り捨てられた己、血だまりに沈んだ母と泣き続ける妹、そして手を汚させてしまった姉。

あの日、意識を取り戻した俺が抱いたのも、己を焼き尽くさんばかりの怒りと憎悪だった。

『弱い己に生きる価値は無い』

自身の魂に刻み込まれた鋼のような信念。

これがあるからこそ、俺も奴も底辺から這い上がることが出来たのだ。

「そんな中、お前に出会った。俺を庇おうとしていたアトラに暴力を

振るっていたクズを、一撃で叩きのめしたお前の後ろ姿。俺と変わら
ない年なのに、驚くほど大きく見えたその背中に俺は憧れたんだ」

そういえば、ヴァーリとの出会いはそんな感じだった。

たしか、グレモリー家での生活も落ち着いて、美朱と共に初めて親
父の元を訪れた時だったな。

こっちとしてはいい大人がガキをイジメているのが見苦しかった
からやったのだが、そんな風に見られていたのか。

因みに、アトラとは俺達より1歳年上の女の子だ。

ハーフ組の中でも年少者の世話をよく見ていた為に下の奴等から
は『姉ちゃん、姉ちゃん』とよく慕われていた、

この前久しぶりに会ったが、新規参入したチビ共の面倒を見る傍ら
保母に成るべく勉強も頑張っていた。

目下の悩みは美朱とトントンの身長と、童顔・幼児体系だそうな。

「お前と出会ってあの世界を知った事で、俺は力を手にした。だが、そ
れはお前がいたからだ！」

叫びとなった独白と共に真つ直ぐにこちらを見つめるヴァーリ。

その青い瞳には確固たる意志と闘志が燃え上がっている。

「俺と同じ混血のお前が、己の血反吐や敗北の汚泥に塗れながらも諦
めずに歩き続けたから！俺とは違い神滅具を持たないお前が、常に
俺の前を走り続けたから！俺は強くなれた!!」

話している内に昂たかぶってきたのだろう、漏れ出した龍の氣が周囲を
渦巻き、それは奴の全身を覆う白い鎧となっていく。

「だからこそ、俺はお前と対等の立場にいたいッ！俺はお前にだけ
は舐められるワケにはいかないんだッ!!」

白龍皇の鎧を纏い終えたヴァーリはその光翼を広げながら、思いの
たけを吐き出した。

その様に俺は思わずため息をついてしまう。

……まったく、恥ずかしい奴だ。

こんなところでデカイ声出して、なに言ってんだか。

けど、これでは仕方ない。

ツレからこれだけの事を言われたのだ。

これで受けなければ、男じゃないだろう。

「ヴァーリ、ちよつとだけ時間をくれるか。お前と闘り合う前に、着けなきゃならんケジメがある」

「ならば、俺と闘うんだな！」

心底嬉しそうな声を上げるヴァーリ。

兜によつて見えないが、その顔にはさぞかし獰猛な笑みが浮かんでいる事だろう。

「そこまで言われたら、無視するわけにはいかねえよ」

「それでそのケジメとやらは、どれだけ時間がかかるんだ」

「ガキか、お前は。十分もあれば済むから、大人しく待ってろ」

そう言い残すと、三勢力の面々について来るように促して会議室の隣の部屋に入る。

周りに監視の目がない事を確認すると遠見防止と音響遮断の結果を張った俺は、

「皆さん、失礼な態度に数々の暴言、本当に申し訳ありませんでした！」

三勢力首脳陣に向けて深々と頭を下げた。

気配からして全員呆気に取りられているようだが、これは当然である。

いくら必要があつたからと言っても、恩人や知人にあんな態度を取っておいて『知らぬ存ぜぬ』など俺には出来ない。

天使にしたつて、ミカエル氏は兎も角として女性の方や護衛に関しては初対面なのだ。

謝罪の一つも無ければ、失礼にも程があるつてものだ。

「あー。顔を上げろ、慎」

最初に我に返つたアザゼルのおっちゃんの声に顔を上げると、案の定みんなは戸惑いの表情を浮かべていた。

「お前が頭を下げる必要はねえ。あそこでお前が俺達を叩かなければ、神々との戦争は避けられなかつたらうからな。むしろあの程度の被害に抑えてくれた助かつたぜ」

「墮天使側はそうでも、我々は大損害です。姫島慎、もう少し軽い措置

に出来なかつたのですか？」

「申し訳ない。あの流れはほぼ即興で作った物でして、神々の留飲を下げさせて尚且つ納得なおかさせる実利を得るには、あの天界側への要求は避けられなかつたのです」

「お止めなさい、ミカエル。ここで彼を責めても仕方がありません。むしろ戦争へと発展させなかつた事に感謝の意を示すべきでしょう」
「ガブリエル。そうは言いますが、この損害を補うのは容易ではない。いつ多神勢力が牙をむいてくるか分からない現状で、この条件を飲むのはあまりにも危険すぎる」

「貴方の言う事も分かります。しかし、現状で戦端を開かれる方が危険でしょう。『禍の団』に続いて、あそこにいた全ての勢力の連合体を相手にするなど、自殺行為ですよ」

「……」

ガブリエルと呼ばれた女性天使の言葉にミカエルの追及が止む。

俺はというと、ただの護衛だと思っていた女性天使が四大セラフの一人だつた事に、内心驚いていた。

「申し訳ありません、ガブリエル殿。初対面の貴女にも、心無い言葉をぶつけてしまいました」

「よいのです。言われた時は怒りもしましたが、貴方の戦争回避への意志と此方に向いた神々の憎悪に考えを改めました。こちらもけつして軽く見ていたつもりは無いのですが、我々の人間に対する対応が他勢力の神々の怒りを買っていたのですね」

「はい、彼の方々は人を愛しています。いつか天照様は仰おっしやつてました。『私達は永遠に変わる事のない存在。それ故に文明や生活を進歩させていく人が、我々の出来ない変化を行い、前に進み続ける彼等が愛おしくて仕方が無い』と」

俺の言葉にガブリエル殿は悲しげに顔を伏せる。

「我々は主の言葉を信じ、その尊厳を守る事のみを使命としてきました。信者に協力を命じ、その身体に手を加える事も使命の為に必要な事だと。ですが、その考えを変えねばならない時が来ているのかもし

れません」

「そう言っていただけだと助かります。正直、私を抑止力にしてもあの方々を抑えるのには限界がありますので」

「わたし達も気が重いなあ。転生悪魔を解放するなんて命令、どれだけの貴族が聞いてくれるんだろ。それに、レーティングゲームも頓挫するよね。あれの経済効果って凄いなだよ」

「あの状況ではやむを得ない事だ。テロに備えながら多神勢力と戦争をできるほど、我々に地力は無い」

「ゴメン、二人とも。各神話勢力から出た不満の中で一番大きかったのは、転生悪魔作成による人間の減少とはぐれ悪魔の被害なんだよ。だから、転生悪魔作成の禁止は交渉の切り札として外せなかったんだ」

サーゼクス兄とセラフォル姉さんが頭を抱えている姿には心が痛む。

けど、条件を軽くして交渉失敗しては元も子もない。

「別に慎君を責めてるわけじゃないんだよ。さっきの交渉だって、本来なら外交担当の私が持つて行かなきゃならなかったんだから。纏めてもらって逆に感謝してる」

「ああ。あの状況では我々がどんな手を打ったところで、交渉の機会すら与えられたなかったろうからな。強要された時はムカツと来たが、この結果の為だというのなら恨むのは筋違いというものだ。」

あ、ムカツ腹は立ったんだ。

「でもさ、これって絶対に反発が出るよね。どうやって公表したらいいんだろう?」

「……ありのままを伝えるしかないだろう。こうなると悪魔至上主義の強硬派の殆どが『禍の団』に行ったのが不幸中の幸いな」

「大王派がどう動くかがカギだよ。ゼクラムのお爺ちゃん公に姿を現さなくなって久しいから、判断が各貴族に任されてるのが痛いよ」

ん、今引つかかることを聞いたな。

ゼクラム・バアルの姿が見せていないか。

「なあ、サーゼクス兄。ゼクラム・バアルが姿を見せなくなって、どれくらい経つんだ」

「ここ十年の間は公の場に出ていないな。大戦直後は最も精力的に動いて、我々新政府とは別の大王派という派閥を作成していたのだが」
「うん。その派閥が完成してから領土に籠こもりがちになって、今ではつて感じかな。でも、それがどうしたの？」

「……いや、何でもない」

ゼクラム・バアル。

バアル家初代当主にして悪魔という種が誕生した頃から生きている悪魔界の生き字引。

そして、悪魔バアルはバエルとも称され、ベルゼブブと共にバアル神と結びつけられる事があるという。

彼が姿を見せなくなった事と活動を再開したアナト様。

偶然って事はないだろうが……。

「とにかく、だ。俺達がこれからやるべき事は、こいつから出された条件を飲むための準備だ」

いつの間にか煙草を燻くゆらせていたアザゼルのおっちゃんが、紫煙と共に言葉を吐く。

周りがめっちゃ嫌そうにしてるから、ヤニ吸うなら窓際に行こうな。

世間は喫煙者に冷たいんだぞ。

「期限を切ってはいないが、極力急ぐようにしろよ。チンタラやってたら、こいつが俺達を潰さなきゃならんようになる。魔王だの総督のと大そうな肩書背負ってんだ、これ以上ガキに重荷を背負わせたら恰好がつかねえだろ」

全員から向けられた批難の目に気付いたのか、さりげなく窓際に移るおっちゃん。

せつかくいい事言ってくれてるのに、どうにも締まらない。

《ところで小僧。お前は本当に白いのと闘うつもりか？》

あまり聞き覚えの無い声に目を向けると、イツセー先輩の赤龍帝の籠手の宝玉がピカピカと光っている。

ドライグと話すのは久しぶりだな。

「ああ」

「大丈夫なのか？　いくらヴァーリとはいえ、今のお前との実力は天と地があるだろ」

「それは心配いらん。絶対に死ぬ事が無いようにするから。あと、おっちゃんはあいつの事を軽く見過ぎだな」

「あん？」

「元々天才肌の上に、強くなる事に関してはアホみたいに努力を惜しまない奴だぞ？　もしかしたら俺くらいに強くなってるかもよ」

「……あり得ないと言い切れないのが、あいつの怖い所だな」

「アホみたいとか、慎兄が言っているいい台詞じゃないよね。どこぞの戦闘民族みたいな生活してるくせに」

「これが『お前が言うな』って奴なのね」

……ウチの姉妹の反応が冷たい。

あ、いいことを思いついた。

「なあ、サーゼクス兄。俺とヴァーリが鬨り合うのって映像に残したりできるか？　できれば、使ってる魔力とか氣のデータ込みで」

「それは可能だが、急にどうしたんだ？」

「それを貴族たちに条約を飲ませるのに使えないかと思ってさ。俺って冥界だと関わった奴以外は知られてないマイナーな存在だし、墮天使とのハーフだからオーフィスを倒したなんて喧伝しても効果は無いと思うんだ。そこで、今回の画像を見せながら条件を迫れば、相手だって飲むんじゃないか」

「なるほどな。ヴァーリが弱けりやあ、白龍皇を物ともしないって事で箔はくが付く。よしんば、あいつがお前に食らいつくぐらい強くなっていても、映像と戦闘に使われたエネルギーでお前の強さが解るって寸法か」

「ああ。悪魔万歳な御貴族様なら、ねつ造だの何だのイチャモン付けてくるかもしれんけど。まあ、その辺はサーゼクス兄達で何とかしてくれ」

「うん、それって結構ナイスアイデアかも。それじゃあ映像はちゃん

と撮つとくから、慎君はドカーンと派手に暴れてね」

セラフオール姉さんの言葉に頷いて、俺は部屋の出口に足を向ける。

「それじゃあ、そろそろ戻ろうか。あいつはこらえ性が無いから、しびれを切らしてるかもしれないし」

「そうだな。痲癩かんしゃく起かこされて暴れられたら、今度こそ三勢力は滅亡だ」

ついてきてくれたみんなに礼を言つて会議室に戻ると、明らかに人口が増えていた。

つうか、ヴァーリの周りにいるの、全員が顔見知りなんだが。

「おい、なんでハーフ組がここにいんだよ？」

「決まってるだろう！ 自分たちのリーダーと副リーダーが、どれだけ強いかを見せてやるためだ!!」

ドヤアと胸を張るヴァーリ。

……殴りたい、この笑顔。

「まったく驚いたよ。空間に裂け目が入ったと思つたらヴァーリが出て来てさ。唾然としてたら『お前達、いいものを見せてやる!』なんて言つてみんなを連れて行つたんだから」

困り顔でこちらに話しかけてくるのは、ビッツ。

俺やヴァーリ、晴矢に次ぐハーフ組の四番手で、今の実質的責任者だ。

恰幅かっぶくの言い体格と愛嬌のある顔、そしてグレーのキャップがトレードマークの頼れる男である。

「すまん、本当にすまん」

「それはいいんだ、ヴァーリが突拍子のない事をするのはいつもの事だし。でも、本当にヴァーリと闘うのかい？」

「ああ。衆人環視で恥ずかしいカミングアウトも受けちまつたし、闘やらないわけにはいかんわな」

苦笑いで返すと、心配そうに眉根を寄せるビッツ。

たまにケンカはあつても基本的に結束の固いハーフ組では、今回みたいにガチで闘り合うなんてことは無かつたからな。

「心配すんな。ちよつとした小道具を使うから、命のやり取りにはならねえさ」

「慎がそういうなら安心かな」

ビッツが表情を緩めると、教室の奥側で子供の騒ぐ声が響いた。

「なんだ？」

「この声……ウチのチビ達だ！」

慌てた様子で走り出すビッツを追っていくと、2歳から5歳くらいの幼児たちが主神の方々に群がっている光景が目に入った。

「このおにいちゃん、へんなふくー」

「きらきらー」

「ムツミしってるー。このひと、おかしやさまっていうんだよー」

「それを言うならお釈迦様だ、幼子よ」

「まつくろのよろいだー」

「かっこいいー」

「もやもやでてるー」

「ヴァーリにいちゃんがいったぞ。こういうのは『やみのちから』なんだって」

「ふむ。我を登るのは一人づつ順番にするがよい。落ちては怪我をするのでな」

「おじいちゃん、おひげまつしろー」

「おじいちゃん、おめめひとつないよー」

「うう……、いたくないの……？」

「ほほ……。古傷故な、もう痛くはないんじや。じゃから泣くでない」
ぎやあああああああつ!?

なにをしてやがりますか、あのチビツ子マファイア共はあああつ!

見れば、片手に赤ん坊を抱いたアトラやラヴィニア姉さん、美朱が必死に制止しようとしているが、20を超えるチビつ子ギヤング相手では到底追い付いていない。

鳶雄兄も刃を子犬モードにして気を引いているけど、それでも神々の方が気にかかるのか、引っかかっているのは4、5人だ。

「ビィィィイツツ！ チビ共を回収だ!! 先方への詫びは俺が入れる

から、片っ端から搔っ攫うぞ！」

「う、うん！」

ビツツに声を掛けて半ば幼稚園とかした主神様の席に突撃する俺。

「あー！ しんにいちやんだー！」

「メイアちゃんだけずるーい！ ミミもだつこー！」

「しんにいちやん、おもちゃかってよー」

「抱っこも玩具も後であげるから、アトラ姉ちゃんのところでもいい子にしてような」

気を抜けば引き攣りそうになる顔の笑みを張りつかせ、『ゆっくり優しく最速で』という訳の分からん動きでチビ共を回収する。

つうか、ヴァーリのアホめ。

なんで幼年組のチビ共まで連れて来てんだよ！

「身内が犯した数々の無礼、謹んでお詫び申し上げます。罰はすべて私が受けますので、どうかあの子達はご容赦いただけませんか」

チビ共をアトラとラヴィニア姉さんに任せた後、主神の皆様方に頭を下げる。

当然、謝罪の方法は『ザ・土下座』である。

「面を上げよ、小僧」

ハーデス様と同じく、ジャングルジム代わりにされていたダグザ様の声にゆっくりと顔を上げる。

一人を肩車、両肩にチビを一人づつ乗せている姿を見た時は、思わず魂が抜けかけた。

「先の件の謝罪は不要、罰も与えん」

「左様。右も左も分からぬ幼子がやったこと、この程度では儂等は目くじらなど立てんよ」

「ありがとうございます!!」

寛大な心を示してくれた神々に、もう一度頭を下げてから立ちあがる。

『無限』殿、あの幼子たちはなんなのだ？」

「あの子達は墮天使の本拠地で保護している、三勢力の種族と人との

混血児達です」

「ほう、墮天使の本拠地でな。何故そのような事を？」

「始めたのは父と副総督のシエムハザです。共に人との間に子の生なし
ていきますから、そういった境遇の子供達を放っておけなかったの
でしょう。特に父は私達が幼い頃に別居していますので」

『無限』殿も随分と慕われているようではないか」

「あの子達とは赤ん坊からの付き合いでして。兄貴分として色々
茶ぶりをされてますよ」

アメン様の質問に苦笑いで応えていると、天照様が歩み寄つて
くる。

「慎、本当に白龍皇と闘うのですか？」

「はい。悪友とはいえ、友人にあそこまで言われては断れません」

「そうですか」

「ふむ、新たな『無限』対『白龍皇』か。なかなか興味のそそられるカ
ドじゃのう」

「確かにな。映像を各々の地域に送信して、視聴料でもとるかね？」

「いやいや、さすがに料金を取るのは拙いでしょう。間近で観戦でき
るだけで我慢しないと」

「……まったく、他人事だと思つて気楽な物ですね。こっちは国土が
どうなるか、気が気でないのに」

「それについてはご安心を。戦うのは日本ではありませんので」

「ではどこで戦うのかね？」

「それは始まってからのお楽しみという事で。ああ、皆様の土地を害
する事はありませんから」

それだけ言い残して神々から離れた俺は、子供組をなんとか落ち着
かせたアトラたちの元に向かう。

「悪い、アトラ。鳶雄兄達も手間をかけた」

「ううん。私の方こそゴメンね。慎君にだけ謝らせちゃつて」

「いいのよ、アトラ。あそこにいらつしやるのは高位の神様だから、私
達が行つても逆効果にしかないわ」

「本当に焦つたよ。チビがむこうにいるの見た時は心臓止まるかと

思ったし。刃もお疲れ、大変だったなー」

「わふ……」

さつきまで揉みくちやにされていたせいか、子犬モードでぐったりと床に寝そべる刃。

その頭を撫でながら、鳶雄兄が^{ねぎらい}労いの言葉をかけている。

「けど、こいつ等よくこの時間まで起きてるな」

「本当は寝てただけだね、ヴァーリ君が来た時に起こされちゃったの。普段ならグズツたりする子もいるんだけど、ヴァーリ君が鎧姿だったからみんなテンション上がっちゃって」

なにやっつてんだ、あのバカヤロウは。

「それでコツチに着くなり大暴れだったんだ」

「うん。みーちゃんも手伝ってくれてありがとう」

「いいって。私とアトちゃんの仲じゃん」

キャツキャウフフと戯れるアトラと美朱。

『わたしもー』『ぼくもー』とチビ共に^{たか}集られてるが、任せておけば大丈夫だろう。

「そんじゃあ、今からヴァーリと暴れるから、後は頼むな」

「うん、気をつけてね」

「慎兄、手加減しなよ」

「お互い、やり過ぎない範囲内で悔いを残さないようにな」

「ヴァーさんの思いに応えて、ガツンと行っちゃえ！」

口々にかげられる声援を背にヴァーリのところに行くと、何故かまた見知った顔が増えていた。

アーサーと美猴、玉藻とクーの兄貴はいいとしよう。

だが、なんでサイラオーグの兄貴とミリキヤス、フェイト嬢にネージユ嬢までいるんだ。

……まあいいや。

その辺は後で聞くとして、今は為さねばならん事がある。

「ヴァーリイイイ！ こんのボケエ!!」

「ぐはあっ!?!」

助走をつけた理想的な喧嘩キックを顔面に受け、もんどり打って倒

れるヴァーリ。

「ハーフ組のチビ達連れて来たんなら、しつかり面倒見んかい！ 主神の方々のところ行って好き放題やってたんだぞ、あいつ等!!」

「す……すまない」

鼻血を滴らせて床に伏せるヴァーリに一言入れて、立たせるついでに顔のダメージを回復させてやる。

この程度のダメージなど問題にならないだろうが、勝負事はフェアであるべきだ。

「で、アーサー達はわかるとして、なんでサイラオーグの兄貴達が来てるんだよ？」

『無限の闘争』の簡易端末に、お前達が闘うと告知があったのだ。画面には立ち合いを行う場所と観戦の是非を問うボタンが表示されてな、これは見逃せんと思いい足を運んだんだ」

「それで観戦希望にYESと答えたら『無限の闘争』の入り口が現れて、控室の入り口がここに繋がったんです」

「なるほどねえ……」

しかしまた、妙な機能があったもんだ。

使用者同士が対戦したら、他の奴に告知が行くようになってるなんてな。

「なあなあ！ 美朱やイツセーはどこにいるんだ？」

「姉さん。偉い人がいっぱいいるみたいだから、大人しくしないと」

「フェイト嬢にネージュ嬢か。あいつ等なら向こうにいるぞ」

「おおっ！ 行くぞ、フェイト!!」

「姉さん、待ってつてばあ！」

「反対には偉い神様がいっぱいいるから、行っちゃダメだぞ！」

こちらの忠告に腕を振って応えながら三勢力の方に駆けていく二人。

ネージュ嬢はメンタル的に幼年組と変わらないから少々不安だが、フェイト嬢がいるから妙な事にはならないだろう。

「そんじゃあ、そろそろ始めるか。玉藻、クーの兄貴、行ってくるわ」「はい。ご武運をお祈りしています」

「あんだだけの事を言わせたんだ、しつかり受け止めてやりな」

二人の声援を背に、俺は窓際に立つヴァーリの横に並ぶ。

「それで、舞台はこの校庭でいいのか？」

「まあ見とけって」

ヴァーリの疑問の声を脇にスマホを操作し、『無限の闘争』の個人ロッカーからアイテムを取り出す。

青い光と共に手の中に現れたのは円錐型の小さなピン。

スマホの画面で端末とアイテムがリンクしている事を確認してGOと書かれたボタンをタップすると、ピンは一人でに学園の敷地の四隅へと飛んでいく。

続いて、起動準備完了の文字と共に現れるウインドウ。

その中に並ぶ項目から目当てのモノを選択して、下にある起動のボタンを押すと虹色の光が窓の外を覆い、それが消えると辺りの風景が一変する。

視界の果てまで続く青い空と黄土色の乾いた荒野、その地面からはてつぺんに僅かな緑を残した岩山がまばらに生えている。

そして校舎のすぐ下、ちょうど校庭の真ん中に当たる位置には、四隅に円錐状の柱を称えた簡素な武舞台がその姿を見せている。

そう、ここは『ドラゴンボール』に登場したセルゲームの会場だ。

「これは……『無限の闘争』の世界か」

「その通り。さつき撒いたアイテムはな、指定した区画を現実世界から切り離し『無限の闘争』のバトルフィールドを再現する物だ。いくら派手に暴れても、ここなら現実世界や校舎に影響は無いし死亡防止機能だつてちゃんと完備してる」

「つまり、何の憂いも無く全力が出せるという事だな」

「ああ、俺達には打って付けの舞台だろ？」

ニツとヴァーリに笑いかけた俺は、乱暴にネクタイを外しながら窓から身を躍らせた。

そして武舞台に降り立ち校舎を振り返ると、身に着けていた背広とYシャツに手を掛けて一気に脱ぎ捨てる。

龍が如くなんかでやってる一気脱ぎ、いつペンやってみたかったん

だよなあ。

まあ、背広とシャツが一発でお釈迦になるのが玉に瑕だが。

「やろうぜ、ヴァーリ！ お望み通りド派手な喧嘩といこうじゃねえか!!」

俺の声に返って来たのは返答でも雄叫びでもなく、呪文の詠唱だった。

我、目覚めるは覇の理に全てを奪われし二天龍なり

呪われた詩が紡がれる度に、校舎から感じる魔力と龍のオーラがドンドン膨れ上がっていく。

無限を妬み、夢幻を想う

二天龍に魅入られた者が到達するという極限の力『覇龍』

神をも超える力を手にする代わりに理性を失い、生命力と寿命を燃料に命が尽きるまで暴れ続けるといふ禁忌の形態。

我、白き龍の覇道を極め

あいつは生まれ持った莫大な魔力を担保に、短期間ならリスク無しで使用できると言っていた。

つまり、初っ端から全力全開の短期決戦狙いって事だ。

ならば、こっちのやる事は一つ。

小細工無しで正面からねじ伏せるのみ。

汝を無垢の極限へと誘おう……!!

『ジャガーノート・ドライブ
覇龍』

詠唱の終わりと共に、俺が出て来た窓が壁ごと吹っ飛んだ。

巻き上がる粉塵を切り裂いて現れるのは、通常の禁手よりもさらに鋭角なフォルムとなった鎧に巨大化した翼を羽ばたかせる白龍の化身。

その身が叩き出す速度、そして纏う龍氣はいつもとは比べ物にならないほどに、攻撃的だ。

「おおおおおおおっ!!」

雄叫びと共に拳を振り上げるその姿に、我知らず口元が吊り上がる。

「いくぞおっ！ 慎!!」

「来いやあつ！ ヴァーリ!!」

ゴングの代わりとばかりにお互いの拳がぶつかり合う轟音が、武舞台の石畳を巻き上げる衝撃波と共に周囲に響き渡る。

さあ、存分に暴れるとしよう！

人だよね!

「落ち着け、小娘」

無理です!・落ち着けません!!

「あの、彼女は?」

「姫島慎の妹だ。ちょうどいい、貴様もここに来い。貴様の持つ『無限の闘争』の知識も少しは役に立つだろうからな」

腕の一振りで自分の隣に呼び出した椅子を指差す将軍様。

心の底から『オコトワリー』したいが、あの眼光を前にそんな事を言う勇氣は私にはありません(涙)

「ギャアアアアアアアアムツ!」

「大変です、部長! イッサー君が顔の穴という穴から、色んな液を噴き出して悶絶してます!!」

「イッサー!・しつかりして、イッサー!!」

なんだか三勢力側が騒がしい。

具体的に言うと、トラウマをスクリユードライバーされたI先輩の悲鳴のようなものが聞こえたような気がするが、きつと気のせいだろう。

……うん、私は何も聞かなかった。

「えー、ただいま悪魔将軍さんの指名により姫島選手の妹、姫島美朱さんも実況席に参加する事となりました。姫島さん、よろしくお願います」

「は、はい。よろしくお願います」

物凄く慣れた感じの吉貝アナに、苦笑いを返す。

はあ、なんでこんな事になっちゃったんだろ……。

「では、決戦の場にカメラを戻しましょう」

いや、カメラなんかないじゃん。

とりあえず、慎兄達の戦いを見る前に疑問を解消しところかな。

「あの、将軍様?」

「なにか」

「どうして将軍様がここにいられるんですか?」

「大したことではない。奴が作り出したバトルフィールドの影響で、

ここは半ば無限の闘争と融合した空間になっている。その為、私の様に力の有る存在はこの空間に足を踏み入れることが出来るのだ」

なるほど、これは思わぬ副効果だ。

「じゃあ、あの二人を連れて来た理由は？」

「この者は大半が奴等の戦いを目で捉える事はできんだろうからな。観客へのサービスというものだ」

観客へのサービスって……何気に紳士だよ、この人。

まあ、いいや。

疑問も解消したし、慎兄達の事に集中しよう。

私が戦場に目を向けると、二人はその役目を果たせなくなった武舞台から離れ、フィールド全体を使ってぶつかり合っていた。

「破壊された武舞台から戦場を荒野全体に移した両者、目にも止まらない速度で激しく鎬しのぎを削っています！」

「高速で動き回りながら相手に襲い掛かる【動】のヴァーリ選手に、大地をしっかりと足を噛ませてどっしりとした構えを見せる【静】の姫島選手。対称なスタイルの両者ですが、戦況はヴァーリ選手に傾きつつあるようですね」

たしかに一見すれば中野さんの言葉通り、ヴァーリ君が一方的に攻めているように見える。

慎兄は何度か当身投げで捕らえようとしているけど目測が合わないのか、出した手は空を切るばかりで逆にヴァーリ君の攻撃をカウンターで食らっている。

……でもおかしい。

ヴァーリ君を見ると、間合いを詰めている最中に姿がブレたと思っただけ瞬間移動したみたいに距離が縮まってる時がある。

あれって一体？

「姫島選手が何かしようとしているが、不発に終わっている上にカウンターを取られてしまっているようです。しかし、事前情報では姫島選手は返し技の名手と聞いていたのですが……」

「あの白龍の小僧は間合いを詰める最中に、空間に何か細工をしているのだろう。その結果、両者の空間が減少した事で慎の奴は上手く目

測を図る事ができないでいるのだ」

「空間に細工……そうか！ ヴァーリ君は空間自体に白龍皇の光翼の能力である【半減】を掛けて、間合いを狂わせているんだ！」

「ふむ。貴様の言葉を聞く限り、白龍の小僧は任意のモノを半減させる能力を有しているらしいな。では、両者の声を聞いてみるか」

私の指摘に興味があるような声を漏らした將軍様は、軽く指を鳴らした。

すると、会議室内に二人の様子を映した投影ディスプレイが現れ、声の流れ始めたではないか。

『どうだ、慎！ 得意の当て身投げもこれでは使えまい!!』

《貴様自身には通用しなくても、我が【半減】にはこういう使い方もあるのだ!》

『……なるほど、アホなりに考えてるって事かよ。———だがなあ!!』

勝ち誇ったような声と共に放たれる白い甲殻に覆われた拳。

だが、今回は今までのようにはいかなかった。

放たれた慎兄の左手によって目標から逸らされる同時にもう一方の手で兜の飾りを掴まれたヴァーリ君は、突っ込んで来たスピードそのままに地面に叩き付けられる。

「ああーと！ ヴァーリ選手、ついに姫島選手に捕まったあ!! 変形肩車のような投げ技で頭から地面に激突う!!」

「これは強烈ですよ。自身のスピードをそのまま利用された形になっていますからねえ」

『がはあっ!?!』

《馬鹿な!?! この短期間で我等の間合い外しに適應したというのか!?!》

『あんだだけ使ってくれば、嫌でも慣れるってもんだ。———そら、もう一丁!!』

衝撃で空いたすり鉢状の穴から引きずり出され、再び地面に地面に叩き付けられるヴァーリ君。

地面に激突する際に、慎兄から放たれた雷光が落雷を逆回しするか

のように天に向けて伸びていく。

【雷鳴豪波投げ】

ギース・ハワードが使っていた追い打ち専門の投げ技だ。

「ここで姫島選手の容赦ない追い打ちイッ！ 杭のように地面に打ち込まれたヴァーリ選手の体を伝って、雷撃が天を焼くうっ!!」

「あの電撃はどうやって発生させているのでしょうか？ モーターマンのように腕に電池がある訳ではないようですし……」

「えーと、あれは氣によって発生した雷撃に、私達が生まれつき持っている能力である【雷光】を上乗せしてるんです。あの雷撃には悪魔の弱点である光力が加えられてますから、半人半魔のヴァーリ君には有効だと思いますよ」

と言ったものの、ヴァーリ君やイツセー先輩を見ると二天龍の神器って、所持者の属性まで龍に近づけるくらいがあるんだよね。

だから、雷光のダメージも想定より少ないのかもしれない。

まあ、そんなもの無くても十分強烈なんだろうけどさ。

「雷撃と投げ技の二重ダメージに悶えるヴァーリ選手ですが、姫島選手の手は緩ゆるまない！ 素早く相手の手を捕り、腕ひしぎ十字固めを狙う！」

吉貝アナが実況している間に、慎兄のヴァーリ君を腕ひしぎに捕らえている。

将軍様に鍛えられているだけあって慎兄の関節技の技術は超一流、さらに『極めたら折る』と教えられているから容赦がない。

いくら白龍皇の鎧に護られているとしても、テコの原理+慎兄の異常な怪力で締め上げられればヴァーリ君の関節は一たまりもないだろう。

『ぐおああ……ッ?!』

「ヴァーリ選手悶絶う！ 右腕を護るはずの肘の装甲も砕け、大きく引き絞られている。これは危険だぞ!!」

映像から流れるヴァーリ君の苦鳴に、主にハーフ組から悲鳴が漏れる。

見るからに肘の関節は完全に極まっている。

慎兄があと一mm後ろに体重を掛ければ、ヴァーリ君の肘は完全に破壊されるだろう。

会議場のみんなが生木をへし折る音を思い浮かべたが、そうはならなかった。

怪しく揺らめく黒いナニカが視界を掠めると同時に、慎兄が技を解いて間合いを取ったのだ。

「む……う？」

横にいる將軍様から不機嫌な声が漏れる。

「おっと、どうした事でしょう。姫島選手、ヴァーリ選手の肘を破壊する寸前で技を解いてしまったぞ!」

「見てください！ 姫島選手の右腕を!!」

中野さんの指摘と共に慎兄の右手が大映しになると、そこには手首から肘に掛けて絡みつく黒い炎が。

「なんででしょう、あれは？ 黒い炎のように見えますが……。中野さん、わかりますか？」

「私にもさっぱり。姫島選手が手を振って消火を試みてますが、消える気配はありませんね」

『無駄だ。それは魔界から召喚した黒き炎、相手を焼き尽くすまで消えはしない』

起き上がって来たヴァーリ君を見ると、やはりその手には黒い炎が煌々と燃え盛っている。

黒い炎、黒い炎……。

ダメだ。

あの手のスキルは厨二病の代名詞みたいなものだから、種類が山ほどある。

特定なんてとてもじゃないができる訳がない。

『また面倒な能力を手に入れやがって……。祓え給い、清め給えつと』
素早く九字を切った左手を当てると、右腕の炎はあつという間に消えて無くなった。

映像越しにも相当の穢れを感じてたのに、あんな略式の祓詞で祓うとか規格外にも程があるわ。

『流石だな、あの炎をこうも容易く消し去るとは。今のは氣功術か?』
『お前、俺の職業を何だと思ってるんだ。魔界の炎なんて大それた事
言ってるが、要は穢れや瘴気を燃料にした呪炎だろうが。なら、そい
つを祓つちまえば簡単に消えるんだよ』

言葉を紡ぎながら右手を上げる慎兄。炎が絡みついていたところは
肌が薄く赤みを帯びただけで特に問題は見受けられない。

あれだけ炎に炙^{あぶ}られておいて、これはないんじゃないか。

「余裕の表れか、炎に巻かれていた右手を掲げる姫島選手。そこには
何の傷痕も存在しません!」ところで、姫島さん。彼の職業というの
は格闘家ではないのですか?」

「えーと、格闘家は趣味です。本業は神職、日本神道の神官ですね。因
みに、今使ったのは祓詞という罪穢れを浄化する効果がある術です。
あの炎が兄の言うような原理で出来ているのなら、効果はあるかと」
引き攣^つりそうになる顔を我慢しながら吉貝アナの質問に答える私。

あのレベルの穢れを祓おうと思ったら、炎系に特化した術師を呼ん
で三日ほど儀式をしないと無理というのは伏せておこう。

『つーか、よりにもよって邪王炎殺拳^{じゃおうえんざつけん}なんざ覚えやがって。それ以上
厨二病を加速させてどうすんだよ』

ため息を突きながら、慎兄がヴァーリ君を半眼で睨み付ける。

慎兄、それは言わないであげて。

『その炎を見ただけで気付くとは、流石だな』

『違うわ、バカタレ。火を出す時、自分で邪王炎殺拳^{じゃおうえんざつけん}って言ったじゃ
ねえか』

『ふむ、そうだったか』

慎兄の指摘に首を捻るヴァーリ君。

うん、相変わらずのポンコツぶりに、なんか安心した。

「二人の会話を聞くに、先程の黒い炎は邪王炎殺拳という技のようで
すね。中野さん、何かご存知ですか?」

「吉貝さん。私は超人レスリング専門ですよ? そんなマイナーな拳
法なんて知ってるわけじゃないじゃないですか」

「では、悪魔將軍さんは?」

「私も風の噂でしか聞いたことは無いが、邪眼師と呼ばれる特殊な職業の者達に伝わる魔界の黒炎を召喚し、それを自在に操る武術らしい」

「では、彼は邪眼師なのですか？」

「そこまでは解らん。奴を見る限り、重要なのは邪眼師か否かではなく、魔界の炎を呼び出す為の妖力・魔力のようだがな」

將軍様の指摘は多分正しい。

ヴァーリ君があれを憶えたのは【無限の闘争】の力なんだろうけど、黒炎の召喚は自身の魔力を使っている。

おそらく、原作世界で【邪王炎殺拳】が邪眼師にのみ受け継がれたのは、邪眼による増幅機能を使用しなければ魔界の炎を召喚するだけの妖力を確保できない為だろう。

しかし、【邪王炎殺拳】かあ。

星の数ほどある【無限の闘争】の技から元祖厨二病の代名詞を選ぶなんて、やっぱりアザゼルのおっちゃんの影響なのかなあ？

『では、行くぞ！ 貴様がオーフィスを倒している間、俺も遊んでなどいなかったことを見せてやろうッ!!』

両腕に黒炎を迸らせながら大地を蹴るヴァーリ君。

背負った白龍の翼が光を放つと同時に目にも止まらない速度へと達した白亜の鎧は、【半減】による間合い外しも無しに一瞬で相手との距離を殺し切る。

『食らえッ！ 邪王炎殺煉獄焦ッ!!』

相手の懐に飛び込むと同時に放たれる炎熱の連撃、しかしそれは氣を纏った慎兄の掌によつて捌かれていく。

そして速度が落ちた最後の一撃を捕られると、瞬く間もなくヴァーリ君の身体が反転する。

『アルビオンッ!!』

《Half Dimension!!》

ヴァーリ君の叫びと共に電子音が響き、当て身投げで地面に叩き付けようと持ち上げられていた身体が、一瞬で地面の近くにまで移動する。

『なにっ!?』

『もらったッ！ 炎殺月輪斬ッ!!』

えんさつがちりんざん

驚愕に目を見開く慎兄の隙を突いて地面に手を突く事で投げを回避したヴァーリ君は、そのままバク転の要領で黒炎を纏った踵を跳ね上げた。

慎兄は咄嗟に身を反らせるが、氣と炎を纏った踵は刃の鋭さでその身体を逆袈裟に切り裂いて、放たれた炎熱真空波が背後の岩山をバターのように両断する。

今のは【サマーソルトシエル】と【邪王炎殺拳】の合体技か。

おそらく【邪王炎殺拳】の要領で踵に炎を纏わせたのだろうが、こういうった事を簡単にやってのけるのを見ると彼が天才である事を再確認する。

そしてその天才は、背中の光翼を煌めかせると逆立ちのまま空中に静止。

そのまま逆回しに回転し、遠心力を加えた黒炎の踵を振り下ろす。

【サマーソルトシエル】と【ムーンサルトスラッシュ】による上下のコンビネーション。

普通ならあり得ない連携だが、常識の逸脱具合では我が兄も負けてはいない。

煙を上げる胸元も気にせずには身体を沈めて紙一重で蹴りを躲し、すぐさま両足で空中にいるヴァーリ君を上高く蹴り上げる。

そして舞空術で追いかけると、空中でチキンウイングフェースロツクの体勢に持っていく。

『やるじゃねえか、【半減】を使って今度は投げ殺しなんてよ。だが、これならどうだ!!』

「ああーっど！ 姫島選手、上空高くでヴァーリ選手をチキンウイングフェースロツクに捕らえると頭から落下あッ!! これはつ雪崩式の変形スープレックスだあ!!」

「これは危険ですよ！ フェースロツクで首を極められたまま、あの高高度から堕ちれば命に関わります!!」

中野さんの言葉に騒めく会場と、そんな事など知らぬとばかりにその速度を増していく両者。

『ぐ……う……ッ！ まだ……まだ、終わらん!!』

《Half Dimension! Half Dimension!
! Half Dimension! Half Dimension!
on! Half Dimension!!》

技から逃れようと身を振るヴァーリ君と、その意思に応えるように連続で空間に【半減】を掛けるアルビオン。

落下のスピードと空間の減少、二つの要素が絡み合った事で瞬く間もなく二人は地面に激突し、大きな砂埃が立ち昇る。

「チキンウイングスープレックスか。戯れたわむに出した技だが、ああも上手く再現するとはな。やはり奴は面白い」

楽しげに笑う将軍様に、あの技がサイラオグ兄を失神させたものである事を思い出す。

会場の誰もが固唾かたずを飲んで見詰める中、粉塵を切り裂いて飛び出す二つの影。

慎兄の身体には右肩から左わき腹に掛けて焼け爛ただれた傷が刻まれ、もう一方のヴァーリ君は兜が破壊され、鎧の右肩部分と翼が大きく損傷している。

「土煙から飛び出した両者。そのダメージは五分と五分か!」

「いや、白龍の小僧の方が重い。奴の構えを見るが良い。先ほどより右手の位置が拳二つ程下がっているだろう、あれは奴が右腕を痛めた証拠よ」

将軍様の言葉を受けてモニターがヴァーリ君をアップする。

そうすると、たしかにヴァーリ君の右腕が細かく震えているのが見て取れた。

「身体能力に加え、技術でも僅かながら慎が勝っている現状での負傷。ともすれば、あれは致命に至いたるものとなるかもしれない」

将軍様の重々しい声に、静まりかえる会場。

付け加えるならば、魔力によって強引に【覇龍】を起動させているヴァーリ君に対して、慎兄は界王拳はおろか潜在力も開放していない

素の状態だ。

正直、ここまで差があるとは思っていなかった。

『さて、まだやるかい?』

『当然だ。この程度、怪我の内にも入らん』

お互いに獰猛な笑みを浮かべた二人は同時に地を蹴った。

そこから二人が繰り広げるのは高速の乱打戦。

「……………」

「……………」

実際の姿はもちろん、投影ディスプレイの映像もお互いの姿がブレて見えるほどのスピードに、実況席の二人は言葉を発することが出来ない。

こつちはまだ目で追えるけど、会場にいる非戦闘員にはキツイスピードだろう。

ヴァーリ君は魔力弾に「ソニックブーム」を織り交せての牽制と「クロスファイアブリッツ」や高速で相手を擦り抜けながら連撃を叩き込むルガールの技「バニシングラッシュ」などのコンビネーションで攻めている。

しかし基礎ポテンシャルの差に加えて接近戦は慎兄の方に分があるようで、先程の投げ殺しを警戒したのか当て身投げも攻撃を受け流しながら掌打で打ち返す【螺旋】や、腹部への突き蹴りから相手を頭上に持ち上げて振り落とす【弧月】等に切り替えている為に、ぶつかり合うごとにどんどん不利になっている。

今だって【螺旋】で弾かれたところを【玄武剛弾】を叩き込まれているし。

「あの……美朱姉様。姉様は二人の動き、見えるんですよね?」

ふと気づくと、ミリくんが何とも困った顔でこちらを見ている。

「まあ、なんとかね」

「できれば、どうなっているか教えていただけませんか? 僕はまだ未熟者だから、お二人の動きが見えないんです」

「私達からお願いできるかな? 実況という立場でこんな事を頼むのは情けないんだけど」

ミリ君に続いて吉貝アナや中野さんも頭を下げて来た。

ネットの動画も視聴オンリーな身としては実況なんてまーったく自信はないけど、ここまでされてノーとは言えない。

「拙つたなくてもよければやらせてもらいます、お二人もフォローしてくださいね。あと、将軍様も手伝ってもらえますか？」

「よかろう。こちらもゲストとして呼ばれているのだ、その責務は果たさねばな」

よし。解らないところは将軍様に丸投げって事で、そんじやあ始めますか！

「えー、外で暴れてる馬鹿二人が普通の人には見えないレベルの高速バトルに移行したので、実況席の方も体制を変えたいと思います。ここからは実況を姫島美朱、解説を悪魔将軍様にバトンタッチして送りいたします」

吉貝アナから渡されたマイクに声を吹き込むと、会場からは歓声が上がる。

どうやら二人の動きをみえていない方は思った以上に多くいたらしく、主神の方々の方から『あの動きを捉えることが出来るとは……』なんて感嘆の声や『やはり無限の血族もただものではなかったか』なんて変な過大評価が耳に入る。

私は外の二人のような逸般人では断じてないので、そのところは勘違いしないでほしい。

「さて、現在両者は攻守入り乱れながらの激しい乱打戦を繰り広げているのですが、その天秤は慎兄に傾きつつあります」

「能力差もそうだが、なにより右腕の不調が尾を引いているな。体捌き一つとっても、ほんの僅かだが体芯にブレがでている」

「それはいけない事なのですか？」

「格下相手ならば問題はない。しかし、奴等レベルになればその闘いは刹那の時の奪い合い、その中であの隙は致命的だ」

ミリ君の質問に将軍様が答えている間にも戦局は進む。

見れば、将軍様の言葉を証明するかのように慎兄はヴァーリ君の右の攻撃に合わせて、反撃を放っている。

「またしても当て身投げ・螺旋！ 上空から加速をつけて放ったヴァーリ君の炎熱の右拳を跳ねのけると同時に、慎兄の右掌底が白磁の鎧の脇腹を抉る!!」

その一撃で錐もみ状に吹き飛ばされて地面に叩き付けられるヴァーリ君。

身を包んでいた白の鎧の殆どが罅割れ、全身が傷と青痣に塗れたその姿は凄惨というべきものだ。

それに対して、足を止めて姿を現した慎兄の姿はヴァーリ君と同じく全身に打ち身の痕はあるものの、胸元の切傷以外に大きな怪我は無い。

《馬鹿な……。いくら無限の力を有しているとはいえ、覇龍を使ってここまで差があるというのか……ッ!?!》

「ドライグ、引っ張るなッて！ お前、俺をどこに連れて行こうってんだよ!?!」

声の方に目を向けると、そこには赤龍帝の籠手ブーステッド・ギアに引きずられるようにして、おぼつかない足取りで進むイツセー先輩の姿。

「というか先輩、目隠しの上に耳栓までしてるんだけど……。トラウマ対策だと思っけど、やりすぎなんじゃないかな?」

「ふむ……。赤龍よ、貴様もこちらに來い。あの白龍の小僧の神器について、貴様ほど詳しい者もおらんだろうからな」

イツセー先輩……というよりドライグを呼び止めて、またもや腕の一振りで私の隣に椅子を呼び出す将軍様。

まあ、出てきたのがパイプ椅子だったのは気にしない事にしよう。「あの……悪魔将軍さん。彼は一体……?」

「その小僧の事は気にするな。私が用があるのは奴が着けている籠手こてだ」

「籠手、ですか」

「言われてみれば、制服には不釣り合いな立派な籠手を着けてますね」

「その籠手に宿る龍は赤龍帝ドライグという。奴は白龍の小僧の神器に宿る白龍皇アルビオンの宿敵なのだ」

「なんと！ では本来ヴァーリ選手のライバルとなるべき相手は

……」

「この小僧ということになるな。もつとも、肝心の所有者は双方ともに相手に興味が無いようだが」

《それは言わんでくれ、虚むなしくなる。俺だってこんな状況を望んでいたワケではないのだからな》

「ならば、その小僧を焚たきつけて白龍に挑いどんでみるか？」

《無茶を言うな。100%勝てん戦いに相棒を送り込むなど、できるわけがなからう》

「賢明な判断だ。必要迫せまられねば強くなろうとしない貴様の所有者では、白龍の小僧には逆立ちしても勝つことは出来ん。羊では狼は倒せんようにな」

《俺の相棒を羊扱いか。餓狼の如く力を求める修羅共を束ねる者は、言う事が違うな》

「その言葉、賛辞と受け取っておこう。それよりもモニターから目を離すな。貴様には白龍の状態について語ってもらわねばならん」

《う……うむ》

皮肉に全く堪こたえていない將軍様に、言葉を飲み込むドライグ。

ちなみにイツセー先輩は、私の介助でなんとかパイプ椅子に腰を下ろすことが出来てます。

目隠しと耳栓はそのままの方がいいよね。

「さて、赤龍よ。今の状況をどう見る？」

《正直に言わせてもらえば、信じられんし信じたくないな。我等の究極たる【覇龍】を使って尚なほあの結果とは、悪夢を見ている気分だ》

「ねえ、ドライグ。その覇龍ってどういうモノなの？」

頭に浮かんだ疑問を紅い籠手にぶつけてみる。

ヴァーリ君からはさわりくらしいしか教えてもらってないので、パワーアップ機能である事と使うときに恥ずかしい呪文が要ること以外、わからないのだ。

《俺達に代表されるドラゴン系の神器の禁じ手だ。封じられた龍の力を強引に開放する事で神をも超える力を手にすることが出来る。だが、我等龍の力は基本人間である神器所有者には過ぎた物。発動すれ

ば生命力と寿命を著しく消費し、理性を失う》

「だが、あの小僧は己が自我を保っているな。それにその姿も人のままだ」

「姿、ですか？」

「龍の力を全開放するのだから、その姿を模すのは当然だろう。神器には禁手化のような形態変化の機能があるのだ、人の姿のまま力のみを解放するなどナンセンスでしかない」

《その通りだ。本来なら禁手化によって身に纏った鎧は龍の姿へと変化する。しかし、奴はルシファアの血から得た莫大な魔力を代償として、疑似的に【覇龍】を制御しているのだろう》

「なるほど。その覇龍とやらが代価を必要とする理由、そして御する方法が見えてきたな」

「え、ええッ!？」

なんか將軍様が一人で爆弾発言しながら納得してるんですけど！

えーと、取り敢えず【覇龍】の事は解ったんだけど、ドライグの言う通りならヴァーリ君って今の状態を維持してるだけでゴリゴリ魔力が減っていくんだよね。

それってもしかしなくてもマズいんじゃないか……

一抹の不安を憶えながらもモニターに目を向けると、傷だらけのヴァーリ君が振るえる足で立ち上がっていた。

『まさか、ここまで差があるとはな。俺も修行を怠^{おこた}っていなかったつもりだが、お前も相当の荒行を積んでいたんだな』

『おう。忙しくてなかなか鍛錬の時間が取れないんでな、凶ランク千人組手なんてアホな真似をしてたんだ。お陰でこの1か月間死んで死んで死にまくったが、飛躍的に強くなれたぞ』

なにそれ、聞いてないッ!？」

あの馬鹿兄貴、なんちゆう無茶やらかしてんのさ!!

「姫島さん、お兄さんの言っていた事は一体どういう意味なんでしょうか？」

「はい。えーと……兄は私的訓練スペースを持ってまして、その空間では致命傷を負ったとしても疑似的に死を体験するだけで、本当に亡

を飲み込み、その姿を異形のモノに変えていく。

陶器のような質感だった鎧の表面は生物的な筋や鱗が入った表皮に。

巨大な翼はさらに肥大化し、身体の形は前傾姿勢の龍のそれに代わっていく。

それに周りに纏わりついてる無数の人影、あれって怨霊じゃないか!?

「なにあれ……?」

《あれが真の覇龍だ。おそらく、あの小僧が担保にしていた魔力が尽きたのだろう》

あまりにも異常な変化を目の当たりにして思わず漏らした声に、ドライグは静かに言葉を発する。

「じゃあ、周りにしがみ付いてる人影は何なの?」

《小娘、お前にはあれが見えるのか?》

「こっちは神官。人の恨み辛みくらい見る事できるよ。それで、あれは何なの?」

「あれはあの神器に飲み込まれ果てた者達の成れの果て、負け犬共の吹き溜まりだ。そうであろう、赤龍よ?」

《……そうだ。あれは歴代白龍皇の残留思念、俺達の戦いに巻き込まれて死んだ者達の怨念だ》

「そんな……」

「……までだな」

絶句する私を余所に、將軍様は小さく呟く。

銀の兜越しにヴァーリ君に向けられる視線は、酷く冷ややかだ。

「今まででさえ大差をつけられているのだ。理性を失い獣となつては慎の敵では無い。奴の強さへの貪欲さは見所があったが、この程度を己が力で御せぬようではな」

静まり返る会議室に將軍様の裁定が響き渡る。

あまりの事に声も出せない者、事態を静観する者。

各々の事情はどうあれ、みんなが静かに投影ディスプレイに映し出された変わりゆくヴァーリ君を見つめる中、不意を突くように校舎が

ぐらりと揺れた。

校庭に視線を移すと、そこには蒼い氣勢を身体の周りに渦巻かせた慎兄の姿があった。

なんだろう、この氣の流れ。

外から取り入れる氣と慎兄の中のもものが混ざり合って増幅し合っているように見えるけど……。

「奴め、【真人】の域に至っていたか。ギースハワードやリョウ・サカザキに比べればまだまだ稚拙だが、悪くはない」

慎兄の変化に心当たりがあるのか、将軍様は興味深げにつぶやく。

【真人】……。

どこかで聞いた事があるような氣がするけど、思い出せない。

「悪魔将軍さん、姫島選手の変化はいつたい？ それにその【真人】というのは？」

「【真人】とは奴が使う氣功闘術の究極と呼ばれる領域だ。自身の身体より氣を生み出す内氣功と周りから氣を取り込む外氣功。その二つを極めた者が辿り着く境地であり、そこに至った者は種族の限界を超えると言われている」

「会場の皆様、お聞きになられましたでしょうか！ ここに来て姫島選手が奥の手を見せました!! 彼が人の限界を超えたのは、暴龍と化した好敵手を討つためか!？」

吉貝アナの叫びに会場内は再び騒めき出す。

でも違う。

慎兄はそんな事の為に力を使ったんじゃない。

きつと別の、私達が考えつかないナニカの為……。

「なにやっつてんだっ！ ヴァアライイイイッ!!」

慎兄の今まで聞いた事もない大声に、会議室の窓ガラスがビリビリと振動する。

「お前は俺のライバルなんだろうがあッ！ だったら、そんな負け犬共に手こずってんじゃねええッ!!」

ヴァーリ君への叱咤と共に放たれた氣勢によって、彼を包んでいた怨念の手がほんの少し緩む。

そして、龍の顔へと作り替えられようとしていたヴァーリ君の目に、ほんの少し意思の光が戻るのが見えた。

……ほら、やっぱりね。

◇

《ヴァーリ！ 気をしっかり持て！ 残留思念に飲み込まれるな!!》

アルビオンが必死に呼びかけているのが聞こえる。

だが、俺はそんな相棒に声を返すことも出来ない。

身体感覚は無く、思考もモヤがかかったように鈍い。

それに、何かに絡め捕られた身体は凍えるようで、なによりひどく眠い。

このまま目を閉じれば取り返しをつかない事になるのを理解していても、それでも睡魔の誘いを振り切ることが出来ない。

《しっかりとしろ、ヴァーリ!! 今はお前があれほど拘っていた姫島慎との戦いの最中なんだぞ！ それをこんな形で終わらせて満足なのか!?!》

姫島慎。

その名にほんの少しだけ、頭がはつきりする。

俺の目標であり、憧れだった男。

奴を追いかけ、時には横に並ぶ事で俺は強くなっていった。

しかし今まで近くに見えていたその背中が、今は酷く遠い。

奴がオーフィスを降して世界最強となったと聞いた時は、それでこそ俺のライバルだと喜んだ反面、置いていかれたような寂しさを憶えた。

この世界の頂点に立った奴に対して、俺は【覇龍】を満足に制御できず、苦勞して体得した【邪王炎殺拳】も奥義の体得に至っていない。そんな己への不甲斐なさや焦りから勝負を挑んだ結果、まったく歯が立たなかったうえに【覇龍】を暴走させてこのザマだ。

情けない。

こんな有様でライバルなどと、どの面を下げて口にするのか……。

もう消えて無くなりた。

自己嫌悪の中で睡魔に身を任せようとしたその時、凄まじい力の波動を感じた。

意識を向けると、先の見えない闇の中に蒼い氣勢を纏った慎の姿が見えた。

先ほどよりも強大な力を見せる奴の姿に、手加減されていたのかとさらに気が沈みそうになる。

しかし、そんな情けない思いは次の瞬間に吹き飛ばされていた。

「お前は俺のライバルなんだろうがあツ！ だったら、そんな負け犬共に手こずってんじゃねええッ!!」

周囲の闇をすらも振るわせる声に、動かないはずの身体が拳を握る。

お前は……俺をライバルと呼んでくれるのか。

こんな情けない姿を晒しても、まだ……。

身体のコに火が灯るような感覚と共に、冷え切った体にほんの少し感覚が戻ってくる。

先ほどよりも開けた視界を巡らせると、こちらに纏わりついて来る顔の無い白い影の群が見えた。

どうやら寒さと感覚の麻痺は、こいつらが原因のようだ。

《ヴァーリ、目を覚ましたか!》

「アルビオンか、情けないところを見せた。状況はどうなっている?」

《お前は今、深層意識の中にいる。そして現実では【覇龍】の暴走寸前で何とか耐えている状態だ》

「なるほどな。では、この状況を打破するにはどうすればいい?」

《ここまで暴走してしまえば、魔力を担保にするなどという誤魔化しは効かん。お前自身が覇龍を使いこなすしかない》

「使いこなす、か。その方法はあるのか?」

《覇龍は神器に封じられた龍の力の全てを解放する禁忌手だ。使った際の暴走や生命力・寿命の喪失は、担い手が龍の力に耐えられないから起こる現象と言える》

「つまり、龍の力に耐えられるだけの強さを身に付けろという事か」

《そういうことだ》

まったく、ずいぶんと無茶を言ってくれる。

制御に乗り出そうにも、今のコンディションははつきり言っていない。

担保としていた魔力は底を突き、体力の方も戦闘で雀の涙だ。

さらにはギリギリで踏みとどまっているとはいえ、暴走が始まっている以上は生命力や寿命も削られている可能性もある。

笑ってしまいそうなほどに不利な条件ばかりだが、当然諦めるなんて選択肢は無い。

さてどうするかと意識を巡らせると、慎の姿が見えた。
ふむ。

さつき見た時は潜心力かと思ったが、よく見れば奴の氣の使い方はこちらの記憶には無い。

よくよく観察してみると、あの蒼い氣勢は内側から練り上げた氣と外から取り込んだ氣を融合し、更なる力へと昇華させたモノであることがわかる。

……なるほど。

氣は身体の内外のエネルギーを融合させれば、爆発的な強化がなされるのか。

是非ともマネしたいところだが、問題は俺が半人半魔という体質故に内側からは魔力しか生み出せないという事だろう。

外から取り込む分はナツシユから学んだ外氣功で何とかなるが、魔力と氣は強く反発するという事だ。

この厄介な性質のお陰で邪王炎殺拳のレパトリーを増やそうとしても上手くいかず、できたのはサマーソルト系統の二つだけという散々な結果だった。

外に放出した氣に魔力を纏わせるだけでも至難の業だったのだ、身体の中で融合させるとなれば難易度はうなぎ上りだろう。

だが、無謀だろうとなんだろうとやるしかない。

今の俺には手段を選んでいる余裕も悩んでいる時間もない。

なにより、奴が出来た事が俺に出来ないはずがない！

掛け無しの魔力を練り上げると同時に、外氣功で氣を取り入れる。アルビオンは潜在意識の中などと言っていたが、力の使い方が変わる訳では無いようだ。

そして、右手に魔力を左手に氣をため込む。

本当は体内で二つのエネルギーを融合させればいいのだが、敢えて手に集めたのはタイミングを計るためだ。

一度深呼吸をして、未だ感覚が鈍ったままの両手を胸元に持つていく。

エネルギーを集めた際に腕に纏わりついていた人影が吹き飛んだのが不幸中の幸いか。

意識を向ければ、右手に宿る黒い光と左手の白い光が目飛び込んでくる。

無限の闘争の中である男に言われた事がある。

俺が外氣功で氣を練る事ができるのは人間の血のお陰だと。

ルシファアの奴等から押し付けられた魔力と母親から受け継いだ氣。

一方は唾棄^{だき}すべき代物だが、それでも双方ともに俺を構成する要素に違いない。

ならば、それを一つにすることもできるはずだ。

覚悟を決めて両手を合わせると同時に体内の氣と魔力を融合させる。

瞬間、反発し荒れ狂う二つのエネルギー。

内側から身体を食い破られる痛みと共に鉄錆の匂いがする何か喉元をせりあがってくるが、齒を食いしばって飲み下す。

この程度の痛みならばまだ問題ない。

身体を食い破られる痛みなど、エイリアンの幼虫を産み付けられた時に体験済みだ。

呼吸を整えながら体内に意識を内側に向けて、エネルギーを少しずつレイラインの流れに乗せていく。

かつて戦った白い聖人も言っていたではないか。

『激流を制するは静水。激流に身を任せ、同化する』と。

融合エネルギーはレイラインを通じてゆつくりと全身を巡る事で、徐々にだがその反発も鳴りを潜めていく。

試みを始めてからどのくらいたったのか。

身を裂かれるような痛みが治まると、身体の芯から膨大なエネルギーが溢れてくるのを感じた。

その力は今までの俺の全力を遥かに凌駕するものだ。

《ヴアーリ、その力はいったい……?》

「慎の技を俺なりに真似てみた結果だ」

さすがに骨が折れたが、そのぶんの成果はあった。

力の総量は体感的に通常時の10倍近い。

これだけあれば、なんとかなるかもしれない。

「アルビオンよ。この力は覇龍を御するに足るか?」

俺の問いに対するアルビオンの答えは是だった。

《お前は本当に大した奴だ。その力ならば、いけるかもしれない》

「ならば行くぞ、アルビオン!!」

《……応!!》

一瞬で白龍皇の鎧を纏った俺は、融合の過程で感覚と熱を取り戻していた身体を起こし、纏わりつく人影共を振り払う。

「そう言えば、こいつらは何なのだ?」

《これは歴代白龍皇の残留思念だ》

ふん、これが慎の言っていた負け犬か。

ならば、手早く蹴散らすとしよう。

右手に力を集中させると、手甲に包まれた前腕部に黒い龍の痣が浮かびあがる。

自身に流れ込む氣と魔力の融合エネルギーを食らって瞬く間に巨大化したそれは、身体を黒炎に変えて俺の周りでとぐるを巻きながら負け犬共を睨みつける。

「……よろこべ。貴様等はこの世界における炎殺黒龍波の犠牲者第一号だ」

俺が右手を翳すと、黒龍は天に向けて咆哮を上げる。

奴から伝わるその意思は一つ、『贄を寄越せ』だ。

「纏めて俺達の中から消え失せろ！ 邪王炎殺黒龍波あああつ!!」

G Oサインと共に力を送り込めば、黒炎を撒き散らしながら飛び出した龍は次々と人影たちをその貪欲な顎に捕らえていく。

そして、存分に暴れまわった黒龍が姿を消した跡に残ったのは黒い焦土のみ。

人影は一体たりともその姿を見せることは無かった。

「ふん。やはり、汚物は焼却すべきだな」

《まさか、過去の残留思念を全て焼き払うとは……》

絶句するアルビオンを尻目に右腕に目を移すと、そこには傷一つない白磁の鎧が——いや、前腕部に絡みつくように黒龍の刻印が刻まれているだけだ。

「ク……ククツ」

湧き上がってくる歓喜の衝動に笑いが漏れそうになる。

以前に一度だけ「黒龍波」を放ったことがあったが、その時は右腕をまるまる持っていかれた。

魔界の炎は肉体だけでなく、その魂までも蝕む呪炎だ。

今の俺に「黒龍波」を撃つ資格が無ければ、肉体という鎧が無い精神体はもつと酷い傷を被^{こうむ}っていただろう。

黒龍の刻印を見ながら感慨に浸っていると、纏っていた白龍皇の鎧が光と共にその姿を変化させていく。

形状は先ほどまで使っていた疑似「覇龍」と同じだが、肥大化した翼が通常の禁手サイズになり、その数を2枚一对から4枚2対へと変化している。

「これは……」

《残留思念を討ち果たした事で覇龍を御する事に成功したのだ。現実世界のお前もこの姿に戻っている事だろう》

なるほど。どこか拍子抜けな感じもするが、上手くいったのならよしとしよう。

「この姿、さしずめ【白銀のエンピレオジャガーノート・オーバードライヴ 極 覇 龍】といったところか」

ともあれ、これで奴との再戦の準備は整った。

「戻るぞ、アルビオン。いつまでも奴を待たせるわけにはいかん」

《よかろう。では、現実の肉体にお前の意識を戻すぞ》

一瞬の浮遊感を感じた後、俺の視界は深層意識という薄暗い穴倉から闘争の場である荒野を映していた。

修復を終えて極覇龍形態となった自身の鎧を確認して首を巡らすと、渦巻く氣勢を纏ったままの慎の姿がある。

「待たせたな」

「まったくだ。あんまりにも遅いんで眠っちまいそうだったぞ」

「それは悪かった。だが——」

口元を吊り上げて軽口を叩く慎に、俺は先ほど修得した融合法で力を解放する。

それだけで大気が振るえ、地鳴りと共に地面が抉れていく。

効果と負荷は精神体の時と変わりないが、力の伝達に関してはこっちのほうがスムーズだな。

「ここから先は眠気など感じる暇はないぞ」

「……そうみたいだな」

皮肉げな笑みを肉食獣の如き獰猛なそれに変えながら構えを取る慎。

それに合わせて俺も戦闘態勢に移行する。

【白銀の極覇龍】に覚醒した影響で傷の方は粗方治癒しているが、失った体力と魔力に変わりはない。

黒龍波は撃てて一発。

理論上で言えば切り札はもう一枚あるが、ぶっつけ本番で使うにはアレはあまりにも危険度が高い。

やはり、黒龍波を如何に当てるかが勝敗のカギになるだろう。

鎧越しに感じる肌を刺す空気に口元が吊り上がる。

まったく、奴には感謝してもしきれない。

あんな無様を晒した俺を引き戻した上に、まだ闘ってくれるというのだから。

この礼は全力で挑み、奴を倒す事で晴らすこととしよう。

「さあ、行くぞ！ 第二ラウンドだ!!」

踏み砕いた大地を撒き散らしながら、俺は奴へと挑みかかった。

小ネタ 『無限の闘争連絡ノート』

『無限の闘争連絡ノート』

これは無限の闘争ユーザーの親睦を深めるための連絡ノートです。各ユーザーへの連絡、運営権利者である姫島慎への要望、新機能発見、ツツコミ等々を記入してください。

対戦記録、観戦コメント等も大歓迎です。

全てのページが埋まった後『こんな事があつたな』なんて、みんなでワイワイ盛り上げられるような一冊にしましょう。

(注)みんなが使うものですので、誹謗中傷などの他人が見て不快に思うような書き込みは控えましょう。

●月×日

記入者 白龍皇

この頃、ドクターペッパーという飲料にハマっているのだが、控室の自販機には無い。

入荷を希望する。

管理者

何でお前はそんなニツチなモンにハマってんだよ……。

入荷してもいいけど、費用はお前持ちな。

妹ニンジャ

ドクペにハマるとはなかなか見所がある。

ようこそこちら側の世界へ。

★月■日

記入者 ビリビリ巫女

本日、ブルーマリーという女性格闘家と手合わせしました。

打撃は何とか捌くことが出来たのですが、投げから寝技に持ち込まれ、足を折られて敗北(涙)。

何方か、寝技の訓練に付き合ってくれる方を募集します。

イケメン猿神

OK、OK。

俺ツチが手取り足取り、腰取り教えてやるぜい。

妹ニンジャ

脳味噌喰うぞ、サル。

巫女さん、ウチの道場で一緒に練習しよう。

管理者も手伝ってくれると思うし。

管理者

妹ニンジャ✓了承。まずは軽く技を覚えるところから始めよう。

サル✓ 金的という技を知っているかね？

@月◇日

記入者 極限流冥界支部

本日、ルガール・バーンシユタインという男と対戦。

結果は敗北。

地面を這う衝撃波とカイザーウエイブという霸王翔吼拳によく似た飛び道具を連射された為に、近づけなかったのが敗因と思われる。

もしよければアドバイス等をいただきたい。

白龍皇

奴は接近戦でもジエノサイドカッターという蹴りを初めとして、強力な技が揃っている。

接近すれば勝てるという過信は禁物だ。

相手の懐に飛び込むフリをして技の空振りを誘い、その隙を突いてみるのはどうだろうか？

管理者

カイザーウエイブは兎も角、烈風拳（衝撃波の事）は霸王翔吼拳で貫通可能なはず。

ただ速射性能では大幅に相手が上なので、相手の動きを先読みすることが肝要。

対戦開始までに氣を練っておき、開幕と同時にぶつ放すのも一つの手だと思う。

飛燕疾風脚等の突進技で間合いを詰めようとする、白龍皇が挙げたジエノサイドカッター等で迎撃されて、大ダメージを食うので止めておいた方がいい。

☆多月●日

記入者 聖劍使い

今日は佐々木小次郎を名乗るサムライと対戦し、力及ばず敗北。身の丈ほどの刀を巧みに使った連撃も然る事ながら、『燕返し』という秘剣が厄介極まりない。

一振りと同時に三種類の斬撃を放つなんて、どんな絡繰りなんでしょうか？

敗北後には御先祖様（女）を引き合いに出されて、未熟者扱いされてしまう始末。

このままでは悔しくて夜しか眠れないので、攻略法を募集します。

管理者

三方向からの同時斬撃か……。

俺なら硬氣功で防いだところで懐に飛び込むんだが、聖劍使いには難しいよなあ。

秘剣が来ると思ったら、聖劍の鞘に使ってる風の魔法をジェット噴射みたくにして、間合いを離すのはどうか？

白龍皇

なかなか面白い奴と手合わせしているな、俺も闘ってみてもいいかもしれない。

相手の得物が長い刀ならば、耐久性はそう高くないと思っていだろう。

ならば剣の質を前に出して、武器破壊を狙ってみるのも手ではないか？

猛犬

夜しか眠れないって、それ普通だろ。

その侍の技量はお前の先祖の騎士王より上だし、至近距離で秘剣を出されたら躲すのはまず不可能。

勝とうと思ったら相手が撃ってくる前に、こっちが宝具で先手を取るしかない。

お前さんの聖剣が飾りじゃないのなら、開幕ブツパを狙ってみろ。

■月☆日

記入者 魔剣マイスター

蒼いコートの刀使いって、誰か知らないかな？

今日対戦して『You shall die』ってナマス切りにされたんだけど。

見えない踏み込みで居合を仕掛けてきたり、空間斬ったり、剣の形をした魔力を飛ばしたきたり……

あれって本当にDランクなの？

あれが低級ランクだったら、正直心が折れそうなんだけど。

妹ニンジャ

それって鬼いちゃんじゃん！

絶対にDじゃないって!!

魔剣マイスターさん、設定間違ってるない？

管理者

調べた。

特徴が一致したのはバールという半人半魔のデビルハンターで、ランクは狂。

魔剣マイスターさんが対戦したのはバグか何かだと思うので、対戦前には一度相手のチエックをお願いします。

▼月\$日

記入者 紅い当主（予定）

見よう見まねで憶えたせいか、技の精度が上がりません（；ω；）。

イーグルという棍棒使いと闘ったときも、滅びの魔力を込めたはずの虎煌拳が、普通の棒に止められてしまいました。

触れた物は何でも消滅させるって触れ込みだったのに……。

これって、僕が未熟な所為ですよね？

P.S. イチかバチかで放った龍神脚が当たったので、勝負には勝ちました。

でも、あのオジさんが言っていた『僕のケツをもらおう』というセリ

フはどういう意味なんでしょうか？

管理者

勝利、おめでとう。

さて、滅びの魔力の件についてですが、この『無限の闘争』にいる闘士が防御を行うときは、氣や魔力等といった特殊能力で肉体や武器を保護しています。

これは攻撃を食らった際の肉体も同様で、滅びの魔力等の必殺性の高い能力が効果を表すには、かなりの力量差が必要になります。

なので、私が教えた錬氣法で滅びの魔力の収束率を上げれば、いつかは本来の効果を發揮する日が来るでしょう。

地味だと思うでしょうが、強さとは基本を積み重ねて得るものであることを肝に銘じて、基礎鍛錬を頑張ってください。

なお、その棒使いはこの世から抹殺しておくので、ケツ云々については忘れるように。

妹ニンジャ

あのキャラってそっち系なんだ。

当主君はおっさんの戯言は気にしないようにね。

魔劍マイスター

十歳の子供にR指定は拙いので、管理者による規制をお願いします。

親御さんに知れたら、シャレになりません。

@月曜日

記入者 管理者

本日、念願である放浪の格闘家リュウと対戦した。

結果はこちらの勝利だったが、落ち着きのある構えからの重厚な攻めや堅実な守り、なによりどんな状況でも勝利を諦めない不屈の精神がとても参考になった。

考えてみれば、破門になったとは言っても彼は俺の兄弟子だったんだよなあ。

そういう意味も含めて、胸を借りられた事はとてもいい経験になったと思う。

妹ニンジャ

ついにMr.格ゲーと闘ったか。

というか、管理者つてあの暗殺拳も習ってたの？

極限流冥界支部

リユウか。

師範から話を聞いていたが、すばらしい格闘家のような。

機会があれば、俺も手合わせ願いたいものだ。

@月★日

記入者 猛犬

今日は暁武蔵つて二刀流の剣士と闘り合った。

二刀を使った精密な連撃と双剣から繰り出される強烈な一撃。

噂に違わぬ猛者だったから、久々に全力で戦えたぜ。

聞けば、奴は日本最強の剣豪である宮本武蔵らしいじゃねえか。

俺の記録にある武蔵は綺麗な姉ちゃんだったんだけどなあ。

聖剣使い

女性のムサシですか。

私の御先祖様(女)といい、平行世界というのは面白いモノですね。

イケメン猿神

俺もムサシと闘り合った事はあるけどよお。

素肌に毛皮着たスツゲムサイおっさんだったよなあ。

あれを女にしたら美人になるとか、想像できねえ。

#月*日

記入者 妹ニンジャ

マシユちゃんという盾使いの女の子と闘ったよ。

アクロバティックに盾で殴ってくるという全く新しい格闘スタイル

ルに翻弄されたけど、何とか勝利。

だけど、適性の関係か盾も技も覚えられなかった。

その代わりに七色に光る金平糖みたいな石を貰ったけどね。

英霊を召喚するのに使うって言ってたけど、どういう事だろ？

猛犬

多分そいつは英霊の霊格の欠片かなんかだ。

そいつを触媒にしてちゃんとした手順を踏めば、俺みたいな英霊を召喚できるんだろうよ。

まあ、魔術師でもない嬢ちゃんには無用の長物だな。

管理者

とりあえず、使うのは保留でよろしく。

過去の英雄なんて呼ばれた日にはまた面倒くさいことになるから。このクソ忙しい中で戸籍の改ざんとかは流石に勘弁だ。

?月@日

記入者 魔剣マイスター

今日は斎藤一さんという方と手合わせした。

何でも僕の師匠の同僚なんだとか。

僕も騎士として自分のスピードには自信があったんだけど、あの人の牙突は全く見切れませんでした。

というか、なんの変哲もない日本刀で魔剣を貫通するってどんな突きしてるの、あの人。

しかも、ナマス切りされた後で『沖田の奴、甘やかしゃがって』って無理矢理弟子入りさせられたし！

誰か、助けて!!

管理者

諦めて修行に打ち込むがよい。

下手に逃げると、ウチの師匠みたいに現世まで出張ってくるかもしれないからね。

白龍皇

よい指導者が付いてよかったじゃないか。

身体が穴だらけになってもここでは死にはしないんだ、蜂の巣になる覚悟でその突きを憶えてくるがいい。

妹ニンジャ

がんばってね、魔剣マイスターさん。

その人、見込みが無かったら相手もしないはずだから。

弟子にするって事は縁故もあるけど、マイスターさんの剣の才を認

めたいんだと思うよ。

@月◇日

記入者 管理者

本日からインフィニット・バトルモードというシステムが解放になりました。

これは一対一の対戦では無く、1、もしくは2対多数で対戦するモードのようです。

まずは私がモニターしたいと思いますので、参加もしくは観戦したいと思う方は記入をお願いします。

白龍皇

もちろん、俺も参加するぞ!!

妹ニンジャ

観戦、というか監視希望。

管理者は目を放すとすぐに無茶するから。

紅い当主（予定）

僕も観戦希望です！

新しい機能や兄様の戦いを見たいので。

極限流冥界支部

俺も観戦希望だ。

管理者には申し訳ないが、この新機能は一番槍で行くのは少々危険だと思うのでな。

☆月♣日

記入者 妹ニンジャ

今日は前の書き込みにあった新モードのレビューを書きます。

挑戦者は管理者と白龍皇。

観戦者は私とビリビリ巫女、紅い当主（予定）に極限流冥界支部長と猛犬。

この度、追加されたのは『インフィニット・バトルモード』

これは次々と現れる雑魚敵を蹴散らして行き、ボスを倒せばクリアという往年のベルトスクロールアクションのような仕様になっている

みたい。

さて、記念すべき初の対戦相手はカンフーマンズ。

これはみんなが初回にお世話になったカンフーマンが、集団で襲い掛かってくるというもの。

まあ、集団と言っても相手は初心者の方であるカンフーマン。

今や凶ランク相当の力を持つ二人の敵じゃなく、ボスとして出て来た『ザ・カンフーマン』も問題なく撃破しての大勝利である。

まあ、やられる度に天からカンフーマンがポロポロ落ちてくる光景は、異様以外の何物でもなかったけど。

次の対戦相手は『マッドギア』

アメリカのメトロシティという町を牛耳っていた犯罪組織『マッドギア』の構成員を倒して、組織を壊滅させるのが勝利条件。

たった二人で乗り込んで犯罪組織を壊滅させるとか、どこのB級アクシオン映画！　なんてツツコミは無しの方向で。

当然ながら犯罪組織のチンプラゴときに管理者たちの相手は務まる訳がない。

パンチ一発でキリキリと回りながら吹っ飛んだり、サンダーブレイクや炎殺黒龍波によってチンプラ風の雑魚敵がダース単位で焼き尽くされる光景は、いっそ哀れだった。

ボスである『ベルガー』もピョンピョン跳ねながらボウガンを連射するだけなので、大した見せ場も無く白龍皇にビルから蹴り落とされてジ・エンド。

三回戦の相手は『エイリアンズ』

最凶最悪と言われる宇宙生命体『エイリアン』。

『ゼノモーフ』ともいわれる彼らは強固な外骨格に槍のような尾、鋼鉄をも貫く第二の顎を持ち、その体液は強酸性という凶悪な生物である。

そんな生物の巣と化した宇宙船の中に突入した二人は、迫りくる様々なバリエーションのエイリアン達を蹴散らしながら奥へと進み、彼らの女王であるクイーン・エイリアンと対峙する。

配下のエイリアンを呼び、二階建ての建物に相当する巨体を活かし

て暴れまわるクイーン。

しかし、道中で強酸耐性を身につけた管理者のチートパワーには及ばず、関節蹴りで足を破壊された上に魔のショーグンクロウで顔面を挟られるクイーン。

その光景を見て『ニューボーンかよ!?』思わず突っ込んだのは内緒だ。

そしてクイーンは白龍皇に天井スレスレまで蹴り上げられてから、管理人の地獄の断頭台で首を刈り取られて敗北した。

最凶の宇宙生物をこうまでボコボコにするとは、お前らリプリー姐さんに謝れ。

そして四回戦。

破竹の快進撃に乗りに乗っていた二人は、対戦相手を見て凍り付く事になる。

その相手とは『ジエネラルズ』

緑の軍服とベレー帽に身を包んだ厳ついおっさんという、全く同じ容姿を持った十人が二人を待ち構えていたのだ。

そして始まる地獄絵図。

「ぐあああああああつ!?!」

「尖兵様は何人もいるように見えるツ!?!」

いや、実際いるからね、十人くらい。

試合場を埋め尽くすおっさんの形をした緑のエネルギー弾の中、襲い掛かるおっさん達にあつという間にボコボコにされる二人。

「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「」

おっさん十人が全員揃ってポーズを決めたところで挑戦終了。

試合後、二人は「緑の尖兵様が襲い掛かってきたと思ったら、ボコボコにされていた」とコメントしている。

特別試合『のりもの』

『インフィニット・バトルモード』挑戦終了後、またもや新モード『のりもの』が解禁されている事が判明。

管理者は『嫌な予感しかしない』と言っていたが、白龍皇の強烈なプッシュにより挑戦開始。

対戦相手の名は『無双神輿』、いかにも強そうな名前である。
舞台は夜。

中央に大きな檣、周囲には明かりを灯した色とりどりの提灯が飾られ、外周には夜店の露店が並ぶ祭りの会場。

楽しそうに行き交うギャラリイの中で二人が所在無さげに立っている、人込みをかき分けて対戦相手が入場してきた。

「ソイヤツ！ ソイヤツ！ ソイヤツ！ ソイヤアツ！」

軽快な気合と共に現れたのは、神輿。

十人ほどの担ぎ手によつて運ばれる神輿の両端に『戦国BASARA A』の『前田慶次』、『ギルティギア』の『ジョニー』という二人の伊達男。

そして神輿本体があるはずの中央には――

「ゲエツ!? トキイ!!」

そう、挑戦者二人の悲鳴の通り、北斗の次兄『トキ』が座禅を組んでいた。

この時点で私も嫌な予感しかしなかった。

そして始まる対戦。

「天翔百裂拳!!」

「ソイヤツ！ ソイヤツ！ ソイヤツ！ ソイヤアツ！」

裂帛の気合と共に神輿が宙を舞う。

そして、放たれるのはトキの拳――ではなく、担ぎ手のストーンピング。

いや、拳の要素どこにもないよね!?

こちらのツツコミなどお構いなしに、食らった白龍皇を吹っ飛ばしながら着地する神輿。

その隙は逃さんとばかりに管理者が突っ込むが、

「刹活孔ツ!」

「いでえっ!」

それよりも速くトキの指が突き刺さる。

そう、横にいた前田慶次の両腿の秘孔に、だ。

「二自分のを突くじゃないんかいッ!」

観覧席と挑戦者の心が一つになるが、当のトキは素知らぬ顔で神輿の中央に座り込む。

一方秘孔を突かれた慶次はというと、千両箱を片手に狂ったように小判を撒き散らしている。

因みに刹活孔とは、一時的に凄まじい活力を得ることが出来るが、その代償は死という非情の秘孔である。

彼の手からは放たれた黄金が弾幕となつて管理者の攻撃を阻んでいるのを見ればトキの意図は解るが、青ざめた顔のままあり得ない速度で小判を撒く慶次の悲壮な顔を見れば、あの男がどれだけ非道かはよくわかる。

ケンシロウではないが、あえてこう言おう。

『貴様は断じてトキではない!!』と。

さて、のっけから混沌極まりない雰囲気醸し出している戦場だが、神輿一台分という広範囲の判定を持つ天翔百裂拳(?)と前田慶次が強制的に命を燃やして放っている弾幕の所為で、二人は攻めあぐねている。

だが、神輿を支配するのはそんな隙を見逃す男じゃない。

ギユウウウンッ! と音を立ててオーラを纏った神輿は猛スピードで二人に突撃する。

「北斗有情断迅拳ッ!!」

「ソイヤッ! ソイヤッ! ソイヤッ! ソイヤアッ!」

「ぐわあああああああつ!!」

トキの叫びと共にそのまま二人を撥ね飛ばす神輿。

そして天高く吹っ飛ばされた二人は、何故か受け身を取ることなく頭から落ちる、通称『車田落ち』で地面に叩き付けられた。

というか、今のつてただの轢き逃げアタックじゃねーか!?

多大なダメージを受けながらも何とか立ち上がる管理者たち。

だが、二人はお互いの頭上を見た瞬間、その表情を凍り付かせた。

そう、二人の頭上。

具体的には、体力ゲージの下である星が煌々と光り輝いていたからだ。

その星の名は死兆星。

神輿の中央に鎮座するあの漢の一撃必殺技の準備が整った証拠だ。

「白龍皇、奴の前面に回り込め！　そこならあのビームは来ない!!」

管理者の指示で神輿の前後を挟み込むように移動する二人。

確かに、トキの一撃必殺は左右にしか放てない。

さらに言うなら、ビームの前に同方向へ放つ衝撃波に当たりさえしなければ、技の発動すらないのだ。

そう考えれば、この戦法は十分有効と言えるだろう。

だが、その位置取りを見てもあの漢に動揺せず、まるで予定調和のように右手を上げる。

「ぐおっ!？」

「いでえっ!？」

突如として上がる悲鳴。

右、左と放たれた衝撃波は挑戦者二人を捉えてはいない。

被害をこうむったのは、トキの左右にいた伊達男二人だ。

そしてトキから立ち昇る膨大なオーラ!!

あの男、同乗者を犠牲にして奥義を発動させおったあ!!

驚愕の声に包まれる観客席。

しかし、挑戦者達は驚きはすれど冷静を保っている。

彼らはこれから放たれる必殺のビームが自分たちにとどかない事を知っているのだ。

だが、世紀末最凶と言われた病人は甘くはなかった。

神輿の中央で宙に浮いたかと思うと、グルングルントキイとばかりに回転し始めたのだ。

「北斗有情ローリングバスターライフ!!」

「ふっぎけんなあああああああああっ!!?」

大回転しながら両手から放つビームで周囲を薙ぎ払うトキ、そしてその即死光線から逃げ惑う挑戦者達。

「こんな馬鹿なああああああ………あもらっ!？」

「ドちくしよおおおおおおお………おらばっ!？」

ビームを浴びて爆発する挑戦者達。

画像のモザイクが入っていて良く分からなかったのは、せめてもの救いか。

そして勝者は神輿の上で回りながらこう残した。

「安らかに 死ぬがよい」と。

猛犬

これはひどい。

極限流冥界支部

実際酷かった。

紅い当主（予定）

見ている気を失いそうでした。

聖剣使い

やはりここは狂気の世界ですねぇ

魔剣マイスター

強くなるにはこんな事をしなくてはならないのか……

管理者

マジでヒドイ目に遭った。

まあ、この程度は『無限の闘争』じゃよくある事だけどな。

白龍皇

ああ。

日常茶飯事という奴だ。

ビリビリ巫女

貴方達、いい加減にしなさい。

24話

「さあ、行くぞー！ 第二ラウンドだ!!」

デイベイン・デイベイン
白龍皇の光翼からジェット噴射のように光を放ちながら、こちらへと突撃するヴァーリ。

衝撃波を撒き散らしながら進むその踏み込みの鋭さは、先ほどとは比べ物にならない。

しかし、そのスピードもこちらの目を逃れる事ほどではない。

ギースが好んで使っていた構えである『無形の位』むぎようで迎撃をしようとしていた俺は――

《Half Dimension!!》

瞬間、視界の内から掻き消えた奴の姿に目を見開いた。

「なるほど、インチキ臭い空間への半減も精度が上がってるみたいだな……っ！」

予兆も無く目前に現れたヴァーリの拳を寸でのところで受け止めながら、俺は白の兜の奥に光る蒼い瞳を睨み付ける。

「ああ、アルビオンを介さずに使用できるようになった。お陰で、こんな芸当も可能だ!!」

《Half Dimension!!》

胸部の宝玉から放たれた電子音と共に、またしても消えるヴァーリ。

「食らえー！ ジエノサイド・カッター!!」

背後からの殺気に身を振るひねると同時に、右わき腹から左肩に掛けて灼熱感が走る。

ジエノサイド・カッター。

自身のつま先に氣を集め、刀剣の鋭さを宿したそれを跳躍と共に足元から頭上まで半月状に回転させる。

闇の武器商人にして格闘技の天才である、ルガール・バーンシユタインが数多の猛者を葬った魔技である。

背の肉を削けずられながらも咄嗟とっさに裏拳を放つが、それも空間への半減によって上空へと間合いを取ったヴァーリの足元数センチ下を通り

過ぎ、衝撃波によって岩山を砕くだけに終わる。

「貫つたぞ!!」

前方に回転する事で加速を付けた踵が、鉞まさかりのように無防備になったこちらの右肩に突き刺さる。

軋きしむ肩に歯を食いしぼりながらも地面を手で叩いて距離を取ろうとするが、それを上回る速度で突っ込んできた奴のバニシングラッシュをまともに食らってしまう。

空間を爆ぜるような連撃に数メートルも吹き飛ばされた俺は、叩き付けられた岩山から身体を引き抜きながら口に溜まった鉄錆臭い液体を吐き捨てた。

バニシングラッシュを使ってきた時点でルガルからある程度技をパクってるとは思っていたが、代名詞といえるジェノサイドカタールまで修得してるとはな。

しかも空間を半減させて間合いを取ることで、撃ち終わりの隙を帳消しにしてると来た。

カウンターを捕ろうにも、跳ね上がったスピードに加えて発動の予兆がほぼ無くなった半減の所為で、タイミングが掴みにくい事この上ない。

本当に厄介極まりないな、あの能力は。

「どうした、慎！ お前の力はこの程度か!?!」

ヴァーリが両腕を交差するように振り抜くと、三日月型の真空波がこちらに襲い掛かる。

奴のソニックブームはナッシュと同じ片手撃ち、込める氣の量を調節すればああいふ芸当も可能ってわけか。

岩山が斬り刻まれるのを尻目に前転で躲かわして体勢を立て直そうとした瞬間、前触れもなくヴァーリが懐に現れる。

このタイミング……半減を使ってソニックブームのすぐ後ろを追いかける形で、間合いを詰めて来たか!

内心舌打ちをしながら防御を固めるが、またしてもその姿は掻き消えて足を払われると同時に、背中を襲う衝撃と共に上空高く撃ち上げられてしまう。

先ほどのサマーソルトと邪王炎殺剣の複合技を食らったのだろう、ヒリつく背中に歯噛みする間もなくムーンサルトスラッシュを受け、俺は、そのまま地面に叩き付けられた。

『パワーアップしたヴァーリ選手の猛攻ー!! 姫島選手、為す術も無く地面に沈没ううーっ!!』

自身の巻き上げた土煙の中、上に乗った土片を振り落としながら身体を起こす。

つうか、さつきから聞こえてくるのアナウンスはなんなんだ？

なんか將軍様や美朱の声も時たま聞こえてくるし。

これはプロレスじゃないんだがなあ……。

まあいいや。

兎も角、スペック差のお陰でそこまでダメージは無いが、このまま食らい続けるのはさすがに拙い。

半減の疑似瞬間移動に前振りが無いのもそうだが、なまじ奴の動きが見えてしまう所為で余計に惑わされてしまう。

……少々古典的ではあるが、ここは視界を捨ててみるか。

呼吸を整えながら、俺はゆっくりと目を閉じる。

視界を塞いだことよって鋭敏化した感覚は、脳内に周囲の様子を鮮明に描き出す。

荒野を走る疾風に崩れゆく岩山、そしてこちらに向けて疾走する強烈な龍の氣も。

正面から突っ込んでくるヴァーリの気配は、ランダムに軌道を変えながら更なる速度を纏う。

「おおおおおおっ!!」

音さえ置き去りにして懐に飛び込み、咆哮と共に拳を振り上げるヴァーリ。

だが、その姿は唐突にこちらの眼前から消え失せる。

同時に張り巡らせた意識は、白い光翼によつて奪われた空間の軋みを掴んでいた。

音無き悲鳴を上げながら奪われた我が身を塞ぐ世界。

その流れに乗ってヴァーリの姿が現れる先は……そう、後ろだ。

「なっ……」

「——捕えたぜ」

振り下ろされた拳を捌いた俺は、ヴァーリが晒さらした一瞬の隙を突いて首と太腿に腕を回しながら跳躍。

空中で胸の装甲に膝を当て、全体重を掛けながら地面に叩き付ける。

『あーつと！ 姫島選手ついにヴァーリ選手を捕えました!! 相手の突進を利用して、その勢いのままパワースラムで地面に叩き付けたあつ!!』

『今のはただのパワースラムではありませんよ。超スロー画像を見てください。地面に叩き付ける前に、姫島選手はヴァーリ選手の胸元に自身の膝を当てています。この状態で叩きつけられれば、体重と衝撃は膝の一点に集中しますから、その危険度は通常のパワースラムの比ではありません!』

『それだけでは無い。彼奴は技を決める瞬間に、膝から寸打を放っているはずだ。鎧に守られていたとしても、白龍の小僧の肋骨は無事では済むまい』

的確にこちらの技を把握する將軍様に内心舌を巻きながらも、俺は胸を押さえて呻くヴァーリの身体を蹴り上げた。

打ち上げられる白い鎧姿を舞空術で追い抜き、上がってくるヴァーリを受け止めると奴の両足をこちらの足でフック。

ヴァーリが頭から落ちるように調整し、地面へ向けて加速する。

『あゝとつ！ 姫島選手、自身の足でヴァーリ選手の膝と足首をロックし、地面に向けて加速し始めた!!』

『あの体勢はキン肉星王位争奪戦で阿修羅マンが使用した必殺技、阿修羅イズナ落とですよ!!』

確かにこの体勢は阿修羅イズナ落とし、しかし今から俺が放つのは別の技だ。

「おおおおおっ!!」

気合と共に前方に体重を掛けると、身体は阿修羅イズナ落としの体勢のまま前転を始める。

『おおつと！ 姫島選手、ヴァーリ選手をイズナ落としての体勢に捕らえたまま、もの凄い勢いで前方に回転する!!』
「うがあつ!?!」

風切り音と遠心力で足が引き絞られているヴァーリから苦悶の聲が聞こえるなか、空転する視界が迫りくる大地を捉えた瞬間——
「食らえ、阿修羅火車落かしゃおとしいツ!!」

俺は全身のバネを使って頭からヴァーリを叩き付けた。

『これは驚きましたっ！ 姫島選手が放ったのは、阿修羅イズナ落としての改造版です!!』

『阿修羅イズナ落としてはその体勢を8の字で表される通り、上下を逆転すると攻守が入れ替わることが弱点だった。しかし、奴の放った火車落としては前方に高速で回転する事でその弱点を帳消しにしてみせたのだ』

「ぐはっ……!?!」

マスクの下を自ら吐き出した血で汚しながらダウンするヴァーリを見ながら、俺は小さく息を付いた。

ヴァーリの奴に発破をかける為に使った『真人しんじん』だが、まだまだ未完成な所為で体力の消費が思った以上にキツイ。

ギースのものに比べれば熟練度は3割程度。

内外での氣の精密操作が必要な為に制御が大変だが、次の段階に行くには必要な技能だ。

基本スペックの向上という観点では、今まで使ってきた潜在力では力不足が否めなくなってきた。

界王拳を活かす為にも基礎能力を向上させる新たな技能が必要になる訳だ。

正直、超サイヤ人になれば一番なんだが、生憎とこの身はサイヤ人の血など引いてはいない。

自身の手首に目を向ければ、そこには淡い藍色の光を湛えた霊的な枷かせが巻き付いている。

だとすれば、俺に出来る事は地道に鍛錬を重ねるだけだ。

十五年もの間、どんな無茶にも付いてきたこの身体を信じて。

意識を逸らした一瞬の間を突いてヘッドスプリングで起き上がったヴァーリは、後方にトンボを切りながら間合いを取る。

胸骨や首にダメージが残ってるくせに、よくやる。

《まだやれるのか、ヴァーリ!》

「当たり前前のを聞くな! それよりもモードR・G・Sだ!!」

《R・G・Sだどっ!? あれはお前自身が制御できてないだろう!》

「あれでなければ、奴の虚を突く事は出来ん!」

《……わかった!》

なにやら揉めていたアルビオンとの会話も決着がついたらしく、地面にクレーターを穿つほどの踏み込みでこちらに突進するヴァーリ。

そのスピードは真に覇龍を使いこなしてからと比べても格段に速い!

「食らえッ! 衝撃のおおおつ! ファーストツブリッ

トおおおおツ!!」

「ぐあ……ッ!?!」

瞬間、腹で何かが爆発した様な衝撃に、俺は肺の中の空気を絞り出しながら吹き飛んでいくうっ!!』

『ヴァーリ選手の渾身の飛び蹴りいいっ! 姫島選手が岩山をなぎ倒しながら吹っ飛んでいくうっ!!』

『凄いですよ、これは。見てください、バトルフィールドをサーチしている超スローモーション映像でも、ヴァーリ選手の姿を捉えきれません。神速なんて言葉でも生ぬるいですよ』

固いナニカを数度ぶち抜いたような感覚の後に、ようやく勢いが弱まったことでなんとか受け身を捕ろうとするが、足が地面を噛むよりも一瞬早く、強烈な衝撃に顎が跳ね上げられた。

思わず踏鞴を踏んだところに背中への一撃、さらに左右のローで膝が落ちたところに、強烈な中段蹴りを食らって再び身体が宙に浮く。

拙い……。

どういう絡繰りかは分からんが、野郎のスピードが俺の動体視力を超えやがった。

「ふははははははっ!! 見ろ、アルビオン! ラディカル・グッドス

ピードが、まるで手足のように使えるぞ!!」

《真の覇龍を極めて身体の強度が増したとはいえ、こうまで使いこなすとはな。一步踏み出しただけで、足が複雑骨折したのがウソのようだな》

バカみたいにはしゃぐヴァーリを余所にカメのように防御を固めるが、今度は全身を次々と打撃が襲う。

さっきのように心眼で相手を掴もうにも、こうも攻撃を続けられては集中もままならない。

こうなつたら範囲攻撃で根こそぎ吹っ飛ばすしかないか。

「レイジングストームツ!!」

防御の合間に両手に氣を集中させた俺は、攻撃が止んだ刹那の間を狙ってレイジングストームを放つ。

しかし、蒼色の衝撃波によって吹き飛ばされるのは周りの瓦礫ばかりで、その中にヴァーリの姿は無い。

「甘いぞ、慎！ そんな技では今の俺を捉える事は出来ん!!」

声の方に目を向けると、レイジングストームの範囲外で大地に足を噛ませているヴァーリの姿が見えた。

奴の姿をよく見れば、翼とは別にシャープに変形した脚部装甲がスラストーのように燐光を放っている。

この馬鹿げた加速はあれが原因か!?

「壊滅のおおおおおつ!! セカンド・ブリットおおおおおあああつ!!」

雄叫びと共に鎧から放たれる燐光がその量を増し、衝撃波を撒き散らしてヴァーリの姿がさらに加速する。

「うがああつ!?!」

大氣を纏いながら放たれる全身ごとぶつかるとぶつかると腹に受け、強制的に吐き出された血反吐を残して吹っ飛ばされる。

「瞬殺のおおおおつ!! ファイナル・ブリットおおおつ!!!」

さらに上空からの振り落としの踵を食らい、俺の身体は隕石さながらのスピードで、地面に激突する。

「がはっ……!?!」

『ヴァーリ選手の神速の連撃イイツ!! 隕石もかくやという勢いで叩きつけられた姫島選手を中心に、割れた地盤がささくれ立っていく!!』

衝撃と痛みに霞む視界の中、宙に浮かぶヴァーリから身の丈を超すような巨大な黒炎が立ち昇るのが見えた。

その黒い炎はヴァーリの身体を中心にとぐろを巻くように身をよじらせると、その姿を龍のそれへと変えていく。

……ちいつ!? ヤバいッ!!

「俺の勝ちだ! 邪王炎殺……黒龍波ああつ!!」

ヴァーリの咆哮と共に放たれた黒龍が、歓喜の声を上げながら牙も剥き出しでこちらに飛翔する。

食い込んでいた地面から身体を起こした俺は、ありつただけの氣を両手に集中させる。

「~~~~ツツ!?!」

瞬間、全身を襲ったトンデモない衝撃に俺は声を噛み殺した。

俺を中心として赤黒い照り返しに周囲が染まり、身体が埋まっていける大地や宙に巻き上げられた岩が、黒龍がうねる度に蒸発していく。

合気鏡殺の結界越しに飢餓に目を紅く光らせた黒龍がこちらに喰らいつこうと口を開いているのが映り、奴が暴れる度にさらに地面へと身体がめり込んでいく。

『あ~~~~とっ! ヴァーリ選手、ダメ押しの本殺技ああつ!! その白き籠手から放たれた炎の黒龍が姫島選手を食いつくさんと襲い掛かるううっ!!』

獲物を前に猛り狂う黒龍とこちらを押し込もうとするヴァーリの姿に、食いしばった奥歯がガリリツと軋みを上げる。

こんな状況じゃあランダム瞬間移動なんて真似も出来ないし、目の前で元気にピチピチ跳ねてる龍から逃げる術は俺には無い。

今の状況は誰がどう見ても、絶体絶命ってところだろう。

しかし、この程度ではまだ温い。

こちらにも伊達に修練をしてきたわけではないのだ。

超ベジータのビックバンアタックを初めとして、ポップのメドロー

ア、本気になったMr.カラテの霸王獅咬拳等々。

黒龍波と同クラスの必殺技として受けるのは初めてじゃない。

ならば——真正面からねじ伏せる事も可能という事だ！

氣功反射の結界を両手に纏わせた俺は、上顎と下顎から剥き出しになった黒龍の牙を掴んだ。

渾身の力で締め上げると、軋むような感覚と共に炎の塊であるはずの黒龍から悲鳴のような鳴き声上がり、此方への圧力がほんの少し緩む。

「ぐ……ぎ……ぎ……ッ!?!」

その好機を逃さずに、地面に埋まった体を起こしながら黒龍を押し返すと、発生源のヴァーリも少しづつ後退していくのが見えた。

「……………っ！　なんだと!?!」

《この状況で黒龍波を押し返してくるとは、奴は化け物か……っ!?!》

『なんとっ！　黒龍によって地面に押し潰されていたはずの姫島選手が、その顎を押し返しながらゆっくりと起き上がってきたあ!!』

『信じられません！　モニターに映る地面がガラス状に溶け始めていることからして、姫島選手のいた中心部は灼熱地獄になっていたはずですよ!!　その中で生きていた上に反攻に打って出るとは、とんでもないタフさですよ!』

驚愕を露わにする実況と共にギャラリーのざわめきが周囲に響き渡る中、ようやく足が大地を噛んだ。

「そうはさせせん！　はああああああつ!!」

ヴァーリの魔力放出によって両腕に掛かる負荷が増し、踏みしめた大地が砕けて破片が舞う。

自身の顎を封じている手を振り払おうと黒龍は荒れ狂うが、その力は再びこちらを地に沈めるほどではない。

先ほどのように押し込まれるような状況ならともかく、こうなれば後は単純な力比べ。

そうなれば、分があるのは俺のほうだ。

黒く照らされた大地が高温で煙を上げる中、再び練り上げた氣を両

手に込めて掴んだ顎を支点に龍の首を左右に捻り上げると、甲高い鳴き声と共にさらに圧力が緩む。

「おおおおおおっ!!」

その隙を逃さずに黒龍を投げ返すと、頭をヴァーリに向けた奴は大気を焼き払いながら自らを呼び出した主に牙を剥き出しにする。

「しまっ——!?!」

言葉を発する暇も与えずにヴァーリを胃に収めた黒龍は、とぐろを巻いてその身をただの黒炎に戻っていく。

『なんとおっ! 姫島選手が投げ返した黒龍波がヴァーリ選手を直撃いいっ!! ヴァーリ選手のいた場所では、巨大な黒炎が天をも焦がさんとばかりに逆巻いています。これは、決着かああ!?!』

吉貝アナの実況が響くなか、俺は黒炎を睨みながら氣を練り上げる。

一見すれば吉貝アナの言葉通り決着だと思っだろうが、そうでない事を俺は知っている。

奴が真の意味で黒龍波を極めているのならば、むしろここからが本番なのだ。

そうやってしばらく様子を見てみると、渦巻き時よりプロミネンスを生み出していた黒炎の中から、白い光と共に莫大な魔力が放たれた。

逆巻いていた黒炎はどんどん中心に吸い寄せられていき、その体積を減らしていく。

「うおおおおおっ!!」

世界を揺るがす咆哮を上げて黒炎に代わって現れたのは、やはりヴァーリだった。

ただし、先ほどと同じ姿と云うわけではない。

白一色だった鎧は肩と籠手、そして胸当ての部分が黒く染まっており、全体の造形がどこか鋭いものになっている。

なにより違っている点は、奴の神器の代名詞と言うべき翼だ。

一回り巨大になっているにも関わらず鎧が司っているのは骨組み部分だけで、龍の物を模した翼の大半を形作っているのは黒炎だ。

「手に入れたぞ！ 俺は……覇龍を超える力を手に入れたぞ!!」
歓喜の声とともに黒炎の翼を広げるヴァーリ。

同時に鎧の継ぎ目からも炎が吹き上がり、放たれた魔力は周囲の岩山と地盤を吹き飛ばす。

「見るがいい、慎！ これが俺の覇龍の進化形『獄炎の銀覇龍』だ!!」
『どういうことでしょうか!? 黒龍波に呑まれたはずのヴァーリ選手、新たな形状の鎧を纏って現れました!!』

『不思議ですねえ。技のダメージが見当たらないどころか、明らかにパワーアップしていますよ』

『姫島美朱、貴様なら知っているだろう。説明するがいい』

『……ヴァーリ君が使っていた炎殺黒龍波。一見すればただの強力な飛び道具に見えますが、あの技の本質は別にあるんです』
『それはいったい?』

『黒龍波の本来の用途、それは術者の能力を爆発的に高める餌。邪王炎殺拳を極めるということは、黒龍波の膨大なエネルギーを受け入れる事ができるだけの肉体を作り出すことなんです』

『なるほどな。白龍の小僧は真の覇龍に覚醒することで、その条件をクリアしたということか。なかなか楽しませてくれる』

『会場の皆様、お聞きになられましたでしょうか！ ヴァーリ選手がここに来て更なる切り札を切ってまいりました!! 決着かと思われたこの一戦、まだまだ波乱が待ち構えています!!』

盛り上がる実況席をよそに、腕をかざしてヴァーリが吹き上げた熱波から顔を守る。

予測はしていたが、まさか一気にオフィスの域にまで到達するとはな。

内心呆れながら視線を落とすと、手首と足首に巻きついた青白い光の枷が目に入る。

さつきまでは霊視しないと見えなかったのだが、黒龍波を跳ね返すのに氣を練った影響で肉眼でもわかるようになったらしい。

やれやれ……こいつは着け始めたばかりなんだがなあ。

まあ、こつちも出し惜しみなんてする余裕はないし、仕方ないか。

「開」
アシテ

覚悟を決めた俺は教えられたキーワード、文字通り枷の鍵となる言葉の口にする。

すると次の瞬間、ガラスが割れるような澄んだ音と共に手足に詰められた枷が砕け散り、身体を巡る氣の量が跳ね上がる。

『靈光波動拳・修の行 呪霊錠』

対戦した幻海師範から教えてもらった術で、要約すれば靈力(氣)養成ギプスだ。

肉体のみならず氣の方面でも強化をしようとしたのだが、着けた当初は常時氣を全開にしないと動けないのには参った。

この呪霊錠は自縛術式なので、使用者が強くなれば錠も強化されるし、任意で負荷も上げられる。

その上、使用者の氣を吸って維持に当ててくれているのでメンテナンスも必要ないときた。

個人的には適性のない靈丸なんかよりも、よっぽど役に立つ代物である。

オフィス戦の後に着けたので初めて三日ほどしか経っていないが、その効果は靦面。

こちらの見立てでは、氣の総量が以前より1.5倍に強化されている。

氣脈に直接作用する術式ゆえに、付けていると精密操作が要求される界王拳は使えなかったが、その甲斐はあったようだ。

「界王拳っ!!」

こちらの気合いと共に再び世界は鳴動する。

枷を解かれた朱い氣勢は紫電を纏いながら身体を中心にして逆巻き、生み出された圧が大地を大きく抉る。

引き上げた界王拳の倍率は10倍。

『真人』化による氣の操作の影響でこれが今の限界倍率だが、強化された肉体と氣の総量を考えればオフィス戦で使用した15倍に相当するはずだ。

『あぁぁぁぁぁっつと!』 地鳴りと共に姫島選手の体から炎を思わせる

朱いエネルギーが吹き上がったあっ!! これは黒い炎を操るヴァーリ選手に対抗してのものか!？」

《バカな……今のオレ達の力をこうも容易く超えるとは》

黒く染まった胸当てに詰め込まれた宝珠から発せられたアルビオンの声に、返ってきたのはヴァーリの馬鹿笑いだ。

「見ろ、アルビオン！ あれが俺のライバル！ 超えるべき壁!! 赤龍帝でもア・ドライグ・ゴツホでもない、奴こそが俺の『赤』だ!!!」
ヴァーリの激情を表すように羽ばたいた翼が、周囲に衝撃波と黒炎をまき散らす。

どうやら、むこうは我慢の限界らしい。

「さあー 無限を喰らうぞ、アルビオンツ!!」

火の粉と燐光と共にヴァーリがこちらへ襲い掛かると同時に、俺もまた地をけている。

初速から容易く音を置き去りにするところを見ると、先ほどのラディカル・グッドスピードとやらを使っているのだろうか、今はこちらの感覚も界王拳で強化されている為に見逃すことはない。

「おおおおおおおっ!!」

激突同時に衝撃に脳が揺れた。

どうやら、奴の右を顔面へモロに受けてしまったらしい。

もちろん、こちらも黙ってやられてはいない。

俺の右も奴の顔面を捉え、フェイスカバーに亀裂を入れている。

「炎殺煉獄焦ツ!!」

「白虎咬ツ!!」

一撃で跳ね上がった上体を戻すと同時に放った連撃は、黒い火の粉と氣の残滓をまき散らしながら互いを相殺するに終わる。

技同士の激突による衝撃からいち早く立ち直った俺は、腹への蹴りでヴァーリを吹っ飛ばすと同時に舞朱雀で追撃を掛ける。

しかし――

「させるかっ！ ソニックブレイクっ!!」

奴が黒く染まった両の籠手を振りぬくことで放たれた、黒炎を纏った真空波によってこちらの残像が次々に迎撃される。

「チイツ……!?!」

2、3発食らったものの、奴の頭上を取することに成功し肘を振り下ろすが、氣の刃が奴の兜に傷を付けたところで前転でこちらの一撃を躲したヴァーリの踵蹴りを肩口に地面へと叩き落とされる。

……ツツ!?! 今のは刃牙が使ってた回転踵落としのカウンターか!

激突する寸前で地面に片手をつけて受け身を取った俺が腕の力で大きく後方に跳ぶと、一瞬遅れてヴァーリの黒炎を纏ったムーンサルトスラッシュがその場所を溶断する。

「逃がさんぞ!!」

打ち終わりの踵を地面に打ち込む事で踏込みにしたヴァーリが、拳を振りかぶりながらこちらに突っ込んでくる。

コンマ一秒で間合いを殺し切るその速度は大したものだが、こちらを取るにはまだ甘い。

放たれた拳を紙一重で躲しながら腹部に一撃、さらに下がった顎を撃ち抜くと同時に腕を取った俺は、ツボから経絡に干渉して無力化した奴の体を上空高く放り投げる。

これより放つはギース・ハワードが得意とした必殺技——

「はあああああああつ! 羅生門!!」

練り上げた全身の氣が込められた双掌が頭から落ちてくる奴の腹を捉え、炸裂音と共に吹き飛ばす。

「玄武金剛弾……行けいっ!!」

「ソニック……ハリケエエエエッ!!」

追撃に放った朱い竜巻状の衝撃波は、奴が両手を交差することで生み出した黒い炎を孕んだ旋風によって相殺される。

「やるじゃねえか! ずいぶんと使える技も増えてるみたいだしよお!」

「言っただけだ! 遊んでいたわけではないとなあッ!!」

軽口を叩き合いながら再び激突する俺達。

お互いが申し合わせたように小細工無しの本勝負に移行すると、拳や蹴りを合わせる度に大氣が軋み、余波で大地がめくりあがる。

実況席の声が途絶えたところを見ると、將軍様はともかくとして美朱や吉貝アナ達はこちらの動きを捉えることができなくなってるのだろう。

まあ、そんな事はどうでもいいか。

今は割れた兜の奥で爛々と眼を輝かせている馬鹿の相手に集中することにしよう。

「はあああああああああああつ!!」

「おおおおおおおおおおおおつ!!」

同時に放った右拳がお互いの頬に炸裂する。

楽しいよなあ、おい!!

◇

今や姫島慎とヴァーリ・ルシファーの一騎打ちの観戦会場となった駒王学園の会議室。

先程までうるさい位に沸き起こっていた歓声も姿を顰め、室内にいる者は神・悪魔・人・混血の区別なく中央に浮かび上がった投影ディスプレイに目を奪われている。

ヴァーリが覇龍を制御してからリアルタイム超スロー画像に移行した中央の投影ディスプレイの中では、それでも二人の動きに追いつけていないのか、二人の姿が消えたり映ったりを繰り返している。

「よもや、白龍皇まで無限の龍神の域にまで達するとはもう」

一角に備えられた各神話の主神がその姿を並べる席、その中でアスガルドの支配者であるオーディンが髭を扱く。

その隻眼が捉えているディスプレイでは、慎の拳でヴァーリが吹き飛ばされるところが映っていた。

もつともそれも一瞬の事で、次の瞬間には二人の姿は掻き消えてモニターから流れるのは激突の轟音とその際に生じた衝撃波が周囲の地形を変えていく様になっているが。

「この一戦で奴が覚醒した回数は二度、この成長速度は異常だ。普通では考えられん」

土色の兜の奥から刃の様な眼光で二人の闘争を見据えながら、ダナ神族の長ダグザはその丸太のような腕を組む。

「無限の進化……。その対象は己だけに留まらず自身に相対した者にまで及ぶのか。ともすれば、それが彼の者の真の力なのかもしれない」

褐色の肌に古代エジプトの王装を身に纏った男、アメン・ラーはその太陽色の双眸を細める。

「そういえば実況席に座る異形の男、たしか悪魔將軍と言ったか。聞けば、奴は姫島慎の格闘の師だそうだな」

漆黒の闇を固めた様な甲冑に身を包んだハーデスは、ドクロを象つた兜の眼窩に灯る紅い篝火を件の男に向ける。

「……あの男、闘神の類か。しかし、奴から感じる強大な力は何だ？」
「信じられん事じゃが、あの男の力は外の二人を上回っておる」

ヒンズー教の破壊神であるシヴァは、悪魔將軍から放たれる威圧感に頭巾の奥にある三眼を鋭くし、横にいた細君であるパールヴァティの顔には汗が浮かんでいる。

神々の中でもトップクラスの権能を持つシヴァ達の言葉に、列席していた者達にわかに騒ぎ出す。

それも当然だ。
灼熱のるつぼと化した荒野で鎬を削っている姫島慎とヴァーリ・ルシファー。

二十年も生きていない混血の小僧が神々に一目置かれるのは、世界最強と言われていた『無限の龍神』オーフィスを超える力を身に着けているからだ。

実際にオーフィスを打倒した姫島慎はもとより、現在進行形でそれに迫る成長を見せているヴァーリでも、ここにいる者達の多くは勝つことが出来ないのだ。

「妙な話だ。それほど力がある者なら、我らが知らぬはずがない」
「しかし、悪魔將軍などと言う名は聞いた事が無いぞ」

神々の中から困惑の声が上がる中、沈黙を続けていた中国道教の最高神である天帝が口を開く。

「もしかすると、彼の者はこの世界の住人ではないのかもしれないかもしれぬな」

「天帝殿、何故そう思う？」

「先ほどから見ている気付いたのだがな、慎殿やその妹御である美朱嬢の使う氣功は我らが知るモノとは大きく違うのだ」

「違う？ それはどのようにだろうか？」

「我等が使う氣功は仙術とも呼ばれ、その目的は名前の通り神仙へと至る事にある。しかし、彼らの使う氣功は戦闘に特化しすぎている。今、慎殿が行っている『小周天』と『大周天』の同時使用など、仙道の極意といえるもの。本来、氣功の腕があつた域にまで達すれば、神仙に成つていなければおかしいのだ」

「たしか、悪魔將軍なる男が言っていたな。無限殿が使う技は氣功闘術という名だと。誰か、聞いた事がある者はいるかね？」

アメン・ラーの言葉に、全能であるはずの主神達の中で名乗り出る者はいない。

「なるほど。その技を知っていたという事が、彼が異世界の存在である証明という事か」

「しかし、それだけで決めつけるのは早計ではないか？ その氣功闘術とやらも第三の無限が生み出した物かも知れぬではないか」

「それはアリエマセーン。あの氣功闘術の技術体系は、驚くほどしっかりしていまシタ。十年、二十年であんな風になるのは無理ゲー！」

仏僧衣に身を包んだ中性的な青年、大日如来の疑問を南米の民族衣装に身を包んだ金髪の女性、ケツアルコアトルが否定する。

「そうであれば、姫島少年はこことは異なる世界に繋がりがあつたということか。それはまた、実に興味深いのう」

「嬉しそうですね、オーデイン殿」

「当然よ。かつて世界樹にこの身を吊るし、片目を代価とする事で得た知識。それが及びもしない世界があるというのじゃ。昂らぬわけがないわい」

遺された目をギラギラと輝かせながら、普段の好々爺然とした雰囲気をかなく捨てているオーデインに、天照大神はこつそりため息

を突く。

実は天照は慎が異界と繋がりがあある事を以前から察していた。姫島慎という少年は、身内と認識した者に対しては対応が甘くなる。

彼が日本神話に所属していた折、天照にも時よりこの世界では見た事も無い贈答品を送っていたのだ。

たとえば、今も首飾りの中央で蒼く輝く命の石と呼ばれる秘石がそうだ。

慎の話では、致死性の呪詛や攻撃に対して一度だけ着用者の身代わりとなる効果を持つらしい。

身代わり系の護符やお守りは世界各地にあるが、神にまで効果がある品など聞いた事も無い。

知識の神である思兼神が解析してみれば、この世界のどこにも存在しない未知の物質と術式で出来ているという。

その報告を聞いた時は、あの少年のあまりの非常識さに、神でありながら意識が遠のいたものだ。

当時の事に頭痛を憶えながらも、他の神達に気付かれない様に周辺を見渡した天照は、その目を冷たく細めた。

慎に恩があるアメン・ラーやある程度の付き合いがあるダグザ、自身の配下である朱雀と美朱の繋がりに興味を示す天帝などはその限りではないが、未だ地上に復権を得ていない者達の中には慎を通じて異界の知識や技術を手にしようと画策している者もいるようだ。

外で行われてる超絶の戦いを見てもなお、そのような欲をかくとは本当に愚かな事である。

彼を人間風情と侮って阿呆が地雷を踏み抜くのは知った事ではないが、それによって神仏全体を敵視されては堪らない。

そういったことにならない為にも、慎に友好的な勢力と協力して予防線を張っておくべきだろう。

冷えてしまった緑茶を啜りながら、天照はこの会合の後でアメン・ラーにコンタクトを取る事を決めたのだった。



暗雲と邪炎の黒く炙られた荒野に生身の肉体がぶつかり合う音とは思えない轟音が響き、その度に撒き散らされる黒炎と衝撃波が周りの地形を変形させる。

現状の界王拳と互角とは……あいつ、完全にオーフィス超えたな。それにしても、さつきから妙な感覚に襲われている。

体力も減って身体にもダメージが蓄積しているはずなのに、動きがドンドン鋭くなっていく。

さつきまで見えなかった相手の連携も見えるようになってるし、『真人』や界王拳の氣の運用も使うたびに効率が上がっている。

こいつはいったいどういう事だ？

『これは……また珍しいものを見せてくれるな』

『どういう事でしょうか、悪魔將軍さん？ 我々は両者の様子を見る事が出来ないのです、何が起こっているのかわからないのです……』

『ミックスアップ。極めて実力が近い者同士が闘う事によってお互いがお互いを高め合い、限界を限界でなくす現象だ。格闘技においては極めて稀な現象だな』

……なるほど、得心が行った。

どうりで、こっちの動きがよくなってるのにあいつを仕留められないワケだ。

とはいえ、向こうはそろそろ限界のようだ。

互いに動きを止めてみれば、こっちは全身に傷を負って血塗れだが、体力的にも身体的にもまだ余裕はある。

対してヴァーリの方は、鎧の殆どは砕け散り黒のインナーに包まれた身体は血だらけ。

さらに身を包んでいた黒の炎はその勢いを無くし、息もずいぶんと上がっている。

『神速の鎧の削り合いから両者生還！ 激しい攻防を表す様に両名共に全身傷だらけですが、明らかに消耗しているのはヴァーリ選手の方

だ!!」

『悪魔將軍さんの言葉では両者の実力は拮抗していたはずですが、何故このような差が着いたのでしょうか?』

『それはヴァーリ君の黒龍波による能力ブーストが、時間制限がある上に肉体にかかる負荷が大きいためでしょう。慎兄が使う界王拳は限界以上に能力を上げなければ肉体への負担はそこまでではないので、その差が出たからと思います』

『それだけではあるまい。魔力と氣の相乗による強化や炎殺黒龍波によるブースト、そして『獄炎の銀覇龍』。いずれも白龍の小僧がこの戦いを通して覚醒した技だ。急激な能力強化というものは、肉体に多大な負担を掛ける。今回の場合も度重なるパワーアップに肉体がついて行けてないのだ』

目を凝らせば実況席の推測通り、ヴァーリの肉体はいたる所で筋肉が細かく痙攣をおこしている。

あと少しでも無理をすれば、肉離れは元より筋肉や靭帯の断裂が起こりかねない。

しかし、そんな状況でも奴の目に宿る闘志は煌々と燃え上がっている。

「勝負は終わっていない! そうだろう、慎!!」

わかっていた事だが、やっぱりあいつは大馬鹿である。

とは言えそんなバカヤロウでも、ここまで来たら最後まで付き合っ
てやるのが人情というものだろう。

「当たり前だ! とは言え、このままダラダラと長引かせんのも芸が無い。ここは一丁、一発勝負でケリと行こうや!!」

こちらの提案にヴァーリの顔が獰猛な笑みに変わる。

「やはりお前は最高だ! ならば行くぞ、アルビオン!!」

《応! こちらの思いを汲んだ礼として、我らの最強の一撃を見せてやろうではないか!!》

後方に飛び間合いを広げたヴァーリから、先程を倍するほどの魔力が溢れ出す。

「さあ、魔界の炎! 全てを焼却する黒き龍よ! 再び我が魔手に宿

れ!!」

《Divide!!》《Divide!!》《Divide!!》《Divide!!》《Divide!!》
《Divide!!》《Divide!!》《Divide!!》《Divide!!》《Divide!!》
《Divide!!》

再び召喚されてヴァーリの右手を中心にうねり始めた黒龍は、わずかに残った胸当ての宝珠が電子音を放ったたびにその身を銀色に染めてあげていく。

邪王炎殺拳と白龍皇の光翼、奴が信用する二つの力を最大限に引き出した一撃か。

食らえば無事に済みそうにないが、あれだけの大口を叩いたからには逃げるワケにはいかない。

となれば、こちらにも正面からねじ伏せるにふさわしい技を放たねばならないだろう。

「はああああああっ!!」

俺は体内を巡る全ての氣を解放し、それを右拳に集中させる。

右手に集った氣はその密度を増す毎に赤から朱金へとその色を変え、こちらのイメージ通りの物を形作っていく。

『あく〜と〜！ これはどういう事だあ!! 互いの最大の一撃を放つと申し合わせた両者！ その身に纏ったエネルギーが同じ物へと変化していつているう!!』

『ヴァーリ選手は翼を広げた銀龍、そして姫島選手は自身の身体に絡みつく金龍。これはとても偶然とは思えません!』

「どういうつもりだ？ お前は俺のようにその身に龍を宿すわけではあるまい」

「偶然さ。だが、こういう幕引きも悪くないだろう？ ———— 最強の

龍は一匹でいいんだからよ」

「……そうだな。お前の言う通りだ!!」

《Longinus Smasher!!》

白銀に染まった炎と共にヴァーリが宙を駆ける。

同時に俺も宙を蹴り、金色の氣勢を放ちながら加速する。

「霸王獄殺銀龍牙あああっ!!」

「龍拳ッ!!」

「撃ち抜け、奴よりも疾くっ!!!」

インパクトの瞬間、此方に振りかかる衝撃と閃光。

右の頬と肩口の肉を抉り飛ばされるような痛みを皮切りに、右半身を灼熱感が襲う。

同時に右拳に感じた肉を打つ手ごたえに痛みをおして強引に振り抜くと、辺り一面を揺るがすような轟音と共に土煙が舞った。

少しの間を置いて閃光と粉塵に閉ざされていた視界が開けると、先程まで荒野を覆っていた暗雲や黒い照り返しは姿を消し、蒼穹の中で輝く太陽が照らし出す荒野には、山を三つは飲み込んで余りあるほどの巨大なクレーターが出来ていた。

残り滓の氣を使つて降りてみると、クレーターの中心ではヴァーリの奴が大の字になって伸びていた。

胸の中心にはくつきりと拳の跡が残っているが、微かに氣を感じるところを見ると死んではないようだ。

まったくタフな奴である。

『互いの意地とプライドを賭けた最後の一撃勝負！ その軍配は姫島慎選手に上がりました!!』

吉貝アナの絶叫と共に、悲喜交々の歓声が荒野に響き渡る。

というか、誰だよ、トトカルチョしてるヤツは。

勝手にケンカを始めたのはこっちだけど、失礼にも程があるだろ。

「アルビオン、話せるか？」

ため息交じりにヴァーリではなくアルビオンに声を掛けると、砕けて欠片となった宝珠から小さく光が漏れる。

《俺達の負けか。未だ、我らの力は『無限』には届かないようだな》

「それでもねえさ。最後の一撃、まともに食らってたら地面に這ってるのはこっちだったはずだぜ。見ろよ、外したのに右の頬や肩の肉は抉れてるし、腕の方も半分はハンバーグだ」

引き攣れる痛み能耐えながら上げた右手は、肩口から指の先まで真っ赤に灼け、皮膚の中には炭化している部分もある。

肩口も肉が抉れて半ば骨が見えてるし、頬の方も薄皮一枚深ければ

啞内にトンネルが開通しているところだ。

まあ、損傷と同時に傷が焼かれた事で出血が無かったのがせめてもの救いだな。

「ヴァーリの身体を動かせるなら、こいつを食わせてやってくれ。放っておいて死なれたら寝覚めが悪い」

ズボンのポケット中に入れていたピルケースから仙豆を取り出して投げてやると、アルビオンの操作によって動いた右腕がそれを掴む。

《これは？》

「仙豆って『無限の闘争』由来のアイテムだ。負傷者が喰えば、傷がたちどころに治って体力も回復する。こんな風にな」

説明しながら一粒口に放り込むと、全身の傷は血の跡を残して消えて無くなった。

《相変わらずデタラメだな。フェニックスの涙など、比較にならないか》

愚痴りながらも宿主の口に仙豆を押し込むアルビオン。

二、三度口を動かして嚥下すると全身に刻まれた傷は癒え、ほどなくしてヴァーリが目を覚ました。

「目が覚めたか？」

「……………そうか、俺は負けたのか」

「ああ、今回は俺の勝ちだ」

まだ意識がはつきりしていないのか、仰向けのまま言葉を漏らすヴァーリに手を差し出すと、すぐに握り返してきた。

「随分と素直だな。少しは悔しがると思っただが」

少々意外に思いながらも立ち上がらせてやると、手を放したヴァーリはニツと口元を吊り上げる。

「悔しいさ。だが、それ以上に今回の闘いは収穫があったからな」

「収穫ってのは、覇龍と邪王炎殺拳を極めた事か？」

「そうだ。真の覇龍と黒龍波を極めた先にあった獄炎の銀覇龍。あれこそが俺の可能性、まだまだ強くなるという証拠だ」

「ふーん。つうか、お前覇龍を極める時に爆発的に基礎能力が増した

けど、あれも神器の効果なのか？」

「いや。あれはお前の氣の操作を真似て、魔力と外部から取り込む氣を練り合わせてみた結果だ」

「俺のパクリって、んな簡単に『真人』を真似るんじゃないやねえよ。あれって無茶苦茶難しいんだぞ」

「そうなのか？ まあお前も赤龍帝の能力を真似てるんだから気にするな」

「それって界王拳の事か？ いや、どっちか言えば赤龍帝の籠手の方がパクリなんだが」

「？ まあそんな細かい事はどうでもいい。それよりもこれからどうするんだ？」

「どうって、会議室に戻って流れ解散だろうな」

「ふむ。ならば、俺はここで別れる事にしよう。ここでの目的はもう達したしな」

「待てや」

さざらりと帰ろうとするヴァーリの頭を鷲掴みにして引き留める。

「放してくれ。俺はもうここに用は無いな」

「オーフィス並みの実力を身に着けた奴を野放しに出来るか。お前はこれから俺の万屋の従業員になるんだよ」

「なぜだ!？」

「お前が俺に負けたから。敗者は勝者のいう事を聞くもんだろ」

「ぐぬぬ……」

俺の完璧な理論にぐうの字も出せないヴァーリを引きずって会議室に戻ると、寄って来た身内や HALF 組に二人してもみくちゃにされた。

チビ達は「にいちゃん、カッコいい!」だの「わたしもおそろとびたい!」と纏わりついてくるし、サイラオーグの兄貴やミリキャス、クーの兄貴は「すげえ喧嘩だった」と口々に俺達を称えながら背中やら肩やらを叩いてくる。

朱乃姉や親父に玉藻はこっちの怪我の具合を心配するし、もう滅茶苦茶である。

ただ喧嘩しただけでこうも盛り上がられるのは気恥ずかしいが、皆が喜んでくれるなら悪い気はしない。

興奮冷めやらぬ感じの皆を掻き分けると、次に俺を待っていたのは将軍様だった。

「ご苦労だった。なかなか見ごたえのある仕合だったぞ」「どうも」

なんでここにいいのかという疑問が脳裏を掠めたが、その気になれば現世に干渉できる将軍様なら、半分『無限の闘争』と融合したこの空間にいてもおかしくないと思ひ直す。

しかし、将軍様の力は大きく増しているのはどういうことか。

具体的に言うと同前までは鬼ランクだったが、今では神ランク相当まで上がっている。

氣を探ってみると、前に闘った時とは桁違いに身体を流れる量と質が向上している。

これってもしかして――

「将軍様、本来の身体を取り戻しましたか？」

「うむ、過去の因縁を清算する時が来たのでな」

重々しく頷く将軍様に、俺は内心首を傾げる。

過去の清算とはどういう事なのか？

将軍様の過去に関わる存在など、弟のシルバーマンを除けばゴルドマンだった将軍様を悪魔に誘い込んだ平行世界のサタンくらいしか思いつかないのだが。

「慎よ、お前に闘ってもらいたい漢がいる」

「それはいつたい……」

「キン肉スグル。我が弟シルバーマンの末裔にして後継者だ」

将軍様の口から出た名前に俺は目を細める。

キン肉スグル。

漫画『キン肉マン』の主人公で第58代キン肉星大王。

超人オリンピックを二度制覇した実績を持ち、現存する超人の中で最強と言われている男だ。

「いいですよ。将軍様が対戦相手を指名するって事は、ちゃんとした

理由があるんでしようし」

『会場の皆さん、お聞きになられましたでしょうか！ 激戦を制した姫島選手の次の相手が決定しました！ それは超人オリンピック二連覇の偉業を持つ正義超人最強の男！ 奇跡の逆転ファイター、キン肉マンです!!』

興奮した様子で実況席でシャウトする吉貝アナと、期待に顔を輝かせる中野さん。

アニメでは何回も見てるけど、生になると感慨深いものがあるな。それはともかく、なんで美朱やイツセー先輩まで実況席に座ってるだ？

にわかに沸きだつ会議室の喧騒の中、将軍様は玉座に掛けていたマントを纏い直して背を向ける。

「慎よ、心するがいい。奴どのリングには、お前は私の後継者として立ってもらおう」

「将軍様の後継者として、ですか。それは責任重大ですね」

そう言うと、将軍様は足を止めて振り返り、こちらに刺すような眼光を向ける。

「勘違いするな。悪魔将軍ではなく、完璧・壺式ゴールドマンの後継者としてだ」

将軍様の有無も言わせぬ迫力に、俺は出かかっていた疑問の声を飲み込んだ。

完璧・壺式というのは解らないが、ゴールドマンの名前を出したからにはキン肉マンとの試合は、別の意味を持つという事だ。

かつて思想の違いから袂を分かち、決闘の末に相討ちになった将軍様とその弟のシルバーマン。

俺とキン肉マンの仕合は、互いの後継者として引き分けとなった決闘の白黒をつける意味もあるのだろう。

「……了解。貴方に恥をかかせない様に精進しますよ」

「うむ。仕合の日取りについては追って知らせる。それまで更なる研鑽に励むがいい」

そう言い残し、自身が発生させた時空の歪みに消える将軍様。

その後ろ姿を見送って、俺は小さく息を付いた。

やれやれ、次の仕合が組まれたのはいいが責任は重大だ。

こりゃあ、鍛錬を怠けるにはいかないな。

胸中で決意を新たにしながら、携帯端末でバトルフィールドを解除する。

空間が軋むような鳴動が会議室内に響くと、窓から見える光景は夜の帳が降りた駒王町へと立ち戻る。

さて、随分と妙な展開になったが、今回の会議もこれにてお開きだろう。

「天照様。申し訳ありませんが、会議の閉幕宣言をお願いできますか」
「待て。貴殿は白龍皇の処遇をどうするつもりなのだ？」

周りの喧騒も落ち着いたところで天照様に締め言葉の言葉を貰おうとしたら、ヴァハグン様が待ったをかけて来た。

懸念は案の定ヴァーリについてだが、その辺はもう対処済みである。

「ヴァーリは今の勝負の結果により、私の万屋で働くことになりました。手綱は私が握ってますし、妙な事をしようとしたら容赦なくシバキ倒しますので、ご安心ください」

ニツコリと営業スマイルを浮かべて答えたのに、ヴァハグン様は顔を青くして黙り込んでしまった。

何故だ、我ながら渾身の笑みだったのに……。

「まあ、無限殿が手綱を握るなら一先ずは安心かの。ところでお主、嫁を貰う気はないか？」

……うん？ オーデイン様が妙な事を言いだしたぞ。

「いや、私はまだ十五歳ですので結婚できる年じゃないんですが」

「十五歳といえば一人前の大人じゃろう。好いた女子がおらんのなら、ウチのヴァルキリーなんてどうじゃ？ 才能も容姿も優れておるが、嫁の貰い手が無い奴が一人おるんじゃが」

「待て、オーデイン殿。それならば、我が配下の妖精にも器量よしいる。娶るならこっちのほうがい」

「ふむ、あの小僧と縁を結ぶというのであれば黙ってはいられんな。

我が方も冥府に住むニンフがおる。見目麗しく、教養もペルセポネの教えを受けているので問題はない。妻に迎えるのなら、こちらの方がよいぞ」

「何を勝手な事を！ 彼の元にはすでにわたくしの分霊である藻女がいます！ 他の者が入り込む余地はありません!!」

「待たれよ、天照殿。彼の者は無限の体現者だ、連れ合いが一人では無くはならない道理はあるまい」

「おおっ！ ならば我等の勢力からも妻を娶ってもらおう！」

「我等も！」

「私達もだ！」

……………なあにこれえ。

啞然としてる間に話がさらにトンデモナイ方向に進んでるんですが。

「ちよつと待ってください！ 俺は結婚するだなんて一言も言ってますよ!! なんか一夫多妻とか言ってますけど、俺にそんな甲斐性ありませんし、複数の女性を同時に愛するほど器用でもないですから!! マジで勘弁してください!!」

「なにを覇気のない事を。男なら女の二人や三人、囲って見せんか」

「どうせ、まだ女を知らんのだろう。これを機に知っておくのも悪くあるまい」

「無茶苦茶言わんでくださいよ！ この歳で女性経験なんて、ある方がおかしいでしょうが!!」

「ふむ、現代ではこのような場合はどう言うのであつたかな？」

「確か、童貞乙と言えばよかつたはずだぞ」

「シバくぞ、お前ら!!」

「ここぞとばかりにおちよくってくる主神達の相手をする事としてはし。

「こちらが半ギレになった事でようやく、馬鹿騒ぎも収まりを見せ始めた。

「ともかく、結婚なんて早すぎますよ。日本の法律では男は18にならないと結婚できないんですし、そういった話をもっと時間が経って

からにしましょう」

妙な疲れを感じながら、強制的にこの話題を打ち切る俺を主神達は不満そうに見ている。

くそつ、みんなしてブーたれやがって。

お前ら、絶対諦めてねえだろ。

まったく、こっちは朱乃姉と美朱を嫁に出すまで、そんなこと考えてる余裕なんてないっつーの。

◇

さて、最後の最後でカオスが渦巻いた会議もようやく終わり、俺は美朱と共に帰路に着いていた。

あの後にはグダグダな空気のまま流れ解散となり、朱乃姉や親父は各々が陣営の後始末。

ヴァーリはこっちに来るのに準備があるとの事でグリゴリに戻ったし、玉藻は何故か天照様に引つ張られて、高天原に連れていかれてしまった。

時計を見れば、針が示すのは深夜二時。

神職の朝ははやいつてのに、まったく困ったもんである。

「お疲れ、慎兄。いろいろ大変だったねえ」

「まったくだよ。まさか結婚云々なんて話になるとは思ってもみなかった」

「でもよかったの？ イッセー先輩じゃないけど、ハーレムも造れそうだったじゃん」

「馬鹿言え。俺にそんな甲斐性ねえよ」

「私達を養ってる時点で十分あると思うんだけど……。まあ、いきなり結婚するとか言われても困るから、私としては断ってくれてホッとしてるけどね」

「ないない。家の事やらなんやらでゴタゴタしっぱなしなのに、嫁を迎えるとかマジでない」

顔の間でひらひらと手を振りながら否定してやると、安心したのか

美朱の顔に笑みが浮かぶ。

「うむ、余はその言葉を信じるぞよ」

「なんだよ、そのしゃべり方は。馬鹿言ってるやないで、お前も朱乃姉も彼氏の一人でも連れて来いっつーの」

「どうせ連れて来ても『妹はやらん!!』とかいう癖に」

「当たり前だ。手塩に育てて来た妹なんだ、納得いく奴にしかやれるか」

「ちなみにその基準は？」

「俺の膝を地に付かせる事」

胸を張って堂々と言ったのに、妹の視線が冷たい。

「……ナニソレ。私達、一生結婚できないじゃん」

「いや、普通にいけるだろ。例えば音速以上で動いたり、氣弾で大陸すっ飛ばしたり。あとは異世界の勇者を捕まえて来てもOKだ」

「貴様、いい加減しろお!!」

何故か美朱が切れたので、親父の『ブレイク・ダーク・サンダー』の真似をして腹筋崩壊させといた。

うーん、裏の世界を探したらこの位はいると思うんだがなあ。

もしかして、俺の基準はおかしいのか？

この世界じゃあ常識なんてクソの役にも立たないし、ここで強くなると決めた時から後退のネジは外してあるんだよ!!

上限いっぱいまで界王拳で倍化した俺は、紅い氣勢を吹き上げながら地を蹴った。

目の前に立ちはだかるのは最強の怪獣王『ゴジラ』!

相手にとつて不足は無い!!

加速のままに黒い巨体へ肉薄し、踏み出そうとしていた足に拳を振りかぶる!

この拳が俺の未来を切り開くと信じて!!

「で、結果はどうだったの」

「拳を当てた瞬間、放射熱線で消滅しましたが、なにか?」

あえて胸を張ってやると、ベンチの左右に座っている姉と妹から呆れを含んだ視線が返ってきた。

打ち切り漫画のような寸劇を見てくださった皆さん、こんにちは。

日本が誇る特撮の偉大さを、文字通り肌で感じてきた姫島慎です。

俺達がいるのは、毎度お馴染みの『無限の闘争』の控室。

朱乃姉や美朱とたまたま鍛錬が終わるのが一緒だったので、反省会を交えた雑談をしているところだ。

「でも、慎の攻撃は当たったんでしょ? そのゴジラという龍にはどのくらいのダメージを与えられたの?」

「足の爪の先が欠けた」

「……それだけ?」

「それだけ」

俺の言葉に絶句する朱乃姉。

うーん、ヴァーリを倒した龍拳だったんだけどなあ……。

やっぱ、ガタイの大きさの差は遺憾ともしがたいものがあるなあ。

早く、サイズ補正無視を憶えないと。

「おおー! 慎兄すごいじゃん!! ゴジラに傷を負わせるとか、パンチの威力核ミサイル超えたんじゃない?」

「いや、ゴジラに核が効かないのは相性だからな。核ミサイル並のパンチを撃とうと思ったら、拳王様レベルじゃないと無理」

感嘆の声を上げる美朱に言葉を返していると、自失から戻って来た朱乃姉が油が切れたブリキ人形のように首を巡らせた。

「ごめんなさい。どういう事か説明してくれないかしら。慎のパンチを受けても足の爪が欠けただけとか核ミサイルとか、さっぱり分からないわ」

「うーんと、慎兄が戦ったゴジラっていう龍はね、『怪獣王』って異名が付くくらいの化け物なの。オーフィスなんて比べ物にならない程に強いんだ」

「戦車の榴弾やミサイルは元より、発電所並みの高圧電流やレーザー砲を受けてもピンピンしてるもんなあ。マグマの中も平然と泳ぐし。たしか、放射熱線を最大威力で撃ったら原爆並の威力になるんだっけ」

「でも、オーフィスは世界最強の龍……」

「それは俺達の世界の話。ここはありとあらゆる多元世界の猛者が集う場所なんだ。星を一撃で砕く宇宙人やら惑星を主食としてる化け物なんか、ゴロゴロしてるんだよ。一番ヤバイ奴なんか、出てくるだけで銀河が一つ消し飛ぶしな」

「あー、私も『ラーグース』がいるの知った時はめっちゃ驚いた。あれに比べればオーフィスなんてミジンコレベルだもんね」

「……貴方が強くなった理由が分かった気がするわ」

話の大きさに理解が追いつかなくなったのか、遠い目で天井を見上げる朱乃姉。

「ここを長く利用するコツが『常識は投げ捨てるモノ』という事に早く気づけばよいが。」

「朱乃姉は例の鼎かなえ二尉の指導だったからいいとして、お前はどうかだったんだ」

「……聞かないで」

対戦の話を振った途端に口元を引き攣くわらせる美朱。

不思議に思っただけで携帯端末から対戦者を確認すると、そこには『GN 先行者』の文字が。

「……ああ、あの卑猥ロボの相手は女の子にはキツイわなあ」

「そうなんだよ！ トランザムするのにも驚いたけど、真っ赤に光ったと思ったら三倍の速度で腰を振り始めたのには、もつとビックリだよ！ 股間のビームも三倍ぶつとくなるし」

「これは酷い」

対戦動画を見ると、赤い残像を残しながら飛び回り股間のキャノンからビームを乱射する先行者の雄姿が、これでもかと映っている。

というか、なんで声が刹那・F・セイエイなんだ。

「ホント。イオリア・シユヘンベルグが助走をつけて殴るレベルだよね、これ」

「戦争根絶とはなんだったのか」

美朱の言葉に侘しいモノを感じながら、コンソールの傍らに置いてあった連絡ノートに目を通す。

●月×日

記入者 赤トカゲ

この度、思うところがあつてユーザーに復帰した赤トカゲです。

みなさん、よろしく。

あ、白龍皇さんは因縁つけるのは勘弁してくださいね。

神器に宿る赤白の龍の因果は、使用者の俺達には関係ありませんからね。

さて、復帰した勢いに弾みを付けようと対戦を試みたんですが、相手は『音速丸』なる黄色で丸い怪物物でした。

対戦相手が野郎だった事が気に入らなかつたのか、妙に凄みの有る声で滅茶苦茶に罵倒されながら襲い掛かれて、結果は敗北。

とは言え手ぶらで負けたわけではなく、タコ殴りにされた代償に技を一つ手に入れました。

でも、この技がクセモノだったので。

……みなさん、『忍法エロモーション』ってどうやって使ったらいいんでしょうか？

個人的には永久封印したいところですが、すでに封印指定の技が二

つある身としては、これ以上増えるのは……。
偉大な先輩方の意見を頂けると嬉しいです。

妹ニンジャ

おい、そのふざけた技がどうして忍法呼ばわりされてるのか、詳しく聞こうじゃないか。

白龍皇

エロモーションwww

バカすぎる!!

イケメン猿神

やめろおっ!?

俺ツチのトラウマを掘り起こすんじゃねええええっ!!

聖剣使い

そう言えば、貴方以前にこの技で負けてましたね

サル、ざまあwww

極限流冥界支部

すまん。

どんな技かが皆目見当がつかないので、アドバイスのしようがない。
い。

無力な俺を許してくれ

魔剣マイスター

イツ……赤トカゲさん、気を落とさないでね。

次はきつとまともな技が来ると思うから

ビリビリ巫女

機会を設けますので、その技を見せていただけませんか？

アドバイスは実物を見てからという事で……。

………イツセー先輩エ。

コメント書いてる奴等もアドバイスくらいしてやれよ。

まあ、技名だけじゃ何が何だか分からんだろうが。

いやいや、憐れむのもツツコミも後だ。

今は先達として有益なアドバイスをしないと。

管理者

復帰おめでとうございます、赤トカゲさん。

『忍法エロモーション』ですが、名前とビジュアルに目を瞑れば周囲の空間全体に攻撃を放つ事ができる、優秀な全体攻撃技です。

基本、肉弾攻撃しかない赤トカゲさんは重宝するかと思えます。

有効範囲や出かかり・撃ち終わりの隙など、技に関する知識を深めて慣熟に努めれば、有効な切り札の一つになるでしょう。

まずは羞恥心を捨てる事から始めましょう。

うむ、こんなところでいいだろう。

しかし、復帰初っ端から音速丸なんてイロモノに当たった上に得た技があれとは。

マジでツイてないな、先輩。

この一件で心が折れなければいいけど……。

懸念が沁み込んだ溜息と共にノートを置くと、携帯端末からアラームが鳴った。

俺の少ないプライベート時間は終わりらしい。

「慎兄、今日はどこに行くの？」

「アイルランドからイタリアに寄って、中東、インド、中国かな」

「大丈夫なの？ あれから二週間ずっと働き詰めじゃない」

「大丈夫だ、仙豆もまだあるし」

「いや、仙豆に頼ってる時点でダメじゃん」

言ってくれるな、妹よ。

一週間で睡眠時間が一時間という暗黒労働を乗り切るには、あの豆が必須なんだ。

というか、あれから『禍の団』の活動もそんなになかったので、助っ

人よりも解放された転生悪魔の処理がメインになってるし。

サーゼクス兄め、段階的に解放してくれって言ってたのに、数千人単位で一斉解放するとはどういう了見か。

少彦名様と思兼おもいかねのかみ神様が組んでくれた浄化結界に収納して、異形化を押しえているから今は何とかなってるが、優先的に処理しなけりやならないのは変わらないのでマジでしんどい。

お陰で、たまに起こるテロの助っ人はヴァーリに丸投げしている状況だ。

つうか、単独で駒落としての法を使える術者が俺以外にいないのは盲点だった。

元々氣を法術に使うのは、アジアの中でも日本や中国、インドくらいしかない。

西洋や南北米、中東等々は氣を魔力に変換して術を行っているため、駒落としての修得は不可能。

中国やインドにしても、術に必要な氣が膨大な為に儀式やら何やらで底上げしないと使えないと来た。

お陰で大半を俺が担当するハメになっているし、順番待ちの転生悪魔達がギスギスし始めて、収容施設の空気も目を追う事に悪くなっている。

神様達も何とか習得しようとしてくれているが、需要に供給が追いついていないのが現状だ。

つーか、これって転生悪魔という下僕を失った悪魔貴族達の嫌がらせだよなあ。

ぶつちやけ嫌気がさしてきているが、こつちが言い出した以上は吐いたツバを飲むわけにはいかない。

こつちで雇い入れたヴァーリの事もあるし、俺を心配してリアス姉の眷属を辞めた朱乃姉や、グリゴリを退職した親父の分まで生活費を稼ぐ必要があるのだ。

「というわけで、一家の大黒柱としてガンバってくるぜ！ 馬車馬のように！ 馬車馬のようにっ!!」

「いい加減、休みなさい!!」

「慎兄、テンションおかしいよ!!」

聞こえない、何も聞こえない!!

家族の未来の為に、今日もブラック&デンジャラスな労働にレッツ
ゴーだ!!

ふははははははははははははっ!!!

◇

さて、皆さん。

初夏の夜長を如何お過ごしでしょうか？

私、姫島慎は家で寝ていたはずなのに、気がつけばとところどころで
炎が燻^{くすぶ}るゴーストタウンに放り込まれるという訳の分からない事態
に、姫島親子4人+居候2名で呆然としています。

「ねえ、慎兄。ここって駒王町じゃないよね」

人の気配が全くしないビジネス街を前に呆然していると、美朱が
声をかけて来た。

確かに、眼前の荒れ果てたビル群には見覚えは無い。

駒王町にこんな場所はなかったはずだ。

「ああ。だが、何処の街かは分からんな」

「……ここは冬木という街のようね」

「知ってるの、朱姉？」

「いや、あれを見たんだろう」

期待を宿した美朱の視線に苦笑いを返す朱乃姉と、道路標識を指さ
すヴァーリ。

というか――

「ヴァーリ。お前、何で全裸なの？」

他のみんなは寝間着なのに、こいつだけは肌色100%のネイキツ
ドなのだ。

ここがゴーストタウンの様相を呈していなければ、公然猥褻^{こうぜんわいせつ}で即御
用である。

「仕方ないだろう。俺は寝る時は裸と決めているんだ」

「変なポーズでブラブラさせるなあ!!」

「服を着てくださいましっ!!」

何故か荒木飛呂彦風なポーズを決めるヴァーリに、美朱と玉藻のツツコミが飛ぶ。

「と言われても着る物が無いんだが?」

「慎、なにかヴァーリ君に貸せるモノあるかしら?」

「私のシャツはどうだろうか?」

「そんな加齢臭が染みついたシャツは駄目だと思いますわ」

辛辣過ぎる朱乃姉の返しにヘコむ親父。

今の親父の恰好は、中年御用達の白のランニングシャツに下は白と水色のストライプなガラパン一丁と、まさにおっさん丸出しな恰好である。

司法がしつかり動いていれば、こちらも間違いなく逮捕案件だ。

それを言ったら俺を含めてみんな寝間着だから、オフィス街に立っていると違和感が半端ないんだが。

「しかし、なんでこんな所に俺達はいるんだ?」

「え、慎兄が『無限の闘争』で何かしたんじゃないの?」

「やったらん。アレ系統のトラブルには、お前等を巻き込まないようにしてるだろ」

「あらあら。私も慎が原因と思ってたのだけど」

おいコラ。

「ともかく、妙な事に巻き込まれたのは間違いないみたいだな」

「まったくです。気持ちよく寝ていたらあんな粗末な物を見せられるなんて、玉藻ちゃんショックです」

「言ってくれるな、アーパー狐め」

「自分の天然さに気づいてない馬鹿トカゲに言われたくねーですよーだ!!」

「こら、そこ! 片方は全裸なんだからケンカすんな」

ここちらの注意に渋々と矛を収める両名。

「つうか、ヴァーリよ。お前、禁手化して鎧着込めばいいんじゃないやね?」
「断る」

「何故に？」

「素肌で鎧なんて、肉を挟みそうで怖いじゃないか」

「……いや、もっと懸念するところがあるだろうが。」

「ねえ、慎兄。無限の闘争経由で家に帰るって出来ないの？ あれってウチの境内も出口に設定してたよね？」

「それがな、さつきから入り口を出そうしてるんだが、出てこないんだよ」

「マジで？」

「ああ。今までも攻勢結界の中とか次元が不安定な場所じゃあ出せなかったから、この街一帯にそういうモノが張られているんじゃないか？」

「確かに、結界かは分からないけど、街全体から異質な魔力が感じられるわね」

「これは結界の類ですね。町全体を覆うなんて随分と大胆なものですけど。それに地脈を通して感じる淀んだ瘴気、あまり長居すべき場所ではないでしょう」

目を閉じ、空に手を掲げながら言葉を紡ぐ朱乃姉と、肌襦袢はだじゆばんの袖から符を放つ玉藻。

面子の中で魔法に精通し、魔力感知が優れているのはこの二人だ。

こちらへの悪意が籠められているなら俺や美朱にも分かるが、このような魔力が充満している中での差異、なんてのは感知できない。「やっぱりそうか。じゃあ、その中で最も魔力が濃い場所はわかるか？」

「むこうに見える山の中……、ごめんなさい、正確な場所まではわからないわ」

「結界の中継点になりうる場所なら幾つかありますが、大本は朱乃さんが感じた場所と同じですね」

朱乃姉が手を降ろし軽く息をつくのと同時に、玉藻が放っていた符も燃え尽きる。

「お疲れ様、二人共。これで第一目標は決まったね」

「ああ。山の魔力溜まりがビンゴなら、そこに街の異変に関係する何

かがあるはずだ。そいつを調べれば街を覆う魔力を何とかするヒントが掴めるかもしれない」

「こういう場合、本来なら現地の魔術組織か土地の管理者から情報を得た方がいいのだが……」

「街がこの有様では、それも望み薄だな」

考え込むように渋面を造る親父と肩をすくめるヴァーリ。

服装を見なければ、そんな仕草も似あうのだろう。

……服装を見なければ。

「そういえば、朱乃姉はここで魔法を使うのは問題ないのか？」

「ええ。周辺の魔力がこちらに干渉してるわけじゃないから大丈夫よ」

「なら、俺とヴァーリ、親父は前衛。朱乃姉と玉藻、美朱は後ろ頼むな」

「なに言ってるの、慎兄。いつも通り、私も前が出るよ」

「いや、お前得物無いだろ」

「あるよ、ほら」

軽い調子の声と共に、美朱は着ているパジャマの胸元に手を突っ込むと、そこからズルリと妖刀を引っ張り出した。

「え、なに？ お前、寝るときに妖刀忍ばせてんの？」

「うん。不意打ちの用心もあるし、持ってるとうまく眠れるんだ。まあ、乙女の嗜みたしなかな」

かなりヒキ気味に問いかけると、美朱は満面の笑みでそう答えた。

……兄として一言言わせてもらっていいだろうか。

そんな乙女の嗜みがあつてたまるか！

「ああ……どうしてこんな残念な娘になっちゃったのかしら。これもきつと甲斐性無しの父親と慎の所為なのね……」

ワザとらしい泣き真似をしながら、とんでもないことを口走る朱乃姉。

「いやいや、何言ってるんの朱乃姉。あいつが残念なのは元からで、断じて俺の所為じゃないから。あと、サラリと親父デイスんの止めろよ」
「でも、ガサツで戦闘狂のあなたと一緒にいたからああなったとしか……。ごめんなさい、天国のお母さま。朱乃は妹の教育に失敗しまし

た」

「異議あり!! 当方は一貫して無実を主張する! つうか、誰がガサツな戦闘狂だよ、このドM巫女モドキ!」

「誰が残念だ、朱姉!! 事と次第によつては、その魔乳を揉む事も辞さないぞ!!」

「ドM巫女モドキに魔乳つて、いくらなんでも酷すぎないかしら!」

「はははっ! 姉弟が雁首揃えてマヌケな事だな」

「黙れ、フルティン皇が!!」

己の恰好を棚に上げて笑う馬鹿に言い返した後で、姉弟三人で好き勝手に言いあう。

こんな所で何やってんだ、と思うだろうがこれもスキンシップの一環である。

授業参観の時に気付いた事だが、兄妹なんだから、たまには腹に溜まったものを言いたい放題吐き出す事も必要なのだ。

さて、どのくらい時間が経ったのか。

互いに言い尽くした俺達は、一斉に息をついた。

大声で叫び合った所為で少々喉が渇くが、俺を含めてみんなスッキリした顔をしている。

ヴァーリは拗ねてるし親父は未だにへこんだままだが、その辺はスルーだ。

さて、ストレスを発散したところで、俺達にはやらなければならぬ事がある。

それは――

「まずは服と靴の調達だな」

100%犯罪者なヴァーリやその一歩手前の親父はもちろんだが、俺達の身なりも少々拙い。

黒のTシャツにカーゴパンツな俺や、ピンクのパジャマを着た美朱はいい。

問題は我が家の長女と従業員番号だ。

朱乃姉も玉藻も身に付けているのは赤い肌襦袢のみ、しかも身体の線の出方から下着も着けていない。

これが家の中ならば構わない。

朱乃姉はガキの頃から寝間着はそれだし、玉藻だつてその恰好で家の中をウロつかなかつたので文句はない。

しかし、外に出る恰好としては甚だ不適切である。

というか、ぶつちやけ痴女にしか見えない。

さらにここに飛ばされるまで全員床についていたので、靴が無い。普段から鍛えている俺はともかく、女性陣の軟足では素足で移動するのは酷だろう。

「たしかに、この荒れ具合で裸足は拙いわね」

「どこかにお店でもあればいいんだけど……」

瓦礫が散乱する道路と自分の足元を交互に見ながらため息をつく二人。

何か手はないかと頭を捻っていた俺は、ある事を思い出して携帯を取り出した。

スマホの画面にある『M』の字が入ったロッカーのアイコンをタップすると、一瞬の暗転を挟んで物品リストのような画面が立ち上がる。

『無限の闘争』は駄目でも、こいつは使えるみたいだな」

「慎兄、何してるの？」

「遠隔操作で無限の闘争にある倉庫から、物を取り出そうと思ってな」

「ああ、それがあつたか。でも、私達の着れる服とかあるの？」

「任せなさい、伊達に十年以上ユーザーしてません」

美朱に言葉を返しながらリストに目を通して、俺は思わず顔を顰めてしまった。

画面に映る項目があまりにも煩雑としているからだ。手に入れた順にならんでいるのか、アイテム、装備、食品等々グチャグチャに差し込まれている。

しかも、収納されている物品の数が上限である4000目前の3920個である。

長年適当に放置していたとはいえ、これはヒドい。帰ったら一度整理しなくてはなるまい。

カオスなりストと格闘する事、十分。

俺は『真・女神転生デビルサマナー』に登場する、背にドクロの刺繡ししゅうが入った黒の空手着である『ドクロ稽古着』。

美朱は『ファイナルファンタジー』に登場した忍者御用達の『黒装束』。

朱乃姉は「ドラゴンクエスト」に登場したプリズムに輝くサマードレスっぽいデザインの『光のドレス』。

親父は『真・女神転生デビルサマナー』からブランド物の白のスーツである『ガルチェのスーツ』。

ヴァーリは『真・女神転生IVファイナル』に登場した、背にドクロの模様がプリントされた黒のライダースーツ『スカルライダーB』。

玉藻には『ペルソナ4』から水色の着物である『雫の小袖』に装いを改めた。

他にも回復アイテム等々の必要物を引っ張り出している最中、ふと頭の隅を疑問が過ぎった。

「そう言えば、玉藻。お前さん、礼装つてのを纏えばよかつたんじゃないか？」

そう問えば、玉藻はいつもの太陽のような笑顔ではなく、意味ありげな艶のある笑みを向けてくる。

「おっしゃる通りです。ですがご主人様、私も女性なのです。殿方に身を着飾る物を頂ける機会があればもらっときたいなー、と思いまして」

「すまんね、気が利かなかった。そんじゃ、他のみんなはレンタルだけど玉藻にはその着物やるよ」

「よろしいんですか？ 実はダメ元で言ってみただけなんですけど」

「ああ。倉庫の肥やしになるよりも、玉藻みたいな女性に袖を通された方が服も本望だろ」

取り出した物をリュックに詰めながら答えると、玉藻が飛び上がって喜んでいるのが見えた。

うんうん。

ああも喜んでもらえるなら、やった甲斐があるってもんだ。



崩れた建物、光を灯さない街灯や信号、焼け焦げて燻る民家と、陰鬱な光景が続く中、俺は此方を囲む異質な気配に足を止めた。

視線を巡らせると剣、弓、槍と思いきいの武器を手に近づいてくる骸骨の群が。

「第一村人、じゃないよな」

「さすがにあれは違うと思いますよ、ご主人様」

「そりやそうだ。そんじゃ、テュホン・レイジ（偽）つと」

適当な声とは裏腹に、回し蹴りの要領で足から放った衝撃波は竜巻のように渦を巻いて、焼けた家の残骸ごと骸骨共を一掃する。

……この技も徐々に本家に近くなってきたな。

これなら（偽）の字が取れるのも遠くないか。

「ふっ、やるな。さすがは俺のライバルだ」

「我が息子ながらデタラメだな」

野郎二人が漏らした感想に、俺は軽く手を振って応える。

女性陣はこの程度ならもう慣れたのか、声も上げやしない。

つうか、あんなあからさまな『ザコです♡』って感じの奴等なんて、まともに構ってられん。

さて、こんな感じで出てくるガイコツ達を掃除しながら進むことしばし。

行けども行けども出るのは亡者、という状況に飽きが入り始めていたところで俺達は待望の生存者を発見できた。

生存者は一人。

蒼いフード付きの外套に白の丈の長い腰巻姿で、銀の籠手を着けた右手には身の丈ほどの杖を持っている。

見つけた状況は良いモノではなく、大量の武装ガイコツにそれを指揮している黒いモヤに包まれた2体の人影と交戦している最中だった。

その状況を見た俺達の決断は素早かった。

散々歩き回って、ようやく見つけた情報源である。

こちらの残り時間的にも、このまま亡者の餌にするなんて選択肢はない。

俺達が取った行動は至ってシンプル。

眼前の鉄火場に『ダイナミックお邪魔します』する事だ。

「先手必勝の玄武剛弾ってなあっ!!」

右拳から放った竜巻状の衝撃波は、ガイコツ共を蹴散らしながら生存者に相對していた黒の外套に髑髏ドクロの仮面を被った男を、横合いから飲み込んだ。

竜巻に吹き飛ばされながらも、ビルの壁面を足場にして着地しようとする髑髏仮面。

だが、それはあまりにも遅すぎる。

髑髏の仮面がこちらを向くよりも速く、奴の上を取っていたヴァーリが流星の如き蹴りを放っているからだ。

「衝撃のおっ！ ファースト・ブリットおおおっ!!」

咆哮と共に粒子を放ちながら加速する純白の具足は、仮面の背中を穿ってアスファルトを陥没させながら地面に叩きつける。

「つまらん、覇龍どころか禁手を使う必要もないとは」

不満そうに唇を尖らせながら、クレーターから飛び出て来るヴァーリ。

つうか、足だけ鎧出すとかできるんだな。

「ラディカル・グッドスピードの使用者だった男の真似だ。いつまでも覇龍にならねば使えんのでは芸がないだろう」

ドヤ顔で自慢するのはいいけど、お前ちよつと前までは全裸の変態だったからな。

「覚悟ッ!!」

呆れながらも一方に目を向けると、美朱がプラズマブレードを相手の影に打ち込んで動きを封じ、高速で相手とすれ違うように何度も刃を走らせていた。

あれってたしか、『ストリートファイターⅢ』に登場する忍者『いぶき』の『闇時雨』というスーパーアーツだったはず。

あんな技いつの間に体得したんだ、あいつ。

「食らえいっ!!」

締めの一撃を食らって錐もみ状に吹っ飛んだ被ったフードを突き破る角を生やした巨漢。

そこに親父が呼び出した落雷が突き刺さり、奴は黒いモヤごと消滅する。

こちらの速攻によって司令官が姿を消したことで、フードの男を囲んでいたガイコツ達の動きに乱れが生じる。

「雷よ!!」

「炎天よ、疾れ!!」

それを見た玉藻と朱乃姉が呪炎と雷撃で包囲の一角を崩すと、フードの男は獣のような速度で軀の檻から脱出する。

「誰だか知らねえが助かったぜ、アンザズ!!」

骸骨たちを視界に収める位置で振り返った男がフードから覗く口元に寧猛な笑みを浮かべながら手を横薙ぎに払うと、その軌跡の上に発生した炎が次々と文字を形作り、強大な炎弾に姿を変えて亡者達を焼き尽くした。

「大丈夫でしたか?」

手に残る魔力の残滓を払う男に声を掛けると、彼はゆっくりと被っていたフードを外した。

「礼を言うぜ、坊主。お前さんたちのお陰でヤバいところを切り抜けられた」

人好きのする笑みを浮かべた男の顔に俺は思わず目を見開いた。

「え……クールの兄貴か?」

そこにいたのは、俺が知っているものよりも多少落ち着きが増した感があるが、まぎれもなく美朱の仲間でありウチの居候2号であるクール・フリーンだった。

「ほう、俺をしってるのか。どっかの聖杯戦争で顔でも合したかね?」

「クール兄! どうしたの、その恰好!?いつもの槍と青い全身タイツは?」

「お前さん達が知ってるのは、ランサーとして呼び出された『俺』だな。

今の俺はキャスターのクラスで現界してるから槍は持ってないのさ。あとお嬢ちゃん、全身タイツはやめてくれ。あれでも正式な戦装束なんだからよ」

興奮して詰め寄る美朱に苦笑いで応えるクー・フリーン。

たしかにこのクー・フリーンは俺達が知っているクーの兄貴とは違うようだ。

クーの兄貴なら、今のやり取りでもっとキレのあるツツコミを入れている。

「しかし、ランサーだとキャスターだのつてのはなんなんだ。あんたはクー・フリーンじゃないのか?」

「あん? 何言ってるんだ、サーヴァントのクラスなんざ聖杯戦争じゃ基本だろうが。お前等、以前にランサーのクラスで俺を呼んだことがあるから、顔を見ただけで俺の真名を言い当てたんだろ」

「聖杯戦争? なんだそりゃ」

「うーん、朱姉知ってる?」

「いいえ、聞いた事も無いわ」

「ヴァーリ君は……いいや」

「おい!」

「親父はどうだ?」

「いや、私も聞いたことは無い」

「あ、私知ってますよ」

その言葉に視線が一斉に玉藻に向く。

そんな様を見ていたクー・フリーンが、何故か控えめに口を開いた。「あー……、なんかややこしい事情がありそうだな。取り敢えず、手え貸してもらった礼も兼ねて情報交換といかねえか?」

……よろしくお願いします。

さて、キャスター（こう呼べと言われた）の話によると、この冬木という街では『聖杯戦争』といわれる魔術儀式が行われていたらしい。

『聖杯戦争』とは、7人の魔術師が英霊を七つのクラスに当てはめて召喚した『サーヴァント』と呼ばれる特殊な使い魔を使い、最後の一人になるまで戦い続けるという、サバイバルバトルだそうだ。

因みにクラスというのは、剣士、弓兵、槍兵、騎兵、狂戦士、暗殺者、魔術師の7種で、精霊と同格といわれる英霊を呼び出す際にその負担を軽減する為に、クラスに呼び出す英霊の一側面を当てはめるのだそうだ。

例を上げれば、魔槍ゲイボルグとルーン魔術を使いこなす魔法戦士であるクー・フリーン。

その中で槍を使う戦士の一面を呼び出したのが俺達の知るクーの兄貴であり、ルーン魔術を操る魔術師の一側面を呼び出したのが、キャスターというわけだ。

「しかし、おかしいな。日本でここまで土地を汚染したら、天照様達が黙ってないんだが……」

こんな有様になるまで神や土着の妖怪などの介入が無いことに、俺は眉根を寄せる。

そもそも、一都市を丸ごと巻き込むような魔術儀式。

しかも過去の英雄を使った、こどく蠱毒みたいな無茶苦茶なものを天津神が見逃す訳がないのだ。

「あ？ 何言ってるんだ。神なんざみんな高次元に引っ込んで、地上のことになんか見向きもしねえだろが」

「いや、俺は昨日会ってるぞ。ダグザ様とかシヴァ様とか、あとかんせい閔聖帝君にも。なあ、ヴァーリ」

「ああ。自身の神話につけ、と言い寄って来てうつとおしかつたな」
未だにスカウトされてんのかい、お前。

証拠としてスマホの写真を見せてやると、キャスターの顔が思いつきり引き攣る。

「機械越しにこれだけの神秘の質と量を感じるとは……マジじゃねえか。どういう事だ、もうこの星には神霊はいねえはずだぞ？」

ふむ、ここは一つ事情が分かってそうな奴に説明してもらおうではないか。

という訳で、タマエモンよろしく。

「そんな狸のパチモンみたいなロボットを呼ぶみたいにな、言わないでくださいな」

プー、と頬を膨らましながらかも説明を始める玉藻。

えらく長々と話していたが、要約するとこの世界は俺達が生きている世界ではなく、数多ある平行世界の一つではないかという事。

なんでここに転移したのは解らないが、元々『無限の闘争』自体が数多の異世界・平行世界に縁を振り撒くモノなので、それが何か関係しているのではないかと推測していた。

どうも色々ややこしい事情が絡んでいるようだが、それはまあ『それはそれ、これはこれ』。

俺達の目標が『家に帰る事』であることに何の変りもない。

取り敢えず聞ける事情は全て聞いたようだし、例の山の中の魔力溜りに行く事にしよう。

「待ちな、坊主。行くなら俺もついて行ってやるよ」

「何ですよ？俺等はある等がやってるバトル・ロワイヤルの参加者じゃないぞ」

「実はな、今回の聖杯戦争は破綻してるんだよ」

さざりと吐き出された穏やかではない言葉に、自然と眉根が寄る。「破綻、ですか。それはこの地脈を汚染している穢れにも関係が？」

顔を陰しくした玉藻の問いにキャスターは首肯する。

「ああ。この冬木の聖杯は呪詛に汚染されていたのさ。こっちも詳しい事情は掴んじやいないが、今回呼び出されたサーヴァントの一騎、セイバーが聖杯を手に入れた事でその呪いが龍脈を通して拡散。俺を除くサーヴァントが反転・暴走して市民を虐殺しちまった所為で、この街は死の街になっちまった」

「成る程、我々が目的地としている山の中に聖杯があるのだな」

「そうだ。で、俺はそいつをぶっ壊したいわけだ」

「なんでだよ。あんたはその聖杯が欲しくてよびだされたんだろ？」

「生憎と俺はそんなものに興味はないのさ。俺は強い奴と命がけギリギリの戦いが出来ればよかった。だが、結果は御覧の通り、堅気の者を巻き込みまくって街一つをクソ溜めにしちまった。だったらせめて、関係者としてケジメくらいは付けねえとなあ」

真っ直ぐにこちらへ向けられたキャスターの目に、偽りの影は見え

ない。

ふむ、多少は違ってもクールの兄貴には変わりないって事か。

なら、同行しても問題ないだろう。

「いいだろう。この街の魔力の出所がその聖杯なら、破壊しなけりや俺達も帰れないみたいだしな。ただし、気を付けてくれよ。ウチの面子は俺を除いて常識外れな奴ばかりだから」

「どさくさ紛れになに言ってるのさ。悪魔超人改め完璧超人になったくせに」

「素手で龍を撲殺できる人に、常識外れとか言われるのはちよつと納得いかないわ……」

「すまんな、慎。いくら私でもこればかりは擁護できない」

「ご主人様。申し上げにくいのですが、神々から腕力で恐れられている時点で常識的ではないかと」

「面白い冗談だな、慎。お前ほど常識から足を踏み外した人間がいる訳ないじゃないか！」

……同行者全員からボロクソに言われてしまったでござる、解せぬ。

26話 『姫島家冬木見聞録2』

皆さん、こんばんわ。

厄介事の匂いしかしない謎の街、冬木を探索中の姫島美朱です。取り敢えず、キャスターことクー兄二号の先導で魔力溜まりがあるっていう山に向かっているんだけど、ゴーストタウンを歩くのはいい気がしない。

不思議世界に関わって長いと言っても私だって年頃の女の子、不気味な場所を歩けば不安の一つも感じるのである。

まあ、慎兄やヴァーリ君が一緒だから、レッドドラゴン程度が出てきても身の安全は保障されてるけどね。

二人がソロでリアルドラゴンスレイヤーするの見たことあるし。

パンチ一発で竜の顎が外れたり角が折れたりしたときは、思わず飲んでたチェリオ吹いたからなあ。

このメンツで命の危険を感じるのは、それこそマザーレギオンとかデストロイアでも出てこない限り無理だと思う。

そんな風に安心してている、私の戦闘力はサイバイマン。

この前、慎兄に氣の大きさが同じって言われたときはショックでふて寝してしまった。

ちなみにうちの長男の戦闘力は、この度めたむでたくフリーザ様（第一形態）の域に達したらしい。（ソースはピッコロさん）

いやあ、本当に慎兄に氣弾の才能が無くてよかったわ。

誤射で地球が惑星ベジータみたいになったら、シャレじやすまないところである。

どうでもいい事をつらつらと考えながら歩いていた私は、腰に下げた妖刀の柄ヒモの先に目をやった。

そこには少し前にマシユちゃんからもらった金平糖石こんぺいとういし（私命名）が、プラプラと揺れている。

クー兄二号が襲われていたシャドウマンを倒したときも同じものが出てきてたけど、もしかして今回の件と何か関係があるのかな。

こっちで拾った分は、慎兄が握りこんでコリコリ擦り合わせてたと

ころを没収しておいたけど。

まったく、自分の握力がどれだけあると思ってるんだか。

そんなこんなで街中を進むことしばし。

市街地を抜けて河川敷に差し掛かったところで、こちらの耳に鋼同士がぶつかる甲高い音が飛び込んできた。

川縁の方に目を向けてみると、誰かが争っているのが見える。

一人は鎌のような獲物を振るう妙齢の女性。

女性にしては高身長で、黒のボンテージのような衣装から見える肌は蠟人形を思わせるほどに白く、黒のフード越しにたなびく紫の髪も酷くくすんでいる。

一方、女性が振るう鎌の猛攻を盾を翳^{かき}して防いでいる少女は見覚えがあった。

マシユ・キリエライト。

『無限の闘争』で私が刃を交えた、シールドと呼ばれる盾を主体に闘う少女だ。

この世界に彼女がいるという事は、私達がここに来たのはあの時にもらった石が原因なのかな。

「ありやあランサーだ」

「ランサー?」

「今回の聖杯戦争で呼ばれたサーヴァントの一騎だ。あの様や土手に並んだ石化した人間を見る限り、奴も反転してるのは間違いないようだな」

キャスターの言葉と同時に、私はアスファルトを蹴った。

よく分からないが、敵という事だろう。

なら、こちらがやる事は一つだ。

風を切る音と共に宙を駆けながら、私は両手に集束した雷光をランサーと呼ばれた女性に向けて放つ。

こちらの手を離れて苦無の形となった紫電は、戦闘領域を封鎖するように張り巡らされた鎖の群の間を擦り抜けて、ランサーの顔面と喉元へ向けて加速する。

しかし敵も反転したとはいえ英霊の一人。

自身の身体に食らいつく寸前、その手の鎌を一閃させてプラズマブレードを打ち砕いた。

「何者ッ!？」

怒りに満ちたランサーの声と共に、周囲から闇色の鎖がこちらに向けて殺到する。

でも、その速度はこちらを捕らえるには到底足りない。

私は襲い掛かる鎖の群を空中での足場にすることで切り抜け、腰から妖刀を引き抜いてランサーに斬りかかる。

脳天を狙った一撃はランサーが間合いを取った為に空を切り、私はマシユちゃんのすぐ傍に、ランサーは結界のように張り巡らされた鎖の上に降り立つ。

「あの……貴女はいったい?」

「うーん……迷子の忍者かな」

自分でもどう言っているのか分からないので、なんともマネケな名乗りになってしまった。

慎兄曰く、『無限の闘争』の闘士はオリジナルとは別物らしい。(將軍様を見る限り、全部がそうではないみたいだけど)

マシユちゃんが憶えてくれていたら話が早いのだが、世の中そう上手くはいかないのだ。

「先輩、先輩! ニンジャです! 東洋の神秘ですよ!!」

「わっ!? マシユ、ちよつと落ち着いて!」

本物の忍者が珍しかったのか、テンション高くマシユちゃんは隣のオレンジの髪の子に話しかけた。

戦闘中にこんなにアクションが来るとは思ってたのか、先輩さんはタジタジになってマシユちゃんを宥めている。

……私の名乗りの所為でご迷惑をかけします。

「人間……いえ、混ざり物のようですね。多少の異能を引き継いでいるようですが、この程度で私に挑むとは無謀もいいところですね……!!」

空気が緩んだ隙を逃さない様に、此方の様子を見ていたランサーがその場で鎌を一振りすると、周囲を囲っている鎖が寄り集まって巨大

な杭となって四方からこちらに殺到する。

だが、それは私達を囲う様に降り注いだ落雷によってすべて打ち砕かれた。

「美朱、いきなり飛び出すのはやめなさい。心配するじゃないか」

焼け焦げた鎖を踏み砕いて降り立ったのはパパだ。

マシユちゃん達の視線はパパの背中にある黒い翼に釘付けになっている。

「慎兄達は？」

「キャスター君と共に石化された人達の解呪を試している。あの子は
大抵の呪いは、力技で何とかできるらしいからな」

神器の結界やら転生悪魔やらを解除できるんだからその認識は間違いないんだけど、肉弾戦だけじゃなくて呪術でもチートつてどうなんだろうか。

そりや便利って言えば便利だけど、これの所為でいらぬ苦労を背負ってるから、私としてはプラマイゼロって感じなのだ。

「しかし、随分と懐かしい顔を見たものだ。人間霊ならともかく、墮ちたる女神が相手ではお前の手には余るだろう。——ここは私に任せなさい」

そう言つて、パパは私達を庇う様に一步前が出る。

「あの人が誰か知ってるの？」

「ああ、墮天する前に見た事がある。ゴルゴン三姉妹の末妹、メドウスだ」

「メドウスサつて、髪の毛が蛇で石化の魔眼を持つってアレ？ でもそんな風には見えないけど」

「彼女は地中海地方の土着の女神であり、オリュンポスの一柱であるアテナから呪いを受けるまでは、ポセイドンに求愛されるほどの美貌を持つていたのだよ。まあ、己の首を刈り落としたハルペーを武器にしている理由までは解らないがね」

「妖魔、いえ墮天使ですか。かつての私を知つてるとは随分と古いモノのようですが、女性の秘密を一方的に暴くのは感心しませんね」

「これは失礼した。私の名はバラキエル、しがない墮天使の一人だよ」

「バラキエル。その名は『神の雷光』を示し、第一エノク書において人間の女性と交わることを誓い、ヘルモン山に集まった200人の天使たちの頭の1人とされている者ですね。騙りかたでなければ随分と大物が現れたものです。これも特異点故の事象でしょうか」

「パパエ……」

ランサーの言葉に私の視線は自然と冷たいモノになる。

アザゼルのおっちゃんて知ってたけど、パパまで墮天した理由が人間の女の人とニヤンニヤンする為だったなんて……。

年頃の娘には結構キツイ事実だよ、コレ。

「……美朱。泣きたくなるから、その視線は止めてくれないかな？」

背中越しに聞こえたちよっぴり鼻声になったパパの言葉に、私は見方を元に戻す。

今から闘うのに、身内がテンションを下げるのは流石に拙い。

「成る程。混ざり物と思っていましたが、墮天使との混血とは。ならばその娘は石にせず、生きたまま血を啜る事にしましょう」

「術式で制限された身でありながら、随分と大言を吐く。愛しい娘を狙うと言うのであれば、こちらも必勝の構えで行かねばならんな」

そう言ってパパが亜空間から取り出したのは、鋭く尖った金属片だ。

一点の曇りもなく磨き上げられ街灯の光で七色に光り輝くそれは、パパの放った雷光を柄にして一本の槍に姿を変える。

あれって槍の穂先だったのか。

「舐められたものですね。槍兵のクラスである私に、槍で挑むとは」「そちらを愚弄する気はない。言っただろう、必勝の構えで行くと」

鎖の上で鎌を突き付けるランサーに、パパはスタンスを広げて右手で槍を構える。

同時にランサーの表情が険しいモノへと変わる。

パパから感じた重圧はアザゼルのおっちゃんを超える物だったからだ。

『雷槍』のバラキエル、参る」

瞬間、舞い上げられた土と残骸になった鎖が宙を舞った。

高速の踏み込みから放たれたパパの刺突が、ランサーの足場ごと境界を形成していた鎖の群を吹き飛ばしたのだ。

寸でのところで飛び退いたランサーであったが、それで難を逃れた訳ではない。

瞬く間に間合いを詰めたパパの猛攻によって、防戦一方の状況に陥っているのだ。

相手の正中線を狙って放たれたパパの三段突き、寸でのところでそれを防いだランサーが力任せに鎌を横薙ぎに振るう。

しかし、その一撃はパパを捉えることは無い。

己が首を刈らんとする刃を身を沈めて躲すと同時に槍の間合いからさらに深く踏み込んだパパは、槍を反転させて下から上へと石突きを跳ね上げる。

「愚かな！ この間合いでは大ぶりの一撃など——ッ!?!」

ランサーの嘲りは肉を打つ鈍い音によって中断された。

堕ちたる女神の整った顎を跳ね上げた槍は、先程とは打って変わって短槍と同じ程度までその長さが縮んでいる。

……そっか、あの槍は穂先以外はパパの雷光で出来ているんだっ
た。

2、3歩たたらを踏んだ足に力を込めて、間合いを取ろうとするランサー。

「ぎゃうっ……!?!」

しかし飛び退くよりも速く、槍の穂先から放たれた雷光がその身体を捉える。

感電のショックで動きが止まったところに放たれる、心臓狙いの必殺の突き。

咄嗟に防ごうとランサーは鎌を持ち上げるが、疾走する穂先はまるで鎌の柄を避けるかのように、稲妻の軌跡を描いてランサーの腹部へと潜り込んだ。

「う……あ……っ!?! そんな……障害物を……避けるように……槍が形を変え——ッ!?!」

血と共にランサーの口から零れたか細い言葉は、傷口から上がった

甲高いスパーク音によって掻き消された。

「我が一撃を阻むもの無し」

吹き飛ばされ、全身から煙を上げるランサーを見下ろしながら、パパは稲妻の形に変形した槍を消して穂先をポケットに収める。

「サーヴァント、か。一側面とはいえ英霊を顕現させると聞いて警戒していたが、この程度ならば問題はあるまい」

いつの間にも手に入れていたのか、胸ポケットから取り出した煙草を啜って雷撃で火を点けるパパ。

『敵の生死も確かめなくて迂闊すぎる！』と注意しようとしたが、ランサーの周りに張られた高圧電流の檻を見て、私は出かかっていた言葉を飲み込んだ。

ていうか、パパってこんなに強かったんだ。

「坊主、お前の親父さんずいぶんとやるじゃねえか」

「実は俺も驚いてる」

「強い、というよりは巧いだな。今の戦いも詰め将棋を見るような感じだった」

各々感想を言いながら、慎兄とヴァーリ君、キャスターが土手からこちらに降りてくる。

思えば、私達ってパパが闘っているところ、見た事なかったんだよね。

この前もカテレアの眷属をネタ技で吹き飛ばしたただけだし。

「こちらは片付いた。そっちの方はどうだ？」

「こつちも問題なく終わったよ。少々厄介な呪詛だったけど、アメン・ラー様にかかってた奴に比べれば楽勝だった」

右手をプラプラと振るう慎兄を横目に、私はパパの元に足を運ぶ。「パパって槍も使うんだね。私、雷撃だけだと思ってた」

「本来の私の得物はこれだよ。お前達が生まれてからはほとんど戦場に立っていないからあまり知られていないが、大戦までは『雷槍』の異名で呼ばれていたからな」

「あれ？ 『雷光』じゃないの？」

『雷光』は大戦から時間が過ぎる間に、聖書の記述によって『雷槍』が

変化したものだ。グリゴリの古い連中は未だに『雷槍』と呼んでいるよ」

私の頭を撫でながら、はにかむ様にパパが笑う。

「けど、マジで強かったな。あれならアザゼルのおっちゃんより強いんじゃないか？」

「うむ、一対一なら私はアザゼルより実力は上だぞ」

「ホントに!？」

「ああ。アザゼルが総督になったのは、総合的に組織を纏める力に優れているからだ。こと戦闘力ならば、堕天使では私が最も高い」

驚く私達に、ドヤ顔で胸を張るパパ。

顔は似てないのに、その雰囲気は『無限の闘争』で試合に勝った慎兄そっくりである。

「あの……」

戸惑いがちに掛けられた声に振り向くと、マシユちゃんと先輩さんが立っていた

「えっと、大丈夫だった？」

笑顔で言葉を返すと、強張っていた二人の表情が少し解れる。

「助けて下さってありがとうございます。私はマシユ・キリエライト、こちらは先輩で私のマスターである藤丸立香さんです。あなた方はいったい……?」

「ええ、と……」

「済まないが、土手の上に連れを残しているから移動しても構わないかな? そちらもお連れさんがいるようだし、詳しい話はそこで」

先ほどもそうだったが、何て説明しようかと頭を捻っていると慎兄が代わりに答えてくれた。

此方の提案を受けて、二人が連れて来た高価そうな服を着た白髪の女性を見て、私は思わず眉根を寄せた。

「ねえ、慎兄」

「ああ」

私と同じことに気付いたのだろう、慎兄も真剣な表情のまま女性に視線を向けている。

あの人、死人だ。

魔力と瘴気が溢れるこの街の影響なのか、霊体が疑似的な肉体を形成している所為で現世に干渉しているみたいだけど、肉体と靈魂をつなぐ靈子線れいしせんが切れている以上、死んでるのは間違いない。

おそらく、本人には死んだ自覚が無いのだろう。

交通事故なんかで偶にいるのだ、死んだ事が分からないまま地縛霊や浮遊霊になるケースが。

「慎兄、この事をむこうに伝えるの？」

「いや、もう少し様子を見よう。同行者が護符を持つてるのか、それとも疑似的な肉体の作用かは分からないけど、彼女はこの街の穢れや瘴気の影響が少ない。その原因が分からないまま、死んだ事を自覚させるのは危険だ」

「うん。その所為で加護が消えたら、悪霊一直線だもんね」

「そういう事だ。伝えるなら浄化した場所、そして成仏させる準備ができてからだな」

小声での打ち合わせを終えた私達一行は土手の上へと移動した。

ちなみにランサーは致命傷ではなかったらしく、まだ生きている。

もつとも、弱っているところに慎兄に至近距離から氣当たりを浴びせられて、完全に氣絶してるが。

そこには石像だった人たちの姿は無く、待っていたのは朱姉と玉藻さんだけだった。

「あれ、石化した人たちを助けたんじゃないの？」

私の問いかけに朱姉は苦笑いを浮かべ、玉藻さんが不機嫌そうに頬を膨らませる。

「そうなんだけど、助けた人たちは錯乱してたみたいだね。意識を取り戻すと同時に、悲鳴を上げて散り散りに逃げちゃったの」

「まったく恩知らずな人達ですよ。あんな最高ランクの魔眼の呪詛を解いてやったのに、お礼の一つも言わないんですから」

「石にされるなんて、普通じゃ絶対あり得ない経験だもんな。そりやあテンパリもするさ」

慎兄は特に気にする様子もなく、屋根付きの休憩スペースのベンチ

に腰掛ける。

中央に置かれた木製の机の周りに置かれたベンチはかなりスペースがあり、私達はマシユちゃん達と向かい合う形で机を囲むことになった。

「それで、貴方達は何者なのかしら？」

先程の幽霊の人が口火を切る。

しかしこちらが勝手にした事と言っても、助けられて礼の一つもないとは。

『所長！ 我々はランサーから助けてもらった訳なんですから、お礼くらいは言うべきですよ！』

マシユちゃんの隣、誰もいない場所から声がしたと思ったら光の柱が立ち昇り、そこに男性のシルエットが映し出された。

年の頃は二十代後半かな？

緑の作業服に白衣を羽織った細身の男性で、優しそうな顔と緩いウェーブの掛かった燈色の髪を後頭部で結んでいるのが特徴だ。

『突然のところ失礼。僕はロマニ・アーキマン。人理継続保障機関カルデアの医療スタッフで、彼等三人のバックアップを担当している者です』

「ロマニ・アーキマンツ!! 得体の知れない連中の前で余計な事を言わないでちょうだい!!」

自己紹介をするロマニさんにむかって、ヒステリックに怒鳴る所長さん？

彼女の態度は無礼と言えば無礼なんだけど、なんか見るからに余裕が無さすぎて、怒る気にもならない。

「マシユちゃん、マシユちゃん」

「はい？」

所長さんがロマニさんに噛みついてる隙に、私は向かいに座っているマシユちゃんに声を掛ける。

「所長さんってすごく余裕が無いように見えるけど、大丈夫なの？」

「すみません、色々想定外の事が重なってまして。いつもは冷静な方なんですけど……」

「助けてもらったのにお礼の一つも言わないで、本当にごめんなさい」
咎めるつもりはまったくなかったのに、マシユちゃんや立香さんに謝られてしまった。

「いや、気にしないでくれ。この街の有様じゃ、敵か味方かもわからない奴を警戒するなって方が無理だろうから」

苦笑いを浮かべながら顔の前でパタパタと手を振る慎兄。

他のみんなも同じような顔をしているから、本気で不快に感じている人はいないだろう。

「そう言えば、自己紹介がまだだったな。俺は姫島慎。その忍者が妹の美朱で、こっちが姉の朱乃。白のスーツを着てるのが親父のバラキエル。あとは従業員のヴァーリと玉藻だ」

「ご丁寧にも。私は藤丸立香。横にるのが後輩のマシユ・キリエライト。あとドクターに突っかかっているのが上司のオルガマリー・アニムスファイアです」

あー、なんかバタバタしてて、こっちが自己紹介してなかったわ。「あの、サーヴァントを連れてきているみたいけど、皆は聖杯戦争に参加している魔術師なの？」

少しは警戒を解いてくれたのか、言葉を崩して立花さんがこちらに問いを投げてくる。

「ここにいるメンツで魔術師は……朱乃姉だけかな？」

「魔術師だっけ？ どっちかっていうと魔導士だよ」

「何を言ってるの、二人共。私は巫女でしょ」

「いやいや。朱姉、神職資格持ってないじゃん」

「巫女（バイト）だな」

「え？ 巫女さんの？」

奇異の目でこちらを見る立花さん。

その視線を受けて、改めてみんなの今の恰好を確認してみる。

慎兄（チンピラ空手家）

私（コスプレ忍者）

朱姉（季節外れのプリズムサマードレス）

パパ（どう見てもヤの付く自由業。もしくはマファイア）

ヴァーリ君（怪しいバイカー。髪型がモヒカンだったら世紀末ザコ）

玉藻さん（ピンクな和装美人）

……ダメだ、どう見ても不審者集団にしか見えない。

ぐぬぬ、所長さんの塩対応が正しく思えて来たぞう。

「この見た目だと信じてもらえないかもしれないけど、私とお兄ちゃんが日本神道の神官。お姉ちゃんは学生で、ヴァーリ君と玉藻さんが従業員。パパは現在求職中」

「……なんだか大変だね」

なぜか立花さんから同情の眼差しが……。

もしかして、父親がリストラ食らった貧乏一家みたいに見られてるのかな？

ウチはちゃんと長男が稼いでるし、貯金もいっぱいあるからね！

「えっと、本当に聖杯戦争のマスターではないのですか？」

「うん。その聖杯戦争っていうの、キャスターに聞いて初めて知ったし」

「では、キャスターを連れているのは？」

「敵集団に襲われてるところを助けたら、向こうから付いてきたんだ」

事もなげに出した慎兄の答えに、咄然となる二人。

英霊とはいえ、人間の延長ではないのだ。

多対一なら不利になるだろうし、ピンチに陥る事もあるだろう。

それを助けたくらいで、そんなに驚く事だろうか。

「あー、あれだ。魔術師の常識じゃあ、人間は英霊に逆立ちしても勝てないって事になってるんだよ。だから、お前さん達が俺を助けたって言うってもピンとこないのさ」

こちら側が首を捻っているのを見かねたキャスターが、補足説明を入れてくれる。

「そうなの？ でもさっきのランサーなら、慎兄やヴァーリ君だと片手で倒せると思うけど」

「お前等は真つ当な人間じゃねーだろうが」

失礼な。

横のリアル化け物二匹はともかく、私や朱姉は清く正しい女子高生だ。

「お前等三人はそこのおっさんの血を引いてるし、そのライダー姿の坊主は別の混血。女狐にいたっては神の分霊じゃねーか」

ふむ、そう言われると返す言葉が無い。

子供の頃から人間の方が少なかったから、その辺はまったく気にならなかった。

『そうだ、ミスター』

「私の事かな？」

なんとか所長の追及をかわしたロマニさんが、パパに声を掛ける。

『はい。貴方は本当に聖書に記された墮天使、バラキエルなのですか？』

「その通りだが、厳密に言えばそうではない」

『？ それはどういう事でしょう』

「私はこの世界のバラキエルではなく近い別の世界、いわゆる平行世界の存在だという事だ」

パパの答えにロマニさんと所長が息を飲んだ。

『それは、本当なのでしょうか』

「事実だ。キャスター君から聞いた情報では、この世界は神仏に見捨てられ、日に日に神秘が薄れていると言うのではないか。そんな世界で墮天使である私が人界に生きて子を作るなど、矛盾していると思わないかね？」

『確かに……。では、何故この世界に？』

「自らの意思で赴いたわけではない。自宅で休息を取っていたところ、気づけばこの街にいた。故に我々の目的は、己の世界に帰る事なのだ」

「平行世界移動……。第二魔法の領域じゃない」

頭を抱えてブツブツと呟く所長さんを他所に、話を進めるロマニさんとパパ。

あ、なんか一緒に魔力だまりに行くことになったみたい。

「マシユちゃん。所長さんを通さずに話が決まったけど、もしかして

お飾りなの？」

「い、いえ。そんなことは……」

私の質問に目を逸らして言葉を濁すマシユちゃん。

あれ、地雷踏んだ？

◇

パパとD r. ロマン（ロマニさんの事だ）の話し合いで、マシユちゃんを初めとする『カルデア』の人達と同行することになりました。（頭を抱えている内に決まった所為か、事後報告を受けた所長さんは怒っていた）

それに伴って、私達はD r. ロマンとモナリザそっくりな美人さんであるダヴィンチちゃんから、極力解り易くカルデアについての説明を受けたんだ。

それによると、『カルデア』は魔術と科学の双方のアプローチを行いながら人類の未来を観測する機関だったんだけど、ある日突然、延々と続いていく筈の人類の未来が2016年で途絶えてしまったらしい。

全力で調査によって原因がこの『2004年の冬木市』にある事を突き止めた彼らは、『レイシフト』と呼ばれる方法で原因究明と人理修復の為に精鋭を送り込もうとした。

ところが、その矢先にレイシフトの重要施設で爆弾テロが起こって、実働班の殆どが死傷。

さらには事故によって、素人同然のマスターである立香さんとマシユちゃん、そして総責任者であった所長さんだけが現場に転移してしまつたらしい。（多分この時に所長さんは死んだのだろう）

冬木市内にバラバラに転移したものの、運よく誰も命を落とすことなく合流することが出来た三人。

デミ・サーヴァントであるマシユちゃんを頼りに何とか行軍していたんだけど、そこに先ほどのランサーが襲来。

劣勢に立たされたところで私達と出会つたんだって。

この説明の後で私達が元の世界に帰る方法を聞いたところ、人理修復が滞りなく行われれば本来の歴史にとつての異物は排除され、元の世界に戻ると言われた。

「それで、さつき手に入れた金平糖石で俺達に英霊を召喚しろって?」
『コンペイトウイシって……聖晶石だよ、セイショウセキ。君達の実力を疑う訳じゃないけど、戦力は多いに越したことは無いからね』

手の中で虹色に光る聖晶石を見ながら首を傾げる私に、Dr. ロマンは苦笑いで訂正を掛けてくる。

「けど、それって適性があるんじゃないの? 私も慎兄も魔術師じゃないよ」

『その通り。本来なら適性の有る立香ちゃんに頼むところなんだけど、現在の彼女はマシユ一人で精一杯な状況だ。これ以上は素人である彼女にとって負担になってしまう』

Dr. ロマンの言葉に、立香さんとマシユちゃんは申し訳なさそうに頭を下げる。

『そこで白羽が立ったのが君達だ。バラキエル氏の子供である君達なら、もしかしたら適性があるかもしれないからね』

「ダメ元でやってみろって事か」
『そういう事』

ダヴィンチちゃんは軽く言うが、慎兄は乗り気では無いようだ。
「もし成功してサーヴァントが出てきたら、管理は誰になるんだ? このヤマを解決したら俺達は元の世界に帰るから、その時に連れて行って言われても困るんだけど」

「あー、それがあるか。玉藻さんやクー兄の時、手続きとかすんごい面倒だったからねえ」

あの時は本当にひどかった。
姫島のお爺様に玉藻さんというはさんの戸籍をなんとかしてもらったり、クー兄関連でダーナ神族と身柄の交渉したりと、学校に行く暇もなく駆けずり回ったものだ。

今の慎兄は無限の一柱としてフリーな立場にいるから、ある程度融通は利くだろうけど、それでも厄介事には変わりない。

『通常は召喚者がマスターになるから、呼び出された英霊は君達に従う事になる。もつとも、英霊を維持する魔力はカルデアが担っているから、その特異点の修復が終わればマスター権限は立香ちゃんに譲渡してもらおうけどね』

「つまり、今回だけのピンチヒッターってワケか」

『その通りだ。協力してくれる代償として、我々も全力で君達の帰還についてバックアップをさせてもらおうよ』

「どうする、慎兄？」

「まあ、向こうが責任を持ってくれるならやってもいいだろ。戦力がいて困ることは無いし、敵は反転した英雄だからな。もしかしたら『キノコ狩りの男』とか『ロトの勇者』とか、『クリプトン星から来た宇宙人』なんかが出てくるかもしれないだろ」

『無限の闘争』じゃないんだから、そんなの出てくるわけないじゃん」
っていうか、『キノコ狩りの男』ってなにさ。

それと、最後の人が出てきてたら、地球在住の英霊じゃ絶対勝てないからね。

トンデモなくズレた英雄像を上げながら、慎兄がマシユちゃんが地面に置いた盾に聖晶石を落とす。

ぶつつけ本番なこの試みを受けるにあたっての条件で、慎兄が一番手をする事になっているのだ。

すると盾の上を跳ねた石は溶けるように無くなり、代わりに光で描かれた立体魔法陣が浮かび上がる。

『召喚陣が起動した。さあ、詠唱を始めるんだ』

Dr. ロマンが慎兄に呪文を促すけど、当の本人は顔を引き攣らせるだけで口を開こうとしない。

もしかして、呪文忘れた？

「つ……つ……えーと、なんだっけ？」

『ええ!? さっき見せたばかりじゃないか!』

あちゃー、やっぱり。

「あんなクソ長い厨二文章、一発で憶えられるか!？」

『色んな方面に怒られるから厨二とか言うのやめて!? 　　』
　　というか召喚

は始まっているのにどうすんの、これ!?!」

パニックるドクターの声に、一層輝きを増す召喚陣。

こんなんで失敗したら、格好が悪すぎるよ!

「ああもう……!?! 出て来いやあ!!」

慎兄がヤケクソ気味に叫ぶと同時に召喚陣から目も眩むほどの光が溢れ、それが収まった後には巫女装束を着た朱乃姉にそっくりな女の子が……て、あれ?

「慎、美朱、それに朱乃まで……。 どういう事かしら。私、慎の守護霊になってたはずなのに」

困惑の表情で、確かめるように自身の身体に触れる女性。

「マジかよ……」

呼び出した慎兄は、呆然としたまま言葉を零す。

きっと私も同じような顔をしているのだろう。

だって、忘れるわけがない。

あの顔、あの姿……。

私達を庇って亡くなった時のままなんだから。

「朱璃……なのか……?」

まるで夢遊病者のように頼りない足取りで、女性に近づいていくパパ。

「あなた……」

継るような表情を浮かべるパパに女性、いやママは私達の思い出の中と同じ笑顔で笑いかける。

「朱璃いいいいいいっ!!」

感極まって走り出すパパと、手を広げてそれを待つママ。

これは感動の抱擁ほうようかつ! と思われたその時——

「ごおの……ダメ亭主っ!!」

「ぶべらっっ!!」

ママが放った顎をすくい上げるような拳に、パパがもんどり打って倒れた。

「おおっ! スマッシュだ!! シフトウエイトまで完璧じゃねえか!!」

慎兄、驚くところはそこじゃない。

いきなりの急展開に一同が動けない中、何故か女座りで頬を押さえるパパにママは指を突きつける。

……ママを見上げるパパの顔が真っ赤だったり、興奮で息が荒かったり、ましてやヨダレを垂らしそうでR指定な表情だったなんて事はない。

……ないっいたらない!!

「私が亡くなった後、子供達を手放したのはどういう見だったんですか!!」

「そ……それは、朱乃に拒絶されたから。あの時の朱乃は精神的に不安定だったし、嫌悪の対象である私がいたら、悪影響が出ると思ってた……」

「だからといって、十にもならない子供達を育児放棄する人がいますか!?! あの時、精神的に不安定だったのは、朱乃だけではありません! 慎や美朱もそうだったに決まってるでしょう!!」

「う……むう」

「その所為で、美朱は目上の人への甘え癖が付いたし、慎はあり得ないくらい強さに執着するようになってしまった! あなたはこの子がどんな修業をしているか知ってるんですか?!」

自分が死んだ後の私達の事を知っているのだろう、怒り心頭でパパを責め立てるママ。

というか、明らかに聞き捨てならないセリフがあったぞ。

「ねえ、ママ」

「なにかしら、美朱」

まるで阿修羅マンのように、怒りの表情から笑顔に変わったママに軽く圧倒されてしまう。

しかし、ここでの撤退は許可できない。

ちゃんと訊くべき事は訊かないと。

「慎兄の守護霊やってたって言ってたけど、もしかして『無限の闘争』での修業も見てたの?」

「ええ。あの子が化け物とか神とか、神以上のナニカと闘って死にま

くったのも、しつかり見てたわ」

「数々の親不孝！ すんませんっしたああつ!!」

ママの衝撃発言に、全力で地面に額を叩きつける慎兄。

知らなかったとは言え、親に自分の死に様を見せつけまくったワケだからねえ。

そりゃあ、土下座の一つもしたくなるわ。

あと、地面に頭突きした勢いで土手の一角が崩れたのは、無視の方
向で。

うん、私？ 私も何回かは死んでるけど、慎兄の守護霊やってたら
しいから私の死に様は見えないでしょ。

だったら、ノーカンノーカン。

「ねえ、美朱」

ウチの男衆の謝罪大会を見ていると、えらく微妙な表情をした朱姉
が声を掛けてきた。

「どしたの？」

「私、母様を見た時は泣くほど嬉しかったの。でも、これって再会を喜
べる雰囲気じゃないわよね」

「ママが落ち着くまで待つしかないんじゃない。カルデアの人達も、
完全に置いてけぼりだし」

横目であんぐりと口を開けている所長達を見ながら、私は軽く溜息
をついた。

あれから静観する事10分ほど。

ようやくママの気も済んだので、事情を聞く事に相成った。

さて、やはりと言うか何と言うか、ママは英霊ではなかった。

困った時のタマエモンこと玉藻さんの鑑定結果では、今のママは精
霊になっているらしい。

言うまでもないが、人霊が精霊になるなんて普通は無理。

それは朱雀の加護を受けた姫島の人間でも変わりはない。

では、何故ママがそうなったかと言えば、原因は慎兄である。

話はママが命を落とした10年前さかのぼに遡る。

姫島の刺客に致命傷を負わされたママは、最後の力を振り絞って瀕

死の慎兄を助けようとした。

それは姫島宗家に伝わる秘術で、自身の魂魄を生命力に変換して対象に吹き込むというものだった。

しかし、己が窮地を力業でねじ伏せるのに定評がある慎兄。

その理不尽さは幼い時から健在で、幽体離脱したママが術を発動させる前に、トワイライト・ヒーリング聖母の微笑を覚醒させて自力で回復してしまったのだ。

この状況に困ったのはママだ。

息子が助かったのはいいが、自身は術の為に慎兄の身体の中に入って霊的パスも繋げてしまっている。

親子であり産んで五年しか経ってないためか、パスが予想以上に強固に繋がってしまい、慎兄の中から出れなくなったそうだ。

仕方が無いので、当時の守護霊(三代前の姫島家当主だったらしい)に事情を説明し、その役目を交代してもらったんだそう。

こうして慎兄と一心共同体になったママだが、予想外の事態は止まる事を知らない。

着々と人間を辞め、人外すら超えていく慎兄と、それに伴って増加するパスを通して流れ込む氣。

さらには駒落としての法を使用するようになった為、その余波で守護霊であるママの魂魄も浄化・研鑽されるようになった。

そしてダメ押しは、オーフィス戦とヴァーリ君との喧嘩で、莫大な量の氣を消費した事である。

当時世界最強だった龍神やそれを超える相手と闘った際の氣だ。

いくら親子で親和性があると言っても、そんな氣の奔流を浴びては人間霊では一溜まりもない。

普通なら飽和状態で靈基が崩壊して魂魄が消滅するところなのだが、それを阻んだのも慎兄の特性『無限の進化』だった。

駒王会議の折りに見せたヴァーリ君の超進化よろしく、流れ込む氣はママを人霊から精霊へと進化させてしまったのだ。

次に『どうして今回の召喚で出てきたのか』だが、玉藻さんの推測では『慎兄の進化のスピードについていけないと本能的に悟った為に、召喚式を利用して現世に逃げてきたのでは』とのこと。

召喚されたママは、めでたくと言うか無事と言うか、慎兄とのパスは切れているらしい。

それだと慎兄に守護霊がないことになるのだが、ここまで強くなればもう必要ないらしい。

突発的に発生した姫島家家族会議も終わりを迎え、ママに甘える朱姉にホッコリしていた私は、召喚陣の隅に人影を見つけた。

地面に片膝を付いて微動だにしないその影は、体の線が出るようなぴっちりとした緑の装束に身を包んだ、右目下の泣き黒子が印象的なイケメンだった。

足元にある朱の長槍と黄色の短槍は、彼の得物なのだろう。

「えっと、そこのお兄さん。もしかして、あなたも呼び出された人ですか?」

「はい。ですが、そちらの御婦人がマスターと知己のようなので、話が済むまで控えてました」

なんと、ママと一緒に出てきてから、ずっとスタンバっていたらしい。

「あの、ご免なさい。ずっとほったらかしにしちゃって」

「いえ、お気になさらずに。ご母堂との再会であるならば、他者が水を差すのは無粋というものです。ところで、貴女は私を見て平気なのでしょうか?」

突然の問いかけに、私は思わず目を目を瞬しばたいてしまう。

「えと、別になんともありませんけど……」

「そうですか。……よかったです」

あからさまにホツとするお兄さんに首を傾かしげていると、こっちの様子を見て取った慎兄が戻って来た。

「こちらから呼び出しておいて申し訳ない。自分が今回の召喚術の責任者です」

「頭を上げていただきたい。という事は貴方が私の主なのですね」

「あー、術式上はそうなるみたいですね」

「そうですか。ならば——」

珍しく自信なきげな表情で返した慎兄の答えを受けて、お兄さんは

居住まいを正した。

「フィオナ騎士団が一番槍、デイルムツド・オディナ、推参致しました。これより貴方に仕えるサーヴァントとなります」

騎士の礼なのだろう、跪いて頭を下げるデイルムツドさん。

対する慎兄は『またケルトか……』と天を仰いでいた。

あ、この人ってクー兄と同じケルト系の英雄なんだ。

『デイルムツド・オディナ。フィニアンサイクルで語られるフィン・マックールの臣下で、フィオナ騎士団最強の騎士だね。伝承では二剣二槍を巧みに操る戦士と言われているけど、今回は槍兵として召喚されているから武器は槍だけなのかな』

『彼は優秀な戦士だけど、女性は注意した方が良いでしょうね。彼は愛の黒子と言われる魅了効果を持つ泣き黒子があつたはずだ』

ドクターとダヴィンチちゃんの説明を聞いて、ようやく先ほどのデイルムツドさんの質問に合点がいった。

なるほど、彼は私が魅了に掛かってないかを心配したのか。

「呪いの類だったら、解呪の氣を込めた絆創膏でも貼つとくか。こっちの面子って女性率多いし。藤丸嬢とかヤバいだろ」

『そんな事できるのかい?』

「これでも現役の神職なんで。解呪やお祓いはお手の物だよ」

『バラキエル氏の息子なのに日本の神官とはねえ』

「色々あつてね。オディナ卿もそれでいいかな?」

「この黒子の効果を打ち消せるのであれば、是非。それと私の事は呼び捨てで結構です」

「了解。そんじや祓え給い、清め給えつと」

どこからかボクサーなんかが貼る白い絆創膏を取り出すと、祝詞を唱えてデイルムツドさんの泣き黒子の上に貼り付ける慎兄。

あんな手抜きの祓詞なのに効果があるんだから、チートって言われなくても仕方ないと思う。

「おや、不埒ふらちな黒子を封じてしまったのですねえ」

「玉藻か。お袋はどうだった?」

「魂魄もすっかり精霊の物に変化していましたし、霊基のほうも綻び

は見受けられませんでした。おおむね、問題はないかと」

玉藻さんの答えに私達はホッと胸を撫で下ろした。

いくら慎兄の非常識パワーでも悪影響があるんじゃないかと心配していたが、大丈夫だったらしい。

「サンキューな、玉藻」

「いえいえ。ところで、先程の召喚は上手くいきましたか？」

「俺も初めてなんで何とも言えんが、多分大丈夫だと思う。ディルムッドはどうだ。なにか変なところは無いか？」

「はい。魔力とは少し違うようですが、十全な戦働きが出るほどの供給は行われています」

『あー、あんな適当な方法でイケるんだ……』

『召喚とパスは正常か。では、令呪のほうはどうかかな？』

「たしか、三回使える絶対命令権だったっけ。身体に浮き出るって聞いたけど、それらしきものは無いみたいだ」

ダヴィンチちゃん言葉に慎兄が身体を確認していると、玉藻さんが呪符を片手に慎兄に近づいていく。

「ご主人様、ちよつと失礼しますね」

玉藻さんは淡く光る符を手に、慎兄の正中線を触れるギリギリの近さでなぞっていく。

「今回の召喚、ご主人様が魔術師ではない所為で、正規の物とは違ってあるみたいです。魔術回路に繋がるはずのパスも氣脈に行ってますし、供給されているのも氣のようです。令呪が無いのもその影響だと思えますよ」

「うん？ 英霊の存在維持に必要なエネルギーはカルデアが負担するって話だったんだが、俺の方から持つていつてるの？」

「そのようです。そも、ご主人様には魔力を生み出す機関がございませんで、それを補填する為にこうなったのでしよう」

「それって、なんか問題あるか？」

「英霊召喚は専門外ですから正確なところは解りませんが、機能的には問題ないかと。言ってみれば、美朱さんと青ランサーさんのような形ですね。他にあるとしたら、ご主人様の負担の度合いでしょうか」

「なら問題ないな」

『いやいや、大ありだよ！ 君個人で現界のエネルギーを担ってたら、マスター権限の譲渡ができないかも知れないし、何より令呪はサーヴァントの反乱を抑える安全機構としての役割もあるんだよ!!』

「そうよ！ 裏切られでもしたらどうするつもりよ！」

軽い調子で流そうとする慎兄に詰め寄るドクターと所長。

「というか、やっと再起動したんだね、所長さん。」

「いや、そういう事を本人の前で言っちゃあダメだろ」

「ごもつとも。」

デイルムツドさんも心外なのだろう、不満そうな顔をしている。

聞いた話では、これから立香さんを中心にして多くの英霊と契約しなきゃならないはずなのに、こんな調子で大丈夫だろうか。

「あのなあ。人付き合いつていうのは、相手を信じようとしなけりや始まんないんだぞ。最初から疑ってかかってたら、良好な人間関係なんてできるワケないだろ」

「うるさいわね！ 私にはレフがいるからいいのよ!!」

『僕にはマジ☆マリがいるから……』

『天才とは凡人には理解されない孤高な存在なんだよ』

慎兄の言葉に思うところがあるのか、目を逸らしながら聞いてもない事を口走るカルデア首脳陣。

あんたら、みんなコミュ障じゃないか。

ホントに大丈夫なの、カルデア？

この後も所長達の追求が続いたが、慎兄が『万が一裏切ったなら、俺がシバキ倒す』と、玄武剛弾で付近の廃ビル一つを吹き飛ばして見せた事で収まった。

あとコミュ障なのは首脳陣だけらしく、立香さんはリアル友達100人なりア充らしいです。

さて、英霊召喚2発目は朱姉である。

ひとしきりママに甘えたのが功を奏したのか、泣き腫らした目は赤いものの当人はやる気に溢れている。

『慎君の召喚はイレギュラーが山の様にあつたから個人的には中止し

「——告げる。汝の身は我が下に、我が命運は汝の剣に。聖杯の寄るべに従い、この意、この理に従うならば応えよ」

吹き上がるエーテルの中に三つの輪が浮かび、その光は黄金に変わる。

「マシユ、これって凄い英霊が来る感じなのかな？」

「はい、先輩。これなら力の有る英霊が来てくれるかもしれませんよ」

期待に表情を輝かせる立香さんとマシユちゃん。

ふむ、なんだかこっちも楽しみになって来たぞ。

「誓いを此処に。我は常世総ての善と成る者、我は常世総ての悪を敷く者。汝三大の言霊を纏う七天、抑止の輪より来たれ、天秤の守り手よ——！」

朱姉が最後の一節を言い放つと魔法陣は一層強い光を放ち、立ち昇る金色の柱の中心に剣を構えた騎士の意匠が刻まれたカードが現れる。

そして、カードが光を放った後、そこにいたのは金の髪を黒いリボンで後ろで結び上げ、白と銀の甲冑に黄金の剣を携えた少女剣士だった。

「はじめまして、マスター。まだ半人前の剣士なので、セイバー・リイとお呼びください。これから、末永くよろしくお願いします」

朱姉の前に歩み出て、セイバー・リイ名乗った少女騎士は笑顔でペコリと頭を下げる。

「私は姫島朱乃です。こちらこそ、よろしくお願いしますね」

「はい！」

笑顔で朱姉が差し出した手を嬉しそうに握るリイちゃん。

「あれってご先祖ちゃんだよな。けど、それにしても覇気が足りないみたいだけど……」

「あれは騎士王か？　だが、以前見た時より幼く見えるが……」

リイちゃんを見ながら首を捻る慎兄主従。

「どうやら彼女に心当たりがあるらしい。」

「慎兄。あの子の事、知ってるの？」

「なんか雰囲気が違うからいまいち自信は無いんだけど、多分『無限の

闘争』にいるご先祖ちゃん。ほら、ヴァーリのツレにアーサーいたろ？ あいつの平行世界の祖先だったと思う。たしか……名前はアルトリア・ペンドラゴンって言ったっけか」

しきりに首を捻りながら慎兄が言葉を絞り出していると、朱姉を引き連れてリリイちゃんがこちらに歩いてきた。

「あの！ マスターの弟さんは未来の私の事を知っているのでしょうか？」

「俺の知り合いにアーサー王の子孫がいてな、そいつに稽古をつけてた縁でチョコチョコつとな」

「私の子孫まで！ 一度会ってみたいです!!」

もの凄くうれしそうな顔をするリリイちゃんに、慎兄は気拙そうに目を逸らした。

あ、そうか……。

子孫のアーサーさんって、王様っていうより剣の道に命をかける人だもんね。

あと、ルフエイちゃんからウザがられるくらいのシスコンだし。

「ふん、どうやら召喚とやらは終わったようだな」

声に振り返ると、さつき倒したランサーを引きずるヴァーリ君を先頭に、パパとママがこちらに歩いてきていた。

その姿を見たリリイちゃんは、怯えた表情で朱姉の後ろへ隠れてしまふ。

「どうしたの、リリイ?」

「すみません、マスター。彼の姿を見た途端、すごく怖くなってしまつて……」

「ああ、そうか。アーサー王はブリテンの赤い竜、ドライグの加護を受けてるから、そのライバルでサクソン人の象徴だった白い竜、アルビオンとは相性が悪いんだな」

「主よ、あの少年は白い竜の加護を受けているのですか?」

「いや、白竜の魂を宿した神器を持ってるんだ。前に覇龍を極めたから、あいつ＝アルビオンみたいになってるんじゃないか?」

『なんだって！ じゃあ彼は白い竜の化身ってことなのかい!?!』

「ま、似た様なもんだな」

驚くドクターに適当な言葉ではぐらかす慎兄。

本当はそれに魔王ルシファアの子孫で、人間と悪魔の混血って事まで付いてくるし。

こう考えると、ヴァーリ君も設定てんこ盛りだよな。

「なら、この娘はヴァーリ君に近づけない方がいいわね」

「そうだな。頼むわ、朱乃姉」

そう言うと、慎兄はヴァーリ君達の方に歩いていく。

見ていると、気絶したランサーに何かをするみたいだ。

ふむ、おもしろそうだから見に行ってみるか。

「朱姉。私も行ってくるからリリイちゃん達の事、お願いね」

「ええ、気を付けてね」

マシユちゃん達とコミュニケーションを取っているリリイちゃんの様子を確認してから、慎兄達のところに行ってみる。

すると、慎兄はベンチの上にランサーを寝かせてその額に手を当てていた。

「慎兄、なにしてんの？」

「ああ。神救いの法の練度上昇の一環で、ランサーの汚染を解こうと思ってるな」

……またとんでもない事を言いだしたぞ。

「おいおい、本当にそんな事できるのか？ 聖杯を元にした呪いだぞ。人間一人にどうこうできるほど、ヤワなもんじゃねーだろ」

「問題ない。神様を墜とす呪いに比べれば軽いもんだ」

言いながらランサーに氣を送り込む慎兄。

「ヴァーリ君。術が始まったから、邪魔が入らない様に警戒しよう」

「いいだろう」

慎兄の紡ぐ大祓の祝詞を聞きながら周りを警戒する事しばし。

術が終わったと声を掛けられたので振り返ってみると、難しい顔をした慎兄がベンチを見下ろしている。

「美朱よ、俺は知らない内にセト神の暗示のスタンド能力に目覚めていたらしい」

いきなりの物言いに首を傾げながらベンチに目を向けてみると、妙齢な美女であったランサーが十歳くらいの女の子になっていた。

「いつの間にアレツシーから能力を奪ったのか、詳しく聞こうじゃないか」

「絶望オオオだねッ！」

「おいやめろ」

荒木先生風な濃い顔になった慎兄にツツコミを入れておく。

「どうか、声はアニメ版かい。」

「しかしどうなってるんだ、こりやあ。坊主、お前さん若返りの秘術でも身に着けてたのか？」

「怪我を治して浄化しただけだったの。しかし、こんな事になるとは、この俺の目をもってしても見抜けなんだわ!!」

「そんな世紀末的な劇画調で言っても誤魔化されないからね。どうするのさ、これ」

ランサーが起きたらブチキレられそうなんだけど。

「というか、あの胸部装甲が大平原になるとか、私だったら絶対に許さん。」

『無限の闘争』が使えれば、プロシユート兄貴と闘って『ザ・グレイトフル・デッド』の能力を修得するんだがなあ」

「それが使えるんだったら、とつとと帰ってるよね」

「まあな。という訳で、目覚めたらお袋にやった『華山岩碎かざんがんさいいどげざ土下座』を超える『ゴッド土下座』で謝るしかあるまい」

「……どんな土下座なの、それ」

アホなやり取りを行っている、小さく呻いてランサーが目覚ました。

「聖杯からの呪詛を感じない。それにこの身体は……」

やはり幼くなった身体に違和感があるのだろうか、全身を確かめるように触れながらランサーは困惑の声を上げる。

「そちらに掛かった呪いを解こうと思ったら、そうやってしまいました。本当に申し訳ありません」

地面に両膝を付き居住まいを正した慎兄は、もの凄く丁寧な所作で

深々と頭を下げる。

多分、これが『ゴッド土下座』なんだろう。

奇をてらってアクロバティックな動きをするかと思ったら、王道を行く正統派の土下座だった。

……うん、土下座をする前に謎の技名が掛かれたリールが回っていたことや、何処からともなく片言で『オネガイシマース』って声がしたのは無視しよう。

「顔を上げてください。敗北した私の命を留めただけでなく、この身を蝕む呪いを解いてくれたのです。感謝はしても謝罪される謂れはありません」

「ですが、身体が……」

「問題ありません。むしろ、この身体になったのは喜ばしい。本当にありがとうございます」

困惑する慎兄に、ペコリと頭を下げるランサー。

「どうやら彼女は幼い身体がお好きらしい。」

「日々己が身体の貧困さに悩む私には、理解できない感覚だ。」

「イラナイノナラ、ソノチチヲココセ……!!」

「……どうやら呪いが解けた事で、聖杯からのバックアップも途切れただようですね。私を使役していたマスターも亡くなっていますし……どうでしょう。恩返しという意味も込めて、貴方のサーヴァントとして契約してくれませんか?」

「俺の?」

「はい」

「けど、俺は魔術師じゃないし魔力もないぞ」

「大丈夫。その溢れる生命力を頂ければ、サーヴァントとしての働きは可能です」

突然の申し出に腕を組んで思索する慎兄。

「デイルムツドさんは慎兄の決定に任せるつもりなのか、背後に控えて口を開こうとしない。」

「慎。こんな小さな女の子が言ってるんだから、手を貸してあげたら?」

「朱璃の言う通りだ。解呪の訓練の為とはいえ、彼女を生け捕りにしたいと言ったのはお前だろう。助けた以上は責任を持ちなさい」

「パパ、どういう事?」

「お前が飛び出した時に頼まれたんだよ。聖書の神によって墮とされた神の救助依頼が来そうだから、解呪の訓練の為に彼女を生け捕りにしてくれと」

「なるほど、そうだったんだ」

「パパの説明に頷く私。」

え、モルモットにした事を責めないのかつて? するわけないじゃん。

こっちは正義の味方でもボラインティアでもないんだから、助ける以上は利を求めるのは当然だし。

それに、アメン・ラー様を復活させた事で神様達に目を付けられる慎兄が、術の精度を高めるために臨床件数を増やしたいって思うのは当たり前だもん。

万が一失敗したら、場合に寄っては依頼した神話勢力が敵に回るんだ。

そりゃあ、チャンスがあったらやろうとするよ。

「聞いた通り、俺が君を助けたのは自分の利の為だ。それでも契約を求めるのか?」

「構いません。無償で助けられるより、こっちの方が信用できます。それに、勝算はあったのでしょ?」

私達の話聞いてもブレないランサーの視線に、ため息交じりに肯定の返事を返す慎兄。

「そこまで言うなら、こっちもケジメも付けなきゃならんか。わかっただ、どうすればいい?」

「あなたの血液をください」

「よし、ならば俺が手伝ってやろう! ジェノサイド・カッター!!」
突如話に割り込んできて、慎兄を蹴り飛ばすヴァーリ君。

あ、慎兄の胸の古傷が開いた。

「これだけ血があれば問題無かろう! さあ、思う存分使うがいい!!」

あまりのトンでも展開に啞然としたままのランサー。
その間に受け身を取った慎兄がゆつくりと立ち上がる。

「おい、馬鹿。なんのつもりだ？」

「暇だったから、話の流れに乗って喧嘩を売ってみた」

「ははは。——死ぬがよい」

慎兄のクロス笑みから始まる大喧嘩。

覇龍も界王拳も使っていないからお互い本気じゃないんだろうけど、それでも余波で川沿いにあった町並みが更地になりました。

ここがゴーストタウンになってるから良かったものの、人が住んでたら二人は完全にテロリストである。

この程度は私達には慣れたものだったけど、その様子を目の当たりにした新規メンバーとカルデア職員の動揺は凄かった。

所長は『こんなものあり得ないわあああ!? レフ！ 助けて、レフううううっ!!』て叫びながら錯乱するし、立香さんとマシユちゃんもは呆然と口を開けていた。

リリイちゃんは禁手化したヴァーリ君に怯えて頭を抱え、ランサーも腰を抜かしてペタリと座りこんでしまった。

例外はキャスターとデイルムツドさんで、二人共目を輝かせながら観戦していました。

余談だけど、ランサーとの契約は無事に結べました。

本人は首から吸いたかったそうですが、喧嘩から帰って来た慎兄は全身が土やらぶっ壊した建物の粉塵やらでドロドロだったため、泣く泣く諦めたそうです。

まったく、こんな調子で私達は帰れるのかな……。

27話 『姫島家冬木見聞録3』

「どうした、色男！ その程度かっ!!」

「……ッ!? まだまだあっ!!」

晴れない夜闇の中を三条の閃きが交錯する。

一つは固まった血のような濁った赤、後の二つは澱みが無い真紅と黄色。

二対一にもかかわらず優劣の秤が傾くのは血色の槍を振るうキャスターで、徐々にデイルムツドの手数は減っていき守勢に追い込まれていく。

攻撃速度や身体能力では勝っているものの、技量ではキャスターのほうが上か。

それにデイルムツドはどことなく闘い辛そうな印象を受ける。

伝承によれば、奴の本来のスタイルは二槍ではなく、今持っている槍に加えてモラルタ・ベガルタの二刀を使用した、剣と槍の二刀流だったはずだ。

クラスで付くというステータス補正差も、その辺で覆されているのだろう。

「チィッ！ 御子とはいえ、これ以上はやらせん!!」

迫りくる突きを長槍で弾いたデイルムツドは、起死回生を狙って短槍の一撃を放つ。

だが、必勝を期した短槍はキャスターに届く前に払い落とされ、間髪入れずに放たれた攻防一体の刺突が、デイルムツドの首を穿つ寸前でピタリと止まった。

「そこまでー」

親父の号令で模擬戦は終わりを迎え、血色の穂先から解放されたデイルムツドは小さく息を漏らす。

「ふむ、どう見る?」

「キャスターの方は流石というしかないな。初めて使う得物なのに全く遜色がない。デイルムツドも戦力的には申し分ないが、本来とは違う二槍流というスタイルが、攻防に隙を産んでいるみたいだ」

投げられた問いに答えを返すと、隣で観戦していたヴァーリは小さく頷いた。

「そうだな。あの男、好機にあつてもどことなく動きがぎこちない時があつた」

「もしかしたら、変な召喚をした所為でなんか不具合でも起きてるのかもな。取り敢えず、本人に確認してみるか」

そう締めくくって、俺達は土手の上から鍛錬の場と化した河川敷のグラウンドへと足を進めた

皆様、こんばんわ。

あの後、ヴァーリと二人で無茶苦茶怒られた姫島慎です。

ヴァーリのアホに煽られて暴れてしまうとは、不覚にも程がある。

半分はノリだったとはいえ、これは反省すべき事案だろう。

さて、今俺達は河川敷の適当な広場で新規参入メンバーの能力確認を行っているところだ。

いくら俺でも、新入りをいきなり戦場に放り出すなんて真似はしない。

なんせ召喚なんて異常な方法で呼び出した面子である、身体に異常がないなど誰が言えるだろうか。

という訳で自他共に確認の為に手合わせを試みたのだが、結果の方は上々だ。

現地の聖杯で呼ばれたというキャスターは問題なし。

クラス補正でクールの兄貴よりは下がっているとはいえ、身体能力に異常は認められないし、むこうの要望で貸したブラッド・ランスも完全に使いこなしている。

身体の方が劇的に変化してしまったアナ嬢（ランサー）の事だ。こう呼べと言われたも、反転していた時のように鎖による包囲攻撃は出来ない代わりに、得物の腕や身体能力は向上していた。

カルデア式で呼んだ二人も、現地サーヴァントの二名には一步譲るが戦力としては十分な力を見せた。

リリイ嬢の方は技量では少々不安な面を見せたが、その辺は最優と言われるセイバーの身体能力と、それをさらに向上させる魔力放出で

カバーしていた。

一対一でサーヴァントを相手にするのは少し厳しいかもしれないが、骸骨兵相手なら問題なく対処できるだろう。

もう一方のデイルムツドは技量、身体能力共に問題はないが、二槍流というファイトスタイルが完熟しきっていない点に玉に瑕か。

この辺は、同じ槍使いであるキャスターや親父と言った超一流がすぐ横にいるからこそ、荒になって見えているのかもしれないが。

「というのが、模擬戦から判断したこちらの見解だ」

俺の口から出した結論に、同行者一行は様々な表情を見せる。

審判を務めていた親父やリリイ嬢の相手をした美朱、玉藻にキャスターは納得。

デイルムツドとリリイ嬢は少々悔し気だ。

朱乃姉とお袋はそんなリリイ嬢を慰め、アナ嬢は我関せずと言った感じで得物の手入れをしている。

「……あなたね、どうしてサーヴァントにダメ出ししてるのよ。今の動き、全部見えてたとも言うつもり？」

「見えてたぞ。つうか、それを確認する為にわざわざ模擬戦したんだし」

「なんだ。お前達には見えなかったのか？」

「見えるワケないでしょーがッ！ サーヴァントは音速を超えてるのよ、音速を!! 普通の人間が捉えられるかーっ!!」

俺達の返しにヒステリックに叫ぶオルガマリー女史。

まったく、世間を知らない奴はこれだから困る。

座学しか能のない無知な魔術師にはわからんだろうが、1日48時間鍛えれば人間は音速なんて軽く超えるのだ。

「音速くらい大したことないだろ。海へビ星座の市や大熊星座の檄、作中ほとんど台詞が無かった子獅子星座の蛮ですら超えるんだ。俺達の動体視力を振り切るならマツハ5は必要だな」

「ふむ。青銅聖闘士下位の名前を列挙すると、本当に音速超えなんて何でもない様に聞こえるな。まあ、俺もラディカル・グッドスピードを全開にしたら音速なんて軽く上回るんだが」

「化け物ツ！ 化け物ツ！！ 化け物おおおツ!!! あんた達絶対おかしいわよー!」

「所長！ 落ち着いて!! 落ち着いてください!!」

「彼らは人間の限界をジェット・ゴーしてしまった、名伏し難いナニカなんです!! 人間はっ！ 人理はっ!! こんな怪物を生み出したりしませんから!!」

頭を掻きむしりながら錯乱し始めるオルガマリー嬢を必死に慰める藤丸嬢とマシユ嬢。

つうか、マシユ嬢って何気に失礼だな。

「ところでドクター」

『なんだい、慎君』

「カルデア式の召喚方法だと、サーヴァントの身体能力って下がるのか?」

『そうだね、確かに低下する。でも、それには理由があるんだ』

ふむ、理由があるとな。

よろしい、詳しく聞こうじゃないか。

『カルデアが使っている守護英霊召喚術式・フェイトは、冬木の聖杯戦争の英霊召喚術式を参考に造られた。でも、カルデアと聖杯戦争では英霊の運用方法は全く違うんだ。知っての通り、冬木の聖杯戦争は7組のサーヴァントとマスターの生存競争だ。その為、聖杯は英霊を使役するに足る者をマスターに選び、クラスという枠に当てはめるものの、基礎能力は生前に近い形で召喚を行う。しかし、カルデアは人理の守護という長大な目的から、多くの手を必要とする。そのため多くのマスターの元に英霊を呼び出さなければならぬ。当然、個々のマスターの能力にはバラツキがあるから、生前の能力を再現して呼び出せば下位の者が使役できなくなる』

「だから、そう言ったマスターも問題なく運用できるように、能力を押しさえて呼び出すと」

『その通り。けど、ずっとそのままってわけじゃないよ。マスターが成長すれば、必要な触媒を使用してリミッターを解除できるようになっているし』

「成長と触媒ねえ……。それって俺とデイルムツドにも適応されるの？」

『それはわからない。ハッキリ言って、君みたいな召喚は想定外もいところだからね』

申し訳なさそうにするドクターに気にしない様に告げた俺は、一団から離れて槍を振っているデイルムツドの方に足を運ぶ。

「申し訳ありません。戦働きの為に呼び出されておきながら、このような無様を晒してしまうとは……」

こちらに気付いたデイルムツドはすぐさま跪こうとするが、手でそれを止める。

「いや、相手は『ケルト版ヘラクレス』なんて言われてる大英雄クー・フリーンだ。クラス補正があっても、本来のスタイルじゃなかったらキツイだろ」

「……気づいておられたのですね」

「まあな。伝承じゃあ剣と槍の二刀流だって伝わってるし、さっきの模擬戦でもチョコチョコ動きがぎこちなくなってた。ところで、それ以外で不具合は無いのか？」

「不具合、ですか？」

「ああ。身体が重いかか能力が下がったとか、どんな些細な事でもいからあるなら言ってくれ。召喚方法やら何やらイレギュラーが多かったみたいだからな、その辺の影響が無いか心配なんだよ」

こっちの問いかけに、顔を伏せて思案するそぶりを見せる。

「正直に言えば、前回召喚された時より少し身体のキレが悪いですね」「ふむ、やっぱ身体能力にマイナスが掛かっていたか。それと得物はどうなんだ？ 二槍で戦い辛いつてんなら剣も用意するぞ」

「よろしいのですか？」

「ああ。モラルタやベガルタみたいな名剣は、さすがに無いけどな」

言いながら携帯端末を操作した俺は、『無限の闘争』で入手した剣を適当に見繕って転送する。

キャスターに貸しているブラッド・ランスもそうだが、『無限の闘争』は先のアップデートから、対戦でも武器を落とすようになったの

だ。

『凶ランク千人組み手』で死にながらゲットした武器の数々、見るが
良い!!

「取り敢えずこんなもんか。気に入った物があるなら持つてつてく
れ」

「ありがとうございます、拜見させていただきます」

目を輝かせながら、地面の並べられた十数本の剣に手を伸ばすディ
ルムツド。

おメガネに適う物があればいいが。

「やれやれ、刃物にギラギラした視線を向けるとか。どう見ても不審
人物ですよ、あれ」

小袖から取り出した扇子で口元を隠しながら、玉藻がこちらに寄つ
て来た。

む……、心なしかこつちを見る視線が厳しい気がするな。

「まあ、あれだ。あいつは一流の騎士だからな、ああいう武器類を見た
らワクワクするんだろ」

「戦人の気持ちは手に取る様にわかるのに、女性の機微をまったく読
めないとかー。これってご主人様の玉に瑕なところですよねー」

ぷうつと頬を膨らませながら、こちらを見上げる玉藻。

ふむ、何か気に障る事でもしただろうか。

「べつつにいい。私に無断であの蛇娘と契約した事とか、全く気にして
ませんから。ご主人様って実はロリコンの気があるのでは!? なん
て思ってたんですからっ!!」

どうやらアナ嬢と契約したのが気に喰わないらしい。

っーか、誰がロリコンじゃい。

「仕方ねえだろ。こつちはアナ嬢をモルモットにした負い目があるん
だしよ」

「ぐっ……。それにしたって、タダで解呪を行っただからイーブン
じゃないですか」

「そりゃ結果論だべ。しくじったらもつと酷い状態になってた可能性
だつてあるんだ。本人の同意無しにやった時点で、こつちに何か言う

「権利はない」

「確かにあれで解呪を失敗してたら、伝承通りの女怪に化けていたと思いますけど……」

マジか。

もしそうだったら、クレイトスさんばりのヴァイオレンスをやらなきゃならんところだった。

あのデンジャラスハゲには、最近ようやく勝てるようになったからなあ。

いやあ、首挽がれたりハラ搔つ捌かれたり、中坊の時はバリバリ殺されたもんだ。

「どうしたんですか、ご主人様。いきなり遠い目をして」

「とある時空でソロでオリュンポスを全滅させた、スパルタンとの戦いを思い出してた」

「クレイトスさんですか。彼って軍神にして特A級の神殺しですから。ご主人様があの化け物に勝ったのを見た時は、正直ドン引きしました」

「いや、退くなよ。メツチャ大変だったんだから」

お前もあの人のCSアタック食らってみるか？

その尻尾、全部千切られるぞ。

……ん、尻尾？

そう言えば、玉藻の尻尾が増えたのって、俺がオーフィスと闘ってる時の氣の余剰分を受けたのが原因だったっけ。

確か、靈基が強化されてパワーアップしたとかなんとか……。

もし、デイルムツドが玉藻と同じ状態だったら、これって使えるんじゃないかね？

「なあ、玉藻」

「はい？」

「その尻尾って、俺の氣の影響で増えたんだよな？」

「はい。あの時のご主人様の氣は、地脈のそれを遥かに上回る程に上質でしたので。お陰で靈格もしっかり上がりました」

「なら、今のデイルムツドに氣を送り込んだら能力が上がると思うか

？」

俺の出した問いに、玉藻は顎に指を当てながら思案に入る。

「不可能ではないと思いますけど、匙加減を間違えると危険ですよ？」

「そうなのか？」

「はい。ご主人様の氣はレイライン、即ち龍脈を通る地球の生体エナジーを上回るほどの高密度エネルギーになりました。現在、蛇娘や黒子さんに流れているモノはご主人様の身体を巡る分の残滓のようなもの。それでも彼ら二人を現界させるには十二分なのです」

「ふむ、それで？」

「ですが、ご主人様の考えを行うには、その氣の上質さが仇となります。本来、レイラインを受けて生きるのは大地や空と言った天然自然、転じて神や精霊といえるでしょう。ですが、サーヴァントは英霊の座という高次空間の影響で精霊に昇華したとはいえ、元は人霊。神や生粋の精霊に比べて、その霊基は遥かに脆弱です」

「成る程。下手に氣を送り込めば、その存在自体が崩壊しかねないってことか」

「はい。私や蛇娘のように神だったモノやキャスターのような半人半神であるなら、まだ受け皿があるのですが。あ、お義母様が精霊に昇華したのは例外中の例外ですからね」

「OK 理解した。取り敢えず、本人に聞いてみるか」

踵を返してデイルムツドのところに向かうと、デイルムツドだけではなくリリイ嬢やキャスターまで剣を見ていた。

「シンさん、ここにるのはどれも良い剣ばかりですね！」

ピンク色の刀身を持つ曲刀を手にながらキラキラした笑顔を向けるリリイ嬢。

うん、あまりこつちに向けないでね、それ『誘惑の剣』だから。

身内にメダパニが掛かるとか、勘弁です。

「主、これをお借りしてよろしいでしょうか？」

デイルムツドが持って来たのは、ドラクエでお馴染みの『奇跡の剣』とファイナルファンタジーの『オリハルコン』だ。

奇跡の剣はもちろん、オリハルコンもFF3仕様なので共に斬りつ

けた相手から生命力を奪う剣である。

さすが騎士、剣の目利きがパネエ。

「ああ、構わねえよ」

「シンさん、私はこれがいいですー」

期待に満ちた声に目を向けると、飛び込んできたのは柄に女王の意匠を持つ騎士剣。

あらやだ、手にしてるのは『セイブザクイーン』じゃないの。

それって、持っている限り永久にプロテス(物理防御力上昇魔法)の効果がある優れものですよ、リレイさん。

つうか、君って自前の剣あつたよね？

「あ、あれです。カリバーンは本命で、この剣は寝所での護身用として使おうかと」

……美朱といいこの娘といい、なんで寝る時も刃物を忍ばそうとするのか？

まあ、いいけどさ。

「いいのか坊主？ あいつ等が持つて行ったのは、どれもこれも宝具級の業物だぞ」

「いいよ。俺は武器が使えないから、持つてても倉庫の肥やしにしかならんし」

キャスターが俺の執着の無さに呆れていると、玉藻がデイルムツドを指差してこう言った。

「ご主人様、デイルムツドさんになにか用があつたのでは？」

そうでした。

ホクホク顔で剣の素振りをしていたデイルムツドを捕まえて強化の事を話すと、ノリノリで是非やって欲しいと言われた。

リスクの事など知った事じゃねえと言わんばかりのテンションに、キャスターはそれでこそケルトの男と笑い、玉藻は頬を引き攣らせた。

どうせだからとアナ嬢も誘ってみると、『せっかくこの姿になったのに、死にたくないのですやります』との答えを貰った。

「さて、そんじゃ始めるから、二人共力を抜いてリラックスしてく

れ」

みんなが集まる中、二人の首の後ろに手を当てた俺は、目を閉じてゆっくりと呼気を放ちながら氣を練り始める。

やる事は『駒落とし』と似ているが、今回は普通に氣を流し込むだけだ。

一氣に流すと北斗神拳案件になってしまうので、できる限りゆっくりと流し込んでいく。

こうやって氣を流していると、デイルムツド達がどうなっているのかが何となくわかってしまう。

氣を受け入れる限界容量とか召喚術式によるリミッターとか。

デイルムツドは聞いていたが、アナ嬢にもリミッターのようなモノはあつたのには驚いた。

これは多分、クラス補正とかサーヴアントに落としこむ際に必要なリミッターなのだろう。

形は違えど、兩名共にリミッターは複数あるようだ。

その氣になれば一氣に全部取り払う事も可能なのだが、靈基への負荷を考えれば一段階に留めておくべきだろう。

靈基に嵌められた枷を外す為にひと際強く氣を送り込んで、俺は調息しながら手を放した。

目を開いてみると、アナ嬢の方は羽織っていたローブが消えて、白銀のブレストプレートと黒のレオタードのようなインナーという姿になっていた。

一方デイルムツドのほうだが……………オイ。

「あれ、わたし……………姿が、変わって……………」

「うむ、更なる力を手に入れられそうだ」

先ほどと同じようにペタペタと自分の身体を触るアナ嬢と、満足そうに頷くデイルムツド。

強化が成功したのは喜ばしいが、その前に一つ言わねばならない事がある。

「デイルムツド。貴様、何故脱いでいる」

そう、デイルムツドは今、上半身を覆っていた緑のスーツを脱ぎ捨

てた半裸の状態なのだ。

「……靈基再臨です」

「セイツ!!」

「ぐぼあぁっ!! 何故!?!」

……無駄に爽やかな露出狂のイケメンスマイルに拳を打ち込んだ俺は悪くない。

◇

見苦しいモノをお見せして申し訳ない。

デイルムツドに服を着せた俺達は、再び魔力溜りへの行軍を再開していた。

あの後、ダ・ヴィンチちゃんやドクターから『素材も無しに靈基再臨するなんてありえない!!』だの『正規の聖杯戦争で召喚されたサーヴァントが再臨するとかどうなってんだ!?!』などと質問攻めにあつたが、東洋の神秘・氣の成せる技で押し通した。

魔術式で説明しろとか言われても、俺にはその手の知識が全くないのでやりようがないのだ。

お陰で所長さんはますます俺に怯えるようになり、姿を見ればマシユ嬢の盾に隠れるようになってしまった。

ちなみにパワーアップした二人だが、デイルムツド・アナ嬢共に身体能力が向上し、スピードは1.3倍、パワーは1.2倍になっていた。

それでも子獅子^{ライオネル}星座の蛮^{ばん}の必殺技『ライオネットボンバー』より遅いのだが。

ふむ、二人共音速超えているのに、ライオネルと並べると途端にザコく見えてしまう。

なんとも不思議なものである。

再臨の効果はステータスの向上だけではなく、持っていたスキルも強化されていたらしい。

アナ嬢は『怪力』、デイルムツドは『愛の黒子』の魅了効果が増した

そうだ。

しかし、デイルムツドは黒子を封印しているので効果は分からず、アナ嬢は自信ありげに俺に腕相撲を挑んできたのだが、コンマ一秒で勝ってしまった。

拗ねて涙目でブーたれるアナ嬢の機嫌を直すのは、本当に大変だった。

そんなこんなで歩む珍道中だが、当然の事ながら骸骨兵や怨霊は襲ってくる。

もつとも、そんな雑兵の群はサーヴァント4騎の敵ではなかった。槍を手にして本来の魔法戦士のスタイルに戻ったキャスターを初めとして、二剣二槍を巧みに操るデイルムツド。

不死殺しの刃を時には槍、時には鎖鎌として操るアナ嬢に『二刀流はいいですね！無銘勝利剣^{エックススカリバー}！ーッ！！なんて必殺技に目覚めてしまいいそうです！』と両手の騎士剣をノリノリで振るうリリ嬢が好き勝手に暴れまわるので、俺達の出番はなかった。

まあ、お袋が回復オンリーの完全な非戦闘員なので、先行して敵を潰してくれるのは大変助かったが。

そんな風に片っ端から敵を蹴散らしつつ、歩を進める事しばし。

入口に『柳洞寺』と掘られた石碑が立つ階段を昇り、山の中腹にある山門を抜けると、目の前に打ち捨てられた寺院が広がる。

ここが石碑にあった柳洞寺なのだろう。

「神仏を祀る場までこんな風になるなんて、酷いものです」

まったくである。

この世界には神はもういないとは聞いていたが、崩壊したとはいえ寺社にまったく神気がないとは。

そのうえ魔力溜まりの影響なのか、敷地一面穢れだらけだ。

俺は素早く九字を切って簡易の浄化結界で皆を包むと、『無限の闘争』の倉庫から塩と酒、白磁の器を取り出す。

そして、玉藻に酒を御神酒に変えるように頼むと、東西南北の邪気を祓って塩を盛っていく。

「あの、なにをしてるのですか？」

こちらの作業に興味があるのか、マシユ嬢が好奇心に目を光らせて声を掛けてきた。

「盛り塩だよ。これからこの寺を浄化しようと思ってるな」

「浄化、ですか？」

「ああ。これでも神官の端くれなんでな、神仏を祀る場所が穢れたままってのは見過ごせないんだ」

俺の言葉に眉根を下げながら首を捻っていた彼女は、何か思い出した様にポンと手を打った。

「そういえば、自己紹介の時にそんな事言っていましたね。そうでした、慎さんは超人や理不人ではなかったのです」

いや、ホントに無自覚失礼だよ、この娘。

何気に美朱と声がそっくりだから、聞き流してしまうけど。

つーか、理不人ってなんだよ。

新しい造語か。

「高天原たかまがはらに神留座かむづまります。神魯伎神魯美かむろぎかむろみの詔みこと以もちて。皇御祖神伊邪那岐大神すめみおやかむいざなぎのおおかみ。筑紫の日向の橘つくしひむがたちばなの小戸をの阿波岐原あわぎはらに、御禊祓みそぎはらへ給たまひし時ときに生座あれませる祓戸はらひとの大神達おおかみたち。諸々の枉事罪穢もろもろまがごとつみけがれを拂はらひ賜たまへ清きよめ賜たまへと申す事ことの由よしを、天津神あまつかみ、国津神くにつかみ、八百萬の神達かみたちとも共に聞食きこしめせと恐かしこみ恐かしこみ申す」

中央に御神酒を供え八拍手を打って大祓の祝詞を唱えると、敷地を吹き抜ける一迅の風と共に周囲に満ちていた魔力や瘴気が消え去った。

「すごいです、先輩。空気が澄んでますよ」

「うん、さっきまでしてた焦げ臭さも無くなってる。それにここだけ星が見えるし」

「ほおー、こいつは見事なもんだ」

「あれだけ穢れていた空気が、すっかり綺麗になってる」

「武だけでなく魔術の腕も一流とは、流石です主」

周囲を見渡しながら感嘆の声を上げるマスターとサーヴァント勢。

デイルムツド、これは魔術じゃなくて呪術な。

「分かっていたけど、実際に見るととんでもないわね。あの穢れつて

一流の術者が複数で、数日は祈祷に当たらないと祓えないレベルなんだけど」

「こういう事ができるから、御爺様が姫島の次の当主にしたがるんだよねえ。まあ、本人は人の上に立つ器じゃないってやらないけど」

「あの子は一般レベルというものを知るべきね。こうもポンポンと隔絶した力を使っていたら、トラブルが絶えないわ」

ウチの女衆がなんか遠い目をしながら言っている。

親父は隅の方でちっちゃくなってるし。

朱乃姉よ、一般レベルって言うけど、この位は頑張ったら誰でもできるだろう。

「ダウト」

「母様が言ってたでしょう。普通は数人がかりでやるって」

「貴方みたいに単独で出来るのは、裏高野の座主様くらいよ」

浄化を成功させたのに塩対応とはこれ如何に。

あとやっぱりあったのね、裏高野。

中央のお神酒を四つに分けて、盛り塩の横に供える事で浄化結界を形成すると、本堂のあった場所に薄い気配が現れた。

目を向けてみるとここで暮らしていた僧侶達なのだろう、多くの作務衣を来た男性の霊がこちらに頭を下げている。

先頭に立つ住職様は徳の高い方のようなので不要かとも思ったが、弔いとして般若心経を唱えると光の柱に乗って雲の晴れた星空へと昇って逝った。

「慎君、神主さんってお経を唱えるの？」

経を終えて凝った首を鳴らしていると、藤丸嬢が声を掛けて来た。

「ああ。日本に仏教が伝来してから、神仏習合っていつて仏教と神祇信仰じんぎしんじょうの融合していた時期が長かったからな。明治時代に神仏分離しんぶつぶんりがなされるまでは神前読経や神前法楽って言って、神社で仏事が執り行われることが多かったんだ。だから、今でも氏子さん達の中には読経で送ってほしいって依頼もあるし、職務として憶えてるのさ」

「へー、そうなんだ」

「それに神道における葬儀って仏教みたいに極楽に送る物じゃなく

て、故人をその家の守護神となっていたただくための儀式なんだ。だから一人一人を弔うのが基本だし、潰えてしまったこの寺で行うのは不釣り合いなんだよ」

「貴方、本当に神官だったのね」

「所長さん、あんたは俺を何だと思ってたんだ」

「……化け物」

「なるほど、シバくぞ?」

「所長を脅かしちゃダメだよ。またマシユの盾の影でプルプル震えるようになっちゃったじゃん」

「今のは俺が悪いのか?」

言い様のない理不尽さを感じていると、後ろから美朱がこちらの袖を引いてきた。

「慎兄。今なら所長さんにあの事、言えるんじゃないの」

ふむ、確かにこの場所なら死んでいる事を伝えても悪霊になることは無いだろうし、そのまま送る事もできるか。

肚を決めた俺は、盾の影から尻を出して蹲っている所長のところに足を運ぶ。

「所長、話があるんだけどいいかな?」

「なっ、ななっ、なによ!? ちよつと失礼な事言っただけじゃないっ!

それだけで私を殺そうって言うの!?!」

「慎兄、どんだけ怯えられてるのさ」

「特に何かした覚えはなんだが……。取り敢えず出てきてくれ、本当に大事な話なんだ」

こちらの真剣さが伝わったのか、渋々といった感じで所長は出てきてくれた。

流れて藤丸嬢とマシユ嬢もいるが、二人にも聞いてもらった方がいいだろう。

「それで、重要な話というのはなんなのかしら?」

「所長さん、落ち着いて訊いてくれ。実は——」

伝えるべき事を口にしようとした瞬間、針のように細い殺意と耳を過ぎった風切り音に、俺は左のコメカミの少し前に手を掲げて立てた

二本指を閉じる。

手に軽い衝撃を感じながら視線を向ければ、指の間には鋼で作られた矢、いや矢の様に細くなつた剣があつた。

「北斗神拳・二指真空把」

指の間で剣を回転させて殺気の発生源に放つてやると、寺の敷地の外側に生えている丸焼けになつた樹の陰から一つの影が飛び出してきた。

俺達のすぐ近くに降り立つたその影は長身の男性で、手には黒塗りの大型の弓を持ち、白い髪と褐色の肌。

黒の皮鎧と同色の皮のパンツを纏い、千切れた赤の外套を腰巻のように巻いている。

「アーチャーのサーヴァント!?!」

警戒心を露わにする所長と藤丸嬢、それを庇う為に出るマシユ嬢には眼もくれず、アーチャーはこちらをジツと見つめている。

「まさか、此方の放つた矢を掴んだ上に同じ速度で投げ返すとはな……」

冷や汗を拭いながら、アーチャーは鷹のような視線でこちらを睨む。

「北斗神拳の前では、貴様の矢など止まつた棒にすぎん」

「その台詞、言いたかつただけだよね?」

「うん」

OK 妹よ、そんな目で見ないでくれ。

こういうのは男のロマンじゃないか。

「ちなみに、その技を覚えるのに何回死んだのかな?」

「34回、風のヒューイの気分を味わつた。反省はしているが後悔はしていない!」

「ダメだ、この兄貴。早くなんとかしないと……」

はははっ、その台詞は10年遅いぞ。

「チツ、やはりイレギュラー共は厄介だな」

こちらの兄妹漫才を他所に、苦虫を噛みしめたような表情で虚空から黒と白の中華刀を生み出すアーチャー。

美朱を背に迎撃態勢を取ったところ、天から降って来たブラッド・ランスが俺とアーチャーの間を隔てるように突き刺さる。

「悪いな坊主。そいつとは腐れ縁だよ、俺に任せてもらうぜ」

ゆつくりとこちらへ歩いてきたキャスターは、地面に突き立った槍を引き抜くと、アーチャーに見えるように一閃させる。

駄目と言える雰囲気ではないな、これは。

「わかった、任せる。それで、俺等は観戦しとけばいいのか？」

「いや、魔力溜りにむかえよ！　ここまで来れば狐の姉ちゃん辺りなら正確な場所を割り出せるだろ」

「いけるか、玉藻」

「お任せください。あの闇落ちしたアチャ男さんはキャスターさんが命を捨てて足止めしてくれるそうなので、我々はいち早く魔力溜りを消し去ることを考えましょう」

三尾の尻尾をフリフリ、胸を張る玉藻。

命を捨てて、なんて言っていないけどな。

それはともかく、玉藻の様子を見るに、これならば任せても問題は無いか。

「そんじゃ俺達は先に行くから、そのボデイビルダーバリの 褐色 見せ筋野郎を倒したら追っかけて来てくれ。槍はそれまで貸しとく」

「おう！　お前等も気を付けてな!!」

「誰が見せ筋だっ!？」

二人の声を後に柳洞寺を後にする俺達。

「主、御子殿一人で大丈夫でしょうか？」

崩れた塀を越えて山道に入ったところでデイルムツドが声を掛けて来た。

聞けばクー・フリーンは、後世に生きた奴にとって憧れの英雄だと言う。

ならば、キャスターの身を案じるのは当然だろう。

「心配すんな、キャスターは負けねえよ。キャスターとしての魔術にあの槍の腕前だ。クラス補正でステータスが下がってたとしても、覆せる奴はそうそういないさ」

こんな事は手合わせしたお前が一番分かっているだろう、と続ける
とデイルムツドは「そうでした」と身の内の焦りを修めた。

そうやって数分ほど山道を行くと、かなりの大きさの洞窟の入り口
が見えて来た。

漏れ出している魔力や瘴気からして、ここが魔力溜りで間違いはな
いだろう。

さて、キヤスターのいう事が確かならば、この奥には冬木で召喚さ
れたセイバーがいるはずだ。

「そういえば、アナ嬢はこの先にいるセイバーは知らないのか？」

「知ってます。この先にいるのは女性のアーサー王、宝具は
約束された勝利の剣です」

「マジで？」

「はい」

なんと、この先にいるのはまたしてもご先祖ちゃんらしい。

リリー嬢が後ろで『未来の私が……』とショックを受けているが、俺
が驚いたのはそこじゃない。

「ヴァーリよ。一週間くらい前に、お前と一緒にご先祖ちゃんとやり
あつたよな？」

「ああ。タッグマッチでむこうは青黒コンビだった」

「そんな時にエクスカリバーからビーム食らったよな？」

「黒と金の同時発射だったな。だが、お前が『モードUMEHARA』
とか言いながら、全弾ブロッキングしたじゃないか」

「そうだったか？」

「ああ。三戦目くらいで直撃を受けたが、二種類食らっても禁手状態
で体力が半分削られる程度だったぞ」

「ああ、思い出した。ナツパの口からビームと同じくらいだったわ、威
力」

なんだ、これなら全く問題ないじゃないか。

「主……よろしいでしょうか……」

この戦い、我々の勝利だ！ とばかりに頷いていると、戸惑いがち
にデイルムツドが声を掛けて来た。

「何だ、デイルムツド？」

「あの、主はあの聖剣を受けて、生き残ったのですか？」

「ああ、ヴァーリもな」

「エックスされた勝利の剣は星が鍛えた最高レベルの神造兵器です。あれに耐えられる人間がいるとは思えません」

デイルムツドに続いて、こちらに疑惑の目を向けるアナ嬢。

見れば、リリイ嬢やカルデアの三人もこちらの言を疑っているようだ。

「馬鹿だな、アナ嬢。デイルムツドもだが、君達は自分のマスターの事をわかっていない」

「どういう意味でしょう？」

「こつちは星なんてバンバン吹っ飛ばす奴等と闘ってるんだぞ。星が鍛えた剣くらいで死ぬわけないじゃん」

「二「ふざけんなあああああつ!!」二」

解り易く説明したのにこの罵倒だよ。

人の理解を得るのって難しいなあ……。

ちなみにウチの家族は呆れはしてたものの、俺達の事を信じてました。

あと真人と覇龍を見せてやると、他のみんなの疑いもすっかり晴れた。

その代償に所長がマッシュ嬢の盾の内側に張り付いて離れなくなったり、リリイ嬢が義兄やお抱えの魔術師の名を呼びながらガチ泣きしたりしたが、真実の前には些細な犠牲だろう。

28話 『姫島家冬木見聞録4』

暗い、暗い、道。

死臭すら感じる淀んだ魔力に満ちた風の中、生命の気配が失せた天然の回廊を私達は進んでいく。

先頭を行くのはこの冬木で知り合った非常識の権化というべき少年、姫島慎。

私の後輩であるマシユが彼の事を『理不人^{りふじん}』なんて言っていたが、聞いた時は『上手い事言った!』と思つてしまった。

非常識な人が揃う^{そろ}姫島家の中でも、彼とヴァーリ君は群を抜いてアレだ。

生身で空を飛び、パンチを打てば竜巻が発生して建物を薙ぎ倒す。相手を掴めば高圧電流を発生させ、拳句の果てにはデミ・サーヴァントであるマシユの目にも止まらない高速移動をやつてのける。

妹である美朱ちゃんの話では、これでも手加減しているというのだからトンデモない。

あと、神主を自称するだけあつてランサーを解呪したりお寺を清めたりと、素人である私にも分かるくらいにその手の技能は凄い。

こんな場面じゃなかったら、妙な災難に巻き込まれ続ける我が身をお祓いしてもらいたいくらいだ。

しかし、こちらとしてはヴァーリ君と繰り広げた怪獣大戦争のイメージが強すぎて、どうにも戦闘機並と言われるサーヴァントを上回る暴力の具現というイメージが強い。

むこうの中でも比較的常識人である朱乃さんから「弟がゴメンなきいね」と謝られた時は、なんともリアクションに困ったものだ。

まあ、そんな天然チートキャラがいるお陰で、私にかかるプレッシャーもここにレイシフトした時に比べたら全然マシにはなってるので、そういう意味では感謝はしてる。

だから、魔力は無いのにサーヴァントを二騎使役している事や、使役しているサーヴァントに任せるよりも自分で殴った方が強いなんて点は気にしないようにしましょう。

あ、自己紹介がまだだったね。

私は藤丸立香。

成り行きでサーヴァントなんてトンデモ存在のマスターになってしまった、ごくごく普通の一般人です。

断じて逸般人じゃないんで、その辺は間違えない様に。

さて、私が回想に耽っている間に洞窟が終わりを迎えていたらしく、目の前にはほのかな明かりが見えていた。

ランサーの話では、あそこで待っているのはセイバークラスで現界したアーサー王。

朱乃さんのサーヴァントであるリリィちゃんとは違う、全盛期の完成された騎士王……なんだけど。

「慎よ。サーヴァントになったからには、『無限の闘争』^{MUGEN}で戦った時より強くなっていると思うか？」

「どうだろうなあ。解呪する前のアナ嬢やキャスターを見る限りだと、そこまでは変わらんとするけど」

「なんだ、つまらん。アルビオンもドライグの洗礼を受けた騎士王と闘えると猛っているし、俺だって死ぬ思いで聖剣を手に入れたんだぞ」

「聖剣だ？ お前剣術の適性なんて無いだろ」

「ふっ、時期が来れば見せてやるさ」

あの二人がいる所為で、緊張感も何も無かったりする。

「先輩、ここはもう戦場です。気を緩めない方がいいのでは？」

こちらの様子を見取ったマシユの苦言に、私は両手で頬を叩いた。マシユの言う通りである。

ここは戦場、いくら慎君達がいるからって、身の安全が保障されているわけじゃないのだ。

ヒリヒリとした痛みを気持ちを入れ替えて顔を上げたその瞬間、私は『死』というものを見た。

通路の出口からこちらに押し寄せてくる黒い魔力の奔流^{ほんりゅう}、それはまさに死の具現だった。

伝説に語られる邪龍のブレスというものが実際にあるのなら、こん

な感じなのだろう。

「マシユ、スキル『今は脆き雪花の壁』発動！ みんなを護って!!」

「何を言ってるの、藤丸！ あんなもの、止めるなんて無理に——
!!」

「分かりました、マスター！」

オルガマリー所長の抗議を遮って、私の指示通りに一団の先頭で盾を構えるマシユ。

って、ヤバっ！

盾の後ろに所長が張り付いたままだよ、マシユ!!

「シールドエフェクト、発揮します！ ……所長、そんなところで何を
しているんですか!？」

「貴方が連れて来たのよ!？」

「二人してなにコントみたいなやり取りしてるの！ もう時間がない
よ!!」

「そうでした！ 所長、盾から離れてください!!」

「こんなところで死にたくない!?! レフ！ 助けて、レ
フううううっ!!」

錯乱する所長をなんとか引き剥がそうと苦心するマシユ。

『これはもうダメか』と絶望に飲まれかけたその時、白磁の鎧を身に
纏ったヴァーリ君がマシユ達の前に出てきた。

「この状態で漫才とは、随分と余裕があるな」

「好きでやってるんじゃないわよ!!」

「危険です！ あの宝具は私が防ぎますから下がってください」

「いや、ここは俺に任せてもらおう。現世で見る本物のエクスカリ
バーの力に、俺もアルビオンも興味があるからな」

《Divid!!》

ヴァーリ君が迫りくる魔力の奔流に手をかざすと、胸当てについて
いる宝玉から電子音のような声が出た。

「ふん、見かけもそうだが威力も『無限の闘争』の物と変わらんか。な
らば、これ以上構う必要はないな！」

《Divid!! Divid!! Divid!! Divid!! Di

vid!!

フルフェイスの兜越しに一人ごちるヴァーリ君と連続する電子音。魔力の波に目を向けた私は、そこで違和感に気付いた。

先ほどまでは暴虐と言えるほどの勢いを誇っていたエネルギーが見る影もないくらいに衰えていたのだ。

「なによ……これ……」

いつのまにか冷静さを取り戻した所長が、盾の脇から顔を覗かせながら呆然と言葉を吐いている。

「あの、ヴァーリさん。いったい何をしたんですか？」

「大した事じゃない。俺の神器『白龍皇の光翼』デイベイン・デイベイディングの力である半減を使って、エクスカリバーの威力を削り取っただけだ」

いや、十分大した事です。

っていうか、なんなのそのチート能力！

それってつまり、放出系の宝具が実質的に効かないってことだよね！！

「なんだ、ヴァーリ。物に触れないでも半減ができるようになったのか」

「覇龍を極めた影響だ。もっとも、お前に効果を発揮させるにはまだまだのようだがな」

「ふーん。親父の結界の上に九字結界張ってたけど、無駄になったな」
……どうやら私達がジタバタしている間に、慎君達は対処に動いていたようです。

つうか、エクスカリバーの威力を削ぐ力が効かないとか、どんだけー。

「未来の私が放った聖剣の真名解放を、あんな簡単に防ぐなんて……。マスター、これがサクソンの白い竜グウィバーの力なのですか？」

「リリイ、彼を基準に考えてはいけないわ。彼は白龍皇と呼ばれる白き竜の魂を宿す者の中でも、最強最悪と言われる人だから」

「朱姉、朱姉。最強は良く聞くけど、最悪は付いてないよ？」

「あら、生涯の殆どを自身が強くなるに費やす竜なんて最悪だと思わない？」

「たしかに思うけど、それってウチの長男が原因だからね」

エクスカリバーが通用しない事実には戦慄するリリーの前で、のほほんと会話をする姫島姉妹。

うん、ただでさえ幻想種最強と言われているドラゴンが、さらに強くなるうと修行をするなんて悪夢以外の何物でもないだろう。

しかし、原因が慎君とはどういう事なのか。

……おっと、深く考えてはいけない。

昨日まで一般人だった私にとっては、魔術世界の事だつてすでにいなくても世界のなのだ。

そのさらに斜め上に行く姫島家のことなんて理解できるわけがない。

ここはあれだ、『激流に身を任せ同化する』という名言にあやかつて、無心で聞き流すべきだ。

「ここまで削つてやればいいだろう。次は俺の会得した聖剣を見せてやろう」

そう言つて、五指をピンと伸ばした状態の右腕を真っ直ぐに上に掲げるヴァーリ君。

今、会得したつていわなかった？

普通、武器を手に入れたら会得なんて言わないよね。

なんか、嫌な予感がしてきたぞ……。

「聖剣……拔刃!!」

気合とともにヴァーリ君が右手を振り下ろすと、手刀から放たれた衝撃波が洞窟の壁ごと魔力の波を両断し、その奥にいる人影を弾き飛ばしたではないか。

え、今のが聖剣？

剣つていうか、武器すら持つてないんですけど!?

「聖剣つてそつちかよ!?!」

「山羊座!?! 今のは山羊座の黄金聖闘士ゴールドセイイントからパクつたの?」

「山羊座? 俺が会得したのは龍座ドラゴンの紫龍しりゅうという男だぞ」

「あ、二代目か」

ヴァーリ君の言葉に納得したかのように頷く慎君と美朱ちゃん。

ああ、これも姫島家的常識なんだなあ。

「つうか、なんで俺の時に使わなかったんだ？ 『獄炎の銀覇龍』でそれを使えば、いい線行けただろ」

「これはあの闘いの後に得た、お前を倒す為の技だからな」

「……ほー、『ロデム』の分際で言うじゃねえか。その鈍なまくらで俺の首を獲れるかよ？」

「誰がロデムだっ!? 見てろ、お前に使うときまでには地上最強の剣に鍛え上げてやる」

セイバーそっちのけでガンを飛ばし合う二人。

「いやいや、なに仲間内で争おうとしてるかな！ 敵は前！ 前にいるよ!!」

「聖剣の真名解放を容易くないなすとは、貴様がアーチャーの言っていた白き竜の化身か」

氷のような威圧に満ちた声に目を向けた私は、その主の姿に思わず息を飲んだ。

くすんだ金の髪に人形のように白い肌。

纏った漆黒の鎧からは可視化できるほどの魔力が立ち昇り、黒く染まった聖剣は見るだけで背筋が凍る。

そこにいたのはまさに人の形をした邪竜、暴虐と死の化身だった。

「なんて魔力放出……あれが本当にアーサー王なのですか……?」

マシユや私が戦く中、ヴァーリ君はそんなセイバーの放つ金色の視線をモノともせず背を向ける。

そして後方に下がると、やる気はないと言わんばかりに壁に背を預けて腕を組んでしまった。

「……なんのつもりだ？」

「分からののか？ 貴様程度、俺が手を下す相手ではないという事だ」

「ふん。悪霊に堕ちた英雄と、呪詛に染まりその真価を發揮できぬ聖剣。例えドライグの加護を受けた騎士王だろうと、貴様では俺とアルビオンの相手にはならん」

どっちがボス敵か分からなくなるような大物感と共に言い放つ

ヴァーリ君。

「ほぎけっ!!」

その言動に堪忍袋の緒が切れたのだろう、ジェット気流のような魔力を噴出させてセイバーが襲い掛かる。

しかし、音の壁を超えるほどの速度の踏み込みは、横合いから放たれた蹴りによって阻止された。

まるで弾丸ライナーのように吹き飛ぶセイバー。

視線をずらせば、蹴り足を地に付ける慎君が見えた。

「悪いな、そつちには身内がいるんだわ」

まったく謝意の伝わらない言葉をセイバーに投げ捨てた慎君は、溜息をつきながらヴァーリ君の方をむいた。

「ラスボスじみた台詞吐いてんじゃねーよ、この馬鹿。エクスカリバー防いだんだったら、最後まで相手してやれよ」

「この程度の相手では、俺の食指は動かん。闘っても得る物も少なそうだしな」

「文句言うな。『無限の闘争』とは違うんだ、実入りなんてあるわけねーだろうが」

「なら、お前が闘ればいいだろう。あの時のように左右の玄武剛弾で固めて、地獄風車から大雪山おろしでも極めれば問題あるまい」

「……ホント我儘な奴だな、つたく。しゃあねえ、サクサク終わらせるか」

テコでも相手にしなさそうなヴァーリ君の態度諦めた慎君は、ゆっくりとセイバーに向き直る。

見ればセイバーは聖剣を杖代わりに立ち上がったところで、さつき蹴られたであろう脇腹は靴の形に鎧がへこんでいた。

軽く足を出した風にはか見えなかったのに、どんだけ威力があったの、あの蹴り!?

「お待ちください、我が主」

腕を回しながら一歩踏み出した慎君を呼び止めたのは、彼のサーヴァントである槍兵のデイルムツドだ。

「どした、デイルムツド?」

「あの騎士王とは少々因縁がございます。ですので、奴の御首級はこのデイルムツドにお任せいただきたい」

片膝を付き臣下の礼を取るデイルムツドの目を真つ直ぐに見ていた慎君は、その決意を読み取ったのだろう、私達一団に向けて踵を返した。

「いいだろう。けど、一つ条件を付けさせてくれ」

「なんででしょうか？」

「絶対に死ぬな。ヤバいと思ったら、誇りや矜持を後回しにしても、こつちに応援を頼むんだ」

「主……」

『無茶すんな』なんて人に言える義理じゃねえけどよ、身内になった奴に目の前で死なれるのは勘弁だ。納得がいかねえなら、再戦の機会は作ってやる。だから、無理はすんなよ」

「……承知しました。ですが、その心配は無用です。この二槍と主から賜った剣があれば、相手が騎士王と言えど遅れは取りません」

「そうか。なら、見せてもらおうぜ。お前がビシツと勝つところを」

「承知」

そう言葉を残しながら二人は入れ替わり、セイバーの前にはデイルムツドが立ちはだかった。

「そう云うわけだ、セイバー。ここからは俺が貴様の相手をする」

「……貴様等、ふざけてるのか」

不機嫌どころか、明らかに怒気を放ちながら剣を構えるセイバー

普通の人間ならショック死してもおかしくない威圧もどこ吹く風と、デイルムツドは朱の長槍と虹色に光る短剣を構える。

「ふざけてなどいない。前回の聖杯戦争で水入りになった勝負、その決着をここでつけようと思っただけの事」

「いいだろう。ならば、貴様の首から刎ねてやる」

「できるかな？ その穢れに染まった聖剣で」

「その身で確かめてみるがいいっ!!」

ジェット気流のような魔力を噴出させてデイルムツドに襲い掛かるセイバー。

瞬きする間に十は放たれているだろう音速の壁を超える剣撃を、デイルムツドは槍の柄と短剣を使って次々と捌いていく。

「どうした、以前に比べて太刀筋が乱れているぞ」

「ちっ!?!」

うん、何が何だかさっぱり分からない。

とりあえず、デイルムツドが圧されていないのは確かかなようだ。

「長剣の間合いより一步深く踏み込んで、短剣の距離で打ち合うと同時に柄を短く持った槍で攻撃を仕掛けるか。あの青年、なかなか出来ているな」

「ホント器用だよな。相手との間合いに合わせて持つ位置を変えて長さを調整してるから、上手く主導権を取ってるし」

どうやら、バラキエルさんと美朱ちゃんには見えているらしい。

いったいどんな動体視力をしているんだ。

「私の聖剣を受けて刃こぼれ一つしないとは……その短剣、鈍らではないようだな!」

「我が主から賜った、伝説の金属オリハルコンで鍛えた逸品だ! 真名解放こそできんが、質では貴様の聖剣に劣る事は無いぞ!!」

間合いを取ろうと後ろに飛んだセイバーを追いかけるように、風を巻いて踏み込むデイルムツド。

右手が見えない程に身体を大きく捻った上段の一撃に、穂先の内側に一步踏みこみつつ剣を振り上げようとするセイバー。

次の瞬間、彼女は左肩から血飛沫を上げた。

見れば、黒の甲冑を切り裂いて肉に食らいついているのは先程までの紅い魔槍ではなく、白銀に光る長剣の刀身だった。

「ぐうッ!?! 剣だと……!!」

「見誤ったな、セイバー!」

その身に食い込む刃を引き抜こうとするセイバーに対し、そうはさせじと踏み込みと共に左手を繰り出すデイルムツド。

その手に握られているのは、短剣ではなく黄色の短槍だ。

その一撃を辛うじて聖剣の腹で受けた黒い剣士は、引き抜かれた銀の刃に血の糸を残しながらも放り出された宙から危なげなく着地す

る。

「ランサー、貴様……ッ!?!」

「先の聖杯戦争で俺の癖を見極めたつもりなら、それは勘違いというものだ。このデイルムツドの本来の闘法は二剣二槍。主の助力により真の姿を取り戻した俺の技、捉えるのは容易ではないぞ」

「黙れっ!!」

怒りの声と共に一足で離れた間合いを殺し切るセイバー。

魔竜の咆哮のような黒い魔力が渦巻く一撃をデイルムツドは巧みな足捌きと長剣でいなす。

そして、黒い刃が白銀の刀身を滑り落ちるよりも疾く放たれた短槍の連撃は、直撃はしなかったもののセイバーの頬と脇に紅い線を刻む。

形勢不利と断じて間合いを広げようとする開けようとするセイバー。

しかし、それは左手の内で一瞬で入れ替わった朱の長槍によって阻まれ、追撃の長剣が再び彼女の身体に傷をつける。

「デイルムツド君は、セイバーの放つ剛剣を上手く捌いているな」

「慎は返し技の名手だから、氣を通してその要素も引き継がれているのかしら?」

「もしかしたら、そうかも。あと、セイバーの方も剣にブレがあるように見えるんだよね。なんというか、魔力による強化が制御しきれないみたい」

「あの黒い私は、聖杯から直接魔力を受けているのですよね。だとすれば、送られてくる魔力の多さが原因かもしれません。魔力炉心である竜の心臓を持っていたとはいえ、あふれ出る魔力全てを制御できるほど、私は器用ではありませんから」

「それもあるだろうが、ご先祖ちゃんの太刀筋は読みやすいんだよ。元々が相手を甲冑ごと叩き斬る戦場の剣だから、フェイントや駆け引きなんかほとんど無い」

「日本の示現流とかそんな感じ?」

「確かに体系的には似てるな。彼女の剣は、魔力で強化した力とス

ピードでフルスイングする一撃必殺のスタイルだ。その性質から格下の相手には有効でも、同等の身体能力や自分以上の技量を持つ奴には分が悪い。『意』を読める内家剣士や他心通の心得がある奴なんかには、むこうの太刀筋が丸わかりだからな」

「あの、私の剣はケイ兄さんやマーリンに習ったんですけど、それではダメなんでしょうか？」

「戦場に出て乱戦になったら問題ないだろうが、一対一だと厳しいと思う。余裕があるなら、受け流しの技術と攻防の駆け引きも覚えてみな」

そう言いながらリリーの頭をワシワシと撫でる慎君。

なるほど、そういうものなのだろうか……。

数メートルほどの間合いを挟んで、再度睨みあう二人。

腕と脇、横一文字に割かれた鎧の腹部から血を滴らせるセイバーに対し、デイルムツドはかすり傷一つない。

いや、一二の腕や頬に血の跡があるから、負った傷が治っているのだ。そう言えば慎君が言っていた。

あの剣は斬った相手から生命力を奪って、持ち主を癒す効果があるって。

「ぐっ、おのれえ……！」

「できる事ならば、呪詛に侵される前のお前と雌雄を決したかったが、これも忠義の為。……次でその首、獲らせてもらう」

「この程度の傷でもう勝った気では、舐めるなよ、ランサー！」
長剣と短槍に持ち替えたデイルムツドと、その身から今まで以上に強大な魔力を吹き上げるセイバー。

同時に大地を蹴った二人が激突する寸前、もの凄い音と共に慎君達がいる辺りの天井が崩れ落ちた。

「先輩、所長！ 私の後ろに!!」

迫りくる砂埃を凌いだ後でマシユの盾から出た私達は、未だ立ち込める煙のむこうにセイバーとは違った形の死の具現を見た。

2メートルは優に超す巖の如き筋肉に覆われた巨体は赤く染まり、その頑強な肌の内側では血管を流れるように黒い呪詛が巡っている。

く彼に伝えていた。

あの光を起こしたのは自身に匹敵する——いや、ギリシヤ随一の大英雄であるヘラクレスをも上回る戦士である事を。

ならば、後を追うのは容易い。

それほどの猛者なら、戦士の嗅覚が逃がすわけがない。

己の直感が導くままに焼き払われた森林を、人の絶えた街並みを、狂戦士はひた走る。

生前、女神の放った呪いによつて狂気に侵された彼は、自身の子と妻を手に掛けた。

アポロンは12の試練を成功させれば、その罪は許されると神託で言っていたが、それは誤りだった。

確かに神々は己の罪を許しただろう。

しかし、彼自身はこの大罪を許そうとは思わない。

愛する最初の妻と生を謳歌する事無く逝った子供達を思えば、この罪は未来永劫許されるべきではないのだ。

だからこそ、同じ過ちは繰り返さない。

例え呪詛に侵されようと、狂気に苛まれようと、彼は自身が護るべき者を違えることは無い。

故に、彼は持てる力の限りを使つて大地を蹴る。

人としての生を望まれなかった、哀れな主を人間として弔うために。

柳洞寺から大空洞へと続く山道、その中でもある程度開けた場所で、呪詛に侵されたアーチャーは苦虫を噛み潰していた。

眼前で血色の槍を構えるキャスター、その能力が自身の戦法とは悉くかみ合わないからだ。

弓矢で遠距離攻撃を挑めば、その悉くを火のルーン魔術や召喚した樹木、そして強固な結界で迎撃された。

虎の子である『偽・螺旋剣』カランドボルグを結界で無効化された時は、思わず目をむいたものだ。

さらにはこの狭いスペースにルーンで結界を張られ、接近戦を行わざるを得ない状況を作られた。

普通なら『キヤスターが接近戦などナンセンスだ』と鼻で笑うところだが、相手はアイルランドの大英雄クー・フーリン。

さらには手には愛槍とは別の禍々しい血色の槍を持っているのだ。楽観視などできようも無い。

そして始まった接近戦だが、ここでもまた計算違いの事が起きた。キヤスターの槍術は、自身が知る物よりも遥かに円熟したものだ。たのだ。

さらにはクラス補正による能力低下を補うためか、槍兵の頃のような『動』の技ではなく、無駄な動きを削いで相手の後の先を狙う『静』の技を駆使してきたのだ。

非才な自身の剣術は敢えて隙を作り相手にそこを攻めさせる事で、相手の動きをコントロールするのを基本としている。

だからこそ、技量が遥かに上の相手にそういった戦法をされると立ちどころに窮してしまう。

かと言って攻めなければ、こちらを追い立てるように火炎弾が飛んでくる。

ダメ押しに、あの槍には傷つけた相手から生命力を奪い、担い手を癒す力があるようだ。

攻略の足掛かりとして手足を殺す等の作戦を練っても、こちらがダメージを食らえばキャラになってしまう。

技量に大きな差を付けられている現状では、これは地味に痛い。

「どうした、弓兵。いつにも増してしかめっ面じゃねえか」

「……そちらこそ随分と消極的な攻めじゃないか。キヤスタークラスになったから落ち着いた、とでもいうつもりかね？」

「ランサーで呼び出された時に比べて、少しばかり歳を食ってるもんでね。力任せよりも技でいなす方を選んじまうのさ、これがな」

「大英雄ともあろう者が、中年オヤジのような物言いを。アイルランドの民が聞いたら泣くぞ」

「ふん、言ってる。さて、いつまでもこうしてたって罅が開かねえ。――

――ここらでケリをつけさせてもらおうぜ」

「……いいだろう。だが、そう簡単に取れるとは思わん事だ」

様々な懸念材料に刻まれた眉間の皺をさらに深くしながら、アーチャーは大空洞に向かって速度を上げた。

「なんでえ、あの野郎。血相変えてすっ飛んでいきやがって」

一人残されたキャスターは、爆心地のようになつた山道で悪態を吐き捨てた。

バーサーカーに続いてアーチャーまでもが大空洞に向かったが、彼はまったく慌てていない。

むこうにいるのがカルデアの面々ならば何としてでもあの二騎を止めただろうが、規格外の力を持った異邦人たちが一緒なのだ。

正直、白龍の少年だけでもあの二騎を相手にしてお釣りがくるだろう。

「とはいえ、追いかけてねえワケにやいかねえか。アーチャーの野郎は任せろなんて啖呵切っちゃまったし、盾の嬢ちゃん達も気になるな」

槍の石突きで地面にルーンを刻んだキャスターは、風を巻きながらその場を後にした。



その巨人が現れた瞬間、私達はもちろん、闘っていたセイバーとデイルムツドも動けなかった。

『動けば殺される』

そこにいるだけなのに、理屈抜きでそう思わせるくらいの威圧感があつたんだ。

誰もが黙ってバーサーカーに視線を向ける中、巨人は無言で目の前にいた慎君に手を差し出した。

大の大人も一掴みできそうな大きな手、そこには十歳くらいの女の子が横になつていた。

「イリヤスフィール……」

彼女を見てセイバーが小さく言葉を漏らす。

きつとそれが女の子の名前なんだろう。

「人間……いや、何かの混血だな。妙な術式が体の中に刻まれてる所

為で、肉体は死んでるのに魂が中に囚われちゃってる。この子を助ければいいのか？」

慎君の言葉にバーサーカーはコクリと頷いた。

ここからじゃわからなかったけど、あの子はもう亡くなっているのか。

「……わかった。じゃあ、そこに寝かせてくれ」

慎君が着ていた道着の上を脱いで地面に敷くと、バーサーカーは指示された通りに女の子をそこに横たえた。

そして、慎君が何かを呟きながら人差し指と中指を立てた右手を9回振るうと、女の子の周辺が淡い光に包まれる。

「ご主人様、この少女に刻まれた術式はあそこの泥壺とよく似ています。解呪できますか？」

「浄化に解呪、後は葬送か。やる事は多いが、呪詛のレベルを考えれば神救いより楽だろう。玉藻、悪いけど例の鏡を頼む。デイルムツドにヴァーリ、デリケートな作業に入るからセイバーをこっちに近づけるなよ」

「承知しました、ご主人様」

「はっ」

「私を侮るな、小僧。堕ちた身とはいええ、死者の弔いを邪魔するほど私は腐ってはいない」

不満げに言い返したセイバーは、自身の意思の表れとして黒く染まった聖剣を地面に突き刺した。

それを見て、デイルムツドも槍を消して剣を鞘に納める。

えーと、私が言うべきじゃないと思うんだけど、そんなに簡単に信用していいのかな？

隣を見ると、マシユの盾の後ろで所長も不満そうな顔をしてる。

多分、戦闘を中断してあの子を弔う事に納得がいかないみたいだけど、さすがにこの流れで否定的な意見を言う気はないようだ。

「そりゃ結構。じゃあ、大人しくそこで見ててくれや」

そんなセイバーの様子を気にも留めずに慎君は遺体となった少女の額に手を当てる。

「玉藻、頼む」

「はい」

慎君の声に応えた玉藻さんは、懐から取り出した鏡を胸に抱きながらゆつくりと詠唱を始める。

「出雲いずもに神在り」

淡い燐光が鏡を包むと同時に玉藻さんの着物の袖そでからお札が一人で飛び出す。

「審美確かに、魂たまに息吹を、山河水天さんがすいてんに天照あまてらす」

舞い飛ぶお札が洞窟の壁に張り付くと周囲を囲むように鳥居とりいが現れ、そして鏡を中心とした魔力が洞窟内に強力な結界を作り出す。

「これ自在にして禊ぎの証。名を玉藻鎮石たまものしずいし、神宝宇迦しんぼううかの之鏡かがみなり」

お札から集めた魔力を浴びて天高く浮かび上がった鏡を玉藻さんが地面に投げつけると、結界内に魔力が広がると同時に身体の芯が熱くなるような感覚が広がっていく。

「凄い。身体から力が湧き出るみたい」

「はい、魔力の生成量が増加しています。これなら、私単独で宝具の真名解放も複数回は可能です」

「複数対象への支援効果のある礼装……いいえ、この効果は宝具レベルね」

「サンキュー、玉藻。これでやり易くなった」

「いいいえ、このくらいお安い御用です。私もこの洞窟の穢れにはウンザリしていたところですので」

私達が騒ぐのを他所に、玉藻さんと言葉を交わした慎君はお寺を浄めた呪文を唱えるが、眉根をよせながらそれを中断してしまう。

「駄目だな。向こうの泥壺の影響が強くて、大祓の祝詞だとこの子の魂が保たない」

「では、どうなさいますか?」

「氣の出力を上げながら、別口でアプローチしてみるか」

呼吸を整えながら意識を集中する慎君。

次の瞬間、彼の身体から蒼い炎のようなモノが立ち上り、強大な威圧感が洞窟の空気を揺るがした。

……凄い。

感じる力がセイバーとは比較にならない。

あれって、大空洞に入る前に見せられたのと同じ物だ。

ビリビリと大気を震わせたまま、慎君は再び呪文を唱え始める。

「人含道善命報名親子倫元因心顯煉
忍君主豊位臣私盜勿男田畠耘女
蠶続織家饒榮理宜照法守進悪攻撰
欲我刪」

独特のリズムを持って流れる呪文、これって聞いた事がある。

確か、ひふみの唄だったっけ。

お婆ちゃんが神棚に向けて良く唱えてたものと同じだ。

ひふみの唄が終わると、慎君を中心にして風が吹き抜け、洞窟の中の雰囲気が一変した。

先ほどまで感じていた鼻につく生臭さやイヤな雰囲気は消えており、周囲に立ちこめていた紫色のモヤの様な物もその姿は欠片も見えない。

「先輩！ 周囲の魔力濃度が殆どゼロになってます！

それに空気も綺麗になってますっ!!」

「馬鹿な……っ！ 大聖杯を浄化しただと!?!」

マシユに続いて、驚愕の声を上げるセイバー。

そんな私達に構うことなく、慎君は更なる呪文を紡ぐ。

「天切る、土切る、八方切る。天に八違い、地に十の文字。秘音、一も十々、二も十々、三も十々、四も十々、五も十々、六も十々、ふっ切つて放つ、さんびらり」

呪文を唱え終わると、少女の身体の中から小さな光の玉が浮かび上がるのが見えた。

私でもわかる、あれはあの子の魂だ。

「ふう……これで解呪まではOKか。あとはどうやって送るかだけど、この子の歳からして地藏菩薩真言でいいのかね」

「いや、こう見えても彼女は18歳だ。普通に送ってやってくれ」

突然掛かった声に視線を向けると、そこにはキャスターと闘ってい

るはずのアーチャーの姿があった。

しかし、そのアーチャーも洞窟であった時と姿が変わっている。前に流していた灰色の髪はきつちりと上げられていて、腰に巻いていた赤の外套も着込まれていた。

見れば、右の目の下から頬にあった赤い痣も消えている。

「彼は聖杯によって召喚されたサーヴァント。大聖杯が浄化された事で、影響を受けたのでしよう」

首を捻っていると、横に来ていたアナちゃんが説明してくれた。

なる程、彼女も慎君に浄化されたサーヴァントだ。

そういった事もあるのだろう。

しかし、そうなると同じ境遇であるはずのセイバーに変化が無いのが気に掛かる。

「貴様、御子殿はどうした？」

「そのバーサーカーが乱入してきたのでね、勝負は水入りになってしまった。私も急いで駆けつけたからな、奴がどこをほつつき歩いているかは知らんよ」

静かなながらも怒気を多分に含んだデイルムツドの声に、アーチャーは肩を竦める。

「バカ言ってるじゃねえ。テメエ等を追って来てるに決まってるんだろ
うが」

そんな抗議の声と共に洞窟に降りたつたのはキャスター。

大きな怪我はしていないようなので、少し安心した。

「ふん、遅かったな。どこで道草を食っていたのかね」

「殆どタッチの差だったじゃねえか。それに一方的に言い捨ててトンズラこいた奴が、どの口が言いやがる」

「コラ、故人の前だぞ。喧嘩すんな」

慎君に諫められた二人は状況が状況なので、さすがにバツが悪そう
だ。

「アーチャー。あんた、彼女の知人なのか？」

「……彼女は私の義姉だ」

思うところがあるのだろう、少女の魂を見つめながら詰まらせなが

らも言葉を吐き出すアーチャー。

しかし、姉とはどういう事なのか？

英霊とは、偉業をなした者が死後に祭り上げられて成るモノだと聞いた。

彼女の弟ならば、アーチャーはこの時代の人間ということになる。

同じ時代に同一の存在がいては、拙いのではないだろうか。

ほら、SFとかにあるタイムパラドックス的な意味で。

「英霊とは時間と隔絶した存在です。その辺の事は問題ありません」

アナちゃん曰く問題ないらしい。

その理由は全く分かんが、英霊がそう言うなら私が気にしても仕方ないな！

「そうか。なら、彼女の冥福を祈ってやってくれ。その方が彼女も喜ぶだろう」

「ああ」

アーチャーが黙祷を始めると、敵味方限らずに場にいたみんながそれに倣う。

穢れが晴れた静なんか空気の中、慎君が紡ぐ読経が流れる。

それが終わって目を開くと、光の柱の中で少女が、彼女によく似た女性と共に天に昇っていくのが見えた。

「礼を言おう、若き神官よ。其方のお陰で、我が主の魂は天に還ることができた」

今までになかった渋く落ち着いた男性の声に目を向けると、そこにはバーサーカーがいた。

いや、先ほどまでの狂気が失せた理知的な瞳と、美形というよりも男前な顔は、もう狂戦士という言葉は似合わないだろう。

「気にしないでくれ、神職としての務めを果たしただけだ。アルケイデス、いやヘラクレスか」

「一目で我が真名を見抜くとは、如何なる絡繰りかな？」

「俺達の世界には、人の部分が生まれ変わったあんたがいるのさ。今のあんたよりは年若い、顔も体型もそっくりだ」

え？ ちよつと待って。

バーサーカーってヘラクレスだったの？

……よかったあああつ!!

本気で助かった!

ヘラクレスっていったら、私みたいな素人でも知ってるギリシャ神話最強の英雄だよ。

それが狂って襲ってくるなんて、悪夢なんてレベルじゃないよ!!

「異世界か、興味深いな。その話は是非とも聞いてみたいが、どうやら時間のようだ」

苦笑いを浮かべる大英雄、その巖のような身体はゆつくりと金色の粒子へと還っていく。

「狂化が解除されたという事は、聖杯との繋がりも断られたという事。あれだけの大英霊ですもの、聖杯の魔力が無ければ現界を保つのは無理でしょうね」

「でも、所長。アーチャーやセイバー、キャスターに変化はありませんよ?」

「セイバーは分からないけど、アーチャーにはマスター不在でもある程度行動ができる『単独行動』のスキルがあるし、キャスターは仮とは言え貴女がマスターになってるじゃない」

……そうでした。

慎君が武器を広げている間に、隅の方でコチョコチョコやってたから忘れてた。

「こちらの要件を聞いてもらったのに、謝礼の一つもできずに申し訳ない」

「気にしないでくれ。また会う機会があったら、手合わせでもしてくれればいいさ」

「ふっ、楽しみにしておこう。では、さらばだ」

そう言葉を残して、ヘラクレスはこの世界から姿を消した。

大英雄が立ち去った余韻に静まる空洞の中、甲高い金属音が響き渡る。

移した視線の先には、地に突き立っていた聖剣を構えるセイバーが居た。

「死者の弔いは終わった。今度は貴様等が冥府へと旅立つ番だ」

「冬木の大聖杯は浄化されたにも関わらず、その寄る辺によつてこの世に現れた貴方は穢れたまま。セイバー、貴方がこの時代の歪み。――

――特異点の原因ね！」

所長の指摘にもセイバーは表情を変えることは無い。

「その通りだ、星見台の責任者よ。この私を討たぬ限り、この時代が元に戻ることは無い」

「悪いが私はここで手を引かせてもらうぞ、セイバー」

「構わん。イリヤスフィールを救つた者を貴様が害せるなど、元より思っていない」

アーチャーの離脱発言にも動じる気配を見せずに、こちらへ斬りかかるセイバー。

しかし、その凶刃は白銀の刃によつて受け止められる。

「この俺との決着はまだ着いていないぞ、セイバー！」

デイルムツドが振り抜いた剣によつて後方に弾かれるセイバー。

……いや、あれは弾かれたんじゃない、自分で飛んだんだ！

「ランサー、悪いが状況が変わった。貴様と遊んでいる暇はない！」

腰だめに構えた聖剣の刀身に今までにないほどの、強大な魔力が宿る。

ヤバい！ これって宝具の真名解放だ！

「構えろ、盾の乙女。その護りが真実であることを私に証明してみせるがいい」

セイバーの言葉と殺気に、慌てて盾を構えるマシユ。

「させるかっ！」

セイバーの意図に気付いたデイルムツドが阻止しようとしているが、間に合いそうにない。

どうする？ さつき対処してくれたヴァーリ君は動きそうにないし、マシユのスキルじゃ止められない。

「先輩、宝具の使用許可を！」

そうだ、河原でキャスターと模擬戦をしたお陰で、マシユも宝具が使えるようになったんだった！

「お願い、マシユ！」

「はい！ 真名、偽装登録……宝具、展開します……っ!!」

掛け声と共にマシユが盾を地面に突き立てると、私達の前に強大な魔力障壁が展開される。

相手は星が鍛えた地上最強の聖剣、防ぎきれるか!?

ううん、これが失敗したら私達だけじゃないく、後ろにいるバラキエルさんや朱璃さんもただじゃすまないんだ。

絶対に防がなきゃ……っ!!

「卑王鉄槌……極光は反転する。光を呑め！ 約束された勝利の剣
エクスカリバー・モルガン

!!」

下段から天に向けて振り抜かれた刃から迸る魔力の奔流。進路の地面を抉りながら向かってくる、先ほど以上の魔力波に心臓が竦み上がりそうになるが、私だけが逃げる訳にはいかない。

全身を強張らせて衝撃に供えるマシユに駆け寄った私は、盾を支えるマシユの手に自身の手を重ねてありったけの力で踏ん張る。

「マスター……」

「マシユだけにこんな重荷は押し付けられない。だから私も一緒に支えるよ」

「……っ、ハイ!!」

マシユと二人、覚悟を決めて聖剣に備える私達。

「ケイイイイッ!!」

盾の内側で目を閉じて歯を食いしばっていると、前から気合の入った掛け声が聞こえた。

何事かと思つて盾の影から顔を覗かしてみると、私達の前に立った慎君が体の前で回した手で次々と聖剣の波動を弾き飛ばしているではないか。

呆然としている私達の前で木で木を打つようなカーンツという音を残して、聖剣は完全に防ぎきられてしまった。

「マ・ワ・シ・受ケ………見事な………」

「聖剣でも邪剣でも邪聖剣でも持って来いやア……」

ヴァーリ君の眩きを受けた慎君の横顔には、もの凄く獰猛な笑みが

浮かんでいる。

さすがにこれには、一同ビックリである。

平然としているのはヴァーリ君と慎君だけで、サーヴァントの面々
はもちろん、他の姫島家の人達も啞然としている。

所長にいたっては、シヨックで泡を噴いて気絶する始末だ。

「うむむ。独歩ちゃんから教わった廻し受けに合気鏡殺を応用して、跳ね返すんじゃないかと散らす事に重点を置いてみたんだが、上手くいったな」

「やるじゃないか。それはビーム対策か？」

「ああ。ビーム系を撃たれると、合気鏡殺じゃ防ぐのが精一杯だからな。アプローチを変えてみたんだ」

「いくら伝説の古武術とはいえ、素手でビームと闘うなんて想定してないだろうからな」

「だからこそ、技を受け継ぐ者はその時代に合わせて、改良・進化させていかなければならんのだよ」

なんかまた無茶苦茶な事を話し始めるヴァーリ君と慎君。

ビーム相手に素手？

英霊のマスターなんかやってる私が言うのもなんだが、どんな状況なんだ？

「慎さん！ 今のは私と先輩で必死に防ぐ場面だと思っただけです!!」

みんなが金縛り状態の中、珍しく怒っているマシユが慎君にクレームをつける。

そうだそうだ、今のはどう考えても私達にスポットが当たる場面だろ！

『聖剣を受け止めたいのか』と聞かれれば全力でお断りするが、それとこれとは別問題だ。

ただでさえ濃いメンバーばかりなのに、ここで出番を潰されたら私とマシユが空気じゃないか！

「いや、すまん。空気を読むべきかと考えたんだが、こっちも身内の安全が掛かってるからな。より安全な策を取らせてもらった」

キツパリと言い切る慎君に反論の言葉が出ない。

うぐう……、言い返したいけど家族の命がかかってるんなら仕方ない。

誰だってそうする、私だってそうする。

「馬鹿な……」

「私の聖剣を素手で弾くだと……」

未だにショックから立ち直れていないセイバーとアーチャー。

その多大な隙を見逃さない者がいた。

風を巻いてセイバーの懐に飛び込む緑の影、デイルムツドだ。

慎君から貰った剣は肩と背の鞘に収まり、その両手にあるのは朱と黄の槍だ。

「穿て、破魔の紅薔薇！ 抉れ、必滅の黄薔薇!!」

真名を解放された二つの槍。

初手の朱い長槍がセイバーの胴体の鎧を消し去り、次に繰り出された黄の短槍が彼女の心臓に突き立つ。

「不意打ちなどとは言うなよ、セイバー。一騎打ちの礼節を破ったのは、我が主の家族を狙った貴様が先だ」

半ばまで赤に染まった短槍の血振りをしながら、デイルムツドはセイバーから離れる。

その顔には怒りとやるせなさが浮かんでいる。

「……まさか、このような無様を晒すことになるとはな」

自嘲的の笑みを浮かべながら立ち尽くすセイバー。

「カルデアの者達が人理修復を達成できるに足るか、試すつもりだったのだろうか？ 仕方あるまい。君の聖剣を素手で弾き飛ばす化け物

がいるなど、誰が想像できるかね」

「白き竜の化身に一度阻まれているのだ、その時点で聖剣が絶対ではないと思うべきだった。結局、運命がどう動こうと私だけではこの末路を迎えるという事だ」

「おい、どういう意味だ、そりゃあ」

諦観の混じったセイバーの言葉にキャスターが声を上げるが、彼女はその冷たい表情を変えることは無い。

「いずれ貴方も知ることになる、光の御子よ。グラント・オーダー、聖

杯を巡る戦いは、まだ始まったばかりだという事をな」

困惑するキャスターを他所に慎君達の方に向き直ったセイバーは、変わる事のなかった鉄面皮を投げ捨て、露骨に嫌そうな表情を浮かべた。

「異邦人たちよ、私の消滅と共にこの時代の変異は修復されるだろう。そうなれば、貴様らもあるべき場所に帰る事になる。正直、貴様たちのような化け物とは顔を合わせたくない。二度と会わない事を祈るぞ」

なんか好き放題言っただけ消滅するセイバー。

横目で見えた慎君達は涼しい顔のままだ。

えーと、怒んないの？

「負け犬の遠吠えに腹を立てるほど狭量ではない」

「まあ、こつちも用は無いから会う必要も無いしな」

なんともドライですこと。

「あんな無茶苦茶な方法で自身の切り札を防がれたんだ、苦手意識の一つも持つだろうさ。まあ、気にしないことだ」

そう言いながら光の粒子になって消え始めるアーチャー。

「おおお!! 俺も強制送還かよー!」

見れば、キャスターもアーチャーと同じく光の粒子と共に姿が薄まっていた。

「貴様もここの聖杯戦争で呼ばれたサーヴァントだろう。さあ、還るぞ」

「家に帰るみたいに言っただけじゃねえよっ! 坊主、槍はここに置いとくからな。カルデアの嬢ちゃんたち、次に喚ぶなら、その時はランサーで頼むわ!」

そう言い残してキャスターとアーチャーはその姿を消した。

「やれやれ、随分とバタバタした撤収だったな」

そう言いながら、キャスターのいた場所に置いてある血色の槍を回収する慎君。

そう言えば、アナって消えてないよね？

「契約した時に寄る辺が、聖杯からマスターに変更になりましたから。

彼が死ぬまで消える事がありません」

「ほー、知らなかった。ところで、カルデアに移籍とかって出来んの？」

「ご主人様、それは無理です。デイルムツドさんもその蛇娘も、術式はカルデアとはいえ極めて特殊な形式で喚ばれています。しかも維持のエネルギーが魔力から氣になってる上に、依り代もご主人様になってますから、カルデアに戻すには存在そのものを書き換える必要があります」

「つまり、返せない」と

「はい。ぶっちゃけ、座に還して再召喚した方が全然早いです」

玉藻さんの結論を聞いた慎君は、力なくその場に崩れ落ちた。

「あの、玉藻さん。私とリリイはどうなんですか？」

「朱乃さんも無理ですねえ。現界維持に魔力を使っているだけ、ご主人様よりはマシですけど、やっぱり依り代が朱乃さんに設定されてますから」

そっか、三騎はカルデアに連れて帰れないのか。

まあ、アナはともかくデイルムツドとリリイは慎君達を主と認めてるみたいだし、野球みたいに移籍なんてできないよね。

「あー。またダーナ神族とオリユンポスに貸しができんのかあ。ハーデス様はまだ分別があるけど、ダグザ様は容赦ないんだよなあ。……割とガチで過労死するかもしれん」

「マスター、オリユンポスの神々と知り合いなのですか？」

「ハーデス様とはなあ。他の方たちとはぶっちゃけ会いたくないから、食事会とか招待されても逃げ回ってる」

アナの問いに地面に寝そべりながら答えていたが、彼女の表情が曇るのを見た慎君は、立ち上がってアナの頭に手を置いた。

「心配すんなって。俺の身内になったのなら、ゼウスでもポセイドンでも手は出させねえよ。一応、対オリユンポスのエキスパートも知り合いにいるからな」

「ふん、オリユンポスを向こうに回して喧嘩か。面白そうだな」

「いや、それは最悪のケースだから。勝手に先走って喧嘩売ったらコ

ロスからな」

慎君とヴァーリ君が軽口を叩き合っていると、カルデアとの通信が繋がりにドクターの姿が現れた。

『すまない、戦闘中だったから通信は控えていた。今の話は聞かせてもらったけど、どうするつもりなんだい?』

「私はリリイと共に帰りたいですわ」

「こつちも連れて帰るよ。下に付いてくれるって言うてる以上、面倒見るのが上の役目だから」

『頼んだのはこちらだしそういう事情なら仕方ないかな。立香ちゃん、マシユ。所長は許可しているかい?』

「いいえ。所長は現在気を失っている為に、この話は聞いていません」

『気絶してる!? 所長にいったい何があったんだ?』

「ちよつとショッキングな場面を見た物で……」

私は目を逸らしながら泡喰っているドクターの問いをはぐらかした。

いや、人間が素手でエクスカリバーの真名解放を弾きました、なんて言えないよね。

『とりあえず、今回のミッションは終了だ。立香君、マシユ。セイバーの持っていた水晶体を回収してくれ。セイバーの異常と冬木の特異点化の原因は恐らくそれだ。その後で、所長と君達をレイシフトで回収する』

「分かりました、Dr. ロマン」

ドクターの指示に従ってマシユが水晶体を回収している間に、私は所長を抱き起こす。

身体を抱えた時に呻いたところを見ると眠りは浅いと思うけど、無理に起こすのは良くないだろう。

「いや、まさか君達がここまでやるとはね。そこの異世界からの闖入者の力もあるのだろうが、これは計画の想定外にして、私の寛容さの許容外だ」

宙に浮いていた水晶に手を伸ばしたマシユを遮る様に現れたのは、緑のスーツに同色の帽子を被った男。

私達カルデアの技術顧問であるレフ・ライノールだった。

「やれやれ、これも48人目の適格者とはいえ、全く見込みのない子供と見逃した私の失態かな」

カルデアであったような柔らかな大人の雰囲気とは打って変わって、此方に向いた糸のように細い目から覗く光は、明らかに私を見下したものだ。

「レフ教授!？」

『レフ!? レフ教授がそこにいるのか!?!』

「レフ……? レフがいるの!?!」

マシユの声にドクターが騒ぎ立て、それに反応して所長が目覚ま
す。

レフ教授はテロ事件の時に現場であるレイシフト管制室にいた事
から、生存が絶望視されていたので驚くのは当然だろう。

「その声はロマニ君か。君も生き残ってしまったとはな、管制室に呼び
出したのに私の指示に従わなかったんだな。まったく——」

瞬間、レフ教授が纏っていた雰囲気が一変した。

纏っていた気配は嫌悪感を催すモノに変わり、こちらに向ける感情
が嫌悪から憎悪に入れ替わる。

「どいつもこいつも統率の取れない屑ばかりで吐き気がするな!」

なんだ、これ……。

「下がっていなさい。あれは人間ではない、悪魔だ」

厳しい顔のバラキエルさんが私達を庇う様に前に出てくれる。

「ふん、招かれざる客の分際で随分とデカい態度だな。部外者ならそ
れらしく、この時代が焼き尽くされるまで大人しくしていればいいも
のを」

「座して滅びを待つような腑抜けでは無いのでな。それに家族が巻き
込まれているのだ、お前の下らん計画に従うわけがないだろう」

鬼気を纏ったレフ教授と真正面から睨みあうバラキエルさん。

しかし、私は二人に構っている余裕はなかった。

意識を取り戻した所長がレフの元に行こうと暴れているからだ。

「所長、落ち着いてください! あのレフ教授は普通じゃありません

！ 危険です!!」

「うるさいわね！ レフが私に危害を加えるワケないじゃない!! 放しなさい、所長命令よ!!!」

「所長!?!」

抑えようとした私の手を振り払った所長は、バラキエルさんの脇を擦り抜けてレフの元に行ってしまった。

「レフ……ああ、レフ、レフ！ 生きていたのね、レフ!! 良かった。貴方がいなくなったら私、この先どうやってカルデアを守ればいいのか分からなかった!!」

まるでぐれた父親を見つけた子供のように、レフ教授に縋りつく所長。

しかし、そんな彼女を見るレフ教授の目は虫けらに向けるように冷淡だ。

「所長！ いけません、その男は……!!」

「オルガ、元気そうで何よりだ。君も大変だったようだね」

マシユの警告を遮る形で所長に優しい言葉を掛けるレフ教授。

その目にギラギラと光る嗜虐の光を見れば、その言葉が偽りなのはすぐにわかる。

「ええ、ええ！ そうなのレフ!! 管制室はテロで爆発するし、レイシフトで送られた街は廃墟だし！ カルデアには帰れないし、出会った現地民は化け物ばかりだし!!」

目に涙を浮かべて、しがみ付いた手に力を込める所長。

レフ教授の顔が嫌悪に歪んでいるのは、縋りついている彼女は見えていないだろう。

「訳の分からない事ばかりで、頭がどうにかなりそうだった！ でもいいの、貴方がいれば何とかなるわよね？ だって今までそうだったもの。今回だって私を助けてくれるんでしょう?」

「ああ、もちろんだとも。本当に予想外の事ばかりで頭にくる」

自身の問いかけの答えを確認しようとした所長は、縋りついていた男が浮かべた邪悪な笑みに表情を強張らせた。

「レフ……?」

「その中でも最も予想外だったのは君だよ、オルガ。君の足元に爆弾を仕掛けていたのに、まさか生き残るとは」

「え……？ ……レ、レフ？ 何を言ってるの？」

「いや、生きているのではないな。君は死人だ、少なくとも肉体的にはね」

「……ちよつと待て。」

今、奴はなんて言った？

動揺を治めるために周辺に視線を巡らせると、慎君や美朱ちゃんが苦い顔をしていた。

実際に死者を鎮めていた彼等があんな表情を浮かべるといふ事は、レフの言葉は真実だといふ事だ。

お寺で言おうとした大事な事って、もしかしてこれの事だったの？
「トリスメギストスはご丁寧にも、残留思念となった君をレイシフトさせてしまったようだ」

「ウソよ……。こんな時に冗談なんて意地悪よ、レフ」

「事実だよ。君は生前レイシフト適性が無かつただろう。肉体を持つたままでは、ここにいられるわけがない。よかつたね、オルガ。君は死んで初めて、あれほど切望していたレイシフト適性を手にしたんだ」

にこやかに笑いながら、レフ教授は所長に向けて祝福の言葉を吐く。

しかし、そこに込められているのはどす黒い悪意だ。

「まあ、その代償としてカルデアに戻る事は出来なくなつたがね。肉体のない君が戻つたら、あとは消滅するしかないのだから」

「あ……ああ……、う、そ……嘘よ、私が死んでいるなんて……」

縋りついていた手を放し、その場に崩れ落ちる所長。

そんな所長にレフは、教師が出来ない生徒に向けるような蔑みの視線を落とす。

「相変わらず理解が遅いな、オルガ。まあいい。そんな君にもわかる様に、現在のカルデアがどうなっているか見せてあげよう」

そう言つて、セイバーが遺した結晶体を掲げるレフ教授。

すると、大空洞の上部に丸い穴のようなモノが現れ、その中に私達の見知ったモノが映し出された。

カルデアの中核である疑似地球環境モデル・カルデアス。

しかし、そのカルデアスはまるで太陽のように真っ赤に染まっていた。

「な……なにあれ？ カルデアスが真っ赤に……嘘、よね？ あれはただの虚像でしょ、レフ」

「いいや、本物だよ。オルガ、君が理解できるように空間を繋げたのさ。この聖杯があればこんな事も可能だ」

目の前の事実と戦く所長を見ながら、聖杯と呼ばれた結晶体を掲げるレフ。

次の瞬間、その柔らかな顔が醜悪な嘲笑へと姿を変える。

「さあ、よく見るがいい、アニメスフィアの末裔！ あれがお前達の愚行の末路だ！ 人類の生存を示す青は何処にも無い！ あるのは燃え盛る炎の色のみ！！ あれが今回のミッションが引き起こした結果！ オルガ、お前の至らなさがこの悲劇を引き起こしたのだ！！」

ここに居る者達を嘲笑う様に声を張り上げるレフ、その様子に所長は血の気が失せた顔のまままで声を上げる。

「ふ——ふざけないで！ 私の所為なんかじゃない！ 私はなんにも失敗なんてしていない！ 私は死んでなんていないッ！！」

怒りが絶望に染まった体を動かしたのか、立ち上がった所長はそのままレフの襟首に掴み掛る。

「あんたどこの誰よ！ 私のカルデアスになにをしたって言うのよお……!?!」

「勘違いするな、あれはお前の物ではない。まったく、最後まで耳障りな小娘だ」

心底うんざりしたような顔で首に掛かる手を振り払ったレフは、座り込む所長へ右手を向けた。

すると所長の身体は宙に浮かび上がり、ゆっくりとカルデアスに向けて進んでいく。

「なっ……!?! 身体が宙に……何かに引っ張られてる!?!」

「言ったはずだ、そこはカルデアスに繋がっていると。このまま消滅させるのは簡単だが、それではいささか芸が無い。オルガ、最後に君の願いをかなえてやろう」

「願い……!?! レフ、なにをするつもりなの!?!」

「君の宝物とやらに触れるといい。死に逝く者への最後の慈悲だ、遠慮なく受け取ってくれ」

「まさか……私の宝物ってカルデアスの事……!?!」

レフの意図を理解した途端、所長は絶望の表情を浮かべて滅茶苦茶に暴れ始める。

「やめて!・ やめて、レフ!?! カルデアスに、あんな高密度情報体に人間が触れたら……!?!」

「ああ。カルデアスはブラックホールと変わらない。それとも今の姿の通り太陽かな。まあ、どちらにせよ。人間が触れば分子レベルで分解される地獄の具現だ。遠慮なく無限の死を味わいたまえ!!」

「いやあああああつ!?! 誰かつ!・ 誰か助けて!!」

レフの狂笑と所長の悲鳴が響く中、あの男の鬼気に当てられた私達は動くことが出来ない。

なんとか歯を食いしばって睨み付けていた私は、いつの間にか慎君がレフのすぐそばにいる事に気付いた。

「あんた、おもしろい事してんな。俺も混ぜてくれよ」

突然現れた慎君に若干驚きの表情を浮かべたレフだったが、彼の言葉聞いて再び小馬鹿にした笑みを浮かべる。

「ふん、いいだろう。そんなに死にたいのなら、あの小娘の次にカルデアスに放り込んでやる」

宙を移動する所長に視線を戻す、余裕綽々なレフ。

彼がエクスカリバーの魔力波を素手で吹っ飛ばしたの、見ていなかったのかな?

「勘違いすんなよ、おっさん」

言いながら数歩下がり、スタンスを広げながらリズムを取る様に身体を揺らし始める慎君。

「——お前が飛ぶんだ」

「何っ」

「あたあっ!!」

レフが慎君に視線を戻すよりも早く、その胸板にワンステップからの足刀が突き刺さる。

「ぐおおあっ!!」

悲鳴と共に吹き飛ばされたレフは、次元の穴の手前にいた所長を軽くぶつちぎると、一直線にカルデアスに向けて飛んでいく。

「だぶっ!? あびっ!? がぶっ!? あぶううっ!?」

装置を保護する外殻をぶち抜く度に珍妙な悲鳴を上げたレフは、そのまま深紅に染まったカルデアスに突っ込んで、その姿を消した。

「ゴンズ様よりは飛んだかな?」

「ふむ、無事世界を超えたか。新記録だな!」

目の前で起きた惨劇に、満足げに頷くヴァーリ君。

「というか、ゴンズ様って誰なの?」

「ねえ、ヴァーリ君。新記録って何のこと?」

「ああ、奴が戦闘で吹っ飛ばした敵の飛距離の事だ。『禍の団』のテロ対策で、あいつは例の人間ホームランを打ちまくってるからな。今では『アララト山のホームラン王』なんて異名も付いているくらいだ」

「ちよっ!? 聖山になにしちやってるの、あの兄貴!」

……ツツコまない、私はツツコまないぞお。

「さて、オルガマリー女史。さっきのクソ野郎に聞いたと思うけど、貴女はもうこの世の人間じゃない」

レフが消えた事で術から解放された所長を助けた慎君が、へたり込む彼女に言葉を掛けている。

正直、今でも信じられないが所長は本当に死んでいるのだろう。

「ねえ、私は本当に死んでいるの?」

「ああ、今の貴女は魂の身の存在で、頭の上から伸びてる魂と肉体を繋ぐ霊子線が切れてるからな」

「でもっ! ちゃんと身体はあるじゃない!」

「その身体は剥き出しの魂魄が自己防衛の為に、周囲の魔力を使って造りだした義体だ。現にあの穴の前に来た時、身体が消えていくのを

感じただろ？」

寄る辺としていた事を看破された所長は、小さく呻きながらその場にへたり込んだ。

俯いた顔の下には、ポツリポツリと落ちた雫が小さな染みを作っている。

「すまない。本当はもう少し早く伝えるつもりだったが、街に立ち込める魔力や穢れの濃さが酷かったから、下手に伝えると貴女を保護していた義体が解けて悪霊に堕ちるおそれがあったんだ」

顔を上げないままの所長に言い聞かせるように、慎君は自身の判断を語る。

破天荒な行動ばかりが目立つけど、仕事に関してはしっかりと考えているみたいだ。

「……助けてよ」

所長の口から零れたか細い呟き、それに気付いた慎君が口を開く前に所長は彼に掴み掛った。

「助けてよ、ねえ！ 貴方、無茶苦茶な力持つてるじゃない！ 空を飛んだり、聖剣を素手で弾いたり！ だったら、私を助ける事だつてできるとでしょ!!」

必死の形相で放つ所長の叫びに、慎君は答えない。

申し訳なさそうな表情を浮かべながら、ただ彼女を見ているだけだ。

「私は……私は死にたくないのツ！ だって、まだ褒められてない！

誰も、私を褒めてくれてないの!!」

所長の叫びに私は心臓を掴まれるような気持だった。

この特異点で、いやカルデアで出会ってから、私は所長を個人として見ていただろうか？

説明会で追い出された時のイメージを引きずったまま、我儘ですぐに取り乱す名家のお嬢さまという色眼鏡で見ていたのではないか。

「……すまないが無理だ」

所長の身も世もない懇願に対する慎君の答えは無情だった。

「魂が身体から離れてから時間が経ちすぎてる。それにレフという男

の言葉を信じるなら、その肉体の方も絶望的だろう。身体が無事なら何か手はあったかもしれないが、それが無ければ俺にはどうする事も出来ない」

「なんでよっ!? アンタの母親は生き返ったんでしょ!? だったら私も蘇らせられるはずじゃないっ!!」

「お義母様のケースは偶然が重なって起きた特例中の特例、貴女に同じことを起こすのは不可能です。それよりも、早く黄泉路に旅立つ覚悟を決めなさい。そんな未練を残しては、地縛霊となってこの地で永く苦しむことになりますよ?」

光を背に神々しさすら感じる玉藻さんの言葉に、所長はゆっくりと継りついていた手を放した。

そして、その場に伏せると大声で泣きだしてしまふ。

「どうしてっ! どうしてこんな事ばかりなの!?! 誰も私を評価してくれなかった! みんな、私を嫌ってた!! みんな、みんな! アニムスファイアの後継者としてしか見てくれなかった!! 生まれてからずっと、ただ一度も、私個人は誰にも認められなかったッ!!」

大空洞の中に所長の慟哭が響き渡る。

それはカルデア所長ではなく、オルガマリー・アニムスファイアという少女の叫び。

魔術師として、貴族として梓に囚われ続けた彼女の心の奥底にあった本当の願いだった。

誰もが口を開かない中、ただ一人所長の元に向かう影があった。

「所長」

震える所長の肩に手を置いたマシユは、静かに声を掛ける。

「マシユ」

「私は所長の事を尊敬しています。私と変わらない歳で、カルデアの代表として外部の方々と交渉し、専門家の多いスタッフの皆さんに指示を出す。貴女が所長に就任してから今まで、どれだけ頑張ってきたかを私は見ていました。お父上やレフ教授の力を借りたかもしれないけれど、今のカルデアがあるのは所長、貴女のお陰だと私は思います」

まるで小さな子に語り掛けるようなマシユの言葉に、所長は顔をくしゃくしゃにして涙を流す。

「どうして……わたし、たち親子は……あなたに、ひどい事しか……してこなかったのに……」

「だって、貴女は私を気にかけてくれたから。あの部屋に閉じ込められていた私を外に出して、カルデアの職員として扱ってくれた。私は貴女に救われたんです」

しゃくり上げる所長をマシユが優しく抱き寄せると、彼女はその胸の中で子供のように泣き続けた。

そうして泣き続けた所長は、マシユの胸から顔を上げると慎君に頭を下げた。

「ごめんなさい。色々助けてくれたのに、貴方には酷い事を言っちゃいました」

「自分の死を目の前に突きつけられていたんだ、取り乱すのは仕方がないさ」

慎君が謝罪を受け入れたのを見届けると、今度は私の方に向き直す所長。

目は赤く泣き腫れているけど、それは一組織の責任者として顔だった。

「藤丸立香、ロマニや他の職員も聞いているわね。これから、カルデア所長として最後の命令を与えます」

凜としたその声に、私は居住まいを正す。

これは所長の、オルガマリー・アニムスファイアの遺言だ。

しっかりと受け止めないといけない。

「カルデア全職員は最後のマスターである藤丸立香をサポートしつつ、全力で人理修復に当たりなさい！ カルデアスの表示が事実ならば、これは人類存亡をかけた戦いになるでしょう！ 故に逃げる事も負ける事も許されなさい！ 人類の未来は貴方達一人一人の肩に掛かっている事を自覚して、己の役割を全うしなさい！ なお、これ以降のカルデアにおける全権はロマニ・アーキマンに一任します。各職員は彼の指示に従って行動するように！ 以上!!」

「はいっ！」

『ごちらも全職員、了解です。所長、お疲れ様でした』

「ありがとう、ロマニ。最後に——」

そう言うのと、所長はマシユの方を向き直り、その手を取った。

「貴女には感謝してるわ、マシユ。やり残した事も未練も山の様だけど、貴女がくれた思いがあるから私は逝ける。本当にありがとう」

「所長……」

「最後に人類の未来なんてとっても重いモノを押し付けてしまうけど、身体に気をつけて最後まで頑張って」

「はい……！」

目を潤ませるマシユに微笑みかけた後、所長は慎君の方に踵を返した。

「もういいかい？」

「はい。お願いします」

所長の言葉を受けて読経を始める慎君。

「自分を誰かに認めてもらいたい。マシユちゃんがその願いを叶えたから、最後に彼女は救われたのね」

ゆつくりと所長が天に召される中、私は朱乃さんと言葉を交わしていた。

「……私は所長に何も言えませんでした。所長の叫びに彼女を凶星を突かれたような気がして」

「立香ちゃんは、所長と付き合いは長いの？」

「いいえ。今日はじめて会いました」

「なら仕方ないわよ。彼女だって貴女には所長として接していたでしょうしね」

そうだろうか。

「貴女がそれを気にかけているのは、きっとこの街にいる間に彼女を仲間として見れるようになったからだと思うわ。上司と部下の間なら、そんなこと気にしないでしょ」

朱乃さんの言葉を聞いた私は駆けだしていた。

勘違いかもしれないし、所長は私の事を何とも思っていないかもし

れない。

でもこのまま何も言わなければ、私はきつと後悔する。

「所長！ 私はこの街に来てから、貴女の事を仲間だと思ってました！」

言いたい事が纏まらないままに叫んだ声を聴いた所長は、こちらに微笑みかけて光の柱と共に姿を消した。

「先輩……」

「マシユ。私の言葉、所長に届いたかな？」

「きつと届いてますよ」

『お疲れ様、二人共。その特異点もじきに修復が始まる。レイシフトで呼び戻すから、レフが聖杯と呼んでいた物を回収してくれ』

ドクターの通信で余韻から帰った私達は、レフがいた場所に落ちていた結晶体を回収する。

「よし、『無限の闘争』も使えるようになってるな。そんじや俺等も撤収するぞ」

慎君の声に目を向けると、何も無いはずの空間に両開きのガラス扉が出来ていた。

「先輩……」

「何も言わないで」

その……あれだ。

彼は私達の常識の外で生きているんだよ、きつと。

だから、いちいち驚いていても仕方がないんだ。

「それじゃあ、皆さん。俺達はこれで引き上げます」

一行を代表して、慎君が私達に頭を下げる。

もうお別れか。

トンデモない人たちだったけど、もう会えないと思うと少し寂しい。

「カルデアのマスターよ、世話になった。機会があればまた会おう」

「リツカさん、マシユさん。これから頑張ってください！」

「一度は敵対した私に、貴女たちへかける言葉はありません。……身体に気を付けて」

最初にサーヴァント三人が、別れの言葉を残して扉を潜った。

「マシユちゃん、また機会があったら会おうね」

「はい、美朱さんも気を付けて」

「今回の戦いは物足りなかったな。もっと規模の大きい戦いが起こったなら、声を掛けてくれ」

「がんばってね、立香ちゃん。悩んだ時は一人で溜め込まないで。今みたいに誰かに話せば、気づかない事が見えてくることもあるから」

「ありがとうございます、朱乃さん」

次にヴァーリ君、美朱ちゃん、朱乃さんが立ち去った。

というか、ヴァーリ君から鎧に付いてた蒼い宝石を貰ったんだけど、声を掛けろって通信機か何かなの？

「では失礼する。二人共、がんばってくれ。D r. ロマンも大変だろうが、彼女たちの事を支えてあげてほしい」

『ええ。ベストを尽くします』

「カルデアの皆さん、ありがとうございます。私が現世に出る事ができたのは皆さんのお陰です。何も返せなくて心苦しいですが、お暇させていただきます」

『彼女達が無事だったのは、あなた方の助力があったからです。こちらこそ、ありがとうございますました』

ドクターと言葉を交わして、姫島夫妻がみんなの後に続く。

「それじゃあ、俺も行きます。二人共、ありがとうな」

「こちらこそ。みんなサーヴァント以上にトンデモなかつたけど、一緒にいれて楽しかったよ」

「私もそう思います」

「そうだ。これを受け取ってくれ」

そう言っって慎君は何かを私に手渡してきた。

確認してみると、紅い色の『健康御守』と銘打たれたお守りだった。「ウチの神社で売ってるお守りだ。中の護摩は俺が作ってるから、少しは効果はあると思う」

「ありがとうございます。マシユの分もあるんだ」

「ありがとうございます、慎さん」

「いやいや。それじゃ、皆を待たせてるから、俺も行くよ」
「うん」

「お元気で」

「ああ、皆もがんばってな」

そう言つて慎君が中に消えると、ガラス戸が締まると同時に扉は煙のように掻き消えた。

「不思議な人たちでしたね」

「うん。でも、いい人たちだったよ」

『立香ちゃん、マシユ。レイシフトの準備が出来た、これから二人を呼び戻すからね』

別れの余韻に浸る間もなく、私の視界はこの街に来た時のように光に包まれていく。

こんな事言うのもなんだけど、もう少し空気を読もうよ、ドクター。



こうして、私達の最初の任務は終わりを迎えた。フェースト・オーダー

カルデアに帰ってきた後は本当に大変で、レイシフトの影響が無いかと健康診断を受けたり、ヴァーリ君の宝石を解析にかけて、何にもわからないとダ・ヴィンチちゃんがムキになったり。

他には、私やデミ・サーヴァントになったマシユが完全な健康体だった事にドクターが狂喜乱舞したりと上を下への大騒ぎだった。

セイバーとアーチャーから回収した聖晶石で、冬木のキャスターやコルキスの女王メディアが来てくれたりと、戦力も少しは増した。

冬木の特異点を復元してからひと月、今度はフランスで特異点が発見された。

次の場所ではどんな事件が待ってるかは分からないし、もう彼らの助けは無いけども、あの時と同じくベストを尽くそうと思う。

「立香ちゃん、準備が出来たよ。コフィンの中に入れてくれ」

「はいー」

ドクターの指示に、私は次の戦場に足を向けた。

閑話 『駒王神社業務日誌 7〜8月』

ここは駒王神社の社務所。

年季を感じさせる和室に置かれた机に、以前より少々痛みが増した日記帳が一つ。

表題の『駒王神社業務日誌』の文字は少し滲^{にじ}んでいる。

◇

7月■●日（晴）

疲れた……超疲れた……。

今日は応援依頼をキャンセルして、お袋と新規参入メンバーの身請けについての説明行脚だ。

行き先はダーナ神族とオリュンポス、そして姫島の老家。

同行者はデイルムツドとリリイ嬢の二名にした。

アナ嬢はポセイドンやアテナとの確執があるので、同行は無しにしてもらった。

アイルランドでは、デイルムツドの育ての親である妖精王オエングス様や海神であるマナナン・マクリル様が、再会できたことに無茶苦茶喜んでた。

リリイ嬢は平行世界のアーサー王、その不完全な側面という事であるまり話題には上がらなかった。

もつとも、たまたま居合わせたアーサーとルフエイ嬢に思いっきり構われてたが。

アーサーよ、お前が救いようのないシスコンなのは知っている。

しかし、鼻から愛を溢れさせながら『お兄ちゃんと呼んで下さい』などど迫^{せま}るのは拙いと思うぞ。

さて、今回もダグザ様の無茶ぶりが来るかと身構えていたのだが、なんと何もなかった。

むしろ俺が二人を身受けする事や、デイルムツドと主従契約を結んでいるのを歓迎して、酒宴まで開いてくれた。

あれか？

クールの兄貴も含めてダーナ神族と縁を結んで優遇されようとするのだろうか？

まあ、あの会議で三勢力への肩入れ具合を見せたから、その辺を狙うのは分からんでもないのだが。

なににせよ、話がスムーズに終わったのはありがたい。

次にオリュンポスだが、話し合いは彼らの本拠地であるオリュンポス山の神殿で行われた。

個人的には冥府でハーデス様とサシで話を付けたかったのだが、こつちが話を持ちかけたのだから仕方ない。

神殿では居並ぶ神々の好奇や欲望にギラギラした目に晒されて、スンゲー居心地悪かった。

なので、俺の知己という事でハーデス様が会議を仕切ってくれたのは助かった。

さて話し合いの結果だが、オリュンポスへの応援依頼の優先度を上げるといふ事でカタが着いた。

ゼウス神やポセイドン神はもつと吹っかけたがっていたが、ハーデス様が愛剣を手に威嚇して止めてくれた。

そもそも、メデューサを初めとするゴルゴン三姉妹自体は、オリュンポスが台頭する以前に崇拜されていた土着の女神である。

それに加えて、英雄ではなくオリュンポスに恨みを持つ怪物の側面がある彼女を引き取ると言っているのだ。

オリュンポスに利がある現状からさらに吹っかけて、俺との関係を悪化させるのをハーデス様は嫌がったのだろう。

ペルセポネ様は怪物のイメージが先行したのか、引き取って大丈夫なのかと心配してくれた。

ああ、マジでこの夫妻がオリュンポスの良心だわ。

アナ嬢が女神の姿だと解った途端に自分が身受けするとはざいたポセイドン神や、会議の後に自室に來いとかブツこいたアフロディーテとはエライ違いである。

そして最後に姫島家だが、こつちに帰ってきた時には解決してい

た。

なんでも、ウチに来た爺ちゃんと婆ちゃんが朱乃姉に土下座で今までの事を謝罪。

お袋の取り成しもあって和解が成立したとか。

俺達があれば言ってもまったく効果が無かったのに、お袋相手だとどんだけチョロイんだ、朱乃姉。

まあ、学校で会った時に爺ちゃんが謝らなかつたのは、お互いの立場故だったしな。

あの時はジオテイクス小父さんやサーゼクス兄がいた為に、互いの立場が『祖父母と孫』じゃなくて『グレモリー家の一眷属と姫島家の先代当主』という形になってしまっていた。

さらに言えば、朱雀さんに当主の座は譲ったものの、世間には今も爺ちゃんが姫島の顔だと思われている。

事情はどうあれ、そんな爺ちゃんが公衆の面前で悪魔の一眷属に頭は下げられない。

バカバカしいと思うかもしれないが、こういう面子というのは組織には必要なのだ。

だからこそ、朱乃姉と爺ちゃん達を会わせる時が来たら、『公』ではなく完全な『私』の立場としてお願いしようと思ってたのだが。

なんにせよ、うまくいったのはめでたい。

これで俺の胃も救われるだろう。

もつとも、『トワイライト・ヒールング聖母の微笑』の効果で胃潰瘍いはいようにはならないんだけだな。

追記 —— 本日の千人組み手 ——

対戦相手：鬼巫女

ついにMUGENの屈指のイカレキャラに挑戦だ！ と思つたら、黄金の賽銭箱が現れて『キングクリムゾンツ!!』という声と共に意識が消えたでござる。

うん、意味が解らない。

観戦していたヴァーリ曰く「トンでもねえ！ 急に死におつた!?!」との事らしい。

そういえば、將軍様が言った。

「神」ランクと闘うときは、因果律操作が最低限の必須項目なんだって。

はははははっ!! ……………笑えよ。

7月■☆日(雨)

—— 本日の千人組み手 ——

対戦相手：デススター

戦闘力がフリーザ様に迫ったことだし、俺もそろそろ惑星破壊に挑戦しようと思う。

対戦相手はスターウォーズから惑星兵器の『デススター』

本物の惑星じゃないから大丈夫! と気合を入れたのもつかの間、

デススターの直径と同じくらいのゴン太ビームによって消滅した。

全力全開の天地神明掌で1パーセントくらい外殻が削れたのが戦果とは、どうやら俺は乙戦士には程遠いらしい。

今回の発見は、宇宙空間でも問題なく活動可能なのがわかった事か。

あとは、生身で大気圏突入に耐えられれば、『江田島塾長』や『ザ・松田』のようになれるだろう。

高天原から応援と転生悪魔の対処依頼が山のように来ていた。

たった一日休んだだけなのに、なんでこんなに忙しいのか。

相変わらず、ウチの職場はブラックである。

さて、本日は中東から南米、中国を巡る事になった。

中東ではシユメール神話の神々が、テロ対策でハッスルしてた。

『禍の団』を追っ払えば追っ払うほど信仰が上がるんだから、張り切るのほわかるけど。

あと、イシユタル様に下僕になるか宝石を貢ぐか選べとか言われたので、『フハハハハハハッ! 愛い奴め!!』と魔のショーグンクローで泣かせてしまった。

まあ、事情を知ったアヌ様が謝って来たので外交的には大丈夫だろう。

次の南米ではケツアル・コアトル様にルチャ勝負を挑まれたので、

炎を纏った変形パイロドライバーを順逆自在の術で返して地獄風車落として勝利。

試合後に「あんな手品、ヒキョウでース！」とクレームが来た際、心の中で思わず同意してしまったのは内緒だ。

しかし、そこから30人転生悪魔を治療させられるとは思わなかった。

駒落とし三十連発とか、並の術師ならミイラになってんぞ

陽気なツラしてえげつないな、あのラテン系。

最後に中国。

テロ屋共がクソ広い国土で広域展開して攻めて来た所為で一時は手が回らなくなるところだったが、奴等に同行していた英雄派が上手く内部かく乱してくれたお陰で事なきを得た。

実はこの英雄派、実は各神話勢力が『禍の団』に送り込んだスパイだったりする。

主な後ろ盾は閔帝聖君様と帝釈天様^{たいしゃくてん}。

自身の宿す神滅具『黄昏の聖槍』^{トウル・ロンギヌス}を狙った悪魔に、育った村を滅ぼされたリーダーの曹操を初め、彼らは神器や特殊な出生から三勢力に狙われ、大事なモノを失った人間の集団らしい。

そんな英雄派の目的は『自分たちのような人間を生み出さない事』多神勢力の応援を初めて間もない時に、帝釈天様から紹介されたのには本当に驚いた。

その際にオーフィスに協力していた事を聞いてみると、どうも俺の事を感じた奴によって無理やり従わせられていたらしい。

あのウザい演技はスパイだとバレない為の工夫で、オーフィスを逃がしたのも『オーフィスを失う事で、禍の団が空中分解するのを防ぐため』だったそうさ。

まあ、せつかくスパイとして入り込んだのに、空中分解なんてされたらタマらんわな。

それ以来、チョコチョコ現場で会っては協力する関係になっていく。

そんな彼らの悩みは人員が不足している事だそうさ。

なんでも上級悪魔と闘り合えるのは、曹操とゲオルク、北欧神話の英雄であるシグルドの末裔のジークフリートにジャンヌ・ダルクの魂を受け継ぐ女性ジャンヌくらいなんだと。

今日も仕事が終わった後で、愚痴られてしまった。

……アルケイデス、紹介してやろうかな。

7月■▼日(雨)

—— 本日の千人組み手 ——

対戦相手：将軍様

キン肉マンとの戦いに備えて将軍様と対戦。

将軍様曰く、今日は因果律操作の方法を身体に教え込むとの事。

この時点で嫌な予感しかなかったが、ふたを開けてみるとやはり地獄モードだった。

本気になった将軍様はマジでヤバイ。

どのくらいヤバイかと言うと、まずこっちの因果を操作されるので打撃が当たらない。

ならばと組み付いてみれば、常時順逆自在の術が自動発動しているような感じで、技が全て跳ね返ってくる。

将軍様が言うには、『通常ランクと神ランクでは勝負にならないのは、通常ランクの者が常に神ランクに因果を握られているから』だそうだ。

その後に『その気になれば、相手の因果を死という形に書き換えて、触れずして即死させる事も可能』と続けられた時には、さすがに言葉が出なかった。

というか、実際にやられたし。

そこから同じ方法で20回ほど殺されては挑戦するという、強制デスマラソンの開始である。

まあ、お陰で漸く自身の因果を操るコツを掴む事ができたが。

そも、『真人』の条件の一つである『内功の究極』は、自身の中に広がる宇宙を掌握することにある。

自分の中に広がる宇宙とは、それ即ち己が因果を指す。

つまり、内功を本当の意味で極めれば、自身の因果をモノにする事

も可能という事だ。

今まで散々使ってきたけど、まだまだギースの猿真似に過ぎなかったわけだな。

こうしてポルナレフ状態で死ななくなった事に調子に乗っていると、進化型地獄の断頭台で一撃死した。

ダイヤモンドを超える強度のロンズブレイトに身体を変えた上に、地獄の断頭台で首に掛かった左足に更に右足と右肘を乗せることで威力を倍化する凶悪仕様。

即死して分からなかったが、食らった時にこっちの首が飛んだのはなかるうか。

こんなオーバークイルな技を開発するとは、さすが將軍様。

というか、誰に使うつもりなんだろうか、これ。

仙豆っ！ 食わずにはいられない！！

オリュンポスの神は他人に迷惑を掛けないと死ぬ病気にでも罹かかっているのだろうか？

鍛錬を終えて出張の準備をしていると、天照様に呼び出された。

高天原に行ってみると、天照様とハーデス様、日本の海神である大綿津見神おおわたつみのかみ様に、罪人のように縛られて床にひざまずく。ポセイドン神がいた。

この時点で大体の察しがついたが一応話を聞いてみると、ポセイドン神……もう呼び捨てでいいや。

ポセイドンが大綿津見神様の娘である、玉依毘売たまよりひめ様に手を出したそうだ。

玉依毘売様というのは、初代神武天皇陛下の母親である。

幸い、寸でのところで大綿津見様が止めたので一線は超えなかったが、強姦に近い形で関係を迫ったそうだ。

その話を聞いた瞬間に、ポセイドンの顔面にヤクザキックを叩き込んだ俺は悪くない。

父親である大綿津見様はもちろん、今回の件を聞いたハーデス様と天照様の怒りは凄まじいものだった。

ハーデス様は高天原の神殿であるにもかかわらず、愛剣を抜き放つ

て『首を出せいっ!!』とポセイドンを斬首しようとし、天照様もそれを止めようとしなかった。

やった事は心底クズだが、こんな男でも地中海を治める神である。

さすがに死なれるのは拙いのでハーデス様を止めると、何故か俺がポセイドンと闘う事になった。

天照様曰く『試合と言つても懲罰的ちようばつな物なので、死ぬギリギリまでボコボコにしてやれ』との事。

要するにリンチですね、わかります。

ポセイドンが視線で断るように念力を飛ばしていたが、何かと世話になって二柱に頼まれてはノーとは言えない。

断じて、ファイトマネーの三億円と神社の母屋を増設する権利に目が眩んだわけではない。

7月▲◇日(雨)

本日の千人組み手はお休みである。

その代わり、先日の件で対オリュンポスのエキスパートに稽古をつけてもらった。

その相手とは、言わずと知れた『スパルタの亡霊』クレイトスさんである。

対戦相手に指定して事情を説明すると、彼は二つ返事で快く引き受けてくれた。

さすがは単身でオリュンポスを滅ぼしただけはある。

さて、諸君。

彼の母国であるスパルタとは、スパルタ教育の語源となる程に厳しい訓練が横行した国である。

何でも生まれた赤子が虚弱や奇形だったりした場合、谷に捨てる風習があつたとか。

当然ながらクレイトスさんとの実戦訓練は、それはそれは厳しいモノだった。

ある時は平行世界のヘラクレスから？ぎ取ったライオンの頭部を模したガントレットと殴り合い、またある時はステージに自然発生していたゴルゴンを武器にして戦った。

その際に相手が投げた来たゴルゴンの頭を別のゴルゴンを振り回してホームランするという、全く新しいスポーツを考案してしまったが、どうでもいい事だ。

まあ、そんなこんなで三戦三勝したお陰で取り敢えずの合格は受け取る事ができた。

懲罰仕合で万が一にも負けたら本気で格好がつかないので、これで一安心である。

7月▲☆日(雨)

—— 本日の千人組み手 ——

対戦相手：H I G E

本日の対戦相手は、MUGEN屈指のネタキャラと名高いH I G Eである。

このH I G E、元は『キングオブファイターズ2000』のラスボスである『クローンZERO』の改造キャラなのだが、原型を留めないくらいに過剰なネタ改造を施された為に、別キャラ枠で登録されている猛者だ。

開幕からGGのデイズイーのパクリか、背中から生えたウンディーネに抱かれて登場してきた。

怪しい黒のバトルスーツを着たオールバックに髭の厳ついおっさんが、青白い女神像に姫抱きされる構図は全く似合っていない。

あと、いちいち発光するな。

さて、肝心の試合内容だが、もはやカオスの一言である。

K9999の『月・・・』モドキを出して来たり、幻影ハリケーンをパクリ……いやオリジナルZEROが攻撃してたからパクリじゃないのか？

あと、ザ・ワールドらしきスタンド呼んだり、ロードローラー持つて振ってきたり、サイコクラシャーしたり……って、ほとんどパクリじゃねーか！

元の技が『白羅滅精』はくらめつせいくらいしかねーよ!!

それと、天翔乱姫モドキてんしやうらんぎで正常位でヤリに来た事は、未遂とはいえ

絶対に許さない、絶対にだ!!

あ、試合結果？

ベネット面のドアップの後でブツパなしてきたスーパー稲妻キックで負けたよ、チクシヨウ!!

とうか、そこだけ声が『タカヤ・ノリコ』になるとか、いい加減しろっ!!

取り乱して済まない。

さて、先日の特訓の成果が出たのだが、エライ事になってしまった。武器が使えない俺は、剣士を初めとした武器格闘家とやり合った際は、技ではなく使っていた装備や特殊スキルといった別のモノを得ている。

今回のクレイトスさんも例に漏れず、彼の保有する特殊スキルを一つ修得できたのだが、それが問題なのだ。

そのスキルとは『オリュンポス特攻』

『オリュンポス特攻』である。

大事な事だから二回言わせて貰った。

正直、『無限の闘争』で自身のステータス確認した際に、これを発見した時は目ん玉が飛び出るかと思った。

こんなスキルを修得したとあっては、俺がオリュンポスに敵意を持っていると誤解されかねない。

とはいえ、これがポセイドン戦で有効なものもまた事実。

仕方が無いので、ハーデス様に事情を説明して今回だけ使う事を許可してもらった。

スキルがRPGや何かみたいに表示される訳が無いのでバレないとは思うのだが、万が一千里眼なんかの能力持ちに発見されたら面倒極まらない。

事前に先方に報告しておくのが一番である。

今日の業務はテロが無かった事と、転生悪魔達が徐々にハケテきたお陰で半ドンですんだ。

久々のOFFに鼻歌交じりで帰ってくると、来客があった。

社務所に待たせていると言うので行ってみると、そこには銀髪の俺

より少し年上の外国人女性がお茶を啜^{すす}っていた。

彼女の名はロスヴァイセ女史。

北欧神話において勇者をヴァルハラに導く役目を持つヴァルキリーで、オーデイン様の付き人だったらしい。

なんでも昨今^{さつこん}は人間から勇者なんて出ることには無く、窓際族となっていたヴァルキリーの中で必死に頑張っていたのだが、駒王会議の後でオーデイン様から付き人の解除とここに就職するように指示されたらしい。

うむ、ここで心の一句『ちよつと待て、そんな話は、聞いてない』たぶん前に話した嫁関連で断ったから、彼女を万屋^{よろずや}の従業員で入り込ませて、そこから繋がりを作ろうとしたんだろう。

オーデイン様の思惑に乗るのも癪^{しゃく}なので最初は断ろうと思ったのだが、このまま帰ったらクビの上に祖母共々追放されるなどと泣かれては放り出すわけにもいかない。

こちらとしても情に絆されてズルズル採用するのは避けたいので、夕方に一個人ではなく事業主として面接を行った。

実質4時間程度しかなかったのに履歴書や職務経歴書、就労ビザ等々の書類を揃えてビジネススーツに身を包んで訪れた彼女は、オーデイン様の付き人をしていただけあつて優秀な人材だった。

再開したばかりの万屋は経理がいない状態だったので、採用してそつちに付けてもらう事に。

正直、俺と美朱のどんぶり勘定だったので本当に助かった。

あ、社宅は神社の母屋の隣にカプセルハウスで建てました。

7月▲●日(雨)

—— 本日の千人組み手 ——

対戦相手：マジンガーZ

恒例になりつつある巨大キャラ対決、今回は日本が誇る元祖スーパーロボット『マジンガーZ』である。

『鉄の城』の異名は伊達ではなく、界王拳全開で殴っても装甲が凹む程度のダメージしか与えられない。

さすがは超合金Zと言ったところだろう。

力押しでは分が悪いのが解つたので浸透勁による内部破壊に戦法を変えると、相手の動きが目に見えて悪くなった。

いかにスーパーロボットとはいえ、内部には精密機械を積んでい

る。超合金Zの守りを擦り抜ける鎧通しや浸透勁は、マジンガーZの天敵と言えるだろう。

舞空術で向こうの鉄拳を躲しながら十数発目の浸透勁を打ち込むと、ついにマジンガーZは膝を付いた。

これならやれるか、とトドメの一撃を放とうとしたところ、Zの身体からまばゆい光が立ち昇った。

膨大なエネルギーを込もった光の柱が消えた後に目の前に現れたのは、マジンガーZとは似ても似つかない凶悪な魔神だった。

いやいや、マジンガーZが変身するとか聞いた事ないんですけど。その後の戦いは悪夢の一言だった。

パンチは地を割り、身の丈ほどの巨大な刃を供えたアイアンカッターを飛ばす魔神。

狂雷迅撃掌を放つても何かに操られた様に全体的を外し、接近戦で打撃を放つてもあの凶体にも関わらず掠りもしない。

まさかの因果律操作に気付いて、覚えたての防御を行うも後の祭り。

ヴァーリの炎殺黒龍波なんて比じゃないほどのブレストファイアーで消し炭になりました。

いったい、あの凶悪な魔神はなんだったのか。さて、今日はポセイドン戦である。

朝一で負けた事を思えば縁起が悪いことこの上ないのだが、ここ最近はいつもの事である。

「貴様を倒して、私の偉大さと身の潔白を証明してくれるわ!!」
などとほざいて海水と甲殻類、シーホースで神話の怪獣スキュラのような巨体に変ずるポセイドン。

奴は甲殻類の足が付いた触手と甲羅で出来た巨大な三叉槍を振るって雷撃を放つが、魔神はおろかマジンガーZよりも全然遅い。

三叉槍を拳で砕いて触手を引き千切り、海水に雷光を叩き込んでやると動きが止まったので、心臓部の甲殻を叩き割って本体を引きずり出した。

ちなみにここまでで掛かった時間は僅か三分である。
はつきり言つて弱すぎる。

これがオリュンポス特攻の成せる技なのだろうか。
崩れ、海水に戻っていく海の鎧を背に蹲るポセイドン。

こうも容易く、しかも一方的に負けた事で、奴のプライドも立場もガタガタだ。

懲罰という意味ならこの辺で十分だと思つたのだが、大綿津見神様や天照様、ハーデス様は許してはいないようだ。

いや、三人して首を搔つ切るジェスチャーせんでもいいがな。
被害者と責任者が許さんというのなら仕方ない。

という訳で、ぐったりしているポセイドンを起こして、首相撲からのムエタイ式膝地獄を開始。

この際にどこからともなく、クレイトスさんの処刑BGMが流れてきたのは気のせいだと思いたい。

さすがに可哀想なので手加減したけど、ゲロやら鼻血やら撒き散らしてエライ事だった。

最後は相手が大と小を垂れ流して失神したところで試合終了。
別段疲れていないけど、やっぱ後味悪かったなあ……。

8月●日（雨）

今日は久々にキレた。

英雄派のリークした情報で冥界の大王派の貴族領地にある『禍の団』の施設に忍び込んだのだが、そこでは心底胸糞の悪い研究がなされていた。

奴等、俺のクローンを作ろうとしてやがったのだ。

オーフィス戦か駒王会議の時にでも、俺の血か何かを採取していたのだろう。

俺と玉藻が研究ラボに乗り込んだ時には、白衣を着た悪魔が首が

座ったばかりの赤子を、ミキサーのような機械の中に放り込む寸前だった。

その悪魔はミキサーのような器具が如何に鋭く痛いのかを赤子に自慢していたので、奴自身に味わってもらおう事にした。

機械に頭を突っ込んで血飛沫を上げながら『ホントに痛てえええええっ!』と断末魔を上げる男を尻目に、保護した赤子を抱きながら周りを調べると、反吐が出るようなものがズラリと並んでいた。

ホルマリンに漬けられた人間とは呼べない奇形の胎児の標本に、赤子の物と思われる解剖された臓器や骨格。

培養カプセルと思わしきものの中で腐敗した、乳児の遺体なんかもあった。

しかも死臭に加えて怨念や穢れも蔓延しており、玉藻が気分が悪そうにえずいていた。

そんな中で培養カプセルで唯一息があったもう一人の赤子を助け出し研究データを確認したところ、ここで生み出された赤子が全て俺のクローンであることが判明した。

オーフィスが敗北した事を知った『禍の団』の上層部が、俺への対抗策兼自身の言いなりになる無限を作ろうとしたらしいが、生憎と奴等は俺の力の本質を分かっていたいなかった。

俺の力は才能ではなく努力。

『無限の闘争』で積み上げた血と汗と涙によって成り立っているのだ。

俺の生来のスペックなどたかが知れている。

その事に気づかなかった奴等は人間とほぼ変わらない能力の子供達を失敗作と断じて、試行錯誤を繰り返しながら次々とクローンを生み出していった。

その数は126人。

しかも失敗と判断された子供たちは、先程のクソがやろうとしたようにゴミ同然に処理されたらしい。

いくら温厚な俺でもこれにはブチキレた。

吹っ飛びそうな理性をギリギリで抑えながら、玉藻にデータのコピーを指示してラボ内に彷徨う子供の霊を地蔵菩薩じぞうぼさつしんごん真言で供養した俺は、玉藻が退避するのを確認すると同時に容赦なく暴れた。

結果、研究所は消滅。

その余波で周囲の地形が変わったらしいが、そんな事はどうだってよかった。

さすがにここまでの騒ぎを起こせば冥界政府も気付いたらしく、暴れ終わった後にサーゼクス兄が来た。

俺がマジでキレているのに気づいたサーゼクス兄は、包囲していた軍を下がらせた。

サシで事情を聞いてきたので、クローンの事をボカして『禍の団』の違法研究施設があつた事を説明。

それを聞いた時、何か言いたそうにしていたが知らん。

ともあれ、不問にするとの言質をもらったので、瞬間移動で家に帰っていた玉藻と合流し、赤子二人を病院と高天原で検査してもらった。

あれだけ劣悪な環境にいたにも拘らず、結果は二人共健康で異常は無し。

しかも、何と一人は女の子である事が判明した。

俺のクローンなのに女が生まれるとはどういう事か。

その後、二人を家に連れて帰って家族と同居人全員に説明。

ウチで引き取りたい旨を土下座でお願いしたところ、全員一致で快諾してくれた。

皆曰く『俺から生み出されたのなら、この子達はウチの家族だ』との事。

朱乃姉も抵抗なく接してくれているし、親父は変わらずのデレデレぶり。

美朱も下の兄妹が出来た事に随分とはしゃいでいた。

戸籍云々の件で爺ちゃん達に連絡したら、あつという間に飛んできて『新しい孫はどこじゃ!』とか騒ぎ出すし。

受け入れられるかどうか不安だったので、この展開には本当に驚い

た。

やはり、俺は家族に恵まれているようだ。

今回の件を天照様に報告するのは明日にして、赤子達が泣きだす前に命名権で言い争ってる親父と爺ちゃんを止めるとしよう。

◇

日誌の記述はここで終わっている。

29話

現代社会において、人間は金銭無しでは生きていけない。

当然だが、それは『世界最強(笑)』と言われている俺も同じことだ。家族が三人、従業員が4人も増加した事で、それはさらに顕著けんちよになったと言えるだろう。

日々の生活費を初めとして、自営業である万屋よろずやの維持。

朱乃姉や美朱の将来の貯蓄に玉藻を初めとした従業員の給与と各種福利厚生、親父とお袋の隠居後の資金や朱音あかねや璃凰りお(この前引き取った双子の名前だ。女の子が朱音、男の子が璃凰)の養育費もある。

あ、母屋の改築費用もか。

改めて考えると、かなりの出費になるな。

本当にポセイドンの懲罰ちやうばつ仕合を受けてよかった。

フアイトマネーの3億のありがたさが身に染みるわ。

振り込まれた日は経理のロスヴァイセ女史がその額にパニくって、経緯を話したら卒倒してしまったなんていうのも、今では笑い話である。

ともかく、世の中は夏休み真っ盛りだが、俺にはそんなのを謳歌おうかする暇は無いわけだ。

あー、うん……。

朱乃姉、そんな社会のゴミを見るような目で親父を見てやるなよ。

いやさ、採用されるかどうかは会社側の問題で、親父はちゃんと就職活動してるじゃん。

え？ 『慎が言ったように、駒王の番所で働けばいい』って？

いや、そこはあれだ。

親父にも矜持けいぢつてもんがあるしさ、さすがに息子の縁故で再就職つてのものなあ。

親父の働き口が見つかるまでは、俺が稼ぐからさ。

もう少し、好きなようにやらしてやろうよ。

……ゴホンッ！

ウチの家庭事情はともかくとしてだ、そういう訳なので嫌な仕事も

受けねばならないのである。

では、本題の仕事について語るとしよう。

八月も前半を終えてお盆を間近に控えた頃、日本神話と政府に動きがあった。

俺の各神話勢力への応援によって蓄積された駒落としの臨床データとその後のケアから、転生悪魔に関するガイドラインが完成したらしく、国内における転生悪魔の対処に乗り出したのだ。

その方針だが、『日本国は転生悪魔となった者に対しては、国籍と国民としての一切の権利をはく奪。1カ月以内に国外退去とする』という厳しいものだ。

とはいえ、これだけでは残存する転生悪魔の反発は必至なので、『ただし、転生悪魔となった者の中には、本人の意に反してその状況に陥った者も多数存在する。その事を考慮して、転生悪魔となった国民には人に立ち戻って国民として暮らすか、転生悪魔のまま国外退去するかを選択する機会を与える』という一文が加えられている。

裏の事情が関わっている為に表には出てないが、八月の頭にこの法案は国会を通り正式に施行された。

実施に当たっては、この国のオカルトの一切を取り仕切る五大宗家主導の元、神社庁を通して各地の裏の管理者や監査官が動くことになった。

この駒王町では俺に白羽の矢が立つ事となり、こうして各神話への応援活動の合間にこの街に在籍している転生悪魔、リアス姉と支取会長の眷属の家を説明して回っている訳だ。

しかしこの業務、途轍とてつもなく面倒くさい。

ここの管理者2名が揃いも揃って眷属に迎えたメンツの保護者に、説明を一切してなかったからだ。

会長の眷属はけっこう裏に関わっていた家とかやむにやまれぬ事情で転生悪魔になった人もいるのだが、匙元士郎先輩に由良翼紗先輩、仁村 留流子の三名については家族はこちらの事情を全く知らなかった。

当然、いきなりこんな話を持って行っても信じてもらえない訳もな

く、条約の証書を見せたり目の前で雷撃を出したりと、あの手この手を尽くさないといけないので手間が半端ない。

とくに大変だったのは匙先輩宅だ。

彼の家には成人した保護者は亡くなっていて、残っていた弟さんと妹さんに説明をする事になったのだが、事情を聞いた二人は『兄が自分を置いて冥界に行くのでは』と半ばパニックになってしまった。

匙先輩の連絡先は知らないし、弟妹が持っていた携帯は通常の物なので冥界までは繋がらない。

二人に電話番号を聞いて俺の携帯で掛けても、どこか電波が届かない場所にいるのか掛からなかった。

主であるソーナ先輩も同様だったため、仕方なく『明日の夜に本人も連れて来てもう一度説明するから、今日のところは待っててほしい』と説得したのだ。

だいたい、未成年を身請けするんだから、その保護者に説明するのは主としての義務だろうが。

なんでそれすらしてないんだよ、あのお馬鹿達め。

夏の容赦のない日差しと蝉しぐれの中、狩衣かりいの裾から出したハンカチで汗を拭いながら帰宅した俺を迎えたのは、顔が緩みまくった美朱の姿だった。

「あーもう、かぁいいい！ かぁいいよお!! アーちゃんもリーくんもどうしてこんなに可愛いかなあ!!」

赤子二人を抱っこしながら、締まりのない顔で玄関をクルクルと回る美朱。

あの二人が来てから、妹は我が世の春とばかりにテンションが高い。

というか、一週間も経ったんだからいい加減慣れなさい。

「無理に決まってるじゃん、念願だった脱末っ子がかなったんだよ！

しかもこんな可愛い双子付きで!!」

「弟分や妹分なら、ミリキヤスやハーフ組の中にもいただろ」

「血が繋がった弟妹はまた別なのだっ!!」

『だーう』『あー』という赤子二人の声と共に、美朱はドヤつと胸を

張る。

うーむ、そんなもんなのかねえ。

「あら、帰ってたの?」

「お帰りなさいませ、ご主人様」

美朱となんだか良く分からんやり取りをしていると、台所からお袋と玉藻、朱乃姉が顔を出してきた。

割烹着を着ているが、みんなその下は巫女装束である。

お袋が生前に持っていた宮司資格を、爺ちゃんが復活させてくれたのには本当に助かった。

今までは俺がやるか、爺ちゃんが派遣してくれる応援の宮司さんをお願いしていた神社の業務を、お袋が捌いてくれるお陰でこっちは外の仕事に取り掛かれる。

「それで仕事の方はどうだったの? イッセー君やソーナ会長の眷属の家族に説明してきたんでしよう?」

「どうもこうも無えよ。ある程度、裏に関わってる家はあったけど、堅気の方に説明してなかった所為で、滅茶苦茶手間取った。話が終わった後でもイマイチ理解してなかったり、今回の政府の対応で付き合ひ方を考えるって人もいたからな。明日ここで本人たちを交えて、再度説明会をすることにした」

ため息交じりに答えを返すと、朱乃姉の表情が少し曇った。

「本人を交えてって、大丈夫なの? 余計な混乱を招いたり、リアスやソーナ会長に敵意が向くんじやないかしら」

「多分そうなるだろうな。けど、それもしゃあないだろ。あの二人は人の身請けをする為の義務を怠ったんだ。そのケジメは付けなきやならない」

朱乃姉の心配はもつともだが、今回は俺も妥協する気は一切ない。親御さんからどれだけ非難されても、本人たちには説明責任を果たしてもらおう。

「まあまあ。難しい話は後にして、お昼が出来ているから頂きましよう」

「そうね。クーさんやリリイちゃん達も待っているでしょうし」

「よーし！ アーちゃん達もまんまにしようねー」

キヤツキヤと喜ぶ双子の声と共に、美朱を先頭に居間に戻っていく我が家の女衆。

「そーいや、親父は？」

「就職活動よ」

ふと疑問に思った事を口にする、朱乃姉がため息交じりに答えてくれた。

このクソ暑い中で就職活動とは……親父、頑張れ。

超頑張れ……！

◇

姫島家と従業員が一堂に会したの昼食も終わり、自室に戻った俺はリアス姉と支取会長に連絡を取った。

今回の件を伝えて、明日の説明会に眷属総出で参加してもらうためだ。

条約の件や親御さんに裏の事情を説明した事、そして一方的に説明会の日取りを決めたのには随分と文句を言われたが、その辺はスルーした。

レーティングゲームの後なのは分かるけど、文字通り眷属の将来がかかってるんだから、時間くらい開けなさいな。

『明日の夕方に瞬間移動で迎えに行くから眷属を集めておくように』と伝えて電話を切って社務所でお盆の準備を進めていると、玉藻が少彦名様すくなひこなと共に部屋に来了。

何でも真神様まかみとハティ様から話があるらしい。

心当たりの無いままに家より冷房が効いている本堂に入ると、板の間の上でだらりと寝そべっている白黒狼様の姿があった。

『ヨク来タナ、慎』

野生や神聖さの欠片も見当たらないだらけきった姿に、思わず顔を引き攣ひきつらせてしまう。

そうしていると、頭だけ起こした真神様がへっへつと息を吐きなが

ら念話で話しかけてきた。

「真神様。お話があると伺いましたが、どのような御用でしょうか？」
一礼した後にそう切り出すと、寝ながら器用に桜餅を頬張っていたハティ様が顔を上げる。

『あのね……。ボク、子供が出来たんだ』

「……………ファッ!？」

尻尾をパタパタしながらのハティ様の爆弾発言に、思わず変な声が出た。

子供っていったか、今!?

そういえば、この頃ハティ様って腹の辺りがふつくらしてきてたけど、まさか妊娠してたのかよっ!?

……落ち着け、俺。

クールだ、クールになれ。

真っ先に頭の中に『なんで』って言葉が浮かんだけど、これを聞くのはいくらなんでも失礼だろう。

夫婦なんだから、ヤル事やって子供が出来んのはおかしくもなんともないわけだし。

問題は、新しい神の仔の誕生なんて、数年どころか数百年、ヘタしたら数千年単位でないって事だ。

つうか、こういう場合って神職ってなにやったらいいんだ？

安産の祈^{きとう}祷か、それとも授かった事を祝う祭事か？

いやいや、ちよつと待て。

今のデスマーチ状態で、さらなるスケジュール入れるのメツチャ辛いんだけど。

諸国からの対テロ応援は引っ切り無しだし、夏祭りは終わってもお盆目前だし。

あ、そうだ。

高天原とアスガルドに連絡もしなきゃならないよな。

日本は兎も角、アスガルドの方は祖父であるロキ様が反対してたとか何とか言ってたから、今回の件で荒れるかもなあ…………。

でも二柱に仕える身としては、先触れとして話を持って行かないと

いかんしなあ。

今日は休めると思ったのに、やはり俺には休息はないのか……。

『シンー、どうしたのー？ だいじょうぶー？』

この先待ち構える労働に絶望としてっていると、いつの間にか近くに来ていたハテイ様がペロリと頬を舐めてくる。

ああ、なんかホツとするなあ。

これがアニマル・セラピーか……って、いかんいかん。

仕える神様相手に癒されている場合じゃねーよ。

「お二人共、おめでとうございます。早速ですが、高天原とアスガルドの方に連絡をさせていただきます。新たな神仔の誕生は慶事けいじですので、国主たる天照様には報せを届けねばなりませんし、ご身内であるフエンリル様やスコル様にも伝えるべきでしょう」

『忙シイナカ、スマンナ』

「いえ、これも神職たる者の務めですから。それよりも、真神様はハテイ様をお気遣いください。ハテイ様は初産ゆえ、不安に思う事も多いでしょう」

『ワカッタ』

『お父さんとスコルのところに行くの？ じゃあ、ここの桜餅もお土産に持っててくれるかな。二人にも食べさせてあげたいんだ！』

ハテイ様のリクエストに応えて、ご神体の前に山と積まれた桜餅の幾つかを傍らに置かれた和菓子屋の紙袋に詰め、一礼をして本堂を後にする。

ああ、念のために保冷剤とクーラーバック持っていくか。

この暑さだと、和菓子が傷むかもしれんからな。

◇

あの後、高天原でハテイ様ご懐妊の件を報告したところ、天照様は飛び上がらんばかりに喜んだ。

なんでも、妖怪や付喪神といった精霊はともかく、新たな神が誕生するのは数百年ぶりらしい。

真神様とハテイ様の仔は、日本神話の次世代であると同時に北欧神話との懸け橋となるということで、ウチの神社にお産の助けとして菊理姫様きくりひめと木花咲耶姫様このはなさくやひめが遣わされることになった。

お二柱様ふたりとは青奈女史せいなの件でお世話になったので、ハテイ様の補助に付いてくれるなら心強い。

報告を終えて咲耶姫様達を神社の本堂にお連れしてから、返す刀でアスガルドに向かう。

『禍の団』対策の関係で頻繁に来ているので、エインヘリヤルの衛士が護る城門を顔パスで抜けると、そこには3メートルはある巨体に金のスケイルメイル纏い、二本の角付いたバイキングヘルムを被った巨漢が立っていた。

「おお、無限の坊主ではないか！」

こちらを見るなり、宮殿中に響き渡るような声で破顔するのは、北欧神話の雷神トール様だ。

このトール様、初のテロ対策で北欧を訪れた時に鼻息荒く俺に挑戦状を叩き付けて来た神でもある。

曰く『貴様のようなケツの青い小僧が、世界最強などと片腹痛いわ！』とのこと。

まあ、その時は開始早々に天地神明掌（甘口バージョン）でトール様がノビて終わったのだが。

それからは『タイマン張ったら、そいつとはダチ』というひとむかし一昔前のヤンキー的な理由で友好的に接してくれている。

こちらとしても、大雑把ながらも竹を割ったような性格のトール様は好感が持てるし、戦闘の面でも同じ雷撃使いという事もあって相性がいいので、色々世話になっている。

余談だが、狂雷迅撃掌とミヨルニルで呼び出した雷撃の合わせ技が、数千の『禍の団』の軍勢を一瞬で消し飛ばしたのは、北欧で語り草になっているらしい。

「今日はどうしたのだ？　こちらにはテロリスト共は現れていないし、転生悪魔も落ち着いているぞ」

「オーデイン様に報告すべき事がありました」

「長老に？ それは良からぬ事か？」

「いえ、ウチに嫁いだフェンリル様の娘、ハティ様をご懐妊したので
す」

俺に言葉にトール様は針金のような赤髭に覆われた口をあんぐりと開ける。

「こりゃあ、たまげた。まさか、この信仰心が薄れた時代に新たな神の仔が授かるとはなあ」

「やはり、神の子供が生まれるのは珍しいですか？」

「うむ。例え男神と女神が交わったとしても、新たな神が生まれるには人々の強い信仰が必要だからな。現代の信仰では、今ある神を維持するだけで精いっぱいと思っておったわ」

誕生にまで強い関りかかわがあるとは、やはり信仰というのは神にとって必要不可欠な物らしい。

「あい解った、ならば行くがいい。それほどのような吉報ならば、長老もさぞ喜ぶ事だろう」

「はい、失礼します」

トール様と別れた俺は、オーデイン様の傍そば付きであるヴァルキリーに付き添われて、謁見の間に案内された。

挨拶はそこそこに、オーデイン様にハティ様の子供の事を報告すると、やはり彼の方も白い眉に隠れた隻眼を見開いて驚いていた。

「まったく心の臓が止まるかと思っただわい。じゃが、これは好機でもあるの」

「好機、ですか？」

「うむ、実は以前より日本の高天原に異文化交流の打診をしておつての。類を見ない事なのでウチの上層部が渋っておつたのじゃが、真神殿とハティとの間に仔が出来たのなれば奴等も否とは言うまい」

腹まで届く長い髭をシゴキながら、上機嫌に話すオーデイン様。

少彦名様は『ハティ様に脅されて真神様に嫁ぐ許可を出した』と言っていたが、もしかしたらこの為の布石でもあったのかもしれないな。

「という訳なので、お主にはパツと日本まで連れて行ってもらおうか

の」

「……ん？ ちょっと待て。」

いきなり何言ってるんだ、この人。

「いやいや。何言ってるんすか、オーデイン様。行くって言ってもむこうにアポ取ってないでしょ」

「なに、そんなものは現地で取ればよい。ついでに観光もすれば一石二鳥じゃわい」

「護衛とかどうするんですか。日本の領土であなたに何かあったら、シヤレじやすまないんですよ？」

「何を言つとる、お主がおるではないか」

「俺って、何処の神話にも属さない中立って話でしたよね？」

「ハテイと真神殿に仕えておるではないか」

「そりや神職としての仕事で、ってことですよ。他の多神勢力の皆様もそういう見方だったじゃないですか」

「だったら仕事としてお主を雇うわい。たしか、何でも屋をしておったじゃろうが」

「どうだ、と言わんばかりのオーデイン様に思わず言葉を飲み込んでしまう。」

この爺さん、痛いところを突いてきやがる。

万屋よろずや自体は日本を中心に仕事をしてるけど、瞬間移動が使える事もあつて海外の仕事が無いわけじゃない。

ヴァーリやサーヴァント連中を雇い入れた以上、ここで断って営業活動に悪影響が出るのは避けたい。

「……わかりましたよ。こつちにも都合がありますから、護衛期間は今日一日。出発もアスガルドでの用事が終わってからにしてもらいますよ」

「構わん。ところで、アスガルドでの用事とはなんじゃな？」

「フェンリル様とスコル様にも、ハテイ様のご懐妊を知らせるんですよ。さすがに身内には連絡しとかないと拙いでしょ」

「それもそうじゃの。じゃが、彼奴等は今こちらにはおらんぞ」

「え、そうなんですか？」

「うむ。ロキに連れられて、どこかに行ったそうじゃ。あ奴が関わっておるからには、ロクな事ではないと思うがの」

オーデイン様の言葉に俺は小さくため息をつく。

まったく無駄骨つてわけじゃないが、親御さんに伝えられないってのは気まずいな。

とは言え、いないものは仕方がない。

少々不義理だが、知らせるのはまた今度にしよう。

「わかりました。それじゃあ、行きましようか」

「うむ。魔術を使わぬ転移は初体験じゃからの、今から楽しみじやわい」

「そうは言っても一瞬ですよ。あと、むこうに行ったら高天原に連絡してくださいね」

「分かっておるわい。お主も口うるさいの、ロスヴァイセみたいじゃぞ」

「あ、そうだ。ロスヴァイセさんの件、ありがとうございます。あの人に来てくれてから、経理の方で助かっていますよ」

「おお、そうじゃろう。あ奴は能力は優秀じゃからな。なんなら嫁にしてみいいんじやぞ?」

「……………普段着が深緑のイモジャージな人はちよつと」

「……………ホント色気がないのう、あやつ」

俺の眩きに頭を抱えるオーデイン様。

つうか、やつぱりそういう意図もあったのか。

「そんじや行きますんで、しつかり掴まっててくださいよ」
「うむ」

意識を集中させて跳ぶイメージを解放すると、一瞬のブレを挟んで視界に映る光景が豪華な宮殿から見慣れた境内に切り替わる。

「む……………(´・ω・´)はど(´・ω・´)じやつ?」

「私が勤めている神社兼自宅です」

正直言っあまり連れて来たくなかったのだが、高天原がダメなので他に目印になる場所が無かったのだ。

という訳で、とつととアポを取ってもらってむこうに行ってもら

事にしよう。

「ふーむ、世界最強の男が住むにしては少々簡素じやの」

「庶民ですんで。それよりも天照様に連絡してください。現状だとはぼ不法入国ですよ」

「……分かつておるわい」

俺が天照様にコールした携帯を差し出すと、不満げに唇を尖らせながらオーデイン様はそれを受け取る。

ジジイがそんなリアクションしても可愛くないからな。

オーデイン様が電話越しで何やら話していると、境内の上空に強い魔力を感じた。

見れば、紫電を纏う黒い魔力の渦がゲートを創り出していた。

そして、暗青色の門のむこうから現れたのは、白い鎧に身を包んだ黒髪の男と二匹の黒い神狼だ。

「ロキか。他神話の領土にフェンリルとスコルを連れてくるとは、どういう腹積もりじゃ？」

「これは不可抗力というものだ、オーデイン。貴殿が無限の力を借りて日本に転移しなければ、私もこのような手は使わなかったさ」

スマホをこちらに投げ返しながらのオーデイン様の詰問に、やれやれと言わんばかりに肩を竦める黒髪の男。

そうか、これがロキ神か。

「さて、お初にお目にかかる無限の少年よ。我が名はロキ。巨人ファールバウティと女神ラウフェイの息子にして、『終える者』とも言われている。何を『終える』のかは、そちらの想像にお任せしよう」
「初めまして、ロキ様。私は姫島慎、貴方の孫娘であるハティ様の神官を務めさせていただいております」

「うむ、あれが世話になっている。今日こちらにきたのも、あの娘に関する事なのだ。姫島慎よ、フェンリルとスコルがああ娘が大和神族の仔を孕んだと騒いでいたのだが、これは真かな？」

おや、フェンリル様達はもう知っていたのか。

いったいどうやって……って、そう言えば前に真神様が『神狼は念話で群の仲間とコミュニケーションを取る』とか言ってたな。

今回もそれなのかもな。

「はい。私も今日、本人から伺って確認しました。確かに、ハティ様のお腹の中には新たな命が宿っております」

「そうか……それはなんとも嘆かわしい事だ」

顔に手を当てオーバーに天を仰ぐロキ様の吐き出した言葉に、俺は眉根を寄せる。

「嘆かわしい、ですか?」

「そうだ。あれ等神喰狼しんじよくろうは、ラグナロクの為に生み出した対神兵器。それが異なる神話の神とまぐわい、尚且つ仔まで設けるとは……。これでは本来あるべき殺戮者としての純粋性も穢れてしまうというものだ!!」

「何を言うかと思えば、愚かな事を。子とはいえ、この世界に生まれ落ちた時点で一つの生命。親の思い通りに等なるはずがないじやろ。あれだけ子供をこさえておいてそんな事も分らんのか、阿呆め」

「黙れ、オーデイン! 元はと言えば、貴様が日本にあの娘を嫁に出したのが原因ではないか!!」

「言いがかりはやめんか。あの婚姻はフェンリルやスコルも賛成していたのだぞ。儂は両家の希望を叶えただけじゃ。……決して話を持って来た真神殿の後ろで、神殺しの牙を剥き出しにしていた花嫁が怖かったわけではないからの」

……本音が漏れてますよ、オーデイン様。

「うるさいッ! 貴様があの婚姻を足掛かりに、日本神話と繋がるうとしてるのは知っているのだ!! ラグナロクを正しく導く者として、そんな事を認める訳にはいかん!!」

「相変わらず融通の利かん奴じや。今の世界情勢を見てみい。多神勢力の多くが協力して、テロと戦っておるのじゃぞ。今さら異文化交流など、どうという事はあるまいに」

癩癩かんしゃくを起し始めたロキ様に、呆れたようにため息を突くオーデイン様。

確かに、今さらの話だよなあ。

しかし、気になるのはフェンリル様達だ。

ハテイ様の輿入れの時に会った事があるが、二柱ふたりとも結構な親バカとシスコンだったはずだ。

なのに、ロキ様の暴言にもまったく反応していない。

念の為に霊視を試みてみると、以前は付けていなかった首輪から頭部に伸びる魔力線を捉えることが出来た。

あれは精神か思考に作用する呪詛か？

『騒ガシイナ。ドウシタノダ、慎』

『あ、ロキのお爺ちゃんとお父さんにスコルだ！』

「げっ!? 神殺しの狼じゃないですか!! イヌ科で神殺しとか、私と相性悪いなんてもんじゃねーですよ!!」

「慎、これはどういう事なの?」

背後から飛んできた声に振り返ると、そこには真神様とハテイ様、そして朱乃姉と玉藻がいた。

これだけの神氣を感じれば、気づくのは当たり前か。

「悪い、今立て込んでる。事情は後で話すから、本殿に入ってきてくれ」「ハテイ、仔を宿したというのは事実のようだな」

『お爺ちゃん、よろこんでくれないの?』

「虚け。お前は兵器として生み出されたのだ、それが不純物を抱えた事を喜ぶ者がどこにいる。……まあよい、ここに来たのも何かの縁だ。オーデインと共に不良品の始末もしてしまおうか」

「この葦原中津国あしはらなかつくにで神戦を始めようとは、アスガルドは高天原と事を起こすつもりですか?」

元の藍色の十二单姿じゅうにひとえに戻った玉藻が、ハテイを庇える位置に立つて鏡を構える。

「そんな気などないさ、天照の分霊よ。私は北欧神話の歪みを正そうとしているだけの事。だが、その歪みたるオーデインやハテイをこの地に連れて来たのは、その神狼や無限の小僧だ。恨むなら、そ奴等を恨むのだな!」

言葉と共にロキが腕を振り下ろすと、宙空を蹴ってフェンリル様とスコル様が飛び出した。

二人の殺気が捉える先はオーデイン様。

——と見せかけて、ハテイ様だ。

『お父さん!? スコル!?』

牙を剥き出しに襲い掛かる家族に、ハテイ様の悲痛な声が響く。

「さあ、祖父としてのせめてもの慈悲だ！ 腹の仔と共に家族の牙に掛かって果てるがいい!!」

動けないハテイ様を庇う様に前に出る真神様と、構えた鏡で防御結

界『呪層・黒天洞』こくてんどうを展開する玉藻。

だが、二柱の牙はその誰にも突き立つことは無かった。

接敵の寸前に俺が身体を割り込ませたからだ。

フェンリル様が俺の首から左肩に掛けて食らいつき、スコル様は脇腹に牙を突き立てようとしている。

『慎!?!』

『慎! 大丈夫なの!?!』

『ご主人様!?!』

『慎!?!』

『無限殿!?!』

口々に悲鳴を上げるみんなの声が当たりに木霊する。

「フハハハハハハっ!! これは僥倖だ！ オーデインを討つには、貴様が一番の障害だと睨んでいたからな！ いかにも無限と言えど、それだけの神殺しの牙を受けては無事では済むまい!!」

二柱に食らいつかれる俺の姿に高笑いを上げるロキ。

「これが神殺しの牙か。——大したことないな」

だが、まったく苦痛を感じさせない俺の声に、その馬鹿笑いはピタリと止まる。

予想外の事がみんなの意識に生じさせた空白。

その一瞬の隙を突いて、俺は身体にぶら下がったフェンリル様達に付けられた首輪を引き千切る。

「真神様、解呪を！ お二柱は精神系の呪詛か意識操作を受けています!!」

『心得々、任セヨ!!』

真神様が放った咆哮が俺の身体ごと二柱を包み込むと、彼らの虚ろ

だった瞳に意思の光が戻ってくる。

『むう……ここはいつたい?』

『御爺様の屋敷に呼ばれてからの記憶が……。私達はどうなっているの?』

『お父さん! スコル! 考えるは後! 慎を放して!!』

こちらを啜えながらもフェンリル様達は器用に念話を漏らしていたが、ハティ様の一喝により慌てて離れる。

『いつたいどうなっている? 何故我等はハティの神官殿に襲い掛かっていたのだ!?!』

『あのね、お父さんたちはお爺ちゃんに操られていたみたいなんだ』

狼狽しているのだろう、俺達の周りをグルグルと回るフェンリル様達に、事情を説明するハティ様。

自身に降りかかった事を理解するにしたがって、二人の表情が困惑から憤怒へと変わっていく。

「馬鹿な……!?!」

「甘いですね。あんなあからさまな術式では、気づいて下さいと言っているようなものですよ」

「そんな事はどうでもいい!! 貴様、何故神殺しの牙をまともに受けて無事でいられる!?! 傷一つないとはどういう事なのだ!!!」

先程の余裕など虚空の彼方に吹き飛ばしたのか、ヒステリックに黒髪を掻きむしりながらこちらを指差すロキ様、いやロキ。

「あれですよ。神殺しってだけあって、その効果は神にしかないって事でしょう。ほら、俺は人間ですから」

「フェンリルに噛まれて無傷な人間がいるかあああああつ?!?!?!」
的確な答えを返したのに、発狂せんがばかりに荒れ狂うロキ。

むこうには言っていないが、当然これには仕掛けがある。

いくら俺の身体が強固とはいえ、フェンリル様に噛みつかれれば怪我くらいはする。

では何故無傷だったのかというと、それは將軍様から教えてもらった技を使ったからだ。

その技の名は『硬度10 ダイヤモンドパワー』である。

その名の通り、肉体の強度をダイヤモンドと同等にする、完璧超人の中でも少数の者しか会得していない高難度技だ。

完璧超人は超人強度を高める事でこれを行うが、俺の場合は内功と因果律操作で代用している。

まあ、オリジナルのようにガチにダイヤモンドになる訳じゃないが、防御力の方は折り紙付きだ。

茶番はここまでにして、ウチの身内に手を出したケジメを付けてもらうとしようか。

「ロキ様、ちよつとこちらへ」

混乱から立ち直っていない隙を突いてロキのすぐ傍に移動した俺は、肩を掴んで移動するように促す。

行き先はみんなの目に映らない本堂の『裏』だ。

「わ……わわっ、私は野蛮な事は嫌いなんだが……ッ!？」

「そうかい？ 俺は好きだぜえ」

肩へ置いた手にかかった握り潰さんほどの力に此方の意図を察したのか、抵抗する素振りを見せるロキに極上の笑顔を向けてやると、顔色が紙より白くなって動きを止めてしまった。

む……なんか釈然としないが、まあいい。

さあ、お仕置きの時間だ。



「……お主、もう少し手加減というものをじゃな……」

『むう……これは酷い』

『顔が原型を留めていませんわ』

「うわあ……これはまさに顔面ピカソですねえ」

「慎、あなたって子は」

『お爺ちゃんの顔が絵本で見た福笑いみたいになってる!?!』

『家族ヲ使イ、我が番ニ手ヲ出ソウトシタノダ。当然ノ報イダナ』

整形手術（拳）を見た、みんなの感想がこれである。

イケメンがイケナイ面になってしまったが、気にしてはいけない。

ウチの身内に手を出してこの程度で済んだのだから、むしろ感謝してほしい。

あと、この件に関しては北欧神話は問題にしない事をオーデイン様と約束済みである。

日本に來たいと言ったのも、その所為でウチがドンパチに巻き込まれかけたのも、全てオーデイン様が原因なので、賠償とか言った日にはあの髭を全て引っこ抜くところである。

「あの、オーデイン様を迎えに來たのですが、これはいつたい……」
天からこちらに降りて來た天宇受賣命様は、この惨状を見て戸惑いの声を上げる。

「おや、ウズメちゃん。お久しぶりです」

「あ、玉藻ちゃん。これってどうなってるのかなあ？」

「実はですね……」

玉藻が天宇受賣命様に事情を伝えていると、フェンリル様とスコル様がハティ様の身体に鼻を押し付けているのが見えた。

『体調は問題無いようだな。ハティ、大事ないか？』

『うん！ 旦那様も神社の人達もとっても良くしてくれてるから』

『日本の夏はとっても暑いですわ。身重の身体なのでですから、無理はしないようにしましうね』

『大丈夫だよ。スコルは心配性だなあ』

『妹の初産ですもの、心配するのは当たり前ですわ』

親子水入らずに邪魔をしたくはないが、夏の日差しはまだまだ強い。

北欧生まれのフェンリル様にはこれは辛いだろう。

『お三方。外は暑いでしょうから、積もるお話は冷房の効いた本堂でしては如何でしょう』

『ソレガイイナ。デハ義父上ニ義姉上、案内イタシマシヨウ』

『すまぬな』

『お言葉に甘えて、お邪魔しますわ』

『うんうん！ 桜餅もいっぱいあるからね！』

尻尾をブンブンと振る四つのお尻が本堂の方向に消えるの光景に

笑みを浮かべていた俺は、いつの間にか高天原に行っていたオーディン様に気付いて、途方に暮れる事になった。
……ロキの事、どうすんだよ。

閑話 『赤龍改めイツセー日記』

7月▲☆日(晴)

この頃、身の回りが忙しない、主に裏関係で。

そこで、前に慎から説明を受けた時にメモを取った事を思い出して、日記形式でまとめて行こうと思う。

正直ガラじゃないと思うけど、こうでもしないとすぐにわからなくなるからな。

まあ、こつちに入ってくる情報なんてタカが知れているけど、こういう努力も少しは役に立つと思う。

夏休みの宿題もまともにできない筆不精なオレだけど、今回は頑張ろう。

家に帰ると、いろはに『何を悩んでいるのか』と問い詰められた。しらばつくれようとしたが、お父様達も気づいてますよという言葉にギブアップ。

家のみんなには分からない様に注意していたつもりだったけど、はたから見ればバレバレだったらしい。

こうなつては仕方が無いので、いろはにだけ悪魔でいるべきかどうか迷っている事を打ち明けた。

部長への恩義を裏切れない事から始まり、駒王会議で見せられた神様達の三勢力への憎悪の事や禍の団のテロ。

そして、それにオレが関わっている事で、家族に被害が及ばないかという怖れ。

自分でも気づかない内に煮つまっていたのか、一度口に出すと言葉が止まらなかった。

聞かせてはいけない事や情けない愚痴までも吐き出した恥ずかしさに彼女の顔を見れないでいると、いろははオレの頭を抱いてこう言ってくれた。

『命を救ってもらった恩義は、決して忘れてはいけない物です。ですが、それが家族にまで累を及ぼすというのなら、その限りではないでしょう。ご主人様がグレモリー様よりもご両親を大切に思うのな

ら、袂を分かつのもまた道の一つと思います。もしかしたら、その選択によりご主人様は『忘恩の徒』と世間から石を持って責められるかもしれません。ですが、たとえそうなったとしても、いろはは貴方様と共にいます』

どうしてそこまでしてくれるのか、疑問に思っただけ聞いてみると、

『ご主人様やお父様達は人非ざる私を快く迎えてくれて、家族の温かさを教えてくださいました。だから、私も皆様の家族として共にいたいと思うのです』

と笑顔で言ってくれた。

恥ずかしい話だが、マジで泣いた。

父さんや母さんだけじゃなく彼女の為にも、後悔はしない様にもつと真剣に考えてみたいと思う。

7月▲●日（晴　だが俺の心はくもり）

学校は夏休みになったけどオカ研があるので部室に行くと、朱乃さんが部長の前で土下座していた。

一緒に来ていた木場と二人で度肝を抜かれる中で聞いた話を纏めると、朱乃さんが悪魔から抜きたいと言っているらしい。

理由は慎の足枷になりたくないとの事。

部長はもちろん、オレや木場、部室にいた小猫ちゃんやアジアにギヤスパーもダメだなんて言えなかった。

聞けば、あいつは駒王会議が終わってすぐに、テロ対策や転生悪魔の対処で世界中を飛び回って不眠不休で働いているらしい。

聖剣事件から朱乃さんは、自分が悪魔なのが慎や美朱ちゃんの足枷になってるじゃないかって気にしてたからな。

そんな姿を見せられたら眷属を辞めて、悪魔社会から距離を取ろうという気にもなるわ。

墮天使の幹部だった親父さんもグリゴリを辞めたらしいし。

その話を聞いた部長は、地面に伏せたまま動こうとしない朱乃さんを立たせて、眷属悪魔を抜けるのを承諾。

「今までありがとう、朱乃。私の眷属ではなくなるけど、貴女が私の親

友である事は変わりないわ」

と声を掛けられると、朱乃さんは部長の胸に縋りついて号泣していた。

気持ちも落ち着いた朱乃さんが家に帰った後、本当に良いのかと尋ねたところ、部長は『あの娘をこのまま悪魔側に残していたら、慎への首輪にされるかもしれないから』と言っていた。

白龍皇との戦いを思えば、どう考えても自殺行為にしか思えなかったのだが、部長曰く悪魔貴族社会の中では慎はそれほど恐れられないらしい。

年齢はもちろん、人間との混血である事やグレモリー家の下にいた事から、その気になれば搦手でどうとでも出来ると評価されているとか。

わかってねえ、わかってねえよ！

あいつのトンでも具合は、常識的な手でどうにかできるもんじゃないから！

変に家族に手を出してあいつがブチキレたら、瞬間移動使ってピンポイントで頭を潰して回るとかマジにするからな！

なんか、ますます悪魔社会の未来が暗く感じるようになってきた。

こつちも本気で身の振り方、考えないとなあ。

7月▲◇日（夏日 暑いけど俺の心は豪雨）

諸事情により『無限の闘争』に復帰した。

本音を言えば勘弁してほしかったが、ドライグの話聞いてはそうも言っついてられない。

なんでも二天龍の神器の所持者は、その漏れ出す竜の気が強者や戦いを呼ぶ為にトラブルから逃れられないらしい。

これには普段おちやらけているオレも本気でキレた。

ドライグよ。お前、オレの中にいたんなら、裏の事情に家族が巻き込まれる事で悩んでたの知ってただろ！

なんでそんな重要な事をこつちに説明しないんだよ!!

今まで伝える必要はないと思ってたとか言ってたけどな、それを判

断するのは俺だろ!!

何千年も生きてんだから、情報がない事がどれだけ不利になるかわいわかってんじゃないかねえのかよ!!!

覇龍の事だって隠してやがって、あれが間違って発動したら俺は暴走してお陀仏だったじゃねえか!

人を舐めるのも大概にしろよ!!

何が神滅具だ、なにが赤龍帝の籠手だ!

テメエなんざ、ただの疫病神だろうが!!

そんな感じで怒りに任せてボロクソに言ったらドライグの奴、へそを曲げやがった。

そのせいか赤龍帝の籠手は使用不能になった。

まあ、あんな呪いのアイテムなんて使う気も失せてたので、別段気にしなかったのだが。

そんなこんなでガチギレしながらも、自分や家族を護るには力が必要である事を思い至ったオレは、慎から借りていた端末で『無限の闘争』に足を踏み入れた。

頭の中はグチャグチャだったけど、モチベーションはフェニックス戦の時以上。

慎の見よう見まねで仕合を組んだオレの前に現れたのは、音速丸と名乗る羽の生えた黄色い球体のようなUMAだった。

ラスボス臭が半端ないヴォイスでアホな事とかエロトークを連発しながらも、マッチョに身体を変形させたりボールを投げてきたりと、奇抜な手でこちらを翻弄してくるUMA。

被弾覚悟で『皆殺しのトランペット』を放つも、謎のピンク空間展開からの連続衝撃波を受けて敗北した。

いやまあ、ブランクも長いし負けるのはしゃあないと思うんだが、使えるようになった新技が『忍法エロモーション』ってのはどういう事なの!?

一応、こっちは覚悟決めてきてんだよ!

いくらなんでも、これはヒドすぎるだろ!?

チクシヨウ、いきなり心が折れそうだ……。

7月■@日(くもり)

今日から部長の付き添いで冥界のグレモリー領で世話になる。前にも行ったけど、紫色の雲に覆われた空は何とも慣れない。

それは兎も角、再会したミリキャスやフェイト達は元気だったし、部長のご両親も相変わらずいい人だった。

しかし気になったのは、こっちに帰って来てたサーゼクス様だ。

駒王会議の時とは違って肌に生気は無く髪はボサボサ、頬はこけてるし目の下には黒々と隈が出来ていた。

一緒に帰って来たグレイフィアさんも似たような状態で、こちらを見かけても小さく挨拶をするだけですぐに自室に行ってしまった。

部長のお母さんが言うには、駒王会議での条約で貴族達から猛反発を食らっているらしい。

魔王になると同時に出了実家に戻って来ているから、精神的に相当ダメージがあるのでは、と心配する公爵様達。

その話を聞いたオレは思わず頭を抱えてしまった。

あん時決まった事を破ったら、世界最強の男が敵に回るんだぞ!?

しかも、そうなったらアナトとか言う超怖い女神様を筆頭に多神勢力も攻めてくるってのに、なに考えてんだ、ここの貴族共は!!

もしかしてアレか?

部長が言ってたみたいに、慎の奴を低く舐めて見ているのだろうか。

そう言えば、部長のお父さんが俺達に『慎がオーフィスを倒したの本当に?』とか聞いてきたから、そういう可能性もあるかもしれない。

つうか、あの白龍皇との試合映像を見せるって話はどうなったんだよ……。

ああ、なんかオレも腹が痛くなってきた。

7月■◇日(冥界はいつもくもり)でも俺の心は快晴)

今日、俺は本気で尊敬できる男に出会うことが出来た。

その人の名は花山薫。

『無限の闘争』の闘士の一人で、俺より2歳しか年が違わないのに極道の組長をやつてるといふスゲエ人だ。

花山さんのファイトスタイルは、相手の攻撃を受けながらも問答無用で殴り倒す喧嘩師だ。

最大威力まで溜めた『皆殺しのトランペット』の直撃を受けて、そのまま殴り返された時はビックリする暇もなくKOされたし。

慎や白龍皇のように修練の果てに掴んだ強さとは違う、ナチュラルボーンの力に魅了されたオレはその場で弟子入りを志願した。

花山さんはほんの少し考えるそぶりを見せると、

『俺は他人に何かを教えられるほど器用じゃねえ。見たところ、お前さんは堅気らしいから盃は交わせねえが、俺個人の舎弟としてなら面倒見てやる』

と言ってくれた。

戦闘に関しては今までずっとブレブレだったけど、ようやく目標が定まった！

花山さんみたいなの、カッコいいと思われる戦いを目指すぜ!!

7月■●日（冥界は今日も雨だった）

久々に慎からメールが来た。

内容は『家族が増えました』

添付されていた写メにはいつもの姫島家に加えて、朱乃さんそっくりの女性に紫の髪の幼女と金髪碧眼の美少女。

さらに目の下に絆創膏をはったイケメンが写っていた。

説明を見ると、女の子やイケメンは英霊（精霊に昇華した英雄の霊というものらしい）で、朱乃さんそっくりの女性はいいつのお袋さんだと言う。

そう言えばあいつのお袋さんにはあつた事が無かつたな、などと思いつつ部長達に見せてみると何故か絶叫された。

部長が言うには、あいつ等のお袋さんは10年前に亡くなっているらしい。

ん、じゃあこの写真に写っているのは何なんだ？

もしかして心霊写真とか？

理解が追いつかず首を捻っていたが、答えはメールに書いてあった。

なんでもお袋さんは死後に慎の守護霊になっていたそうだが、そのせいであいつのトンでもパワーをモロに浴びることになり、精霊に進化して現世に復活したらしい。

これを読んだ部長やグレイフィアさんは、なんか白目になっていた。

魔術的な事なので説明されてもサツパリだが、なんだかとおつてもレアな事らしい。

まあ、難しい事は抜きにしても、知り合いの家族が帰って来たのならそれはめでたい事だろう。

お祝いメールを送っとくか。

8月●日（快晴らしいが、冥界ではイマイチわからない）

今日も今日とて、『無限の闘争』通いである。

今まであんなに億劫だったのに目標が定まった途端にこれなんだから、オレって思った以上に現金な奴なのかも。

今日は花山さんの舎弟先輩である登倉竜士さんと、九戸文太郎を相手にした。

登倉竜士さん、通称レックスさんは痛風持ちで、発症すると痛みで見境なく暴れるらしいのだが、普段は優しいとってもいい人だ。

そして文太郎さんは金髪リーゼントに短ランの下にはさらしを巻き、ズボンにはボンタンというレトロな不良。

言葉遣いや態度は荒いが、面倒見が良く情に厚い人である。

さて試合内容だが、レックスさんの相手にはならなかった。

『皆殺しのトランペット』を当てても大したダメージにはならず、そのまま殴り返されて20メートルほど吹っ飛んでKOされた。

文太郎さんは比較的普通の身体能力（といっても無限の闘争の闘士なので、常識的には十二分に超人レベル）なんだが、なんというか不良特有の凄みとか脅しに気圧されてしまつて力を出せないままに

サマーソルトキック（文太郎さん曰く『ブンちゃんキック』）を受けて敗北。

花山さん曰く、オレはまだまだ場数が足りてないらしい。ギギギツ……悔しいが全く言い返せない。

という訳で、今後の方針はとにかく対戦をこなして相手に飲まれないうようになる事だ。

あと、訓練中にドライグが神器を使えとうるさかった。信用なんて欠片もしていないお前なんざ誰が使うか！

なにが『白いのに追いつけ！』だ。そんな事の為に鍛えてんじやねえよ、馬鹿め。

8月▲日（くもり）

今日はミリキヤスに誘われて、『無限の闘争』で稽古を行つた。

例のツアーから二か月くらい経つたけど、ミリキヤスがまたもや強くなつていた。

駒王会議で白龍皇が使つてた真空波やサマーソルトキックをパクつたうえに、それに部長と同じ滅びの魔力を加えてた。

聞けば、『大したことじゃないですよ、あの時自分が見えた分しか真似できてませんから』と笑顔で答えが返つて来た。

……天才つてこういうのを言うんだなあ。

かく言うオレは花山さんから与えられたノルマに従つて、バーデイという黒人のヤンキーと闘つた。

首に手錠のチェーンを絡められて地面に叩きつけられたり、突進頭突きで吹っ飛ばされたりと散々だったが、むこうがトドメに放つた頭突きに『皆殺しのトランペット』がカウンターで入つて勝つことが出来た。

今回の闘いで『皆殺しのトランペット』の新しい形が、臆気ながら浮かんだような気がした。

取り敢えず、花山さんや慎に相談しながら煮詰めていく事にしよう。

8月●日（快晴 偶には太陽が見たい）
慎からメールが来た。

内容はまたしても『家族が増えました』
いやいや、この短期間に増え過ぎだろ。

添付されていた写メに映っていたのは姫島家に加えて、お袋さんと美朱ちゃんに抱かれた2人の赤ん坊。

なんでも男女の双子で、ちゃんと血の繋がった慎達の弟妹らしい。
……おかしくね？

お袋さんが帰って来たのって数日前だろ。
精霊ってそんな短期間に子供産めるのか？

生命の神秘に首を捻っている、同じく知らせを受け取っていたサーゼクス様から細かい事は気にしない様に言われた。

もしかしくなくても、なんかヤバイ事が関わっているようだ。
……うん、俺のような下っ端は首を突っ込むべきじゃないな。

お袋さんの時と同じく、素直に祝福のメールを送っておく事にした。

あ、今回のノルマは草薙条という不良との対戦である。

「本牧の赤豹」という二つ名の示す通り、足を使った素早い立ち回りと豊富な手数が武器の男だ。

スピードを活かしたヒット&アウェイ戦法に苦戦したが、攻撃を食らいながらも連続技に割り込む形で出した改良型『皆殺しのトランペット』で形勢が逆転。

止めを刺そうとしたら、突然奴の舎弟が乱入してこちらを羽交い締めにしやがった。

「条さん、やっちゃってください!!」

「行くぜ！ 勝男!!」

——じゃねーよ。

対戦の方は、こちらが振りほどこうとしているうちに復活した奴にボコボコにされた事で敗北。

これって反則じゃないか!? とルールを調べてみたら、短期間ならば助っ人の召喚はOKらしい。

どんな技も認めますつてのは、マジだったんだなあ。

『無限の闘争』パネエ。

あと、慎に花山さんの舎弟になった事やドライグとのいざこざをメールしたら、『無限の闘争』のロッカーに重り入りの服(合計300キロ)と肉体改造メニュー、あと『精神と時の部屋』つてところの地図が用意されていた。

花山さんに近づくには、肉体を限界まで鍛える事が必須だとか。

確かに花山さんは天性の才であれだけど、オレはそうじゃないからなあ……。

ま、ここは頑張るとしますか。

8月☆日(快晴 一年ぶりのご無沙汰でした)

……ありえん。

『無限の闘争』に通うようになって少しはこの世界を理解したかと思っただけど、そんな認識は全然甘かったのを思い知らされた。

先日、慎から紹介された『精神と時の部屋』

ここは一日で一年分の修行が出来る部屋だった。

説明書きでは、部屋の中は外界とは時間の流れが違う特殊な空間らしい。

將軍様に拉致られた時に似たような体験をしなかったら、絶対に信じられなかったと思う。

さて修行のだが、我ながら頑張った。

超頑張った!

空気が薄くて妙に身体が重い世界で、一日も休まずに慎から貰ったメニューをこなす傍ら、ひたすらに対戦を続けた。

メカ沢新一に城所剛、カズマにシエン・ウーときて山崎竜二やさぶまで。

なんかゴロツキとか不良ばっかりなのは気のせいだと思いたい。

一緒に付き合ってくれる花山さん達のチョイスだから仕方ないっちゃあ仕方ないが。

というか、山崎やサブつて本職の極道だし、絶対に狙ってやってる

よなあ。

そんな過酷な修行を乗り越えたお陰で、昨日までは貧弱な坊やだった俺も今では筋肉ムキムキの細マツチヨ。

さすがに花山さんの握撃は真似できないけど、ヤシの実くらいは握り潰せるようになったぜ!!

この努力が実った充実感、赤龍帝の籠手じゃ絶対に味わえないわ。

難点があるとすれば、会う人みんなが『誰だよっ!?!』って聞いてくることくらいか。

まあ、そんなこんなで少しは強くなれたと思う。

あとは父さんたちを護れるように理想の一撃目指してまっしぐらだ!

8月@日(晴 俺の心は嵐)

……サーゼクス様とセラフォル様が魔王をクビになった。

なんでも慎との約束を守るために一部の転生悪魔を地上に還した事と、悪魔の駒の使用禁止にしたのが原因らしい。

『貴族の既得権益を犯した上に、下僕悪魔を政府に無断で解放した事で悪魔社会に多大な損害を及ぼした』

なんてお題目で、サーゼクス様達とは別の魔王二人とほとんどの貴族連中の合意により、魔王の座を追われたそうだ。

後任はルイとかいう悪魔が二人分の仕事をするんだとか。

今回の事で、サーゼクス様が進めて来た転生悪魔廃止の動きは中止。

地上に還るのを待っていた転生悪魔は再び貴族の元に戻る事になり、没収されていた悪魔の駒は改良が施された物が再配布されるらしい。

ふざけんなよ、おい!

このままじゃマジで慎と敵対する事になるじゃねーか。

上の連中は分かってるのか?

そうだったら条約を破られた天界や堕天使、多神勢力の神様達も攻

めてくるんだぞ。

悪魔だけでどうやって勝てつてんだよ!?

サーゼクス様は帰って来てから死んだみたいに眠ってるし、グレモリー家の雰囲気も滅茶苦茶暗い。

尊敬する慎と敵対するのがショックだったのか、ミリキヤスも寝込んでしまった。

本当にこれからどうなるんだよ……。

8月■◇日（くもり 俺の心は梅雨もよう）

正直、気分が悪い。

今日、若手悪魔の会合とかいうイベントに部長の付き添いとして行ってきた。

参加していたのは、ウチの部長の他に支取会長と生徒会。

アガレスとかいう家のお嬢さんとバアル家からマグダラン・バアルとかいうヒョロツこい兄ちゃんが出てた。

このマグダランとかいう人、サイラオーグさんの弟らしい。

部長が彼の事を聞いたところ、なんとお袋さんと眷属を連れて家を出奔したらしい。

マグダランの兄ちゃんは『魔力も持たない欠陥品の負け犬が逃げ出したのさ!』なんて見下していたが、きつと違う。

あの人、多分悪魔を見限ったんだ。

前にあった時、生まれつき魔力が無かったせいで悪魔社会で迫害されてたって聞いたし。

その上、極限流空手の総帥を父親同然に慕ってたお陰で、人間はすばらしいとか言ってたからなあ。

悪魔社会での人間の扱いとかに、思うところもあったんだろう。

あと、サーゼクス様達の失脚に対しては、アガレス・バアル共におかしいとは思っていなかった。

転生悪魔の解放による影響は軍事力や労働力の減少はもちろんの事、レーティングゲームの廃止とそれによる収益の消失に繋がる。

さらに強力な他種族を下僕として従える事は貴族悪魔としてのア

イデンテイテイでもあるらしく、そういった貴族の既得權益を犯そうとした事も悪魔社会に重大な損害を与える事になる。

転生悪魔の消失という悪魔社会の根幹を揺るがす行為を強引に押し進めようとした以上、サーゼクス様達の更迭は仕方がない事らしい。

他の種族を下僕呼ばわりするのに思うところはあがあるが、それは置いておこう。

サーゼクス様達の急な改革の原因になった慎の事について部長が話を振ると、マクダランのあんちゃんは嘲りの笑みを浮かべ、アガレスのお嬢さまは悔し気に顔をゆがめた。

マクダランにしてみれば、慎は出来損ないであるサイラオーグさんに媚びを売る混ざり物だそう。

オーフィスに勝ったという話も当然の如く信じていなかった。

対してアガレスのお嬢さまは、日本の領地（たぶん、そう呼んでるだけで不法に居座った土地だろう）にいた頃に眷属ごとまとめて叩き潰されたらしく、もの凄く忌々しそうに次は負けないと言っていた。

多分、今闘ったら腕の一振りですべて全滅させられるだろうから、辞めといたほうが良いと思う。

そんなこんなと雑談をしていると、式の間がやってきた。

お偉いさん方が取り囲む壇上に連れていかれて、部長を初めとした若手達が政府首脳陣に挨拶。

それぞれに今後の抱負を発表したわけだが、最後にお偉いさん達がトンでもない事を言いだした。

サーゼクス様の方針で休止していたレーティングゲームを再開する事、その第一試合として部長と支取会長の仕合を組むと言うのだ。

今後の事を思うとそんな気分では無いのに、こっちの事はお構いなしに周囲は盛り上がる。

そのうえ、俺を見る度にどいつもこいつも赤龍帝、赤龍帝だ。

今の俺にとってドライグはただの疫病神と言うのもあるが、こっちの名前を聞いても赤龍帝呼ばわりしてくる奴にはどうにもむかつ腹が立つ。

これはいったいどういう事なんだろうか？

グレモリー邸に帰ってから『無限の闘争』に籠った俺は、すぐさま対戦を組んだ。

何も考えられなくなるほど暴れて、この気分を吹き飛ばしたかったのだ。

対戦相手はなんと『皆殺しのトランペット』のオリジナルの使い手である壬生灰児。

痛覚がマヒした奴との防御を捨てた乱打戦の末に、『皆殺しのトランペット』の強化版である『絶望の地下鉄』を食らって敗北。

とはいえ、収穫が何もなかったわけじゃない。

決まり手である『絶望の地下鉄』を修得できたし、そのおかげで俺が求める渾身の一撃が明確に見えた。

レーティングゲームがある事だし、この技を完成させるために全力を尽くさないと。

8月\$日（雨 心の中はタイフーン）

『無限の闘争』で例の技の精度を上げていたら、ミリキヤスから部長が呼んでいると声を掛けられた。

呼ばれた場所に向かってみると、そこには巨大なドラゴンが。

彼はタンニーンという転生悪魔で、元は竜王と呼ばれる強力なドラゴンだったらしい。

用を聞いてみれば、俺がここにいると聞いたのでドラゴンとして鍛えてやろうと思ったんだとか。

はつきり言っただきなお世話だったので、こちらが赤龍帝の力を使う気がない事を説明してお断りさせてもらった。

しかし、むこうは納得がいかなかったらしく、俺を連れ去ろうと手を伸ばしてきたのだ。

仕方が無いので、試作段階である新型の『絶望の地下鉄』をぶっ放したところ、腹に拳の型を残して吹っ飛ばタンニーン。

殴っただけでなんだが、啞然とする部長達と同様に俺もこれには度肝を抜かれた。

俺が目指す一撃は、花山さんをリスペクトした拳一発に全力を込める物だ。

しかしメインで使っている『皆殺しのトランペット』や『絶望の地下鉄』は、踏み込みによる加速がダメージ増大に一役買っている為に至近距離ではイマイチ威力にムラがある。

その辺の改善に試行錯誤していたところ、修行に来ていた慎から『踏み込みの途中で急ブレーキを掛ける事で、加速と急停止の反動を拳に乗せる』という、神極拳の打法を教えてもらったのでやってみただが……

うん、効果出すぎである。

今思えば、全体重を乗せる一撃って事は重りの300kgも含まれてるんだよなあ。

そりやあドラゴンだって吹っ飛びもするわ。

ともあれ、この一撃でタンニーンは気を失ってしまったために、ドラゴンブートキャンプは始まる前から閉幕。

悪い事をしたと思うけど、確かな手ごたえを感じられて嬉しかったのは内緒だ。

8月●日（晴 俺の心も梅雨明け）

ようやく……本当にようやく、俺の理想の一撃が完成した。

初お目見えが警察車両（？）のポリタンクZというあたり、着々とアウトローに染まって来てると思う。

『絶望の地下鉄』をベースに突進を一步で止めてその反動を使う神極拳の打法、カズマからパクったシエルブリット（打つ瞬間だけ、右手に装甲が出るのだ！）を織り交ぜた一撃必殺の拳。

赤龍帝の籠手に頼らない、俺自身が鍛えた俺だけの拳だ！

決まれば、あの白龍皇にも大ダメージが行くと慎もお墨付きをくれたし、花山さんも合格点を出してくれた。

後はこいつの習熟度を上げて、どんな状況でも撃てるようにしないと。

俺には当て勘や防御に対する才能は無いけど、修行や対戦で身体が

妙に頑丈になったし、この頃痛みも鈍くなってきたから相討ち覚悟でぶつ放せば大体は当たるだろ。

ともかく、これで『無限の闘争』での修行も一端は切り上げだ。

そういえば、明後日には会長とのレーティングゲームがあるんだよなあ……すんげー気乗りはしないけど。

ゲームでタイトルを取るのが部長の夢だっつてわかってるけど、戦争間近の状況でこっちの事を見下したり赤龍帝としか見ない奴等の見世物になると思うと、やる気なんてプシューってな感じに抜けちゃうのだ。

もう適当にヤラれてお茶を濁そうかな。

ドライグの馬鹿とも冷戦状態で、籠手なんて全然出してないし。

せつかく技が出来たのに、後の事を考えるとマジでヘコむ。

やっぱ、俺って悪魔社会に馴染めそうにないなあ……

8月■\$日（最悪）

最悪だ。

今日、部長から話を聞いた。

日本が転生悪魔の排除に動き出したらしい。

一か月以内の国外退去（駒王町在住の者は部長の管理権限が切れるまで）、それを破った場合は強制排除するらしい。

転生を強制された者への救済措置として希望すれば人間に戻れるそうだけど、それだっつて2週間以内に返答を出さないといけないそうだ。

この話は国会で正式に決められたもので、慎に掛け合っても覆すことが出来ない。

そのうえ、この事で俺や会長の眷属の保護者達に裏の事がバレたらしい。

法的措置を実行に移す為に、日本全国で確認されている転生悪魔の親族には裏の事情の説明が行われているんだとか。

駒王で動いているのは慎らしいので悪し様に言われてはいないと思うが、それでも父さん達には知ってほしくなかった。

『今後どうするか、じっくり考えて決めてちょうだい』

という部長の言葉を最後に解散した後、俺は花山さんにこの件を相談した。

『本物の親を取るか、組織での親分を取るか。随分と難しい問いを出されたもんだな』

小さくそう呟いた後、花山さんは俺の頭に手を置くと、少し強めに撫で始めた。

『……親への情と渡世の義理。難しい話だが、こいつはお前が決めなきゃならねえ事だ。……だから、他人が言う小綺麗な言葉に飛びつくな。最後の最後までしっかり考えるんだ。……自分が納得しないと、きつと後悔するからな。……あと、自分の心に嘘をついちやいけねえ。誰かにいい顔がしたいとか嫌われたくないなんて理由で、自分の本音に背を向けてもよ、そんなもんは続かねえ。限界が来て心が折れちゃったら、今度は好かれないと思ってた奴を恨んじまう。そんなのは格好悪いだろ。……侠が意地を通すなら、テメエに真っ直ぐじゃねえとな』

寡黙で普段はあまり喋らない花山さんが、懸命に語ってくれた言葉はひどく胸に染み込んだ。

省みれば家族と部長達、その両方を傷つけないようにしたいなんて考えが、オレの中にあっただのだからと思う。

でも、それじゃダメなんだ。

今の状況で父さん達と部長、双方を掴めるほどオレの手は長くない。

中途半端じゃ両方を失う事になる。

だから、決めないといけない。

どちらかを切り捨て、選んだ方を死に物狂いで守る覚悟を。

気合注入という名のビンタを花山さんから貰ったオレは、顔に入りきららないモミジを貼り付けたまま、『無限の闘争』後にした。

入れられた気合が強烈すぎて、足元が生まれたての子鹿みたいだったのは、秘密だ。

その後、オレはドライブとも話し合った。

気付いたのはつい最近だが、生まれた時から一緒だったのだ。
喧嘩したままというのも寂しいだろう。

やっぱりこっちの意志では神器は出なかったもので、左手に何度か呼びかけたところ、手の甲の部分が緑に光ってドライグの声がした。

ドライグはオレの中で修行を見ていたらしく、機嫌は前よりも上向きだった。

だけど、その理由が白龍皇と闘う可能性が出てきたから、というのはいただけない。

修行は自衛の為で、白龍皇となんて闘うつもりは無いと伝えようと、ドライグの機嫌は急降下。

『赤と白の闘いは決着を着けなければならん！』

だから、奴が無視できない程に強くなれ!!』だの、『俺がお前の中にいる限り、闘いの宿命からは逃れられん。大人しく運命を受け入れろ!』などと怒鳴り散らした。

正直ムカツ腹が立ったが、こちらがキレては前と同じだと思って根気よく話を聞いていると、ドライグにも余裕が無いことが分かった。

どうもこいつは、ライバル関係であるアルビオンに大差を付けられた上に、眼中に無いかのような態度を取られたことに焦っているらしい。

気持ちは分からなくもないが、こちらも譲れない事情がある。

奴の都合には付き合ってはもらえない。

結局、話しは平行線に終わり、出た結論は

『俺が宿主である内は赤龍帝の籠手は使わないし、ドライグも力は貸さない』

『その代わりに、こちらが無用だと判断した戦いには関わらないし、完全に神器を摘出する技術が見つかれば、俺が赤龍帝の籠手を手放してもドライグは文句を言わない』

というものだった。

寂しくないと言えば嘘になるし、赤龍帝の籠手が無い俺にどれだけの価値があるか分からないが、互いに納得して出した答えだ。

しっかりと受け止めて行こうと思う。

◆
「うおおおおっ!!」

駒王町に現存する巨大なショッピングセンターを模した空間に、怒号と肉を打つ鈍い音が木霊する。

一見すれば黒いカメレオンにも見える、デフォルメされた龍の頭を模したデザインの籠手を手に、次々と攻撃を繰り出す金髪の男は匙元士郎。

そして、その猛攻を拙い防御でなんとか凌いでいるのは、兵藤一誠だ。

「どうした、兵藤！ 赤龍帝の力つてヤツを見せてみる!!」

気炎を吐きながらも、右手に纏った自身の神器である黒の籠手『黒い龍脈』アフソーション・ラインで相手の右頬を打ち抜く匙。

対する一誠は、クリーンヒットしたにも関わらず少しぐらついただけで、ダメージなど無いと言わんばかりにすぐさま反撃に打って出る。

しかしモーションが丸見えのワイルドパンチはアウトボクサー顔負けのステップを駆使する匙を捉えることが出来ず、拳が空を切る間に更なる一撃が一誠の顔面に突き刺さった。

匙元士郎は兵藤一誠の事が気に喰わなかった。

元は女子高ということだけでさえ肩身が狭かった駒王学園での男子の立場を、悪友二人でやらかした女子更衣室の覗きやわいせつ物の持ち込みなどでさらに落とした事もそうだが、神滅具『赤龍帝の籠手』を持つと言うだけで裏の世界から一目置かれているのが許せない。

これで何らかの活躍でもしていたのなら、不承不承ながらも少しは認めただろう。

しかし、戦歴も非公式のレーティングゲームで、ライザー・フェニックスに敗北しただけだ。

同時期に悪魔になり、なんの皮肉か同じ龍系統の神器を宿していた

匙は、何かにつけて一誠を比較に持ち出された。

そして、その話題を出す者の殆どは『赤龍帝の籠手』を重要視し、龍王とは言え五分の一しか持っていない匙を下に見たのだ。

ソーナの付き添いで出会う裏の実力者にそう言われる度に、匙は唇を噛み、手の皮に爪が食い込む程に拳を握ることで悔しさに耐えて来た。

中学時代は札付きのワルで通っていた匙にとって、変態三人組などと言われている一誠より下だと思われるのは、屈辱以外の何物でもなかった。

だからこそ、このゲームが決まった時は誰よりも闘志に燃えたのだ。

己の手で一誠を倒し、世間のイメージを払しょくする。

ソーナに無理を言って格闘の教官を手配してもらったのも、その元で血の小便が出尽くす程に鍛えたのも、すべてはその目的の為なのだ。

相手の異常なタフネスは少々予想外だが、手が無いわけではない。それを使う為にも、手数で翻弄する必要があるのだ。

『赤龍帝の籠手』はどうした!? そんな素人パンチじゃ俺は捕まえないねーぞッ!!』

一誠の事を煽りながらも、匙の頭はこの上なく冷えていた。

表に出していない神器の効果なのか、振るわれる剛腕も厄介だ。

素人めいた大振りのお陰で躲すのは苦でもないが、砲弾が通り過ぎたような空振りの轟音からして、被弾などしようものならただでは済まないだろう。

研究資料で見た試合のライザーみたいな再生能力を、匙は持っていないのだ。

だがしかし、それでも匙は下がらない。

自分の想いもあるが、ここで赤龍帝である一誠を落とせば、それは主であるソーナの評価につながる。

彼女の力が新たになった上層部に認められれば、一度は断たれた『レーティングゲームの学校を作る』という自分たちの夢に一步近づ

くのだ。

試合前にソーナから受けた日本政府の対応が事実なら、自分たちの生きる場所は冥界になるのだから、そういう意味でも負けるワケにはいかない。

一誠を中心に、円を描くようなフットワークでヒット&アウェイ戦法を繰り返す匙。

威力は無いが絶え間なく襲い来る左ジャブに焦れた一誠が、背中が見えるほどに右腕を振りかぶったのを見て、その瞳に鋭い光が走る。

空気の壁を叩き潰さんばかりに振るわれる、オーバースイングの右拳。

当たればKO必至の強打を前に、匙の足は前に出る。

顔面に向けて襲い掛かる剛腕をダッキングを使って紙一重で躲した匙は、反動に振る舞わされる形になっている相手の一点に向けて、渾身の右フックを放つ。

弧を描きながら黒龍の籠手を纏った拳が食らいついたのは、一誠の右耳。

次の瞬間、今まで小動しかなかった一誠の身体が大きく傾いた。

『アンダー・ジ・イヤー』

相手の耳の裏に拳を当てる事により三半規管に衝撃を与え、平衡感覚を狂わせるボクシングの高等技術だ。

「う……おお……!?!」

「やっば、これでも倒れねえかよ……。だがなあッ!!」

己が意思に反しておぼつかない両足に戸惑う一誠。

「———これならどうだあッ!!」

その間に背後へ廻った匙は、その拳にありったけの力を込めて右ストレートを放つ。

『黒い龍脈』の下で固く握りしめられた拳は、落とされたギロチンの刃のように無防備になった一誠の延髄に食らいつく。

ゴッ! というひと際鈍い音が当たりに響き、匙が拳を振り抜くと同時に一誠の身体が前のめりに倒れる。

『難攻不落と思われていた赤龍帝の身体が音を立てて崩れ落ちたあッ

！ シトリーの兵士、これは大金星かあ!!』

集中していた為に今まで聞こえなかった実況の声と共に、ゲームのバトル・スペースを覆う様に設けられた観客席を映すモニターから大歓声が木霊する。

（魔技『断頭』 上手くいききましたよ、教官）

一誠を打倒した自身の右拳を見つめながら、匙は切り札を伝授してくれた教官に感謝の意を示す。

『断頭』と名付けられた一撃は、背後からの攻撃を反則とする現代ボクシングでは絶対にありえない殺し技だ。

相手の背後に回り込み、延髄に向けて拳を叩き込む。

言葉にすれば単純だが、実戦の最中に相手の後ろを取ることもや首に向けて正確に拳を打ち込む事など、この技を成立させるための難易度は桁違いに高い。

またその殺傷力は凶悪で、人体の急所である後頭部、そして神経節の集合場所である延髄をダイレクトで殴打する為、食らった者の意識は容易く消失する。

さらに神経や脳に損傷を及ぼす可能性も高く、相手の身体に重大な障害を及ぼすのはもちろん、最悪の場合は死に至らしめる場合もある。

人間の力でこれだけの被害を及ぼすことが出来るのである、悪魔の身体能力でそれを行えば、結果は言うまでもないだろう。

神滅具と龍王の欠片、明らかに格上を落とした匙のジャイアント・キリングに沸く実況と観客たち。

騒音と言つてもいいほどの歓声の中、一誠はまどろみの中にいた。ここ最近、頻繁に味わったKOされた時の泥の中に引き込まれるような感覚。

その中で彼は、忘れかけていた記憶を夢見ていた。

◇

……………そう。

あれは高校に入る前の日の夜の事だった。

話があるって呼ばれたオレは、1階の仏壇がある部屋で父さんと向かい合っていたんだ。

この部屋の仏壇はオレが生まれる前からあった。

小さい頃は写真のないこの仏壇が、誰の物なのかって父さんや母さんによく聞いたっけ。

それで、その度に父さん達は少し悲しそうに笑いながら『一誠。これはお前を護ってくれる人のモノなんだよ』って言ってたんだ。

けど、その夜は違った。

父さんは自分用の焼酎を片手にオレにビールを勧めながら、この仏壇の由来を教えてくれたんだ。

この仏壇は、オレが生まれる前に母さんのお腹に宿ったけど、生まれてくることが出来なかった姉さんや兄さんのものだったんだ。

父さんが言うには、母さんは元々子供を宿しにくい体質だったらしい。

それでも子供が欲しいと望んだ母さんは、不妊治療に挑戦した。

長い時間と多くの金が掛かったけど、そのお陰で母さんは最初の子供を宿すことが出来た。

それが俺の姉さんになるべき人だった。

父さんと母さんは姉さんが生まれてくるのを本当に楽しみにしていたらしい。

父さんはベビーベッドや赤ん坊用のオモチャを山ほど買ったり、母さんは婆ちゃんから産着の縫い方を教わって自分で塗ったりしていたんだと。

でも、姉さんがこの世界で産声を上げることは無かった。

母さんのお腹の中で十分に育つ前に身体の外に出てしまった姉さんは、乗った救急車が病院に着く前に息を引き取ったそうだ。

それでも子供を諦めなかった母さんは、姉さんの事があった後も努力を重ねて再び妊娠する事に成功する。

これが俺の兄さんになるはずだった人。

でも、兄さんも父さんたちに抱かれることは無かった。

詳しい事は教えてもらえなかったけど、兄さんは母さんのお腹の中で亡くなってしまったらしい。

オレはそんな悲しい経験をした母さんたちが、ラストチャンスと決めた挑戦で生まれて来た子供だった。

オレの名前『一誠』は「一番、誠実に生きてほしい」という父さんの願いの他に、生まれてくる事のなかった姉さんと兄さんに着ける筈だった名前から一文字づつ貰ってるんだ。

『一葉』と『誠』それが俺の兄姉の名前。

最後に父さんはこう言った。

「一誠。人間の命はな、思っているより儂いものだ。生まれてくる事が出来なかった子供もいれば、爺ちゃんみたいに昨日まで元気だった人があっさり逝っちゃう。……もし俺になにかあったら、母さんを一人にしないでやってくれ。あの人はな、お前が思っているほど強くない。すごく寂しがり屋なんだ。母さんが無理して子供を作ろうとしたのも、夫婦二人じゃ寂しいと思ったからなんだ。お前の将来を縛り付けるような事は言いたくないが、こんな事を頼めるのは息子だけだからな。大変だと思うが、頼む」

酒で少し赤くなってたけど、見た事も無いくらい真剣な顔をした父さんの頼みをオレは受けた。

零れ落ちそうな涙を誤魔化す為に飲んだ、人生初のビールは酷く苦かった。

……………ああ、そうだ。

どうして俺は忘れていたんだろう。

こんな絶対に破れない約束を……………。

……………すみません、部長。

貴女について行くことはできそうにありません。

オレは家族を、命をくれた両親や名前を分けてくれた姉兄達を捨てる事はできないから……………。



大番狂わせで沸き立つ会場の中、匙は倒したはずの一誠が起き上がろうとしているのに気づいた。

一誠が倒れていた時間は20秒ほど。

ボクシングならば勝敗を決して余りあるが、この舞台はレーティンゲーム。

審判がリタイヤと断じなければ、どれほどダメージがあろうとも続行である。

起き上がり、凝り固まった首を鳴らす一誠の顔を見た匙は、緩んでいた気持ちを引き締めた。

先ほどまで浮かんでいた憂いや迷いが、一誠の顔からきれいに消え失せていたからだ。

「随分とスツキリしてるじゃねえか。そんなに夢見が良かったかよ？」

『そのまま寝ていればいいものを』という皮肉を込めた軽口に、一誠は口元を吊り上げる。

「ああ、大事な約束も思い出したしな。お陰で迷いが吹っ切れたよ」「へえ……。それで、お前はどうするんだよ？」

一誠の迷いが日本の事だと当たりを付けた匙は、その結論を問う。好奇心も勿論あるが、一般人からの転生で男という自身と似たような境遇から、定めた道を知りたかったのだ。

「……日本に残る。部長に命を救ってもらった事には感謝してる。けど、両親を捨てる事は出来ない」

「……意外だな。スケベなお前の事だから、リアス先輩の色気に迷って冥界を選ぶと思ってぜ」

匙の身も蓋も無い物言いに、一誠の顔に苦笑いが浮かぶ。

「否定できないところが辛いな。……匙、お前はどうするんだ？」

「決まってるんだろ。どこまでも会長に付いて行くのさ」

「家族はどうするんだ？」

「俺の家族は弟と妹だけだからな、日本にいてもらう。それで会長を頭にガンガンのし上がって、あいつ等が一人前になるまで仕送りを送ってやるのさ」

「……今、悪魔の立場がどれだけヤバいか、解ってるよな？」

「ああ。けど、俺は会長とシトリーの家に助けられたんだ。あの人が悪魔に付くってんなら、俺に退く道はねえよ」

そこまで口にするると、匙はファイティングポーズを取ってステップを踏み始める。

「そういう訳なんでよ、お前も出し惜しみしないで『赤龍帝の籠手』出してくれや。さっきみたいに派手にブツ倒して、俺達の夢の踏み台にしてやるからよ」

『赤龍帝の籠手』、ね。……匙、お前もそうなんだな」

「あん？」

顔を俯かせた一誠の呟きに、匙は眉を顰める。

「こつちに来てからよ、誰も彼もがオレを赤龍帝としか呼びやがらねえ。それがどうにも気に入らなかつた」

「何言ってやがる。『赤龍帝の籠手』を持つてるんだから当たり前じゃねえか。こつちの連中は日本から来た下級悪魔の素性になって興味はねえからな」

「理屈は分かるさ。けど、納得はいかない。お前にもそういうの、あるだろ？」

「まあ、気持ちは分かるな」

「ずつと何でだろって考えてただけどよ、さっきその理由がわかつたんだ」

「で、その理由ってなんだよ？」

興味なさげに問いを投げた匙は、前を向いた一誠の顔を見て息を飲んだ。

そこにはスケベでお調子者という、目の前の男のイメージを粉々にするほどの憤怒の形相が浮かんでいたからだ。

「オレの名前は兵藤一誠だ、赤龍帝じゃない。この名前は父さんが、生まれる事が出来なかつた兄妹たちの名前から一文字貰って付けてくれたものだ。テメエ勝手な理屈で他人に迷惑しか掛けないクソドラゴンなんかと一緒にされちゃあ堪んねえんだよ！ なのにどいつもこいつも赤龍帝、赤龍帝だ！ ふざけるのも大概にしやがれってん

だッ!!」

ビリビリと空気を振るわせるほどの怒号に、モニター越しの歓声が止まる。

一誠の言葉は無茶苦茶な理屈だった。

しかし、それを聞いた者の多くは彼に共感を覚えた。

よほどの事情がなければ、親から貰った名前に誇りを持たない者はいない。

一誠が口にしたような事情があるならば、猶更だ。

そんな大馬鹿な、それでいて真つ当な叫びを声を上げて笑う者がいた。

目の前に立つ匙だ。

「……いいねえ。見直したぜ、兵藤。このギャラリーの前で無茶苦茶な事をぶちまけた上に、神滅具に宿る伝説のドラゴンをクソ呼ばわりするとはな。——さっきの言葉、訂正するわ。俺が乗り越えるのは赤龍帝じゃねえ、兵藤一誠って男だ」

「そうはいかねえ。こつちもこれが最後の奉公だからな、負けて終わるのは御免だ」

匙の宣言にそう返しながら、一誠は両腕を上げる。

彼が取ったのは花山薫や壬生灰兎と同じ、スタンスを広げ両腕を頭の横にあげる独特の構えだ。

「行くぞ、兵藤! テメエの意地、見せてみるやあッ!!」

気炎を吐きながら、地を蹴る匙。

同時に一誠は背中が相手に見えるほど、大きく右腕を振りかぶる。両者の状況は対戦の序盤と同じ。

あの時は一誠の右拳を匙がカウンターで切って落とした。

では、今回はどうか。

先程までのフットワークを捨てた匙が、一直線にお互いの射程圏内に飛び込んでいく。

対する一誠は、鋭い視線を匙にむけたまま、彫像のように動こうとしない。

「カアッッ!!」

気合一閃、加速の勢いを込めた渾身の右ストレートが一誠の顔面に突き刺さる。

顔の中心を捉えた拳骨に押し潰された鼻っ柱から鼻血が飛び散る。だがしかし、拳を撃ち抜く事は出来ない。

匙の放った一撃を一誠は首の筋肉だけで完全に受け止めたのだ。

フェニックス戦を資料に一誠を研究していた匙。

彼が見落としていたことが一つある。

それは、一誠は『自身のテンションに大きく左右されるファイターである』という事だ。

生来の激情家である彼は、物事に対する興味の度合いや気合の乗りで大きく能力が増減する。

フェニックス戦で実力的に大きな差があるライザーに食い下がった事や、例えは悪いが駒王学園での覗き行為に対するバイタリティがそれを物語っている。

そしてこの傾向は花山薫の舎弟となり、喧嘩師というファイタースタイルを選んだ事で大きく加速した。

迷いを抱えたままだったレーティングゲーム序盤ならまだしも、匙の拳では今の一誠を単発で沈める事は出来ないのだ。

「見せてやるよ……」

一誠の放つ刃物のような凄絶な眼光に射抜かれた匙が咄嗟に拳を引こうとするが、それは遅きに逸していた。

「兵藤一誠の喧嘩面子ツツ!!!」

匙が動きを見せるよりも速く、金色の装甲に包まれた拳がその顔面を捉えていたからだ。

まるで爆弾が破裂したかのような轟音と振動。

モウモウと撒き上がる粉塵が晴れた後には、コンクリート製の床に刻み込まれたクレーターと、その中心に上半身を埋めた匙の姿があった。

「ケジメは付けさせてもらった。……匙、お前は強かったぜ」

右腕から？がれて消える朱金の装甲を横目に、一誠は倒れた匙に言葉を投げる。

シエルブリット

一誠が『無限の闘争』で対戦した中でも、屈指の打撃力を誇るアウトロー『カズマ』の持つ能力だ。

アルターと呼ばれる物質変換能力によって己が右手を装甲で鎧い、目標を叩き潰すというシンプルながら強力な技だ。

本来なら背中に三枚の羽根状のパーツが展開され、それを消費する事で爆発的な推進力へと変換。

その勢いのままに拳を放つのだが、アルター能力の適性が無い一誠では技の効果で右手に装甲を纏うのが精一杯だ。

リタイア判定を受けて、転移陣の中で消えていく匙に背を向けた一誠は、仲間と合流する為に走り出した。

匙との闘いは終わっても、ゲームはまだ続くのだから。

8月■@日（気分晴れ晴れ）

支取会長とのレーティングゲームが終わった。

結果は俺達の勝利。

序盤は本調子でなかった為に足を引っ張ってしまったが、匙にKOされかかった時に見た夢のお陰で迷いを吹っ切ることが出来た。

その時、場の勢いで滅茶苦茶恥ずかしい事を言ったような気がするけど、関係者のみんなにはその辺はスルーしてもらいたい。

なんにせよ、オレは進むべき道を選んだ。

部長には逆縁を切るケジメをしっかり着けないといけない。

まあ、まずは今日の説明会だな。

父さんと母さんへの言い訳を考えとかないと……………。

◇

「おーおー。スッゲーな、最近の若いモンは。ワンパンでビルのフロア一つを半壊させるかよ。オレちゃんには真似できねえわ」

豪華を極めた貴賓室の中に、場にそぐわない軽薄な声が響き渡る。

燭台に灯った火が照らし出すのは三人の男。

彼らが目を向けているのは、有能な若手と称されるリアス・グレモリー対ソーナ・シトリのレーティングゲームだ。

「なるほど、この少年はかの喧嘩師の系譜か。他にも多くの力が混ざり合っているようだが、なんとも見事な物だ」

「この下級悪魔が気になるようでしたら、御前にお連れしますが。ルシ——」

「ユーグリット。今の私はルイ・サイファーだよ」

「……失礼しました」

部屋の中央に置かれた玉座に腰かける最高級のスーツを身に纏った金髪碧眼の青年に、銀髪の執事姿の男が頭を下げる。

「パパも用心深い事だねえ。偽名まで使って正体を隠すなんてさあ」

「リゼヴィム。分かっているならその呼び方を改めなさい。それより、あの件はどうなっている？」

「……ああ、ヴァーリちゃんの事ね。いやあ、なんとか顔を見せようと思ってるだけだし、無限のアンちゃんの監視がキビシくてねえ。こつちの事がバレても構わないってんならすぐにも連れてこれるけど、どうする？」

「無用だ。彼とは言葉を交えたいだけなのでね」

青年の言葉に、背後に控えていた銀髪の中年男性は『つまんねーな』と愚痴を漏らす。

「閣下、何故あのような混ざり者を気になさるのですか？」

「彼は『白龍皇の光翼』を極め、無限の龍神に匹敵する力を手にしている。理由としては十分だと思いが？」

楽し気に表情を緩ませた青年が軽く右手を振るうと、先程とは別の投影画像が現れる。

そこに流れているのは、姫島慎とヴァーリ・ルシファーの闘いだ。

「それに私がここに居るのは彼の功績だ。それについての謝辞も述べねばなるまい」

「はっ……」

口を噤んだユーグリットからモニターに目を戻したルイは、玉座に深く腰掛けて頬杖をついた。

「さて二人共、少し席を外してくれないか。観戦に集中したいのでね」
「お待ちください。閣下の御身体はまだ安定していません。もしもの事があれば……」

「心配は無用だよ。この世界で最も親和性の高い彼を元にして、身体を造ったのだ。全力を出さなければ、今のままでも問題は起きないさ」

「そうそう。何の為に苦勞してあのアンちゃんの細胞を手に入れたと思っただい」

「……承知しました。何かございましたら、お呼びください」

「ああ。……そうだ、天界の動きには眼を放さない様に。何かあればすぐに私へ連絡を」

「天界ねえ。腑抜けになつたいい子ちゃん達がナニカするとは思えないけどなあ」

「腑抜け、か。それはどうかな」

「ん？　なんか言ったかい、閣下？」

「独り言だ、気にしなくていい」

「……そうかい」

柔らかな笑みを浮かべたまま真意が読めないルイ・サイファアの顔を一瞥し、リゼヴィムは部屋を後にする。

「では、失礼します」

二人が部屋から姿を消した後、ルイ・サイファアは眼前に映る二つの激闘に口角を吊り上げた。

「素晴らしい。あの非力だった子供達がここまでの力をつけるとは。やはり人の可能性は混沌の中で芽吹くという事か。ならば人の更なる可能性の為、この世界に混沌を振り撒かねばなるまい」

楽し気に呟くその横顔に先程までの紳士然とした雰囲気は微塵もなく、その容貌は神話に語られる悪魔そのものだった。

30話

高天原で接待を受けていたオーデイン様に、顔面ピカソなロキを投げ返して翌日。

ついにこの日がやって来た。

色々な意味で混乱が予想される『駒王町転生悪魔保護者説明会』当日である。

ハティ様が妊娠中の為に本堂が使えないので、『無限の闘争』サブイバルツアーの時に買っておいだ、予備のカプセルハウスを臨時の会場とした。

説明会に先駆けて、主二人と打ち合わせをしていた俺は、彼女達から齎もたらされた情報に絶句してしまった。

サーゼクス兄とセラフォル姉さんの失脚と、それに伴う転生悪魔解放及び悪魔イビル・ピリスの駒使用差し止めの中止。

あれだけ必死に漕ぎつけた条約が、全部パーってか。

……………面白すぎんぞ、オイ。

「おっ…………落ち着いてください、姫島君」

「そっ、そうよ…………。気持ちに分かるけど、怒ったってなにもいいことは無いわ。だから、ね？」

何故か目に涙を溜め、引き攣つった顔でこちらを宥めようとする、リアス姉と支取会長。

失礼な、俺はいたって冷静である。

「だったら、金属製のマグカップをグチャグチャに握り潰すの止めてちょうだい！ 見てて怖いのおおっ!!」

……………おおっ！

いつの間にかハーデス様から貰ったオリハルコン製のマグカップがエライ事につ!?

何という事だ。

これは思ったより、精神的に来ているのかもしれない。

「しかし、なんでサーゼクス兄から連絡が来なかつたんだ？ 条約の絡みもあるから、『神の子を見張るもの』や天界に知らせないと色々ヤ

「バインだけど」

「お兄様は解任されてすぐに、過労で倒れられたから。それに機密保持って名目でお兄様とお父様は行政府から外界への交信も禁じられてしまったもの」

「シトリー家も同様です。本来なら条約締結の責任者として、貴方達に伝えなければならなかったのですが……」

「……そっちの事情は分かった。つうか良いのかよ？ その情報って行政府から箝かんこうれい口令しが布かれてるんだろ」

「構わないわ。こんな事、いつまでも隠し通せないでしょうし。それにここは貴方の結界が貼られているんでしょ？ なら覗き見なんてできる輩がいるワケないわ」

「今回の行政府の決定には、私達も腹が据えかねているのです。お姉様達が身をすり減らせる思いで結んだ平和への道に、唾を吐きかけるような真似をされて許せるわけがない」

このリークは二人の独断か。
リアス姉は言うまでもないが、支取会長もクールを気取っているが根は激情家だ。

この件の出所が二人って事は、秘密にしとかないと。

「しかし、サーゼクス兄の後任のルイだっけ？ そいつはいったい何者なんだよ。あの頭の固い爺様連中が、ぽっと出の無名悪魔なんて魔王に据えるとは思えないんだけど」

「分からないわ。各領主には、魔王交代の通知が来ただけらしいし。メディアの方にもアジュカ様ばかり出て、当の本人は全く現れないんだもの」

「ルイという名前以外は、経歴、容姿、能力など、情報の一切が謎です。分かってる事は元老院や各家の当主と言った、古き悪魔から絶大な支持を得ているという事ですわね」

リアス姉と会長からの情報に思わず眉根が寄る。

古き悪魔から絶大な支持を受ける、ルイという悪魔か……。

——まさか、な。

ふ、とその人物像に該当する者が頭を掠めるが、それを振り払う。

こちら側の『その者』はとつくの昔に墓の中だし、『無限の闘争』の中にも『彼』はいるが、こちら側に出る手段が無いはずだ。

「どうしたの?」

「いや、なんでもない」

リアス姉の呼びかけに、かぶり頭を振ってさつきまでの考えを追い出した俺は、次の話題に映ることにした。

「ところで、今回の件だけど二人はどうするつもりなんだ?」

こちらの問いを聞いた途端、リアス姉の顔が明らかに曇った。

「祐斗は私の元に残ってくれると言ってくれたわ。逆にイツセーは人間に戻ると決めたみたい。小猫は姉の件があるから、私のところに残るか迷ってるわ」

……そうか。

イツセー先輩は決断したのか。

「私の方は、匙と椿姫つばきが残ってくれると約束してくれました。他の子達は、この説明会次第というところでしょう」

「二人共、それでいいのか?」

聞くべきではないと思いつつも、俺はその問いを口にした。

レーティングゲームの戦力や奴隷欲しさに駒を使う悪辣な貴族とは違い、二人は眷属を身内と思つて接してきた。

そんな仲間と別れるのは、文字通り身を切られる思いだろう。

「ええ。私は下僕や奴隷が欲しかったわけじゃないもの。レーティングゲームへの打算が無かったと言えぼうそになるけど、私が彼等を転生させたのは『助けて』と求められて見殺しに出来なかったから。それに朱乃も、祐斗も、小猫も、イツセーだって私には家族同然なもの。………みんなの決めた道を邪魔なんてできないわ」

涙をこぼしながら、それでも笑顔を浮かべるリアス姉。

なんだかんだ言つても、この人は大概お人よしだ。

人一倍、甘えたがりで寂しがり屋なのに、ずいぶんとまあ強がったもんだ。

「泣くなよ、リアス姉。眷属じゃなくなったからって、縁まで切れるもんじゃないんだ。日本に来れなくなったとしても、会う場所くらい

セッティングしてやるさ」

「そんなところ、あるの?」

『無限の闘争』があるだろ。オカ研のみんなは全員ユーザー登録してるからな。会おうがどうしようが、あそこなら誰も文句は言わんさ」
「でも、あそこに入ったら修行をしなきゃいけないでしょ?」

「いやいや、そんな事はないぞ。控室でダベっててもいいし、宿直室で泊ってもOKだ。なんなら、今度みんなで中にある海でバカンスでもするか?」

「ふふつ、そうね。夏休みなのに、私達はプールにも行ってないものね」

眼尻に残った涙を拭いながら、リアス姉は強がりじゃない笑顔を浮かべる。

しかし、『無限の闘争』でバカンスかあ……。

勢いで提案したとはいえ、なかなかの試みである。

問題はどのくらいの危険が予測されるか、だが……………

まあ、大丈夫だろう。

全長十数メートルのシャチやクラークンに襲われたり、ガチのリヴァイアサンが津波を起こすくらいだ。

そのくらい、ヨユーヨユー。

あ、念のために璃凰りおと朱音あかねの安全は確保しないとな。

「……ねえ。一つ、確認しておきたいんだけど」

俺の心を見透かしたように、声を掛けてくるリアス姉。

……おかしいなあ。

とつてもイイ笑顔なのに、寒気しか感じないぞう。

「バカンスのはずが、リアル・モンスターハンターになったりしないわよねえ?」

「……ダイジョウブ、『無限の闘争』の攻略本（人間）付キダヨ?」
「なんで片言なのかしら。……まあいいわ。バカンスの件、楽しみにしてるわよ」

こちらの真摯な言葉に納得したのだろう、リアス姉は追及の矛を収めてくれた。

つうか、バカンスは決定なのね。

「ねえ、リアス。貴女、彼の能力について何か知っているの？」

「少しはね。でも、私がどう答えるかは聞くまでもないでしょ？」

「ええ。貴女の事だから、身内を売るようなマネはしないでしょ？」
「さすがは幼馴染、話が早くて助かるわ。それで、貴女はどうするのよ？」

「私も同じよ。学内で眷属を探したのは、同じ夢を追ってくれる同士が欲しかったから。彼らが他の道を行くと言うのなら、止めるようなことはしないわ」

「まったく、他の貴族もリアス姉達みたいだったらよかったのによ。まあ堅気かたぎを引き込んでおいて、保護者に何も伝えていないのは減点だけれどな」

「それは……仕方が無いことです。我々には一般の人に裏の事を知られてはならないと言う、不文律がありますから」

「引き込んだのが成人した大人なら、それでもいいさ。けどな、二人共眷属はみんな未成年だろ。いくら身体がデカくても、社会的に責任能力が無くて生活の全てを保護者が担っている以上、彼らの言動の責任を取るはその親や保護者だ。なら、いくら自分の意思で転生したって言っても、話は通しておくのが筋つてもんだ。……でないとな眷属に万が一のことがあった時、絶対に遺恨になるぞ」

こっちの指摘に、リアス姉達は顔を俯かせて考え込む。

思えば、二人も未成年な上に親から養われてる身なんだよな。

こういう事に考えが回らないのも、無理もない事なのかもしれん。

……ん、俺？

俺は自立してるぞ。

家族も養ってるし、社会的立場もあるから責任能力もある。

まあ、法的に見ればガキだけ。

冥界でジオテイクス小父さんから世話になった分は、費用を借金つて形に変えて返したし。

後見人として爺ちゃんがいるけど、お袋の分が復活するまでは戸籍上は親もいないしな。

親父はどうしたのかつて？

堕天使の親父に日本の戸籍なんてあるワケないじゃん。

だから、俺達兄妹って書類上はお袋の婚外子ってことになってるからな。

堕天使との混血だったのもそうだけど、これも爺ちゃん達を除いた姫島一党で、俺等の評判が悪い原因の一つだし。

そして爺ちゃんが親父にブチキレた理由でもある。

日本に戻って来てこれを見た時は、目ん玉が飛び出すかと思った。当然ながら兄弟の中でこれを知っているのは俺だけである。

………朱乃姉や美朱にはとても言えんかった。

そう言えば、今のウチの戸籍ってどうなっているだろうか？

お袋の復帰手続きも進んでいるし、さすがに親父も自分の戸籍を用意していると思うのだが……

あと、グレモリー家に金を返した件だが、これは別に悪意があつてやった事じゃない。

そうする必要があつたからだ。

俺達が冥界にいた間というのは、小競り合いばかりの冷戦状態だったとはいえ、堕天使は悪魔の敵だった。

朱乃姉が転生悪魔になったと言つても、冥界政府の中での俺達の立ち位置は親父への人質に変わりはなかった。

保護者を買って出てくれたグレモリー家の人達は家族のように接してくれたけど、公爵位に就くからには行政府の命令があれば、俺達をそのように扱わなければならない。

当然そんな扱いは御免被るので、雲行きが怪しくなったら逃げる(ジオティクス小父さん公認だった)つもりだったのが、受けた何もかもを踏み倒すとなればさすがに気が引ける。

さりとて、恩義なんてものは一朝一夕で返せるものではない。

そこで俺が考えた短期間で返せるものが金だったわけだ。

もちろん、子供三人分の養育費は簡単なものではないが、金ならば逃げた後も送金という形で返すことが可能だ。

この話を持って行った時は、ジオティクス小父さんは物凄く渋っ

た。

しかし先程の予測も交えて、俺の精神的負担の軽減を理由に飲んでもらった。

試算された額は結構な大金だったが（相当差し引かれていた事は想像に難くない）立ち上げた万屋とはぐれ悪魔の懸賞金で、中学を出るまでには完済出来た。

幸い、俺が考えていたような墮天使との戦争は起きなかったが、他にも朱乃姉に望まない縁談なんか来た時に、話を蹴りやすくするという打算もあつたので、後悔はしていない。

なお、この件も対朱乃姉の機密事項である。

もしこんな事が当時の朱乃姉に知れたら、親父への怒りがカムチャツカインフェルノするのは、火を見るよりも明らかだったからな。

今はどうなのか、だって？

………ホームズ君、世の中には時効というものがあるのだヨ。

さて、二人の打ち合わせも終わったし、説明会が始まる前にアザゼルのおっちゃんにサーゼクス兄の事を伝えとかないとな。



オレ、兵藤一誠は体感時間にして、1年と一ヶ月ぶりに両親と再会した。

父さん達はこちらに来るなり、オレを抱きしめて涙ながらに謝ってくれた。

『今まで気付いてやれないで、すまない』と。

なんでも慎が裏の事を説明に来た時に、あいつはオレがレイナーレに殺された事を、土下座で謝罪したらしい。

オレがピンピンしていた事もあり、最初は父さん達も信じてはいなかった。

しかし『日の光に弱くなる』事や『夜になると活発化する』事など、悪魔に転生した者の初期症状がオレが成りたてだった時と一致した

ことで、信じたそうだ。

とうか、成りたての時は調子悪いのを隠してたんだけど、バレてたんだなあ。

その後、激高した父さんが憤を殴るというアクシデントがあったものの、人間に戻る事を聞いて頭が冷えた二人は、オレを説得する為にここに来たらしい。

「なあ、一誠……」

何時になく厳しい表情で口を開く父さん。

いつも優しくして、滅多に怒らない父さんにこんな顔をさせていると思うと、物凄く申し訳ない気持ちになる。

でも、そこから先は言わなくてもいいんだ、父さん。

「父さん、母さん。オレは人間に戻る。それで、ここで生きるよ」

機先を制したこちらの言葉に、父さん達は目を丸くした。

「それでいいのか……?」

「うん、もう決めたことだから。部長にも伝えてある」

「でも、オカルト研究部に入ったって、あんなに楽しそうにしてたのに……」

「オカ研のみんなは大切な仲間だよ。だからって、二人を置いてなんていけない。それに、父さんとの約束もあるからさ」

「一誠……。お前、憶えていたのか」

こちらを心配する母さんへ向けた言葉に、父さんは声を詰まらせる。

本当はつい最近まで忘れてたから、そんなに感動されると罪悪感がヤバイ……。

「そういうわけだから、一流とはいかなくてもそこそこの企業に入つて、二人の面倒見るからさ。老後の心配はしなくていいぜ」

「バカモン。こちらの心配をする前に、彼女の一人でも連れて来い」

「あれだけお世話になってるいろはちゃんも見てるだけだし。気になるならデートの一つでも誘ってみなさいな、このヘタレ息子」

「ぐはっ!？」

湿っぽくなった空気を変えようとしたら、匙なんて目じやないくら

いのカウンターを食らってしまった。

あと、ヘタレでごめんね!?

いろはの我侭ボディは見てるだけで眼福なんだよおっ!!

手痛い自爆もあったが明るい雰囲気を取り戻したオレ達は、いつもの雰囲気の中でとり止めの無いことをたくさん話した。

『無限の闘争』での修行が長かったせいも、いつもなら聞き流すようなことも妙に新鮮に感じて、とても楽しかった。

そんな中、説明会の時間が迫っていることに気づいたオレは、話を中断して席を立った。

「二誠、どうしたんだ?」

「ごめん。ここの神主さんに相談したいことがあってさ、ちよつと行ってくる」

父さんに断りを入れて会場を出たオレは、会の準備をしていた朱乃さんに教えてもらった控え室に足を運んだ。

ノックをすると『どうぞ』と声が返ってきたので、遠慮なくお邪魔する。

オレが来るのは想定外だったのか、神主姿でお茶を飲んでいた慎は少し目を丸くしていた。

「イツセー先輩、どうしたんだよ。説明会はもう少し後だぞ?」

「忙しいとこ、悪い。ちよつと相談したいことがあってさ」

『相談とな?』と片眉を上げる慎。

そのリアクション、ジジ臭いぞ。

「そいつは『赤龍帝の籠手』ブラスレット・ギアについてか?」

「ああ。よくわかったな」

言わんとしていた事を言い当てられて驚いていると、慎はニツと得意げに笑った。

「先輩が行く道を決めたのは聞いてたからな。後は神器についてだどあたりをつけたただけだよ」

「かか呵呵と笑いながら椅子をすす勧められたので、腰を下ろす。

「それで、どんな話かな?」

「オレの中の神器を安全に取り出したい。何か方法は無いか?」

『赤龍帝の籠手』を取り出す、か。ドライグと喧嘩別れして、神器を使っていないって言ってたけど、それが理由か？」

「それもある。でも、それ以上にこいつの出す龍のオーラの所為で、妙なトラブルに巻き込まれるのを避けたい。オレは人間として平穩に生きたいんだ」

「なるほど。龍の氣もそうだが、イツセー先輩が『赤龍帝の籠手』の所持者だつて情報は、裏では結構広まっている。そっち方面のトラブルも御免蒙るつてわけだな？」

その言葉にうなずくと、慎は悩むかのように眉根を寄せる。

「とはいえ、これは少々難しい話だぞ。所有者に悪影響を及ぼさないように神器を摘出する術つてのは、俺の知る限り存在していない。無理やり引き剥がすのならいくらでもあるが、そいつを使ったら十中八九所有者は死ぬしな」

「いや、それじゃあ意味ねーよ」

「だな。神器は所有者の魂と密接に絡み合っている、取り出すということは魂を削るも同じなんだ。転生悪魔を人間に戻す時つて、その人の魂を見ることができただけだな。神器持ちはみんな、本来魂があるべき場所に神器がジグソーパズルみたいに食い込んでるんだよ。あれを無害で取り出そうと思つたら、引き剥がすと同時に魂を補填する必要がある」

慎の答えを聞いた俺は、思わずうつむいて頭を抱えてしまった。

こちらの知る限り、万能の能力を持つ慎でも駄目だとは……

どうする？

相手は持つてるだけで災厄を呼び込む、呪いのアイテムだ。

せつかく人間に戻る決意をしたのに、樂觀視して家族が巻き込まれたら堪ったもんじゃない。

方法の目処が立つまで、父さんたちとは離れて暮らすか？

「そう思いつめるなよ、先輩。今はまだ方法は無いけど、神器の安全な摘出方法なら遠くないうちに見つかるさ。なんせ、多くの神話で研究されているからな」

「そうなのか？」

「ああ。神器を持つてることと苦しんだり不幸になる人つてのは、いつの時代にもいるからな。当然、それを助けようとする神様も出てくる。俺も今抱えてる件が一段落したら専門家に当たってみるから、もう少しだけ時間をくれ」

方法が無いわけじゃないと知って、少しだけ心が軽くなる。

しかし、もう一つ問題が残っている。

というか、メインの相談事はこっちなので、解決しないことにはオチオチ喜んでもいられない。

「慎。無茶振りばかりで悪いと思うんだけど、龍のオーラをなんとかできないか？ あれがあつたら、まともに生活できる気がしないんだ」

「龍の氣、か。龍殺しの武器でもあれば、それを参考にして龍にだけ効く術式を組めるんだが。それ無しでどうにかするとなると、対処療法になるな。それでもいいか？」

こちらが頷くと、慎は後ろの道具箱から墨と硯すずり、そして包帯を取り出した。

そして馴れた手つきで墨を磨すると指を噛んで血を混ぜ込み、筆で包帯に何かを書き始める。

その様子をぼんやり見ながら、待つことしばし。

「うっし、完了。先輩、これを左手の甲から肘にかけて巻きつけてくれるか」

「分かった」

慎の言葉通りに包帯を巻きつけてみると、電気風呂に浸かった時のようなピリピリした刺激と共に、左手の感覚が鈍くなった。

「大丈夫なのか、これ。巻いたら腕がピリピリして、動かしにくくなっただけだ」

不安になつて問いかけると、慎は左肘の辺りにギリギリ触れないように手をかざす。

そのまま自身の手をオレの左手の甲まで持つていくと、小さく息を吐いて自分の席に腰を下ろした。

「……とりあえずは成功だな」

「成功って、なにがだ？」

「その呪布帯じゆふたいには氣、すなわち生命エネルギーを抑える術式が組み込んである。書かれた呪いは地面や石なんかに刻んで妖物を封印するのが本来の用途なんだけど、今回は余計な部分を削ってその分を効果上昇に当ててる。と言つても、対妖物用の術式なんで二天龍にどこまで通じるか分からん。そこで、数日ごとに様子を見て術の強弱を変えたいと思う」

「何でそんな回りくどいことを？ お前ならドライグのオーラを完全に封じる事も出来るんじゃないのか？」

「それをしたら、イツセー先輩の左腕が腐って落ちるぞ」

「さりと出たエゲツない言葉に、オレは思わず左手を押さえる

腐って落ちるって、なにそれっ!？」

「さつき言つたら、『氣は生命エネルギー』だつて。それを封じるって事は、すなわち生命活動を阻害するってことなんだよ。仕込んだ呪いはドライグが標的になるようにしてるけど、先輩の腕に影響が無いわけじゃない。俺が様子を見るって言ってるのは、その辺の兼ね合いもあるんだ」

「そういえば、さつき対処療法とか言つてたよな。」

「どうする？ 嫌なら取ってくれてかまわんぜ」

「要らないなら寄せ、と言わんばかりに手を出す慎。」

「しかし、それに対する答えはノーだ。」

「いや、ありがたく頂戴ちやうだいするよ。元はと言えばオレが言い出したことだし。家族の安全がかかってるんだから、このくらいのリスクで泣きを入れるわけにはいかないさ」

「了解。じゃあ、二週間ごとにウチに来てくれ。術式と封じた氣の量、先輩の腕への影響を見て呪布帯を代えるから」

「わかった」

頷いたオレは、改めて包帯まみれの左腕を見る。

普通に真っ白なら怪我してるだけですむんだが、包帯にびっしりと書かれたお経みたいな文字が実にアレだ。

「なんつうか、厨二病って感じだよな、これ」

「そこは言わないのがエチケットだぜ、先輩」

「なんだか、触れてはならないものに触れたらしい。」

「ところで、こういうのって普通ならどのくらいの値段でやるんだ？」
「さっきの事を誤魔化そうと、もう一つ気になった事を口に出してみる。」

「いや、気になるじゃん。」

怪しい自称『霊能力者』じゃなくて、ガチの術士に頼んだときの値段って。

「ふむ……。だいたい20万くらいかな」

「高ッ!? マジで!!」

予想よりも遥かに高くて、思わず声を上げてしまった。

呪術ってそんなにお金かかんの!? 2000円くらいだと思ってたのに!

「うくん。やっぱり高いよなあ。俺もそう思うんだけどさ、前にアナト様に言われたんだよ」

「アナト様って、あのおつかない女神様だよな?」

「そう。術を安売りするのは作った者や伝えた者、習得しようとして出来なかった者を貶める行為だって。それで高めに設定したんだけど、玉藻に言わせたらまだ安いんだと」

「玉藻さんはどれくらい取れって?」

「200万」

「なんだそれ、ポリすぎだろ」

「だよなあ」

「なんだか分からんが、二人してため息をついてしまった。」

「術の価値とか値段ってどうやって決めるんだ?」

「オレにはさっぱりわからん。」

「お、もうこんな時間か。先輩、もうすぐ説明会が始まるから席に戻っていきなさい」

「うおっ、マジか」

机に置かれた時計の指し示す時間に慌ててドアの方を向いたオレは、部屋を出ようとして足を止めた。

「なあ、慎」

「ん？」

「……本当に、悪魔と闘うのか？」

口から出たのは『あいつの方がキツイから』と、言うのを躊躇^{ためら}っていた言葉。

けど、分かっているでも部長やみんなの事を思うと、やはり問わずにはいられなかった。

「やらないワケにはいかないからな。ここで退いたら、全世界に俺が口だけだつて印象付けちまう。そうなつたら、俺の力は抑止力として役に立たなくなる。ウチの家族を護る為にも、それだけは避けなけりやならない」

「でも……」

「それに、横紙破りをしたのは向こうなんだ。ケジメはつけないと周りが納得しないだろ」

ケジメ。

その言葉に俺は言わんとしていた事を飲み込んだ。

花山さんと一緒にいたからこそ分かる。

物事のケジメを付けるという事が、どれだけ大切かが。

……ちくしょう。

これを出されたら、もう何も言えねえ。

「そう落ち込むなよ。リアス姉達と敵対するとは、まだ決まってないんだから」

「……どういう事だよ？」

「説明会が終わつたら、詳しい事情を聞くためにサーゼクス兄に会う事になってるんだけどな。その時、グレモリー家全員を駒王町へ一時避難させるように言うつもりなんだ」

「ええっ!？」

突拍子のない提案に、思わず声を上げてしまった。

避難つてどういう事だよ!？」

「今回の件で冥界政府が開戦に動けば、サーゼクス兄とセラフオルー姉さんは危険な立場に立たされる。二人はつい最近まで和平を推し

進めて来た、穏健派の代表だったんだからな。今の冥界の世論は分からないけど、戦争を嫌う者は絶対にいる。そういう連中から反戦の旗頭にされるのを防ぐために、現政府がサーゼクス兄達を暗殺する可能性は十分にある。そうなつちまったら、超越者のサーゼクス兄や最強の女悪魔であるグレイファイア姉さんを押さえるために、グレモリー家のみんなを人質にする可能性は高い。そうでなくても、あの人達は俺への抑止になると思われてるだろうしな」

「だから、こつちに身柄を引つ張るつもりなのか？」

「ああ。高天原には話を通しとく必要がありけど、ここはまだグレモリー家の管理だし、俺が気兼ねなく戦う為って言ったらいけるだろ」
「けど、それってここが狙われる可能性があるって事じゃないのか？」
「俺がここにいる時点で、その可能性は十分あるんだけどな。その辺についてはリアス姉達を保護した後で、対悪魔用の侵入防止結界を張るつもりだよ。魔王レベルじゃないと入れない、キツツイやつ」

……こつちの懸念事項が次から次へと埋められていくんですが。
つうか、なんだかんだと色々考えてんだな、こいつ。

戦争自体を防ぐことは考えてないみたいだけど、次善策を用意してるのなら安心できるかな。

「長々と邪魔した上に、最後に変な事まで聞いて悪かった。色々ありがとうな」

「気にすんなって。それより後ろの二人にも、礼を言つときなよ」

再び部屋を出ようとした俺は、慎の妙な言葉に足を止めた。

「後ろの二人？ 何のことだよ」

「イツセー先輩の守護霊。先輩によく似た、小さな女の子と男の子だ」
『これは一誠を護ってくれる人のものなんだよ』

慎の言葉に、姉さんと兄さんの仏壇が脳裏をよぎる。

……マジかよ。

「前までは掠れてよく見えなかったけど、今ははっきりしてるよ。その子たちな、ずーつとこつちに頭下げてるんだよ。』一誠を助けて』
『お父さんたちを助けて』ってな」

ああ……姉さん、兄さん。

「あとレイナーレに殺されかけた時、リアス姉が来るまで先輩の命を繋いだのもその子達らしい。女の子が傷を癒そうとして、男の子がチラシの魔方陣を起動させたんだと」

二人は本当にオレを護ってくれてたんだな……。

「——なあ、その二人にはどうやって恩返しをしたらいいかな？」

震える声を必死に抑えながら尋ねると、慎は小さく笑いながらこう言った。

「お母さんの料理が食べたいんだとき」

——限界だった。

そのまま部屋を飛び出したオレは、トイレに駆け込んで声を抑えながら泣いた。

オレには姉さんや兄さんの思い出はない。

それどころか、友達とバカをやるのが楽しくて、父さんとの話ごと忘れていた。

なのに、二人はこんなバカでスケベな弟を必死に護ってくれていたのだ。

申し訳なさと、それ以上の嬉しきで涙が止まらなかった。

ひとしきり泣いた後、ようやく気分が落ち着いたオレは洗面台にむかった。

鏡に映るのはなんともヒドイ顔だ。

目は真っ赤、涙の跡は何本もあるし鼻水だつて拭えていない。

さすがにこんな顔では外には出れないだろう。

二度、三度と水を叩き付けるようにして顔を洗つてもう一度鏡を見ると、背後に薄く5歳くらいの男の子と女の子の姿が見えた。

あわてて振り返ってみても、当然背後には誰もいない。

どう考えてもホラーな状況なのに、なぜかまったく怖くなかった。そういえば、慎が言つてた事がある。

霊を見るには、まず最初にそこに霊がいることを認識するから始まるって。

だったら、今の二人はきつと姉さんと兄さんなんだろう。

「今までありがとう。これからもよろしくな、姉さん、兄さん」

もう自分しか写っていない鏡に小さくつぶやいて、オレはトイレを後にした。

会場に戻ったオレは、父さん達に慎から聞いたことを交えて姉さん達のことを伝えた。

父さんは涙を見せない為に目を手で覆いながら天井を向き、母さんは口元を押さえて泣いた。

突然泣き出した父さんたちに、周りから好奇の目が向いたけど、そんなものは気にならなかつた。

これが終わったら、仏壇に料理を供えよう。

二人が食べきれないくらいのたくさんの料理を。

31話

さて、いよいよ『保護者説明会』の開始である。

今回参加しているは、シトリー眷属の親御さんが大半とイツセイ先輩のご両親。

あと、さりげなく黒歌まで来てやがる。

いやまあ、別にいいんだけどさ。

あいつ、もう悪魔じゃないし。

面子といえ、会議自体には関係は無かったが、昼間に真羅しんらの当主の訪問があった。

てつきり、娘である生徒会副会長、真羅椿姫嬢しんらつばきについてかと思ったら、美朱への縁談の申し込みだったでござる。

話を聞いたところ、どうも五大宗家の中で美朱が朱雀の力に目覚めたことが話題になってるらしい。

それで『当主以外で四神の力を借り受けることが出来る逸材なら、ぜひ嫁に!!』という流れになってるんだそう。

余談だが、五大宗家で当主になる条件は、各家に対応した黄龍と四神の力を発現することだったりする。

そういう意味では美朱も当主候補になるのだが、現当主の朱雀さんはまだまだ若い。

縁起でもない話だが、彼女が子供を残さずに事故死でもしない限り、美朱に当主なんて回って来ることはないのだ。

ならばその才を残すためにも他の家に嫁入りを、という事らしい。墮天使の血や忌み子の件はどうした？ と聞いたところ、四神の力を使えるのならば五大宗家の血を色濃く継いだ証なので問題ない。

真羅は古くから精霊や妖物を使役してきた一族であるので、息子と自分でうまく御してみせるなどとほざいてくれた。

当然ながらオレの答えは『NO』。

妹を猛獣みたいに扱おうとしている奴のところになんて、嫁にやれるわけがない。

断られると思っていなかったのか、相手は随分とご立腹だったが

『どうしてもと言うのなら、爺ちゃんと朱雀さんの許可を取れ』と告げると、すぐすぐと帰っていった。

後で確認してみると、やはり爺ちゃん達はこの話に猛反対していた。

今でこそ一線を退いてはいるが、爺ちゃんは現当主がガキだった時から、ご意見番兼カミナリ親父として恐れられていたらしい。

今回の件を伝えると、爺ちゃんは随分と驚いていた。

あれだけ強硬に反対していたから、直接こっちに乗り込んでくるとは露にも思わなかったそうだ。

まあ、『あの真羅の洩垂れはなたが、舐めた真似をしおって………ッ！』と随分ご立腹だったので、おそらく真羅からの縁談はもう来ることは無いだろう。

ちなみに真羅副会長だが、彼女は神器『追憶の鏡ミラー・アリス』を持って生まれて来た。

しかし神器を宿した事に加えて、それが原因で際限なく異形を呼び込むようになったために、地下に幽閉される事になったと言う。

その後、経緯は分からないが支取会長が彼女を救ったことにより、副会長は会長の『女王』となったそうだ。

いきなり娘を牢に叩き込むなど常軌を逸した話だが、五大宗家の役割を考えればそこまでおかしいことではない。

五大宗家は四神と黄龍の力を借りて、諸外国から日本を靈的に守護することを役目としている。

となれば、聖書の神の忘れ形見である神器を宿した子供が、忌み子と見做されるのは自然な流れなのだろう。

あー、ウチの爺ちゃんは例外だと思っておくように。

あの人は古い因習とか大っ嫌いだから。

五大宗家代々の当主は、自身の家が祀る神獣まつの名前を襲名するって決まりも蹴って、ずっと本名で通してたらしいし。

だから今でも『大虚け』とか『姫島愚連隊』とか言われてるんだよ。ん？　なんでこんな事知ってるかって？

お袋や双子の件で爺ちゃんところに行く事が多くなったんだが、そ

の度に茶飲み話で五大宗家の裏事情ややらかし案件を聞かされるからだ。

その中には副会長みたいな洒落にならない事案もあって、なんかドンドン深みに引きずり込まれてるような気がする。

爺ちゃん、ぜったい俺を跡目にするの諦めてないだろ。

閑話休題

壇上だんじょうから会場を見渡せば、真羅の席を除くすべての席が埋まっている。

保護者の隣に座っている眷属たちは、会話が弾んでいるイツセー先輩を除いて、みな居心地が悪そうだ。

そんな参加者たちから離れた窓際の席に座った会長とリアス姉は、共に顔を強張らせたままだ。

この会が始まる前に、俺は悪魔社会が戦争になる事を保護者に話すと二人に言った。

本来ならこの会とは関係のない事だが、この情報を隠したまま相手に道を選べというのはあまりに酷だ。

会長は自分が伝えると言っていたのだが、今回は代わってもらった。

いくら眷属の長だといっても、女子高生が背負う話題にしては少々ヘビーすぎる。

それに俺が話す事でこっちに不満を集めて、その分会長がフォローに回った方がうまく回ると思ったからだ。

リアス姉のほうは、イツセー先輩は人間に戻るから伝えても問題はないだろう。

この情報が知れば、シトリー眷属はその多くが保護者によって離脱させられるのは想像に難くない。

気の毒だとは思いますが、会長には残った副会長や匙先輩を率いてどうするか、を考えてもらおう。

「来場の皆様、大変お待たせしました。これより駒王町在住の転生悪魔とその保護者各位に対する、改正条約の説明会を始めさせていただきます」

俺の宣言に対して、リアクションは無し。

しかし、目に映る参加者達の表情は真剣そのものだ。

「私は今回の司会進行並びに条約の説明をさせていただきます、駒王神社宮司の姫島慎です。皆様、短い時間ですがよろしくお願いします」

頭を下げると、ぽつぽつと拍手の音が聞こえた。

手を打ち合わせているのは、兵藤夫妻か。

こういう空気が読める日本人のアレは大好きよ。

「本日お集まりいただいた皆さんは『転生悪魔になったご子息やご息女が、今後日本でどのような扱いを受けるか』を知るためにこられたと思います。まずはそこからお話ししましょう」

そう言つて備え付けてあるホワイトボードの前に行けば、会場のほとんどの人が顔を見合せている。

まあ、普通はいきなり結論から入るとは思わんな。

とはいえ、家庭を訪問した際に一度はすべて説明しているのだ。

この会はあくまでその補足なのだから、再び一から長々と喋つても仕方ないだろう。

「今回の法改正で転生悪魔に対して国が出した対応は、一ヶ月以内の国外退去。これは他の地域の話で、この駒王町に関しては約7か月後になります。そして、戸籍の抹消とそれに伴う基本的人権を含めた、すべての権利の取り消しです」

俺の言葉に会場が重く暗い空気に包まれる。

それもそうだろう。

国民主権を国の根幹としている日本において、これほど強行な策を押し通すというのはまずありえない。

これを知つた転生悪魔が騒ぎ立てでもすれば、一大スキャンダルに発展しかねないからだ。

未だ国民としての権利を保持している彼等が権利を剥奪されれば、人権無視としてマスコミや人権団体はここぞとばかりに政府を叩くだろう。

そうなれば現政権は大打撃を受けることになる。

それを避けるために裏の事情を公表すれば、人間と転生悪魔との見分け方が分からない以上、国民の疑心暗鬼ぎしんあんきを誘発させる可能性がある。

さらに言えば、一般人に裏の事情を隠すのは国際的常識でもあるから、国民に暴露などしようものなら国際的な非難は避けられない。

ここまでのリスクを背負ってでも国がこの法案を可決したということは、それだけこの国に紛れ込んだ転生悪魔を恐れているという事に他ならない。

「また、政府の調べでは自らの意思に反して悪魔にされた者が、多数存在する事も確認されています。そのため、彼らの救済策として人間へと戻る手段も用意されています。人間へ戻った場合は呪術・科学双方の心理テストを受けてもらい、異常が無ければ国民として日常生活に戻ってもらいます。もちろん、その場合はすべての権利は保障されま

すし、国外退去もありません。なお、この件によって失踪・死亡と扱われた場合は、最寄の役所か法務局に行っていただければ、社会復帰の手続きはすべて国が請け負います」

一旦言葉を切って周りを見渡すと、親御さんは厳しい顔で思案に暮れる者が殆どで、当事者である眷属の面々は理解している者は事態の大きさに顔を顰め、理解が追いついていない者は首を捻っている。

「すまないが、一つ質問をしていいだろうか？」

声に目を向けると、オールバックに眼鏡を掛けたスーツ姿の男性が手を上げていた。

あの人は確か、仁村先輩のお父さんだったな。

「どうぞ、仁村さん。遠慮なく仰ってください」

「どうして政府は転生悪魔の事を、ここまで危険視するのかな？」

ふむ、この辺は前回の説明では触れていなかったか。

「質問にお答えします。それは政府が彼等を潜在的テロリストだと見做みなしているからです」

こちらの返答に、会場の誰もが息を飲んだ。

困惑する彼らの目から読み取れるのは、事態の大きさに対する戸惑いと恐れだ。

「これに関しては、先ほど挙げた無理矢理悪魔にされた者は当てはまりません。政府が危険視しているのは、自らの意思で転生悪魔になった者です」

「ちよつと待てよ！　なんで自分で悪魔になった奴がそんな風に見られなくちやならないんだよっ!!」

抗議の声を上げたのは、シトリー眷属の黒一点である匙先輩だ。

まあ『政府はお前等をテロリストとして見てるぞ』なんて言われたら、反論の一つもしたくなるだろう。

「それは『人間を捨てて悪魔になれる』という精神の異常性を、政府が恐れているからです」

「精神の異常性ですか？」

困惑の表情で呟いたのは由良翼先輩のお父さんだ。

そりやあ遠まわしとはいえ、これだけの人の前で『お前の娘は異常者だ』と言ったようなものだからな。

普通は激怒するものだが、理由を求めるあたり理知的で温厚な人なのだろう。

「由良さん。一つ尋ねますが、貴方は人間を辞めろといわれて辞められますか？」

こちらが投げかけた突然の質問に、戸惑いながらも考え始める由良さん。

その答えは数分も経たずに出た。

「……無理だ」

「それは何故？」

「……恐ろしいからだ。人間を辞めて、その先に何かあるのか見えないのが。今まで生きてきた人生を否定する事が。何より、家族と別の生き物になってしまうという事実が、怖くて仕方が無い」

先ほどよりも若干悪くなった顔色のまま、呻く様に声を絞り出す由良さん。

こんな突拍子も無い質問を、さぞや真剣に考えてくれたのだろう。ありがたい事である。

「それが普通ですよ。人間を辞めて他の生き物になるなんて選択、

まっとうな神経で選べるわけないんです。変貌した際の副作用、付加された力の制御、趣味趣向をはじめとする意識の変化はあるのか、契約者との関係で不利な条件を付けられるのではないか。．．．．．ぎざっと思いつくだけで、疑問なんてこれだけ出てきます。止むを得ない事情がない限り、一般の人なら二の足を踏むでしょう」

実際、これは俺も疑問に思っていたことだ。

生徒会のみんなはサクサク眷属になったけど、よく躊躇もせずに受け入れられたもんだ。

オカ研のメンバーは全員『そうしないと生きていけない』からこそ悪魔になった。

けど、生徒会のメンツって、そうでもない人が多い。

ならないと人生的にアウトだった奴って、巡先輩と副会長だけのはずだ。

ホント、よくもまあなろうと思ったもんである。

「仁村先輩、あなたはどうして支取会長の眷属になろうと思いましたか？」

「え？」

このタイミングで当てられると思っていなかったのか、虚を突かれて啞然としている仁村先輩。

「．．．．．それは、生徒会のみんながすごく楽しそうで．．．．．私も仲間になりたいって、会長の夢と一緒に叶えたいって思ったから」

仁村先輩はしどろもどろになりながらも、俯くことなく理由について語る。

悪くは無い。

普通の高校生として生活していたのなら。

『裏』に何の関係も無く、生徒会に入るのならば十分な理由だろう。しかし、人間を捨てるにはあまりに軽すぎる。

「ありがとうございます、女子高生らしい理由だと思います。ですが、政府の人間はそうは取りません。彼等は止むに止まれぬ事情があった者以外の転生悪魔は、ある意味で狂信者だと思っっていますから」

「この一言で会場が静まり返る。

「なによ、それ……………」

「狂信者って……………」

「いくらなんでも酷すぎる……………」

支取眷属の面々から口々に言葉が漏れる。

「皆さんが不満に思うのも無理はありません。ですが、先ほどの由良さんの様に『人を捨てる』と言われれば普通の人は躊躇するものです。だからこそ、人を捨てて悪魔になった者には揺らぐ事の無い忠誠や信念、もしくは信仰があると考える。例えば悪いですが、あなた方が行った人間を捨てるという選択肢は、人体改造を受けて強化人間になる事。もしくは命と身体の違いはあれど自爆テロ要員になる事と大差はない。政府高官にしてみれば、転生悪魔は海外で猛威を振るっている過激派テロ組織と同じと思われているのです」

「ふざけんなっ！ 私達がそんな事するわけないだろっ!？」

「そうです！ 会長達とは仲間としてがんばって生きたいと思っただけで、命を捨てるなんてできません!!」

極論ともいえるこちらの言葉に、必死に反論する由良先輩と仁村先輩。

勿論、そんなことは分かっている。

二人にそんな覚悟なんてあるわけがないし、支取会長に向ける気持ちも『頼りになる生徒会長』くらいだろう。

「というか、内心では『ですよねー』と同意したいところだ。

職務上そうもいかないけど。

実際、爺ちゃんからこの経緯を聞いた時にはアホすぎて思わず引いたし。

とはいえ、政府の人間の懸念や恐怖も、あながち間違っているわけではない。

人間と同じ容姿をしていながら、人間より遥かに優れた身体能力に魔法や特殊能力を持つ生物。

しかもそいつ等は元人間で、自身の主とやらに人の身を捧げるほどに傾倒しているという。

そんなモノが自国に紛れ込んでいると知れば、恐怖を覚えるのも仕方がないだろう。

まあ『裏』の案件は五大宗家がメインで対応しているから、政治家連中が関わることってほぼ無いらしいし、その辺も誤解を招く原因の一つなんだろう。

「でしようね。ですが、私が納得するのは貴方達と顔を合わせて、その人となりを知ったからです。それを知ることが出来ない政府の人間は、転生悪魔への疑惑を解くことは無いでしょう。だからこそ、彼らはこれほどの強攻策を取ったのです。起こりうるであろう、悪魔の力によるテロを未然に防ぐために」

ここままで一旦言葉を切ると、また会場内は参加者の声でざわつき始める。

周囲の反応を見てみると、保護者の方達はある程度の理解をしているようだが、当事者である眷属の面々は納得がいかないようで、表情に表れた不満を隠そうともしていない。

今回の趣旨は保護者へ理解を求めるものなので、眷属連中がどう思っているかはあまり関係が無い。

そういうのを纏めるのは主であるリアス姉達の役目だ。

「なあ、ちよつといいか？」

ざわつきが落ち着いてきたので説明を再開しようと思っていると、匙先輩が高々と手を上げていた。

「なんでしようか、匙先輩」

「お前って政府の連中に顔が利くんだろ？ だったら、そいつ等に俺たちのことを紹介してくれねえか？」

「……………いきなり何を言い出すのか、この兄ちゃんは。」

あれか？ もしかして妹さんに泣き付かれたから、テンパってるのか？

「何故でしようか？」

内心は抑えつつ、とりあえず話を聞いてみることにする。

あと、俺には政府とのパイプなんてない。

『裏』ではどうあれ、表向きは神主しながら学校に通う苦学生なの

だ。

高天原や爺ちゃんを経由すれば繋ぎを取れるかもしれないが、そんなことをするのはよっぼどの事態が起きた場合のみ。

ホイホイできる手ではないのだ。

「そいつ等がこんな滅茶苦茶な法律作ったのは、転生悪魔がどんなもんか分からないからなんだろう？ だったら俺たちが直接会って、転生悪魔も人間と変わらないって事を見せ付けたら、奴らだって考え直すかもしれない」

「それは無理です」

「なんでだよっ!？」

「まず、政府の人間は匙先輩の言ったような理由で一人一人と面会する事は有りません。そんな事をしていてはキリがありませんから。よしんば会うことが出来て皆さんの人柄に理解が得られたとしても、それはシトリー眷属が無害であることを示しただけで、この国に200人はいるという転生悪魔すべてが安全だという証明にはなりません。それに、転生悪魔が有害であるという証拠はすでに出てますからね」

「ふざけんな！ そんな証拠どこにあるってんだ!？」

「はぐれ悪魔ですよ」

その名が出た途端、匙先輩は苦虫を噛み潰したような顔で口を噤んだ。

会場の悪魔関係者の表情も同様だ。

「神主さん、そのはぐれ悪魔というのはどういったものなのかな?」

「はぐれ悪魔とは主から離反した転生悪魔のことを指します。逃亡や主の殺害など離反の理由は様々ですが、悪魔政府の法律でははぐれ悪魔は全て極刑。討伐対象として、指名手配されることになります」

「悪魔側の犯罪者ということか」

「一概にはそうとは言い切れないのですが、この辺は置いておきましよう。彼等の特徴は理性を無くし欲望に忠実になった精神と、蟻人間や蜘蛛女、蛇女といったような異形の身体を持つ事です。行動原理に関しては人であった頃の性癖や欲求に左右されますが、大抵は食欲

に偏っていて人間を好んで捕食します」

ホワイトボードに番所で撮ったはぐれ悪魔の写真を貼っていくと、会場内から小さな悲鳴が飛び出す。

裏に首を突っ込んだとはいえ多くは一般人、リアル化け物の姿には抵抗があるらしい。

「人間を餌にする、ですか。確かにそれは脅威ですが、何故そのはぐれ悪魔が転生悪魔の警戒を強める要因に？」

「それは、はぐれ悪魔が転生悪魔の成れの果てだからです」

瞬間、会場の空気が死んだ。

「……ちよつと待ってくれ。この化け物が元は私の娘と同じ転生悪魔だど？」

先ほどまで合いの手の様に質問をしていた仁村さんは、信じられないといった顔で言葉を詰まらせる。

「ええ。転生悪魔は人間に『悪魔の駒』という道具を埋め込むことで誕生します。これは体内に埋め込まれた『悪魔の駒』に込められた術式が、肉体と魂を悪魔へと変化させるためです。ですが、この術式にはもう一つの顔があります。何らかの理由で所有者から駒への魔力が尽きた場合、術式が暴走して宿主を異形の身体に変えるという役割が」

こちらの言葉にすべての眷属が『悪魔の駒』が埋め込まれているであろう胸の中心に手を当てた。

「逃走防止を目的に組み込まれたモノなのでしようが、これが与えた被害は多大に過ぎる。日本も高野山や比叡山、神社庁などの退魔の術士が対処に当たっていますが、やはり数が足りません。日本全国で行方不明者は毎年10万人でいますが、そのうちの1割がはぐれ悪魔の犠牲になったと言われています」

年間約一万人。

そのあまりにも膨大な数の犠牲者に、誰も声を出せない。

「これが日本政府がこの条約を推し進めようとした理由です。他に何方か質問はありませんか？」

話を振ってみるものの、やはり誰も手を上げようとしなない。

さすがにはぐれ悪魔の件は刺激が強かっただろうか。

とはいえ、これを飛ばすと悪魔に転生することの危険性が見えないからなあ。

などと思案に暮れながら待つこと数分。

一向に手が挙がらないのを確認した俺は、恐らく最も重要な話題を口にすることにした。

「長時間の間にも拘らず、こちらの話に耳を傾けていただいた事を感謝します。では最後に、私が独自に入手した情報を皆様にお伝えしたいと思います」

終了を匂わせた為に緩まった空気が、再び引き締まる。

「現在、悪魔政府は他の神話の勢力との戦争へ、突入しつつあります」

この瞬間に漂った雰囲気は何と言えればいいのだろうか。

静寂の中にピシリツ、と輝が行くような感じ。

空気が凍る、死ぬというのはこういう事を表すのではないだろうか。

「何故このような事態になったかという点、原因は悪魔側に起きた政変にあります。一月ほど前に行われた世界中の神話によるサミット。そこで一触即発に近かった聖書の勢力とその他の神話勢力は、聖書の勢力が特定の条件を呑むことを代価に不戦条約を結びました。しかし数日前に悪魔政府は首脳陣が交代し、新政権はサミットでの条約を一方的に破棄したのです」

誰もが固まる中で、俺はニュースを読むかのように無感動に事実を告げる。

厳密に言うならば、開戦の火蓋が切って落とされるにはもう少し時間がかかるだろう。

何故なら、悪魔側の条約破棄は政府から正式に公表されていないからだ。

聞けば、冥界ではニュースで取り上げられるほどに知れ渡っているそうだが、公式見解で無ければのらりくらりと躲されるだけだ。

転生悪魔の開放が一週間ほど前から止まっているのも、初回に三千人を送り出した影響で人員を調整していると言えはおかしくはない。

まあ、その辺のウラを取るためにも、これが終わったらサーゼクス兄に会いに行くんだけどな。

「あの、いいですか？」

あんなこんなと思索していると、一人の男性が手を上げていた。

ブランド物のスーツに身を包んだナイスミドルだ。

「どうぞ」

「私は花戒桃はなかいももの父親です。我が家はソーナソーナさんの実家であるシトリー家と古くからお付き合いがあるのですが、そういった話は聞いたことがありません。先ほどの話は本当なのですか？」

戸惑いと不安を露にして、問いを投げってくる花戒氏。

この人は大企業の重役をしていると聞いていたが、最初に会った時のような覇気はまったく感じられない。

まあ、身内が戦争に巻き込まれると聞けば、不安になるのは仕方ないか。

「明確な物証はありませんが、間違いないと思います。冥界ではニュースで報道されるほどに広まっているそうですから」

「では、何故私の耳には入ってこないのでしょうか？」

「外部への情報規制が敷かれていますと聞いています。私もこの情報は特殊なルートで手に入れたので」

そうですか、と答えると、花戒氏は席に座って何かを考え始めた。

娘の将来やシトリー家との付き合い方など、彼にも頭を悩ませる種は多くあるのだろう。

「すみません」

声のほうに目をやると、こんどは由良氏が手を上げている。

「由良さん、どうぞ」

「戦争へ突入しつつかあると言っていたけど、それはすぐに始まるものなのか。それと戦争になった場合、悪魔はどのくらいの被害を受けるんだ？」

「時期については私にも分かりません。この件は高天原に伝えていますが、情報の確認や準備等があるでしょうし。被害についても同様です。神々と悪魔政府、互いの落としどころが分からない以上、なんと

も言えませぬね」

「では、悪魔に勝ち目はあるのか？」

「それは——「あるわけないにゃん」」

続けて出された由良さんの質問に、俺の声を押しつけて返す。
「返す。」

このイタいキャラ作りは確認しなくても分かる。

何でか知らんが参加している黒歌だ。

「あの、貴女は？」

「私は黒歌、あそこにいる塔城小猫の姉よ」

左手の最前列、保護者がいない祐斗兄の隣に座っていた塔城を指差して、黒歌は名乗りを上げる。

つうかあの馬鹿猫、自分から暴露しやがった。

状況が変わったから身元を伏せる必要はなくなったけど、ほとぼりが冷めるまで大人しく出来んのか。

見ろ、塔城だつて『姉さま』って言いながら、物凄い戸惑ってるじゃないか。

「主殺しのS級はぐれ悪魔、黒歌!? 死んだはずじゃなかったの!？」

「あり得ません! 討伐の証拠として、埋め込まれていた悪魔の駒も回収されたのに!？」

席を蹴り倒して臨戦態勢になる、支取会長とその眷属達。

事情を知っているリアス姉達は、驚きはしたものの警戒はしていない。
い。

しかし黒歌はそんな事はどこ吹く風と、胸元から取り出した扇子で口元を隠す。

「お生憎様。あんた等に渡ったのは、日本神話の秘術で私の身体から取り出した物。私はこの通り、ピンピンしてるにゃん」

「なら、日本は冥界政府を謀^{たばか}っていたという事ですね？」

「別に騙してはいないわよ。今の私は猫又の黒歌。指名手配の『S級はぐれ悪魔』黒歌は、その駒を取り出した時点で存在してないもの」

「そんな詭弁が——」

「通用するでしょ。日本に入ったはぐれ悪魔の裁量権は日本神話にあ

るんだから。この処遇は駒王番所の長である土地神久延毘古様が定め、天照様が許可を出したモノ。私がどこで何をしよう、あなた達に口出しする権利はないわ」

……その通りなんだけど、面の皮厚いな、あいつ。

猫に退行してた時にリアス姉に保護されてた事、全部棚に上げて煽ってやがる。

まあ、黒歌は元々貴族悪魔大嫌いだし、聖剣事件の時に豪快に置いていかれた事を考えれば、仕方が無いのか？

「ちよつと待ってくれ。はぐれ悪魔とは先ほどの化け物のことじゃなかったのか？ 君はそんな風には見えないんだが……」

どこかあせった様子で、話に割り込んでくる仁村さん。

はぐれ悪魔Ⅱ転生悪魔という事実を聞いてシヨックを受けていたから、その辺の絡みもあるのかもしれない。

「私は特殊な技で異形になるのを防いだけ。普通の転生悪魔だったら、みんな化け物コースよ」

「その技というのは、誰でも学べるものなのか？」

「常人なら数十年くらい修行しないと無理にやん。まあ、あそこの神主みたいな例外はいるけどね」

失礼な。

氣功闘術はわりと誰でも習得可能な技術だぞ。

普及させるには危険すぎるからしないけど。

「さて、そこのおっさんの質問に答えてやるにやん。悪魔は絶対に勝てないし、負けたら間違はなく皆殺しにされるわ」

何の気負いもなしに言い放たれた黒歌の答えは、衝撃的なものだった。

これが悪意を持って言われたものならば、悪魔に恨みを持つあの女の願望だ、と言うことができた。

しかし、眼前にいる黒衣の女は、さも当たり前前の様にここにいる多くの者にとって最悪の未来を口にする。

それが彼女の言葉に異様な信憑性を与えるのだ。

「なんなんだテメエは?! いきなり出てきて縁起でもない事を言いや

がって！」

「縁起も何も事実だにゃん」

「………」

怒り心頭で立ち上がったものの、またもあつけらかなと答える黒歌に匙先輩は鼻白む。

「駒王会議での条約を守らない以上、多神勢力は容赦なくあんた等を潰しにかかる。それは同盟を結んで早々に裏切られた天使と墮天使もそう。奴らの場合、裏切りの報復に加えてあんた等の首で停戦を維持しようと、死に物狂いで襲い掛かってくるんじゃないかしら」

「うそ………」

「そんな………」

黒歌の容赦ない意見に、支取眷族の何人かが悲痛な声を上げる。

「さらに言えば、『禍の団』もこの機を逃さないだろうにやー。あいつ等ってば、聖書の勢力の現政権打倒を目的とした主戦派の集まりだし。最後に、今まで抑止力になってくれていた『あいつ』も敵に回る。どう考えても、悪魔だけで支えられるわけ無いにや」

黒歌が言葉を終えると、会場内の空気は暗く落ち込んでいた。

『裏』の事情に詳しくないと分かりにくい説明だったが、ヤバいという雰囲気だけは感じ取ったのだろう。

由良さんや仁村さんの浮かべる表情も、今までに無く厳しい。

しかし、改めて列挙すると本気で洒落にならん。

『禍の団』も動く可能性があるってのには、俺も目が行かなかつたし。

「という訳で、グレモリーには白音を返してもらいたいにや」

窓際で黙り込むリアス姉に向けて、黒歌はとつてもイイ笑顔で手を差し出した。

あー、なるほど。

今までの脅しじみた説明は、このためか。

「ふざけないで、小猫は私の大切な眷属で妹分よ。この子が望むのならともかく、物みたいに渡せるわけないわ」

「で、あんたの無駄死に付き合わせるってワケ？」

黒歌の吐いた痛烈な一言に、リアス姉は小さく息を呑んだ。

『ふざけんな』つてのは、こつちに台詞よ。今まで白音を保護してくれたのには感謝するけど、こんな負け戦につき合わせるのは見過ごせないわ。公爵令嬢であるあんたと違って、白音は逃げられるの。日本に帰ってくれば猫又に戻れるし、こつちには遠野や京都みたい妖怪が住める場所だつてある」

さつきまでのキャラを一切捨てた黒歌は、その金色の瞳でリアス姉の目を見据えて語りかける。

そこにあるのは、どんなことをしてでも塔城を連れ戻すという覚悟だ。

「ねえ、グレモリー。私も余裕なんてどこにも無いの。今回の件で白音が冥界に戻ったら、日本はこの子を切り捨てる。そうなったら二度と助けられない。猫又に戻ってから、白音と暮らす為に必死に働いて手に入れた家も、お金も全部無駄になる」

「わ、わたしは……」

「あんた、白音の事を妹分つて言つたわよね。だったら、身を引いてよ！ あんたと一緒に冥界に戻ったら、この子は死ぬの!! 戦争が始まったら矢面に立つのは貴族じゃなく転生悪魔なんだから!! 神話の主神や『あいつ』の前に立って、白音が無事でいられるわけないでしょッ!!」

余裕が無いというのは本当だったのだろう。

黒歌はリアス姉の両肩を掴んで、涙ながらに声を荒げている。

猫又に戻ってから表に出ることは無かったあいつが来ているからおかしいと思っていたが、本気でなりふり構つてなかつたんだな。

おそらく塔城の事を知ろうとした際に、冥界の政変をはぐれ悪魔時代の伝から聞いたんだらう。

それに今回の条約改定が重なつたために、いても立つてもいられなくなつたつてところか。

塔城はと言うと、普段はおちやらけている姉が感情むき出しに泣き喚くのを見て、呆然と座り込んでいる。

「でも……あなたは一度白音を小猫を捨てたわ！ 欲望のま

まに主を殺して、はぐれ悪魔になってっ！ 残されたこの子がどれだけ辛い目にあつたと思つているの!!」

「欲望のままに主を殺したですって……ツ！ ふざけるなツ!!」

私があいつを、あのクソ野郎を殺したのは、白音を守るためだ!!」
売り言葉に買い言葉、なのだろう。

あの事件の真実を知らないリアス姉が、黒歌の『地雷』を踏み抜いた。

自身の逆鱗といふべき部分に触れられた黒歌はリアス姉を突き飛ばし、倒れこんだ彼女を前に猫の様に鋭い爪を露にする。

——これ以上は拙い。

「お前たちはいつもそうだ！ 貴族や血統ばかりを気にして、真実なんて見向きもしない！ あの下種がどれだけ非道な行いをしたのかも調べずに、私を犯罪者として追い立てた！ 私は……ツ！ 妹と自分を守つただけだ!! 犯されそうになりながら『次は白音と一緒に抱いてやる』なんて言われて、許せるわけないだろお おおおつ!!」

激情のままにリアス姉の左胸に向けて爪を振り下ろす黒歌。

その凶爪が目標に届く前に、俺は黒歌の右腕を掴み上げる。

「離せっ！ 離せえええっ!!」

黒歌が拘束から逃れようとこちらに爪を立てるが、念のために硬氣功を施した狩衣は傷一つつかない。

「落ち着け、黒歌。ここでお前が手を出したら、二度と塔城は戻ってこないぞ」

掴んだ手を握り潰さないように気を配りながら押さえ込んでいくと、次第に黒歌の身体から力が抜けていく。

完全に脱力した黒歌がその場にへたり込むのを確認して、俺は掴んでいた腕を離した。

「……あの、姉さまはどうして、あんなに取り乱したんですか？」

いつの間にかそばに来ていた塔城が、裾を引きながらこちらに問う。

だが、この件は赤の他人が話していいことじゃない。

「それを答える資格があるのは、俺じゃなくて黒歌だ。あいつの口から直接聞きな」

蹲ったままの黒歌へと塔城を押し出した俺は、呆然と座り込んでいるリアス姉を助け起こす。

「リアス姉、怪我は無いか？」

「ありがとう、大丈夫よ」

自分の席に戻ったリアス姉は、顔を俯かせながら深々とため息を吐いた。

「ねえ、貴方は黒歌の事件の事を知ってたの？」

「ああ。冥界にいた頃に、サーゼクス兄から事件の調査を頼まれたことがあつたからな」

言いながら、俺は黒歌達のほうに目を向ける。

そこには涙ながらに事件のあらましを語る黒歌と、涙を溜めた目で姉の顔をしっかりと見ている塔城の姿がある。

「黒歌の元主だった貴族はな、底なしのクズだった。奴にとって眷属は代えの聞くオモチャ程度でしかなくて、その扱いは男は奴隷。女は性欲の捌け口だったんだ。それで、レーティングゲームでミスした奴や反抗的な奴、ご落胤らくいんを身籠みかごった女性も殺していたらしい」

「なによ、それ……」

愕然とした表情で言葉を搾り出すリアス姉。

眷属を家族同然に扱う彼女には、あのクソつたれの事など到底理解できないことだろう。

「黒歌が主を殺ったあと、保護された眷属から次々に証言が飛び出してな。サーゼクス兄は眷属虐待事件としてこの件の再調査を行い、立件しようとした」

「お兄様が？」

「ああ。サーゼクス兄は転生悪魔が新たな可能性になるって、信じたフシがあるからな。けど、駄目だった。証拠を揃えて被疑者不在のまま立件しようとしたところで、貴族院の爺達から妨害を食らったらしい。『誇りある純血悪魔と下僕を同列に扱うのは不敬である』だと

さ」

「そんな……」

あの立件が成功していれば、黒歌の事も情状酌量が認められて冥界からの追放処分程度に治まっていたはずなのだ。

これの所為で、サーゼクス兄が推し進めようとしていた眷属悪魔の権利保護や、虐待禁止の罰則制定なんか全部ポシヤツたらしいしな。

「そういうわけで、あいつにとってあの事件や主の事は結構なトラウマなのよ。許してやれとは言えないけど、理解してくれると助かる」

そう残して壇上に戻った俺は、突然のことに混乱が治まっていない会場に向けて声を発した。

「皆様、お静かに願います!!」

けっこうな音量で出したおかげか、喧騒はピタリと止んだ。

身内がやらかしたゴタゴタでこんな対応するのは申し訳ないが、時間も押している事だしご勘弁願おう。

「さて、時間のほうも残り少なくなりましたので、これが最後の質問とさせていただきます」

その声に応えるように、幾つか手が上がる。

仁村さんや由良さんも上げている中で、俺が目についたのは和装の男性だ。

この人は確か、巡めぐりともえ巴柄先輩のお父さんだったな。

「巡さん、どうぞぞ」

「最後の質問を私用に使うこととなって、列席の方々には申し訳なく思う。しかし、娘の命が関わることなのでご勘弁願いたい」

巡さんは周りにいる保護者たちに一礼をした後、こちらに向き直る。

「我々の家は退魔を生業にしているのだが、娘の巴柄は祖先が討った妖怪によって魂に呪いを受けてしまった。悪魔となったのも延命のためなのだ」

「なるほど。巡さんがお聞きになりたいのは『人間に戻った際に呪詛

がどうなるか』ですね?」

「うむ」

「ご安心ください。転生悪魔を人に戻す術は強力な解呪のようなものです。それ故、たいいていの呪詛ならば人間に戻る際に祓われてしまうでしょう。もし巡先輩が人に戻って、それでもなお呪詛が残るようなら私に連絡をください。責任を持って解呪致しますので」

「感謝する」

深々とこちらに頭を下げる巡さん。

「ちよつと待つてくださいいよつ!」

彼が席に付くよりも早く、叫ぶような抗議の声が上がった。

見れば、立ち上がった匙先輩が怒りと焦りを混ぜ合わせたような顔で巡さんを睨んでいる。

これでようやく終わりかと内心ほつとしていたのだが、もう一波乱あるらしい。

ただの説明会のはずなのに、どうしてこうなった……。

「どうしてそんな事を聞くんスか……! 巡を人間に戻す気なんですか!」

「匙……」

今にも噛み付かんばかりの雰囲気で自身の父親を睨む匙先輩に、巡先輩も困惑の声を上げる。

一方、巡さんは匙先輩の問いかけに肯定も否定もせず、ただジツと相手を見据えている。

「なんで……なんでなんすか!? オレ達は会長の眷属になって、一緒に夢を追いかけようって約束したのに……なんでそれを取り上げようとするんすか!」

匙先輩の半ば悲鳴のような糾弾が会場の中に響く。

言いたいことはわかる。

実際、今回の事で眷属である事を見直すメンバーは出るはずだ。

それは、匙先輩にしてみれば理不尽に仲間を奪われるような感覚なのだろう、多分。

そんな叫びを受けた巡さんは、一文字に結んでいた口をゆつくりと

開く。

「匙君、だったね。我々に想いをぶつけるほどに、娘を惜しんでくれるのはありがたいと思う。だが、私は親なのだ。家の宿業で退魔行という危険な行為に娘を置いていたが、この子に死んでほしいなど思った事は一度も無い」

選ぶように言葉を紡ぎながら、彼は傍らの娘の頭をゆっくりと撫でる。

「永く生を謳歌し、子や孫に囲まれて幸せになってほしい。この子が生まれてから17年、そう願わなかった事は一度も無い。だからこそ、この子が呪いに侵された時に悪魔になる事を認めたのだ。たとえば魔に堕ちたとしても、生き続けてほしかったからな」

「それで、悪魔がヤバくなったら今度は人間に戻すんすか？　いくらなんでも勝手すぎるでしょう?!　そんなん会長を利用しただけじゃないっすか!!」

「君の言うとおりだ。私のやっている事は、酷く浅ましいモノだろう。だがね、たとえ畜生に劣る行いをしてでも、わが子には死んでほしくない。そう思うのが親なのだよ」

自身の放った糾弾を真っ向から肯定された事に、言葉を詰まらせる匙先輩。

先輩から視線を外した巡さんは、窓側に向き直ると支取会長に深々と頭を下げる。

「ソーナ・シトリー殿。不義理も横紙破りも承知の上、私の事は如何様に罵ってもらっても構わない。しかし、この子は引き取らせてもらう」

巡さんから放たれたのは許可を得るための問いではなく、決定事項を告げる宣告。

如何なる事であろうと折れる事はない芯鉄を感じさせる意思表示を受けた会長は、頭を下げたまま微動だにしない巡さんの姿を見据えてこう返した。

「……巡様、貴方の意思は受け取りました。娘さんはお返ししますので、彼女をよろしく願います」

「かたじけない」

「会長ッ!？」

「——いいのです、匙。黒歌が言ったように、これから悪魔が辿るのは多くの物を敵に回した生存への道。そんな、いつ命を落とすともしれない茨の道を歩ませたくないと思うのは、親として当然でしょう。それを無視して貴方達に従える事は、私には出来ません」

「けど——」

反論しようとした匙先輩は、決意に満ちた会長の顔に言葉を飲み込んだ。

「匙。こんな状況でも私に着いてきてくれるという、貴方の気持ちは嬉しい。ですが、もう一度しっかりと考えてください。今の冥界が、悪魔という存在が、そして私が、貴方が仕えるに相応しいかどうかを。ご両親はおらずとも、貴方には守るべき弟妹がいるのですから」

支取会長の言葉に応える事無く、匙先輩は項垂れたまま自分の席に戻った。

「いいの？ ソーナ」

「いいのよ、リアス。あの子は、私が全て正しいと思ひ込むところがあったから。これを機にもう少し物事が見えるようになってくれればいいけど」

「……そうね。私達はまだ未熟者、誰かから盲信されてもお互い不幸にしかならないものね」

背もたれに身体を預けながら、互いに憂いの表情を浮かべるリアス姉と会長。

その歳で他人の人生を背負っているのだ、そりゃあ心労も堪^{たま}るだろう。

さて、最後にもう一発波乱があつたが、会を閉じるにはいい頃合いだ。

足の指程度しか踏み込んでいない素人もいるから込み入った話は出来ないし、俺もこれから冥界行きが決まっているからな。

「皆様、今回の説明会はここで終了させていただきます」

来客たちの様子が落ち着いたのを見計らつて閉会の宣言を告げる

と、やはり幾人かは不満げな表情を浮かべた。

アフターケアはしてやりたいがこちらにも忙しい身、後は政府の相談窓口を頼っていただきたい。

「ここまでで、私から皆様へ伝えるべき事項や情報は、全てお伝えすることが出来たと思います。ですので、ここからは当事者ご本人とご家族で十分に話し合って、皆様が納得できる結論をお出しく下さい。なお、会場退出時に出口にて政府への提出書類をお渡しします。こちらは今日から二週間以内に必要事項を記入の上、同封されている返信封筒にて書類を郵送してくださいますよう、よろしくお願いいたします。また、何かご不明な点がありましたら、封筒に明記された番号へのご連絡お願いします。本日はありがとうございます」

締め言葉と共に頭を下げると、来客たちはゆっくりと席を立ち始める。

入り口にはロスヴァイセさんとお袋が控えてるから、資料配布は任せておけばいいだろう。

妙に重く感じる首をコキコキと鳴らしていると、掃除道具を持った朱乃姉と玉藻が来た。

「お疲れ様です、ご主人様」

「お、サンキューな」

玉藻から差し出された紙コップを煽ると、よく冷えた麦茶が乾いた喉を滑り落ちる。

—— キンツキンに冷えてやがる！

ありがてえ!!

「ご主人様、何だか博打で身を滅ぼしそうな顔になってますよ？ 具体的に言くと『福本系マンガ』のキャラのような」

玉藻さんや、メタ発言は禁止ですよ。

あと、背後から『ざわ・・・ざわ・・・』なんて声は聞こえていないのであしからず。

「それで、この後はゆっくりできそうなの？」

「うんにゃ。今からアザゼルのおっちゃんを拾って、サーゼクス兄のところに行かなくちゃならない。親父は帰って来てんの？」

「はい。母屋で朱音ちゃん達の面倒を見ているかと」

「父様に何か用なの？」

「サーゼクス兄との話の内容によっては、冥界政府にも顔を出すことになりそうなんだな。親父にも付き合ってもらおうと思ってるさ」

「こちらの言葉に不穏さを覚えたのか、朱乃姉達の顔が少し強張る。」

「冥界で何かあったの？」

「そういえば二人共、冥界の政変は知らなかったっけか。」

簡単に冥界での政変と条約破棄について知らせると、二人は心配や怒り、不安などが入り混じった何とも言えない表情になった。

「ご主人様、この件は本体には？」

「もう連絡してる、俺が冥界に乗り込んで情報のウラを取る事もな。むこうはまだ公式に今回の件を発表しているわけじゃないから、多神勢力も大々的な動きはしないだろう」

「……でも、戦争は避けられないのでしょうか？ 慎、あなた本当に悪魔と闘うの？」

「……ああ。これはもうどうしようもない。グレモリー家に関しては出来る限りのことはするけど、どうなるかはむこう次第だな」

「そう……」

「まあ、今考えてる案が上手くいったら、ジオテイクス小父さん達は保護できるはずだから、成功するように祈っててくれ」

「落ち込んだ朱乃姉の頭を軽く撫でると、すぐさま手を払われてしまった。」

「この元気があれば、何とかなるだろう。」

『カプセルハウスを片づけるのは明日以降になるので、片づけも急がなくていい』と二人に言い残し、俺は会場を後にする。

親父達の護衛として連れて行くつもりなので、パスでデイルムツドの居場所を確認すると、『無限の闘争』の中にいることが分かった。迎えに行ってみると、大草原を思わせるバトルステージの真ん中で、デイルムツドはクーの兄貴と共に大の字に倒れて荒い息を吐いていた。

二人の傍らには、クーの兄貴と良く似た紅い槍を持った黒衣の女性

が立っている。

「ほう……。貴様がこの世界の所有者に選ばれし者か」

女性はこちらに気が付くと、値踏みをするように頭頂からつま先に視線を走らせる。

「貴女は？」

「我が名はスカサハ。影の国の女王にして、その馬鹿弟子の師だ」

スカサハ。

ケルト神話アルスター伝説群に登場する女神で、武芸や魔術の達人でもある。

たしか英雄クー・フリーンにゲイ・ボルグという槍を与えたのも彼女だったか。

その割には空中で正座していないのだが、あれがデフォの体勢ではないのか？

「初めまして、私は姫島慎と申します」

「そう畏まるな。この世界では私は新参者だ、普通に接してくれて構わん」

思ったよりフランクな態度を見せるスカサハ女史。

しかし、新参者とはどういうことか？

憶えている限り、前世のMUGENのキャラにはスカサハはいなかったはずだ。

という事は、俺が死んだ後にスカサハはキャラとして制作され、その影響で女史がこの世界に闘士として登録されたって事か？

そういえば、マジンガーZが変貌するのも俺は知らなかった。

うつすらとは予測していたが、やっぱりこの『無限の闘争』という空間は元の世界とリンクして、闘士を増やし続けているらしい。

「馬鹿弟子と輝く貌を鍛え直していたところだが、お主もなかなかの戦士と見た。どうだ、俺と一戦交えると言うのは？」

「申し訳ありませんが、予定が立て込んでおりまして。ここに立ち寄ったのもデイルムツドを迎えに来たのです」

「私を、ですか？」

ようやく動けるようになったのか、こちらの声に上体を起こすディ

ルムツド。

兄貴の方は……うん、王大人なら『死亡確認』と言うほどの有様だ。復活はまだ無理だろう。

「冥界に行く用事が出来てな、場合によっては行政府に乗り込むことになる。護衛としてついてきてほしいんだが、行けるか？」

「もちろんです」

「興味深い話をしているな。共に行きたいところだが、生憎と儂はこの世界に縛られた身。口惜しいが土産話とお主との手合わせを楽しみに、セタンタの奴を鍛え直す事にしよう」

スカサハ女史は残念そうに溜息を吐くと、『起きろ、馬鹿弟子』とクーの兄貴の顔を踏みつける。

おお……ナイススパルタ。

「御子殿、おいたわしや」

目頭を押さえるディルムツドを連れて、俺は『無限の闘争』を後にした。

そのあと親父と合流した俺達は、グリゴリでアザゼルのおっちゃんを拾って悪魔領へとジャンプした。

目印はサーゼクス兄だ。

瞬間移動が完了すると目の前に広がるのはルシファードにあるサーゼクス兄の自室、ではなくどこか見覚えがある湖。

「十七匹目フィィィイッシュュツ!!」

突然響いた湖面を揺るがすほどのハイテンションな声に目を向けると、そこには物凄くノリノリで釣りを楽しむサーゼクス兄の姿が。

……いや、なにやってんの？

32話

「いやあ、恥ずかしいところを見られちゃったね。釣果がちようかいつもよりも良かった所為で、ついテンションが上がっちゃったんだ」

ポリポリと後頭部を搔きながら、にこやかに笑う赤毛の青年。

麦藁帽子をかぶり、くたびれた白いシャツにオーバールのジーンズを履いたその姿を見て、この人がかつての魔王だったなどと誰が思うだろうか。

つうか、これはあかん。

この人、完全にプライベートモードになつとるわ。

「おい慎。こいつ、本当にサーゼクス・ルシファーなのか？」

今まで相對してきた魔王としての姿とは地平線の彼方までかけ離れた姿に、不安の声を上げるアザゼルのおっちゃん。

だが、悲しいかな、目の前にいる陽気な釣り人は紛れも無くサーゼクス兄である。

「サーゼクス兄はこつちが素だよ。魔王の時はガチガチにキャラ造りしてたからな」

「マジかよ……」

あまりのキャラの差にアザゼルのおっちゃんは、こめかみの辺りを揉み込んでいる。

俺達がいるのは、グレモリー領にある湖畔のロッジだ。

貴族向けの別荘として造られただけあって、テラスに置かれた家具も全て一級品。

根が小市民の俺は、こういった場所はやはり慣れない。

「ところで、今日はどうしたんだい？ 慎だけじゃなくてアザゼルやバラキエルをも来ているところを見ると、穏やかな話じゃなさそうだけど」

「リアス姉から冥界に妙な動きがあるって聞いたんで、その確認にな。あと、サーゼクス兄達心配で様子を見に来た」

「そうか。心配してくれてありがとう、僕はこの通り元気だ。ここでの生活は悠々自適だし、ミリキヤスやグレイフィアとの時間も増え

た。まさに『無職サイコー!!』って感じだよ」

微笑を崩さずに、社会人としては最低な事を口にするサーゼクス兄。

いや、あれだよ。

きつとこれは、激務で追いつめられた反動なんだよ。

だから気にすんなよ、親父。

そつちに対する嫌がらせじゃないんだからさ、多分。

「それで冥界の不穏な動きというと、政変や条約破棄の事だね」

「ああ。まだ日も経ってないのに悪いけど、聞かせてもらえるか？」

「いいとも」

快く頷いてくれるサーゼクス兄に、思わず苦笑いを浮かべてしまう。

あー、やつぱり気まずいわ。

クビになって一週間も経ってないのに掘り返すとか、不躰ぶしつけにもほどがあるだろ。

「まずは僕等の解任についてだね。駒王会議の後、持ち帰った君との約束を議会で発表したんだけど、待っていたのは貴族共からバツシンの嵐だった。とくに話題が『悪魔の駒』になると、アジュカのバカまで顔を真っ赤にして反対してね。秘密兵器として持って行った君と白龍皇の戦いの映像も、捏造だの、混ざり物がどうだのって認めようとしないう始末だ。思わずセラフォルと二人で、貴族院の老害共を皆殺しにするところだったよ」

……あの、ニコニコ笑いながら皆殺しとか言わんでください。

目がマジなのが異様に怖いです。

「外からは無理難題を押し付けられ、下からは反対反対と突き上げられる。あれが世間で言う『中間管理職の悲哀』なんだろうね。しかし、それでも結果を見せないで、待っているのは君や多神勢力との戦争だ。他の神々はどうでもいいけど、君の相手は真っ平ゴメンだったからね。父上たちを説き伏せて、グレモリー傘下にいる下級貴族の眷属達を開放したんだ。そうしたら、その貴族達が貴族院に僕達を訴えたのさ。『冥界に不利益を及ぼす輩』だってね」

立て板に水とばかりに、スラスラと経緯を話すサーゼクス兄。
先ほどまで目に宿っていた殺意は今は無く、代わりに顔に浮かぶのは皮肉げな笑みだ。

「そこからは早かった。貴族院が出した不信任案はあつという間に可決されてね。僕達はお役御免というわけさ」

自分の転落を語っているはずなのに、サーゼクス兄に浮かべるのはやはり溢れんばかりの笑顔だ。

「というか、これって完全に俺の所為じゃね？」

「あー……。なんつうか、ゴメンな。サーゼクス兄達の立場がこうまで悪いとは思ってなかった」

「あやまる必要なんてないさ。むしろ僕は感謝してるんだよ」

「……………うん、感謝とな？」

「だって、君のお陰で穩便に魔王を辞める事が出来たんだから」

「いやいや、罷免ひめんって全然穩便じゃないから」

「穩便だよ。普通は死ぬしか辞められないからねえ、魔王って職は」

『まるで呪いのアイテムだよ』なんて言いながら呵々かかと笑うサーゼクス兄。

「ちよつと待て。お前、魔王を辞めたかったのか？」

「もちろん。そもそも、あんな面倒な立場になりたいとも思ってたなかったからね」

顔を引き攣らせたアザゼルのおっちゃんの問題かけに、サーゼクス兄は当たり前のように答える。

「じゃあ、なんで引き受けたんだ？」

「祀り上げられちゃったのさ。僕が超越者である事に目を付けた、貴族院の老害にね」

俺の問いで当時の事を思い出したのか、笑顔だったサーゼクス兄の表情が苦々しいものに変わる。

「当時は三勢力の大戦からの旧魔王派と新政府の内戦で、悪魔が大幅に衰退していたからね。魔王の後継として、他の勢力への抑止になりうる強い悪魔が求められたんだ」

「それで候補に挙がったのがお前さんか」

「ああ。同じ超越者であるアジユカ、当時はグレイファイアと女性悪魔最強を争っていたセラフォルもそうだ。ファルビウムは、戦闘力に特化した僕達を知略面でフォローする為に使われたんだ」

「……その人選って何気にダメになってるよな。アジユカさんは自分の研究に没頭しているし、ファルビウムさんは眷属任せでほとんど職務放棄じゃん」

「ホントにね。真面目に働いてたのって、僕とセラフォルだけじゃないかな。ゴホンツ。正直、僕はなりたくなかったんだ。こんな性格だから、個人的にはグレモリー家を継ぐのもヤバいんじゃないかって思ってたし。でも、大戦や内戦で亡くなった人を引き合いに出されたら、断る事なんてできないでしょ。グレイファイアとの結婚もあったしさ」

「まあ、旧魔王派についたルキフグス家の女を嫁にするなんざ、魔王の権力でもなけりや無理だわな」

「そうそう。そんな理由で引き受けたんだけど、すぐに滅茶苦茶後悔したよ」

うおっ!?

なんか、サーゼクス兄の眼が急速に死に始めた。

表情が笑顔のままだから、余計にキモいぞ。

「魔王になった僕を待っていたのは、ストレスと頭痛・胃痛の毎日だ。老人達は好き勝手言うし、貴族やそのガキ共はあちこちで問題を起こす。外部勢力はことごとく当たりが強いし、問題解決の為の法案を出しても、貴族院の都合の良いもの以外は全部撥ねられる。同僚もアジユカは研究室に引き籠もってばかりだし、ファルビウムはやる気がゼロ。貴族院の議長かファルビウムの顔面に辞表を叩きつけてやろうと何度も思ったけど、リアスやミリキャスの将来を思えばそれもできない。『玉座は豪華な牢獄』とはよく言ったものだよ。気が付けば、ブラック企業もなんて裸足で逃げ出す国家の奴隷だったんだから」

目に続いて表情まで死んだサーゼクス兄の異様に二の句が告げないでいると、何を思い出したのか、物凄く至福の笑みを浮かべ始めた。

これ本当に大丈夫か？

サーゼクス兄は顔芸に走るキャラじゃなかったはずなんだが……。だからさ、罷免の通告を受けた時の開放感たまは堪らなかつたよ。世間の目があるからシヨックを受けたフリをしてたけど、議会を出た瞬間にセラフォルーと思いつきりガッツポーズをしたからね」
言われてプラトーンのジャケットトさながらに、天に向けて両手を突き上げる魔王二人の様子が思い浮かぶ。
シユールすぎるわ。

「そ………そうか」

『フリーイイイダアアアムツツ!!』と、湖に向けてどこぞのロツクシンガー張りのシャウトを放つサーゼクス兄に、アザゼルのおっちゃんちは遠い声で呟いた。

なんつうか、ストレス半端なかつたんだな、サーゼクス兄。

それだけ必死こいて頑張ってたんだから、次がアングラーとか無職でも仕方ないよな。

まあ、そんなこと言われてられる場合じゃないんだけどね。

「話は変わるけどさ、条約破棄つてマジなのか？」

「ん？ ああ、本当だよ。貴族院の老害共とアジュカ達が決定した」

ため息混じりに応えるサーゼクス兄に、アザゼルのおっちゃんはは不満げに顔を顰める。

「だったら、なんでこつちに何も連絡が無い？ 駒王会議で決まった条約は、三勢力にとって一蓮托生の代物なんだぞ。それを一勢力が勝手に破ったら、同盟なんて意味無いだろうが」

「今の政府の考えは僕には分からないよ。もしかしたら、駒王会議で決めた事的一切を無かつた事にするつもりなのかもね。ニュースを見る限りだと、他の勢力を敵に回しても何とかなる手があるみたいだし」

「無かつた事だあ!! この状況でなにを考えてやがんだ、老害共は!!」
「まあ、僕もセラフォルーも老人達うに疎まれてたからね。僕達が持ち帰った条約なんて認めなくなつたんだと思うよ」

苛立たしげに机を叩くアザゼルのおっちゃんに、サーゼクス兄がフオローになつてない言葉をかける。

「サーゼクス兄達は、上級貴族連中に嫌われてたのか？」

「うん。僕とセラフォルは行政と外交の前面に立ってからね、必然的に改革を推し進める立場になったんだ。それが自分の権利を保持したい老人たちには目障りだったみたいでね」

「そういうや、眷属悪魔の地位向上とかやってたもんな」

「それも改革の一環だったんだよ。まあ、そっちは『尊き悪魔の血を守る』っていう、高潔な志を持つ連中に潰されたけどね。そんなに純血悪魔が大事だったら、政治に口出ししないで嫁さんと腰でも振ってけって話だよ」

「そんな身もフタも無い事を……」

ド直球の下ネタに、さしものアザゼルのおっちゃんも閉口する。

もう魔王だった時のキャラは欠片も残ってないな。

しかし、駒王会議の案件をガン無視とはな。

こりやあ、やっぱり行政府に乗り込む必要があるしそうだ。

「もう一つ、サーゼクス兄に聞きたいんだけどさ。二人の後釜に座ったルイって奴を見た事があるか？」

俺の中でしこりとなっている人物の事を尋ねると、サーゼクス兄の表情に困惑の影が挿す。

「それは僕も気になっていてね。色々と探りを入れているのだけど、彼の姿を捉えることもできなかった」

「つまりは何も分からないと？」

「そうなるかな。まあ、今の僕はただの貴族の長男だからね、行政府の機密を見抜くのはハードルが高いよ」

落ち込んでるかと思えば、あつという間に素に戻って笑うサーゼクス兄。

当事者に聞けば何か分かると思ったが、これでは仕方が無い。

またしても収穫無しという事実小さくため息をついていると、遠くから俺を呼ぶ声が聞こえた。

声が出た方に目を向けると、こちら近づいて来るミリキヤスとグレイフィア姉さん、そしてフェイト姉妹の姿が見えた。

振り返った俺に嬉しそうに手を振る、お子様三人。

こちら手も振り返っていると、四人の背後に妙な魔力反応を感じた。

いつでも動けるようにこちらが椅子から腰を上げると、それに少し遅れて転移の魔方陣が形成され、中から複数の不審者が現れる。

不審者はいずれも上級悪魔で、その数は7人。

全員が特殊部隊が着るような黒の戦闘服を身に纏っている。

両手に魔力を迸ほとばらせている魔術師タイプが3人、剣や槌など近接用武器を腰に下げているのが3人、そして、自分の周りに障壁を張り巡らせた指揮官らしき者が一人。

狙いは言うまでも無く、ミリキヤスたちだ。

こういう事もあるだろうとは思っていたが、このタイミングで来るとは思わなかった。

不審者たちは声を出さず、ハンドサインで意思疎通しているらしい。

司令官がミリキヤスを指差すと、前衛らしき三人が音も無く背後に忍び寄る。

背後からの影に気づいたグレイファイア姉さんとサーゼクス兄が動こうとするが、間に合わない。

普通ならこのままミリキヤス達が拉致されて終了だが、どっこいウチの弟分は普通ではない。

三人の内の一人在自身を捕まえる寸前、ミリキヤスは奴の眼前から消えた。

「今のは『ブラックアウト』という技です。僕の動き、見えなかったでしょう？」

目標を失ってせわしなく視線を巡らせていた奴は、背後からかかる声にその動きを止めた。

そして次の瞬間、物凄い力で腰の辺りを押されたかのように、背を反らせながら不審者は吹っ飛んだ。

強制的に上を向かされた奴の視線の先には、宙を舞うミリキヤスの姿が。

「行きますよ、飛燕双龍脚ッ！」

滅びの魔力を纏った左の飛び足刀が相手の顔面にメリ込み、間髪入らずに足刀を軸足にした右の回し蹴りが米神を抉る。

食らった不審者は側転気味に吹っ飛び、蹴られた方とは逆の側頭部を地面に叩きつけられて動かなくなった。

「うん。やつぱり『ミニッツスパイク』で蹴り飛ばすと同時に、相手の上を取る作戦は使えますね。あとは『ブラックアウト』からの繋ぎの隙を無くすのが課題でしょうか」

自分の動きが満足のいくものだったのか、着地と同時にミリキヤスはうんうんと頷いている。

だがしかし、あいつを狙う敵はまだ控えている。

あつという間に仲間を倒された前衛の二人は、武器に手をかけながら間合いを計ろうとしていた。

しかし、それはもう遅きに逸している。

奴らの背後でフェイト嬢がバルIIを構え、ネージュ嬢とデイモスが魔力チャージを終えているからだ。

「行くよ、バルディッシュ!!」

『Yes sir!』

「おっちゃん、がったいこうげきだ!!」

「任せてもらおう」

「二トライデント・スマツシャー!!」

姉妹とデイモスの合体雷撃を食らって、声も無く倒れ伏す二人。

相変わらずのコンビネーションである。

「くっ、手練れの下僕共がこうも簡単に……さすがは超越者の息子ということか」

襲撃からわずか一分足らずで前衛が全滅したことに、声を上げて焦る司令官。

いや、あの程度で手練れってのはどうなのか。

それとミリキヤスの奴、『K』と闘ったみたいだな。

「それは間違いですよ、不審者さん。僕の強さは弛まぬ努力と、慎兄様の指導の賜物です。お父様からは滅びの魔力を貰っただけで、あまり関係はありません」

エツヘンと胸を張るミリキヤスの言葉に、向かいに座っていたサーゼクス兄がペチャリと机に突っ伏した。

「ミリキヤスウウウウ。パパは……。パパは悲しいぞおお」

「おーい、精神的に折れてる状況じゃないぞ、駄目親父」

「いや、君がいるから大丈夫かなって」

「そりゃあ、ヤバくなったら助けるけどさ。それでも気は張ってないと駄目だろ」

「御尤もです」

サーゼクス兄とアホなやり取りをしている間にも、向こうの事態は動いている。

見れば、後衛の魔法使い達が術式を展開し、その前面には司令官を覆っていた障壁がそびえ立っている。

なるほど、あの司令官の役割はこれか。

「舐めるなよ、小僧！ いかにも貴様が滅びの魔力を持っていても、三重に重ねた我が障壁を破れはせん!! 高位魔法の雨を食らいたくなくなれば、投降しろ!!」

「お断りします。貴方程度の小物に敗北を認めるようでは、僕の目指す場所には到底たどり着けませんから」

微笑を崩さないままに、えげつない事を口にするミリキヤス。

「純真だったはずの弟分が、あんなに煽りが上手くなってるなんて……ツツ!?」

「クソガキがあツ!? 後悔しやがれええつ!!」

「こらえ性がないのか、容易くブチキレた司令官の号令で一斉に放たれる高位魔法。」

「つーか、あいつ等ってミリキヤスを捕らえに来たんじゃないのか? 「大丈夫です、お母様。僕に任せてください」

前に出ようとしていたグレイフィア姉さんを制すると、ミリキヤスは大きく両手を広げる。

「一見すれば十字に見えるその体勢、広げた双方の掌には膨大な量の紅い魔力が蓄積されていく。」

「おいおい、あの体勢って……」

「覚えたての超必殺技、受けてください！ カイザアアアッ！
ウェイイブ!!」

広げていた両掌を合わせると同時に放たれた巨大な紅い魔力弾は、
迫り来る高位魔法を容易く飲み込み不審者たちに襲い掛かる。

「ぐわああああああああああつ?!?!?!」

道に敷き詰められていたレンガや街灯などを根こそぎ消し飛ばし
た魔力弾は、紅い軌跡を残して空へと消えた。

跡には抉り取られた地面とパンツ一丁でブスブスと焦げている不
審者四名が残されている。

言うまでもないが、戦闘不能である。

「うくん、まだまだ威力が足りないなあ。この程度じゃ、サイラオーグ
兄様の霸王翔吼拳を止められそうにないや」

「そうかな、私はやりすぎだと思っけど」

「みんなパンツ丸出しだあ！ かつこわる〜い」

無残な姿になった敗北者を見ながら、言いたい事を口にするお子様
たち。

しかし、今の『カイザー・ウェイブ』はなかなかの威力だった。

威力はそのまま服だけを消滅させているあたり、魔力制御の腕も
相当にあがったらしい。

何があつたかは知らないが、ミリキヤスの奴一皮むけたかな？

「みんな、怪我はない？」

「はい」

「もちろんです」

「もんだいなーし」

グレイファイア姉さんの問いかけに三人は元気に答える。

「かあり、やるねえ。魔力制御もそうだがあの歳で近接戦闘もこなす
とは、^{せがれ}倅をしつかり育ててるじゃねえか！」

しきりに感心しているアザゼルのおっちゃんに、サーゼクス兄はバ
ツが悪そうな顔をする。

「僕が鍛えたわけじゃないよ。ミリキヤスは勝手に強くなつてたん
だ」

「勝手について、そりやねえだろ。あのチビが使ってたのは、全部高等技術だぞ。あんなの独学で覚えられるかよ」

ところがどっこい、覚えたんだな。

ミリキヤスはヴァーリに匹敵する才能を持っている。

一目見ただけで技を模倣する理解力もそうだが、格闘センスや魔法のセンスもぴか一だ。

「主、あの少年も『無限の闘争』の修行者なのですか?」

「ああ。あいつは天才を超えた鬼才だからな。十年後にはサーゼクス兄を抜いて、悪魔最強になつてるかもな。機会があつたら手合わせしてみな」

「はい」

問いかけに答えると、傍に控えているデイルムツドはミリキヤスへ鋭い視線を向ける。

その目は子供を見守るものではなく、自分に並び立つであろう強者を定めるそれだ。

「そういえば、さっきの襲撃の時に動かなかつたな。お前さんなら、率先して守りに行くと思つたんだが」

「その必要はありませんでしたから。あの程度の手合いなら、彼一人であしらえたでしょう」

「なるほど。こりやあうかうかしてると、追い抜かれるかもな」

英霊に認められるほど強くなったか。

ミリキヤスよ、お兄ちゃんは鼻が高いぞ。

「しかし、こいつ等は何者なんだ?」

顎鬚あごひげを弄りながら、アザゼルのおつちゃんが呟く。

襲撃から10分ほど後、俺達は情報を聞き出す為に襲撃者達を別荘の裏まで連れてきていた。

両手足を縛られて、地面に横たわる曲者たち。

念のために肩と膝の関節を外してあるので、妙な真似はできないだろう。

「装備や所持品からは、身元が分かる物は発見されませんでしたね」

「元とはいえ要人の家族を拉致しようって連中だ。身元が割れるよう

な物なんて、身に付けてるはずないわな」

パン一の刑に処されなかった奴から剥いだ装備を調べている、デルムツドの眩きに答えを返す。

今のタイミングでミリキヤスを狙う奴なんて、貴族院の老害か現魔王のどっちかだろうが、それを示す証拠が出なければどうにもならない。

「どうするんだ、慎。なんなら私が聞き出してもいいが」

襲撃者に見せ付けるように、両手で雷光をスパークさせる親父。

悪魔があれを食らえば、黒こげどころか消滅は免れないので、脅しとしては効果はあるだろう。

しかし、相手も然る者。

顔面のすぐ傍まで雷光を近づけられても、うめき声の一つも上げない。

「……………これは真つ当な手段だと、時間を食いそうだな。

「ちよつとした裏技を使うから、みんな下がってくれ。あと、グロイのが苦手な奴は離れるのをお勧めする」

指の骨をゴキゴキと鳴らしながら、パン一アフロになった司令官の前に立つ。

さて、成功するかどうか。

不安に揺れる相手の目を見ながら、胸の辺りに指拳を打ち込む。

あまり威力を込めていないので、指拳自体は軽く身体を揺らす程度でしかない。

「き……………ツ、貴様らが何をしようとも、我々が口を割ることはない。諦めてさっさと殺すが——が、ががつ!？」

得意げな顔でこちらを挑発していた司令官は、突然自由を失った己の口に目を白黒とさせる。

使うのは初めてだったが、上手くいったらしい。

「経絡秘孔の一つ、新一を突いた。お前の口は意思とは無関係に喋りだす」

「あがつ……………が……………我々は……………貴族院に、属する……………なぜつ……………裏の、実行部たい……………い、い……………」

いってればっ!？」

……おや？

「グロっ!? おまえなあっ! 頭と胸が内側から破裂するとか、やりすぎだろ!」

「おろろろろろろっ」

「サーゼクス! しっかりして、サーゼクス!!」

突然のスプラッタな光景に抗議の声を上げるアザゼルのおっちゃん。

見れば、サーゼクス兄がりバーズしているのを、グレイファイア姉さんが看病している。

おかしい。

ここは全部吐いた後に、『いけねええっ!? 喋っちまったああ!!

……ごべりばあっ!』と爆発するのが正解のはずなんだが。

くっ、俺の北斗神拳は未だにアミバの粹だということのか……!?

「慎、いったい何をしたんだ? 口を割り始めたと思ったら、こんな風になるなんて」

「いや、自白用のツボを押し込んだよ。本当なら全部ゲロするはずなんだけど、どうしてこうなった?」

手順を省みてみても原因は思い当たらない。

込めた氣が多かったのか?

それとも秘孔の位置がズレていたのか?

うゝむ、わからん。

北斗神拳は完全独学だから、詰まった時が困るんだよなあ。

誰かを師事したくても、北斗三兄弟は口をそろえて『北斗神拳は一子相伝、教える事はできぬ』っていうし。

え、石油のアルカナに某天才?

結構ですので、お帰りください。

てな感じで大恥をかいたわけだが、この後尋問自体はスムーズにいった。

どうやって口を割らせたかというと、『あべしっ!』状態になった司

令官の遺体を見せて『お前もああなりたいか?』と聞けば、盛大に舌を躍らせてくれた。

相手の胸に指を当てるだけで、なんでもかんでもベラベラと喋ってくれたので、手間という意味では大助かりだったのだが、個人的には納得のいかない話である。

肝心の情報だが、今回の襲撃は貴族院主導のモノで、その目的はミリキヤスの身柄の確保。

定石というか何と言うか、息子を人質に取って、サーゼクス兄達の首輪にするつもりだったらしい。

奴らも温室培養で育てられた貴族のボンボンを攫うだけの簡単な仕事と思っただけだが、結果はこのザマである。

「それでどうする、サーゼクス兄?」

今回の被害者であるサーゼクス兄に水を向けてみる。

「慎。さっきの証言は記録してくれてるかな?」

「ああ、最高画質で録画しておいた。魔法で隠してた身分証明書と、こいつらが飼い主に会う為の割符付きでな」

「結構。ならそれを使って、グレモリー家から貴族院を訴えよう。僕が戻ったといっても、ミリキヤスはグレモリー家の次々代の当主だ。手を出したのなれば、父上も黙ってはいない」

「なるほどな。元魔王と言ってもケツの青い若造より、同世代の公爵であるジオテイクスの方が抑止に向いているか」

「この歳で父親に頼るのは恥ずかしいけど、格好なんて気にしてられないさ。とはいえ、むこうも海千山千の老怪共だ。完全に黙らせるにはまだ弱いだろうね」

確かに。

あの爺達なら表向きは念書を書いても、裏で下部組織経由で自分達とは繋がりが無い奴らに襲撃を任せる、なんて事くらいは朝飯前だろう。

やはり、ミリキヤス達の安全を考えるなら、冥界を離れたほうがいいか。

「なら、駒王町のリアス姉のところに行ったらどうだ? さすがに日

本まではジジイ達の手も伸びないだろ」

「駒王町か。そこなら彼らの手も届かないかな。けど、大丈夫なのかい？ 僕らが行くとなると日本が黙っていないと思うけど」

「その辺は俺が話をつける。戻ったら、駒王町に魔王しか入れないくらいの結果を張るし、悪魔との戦いでサーゼクス兄たちがいたら本気を出せないとか言つといたら、向こうも納得するさ」

「悪魔との戦い、か。やはりそこは避けられないんだね」

「悪い。こればかりは、どうしようもない」

「仕方が無いさ、伸ばされた手を払ったのは悪魔側だ」

「ジオティクス小父さん達にも、日本に行くように勧めてみるつもりだけど——」

「難しいだろうね。父上や母上が自領や民を見捨てるとは思えない。

あの人たちは最後まで、貴族としての使命を果たそうとするだろう」

「やっぱりそうかな？」

「うん」

思わずため息が漏れてしまう。

こうなったら、小父さん達が戦場に出た時に、当身か何かで気絶させてかっ攫うしかないか。

同じ戦場にいる事や小父さんたちが主神クラスにエンカウントしてない事など、確率的には殆ど博打だがやるしかないだろう。

「アザゼルのおっちゃん。悪いけど、現魔王にアポを取ってくれないか？」

「そりや構わんが、今日行ってすぐに会えるってわけじゃねえぞ」

「分かってるよ。けど、極力早めに会えるようにしてくれ。こつちが裏を取るってんで、天照様は動きを抑えてくれてるんだ。長々と待たせるわけにはいかない」

「……やれやれ、戦争かよ。今までこうならねえように必死にやってきたのに、堪んねえなあ」

頭を押さえながら、アザゼルのおっちゃんは慣れた手つきで携帯を操作する。

「慎、やはり戦場に出るのだな？」

「ああ。言い出さずだから、吐いた唾は飲めないよ。それより俺がいない間、お袋たちを頼むな。悪魔はもちろんの事、多神勢力の中の欲をかいた連中も手を出してくるかもしれないから」

「任せておけ。母さんや朱乃達は私が必ず守ってみせる。だから、お前は余計な心配はせずに生き延びることだけを考えるのだ」

「了解」

「慎、アポが取れたぞ。会うのは二日後、むこうはアジュカとファルビウムが参加するそうだ」

「ルイって奴は出ないのか」

「出るように要請みたが断られた。奴さん達、どうあってもそのルイってのを出したくないらしい」

「そいつは臭いな」

「ああ、厄介事の匂いがプンプンするぜ。この件は一筋縄じゃいかないかもな」

苦虫を噛み潰したような顔で、懐から取り出したタバコをくわえるおっちゃん。

その前に火を差し出しながら、親父は口を開く。

「アザゼル、堕天使はどうするつもりなのだ？」

「ミカエル達の動きにもよるが、日本に掛け合つて下に付かせてもらうつもりでいる」

「聖書の勢力を抜けるつもりか？」

「ああ。今のグリゴリには神話勢力を名乗れるほどの力は無い。それに今回の件で悪魔がやられれば、次はウチや天界にお鉢が回ってくるのは自明の理だ。だったら、お前やシエムハザの事を縁にして日本の下に付いたほうが、生きる目もあるってもんさ」

「……私になにか出来ることは無いか？」

「阿呆。お前は家の事だけ考えとけ。せつかく奇跡中の奇跡を引き当てる、家族を取り戻したんだ。今度こそしっかり守ってやれよ」

紫煙を吐きながら、自分より一つ分高い親父の頭をぐしゃぐしゃと撫でるおっちゃん。

俯き、目頭を押さえる親父の手からはポツポツと水滴が落ちてい

る。

……こりやあ死なせるわけにはいかんわ。

悪魔側がどんな隠し札を持つてるのかは知らないが、何としてでも一緒に帰るようにはしないと。

◇

あの後、ミリキヤス達に分かりやすく事情を説明した俺は、サーゼクス兄一家を日本へと送り届けた。

天照さまには、悪魔側の契約破棄を伝えた時にこうする事も伝えていたので、この辺は滞り無くいけたと思う。

まあ、今回の代価として無茶振りを二つ聞くことになったけど、それは仕方が無いだろう。

で、その際に二日後の悪魔との会合の事を伝えたところ、コンパクトサイズの遠見の鏡を持たされた。

なんでも雲外鏡うんがいきょうの協力を得て造った特別製らしく、親鏡が映した光景を複数ある子鏡で確認することが可能らしい。

でもって、子鏡は主な多神勢力の主神のところにある、と。
……なるほど、LIVE配信しろってことですね。

『一番良い中継を頼みましたよ』とにこにこ顔で手を振る天照様に、思わずため息が出る。

むこうが開戦を口にした瞬間に、宣戦布告しながら奇襲でもするつもりじゃねえの、これ？

多神勢力の皆さんの戦意がすぐくて泣きそうです。
そんな生臭いやり取りを終えた俺は、その脚でシトリー領に飛ん

だ。

さっきのサーゼクス兄の件でも分かると思うが、世界を跨ぐまたと瞬間移動の精度は若干落ちる傾向にある。

さらに言えば、氣で察知するのは位置だけなので、相手が何をしているのかは分からないのだ。

……うん、言い訳はこの辺にしようか。

セラフオール姉さんの様子を見に行ったら、バスルームに転移してしまっただ。

しかも姉さんはシャワー中だった為に、思いつきり裸を見てしまったのだ。

漫画とかでラッキースケベってのがあがるが、実際にやらかしてしまふと氣拙いなんてもんじゃない。

謝罪と共に慌ててバスルームを出ようとする俺。

しかし、不用意に踏み出した一歩が、床に落ちていた石鹼によって滑ってしまう。

このままでは姉さんを巻き込んで転倒するという、最悪が二乗になるコース！

だがしかし、俺はそんなハーレム系ラブコメの主人公では断じてない………ツ!!

転倒するよりも早く姉さんの手を掴んだ俺は、合氣の要領で湯が満たされたバスタブに彼女を放り込む。

そして倒れこむのを、勢いを利用しての前方宙返りで回避。

だが、床いっぱいに広がった石鹼の泡の所為で、着地の足がまたしても滑る！

仕方が無いのでまた前宙、また滑る、また回る、滑る、回る、滑る、回る………

気づけば、一昔前に流れていた燃焼系アミノスポーツ飲料のCMの様に、その場でひたすら前宙を繰り返していた。

この際にあのCMソングを口ずさんでしまったのは、仕方が無いと思う。

セラフオール姉さんの拍手によって無限前転を終えた俺は、ローリングアタックのようにして素早くバスルームから撤退。

後から出てきたセラフオール姉さんに『GOD土下座』で謝った。

幸い、俺がそういう奴ではないと分かっていた姉さんは、苦笑いで許してくれた。

日本に行く事を薦めに来たのに、初っ端からアウトにもほどがある。

女性に会いに行く時は瞬間移動は控えよう、いや、マジで。

「それで、今日はどうしたの？」

魔王と共に魔法少女も廃業したらしいセラフオール姉さんは、フローリングに正座したままの俺にお茶を煎れてくれた。

室内は柔らかい色彩の壁紙に、センスの高さが伺える一級の家具という落ち着いた大人の女性の部屋だった。

そこからは、魔王少女のようなイタいファンシーさは欠片も見当たらない。

とりあえず、彼女も魔王の座を追われたことに関してのショックは無いようだった。

外交という外からの圧力が一番来るポジションだった為、掛かるストレスは相当キツかったのだろう。

辞めた時には、世界がバラ色に見えたらしい。

で、その後は部屋でゴロゴロしつつ、趣味のアニメやらネットショッピングやらで英気を養っていたそう。

なんか、ニートの入り口に足を踏み入れているような気がしないでもないが、その辺は置いておこう。

ルイと呼ばれる男の情報については、知っていたのはサーゼクス兄と同程度。

期待していなかったと言えば嘘になるが、姉さんもこの辺は同条件なんだから仕方ないだろう。

その後、現状を伝えた上で日本の支取会長の元に行くように薦めると、少し迷った後でOKを出してくれた。

シトリーのご両親にも薦めるべきかと聞いたところ、止められてしまった。

『突然、君がそんな話を持っていても両親は混乱するだけだし、領主としての責務があるから領きもしない。それ以前に不法侵入者として逮捕されるよ』

との事でした。

すみません、姉さん。

御尤もです。

会長に確認を取ったところ、受け入れには少し時間がほしいのとこのどだったので、魔王との会談の前に迎えに来る事を約束して、俺は部屋を後にした。

その際、『来る時は事前に連絡してね』と言われて、『シューティング・スター・土下座』で再度謝ったのは、是非とも消し去りたい過去である。

—— 突発企画『サイラオーグ君、今を行く』

悪魔という種族に未来が見出せなくなつたため、眷属と母を連れて冥界を出奔しゅつぽんしたサイラオーグ。

事前準備は整えていたものの、不可避の戦争が目前に迫っている事に焦つたのが災いしたのか。

彼等が現れたのは、目的地である日本から遠く離れたギリシヤであつた。

「申し訳ありません、サイラオーグ様。距離的な問題に加えて、オリュンポスや高天原の結界がある為、我々の力では転移は不可能なようです」

「そうか……。ご苦労だつた、ミスティータ達と共に車の中で休んでくれ」

自身の女王であるクイーシヤ・アバドンにねぎらいの言葉を掛けたサイラオーグは、自身の家となつた白い大型キャンピングカーに背を預けた。

今の窮状を呼び寄せたのは、完全な己の判断ミスだ。

あの時、行政府の判断に危惧を抱いたからといって、なぜ日本に近いグレモリー領に移動してから地上に転移しなかつたのか。

クイーシヤを初めとした眷属の中でも魔術に精通した者達が、車体に強力な抗結界の仕掛けを施してくれたのは本当に助かつた。

下手をすれば、転移をこの地に張られたオリュンポスの結界に阻はばまれて、車体ごとお陀仏だつた可能性もあるのだ。

そんな感じで一難が去つたとはいえ、現状が芳かんばしくないのは変わらない。

ギリシヤは悪魔にとって最右翼の一角であるオリュンポスの地。ここに長居していればいらぬ疑いを掛けられ、最悪の場合は彼等の手勢を相手どらねばならない可能性もある。

そうなつては、いかに姫島愼でも自分達を保護するのは難しくなるだろう。

この身一つであれば、誰かの保護に頼ることもなく、邪魔するモノは拳で粉碎すれば事足りる。

日本にだつて、転移など使わずに走っていけばいいのだ。

しかし、病床から復帰したばかりの母や自分を慕う眷属達を思えば、そんな無茶は出来ない。

『無限の闘争』を経由して日本に行くという手もあるが、それは本当の意味での最終手段だ。

アクセス権を貸し出されたとはいえ、あそこは愼にとっての重要機密。

いくら自身の眷属でも、管理者の許可なく上げるべきではないだろう。

となれば、この地を離れて日本を目指すには、キャンピングカーが積めるフェリーを探し出しての海路。

もしくは、車をこの地に捨てての空路かのどちらかになるだろう。「さて、どうしたものか……」

どちらを選んでも先立つ物が必要になるが、取るものも取り敢えず出て来た所為で路銀の方も十分とは言えない。

かと言つて、この世界の住人ではない自分達が真つ当な手段で金銭を稼ぐことは難しい。

「どこかでストリートファイトの大会でもやっつていれば助かるのだが……」

益体も無い事を口にしながら、サイラオーグは己の拳を見つめる。師父と呼ぶべき男が『ブ厚くて大きい』と褒めてくれた拳。

魔力を持たず、母を除く周囲の大人から出来損ないと蔑まれていたサイラオーグにとって、自身の身体の事を認められたのはまさに衝撃だった。

思えば、師を尊敬したのも、空手にのめり込んだのも、全てはその言葉が始まりだった。

それから彼は、極限流空手の腕を磨きながら、自身のように出自や能力が原因で迫害されている者達を助け、眷属にしていった。

迫害している側と衝突する事も少なくなかったが、どんな窮地に陥った時この拳があれば打ち砕くことができた。

しかし、そんな自慢の相棒でも今回ばかりは鳴りを潜めたまままだ。途方に暮れて舗装もまばらな田舎道を眺めていたサイラオーグは、自分達が停車している道の先に対峙する一団を見つけた。

一方は大型バイクを傍らに停めた男女、もう一方は鎧姿で剣や槍で武装した時代錯誤の男達だ。

その様子にサイラオーグは、もたれ掛かっていた背をキャンピングカーから放した。

未だ未熟なれど、彼もまた武術家である。

目の前で無法が行われるのを見過ごしては、師に顔向けができない。

それが悪魔の手による物ならば、猶更だ。

カップルを救おうと急いでいたサイラオーグは、片割れの男を見ても思わず足を止めた。

遠間からは解らなかつたが、男は三メートル近い巨体に全身が巖の如き筋肉で覆われていた。

フリーサイズのカーゴパンツやTシャツを着てもなお逞しさが見て取れるその姿は、現地の人間が見ればこう評すだろう。

まるで『ヘラクレス』のようだ、と。

男の鍛え抜かれた巨体とにじみ出る強烈な威圧感に、思わず息を飲むサイラオーグ。

自身も悪魔の中では上背があり体格もいい方だが、目の前の男とは比べ物にならない。

平均的な背格好の襲撃者では、その差は大人と子供のそれである。

しかし襲撃者たちは、それでもなお引き下がろうとしない。

多少腰は引けているものの、武器を構えてじりじりと間合いを詰め

ている。

魔力の流れから、4人ともに上級悪魔なのは見て取れた。

おそらく、その矜持が人間に背中を向ける事を良しとしないのだから。

……その気概は買うが、今回ばかりは悪手としかいいようがない。

「アル……」

「心配はすることはない」

自身の身を案じて縋りつく連れの美女を優しく解いた男は、一步前に出る。

それだけで、包囲しているはずの悪魔達は大きく後退する。

最早どちらが襲撃者かわからないような状態だが、対峙する事で恐怖が振り切れたのか、雄叫びと共に悪魔の一人が剣を上段に構えて突撃した。

「いつも通り——」

自棄を起こしているとは言っても、そこは人とは性能が懸け離れている上級悪魔。

そのスピードはオリンピックピックの短距離メダリストを凌駕している。

しかし、男の顔に焦りはない。

ごく自然に足を踏み出した次の瞬間、轟音と共に大地が揺れた。

突然の地震に足を取られぬように踏ん張りながら、サイラオグの目は一部始終を焼き付けていた。

地面を陥没させ、周辺の大地を揺り動かす程の踏み込みと、その力が込められた破城槌のような拳。

その一撃は魔法加工された鎧を着込んだ上級悪魔を、文字通り粉碎したのだ。

「どうせ、一撃だ……」

仲間だった者の肉片を浴びて取り乱した上級悪魔が発する声の中、男の発した重厚な呟きがサイラオグの耳を叩く。

男の雰囲気、放った一撃に、身体が振るえた。

全身から汗が吹き出し、鳥肌が立った。

自身が敵対しているワケではないにも拘らず、身体の芯から恐怖が

湧き出てくる。

しかし、サイラオーグは嗤わらっていた。

心が凍てつくような恐怖の中にあつて、全てを焼き尽くすような激情もまた立ち昇っていた。

渦巻き、吹き上がるそれは声高にこう叫ぶ。

『奴と闘いたいッ!!』と。

サイラオーグ・バアルとアルケイデス。

後に一撃必殺を目指し、鎬を削る事となる二人の武術家の出会いであつた。

33話

「こちらで魔王様がお待ちです」

秘書官に促されて重厚な木製の扉を潜ると、白の大理石で造られた巨大なホールが目に飛び込んできた。

純白の壁面には金で細やかな細工が施され、窓はステンドグラス。置かれている彫刻や家具はどれも超一級品ときた。

なんつうか、物凄く落ち着かない。

「ようこそ、アザゼル総督。そして、姫島慎よ」

中央に置かれた黒曜石の円卓で席を立ち、歓迎の意を示すアジユカさん。

横にいるファルビウムさんは、机に頬杖をついたまま、半分閉じた目をこちらに向けている。

「急な話ですまん、アジユカ。今回はお前さん達に色々聞きたい事があるんだ」

口ではすまんと言っておきながら、まったく悪びれる様子を見せないアザゼルのおっちゃん。

対するアジユカさんも、その程度の事は予測しているのか、浮かべた笑みはまったく崩れていない。

勧められた席に腰を下ろすと、例の鏡を相手の様子が分かるような位置に置く。

軽く氣を通して鏡を起動させてから背もたれに身体を預けると、自然にため息が漏れた。

会議のほうに集中しないといけないのだが、今朝にあった事の所為でいまいち氣が乗らない。

この会議から数時間前、俺は後顧の憂いを断つ為にグレモリー本邸を訪れていた。

小父さんたちに日本への亡命を持ちかけたものの、返ってきた答えはやっぱりN o。

なんとか説得したいところだったが、むこうの覚悟が決まった目を見ては何もいえない。

逆にサーゼクス兄達の事を頼むと念押しされてしまい、重い足取りで本邸を出ようとしていると、アーシア先輩に出会った。

思えば、会うのは駒王会議以来だったので軽く挨拶しようとしたところ、先輩は感極まったように涙を流し、俺の前にひざまずいて祈り始めたのだ。

予想の斜め上すぎる行動に慌てて立たせようとしたが、先輩は『貴方様が私ごときに触れるなど畏れ多いっ!!』などと言って、激しく抵抗する始末。

彼女の目がトランス状態のように光が無いのを見た俺は、耳元近くから強めに声を掛けた。

何度かの呼びかけで、ビクリと身体を震わせたアーシア先輩は、光を取り戻した目で不思議そうにこちらを見上げていた。

とりあえず落ち着いた様なので事情を聞いたところ、どうも彼女は『主』からお告げを聞く夢を見たらしい。

お告げの内容自体は覚えていなかったらしいだが、その姿はしっかりと目に焼き付けたそう。

で、何でそれが今回の事に関係するかと言えば、その『主』とやらの姿は髪の色などは違えど、俺そっくりだったらしい。

『だから、慎君の姿を見た時に勘違いをしちやっさんです』と、アーシア先輩は恥ずかしげに笑ったが、俺はまったく笑えなかった。

朱音あかねと璃凰りおの件は『禍の団』の手によるものだった。

という事は、あの研究所で培われたデータが天界の手に渡っていてもおかしくは無い。

オーフィスとグレートレッドは、聖書の神話で邪悪なる物として扱われる龍だから、複製体を生み出してもそういった使い道はありえない。

しかし、俺ならばどうか。

墮天使の混血とはいえ、人に近い『無限』を神を迎える依り代とする。

……鍛えていない俺のクローンが使い物になるかは分から

ないが、発想だけなら十分にあり得る話だ。

この件があつてすぐ、同行していた親父には家に帰ってもらつた。あつてほしくない事だが、アーシア先輩の夢が妄想じゃないとしたら双子がヤバイ。

試作か予備かは分からないが、あの子達が神の素体として生み出されたのならば、どこからか手が伸びる可能性が高いのだ。

聞けば、天界にあるシステムと呼ばれるモノと曹操が持つ『黄昏の聖槍』トウクルー・ロンギヌスには、神の意思が込められているという。

アザゼルのおつちゃん曰く、これが残留思念ではなく魂の中枢を司る霊核だった場合、器となり得る身体を用意すれば復活の目があるそうだ。

ここまでの時点で天照様に速報を入れようとしたが、これはアザゼルのおつちゃんに止められた。

悪魔の条約破りが表面化しつつある現状で、天界が聖書の神の復活を目論んでいるなんて話が流れれば、それが噂だとしても三勢力は殲滅対象になる。

墮天使の日本への帰属化の算段もあるし天界とは浅からぬ付き合いがあるので、もう少し証拠が出揃うまで待つてほしいと頼まれたのだ。

前提として俺のクローン事案があつたとしても、現状において天界が聖書の神復活を画策している証拠は、アーシア先輩の証言だけだ。

証拠として扱うには、これではあまりに弱い。

今回の会合をミカエル天使長が欠席したのを踏まえても、荒事に発展するには不足だろう。

とはいえ、俺達で情報を止めるというのも悪手に過ぎる。

という訳で、この件は『不確定情報』という前提を加えて、天照様に報告するという形で落ち着いた。

この件を受けた天照様は、『事態を重く受けとめて、事実ならば早急に証拠を掴む』と言っていた。

アザゼルのおつちゃんは、大事に発展しそうな雰囲気^{アザゼル}に苦虫を噛み潰していたが、この判断は間違っていないはずだ。

仮にこの件を俺達で止めていた場合、後で露見すれば墮天使の日本帰属なんて認められるわけがなく、諸共に叩き潰されるのは目に見えている。

けど、アザゼルのおっちゃんの様子を見てると、俺がすっげー冷たい人間に思えるんだよなあ。

まあ、家族と知り合いが無事なら、後はどうでもいいやって思ってるあたり、そう間違った評価じゃないんだろうけどさ。

「おい、慎。おい」

こちらに呼びかける声と肩に掛かる緩い振動に、思考の海に沈んでいた意識が浮上する。

「大丈夫か？　心ここに在らずって感じだったか」

見れば、隣に座っていたアザゼルのおっちゃんが、呆れと心配が入り混じった顔をこちらに向けている。

「どうやら、思っていた以上に考えに没頭していたらしい。」

「悪い。さっきのことについて考えてた」

「頼むぜ。あの件が気にかかるのは分かるが、今はこっちに集中してくれ」

「ごめん」

ため息をつくアザゼルのおっちゃんに頭を下げ、俺は再び現ベルゼブブ・アスモデウスの両魔王に向かい合う。

「ふむ、何か心配事かな？　体調が優れないようなら、日を改めるが？」

「えー、メンドクサイなあ。どうせこっちの意向を確認するだけなんでしょ。だったら今日やったほうが、手間が無くていいじゃん」

アジユカさんはともかく、やる気ナツシングのファルビウムさんは辛辣しんらつである。

まあ、アポを取っておいてポーツとしていたこっちが悪い。

ここは素直に謝っておこう。

「失礼しました」

俺が頭を下げると、アジユカさんは鷹揚おうように頷いた。

顔を伏せ、黒光りする円卓の淵に視線を向けながら、建物内と周辺

に馬鹿でかい氣や妙な氣配を探しているが、反応は無い。

どうやら、ルイという男はこの周辺には居ないらしい。

もし捕まえる事ができたら、瞬間移動で奇襲を掛けてやろうと思っ
ていたのだが……。

「問題がないなら続けよう。さて、まずは我々が駒王会議において、
サーゼクス達の決めた約束を反故にした理由だったな」

「約束、ですか？」

「約束だよ、あんなものは。サーゼクス・グレモリーと君との間で結ば
れた個人的な、ね」

「悪魔側が駒王会議で結んだのは三勢力の同盟だけだよ。何故なら、
条約というものは国家間で結ぶものだもの。君がどれだけ力を持っ
ていても、国家が個人と条約を結ぶなんてありえないのさ」

「故に、悪魔の駒や転生悪魔についての事案は、こちらに護る理由は無
い。そうしたいのであれば、三勢力の同盟の条件として提示すればよ
かったのだ。そうすれば、サーゼクス達が持ち帰った後にこちらも検
討はしただろう」

二人して捲くし立てる魔王達の弁に、俺は密かに納得していた。

なるほど、たしかに相手の言うとおりである。

個人と国家の交渉で条約など締結しない、道理としてはあつてい
る。

まあ、道理としてあつてる『だけ』なんだが。

「おいおい、状況を知らない奴がふざけた事を抜かすなよ。あの時は
こいつがああ条件を飲ませなきや、即戦争だったんだ。それを後に
なつていちゃもん付けられたつて、こつちも納得がいかなぜ」

「いちゃもんとは心外だな。我々としては、検討の機会も無くこんな
不利な条件を飲まされるのは、不当だと言っているだけだ」

「アザゼル。君なら下僕悪魔の価値が分かるんじゃないの？ 労働力
や戦力、レーティングゲームに代表されるエンターテイメントの資
源。今の冥界は、下僕悪魔の力無しでは成り立たなくなつてる。それ
を手放すなんて、できるわけないじゃん」

「下僕悪魔、ですか。両陛下は転生悪魔を随分と下に見ているようで

すね」

「そんな事は無い。下層とはいえ、彼等も悪魔社会に取って無くてはならない存在だ。差別や蔑視など持った事は無いよ」

「ナチュラルに見下してるじゃねーか。あのな、その転生悪魔って言う現代の奴隷制度が、国際社会で目の仇にされてるんだよ」

アジユカさんの『下層』宣言にツツコミを入れるおっちゃん。

現代の奴隷制度とは言いえて妙である。

しかし、今度はその発言にファルビウムさんが噛み付いてくる。

「奴隷制度とはずいぶんだね。彼等は望んで悪魔になったんだ。新参者である以上、多少の不利益は甘んじるべきだと思うけど？」

「リサーチ不足ですね。転生悪魔の中には主によつて拉致、もしくは瀕死にされた後に無理やり悪魔に変じられた者も多く居ます。アスモデウス陛下、貴方の主張を通すなら、そういった行為を取り締まる必要があるのでは？」

「それくらいは把握してるよ。でも、そんなのは下僕の中でもほんの一部でしょ。駒が渡される貴族には、ある程度の自治が認められてるんだ。それなのに、一々行政府が取り締まるなんてできるわけない」
「そうやって見て見ぬフリをしてきた結果が、今の状況なんです。アスモデウス陛下、貴方の言葉は悪魔が他神話の人間を拉致するのを、認めるようなものなのですよ？」

「だからなんだい。そんなのは大昔からやってる事だ。今更言われたって、どうしようも無いでしょ」

そう言つて大欠伸をするファルビウムさん。

……あかんわ、この人。

転生悪魔や悪魔の駒が、悪感情を買っているのを分かった上で開き直ってる。

「……多神勢力が悪魔の駒に、どのような感情を向けているかは把握している。それでもなお、我々には下僕悪魔を手放すことは出来ん」
「わかつてんのか、お前等。そりや世界相手に喧嘩売ると同じ意味なんだぞ？」

「もちろんだ。だが、我々にも血を流しても護らねばならん物があ

る。そして、その為に戦争という手段を取る事、即ち交戦権は国家に認められた権利の一つだ。それが個人の思惑にねじ伏せられるなど、あつてはならない」

おっと、そりや俺に対する皮肉か？

「なら、三勢力の同盟は終わりだな。俺達も天界も、お前等に付き合つて沈むわけにはいかねえ」

「貴殿がそう言うなら、やむを得んな」

「……即決かよ。サーゼクスの時には散々検討する時間を取れて言つといて、自分はガン無視か？」

「検討なら何度も行つたし、貴族院の承認も得ているよ。私はサーゼクス達のような理想主義者ではないからね、昨日まで敵だった者に背中を預ける事はできないのだよ」

「君もそうだよ、慎。セラフォルは君の事を『無限』の傘なんて言つてたけど、そんな信用が無いモノに自分の未来を預けるのはナンセンスだね」

「信用ならない、ですか。今までこつちは三勢力に気を使つてたんですけどね」

「使っていたのはグレモリーを初めとする知り合いに、でしょ？」

立て続けに出る否定的な言葉にため息交じりで言葉を吐くと、ファルビウムさんからキツイ言葉が返ってくる。

「君は悪魔社会全体のことなんて考えてないじゃないか。だから、悪魔の駒や下僕悪魔の使用停止なんて口に出来る。『無限』の力による保護だって、グレモリー家が居なくなつたら終わりなんでしょ？ そんな不安定な抑止力なんて無いほうがマシさ」

いつに無く苛立った口調でこちらを責めてくるファルビウムさん。彼の性格からいって、この怒りは悪魔社会を思つてのモノじゃなくて、自分の仕事が増えたからなんだろうな。

「たしかに、そちらの言う通りです。ですが、それはおかしな事でしょうか？ そも、悪魔社会の守護や今後の展望を思慮するのは、あなた方の仕事でしょう。魔王でも大王でもない私が行う事じゃない」

「だったら口出しなんてしないでほしいね。部外者に引つ掻き回され

「たら、余計に厄介な事になるんだから」

「そうはいかない。恩人や幼馴染が戦争に巻き込まれそうになってるです、必要なら手も足も出しますよ。だいたい、あなた方がサーゼクス氏達が外交の矢面に立っていた時に、後ろで我関せずとやっていたからこうなっただんでしよう？ 後で文句言うのなら、会議に参加していればよかったですか？」

「やだよ。そんな面倒な場所に顔を出すわけじゃないじゃないか。なんのためにセラフオルーに任せたと思ってるのさ」

「こちらの反論に露骨に顔を歪めるファルビウムさん。」

「全く悪びれないで言い放ったぞ、このおっさん。」

「どう考えても給料泥棒だろ、これ。」

「つーか、女性のセラフオルー姉さんにあんなキツイポジ押し付けといて、恥ずかしくないのか？」

「まあ、サーゼクス氏達に押し付けた『約束』に文句があるのはいいでしよう。所詮は素人が苦し紛れで考えた程度のものですから。ですが、当時の代表が誰であれ、あなた方は条件を飲んだんです。それを反故にするのなら、それなりの代償は払ってもらう事になりますよ」

「それは覚悟の上だ。先ほども言ったように、私達は自身の権利を護る為なら戦いも厭わない」

「権利、ねえ。」

「他者を無理やり改造して奴隷にする権利なんて、誰が持つてるってんだか。」

「今回の件、約束を破れば私も多神勢力側に付くのは聞いていますよね？」

「ああ。だが、我々は噂ほど君を脅威とは思っていない」

「いくら強くなったとはいえ、雷撃も飛ばせない君がオーフィスに勝ったというのは盛りすぎでしょ。白龍皇との戦いも捏造臭いし、その気になれば、僕達のどちらかで押さえられるんじゃないの？」

「なるほど、なるほど。」

「聞いてはいたが、俺は冥界ではえらく舐められているようだ。」

「サーゼクス兄達の手前、言いたい事は言いながらも最低限の礼は尽

くしてきたつもりだけど、これはさすがにムカついた。

今後の事もあるし、ここらで一発『キャン』と言わしとくか。

「それはまた随分な評価ですね。では、仮にこの場で私が襲い掛かったとしても、討ち取られる事は無いという事ですね？」

にこやかな笑顔のまま軽く殺気を放つと、室内の空気が凍りついた。

見れば、薄い笑みを浮かべていたアジユカさんの表情は強張り、ダレた態度を崩さなかったファルビウムさんは、怠惰な雰囲気を取り出して後方に距離をとっている。

「失礼、場を悪くしてしまつたようです。それにしても両陛下、私は軽く怒気を放つただけですよ？　そこまで過剰に反応する必要は無いと思うのですが」

こちらの言葉には答えずに、向こうは臨戦態勢を取る両名。

ファルビウムさん……もう呼び捨てでいいや。

ファルビウムは境界の重ね張りで防御を固めてるし、アジユカの方は妙な気配を纏い始めている。

多分、あれがむこうの超越者としての力、『カンカラー・フォーミュラ覇軍の方程式』だろう。

感じる力は『無限の闘争』で換算すればB上位、何らかの特殊性を加味してもA中位が妥当か。

ふむ、ちようどいい機会だ、例の技を試してみるか。

むこうに気づかれないように調息した俺は、アジユカの身体の中心、いわゆる魂魄に向けて意識を集中する。

放った意識の糸はゆつくりと彼の体の中に入り、経絡を経由してその中枢へと進んでいく。

駒落しに近い感覚を感じながら奥に進んでいくと、意識の糸はついに彼の根幹というべき物を捉えた。

自分の物を操作していたからこそ分かる。

これがアジユカ・ベルゼブブという存在の『因果』だ。

さすがにここまでは防御策が講じられてはないようで、無防備な因果の掌握は拍子抜けするほど上手くいった。

なるほど、因果を掌握するとはこういうことか。

身体を司る部分を少し弄^{いじ}るだけで、脑梗塞^{いじ}だろうが心臓麻痺^{いじ}だろうが簡単に引き起こせる。

しかも因果律操作を習得していなければ、相手はまったく気づかないときた。

うん、これはヤバいわ。

これに慣れたら、修行なんかしなくなっちゃまうぞ。

さて、初めて他者の因果に触れた感想はここまですて、そろそろ行動を起こそう。

今回俺が手を加えるのは、むこうご自慢の『覇軍の方程式』である。現在展開している効果を打ち消すつても悪くないのだが、この能力の効果を思えば、今後の戦いで使われるのはよろしくない。

やはり、ここは永久封印だな。

こちらが因果にかかった意識を操作すると、アジュカの纏っていた雰囲気^{あやうき}が綺麗に消失する。

「なっ!? 『覇軍の方程式』が……!?!」

「どうしたんだい、アジュカ」

「わからん、急に『覇軍の方程式』が発動しなくなった! どういうことなんだ、これは!?!」

さつきまでのすまし顔はどこへやら。

顔いっぱい冷や汗をかきながら魔力を放出し続けるアジュカを横目に、俺は奴に絡んだ意識の糸を離す。

………掌握から発動まで1分少々か。

たしかに効果は凄^{すご}いんだが、ここまで時間がかかっては使い物にならないな。

しかも、今の俺ではBランク以上の相手だと因果は握れないみたいだし。

………あれからお代わり十回ほど將軍様に殺されたのに、この体たらく。

これではキン肉マンの因果を握るのも無理そうだ。

ミキサ―大帝よろしく、火事場のクソ力を封印できれば有利に立てると思ったのに、残念。

「貴様、いったいなにをした!？」

能力を封じられた焦りから紳士の仮面が剥げたアジユカは、こちらに向けて声を荒げる。

「なに、とは？ 私はここに座ったまま指一本動かしてませんよ。そもそも、私の力は陛下達と互角なのでしよう？ ならば、力を封じるなど出来るはずがありませんまい」

いけしやあしやあと答えてやれば、アジユカの顔が様々な感情がない交ぜになった凄いモノになる。

「……宣戦布告も無しにこんな真似をするなんて、随分と卑劣なじゃないか」

「これはまた随分な物言いで。ですが、仮にも国家元首たるものが、証拠も無しに他人を非難するというのはいかなるものでしょう?」

余裕を崩さないこちらの態度に押し黙るファルビウム。

当然証拠など無いのだから、こうなるのは当然だ。

「仮に私が何かをしたとしても、貴方の言葉はお門違いですよ、アスモデウス陛下。『国家と個人間に条約は結べない』と言ったのは、他ならぬ陛下なのですから」

笑顔と柔らかい態度を崩さずに恫喝どっかつするという、我ながら器用な真似をしていると、魔王の後ろにある通用口の扉が勢いよく開いた。

開け放たれた扉の奥から部屋に飛び込んできた一団は、素早く魔王両名の前に陣取って油断無くこちらを警戒する。

「ありやあ、ディハウザー・ベリアルと眷属達じゃねーか！ 奴等、レーティングゲームのトップランカーを護衛に付けてたつてののか!」
どっかで見えたことがあると思ったら、今をときめくトップアスリート様らしい。

「ディハウザー！ 奴を討て!!」

「はっ!」

アジユカの指示で初めて、臨戦態勢を取り始めるディハウザーとその眷属達。

はつきり言って、話にならないくらいに遅い。

こっちがその気なら、十回は魔王の首が取れている。

こういった場合はアジュカの指示など待たずに、行動を開始するのが正解だ。

レーティングゲームの王者とはいえ、この辺の臨機応変さが無いところがスポーツマンなんだろう。

「ポーン総員はナイトと共に奴の足止め！ ビシヨップ兩名は後方援護！ ルークとクイーンは、私と共に陛下たちの守護に付け!!」

「「了解」「」」

デイハウザーの指示で眷属各員はキビキビと動き始めた。

兵士たちは隊列を組んで最前列に立ち、その後ろには騎士らしき全身鎧が控える。

ルークと思われる巨漢は円卓を立てて盾代わりにし、女王と思われる女は魔王二人をデイハウザーの後ろへと誘導している。

よく仕込まれているのはいいのだが、テーブル立てる時は声くらい掛ける。

危うく、例の鏡を割るところだったじゃないか。

「おい、慎……!」

「おっちゃんは下がってろ」

焦りを含んだ声で呼びかけてくるおっちゃんを後ろに下げると、むこうの兵士八名がこちらに突撃してくる。

銘々に得物を抜き、派手な鬨ときの声を上げてはいるが、あれはフェイク。

本命は――

兵士達に向けていた視線を奴等の頭上に向けると、一呼吸置いて騎士二名が後方から飛び出してくるのを捉えた。

そう、兵士をブラインドにした騎士での奇襲だ。

動きにムラがないし、騎士が飛び出すタイミングも悪くない。

この戦法を考案してから、何度も訓練もしたのだろう。

だが、まだまだ甘い。

敵の察知を視力だけに頼っている者になら通用するだろうが、他心通たしんつうに長けた者にとっては大バレだ。

「曲者、覚悟ッ!」

「魔王様への不敬、その首で購え!!」

裂はくの気合と共に、頭上から振り下ろされる剣と槍。

高位魔法と同等の魔力が込められた切っ先は、風を巻いて俺の両肩に食らい付いた。

「やったか!?!」

一見すれば致命の一撃に見える体勢に、歓声をあげるデイハウザー。

見事なまでのフラグ構築である。

こうまでベタな反応をされては、期待に応えるしかあるまい。

「やれやれ、暴力はいけないなあ」

平然としたこちらの声に、悪魔側の歓声がピタリと止んだ。

見れば、デイハウザーや眷属達はもちろん、魔王達までもが驚愕の表情を浮かべている。

というか、騎士二名。

お前等は打ち込んだ感触で、ダメージがあるかどうかぐらい分かるだろうに。

賢明な読者諸兄は分かっていると思うが、この程度の攻撃では俺の肉体はおろか、着ているスーツの糸一本すら傷つけることは出来ない。

俺の硬気功は肉体はもちろんの事、毛髪や着ている服の繊維に至るまで、鋼の柔軟さを兼ね備えたダイヤモンド並の硬度に引き上げる事が可能なのだ。

さて、事情はどうあれ、手を出してきたのは向こうであり、こちらが殺されかけたのは間違いない。

会談の参加者としては、身を護る為に最大限の努力をしなくてはなるまい。

得物を両肩に押し付けている騎士達をよそに、俺は前方に向けて少しキツめに殺氣を放った。

次の瞬間、眷属悪魔達が次々と白目を剥いて倒れ、デイハウザーと魔王達もヘナヘナとその場に尻餅をついた。

「おい、なにをやったんだ?」

「別に。少し脅かしてやっただけだよ」

適当に答えを返しながら、俺は武器を当てられた場所の埃を払う。ア●ヤマ製とはいえ、朱乃姉と美朱が買ってくれた一張羅なのだ。必要なパフオーマンスとはいえ、気を揉むのは仕方が無いだろう。ちなみに、今俺がやったのは氣当たりという古流の技法だ。

相手に向かって瞬間的に強烈な氣を放つ事で、相手を竦ませたり、氣絶させたり、もしくは錯乱させたりと、精神的に様々な不調を誘発させることが出来る。

これに暗示を織り交ぜれば極めて簡単に相手を洗脳することも可能で、ゲームストコミック版の『龍虎の拳』では、Mr. ビッグがこの技法を使って無敵の軍隊を作ろうとしている描写があった。

まあ、洗脳や暗示はヤバいから使わないけどね。

「行こう、おっちゃん。ここでの用はすんだ」

「いいのか？」

「問題ないだろ。先に手を出してきたのはむこうだし。俺の発言が切っ掛けだったとしても、しつかり『仮に』って付けてるからな」

『ですよね?』と手の中の鏡に氣を送ると鏡面に波紋が広がり、次に映っていたのは天照様の顔だった。

『ええ、しかとこの目と耳で確認しました。もちろん、ベルゼブブ・アスモデウス両魔王からの条約破棄の件も。ですので、我等日本神話は只今を持って悪魔政府に宣戦を布告します』

鏡面が揺らぎ、次に現れたのは腕を組んだダグザ様だ。

『我々ダーナ神族も同様だ。公式発表を遅らせることで開戦の準備を進めるつもりだったのだろうが、そんな小細工が通用すると思っただか?』

『無論、我等オリユンポスも参戦させてもらう。停戦や和平は期待するな。舌の根が乾かぬ内から、約定を覆す輩と交渉なぞ行う氣は無いからな』

『アスガルドも参加させてもらうぞ。契約の重要性を理解できぬ悪魔など、害獣でしかないからの』

『無論、我等エジプト神話もだ。薄汚い魔に墜とされた借り、存分に返

してやろうぞ!』

ハーデス様に続き、オーデイン様やアメン様が映ると、他の多神勢力達も次々に宣戦を布告していく。

……OK、アザゼルのおっちゃん。

その猜疑さいぎに満ち満ちた目を止めるんだ。

誤解が無い様に言っておくが、別に意図してこうなったわけじゃないよ?」

さつきから鏡がペカペカ光ってウザかったから、氣を通したらこうなつたんだ。

本音を言えば、やるかとは思ってたけど、本当にやらかすとは。実況だけだとか言つてたのに、酷いっすよ天照様。

「あく。もう後には引けなくなつちやつたし、諦めて行こうぜ」

「……ああ、畜生め」

俺うながに促されて、アザゼルのおっちゃんも腰を上げる。

入り口を警護していた憲兵は殺氣に当てられたせいで、股間を濡らしながら氣絶していた。

……彼等にトラウマが残らないように祈るとしよう。

アザゼルのおっちゃんの後ろについて会議室を出る寸前、俺は二人の魔王様にむけて笑顔でこう言い放つた。

「それじゃあ、次は鉄火場で。吐いた唾を飲まないよう、せいぜい氣張つてください」

地に膝をつき、俯いた顔を上げようとしない魔王達を尻目に、俺は会議場を後にした。

◇

「なに考えてんだよ、お前。今ので完全に止めとどじやねーか!」

「俺のせいとか!? 宣戦布告ブツパしたのは天照様達だろうが!」

「そもそも、悪魔との会談になんで主神連中とホットライン結んだ鏡なんて持つてきてんだよ!? おかげでフオローのしようがねえだろうが!!」

「仕方ないだろ。今回の会談の実況動画取るのが、サーゼクス兄達を日本に保護する条件だったんだから。だいたい、あいつ等の会話のどこをフォローするつもりなんだ」

「……今は思いつかねえけど、家に帰って考えたら何か出るだろ」

「全然ダメじゃねーか。むこうもやる気満々なんだから、フォローなんて入れようないっつーの」

「まったく、例のルイって奴のことも何も分からなかったし、天界は天界で妙な動きしてやがる。どうすんだよ、これ……」

「日本に帰属すんだろ。もう賽は投げられたんだ、はら括れよ」

魔王府から出た大通りを、俺とおっちゃんはブラブラと歩いていた。

瞬間移動で帰ってもよかったのだが、なんとなく街外れまで歩きたくなったのだ。

まあ、建物を出たあたりから、おっちゃんがグググチ言い始めたのは誤算だったが。

そんな会話を垂れ流しながら、ファストフードやらファミレスやら人間の店のパクリが立ち並ぶ通りを歩いていると、前方でこちらを待ち受ける金髪の女がいるのが見えた。

ワインレッドのドレスに包まれた、背丈の割りにボリュームがある胸の前で腕を組み、ドヤ顔でこちらを見つめる謎の少女。

年の頃は俺と同じか、一つ上程度。

……どつかで見たような顔なんだが、どうも思い出せない。

「待っていたよ、アザゼル総督。そして人中の『無限』殿」

近くに来た途端、女は堂々と俺達の事を口にした。

俺は兎も角、アザゼルのおっちゃんは冥界では有名人だ。

こんな人通りが多いメインストリートで名を呼ばれた所為で、あつという間に人だかりが出来てしまった。

まあ、遠巻きに見ているだけで、芸能人みたいにサインとか強請ってくる輩がいなのは救いか。

「すみません、どこかでお会いしたでしょうか？」

「すまねえな、お嬢ちゃん。どつかで在ったかもしれねえが、思い出せ

ねえや」

「ああ、気にする必要は無いよ。貴方達とは面識はないし。ただ、名前を知っている程度さ」

なんとも気取った態度で、こちらの言葉を受ける女。

その一挙一動に周囲の目が奪われている。

それは隣にいるおっちゃんも同じだ。

そういえば、芝居がかった仕草の一つ一つに妙な波動を感じる。

か細くて殆ど感じられないけど、これって神氣か？

「おや、辺りもずいぶん騒がしくなっちゃったね。これも私の所為なんだけど、衆愚とは群れるもの。気にする事はないさ」

尊大に頷く少女に、傍付きのオリエンタルな衣装を身に纏った女が耳打ちをすると、彼女の雰囲気が一変した。

先ほどまでの芝居がかった挙動は鳴りを潜め、表情も楽天的な笑顔から張り詰めたそれに変わる。

「……すまない。状況が代わってしまった。何も言わずに私に付いて来てくれないか」

突然の無茶振りである。

とはいえ、目の前で少女が涙目になっては、無下に断ると言うのも憚はばられるものである。

「何も聞かされずに付いて来いと言われても……。恐らくやんごとなき方で在あらせられるのでしようが、話しても良いと思われる事だけで構いませので、事情をお話願いませんでしょうか？」

「……そうだね。私の両親にタチの悪い呪いが掛けられてしまったね。君に解呪を頼みたいんだ」

「私でなければ、ならないのでしょうか？」

「うん、君でなければ解くことができないんだ。なにせ、相手は『主』の呪いだからね」

皮肉を込めて少女は仇の名を吐き捨てる。

なるほど、『主』ね。

ならば、俺が行かねばならんだろう。

「わかりました、同行しましょう」

「いや、待て待て」

即座に決断すると、アザゼルのおつちゃんに肩を掴まれた。

「どう見ても怪しいだろ、あの嬢ちゃん。それがなんで『行く』って結論になるんだよ」

「いや、仕事だからな。それも10億円のビックビジネス」

「10億うツ!? なんだそりゃあ!!」

「ああ、姉母様の提示した額だね。大丈夫、そのくらいならポーンと払うよ」

おつちゃんの絶叫がむこうに聞こえていたらしく、少女は、こちらを振り向かないままに言葉が返してくる。

「つうか、ちよつと待て。」

「このお嬢さん、今、なんて言った?」

「あ、現地には姉母様もいらつしやるから、挨拶だけはしておいてくれよ」

Oh……

「おい、あいつの言ってる姉母って誰だ?」

「ウリガット神話のアナト様ですが、なにか?」

「よし、俺帰るわ」

その名前を聞いた瞬間に、クルウリと回れ右をするおつちゃん。

そんな薄情な男の肩を、今度は俺の手ががっちり掴む。

「ほほほ……ッ! 逃がしませんことよ」

「離せ! 離してくれ……ッ!! あんな世界一おつかねえ女のところになんか行けるか!? あいつが居るだけで、ハーレムの後宮もグラウンド・ゼロに化けるんだぞ!」

「そこまで分かってるなら、なおさら来い!! 俺一人をあんなブラツド・バス製造機に放り込む気かよっ!」

「言うの忘れてたけど、姉母様は君達が来るのを前提に宴の準備とかもしているからね」

その言葉を聴いた瞬間、俺達の表情は死んだ。

超物騒な上にヤンデレを拗らせているという、絶対に敵に回してはいけない女神様の一柱からのお誘い、か。

……な、なんてこしたShit!?

『yes』か『はい』しか答えがないじゃないか。

「おっちゃん」

「なんだ、慎」

「逝こうか」

「……そうだな」

精肉場に送られる豚のような気分で少女に付いて行く俺達。

路地裏に入って転移ゲートを開く少女を見て、俺はある事を思い出した。

「そういえば、まだ貴女の名前を聞いてませんでした。良ければ教えてくださいますか?」

「ああ! そういえば、そうだったね」

ゲートを開き終えた少女は、こちらの言葉にポンと手を打った。
「では、改めて我が名を名乗ろう」

そう宣言して、少女は自身の髪を大きく払った。

真紅のドレスに柵引く金糸のような髪が随分と栄える。

「我が名はディオナ・アスタルテ! かつてはディオドラ・アスタロトと呼ばれていた存在さ」

格好良く名乗りを終えて、どうだつ! とばかりに胸を張る少女。

しかし、俺たちには感想を返す余裕が無い。

え? これがディオドラ?

あの『アスタロト家のう●こ』とか、『きだい稀代の大うつけ』とか呼ばれた穀潰しの?
マジで?!

あいつって悪魔貴族のくせにAVに出演した、伝説のバカだよ?

それが発覚した時は、アスタロト家が阿鼻叫喚の地獄に化けたって話しだし。

「え、ちよつとまって。貴女、あのディオドラなのか? とうか、なんで女になってんの?」

『あの』っていうのが何を指すのかがとつても気になるが、今は追求しないでおう。『無限』殿、君の問いの答えは『yes』だ。もつと

言えば、これが私の本来の姿であり、男性体のディオドラは仮の姿ということになるね」

「おい！ 聖女を墮としまくったっていう、穢れたバベルの塔はどうなったんだ!?!」

「この身体になる時に無くなってしまったよ。あれば私の子猫ちゃん達を可愛がることができただが、惜しい事をした」

『セイント・バスター、カムバック！』などと叫ぶ少女のあんまりな姿に、ストーンと納得がいった。

『ああ、あれは噂通りのディオドラだ』と。

女が本来の姿とかほざきといて、『ピーー』を欲しがる奴なんて、そうはいないだろうし。

「さて、私の最大の秘密が明かされたところで、姉母様のところに行こう。……あの人を待たせすぎると歓迎の宴が、鮮血たつぷりの謝肉祭になってしまう」

何を思い出したのか、少し上向きになったテンションを急下降させながらゲートを潜るディアナ嬢。

それについて行くと、眼前に広がっていたのは古代の神殿だった。

漆喰が塗られた白い壁に、金や翡翠で造られた数々の装飾品。

巨石を削って作られた勇壮な神像達が列を成し、中央の祭壇には山羊の角を生やした美女が無人の玉座の脇に座っている。

「久しいな、『無限』の男よ」

「お久しぶりでございます、アナト様」

跪いて礼を示すと、アナト様は口元に笑みを浮かべる。

「そなたは善き男よな。神をも超える力を持ちながら、神を敬い礼を尽くす。あの方の慧眼に見落としがあったとすれば、そなたをグレモリーに取られたことかもしれん」

「勿体無いお言葉です」

過分な評価に頭を垂れると、その視線はアザゼルのおっちゃんを捕らえる。

「それに比べて、そこな『カラス』は変わらずに虚けなことよ。妾を前にして膝の一つも折らぬとは。齡20にも満たぬ者が礼節に通じて

おるのに、数千年生きた貴様は何を学んだのだ？」

「うつせーや。俺はこいつみたいいな神官職じゃねーんだよ。テメエが頭を下げる相手くらい、テメエで選ぶわ」

「ふん、女の乳に迷って天使長の座を捨てた男は言うことが違うわ。ところで、そこな少年に借りた聖娼の代金は返したのか？」

「か………返したわいつ?！」

「いいえ、返してもらってません。」

「いい加減にしないと利子を十一にするぞ、エロ親父が。」

「まあよい。『カラス』の戯言ざれごとに付き合っても、時間の無駄でしかないからな。顔を上げよ、姫島慎」

「はっ」

「本来なら夕餉ゆうげを楽しみながら悪魔を討つ算段さんだんを付けるつもりであったが、状況が変わった。そなたには、何時ぞやの約束を果たしてもらいたい」

「ディアナ様より伺うかがっております。神救いの法が必要な方がいらっしやるのですね?！」

「うむ。本来であれば、彼奴の遺した呪詛じゆそになど屈する方ではないのだが、半月ほど前から急にその力が増してな」

「わかりました。まずは患者のところに行きましょう」

「ついて来るがいい。『カラス』、貴様は適当に酒でも飲んでおれ」

衛兵に連行されるおっちゃんの怒声を背に、踵を返したアナト様に続いて俺は祭壇の奥に備え付けられた部屋へ入った。

そこには右半身が蠅となった男性と、下半身が蛇、左半身が男となった女性がうめき声を上げていた。

「これは……」

「父上……母上……」

あまりの光景に絶句する俺と、涙をたたえて口元を押さえるディアナ。

「って、ちょっと待て。」

アナト様を『姉母』なんて言ってたから何となく察しは付くけど、マジなのか？

そんな俺達を他所に、アナト様は目に涙を浮かべながら、男の人の形を保っているほうの手を握り締める。

「あなた……」

「彼が……来たのだな……?」

虫の羽音が混じったようなしやがれた声に、アナト様は小さく頷く。

この状態で意識があつてしゃべれるとは、とんでもない生命力と意思だ。

「姫島！ この方を、我が夫を救ってくれ！」

焦りと不安を顔に張り付かせたアナト様が噛み付かんばかりに訴えてくるが、それを止めたのは手を握っていた男性だ。

「……よい。私は、まだ持つ。それよりも……アスタルテを……あ奴を先に救ってくれ」

「しかしっ!」

とっさに反論しようとしたアナト様は、男性の残された瞳が放つ眼力に言葉を飲み込む。

さて、これは近年稀に見る修羅場のようなだ。

アナト様が夫と呼び、呪詛に蝕まれた女性がアスタルテとくれば、この男性はバアル神であることは間違いないだろう。

顔を見たことがないので、ゼクラム・バアルであるかどうかは、判断が付かないが。

氣を精査したところ、バアル様の言葉通り、アスタルテ様より彼のほうが余力はある。

しかし、神救いの法に掛かる時間を計算に入れば、彼が助かる可能性は殆ど無い。

さて、選択肢は二つだ。

どちらかを見捨てて確実に一柱を救うか、もしくは双方命を落とす危険を覚悟の上で、同時に施術を行うか。

駒落としての二名同時施術は何度か体験したが、神救いは初めてだ。

片方のみならば、確実に施術を成功させられる

しかし同時使用となると、アメン様を救った時から上達したことを

考慮に入れても、成功する可能性は60%程度だろう。

……いや、玉藻の支援があれば、もう少し上がるか。

あの宝具が有ると無しじゃあ、負担が全然違うし。

となれば、アナト様に状況を説明して玉藻を迎えに――

「その必要はありません、ご主人様。貴方様が必要とされますならば、この玉藻、宇宙の彼方でもはせ参じましょう」

突然背後からかかった声に振り向いてみると、そこには藍色の十二単という完全武装の玉藻がいた。

「……なんでいんの？」

「ご主人様の私を求める声が聞こえましたから、パスを伝ってちよちよいと転移をば」

いや、お前ね。

他者の神殿に無断で乗り込んでくるとか、結構失礼なことアルヨ？

「その辺は緊急事態ということで。アナトさんも、旦那様も第二婦人も救ってみせますから大目に見るヨロシ」

「よく分からんが、救ってくれるなら大目に見よう」

アナト様の許可も降りた事で、俺達は早急に準備を進めていく。

施術の前に、先ほどの選択をアナト様に提示したところ、迷うことなく二人を救うことを選択した。

正直、マンツーマンで対処できれば一番なんだが、この『神救いの法』を使用できるのは世界で俺だけなのだ。

というわけで、玉藻以外の援軍は無し。

今回も唯一の使い手として気張るしかない。

玉藻が宝具によって結界を展開すると同時に、患者両名の額に手を当てて氣脈にアクセスする。

20倍の界王拳を維持したまま両者の中を進んでいた俺は、思わず舌打ちを漏らした。

バアル様とアスタルテ様のキャパシティに差がありすぎるのだ。

アスタルテ様のスペックを1と仮定したなら、バアル様は4以上。

つまり、氣を均等に送り込んでいたのでは、確実に術式は失敗する。

そうではなくバアル様に八割、アスタルテ様に二割という風に振り

分けねばならないのだ。

大きく呼吸を放って、俺は送り込む氣を調整する。

出力差でバル様側に当てた右腕が軋^{きし}みをあげるが、無言で痛みをねじ伏せる。

そうやって氣脈を辿っていると、アメン様の時と同じく中枢部分にたどり着くことが出来た。

彼等の黒く染まった魂を縛る鎖は三本。

アシユタルテ様には蛇と男の意匠が施されたもの、バル様に絡みつくのは他とは比べ物にならないほどに太い蠅の意匠がほどこされたそれだ。

手順どおりに魂へのアクセスを試みたところ、案の定迎撃機能が発動。

アメン様の時は鎖が直接氣脈を攻撃してきたのだが、今回はなんと鎖の先端が變形し、鋼の天使となって襲い掛かってきたのだ。

これまでなら、為すすべも無く氣脈を攻撃されて術式失敗となっていただろうが、今の俺は一味違う。

こちらが思念を送ると、奴等と同じように氣脈の先端が俺の姿へと変わる。

これも因果律操作のちよつとした応用である。

条件は同じに戻したわけだが、鋼鉄天使はアスタルテ様側には3、バル様の方は9体存在している。

対する俺は、各身体に一人だけだ。

バツチリ多勢に無勢だが、この程度のハンデ、乗り越える技ならいくらでもある。

俺の分身たちは、双方とも両腕を組んで仁王立ちになる。

一見、隙だらけに見えるこの体勢。

これこそが今回の技の構えなのだ。

漆黒に染め上げられた全身鎧姿の天使たちが、劍や槍を手にこちらへ襲い掛かる。

奴等に言葉は無い。

あるのは兜の奥で煌々と輝く紅い光のみ。

……と、簡易講座を行っているうちに術式も佳境に入ってきた。魂の浄化も終わり、今は肉体の再構成の真つ最中だ。

真人モードを立ち上げた上に、界王拳はオーバードブーストの三十倍。

氣の出力差によって右手の経絡が何回かクラッシュしかかった所為で、『聖母の微笑み』もフル稼働状態だ。

……玉藻がいなかったら失敗してたな、これ。

そんなこんなで久々の大苦戦だったのだが、それも漸く終わりを迎える。

平行作業していたわりに早く終わったアスタルテ様から氣脈を離れた俺は、最後の仕上げという事でバアル様の額と心臓の上に手を当てて、思い切り氣を送り込んだ。

すると、半人半蟲だった身体は人間体に戻り、苦しげに呻うめいていた呼吸も穏やかなものに戻っていた。

「ああ……もう一度、貴方様の凛々しい姿を見ることが出来るなんて……」

感極まって眠っているバアル様に抱きつくアナト様。

確かに凛々しいと言えば凛々しいのだが、なんでこんな『メタルギアソリッド』の『ビッグボス』そっくりなんだ、この方。

アスタルテ様は普通に愛らしい女性って感じなのに、どうしてこうなった？

「アナト様、喜ばしいのは分かりますが、そんなに強く抱きしめてはいけません」

「なぜじゃ！ 夫婦の再会を邪魔する気か!?!」

「バアル様もアスタルテ様も、術によって肉体を再構成したばかりなのです。身体が安定する前に強い衝撃や無理な活動をすれば、どのような悪影響が出るか分かりません」

「む、そうか」

『不機嫌です』と表情に出しながら、名残惜しげにバアル様から離れるアナト様。

「それで、バアル様とアスタルテは何時になったら本調子を取り戻す

のだ?」

「個人差がありますので一概には言えませんが、今までの症例では2週間前後は掛かるかと――」

「それでは遅すぎる」

こちらの声に異を唱えたのは、アナト様ではなかった。

見れば、眠っていたはずのバル様が厳しい顔でこちらに視線を向けている。

というか、だろうなと思ってたけど声までスネークなのね。

「あなた!」

「アナトよ、今まで苦勞を掛けた。だが、ようやく私も高き館へと戻る時が来たようだ」

感極まって涙するアナト様を、優しく撫でるバル様。

『ご主人様、ここは空気を読みましょう』

後ろで控えていた玉藻から釘を刺された。

失礼な、俺はいつでも空気が読める日本人である。

さて、ある程度アナト様も落ち着いたようなので、先ほどの発言の真意をバル様に聞いてみた。

「それだが、悪魔どもは近々行動を起こすはずだ」

「行動、ですか? 今の悪魔に攻勢に出る力は残っていないと思いませんが」

「それだ。多神勢力の殆どが現在の悪魔を死に体と捉えている、今のそなたの様にな。だからこそ奴は動く。多くの者達の心の隙を突いて、こちらの急所を狙い打つ為に」

「……奴とは?」

「明けの明星、初代ルシファーだ」

苦虫を噛んだような顔で吐き捨てるバル様とは裏腹に、それに驚きは無かった。

頭に浮かんだ言葉は『やはり』だ。

散々否定はしていたが、心のどこかにいるという確信があったからだ。

そして、悪魔側の強気な態度もこれで得心が行った。

魔王のトップとして三勢力全盛期に君臨していたルシファーが戻ってきたのだ。

衰退し、多神勢力から追い詰められていた奴等にしてみれば、まさに救世主に見えたのだろう。

悪魔が救世主とは皮肉が効いているが。

という事は、奴等が詳細をひた隠しにしている魔王ルイが、そのルシファーで間違いは無いはずだ。

「バアル様。貴方様はルシファーに会った事があるのですか？」

「ああ。『禍の団』を利用して、悪魔社会内部への破壊工作を指揮している時に奴は現れた。最初に奴を見たときは、人違いかと思っただが、滅びる前の奴と容姿がまったく違っていたのもあったが、内面も大きく変わっていたからだ」

「内面、ですか？」

「そうだ。私の知る奴は、悪魔至上主義を掲げて天使や墮天使と矛を交えながら、無作為に地上に手を伸ばすような奴だった。しかし、今のあの男は人の可能性に価値を置き、その発芽を促す為に世界を混沌に陥れようとしている」

「混沌……」

バアル様の話を聞くに従って、脳裏に嫌な予感が募っていく。

混沌、人の可能性、そしてルイの偽名。

ありえないと思っていた、間違いであって欲しかった。

しかし、ここに至っては認めないわけにはいかない。

「バアル様、ルシファーは現在は偽名を名乗っているのですよね。それを聞いたことがありますか？」

「ああ、ルイ・サイファーだ。そして、奴の容姿は色彩が違えどそなたと瓜二つだった」

バアル様の答えを聞いた俺は、ゲートを開いて『無限の闘争』に飛び込んだ。

界王拳で限界の身体だとか、誰かに見られているなんて気にする余裕は無い。

ルイ・サイファーは、『真・女神転生シリーズ』に登場したルシファー

が好んで使っていた偽名だ。

そして、この『無限の闘争』に闘士として登録されているのも件のルシファーなのだ。

偶然に一致と言うには、あまりにも出来過ぎている。

誰かが入ってくる前に入り口を消し、メインコンソールへたどり着くと、すぐに闘士の現状のステータスデータを確認する。

検索するのはもちろん、ルシファーだ。

しばしの読み込みの後、現れたデータに記された文字は『LOST』これは消滅が確認された者、もしくは『無限の闘争』の管理下から逃れた者に付けられるステータスだ。

全身から嫌な汗が吹き出ているのを自覚しながら、ログを遡さかのぼっていく。

すると、何度か外部との通信が試みられている記録があった。

そしてロストしたのは駒王会議当日、どうやら俺とヴァーリが闘り合っていた最中だったらしい。

あの時、将軍様は言っていた。

『無限の闘争』のバトルフィールドを現実空間に展開した事によって、現実と『無限の闘争』との境界が薄まった、と。

将軍様がこちらに來れたという事は、あのルシファーが同じことが出来てもおかしくはない。

しかし『無限の闘争』に登録されている闘士は、正規手続きを踏まなければ現実世界に残ることは出来ないはずだ。

ならば、いったいどうやって……

もう一度ルシファーのデータを洗いなおした俺は、漸くその答えにたどり着くことができた。

コンソール内に残されている最終のステータスには『S o u r』と記されている。

つまり、こちら側に縛られた肉体を捨てて、魂だけで外界に飛び出したという事だ。

闘う事が基本であり、肉体に重きを置く『無限の闘争』からしてみれば、盲点というべき行動なのだろう。

そして、これでバアル様が言っていたもう一つの証言とも繋がった。

今のルイ・サイファー、ルシファアの容姿が俺に瓜二つな訳は、奴の魂の受け皿として俺のクローンが使用されたからに他ならない。なるほど、鍛える必要など無いわけだ。

奴にとって必要なのは肉体のポテンシャルではなく、己が肉体にする為の『無限の闘争』への親和性なのだから。

「くそおっ!!」

苛立ちのままにコンソールに拳を叩きつける。

だが、メインルームに打撃音が響くだけで、異界の技術で作られたコンソールには傷一つ無い。

なんてこった。

今回の戦争の原因は俺だったってワケだ。

まったく笑い話にもならない。

今まで必死に積み上げてきた物を、自分で台無しにしたってことじゃないか。

後悔と自己嫌悪が頭の中を満たしていくが、今はウジウジ後ろを振り返っている暇は無い。

ルシファアがこうなつたと知つたお陰で、確信が持てた。

ここからの逃亡者はもう一人いる。

次に検索に掛けるのは『DIOS』

再び訪れる読み込み時間の後に、ディスプレイに表示されたデータはやはり『LOST』だった。

DIOS。

海外で作られ出された、旧約聖書のキャラクターが闘う罰当たり同人格闘ゲーム『バイブルファイト』

こいつはその最終ボスであり、その正体は聖書の神だ。

ログやデータを遡って見れば、通信履歴から逃亡の手口までルシファアと一緒。

もしかしたら、奴等はグルだったのかもしれない。

それから、聖書に由来を持つ悪魔や天使のキャラを中心に確認を

行ったが、この二体以外の脱走者は見当たらなかった。

コンソールを落とし、大きく息を吐いた俺は自分の顔面を思い切りぶん殴った。

頭の奥がジンツと痺れる感覚と共に、口の中に鉄さび臭い味が広がる。

さすがに自分のパンチには、無傷ってワケにはいかないらしい。

だが、これで気合は入った。

後悔はある、罪悪感や自己嫌悪だっただけ消えていない。

だが、そんなものは後回しだ。

今はテメエがやった事のけじめを付けるほうが先である。

今回の悪魔の暴走や天界の不穏な動きの原因が俺にあるのなら、そのカタも俺が付ける。

奴等にどんな意図があるかは知らないが、それも関係ない。

……ルシファーと聖書の神を叩き潰す。

34話

ルシファー・DIOSの逃走が発覚してからしばし。

トレーニングで頭を冷やした俺は、冷水のシャワーで汗を流して『無限の闘争』を後にした。

ここに泡を食って飛び込んでから、要した時間は2時間少々。

外のバアル様達には失礼を承知で、これだけの間を取らせてもらった。

頭に血が上った状態では正確な説明は出来ないし、無礼を働いて相手を不快にしまっては本末転倒だ。

疲弊しきった身体で500倍の重力ルームに挑んだお陰で、上がっていた血はすべて下に降りてくれた。

修練の最中、肋骨を折ったり腕や足の筋肉がイカれたりもしたが、大したことはない。

どうせ、強化修復されただろうし。

身なりを整えて神殿の奥の廟びょうに戻った俺は、待っていたバアル様達に事情を説明した。

高確率で聖書の神が復活した事。

『無限の闘争』の簡単な概要と、これがルシファー・聖書の神の復活に大きく関わっている事。

全てを報告した後、多神勢力の主神各位にこの事を連絡し、俺単独で冥界と天界に攻め込む旨を伝えたが、これはバアル様に却下された。

現状で二者の復活に俺が関わっている事が広まれば、多神勢力の士気低下や疑心暗鬼という大きなデメリットを生む恐れがある。

そして、今回の戦争において俺は多神勢力の切り札であることから、単騎特攻など認められないとの事だ。

さらには『この件を伝える際には自分が後ろ盾になるので、それまで待て』とまで言われた。

何でそこまでしてくれるのかと聞いてみると、アスタルテ様共々助けた事に恩義を感じてくれているからだそう。

アナト様や玉藻が言うには、助命ではなく神の座に立ち戻らせた事が大きいのだという。

聖書の神の呪いが活発化したのって復活を許した俺の責任だし、こっちとしては詫び的な感覚が強いのだが……。

とはいえ、たしかに今回は個人で責任を取るには大きすぎる案件だ。

ケツを持つてくれるというのなら、ここは好意に甘えるべきだろう。

聖書の神が蘇った事に関しても、『奴にはまだまだ返していない借りがある。いい機会だから二度と蘇らないように粉々にしてやろう』って笑い飛ばしていたし。

ただ、天照様を初めとする縁の深い神様やウチの家族には、全てを伝える事を了承してもらった。

我俣だとはわかっているが、これも俺のけじめなのでご理解いただきたい。

例の鏡と携帯で関係者各位に伝えたところ、反応は様々ながらも混乱は避けられなかったようだ。

天照様やハーデス様、オーデイン様のように国内の防備を固めようとする方もいれば、ダグザ様やアメン様といったリベンジに燃える方もいる。

ヴァーリは『初代ルシファー討伐クエ、キター!!』とテンションを上げ、親父は事の重大さを知って避難場所の確保を始めていた。

親父には、前に連絡を入れた爺ちゃんから許可が出ていたので、姫島本家に匿って貰えと指示を出しておいたが。

あと、ヴァーリのアホは不謹慎にすぎるので、後でシバいておこうと思います。

報告やら何やらと込み入った案件が一段落し、奥の廟を出た俺達を待っていたのは、神殿の端から端まで続くほどの机を埋め尽くす、豪華な料理だった。

「やっと出てきたのか。あんまりにも遅かったから、こっちは先にやらせてもらっ——」

金髪美女を傍らにして酒杯を呷っていたアザゼルのおっちゃん、こちらを見るなり一気に顔色をなくした。

「適当に飲んでおけとは言ったが随分と遠慮が無いことだな、アザゼルよ」

「気にするな。太平楽なカラスとはいえ、今回は我等のゲスト。持て成すのが主としての勤めだ」

白金に朱の意匠が施された神具というべき鎧に身を包んだバアル様は、純白のマントを靡かせながら上座に座った。

続いてその左右にアナト様とアスタルテ様が腰を下ろし、ディアナ嬢……いや、ディアナ様はアスタルテ様の隣に、俺はその対面に座る。

玉藻はさり気なく俺の隣に陣取っていた。

本来なら絶対安静のバアル様とアスタルテ様が元気に着飾っているのは、俺が仙豆を与えたからだ。

ベッドで休めって言ってるのに、この二人は『恩人の為の宴の場を欠席しては、我等の沽券こけんに関わる!!』とか言っただけで諦めようとしなないだもの。

見かねて助け舟を出してしまっても、仕方が無いと思いませんか、奥さん。

「ど……どどど、どうなってやがるっ!? なんでバアル神が復活してんだ!!」

「さてな。私がどのように蘇ったかなど、貴様には関係あるまい。それよりも、我が恩人たる姫島慎を歓迎する宴を始めようではないか」
バアル様の号令にアナト様とアスタルテ様が手を叩くと、楽士達がオリエンタルな音楽を奏で、女官たちが次々に料理や酒を持つてくる。

あゝ、こっちの酌はウチの従業員がやるんでいいっす。

あと、玉藻も女官さんを威嚇すんなって。

『無限』殿は素敵な桃色の首輪を持っているようだね。天照様の分霊が居なかったら女官を愛でてやることもできたらうに。この私の様に」

世話役の女官の衣服の中に手を入れて、撫でくり回しているディア

ナ様。

こんなところでなにやってんだ、あの人は。

「公衆の面前、しかも食事中に破廉恥な事をするとか、ありえねーんですけど。ああ、ご主人様がやりたいというのであれば、玉藻はいつでもOKですよ?」

すみません、それよりも飯をください。

「うう……あい変わらず、つれないお言葉」

ゴメンね。

折れた肋骨とか筋肉の修復にカロリー使ったから、腹が減って仕方ねーの。

「また無茶な鍛錬をなさったのですね。いい加減にご自愛してくださいませんと、お義母様に言っちゃいますよ」

サーセン。

「つーか、ディオドラ。傍そばにいるのって、お前の眷属だよな。見たところ悪魔じゃねえようだが、どうなってるんだ?」

おっちゃんの問いかけを聞いて、ディアナ様はアスタルテ様譲りの可憐な顔に、ニヤリと悪役臭い笑みを浮かべる。

「そりゃあ駒なんて一度も使ってないからねえ。この娘達は私の神聖娼婦となるべく、教会から保護したんだ。悪魔に墮とすなんてこと、するわけが無いじゃないか」

神聖娼婦。

たしか古代の中東や東アジアでは、娼婦は聖なる職業として神官に近い地位にいたとされていた。

シユメール神話やバビロニア神話と隣接していたウリガットの彼等に、そういう文化があったとしてもおかしくは無い。

しかし、教会から保護したというのはどういうことか?

「私はディオドラだった時に、教会で聖女と持て囃はやされていた女性を狙って墮としてきた。何故だと思う?」

「趣味」

「性癖」

「この上ないほどに色ボケだったから」

「OK、どれも間違っではない。けれど、それではマルはあげられないな」

こっちの容赦ない答えにも動じず、ディアナ様は髪を掻き上げる。いや、全部当たってるってのはどうなのか。

「聖女と呼ばれていた彼女達には、自愛に満ちた精神や治癒術の適正の他にある才能があった。それは古代の巫女が神と交信する為に使っていた、チャネリングとも呼ばれる交感能力だ。彼女達の聖書の神への強い信仰心はこれを基もとにしている」

「たしか、古代ギリシャの巫女なんかは、自己暗示や薬でトランス状態に陥る事で神託を受け取っていたらしいな。で、そいつがなんで教会からの保護に繋がる？」

「それはね、彼らがある実験をしていたからさ」

「実験とはどういうものでしょうか？」

ここちらの問いを口にする、ディアナ様は人差し指を立てた左手をこちらに向けて、『チツチツチツ』と左右に揺らしてみせる。

「私に敬語は不要だよ。どうもディオドラの癖が抜けなくてね、眷属や部下以外に敬語で話されるとケツのすわりが悪いんだ」

なるほど、そいつは助かる。

だから、ケツのあたりをポリポリ掻くんじゃありません。

「TSって創作話だと盛り上がりますがけど、現実で見たらダメですね。あれって私の知り合いの紅い皇帝よりヒドいですよ」

メタ発言は禁止。

あと、紅い皇帝って誰やねん。

「さて、実験の話だったね。教会で画策されていたのは彼女達を第二の MARIA とし、神の子を生み出すというものだったんだ」

いきなり話がエライ方向に飛んでいった。

第二の立川の聖人って、そういうのを人工的に造ったら大抵は口ク
な事にならないんだぞ。

「ちよつと待て。もう神はいないんだぞ、そんな真似できるはずが
ねえだろ」

「普通なら、ね。けど、教会上層部と一部の天使が考えたのは正道ではなく裏技だった。奴等は天界の『システム』に残る聖書の神の思念、それに信仰の深いシスターを接触させる事で、処女受胎を再現するつもりだったのさ」

「腑ふに落ちました、その為の感応能力なのですわね」

うわあ、本気でロクでもないわ。

こんな生まれ方した奴がまともなワケねーだろうが。

「その通り。もちろん、この試みは大きな危険を伴う。今よりも力を持った古代の巫女でさえ、神託を得る時は命を削ったんだ。精神も肉体も弱くなった現代の人間が、神託のように神から降ろされるのではなく、自ら神に働きかけようというんだ。その危険度は推して知るべしだね」

「それで、そいつを阻止する為にお前さんは聖女を次々に墮落させたってわけか」

「その通り。第二の神の子なんて、看過かんかできることじゃないからね。ま、好みの女の子が無残に散るのは勿体無いつていう、個人的事情もたっぷりあったけど」

アザゼルのおっちゃん言葉に、ディアナ様は悪びれる様子も無く言い放つ。

「二神教の処女厨つぶりは凄すごいからねえ。人間のフリをして一度でも抱いてしまえば、どんな功績があってもすぐにポイしてくれる。後は事情を説明して私の聖娼になってもらえば、八方丸く収まってハッピーエンドってワケさ」

「ハッピーエンドですか、それ？」

……どうだろうな。

命が助かったし永久就職も出来たから、長い目で見たら勝ち組なのかも。

この辺の判断は何ともいえないが、手段として宗教的な性の価値観の差を持ってきたのは凄すごいな。

やってる事はエゲツないけど、理には適ってる。

「そう言えば、ディアナ様ってどうして女になったんだ？」

「まだまだ固いなあ。もっとフレンドリーにディアナでいいのに」
「いや、その辺は神職としてのけじめだから」

相手のノリの軽さに苦笑いを浮かべながらも、不満そうに頬を膨らませるディアナ様を説得する。

ディオドラの時ならともかく、両親が神格を取り戻した影響か、完全に神氣を纏った今の彼女を呼び捨てにするのは無理。

この辺は職業病だと諦めていただこう。

「この辺は誤解があるけど、元々私は女なんだよ。ただ、私が出来たのは両親が悪魔に堕とされてからでね、母様のお腹の中にいる内に神の呪いの影響で性別が変わってしまったんだ」

「そんなことがあるのか？」

「普通はありえないね。でも、可能性が高い説が一つある」

言いながら人差し指を立てるディアナ様に、思わず俺達は身を乗り出す。

「数あるアスタロト誕生の話には、イシユタルが墮天する際にウチの軍神であるアシュターと融合して、男性体になったという説がある。母であるアスタルテはメソポタミア神話のイシユタルやシユメール神話のイナンナと同じ系譜の神んだけどさ、悪魔になっても女性だったんだよね。だから帳尻合わせとして、その説話が信仰によって呪いになり、娘である私に降りかかったんじゃないかと思うんだ」

帳尻合わせって理由は兎も角、ありえないとも言い切れないか。

実際に異形化しかけていたアスタルテ様は、上半身の片方が男性のモノになっていたし。

「けど、それだとアジュカ——も神になるか女性化してないとおかしいと思うんだが」

……危ねえ。

アジュカを例に挙げたけど、ベルゼブブなんて超蔑称べつしやうじゃねえか。バアル様本人の前でなんて死んでも言えんぞ。

「当たり前だ。私の子はアスタルテとの間に生まれたディアナだけだからな」

「勿論、私もこの娘の他に子を生んだ覚えはありませんわ」

「なるほど。蠅は雑食性で、その消化液は多くのモノを溶かすといわれています。その特性が魔力という形で遺伝したなら、ありえないとは言いい切れませんね」

え？

マジで？

冷静になろうとしているが、与えられたショックが大きすぎてなかなか頭が回転しない。

「蠅、ですか？」

呆然と呟いた言葉に、バル様は鷹揚おうように頷いてみせる。

「そういえば、そなたはグレモリーと縁が深かったな。奴等は自慢にしている力の正体を知って、さすがに度肝を抜かれたか？」

「はあ……」

嬉しそうに呵呵かかと笑うバル様に、俺は曖昧な答えを返すことしかできない。

「ちよつと待て。あんた、ゼクラム・バルだったんだよな!? 今まで冥界でなにやらかしてきたのか、順を追って説明してくれ!!」

混乱で声を荒げるアザゼルのおっちゃんに、バル様は上機嫌な笑みを隠さずに口を開く。

「本来なら貴様に語る舌など持たんのだが、今の私は機嫌がいい。恩人である『無限』殿も知りたがっているようなので、特別に聞かせてやろう」

アナト様より注がれた神酒で舌を湿らせたバル様は、ゆっくりと言葉を紡ぎ始める。

「聖書の神が台頭してから暫しばし後、アメン・ラーを初めとする魔に墮おとされた者達は、聖書の神の呪いと冥界の瘴気に蝕まれて次々に元の人格を失っていった。しかし、私は元来の己を失うことは無く、アスタルテも私と縁の深かった故か同様だった。長い旅路の末に再会した我等は、聖書の神やそれを取り巻く有象無象への復讐心を糧に、悪魔社会に身を潜める事を決意した」

バル様の語りを耳にしながら、俺は思わず息を呑んだ。

エジプトの太陽神であるアメン様ですらその人格を失うほどの呪

詛の中で、その意思を保ち続けるのはどれほどの難行だったのか。

「悪魔社会黎明期れいめいにおいて、私達は群れなす悪魔の中ですぐに頭角を現した。その大半を失ったとはいえ、主神であった頃の力と知恵を持つ私と、その妻たるアスタルテだ。呪いによって知恵を失い、獣の様になったほかの悪魔共を支配するのは容易かった。そうやって敵対者を屈服させて領土を拡大していくうちに、気づけば私は魔王の地位を手に入れていた。……あの忌まわしい名と共にな」

「待ってくれ、あんたが初代ベルゼブブだったのか!? 大戦の時に見たのと全然顔が違うじゃねーか!!」

「アザゼル、二度と私の前でその名を口にするな。——次は死んでもらう事になるぞ」

怒気と共に放たれた強烈な威圧感に、反論の声を飲み込むアザゼルのおっちゃん。

やはり、あの名は禁句だったらしい。

「我が栄光の全てを汚し、貶めたベルゼブブの忌み名。だが、私はその蔑称をあえて受け入れた。如何なる時でも奴への憎悪を絶やさぬ為に。そして、同時に使い魔に命じて一つの家を建てた。それが——」

「バアル家ですね」

「そうだ。土着の神を駆逐しながら次々に強大になっていく聖書の神と一神教。かの家は、その姿に危機感を抱いた私のセーフハウスの役割を担っていた」

「セーフハウス、ですか？」

「聖書の勢力を完膚なきまで殲滅し、神の座を取り戻す事が私の目的だったからな。それまではどうあっても死ぬわけにはいかなかった」

なるほど、魔王ベルゼブブとして失脚した際や避けられない危険に見舞われた時に、使い魔と入れ替わる事でその危険を回避する為の保険か。

そんな物まで用意するなんて、凄まじい執念だ。

恐らくだが、さっきアザゼルおっちゃんが言っていた容姿が違うというのも、この辺の事を想定して幻術で作り変えていたのだろう。

「そうして魔王としての責務に追われる中、ついに三勢力による戦争

の幕が切つて落とされた。世界中を舞台とし、他の神々の土地を侵しながらの内戦に関わるのは恥辱ちじよくの極みだった。かつて私も土地を支配し、人々を導いていたからこそ分かるのだ。自身が行つてることが、どれだけ土地神や民に苦難を与えるかを」

当時の事を思い返してか、苦虫をダースで噛み潰したような表情を浮かべるバアル様。

「そんな遣やる瀬せ無い思いに耐えながら戦う事、数ヶ月。我慢の甲斐あって、ついに聖書の神を討つチャンスが巡ってきた」

「アララト山での最終決戦か」

「さすがに覚えておったか」

「当たり前だ。あの時、誰も勝者にならなかったからこそ、今の三勢力がある」

「誰も勝者に、なあ。……まあよい。三勢力の内戦の最後を飾る戦い、その火蓋が落とされる数日前に、私はアナトを通じて多神勢力にある事を依頼していた」

「それは？」

「複数の『神殺し』の神具を使った超長距離からの狙撃による——聖書の神の暗殺だ」

その一言はあまりにも衝撃だった。

聖書の神は先代四魔王と相打ちになって消滅した。

この事実ですら裏の中でもトップシークレットなのに、さらにその奥に真実があったのだ。

「暗殺だ?! ふざけんな! 奴は……奴はっ! あんた達先代魔王と相打ちになったはずだろ!」

激昂して立ち上がったアザゼルのおっちゃんを、三柱の神は冷やかに見つめている。

「その現場を貴様等を見たのか? あの時、墮天使は私の指示で配置した精鋭部隊によって遠方に釘付けになっていたはずだ。そして、その場所からは神と魔王の戦場は完全に死角になっていた。そうだろう?」

「デメエ……ッ! そこまで計算に入れて……!!」

「当然だ。あの計画は私や多神勢力が練りに練ったもの、寸毫すんごうの不安要素も見逃す事などありえん」

バアル様を睨み付けるおっちゃんの胸に、去来しているモノは何なのか。

袂を分かったとはいえ、創造主たる者の死因に対する遣る瀬無さか、それとも三勢力から見れば裏切り者である、バアル様への憎悪か。しかし、おっちゃんは手に集中させた魔力を武器にはせず、ドカリと乱暴に腰を下ろした。

その様子を見たアナト様は警戒を解き、バアル様も酒盃で喉を潤す。

「戦場にしゃしゃり出て来た愚神と、それに釣られた悪魔共の奮闘によつて計画は成功。神々の協力の下に放たれた神殺しの一矢によつて、鎬を削つていた聖書の神と魔王達はこの世から姿を消した」

「アザゼル総督は勝者はいないと言つていたけど、本当はいたんだねえ。多神勢力という勝者が」

「そういう事だ。発射のタイミングを事前に知らされていたお陰で、私は他の魔王達を盾にして生き残る事ができた。その後、すぐに自身の死を偽装してバアル家の使い魔と入れ替わった。ゼクラム・バアルとしてな」

「どうしてそんな事を？」

「後援していた貴族共からしてみれば、三勢力共に痛み分けでは負け戦なのだよ。莫大な戦費に膨大な人員、その上四魔王まで動員して、結果はあの体たらく。私一人が生きて帰ったなら、全ての戦争責任を被せられていただろうな」

「当時の貴族の主流だった旧悪魔は、先代魔王に忠誠を誓っていたフシがありました。そこまでするとは思えないのですが」

「悪魔というのは強欲かつ意地汚い。奴等が私達に忠誠を誓っていたのは、貴族制の発布など悪魔社会を発展させる中で多くの利益を提供してきたからだ。不利益にしかならないと判断すれば、連中はたとえ魔王でも容赦なく扱き下ろすさ。サーゼクス達のようにな」

なるほど、実例を出されるとなるとも説得力がある。

「あの、先ほどの暗殺って私の本体も一枚噛んでます?」

おずおずと手を上げる玉藻に、バアル様は肯定の意を示す。

「うむ。国宝である天羽々矢あめのほはやを貸してくれたぞ」

「神殺しの矢とか、殺る気満々じゃないですかー!!」

わーっと頭を押さえる玉藻。

天羽々矢。

葦原中国平定において、使者として派遣されるも女と野望に取り付かれて反旗を翻した男神、天若日子あめのわかひこを殺めた矢か。

確かにそんな日く付きの物を持ち出した辺り、当時の天照様の本気さが伺える。

しかし、玉藻は天照様の黒い面を見るのを嫌う節があるな。

「気にすんな、玉藻。数百年前の事だから時効だ、時効。それに、当時は出し惜しみなんて出来る状況じゃなかったんだろうさ」

「ご主人様、私は暗殺とか無理ですからね? バリバリ呪うくらいが精々ですから……」

暗殺はダメでも呪詛はいいんだ……。

しな垂れかかってくる玉藻の頭をポンポンと叩いてやりながら、俺は何とも言えない気持ちになった。

「話を戻すぞ。ゼクラム・バアルになったあんたは、大王派を作って悪魔社会を裏から牛耳る一大権力を手に入れた。そうだよな」

「それだけではない。サーゼクスを中心とした新政府の樹立を支援する傍ら、旧魔王派を焚き付けて内戦を引き起こしたのも私だ」

おいおい……。

「デメエ、どこまで——ッ!?!」

再び激昂しかかるおっちゃんの肩を掴んで押さえるこちらを尻目に、バアル様の語りは続く。

「これにより戦後も比較的勢力を保っていた悪魔も凋落。聖書の勢力はその全てが大きく衰退した。その後しばらくは目立った動きは無く、権勢を取り戻そうとしていた三勢力は各々の方法で多神勢力の怒りを買っていた。そんな中、私は僻地に流された旧魔王の子孫や主戦派と呼ばれる者たちに接触を図った」

「まさか……」

「そのまさかだ。私の支援を受けた奴等は独自のルートで天使や墮天使側の同士を集め、瞬く間にテロ組織『禍の団』を作り上げた。まあ、奴等が『無限の龍神』をトップに担ぎ上げたのは予想外だったがな」
もうここまで来たら、俺もおっちゃんも言葉が無かった。

ここ数百年間の悪魔や三勢力の大事件、その殆どの黒幕が目の前の男なのだから。

「奴等は期待通りの働きをしてくれた。聖剣奪取から始まる一連の事件によって多神勢力の敵愾心を煽り、世界各国で三勢力が協力してテロを起こすことによって、黙示録を連想した信者から信仰を奪う。計画通りに行けば、信仰を失った事により天界の『システム』は崩壊。『システム』が辛うじて繋いでいた信仰の加護を失った三種族は、多神勢力に滅ぼされて終わるはずだったのだが、な」

バアル様が語りを終わると、神殿の中を静寂が支配した。
取り分けてくれた女官さんには悪いが、もう目の前の飯に手をつける気にもならない。

要するに、俺が今まで必死こいてやってきた三勢力存続の努力って殆ど無駄だったってことだよなあ。

元魔王で悪魔社会最大派閥のトップが獅子身中の虫だったとか、もうどうしようもねえよ。

つーかこの虫、ライオンを頭から丸かぶり出来るくらいヤバイし。

「そういえば、『無限』殿」

「はい？」

「先ほどの二名の話だがな、そなたが考えているほど、簡単な話ではないかもしれんぞ」

「……どういうことでしょうか？」

「まず、そなたは奴等が特殊空間から外界に交信を試み、その結果として、受け皿であるそなたの複製を作らせたといったな」

「ええ、その通りです」

「ならば、交信相手等の外界の知識はどうやって手に入れたのだ？」

「それは、元々ある己の知識からでは？」

「ふむ。重ねて尋ねるが、奴等が居た世界はこの世界と変わらないのかね？」

バアル様の言葉で、俺の中でも違和感が首をもたげ始める。たしかに、言うとおりだ。

あの時は逃げられたという事ばかりが頭にあつて思いつかなかつたが、これはおかしい。

例えばルシファーだが、奴が何かを伝えようとするなら右腕であるルキフグスだ。

しかし、この世界ではルキフグス家はグレイファイア姉さんを除いて全滅している。

ソロモン72柱の悪魔だって、かなりの数が断絶や取り潰しの憂き目にあっている。

さらに言えば、メガテン世界で悪魔扱いされていた多神教の神々も、こちらの世界では各々の神話勢力で神として存在している。

あちら側のルシファーの知識では、『無限の闘争』の中にいながら、こうも暗躍できるとは思えない。

比較的現代に近い世界を生きてきたルシファーがこうなのだ、聖書の時代そのまんまである『バイブルファイト』のDIOSに至っては、言わずもがなだ。

「気づいたようだな。次にくる可能性は、奴等が利用者から知識を得ていたものだが、恐らくこれも無いだろう。君の話では複数いた利用者の中で、最も悪魔貴族の社会に近いのがサイラオーグだという。悪魔や貴族に嫌悪感しか持たん奴では、取れる知識などタカが知れている。そして天界については誰一人知らなかったのだろうか？」

「ええ。私も聖剣事件のおりに初めて、ミカエル天使長に会ったくらいですから」

「これは私の単純な疑問から端を発したことだが、もしかしたら奴等を見定める上で重要な要素になるかもしれない」

「わかりました。もう一度、データを洗いなおします」

無意識のうちに立ち上がっていたので再度腰を下ろすと、アザゼルのおっちゃんの声が掛けてきた。

「慎、今のは何の話だ？」

「聖書の神と初代ルシファーが蘇っちまった」

「……マジか？」

「マジ。朝の推測通り、俺のクローンを肉体にしているみたいだ」

「くっそおっ!? どうなってるんだ！ この状況で奴等が復活とかありえねえだろ!!」

両手を机に叩きつけながら叫ぶアザゼルのおっちゃん。

料理の方は俺と玉藻が避難させて置いたから無事だ。

「正直言つて、これで天界と悪魔を助けることは出来なくなった。この情報は多神勢力に流してるから、戦争も不可避だ」

「それでどうする、アザゼルよ。貴様も三勢力と共に、我等の前に立ちはだかるか？」

「……そんな事出来るかよ、俺は墮天使を背負う責任があるんだ。俺達墮天使は、日本に亡命して高天原の下につく」

「ほう、少しは頭が柔軟になったではないか。しかし、神器の危険性から無辜の民を手に掛けてきたお前達を、天照殿は受け入れるかな？」

俯いたまま搾り出すような声でのおっちゃんの宣言に、バアル様は面白そうに笑う。

右も左も三勢力には塩対応だから、本当にキツツイ。

「バアル様は、これからどう動くつもりですか？」

「大王派を召集し、彼らを在るべき姿へと戻す」

「在るべき姿、ですか」

「そうだ。大王派の者達の多くが、聖書の神に貶められた精霊や土着神だからな。本来の姿を取り戻せば、力強い味方となろう」

「……その時は俺の出番なんですな」

「そういうことだ。報酬は弾むので、よろしく頼むぞ」

「はい！ お任せください!!」

「……ヤバイ。」

俺、戦争の前に枯れるかもしれん。

そして玉藻よ、何故お前が返事をする。

「宴もたけなわ、というワケじゃないけど、父様達の体調の事もあるか

ら、そろそろお開きにすべきじゃないかな?」

「そうだな」

ディアナ様の言葉に同意を示した俺は、自分の席から腰を上げる。自業自得とはいえ、身体がガタガタなのだ。

色々在りすぎたし、今日はもう寝たい。

「もう少し、明るい席にしたかったが仕方あるまい」

「いえ、十分料理もお酒も堪能させていただきました」

「本当なら泊まっていてもいい、ディアナに夜伽でもと思っていたのだがな」

「……すみません。元AV男優とか本気で勘弁してください」

「私も竿が付いた生き物はちよつと……」

「……………ハア」

俺達のおんまりな答えに、思わず天を仰ぐバアル様。

いや、ただだけガワが良くても、中身ディオドラとかありえないっすから。

さて、これ以上妙な事を言われる前に、手早く退散しよう。

「それではバアル様、私達はこれで失礼させていただきます」

「姫島慎よ、戦いの時は近い。くれぐれもその身を錆付かせないように」

「はい」

バアル様達と神官の方々に見送られて、俺達は瞬間移動で神殿を後にした。

アザゼルのおっちゃんをグリゴリに送ってから家に帰ってくると、時間は昼を過ぎていて太陽は高々とあがって青空を照らしていた。

バタバタと動いていた親父には悪いが、心身ともに限界に来ていたので床に就かせてもらおう事にした。

明かりを消してベッドに身を投げ出せば、様々な事が脳裏を掠めていく。

正直、バアル様については思うところがないわけじゃない。

しかし、あの方が受けてきた仕打ちを思えば、仕方が無いとも考えるのだ。

あの方の話聞いて、グレモリー家のみんなの為に悪魔社会をどう

こうする、なんて考えも吹っ飛んだしな。

ぶっちゃけ、バアル様がいる限りは悪魔社会に未来はないわ。

腕っ節ならともかく、政治力や読み合いであの方に勝つとか無理ゲーだし。

当面は敵対することもないだろうし、できれば良好な関係を作って行きたいと思う。

さて、展開の動向は分からないが、悪魔との戦争は待ったなしだ。

出来うる限り備えを万全にして、家族や知り合いみんなが元気で乗り切れるようにしないと。

その為にも、もう一度徹底的に鍛えなおしてみるか。

閑話 『平行世界での話』

どうもこんにちわ。

夏休みも終盤を迎えたのに、相変わらず休みに恵まれない、姫島慎です。

我々姫島兄弟5名+イツセー先輩は、夜の駒王学園にいます。

ああ、勘違いしないで頂きたい。

別に不良行為をしようというワケでも、学校のイベントでもない。数分前まで、俺達は夕日に赤く染まった帰り道を歩いていたはずなのだ。

それが気づけば夜の学校、しかも近くで誰かがドンパチをしている場所に放り出されたのである。

「えくと、どうするんだ？」

なんとも困り果てた顔で、こちらに水を向けてくるイツセー先輩。

数日前に漸く人間に戻ったのに、こんな事に巻き込まれるとは、この人も大概運が無い。

「ここってウチの学校だよ。なんでいきなり夜になってるんだろ？ 時計は4時過ぎになってるし……。朱姉、ここが擬似的に作られた空間ってことは無い？」

「いいえ。調べてみたけど、紛れも無くここは現実の駒王学園よ」

こちらが口を開くよりも早く、周辺の様子を確認している朱乃姉達。

冬木で一度こういうのを経験しているだけあって、その行動に無駄は無い。

俺？ 俺は背中では暴れる二匹のミニ怪獣の世話で手一杯だ。

つーか、痛い痛いっ!? 璃凰、お兄ちゃんの髪の毛を引っ張るんじゃない。

とはいえ、このまま突っ立ってたとしても事態は進展しない。

取り合えずは、何らかの情報が必要だ。

ここにいる四名で何だかんだと意見を出し合った結果、ドンパチの現場に行く事が決定した。

最初は俺だけ先行するという案が出たのだが、何故か背中に張り付いて離れようとしないう双子の為に断念。

イツセー先輩を連れて行くのは気が引けるが、ここに置いて何があつたほうが大変だ。

それに氣を探つたところ、向こうに居るのは墮天使幹部クラスが一に上級悪魔が一、後は中、下級悪魔程度だ。

今でも並の上級悪魔より強いイツセー先輩なら、そうそう危険はないだろう。

……しかし悪魔側の氣つて、物凄い見知った感じがするんだよなあ。

という訳で、やってきました鉄火場です。

一歳の乳児や裏から足を洗った人間を連れてくるのは、我ながら色々な面でどうかとは思ふ。

しかし、冬木と同じく妙な結界が張られてる所為で、原因を調べないと『無限の闘争』が開けないんだから仕方が無い。

さて、目の前ではどつかで見たような墮天使幹部を相手に、見覚えがありすぎる悪魔たちが必死に抗戦を繰り広げている。

どう見覚えがあるかと言うと、内2名が隣に並んであんぐりと口を開けている姉と先輩と同じ姿なのだ。

さらに言えば暴食猫娘や魔剣マイスター、幼女返りが得意技な紅い姉貴分に影の薄い葉箱シスター。

あと、名前はまったく思い出せんが青髪の聖剣使いと、闘っているのは全員顔見知りだったりする。

「おつ、おい！ オレがいるぞ！ どうなつてんだ、これ!？」

「イツセー先輩、いつのまに自己再生、自己増殖、自己進化の三大理論を体現したんだ?」

「オレはそんな化けモンじゃねーよっ?! つーか、そのうちの二つはお前の能力じゃんか!!」

自己再生と自己進化ですね、わかります。

「朱姉の分身の術、完成度高けーなあ。私もあそこまでは無理だつてばよ」

「美朱。私に忍術の適正が無いの、知ってるでしょ?」

さて、兄弟揃つてのボケはこの辺にして、現実を見ようじゃないか。

「まあ、あの先輩も朱乃姉も本人じゃないのは確かだわな。だって、悪魔だし」

「朱姉は雷光使つてないし、イツセー先輩も『赤龍帝の籠手』ブーステッド・ギアガンガン振り回してるもんね」

「あ、そっか」

歯を食いしばりながら、籠手から緑色の魔力弾を放つ先輩2号を見て、こつちにいる1号も落ち着きを取り戻す。

「たしかに二人の言うとおりですわね。でも、私つてあんなに雷撃が下手だったかしら?」

「それに、アーシア姉も悪魔になつてるじゃん。相手は死んだはずのコカビーだし。どうなつてんの、これ?」

眼前で展開する不可解な現象に首を捻るウチの姉妹。

ちなみに、こちらの姿は俺が張つた摩利支天まりしてんおんぎょういん隠行印により、向こうには見えていなかったりする。

確かに、朱乃姉達が言うように状況が分からん。

コカビーは蘇つたか、再生怪人にされたと言えば説明は付かなくもないが、ウチの姉やイツセー先輩が二人居るのはそうはいかない。

一瞬、俺と同じくクローンでも造られたかと思つたが、朱乃姉はともかくとしてイツセー先輩は需要がないだろう。

仮にそうだとしても、悪魔になつてる事やリアス眷属と共に戦つているのは不自然だ。

アーシア先輩も悪魔になつてる理由もわからんし。

出ない答えに首を捻っていると、美朱が何かを思いついたかのように手を打った。

「ねえ、慎兄。これつてもしかして、平行世界つて奴じゃない?」

「平行世界つて、あの可能性で分裂したIFの世界の事か? 幾らなんでもそりゃないだろう」

「でもさ、ここに転移した事が冬木の時と同じく世界を跨またいだとしたら、あり得るんじゃないかなあ。そうだったとしたら、もう一人の

イツセー先輩や朱姉の事も、悪魔になったアーシア先輩も説明がつくし」

ふむ、確かに興味深い。

言われてみれば一理あるかもしれないん。

「たしかに、そうかもしれないわね」

「すみません。平行世界ってなんスか？」

「漫画とかに良く出るI Fの世界の事だよ。例えばイツセー先輩が悪魔を続けている世界とか、逆に元から悪魔にならない世界とか」

「へえ、そんなのがあるのか」

「我ながら無茶苦茶な話だとは思うけどね。でも、可能性としたらこれが一番しつくり来るんじゃない？ 私達の世界ならリーア姉達とコカビーが闘うなんてありえないもん」

「ごもつとも。」

さて、考察が一段落付いたところで、目の前の戦いに目を戻そう。

現在の状況は悪魔側が不利。

相手は腐って骨になつても、親父の同僚である墮天使大幹部だ。

高位貴族グレモリー家の令嬢とはいえ、生まれて20年も経っていない若造には荷が重いようだ。

リーア姉達の奥の手だと思われる、特大の滅びの魔力弾も多少手傷を負わせる程度でしかなかったし、大勢は決したと見ていいだろう。

「なあ、みんな。接触するならどっちがやりやすいと思う？」

「そりゃあ、テロリストより部長だろ」

「リーアスでしょうね」

「さすがにコカビーは無いんじゃない？」

満場一致である。

コカビーの人望の無さに全俺が泣いた。

では、リーアス姉2号達に助け舟を出そうじゃないか。

という訳で、いつの間にか夢の世界に旅立った双子を朱乃姉に任せ、俺は、なんか調子に乗ってるコカビエルに軽く衝撃波を放つてみた。

「死んでいった奴等のためにも、俺たち『墮天使』が最きよ——べ

イツツ!？」

『これを切欠にして彼女達が反撃の糸口でも掴めれば』なんて思っていたのだが、なんと食らったコカビーは爆裂四散してしまったのだ。

「あらま……」

「やりすぎよ、慎」

おお、ミステイク。

突然の事に啞然とするリアス姉2号達と、物凄く冷たい視線を向ける同行者たち。

こうなったら、名台詞を使って凌ぐほかあるまい。

「汚ねえ花火だ」

「ベジータ乙」

背後からの圧力が増したような気がするが、きっと気のせいだろう。

まあ、あれだ。

牽制程度で死ぬコカビーが悪い、ということの一つ。

「どういう事なの？ 朱乃、それにイツセーまで」

さっきの攻撃で隠行印が効果を失った為に、こちらを見つけることが出来た2号達は、一様に目を丸くしている。

『ファーストコンタクトはどういう風にしたものか』と思索していると、上空にこれまた見知った気配が現れた。

「アザゼルに言われてコカビエルの回収に来たんだが、随分と面白い事になってるようじゃないか」

上空で停止しながら、尊大に腕を組む白い鎧。

こっちの世界のヴァーリなんだろうが、感じる気がえらく弱い。

むむ……。この感じからすると、向こうの実力は2、3年前のヴァーリとトントンくらいなんだが。

「あれは白龍皇!？」

初見なのか、ヴァーリの姿に慄く現地の方々。

一方、ウチの身内は奴の姿を見てしきりに首を傾げていたりする。「なあ、あれって白龍皇だよな」

「現地産の、だろうけどな」

「けど、滅茶苦茶弱くない？　ウチのヴァーリ君と、すんごい差があるように感じるんだけど」

「感じる気はウチのが中1だった時と変わらんしな。今のあいつと比べるのは酷だろ」

いや、本当にあいつが居なくて良かった。

もしウチのヴァーリが現地産の弱さを知ったら、『あんな弱者は、断じて俺ではないっ!!』とか言っつて殺しかねんし。

「どうしてこんなに差が付いたのかしら？」

「多分、この世界には慎兄がいらないんじゃないかな？」

「ああ、『ライバルがいるから強くなれる!!』的なヤツな」

なんだか知らんが、また妙な冤罪が増えた様な気がする。

つか、本当にこの世界つて俺がいらないのだろうか？

「ところで、コカビエルはどこにいるのかな？」

ヴァーリの問いかけで、現地の方々の視線が一斉にこちらに向く。

「ごめん。軽く殴ったら死んじゃった」

誤魔化しようがないので、ありのままに説明してみた。

「慎……。それは無いんじゃないの？」

「なんか、借り物のカマキリを殺した、みたいな言い訳だな」

はい、ウチの面子は呆れた目で見ない。

これ以上、的確な説明はないでしょうが。

『コカビエルを葬った一撃が軽くですって!!』

『彼はいつたい何者なんでしょうか？』

等々と騒ぐオカ研現地組はさて置いて、問題は現地産ヴァーリである。
る。

言った後で失態に気づいたのだが、ウチのヴァーリにはこの手の事態に遭遇した場合、嬉々として襲い掛かってくる習性がある。

「あのコカビエルを容易く屠っただと！　貴様は見た目以上の強者のようだな!!　ならば、その力を俺に見せてみる!!」

やっぱりと言うかなんと言うか、一人でテンションをあげてこつちに突っ込んでくる現地産ヴァーリ。

オカ研現地組の皆さん、驚愕の声や悲鳴を上げているところ申し訳ないが、ラディカル・グッドスピードに慣れてきた目だと止まって見えるんですが。

「ドアアアアアアアツ（コング桑田氏ヴォイス）!!」

いつもの癖で、上空から殴りかかってきたヴァーリを上段当身で地面に叩きつける。

「うがあっ!?!」

校庭の土と砕けた鎧の破片を撒き散らして、苦鳴を上げるヴァーリ。

その間にも、俺は奴の首と足に手を掛けている。

「DIE——」

そして地面から奴を引っこ抜くと、勢いのままに頭上へと持ち上げ

「Foreverツ!!」

雷鳴豪破投げで追い討ちを……って、ハッ!?

我を取り戻してみれば、目の前にはブスブスと煙を上げる、犬神家状態の現地産ヴァーリの姿が。

……ツ!?! やつてもうたあああああツ!!

姿形はウチのと一緒だったから、いつもの様に追い討ちまで入れてしまった!

「慎兄!・ なにやってんの!?!」

「お兄ちゃんは隙だらけの相手を見ると、つい殺^やっちゃうんだ☆」

「どんなドナルドツ!?!」

美朱の突っ込みを背に慌てて引っこ抜いて確認したものの、患者は完全に心停止状態。

頭の中で王^{ワン・ターレン}大人が『死亡確認』と言ったが、さすがにそれはヤバすぎる!!

こびり付いていた胴鎧を叩き割って、行うのは『^{トワイライト・ヒーリング}聖母の微笑』付きでの胸骨圧迫だ!

「そこの薬箱先輩! 人命救助手伝って!!」

「薬箱って、私の事ですか!?!」

『キミに決めたっ！』とばかりの指名に、現地産アーシア先輩は何故か悲鳴を上げる。

薬箱つて物凄く本質を表していると思うのだが。

突然の事に戸惑う素振りを見せていた彼女だったが、人命救助の一言が効いたのか、むこうの制止を振り切ってこちらに来てくれた。

さすがは慈愛の人である。

あんたなら二代目ナイチンゲールも夢じゃないさ！

「ランツ・ランツ・ルーツ！ ランツ・ランツ・ルーツ!!」

応援に来てくれたアーシア先輩に外傷の治療を頼んで、胸骨圧迫を再開する。

「人の命が懸かっているんですよ！ 真面目にやってください!!」

「すみませんッ！ こっちは大真面目っすッ!!」

アーシア先輩のツツコミに叫び返しながらも、心臓マッサージは止めない。

なに、人工呼吸だと？

あれは感染の危険があるから、専用の器具が無いと素人はやっちゃダメなの。

つうか、こんな簡単に死んでんなよ！ ちょっとギースが乗り移っただけじゃねーか!!

ところで、頭に過ぎった『鉄拳7』参戦記念ってどういう事!?

個人的にめっちゃ気になるんだけど!!

次々と取り留めのない事が頭を過ぎりながらも救命活動する事数分。

ダブル『聖母の微笑』の効果もあってか、なんとか現地産ヴァーリは息を吹き返した。

意識はまだ戻っていないけど、自律呼吸ができるのならばグリゴリの医療用ポッドに任せても大丈夫だろう。

「という訳で、ちよつとグリゴリに行ってくる」

「いやいや、ちよつと待って」

なにかな、妹よ。

容態は落ち着いたとはいえ、できるだけ早くこの馬鹿を医療設備に

放り込みたいのだが。

「この状況で放置とかないから、マジで」

大丈夫、大丈夫。

相手は世界が違ってモリアス姉だ。

警戒はされても、命の恩人に無体な事はしないだろう。

万が一戦闘になっても、お前一人で全員倒せるし。」

「けど、アーちゃんとリーくんいるじゃん」

おっと、そういえば双子がいたな。

それにイツセー先輩も荒事に巻き込んだら拙いし。

……………仕方ない。

ここは一つ、気付け薬でもくれてやるか。

携帯を操作し、『無限の闘争』の倉庫から『やくそう』をありったけ取り出す。

「それってドラクエの『やくそう』だよ。なんに使うの?」

「俺の錬金術で、極上の気付け薬を調合してやるのさ」

「慎、あなた錬金術なんてできたかしら?」

「大丈夫だ、問題ない」

さて、クツキングのお時間だ。

用意するものは『やくそう』五十個のみ。

まずは患者の気道を確保し、口を大きく開ける。

次に、口の上で五十個の薬草の束を両手で掴む。

そして、全身全霊の力を込めて、やくそうを握る!!

「錬ンンンンンン金っ!!」

「それ錬金違う!!」

「ぐぼぼぼぼぼぼぼぼぼぼ……………」

「酷いッ！ ヴァーリ君が『やくそう』の汁で顔中緑色に!」

朱乃姉の悲鳴が表す通り、強烈な青臭さと共にドロツとした深緑の粘液に包まれるヴァーリの顔面。

素人目から見てもかなりヤバいが、これも薬効の為だ。

是非とも我慢していただきたい。

そんなこんなで一応の施術も終わり、俺は朱乃姉が魔術で出した水

で手を清めていた。

やくそうはHPを約30回復させたはずだから、これでヴァーリの体力は1500前後回復したはずだ。

こうすれば、俺は倉庫を圧迫していた在庫を放出できるし、奴は体調を持ち直す。

まさにWIN—WINの関係だな。

「ぐぼはああああああああああっ!?!」

まるでエクソシストの悪魔憑きの如く、緑色の汁を吐き出しながら起き上がるヴァーリ。

顔面全体が深緑だから、キモい事この上ない。

「起きたあっ! マジで今のインチキ葉が効いたの!? うそおっ!?!」

あんまりな絵面に絶叫する美朱と、言葉も出ない朱乃姉。

言うに事欠いてインチキ葉とは、何たる無礼か。

「起きたか、ヴァーリ。だったらとっとと帰れ。それでコカビエルは殺されていなかった、とアザゼルのおっちゃんに伝えるんだ。あと、帰り道は事故らない様に気をつけろよ」

状況が掴めずに呆然としているヴァーリの目を覗き込んだ俺は、少し強めの氣を放ちながらしっかりとした口調で指示を伝える。

「……………わかった」

すると、虚ろで異様な返事を返したヴァーリは、フラフラとしながらも飛び去っていく。

少々危なっかしいが、どうせこの町に隠れ住んでるおっちゃんの家までだ。

飛んで行ったなら、あんな成りでも数分も掛かるまい。

ちなみに、今のが氣を使った暗示。

氣当たりと同じ要領で相手を威圧し、受けた相手に生まれた心の空白地帯に暗示を刷り込むというものだ。

個人的にはあまり好ましい手段ではないが、今回は例外ということだ。

「という訳で、I'm Loving It!!」

「慎兄、まだドナルド抜け切ってないよ! ていうか、こわっ!?! なに

その凶悪な顔のドナルド！ 背中越しに浮かんでるの『ステイプ
ン・キング』の『IT』にしか見えないんだけど!？」

マジか。

なんか変なモノに取り憑かれたのかもしれない。

とりあえず、お祓いしとこつと。

◇

「……信じられない話だわ」

湯気が立つカップを前に、私の親友兼主あるじであるリアス・グレモリーはそう呟いた。

目の前に腰掛けた珍客の説明に、彼女の眉間には深い皺が刻まれている。

たしかに、彼等の弁は常軌を逸している。

平行世界から迷い込んできた同一人物だ、なんて与太話もいいところだ。

しかし私の眼前に座る彼女は、まるで鏡を見るかのように私そっくり。

イツセー君の方はあちらの方が鍛えられているので見分けがつくが、こちらはよほど入念に確認しなければ無理だろう。

何者かによるクローンという可能性もあるが、下級悪魔にすぎない私達の複製を造るなど、よほどの物好きでもなければするとは思えない。

ならば、やはり彼等の言うとおりののか？

だとすれば、何が目的でこの地に現れ、そしてコカビエルを討ったのだろうか？

「気持ち分かるわ。でも、こんな話ぐらいしか説明が付かないでしょう?」

苦笑いを浮かべる向こう側の私に、リアスは諦めたかのようにため息を付く。

「いいわ、貴女達の話信じましょう。それで、ここに来た目的はなん

なのかしら?」

「別に無いぞ。ただ単に迷い込んだだけだし」

「そうそう。家に帰ってたのに、こんなところに放り出されるんだもん。ホントまいっちゃうよ」

本人曰く、むこうの私の弟妹であるという少年達の答えに、私たちはポカンと口を開けてしまった。

「迷っただけ? こっちに必要なものを取りに来たとか、そういった事じゃなく?」

「ああ」

「そんな目的だったら、人間のイツセー先輩やこの子達を連れてくるわけ無いじゃん」

言われて、向こう側の一誠君と彼女たちの膝の上で寝息を立てている赤ん坊に目が行った。

たしかに向こう側の一誠君は人間のようだし、何か目的があるのなら赤子なんて連れてきたりはしないか。

でも、この子達から感じる気配は……。

「えっと、その子達はいつたい……?」

「私の可愛い弟と妹、璃凰クンと朱音ちゃんです!」

リアスの質問に上機嫌で答えながら、彼女、美朱ちゃんは膝の上に寝ている妹の手を摘つまんで小さく振った。

さつき、あの子達から感じた墮天使と人間の気配は気のせいではなかったらしい。

美朱ちゃんの妹という事は、むこうの私の妹ということ。

やはり、むこうでは母様は生きているのだろうか?
だとしたら、こちらと何が違ったのだろうか?

「じゃあ、なんでゴカビエルを倒したんだよ?」

こっちのイツセー君が問いを投げると、慎と名乗った少年はバツが悪そうな顔をした。

「いや、殺す気はなかったんだよ? そっちがピンチなのを見てさ、見知った顔が死ぬのは気分が悪いから手を貸したんだ。そしたら極力手加減したのに、汚ねえ花火になっちゃったんだよ」

『あれは計算外だったわ』などと言いながら後頭部を搔く慎君に、むこうの一誠君と私からツツコミが飛ぶ。

「いやいや。あれって墮天使の大幹部なんだろう？ それを一発でミンチとか、お前いったい何したのよ？」

「貴方が腕を組んだと思ったら、いきなりコカビエルが吹き飛んだものね。見ていた私達もなにがなんだか分からなかったわ」

「練習中の無音拳を、ちよつとな」

「無音拳？」

「グレートホーンの応用でな。腕を組んだ状態を鞘に収めた刀に見立てて、居合い抜きの要領で初速からMAXスピードで放つ打撃法なんだ」

「グレートホーンって、光速拳じゃん！ 悪魔超人・完璧超人とききて、今度は黄金聖闘士になるつもりか!!」

「今の俺じゃあ、まだまだ亜光速が限界だつーの。コカビーに放つたのだって、めっちゃ手加減したから超音速だし」

「どう考えても手加減じゃねーよ、それツ!!」

……これはどう反応したらいいのだろうか。

言ってる事のスケールが大きすぎて、ワケが分からない。

普通の男の子がこう言うのなら、大した妄想だと一笑に付すところだ。

しかし、コカビエルを倒して白龍皇を手玉に取った彼が言うところの凄みを感じてしまう。

「理由はどうあれ、助けられた事にはお礼を言わせて貰うわ。でも、貴方はいったい何者なのかしら？」

「どこにでもいる神主兼格闘家ですが、なにか？」

「ダウト」

「貴方みたいな人、他にいるわけじゃないじゃない」

「近頃、俺への対応ヒドくね？」

姉妹二人にダメ出しを食らって、不貞腐れる慎君。

私と同じく母様に似た顔立ちだけど、ややつり目で大人びた感じを纏っているので、こういった歳相応の反応するのは意外だ。

「まじめに答えて欲しいんだけど……。ただの格闘家がコカビエルや白龍皇を倒せるわけないじゃない」

「鍛えてますから」

敬礼のような動作と共に無駄に爽やかな笑みを浮かべる慎君に、周りからため息が漏れる。

「どうやら、まじめに答える気は無いらしい。」

「グレモリーさん。悪い事は言わないから、深く詮索するのはやめておきなさい。こちら側の事を知ったら、貴方達発狂するくらい驚くわよ。」

「につこりと笑いながら、こちらに釘をさす向こう側の私。」

「だがしかし、笑顔の隙間から垣間見える目は完全に死に絶えてい

る。……これは怖い。」

「そ……そう、だったら聞かないわ」

言葉では威厳を保とうとしながらもプルプルと震えているリアスの手を、向こうには見えないように握って慰める。

「勝気ではあるものの、この子は精神的にはそれほど強くないのだ。」

「いちめるのは止めてもらいたい。」

「でもさ、驚いたのはこっちのアジア姉が悪魔になってる事だよねえ」

「オレもそれにはビビった。レイナーレに狙われた時に美朱ちゃんがアジアを助けなかったら、こうなってたのかもな」

「あの、そちらの私は人間のままなのですか？」

「うん。眷属にはなっていないけどリーア姉が身元引受人になってるから、今は冥界のグレモリー家にいるよ」

「あら、貴女はむこうの私とは親しいみたいね」

「子供の時から一緒にいる姉貴分だからね。リーア姉がおねしよを慎兄に擦り付けようとしたり、ソーナさんと一緒に肥溜めに落ちて、泣きながら救助された事も知ってるよ」

「……………」

悪意無くバラされる忌まわしい過去に、リアスはもう涙目だ。

とうか、むこうでも同じ事をしていたのね。

こつちでの冤罪対象は私だったけど。

「そう言えば、近頃忙しくてアーシア姉に会ってないなあ。元気だといいいけど」

「……元気、だったぞ。信仰の方向性は、なんつか、激しく変わっちゃまったみたいだけど」

美朱ちゃんの眩きに、何故か冷や汗を掻きながら目を逸らす慎君。

「……おい」

兄の様子の変化をしっかりと見て取った美朱ちゃんは、隣を向くと同時にガシリツと彼の襟首に手をかける。

「アーシア姉になにをやらかしたのか、その辺の事を詳しく聞こうじゃないか」

『ハケツ、ハクンダツ！』と激しく慎君のボディを叩きながら、尋問を行う美朱ちゃん。

さつきまでの仲睦まじい兄妹の様子はどこにいったのか。

「わかった、わかった！ 言うからアドラーみたいにボディを叩くのはやめろ！」

「最初からそう言えばいいの！ ほら、キリキリ話す!!」

全然効いているようには見えないが、観念した慎君は美朱ちゃんを引き剥がしつつ口を開く。

「その前に、そっちのアルジェントさんは聞かないほうがいいから、この話が終わるまでは部屋から出る事をお勧めするぞ」

やはり気乗りがしないのか、慎君の放った覇気の無い忠告にアーシアちゃんは首を横に振る。

「いいえ、聞かせてください！ 違う世界だとはいえ、自分の身に起こった事ですから!!」

「好奇心は猫を殺すって言うんだけどなあ。……まあいいや」

アーシアちゃんになんとも言えない視線を向けた慎君は、こちらには聞こえない声量で何かを呟いた後、ゆっくりと語り始めた。

「この前、魔王連中との会談で冥界に行っただろ。その時にグレモリー家でアーシア先輩にあっただよ。そしたらさ、なんか天界のヤ

バいもんの啓示を受けたのか、俺の事を聖書の神と勘違いするんだわ」

「……なんだか途轍もなく不穏な単語が連発されてるわ。

ツツコミたい！ ツツコミたいけど……踏み込んだら最後、聞いてはいけない事実には直面するような気がする。

後ろを見れば、口出しをしようとするこつちのアーシアちゃんやイツセー君を、祐斗君や小猫ちゃんが必死に押さえてる。

ナイスよ、二人とも。

「それって大丈夫なの？ 慎兄を聖書の神と間違えるとか、相当重症だよ」

「神は神でも、お前の場合はどう考えても破壊神だからな。アーシア、マジで大丈夫かよ」

「おいコラ。……まあいいや、話を戻すぞ。その日は会談の後にヤボ用があつてそのままだったんだけど、次の日の夕方に気になって見に行っただ。そしたら先輩がこつちを見るなり『主を護るために強くなりたいです!!』なんて言い出したんだよ。本人もやる気十分だし、サバイバルツアーを完遂した実績があるから、そんならつてワケで『無限の闘争』に叩き込んだんだよ」

「お前、マジふざけんな!!」

「あんな人外魔境の修羅の国にアーシア姉を放り込むとか、なに考えてんのさ!!」

「うっせーな！ マジに変なもんと繋がってたから、シヨック療法になるかと思っただよ!!」

非難轟々の二人に負けじと反論する慎君。

よくは分からないが、彼の話しているのは相当に危険なところらしい。

そんな場所に戦闘力の無いアーシアちゃんを放置なんてしたら、怒られるのも仕方ないだろう。

「……それで？」

「それで、とりあえず闘らせてみたんだけどな。出てきたのがアレだったんだ」

そう言いながら、彼が指差したのはこっちのアーシアちゃんの胸に光る十字架だ。

「十字架？」

むこうのイツセー君は首を傾げているが、美朱ちゃんは一気に顔色を無くしている。

あ、美朱ちゃんがイツセー君に耳打ちしたら、むこうの二人も真っ青になったわ。

「え、マジで？ マジであの神の子だったの？」

「マジ」

「なんであんなのが『無限の闘争』にいるのよ！ 彼は格闘家じゃないわよ!!」

「馬鹿だなあ、朱乃姉。聖人なんてのは大概闘えるんだぞ。聖ジョージもそうだし、ジャンヌ・ダルクもそうだろう」

「それ、超偏見！ ……兎も角、それで立川の聖人とアーシア姉は闘ったんだね？」

「ああ。先輩は恐れ多くて手は出せなかつただけど、むこうはそんな事お構い無しに襲い掛かってきてな。被っていた茨の冠を投げつけるわ、デカイ十字架担いでブン殴るわ、遣りたい放題だった。最後には、神の恵みで天からパンや魚を降らせて圧殺したし」

「フリーダムすぎるわ！ 聖人要素何処に行った!?!」

「どこって、パンとか魚降らせるトコじゃね？ あと、むこうのビジュアルが禪一丁だった所為で、対戦してる絵面はどう見てもシスターに襲い掛かる髭面の変質者だったなあ」

「『罰当たりもいい加減にしろッ!!』」

「解せぬ」

三人に怒鳴られながら、しきりに首を傾げる慎君。

なんというか、物怖じしない少年だ。

分からないように伏せてくれているが、彼らが召喚したのは一神教の神の子だろう。

それをああも遠慮なく評するなんて、神をも恐れれないというのは、彼のような人を言うのだろうか。

「その後は気絶した先輩をベッドに寝かせて、オレは野暮用があるからその場を離れたんだよ。それで次に戻った時に見たものは——」
「……見たものは？」

「ごくりっと、私は思わず喉を鳴らしてしまった。」

気づけば、こちらのオカ研メンバーも固唾を呑んで彼の話を聞いている。

平行世界とはいえアジアちゃんに関する事だ。

こちらとは別人だと分かっているにしても、気になるのは仕方が無い。

『レッツゴー！ 陰陽師』をかき鳴らして、ブレイクダンスを踊りながら神に祈りを捧げるアジア先輩の姿「アウトオオオオオオオツツ!!」

あんまりにも救いが無い事実を遮るように、むこうのイツセー君の黄金に光る拳が慎君の頬を捉える。

しかし、その拳は頬にめり込んだだけで打ち抜くことは出来ず、慎君が首を捻ると簡単に弾かれてしまった。

「不安定な状態から撃ったから、踏み込みも身体の捻りも足りん。あれじゃあ、本当の実力者には傷一つ付けられないぞ」

「チツクシヨー……ッ！ 分かっていたけど化けモンめえ」

頬に痣の一つも無く駄目だしをする慎君と、拳に纏った金属質な外殻の輝が入った部分を押さえるイツセー君。

振り抜いた時の余波だけで部室の天井と床を破損させるほどの拳を受けて、無傷どころか相手が負傷するなんて、どんな身体をしているの？

「というか、慎兄どうするのさ。アジア姉、完全におかしくなってるじゃん」

「慌てるな、美朱。こういう時は逆に考えるんだ」

「逆？」

「おかしくなったんじゃない、アジア先輩が新たな道に目覚めたんだから、これを期に陰陽師やダンサーになってもいいや、と」

「どんな考え方あ!？」

「問題はそこじゃねーよ!!」

慎君の謎理論に容赦なくツツコミを入れる一誠君達。

むこうの私は、双子ちゃんを抱きながら天井を仰いでいる。

うん、今のはないわ。

「まあ、安心しろ、二人とも。昨日見に行つた時にはアーシア先輩は元に戻つてたから」

「……本当だろうか？」

「ああ。偶に祈りの言葉がラップ調になったり、ちよくちよく『ドーマン・セーマン』って混じるけど」

「ダメじゃねーか!!」

渾身のツツコミと共にイツセー君が慎君の頭をはたく。

どうやらこの話もこれでオチが着いたようだ。

後ろでは、『イツセーさん!? 私もラップを歌いながら、ブレイクダンスをしないとイケないんでしょうか!?』とアーシアちゃんがイツセーくん^{さん}に詰め寄っている。

アーシアちゃん、そんな無茶苦茶なんてしなくていいのよ。

先ほどの騒ぎも収まり、もう少しだけ警戒心の解けた私達は色々な話をした。

最初は兄妹に囲まれたむこうの私を羨うらやんでいたのだが、あちらの世界の話を聞いた後はそんな気持ちも抜けてしまった。

三大勢力が風前の灯とかどういふことなのか。

悪魔はサーゼクス様とセラフォル様さんが失脚しているし、天界は聖書の神の復活を目論んでいるという噂がある。

さらに墮天使はそんな三大勢力の現状に見切りをつけ、日本神話に亡命する気にいるらしい。

しかも、世界の多神勢力が連合を組んで、三大勢力潰しに動こうとしているというんだから堪らない。

それを聞いたとき、あつさりと意識を手放したりアスを少し羨ましく思つたのは秘密だ。

彼等の立ち位置を聞いてみれば、一誠君は一般人、姫島兄妹は日本よりの中立だそうだ。

むこうの私曰く、三大勢力を離脱してこの位置に立てたのは、慎君

のおかげだとか。

あと、むこうの一誠君が『赤龍帝の籠手』を封印している事や、あのライザーがまともになってユーベルーナとの間に子供が出来ていたのは意外だった。

さらには姫島家の生活費の全てを慎君が稼いでいるという事にも驚いた。

『同居しているはずのあの男はどうしたのか』と尋ねたところ、返ってきた答えは無職で母様のヒモである。

向こうの私は、朱音ちゃんや璃鳳ちゃんの為にも普通の社会人になってほしいと涙ながらに語っていた。

横で慎君と美朱ちゃんが必死にフオローしていたようだが、無職という烙印の前には無力だった。

どの世界においても、あの男がロクデナシだというのは変わらないらしい。

楽しい時間は速く過ぎるといふのは本当らしく、夜が終わり朝日が空を照らし始めた頃に、慎君が元の世界に帰る準備が出来たと言った。

なんでも帰還の為の出口は、魔力による結界が張られていると空間への干渉が邪魔になって出せないのだとか。

という事は、彼等の帰還を妨げていたのは、ソーナ会長が街への被害を防ぐ為に張った結界という事になる。

……ややこしくなるから黙っておこう。

まあ、『宴もたけなわ』ではないけれど、コカビエルとの闘いの疲れもあつて舟をこぐ人間が出始めていたので、ちようどいいと言えるのかもしれない。

慎君が軽く手を一振りすると現れた、両開きのガラス扉。

これが彼らが帰還する為のゲートなのだろう。

「なんというか、世話になったわね。軽すぎて実感は無いけど、貴方達は命の恩人よ」

「こつちが勝手にやった事だから、気にする必要は無いさ。それより、これからそつちも大変になると思うけど、合言葉は『命大事に』で頑

張ってくれ」

扉の前で握手を交わす慎君とリアス。

一見すればしっかりと代表をしているように見えるウチの主だが、さつきまで気持ちよさそうに眠っていた事を思うと残念さは拭えない。

あ、慎君にヨダレの跡が指摘されて真っ赤になってるわ。

「そうだ。姫島さん、ちよつといいかい？」

一通りみんなに挨拶を済ませた後、私は慎君に呼ばれた。

むこうの私の事もあつてか、こちらとは一線退いている感じだった彼から、声を掛けられるとは思っていなかった。

とりあえず行ってみると、目を閉じて欲しいといわれたので言うとおりにする。

すると、小さく日本神道の祝詞が耳に入ると同時に、まぶたを掠かする様に何かを通り抜ける感覚がした。

「ありがとう。目を開けてもらって大丈夫だ」

その言葉に目を開けてみるが、特に変わった様子は無い。

彼は何がしたかったのか、と首をかしげていると、後ろからこちらを呼ぶ声がした。

この声を知っている。

記憶の中に封じてもおなほ褪せることない、もう聞けないと諦めていた優しい声。

恐る恐る振り返った私の目に映ったものは、周囲の景色に比べて少し薄れているが、思い出の通りの着物を着た一番会いたいと思っていた人だ。

『朱乃』

「……母様ッ！」

頬を伝う涙もそのままに、私は母様の胸に飛び込んだ。

しかし、期待していた包み込むような暖かさは無く、私は母様の身体をすり抜けてしまった。

「すまん。彼女は貴女の守護霊だから、見ることや会話する事は出来ても触れる事はできないんだ」

「守護霊……」

半ば止まった思考で慎君の言葉を反芻していると、ニコリと笑った母様が言葉を続ける。

『そうよ。死に別れたあの時から、私は貴女をずっと見守っていたの』その言葉に、また目頭は熱くなる。

……ずっと母様はいなくなったと思っていた。

心の何処かで私を置いていった母様を恨んだ事もあった。

でも、それは間違いだった。

母様はずっと私を見守ってくれていたのだ……。

「悪魔になった事で希薄になった霊的繋がりを強化して、閉じていた霊視眼を開いた。これで、いつでも朱璃さんとコミュニケーションは取れるはずだ。触れ合うのは肉体が無いと無理だから、その辺は勘弁してくれ」

申し訳なさそうに頭を下げる慎君に、私は感極まって出ない言葉の代わりに頭を振る。

謝る必要なんてない。

今まで存在を感じる事も出来なかったのだ。

それに比べたら、言葉を交わせるだけでも十分すぎる。

「けど、これで一安心だよな。この部屋に入ってから、お袋さんずっと朱乃先輩の後ろで、俺達にすんげえメンチビームブツパしてたし」

「あれ、イツセー先輩って『見える人』だったの？」

「おう。と言っても、見えるようになったのがちよっと前からだけど」

「確かに、先輩の言う通りだよな。あの人がこっちに向けてたのって、『サイクロプス』の『メガ・オプティクブラスト』バリのゴン太ビームだもんな。意識しないようにするのがどんだけ大変だったか。お陰で俺の『漢気ゲージ』が『シャバ僧』になってるんだが」

「そんなゲージあったんだ……。まあ、途中で肩を掴まれて『コツチヲ見口オオオオツ!!』ってされた時には、チビリそうになったけど」

……母様？

『仕方ないじゃないっ！ 霊視が出来るあの子達を逃したら、もう朱

乃とコンタクトが取れないと思ったんだから!!」

何故か頬を膨らませながらぷりぷりと怒る母様。

ウチの母親はこんな人だったろうか？

『それよりも朱乃。私が肉体を手に入れる方法を探すわよ!』

「どうしてですか、母様?」

『もちろん、あの子達を産むためよ!』

ビシィツと慎君達を指差し、声も高らかに宣言する母様。

ちよつと待つてほしい。

いきなり、トンでもない事を言い出したんだが、この人。

『私、昔から大家族っていうのに憧れてたのよ。でも、あの人って墮天使でしょ? お産も上手くいくかどうかかわからないって言われたから、貴女一人で我慢したけど……』

「けど?」

『平行世界とはいえ、三度のお産に成功した私がいると知った以上、この夢を諦めることは出来ないわ! 一度は死んだ身ですもの、バァーンと挑戦してみなくっちゃ!!』

『とりあえずは、あの宿六を捕まえて協力させないとね!!』などと高笑いをする母様に啞然としてみると、こそこそと撤収していく慎君たちの姿が見えた。

「待つて。いまの術、クーリングオフを要求するわ」

ガラス扉を開いたところで、慎君の肩を掴むことに成功した私は、ここぞとばかりに要求を突きつける。

「すみません。当方の施術はクーリングオフ対象外です」

こちらから目を逸らしながらも、いけしやあしやあと嘯く彼。

だがしかし、こちらだって諦めるわけには行かない。

今まさに思い知ったが、思い出とは美化されるからこそ尊いのだ。

「貴方も聞いたでしょ! あんな無茶苦茶な事を計画する人が母様なワケがないわ!!」

「闘わなくちゃ、現実と。あの超絶ドM親父の嫁になる人なんだから、一癖どころか二癖・三癖あるのは当然だろ」

『まあ、こつちの親父もあの性癖とは限らないけどな』と口にする慎

君に、思わず身体を揺さぶっていた手を止めてしまった。

え、あの男ってそんな変態だったの？

母様の『筋金入りよお』という声なんて聞こえない。

ええ、聞こえませんがとも!!

「という訳で、撤収！ 総員撤収!!」

こちらの手の力が緩んだ一瞬の隙を突いて、ドアに駆けこむ平行世界の珍客達。

咄嗟とつさに伸ばした手は間に合わず、閉まると同時に掻き消えた扉のあつた場所を虚しく通り過ぎた。

『さあ、朱乃！ まずは死人返りの研究よ！ 私の実家の書庫にそれらしいものがあつたから、取りに行きましよう!!』

「待って、母様！ 私達は姫島と不可侵条約結んでるから!! というか、それって完全に外道の法術じゃないの!?!」

あまりにもフリーダムな我が守護霊に悲鳴を上げる私。

これから父親との関係改善するまでの間、母様の行動に振り回される事になるのを、今の私はまだ知らなかった。

◇

夕焼けが赤く照らす元の帰り道に戻った俺達は、プラプラと歩きながら雑談を繰り広げていた。

「そういえば、慎兄」

「ん?」

「アーシア姉の件って、ちゃんと意味があつたんでしょ?」

確信を感じさせる美朱の言葉に、俺は思わず苦笑いを浮かべてしまう。

その辺は悪意とかノリとか、そういった動機じゃないかと疑つてもいいだろうに。

「ああ。アーシア先輩が神託を受けたのって、明らかに天界からの干渉だったからな。こつちから同質の力を叩き込めば相殺できると思ってたんだよ」

「だから、立川の聖人だったんだね」

「まあ、聖書の神に最も近い人間だからな。使うのは賭けだったんだが、式神で様子を見てるとあれ以来啓示を受けた気配はないから、一応は成功だったんだろう」

まあ、聖書の神が『無限の闘争』から脱走した事を思えば、まだまだ油断は禁物だろうが。

「ギヤグやネタじゃなかったんだな」

「なワケねーだろ。もっとも成功したとはいえ、当面の経過観察は必須だけだな」

イツセー先輩のチャチャをいなしながら、俺は肩を竦めて見せる。今回の件はなんだかんだと後手に回ってる。

……やっぱり今のままでは不安が残るな。

「朱乃姉。悪いけど、明日は一日『無限の闘争』に籠るから」
「どうしたの、急に」

「先の事もあるから鍛え直したいんだよ。一からガツツリと」

「一日でどうやって……ッ！ お前もしかしてあそこを使うつもりかよ!?!」

どうやら、イツセー先輩は俺の意図に気が付いたらしい。

「戦争が終わればキン肉マンとの試合もあるからな、限界までやってみるさ」

こちとら、こんなところで終わるつもりなんて無いのだから。

閑話 『精神と時の部屋・修行日記』

精神と時の部屋生活1日目

本日から体感時間で1年間の荒行の開始である。

最初の目標は、伸び伸びになつていた高木先生からの最終秘伝『龍天昇』の修得だ。

ここまで長引いたのは、多忙さとは別に『天地神明掌』と『邪極拳』の修得に時間がかかった為だ。

前者はリョウ総帥のお陰で何とかなつたし、後者はクーの兄貴の協力で見れるモノになつたと思う。

先生を師事して7年、数々の条件をクリアして漸くここまで来た。二か月ぶりになる高木先生の修行は『龍天昇』の基礎である象形拳の型から始まつた。

鳥が羽ばたく構えでバランスを取り、蛇の様に体に捻りを加えて力を蓄積。

その力を鷹の爪のような形にした掌に伝え、熊が立つような姿勢から体内で力を増強し、最後は虎が獲物に襲い掛かるように相手に強烈な正拳を叩き込む。

高木先生の初っ端の鳥の構えは、鳥は鳥でも何故か鶏だったので、この辺は変更させてもらった。

後に続いて一度やってみたが、氣や力の運用に関して驚くほどに効率が良い。

流星は高木先生の世界で中国最強の拳法家と謳われた『黄天昇』の秘奥義である。

一通り型は憶えたものの、高木先生曰くこれではまだまだ不十分との事。

明日からは、その神髓に触れていくそうだ。これは一層気合を入れねばなるまい。

—— 本日の千人組み手 ——

対戦相手：ロールシャツハ

異世界のアメリカにおいて、『キーン法』という法律で個人でのヒー

ロー活動が封じられてもなお、ヒーローとして悪を処断し続けた男。特別な力は何一つ持たない彼は、少しの発明と信念、そして容赦のなさで己の正義を貫いてきた。

戦闘力では俺に遠く及ばないが、どんな状況だろうと決して折れない精神と信念は、まさに『超人』だった。

狂気の思考はともかくとして、その精神の強靱さは見習いたいと思う。

精神と時の部屋生活8日目

『龍天昇』の修得がムズい。

初日に習った5種の象形拳に加えて、太極拳の柔拳・神極拳の剛拳・邪極拳の超スピードという要素。

さらには『生命力』を操った力を加えて初めて完成なのだと言う。

この一週間で条件の二つはクリアできたし、象形拳に関しては氣の練りを応用して省略する事も可能になった。

問題は『生命力』だ。

ここで言う『生命力』とは、魂を元にした生きる為、もしくは生きようとする力の事だ。

これは身体的ポテンシャルも然る事ながら、強固な意志によって出力が左右される。

まあ、テンションや気合でパワーが増減すると思ってもらえればいい。

それで何が問題なのかというと、この生命力は出力が大きすぎて制御がとっても難しいのだ。

経絡を巡り身体にのみ影響を及ぼす氣功術とは違い、『生命力』は生命の根源というべき魂にアクセスして力を引き出すもの。

つまりは氣功術の上位互換なのである。

現状は『生命力』を引き出す事には成功している。

これも内氣功を極めた事と、自己への因果律操作の習熟が上がったお陰だ。

しかし、引き出したエネルギーの制御が大きな壁になっている。

何気なしに軽く引き出しただけで、通常の10倍界王拳と同等。現状で出せる最大出力ならば、100倍界王拳を超えるだろう。

指導をしてくれていた高木先生も、俺の生命力の巨大さには驚きを隠せない様子だった。

とはいえ、高木先生は『龍天昇は生命力を全開にして、初めて完璧となる』と言っていた。

極めんとするならば、避けて通るわけにはいくまい。

一声気合を入れた俺は、現状で出せる『生命力』を100%引き出して、『龍天昇』を撃つてみた。

当然こんな高出力に身体が持つわけがなく、放とうとした瞬間に右腕が爆砕した。

高木先生がエビ反りになるほどビビらせてしまったが、これは仕方が無いだろう。

という訳で、現在は生命力の制御に並行して肉体改造中だ。

重力負荷を500倍にウェイトは大台の1000t。

呪霊錠は三つに増やして基礎トレーニングかたわを行う傍ら、CとSランクの闘士を相手に超必殺技を食らいまくる事で肉体強度を上げていく。

『生命力』の制御を主眼に置いている為、擬死する事は許されない。

どれだけダメージを受けても生き残り、仙豆で回復するという条件までついている。

まさに狂気の沙汰だが、大したことはない。

この先に待っている『神』ランクなんて、狂気も理屈もへったくれも纏めて彼岸の彼方にぶっ飛んだ奴しかいないのだ。

これくらいしなければ、追いつけるわけがない。

——本日の千人組み手——

対戦相手：名無き王

『龍天昇』に因んだわけではないが、何回目かのドラゴン狩りである。

相手は『名無き王』

タイトルから発売された対戦型格闘ゲーム『カオスブレイカー』

(ダークアウエイク)』の隠しボスで、紅い鱗の巨大な龍だ。

尻尾による打撃に火球、そして炎のブレスとドラゴンとしては基本を押さええている攻撃だが、ゴジラやキングギドラを相手にしてきた身としては、やはり物足りない。

というわけで、生命力1%解放の『龍天昇』の実験台になっていたできました。

でもって、結果はまさかの全身ミンチ。

ついでに右拳も砕けました。

やっぱ、未完成の技は使うものではないな。

精神と時の部屋生活25日目

……ヤバイ。

『生命力』の制御をしくじった所為で、物凄く衰弱している。

身体がほとんど動かないし、物も食えない。

髪の毛だってボロボロ抜けてる。

高木先生が手を尽くしてくれなかったら、マジに死んでた。

先生曰く、『生命力』は魂に直結しているから枯渇すると精神は消滅して、死亡・もしくは廃人になるらしい。

今日の失敗は、俺の生命力が膨大だったためにこの程度で済んでいるが、もう少し出力が上がっていたら危険だったそうさ。

また『無限の闘争』の死亡防止機能があっても、その機構は対象者の魂を基点にしていることから、魂の消耗から来るダメージに関しては100%の効果が発揮できない可能性があるとか。

……しかし、まいった。

新たな力を得る際にはリスクがつきものだが、こうまで高いモノだったとは。

とはいえ、『生命力』と『龍天昇』を諦めるなんて選択肢は論外だ。強くなる術があるのに手を伸ばさないのであれば、弱いままではと言うのなら……俺に生きる価値は無い。

力を手に入れるためなら、命くらいいくらでも賭け代に乗せてやる。

今までずっとそうやってきた。
そうやって、力をもぎ取って来た。
だから、やってやる。

今回も、次も、何度でもだッ!!

精神と時の部屋生活49日目

漸く、『生命力』の操作が可能領域が5割に達した。

ここままで来るのには、本当に大変だった。

『龍天昇』を撃とうとする度に腕や足など強度が足りない箇所が爆砕し、逝った箇所を『トワイライト・ヒーリング聖母の微笑』で修復しては、その場所を重点強化する。

『生命力』の制御ミスで15回も衰弱死寸前まで行った。

5回を超えた頃から、外氣功で取り入れた氣を『聖母の微笑』経由で『生命力』に変換する術を憶えたからなんとかあったけど、あれがなかったらとつくに廃人である。

つか、『聖母の微笑』の再生力が更に増したような気がするのはい気のせいだろうか。

手足が吹っ飛んだくらいなら、ものの10秒足らずで止血、再生も五分くらいでするようになったんですが。

しかも、この頃は使おうと思わなくても怪我が回復していくし。

なんかヤバイスイッチでも入ったんじゃないか、コレ?

こっから出たら、またグリゴリに診てもらいに行こう。

あと余談だが、衰弱時に抜けた髪の毛は仙豆を食ったら生えて来た。

喰ったらすぐに元の長さまでニョキニョキ伸びるのは、ある意味恐怖だった。

さて、今日からは従来のトレーニングにプラスして、『生命力』を使つての『真人』化を試している。

やってみると、10%の『生命力』で肉体の限界が来た。

この計算で行けば、真人に使用する事で出力は5倍になるわけだ。ゆくゆくは界王拳の使用も視野に入れているのだ、これは基礎強化

に更なる力を入れねばなるまい。

——本日の千人組み手——

対戦相手：冥王グランドマスター

今回の相手は異世界における地球の支配者だという。

現れたのは黒のローブに包まれた初老の男。

一見すればレトロタイプの魔法使いだが、その力は一線を画していた。

数多くのエネルギー弾に、魚や鳥といった生物の形をした飛び道具。

実体を持たずとも生きている生物達を想像し操る様は、まさに神だ。

だがしかし、所詮は飛び道具主体の魔導士タイプ。距離を詰めれば優劣は一気に逆転する。

瞬間移動で間合いを詰めたところで、相手の顎に手を当てながら足を払い、空中で数度回転させた上で、遠心力と加速を加味して後頭部から地面に叩きつける大南流『轟天殺』ごうてんざつで地面に叩きつけた。

そして追い打ちに0距離レイジングストームを放ち、宙に吹っ飛ばされたところを大雪山落としを決めて、試合終了と相成った。

今回の対戦で解つたのは、防御力が上がっているという事だろう。グランドマスターの弾幕が直撃しても、ジャブ程度にしか効かなかったし。

うん、少しづつだけ修行の成果が出ているらしい。

精神と時の部屋生活72日目

ここに籠って、もう二か月である。

『生命力』の制御率は7割に達した。

このところは使い方にも慣れて来たのか、しくじって衰弱するといふ醜態を晒す事も無くなった。

修行の方は順調と言っているだろうか。

さて、今日はヴァーリがやってきた。

『こんな便利な場所を隠しているなんて、ズルいぞ!!』

と言いながら乗り込んで来たヴァーリは、山の頂上並みの空気の薄さや10倍の重力など物ともせず、『ヒヤッハーハーッ!!』とフルテンションで修行を開始した。

他に顔を出したのは美猴やアーサー、さらにはルフェイ嬢までいた。

『無限の闘争』に登録していないルフェイ嬢の存在には首を傾げたが、アーサーの意向との事だったので、割と本気でシバキ倒しておいた。

情報の拡散もそうだが、擬死を体験して精神に傷が残ったらどうするんだ、馬鹿め。

『なんで来たのか』と問えば、三勢力との戦争も近いので生き残るために実力を上げたいのだとか。

そう言えば、ペンドドラゴン兄妹はダーナ神族、サルは道教に所属していたんだった。

世界各国の多神勢力が臨戦態勢に入ったのだから、こいつ等も戦争に巻き込まれる可能性は高いか。

まあ、そういう理由ならば断る理由は無いです。

こっちの精神と時の部屋は原作とは違って定員はないんだし、存分に使ってくればいい。

—— 本日の千人組み手 ——

対戦相手：鉄人28号

恒例となつてしまった巨大サイズ対決。

今回はマジンガーZよりも古い、日本初の巨大ロボット漫画の主人公である鉄人28号だ。

設定上は太平洋戦争末期に造られたレトロな代物だが、こっちの旧日本帝国軍の技術は半端じゃない。

唯の鋼鉄のはずなのに超合金Zに迫る防御力と、ビルを一撃で倒壊させるパワー。

これ、ぜったいオーバーテクノロジーで出来てるだろ。

片腕を破壊しても、性能が落ちるところかパワーとスピードが上がったし。

下の方で一生懸命にリモコンを操っていた正太郎君を狙うのは、禁止手だと思う。

巨大でスピードとパワーはあっても例の魔神には及ばないし、内蔵武器もゼロだったので浸透勁連打でなんとかなった。

『龍天昇』修得の為の身体づくりとしてランクを落としていたが、そろそろ戻しても良いかもしれない。

精神と時の部屋生活92日目

『龍天昇』修得！ 『龍天昇』修得！！

苦節三ヶ月、ついにやった！

『生命力』も100%全開での操作も可能となり、その出力に身体も付いていけている！

高木先生からも完璧との太鼓判を貰った！！

気分は、最高にハイって奴だ！

いやホント、今回は苦労した。

何度も身体を壊すわ、衰弱死しかかるわ。

その度に『聖母の微笑』を酷使しまくったから、今ではオートでリジエネレートがデフォオになってるし。

まあ、あれだ。

神器だって進化するという事だな。

アザゼルのおっちゃんが聞いたら、解剖させろとか詰め寄ってきてきそうだけど。

あ、そうだ。

今日から新たに8人、精神と時の部屋の修行に参加する事になった。

面子はクーの兄貴、デイルムツド、アナ嬢、リリイ嬢、朱乃姉、美朱、玉藻、そしてイツセー先輩である。

全員、今回の戦争を無事に乗り切りたいからという理由らしい。

取り合えず、未登録のリリイ嬢達を連れてきた事は怒っておいた。

しかし、イツセー先輩は堅気かたぎに戻ったんだから、首を突っ込まなくていいと思うだけどなあ。

とはいえ、本人から『駒王町を結界で包んだとしても、絶対って事はないんだろ？ だったら、万が一の事態に備えて家族と自分を護れる力が欲しいんだ』なんて言われたら、断るわけにはいかないじゃないの。

自分が死なない事を視野に入れてる点も、成長したんだなと思えるし。

後輩のクセに生意気？ 精神年齢は上だからいいんだよ。

あと、アナ嬢は地中海に住んでるお姉さん達を護りたいらしい。なるほど。

近頃見えないと思ったら、お姉さん達に会いに行っていたのか。

何でも、俺がポセイドンにヤキを入れた影響で、オリュンポスの目を気にせずに会いにいけるようになったとか。

……コツチは金目当てだったんで、真摯しんしに礼を言われると本当に居心地が悪いんだが。

さて、先に合流したヴァーリ組だが、各員それぞれに頑張っているようだ。

ヴァーリは俺に倣ならって狂ランク千人組み手を開始し、アーサーは『燕返し』の修練。

サルは如意棒でビリー・カーンの『超火炎旋風棍』を練習していたし、ルフエイ嬢は炎と氷を合わせてどうたらとか言っつて、研究に没頭していた。

どう見てもインドア系のルフエイ嬢が、この部屋の過酷な環境で平然としているを不思議に思っつて質問したところ、結界によって通常環境に戻しているんだとか。

それって修行にならないんじゃないやね？ と思っつたが、本人言うには『常時結界を張る事で魔力に負荷がかけている為、総魔力値が上がっつていつている』とのこと。

なるほど、俺に取っつての呪霊錠みたいなものか。

時に、ヴァーリよ。

お前、『初代ルシファア討伐キター!!』とか言っつていて、人修羅に負けるのはどうなのか。

確かに『デスカウンター↓ベノンザツパー↓ジャベリンレイン↓至高の魔弾』のコンボはエグかったけど、そこはもう少し頑張ろうぜ。

—— 本日の千人組み手 ——

対戦相手：ベジータ

野菜王子と二度目の対戦である。

前回は超ベジータにワンパンで『汚ねえ花火』にされたが、そう何度も負けるつもりは無い。

開始前、額に文字のようなものが見えたので嫌な予感はそのだが、ベジータはベジータでも『魔人ベジータ』だった。

開始早々超サイヤ人2の力を全開で突っ込んでくるベジータ。

当然、手加減できる相手では無いので、こっちも『生命力』全開で迎え撃つ。

嬉しい誤算というか、ここまでとは思っていなかったというか。

なんと、超2のベジータとまともに渡り合う事ができた。

とはいえ、相手は歴戦のサイヤ人な上に超エリートだ。

飛び道具の種類が少ない事を見抜かれて、高速のヒットアンドアウェイを織り交ぜた氣弾のグミ撃ちに大苦戦。

それでも攻撃のタイミングを読んだ俺は、氣弾連射に起きた爆風を隠れ蓑に瞬間移動で背後を取り、全開『龍天昇』を叩き込んで逆転。

これで勝利か！ と喜んだのも束の間、原作の魔人ブウ戦で使った自爆によって吹っ飛んでしまった。

あ、勝負には勝ちましたよ。

むこうは全てを出し切って戦闘不能になったけど、コッチは咄嗟とっさに全ての力を防御に回したお陰で、1ドットくらい体力が残ってたから。

しかし、ブウですら消し飛んだエネルギーに耐えるとは、いやはや頑丈になったものである。

まあ、火事場の馬鹿力で『生命力』を界王拳で増幅できたからなんだが。

全然格好は付かないが、一応はリベンジ完了という事で。

そういえば、ベジータって超サイヤ人4もあつたな。

……今度は逆リベンジされる予感。

精神と時の部屋生活123日目

修行生活も四ヶ月を過ぎようとしている。

『龍天昇』を修めた俺は『生命力』による『真人』化の全開運用を指して、身体造りと力の操作に磨きを掛けている。

実際、高木先生は両腕を振り下ろすスレッジハンマーや頭突きで『龍天昇』を放っていた。

俺も拳で満足せずに、全身で『龍天昇』を撃てるようにならなければなるまい。

さて、ここで修行をしている各員なのだが、みんな思い思いに技に磨きを掛けている。

一人一人を上げていくのもあれなので、連絡ノートから抜粋して確認しよう。



合宿生活7日目

記入者 妹ニンジャ

うずまきナルト君と戦って、螺旋丸と影分身GET!!

螺旋丸はチャクラらせんがん（こつちだと氣だね）を乱回転・圧縮させた気弾で、貫通力がハンパない。

影分身は私の使っている奴とは違って10人くらい出るうえに、分身が体験した事は私の経験になると言うチート使用！

この便利なスキルを使って、忍者王に私はなるっ!!

管理者

おつかれ。

妙な称号は置いといて、影分身の管理には注意するように。

経験と言っても、いい経験と悪い経験があるからな。

分身が変な事に巻き込まれて、その所為でお前が傷ついたら、みんなが心配する。

できればコッチにいる内に安全装置みたいなものを組み込めない

か、調べてくれ。

あと、螺旋丸は使えそうだ。

雷打に織り交ぜたりモズ落としての始動に加えたりと、色々試してみれば良いと思う。

ビリビリ巫女

危ないから、影分身は2人まで。

あと、学校に代理で行かせるなんて事はしてはダメ。

この約束を守れないなら、お小遣いは抜き。

イケメン猿神

ガツチガチの家族の会話だねえ。

なんつうか、後で書くの気が引けるんだがよう。

まあ、俺もジジイみたいに髪の毛を使って分身が出せるから、今度術比べといこうじゃねえか。

未来の魔女

すごいですね、み……じゃなかった、妹ニンジャさん。

でも、ご家族が心配するので、あまり無茶な使い方は避けたほうがいいですよ？

私も友達として心配です。

白龍皇

分身か……。

俺も妙なガイルと闘ってから、兜の上から小さな俺が出るようになったんだが、これも分身なのだろうか？

聖剣使い

小さな白龍皇、だと……!?

合宿生活9日目

記入者 イケメン猿神

ビリー・カーンって棒術使いに勝って、技を覚えたんだけどよう。如意棒が三節棍になったり、穂先が分裂したりしねえんだけど。

この世界って、技を覚えたら武器も進化するんじゃないのかい？

管理者

んなわけあるか。

武器持ちはみんな、自分の得物と相談して技を使ってんだよ。

氣と隣でなんとかなる『サラマンダー・ストリーム』で我慢しとけ。

妹ニンジャ

ていうか、その如意棒つてもらい物でしょ？

勝手に改造したら初代様が怒るんじゃないかな。

聖劍使い

ここはアレですよ。

貴方の技量で如意棒の打撃を複数同時に分裂させるんです。

大丈夫、私も出来るようになってきたので、貴方もできます。

合宿生活11日目

記入者 ビリビリ巫女

とあるOLから『男殺し』という技を覚えました。

内容は、殿方の股間を爪先で蹴るというものなのですが……。

これってやっぱり、封印したほうがいいのかしら？

赤トカゲ改め喧嘩師見習い

やめてください、しんでしまいます。

妹ニンジャ

うくん。

ビリビリ巫女さんはすっごいナイスバディだからねえ。

身の危険を感じたら、使ってもいいと思うよ？

ほら、柔術に合わせて、相手を拘束してからキンツつて。

へびっ子末娘

男はケダモノ。

積極的に使っていけばいいと思います。

良妻狐

なんでしたら、私の『一夫多妻去勢拳』も伝授しますよ？

イケメン猿神

妹ニンジャのたとえば生々しすぎるぜい。

そんなの食らったら、オレツチの如意棒がお陀仏になっちまう。
未来の魔女

ゴメンなさい。

このサルはこっちが責任を持って去勢しておきますね。

管理者

取りあえず、使用は実戦のみという事で。

もし練習がしたいのなら、専用の防具を買ってきます。

合宿生活15日目

記入者 管理者

白龍皇が本人も気づかない内に、『アルティメット待ちガイル』と闘っていた。

奴が『Mr. 師範』と並ぶ『無限の闘争』屈指のネタ闘士と手合わせしたのなら、俺もそれに続かねばなるまい。

というワケで、今回は『羅将モン』と闘ってみた。

出す技全てが羅生門！

どっかで見た様な技がてんこ盛りでも羅生門！！

どう見てもネタなのに、妙に強いぞ羅将モン!!!

……対戦をレビューするとこれで終わってしまうんだが。

とはいえ、これでは何が何だか分からんので、わかり易く解説しよう。

取り敢えず、見た目は普通のギースと一緒にんだが、ファイトスタイルというか、存在そのものが変だ。

『烈風拳！』『疾風拳!!』と叫びながら『羅・生・門』の漢字を飛ばしてきたり、ズラがぶっ飛ぶほどのビームをブツパしたり。

さらには、投げをスカった瞬間にサイコクラッシュャーに移行したり、俺がまだ使えない有情破顔拳をパクつたり（ぐぬぬ……ッ！）とカオス極まりない。

とはいえ、こちらら本物のギースに勝った身だ。

こんなんに負けたらマジに立つ瀬がない。

そりゃあもう必死に戦って、なんとか勝利をもぎ取った。

決まり手が純正の『羅生門』だったのは皮肉以外の何物でもないだろう。

試合も終わって技の修得と相成ったわけだが、奴の持つ技のファンキーさに少し泣きそうになってしまった。

『羅生門の舞』だけは無理ですから！ 勘弁してください、マジでツ

!!

白龍皇

俺がネタ枠と闘っていた、だと……ッ!?

妹ニンジャ

絶対、また変な技覚えた来たよ、この兄貴。

前の『ドカベン』みたいな。

これ以上、管理者がイロモノになってどうするのさ。

赤トカゲ改め喧嘩師見習い

初めから終わりまで羅生門ばかりで意味わかんねーよ！

つうか、お前が嫌がる『羅生門の舞』ってどんな技!?

ビリビリ巫女

そも、私達は『羅生門』がどんな技か、解りませんものねえ。

聖剣使い

確か、白龍皇との闘いで管理者が使ってましたよ。

相手を上空高く放り投げて、落ちてきたところを双掌打で追い打ちをかけるという技だったと思います。

イケメン猿神

こいつの怖いところは、ネタ技も普通に使えるものに仕上げてくるところだぜい。

『地獄風車』とか、そもそもロメロ・スペシヤルを実戦で使う奴なんていねえよ。

合宿生活16日目

記入者 白龍皇

一撃必殺!!

ついに俺もこの技を習得できた！

その名は『ブランディングブリーチ』!!
ルシファール討伐のとどめはこれで決まりだな!!!

あと、食らってみたい奴、大募集だ!!

イケメン猿神

あゝあ。

また物騒なもん手に入れやがったぜい。

つか、そんな技を食らいたい奴なんているわけないだろお。

聖剣使い

彼はアレで良識のある男ですからね。

ところ構わずぶっ放すなんて真似はしないでしようが……。

まあ、テンションが上がって『つい殺っちゃったんだ☆』には気を

つけましょう。

妹ニンジャ

一撃必殺技かあゝ。

私も欲しいといえば欲しいかなあ。

でも忍者系で一撃必殺持つてるのって、あの元ジャンキーの紙忍者

もどきしかないんだよねえ……。

え、断末奥義?

そんなものは知らないなあ。

未来の大魔女

このう●こヤロウ!

私のゴツくんを実験台にするなあツ!!

青い猛犬

一撃必殺かあ……。

俺の槍も一撃必殺の筈なんだが、この頃一発で殺れたことがないん

だよなあ。

師匠も来てる事だし、鍛えなおしてもらおうかあ

管理者

ああ、GGのソルから覚えたのか……って、それってXrdの一撃

必殺だよな。

『無限の闘争』にはXXのソルしかいなかったはずなんだが……。

まあいいや。

炎を主体とする戦い方だから、邪王炎殺拳と相性がいいかもな。

あ、発動条件はよくチェックしとけよ。

いざって場面で使えなかつたら、笑い話にもならないぞ。

あと、ここの面子にぶつ放したら、『お前で野球』するからな。

合宿生活17日目

記入者 輝く貌^{かお}

始めまして、私は管理者様の従者をしている者です。

気軽に輝く貌とお呼びください。

青い猛犬殿に誘われて、何度か場を借りて鍛錬をしていたのですが、本格的な意味で関わるのは初めてです。

妹ニンジャ殿はこの場所を『御伽の国』^{おとぎ}と言っていました。その理由がよく分かりました。

ここは古今東西のあらゆる強者や、数多の流派とその奥義に溢れている。

武芸者ならば、垂涎^{すいぜん}の修行場です。

それならば、と私も早速腕試しに参加させていただきました。

対戦相手は三国志の中でも『人中の呂布』と言われ恐れられた豪傑、呂布。

彼は噂にたがわぬ槍捌きもとより、口に酒を含んで火を放つと言った奇手も織り交ぜながら、こちらを翻弄してきました。

しかし、私もフィオナ騎士団の一番槍と呼ばれた男。

力や技量で敵わぬのならば、別の手で立ち向かえばよいと、攻め手を変更しました。

スピードで翻弄する事で力を空回りさせ、技術も二剣二槍の手数で封殺する。

そうやって相手を焦らしていると、史実の通り我慢強くなかった奴は、手にした剛槍を大きく振りぬきました。

今までの精妙さからかけ離れた、力のみ粗暴な一撃。

それは奴がこの試合の中で初めて見せた明確な隙でした。

この瞬間を待っていた私は、風を巻いて振りぬかれる穂先を掻い潜り、奴の懐に飛び込みました。

間合いを取られれば嵐のようだった剛槍も、懐に飛び込めば脅威は半減します。

呂布は火炎を吐いて牽制してきましたが、我が宝槍の前では無意味。

短く持った紅の槍が火炎を貫いて奴の胸を穿った事で仕合は終了しました。

初戦を白星で飾れたのは誉れですが、この世界にはまだまだ強者がいる模様。

これに慢心せずにもっと高みを目指したいと思います。

管理人

初勝利おめでとう。

その呂布は英霊とは違って生身だから、色々戸惑っただろう。

ここには柳生十兵衛や服部半蔵といった歴史上の達人もいるから、腕試しや修行にはもってこいだと思う。

ま、気が向いたら使ってみてくれ。

妹ニンジャ

おめでどう、輝く貌さん。

でも、フィオナ騎士団って書いたら身バレしちゃうから、その辺もボカしたほうがいいよ。

たしか、三刀流とか六爪流なんて人たちもいるから、手数勝負してみるのが面白いかもね。

イケメン猿神

あく、お宅ってケルトの出身かい。

まあ、あつちもこの戦争には気合入れているから、最前線に放り込まれる可能性は高いわな。

お互い、死なないように一丁気張ろうぜい。

聖剣使い

初勝利、おめでどうございます。

フィオナ騎士団の輝く貌。

フィニアン・サイクルに語られる無双の騎士と、書面でも言葉を交わせる事を嬉しく思います。

私も一介の武芸者としてこの地を利用していただきますので、武者修行のつもりで肩肘張らずに楽しむのがよろしいかと思えますよ。

白百合の騎士

初勝利、おめでとうございます。

あの呂布を下すとは、さすが輝く貌殿ですね。

私もその武勇を見習って修行に励もうと思えます。

合宿生活18日目

記入者 聖剣使い

漸く、『燕返し』の目処が立ちました。

同時斬撃はまだ二つが限度ですが、代わりにコールブランドの聖なるオーラを刀身に収束させて、切れ味を格段に上げる事に成功。

本家には未だ及びませんが、二方向同時の防御不能斬撃。

これはこれで、結構いけるのではないでしょうか？

三刀同時を諦めたワケではありませんが、今はこの技を磨く事にしましょう。

白龍皇

よくやった！

今度俺が試しに受けてやるから、その時は全力で来るがいい!!

イケメン猿神

お前ね、昔そうやって輪切りにされそうになったじゃねーか。

学習能力つてモンがあるのなら、やめて欲しいもんだねえ。

ともかく、聖剣使いはおめでとさん。

俺の『大旋風』修得の為にも、その斬撃を増やすコツを教えてください。

妹ニンジャ

おめでどう、聖剣使いさん。

二刀同時でも十分強力だから、自慢していいと思うよ。

三刀めは、こつちの熟練度を上げながら、ゆつくりと行けばいいん

じゃないかな。

未来の大魔女

おめでとう、兄様。

ご先祖様も喜んでると思うよ。

あ、あとリリイ姉様への接触禁止は、変更なしで。

変質者の疑いでロンドン警察に身柄を持つていかれた罪は重いのだ。

白百合の騎士

凄いです！

さすがは私の子孫。

世界が違うとはいえ、先祖として鼻が高いです。

出来れば、刀身にオーラを纏わせる方法を教えていただけたら嬉しいです。

管理者

すげえよ、よくやった。

取りあえずの目標は九種類ある斬撃のどの方向からでも、二刀同時斬撃を出せるようになる事だな。

合宿生活21日目

記入者 ヘビっ子末娘

ここに書き記すのははじめてです。

管理者のサーヴァントをしているヘビっ子末娘です。

こつちでは生きていてくれた姉様達を護る為の力を求めて、ここにやってきました。

闘い方が我流なので、アドバイスなどをいただけると助かります。

今日はアクセル・ロウという鎖鎌使いと闘いました。

残念ながら敗北しましたが、彼の鎖鎌の技は私の不死殺しの鎌に役立ちそうです。

取り敢えずは、憶えた『蜂巣箱』はちすばこという反撃技に磨きを掛けたいと思います。

聞けば、管理者は返し技の名手だとか。

ご指導、期待してますね。

管理者

了解。

得物と素手なんで噛みあわないところがあると思うけど、解り易いように教えよう。

最初は基礎である相手の殺気や戦意の気取り方だな。

イケメン猿神

姉妹の為ってのは泣かせるねえ。

今回は負けちまったが、腐らずがんばってほしい。

何かあったら、オレツチも協力するからよお。

青い猛犬

あの蛇女が随分としおらしくなったもんだ。

まあ、お前さんの事情はわかった。

長柄の使い方を知りたい事があったら、いつでも来な。

白百合の騎士

へびっ子末娘さん、お疲れ様です！

対戦は残念な結果でしたが、これをバネにしてさらに強くなってください！

合宿生活24日目

記入者 良妻狐

今回の参加者は見知った顔ばかりなので、初めましては無粋ですね。

戦装束よりも割烹着が似合う家庭的なサーヴァント、良妻狐です。

私は呪術師なのでこういった武は得意ではないのですが、ご主人様との輝かしい未来が掛かっているのならば話は別。

西洋魔術でも異界の魔法でも、ガッツリ修得してやろうじゃありませんか。

というわけで、今回の相手は高町なのはちゃん。

小学3年生の魔法少女です。

いや、退かないでくださいよ。

私だつて好きで闘つたワケじゃありませんし、この娘は砲撃魔法だけなら並みのキャスター以上だったんですから。

とはいえ、これでも私は呪術師としては最高クラス。

さらには御主人様のお陰でリスク無しで尻尾が三本増えてます。

才能と魔力だけのおこちやまには負けません。

相手御自慢の魔力砲撃を『呪層・黒天洞』で防ぐことで魔力を頂いて、その分を『呪層界・怨天祝奉』で上乘せした『呪相・密天』で吹き飛んでもらいました。

あ、誤解のないように申し上げますが、殺してはいませんよ。杖が破損してむこうが戦闘不能になっただけですから。

さて、勝利した私が頂いた技ですが、砲撃でも魔力弾でもありません。

あの城砦並みに強固な魔力障壁です。

だって、私つてひ弱なキャスターですから。

あの子の聖剣の真名解放が直撃しても耐えられそうな障壁って、喉から手が出るほど欲しかったんですよ。

此度の戦、これでご主人様について行くことが出来ますよ。

管理者

あゝ、取り敢えずおめでどう。

なんつったらいいか迷うけど、絶対について行くっていう気概は感じました。

俺が配置されるのは多分最前線だから、一緒に行く気なら防衛の他に広域殲滅の技も習得する事。

死ぬ事は許さんし、どんな状況でも見捨てる気はないから、足手まといになりたくなかったら強くなってくれ。

妹ニンジャ

管理局の白い悪魔を倒すなんて、良妻狐さんパないね。

私もついて行きたいけど、管理者の出した条件は厳しいかな。

だから、むこうで愚兄が無茶しないように、良妻狐さんは監視ヨロシクね。

青い猛犬

やるじゃねーか、女狐。

ま、どんな異能があつても英霊がガキに負けちゃおしまいだがな。坊主について行くってんなら、その尻尾はあと三本はいるんじゃないか？

合宿生活27日目

記入者 白百合の騎士

始めまして。

白百合の騎士と申します。

こんな優れた修練場をお借りできるなんて、感謝の念に絶えませぬ。

この恩に報いる為にも、絶対に立派な騎士になって見せます。

あ、今回は聖剣使いさんに教えてもらった『勝利^カすべき黄金^バの剣^ンへのオーラの付与』に成功したので、それをお知らせします。

儀礼用の勝利すべき黄金の剣が、あんなに強固で切れ味鋭くなるとは思いませんでした。

使ってみて、本当に驚いています。

あと、その応用でもう一本の騎士剣である、セイブ・ザ・クイーンにも私の魔力を纏わせる事が出来ました。

これで『双方の剣からの魔力放出で加速して、二刀連続攻撃で敵を完封』という、私の目指す二刀流に近づく事ができます。

ですが、この技を使うたびに『星光の剣よ……赤とか白とか黒とか消し去るべし！』という口上が脳裏を過ぎるのですが、これはどういう事でしょうか？

PS 妹ニンジャさん、ジャージを貸していただいて、ありがとうございます。

妹ニンジャ

気にしないで、白百合の騎士さん。

あれって私のお古だから、乱暴に扱ってもいいからね。

聖剣使い

素晴らしい。

さすがは我がご先祖様。

オーラの付与を教える報酬は、『お兄様』と呼んでくれるだけでOKです。

イケメン猿神

ダウト

へびっ子末娘

ダウト

未来の大魔女

祖先への不敬は、首を持って償うべし。

……死ぬがよい。

合宿生活29日目

記入者 未来の大魔女

ここにメインで書き込むのは初めてかな。

未来の大魔女といいます。

異界の魔道を学べる場所なんて他には無いので、本当に感謝しています。

有益な研究成果が出たら、管理者さんにお教えしますね。

今日の発表は、異界の大魔導士から教わった大魔法についてです。

この魔法は、熱と冷気という真逆の特性を持つ魔力を融合させる事で、万物を消滅させる力を形成する事ができます。

この二つの魔力を混合する際の度合いが大変難しく、上手く融合させる事は困難でしたが、やっと成功させる事ができました。

白龍皇さんではありませんが、この魔法は一撃必殺といっても過言ではありません。

来る大戦を乗り切る為にも、成功率の向上や発動の時間を縮める等、更なる研鑽を行いたいと思います。

……さし当たっては、愚兄の処刑に使用しましょうか。

聖剣使い

さすがは我が妹。

かつての大魔術士モルガンにも匹敵する才能だ。

……だから、処刑は勘弁してください。

お願いします。

妹ニンジャ

それってもしかしくなくても、メドロアだよね。

扱いが物凄く難しい魔法だから、気をつけた方がいいよ。

青い猛犬

凄え威力みたいだが、魔力弾って事を忘れないようにな。

どこぞの色男の槍みたいに、世の中には魔力なら問答無用で消滅させる武器ってのもあるからよ。

白龍皇

ふむ、なかなか面白い能力みたいだな。

今度、どちらの一撃必殺が優れているか、勝負してみるか。

管理者

白龍皇は後でバックスクリーンへ飛ぶように。

あと、未来の魔女さんは『反射』の力に注意して下さい。

強力な攻撃だからこそ、自分にそれが向いた時は脅威になるからね。

合宿生活30日目

記入者 喧嘩師見習い

みなさん、どうも。

思うところがあつて、赤トカゲから喧嘩師見習いにニックネームを変更しました。

さて、今日は謎の怪人Qと対戦。

トレンチコートに帽子、そして首から上をすっぽりと覆う鉄仮面と、相手は不審者丸出しだったけど、その怪力は本物だった。

素人でもやらないような無茶苦茶な殴り方なのに異様に重い打撃も厄介だったけど、掴まれてからのスレッズハンマーは本気でヤバかった。

地面に叩きつけられるだけじゃなくて、バウンドして建物の二階く

らいまで高く吹っ飛んだからなあ。

あの相手には防御とか考えてたら負けると思ったオレは、頭を空っぽにしてひたすら殴りあった。

それが功を奏したのか、腹にいいのが入って相手が一步退いた隙を
ついで、自慢の拳を顔面に叩き込んでKO。

終わった時には身体はボロボロで、指一本も動かせなかった。

薄氷の勝利ってこういうのを言うんだろうなあ。

とりあえず、食らって一番ヤバかった掴みからのスレッジハンマー
を修得できたから、こいつを磨いて行きたいと思う。

みんなに比べたらグダグダだけど、アドバイスとかくれると嬉しい
です。

管理者

勝利と新技おめでとう。

とりあえず、後ろに下がらないで打ち合いに持っていた判断はさ
すがだと思う。

今後の課題はタフネスの向上と、上手なダメージの抜き方かな。

喧嘩師見習いさんの戦い方は生傷が絶えないと思うので、ヤバいと
思ったらこちらに来るようにしてください。

整体と傷の治療は無料で承りますので。うけたまわ

妹ニンジャ

喧嘩師見習いさん、ファイトスタイル変わったねえ。

前もたいがいだったけど、今のノーガードで自分の土俵に持ち込む
強引さにはびっくりした。

パンチ力も凄くなったし、ストリートファイトの大会とかでいい線
行きそう。

青い猛犬

いい喧嘩っぷりだったぜ、兄ちゃん。

やっぱ男の殴り合いはあじやなけりやあな。

いや、いい酒の肴になったわ。

白龍皇

なかなか興味深い戦いだった。

技巧で鎬を削るのもいいが、ああやって真正面から勝負するのも面白い。

あの闘い方を選んだから、お前はドライブを封じたんだな。いつかは俺もやってみたいものだ。

合宿生活31日目

記入者 青い猛犬

久々に書き込む。

今日の報告は二つ。

今日は『魔界を統べし我^が旺^{おう}』って奴に勝った。

ボロボロの着物をきた侍のおっさんで、すつげえ魔力を迸らせていた兵だ。

身の丈ほどある十字槍の槍捌きや、愛馬と一体になつての突撃は脅威だったが、馬に乗った時には身体の自由が制限される事を逆手に取って、空中からの『刺^ゲし穿^イつ死^ボ棘^ルの槍^ク』で勝負を決めた。

技の方はスピードの俺とパワーの奴では相性が悪いので、いただきますやあいない。

久々に『刺し穿つ死棘の槍』も宣告通りに心臓を穿つたし、腕の立つ奴との戦いで鈍っていた身体にも喝が入った。

ま、悪くない戦いだったってことさ。

二つ目だが、俺の師匠が坊主に負けた。

開始一分足らずでのスピード決着だったが、実力的にはそこまで開きがあったわけじゃない。

小手調べとして放った師匠の甘い初撃を迎撃した坊主が、師匠が体勢を立て直す前に大技を連続で叩き込んだだけだ。

相手の実力を調べようとしていたスカサハと、隙あらば喉元を噛み千切る気だった坊主の意識の差がそのまま結果に出たってワケだ。

ああ、勘違いすんなよ。

仇討ちをするとか、そんな気はさらさら無いからな。

殺されたってんなら兎も角、ただ負けただけならスカサハが悪い。

弟子だからってそんなもんにしやしやり出たら、みつともないだろ。

ここに書いたのは、坊主に忠告する為だ。

坊主、師匠はお前の首を狙ってくるぞ。

あの女は神や精霊を殺しまくった所為で、人間から外れた存在になつて死ぬことができなくなった。

だからこそ、死への好奇心とケルトの戦士の性から闘つて殺される事に憧れてた。

で、それをお前が叶えちまったんだ。

師匠を殺したのが俺だったなら、弟子が己を超えたつてんで納得もしただろう。

だが、見ず知らずのお前に殺られたとあっちゃあ、間違ひなく雪辱を晴らしに来る。

ここで生活する間、いつ何時襲ひ掛かってくるか分からないから、気をつけるようにな。

ビリビリ巫女

……なんてはた迷惑な話なんでしよう。

猛犬さん、弟子なんですから止めてください。

妹ニンジャ

また変な厄介事背負っちゃつて……。

取りあえず、危なくなつたら全力で反撃する事。

ヤバかつたら、青い猛犬さんを生贄に差し出すから。

聖劍使い

武勇を伝説に謳われた影の国の女王を倒すとは。

どのようにして彼女を倒したのですか？

管理者

初っ端に槍で刺突してきたから、当て身投げから『裏雲隠し』で背中を取つて『邪影拳』を二発目で止めて『羅生門』。

技後の硬直を氣の操作でキャンセルして吹っ飛ばす相手に追いついてから、連続で真空波を叩き込む大南流の奥義『摩利支天』。

そこからさらに『狂雷迅撃掌』に繋いで、落ちてきたところに『デッドドリーレイブ』かな。

あ、『デッドドリーレイブ』のシメは双掌じゃなくて、地面に投げつけ

てからありつたけの氣を叩き込む『レイジング・デッドエンド』だったな。

白龍皇

いつになく容赦ないな。

いくら不死だったとしても、これでは耐えられまい。

しかし、奴の当て身投げは凶悪すぎる。

捕られるとほぼ100%で追い討ちが待ってるからな。

しかも食らったら、ほとんど死に体になってしまおうし。

どうにかして、封じる術は無いものか……。

アルビオンと一緒に考えた空間の半減も、すぐに見破られてしまったしな。

イケメン猿神

お前も散々やられたからなあ。

経験者は語るって奴だねい。

未来の魔女

『武神とも言われる伝説の女王を倒した』といって誰も驚かないあたり、あの人の異常性が分かりますね。



と言った感じだ。

みんな各々に成長しているようで、結構な事である。

俺も負けてはいられないな。

精神と時の部屋生活155日目

精神と時の部屋に入ってもうじき半年である。

この一ヶ月は『キン肉マン対策』で訪れた将軍様と、マンツーマンでのガチ特訓だった。

『生命力』を全開にしているのにちよくちよくパワー負けするって、どんな身体してんスカ将軍様。

そんなリアル『虎の穴』な厳しい修練の中でも嬉しいもある。

数ヶ月間死ぬほど鍛えまくったお陰で、界王拳の補助無しに完全版

地獄の断頭台が撃てるようになったのだ。

まあ、調子に乗って將軍様にお披露目したら『技の掛かりが甘い！そんな温い有様で、地獄の断頭台と呼べるかああああっ!!』と、オリジンを食らったわけですが。

あと、アレを食らった後でも鬨えるようになったのは、マジで成長だと思う。

そんなこんなでガチガチに扱しじかれた俺は、時に対戦でロビンマスクを血祭りに上げ、時にキン肉マンゼブラのマツスルインフェルノを口デオスキップからの地獄の断頭台で返すという、残虐ファイトを繰り返した。

そのお陰か、はたまた悪魔の呪いか。

ある時、俺には見えてしまったのだ。

そう、俺式地獄の断頭台の改良型が。

上手くこれを生み出す事ができれば、將軍様の神威の断頭台ほどではないにしろ、地獄の断頭台を越えるであろう技。

当然殺傷力も強化されるので、『技を出す＝相手の死』という図式は避けられないだろう。

……將軍様。

楽しみにしているのは分かりましたから、どっからとも無くテリーマンを拾ってこないでください。

え、技の練習台？

いやいやいやいや、鬨る前からキン肉マンと遺恨を残してどうするんスか。

『問題ない。遺恨など、私には十分にある』って、あるのは將軍様であって俺じゃないでしょう。

ほら、ナツコが妊娠してるとか言ってるし、逃がしてあげましようよ。

とまあ、こんな感じで將軍様が荒ぶる事もあったが、大きな問題は無く修行は進んでいる。

新型断頭台の開発の為にも、かんばるとしよう。

余談だが、テリーマンの訴えを聞いている時、恐らく生まれてくる

子の未来の姿である『テリー・ザ・キッド』の醜態が脳裏を掠めて、『このまま殺してやるのも慈悲か』と考えてしまったのは秘密である。

精神と時の部屋生活182日目

ついに、ここでの生活が半年を越えた。

今日からは今までとは別の修行へと移行する事となった。

分かりやすく説明すると、『無限の闘争』が持つ並行世界や異世界の因果を利用して、別の世界に出稽古に行くというのだ。

発案者はもちろん將軍様。

曰く、『擬似的な死があるとはいえ、命が保障されている場所で修行を続けるのは甘い』のだそうだ。

という訳で、俺は將軍様が用意したワープゲート（悪魔六騎士戦の序盤で使われた、洞窟を模したセットそっくりだった）に飛び込む事と相成った。

洞窟の入り口には、『触手地獄』だの『●●地獄』だのと六種類の地獄が銘打たれていたのだが、俺はその中から『獅子王地獄』を選んだ。格闘ゲームで『獅子王』といえば、名門格ゲーメーカーSNKの異端児『風雲黙示録』のラスボスである『獅子王』だろう。

ボクシングと剣術を組み合わせたまったく新しい格闘技を使う男で、オーブニングに出てくる顎がしゃくれたあまりに濃い顔は、主人公シヨー・疾風はやての五月蠅い雄叫びと相まって、格ゲーマニアの中では屈指のネタになっている。

言うまでもないことだが、奴は『無限の闘争』にも登録されている。俺としても手合わせを楽しみにしていたのだが、今までその機会は巡ってこなかった。

この『獅子王地獄』は、そんな俺に神様がくれたチャンスだろう。『風雲黙示録』は勿論の事、『ネオジオバトルコロシウム』の獅子王とも闘えるかもしれない。

もしかしたら影武者と本物を相手にした、ハンディキャップマッチが待ち受けている可能性もある。

ん、そんなに獅子王が好きなのかって？

好きだぞ、ネタ的な意味で。

あんな濃いキャラとやりあうなんて、ある意味得がたい経験だと思うし。

まあ、『風雲黙示録』自体は一回しかやった事無いんですけどね。そんな期待に胸を膨らませながらトンネルを抜けると、そこは一面の荒野だった。

赤茶け、ひび割れた大地にペンペン草のようなものしかない植物。見れば、ところどころに爆撃されたようなクレーターまであった。獅子王城に出るものと思っていたので内心がっかりしていると、なんか修羅の国のボロみたいな格好をした一団に襲われた。

これが命をかけた実戦なのか、とグレートホーンを開幕ブツパしたら、一瞬で全員ミンチになった。

てつきり、ボロの衣装を脱ぎ捨ててシヤチのような奴が出てくるものと思っていたのだが、当てが外れたらしい。

周辺を確認する為に舞空術で空を飛んでみると、目に入ってきたのは実に奇妙な地形だった。

周辺の殆どは荒野が続き、右手に見えるのは砂漠とピラミッド、左手には謎の白い城塞都市。

正面をそのまま行っただころにある山岳地帯には、少数の集落が見て取れた。

はて『風雲黙示録』に山岳地帯やピラミッドがあっただろうか？

などと首を傾げていると、下から見知った気配を感じた。

上がってきたのはヴァーリだった。

何でいるのか問えば、面白そうな事をやっているのが見えたから、俺に続いて飛び込んだとの事。

まったく、こういう事にかけては鼻が効く奴である。

地面に下りれば美猴やアーサー、玉藻までいたので同行を許可した。

周囲を確認したが、目指すのはやはり白亜の城塞都市『獅子王城(仮)』だろう。

あそこにいけば獅子王が出てきて、影武者と共に俺達を『ダイナマ

イツ』してくれるに違いない。

そうと決まれば腹ごしらえだ。

まずは食材を現地調達しないと。

閑話 『獅子王・地獄変（1）』

皆さん、こんにちは。

現在、空の旅人になっている姫島慎です。

この獅子王ワールドが思った以上に広いうえ、歩いていると先ほどのボロが襲ってくるので空中散歩と相成ったわけだが、これはこれだと思つた以上に快適である。

………視界の隅をチラチラと飛ぶUFOが無ければ、最高だったんだけどなあ。

美猴^{びこう}は筋斗雲、ヴァーリは『デイベイン・デイベイディング白龍皇の光翼』、俺は舞空術で空を駆けている。

飛べないメンツはアーサーが筋斗雲に相乗りし、玉藻は俺が背負っている。

しかし、背中に玉藻がベツタリ引つ付いてるのに何も感じないだが、男としてこれはどうなのか。

もちろん、玉藻に魅力が無いわけじゃない。

顔も美人だしスタイルだって女性的だ。

街を歩いていたら、ナンパとかスカウトとか山ほど来ると思う。

それでも、ドキドキするとか顔に血が昇るとかつて事にはならんよ。

……改めて考えてみると、俺の恋愛観ってどうなっているんだ？

ガラじゃないけど、自己分析してみるか。

学校の変態三人組のように、『チチッ！ シリッ！ フトモモッ!!』なんて感じにガツつくのは無理だ。

かと言って、アベックみたいにいチャイチャしたいとも思わん。

俗に言う新婚さんの甘い生活も食指が動かない。

いやはや、随分と歪んだもんだ。

女自体に興味が無いわけじゃないから、不能って事は無いと思うなら、俺が望んでるモノってなんだ？

……

……

……そうだ、あれだ。

縁側や居間で茶を飲みながらゆっくりしたり、ゆっくり温泉なんかを旅行したり、一緒にいてホッとできたらいいんだわ。

……えくと、我が事ながら何ともアレな好みだな、おい。

なんか定年間近のおっさんみたいだぞ。

……いや、別におかしい事じゃないかも知れない。

前は二十歳過ぎで終わったから、今の年齢プラスしたらアラフォー寸前だし。

今生だってガキの頃から姉妹背負ってたから、異性なんて言ってる余裕無かったしなあ。

草食系ならぬ干し草系男子になったっておかしくないのか？

しかし、干し草系か。

これって玉藻的にはどうなんだ？

こっちに來てからずっと好意を向けてくれてるけど、しっかりとした返事はしていない。

厄介事が起こりまくってそれどころじゃなかったからなんだけど、2か月以上放置するのはさすがに誠意に欠けるだろう。

肝心のどう思っているのかってトコだけど、好意は持ってるのは間違いない。

一緒にいても疲れないし、アピール過多に見えるけど一線は超えようとしないうし、ある程度以上になると絶対にこっちの同意を求めてる。

何気に無茶苦茶頭もいいしな。

自分の立場のややこしさを考慮に入れても、結婚相手としては一番だと思う。

ん、打算で結婚していいのかって？

別に打算だけってわけじゃないぞ、色々加味して嫁になってもらえたらって思ってるし。

これから一生を共にするんだから、ある程度の計算だって必要だろ。

それに恋愛からの結婚って大変なんだぞ。

実際に暮らしてみたら、お互いのアラが見えて幻滅するとか。

それを思えば、もう一緒に住んでるからある程度のアラは見えてるだろうしな。

本気で嫁に来てもらうとなったら、お互い対応も変わるだろうし。

まあ、問題は俺がこう思っているけど、むこうはどうなのかってころなんだが。

なんせこんな性分だから、乙女が望むような事はとんとしてこなかったからなあ。

『玉藻さんや、今いいか?』

玉藻と繋がっているパスを通して言葉を念じてみると、背中越しにピクリと玉藻が反応するのが解った。

意図的に使うのは初めてだったが、念話はちゃんと機能しているらしい。

『どうしました、ご主人様? 念話をつかうなんて珍しい』

『結構な速度で飛んでるからな。それに、周りに聞かれたくないし』

『周りに聞かれたくないこと……! それってもしかして告白ですか!?! 愛の囁きだったりいたしますかっ!!』

『まあ、それに近いかな』

此方の答えに、きつく抱き着いていたはずの腕から力が抜ける。

『えっと……本気ですか?』

『こんな時に言うなんて風情もムードも無いとは思う。けど、今の内に答えとかないと二度と言えなくなるかもしれないからな』

『ご主人様……』

『こっちの神ならグレートレッドが相手でも負ける気はしないが、今回の相手は『無限の闘争』の脱走者だ。奴等だと絶対はないし、現実で負けたらそれでアウトだからな』

『……』

『玉藻が最初からこっちに好意を向けてくれてるのは分かっている。こっちの都合で答えを先延ばしにして勝手だとは思うけど、それ

にはちやんと答えたいと思うんだ』

『はい』

帰って来た返事にいつもの陽気さは無く、代わりに真摯な思いを感じた。

こんな勝手な男に、まったくもってありがたい事である。

『あー、なんついたら良いんだろうな。巧い言い方は思いつかないんだが、玉藻には好意を持つてる。ぶっちゃけると、そっちが良ければ嫁に来てほしい』

脳をフル回転させて絞り出したのだが、ごらんの有様である。

だがしかし、こんな言葉でも玉藻が息を飲むのが分かった。

『え……でも、ご主人様はそういう素振り全く見せなかったのに……』
ですよー。

『その辺はすまん。いろいろスレちまってな、同年代に比べて物凄く枯れてるんだよ。だから、『好きだッ！』って叫んだり、抱き合ったりっていう直接的にな愛情表現は思いつかんかった』

『は、はあ……』

なんか呆れられたような気がするが、これが俺なのだから仕方が無い。

『だからさ、もし一緒になくても縁側でゆっくり茶を啜ったり、温泉街とか旅行するなんてスローライフになると思う。もちろん愛情表現は頑張るし、子供が出来たら家族サービスもしっかりするけど』

うん、我ながらこれはヒドい。

枯草系の俺でもわかる。

もし恋愛に赤ペン先生がいたら、答案用紙が真っ赤になるほどの修正の嵐だろう。

しかも、なんか途中からプロポーズになってるし。

いやまあ、これからの事を考えたら早めに身を固めるのが正解な気がするからいいけど。

この戦争が終わったら、なんか変な政略結婚とか飛んできそうで怖いし。

『えつと……。これってプロポーズと受け取っていいのでしょうか

？』

『法律やら家の事情やらで、籍を入れるのは大学出てからになるだろうから、正確には婚約かな』

『よろしいのですか？ 私、自分で言うのもなんですけど、もの凄く嫉妬深いですよ？ 浮気は許せませんし、ハーレムとか一夫多妻制とか、二次小説にありがちなウッフ展開なんてもつての外です』

『いや、俺そんなモテないから。浮気する甲斐性なんて無いし、ハーレムとか論外。嫁貰って子供出来たら、それでキャパはいっぱいはいです』

『だいたい、今まで俺に女の影とかありましたか？』

『あつたのはヴァイオレンスと策謀と、超人レスリングだけですやん。』

『そうでした。どれほど力を持つと、ご主人様は小市民ですものね』
後ろから鈴を転がすような笑い声が聞こえる。

『少しは場の空気が解れたかね。』

『そういう事。俺に似合うのは四畳半で慎ましく暮らす幸せだよ。だからさ、そいつに付き合ってくれるか？』

『喜んで。不束者ですが、未永くよろしくお願いします』

『ありがとう。この戦争が終わったら、家族にも言って正式に場を整えるから。それまでちよつと待っていてくれ』

『ご主人様、それって死亡フラグです』

……台無しです、玉藻さん。

『まあ、もし亡くなったとしても、お母様と一緒に黄泉路から呼び戻しますけど』

『大丈夫。その前にギルからパチツた『リザレクション』がある』

『そうそう死ぬわけにはいかないのです、この辺に抜かりはないのだ。』

『おーい、お前等！』

玉藻との会話が一段落すると、美猴から声がかかった。

ニアミスしないように距離を取ってるから、叫ばないとお互いの声が聞こえないのは不便だ。

『どうしたあー！』

「なんかなあ！ 下でジジイの名前を呼ぶ悲鳴が聞こえたんだけどよおー！」

「ジジイって、齊天大聖様かよ!?」
「そうだぜい!!」

「妙ですね。悲鳴を上げるにしても、あの方の名前なんて呼ばないでしょう」

ふむ……たしかに。

けど、異世界には英霊召喚なんてものもあるし、あり得ないとも言い切れないんだよなあ。

「もしかしたら、縁者か何かがいるのかもしれんな！」

「ジジイの縁者あ!? いったい誰なんでい！」

「わからん！ けど、様子くらいは見に行つた方がいいんじゃないかねえか!?」

俺の言葉に美猴は少し考えるそぶりを見せた後、筋斗雲の舵を大きく右に切る。

「悪いねえ、お前等！ ちよつと寄り道してくぜい!!」

もちろんこちらも異論はない。

筋斗雲の描く雲の軌跡に沿って飛ぶこと数分、荒れ地から砂漠地帯に差し掛かったところで、地上で誰かが戦闘を行っているのが見えた。

襲われているのは、錫杖を手にした僧衣に似た露出の高い服を着た黒髪の女に、弓を片手に片袖をもろ脱ぎにした緑の髪かほの鎧武者。

どうも二人は負傷者を庇かばっているらしく、その場から動こうとしない。

感じる気配がデイルムツドやリリイ嬢と同じなところを見ると、この二人も英霊という奴なのだろう。

という事は、ここでも聖杯戦争って奴が行われてるのかもしれない。

対する襲撃者の方はって、オイオイ……。

「なんでビホ……じゃなかった。鈴木土下座工門すずきどげざえもんとレイザークローウが
いんだよ」

そう、二人の周りで円を描きながら襲い掛かろうとしているのは、『無限の闘争』に登録されている怪物だったのだ。

あらゆる魔法を視線で封じる鈴木土下座エ門に、アーケードゲーム『エイリアンVSプレデター』の二面のボスにして、初心者殺しの異名を持つ変異体エイリアン、レイザークロウ。

なんで目玉野郎の名前が変わってるのかって？

知っておくといい、世の中には『版權』というものがあるのだよ。

『MUGEN』やってて今更とかは、言わないお約束だ。

「慎、あれは『無限の闘争』の敵だな」

ヴァーリの問いかけに肯定の意を示す。

周りを見れば十数匹のエイリアン・ウォーリアーの死骸も確認できた。

というか、ほとんど矢が刺さって死んでるし。

弓矢でエイリアン倒すとか、あの武者すげえな。

「ああ。両方とも凶悪な生物だから、現地の人間の手には余るだろうな」

「ならば、彼らに手を貸す事にしましょう！」

「あ、バカッ!？」

言うが早いか、制止する間もなくアーサーは筋斗雲から飛び降りてしまった。

抜き放ったコールブランドを大上段に構えて落下するアーサー。

奴が狙うのは、異常発達した剃刀の様な爪を構えて突進するレイザークロウだ。

アーサーの行動のお陰で、僧衣の女を斬り刻もうとしていた爪はその寸前で肘から断ち切られた。

「きやああああっ!？」

「ぐああああああっ!？」

「三蔵!!」

しかし、レイザークロウの傷口から溢れ出した血を浴びた二人は、血が付着した個所から白煙を上げながら崩れ落ちてしまう。

アーサーの奴、やっぱり奴等の血が強酸だって事を知らなかった

か。

「俺は二人の治療に行くから美猴は目玉の相手を、ヴァーリと玉藻は爪ヤロウを炎で焼き払ってくれ」

「任せろ！」

「承知いたしました！」

「了解だぜい！」

玉藻を背負ったままパワーダイブで急降下した俺は、地上に着くと同時に玉藻を降ろすと二人の元に駆け寄った。

「お主らはいったい……」

「悪いけど話は後だ！俺の連れが奴等を押さえてる内に二人を治療する!!」

「お……おう！」

戸惑う鎧武者はこちらの一声で戦線に戻ってくれた。

傷口を押さえて呻く二人の手を退けて具合を診ると、女性は二の腕と胸元、至近距離にいたアーサーは左頬と右腕に浴びていた。

着衣のある場所は表皮が溶ける程度で済んでいるが、素肌に直で浴びた箇所は肉にまで達している。

「六根清浄急急如律令!!」

素早く呪しゅを唱えて傷口を清め、『トワイライト・ヒーリング聖母の微笑』で治療を行う。

『生命力』を修めた事で強化された治癒の力は、今までの倍近い効果を発揮して急速に二人の傷を治療していく。

「炎天よ、疾れ!!」

「吹き飛ば、ヴォルカニックヴァイパー!!」

ヴァーリと玉藻の声と共に爆音が木霊し、ここまで熱が伝わってくる。

というかヴァーリの奴、一撃必殺の他にもソルの技を覚えたのかよ。

「二人共、具合はどうだ？」

皮膚まで再生したのを確認して、俺はアーサー達に声を掛ける。

「ありがとう。ちよつとかゆみは残ってるけど、痛みは無くなったわ」立ち上がって傷が癒えた腕をグルグルと振り回す女性とは裏腹に、

アーサーは暗い顔で俯うつむいたままだ。

「面目ない、不覚を取りました」

小さくこちらに謝罪するアーサーに、俺は頭を振る。

「謝るのはこっちだ。奴等と闘った事のある俺達が、先に情報を伝えるべきだった」

生物の血液が鉄をも溶かす強酸だなんて思わんだろ、普通。

まあ、神話時代の怪物や幻獣にはそんな奴等もいたらしいけど。

「バンディットリボルバーッ!!」

ヴァーリの気合で戦場に視線を戻すと、空中に吹き飛ばされたレイザークロウの頭部を、脚部限定展開された白龍皇の鎧が打ち砕いていた。

ラデイカル・グッドスピードで踵落としかか、まさに鬼の所業だな。

しかも邪王炎殺拳の応用で全身に高熱を纏まとって、飛んでくる返り血を防いでるし。

いやはや、レーザークロウ程度ではもう相手にならんか。

まあ、前に俺とエイリアンの巢を潰してるから順当と言えば順当なんだけど。

さて、一方の美猴はというと鎧武者の矢の支援を受けて土下座エ門に肉薄。

如意棒の中心を掴んで激しく回転させる『旋風棍』で相手を打ち上げると、『そんじゃトドメといくぜい!』という掛け声と共に如意棒がしなるほど強く地面に突き立て、思い切り振り上げる。

齐天大聖様譲りの膂りよりよく力で擦り付けられた如意棒の端からは、氣と燐そして摩擦熱によって巨大な火柱が生じ、打ち上げの一撃で両断された土下座エ門を消し炭に変えた。

あれってビリー・カーンの超必殺技『殺棍さつこん・大焦熱だいしょうねつ』だよな。

あいつ、三節棍に変形させる必要のない技を選んで修得してるのか。

「こっちは片付いたぞ、慎」

「アーサーの様子はどうだい?」

「治療は済んだ。もう傷跡も「悟空! やっぱり悟空なのね!!」

戻って来た三人に怪我人の容態を伝えようとする、それを遮って僧衣の女が美猴に走り寄る。

「ちよっ!? 誰だいあんた!？」

「え〜! お師匠様の事、忘れちゃったの!? なによそれ、仏罰モノよ!!」

いきなり飛びつかれてドン引きの美猴と、その言動にプリプリと怒る女性。

待てよ、彼女は今なんて言った?

美猴を悟空と呼び、自身をその師匠と称する。

そういえば、さっきの鎧武者は彼女を『三蔵』と呼んでいた。

……マジで?

本当にこの軽そうな女性が、かの高僧なの?

「あの……貴女はもしかして玄奘げんじょうさんぞう三蔵法師様でしょうか?」

「そうよ。名乗ってないのに分かるなんて、あたしの徳の高さにじみ出ちゃったかしら……」

……マジでした。

ちなみに同じ神官職として言わせてもらいますが、徳なんて全く感じません。

むしろその恰好と性格で仏僧だって分からせるのは、かなり無理があると思います。

「この姉ちゃんがジジイの師匠!? 嘘だろ! 聞いてた話と全然違うじゃねーか!!」

いつもの間延びした口調も忘れて驚嘆の声を上げる美猴。

目の前の女性が三蔵法師だと言われれば、そりゃあ驚くわ。

「三蔵? 誰だ?」

「あとで教えてあげますから、あなたは黙っていてください」

相変わらず闘争にしか興味が無いのか、首を傾げるヴァーリをアーサーが宥めている。

三蔵法師を知らんとか、かなりヤバいんじゃないかなろうか。

……やっぱり学校に行かすか。

「ジジイって、貴方悟空じゃないの?」

「オレツチは美猴。齊天大聖・孫悟空はオレツチの爺さんだよ。だいたい、猿丸出しのジジイとハンサムなオレツチを間違えるとなんて、失礼にも程があるぜい」

いや、齊天大聖様の方が渋い。

一度お会いしたけど、あの男の渋さを保ったまま年を取った雰囲気と達人のオーラは若造のお前には絶対に真似できん。

「へえー、悟空のお孫さんなんだあ。だったら、貴方も私の弟子よね！」

「へえあ!?　なんでそうなるんではない!!」

「なんでって、私は貴方の御爺様のお師匠様。御爺様より偉いんだから、従うのは当然でしょ?」

「ふざけんなあ!?　ジジイはジジイ、オレツチはオレツチでい!　身内の宿縁に巻き込まれてたまるか!!」

「ぎゃーてえっ!!　悟空の孫なら私の弟子も同然でしょ!　あと、御爺様の事をジジイなんて言っちゃダメ!!」

「むこうは何やら不毛な会話をしておるのお。それよりも、お主は腕の立つ陰陽師と見た。悪いがこの二人を見てやってくれんか?」

言い合いを始めたサルと三蔵法師にゲンナリしていると、先程の鎧武者が声を掛けて来た。

視線を移せば、両脇にぐったりとした少年と少女を抱えている。

どういう症状かは分からないが、こんな砂漠では満足な対処は出来ないだろう。

「分かりました。ここではなんですから、場所を変えましょう」

そう言った俺は、『無限の闘争』の個人倉庫から以前のツアーでも使用したロッジ型のカプセルハウスを取り出す。

スイツチを押して家を展開すると、鎧武者は大層驚いていた。

「これはたまげた。お主、陰陽道だけではなく妖術も使うのか?」

「これはこういう機能が付いた家なんですよ。それよりも二人を中に」

「うむ」

外にいるメンツに一声かけて家に入った俺は、来客用の寝室に二人

を寝かせるように指示を出す。

怪我人の一人は俺と同年代の燈色の髪をした少年。

前髪の一部が白髪になってたり、皮膚がところどころ褐色になっているのは気になるが、それは後回しだ。

身体中に大小様々な外傷はあるが、出血も止まってるし傷も半ば塞がってるからこれが原因じゃない。

他に異常があるとしたら、体温が高く皮膚が赤くなっている事か。それに反して汗がほとんど出ていないところを見ると、熱中症と思つて間違いないだろう。

砂漠で行き倒れていたんだから、おかしい話じゃないよな。

もう一人の患者である9歳くらいの黒髪の少女も、少年と同じ症状だった。

氣の巡りや顔色からして、女の子の方は少年より症状はかなり軽いようだ。

ここには点滴や専門の道具は無いので、対処療法として冷房を効かせて服を緩めて楽な姿勢にする（当然、女の子は玉藻にやつてもらった）。

そして頭と両脇に氷枕を挟んで身体を冷やし、唇の周りを湿らせるようにゆつくりとスポーツドリンクを与える。

出来ればもつとしつかり水分補給したいのだが、意識が無い状態では氣道に入ってしまう恐れがある。

唇に少し垂らせれば無意識に舐めとつているので、このまま氣長に与えるしかないだろう。

「いろいろとすまんな。助けはしたものの、我等だけでは手の打ちようが無くて途方に暮れておったのだ」

「気にしないでください。怪我人を見捨てるのはこちらも氣が退けますので。あ、申し遅れました。俺は姫島慎と言います」

「おお！ 名乗りがまだであったか。俺は俵籐太、この地に呼び出されたしがない武芸者よ」

豪快ながら人好きのする笑みを浮かべる俵氏に、俺は内心で驚いていた。

俵籐太。

平安時代の人物で、三上山の大百足や百々目鬼どどめきを退治したという逸話を持つ武将だ。

彼は後に『藤原秀郷』と名を変え、新皇『平将門』を討つたと伝えられている。

「ところで、お主はこの地の者ではあるまい。何故ここに来たのだ？」

「それは——」

答えを返そうとした時、小さくうめき声をあげて少年が目覚ました。

「……は……？」

小さな眩きと共にぼうつと天井を見つめる少年。

これで意識や記憶に問題が無ければ、大事に至ることは無いはずだ。

「ここは俺の別荘みたいなものだ。それより、自分の名前はわかるかい？」

声を掛けてやると、少年は虚ろな雰囲気が抜けない琥珀色の視線を此方に向ける。

何処かで見えた顔立ちだと思ったら、どことなく冬木で出会った藤丸立香嬢に似ているのだ。

「俺は……衛宮えみや……士し……郎ろう……美遊みゆうは……？ 妹……は……？」

「妹御とは、一緒にいた9歳くらいの黒髪の女子か？」

問いに問い返した俵さんに、衛宮君は小さく頷く。

「それならお主の隣で寝ておる。砂漠の熱にやられたようだが、この御仁が良く処置をしてくれた。お主が目覚めたのなら、あの娘も大事あるまい」

「あんだ……は……？」

「この人は俵籐太さん。砂漠で行き倒れたあんだ達を助けたのは彼だ」

こちらの言葉に体を起こそうとする衛宮君を、俵さんは苦笑いで押し止める。

「よせよせ。お主は先ほどまで茹でダコ同然だったのだ。妹御の為に今は体を休めるがいい」

「ありが……とう」

「うむ」

俵さんが満足げに頷くと、今度は美遊嬢が瞼を開けた。

「美遊……」

「お……兄……ちゃん」

衛宮君の呼びかけに美遊嬢はか細いがしつかりと返事を返した。

これならば問題はあるまい。

「これで一安心だな」

「ええ」

呵々^{かか}と笑う俵さんに返事を返した俺は二人の枕元から腰を上げる。

「衛宮君。脱水症状寸前だったあんた達に必要なのは、身体を冷やす事と水分を取る事だ。ここにスポーツドリンクと水を用意してあるから、身体が満足するまで飲んでくれ。それで、飲んだ後はぐっすり眠る事。妹さんも同様だから、体調が戻るまでしつかりと休むようにな」

二人が頷くのを確認して、俺は俵さんと共に部屋を後にした。

◇

あれからお互い何の話もせず一日が経過した。

何故かという^と衛宮君達の治療を終えた時にはすでに、三蔵ちゃん（もうこう呼んでくれる）がベッドの一つを占領して夢の世界に旅立っていたからだ。

何度起こそうとしても無し^{つぶて}の礫^{つぶて}な三蔵ちゃんに白旗を上げた俺達は、仕方が無いので全員休むことにしたのだ。

その際、食材を俵さんが用意してくれたのには助かった。

担いでいた俵から米はもちろん、魚や野菜がドサドサ出てくるのは圧巻の一言である。

さて、時計は昼前の11時を指している。

俺達と三蔵ちゃん一行、体調が回復した衛宮兄妹はリビングに集まってお互いの事を話していた。

俺達が異世界から武者修行に來た武芸者である事。

三蔵ちゃんと俵さんがここで行われている聖杯戦争に呼ばれた、はぐれサーヴァントである事。

そして衛宮兄妹が俺達が訪れたのとは違う、平行世界の冬木で行われた聖杯戦争の勝者であり、願望機である美遊嬢に平穩を与える為に聖杯の力で世界を超えた事。

三者三様の事情を聞いて、俺は思わずため息をついた。

「また聖杯戦争か。あの冬木で妙な縁でもできたのかねえ」

「お前が蹴り殺した悪魔が言っていたな。奴等の王によって人理は燃え尽き、人類は滅亡したと。もしかしたら、奴を殺った事でその王とやらに目を付けられたのかもな」

「たしかレフ・ライノール・フラウロスだったか。奴の言うフラウロスが72柱のそれなら、王つてのはソロモンって事になるか」

「だとすれば猶更だ。お前はそいつに祝福を与えた神を殺そうとしているのだからな」

ヴァーリの指摘に俺は思わず唖ってしまふ。

なるほど、そういう考え方もあるか。

奴もなかなか味な事を考えやがる。

「面白い奴だな、気に入った。殺すのは最後にしてやる」

「ちよつと待った！ 姫島達も聖杯戦争に関わった事があるのか!？」

それにソロモンとか悪魔とか、神を殺すとかってどういう事なんだ！」

絶賛混乱中の衛宮君にこちらの事情を掻い摘んで説明してやると、なんか顔色が青くなったり赤くなったり、真っ白になったりと大変なことになった。

「ちよつと待ちなさいー！」

押し黙ってしまった衛宮君に代わって、声を上げたのは予想通りの三蔵ちゃんだ。

「神様を殺めるなんてそんな罰当たりな事、許されると思っているの!?!」

「少なくとも三蔵ちゃんの信じる御仏には許してもらえらるだろうな。大日如来様も今回の戦に参戦するって聞いたし」

「ウソツ!?!」

「ホント。俺等の世界では、それだけ聖書の神は嫌われてるんだよ。ウチの知り合いは聖書の勢力の関係者が多いから、元凶を潰さんと風当たりが強くてまともに生活も出来ないのさ」

「それはまた難儀なことよな。だが、お主ら神殺しが為せるのか?」

「その為の武者修行だ。俺も魔王ルシファアの首を獲らねばならんのだな、ソロモン王とやらが出張ってくるのなら好都合だ」

「龍氣が漏れてるぜい。小さなお嬢もいるんだから、自重しな」

無駄にテンションを上げるヴァーリの頭を美猴が如意棒でこぞく。

覇龍を極めてからはちよつとした事で禁手化するようになったからな、この馬鹿は。

「神様にルシファアとか、もうスケールが違いすぎるな」

「聖杯や私の事がとつても小さく見える」

苦笑いを浮かべる衛宮君に、表情はあんまり変わっていないが驚いているのだろう美遊嬢。

「まあ、彼等は特別ですよ。なんせ私達の世界で一・二を争う実力者ですからね。私達、普通の人間には及びもしない世界に生きてます」

「ダウト」

さり気なくアーサーが俺達をダシにして普通アピールをしているが、そうはしません。

「ほぎけ、アーサー! 騎士王の子孫が何を寝ぼけた事を!」

「アルティメットシスコンなうえに、平行世界に干渉して二刀同時斬撃なんてできる奴が普通なワケねーだろ!」

「失敬な! ロキやポセイドンをボコボコにしたり超音速で動き回る貴方達に比べたら、私は十分普通ですよ!!」

「アホな事で言い合ってるじゃねーよお。それでこれからどうするんだ?」

む、情報交換だけで先の方針が全く決まっていなかったか。

「聖都とやらに攻め込むだろうか？　俺はチマチマと虫退治するなんて御免だぞ」

ヴァーリに言われてエイリアンの事を思い出した。

あれってこつちで自然発生した者なのか？

レイザークロウがいたところを見るに、俺等に関係しているような気がして仕方ない。

何故なら、昨日のレイザークロウは映画原作には登場しないゲームオリジナルの変異体だからだ。

まあ、『原生生物の遺伝情報を元にしてここで発生した』なんて可能性もあるかもだが、あそこまでゲームに忠実な姿をとられてはそれは無いと考えるべきだろう。

「そういや、その事もあったな。俵さん、昨日襲ってきた化け物について何か知らないか？」

「うん？　あの目玉の方か？」

「いや、もう一方の黒とか紫の方」

むむつ……と、顎に手を当てて思案する俵さん。

これはあまり期待できそうにないかねえ……。

「俺達も彼奴等についてはあまり知らんのだ。わかっておるのは数か月前からこの辺に出没するようになった事と、人を襲っては殺める、もしくは攫って行くことくらいか」

数か月前、か。

奴等がどれだけ繁殖しているか、考えたくないな。

「そういえば聖都の警備をしていた人たちは、奴等の事を『ピクト人』って呼んでたわよ」

続く三蔵ちゃんの証言に、思わず眉根が寄る。

ピクト人って、あれが人に見えるってどういう認識してんだよ。どう見たって化け物だろうが。

あ、聖都ってというのは俺達が獅子王城だっと思ってた白い城塞都市ね。

「なあ、一つ確認したいんだけど」

続いて手を上げたのは衛宮君だ。

美遊嬢が妙に怯えてるし衛宮君も顔が引きつってるんだが、どうかしたのだろうか？

「あの黒いのって映画とかに出た『エイリアン』だよな？」

あ、『向こう』にも有ったのね、エイリアン。

ホラー映画のモンスターが実在してるんだから、そらビビるわ。

「まず間違いない。特徴も完全に一致しているしな。問題は奴等がどうやってこの地に発生したのか、そして奴等の巣穴がどこにあるのか、だ」

「巣穴って、人間なら集落とか村じゃないの？」

ピクト人説を鵜呑みしているか、三蔵ちゃんが不思議そうに首を傾げる。

なんつうか、思った以上に純真だな、この人。

「あれは人間じゃなくて宇宙から来た生命体だよ」

「お主、あの化生けしやうが何か知っておるのか？」

「ああ。奴等是最凶最悪と言われる宇宙生物だ。その特徴は蟻や蜂のような社会的昆虫と同じく、女王を中心とした巣を形成すること。強靱な外骨格に強酸の血液、そして高い運動能力と槍のように先端が尖った尾を武器にする事。そして人間を初めとして生物に寄生して短期間に繁殖することだ。衛宮君もエイリアンの映画見たことあるんだろ？」

「ああ」

「だったら、奴等のヤバさはわかるよな。ここにどれだけの人間が住んでるかは分からないけど、ヘタをしたら『エイリアン2』の植民惑星みたいな末路を辿る可能性もある」

「……くそっ！　なんでこうなっちゃうんだよ！　美遊に普通の生活をさせたくてあの世界を捨てたつてのに……ッ!？」

「お兄ちゃん」

テーブルに拳を打ち付けて悔しがる衛宮君と、心配そうに彼に寄りそう美遊嬢。

うむむ……、罪悪感がパネエ。

「慎、何故そこまで虫を気にしてるのですか？」

「奴等の発生に俺達も無関係じゃなさそうなんだな、放っておくとケツの座りが悪いんだわ」

「なんだ、また虫退治か」

物凄く詰まらなそうにつぶやくヴァーリ。

お前はもう少し空気を読め。

「とりあえずは、な。腕試しをするにも、虫共にウロチヨロされたら鬱陶しいだろ」

「なら早く巣穴を見つけろ。俺が黒龍波で灰にしてやるから」

「はいはい。ヴァーリは向こうで飯でも食ってようぜえ」

場が変な空気になったのを察した美猴によって、リビングから連行されるヴァーリ。

うむ、やはりあいつの保護者はサルに任せるに限るな。

昼食を用意してくれてる玉藻の邪魔をしなければいいけど。

「お主、あの化け物共を斃した事があるのか？」

「ええ、過去に一度。今回も巣穴を見つければ処理するつもりですが」
愛想笑いでお茶を濁していると、きゆううつと小さく腹の虫が鳴った。

発生源である美遊嬢は、真つ赤な顔をしてお腹を押さえている。

そう言えば、昨日は熱中症でダウンしていたからまともな食事をし
てなかったな。

「ふむ。そこな娘の腹の虫が音を上げたのならば、小難しい話は中断
するしかあるまい。飯にするか！」

豪快に笑いながら、席を立つ俵さん。

これ以上は有益な情報も出そうにないし、ここらで切り上げるのも
手だろう。

俺が席を立った頃には三蔵ちゃんはおろか、衛宮兄妹もキッチンへ
と向かった後だった。

……みなさん、冷たいねえ。



夜である。

「衛宮君が玉藻に匹敵する腕前を披露した夕食も終わり、俺とヴァーリは屋根の上から周囲の警戒を行っている。」

「なんで俺とヴァーリなのかって？」

「奇襲を食らっても、絶対に死にそうにないからですが何か？」

「見張りの片方が俺に決まった時、玉藻が強硬に相方へと立候補を訴えていたがそれは自重してもらった。」

「いくら魔法障壁を得たと言っても、横にいるヴァーリとは違って彼女は壊れ物なのだ。」

「俺達のような自己再生機能付きの超合金と一緒にしてはいけない。」

「暇だぞ、慎」

「見張りを初めてまだ一時間なのに飽きてしまったらしく、ヴァーリはしきりにこう訴えてくる。」

「我慢しろよ。俺等が警戒を解いて、皆が奇襲を食らったら目も当てられないだろう」

「ふん。美猴達が虫如きにやられるわけがないだろう」

「あいつ等は大丈夫でも、美遊嬢や三蔵ちゃんがいるだろうが。虫共がコツチに出たのには俺等も噛んでる可能性があるんだから、しっかりと見張れよ」

「チツ、解っている」

「ブーたれながらも会話を打ち切るヴァーリ。」

「まったく、もう少し年相応の落ち着きつて奴を身に着けるってんだ。」

「ため息と共に視線を戻すと、視界の先にこちらへと向かってくる一団を見つけた。」

「先導しているのは髑髏ドクロの仮面を被った怪しい黒ずくめ、後ろにいるのは現地の難民のようだ。」

「そして、それを追っているのは白銀の鎧を身に着けた騎馬の集団。」

「イマイチ状況が見えんが、穏やかな展開になるという事は無いだろう。」

「ヴァーリ、下に行つて美猴を呼んで来きてくれ」

「何があつた？」

「現地民のいざこざみたいだ。難民らしき集団を騎士が追いかけてる」

「騎士か、おもしろそうだな！ 俺を楽しませる強者がいればいいが」
「揉めるの前提かよ。まあ、そうなる可能性もあるけど、あんまり期待しないほうがいいんじゃないかね。あと、俵さんたちに警備の交代を頼むの忘れんなよ」

ヴァーリが飛び降りると同時に、小屋に刻んでおいたマントラを触媒にして摩利支天まりしてんおんぎょういん隠行印を発動。

これで邪悪な存在にはこの小屋を認識する事はできなくなるはずだ。

美猴の襟首を掴んで飛び出してきたヴァーリと合流して、件の現場へと向かう。

「おい、慎！ なにがあつたんでい!？」

「現地住民と騎士らしき集団が揉めてるみたいなんでな、情報収集がてら様子を見に行くんだよ。ヴァーリから聞いてないのか？」

「聞いてねえ！ こいつ、いきなりオレッツチの襟首掴んで『行くぞ』の一言で引つ張つてつたんだ!!」

「おいこら。お前、ちゃんと俵さんやアーサーに警備の引継ぎ頼んだんだろうな?」

「……………問題ない」

ヤロウ、忘れてやがったな。

「大丈夫、大丈夫。その辺は出る前にオレッツチが頼んどいたから」

「さすが。伊達に長年ヴァーリの保護者やってないな」

「おいやめろ」

そんな嫌そうな顔すんなよ。

ヴァーリの奴が地味にヘコんでるじゃねーか。

さて、俺達がある程度まで近づいた頃には、難民達は騎馬集団に包囲されていた。

それはいい。

馬と人では足に差がありすぎるから当然だから。

俺が突っ込まねばならないのは、騎士の中にしれつと混じっている柔道着を着た山人間だ。

……何してるんすか、マウンテン魔雲天先輩。

彼こそは原作において、キン肉マン達正義超人への悪魔超人側の刺客として送り込まれた7人の悪魔超人の一人、ザ・魔雲天である。

柔道着を着た山そのものといった姿が示す通り、パワーと1tもの巨体を武器にしている。

あと、ゴールデンキャツスルにおける俺の先輩でもある。

他の騎士は全員馬に乗ってるのに自分だけ走ってきたせいか、なんかメツチャ息切らしてるんだけど……。

そんな姿見せてたら、また將軍様に絞られますよ？

おっと、思いがけないところに知り合いがいたせいか、話が脱線してしまった。

この状況では逃げられないと判断したのか、黒づくめの髑髏仮面は懐から取り出した黒塗りの短刀を、騎士の首領格である赤髪のロンゲ野郎に投げつける。

どんな組織でも頭が倒れれば指揮系統は混乱する。

あの髑髏仮面はその隙をついて一人でも難民を逃がす腹積もりなのだろう。

しかし眉間と喉へと飛んでいた短刀は、赤髪が腰の下げた豎琴を鳴らすと二つに裂けて地に落ちた。

「むう、あれは……ッ!？」

「知っているのか、慎!？」

「あれは中国に伝わる伝説の秘技、こきんはどうけん古琴波動拳!」

古琴波動拳

それは中国の宋の時代に編み出された武術である。

張り詰めた琴の弦を特殊な技術で弾く事で大気中に真空波を生み出し、離れた対象を一撃の下に斬り捨てる。

その攻撃方法は幅広く、斬撃はもとより槍による刺突や弓矢、さらには斧による断撃までも再現できたという。

達人ともなれば放たれた波動は武器を幻視させ、その奥義は一軍の攻撃にも匹敵したといわれている。

当時の有力者が開く宴には琴は不可欠なものであり、それ故にこの拳の使い手は優れた暗殺者になりえた。

この拳法の脅威と実際に行われた多大な有力者の暗殺から、時の皇帝は人前で琴を弾くことを禁止。

同時に朝廷軍による使い手の摘発が行われた事によって、この拳の使い手は潰えたと言われている。

『民明書房刊 中国奇拳・妙拳大全集』我が魂のビートを聞け!!』より。

「ほう、さすがは中国4000年。そんな技が開発されていたとは」

「嘘付け。そのなんとら波動拳って、この前観た『カンフーハッスル』で出てた奴、そのまんまじゃねーか」

「バレたか」

ヴァーリは騙せても美猴は無理だったらしい。

奴は中国名物のキンシコウだからな、この手の話題には引つ掛からんか。

「ちよつと待て! なら、さっきの民明書房という、もっともらしい文献はなんなんだ!」

「ん? 即興ででつち上げた」

「なん……………だと……………」

「俺の冗談はともかく、あの赤毛君が琴で攻撃しているのは確かなんだ。後学のために見に行こうぜ」

「ちよつと待て。情報収集が目的じゃなかったのかよお!」

「俺達の本来の目的を忘れたか? 知らない技を見ることが情報収集だろうが」

「確かにそうだ。よし! ならば、奴からあの飛ぶ斬撃を奪ってやろうではないか!!」

ワナワナと震えてショックを受けていたはずなのに、あっさり立ち直るヴァーリ。

お遊びもここまでにしてそろそろ行かんと、向こうで人死にが出た

らややこしいからな。

テンションを上げるヴァーリを連れて一団に近づくと、状況は『深手を負って跪く髑髏仮面と、それを見下ろす無傷の赤毛』という構図へと変化していた。

「どうやら間に合ったらしい。」

「……………ここまでか」

上空から事態の推移を確かめていると、髑髏仮面が呟いた諦めの声が耳に入った。

見れば、欠けた仮面から覗くその目から、意思の光は薄れていくのが分かる。

「これだけの同胞を連れて逃げ延びるのは不可能。……………不覚、そして無念なり。万事、ここに休した」

降伏宣言とも取れる髑髏の声に、赤毛がゆっくりと口を開く。

「……………悲しい。私は悲しい、山の翁よ」

「あいつ、悲しいと言っているが、まったく表情は変わってないぞ」

「あの糸目、妙に胡散臭いぜい」

後ろの二人、同感だがうるさい。

「貴方一人ならば、窮地を脱するのは容易い。……………しかし、貴方は運命を受け入れた」

赤毛の言葉に髑髏仮面は沈黙で返し、後ろの難民達は悲しげに『ハサン様』と跪く己が守護者に呼びかける。

「貴方の背後で怯える聖地の人々、彼等難民を護る為に貴方は残り続けるのですね」

そう続けながら、髑髏仮面から難民へと視線を移す赤毛。

細められたその目からは、情というものが一切感じられない。

「行くぞ、お前等」

「ああ。あの糸目、難民を皆殺しにするつもりようだ」

「オレッチ達には関係ないが、目の前でやられちゃあ飯が不味くなるからなあ！」

ヴァーリを先頭にして一気に地表へ加速する俺達。

「価値無き者を護らんと、価値ある者が失われる。……………私には、そ

れが悲しい」

「はい、ダウトオオオオオッ!!」

赤毛が竖琴に手をかけようとした瞬間、ヴァーリの急降下キックが奴の顔面に炸裂する。

キリキリと錐揉み回転する赤毛を尻目に、地上に降り立つ俺達。赤毛の後ろに控えていた騎士達は、一斉に得物を抜いてこちらに向ける。

「不意打ちとは卑怯なツ!? 貴様等、何者だ!!」

「通りすがりの武芸者だよ。取りあえず、その嘘松にツツコミを入れさせてもらった。それより——」

ガタガタ騒ぐお供の騎士から、後ろで笑っている魔雲天先輩に視線を向ける。

「魔雲天先輩、そこにいるのは將軍様の命令ですか?」

「グフフフツツ、その通りだ。命がけの闘いで、お前の力を試せとな」

先輩の返答に、俺はしかめっ面を浮かべてしまう。

將軍様もエグイことをする。

俺が身内に甘い事を知っていて、あえて先輩をぶつけて来たな。

むこうの意図は、敵に回った『知り合いを容赦なく打倒できるか』つてところか。

今の俺に必要な覚悟じゃねーか、まったく。

「將軍様の意図に気付いたようだな」

「ええ。本当によく見えますよ、あの方は」

「グフフツツ。そんな方だから忠誠を誓っているのさ、俺達もな。分かっていると思うが、手加減は無用だぜ」

「勿論っすよ」

「あと、ここでのオレはサー・ベイリンで通っている。お前もオレの事はベイリンと呼べ」

柔道着の襟を直しながら笑う、魔雲天先輩改めサー・ベイリン。

いやいや、サー・ベイリンって円卓の騎士じゃねーか。

それは無理有り過ぎだろ。

あの人、円卓とか騎士とか通り過ぎて人間ですらねーよ。

「なに言ってるんスカ。先輩は騎士に処刑された側でしょうに」

「相変わらず遠慮のない野郎だ。だが、心配すんな。円卓の騎士ってのは、仲間内で揉めまくりやいいのだから？俺も悪魔超人、その程度の事は朝飯前だぜ」

途轍とてつもない偏見だが、全部が全部間違っていないのはツライところだ。

「サー・ベイリン！あの狼藉者ろうぜきを知っているのですか!？」

「グフフフツ、奴はかつて私と共に武を学んだ者だ。まさか野盗に身をやつしてるとは思わなかったがな」

……嘘だろ、普通に通じてるよ。

エイリアンの事といい先輩の事といい、奴らの目は節穴か!？」

呆れかえっている俺達を見て好機と思った前列の数人が突撃しようとするが、思ったより早く立ち直った赤毛がそれを押し留める。

「……私は悲しい。理想郷を築かんとする我が王の威光に背く者がこ
うも湧き出てくるとは……。ピクト人の手がこの地に伸びている以
上、貴方達のような反乱分子に時間をかけている余裕はありません。
ベイリン、卿もよろしいですね?」

「是非もない。我らが忠義は王の為にある」

先輩が頷くのを確認し、糸の様だった目を見開いて豎琴を構える赤毛。

こちらに向く殺気は髑髏仮面に向けたものと比べ物にならない。

「いいぜ。古琴波動拳の真髓しんずい、見せてもらおうじゃないか」

映画で見た中国の神秘を体験できるとは、これこそが武者修行の醍醐味とてつって奴だろう。

「コキンハドウケン? 何をわけのわからない事を。我が『妖弦フェイルノート』の見えざる音の刃、とくと味わってもらいましょるか!」

これ見よがしに豎琴を構えてみせる赤毛に、怪訝けげんそうな顔をしたヴァーリが待ったをかける。

「おい。まさか、あの飛ぶ斬撃は技ではなく豎琴の性能だというのは?」

「その通りです。爪弾つまびくだけで獲物を寸断する音の刃、それこそが

フェイルノートの真価」

自身の得物について得意げに語る赤毛。

だがしかし、帰ってきたのは感嘆でも恐れでもなく、ヴァーリの怒声だった。

「つまらんッ!!」

ビリビリと大気を振るわせる怒号。

奴の身体から漏れ出す白龍皇の龍氣も相まって、周囲に振りまく威圧感ほまさに巨龍のそれだ。

その威圧感に吞まれて動きを止めた騎士達を前に、ヴァーリはさらに捲まくし立てる。

「自分が体得した技ではなく得物の性能を誇るとは、なんとつまらん奴だ!! 貴様のような小物に俺と戦う資格は無い!!」

地団駄のように地面を踏み鳴らし、不機嫌そうに周辺の岩に腰を下ろすヴァーリ。

なんか威厳の在るような事言ってるけど、飛ぶ斬撃を憶えられなくてキレてるだけだろ、お前。

『ヴァーリ、奴は円卓の騎士のトリスタンだぞ』

「そんな奴は知らん!!」

宥めに入ったアルビオンの言葉も、ヴァーリは容赦なく一刀両断する。

仮にもサクソンの白い龍を身に宿してるんだから、円卓の騎士の有名どころくらいは憶えとけよ。

見る、赤毛もといトリスタンの奴、プルプル震えてるじゃねーか。

魔雲天先輩もめっちゃ笑ってるし。

「トリスタン卿に何たる無礼!?!」

「栄光ある円卓の騎士を知らぬとは、どこの田舎者だ、貴様!!」

異世界の冥界産です。

「そんなマイナーな小物など知るか! 俺に知って欲しければ、ロトの勇者にメガ進化して出直して来いッ!!」

「なんでドラクエなんだよ」

「あいつが小学校出るくらいに負けたりしいぜ」

そんな感じで交わされていたトリスタンの取り巻きと馬鹿の低俗な言い争いは、トリスタンが右手を上げた事で終わりを迎えた。

「——静まりなさい。私の名声など瑣末事さまつごと、今は反逆者を排除するほうが肝要です」

再び琴を構えたトリスタンに、俺は軽く首を鳴らす。

ヴァーリの所為でぐだぐだになってしまったが、漸く再開ようげというわけだ。

「どうするんでい？」

「まあ見てなつて」

向こうから視線を外さずに耳打ちしてくる美猴に、俺は余裕を持って返す。

奴の音の刃とやらは、上から観察したお陰でだいたい見切っている。

確かに視覚では捉えられないだろうが、大気の振るえや殺気などを読めば十二分に補足可能だ。

もつとも、現状では後ろのハサンや難民に当たる恐れがあるから、容易に躲す事はできない。

難民に被害が出たら本末転倒だからな。

では、どうするのか？

決まっている

……真正面から叩き潰すのである。

氣を練りながら、ゆっくりと息を吸い込む。

腹式呼吸の要領で腹をへこませ、同時に肺と横隔膜が限界まで膨らませる。

おそらく今の俺の身体は腹は縮み胸は異様に膨らんだ、異様な姿に見えるだろう。

だが、これでいい。

映画をヒントにした技で実戦初使用だが、かのワギャン君も手伝ってくれたのだ。

失敗などありえない。

「痛みを歌い、嘆きを奏でる……『フェイタルノート痛哭の幻奏』。これが私の矢です」

琴を持ち替えながら、激しく弦を爪弾くトリスタン。

見える。

視境しつぎょうに在らずとも、大気が、気配が、三方向から襲い掛かる音の刃の軌跡を教えてくれる。

ならば、こちらでも全開で迎え撃とう。

そう決意を固めた俺は見えざる刃がこちらに届く寸前、限界まで溜めた空気を解き放つ！

「わっ!!」

呼吸法で極限まで集中・圧縮された空気は、体内を巡る氣を孕みながら大気を押し流す衝撃波となつて口から放たれた。

向こうが音の刃ならば、こちらは空気の大砲である。

放たれた衝撃波は大地を削り音の刃を全て蹴散らして、トリスタンを先頭に騎士達を飲み込んだ。

全てを薙ぎ倒す豪快な破碎の波が過ぎ去った後には、装備を碎かれパンツ1丁になったトリスタンと騎士が力なく横たわっている。

……うむ、想定通り。

映画とまったく同じ結果になった。

「んんっ、ゲフン！」

しかしこの『獅子吼』という技、けっこう喉にクルな。

声帯なんかを鍛えているわけじゃないから、連発したら喉を痛めるかもしれない。

まあ、手足を封じられた時の奥の手で覚えた技だし、そこまで使用する機会はないと思うが。

コツてしまった首周りを解そうとした俺は、ある事に気づいて手を止めた。

ゴミの如く散乱した騎士達の中に彼の姿が見当たらない。

超重量級の彼がフットワークで『獅子吼』の範囲外に逃れるとは思えない。

だとすれば――

次の瞬間、こちらの思考を肯定するかのようになり注ぐ殺氣。

視線を上げれば、そこには身体で大の字を描きながら、此方に落ち

てくる魔雲天先輩の巨体が！

「まったく勘のいい奴だぜ！　だが、この状況で俺の技を返すことが出来まい!!　食らえ、魔雲天ドロップウウウウツ!!」

魔雲天ドロップ。

先輩の必^{フエイバリットホールド}殺技である、1tにも及ぶ岩の巨体を活かしたフライングボディプレス。

このタイミングでは、人間はおろか超人でも返す事はおろか躲す事もできない。

だがしかし、それは頭に『並みの』が付く奴等の話だ。

未だかなり上空にいる先輩の位置を把握した俺は、大地を蹴ると同時に舞空術で飛翔。

自由落下する魔雲天先輩の横をすり抜けてその背中に降り立つと、背骨に膝を当てて顎と足首をホールドする。

「グゲエツ!!　こっつ、この技は……ツ!!」

「悪いっスね、先輩。これで決めさせてもらいますよー!」

掴んだ両手を引き絞りながら、俺は先輩を地面に叩きつける!

「これぞ正しく、大雪山落としてなあ!!」

「ウギヤーツ!!」

落下の衝撃と先輩の自重によって荒野に大きなクレーターが出来あがる。

もうもうと立ち昇る土煙を払いながらそこから抜け出すと、ヴァーリ達が出迎えてくれた。

「ふん、完勝だな」

「お疲れ。ところであいつは何者なんでい?」

「將軍様の道場の兄弟子だよ。あの人の指示で俺と一戦やりに来たらしい」

言いながら、土煙が薄れていく大穴に目を向ける。

自画自賛になるが、今の『大雪山落とし』は完璧だった。

先輩の体重も利用して技の威力を増したから、死なない様に手加減はしても立ってくることはできないはずだ。

回収は將軍様に任せるつもりで背を向けた俺は、背後から聞こえて

くる笑い声に足を止めた。

「グフフフフツ、どこへ行くこうってんだ？」

振り返ると、土煙を切り裂いて魔雲天先輩が穴から飛び出来るのが目に入った。

……あり得ねえ。

大雪山落としてのダメージは確実に先輩を戦闘不能に追い込んだはずだ。

その証拠に先輩の腹部は大きく亀裂が入り、鮮血が道着を紅く染めている。

「……間抜けなツラしやがって。俺が立って来たのがそんなに不思議か？」

その言葉に思わず頷くと先輩から怒号が飛んだ。

「舐めるなよ、糞餓鬼がああつ!! 殺気の籠らない攻撃でこの俺を斃せるワケないだろうがああああつ!!」

周りの空気を振動させるほどの怒鳴り声に驚いていると、重量級とは思えない踏み込みでこちらに肉薄した先輩の拳が俺の右頬を捉える。

感じるのは衝撃と僅かな痛み。

ダメージは殆ど無いが、虚を突かれた事で更なる追撃もまともに受けてしまう。

「仲間相手だからって腑抜けた技を出しやがってツ! なにが『將軍様の意図は解った』だ、全然理解してねえじゃねえかツ!! テメエはあの方の後継としてキン肉マンと闘うんだぞ! そんなザマであるの代理がツ! 俺達の代表が張れると思ってるのかああつ!!」

腹の傷が開くのを厭わずに、怒りと共に拳を振り下ろす魔雲天先輩。

……確かに先輩の言う通り、俺は腑抜けていたらしい。

命懸けで挑んでくる相手に手加減なんて、侮辱以外の何物でもない。

そもそも、將軍様の意図は最初に理解していたはずだ。

にも拘らず、この体たらくでは先輩が激怒するのも無理はないだろ

う。

——この無礼を詫びるには、俺が出せる最高の技を見せるしかない。

肚はらを括くくった俺は、振り下ろされる何度目かの拳を受け止めた。

「ふん、少しはマシな面になったじゃねーか。やつと目が覚めたかよ？」

「気合きごこつっあんです、先輩。お陰で鈍鈍つた頭がようやく動き出しましたよ」

「グフフフフツ。なら見せてくれるんだろうな、最高の一発って奴を」

「ええ、今の俺の全力全開を!!」

「いい返事だあッ!!」

気合と共に振るわれるもう一方の拳も捕った俺は、先輩をリバースフルフルネンソンの体勢に持っていき、渾身の力を込めて振り回す。

超重量を誇る先輩の身体は大した抵抗も見せずに回転の渦に巻き込まれ、遠心力によって逆さに立ち上がる。

タイミングを見計らって先輩を上空高く放り投げ、間を置かずにこちらも大地を蹴蹴って飛翔する。

そして死に体で落下する先輩の上を取ると、その首の中心、喉仏に膝を叩き込みそのまま落下!

足全体で押さえていた従来の断頭台に比べて体勢が安定しないが、そこは舞空術でバランスを取って対応し、加速と体重を相手の首に食い込んだ膝の一点に集中させて地面に叩きつける!

これがッ——

「俺式地獄の断頭台だあッ!!」

「ゴパアーツ!?!」

再びクレーターの中心に激突した先輩から離れると、血反吐と共にその身体は大の字で地面に沈む。

「み……見事だ、あの方の……必殺技を……ここまで……修得……」

息も絶え絶えに言葉を紡ぐ魔雲天先輩から目を背けない様にしていると、その身体は虹色の光に包まれてつま先から少しづつ消え始め

る。

あれは『無限の闘争』の死亡防止の光だ。

先輩も発動すると思っていなかったのか、お互いに驚きの表情を浮かべているのに気づいた俺達は、双方の間抜け面に噴き出してしまった。

……まったく、將軍様も人が悪い。

喉の負傷で言葉が出せなかったのだろう、先輩は転送される寸前にサムズアップをこちらに見せて姿を消した。

「魔雲天先輩、ごっつあんでした」

無人になった大穴に向かってもう一度、深く頭を下げる。

こつちが本当の意味で肚を括るのを命懸けでサポートしてくれるなんて、マジで悪魔超人とは思えないくらい良い人だ。

「あれが新型の断頭台か。随分とエゲツないな」

「まだ未完成だけどな。完成度は今ので大体50%つてとこだ」

声を掛けてきたヴァーリにため息交じりに答えを返す。

完成版はあそこからもう一つ工夫があるのだが、現状では体勢を安定させるのに精一杯でそこまで手が回らない。

この修業期間が終わるまでにはモノにしないと。

内心で目標を再確認しながら、俺は残った騎士達の対処を始める。

都合のいい事に全員仲良くおねんねしてくれているので、音波砲の被害を免れた3メートル近いデカさの巨石に拘束することにする。

ヴァーリや美猴は元より、遠巻きに見ていたハサンや難民達も手伝ってくれたので作業は滞りなく終わった。

縛る道具としては、ボロ達からの戦利品である赤茶けた鎖を使った。

一見錆びてボロボロに見えるが、思った以上に頑丈なのだ。

万が一の事を考えて、縛る前にみんな首から下の氣脈を絶つてやったから、救援が来てもこいつ等にできるのは病院で天井のシミを数える事だけだ。

拘束する際にトリスタンが亀甲縛りを施されて上下逆さにされたのは、自業自得ということにしておこう。

作業も一段落し、一息ついた俺は地面に転がっている豎琴に手を伸ばした。

しかし『無駄なしの弓』と謳われたフェイルノートが豎琴だったとは。

俺もこいつを弾いたら殺人音波を出せるのだろうか？

興味がわいたのでみんなから距離を離して弦に指を走らせると、ピイイイイイイインツという甲高い音と共に弦が全て切れてしまった。

「……………」

思い思いの方向に切れた弦が飛び跳ねてる豎琴に目を向けることしばし。

一つ息をついた俺は、トリスタンの頭にそつと豎琴を被せてやる。弦が無くなった空洞は奴の頭のサイズにピッタリだったようで、サークレットのようにより上手いこと嵌ってくれた。

「これでよし」

「いやいや、よくねえよ。なにナチュラルに相手の得物ぶつ壊してんの？」

「なんだ、サル。俺の完璧な対処に文句でもあるのか？」

「サルゆるな。あと、全然誤魔化せてないからな」

「バツカ、お前。フェイルノートは頭に被るもんだったんだよ」

「じゃあ、最初の豎琴はなんなんかい」

「それは…………あれだ。聖闘士の聖衣みたいに變形するんだ。ほら、豎琴座ってあつたらろ」

「いや、頭にしかパーツねえから。全部纏ってるのに頭だけって、どんな斬新な聖闘士だよ」

「きつとあそこからパーツが展開するんだって。どつかの果物ライダーみたいに」

「さすがにそれは無理があり過ぎじゃね？」

「細かい事はいいんだよ。どうせ敵対したんだ、武器なんて残してやる義理は無いし」

「まあそうだけど、幾らなんでも酷すぎだろ」

確かに、大岩にパワーボムをくらったような体勢で括り付けられた姿には同情の余地は在るが、下手に情けをかけて身内に被害が行く事を思えば妥当な手段だろう。

さて、事態は一応の決着を見た。

助けたハサンと難民から話を聞こうと踵を返したところ、妙な駆動音を耳にした。

視線を向けると、先端に猫の意匠をつけた木製のバギーらしきものがこちらに向かってきているのが見える。

乗っているのは、カルデア所属の立香嬢にマシユ嬢、さらには後方担当のはずのダ・ヴィンチちゃん。

後は冬木のアーチャーに、……ヤツベ。

トリスタンの姿に悲鳴を上げながら突っ込んでくるの、ご先祖ちゃんだ。

これはどう考えても面倒案件である。

しかし、ここでうろたえてはいけない。

自身に非が無いのならば、毅然とした態度で臨めばよいのだ。

一度大きく息を吸い込んで、俺は目いっぱい大声を上げる

「惨い！ いったい誰がこんな事をツ!?」

「!!」「お前だあああああッ!!」「!!」「!!」

間髪いれずに全員からツツコミを貰いました。

ハサンと難民の皆さん、ノリがいいですね。

閑話 『獅子王・地獄変（2）』

皆様、秋の夜長をいかがお過ごしでしょうか？

私、姫島慎はカプセルハウスの前で、難民の炊き出しに大忙しです。
……あの後は大変だった。

こつちの姿を見た途端に物凄い絶望の表情を浮かべたご先祖ちゃんは、それでも腰が引けた体勢で剣を構えてこちらを威嚇してきた。まあ、カルデアを向こうに回す気は無かったのでホールドアップしてやると、今度はこちらの話も聞かずにでトリスタンを解放しようとし始めた。

さすがにそれは拙いので慌てて止めると、その間にカルデアの面々も合流。

事の成り行きを見守っていたハサンも、ご先祖ちゃんの行動+謎の乗り物（バギー）に乗った増援を見て、『聖都の増援かッ!?』って立香嬢達に詰め寄り始めた。

そんなこんなで揉めていたら、今度は紛れて虫共が襲撃かけてきた。

虫共見るのは初めてだったらしく、『アイエエエ!?』『エイリアン!? エイリアンナンデ!?』『コワイ!』と混乱するカルデア組。

立香嬢やマッシュ嬢は大目に見るとしても、アーチャー、お前まで混乱してどうする。

そんな同行者とは裏腹に『ピクト人、ゆるぎまん!!』と、ご先祖ちゃんはブツ込みをかけていく。

ブリテン人はエイリアンがピクト人に見えるのはデフォなのか？
まあ、唯一の救いはダヴィンチちゃんが冷静だった事だろう。

あの虫共は知恵が回るらしく、俺達ではなく率先して難民を狙ってきやがった。

強酸の血液があるから至近距離で仕留める訳にもいかず、一々難民から引き剥がすのが滅茶苦茶面倒だった。

率先して避難誘導してくれたダヴィンチちゃんとハサンには、本当に感謝である。

余談だがご先祖ちゃんの風王結界って、強酸の血液対策だったんだな。

あの風のお陰で刀身は劣化しないし、接近戦をしても返り血を浴びずにすんだ。

しかし、あんな技術が開発されているところを見ると、ピクト人Ⅱエイリアンは事実なのかもしれない。

とまあ、そんな訳で美猴とヴァーリ、途中で復帰したアーチャーも加えてなんとか犠牲者無しで撃退に成功したのだが、一息ついて岩場を見てみれば今度はトリスタンを初めとした騎士達の姿が無いときた。

ハサン達はどさくさ紛れに逃げたと思っていたようだが、奴等を拘束していた鎖が溶け千切れていたのを見ると虫共に連れて行かれた可能性が高い。

英霊から虫が孵化するのは不明だが、プレデリアンならぬトリデリアンが生まれないことを祈ろう。

虫共に襲撃された後では流石に揉める気にならなかったらしく、双方共に大人しくなったところを見計らってカプセルハウスに連れてきた。

幸いにもハウスの方は襲撃されてはいなかったようで、出迎えてくれたアーサー、俵さん、そして玉藻はこちらの無事を喜んでくれた。

出てこなかった三蔵ちゃんと美遊嬢は夢の中。

衛宮君も妹に付き合っただけについているらしい。

で、ようやく本来の目的である情報収集の開始である。

カルデアの目的は、冬木と同じく人理修復の為にこの時代にある聖杯を回収すること。

しかし、肝心の聖杯は砂漠のピラミッドに住むオジマンディアスというファラオが所有しており、手が出せないらしい。

そこでこの世界の状況をさらに探り、あわよくば戦力アップを行いたいんだそう。

次に煙酔えんすいのハサンを初めとした難民の皆さんだが、円卓の騎士やエイリアンから食うや食わずで逃げていた彼らは疲労困憊であり、話を

する余裕も無かった。

情報云々に関しては英霊のハサンがいるので何とかなるが、へたり込んだ難民を放置するのは気が引ける。

という訳で、俵さんと玉藻の協力によつて炊き出し大会が行われたのだ。

いや、本当はここまでする気はなかったのよ。

けど、4歳くらいの子供に涙目で『おなかすいた』って言われてみ？

そら、人として見捨てられないって。

その子には柔らかい菓子パンをあげただけで、そうなれば他の奴も要求してくるわな。

普通なら40人も人間に食わせる備蓄は無いけど、今の俺たちには俵さんがいる。

彼も貧窮ひんきゆうしている民達を見捨てる事は出来ぬと、快く食材を提供してくれた。

で、消化のことも考えて雑炊を作る事になったのだが、ここで活躍したのが冬木のアーチャー。

衛宮君以上の料理の腕を見せ、難民達に次々と栄養満点の食事を提供したのだ。

あと、ご先祖ちゃんは自重しろ。

それは難民の為の食事であつて君のではない。

4杯目をお替りに来た時は、思わずチョップをくれてしまったではないか。

さて、みんなの腹もくちくちくとなつたところで、難民の代表であるハサンの話に相成つた。

ハサン自体は山岳地帯の集落を拠点にしている山の民で、他の難民は元々この地に住んでいた人達らしい。

それが、ある日いきなり西側はエジプトもかくやの砂漠地帯となり、十字軍を名乗る騎士達に占拠されていた聖地もあの白亜の城塞都市に姿が変わってしまった。

異変はさらに続き、肥沃だった土地は見る見るうちに死に絶えた荒

野へと変貌。

その所為で生活が立ち行かなくなつた彼等は、難民として聖都に助けを求めた。

砂漠の方へ行く者がいなかったのは、あそこには人喰いのスフィンクスが放し飼いにされており、ピラミッドのある場所にたどり着くことができないからだとか

次に問題の聖都だが、聞いた話によると入居を求め難民に対して聖拔せいぼつという儀式を行っており、それに合格した者は都市に入ること許される。

そして不合格だった者は、その場で都市を警護している騎士達に抹殺されるというのだ。

煙酔のハサンが連れていたのは、その虐殺からなんとか逃げ延びた人達らしい。

これを聞いたウチの面子のコメント。

サル「とんでもなく怪しいねえ。こいつはピラミッドより先に手を打っておいた方がいいんじゃないかい？」

ヴァーリ「俺はこの世界のことには興味は無いが、聖都とやらには騎士がいるのだろうか？ ならば多少は齒応えのある奴がいるかもしれない」

俵さん「保護すべき者を選別するのはよい。民の全てを救うなど、御仏でも困難な無理難題ゆえな。しかし、振るい落とされた民を手に掛けるのは許されん」

玉藻「聖拔ですか。なんだか尻尾の辺りにいやあな予感がピンピンします。あそこの主は妙なものを拗らせてる可能性が高いみたいですから、早めに処理したほうがよろしいかと」

なんと満場一致で聖都攻めである。

なんとという脳筋思考だろうか。

とはいえ、この意見を無碍にするわけにも行かない。

ヴァーリは平常運転だから置いとくとしても、俵さんや玉藻までもが攻めを推すのだからこれは何かあると考えたほうがいい。

ちなみに俺の意見は『聖都の門番は最強の騎士らしいので、武者修

行中の身としては手合わせせざるを得ない』だ。

お前も脳筋？

はははっ、何を今更。

◇

俺、衛宮士郎がこちらとは違った異世界人、姫島慎の世話になって1日が経った。

昨日の夜に何かあったのは知っていたが、この世界に来てすぐにイリアンに襲われたせいで、美遊は一人で眠れなくなってる。

助けられた身で申し訳ないと思っただが、美遊の面倒を見るために昨日は早めに休ませてもらったんだ。

元の世界でジュリアンに攫さらわれた美遊を取り戻す為に聖杯戦争に勝利した俺は、戦争で手に入れた7枚のクラスカードと美遊の力で、あの子が狙われる事のない、幸せを掴める世界に送ろうとしていた。

これは美遊の願望機としての力を使って、『滅びる定めの人類を救う』というジュリアンとエインズワースの悲願を砕く行為。

そして同時に、俺がずっと抱き続けて来た養父衛宮切嗣から託された『世界を救済する』という理想を捨てる事でもあった。

ああ、わかってる。

これは人という種から見れば、この上ない裏切り。

まさに『悪』と言っていいだろう。

でも、妹の幸せを、美遊が笑って暮らせる生活を送る事を望むのが『悪』だというのなら、

——俺は『悪』でいい。

そう覚悟を決めて送り出したのだが、俺はまた間違えていたらしい。

願いが叶う瞬間、転移の為に美遊の周りに張られた結界にあの子は俺を引き込んでしまったのだ。

結果、エインズワースの刺客であるギルガメッシュのカードを持つ女の攻撃を受けることになった。

幸い結界は無傷だったが、そのショックの所為で転移は失敗。

俺達は本来行くべき世界ではなく、この荒れ果てた世界へと飛ばされてしまったのだ。

神話の神獣であるスフィンクスや絶望した異常者、さらには映画の中の怪物であるエイリアンまで跳梁跋扈する世界で、俺は美遊を護る為にガムシヤラに戦った。

聖杯戦争で俺が我が身に降ろしていた英霊は、平行世界の俺自身の未来である『英霊エミヤ』。

お陰でクラスカードが無くても、ある程度ならその力を振るう事が出来た。

その代償が自身の身体を英霊へと置き換える事だとしても、俺には後悔は無かった。

そうやって何とか襲撃者は撃退できたのだが、この世界の過酷な環境は聖杯戦争のダメージが抜けきっていない俺や子供の美遊には厳しかった。

砂の中で行き倒れ、せめて美遊だけでもと思いつながら意識を失った俺は、この世界で行われている聖杯戦争に参加している英霊と、俺達とは違った平行世界の旅人である姫島慎に助けられたんだ。

◇

窓から聞こえる騒がしさに目を覚ました俺が外に出てみると、玄関辺りで人だかりが出来ていた。

俵さんに事情を聞くと、この世界で生まれた難民だという。

言われてみれば切嗣と一緒に世界を回っていた時、内戦の地で見た現地の住民に雰囲気似ていた。

あと、彼等を先導していたのは多分アサシンのサーヴァントだと思う。

桜の兄貴がインストールしていた姿に少し似ていたし…。

「お。起きたか、衛宮君」

ぼうっと難民たちの様子を見ると、ビニール袋に詰められた何

かを配っていた慎が話しかけてきた。

「おはよう。それと昨日は悪かった」

「いいさ、事情は玉藻から聞いた。美遊嬢の為なら仕方ないさね」

「こちらの謝罪に気にするなと返しながら、袋を手渡す作業を続ける
慎。

「そう言えば、それってなんなんだ？」

「ん？ ああ、弁当だよ。中には焼きおにぎりが三つと、ペットボトルに水が入ってる。この人達は山の上の集落に行くらしいから、道中飯が無かったら困るだろ」

「けど、40人くらいいるぞ。そんなに配って大丈夫なのか？」

「俵さんから食材は提供してもらってるからな、備蓄については大丈夫だよ。それより朝飯まだなんだろう？ むこうで炊き出ししてるから貰ってきなよ」

「ああ、わるい」

慎に促されて示された場所へ移動した俺は、そこにいた人物に思わず足を止めた。

紅い外套と黒い胸当ての上にエプロンを付け、一心不乱に鍋を振るう白髪の男。

桜から託されたクラスカードで契約を結んだ、平行世界における俺の可能性。

『英霊エミヤ』

……ここまで調理が似合う男だとは思わなかった。

いや、平行世界とはいえ俺なんだから、料理が出来るのは当たり前なのかなのか？

「待たせたな。出来立てだ、早く持っていき—— 貴様は」

「すまない、一つ貰うよ」

むこうも俺の事に気づいたのだろう、微かに浮かべていた笑みが消えて顔が強張っている。

「……随分と歪な姿だな。理想の為と分不相応な力に手を出したツケか、それは？」

不機嫌さも言葉の棘も隠そうとしないエミヤに、ジュリアンを思い

出して思わず苦笑いが浮かぶ。

きつと、この『エミヤシロウ』は切嗣の理想を捨てずに体現し続けたんだろう。

あの時、美遊を選ばなければ、俺も彼のようになっていたのかもしれない。

「……理想は捨てたよ。今の俺にあるのは、誓いだけだ」

「誓いだと？」

「ああ。妹を幸せにするというな」

鋼色の瞳に猛禽類を思わせる鋭さを宿し、こちらを見据えるエミヤ。

聖杯戦争で戦った魔術師とは一線を画す強烈な威圧感がこちらを襲うが、俺はそれを真つ向から受け止める。

ここで目を逸らしたら、あの大空洞で選んだ答えを嘘にしてしまうような気がしたからだ。

彼が切嗣のような『正義の味方』ならば、『悪』である俺は逃げるわけにはいかない。

「……ふん、覚悟だけは一人前か。小僧、話を聞かせてもらおうぞ」

エプロンを外して玉藻さんに声を掛けると、エミヤはロツジの裏に歩いて行く。

彼に付いて行った俺は、人影が無くなったところで元の世界での事をすべて話した。

彼が、玉藻さんが言っていたような聖杯を求める英霊である可能性を思えば、美遊の特性は伏せるべきなのだろう。

だけど、クラスカードを通して彼の力を借りなければ、俺は聖杯戦争を勝ち抜く事も美遊を助ける事も出来なかった。

だからこそ、彼には嘘はつけない。

これを聞いて彼が美遊を狙うようなら、俺が命を懸けて止める。

それが、一方的とはいえ協力を仰いだ俺のケジメだ。

「……なるほど。そうしてお前は借り物の理想を棄てたわけか」

「そうだ。切嗣には悪いが、俺は人類の為に美遊を犠牲には出来ない。

それが『悪』だと言うのなら……俺は『悪』で構わない！」

魔力回路を起動させながら、俺はエミヤを睨み付ける。

もし彼が敵対したのなら、美遊からの魔力供給を失った今の俺がどれだけ保つか分からない。

それでも――

「そう警戒するな。こちらにお前を害そうという気はない」

臨戦態勢を取るこちらを見ながら、エミヤは皮肉げに口元を吊り上げる。

……なんか非常にムカつくな、あの顔。

「衛宮士郎が自ら『悪』を名乗る、か。こんな可能性もあるのだな。……手間を取らせたな、もう行っていいぞ」

しっしっ！ と犬猫を追い払うような仕草にイラッと来たが、俺は彼の言葉の通り踵きびすを返した。

最初に何を呟いていたか聞き取れなかったが、大したことじゃないだろう。

「ああ、最後に一つ忠告しておいてやる」

小屋の角を曲がろうとしたところで、再び掛けられた声に俺は足を止める。

「その力はもう使うな。自覚があるようだが、貴様の身体は力を使えば使うほど、英霊のそれに置き換えられていく。今のままなら問題は無いが、それ以上進めば待っているのは破滅だけだぞ」

「わかってるさ。けど、忠告はありがたく受け取っておくよ」

「……憶えておけ。自己犠牲ほど、残された人間にとって残酷なモノは無い。真に妹の事を思うのなら、そんな考えは捨てることだ」

真剣味の増したエミヤの声を背に、俺は再び歩みを進める。

わかっている、わかっているさ。

けど、それに関しては確約はできない。

もう失わない為なら、美遊を護る為なら――俺は何度でもこの力を使う。

エミヤと別れて玄関先に歩を進めていると、白銀の鎧を纏った金髪の少女がいた。

「……シロウ、なのですか？」

こちらを見てエメラルドグリーンを目を見開く彼女を、俺は知っている。

アーサー王。

聖杯戦争でジュリアンの父親の人格を置換ちかんされた人形が宿していた、セイバーのクラスカードの接続先。

そして、エミヤが英霊に至る分岐点となった女性だ。

彼の力を使う中で垣間見た記憶では、他の事は磨耗して朽ち果てかけていても、彼女の事は黄金の光と共に鮮烈に残っていた。

「すまない、俺は貴方の知っている衛宮士郎じゃない。貴方の事は知ってはいるけど、俺と貴方は出会わなかった」

だからこそ、俺は彼女と関わってはいけない。

彼女にとって衛宮士郎は『理想を背負った正義の味方』であって『理想を捨てた悪』ではないのだから。

「……そうですか」

ほんの少しだけ寂しそうな表情を浮かべる彼女の隣を、俺は言葉もなく通り過ぎる。

俺にはもう『黄金の理想』は不要なのだ。

玄関先に戻ると、美遊がおにぎりが入った袋を手にキョロキョロと辺りを見回していた。

こちらを見つけると、不安げな顔を笑顔に変えて思いっきり飛びついてくる。

犬みたいだと思ったのは内緒だ。

「おはよう、美遊。今日はずいぶんと甘えん坊だな」

「起きたらお兄ちゃんがいなかったから不安になって……」

「俺は何処にも行かないよ。——そうだ、朝飯まだだろ？　そこで一緒に食べよう」

「うん」

玄関前のテラスに開いたベンチがあったので、そこで美遊と二人で貰ってきたおにぎりを頬張る。

「おいしいー」

表情を輝かせる美遊とは裏腹に、俺は思わず頬を引きつらせてしま

う。

俺と似た味付けなのに俺より美味しい。

向こうの方が年を重ねたんだから、そうなるのは当たり前なんだが……何だろうか、この敗北感は。

「どうしたの、お兄ちゃん?」

不思議そうにこちらを見上げる美遊に、慌てて表情を取り繕う。

「いや、大したことじゃないんだ。さつき爺さんと似た人とあつたからさ」

「切嗣さん?」

「ああ。それで再確認したんだ、俺は『正義の味方』じゃなくて『美遊のお兄ちゃん』になるんだって」

「……いいの?」

「もちろん。それより、ここの人たちはどうだ?」

不安げな表情を浮かべる美遊の頭を撫でながら、この子が余計な気を回さないように話題を変える。

「良い人達……だと思う。今日も私の事を心配してくれてたし、ご飯を取ってきてくれたのは慎さんだから」

それは同感だ。

行き倒れてたところを助けた上に、ここまで親切に世話してくれているのだ。

悪い人間なワケがない。

美遊の事だつて『神様の権能で願いを叶えるんだろ?』じゃあ天照様に頼んだほうが早くね』とか言つて、興味無しだったし。

というか、何でそんなに神様と親しそうなんだよ。

……俺のツツコミは置いとくでしょう。

それに、この世界の危険性を考えるなら彼らといたほうが絶対に利口だ。

神獣や英霊、エイリアンの蠢く魔境を俺達だけで生き抜くなんて、どう考えても不可能だろう。

「ただ……」

思考に嵌まり込んでいた俺は、ポツリと呟いた美遊の一言に我に

返った。

「何か気になる事でもあるのか？」

「自分でもよく分からないんだけど……疲れるくらいビックリする？

ような気がする」

しきりに首を傾げながら、美遊は自分の感じた事を口にする。

後にこの予言が大当たりするとは、この時の俺は夢にも思っていなかった。

◇

美遊との朝食を終えてから数時間が経った。

難民達は慎が分け与えた食料を手に山の方へと旅立って行った。

俺が関わる事は殆ど無かったけど、どうか目的地にたどり着いてほしい。

エミヤとアーサー王は仲間と共に、木で出来たバギーの様な物で出発した。

彼等は聖都と呼ばれる都市に向かうとの事。

むこうの責任者である藤丸さんは一緒に行ってほしそうだったが、慎達はやんわりと断っていた。

理由を聞いたところ、敵に回った円卓の騎士をボコボコしているところをアーサー王に見られたのだとか。

なるほど、そんな事があったのなら同行するのは気まずいだろう。

『俺達の次の目的地も聖都だから、現地で合流すればいい』と慎は笑っていたが、そう上手くいくのだろうか？

さて、俺達の出発が最後になっているわけだが、その理由は美遊にある。

慎曰く、次に行く聖都は昨日敵対した円卓の騎士の根城なので、戦闘になる可能性が極めて高いらしい。

当然、『そんな修羅場に妹を連れて行くのか！』と噛み付いたのだが、その後にはされた説明で俺は矛を収めざるを得なかった。

美遊をそんな場所に連れて行くのは、彼等も本意では無い。

本当ならここで留守番をしておいて欲しいが、この世界にはエイリアンがいる。

自分達が留守の間に襲われては、美遊と俺では危険が高すぎる。

英霊の二人を残したとしても、群れで襲撃されては自衛できても美遊を護れる保証は無い。

ならば、十分な用意をしたうえで同行させた方が安全では無いか、と言うのだ。

たしかに、彼等の言う事には一理ある。

本音を言えば、聖杯戦争みたいな血生臭い場所に美遊を連れて行くなんて、死んでも御免だ。

でも、それがあの子の身を護る一番の方法だと言うのなら……

結論として俺は慎達の提案を飲んだ。

元の世界で親友であるジュリアンに裏切られたので、彼らを信じるには酷く勇気が要った。

心とは別に何度も猜疑心さいぎしんが沸いたが、今まで世話になった事を思い返す事でねじ伏せた。

俺の返事を快く受け入れてくれた慎達は、『ならば美遊嬢が自衛できるような道具を出そう』と、何故か携帯端末をいじくり始めたのだ。

「なあ、なんで携帯を弄ってるんだ？」

「この端末はな、俺達の元の世界にある倉庫に繋がってるんだよ。だから、こいつで呼び出せば——」

慎が軽快な指使いで画面をタップすると、床に淡い光が立ち上った後で和服が現れた。

「とまあ、こんな風に品物を転送する事ができるんだ。そいつは衛宮君にやるから、美遊嬢に着せてやってくれ。そんな薄手のドレスだと外の移動は大変だからな」

そういえば、美遊の格好は助け出した時に着ていた黒のドレスのままであった。

着替えるように美遊に手渡して待つ事数分。

寝室から現れた美遊は、何故か巫女服姿だった。

「サイズの方はOKだな。妹のお下がりなんだけど、違和感とか無い

か？」

「いえ、大丈夫です。着ているとポカポカ暖かいし、何かに護られてる気がするから」

「それについては日本中の神様が、護身用の呪をテンコ盛りで仕込んでるからな。バズーカの直撃くらいなら無傷で耐えるはずだぞ」

なんだ、そのトンでも性能!？」

「本体に月読、ウズメちゃんや道真さん。げっ、将門さんにスサノオのモノまである。よくもまあ、これだけの加護を集めましたね」

「神職の研修の時に日本中を飛び回ってたからな。行く先々で加護を授けてもらうように頼み込んだんだよ」

日本神話のメジャーどころの名前がポロポロ出てくる事に、思わず頬が引き攣ってしまう。

これって、もしかしなくても凄い物なのではないだろうか？

「気にしない、気にしない。妹が入らなくなってから倉庫の肥やしになってた代物さ。誰かに袖を通してもらうなら、そいつも幸せってモンだよ」

軽い慎の言葉に、俺も強張った身体から力を抜いていく。

しかし、それは途轍とてつもなく甘い判断だった。

「ふむ、このパワーローダーというのはどうだ？」

ヴァーリさんの言葉と共に外に現れる、『エイリアン』の映画そのまんなまのパワーローダー。

突如として現れた無骨な鉄の人型に、俺と美遊は固まってしまう。

「よく見ろ、ヴァーリ。こいつの対象年齢は18歳以上、嬢ちゃんにや大きすぎる。それよりもこっちはどうだい？ クロウカードっていう魔法のカードなんだけどよう」

美猴のダメ出しと共に床に現れるのは、クラスカード7枚分に負けず劣らずの魔力が籠った一冊の本。

ヤバイ、この本はヤバすぎる！

「ダメだな。使いこなす為には、一度カードをばら撒いてから集め直す必要があるんだと。……さすがに仮面ライダーの変身ベルトはヤバイよなあ」

慎はそうのたまつた後に出てきたのは、銀色のアタッシュケース。中には折りたたみ式のガラケーと大き目のベルト、デジカメに双眼鏡が入っている。

……ちよつと待つて欲しい。

今、奴は何と言つた？

カメンライダー、仮面ライダーだ！

男の子なら誰しもが憧れるヒーロー！

もちろん、俺だつて憧れた!!

それになる事ができるベルトがこれだというのか!?

「マジで本物なのか!? 貸してくれ、俺が使う!!」

「いいのか、衛宮君? ベルトに適応できなかつたら灰になつて死ぬ

らしいけど、このカイザ・ギアつて」

「呪いのアイテムかよ!?!」

……思わず掴んだベルトをブン投げた俺は悪くない。

そんな感じでワチャワチャとやりあう事、しばし。

武装練金という武器に変形する謎の角ばつた金属や、ヤヴアイオーラをビンビン感じる魔法少女の杖（なんでも豪血寺つて一族が使つていた物らしい）。

果ては強殖装甲ユニットとかいう、宇宙生物と融合してバイオヒーロー「生体兵器」になる代物まで。

カオス極まりないアイテム郡が続く中、投げやり気味に美猴さんが出したのは半月状の白い布だった。

「なんだ、これ?」

手に取つて伸ばしてみるが、特に変なところは見当たらない。

魔力もゼロだ。

「ドラえもんのスぺアポケットだつてよ」

………なんですか。

呆然と固まっていた俺は、袖を引っ張られる感覚で再起動を果たした。

見れば、物凄く目をキラキラさせた美遊がスぺアポケットに熱い視線を送っている。

ああ、そういえば好きだったよな、ドラえもん。

「お兄ちゃん！ 私、これにする!!」

熱意に負けてポケットを渡すと、美遊はとっても嬉しそうに緋袴の上に貼り付ける。

「凄いよ、お兄ちゃん！ 本当にどこでもドアがある!! それにタケコプターも!!」

普段の大人しさもどこへやら、大はしゃぎする美遊に和んでいると、ふとある疑問が浮かび上がってくる。

美猴さんはどこでこれを手に入れたのか？

疑問に思っただけ聞いてみると、美猴さん曰く『のび太と闘って』得た戦利品らしい。

孫悟空の孫がのび太と闘う？

どんなシチュエーションだ、それ？

頭に疑問符を浮かべまくる俺を見かねた美猴さんは、携帯端末である動画を見せてくれた。

、小さな画面の中に映っているのは、美猴さんとどう見ても『のび太のコスプレをした怪しい変態』だった。

側転や地面を滑るような動きから蹴りや肘を出し、目から怪光線まで放つコスプレ男。

なのに、声だけアニメののび太と同じというカオスツプりに、一緒に見ていた美遊はもう半泣きだ。

そして奮戦むなしく地面に沈んだ美猴さんを見下ろした男は、恐ろしいほど醜悪な表情を浮かべて一言。

『ボク、勝ったよお（ゲス顔）』

ドラえもん屈指の名台詞に何たる冒瀆。

これはもう訴訟物だろ。

というワケで、美遊を泣かせた罪によって美猴さんの昼のおかずを一品減らしたのは、妥当な判断だろう。

それと、ヴァーリさんの倉庫に入っていた武装練金『シルバースキン』は、俺が使う事になった。

攻撃の面は投影で何とかなるが、防御力は普通の人間と変わらない

からだ。

ならば道具で底上げするのは当然だろう。

『武装練金^一』の掛け声で金属製のコートまじを纏うのが、変身ヒーロー
ほくて気に入ったのは内緒だ。

こうしてアイテムの選別も終わり、遅めの昼食を取っていると三蔵
法師が起きてきた。

昼ご飯をねだる彼女に取って置いた彼女の分を渡し、あれこれと片
付けた俺達が出発したのは太陽が傾かたむき始めた頃だった。

俺と美遊は美猴さんの後ろで筋斗雲に乗り、他のみんなは徒歩であ
る。

並の車など比べ物にならない速度で飛ぶ筋斗雲に全員が平然とつ
いてくるのは、呆ればいいのか驚けばいいのか判断に迷うところ
だ。

とはいえ聖都までの道程は遠く、たどり着いた時には夜になってい
た。

最初に聖都を目にして度肝を抜かれたのは、聖都を囲むように広が
る難民キャンプさながらの光景だ。

聖都の城壁に沿って仮設のテントや布製の敷物しきものが所狭しと並び、埃
や泥の塗れた難民達が犇めき合うようにして暮らしている。

治安など在于って無いようなモノらしく、俺達が来た時にはそこから中
で怒号や悲鳴が立ち上っていた。

「こいつは凄え人だねえ」

「何処もかしこも難民で溢れかえってますね」

城門を目標に外壁に沿って移動しながら、アーサーと美猴は周りの
人の多さに閉口している。

そうやってしばらく歩いていると、外壁よりも一層輝きを放つ純白
の門が見えてきた。

あれが聖都の城門だろう。

「そうそう。あれが聖都の門よ」

まるで観光ガイドのように、三蔵法師が城門に指を差す。

「法師様、ここに来たことがあるんですか？」

「ええ。少しの間だったけど都の中ですごしたわ」

「おいおい。そんな話は聞いてないぜえ、三蔵ちゃんよお」

「美猴、私の事はお師匠様って呼びなさいっていったでしょ！　というか、聖都の話なんてしてたの？」

「そういえば、その話の時は貴女、ぜんぶ眠ってましたね」

「うっ……。それは私が悪いんじゃないかって……。そう！　間が悪かったのよ」

玉藻さんの指摘によく分からない答えを返す三蔵法師。

昨夜といい今朝といい、タイミングが悪かったのは確かだろうな。

「それで、その聖都とやらはどうだったのだ、三蔵？」

「ん？　良い街よ。治安も良いし、皆は飢える事もない。正しい王様の統治の下、善良な人たちが暮らす街ね」

「ほう、俗に言う理想郷と言う奴か」

感嘆の声を漏らす俵さんとは裏腹に三蔵法師の表情は晴れない。

「そう言っても良いかもね。でも、私は好きになれなかったなあ」

「それはどうして？」

気づけば俺は三蔵法師に問いを投げていた。

誰もが苦しまず、悲しまない。

それはある意味で切嗣が目指した世界だったからだ。

だからこそ、それを見て否定的な意見を出す彼女の真意を聞いてみたかった。

「だって、あの都は正しい事しかなかったんだもの。王は正しい、騎士も正しい。市民も、動物も、建物の立ち方から果ては空気まで。そんなの、息がつまっちゃうでしょ？」

「それって悪い事なんですか？」

「悪くは無いわ、美遊ちゃん。でもね、私は思うのよ。人間は善悪あつて始めて人間足りうるって。悪の誘惑に打ち克つ、もしくは悪行を為しても悔い改める事で徳が溜まる。そして、悪を知るからこそ為す善行が意味を持ち、悟りの道へと繋がる。正しい事しかない街じゃ徳も悟りも得られないもの」

「善悪あつて始めて人間、か……」

ジュリアンが言っていた。

美遊と兄妹になろうと決める前の俺の笑顔は偽者だったって。

なら、俺は正義の味方の理想を捨てた時に初めて、人間になれたのかもしれない。

そんな事を考えていると、夜闇に包まれていた周囲が突然明るくなった。

空を見上げると、今日の役目は終えたはずの太陽が煌々こうこうと輝いている。

……いつたい、これはどうなってるんだ!?

「ラナルータか」

「ラナルータだな」

「魔法使いはジジイじゃなくて、姉ちゃんがいいよなあ」

「ドラクエじゃねーよ!!」

異常事態にも関わらず平然とボケをかます三人にツツコンでると、小さく城門が開いて中から一人の男が現れた。

金の髪に白銀の鎧、そして風にたなびく青いサーコート。

どこか朝に会ったアーサー王を思わせる男性を見ていた俺の視線は、彼が腰に刺した剣に釘付けになった。

あの英雄王を宿した女との戦いで癖になったのか、無意識のうちに俺の目はその剣の解析を始める。

あの剣は『神造兵器』。

かの星の聖剣の姉妹剣。

『エックススカリバーの勝利の剣』が星を司るなら、あれが司るは『太陽』。

太陽の写し身にして、あらゆる不浄を払うほむら焰の陽炎。

あれこそは『エクスカリバー・ガラティーンの勝利の剣』。

そして、その担い手は――

「円卓の騎士、サー・ガウエイン」

荒くなった吐息と共に、門の前に立つ男の名前を吐き出す。

「あれ、貴方もガウエインと会ったことがあるの？ ていうか大丈夫

!?! 顔は真っ青だし汗も凄いわよ!」

「お兄ちゃん!?!」

「……大丈夫だ、美遊」

強張った表情筋で無理やり笑顔を作った俺は、泣きそうな顔でこちらを見上げる美遊の頭を撫でてやる。

神造兵器である聖剣を解析したせいで頭は割れるように痛いし、魔術回路も焼け付きそうになってる。

英霊エミヤの侵食も進んでしまっただろう。

意図せず解析してしまうとは、我ながらマヌケな話だ。

「今宵も夜闇に紛れたピクト人が釣れると思っただのですが、そうはならなかったようですね」

そうひとりごちたガウエインは、突然昼になった事に混乱する難民達に声をかける。

「民よ、落ち着きなさい。これは獅子王がもたらした奇跡——『常に太陽の祝福たれ』と我が王が私に与えた祝福ギフトなのです」

ガウエインの言葉に背中を冷たいものが走った。

つまり、獅子王と名乗る者は太陽すらも自由に操る力を持つと言うのか。

そんな力を持つ者なんて、まさしく神——

「だそうだと、玉藻」

「太陽神の分霊である私を前に、随分と舐め腐ったマネをしてくれま
すね。ならばその増長ぞうちようまん慢、懲こらしめてくれましょう！」

怒りの声と共に太陽に手を掲げる玉藻さん。

すると、彼女の身体から信じられないくらいの膨大な魔力が立ち昇り、ゆっくりと振り下ろされる手の動きに合わせてるように、頭上にあつた太陽は地平線へと姿を消した。

「バカな……！ 王の祝福がかき消されただとツ！」

「あら、何を驚いてるんです？ 私は太陽の化身。神具に触れて神域に昇っただけのなり損ないの権能を消し飛ばすなんて、里芋の皮を剥くより簡単です」

驚愕の声を上げるガウエインを玉藻さんが笑う。

「ん？ 玉藻、尻尾がまた増えてるぞ」

慎の言葉に玉藻さんの背後へ眼をやると、確かに狐の尻尾が5本に

なっていた。

さつき玉藻さんの魔力が爆発的に上がったのは、これが原因なのか？

「おや、気づけば五本になってますね。これもご主人様が注いでくれた愛のパワーのおかげです！」

「パスを使つて『生命力を』送っただけで、そんなたいした事はやってないんだけどなあ……」

右手に抱きついてくる玉藻さんをそのままに、首を捻る慎。

……何となく分かった。

あいつつて無自覚にトンでもない事をしでかす奴だ。

「ガウエイン卿！ いかがいたしましたでしょうか!?!」

「うるたえてはいけない！ 予定の変更はありません。聖抜が行われるまでは、各自ピクト人を警戒しなさい！」

予想外の事態に動揺する騎士達に檄を飛ばしたガウエインは、続けて難民達に語りかける。

「皆さん。自ら聖都に集まっていた事、感謝します。人の世界は滅び、またこの小さな世界も滅ぼうとしています。主の審判は下りました。もはや地上の何処にも人の住む余地はありません。そう。この聖都キャメロットを除いてどこにも」

ガウエインが難民に熱弁を振るう中、放置された俺達はなんとも言えない気分を味わっていた。

「なんだ、こっちはシカトか」

「私たちの事は後回しにして、先に目的を果たそうというハラですね。いかがいたしましたでしょう、ご主人様?」

「ハサン達の情報が確かなら否応無しに鉄火場になる。美遊嬢たちの事もあるから、今のうちに準備しておこう」

そうだった。

慎から聞いた話では、ここから開始されるのは難民の選別と落ちた者の虐殺。

俺はその混乱の中で美遊を護らなければならないんだ。

トレースオン
「同調開始」

覚悟を決めた俺は騎士達に気取られないように魔術回路を起動させる。

やる事は決まっている。

虐殺が開始される瞬間に、投影した武器をガウエインたちに射出し、当たる直前で『壊れた幻想^{ブローケン・ファンタズム}』で爆破。

あとは本隊を慎に任せて、俵さんと共に美遊と三蔵法師の護衛にあたる。

かつて無い緊張感に小さく息をついたとき、聖都の城門に立つ人影を見つけた。

獅子を模した兜に銀の鎧をつけた細身の男……いや女か。

「最果てに導かれる者は限られている。——人の根はやがて腐り落ちる物、故に私は選び取る。決して穢れぬ魂、あらゆる悪にも乱れぬ魂。」

高みから難民に向けられた女騎士の視線。

銀獅子の兜越しでも寒気のするそれが、何故か美遊で止まったような気がした。

「生まれながらにして不変の、永劫無垢なる人間を」

瞬間、銀獅子の騎士から眩いばかりの光が放たれた。

手で視界を庇いながら周りに目を向けると、光の中にあってもさらに黄金の光を発する者、その逆にまったく光らない者が見て取れた。

俺は光っている方で、美遊は光っていない。

慎達は——

「勝手に人を定規に掛けてんじゃねーぞ！ グレートホーン!!」

「拳圧で選定の光を蹴散らすとか、さすがご主人様!!」

「邪王炎殺煉獄焦おおおおっ!!」

「おお！ 黒い炎が光を焼き尽くしていくぜい!!」

「いつもながら非常識ですね。まあ、光を剣で斬り裂いてる私が言うことじゃありませんが」

「なんと！ 神殺しを目指すだけあって剛毅なものよ!」

「ぎゃーてえ。私の釈迦如来掌より凄いわ」

……

……………オレハ、ナニモミナカツタ。

一部のおかしい人達は例外として、光は難民全ての中を駆け抜けた。

「聖抜は為された。その四名のみを引き入れる。回収するがいい、ガウエイン卿」

「聖抜の光を拒んだ者はいかがいたしましたでしょうか？」

「……………ほ、放っておけ」

そういう残して銀獅子の騎士は聖都へと姿を消した。

最後の言葉の声が震えているように聞こえたのだが、気のせいだろうか？

「……………御意」

騎士の消えた方角を見ながらガウエインが発した言葉に、俺は警戒を強めた。

四名のみ。

先ほど銀獅子、おそらく獅子王はそう言った。

俺の視界の中で光らなかったのは、母親と子供の親子連れの子供と美遊だけだった。

もし、光らない事が聖抜の合格条件だとすれば、奴等は美遊を狙ってくる！

「みなさん、まことに残念です。ですが、これも人の世を繋げるため」

そこで一度言葉を切ったガウエインは、飲み込み難いものを飲み下すように目を閉じた後、言葉を続ける。

「王はあなた方の肅清を望まれました。——せいばつ聖罰を開始します」

「ロールアウト——ロードバレルフルオープン工程完了。全投影連続層写……………!!」

ガウエインの宣告が終わると同時に、俺は投影した十二の剣を騎士達に射出する。

奴等は腕が立つらしく、不意を付いたにも関わらず手傷を与えたのは十人中二人。

当然、ガウエインも無傷だ。

「先ほどの反乱分子ですか……………。聖罰と共に反乱分子の討伐も開始——

「壊れた幻想」

紡いだトリガーワードにより、騎士達の傍らに落ちていた剣が同時に爆発する。

これで剣が突き刺さっていた奴は倒した。

そして、負傷の無かった騎士達にも手傷を負わせたはずだ。

なんにせよ、玉藻さんが起こした騒ぎで奴等が城門前に集まっていたのは助かった。

あそこは難民が寄り付かない場所だったから、何の遠慮も無しに爆破できた。

立ち昇る炎に目を凝らしていると、やはりというべきか。

ガウエインを初めとして数人の騎士が飛び出してくる。

「粛清騎士各員に告ぐ！ 反乱分子は私が処理する！ 卿達は聖罰を執行せよ!!」

ガウエインの飛ばした激、これを引き金にして事態は動き出す。

「殺される！ 騎士達に殺されるぞ！ 逃げろおおおおつ!!」

商人風の男が上げた怒号によって、思考停止状態だった難民達が我先にと逃げ出そうとする。

本来ならば完全な包囲陣が仕掛けられていたのだろうが、城門に十数人の騎士が集まった為に一箇所だけポツカリと穴が開いている。

先ほどの男はパニック状態の難民達をそこに誘導するつもりだ。

「チイツ!?!」

先導者に気づいたガウエインは、腰に下げた聖剣に手をかけながら走り出そうとする。

しかし、弾丸さながらの速度で奴に飛び掛った影によってそれは阻まれてしまう。

「どういうつもりだ、ガウエイン!!」

「王……ッ!?!」

ガウエインを押し留めた影はアーサー王だった。

彼女は憤怒の形相で、手にした聖剣をガウエインに突きつける。

「助けを求める無辜の民を斬り捨てようなどと、卿は騎士の矜持を忘

れたのか!？」

向けられた黄金の切っ先に、ガウエインの表情に迷いが過ぎる。だが、次の瞬間にはそれも消え失せ、彼は感情を感じさせない人形のような顔をかつての主に向けた。

「貴方の質問に答える義務は無い。かつてはどうあれ、今の私は獅子王の騎士」

言葉と共に聖剣を構えるガウエイン。

奴の戦意を感じ取ってか、白銀の刀身からは紅い炎が吹き上がる。

「我が王の命を邪魔するならば、何者であろうと排除します!!」

火の粉を引き連れてアーサー王に斬りかかるガウエイン。

その刃を受け止めるアーサー王の顔に浮かぶのは、先程までの激情ではなく動揺だ。

「……拙いな」

徐々に押され始めるアーサー王の姿に、俺は内心舌打ちをする。

闘いにおける覚悟の重要性は、聖杯戦争で嫌と言うほど感じた。

素人かつ無銘の英霊を降ろした俺が勝ち抜けたのは、なんとしても美遊を助け出すという覚悟があったからだ。

ガウエインは先程のやり取りでかつての王を討つ覚悟を固めたが、アーサー王にはそれが無い。

下手をすれば、このまま一気に押し切られる可能性もある。

できれば、慎達が騎士の排除を終えるまで時間を稼いで欲しかったのだが……

状況の推移に内心歯噛みしていると、久しぶりに聞く銃声や爆音が辺りに響き、同時に視界の端にこちらへ向かってくる騎士の影が見えた。

どうやら、こちらものんびり観戦とはいかないらしい。

「美遊!」

「うん!」

返事と共にテキオー灯を浴びて、スペアポケットの中に飛び込む美遊。

主が無くなったスペアポケットを素早くジャケットの内ポケット

にしまい込み、同時に武装練金の待機状態である核金かくがねを取り出す。

「行くぞ、武装練金!!」

俺の声に反応して展開した核金は、一瞬にして全身を覆う金属製のジャケツトになる。

これが防護服メタルジャケツトの武装練金『シルバースキン』だ。

「投影開始!」

言葉を吐き出すと共に魔術回路に熱が灯り、両手に使い慣れた重さが宿る。

「ハアツ!」

気合と同時に振るった干将かんしょうを右から襲い掛かってきた騎士は剣で押し留める。

奇襲が失敗にも関わらずこの反応、かなりの手練れのようだが——
—まだ甘い!

身を沈めると同時に干将で相手の剣を跳ね上げ、左の莫耶ぼくやを腹に叩き込む。

先の騎士が崩れ落ちた直後、背後から殺気を感じた。

俺は振り返らないままに空中へ身を躍らせる。

グルグルと回転する視界に、先ほどまで俺がいた場所を槍で貫く騎士が見えた。

同時に俺は黒塗りの弓を投影し、剣を改造した矢を奴へ放つ。

大気を裂いて疾る矢は狙い通りに喉と頭を打ち抜いた。

身を捻り着地に成功した直後、足の先を矢が掠めた。

素早く目を走らせると、そこには銀の弓に矢を番える騎士つがの姿。

二射、三射と放たれる矢を身を低くしながら回避すると同時に再び投影した干将・莫耶を投擲とうてき。

相手の注意が手を離れた剣に移った一瞬の隙を突いて、再度生み出した双剣を手に一気に間合いを詰める。

突撃するこちらに弓兵は慌てて矢を番えるが、その前にブーメランの様に飛翔する干将が奴の弓を破壊し、莫耶が右腕に食らいつく。

鮮血を撒き散らしながら奴が体勢を崩したところで、懐に飛び込んだ俺は交差した双剣で奴の首を薙ぐ。

首から上を失い崩れ落ちる騎士を尻目に油断無く走らせた視界は、こちらに向かつてくる騎士の一団を捉えた。

「邪魔だっ!!」

瞬時に10本の刀剣を投影し、奴等に向けて射出。

飛来する剣に騎士達は足を止めるが、先程とは違ってこちらに当てるつもりはない。

その剣の使い道は——こうだ!

「壊れた幻想ッ!!」

こちらの言霊に応じて騎士達の直前で剣は爆ぜ、紅蓮の炎が奴等を包み込む。

更なる奇襲を仕掛ける為に足を踏み出した瞬間——

「ぐああああああつ!!」

身体の内から軋むような音と共に全身に激痛が走った。

歯を食いしばって耐えようとするが、意思とは裏腹に身体は干将・莫耶を取り落として膝を突いてしまう。

くそっ、こんな時に置換の反動が出るなんて……ッ!

幸か不幸か、逸れずにすんだ視界に映るのは、爆炎の中から歩み出てくる騎士達の姿。

まずい、マズイ、拙いッ!?

必死に動こうとしても返ってくるのは激痛だけで、首から下は神経の糸が切れたようにピクリともしない。

こちらが足掻いている間に目の前まで接近した騎士の一人は、こちらに見せ付けるように剣を振り上げる。

俺はまだ死ねない!

こんな世界に美遊を置いたまま、終われるものかよッ!!

焼き付いた魔術回路に無理矢理魔力を流し込み、俺はまた干将を投影する。

但し、造りだす場所は役立たずの腕じゃない。

こちらの意思通り顔の前に現れる黒い短剣。

迷う事無くその柄に食らいつき、

「がああああああああつ!!」

唯一思い通りになる首を思い切り捨てる事で投擲する。

こちらの行動に虚を突かれた騎士は振り下ろそうとした剣を盾にしようとするが、その剣の横を縫って干将はその顔面に食らいついた。

鮮血を撒き散らして崩れ落ちる騎士を尻目に後続に目をやると、空から飛来する剣群の絨毯爆撃によって蹴散らされた。

「たわけ。その力は使うなと忠告しただろう」

苛立ちと呆れを緇交なймаぜにした声に視線を向けると、そこにいたのはやはり英霊エミヤだった。

「悪いな。こつちにも事情って奴があつてさ」

ようやく意思が通るようになった身体を起こすと騎士の姿はすでになく、難民も生きている者は遙か遠方に映る小さな影しか見えない。

どうやらこちらが足掻いている内にカタが付いたらしい。

「そういえば、アーサー王はどうなってるんだ？」

言葉と共に城門に目を向けてみると、慎達に藤丸さんをはじめとしたカルデアの面々も揃っていた。

ガウエインが城門の前で跪いているところを見ると、どうやら無事勝利したようだ。

「よかつた。みんな無事みたいだな」

「気を抜くな、まだ何か出てくるぞ」

気を緩めようとした俺を戒いましめるように、鋭い声を上げるエミヤ。

奴に釣られて視線を上げれば、城壁の上に二つの人影が立っている。

「カアーツカカカアアー!! よくぞガウエインと肃清騎士を倒した。

少しは褒めてやるぜ!」

「グオッフオッフオオ! だが、オレ達が来たからにはお前等もここまでだ!!」

「おおー! 卿達は!!」

奇怪な笑い声と共に城壁から身を躍らせる影に、俯いていた顔を上げるガウエイン。

そして月明かりをスポットライトに、その影は姿を現す。

「俺は円卓の騎士が一人、アシユ……もとい、隻腕のベディヴェイエル
!!」

そう名乗りながら、六本の腕を組む青い怪人。

「俺は円卓の騎士が一人、サン……じゃない、太陽の騎士の妹、ガレス
!!」

もう一方は野太いおっさん声を発する、3メートルはある謎のゴー
レム。

「二人合わせて、はぐれ円卓超人コンビ!!」

……

……

……ヤバい、ツツコミどころしかないぞ。

「なあ、どこからツツコんだらいいと思う?」

「……………私に聞くな」

コメカミを揉みながら、沈痛な表情を浮かべるエミヤ。

リアクションに困りながらも視線を戻すと、何故かアーサー王と藤
丸さんの隣にいる騎士が崩れ落ちてた。

「何故だ! ガレス! ベディヴェイエル!! 何故、卿達まで私の元
から離れた!?!」

「馬鹿な……! 私がもう一人いるなんて、これも魔術王の策略か!?!」
「なんでさ!?!」

閑話 『獅子王・地獄変 (3)』

え、現在傷心中の姫島慎です。

ようやく辿り着いた聖都は獅子王城ではありませんでした。

さらに言うなら、獅子王も『ダイナマイツ!!』じゃなかったとです。骨格も声も完全に女だったし、剣もボクシンググローブも着けてませんでした。

……私は悲しい(ピイイイイッン)

悲しさのあまり、聖抜の光をグレートホーンで消し飛ばしてしまっただが、仕方のないと誰もが認めてくれるだろう。

さて、現在はハサンの情報通りに虐殺の真っ最中である。

もつとも、虐殺されているのは騎士の方だが。

俺が無音拳の衝撃波で騎士達の頭を狙撃してるといいうのもあるのだが、まさか難民の中に『無限の闘争』の闘士が混じってるとは思わなかった。

いや、魔雲マウンテン天先輩や虫エイリアンを見た時点でいるんじゃないかなあとは思ってたよ。

けど、実際にこの目にすると思はは隠せなんだ。

まず、聖抜せいぼつをクリアした子供を母親から引き剥はがそうとしていた騎士が、チェーリングンで頭を吹っ飛ばされた。

弾が飛んできた方向を見ると、シユワ……じゃない。

『エイリアンVSプレデター』のダッチ・シエーファー少佐が硝煙の上がるサイバーアームを構えていた。

『大丈夫か、お前達』と、まさかの玄田ボイス。

因みに、騎士との会話のやり取りが『子供の命が惜しかったら抵抗するな、OK?』『OK!!(ズドンッ!!)』と映画の『コマンドー』じみてたのには、不覚にも吹きそうになった。

さらにそれに呼応するかのよう、ささきいさおヴォイスな雄叫びを上げながら『ランボー』のジョン・ランボーが機関銃片手に現れ、現在は木曜洋画劇場さながらの戦争アクションが展開されている。

弓を構えた騎士が穴だらけのチーズにされ、剣を持った騎士がサイ

バーアームの一撃で沈む。

ハンドグレネードがポンポン宙を舞い、拳句の果てにはシエーファア少佐がミサイルランチャーで騎士の一团を吹き飛ばす。

ガウエインとやり合っているご先祖ちゃんは仕方ないとして、合流したカルデアメンバーにはマシユ嬢の盾の後ろに避難中。

俺からB級アクション映画の洗礼を浴びたヴァーリとアーサーは目を輝かせ、玉藻は『なんで現代火器が、サーヴァントモドキに効くんでしょうか?』としきりに首を傾げていた。

そんなもの『漢のリトマス試験紙』だからに決まっているだろ!

当然、俺もバリバリ陽性反応だ!!

「なんで特異点でシ●ワちゃんとスタ●ーンが大暴れしてるのよおおおおつ!!」

爆音が轟く中、立香嬢の魂の叫びが木霊する。

細けえ事はいいんだよ!

さて、二人の無双タイムも終了し、白亜の城砦の前は難民キャンプから硝煙と炎の匂いがむせる戦場跡へとジョブチェンジした。

二人のアクションスターは避難する難民と共に姿を消し、後に残されたのは少数の難民の亡骸とミンチよりヒドイ騎士の死体のみだ。

「クッ! まさか、あのような戦力を難民に紛れ込ませていたとは……」

体格差に物を言わせてご先祖ちゃんを弾き飛ばして、ガウエインは歯噛みする。

現在、城門を守るのはガウエインと手傷を負った肅清騎士が三人のみ。

対するカルデアは先に見たご先祖ちゃんと冬木のアーチャーに加え、ダヴィンチちゃんに中性的な細身の騎士、そして黒と紫のローブを身に纏った青紫の髪と少し尖った耳が特徴の女性魔術師がいる。

これは大勢が決したと言っても過言では無いだろう。

「勝敗は決した! 大人しく城門を開けよ、ガウエイン!!」

「馬鹿な事を! 私はまだ闘える!! それに聖都の中には他の円卓も

控えているのだ！ 我等獅子王の円卓に敗北は無い!!」

「ご先祖ちゃん放った降伏勧告は、未だ闘志をむき出しにしたガウエインによつて跳ね除けられた。

「ここは私が食い止める！ 卿らはキャメロットに戻り、アグラヴェインに増援を要請せよ!!」

「ガウエイン卿?!」

「行けえっ!!」

有無も言わせぬガウエインの迫力に、粛清騎士達は聖都の中へと駆けて行く。

……今、粛清騎士達は閉じられた城門をすり抜けて行ったな。

「あら……。あの城門には物理的な防備に加えて、概念的な守りも付与されているようね」

「分かるの、メディア先生?」

「もちろんよ。術式が生前、神々の神殿で見たモノとそっくりなもの。掛けられた効果は聖なる物、より正確に言えば聖都の主の許可を得たモノ以外の侵入の遮断、といったところかしら」

「待つてください、メディアさん。神殿で見たものと同じということ……!?!」

「貴女の思っているとおりよ、マシユ。獅子王は神、もしくはそれに順ずる力を持つという事ね」

「先程の聖抜の光や獅子王の姿は、込められた神秘の濃さに比べて神性は低く感じられた。恐らく獅子王は純粹な神靈ではなく、何らかの要因で神域に上がってしまった人間。俗にいう現人神あらひとかみなのだろうね」

ローブの女魔術師……メディアだったか、の説明にダヴィンチちゃんちゃんの補足が入る。

確かに、あの獅子王から感じた神氣は、知己の神々に比べて少なかった。

玉藻も同じ事を言ってたし、むこうの予測は間違っていないだろう。

「逆徒共よ！ このガウエインがある限り、キャメロットには一歩た

りとも踏み入れさせはしない!!」

こちらが色々考察していると、裂ぱくの気合と共にガウエインが再び戦闘状態に入った。

構えた聖剣から、奴の闘志に呼応するように紅蓮の炎が立ち昇る。

この魔力の高まり、どうやら奴は聖剣を使うつもりようだ。

普段ならお手並み拝見と行くところだが、三蔵ちゃんや俵さん、衛宮君たちがいる中でそいつを撃たせるわけにはいかん。

「慎。ここは任せてもらおうか」

対処の為に氣を練っていた俺の前に、禁手化を済ませたヴァーリが立つ。

普段はアレな奴だが、こと戦闘においてはその限りでは無い。

ハーフ組絡みの経験から仲間を護ることに積極的だし、任せても大丈夫だろう。

「OK、そんじゃ頼むわ」

ヴァーリとバトンタッチして後ろに引っ込んだ俺は、素早く九字を切ってウチとカルデア組が入るように結界を形成する。

「あら、珍しいわね。東洋魔術かしら?」

物珍しそうに結界に触れたり解析の魔術を掛ける、メディアと呼ばれた魔術師の女性。

緊急用なので、壊さないようにお願いします。

観戦モードで気楽に見ている俺たちとは対照的に、対峙する二人を固唾を呑んで見守っているカルデア組。

その中でも特に緊張しているのはご先祖ちゃんだ。

ガウエインではなくヴァーリに敵意の籠こもった視線を向けているあたり、冬木の件を憶えているのだろう。

「では行くぞ、太陽の騎士よ。貴様の武勇、この俺に見せてみる!」
気合と共に動いたのはヴァーリだ。

一步目の踏み込みからトップスピードに乗った奴は、十数メートルはあったガウエインとの間合いを一瞬で殺し切る。

「ツツ!? 速いっ!」

驚愕の声を上げながらもガウエインは聖剣を防御の方に構える。

迎撃が間に合わないと感じての咄嗟とっさの策なのだろうが、ヴァーリに
対してはそれは悪手だ。

『Divid』

ヴァーリの胸当てに嵌め込まれた宝玉から電子音が響くと同時に、
聖剣を覆っていた炎はその出力が大きく衰える。

同時に黒炎が宿ったヴァーリの手が聖剣を上に跳ね上げ、がら空き
になった胴に右の回し蹴りが突き刺さった。

「グハアッ!？」

苦鳴と共に左へと吹き飛ばされるガウエインと、それを追撃する
ヴァーリ。

反吐を吐きながらもなんとか空中で体勢を整えたガウエインは、襲
い来るヴァーリに向けて剣を振るう。

未だ炎が揺れる刀身は、迫り来る純白の甲冑の肩口から袈裟懸けに
食い込んだ。

しかし、刃がわき腹から抜けようとした瞬間、白亜の甲冑の輪郭が
歪んでその姿を消してしまう。

眼前で起こった異常に唾然とするガウエインとカルデア組。

「――残像だ」

背後から掛かった言葉と共に、ガウエインは猛烈な勢いで地面に叩
きつけられた。

ヴァーリの十八番、ムーンサルトスラッシュだ。

もうもうと上がる土煙の中、ふらつきながらも自身が生み出したク
レーターから出てきたガウエイン。

見上げた彼が目にしたのは、遙か高みから自身を見下ろすヴァーリ
の姿だ。

《下らん。音に聞こえし太陽の騎士がこの程度とはな……。こんな輩
に加護を与えるなど、ドライグの奴も見る目が無い》

「先程の男とは違う……。貴様、何者だ!？」

《我が名はアルビオン・グウィバー。サクソンの白き龍と呼ばれし者。

——貴様等『赤き龍ブリテン人の民』の怨敵よ》

どこかノリノリのアルビオンの名乗りに表情を失うガウエイン。

あー、ご先祖ちゃんよ。

今にも斬りかかりそうな目でヴァーリを見るのは止めなさい。

気持ちは分かるが、ガウエインが『敵』でヴァーリは『仲間』だからな。

「馬鹿なツ!! 貴様は化身である卑王^{ひおう}ヴァーティガンが討たれた時にこの世界から去ったはず……ツ!!」

在り得ないという意思が籠ったガウエインの指摘に返って来たのは、アルビオンの大笑であった。

《ふはははははははっ!! あの出来損ないが俺の化身だと? 馬鹿も休み休み言え。奴は俺の血にすら耐えきれずに、醜い魔竜と化した小物。化身というならば、このヴァーリこそが相応しい。この男こそが我が相棒、そして真なる『白龍皇』よ!》

アルビオンの言葉に合わせてドヤツと胸を張るヴァーリ。

さつきからあいつが妙なりアクションをする所為で、シリアスな場面のはずなのにまるでコントである。

「……ツ!? ならば、何ゆえ我等の前に現れたのだ、白き龍よ!」

《聞かねば分からぬか、太陽の騎士よ。俺が貴様等『赤き龍の民』の前に現れる理由など、一つしかあるまい》

アルビオンの含みのある言葉に、ガウエインは大地を蹴った。

「うおおおおおおおっ!!」

砲弾のような勢いでヴァーリの頭上を取ったガウエインは、気合と共に剣を振り下ろす。

しかし、亜音速の一撃もヴァーリの身体を捉える事は無い。

「ここは我が王が放浪の果てに築き上げた理想郷! それを貴様の手に掛けさせるわけにはいかんツ!!」

諦めずに空で体勢を整えながら胴薙ぎ、斬り上げと繋げるが、そのどれもが空を切る。

さらには着地の瞬間を狙われ、先程と同じように蹴り飛ばされた挙句、360度全方位からの黒炎を纏った魔力弾の爆発によって城門の前まで吹き飛ばされてしまう。

「ぐ……お……ツ!」

食い縛った歯の隙間から苦鳴を漏らしながらも、立ち上がるガウエイン。

その白銀の鎧は半ば砕け、全身の至る所から血を流している。「つまらないな。最強の騎士と聞いていたから期待していたのに、これでは今代の赤龍帝のほうがまだマシだ」

《仕方あるまい。あの騎士は太陽の下でこそ本領を發揮できるのだ。今の奴はベストコンディションの三分の一程度の力しか持たん》

「そういえば、ガウエインってそんな逸話あつたな」

「聖者の数字ですね。ケルト神話における神聖文字である『3』を宿し、9時から正午と午後3時から日没までは身体能力が三倍になるという特技です」

「なんつうか、慎の奴を見てるから三倍程度じゃ驚かなくなつちまつたぜい」

「ご主人様って、5〜10倍がデフォですからねえ」

「そうだろうか？」

時間制限があるとはいえ、ノーリスクで三倍とか便利だと思うんだが。

「……うむ。決めたぞ、アルビオン」

《どうした、ヴァーリ？》

「奴の止めはここでは刺さん。お前の言うベストコンディションの時に、もう一度相手をしてやろう」

《それは構わんが、それでもお前を満足させられるとは思えんぞ》

「その時は他の円卓を集めればいい。それでも足りなければ、さっきの獅子王も呼び出せ。そこまでやって俺を満足させられんのなら、こんな都市に価値は無い。諸共全て、灰塵に帰すだけだ」

《ふむ、それもいいな。ではそうするか》

当のガウエインそつちのけで、物騒極まりない結論に至る馬鹿コンビ。

ヴァーリはいつも通りだが、ブレーキ役のアルビオンまでああなるとは。

この頃出番が少なかったから、はっちゃけてるのか？

「待て……っ！ まだ…勝負はついていないっ!!」

覚束ない足取りながらも聖剣を構えるガウエイン。

だがしかし、優劣が決しているのは誰が見ても明らかだ。

《吼えるな、太陽の騎士よ。今の貴様では俺達の足元にも及ばん》

「切り札を隠しているのは分かっているが、その有様では切ったところで俺には通じん。次は貴様が全力を出せる状況で闘ってやるから、それまで取っておくがいい」

禁手を解き、背まで向けてしまったヴァーリを睨み付けるガウエイン。

完全に相手にされていけないことで気力が尽きたのか、地面に突き立てた剣に縋る様に崩れ落ちた。

「お疲れさん」

「別に疲れてなどいない。むしろあの程度では消化不良だ」

こちらの劳いの声にムスツとした表情でヴァーリは応える。

「再戦を約束してみたいだけだよお、どうやって実現させるんだ？」

「ふむ…そうだ。慎に傷を回復させて、あとは町の中に放り込めばいい。そうすれば、明日の昼になれば奴も出てくるだろう」

「面倒臭い事この上ないですよ、それ」

「美遊嬢のこともあるから、さすがにそれは却下。城攻めは基本日帰りだ」

「ぬう……。妙案だと思ったのだが」

アレが妙案ってお前……

全部終ったら、やっぱり学校に行かせよう。

そんな感じで何だかんだと話していると、城壁の上に気配を感じた。

上げた視線の先には、明らかに人としておかしいシルエットが二つ立っているのが見える。

……なんだろう、物凄いアレな予感がする。

「カーアツカカカーアー!! よくぞガウエインと肅清騎士を倒した。少しは褒めてやるぜ！」

「グオツフオフオフオ！ だが、オレ達が来たからにはお前等もここ

までだ!!」

夜闇に響き渡る懐かしの郷里ヴォイスと佐藤ヴォイス。

なんてこった、シリアスだった空気が一瞬にしてシリアルになっちまった。

「おおっ！ 卿達^{けい}は!!」

俯き、苦悶していたガウエインは二人の登場に表情を輝かせる。

いや、そのリアクションはおかしい。

「とう!!」

気合と共に城壁から身を躍らせた二つの影は問題なく着地する。

そして、月明かりが奴等の姿を映し出した瞬間、俺の中からやる気がしおしおと抜けていくような気がした。

「俺は円卓の騎士が一人、アシユ……もとい、隻腕のベデイヴェール!!」

と六本の腕を組む男。

どう見てもアシユラマンです、本当にありがとうございます。

というか、隻腕の意味をもう一度調べて来い。

「俺は円卓の騎士が一人、サン……じゃない、太陽の騎士の妹、ガレス!!」

こいつに至っては性別詐称である。

野太いおっさんヴォイスに身長三メートルの砂の巨人。

お前のような妹がいるか!?

「二人合わせて、はぐれ円卓超人コンビ!!」

もう、超人って言っちゃまつてるじゃねーか!

あんた等隠す気ないだろ!!

「……ベデイヴェール、ガレス。よく来てくれました。卿達の力があれば、賊など恐るるに足りません」

「手酷くやられたようだな、ガウエイン。ここは我々に任せて、貴様はキャメロットに戻るがいい」

「それは要らぬ心配だ、ベデイヴェール。私はまだ闘える」

「いいや。太陽の加護を剥ぎ取られた今の兄貴には、あの連中の相手は荷が重い。アンタがすべきは、王の加護があるキャメロットで万が

「一に備える事だ」

「ガレス……しかしっ」

「なに、心配するな。報告を聞いたアグラヴェインが掃討部隊にも帰還命令を出していた。ランスロットやモードレッドが戻るまで、我々はここを護ればいいだけの話よ」

「そういうことだ。それとも、兄貴は俺達が後れを取ると思っているのか？」

撤退を渋るガウエインに、説得の言葉を畳み掛ける悪魔超人二名。

あと、サンシャインは少しは演技しろ。

「……わかりました。ですが、ランスロット達が来るまではけっして無理はしないよう」

「うむ、任せておけ」

鷹揚おうように頷くアシユラマンを心配そうに何度も振り返りながら、ガウエインもまた城門の奥に姿を消した。

「ふうっ。やっと消えやがったぜ、あの太陽野郎」

「まったくだ。奴がいてはオチオチ本来の目的も果たせん」

ガウエインの姿が消えた途端に吐き捨てるアシユラマンたち。

その態度にはガウエインに対する心配など微塵も無い。

アシユラマンにいたっては、ご丁寧に『怒りの面』に切り替わって
るし。

「えーと……何してんスか？」

「見て分からののか？ 將軍様の命により円卓の騎士をやっている」

恐る恐る声を掛けてみると、さも当然の様に言い返してくるアシユラマン。

「1mmもわかんねーよ。やるんならせめて、リングコスチュームじゃなくて鎧くらい着ましようよ」

「何を言う。リングコスチュームは我等超人レスラーにとっての戦装束では無いか」

「アンタは何も着てねーだろうが！ つーか、どうやってこの世界に来たんですか？ 貴方達は『無限の闘争』に登録されてないはずですよ」

両者の姿を見た瞬間から疑問に思っていた事をぶつけると、アシユラマン達はまたしてもあの独特な笑いを上げ始めた。

「アレだけ扱きまくってやったというのに、ずいぶんと冷たいじゃないか、坊や」

「そうだけ。お前さんの首をヘシ折った断頭台は、將軍様の命で俺達が撃つてたんだがなあ」

アシユラマンはともかく、サンシャインの妙な言い回しに思わず眉根が寄る。

將軍様の命で断頭台を撃った？

俺はサンシャインに技を食らった事はおろか、闘った事もない。

それに奴が断頭台を使えるなんて聞いた事も……あっ！

脳裏に過ぎるのは原作にあった夢の超人タッグ編のワンシーン。

將軍様との対戦がトラウマになっていたキン肉マンに二人が取った行動は――

「そういう事ですか。貴方達はいつい最近まで、將軍様の仮の肉体を構成していた。だから、変則的に『無限の闘争』に登録されてここにいるワケですね」

「カァーカカカッ！　そういうことだ」

「察しの良い奴は嫌いじゃないぜえ」

なら、残り四人の悪魔騎士もいる事になる。

もしかして、全員円卓を騙ってるんじゃないだろうな？

「あの、ご主人様。この奇天烈な方々とお知り合いなのですか？」

背後からの声に振り返ると、玉藻が困惑の表情を浮かべている。

さらに後ろには、同じような顔のウチの同行者とカルデア組。

あ、衛宮君も無事だったか。

はぐれてたんで心配してたんだが、これで一安心だ。

と、話が逸れた。

まあ、みんなの反応は十二分に理解できる。

どう見たって怪人だもんな、この二人。

「彼等は將軍様の部下である悪魔六騎士のメンバーだよ」

「ああ、あの方の。どうりで個性的な容姿をしていらっしやるわけで

す。ところで、何故彼等は円卓の騎士を騙^{かた}っていたらっしゃるのです？
その所為で、カルデアの方にいる青ペンさんと新入りさんが物凄く嘆
いてるんですけど」

青ペンってご先祖ちゃんのことか？

んなペンギンみたいな呼び方せんでも……。

それは置いといて、玉藻の疑問は俺も感じていた。

魔雲天先輩の時も、トリスタンや騎士達は普通にベイリンと勘違い
してたし。

新人さんが何者かは知らんがアーサー王であるご先祖ちゃんまで
引ッ掛かったって事は、絶対に妙なタネがあるぞコレ。

「その辺はどうなんスカ？ アシユラ先輩」

「バカモノ、俺の事はベティヴィエールと呼べい！」

それはもういいから。

「ふん。彼奴^{きやつ}らが我々を誤認しているのは、將軍様が施した認識操作
によるものだ」

「やっぱりその辺を弄^{いじ}くられてますか。見たところ、聖都の戦力全体
に施しているみたいですけど、どのようなカラクリなのでしょう？」

「大したことじゃねえ。奴等は全て獅子王、変質し現人神になった
アーサー王に召喚された靈魂だ。だから將軍様は奴の因果を操作し
て、俺達を円卓の騎士だと誤認するように仕向けたのさ」

うわっ、エゲツねえ！

因果を操作とか、認識阻害なんてレベルじゃねーよ。

それって同様の技術を持つ奴が戻さないと、永久にそのままだぞ。

「アーサー王は円卓の騎士、いやブリテンの中心だ。その因果を狂わ
せれば、奴に繋がるもの全てに影響が及ぶ。奴を依り代に現界してい
る英霊はもちろん、奴と因果の深い人間もな」

「そっちのチビな騎士王がイカレたのは、同一存在かつ上位な獅子王
の因果が弄られたからだな」

思ってた以上にタネが酷かった件。

けど、ウチのアーサーが影響を受けてないのはどうしてだ？

因果を弄られたのはアルトリア・ペンドラゴンであつてアーサー・ペンドラゴンじゃないから、平行世界の子孫にまでは影響が及ばないとか？

「お答えくださって、ありがとうございます。しかし、低級とはいえ現人神の因果を操るなんて、よくそんなマネができましたね」

「カァーカカカッ！ その程度、將軍様にかかれば造作も無いわ!!」
「奴等はここに来てすぐに仲間内で殺りあつたようだな、精神的にボロボロだったのさ。それを逆手に取って俺達を死んだ仲間だと思わせたら、拍子抜けするほど簡単に掛かつたそうだけ」

『まったく、無様なこつた!!』と、辺りに響く程に大笑する二体の悪魔超人。

その形相は一度は正義超人の友情パワーに感化されたと思えないほどに邪悪に満ちている。

しかし、また悪辣な手を打つたものだ。

どうやら將軍様は久々に悪魔モード全開らしい。

ん、何か思うところはなにかつて？

別がないぞ。

「ここがアーサー王が治めるブリテンだったなら、非難の一つでもするだろうさ。」

けど、ここは全く別の土地でこいつ等は現地の人達の聖地を乗っ取つて、こんなもんをおつ建てた侵略者だ。

挙句に貧窮した現地民を救済なんて餌で集めて、必要な人材以外を虐殺するなんて胸糞の悪い真似をやらかす始末。

どこに同情する点があるよ？

將軍様のやらかした事はエグいとは思うけど、これだって悪党がより強い悪にねじ伏せられただけの話だ。

恨むなら力の足りない己を恨めつて奴だな。

「姫島君!!」

半ば悲鳴のような声に振り向くと、頭を抱えて座り込むマシユ嬢を介抱する立香嬢がいた。

「どうした、立香嬢？」

「その怪人達を見てからマシユの様子がおかしいの！ そいつ等が円卓の騎士に見えるのを、必死に否定しようとしてるみたいで！」

たしか、マシユ嬢は英霊をその身に宿したデミ・サーヴァント。

アシユラ先輩達がそう見えるという事は、彼女と同化したのも円卓の騎士である可能性が高い。

彼女が頭を抱えているのは、獅子王の因果の影響で歪められた認識をマシユ嬢のソレが拒絶しているが故か。

しかし厄介な状況だ。

一つの身体で二つの認識がぶつかり合えば、多重人格が生まれる切っ掛けにもなりかねない。

原因が獅子王の因果ならば、こちらの取れる手は――

舌打ちをしながら、俺はマシユ嬢に意識を集中する。

アジユカの時と同じくその存在の中枢に意識を潜り込ませると、たしかに二つの魂が重なって存在していた。

一つは傷一つない真珠色の魂、そしてそれと重なり合う様に在る傷だらけで色がくすんだ魂魄だ。

前者がマシユ嬢、後者が融合したサーヴァントだろう。

魂魄の中枢である霊核、そして最奥へと意識を潜らせてみると、互いに深く絡まり合った因果に突き当たる。

綾取りのように複雑な因果の糸を辿ることしばし。

ようやく認識を司る部分を探し当てた俺は、マシユ嬢との繋がりを切ろうとして手を止めた。

この繋がりは果たして切って良いものか？

英霊の方は融合の弊害なのか、自我というものがほぼ残っていない。

しかし記憶や経験が消えたわけではないので、この繋がりを通して徐々にマシユ嬢へ落としこまれているのだろう。

同時に獅子王の因果の影響を受けて、マシユの認識まで狂わせているのもこの部分である。

こちらでもデミ・サーヴァントがどういう物か把握しきれてない以上、ヘタに断ち切るのは拙い。

となると封印措置しかないわけだが、果たしてうまくいくだろうか？

ここで悩んでいても仕方ないので、とにかくやってみる事にする。『マシユ嬢とサーヴァントの認識の境界がどこまでか』やら『封印がどこまで影響を及ぼすのか』等、面倒な調整をクリアして、何とかサーヴァント側の認識を封印することが出来た。

術式が終了したので意識を戻してみると、頭を抱えたマシユ嬢が立ち上がる所だった。

『やっぱり彼等は円卓の騎士ではありません、先輩！』と立香嬢に訴えかけているのを見ると、上手くいったようだ。

『ほう、將軍様と同じ術を使えるとはな。後継者に選ばれたのは伊達ではないか』

『もつとも、まだまだあの方には及ばねえみたいだな』

『精進しますよ。ところで、將軍様はどうして貴方達を円卓の騎士に入り込ませたのですか？』

『その理由は二つある。一つはノリ、というか演出の為だ』

『ノリ!?!』

將軍様らしからぬ言葉に目を剥く俺に、アシユラ先輩は苦笑いで話を続ける。

『今回の件は『無限の闘争』初の異世界遠征だからな。あの方とて期待や遊び心が抑えられなかったのだろう』

『『初の』って事は、異世界に渡る機能は元から付いてなかったんですか？』

『知らなかったのか？ あの世界は所有者であるお前の成長に応じて、機能が拡張されていくんだぞ』

『マジで!?!』

『サバイバルツアーにしても、対戦後の武装の入手にしてもそうだったろう？ 最近二度ほどお前が平行世界に飛ばされたのだったって、今回の機能の試運転だ。異世界では先日の魔雲天のように、強力な力を持つ者の加護がなければ『無限の闘争』の恩恵は受けられないからな。比較的安全な場所に仲間と送って、お前が無事に帰ってくるか確認し

ていたのさ」

アシユラ先輩から明かされる事実には思わず呆然となる。

冬木や平行世界に飛ばされたのもそうだったとは……

今まで考えた事も無かったが、『無限の闘争』ってのは何なんだ？

「二つ目だが、こいつが本命だ。お前と闘うまで獅子王を護る為なのさ」

「獅子王を？ それはどうして」

「お前、元の世界で神を殺るハメになったんだろ？」

此方を見下ろしながら問いかけるサンシャイン先輩に、俺は肯定の意を返す。

「將軍様が言うには、神を相手どるには神を殺した事がある方が有利に立てるそうさ。こいつは経験の事を言ってるわけじゃねえ。神を殺したって事実が概念となり、そいつの攻撃を神の弱点へと変えちまうらしいのさ」

「俗に言う特攻という奴ですね」

「そうさ。だがお前さんは元の世界じゃあ、神殺しなんてそうそう体験できねえ。神官って職業や世界中から注目される立場がそれを許しはしないからだ」

その通りだ。

仮に現実世界で神を殺したとすれば、状況によっては世界中の多神勢力を敵に回す可能性もある。

「かと言って『無限の闘争』じゃあ本当の意味で神を殺した事にはならないから、いくら神を倒そうが概念は手に入らん。じゃあ、どうすればいい？ 答えは簡単だ、他の世界で殺っちまえばいいのさ」

「成る程、そこで獅子王って訳ですか」

「その通り。奴さんはこの世界とは縁もゆかりもない異邦からの侵略者だ。始末したところで、誰にも迷惑はかからん」

ニヤリと笑うサンシャイン先輩に、俺は思わず顔を引き攣らせてしまった。

獅子王の扱いが、まるで食肉用の家畜である。

いや、こつちにしてみれば至れり尽くせりだから文句なんて言えな

いのだが、それにしても哀れだ。

「そういうワケだから、我々は獅子王の身柄を確保しておかねばならん。なんせこの世界は東の砂漠にはエジプト史上最大のファラオ、山岳地帯には他のサーヴァントとは一線を画す死の具現と、奴を脅かす存在には事欠かん」

「その他にも神出鬼没のエイリアン共までいやがるしな。將軍様は円卓の馬鹿共では荷が重いと判断されたんだろうぜ。なんせ、奴等は俺達悪魔超人よりも仲が悪いと来てる。ランスロットの野郎なんて、もう裏切りの兆候を見せてるしなあ」

吐き捨てながら、キヤメロットに侮蔑の視線を送るサンシャイン先輩。

正義超人の友情を否定してるけど、悪魔超人ってなんやかんや言ってる仲間思いだからなあ。

女やら人間関係で自滅した円卓に、思うところがあるのだろう。

「それ以外にも俺達が円卓の中にいれば、闘ってお前の力を試すことが出来る。將軍様が後継に指名したというのものもあるが、お前は超人レスラーとの対戦経験が少ない。キン肉マン戦に備えて、それを補うという狙いもある」

「俺達はあの野郎と何度もやり合ってるからな、スパーリングパートナーとしては最適だ」

ちよつと待ってほしい、これって一石何鳥の話だよ。

ここまで計算してこの場所を用意したのなら、將軍様マジにパねえわ。

しかし、サンシャイン先輩は聞き捨てならない事を言わなかったか？

「ちよつと待ってください。サンシャイン先輩、エイリアン共は『無限の闘争』から現れたんじゃないんですか？」

「いいや。我々が来る時にあちら側の闘士が何人か出て行ったが、あんな化け物は送り込まれていない」

「無関係な一般市民に被害が出るのは、將軍様が最も嫌う事だからな。仮に出ようとしたとしても、あの方が見逃すわけがねえ」

「たしかに……」

だとすると、あのレーザークロウはなんだったのか？

虫共が現地発生したとしても、あんな変異種が自然に生まれるとは……

いや、可能性はあるか。

ここに来るまでの道程で、俺達は土下座工門や神話そのまんまなキマイラ、シャドウビーストとかいう目が無く全身にモヤを纏った謎生物達に遭遇している。

これらの生物が示すように、この世界の生態系が地球と大きく違って
いるならば、寄生した宿主の遺伝情報によって変化するという虫の
特性上、レーザークロウによく似た種も生まれてもおかしくは無い。

だとすれば、奴等はいったいどうやってこの世界に発生した？

「あの、姫島さん」

そこまで考えを巡らせていた俺は、掛けられた声に思考を中断した。

「なんだ、マシユ嬢？」

「円卓の騎士の認識を狂わせたのは、お知り合いの方なんですか？」

「ああ。あっちのアシユラ先輩たちの大将で、俺の師匠」

質問というより確認の色が濃いマシユ嬢の問いに、俺は肯定の意を示す。

「その理由は獅子王となったアーサー王を利用して、最後は殺すため
なんですよね」

「らしいな。俺も今まで知らんかったけど」

「それに関して、君には何か思うところは無いのかな？」

他の声に視線を巡らせてみると、困惑顔のマシユ嬢の横にアー
チャーが厳しい表情で立っている。

「そうだなあ……。武者修行の趣旨で考えれば妥当なんだが、至れり
尽くせりすぎてちよっと過保護かなってところか」

「……それだけかね？」

返した答えに、アーチャーの声のトーンが一段下がる。

「それだけだよ。まあ、手段に関しては少々悪辣だなんて思うけど、聖

都の連中が現地の人にやってる事を考えたら同情する気は起きんな

こちらの言葉に、苦虫をダースで噛み締めたような顔で言葉を飲み込むアーチャー。

騎士の手に掛かった難民の亡骸を前にしては、流石に言葉を続ける事はできないようだ。

「ねえ、姫島君」

黙り込んだマシユ嬢達に代わって、声をかけてきたのは立香嬢だ。

「マシユを治したのって、姫島君なんだよね？」

「一応な」

「じゃあ、アルトリアとルキウスも治せないかな？」

憂いを帯びた立香嬢の視線を追うと、頭を抱えるご先祖ちゃんと線の細い騎士の姿が。

どうやら、俺とのやり取りも円卓の騎士本人が言っているように変換されているらしい。

乗りかかった船という事で確認してみたが、出た答えは『無理』である。

まずルキウスとかいうアンちゃんだが、優男な見た目に反して生き物として狂っていた。

肉体や魂、果ては霊核に至るまで何もかもがボロボロ。

まるで人間のまま千年以上無理やり生きてきたような酷い有様だ。

ここまで魂が劣化すると成仏なんて絶対無理だし、それ以前に左手に装着されたヌアザ様の義手のパクリがなかったら、とつくに消滅してる。

でもって、死人を通り越してる彼が生に執着しているのって、ご先祖様への忠誠と後悔らしい。

だから、認識を阻害してる円卓という縁を封印すると消滅する。

というか、この人って本物のベディヴィエールだったんだな。

アシユラ先輩、もうちよつと騙る人間を選ぼうぜ。

アンタとは一ミクロンも共通点が無いよ。

一方のご先祖ちゃんだが、こっちは単純に獅子王の方が圧倒的に存

在が強いから無理。

もし因果でこの辺を弄つたら、アルトリア・ペンドラゴンつて大元から、ご先祖ちゃんの方が不要と判断されて斬り捨てられかねない。という旨を説明したら、立香嬢は納得して引き下がってくれた。

「さて、長々とお喋りしちまったな。それで、お前たちはどうするんだ？」

「どう、とは？」

「このまま俺達を倒して進むか。それとも尻尾を巻いて逃げ出すか、だよ」

軽い挑発を交えるサンシャイン先輩に、俺は肩をすくめて見せる。

「今回は退きますよ。有益な情報は貰えたし、攻めるにしても時間を掛けすぎた」

視線を後ろに飛ばして同行者の意思を確認すると、三蔵ちゃんは不満そうだが他のみんなは撤退に納得してくれているようだ。

衛宮君や俵さんには、ここを離れてから色々と説明しなければならんだろうが、コレに関しては仕方が無い。

カルデア組も、ダヴィンチちゃんを中心にして撤退の方向で話をまとめているようだ。

まあ、アタツカーのご先祖ちゃんが不調なんだから、この判断は妥当だろう。

「そうか。なら、しっかりと準備をして待つとしよう」

「次こそはお前の力、計らせてもらおうぜ」

「その時は存分に胸を借りますよ」

そう言葉を交わして、俺は城門に背を向けた。

「はい、皆の衆。そういう訳だから、撤収するぞー」

そう言いながら走り出すと、ウチの面子が慌ててついてくる。

よしよし、美猴の奴はちゃんと衛宮君達を筋斗雲に乗せてるな。

あ、美遊嬢がスペアポケットから出てきた。

「ご主人様、どうして撤退を？」

俺の横を並走しながら問いを投げってくる玉藻。

息が乱れているところを見ると、けっこうマジに走っているようだ。

もうちよつとしたら、おぶってやるか。

「ガウエインが伝令として返した肅清騎士達が聖都に入ってから時間が経ち過ぎた。間違いなく聖都内部の防備は固められてるし、討伐部隊もこつちに帰ってきてる。あのまま攻めたら、内外両方から挟撃される可能性が高い。俺達はそうなってもどうってこと無いけど、衛宮君や三蔵ちゃんは行かないだろ」

「なるほど、後はカルデアのマスターもいらつしやいますからね」

「そういうことだ」

玉藻の方に向けた視界の隅をゆらゆらと掠める尻尾。

そういえば、以前に天照様が言ってたな。

玉藻は尻尾が増えれば増えるほど、傾国けいこくの美女と言われた悪女モードになっていくとか。

出会った時より四本も増えてるけど、今はどうなんだ？

「玉藻、ちよつと聞きたい事があるんだけど」

「ハアハア……、な……なんででしょうか」

あ、そろそろ限界っぽいな。

とりあえず念話で『おぶってやる』と伝えると、すぐに軽いものが背中に押し掛かってきた。

「お邪魔します、ご主人様。汗でベタ付くかもしれませんが、ご容赦くださいね」

「気にすんな。それより前に天照様に聞いたんだけど、玉藻って尻尾が増えると悪女モードになるのか？」

何気ない問いかけだったのだが、それを聞いた玉藻はビシリと固まってしまう。

「うう、あの本体めええっ！　ご主人様に何て事を吹き込んでやがりますかああああっ!!」

「あく、別に嫌なら答えなくていいんだぞ。悪女だろうがなんだろうが、玉藻は玉藻なんだから」

「ご主人様、なんて優しいお言葉！　ですがご安心ください。この玉

藻、尻尾の方は増えましたが、傾国モードにはまったくなっておりますので!!」

背中の上でフンスツと誇らしげに胸を張っているのがわかったので、何とか拍手を送っておく。

尻尾の下から聞こえるような形になってすまぬ。

「それって、天照様が間違えてたって事か?」

「いいえ。普通であれば、本体の言うように傾国を司る悪女となっていたでしょう。ですが、此度は別です」

ふむ、別とな?

「はい。今回、私が傾国モードにならなかったのは、送り込まれたのがご主人様の氣だったからです」

「俺の氣が原因なのか?　なんか特別な事したかな」

「やはり無自覚だったのですね。……ご主人様はこの数ヶ月で千を超える駒落しの呪をこなして参りました。その影響で他者に氣を送り込む時に、浄化の力を付与する癖が付いているようなのです。ですので、ご主人様の高純度で莫大な氣を浄化付きで送り込まれた結果、悪女モードは綺麗さっぱり無くなってしまったというワケです」

「それっていいのか?　玉藻的に」

「問題ありません。良妻狐としてはむしろバッチ来いです」

釈然としないが、玉藻はいいのなら深く追求する必要は無いか。

そう思い直して加速すると、今度は筋斗雲を横に付けて美猴が話しかけてくる。

「それで、次はどうするんでい?」

「ある程度距離をとったら、立香嬢に砂漠の様子を聞いてみる。『むこうに妙なものはなかったか?』ってな」

「ん、なにか探し物でもあるの?　なんだったら私が御仏に聞いてあげようか?」

「仏さんに聞いて見つかるかな?　虫共の巣、もしくは発生源なんだけど」

「それを見つけ出して、お主はどうするつもりだ?」

あんぐりと口を開ける三蔵ちゃんに代わって、俵さんの鋭い視線が

こちらを向く。

あく、これは疑われてるなあ。

まあ、アシユラ先輩たちとあんだだけ親しく喋ってたから、この辺は仕方ないけど。

早いとこ事情を説明しないと拙いかもな。

「潰すよ。なんだかんだ言っつて、こっちの混乱に俺も一枚噛んでるみたいだからさ。偽善でもいいからボランティアでもしようかなって」「ボランティアって、エイリアンの巣を壊滅させるのがですか？」

「ああ、前にも経験あるしな。一匹でも逃げたらアウトなんだけど、その辺はクイーンを半殺しにして人質にすれば兵隊どもは寄ってくる。そんなに難しいことじゃないさ」

筋斗雲の上から問いを投げってくる美遊嬢に、俺は笑顔で答えてやる。

あれ、美遊嬢？

なんでそんなありえない人を見るような目を向けるのかな？

「た、たしかに、慎が主役になったらエイリアンもホラーから爽快アクションに変わるかもな」

「……衛宮君、フオローごっつあんです」

なんて会話をしていると、後方に例の木製バギーが土煙を上げて走ってるのが見えた。

どうやらカルデア組もこっちと合流するらしい。

さて、どの辺りで説明したものか。

などと頭を捻っていると、バギーのさらに後方から複数の気を感じた。

恐らくはさつき話題に上がっていた、外遊の討伐部隊だろう。

奴等の足も特別せいなのか、結構な速度で走っているバギーとの距離をどんどん詰めていっている。

このまま行けば、カルデア組が捕まるのは時間の問題だ。

となれば、見捨てるわけにはいかない。

軽く息をついた後、俺は地面を蹴って舞空術に切り替える。

「どうした？」

「カルデア組が聖都の討伐部隊に捕まりそうなんで、ちよつと支援してくる」

宙を浮く俺の姿に目をむく衛宮兄妹や三蔵ちゃんを尻目にヴァーリにそう伝えると、みんな揃ってついてくると答えが返って来た。

空路で来た道を戻っていると、騎馬隊を前に停止したバギーが見えてくる。

立香嬢達は降ろされており、バギーの中にはダヴィンチちゃんのみ。

状況からして、彼女の狙いは自爆特攻による時間稼ぎか。

さすがにそれは容認できかねる。

氣を放出する事で一気に加速した俺は、ダヴィンチちゃんがバギーを発進させる寸前でカルデア組に合流した。

「悪い、先行してた。それで状況はどうなってるの？」

「姫島君！」

『彼も来てたのか！ よかった、理不尽と非常識の権化な慎君なら、この状況をひっくり返す事も不可能じゃないぞ!!』

「お久しぶりです、ドクター・ロマン。顔を合わせるなり罵倒とか、なんか俺に恨みでもあるんスか？」

『いやいや!? 恨みとか、そんなのまったく無いよ！ さっきのだって罵倒というより純然たる事実——』

「ドクターは黙っててください!!」

通信越しでパニックながらも墓穴を掘るといふ器用なマネをしていたロマン氏は、マッシュ嬢の一喝で口を噤む。

「いやいや、助かったよ。私の一世一代の覚悟が無駄になったのには思うところがあるけど、その辺は今置いておこう」

そう言いながら、バギーから降りるダヴィンチちゃん。

やっぱり自爆特攻するつもりだったのか。

「さて、現在我々の前に居るのは聖都の騎兵約百騎。指揮するのは円卓最強の騎士ランスロット卿だ」

ダヴィンチちゃんに釣られて、数百メートルの距離を置いて向かい合う騎兵たちに目をやる。

……なるほど、あそこにいる紫の鎧がランスロットか。

「たしかにズラズラとガン首並べてるみたいだねえ。けど、奴等はなんで襲ってこないんだい？」

「……君達のせいだ。生身の人間が空を飛んだり、雲に乗って現れれば警戒するに決まっているだろう」

「貴方、その雲はいつたいなんなのかしら？」

「やれやれと頭を振るアーチャーに、筋斗雲に興味津々のメディアア女史。」

なんか緊張感なくなつたな。

「こいつはオレツチのジジイから受け継いだ筋斗雲だぜい」

「美猴は私の一番弟子である孫悟空の孫なの！」

『孫悟空の孫!? それにそちらの女性は三蔵法師か!!』

通信越しにテンションをあげるロマン氏とは裏腹に、ご先祖ちゃんとベデイヴィエールの表情は暗い。

「王……」

「心配は無用だ、ベデイヴィエール。たとえランスロットが獅子王に付いたとしても、私の為すべき事は変わらない」

本人はこう言うものの、顔に影が射しまくっているのを見れば戦場に出すのは危険すぎるだろう。

「ご主人様、いかがなさいますか？」

「ふむ……」

美遊嬢や立香嬢がいる事を思えば、あの数で一斉に突撃をかけられるのはキツイ。

美猴に任せて上空に避難という手もあるが、狙撃されるリスクを考えると実行に移すのは戸惑われる。

「ダヴィンチちゃん。今つてむこうから休戦を示されたり、降伏勧告の返答待ちなんかじゃないんだよな？」

「うん? そういった事は全く無いよ」

よっしゃ、なら問題ないな。

少々悪い手だが、ここは安全策と行こうじゃないか。

「玉藻、少し離れててくれ。奇襲をかけてランスロット倒すから」

周りの視線が集中したような気がするが、あえて無視して練り上げた氣を天空に放つ。

こちらが拳を握ると、それを合図として上空に打ち上げられた氣は一斉に雷撃に姿を変えて騎士達を飲み込んだ。

狂雷迅撃掌・広域殲滅型。

以前からの課題であった広域殲滅技の不足を補う為に、『無ければ造れば良いじゃない』精神で開発した新バージョンだ。

コンセプトはツール様が使っていたミヨルニルの雷撃。

実戦で使うのは初めてだが、百人単位を飲み込むのに氣の消費は1.5倍と結構コストがかさむようだ。

まあ、この辺に関しては要改善といったところか。

そんなこんなと思考を巡らせながらも、俺は降り注ぐ紫電に混乱する騎兵の中を駆け抜ける。

むこうに取っては不意を付く形となった雷撃だが、休戦も何もしてないのだ。

卑怯とは言うまいね？

部隊の混乱を収めようとランスロットが櫓を飛ばしているようだが、この状況で冷静になれる奴なんてそうはいない。

阿鼻叫喚の巷ちまたと化した敵陣の中、雷撃により泡を吹いて倒れた馬から飛び降りるランスロットが目映る。

間合いを詰めるべく一気に加速するが、こちらに気づいたランスロットは夜の湖面のような蒼を帯びた聖劍を大上段に振り上げる。

「この程度で私の隙は突けんぞっ！ 『縛鎖全断・過重湖光』!!」
アロンダイト・オーバーロード

聖劍の全力を引き出したのだろう、奔流ほんりゅうと言っていいほどの蒼光を帯びた刀身が迫る。

だが——甘いッ!!

「ば……バカなっ!?!」

聖劍の光が溢れる中、ランスロットの驚愕の聲が耳を打つ。

それもそのはず、鎖骨に食らい付くはずだった『無垢なる湖光』アロンダイトの刀身は、俺の両手に挟まれてピクリともしないのだから。

しかし、流石は最高の騎士と呼ばれるだけはある。

あのタイミングで気づかれることはおろか、必殺技で迎撃されとは思わなかった。

むこうのスイングスピードがもう少し速ければ、傷の一つもついたかもしれない。

まさに神技と言うべき一太刀だった。

だからこそ、こちら奥義で返さねばなるまい。

「フッ!!」

鋭い呼気と共に腕を捻れば、こちらに引き付けられたランスロットの体が大きく泳いだ。

必殺の一撃を防がれた事で呆然となった奴は、こちらの為すがままに体勢を崩す。

そしてその隙を俺は見逃しはしない。

「食らえ、我が姉直伝の秘技——!!」

剣の間合いから一歩前、クロスレンジに踏み込んだ俺は、サッカーのシュートの様に右足を大きく振り上げる。

「男殺しッ!!」

そして一瞬の溜めの後、一気に足を振り抜いた。

大気を斬り、余波で地面を抉った足の甲は、風を巻きながらランスロット足の間を通り抜けてその股間に直撃。

「~~~~~ッッッ?!!」

そのまま骨盤の辺りまでメリ込んで、その動きを止める。

足を引き抜くとランスロットは白目を剥いて、舌をダランと出した状態でその場に崩れ落ちた。

『男殺し』

朱乃姉が習得した男性特攻の必殺技だ。

ただ全力で相手の『穢れたバベルの塔』を蹴り上げるといふ実にシンプルな技だが、男性諸氏知ってのとおり、男に対してこれほど危険な技は無い。

男に取って『穢れたバベルの塔』は、最重要器官であると同時に最大の弱点でもあるからだ。

そこに攻撃を加えられた際の苦痛は、ランスロットのザマを見れば

よく分かるだろう。

同じ男として使用するのには躊躇とまどわれたが、こと死合においては禁じ手など存在しない。

まあ、奴が持つ股間のアロンダイトはブリテン崩壊の引き金となつたというし、ヘシ折っておけばご先祖ちゃんもニッコリだろう。

「ランスロット卿おおおおつ!？」

「ランスロット卿のアロンダイトが折られたあああつ!!」

「男のシンボルに容赦ない攻撃を……この悪魔めえええええつ!!」

生き残っていた騎士達からの熱い声を耳にしながら、俺はランスロットの襟首を掴む。

「この男の身柄は貰っていく! 二度と子作りできなくなっても構わんという奴は、助けに来るがいい!!」

残った騎士達にそう宣告して、ランスロットを担ぎ上げる。

一人くらいは襲い掛かってくると予測していたのだが、奴等はこちらの視線から全力で目を逸らしていた。

円卓最高の騎士のカリスマを上回るとは……恐るべし、男殺し。

「というワケで、ランスロットを拉致って来たんだ」

「なにをやってるんですか、貴方はああああああつ!？」

「ランスロット! しっかりしてください、ランスロットおおおおおつ!？」

窮地を救った功労者の俺に待っていたのは、ブリテン関係者二名による熱い修羅場でした。

……解せぬ。

なお、先ほどの男殺しはマシユ嬢には好評だったらしく、ランスロットを連れ帰った時には物凄くイイ笑顔でサムズアップされました。

閑話 『獅子王・地獄変（4）』

秋の訪れを感じさせるこの頃、いかがお過ごしでしょうか？

私、姫島慎は変わらずに謎の世界を旅しております。

さて、あれから一日が経過した。

討伐部隊を倒した事から少し移動速度を弱めた俺達は、カプセルハウスを出して疲れを癒した。

同行者の中には俺達のような肉体派ガテン系ではなく、メデイア女史やダヴィンチちゃんのような頭脳労働派、美遊嬢や立香嬢のようない一般枠もいるのだ。

無理して体調を崩しては元も子もない。

ホイポイカプセルを見たダヴィンチちゃんが異様に原理を知りたがっていたけど、残念ながら俺にも分からん。

そういう専門的な事は、ブルマさんかブリーフ博士に聞いていただきたい。

その休憩を利用して、俺は俵さんをはじめとした現地同行者に悪魔超人関連の事情を説明。

事前にこちらの目的を知っていた俵さんは、割とあっさり納得してくれた。

曰く『思考操作に関しては思うところがあるが、あちらの意図はどうあれ獅子王はこの地の者に害を為した時点で悪神。同情の余地はない』との事。

三蔵ちゃんも神殺しや他者を利用する手口に思うところはあったようだが、それでも民を虐殺する者を放っておけないと一定の理解を示してくれた。

また、その間にランスロットの股間の性剣が修復不可能である事が分かったり、色んな意味で自害しようとするランスロットをマッシュ嬢がシバキ倒したり。

さらには、ハウスに保存していた酒を飲んだご先祖ちゃんが黒くなったりとワリと色々あった。

そんな中でも立香嬢からは目的の情報を手に入れたのだから、我な

がらなかなかのコミュ力だと思う。

その情報だが、例の砂漠の山岳地帯にほど近い場所に、他の物とは明らかに違う黒いピラミッドのようなモノがあるのだという。

砂漠を支配しているオジマンディアスに確認を取ったのかと問えば、それを見たのはフアラオの神殿から聖都に移動している最中だったので確認はしていないとのこと。

それを聞いて俺の頭に過ったのは、映画『エイリアンVSプレデター』の古代の回想シーンで登場した、南米の古代文明を思わせるピラミッド型の神殿だ。

もし立香嬢の口にした建造物がそれなら、中にエイリアン共が保管されていて不思議じゃない。

その事の確認も踏まえて調べに入りたいのだが、無許可で手を出すのは少々拙い。

万が一、それが本当に歴代フアラオの墓だった場合、相当な厄介事になる事は火を見るよりも明らかだからだ。

というワケで、まずはオジマンディアスに確認しにいく事になった。

俺達だけで行くつもりでいたのだが、カルデア組もついて行くと言うので同行することに。

となると、こちらも解決しないといけない問題が出てくる。

それはご先祖ちゃんとのシコリというか、不信である。

俺としては思うところなど無いのだが、ご先祖ちゃんの方はそうも行かないようだ。

まあ、冬木では聖剣素手で弾いたり、こつちでもトリスタンやランロットをボコつたりと嫌われる理由に事欠かんのは自覚している。

仲良くしようとは言わんが、せめて最低限のコミュニケーションは取っておいたほうが良いだろう。

いざという時に、こんな下らん事で足を取られるのは勘弁願いたいし。

アーサーに仲介を頼んだところ、『微妙な立場の私が入れば、余計に拗れるでしょう』と拒否された。

そう言われてしまえば仕方が無い。

純粹培養なリリイ嬢や師事していた『無限の闘争』のご先祖ちゃんならともかく、彼女は平行世界の子孫とか言っても受け入れそうになりからな。

となれば、やはり直接言葉を交わすしかないだろう。

掛かった時間は大体二十分程度。

上手く話が出来たかと問われると自信は無いが、愚痴くらいは聞けたと思う。

ご先祖ちゃんの言い分はこうである。

「俺に相對すると、聖劍を弾かれた事が頭をよぎって苦手意識が凄い」
「円卓の面々が敵である事は理解しているが、パン一に剥くとか金的は酷いのではないか？」

「ガレスやベデイヴィエールとの会話にも思うところがある。獅子王はともかく、円卓の騎士達を自身の糧にするのは如何なものか？」

「なにより、白い龍と友人関係でいるのが受け付けない」

言ってる事はたいがい酷かったが、言いたい事があるなら言えと誘ったのはこっちなので、文句はつけなかった。

その辺は本人にも自覚があったらしく、最後には『下らない話を聞かせて、すみません』と頭を下げてくれたが。

これで円滑にはいかんが、最低限のコミュニケーションは図れると思いたい。

その後は聖都の連中や虫共の襲撃もなく、俺達は無事に砂漠地帯へと入ることが出来た。

ここからは環境が過酷になるので空を飛べる者は空路で、他の者はダヴィンチちゃんのバギーで移動と相成った。

「わー、気持ちいい！ 筋斗雲に乗るのも久しぶりだわ!!」

「危ねえから揺らさないでくれ、三蔵ちゃんよお!」

「私の事はお師匠様!」

けっこうな速度で飛んでいるにも関わらず、いつも通りのやり取りを繰り返す美猴と三蔵ちゃん。

なんとも器用な事である。

しかし、この砂漠に入ってから奇妙な事がチラホラと起きる。

砂嵐に道を阻まれたと思えば俺達を誘導するように真つ二つに割れるし、砂漠を護るはずのスフィンクスも俺の姿を見れば首を垂れる。

これはいったいどういう事なのか？

「これはあれですね。ご主人様は元の世界でアメンさんと懇意でしたから、むこう側の好意が加護という形で表れているのでしょうか」

成る程、ダヴィンチちゃんはおジマンディアスは『ラムセス2世』とも呼ばれていると言っていた。

『ラムセス』とは『ラー・メス・シス』

ラーによって生まれたという意味の言葉をギリシャ読みにしたものの。

自らを太陽神ラーの子であり、化身でもあると名乗っているのだ。ならば、その加護を受けたこちらに妨害が無いのも頷ける。

そのまま何の障害も無く進んでいると、巨大なピラミッドを中心とした建造物が見えてくる。

あれがおジマンディアス王の居城なのだろう。

「驚いたな。ピラミッドだけじゃなくて、川や町まであるぞ」

「カルデアの話では、この世界の聖杯を手に行っているのはこの王とのこと。おそらく彼は、聖杯の力で己が居城だけではなく生前の領地そのものを召喚したのでしょうか」

さすがはアメン様の子を自称するだけある。

発想のスケールが桁違いだ。

それを聞いた俺は、神殿都市の入り口の前で地面に降りた。

「どうした、慎？ 目的の神殿はまだ先だぞ」

「見たところ空中に障壁なんかも張られてねえし、このまま飛んでいこうぜい」

「馬鹿たれ。古今東西、王とは天の象徴に位置付けられてるんだ。だから、そういう貴人を上空から見下ろすのは失礼にあたるんだよ」

「ほう、そうなのか」

「脳筋なクセして、なかなか学が深いねえ」

やかましいわ。

それとサル。

お前の国は皇帝の事を天子って呼んでただろうが。

そのくらしいの事、気づけよ。

「見事です！ 天を駆ける術を持ちながらも、地に足を付けてファラオに畏敬の念を示す。その心根、褒めてあげましょう!!」

声の方に目を向けると、そこには動物の耳のようなクセ毛をもった褐色の少女が胸を張っている。

ムト様……じゃないな。

容姿はびつくりするくらいそっくりなんだが、神氣は感じないし胸も小さい。

それに感じる気配は英霊のものだ。

「ありがとうございます、高貴な方よ。よければ、お名前を頂いてもよろしいでしょうか？」

「我が名はニトクリス。歴代のファラオに名を連ねる者にして、現在は太陽王オジマンディアスに仕える者です」

頭を垂れるこちらを見て満足げに頷きながら、名を名乗る少女。

ニトクリス。

たしか、エジプト王朝中期にいた女性のファラオだったか。

この時代に現れているという事は、彼女も聖杯に招かれた英霊なのだろう。

「太陽神ラーの加護を受けし者よ、ファラオ・オジマンディアスは貴方達との謁見を許可されました。神殿まで案内しますので、私の後について来なさい」

「申し訳ありませんが、少しお時間をいただけませんか？」

踵かかとを返すニトクリス様に、俺は慌てて口を開いた。

まだ陸路組が到着していないのだ。

ここで逸れるのは勘弁してもらいたい。

「なにか不都合でも？」

「連れの者が遅れておりまして。もうじき到着すると思うのですが」
そう言いながら砂漠に目を向けると、砂煙を上げながらこちらへ

走ってくるバギーの姿が見えた。

うむ、なかなかいいタイミングである。

「あれはカルデアの……。あなた達も彼らの仲間だったのですか？」

「知り合いではありませんが、仲間ではないですね。彼等の組織には所属していませんし」

「そうですか。なら、彼等の謁見は不要ですね」

ニトクリス様がそう呟いていると街の前でバギーは停車し、立香嬢を先頭にカルデア組と衛宮兄妹が降りてくる。

「あ、ニトクリス様だ。どうしたの？」

「不敬ですよ。ファラオを前にしているのです、頭を垂れるのが礼儀でしょうに」

「ゴメン、ゴメン」

反省の欠片もない立香嬢の返しに軽くため息を付くと、そのまま神殿に向けて歩を進める。

街は歴史の教科書なんかで見た古代エジプトとまったく同じ。

驚いたのは、エジプトの民に紛れて現地住民らしき者の姿がチラホラと見えることだ。

煙酔のハサンは砂漠に入るとスフィンクスの餌になると言っていたが、ここまでたどり着いた人もいるんだな。

「エジプト以外の民がいる事が不思議ですか？」

こちらの思考を見透かすようなニトクリス様の問いに、内心で驚きながらも首を縦に振る。

「我等エジプトの民は砂漠と共に生きる者。故に砂漠の厳しさに挑み、打ち勝った者には敬意を持って接します」

「それが異なる民族でも？」

「関係ありません。サハラに認められた者は、誰であろうと我等の同胞なのです」

そう言いながら、領民に慈愛の目を向けるニトクリス様。

滅びが迫った世界の中でも他者を受け入れる度量を示すとは、オジマンディアスとは相当な傑物のようだ。

彼女の後を追う道すがら、地上組に状況を説明していると、眼前に

黄金に輝く巨大なピラミッドが現れる。

「ここがファラオ・オジマンディアスの神殿です。中では決して失礼のないように心がけなさい」

そうこちらに釘を刺して中に入っていくニトクリス様。

テレビで偶たまにみるような風化したものではなく、金箔に翡翠等の装飾が施された豪華な通路に目を奪われながら通路を行く事しばし。

玉座へと続くと思われる巨大な扉の前で、ニトクリス様は足を止める。

「此度、ファラオが謁見を許したのは、ラーの加護を受けた彼と異国の太陽神の分霊殿のみ。他の者はここで待機してもらいます」

こちらにむかってそう宣告するニトクリス様。

カルデア組の方は不満げにする者がチラホラというが、ウチでそんな顔をするのは三蔵ちゃんのみだ。

ヴァーリや美猴、アーサーといった脳筋連中は面倒くさい事が嫌いだし、衛宮兄妹は興味無し。

三蔵ちゃんも『せつかく砂漠を越えてきたんだから、その王様の顔くらい見てみたいじゃない』的な理由なので、ごねる事は無かった。

さて、ニトクリス様の先導で謁見の間に入った俺達を迎えたのは、建物の二階分くらいはありそうな台座の上に設置された玉座からこちらを見下ろす男だった。

褐色の肌に金の瞳、絹のような黒髪と、これまたアメン様そっくりな偉丈夫。

彼がオジマンディアス王で間違いないだろう。

「よくぞ来た。我が父ラーの祝福を受けし者、そして日本の太陽神の分霊よ。同胞として歓迎しようではないか」

「お初にお目にかかります、オジマンディアス王。私は日本で神官を勤める姫島慎と申します」

「その従者の玉藻の前です」

跪いて頭を垂れる俺と、深くお辞儀をする玉藻。

礼の方法に差があるけど、間違いじゃない。

大妖にカテゴリーされるとはいえ、玉藻は天照様の分霊である。

アメン様の化身と称するオジマンディアス王とは名目上同格なので、挨拶のようなお辞儀で十分なのだ。

「うむ、面を上げよ。此度はどのような用件で余の前に現れた？」

「はい。この砂漠にあるピラミッドの一つを調査する許可を頂きたいのです」

単刀直入で出した用件に、オジマンディアス王の顔から笑みが消える。

「ピラミッドの調査だと？ 異国の分霊とはいえ、誇り高き太陽神が盗人ごときに寄り添うはずもなく、さりとて学者にも見えん。其の方、何が目的だ？」

「私はこの地に現れる妖蟲ようちゆうを駆除すべく、奴等の巣穴を探しています」

「妖蟲か。人ほどの大きさを持ち、その血は強酸だという話だが？」

「はい。エジプト領への侵入は許してはおりませぬが、旅人や行商の者が被害にあつたと報告が上がっております」

オジマンディアス王が水を向けると、ニトクリス様は立て板に水を流すようにここでの虫の被害状況を口にする。

「お二方が仰おつしやられたモノで間違いないかと思えます。先日カルデアの面々と合流した際、砂漠と山岳地帯の境界付近に他の物とは異質な黒いピラミッドがあるという話を耳にしました」

「成る程。そこが蟲共の巣穴であると判断したわけだな」

「左様でございます」

「黒いピラミッドか……。ニトクリス！」

「はっ！」

王から飛んだ指示によって、ニトクリス様は短い詠唱から使い魔を頭上へと放つ。

白いモヤ同然だった使い魔はみるみる内にその姿を隼へと変え、窓の外から飛び去っていった。

「隼ですか。あの鳥は、エジプトの天空神であるホルスさんの象徴とされていますね」

「そうだ。あ奴は冥界の鏡にして天空神たるホルスの化身よ」

ホルス神か。

容姿からしてムト様の加護を受けてると思ったのだが、違ったらしい。

けど、ムト様も『天空の女主人』って呼ばれてたらしいから、その辺で繋がりがあるのかも知れんな。

「其の方が口にした黒いピラミッドだが、こちらも存在は把握していた。しかし、あれは我が所領ではなく山岳地帯に位置するモノ故、調査を後回しにしていたのだ。ところで、其の方にはなにか確認があるのか？」

「確認と呼べるモノではありませんが、私が以前読んだ文献に黒いピラミッドと妖蟲を挙げた物がありました」

「文献だと？」

「はい。その文献は、とある異星人の生態について書かれたものでした。彼等は戦いと狩猟を最も重きに置く戦闘種族であり、一人前であると周りに認めさせるために力を示す習慣がありました。その為、宇宙で指折りの凶悪さと戦闘力を誇る妖蟲の女王を狩る事が、彼等の成人の儀となっていたようなのです」

「異なる星の民ですか。では、あの妖蟲も異なる星で生まれたものなのですか？」

「文献ではそうなっております」

「ふむ、続けよ」

「かの蟲は蟻や蜂と同じように女王を中心とした社会を築き、驚異的な繁殖力を持ちます。しかし、成人する者が現れる度にその巢を見つけてというのは、星を股にかける彼等でも容易ではありません。そこで彼等は蟲の女王を捕らえ、儀式の為に飼育する事を選んだのです」

「ふん。その飼育用の施設が、汝の言う黒いピラミッドというワケか」
得心が行ったと言わんばかりのオジマンディアス王の笑みに、俺は肯定の意を返す。

「彼等は星間航行を可能にするその技術で未開の土地に降り立ち、その技術力と戦闘力を持って現地民の信仰の対象となります。そして彼等を使って黒いピラミッドを建造し、捕らえた蟲の女王を最奥に配

置。外的ショックを与える事で強制的に産卵を促し、同時に生まれた卵の宿主として民に生贄を用意させます。それによつて宿主を犠牲に蟲が生まれ、それらが狩るに足る大きさに成長した時、異星人の命を懸けた成人の儀がはじまるのです」

「では、この地の虫共はその成人の儀によつて呼び出されたもの?」「そこまでは分かりません。あの黒いピラミッド自体、別のモノの可能性もありますから。ですが、あの蟲は間違いなく地球上には存在し得ない種です。それが現れたのなら、何処からか転移してきたと考えるべきでしょう。そして、その可能性が最も高いのがあのピラミッドであると私は考えます」

「成る程な」

こちらの言葉に、オジマンディアス王は眩きを漏らす。

ちなみに、文献とはもちろん、映画『エイリアンVSプレデター』の事である。

「ファラオ・オジマンディアス。使い魔が例のピラミッドを捉えました」

映画の内容を思い返していると、ニトクリス様が声を上げた。

「よし、鏡に映せ」

部屋の主の命により、中空に現れた水鏡に映像が映し出される。

空間投影ディスプレイのようなそれに映ったのは、上空から見下ろした黒いピラミッドだった。

「ほう、あれがそうか。実際に見るのは初めてだが、確かに他のモノとは違うな」

「はい。頂上に祭壇の様なものも見えます」

「しかし、これでは詳細までは見えんな」

「では、拡大してみましよう」

ニトクリス様が杖を軽く一振りすると、鏡に映された映像がどんどんピラミッドへと近づいていく。

そして、それがエジプトのピラミッドというよりも南米の遺跡に近い物であると解った時、俺達は確実な証拠を手に入れた。

「いますね」

「ああ、いるな」

外部の階段状になっている部分と入り口付近に数匹づつ、虫共が這い回っているのを目にしたのだ。

しばらく様子を見てみると、山岳側から虫の一団が戻ってくる。

奴等の手の中には、ぐったりとして動かない人間が見て取れた。

人間を運び込んでいるって事は間違いない。

奴等の巣穴はここだ。

「なるほど、其の方の言葉通りだったようだな。それで、どうするのだ？」

「巢に乗り込んで殲滅します。その際にあのピラミッドが破壊されてしまふ恐れがありますが……」

「構わん、あれは余のモノではない故な。しかし、何故貴様がそこまでする？ 見たところ、この世界とは縁のない異邦人であろう」

頬杖をつきながらも、オジマンディアス王が向ける眼光は鋭い。

一切の虚偽を許さないと言わんばかりの視線に俺は苦笑いを浮かべた。

「そうですねえ……。しいて言えば、カツコ悪いと思ったからですかね」

「カツコ悪い、だと？」

「ええ。……俺はこの世界に武者修行目的で来ました。だから課題をこなして強くなれば、もうこの世界には用は無いです」

「単純で分かり易い目的では無いか。その何処が悪い？」

「目的自体には問題は有りません。でも、俺自身が納得できないんですよ。他人の世界に土足で踏み込んで、好き勝手した挙句に目的を果たせばオサラバというのは。……男だったら責任取って、胸張って、カツコ良く行きたいじゃないですか」

「その為に妖蟲の巢に乗り込むと？」

「ええ。害虫駆除程度ですが、少しは現地の人達へのケジメになるでしょう」

「随分と愚かな事よな。己の意地の為にそこまでするか？」

「かもしれません。ですが、格好を付けるってそういうものでしょう？」

俺の言葉を受けたオジマンディアス王は、一瞬だけキョトンとしたような表情を浮かべ、次の瞬間には謁見の間に響き渡るほどの声で大笑した。

「成る程、これは一本取られた！『格好いい』と思わせるとは、他者を魅了し惹きつける事に他ならぬ!! 行動でそれを示そうというのだ、生半可な事では勤まらぬは道理よな!!」

それから少しして、ひとしきり笑ったオジマンディアス王は、ニトクリス様に目配せをした。

すると彼女の背後に黒い穴が開き、中からポケットサイズの足から上を白い布ですっぽりと覆ったUMAが現れる。

コレって確か、エジプト神話に登場する冥界の神の一柱であるメシエド様だったか。

「彼の者を連れて行くがいい。貴様のこれからの行動、しかと見定めてやろう。そして、それで余を楽しませたのならば、褒美にこれをくれてやる」

そう言っただけから取り出したのは、黄金に輝く杯。

カルデアが求めていた聖杯だ。

「いいのですか？」

「構わぬ。余には別に叶えたい願いなどないからな。魔術王が作ったものなど、余興の景品程度がちょうど良い」

聖杯をその辺の瀬戸物セットのように言う太陽王。

まさに太っ腹である。

景品まで用意されたとあっては、こっちも気合を入れねばなるまい。

「分かりました。では、王の死ぬほど楽しめるように、私の誇る『明るく、楽しく、激しい』修行風景を提供いたしましょう」

「うむ、期待しているぞ」

その後、オジマンディアス王とニトクリス様に退出の礼をして、俺と玉藻は謁見の間を後にした。

こっちのモチベーションを上げてくれるとはとてもいい人だ。
こっからはいつもの『無限の闘争』タイムである。

「ご主人様。普通の方もいらっしやるので、常識的な範疇に収めたほうがよろしいかと」

……常識つてなんだあ？

◇

さて、問題の黒ピラミッドにやっていました。

みんなと合流してから、ここまで来るのに掛かった時間は約10分。

王都から結構離れていたが、カルデアのバギーを担いで飛んだお陰でビックリするほど速く着いた。

中の人たちが怖いだのなんだの言っていたが、些細な問題だろう。先程も言ったが、ここは虫共の巣である。

当然こちらの気配を察して迎撃部隊が現れたのだが、『聖杯動画大賞』を狙う俺の前では無力に過ぎた。

具体的に言うと『やーまだたーろうー』で、全員星になっていた。いた。

「開幕ホームランとは、幸先がいいな」

「今度はピラミッドのホームラン王でも目指すのか？」

「馬鹿め、目指すは『聖杯動画大賞』だ」

ヴァーリを初めとして、こちらの言葉に首を傾げる面々にミニメシエド様を見せながら説明。

カルデアの面々は頭を抱えたが、ウチの面子のテンションは上がった。

どいつもこいつも聖杯なんぞ興味は無いが、この手のイベントに目が無いのが『無限の闘争』常連者である。

ヴァーリがノリで放った黒炎弾によって、ピラミッドに大穴が開いたのはご愛嬌だろう。

「てなワケで、巣穴に乗り込む面子を決めようと思う。希望者は拳手

！」

こちらの合図で手が上がったのは5人。

俺、ヴァーリ、アーサー、美猴、ご先祖ちゃんだ。

「先輩は行かないんですか？」

「ごめんね、マシユ。さすがにリアルリプリー体験は遠慮したい」

立香嬢とマシユ嬢の間で行われた会話には、思わず納得してしまった。

人類最後のマスターとやらも、クイーン相手に『ビッチ!!』と叫ぶ根性は無いだろう。

とはいえ、希望者全員を連れて行くというワケには行かない。

立香嬢や美遊嬢の事を思えば、地上に待機する方にも戦力を配置しておかなければならないからだ。

ご先祖ちゃんは兎も角、ウチの面子は口で言っただけで聞かぬような奴はいない。

ここは公平にじゃんけんで決める事にしよう。

「じゃんけん、ホイ!!」

「じゃあっ!!」

「くっそおおおっ!?!」

「しまった! チョキを出していれば!?!」

「へへん。これも日ごろの行いって奴だぜい!」

結果は俺と美猴が勝ち、アーサーとヴァーリが負けである。

「エイリアンの巣穴に乗り込むメンバーをジャンケンで決めるとは

……」

「まるで遊びにでも行くようなノリね」

アーチャーとメディア女史が呆れているようだが、気にしてはいけない。

枯れた大人にはわからんだろうが、危険に目を輝かせるのは少年の特権なのだ。

突入メンバーが決まり、ダヴィンチちゃん特製の通信機を着けて準備は完了。

「ここから先は、ピクト人の巣窟なのです。二人共、真面目にしてください」

「さーい！」

「そう目くじら立てんなって。鉄火場じゃいつでも大真面目だぜい、オレツチ達はよおッ！」

緊張が隠せないご先祖ちゃんに、美猴は軽口と共に如意棒を一閃させる。

軽く振られたはずの先端から放たれた衝撃波は入り口の外壁を深い傷を刻むと共に、迎撃に跳び出そうとしてたエイリアン数匹を両断する。

「なんでい、そのツラは。オレツチをヴァーリの腰ぎんちゃくだなんて、思ってもらったら困るぜ。これでも斉天大聖の名を継ぐ漢なんだからよお」

呆気にとられているご先祖ちゃんに、ニツと笑みを浮かべる美猴。お前のレアなカツコいいシーンは、メシエド様がしつかり記録しているぞ。

虫共の死体を除ければ、奥に見えるピラミッドの内部は見覚えのある生物的な巣穴の様相を呈している。どう見ても完全な虫共の巣窟である。

ならば、殴りこむ時に言うセリフは決まっている。

「狩・リ・ノ・時・間・ダ！」

……だろう？

「纏めて吹っ飛べ！ テュホン・レイジツ!!」

弧を描くように振り抜かれた踵が飛び掛かって来たエイリアン・ウォーリアの首を粉碎し、発生した衝撃波が竜巻となって通路の前方にいた敵集団を吹き飛ばす。

突風と真空波に晒された虫共はミキサーにかけられたようにバラバラとなって、辺り一面に身体の破片と強酸の血を撒き散らした。

ピラミッドに足を踏み入れて約1時間半。

奥へと進むごとにエイリアン共の襲撃も激しさを増し、そろそろ数えるのも億劫になってきた。

むこうもなかなか必死なようで、天井を初めとした高所からの奇襲はもちろんのこと、床下から顔を出して酸を吐きかけたり壁の隙間か

ら槍袵のように尻尾を突き出してきたと、奇襲のバリエーションも増やしてきている。

とはいえ、知恵が働くといっても所詮は虫。

殺気を隠すというところまで頭が回っていないために、せつかくの罠も全て事前に察知できてしまう。

天井から襲撃してきたドッグタイプのを驚掴みにして握り潰す。

「そら返すぞ、地獄の剛速球ツ!!」

「!!」「ピギイイイイイイッ!!」「!!」「!!」

前頭部を失って痙攣する虫を続けて落ちてくる奴等に投げ付けると、先頭の奴にぶつかってバラバラになった死体が散弾のように後続を巻き込み、あつという間にミンチの山が量産される。

奴等を蹴散らすのは作業然として面白くもなんともないが、我儘は言うべきではないだろう。

聖杯動画大賞の事もあるが、今はそれ以上に急ぎの要件もあるのだ。

「二人共、大丈夫か?」

足を止めて後ろに声を掛ける。

「やれやれ、随分と気合入ってるねえ。エジプトの大將にどんなハツパをかけられたんでい」

「こちらは問題ありません。貴方こそ先頭がキツくなったら言ってください。いつでも交代しますから」

軽口を挟みながら如意棒で軽く肩を叩く美猴と、こちらへの気遣いを見せてくれるご先祖ちゃん。

見たところ双方共に大した負傷も無いようだから、このまま進んでも問題ないだろう。

「休み無しの強行軍で悪いが、もう少しだけ付き合ってくれ」

「エラく急いであるが、何があるんでい? 聖杯動画大賞に関連する事か?」

「そっちも大事だが別口だ。オジマンディアス王の神殿でこの様子を探ってた時にな、山岳地帯から攫われてくる人が見えたんだ」

「成る程。奴らの手にかかる前に民達を助けようという事ですね」

「ああ。もう少し行つたところから人の気配がするから、多分そこに捕らえられてるんだろう」

「そういう事なら是非ありません。先を急ぎましょう」

一瞬の迷いもなく言い放つご先祖ちゃん。

この辺は英雄の面目躍如といったところだろう。

「ところでよお」

先ほどと同じようにエイリアンを蹴散らしながら進んでいると、美猴が声を掛けてくる。

虫共をむこうに回していないから、手持ち無沙汰でもなつたのか？

今は御先祖ちゃんのエクスカリバーと俺の手刀の切れ味を比べるのに忙しいのだが。

「さつきから奴等の返り血浴びてるのによお。溶けてないよな、お前」

「なんだそりゃ？ 俺に溶けてほしいのか、お前は」

「ちげーよ。身体の方は耐性が出来たとか理不尽な理由なんだろうが、服も溶けてないのはなんでかなって思ったんだよ」

「実は私も疑問に思つてました。英霊の礼装も溶かす程の酸をどのよう

に防いでるのですか？」

まさかのご先祖ちゃんからの援護射撃である。

別に隠す程の事でもないからいいんだけどさ。
「この道着は天津神が身に着けている神衣と同じ製法で出来てるんだよ。トール様の雷撃でも焦げ目一つ付かなかつた優れものだからな、虫の酸なんて目じゃないのさ」

「いや、十分大した事だろ」

「普通は神霊と同じ礼装を貰つたら誇る物なんですけど……」

「つっても、去年のお歳暮兼冬のボーナスに貰ったもんだしな。そんなん誇つてもカッコ悪いだけだろ」

「冬のボーナスって……」

「日本の神様、アットホームすぎるぜい」

呆れる二人を尻目に歩を進めると、通路が終わって少し開けた場所に出た。

周辺に目をやると四方は高い石の壁に囲まれ、床にはエイリアンの

幼生である『チェストバスター』を模した彫刻が施してある。

そして、部屋の片隅には人間とも虫とも違う異形の死体が二つ、転がっていた。

「エゲツないねえ、一撃で頭をブチ抜かれてやがる」

「ピクト人……ではありませんね。この生物はいつたい……」

乾いて濃さを増した蛍光緑の血溜りに伏した遺体は、人型ではあるが爬虫類のような表皮に金属製のプロテクターとチェインメイルで武装していた。

大穴が開いた頭部は金属のマスクが嵌められており、側面にはドレッドヘアのような物が生えている。

「……間違いない、プレデターだ」

「この異人の事を知っているのですか、シン？」

「ああ、こいつ等は異星の狩猟民族だ。目にした文献によれば、このピラミッドはこいつ等が造ったモノらしい」

「ここをですか。その理由は？」

「成人の儀式の為なんだとき。こいつ等は戦闘種族だからな、一人前と周囲に認めさせるには力を示す必要がある。虫共もその為の小道具だったんだが、この様子だと見事に返り討ちにされたようだな」

「そいつはまた、無様なこつて」

肩を疎める美猴を他所に、俺は倒れたプレデターからガントレットをはぎ取った。

軽く弄ってはみるが、言語が分からない所為で使えそうにない。

自決用の爆弾を使えば、雑魚共を一掃するのに役立つと思ったんだが。

「シン。死者から物をはぎ取るべきでは」

「すまん。何か情報があるかと思ったんだ」

ガントレットを元に戻した俺は、立ち上がりざまに右手を一閃させる。

振り抜かれた手刀は物陰から飛び掛かって来た虫を縦に両断。

その死体は床に転がってから初めて、断面から血を溢れさせた。

「やれやれ、どつからでも湧いて出るな。ゴキブリか、こいつ等は」

「凄まじい切れ味ですね……。素手とはとても思えない」

同じタイミングで襲撃を掛けて来た別の一匹の死体を前に、ご先祖ちゃんがこちらに称賛の声を掛けてくる。

「なんだよ、慎。ヴァーリを真似て手刀を鍛え始めたのか？」

「あいつの真似なんてするか。『余の手刀こそが、如何なる伝説の武器をも上回る地上最強の剣なのだ』って、とある漫画の大魔王様の台詞に感銘を受けたんだよ」

「主人公じゃなくて魔王のセリフに感銘を受ける辺り、捻くれてるよなあ」

やかましい、バーン様は偉大なのだ。

「ところで、囚われた民は何処のいるのですか？」

「おっと、悪い。この下のフロアだ」

「下の階かよ。じゃあどうやって降りるんかい？」

「まあ任せとけて。救助対象もすぐそこだし、そろそろ動画を見る視聴者用に一発芸でも見せようと思っていたところだ」

「視聴者って、『聖杯動画大賞』の事か？ あれってエジプトの大將以外見てないだろ」

「いんや。どうせならって、外で待ってる奴等にも携帯端末使って送ってるぞ」

「マジかよ、いつの間に……」

「仕事は手早くがモットーだからな、俺は」

カラカラと笑っている俺を見て、ご先祖ちゃんは不快げな表情を浮かべた。

「その動画というのは、本当に撮らなければならぬのですか？ 今の状況でそんな事をするのは不謹慎だと思うのですが」

「そう言われると返す言葉も無いな。けど、この動画を撮るのも大事な事なんだぜ」

「どう大事だというのです」

「上手くいったら、オジマンディアス王と戦わずに聖杯が手に入る」

俺の答えに思わず息を飲むご先祖ちゃん。

俺達には無用の物である聖杯も、カルデアからすれば喉から手が出

るほど欲しいはずだ。

それが闘わずに手に入るとしたら、そりゃあ考えるまでもないだろう。

「エジプト勢力は強いぞ。オジマンディアス王はもちろんだが、ニトクリス様も十分に強敵だ。そこにエジプト兵や神獣が加わるんだから、本気になれば聖都の連中も圧倒できるかもしれない」

「……だから、私達では敵わないと?」

「そこまでは言わんさ。でも闘えば犠牲は免れんし、勝てたとしても戦力的にもボロボロになるだろう。それだけの被害を出して聖杯を手に入れても、この世界の歪みを正さないと人理つてのは修復されなின்றろ? つまり、そんな状態で聖都の獅子王や山岳地帯の勢力と闘り合わなけりやならんわけだ。ぶっちゃけ、厳しいなんてレベルじゃないと思うけどな」

こちらの指摘に黙り込むご先祖ちゃん。

援軍があるならともかく、正直言つて現状のカルデアの戦力ではオジマンディアス王にも勝てないと思う。

物量を盾に波状攻撃をされたら、為す術もなく詰むだろうし。

「すみません、出すぎた事を言いました」

「いや、こっちもすまない。本当ならセイバーちゃんの言う事が正しいと思う。けど、今は少し異常な状況だからさ。不快だと思つても目を瞑つてくれると助かる」

謝罪してくるご先祖ちゃんに、こっちも頭を下げる。

こういう場合は互いに非を認め合うのが、人間関係を円滑にするコツだ。

「それで一発芸つてのはなんなんだよ。雷撃でも呼んで、この施設を跡形も無く消し飛ばすのか?」

「爆発オチなんてサイテー! そんなんじゃないやなくてモノマネだよ、モノマネ」

「モノマネって、誰の? エジプトの大將が分からないと意味が無いんだぜえ」

「甘いな、俺が今からやるのは一発芸。普通のモノマネとは一味違う

ぞ」

そう言いながら、オレは床に手を当てる。

「よしよし、この程度ならアレで抜けそうだ」

「なんだかイヤな予感がしてきたぜえ……」

「奇遇きぐうですね、私もです」

美猴たちが顔を曇らせながら距離を取っているが、そんな事は気にせずに俺は身構えながら調息する。

「そんじゃ、行くぞ！ 二人共、成功したら床が抜けるから準備しとけよー」

「そういう事はもつと早く言えよ！」

「普通に下に降りようとは考えないのですか、貴方は!？」

二人が抗議の声を上げると同時に、氣を込めた右手に蒼い光が宿る。

練氣の量も、宙に浮いたミニメシエド様の角度も良し。

それじゃあ行くぜ！

「硬度10！ ダイヤモンドアーム!!」

将軍様直伝の素敵技能を展開した俺は、床を蹴ると同時に右手を大上段に振り上げてこう叫んだ。

「ランスロットのマネ！ 『全鎖断裂・過重湖光』!!」
アロンダイト・オーバーロード

裂帛の気合と共に振り下ろされた蒼の手刀が刻まれた『チエストバスター』の頭を切り裂いた瞬間、その傷口から蒼い光が溢れ出して内側から弾けるように床は崩壊した。

「以上、ランスロットのモノマネでした!!」

筋斗雲の上でアングリと口を開けるご先祖ちゃん達にむかって、舞空術で浮きながらしめのお辞儀を見せる。

「いやいやいや！ モノマネじゃねーよ!! 今のつてランスロットがお前に仕掛けた技だよな!? 完全にパクッてるじゃねーか!!」

「そうです！ 今のはランスロットとアロンダイトがあつて初めて可能になる技！ それを再現するなんてあり得ません!!」

「そう言われてもな。スツゲエ簡単だぞ、この技。ビーム用の聖剣エネルギーを刀身に込めて唐竹割りするだけだし。これに比べたら、

アーサーの未完成燕返しの方が百万倍難しいと思う」

まあ、聖剣エネルギーを氣で代用したり、念のため手刀の強度もダイヤモンド並みにあげるなど、再現にあたっては地味に手間がかかってたりするだけだな。

「何を言ってるんですか！ 聖剣の力を放たずに、刀身に留める事が最も難しいんじゃないですか!!」

えらい剣幕で怒鳴りつけてくるご先祖ちゃんに思わず首を捻ってしまう。

「え？ 力の流れを制御するのって、氣功術はもちろん魔術や呪術でも基礎の基礎だろ。それを疎かにすると、使えなかつたり垂れ流しに……あつ」

ある事に気付いて、俺は慌てて口を噤んだ。
そうだよ。

ご先祖ちゃんって、普通でも黒い時でも魔力放出とかいってバリバリ垂れ流しだったわ。

リレイ曰く、『竜の心臓』とかいう魔力炉心があつた所為で、生成される魔力が多すぎて制御しきれないとか。

……実際リレイも垂れ流しだったし。

『カリバーンが魔力に耐えられない』とか言ってたのも、制御もせずにはブチ込んでるのが原因だったもんな。

あ、今のリレイはしっかり制御できてるぞ。

「ゲフンツゲフンツ！ ともなく、手ごろだったんでパクってみましたって感じだな」

「そんな理由で、聖剣の真名解放を模倣しないでください!!」
新技を公開したのに怒られてしまった。

パクられるのが嫌なら、あんなシンプルな技なんて作らなければいいのに。

さて、ご先祖ちゃんの怒りも収まったところで下のフロアに降りてみたのだが、待っていたのは予想通りの地獄だった。

灰色の壁に埋め込まれて力なくうな垂れる人々、その誰もが胸に大きな穴が開いている。

傷の様子や出血の無さから死後数日が経過しているはずなのに、そのどれからも腐敗する様子が見えない。

そんな異常さが、この場所の不気味さを殊更に引き上げている。

「ここはなんなんでい……」

先程までの軽口が鳴りを潜め、苦々しい表情で周りの様子を見渡す美猴。

そう言えばこいつって、『無限の闘争』でヴァーリと一緒にエイリアン狩りした時にいなかったっけ。

「奴等の保育所、いや孵化室というべきかな」

表情を殺して周りを見渡していると、こちらに釣られて視線を巡らせていたご先祖ちゃんが、瓦礫に潰されていなかった奴等の卵に目を付けていた。

「あれがピクト人の卵だと？」

「くれぐれも中を覗こうとするなよ。最悪、寄生されちまうからな」

「……ッ」

好奇心のままに中を見ようとしたので注意すると、ご先祖ちゃんはビクリと身を仰け反らせる。

「しかし、寄生とはねえ。つまり、奴等が人間を浚う理由ってのはこれだったって事か」

如意棒で犠牲者の胸に開いた傷を指し示す美猴。

犠牲者の傷口の肉が、内側から外に向かって弾けているのに気づいたららしい。

「そうだ。奴等の増え方は、まず卵からフェイスハガーと呼ばれる幼生のキャリアーが飛び出して、宿主の顔に付着。身体全体で顔面を押しさえつつ尾で首を絞める事で宿主の口を強制的に開かせ、そこに産管を差し込んで幼生を寄生させる。植えつけられた幼生は宿主の胸部に留まり、ある程度の大きさになると内側から胸を突き破って出てくる」

エイリアンの繁殖方法を口にするのと、ショックを受けた様子のご先祖ちゃんは思わず口元を押さえている。

「で、攫さらわれた奴等ってのはどこにいるんでい？」

「この部屋の奥だ」

胸糞の悪くなる光景の中を気配のする方に進んでいくと、そこには壁に埋め込まれた数人の男女がいた。

「要救助者発見ってか。ところで、奴さん達は大丈夫なのか？」

「ああ。彼等の前に置かれた卵も口を開けてないし、体の中に別の気も感じない」

なんて言っていると、此方の話を聞いていたかのように卵の口が開いていく。

「なるほどなあ、フラグつてのはこういうのを言うのかいッ!!」

「言ってる場合かつ!？」

バカを言い合いながらも、俺達は慌てて対処に入る。

美猴は伸ばした如意棒を横薙ぎにして、フェイスハガーが飛び出してきたところを叩き潰し、俺は撃ち漏らした分を衝撃波で仕留める。

時間にして数秒ほどだが、正直寿命が縮まる思いだった。

「やれやれ、なんとかなったかね」

「まだ終わってないっつーの。さっさとあの人達を壁から引き剥がすぞ」

「へいへい……」

周りの壁を壊して囚われた人達を救出していると、不意に美猴が口を開いた。

「ところで、ご先祖ちゃんの姿が見えねえんだけど、どこいった？」

「あん？」

辺りを見回してみたが、たしかにご先祖ちゃんの姿は何処にも無い。

「ホントだな」

「どうすんだ？」

「こつちを片づけたら探しにいこう。ご先祖ちゃんも英霊なんだ、そこから辺の虫程度なら遅れは取らないだろ」

「それもそうだな」

そうやって作業を再開して数分、最後の救助者である紫の髪に褐色の肌をした幼女を降ろして、俺は小さく息を付いた。

こんな小さな女の子まで連れ去られてるとは思わなかった。しかし、なんでこの子は御先祖ちゃん達と同じ気配がするんだ？

こんな年の英霊なんているとは思えないんだが……。

「ひーふーみーの……六人か。一人はチビでも、こっから運び出すのはけっこう骨だぜえ？」

「ご先祖ちゃんと合流したら瞬間移動で外に出よう。寄生はされてないんだし、待機組に預ければ虫共を駆逐する間くらいは何とかなるだろう」

そう言った瞬間、肌を刺すような殺意がこちらを襲った。

「美猴！」

「分かってるよおツ!!」

声を掛けるまでもなく、警戒態勢を取っている美猴。

ヒリつくような空気の中で感覚を研ぎ澄ましていると、壁面の上の大気が弾けるのを感じ取った。

ハープの音色のような音と共に押し寄せる不可視の刃。

こいつは——！

「チイッ!?!」

舌打ちと共に、俺は四方から押し寄せるそれを片っ端から払い落とすしていく。

要救助者がいる以上、躲す事は許されない。

流れ弾が行く事もアウトなので、思った以上に神経を使う。

そうやって襲撃者の攻撃を凌ぎ続けていると、ようやく間断なく襲い掛かって来た刃に綻びが見えた。

「美猴!!」

「あいよお!!」

ブロッキングに加えて手の振りで発生する衝撃波で、美猴の範囲をフォローに回る。

そして、フリーハンドになった奴が襲撃者の気配がする方に如意棒を突き出すと、届かないはずの穂先はグングン伸びて、壁面を削り取りながらその先の闇に突き刺さる。

ビリー・カーンの対空技である『雀落とし』。

本家は三節棍を伸ばしてリーチを稼ぐのだが、その辺は伸縮自在という如意棒の特性で代用しているようだ。

「ギシャアアアアアッ!?!」

虫特有の甲高い悲鳴を上げて、退散していく襲撃者の気配。

そして一瞬ではあるが、他の個体よりも赤みを帯びた尻尾を見て取れた。

「慎、今のってよお」

「ああ。似てたな、トリスタンのフェイルノートに」

奴が連れ去れた時、基本霊体である英霊からはエイリアンは生まれないとタカを括っていたんだが……見通しが甘かったのかもしれない。予定では救護者はここに置いて、俺達のどちらかがご先祖ちゃんを探しに行くつもりだったが、あんなのが潜んでいるならそうも言ってもらえない。

「美猴、移動するぞ。この人達担げよ」

「あいあい。まったたく、面倒な事になったねえ」

取り敢えず救護者を3・3で担いで、俺達はその場を後にした。

◇

私、アルトリア・ペンドラゴンは自身の迂闊さに歯噛みしていた。同行者であるヒメジマ・シンから聞いたピクト人の繁殖方法の醜悪さに気を取られたとはいえ、敵地で仲間とはぐれるという失態を犯すとは……。

自ら同行を申し出ておいてこれでは、地上で待っているマスター達に合わせる顔が無い。

気を取り直して彼等と合流する為に動いた私は、周囲を見渡して表情を歪めてしまう。

私も騎士として、そして王として戦場を駆け巡った身だ。

こう言っただけなんだが、人の死には慣れているし無残な死体だって飽きるほど見た。

しかし、眼前に広がる地獄は違う。

ここには人としての意思も尊厳も存在しない。
犠牲者たちは奴等の子を孵化させるための『モノ』として扱われて
いるのだ。

かつての我が民達もこんな仕打ちを受けていたのかと思うと、反吐
が出そうになる。

……やはりピクト人共は駆逐しなければならぬ。

犠牲者たちの顔を目に焼き付けながら決意を新たにしていた私は、
その一つを目にした瞬間に息を飲んだ。

彼は優れた騎士だった。

慈悲深く正義感に溢れ、弓の實力は円卓の騎士随一。

彼が爪弾くフェイルノートは多くの民を救い、また多くの蛮族を
討った。

だからこそ、彼が袂を分かった時は本当に辛かった。

もし再び出会う事があるのなら、その時こそは『人の気持ちがか
らない』と言われる事のないようにしよう。

そう、思っていたのに……

「トリ…スタン……なんという姿に……」

一步、二歩と後ずさりながら、纏れる舌で紡いだ言葉。

それを受け取る彼から答えが帰ってくることは無い。

何故なら壁に埋め込まれた彼の胸には、他の犠牲者と同じく大きな
穴が開いているからだ。

あまりにも、あまりにも無残なその姿に、私は思わず目を背けてし
まう。

だが、それは間違いだった。

何故なら、その先には肌色の蜘蛛のような生物がいたからだ。

突然の事で開いた意識の空白、そこを突いて奴はこちらへ向けて跳
躍する異形の蜘蛛。

遅まきながら脳裏で直感が警鐘を鳴らす、虚を突かれた身体がピ
クリともしない。

頭の中で渦巻く、寄生という事実と犠牲者の姿が絶望という文字へ
と変わるその瞬間――

「悪魔忍法・空気手裏剣ッ!!」

まるで不可視の刃に切り裂かれたように、蜘蛛の身体が八つ裂きにされた。

四散する奴が撒き散らした黄土色の体液を、反射的に風王結界で払いのけていると、足音も無く一人の男が現れた。

「ここは既に彼奴の腹の中。油断は禁物ですぞ、王よ」

「そなたは……っ!」

そこにいたのは、潜入の為であろう動きやすい黒衣に身を包んだ円卓の騎士の一人、グリフレット卿だった。

おまけ 『聖杯動画大賞視聴者の反応』

『ランスロットのマネ!』 アドロンドイト・オーバードロード 全鎖断裂・過重湖光!!』

ヴァーリの携帯端末から展開する投影ディスプレイが映し出す光景に、地上で待機していた面々は開いた口が塞がらなかった。

「まさか体術で聖剣を模倣するとは……。分かってはいたが、君達のリーダーは非常識にも程があるぞ」

「こればかりは私も返す言葉が見つかりません。ご主人様、マジ歪みねー」

眉間を揉みしだくアーチャーの言葉に、玉藻の前の尻尾がへにやりと下がる。

「トータ。あのね、ランスロットが真っ白になって動かないんだけど……」

「おおっ!? ランスロットがまた死んでおるぞ!!」

困惑気味に声を上げる三蔵法師と俵籐太の声に全員の目が向くと、そこには燃え尽きた灰よりも白くなった湖の騎士が力無く椅子に座り込んでいる。

「ランスロットオオオオオオオオオオオッ!」

「ランスロットさん、しっかりしてください! ランスロットさん!!」

風が吹けばそのまま消滅しそうなくらいに、生気を感じられない友の姿にベデイヴィエールは絶叫を上げ、藤丸立香は必死に呼びかける。

閑話 『獅子王・地獄変 (5)』

「ファラオ・オジマンディアス。太陽神の加護を受けているとはいえ、旅の者に聖杯を与えるなど……本当によろしいのですか？」

傍そばに控えていたニトクリスの言葉に、大神殿の玉座に座してミニメシエドから送られてくる画像に目を向けていた太陽王の柳眉が動く。

「ニトクリスよ、余の采配に異論でもあるのか？」

「いえつ、そのようなつ!？」

少し不機嫌な声を出してみれば、途端に狼狽した気配が伝わってくる。

この少女は己に自信が持てないのが玉に瑕きずだ。

生前の事を思えばそれも己む無いのだが、それでも歴代のファラオに名を連ねる身としてもう少し大きく構えてもらわねば困る。

「悪戯が過ぎたな、許せ。余があのような沙汰を下したのは、父神の加護を得ているからだけではないぞ」

「では、何ゆえでしょうか？」

先達でありながらも導くべきと断じた女性のファラオの問いに、オジマンディアスは少しの思案の後に口を開く。

「……あれ等がここを訪ねてくる前に夢を見たのだ」

「夢、でございますか？」

「うむ。夢の中で余は太陽の化身ではなかった。強い悪意を持つナニカに墮とし穢され、地を這いずる薄汚い魔となっていたのだ」

「そんな……!？」

「目覚めれば一夜の夢であったが、夢の中では永劫に等しい時であった。深淵しんえんの如き闇の中を只管ひたすらに彷徨さまよい続けた余は、ついに一筋の光を見つけることができた」

太陽王は陽の色の瞳を閉じて、そのときの事を思い出す。

呪詛と嘲笑、嫌悪を塗り固めたような世界。

本来の己であれば自決する程の恥辱を味わい続け、もはや己が命を絶つ気力すら湧かない中で見つけた光。

涙が出るほどに嬉しかった。

逸る心のままに駆けだそうとしたが、醜く歪められた身体ではまともにも歩く事もできず、無様に転び虫けらの様に地を這いずった。

だが、そんな事など気にならないほどに、その光は甘美だった。

「残り滓のような気力を振り絞って、余は光の中へと飛び込んだ。この身を包む光は、まるで我が妻の胸のように優しく温かかった。東洋の言葉に『地獄に仏』という言葉があるそうだが、あれこそ正にそうであったわ。光は悪意のへドロに塗れ、人あらざる異形と化した我が身も洗い流してくれた。そして我が身が本来の物に戻り始めると同時に、光は我をゆつくりと闇から救い上げてくれたのだ」

こちらを逃がすまいと光に集ってくる闇は心底憎く、そして恐ろしい物だった。

汚泥の如きそれらが光の柱に備わった外壁にぶつかる度に、己らしからぬが肝が冷えたものだ。

「そして、夢の中の余は東洋の建築物の中で目が覚めた。傍らには涙ながらに縋りつく我が妻、そして異国の神官装束に身を包んだかの者がいたのだ」

「それは……夢見でしょうか？　こことは別の聖杯戦争に呼び出された時の記憶が夢として出てきたと」

「違うな、アレは余の記憶や記録ではない。夢の中で妻の事をムトと呼んでいたのを思えば、あれは我が父ラーの記憶なのかもしれん」

「太陽神の……!?!　しかし、神話には太陽神が貶められたなどという記述はありません!」

「我等の神話には、な。他の神話……そうさな、聖書を紐解けばその記述は容易く見つかるう」

「他の神話、ですか」

「うむ。聖書を下敷きにした魔導書グリモワール、そこに記された悪魔の中にいるアモン。彼奴はアメン・ラーが墮天した姿だと言われている」

「アモン……」

「そして魔術王が従える72の魔神、その中に彼奴の名前が刻まれている」

「……」

もはや声も出ないニトクリスを一瞥いちべつもせず、オジマンディアスは懐から取り出した黄金の杯を憎憎しげに見据える。

「何故この聖杯が触媒も無しに余を呼び出し、こうも容易に心に忍び込んでくるのか。……タネが分かれば簡単よ。彼奴は夢で見た父神のように、余にこの聖杯で墮天せよと言っておるのだ」

太陽王がその黄金の杯から手を離すと、それは何度も階段を跳ねながら、高い音立てて床に転がった。

「不遜！・不遜!!・不遜!!! 人理を護りし英霊の一角として、地力で我を上回る事は認めよう。しかしっ!! このような小道具で我が父と余を貶める事が絶対に許さんッ!!」

突如として立ち昇った怒声。

身を竦すくませながらも見上げたニトクリスが見た物は、立ち上がり怒りを剥き出しにした太陽王の姿だった。

その立ち昇る怒気に、一言一句に込められた言霊に、あてられたニトクリスと大神殿が大きく揺らぐ。

「故に杯は彼の者に渡すのだ。本来なら余自らが対するのが筋であるが、今の余は忌まわしい事に聖杯を依り代としている。それに込められた術式が発動すれば逃れるのは困難だ」

「そ……それ故に、彼の者に渡すのですね」

「そうだ。異なる世界とはいえ、父神をアモンという呪いから開放した奴ならば、魔術王の下らぬ企みを阻止できよう。それに——」

「それに？」

「一度聖杯に縁を結んだならば、近くに起こるカルデアと魔術王の決戦に彼の者も呼ばれる事となるだろうからな」

人の悪い笑みを浮かべるオジマンディアスに、ニトクリスは整った柳眉を下げる。

「ですが、あの少年を呼び出して何になるのですか？ ファラオのお話から術師としては有能なのはわかりますが、魔術王との闘いでは役に立つとは……」

「ふん。平凡に見えるかもしれんが、あ奴は並の英霊など歯牙にも掛

けんほどに強力な存在ぞ。その気ならば、聖都など奴一人で殲滅できるほどにな」

「そ……そこまでなのですか!? 聖都には名高い円卓の騎士が控えているのですよー!」

「その円卓最強の騎士が去勢されたではないか。しかも己が真名開放を一目で模倣される始末だ、あんな芸当ができる者などそうはおらぬぞ」

「た、確かに。ならば、なぜすぐに聖杯を授けられなかったのですか?」

「それはな、ノリだ」

「ノ……ノリ?」

予想の埒外な台詞に、ニトクリスは啞然と言葉を漏らす。

「そうだ。それに足る理由はあろうと、ただ聖杯を渡すのでは芸が無い。どうせならば奴等のやる気を刺激し、我等も楽しめるようにした方がお互い利点があるろう」

「そ、そういうものなのでしょうか?」

「だからこそ、このような愉快な物が見れている。ニトクリスよ、覚えておくがいい。世の中の多くにおいて、『面白い』という事は重要なものぞぞ」

「面白い……憶えておきます」

呼び出したメシエド神からパピルスを貰ってメモを取るニトクリスを横目に、再び玉座に腰を沈めた太陽王は魔術によって造られた投影画像に目を向けた。

その太陽色の眼を期待に細めながら。



謎の古代遺跡からこんにちわ。

現在、害虫駆除作業中の姫島慎です。

さて、前回ちよっとした手違いで逸はぐれてしまったご先祖ちゃんだが、孵化室から動かないでいてくれたお陰で無事に合流する事ができ

た。

本人に怪我が無かった事はめでたいのだが、彼女と同行していたのがまた意外な御仁だった。

悪魔六騎士の一人であるザ・ニンジャ。

レスラーなのに使う技の大半が忍術という異色の超人だ。

とはいえ、その実力は折り紙付きで、将軍様との対戦でこちらが散々苦しめられた『順逆自在の術』は彼の持ち技だったりする。

例によって円卓の騎士の一人である『サー・グリフレッド』を名乗っている彼の目的は2つ。

一つは拉致されたトリスタンの安否の確認。

そしてもう一つは俺たちへの伝言だ。

まず伝言だが、その内容は『後二日以内に、この特異点をクリアせよ』という将軍様からの非情のオーダーであった。

聖都の獅子王、山岳地帯の勢力、そしてこの虫塚と問題は山積しているにも関わらずコレである。

流星は将軍様、無茶振りの年季が違う。

次にトリスタンの件については、やはりと言うべきか奴は蟲達の苗床にされていた。

壁に磔はりつけにされて力なく垂れた頭と、紅い髪の間から見える胸元の大穴。

「惨むごいな、これは……」

栄光ある円卓の騎士とは思えないその末路にニンジャ先輩は顔を顰しかめ、事前に知っていたらしいご先祖ちゃんも堪たまらず目を逸らす。

眼前に広がる光景は確かに無残だが、俺にはどうにも腑に落ちない事が一つあった。

前回の冬木では、ヘラクレスや黒化したご先祖ちゃんなどの脱落した英霊は、落命した時点で光の粒子となって消滅していた。

しかし、眼前のトリスタンは未だ屍を晒している。

この違いはいったいなんなのか？

それに、先程の襲撃にあったフェイルノートによく似た攻撃を撃ってきた変異体も気に掛かる。

奴の死体が残っている事に、関わりがあるのだろうか……。そう考えながら死体を検分しているが、やはり門外漢の俺には分からない。

ならば『餅は餅屋』という言葉があるように、こういう時は専門家の意見を聞くのがベターであろう。

そう思い至った俺は、地上にいるダヴィンチちゃんに連絡へ連絡。状況を説明しエイリアンの特性を説明したところ、あつという間に仮説を立ててくれた。

曰く『奴に仕込まれていた幼生は、遺伝情報ではなく霊核を取り込んだのではないか』との事。

トリスタンの死体が残っているのは頭部と奪われた心臓、二つの霊核が不完全ながらもまだ存在している事が原因だと思われるそうだ。

また、フェイルノートに似た攻撃は霊核に含まれていた英霊の武器（むこうは宝具と言っていた）の情報を、肉体に反映させたものらしい。

余談だが、入り口に放置していた虫の残骸を調べたところ、かなりの神秘（魔術や霊的存在に干渉できるバロメーターのようなもの）が検出されたそう。

まあ、相手は宇宙生命体なのだ。

遺伝子工学だけではなく、地球の魔術に似た技術が使われていたとしても不思議では無いだろう。

などと自分を納得させてようとした瞬間、微かに感じた肌を差すような感覚に俺は右手を一閃させる。

甲高い金属音を立てて床に転がったのは、投擲用と思われる黒塗りの短刀。

どこか見覚えのあるそれを、ニンジャ先輩が一つ蹴り上げて気配がしたほうに投げ返すと、蟲共の繭となった柱の影から複数の人影が現れる。

最初に姿を見せたのは青銅の鎧に朱塗りの弓を持った青年。

それに続くのは、髑髏ドクロの仮面を着けた全身黒づくめの男達が4人。

そして、先日聖都で大暴れしたダッチ・シエーファー少佐だ。

「隠形の腕はなかなかのもの。されど、攻めの際に殺気を御し切れなければ、それも宝の持ち腐れよな」

「聖都の騎士風情が知った風な口を！」

ニンジャ先輩の評価に激昂する、黒ずくめの中でも比較的細めの男。

彼の発言に美猴は呆れながらも言葉を返す。

「おいおい、俺達は聖都の関係者じゃねーよ」

「しらばっくれるな！ その女はどう見ても円卓の関係者ではないか!!」

美猴の言葉に、男はご先祖ちゃんを指差して喚く。

あく、確かにそう取られても仕方ないか。

「止さぬか、ザイド！ 此度の我等の目的は民の救出、聖都の者と争っている余裕なぞ無い!!」

血気はやる黒ずくめの一員を、頭目と思われる右手を布で拘束した男が一喝する。

「突然の無礼、許されよ。我が名は『呪腕のハサン』、山岳地帯に住まう民を束ねし者の一人だ」

呪腕と名乗った男の言葉に、俺は思わず手を打ちそうになった。

さっきの短刀、どつかで見たと思ったら煙酔のハサンの持ち物と一緒だったわ。

「ハサンつつー事は、旦那は煙酔のねーちゃんと知り合いかい？」

「む……煙酔の事をご存知か？」

美猴の言葉に驚きを隠せない様子の呪腕のハサン。

むこうは俺達を聖都の手先だと決め付けてたんだから、そりや驚くわな。

「応よ。あのねーちゃん、難民連れて山道を上がってつたから後の事が気になってたんだよ。それで、彼女達はアンタ等の集落に無事に着いたのかい？」

「うむ。心ある方が支援してくださったお陰で、誰一人欠けることなく我等の集落に行き着いた。それを知っているという事は、お主等が彼奴に手を差し伸べた者なのか？」

「ま、そういうことだな」

「戯言をつ！ 聖都の者が我等を支援するなぞ有り得るかっ!!」

「落ち着きな、ザイード。そうやって頭に血を上らせてると、見える物も見えなくなるぜ？」

「俺達のいる場所を考えろ。人間同士のイザコザを持ち込めるほど、安全な場所か？」

美猴の言葉に抗議の声を上げたザイードと呼ばれた黒ずくめだが、弓兵の青年と少佐に声をかけられてその口を噤む。

「連れが失礼した。あの者は仲間が聖都の騎士に討たれておるのでな、彼奴等を目の敵にしておるのだ」

「なんの。だが、その女人の格好を見て聖都と結びつけるのは早計というもの。見ず知らずの拙者の弁など信用に値せぬだろうが言わせて貰おう。この者達は聖都の手の者ではない。星見台の英霊と旅の武者者よ」

「いや、信じよう。我等、闇に生きる者は易々と己が名を明かす事は無い。煙酔のが貴方達に名乗ったのならば、相応の理由があつてのこと。それが民への援助ゆえと考えれば、得心も行くものよ」

ニンジャ先輩の言葉にゆっくりと頭を振った呪腕さんは、こちらを向き直ると深々と頭を下げた。

「我等が同胞の命を救ったうえに貴重な食料まで分け与えてくれた事、心より感謝いたす」

「あー……、礼なら上にいる俵のおっさんかこいつに言ってくれ。奴さん達に与える飯とか用意したのこいつ等だからよお」

「お前な、こういう状況でこつちに振るんじゃねーよ。呪腕殿、礼は受け取りました。こちらも好きで手を貸しただけです、お気になさらないでください。それよりも民の救出と仰ってましたが、皆さんがお探したのはこの方々ではないですか？」

真正面から頭を下げられるのはむず痒いものがあったので、そうそうに話題を変えさせていただく。

先程救出した山岳地帯の民達を、彼等の前に寝かせて確認をお願いする。

「おおっ!! 間違いありませんぞ、呪腕殿。皆、憎き蟲怪ちゅうかいに連れ去られた者達です!」

「百貌ひやくぼうの姐あねさんとこのチビも無事か。よかった、これで一安心だな」
黒ずくめ達や弓兵が喜ぶ中、シエーフアー少佐は救助者たちに厳しい目を向けている。

「坊主。彼らの中には何もいないのか?」

「エイリアンの寄生のことですね。私は生命体の生体反応を感じ取る技能を持っています、間違いなく彼等の中には何もいません」

言葉の真偽を確かめるように、こちらの目を見据える少佐。

あの人がモデルであることに加えて歴戦の勇士である事も相まって、その威圧感は相当なものだ。

しかしこちらも己の業にはそれなりの自負がある。

この程度の脅しで怯んではいられない。

「……信じよう。民間人救出の手助け、感謝する」

しばらく睨みあった後、彼は厳つい顔に男臭い笑みを浮かべて義手を差し出してきた。

握り返すと血の通わないはずの鋼鉄は、何故かほのかな温かみを感じさせた。

「……これで目的の一つは果たせたか。ザイド、マクール、ゴズール。お前達は民を連れてここから脱出せよ」

「呪腕殿達はどうかされるのですか?」

「我等はこのまま最深部に入り、彼奴等の首魁しゅかいを討つ。これ以上、村や初代様の霊廟を脅かせるわけにはいかぬからな」

どうやら、向こうの方針は決まっただらしい。

彼らもクイーン狙いとは、これは渡りに船という奴ではないか?

シエーフアー少佐は対エイリアンのエキスパートだし、あの弓兵も只者じゃない。

呪腕さんとコネを造っておけば、山岳地帯の勢力と争わなくてすむかもしれないし。

將軍様にリミットを切られた以上、できれば鬨り合うのは獅子王だけにしたいからな。

「皆さん。クイーンのところに行くのなら、ご一緒して構いませんか？」

「なんだ、そつちも奴さんに用があるのか？」

「目的は皆さんと同じですよ」

「ええ。こんな地獄を二度と生み出さない為にも、ピクト人は殲滅する必要がありません」

「ま、妖怪退治は武道家の使命っていうからな。ジジイからその手の自慢話を耳にタコが出来くらい聞いたし」

「同じ釜の飯を食った同僚がああも無残に殺られたのだ。仇の一つも討たねば、墓前に花も供えられまい」

俺に続くようにこちらの面子が決意を口にする、弓兵は苦笑いで呪腕さんを見る。

「ここから先は決死行となる。動けなくなつた者は容赦無く置いていくが、それでも構いませぬかな？」

「もちろんですよ」

こちらが全員頷くのを確認した呪腕さんは、一息ついて左手を差し出してくる。

「ならば、改めて名乗ろう。私は『山の翁』が一人、呪腕のハサン。この縁がどこまで続くかは分からぬが、よろしく頼む」

「俺はアーラシユ、何処にでもいるしが無い弓使いさ」

「地球軍海兵隊のダッチ・シエーフアード。蟲共とは腐れ縁でな、対処の仕方は心得ている。分からん事があつたらなんでも聞いてくれ」

互いの自己紹介も終わったところで、ザイードを初めとする黒ずくめ軍団が救助者と共に離脱。

無事にここを抜けられるか気になったが、彼らも英霊の端くれだと言う呪腕さんの言葉を信じる事にした。

さて、ここからは仕切り直しである。

将軍様の無茶ぶりのせいで時間も無いことだし、巻きで行こうではないか。

「というワケで、ここからは床をブチ抜いて最下層に行こうと思います」

「「ちよつとマテや」」

ナイスな案を提示したはずなのに、何故か少佐を除いたみんなから抗議の声が上がる。

「何か問題が？ 敵には遭遇しにくいし、最短距離で移動できる良案だと思ふのだが」

「そういう問題ではありません！ どうして貴方はまともに降りようとしないのですか!?!」

「時間が無いから」

「脳筋だとはわかつちやあいたが、ここまですとは思わなかつた！

やつてる事がヴァーリと変わらねえだろうが!!」

「あいつよりマシだ。シバくぞ、サル」

「着地はどうするんだ？ 高さに関しては心配してないけど、畏んんかがある困るんだが」

「俺は飛べますし、美猴には筋斗雲があります。空中で回収するから大丈夫」

「武者修行で来ているのだから、ちゃんと経験は積むべきだと拙者は思うのだが?」

「クレームならリミットを切った將軍様をお願いします」

「下で敵か待ち構えていたら、どうされるのですかな?」

「相手の上を取ってるから、飛び道具を撒いていればなんとかなるでしょう。もしそれでダメだった場合は、俺が突貫して叩き潰します」

次々と押し寄せるクレームに真摯に答えると、納得したのだろうか誰も文句を言わなくなつた。

「いいじゃないか。派手だしシンプルだ、俺は好きだぜ」

葉巻を吹かしながら、上機嫌でOKを出してくる少佐。

うむ、州知事そつくりの彼からお墨付きを貰つては、実行に移さざるを得ない。

「そんじゃ軽く3階層ぶち抜き、いつきまーす!!」

「ちよつ!?!」

「1階層つつじやないんですか!?!」

「こりやまた、トンでもない兄ちゃん知り合ったもんだ」
「す……っ、少し待たれよ！ 心の準備がまだ……ッ!?」
「やれやれ、この無茶苦茶さは將軍様に通ずるものがあるな」
「よおし、やれ！ 要員の回収も忘れるなよ!!」
「アイアイサー!!」
そう言いながら、俺は床に向けて拳をブツ放したのであった。

◇

甲高い声を上げて、通路から、天井から、床下からも殺到する蟲共。
その数は四方にある大型の通路を埋め尽くすほどで、種類もウオー
リア、ドッグ、外殻が過剰進化したクリサリスに他の物よりも二周り
ほどの巨体を誇るロイヤルガードなど、多種にわたる。
「流石に、ここまで来ると歓迎もひとしおだねえ!!」
「宴に招待されるのは嫌いじゃないが、卓上に並ぶのは遠慮したい
なッ!!」

軽口を叩きながら得物を振るう美猴とアーラシユさん。
氣と燐をふんだんに纏った如意棒は風を切ると同時に巨大な炎を
生み出し、朱塗りの弓から放たれた矢は対物ライフルさながらの威力
で、壁や天井もろとも蟲共をブチ抜いていく。

「ふんっ！ ザクロと散れ!!」
「かように未熟な隠行では、我等の隙を突く事はできぬッ!!」

物陰から飛び掛ろうとしたドッグタイプ達は、その素振りを見せる
間も無く黒塗りの短刀と手裏剣に頭部を貫かれる。

「この迎撃密度の濃さ……女王の間は近いようですねッ!!」
「女王親衛隊であるロイヤルガードまで出張ってるからな。感じる氣
の位置もあと二階層ほど下つてとところだ」
「なら、雑魚共と遊んでる暇は無いな!!」

玄武剛弾と風王鉄槌ストライク・エアによって一箇所固めたところに、風を巻きな
がら飛来する手榴弾。

轟音と共に咲いた紅蓮の華は、数十匹のエイリアンを纏めて焼き

払った。

あれから階層をブチ抜くこと、数回。

我ながらエゲツないショートカットを行った結果、俺達はクイーン
の座する巢の中枢まで後一步という位置まで歩を進めていた。

当然ながら奥に進むほどに迎撃は苛烈になっていき、奴等の兵種も
ウォーリアやドッグタイプはもちろんの事、クリサリスや腕部の甲殻
が強化されたディフェンダー、敏捷性に特化したデモノイド等の変異
体が多数出現し始めた。

とはいえ、迎え撃つこちらも海千山千の英霊たちに加えて
『無限の闘争』^{MUGEN}の闘士に悪魔超人と手練ぞろい。

即興ながらも各自が連携を取り出したこともあって、その足は止ま
る事は無かった。

気になるのは、あれ以来トリスタンから生まれた変異体『トリデリ
アン』（命名俺）が姿を現さない事だ。

乱戦の最中に奴の狙撃があれば、それなりに厄介だと思うのだが
……。

まあ、出てこないからと言って建物内を探して回る時間も無いの
で、現在は放置の方向を取っている。

どのみちクイーンを痛めつければ、助けを呼ぶ声に反応して姿を見
せるだろう。

さて、現在俺達の前にはこれ見よがしな石造りの門が立ちはだかつ
ている。

気配からしてクイーンがこの奥にいるのは間違いないうえで周辺
にエイリアンの影もないので、ここで最終の打ち合わせを行う事にし
た。

「えー。この先にクイーンがいると思うんだが、殺すのは止めてほし
いんだ」

「む、どうしてでしょうか？ 敵の王を目の前にしてその首を取らな
いというのは、納得がいかないのですが」

「王よ、まずはあの者の話に耳を傾けましょう。今までの態度からし
て、考えも無くあのような事を口にしてるとは思いませんぬ」

「……そうですね」

こちらの言葉に難色を示したものの、ニンジャ先輩のフォローでご先祖ちゃんも矛を収めてくれた。

まったく演技をする気も無いアシユラ先輩たちに比べて、その副官っぷりは堂に入っている。

(忍の変装とは、その者になりきる事こそが肝要。サー・グリフレッドに関しては、円卓の騎士共に顔写しを掛けて下調べは済んでおる)

耳の中に直接ニンジャ先輩の声が木霊する。

美朱もちよくちよく使う口寄せの術だ。

さっきの將軍様の伝言もこうやって伝えてきたし、どこぞのはぐれ悪魔コンビと違ってこの人はガチで潜入してるわ。

「疑問に思うのは尤も^{もつと}だけど、少し話を聞いて欲しい。そういう措置を取るのには奴等をここで全滅させる為なんだ」

「もとより我等はそのつもりだが、それと頭目を生かしておくのとはどう繋がるのだ？」

「奴等は蟻や蜂のような社会的昆虫に似た性質を持っている。だから、女王が死んだり巣が壊滅した場合、種の保存の為に生き残りの兵隊が女王に突然変異する事があるんだ」

「蟲共の研究データによると、女王じゃなくても単体生殖能力を持った奴もいるらしい。つまり、兵隊一匹でも逃がしたら駆逐失敗ってわけだ」

俺の弁を補足する少佐に、周りのみんなに洩面が広がる。

どうやら、クイーンさえ倒せば解決すると思っていたようだ。

「そこでクイーン討伐の際、奴を半殺しの状態で手を止めてもらう。そうすれば、命の危険を感じた奴は自身の兵隊に助けを求めずはだ」

「なるほどねえ。そこで寄って来た奴等をオレツチ達が、一網打尽にすればいいって寸法か」

「そういうこった。奴等は女王を中心とした社会を築いているから、次の女王候補がない限りクイーンを見捨てる事は無いだろう」

「もし候補がいた場合はどうするんだ？」

「その場合はここを壊滅させた後、聖都の対応をしつつ地道に探すしかない。対策としてクイーンの亡骸を触媒にして呪いを掛けるつもりでいるけど、それも何処まで通用するかわからんしな」

『お話のところ失礼するよ。それに関しては、亡骸の一部を持って来ればメデイア女王が探索の魔術と別の呪いをかけてくれるそうだ』

こちらに割り込む形で通信を入れてきたダヴィンチちゃんの言葉に、俺とご先祖ちゃんは小さく安堵の息を吐く。

「上で待つキャスターは、魔術の腕に関しては英霊随一です。一族の母体である女王の一部があれば、残党を探し出す事も可能でしょう」
「たしかメデイア女史って、古代ギリシャにあったコルキスの女王だったっけか」

「はい。女神ヘカテーに直接教えを受けた神代の魔術師。その实力は世界に五人しかいないとされている魔法使いにひけは取らないでしょう」

ふむ、その『魔法』と『魔術』はどう違うのかというのには疑問はあるが、その辺は置いておこう。

『あ、あと慎君に連絡だ。美遊嬢の体調が優れないみたいだったから、救護者を救い出したハサンと一緒に山岳地帯の集落に行ったよ』

寝耳に水な話に、思わず眉根が寄ってしまう。

「彼女の容態は？」

『風土病や大事に至るようなものではないよ。ストレスや緊張で気分を害しただけのようだからね』

「そうか……」

安堵と共に湧き上がる自己嫌悪を噛み潰す。

思えば、9歳の女の子を化け物の本拠に連れてくるのは拙かった。

聖杯動画大賞でテンションが上がっていたとはいえ、そんな事に考えが行かないとは猛省せねばなるまい。

「それで、付き添いは誰が行ったんだ？ 嬢ちゃんだけでクロスケ達について行ったんじゃないやねーんだろ」

『ああ。兄の士郎君と三蔵法師、俵藤太やアーサー君も同行してるから心配は要らないと思うよ』

「それなら安心だ。三蔵ちゃんはともかく、俵の大将やアーサーがいれば大抵の事はなんとかなるしな」

美猴の言葉に俺は小さく頷いた。

アーサーは救いようのないシスコンだが、剣の腕とそれを除いた人格は信頼に値する男だ。

万が一円卓の騎士が攻めてきても、奴ならそうそう遅れを取る事は無いだろう。

「ダヴィンチちゃん、こつちの方針はこんなところだ。クイーンを追い詰めたら『戻り』の兵隊と遭遇するかもしれないから、立香嬢の事は頼むな」

『了解したよ。こつちにはエミヤ君にヴァーリ君、そして私もいるんだ。心配はご無用だよ』

「そんじや突入するんで、あとよろしく」

『うむ。くれぐれも気をつけてくれたまえ』

そう締めて地上からの通信は終わりを告げた。

「さて、これで大方の対策も立つたろう。そろそろ女王陛下へ謁見としゃれこむとするか」

「そいつはいいいんだが、こつちは無骨な戦装束だ。礼服一つ着ちやいない奴を、むこうは通してくれるかね？」

「なに、ドレスコードに引つ掛かるのはいつもの事だ。それで断られた場合の対処も抜かりなしさ。——だろう、騎士王様？」

「ええ。戦場において、相手の王に相對する為の妨害は付き物です。ならば、目の前に立ち塞がる有象無象は吹き飛ばすまで」

「もしくは、案山子共の目を盗んで王の前に現れるというのものもある」
「左様。鈍間共ノロマの目の前で、彼奴等が主の首に刃を突きつけるのが我等の流儀よ」

「どつちにしたって構わんさ。獅子王やら何やらと後が悶つぶえてるからな、チャツチャと片をつけるまでだ」

言いながら俺は閉ざされた門を押し込む。

わずかな抵抗の後、重い音を立てて動き始める石造りのそのの先には、予想通りの光景が待っていた。

部屋の中央で半透明の産卵管を蠢かせ、粘着質な音を立てながら次々と卵を産み落とすクイーン。

その身体は『無限の闘争』で出会った個体よりも倍近いデカさがある。

そして周りでこちらに威嚇の声を浴びせているのは、かつてのクイーンと同等の巨軀を誇るロイヤルガード達。

その数はざっと見ただけでも百近くはいる。

奴等は通常のモノより外殻や筋力が強いうえに、周囲に強酸の体液を吐き散らす習性があるからな。

酸対策が出来ている俺やご先祖ちゃんはともかく、他の面子は注意が必要だ。

石門は閉めたものの、通風孔や屋根裏、いざとなれば自身の体液で穴を開けて移動できる奴等が相手では、たいした意味は無い。

このまま火蓋を切られれば一気に乱戦になるだろう。

なら、初手はどうするべきか？

——そんな事は決まっている。

「こんにちわ、死ねッ!!」

身も蓋も無い言葉と共に放った衝撃波はロイヤルガード二体の頭を爆砕して、クイーンの右前肢二本を折り取った。

「おいおい、女王様に当たったけどいいのかよお」

「目測を誤った。あの不細工がかいのが悪い」

「確かに醜いですね。同じ王でも、ああはなりたくないものです」

「そうは言っても奴さん達に取っては大事な女王様だ、むこうは随分と頭に血を上らせてるようだぜ？」

「無駄口はここまでだ。総員、迎撃準備！」

それぞれが軽口を叩いたところで、少佐の声で全員が迎撃体勢を整える。

前衛は俺とご先祖ちゃん、殿は美猴と少佐。

後の三人は中衛に残って遊撃もしくは支援射撃。

乱戦を見越して全方位に対処できる円陣を組む中で、俺はそこに一手を加える事にした。

周りへの警戒を維持したまま呪腕さんに指示を出すと、こちらの意図を読んでくれた彼は漆黒の外套を翻して物陰へと消えていく。

集まりつつある衛兵達が彼に気づかないのは、アサシンのサーヴァントが持つ『気配遮断』の為せる技だろう。

黄土色の体液を撒き散らしながら一頻り叫んだクイーンは、歯を剥き出しにしてこちらを睨んでくる。

目が存在しない奴に睨まれるというのは妙な気分だが、奴から放たれる怒気や殺意は存分に感じる。

クイーンはその巨軀を一瞬縮こませると、天井へ向けて咆哮を上げた。

それは先程までの甲高い悲鳴とは異なる、怒りと殺意に塗れたものの。

そして、それを合図として周囲の衛兵達も一気にこちらへ雪崩れ込んでくる。

もはや壁と言っても過言ではない群れを、グレートホーンの応用である無音拳をブチかます。

放たれた衝撃波は次々と奴等を粉碎するが、なんせ数が数だ。

こちらの攻撃を掻い潜ってくる奴等もチラホラと現れる。

しかし、そいつ等もご先祖ちゃんが振るう風を纏った聖剣によって、次々に両断されていく。

「我が騎士を貶めた報い、受けるがいい!!」

踏み込み一つで床を割り、身体から放たれる魔力は触れずして雑魚共を吹き飛ばす。

そして放たれる剣撃は一振りです体のエイリアンを断ち切り、最初の犠牲者に至ってはその威力に耐えられずに身体が爆砕する始末だ。

降り注ぐ酸の体液を物ともせずには暴れまわる様は、『ブリテンの赤き竜』の名に恥じないものだろう。

そして後方では――

「食らえッ！ このへピーーッ！ 野郎!!」

「数の暴力はテメエ等だけの専売特許じゃねえだぜ！ 見な、こいつがジジイ直伝の身分身の術でい!!」

「ほう、見事。ならば拙者も一芸魅せねばなるまいっ！ 悪魔忍法・焦熱地獄!!」

「視界一面敵だらけ、か。これなら狙いを付けないうでいい分、早撃ちに専念できるってもんだ！」

シエーフアー少佐のスマートガンが唸りを上げ、美猴が分身達と共に振るった如意棒でエイリアンを叩き潰す。

ニンジャ先輩が吐き出す火焰の玉が蟲共を焼き払い、アーラシユさんがマシンガンばりの速射力で放つ矢は鉄鋼弾のように並み居る敵を粉碎する。

分かつちやいたが、過剰戦力である。

エイリアン達の脅威は、個々の戦闘力もさることながらその多くは数の暴力が奇襲である。

映画でもあったように、正面切つての戦闘では武装した海兵隊でも撃破することが可能なのだ。

まあ、このエイリアン達はプレデターが意図的に戦闘力を強化した種だろうから、本編のようにはいかんだろうが。

だとしても、ここにいる面々に比べれば個々の戦闘力は比べるべくも無い。

数の暴力に訴えようにも、これだけ戦力差があつては纏めて叩き潰されるだけ。

奇襲狙いだとしてもこうも開けた場所で、俺の気配察知やご先祖ちゃんの直感を潜り抜けて行うのは至難の業だ。

それが唯一行えそうなのは――

こちらがそう思考を組み立てた直後、微かな琴の音と共に目の前のエイリアン達が両断された。

奴等の身体の裂け方と飛び散った体液から軌道を読んで手を払うと、鉄を叩くような鈍い感覚が伝わる。

「ッ……いっ！ やっぱり来やがったか」

「今のはトリスタンのフェイルノート!? トリスタンの力を奪った者が現れたのですね！」

「待った、セイバーちゃん！ 奴に対してはもう手は打ってる。君は

こつちに専念してくれ」

「しかし……ッ!？」

こちらの指示に異を唱えようとするも、不可視の刃に続くように飛んでくる強酸の飛沫に、(ご)先祖ちゃんは言葉を飲み込んで風の障壁を張る。

トリデリアンの攻撃に合わせて遠距離攻撃に戦法を切り換えるとはッ!?

奴等、思った以上に知恵が回る。

本来ならここで足を止めているのは悪手でしかないのだが、酸に対応できる俺達が抜ければ残されたみんなの危険度が増す。

ここはトリデリアンを潰すまで耐えるべき——

「束ねるは星の息吹……以下略! 『約束された勝利の剣』!!」

「ちよっ!？」

いきなり聖剣ブツパをかました(ご)先祖ちゃんの手によって、酸を吐いていたロイヤルガードとこちらに向かっていた戦力の三分の一は光の中に消えた。

そして巻き添えになったクイーンは産卵管と卵を丸々失っている。

「なに、いきなり聖剣ぶっ放してんの!？」

「奴等の酸攻撃を防ぐ為には数を減らすのが一番でしょう。大丈夫、むこうの女王は存命ですよ」

「いやいや、呪腕さんが別行動とってるから! 巻き込んだらどうすんだよ!」

「……大丈夫です。彼とて一流のアサシン、私の殺気を感じて射程範囲からいち早く離脱している事でしょう」

こちらから顔を背けて呟く(ご)先祖ちゃん。

いや、全然説得力ねーよ。

多分、頭に血が上って忘れてたんだろ。

さすが『コンウォールの猪』なんて綽名を貰うだけはあるわ。

卵を失い産卵の場を荒らされたクイーンの怒りの叫びに、ここに雪崩れ込む虫の数がさらに増えている。

(ご)先祖ちゃんにツツコミを入れている暇はなさそうだ。

「ともかく、呪腕さんが戻ってくるまで聖剣は禁止！ 聞かないのなら、今度はそっちもパクるからな!!」

「やめてくださいっ!!」

「遊んでねえで闘えよ！ ヒャオオオオオオッ！ ファイヤアアアアッ!!」

「お前、その辺は中国語でやれよ！ グレートホーン!!」

美猴の放った超火炎旋風棍と俺のグレートホーンが、ご先祖ちゃんの聖剣と同等の敵を抹殺する。

まあ、ご先祖ちゃんの思惑通りに、ロイヤルガードが減って酸攻撃の手が緩んだから楽になったけど。

視界を巡らせば、少佐が『FU●K』と叫びながら十体くらい一気に殴り飛ばしていたり、ニンジャ先輩が複数纏めて鋼糸で縛り付けて切断したり。

あれって、『悪魔忍法・蜘蛛糸縛り』の応用だよな。

あと、アラシユさんがどう考えてもオカシイ威力の射撃で、天井や壁に風穴を空けながらエイリアン共を駆逐している。

ふむ、こっちはちよくちよく必殺技を織り交ぜてれば何とかかなりそうだ。

というワケでそっちは頼むぜ、呪腕さん。



「やれやれ、騎士王殿にも困ったものよ」

周囲を照らす聖剣の極光を横目に、髑髏の面を被った男は闇に身体を浸しながら一人ごちる。

彼の名はもはや無い。

あえて呼ぶとすれば、背負った責務と能力から呪腕のハサンというべきか。

異形の蟲怪が溢れる回廊を、呪腕はまるで影のように誰にも気取られること無く駆け抜けていく。

彼が狙う物は一つ。

円卓の騎士トリスタンの身から生まれでた変異体だ。

実質的に自身達を率いている少年の弁では、かの変異体は英雄の宝具であるフェイルノートと同等の能力をその身に宿しているという。

呪腕自身も数えるほどだが、かの魔弓の力を目にした事はある。

彼の弓、いや豎琴は弦の調整如何によつて変幻自在、あらゆる角度から目に見えない音の刃を放つことができる。

奏でられる甘美な調べとは裏腹に、その切れ味はギロチンなど足元にも及ばないほどだ。

そんなモノが人を襲い、殺める事しかしない蟲怪の手に落ちたとなれば、その危険性は口にするまでも無い。

獅子王の円卓の中でも最も残忍といわれた本来の主の手にあつた時よりも、同胞の血に塗れることだろう。

だからこそ、その禍根はここで断たねばならない。

決意を新たに柱から柱に飛び移っていた呪腕は、陽動の役目も担っている仲間たちに向けて殺到する敵の中において、一匹だけ集団から離れて物陰に潜もうとする赤い影を見つけた。

気配を殺して近づくと、それが他の物とは大きく異なる容姿をしている事が見て取れた。

まずは全身の外骨格が赤く染まっていて、大きく突き出た後頭部には左右に広がるエラがある。

そしてそのエラには細い弦のようなものが張られており、首の後ろに当たる部分から左右二本の副腕が生えている。

物陰に潜んで仲間たちの様子を盗み見る変異体を、髑髏の仮面に隠された暗殺者の瞳が冷徹に射抜く。

乱戦に紛れての遠距離からの狙撃。

少年の予測は見事の中しらしい。

確かに現在自分たちがいる位置は狙撃にはうつつけだ。

仲間にとつて死角で距離もある。

さらに言えば、ここからなら全員の頭部へ容易に狙いを付けられる。

このベストポジションを経験の裏打ち無く本能だけで選んだのだ

から、この生物は本当に侮れない。

蛇のような鳴き声を一つ上げて、副腕で頭部の弦をかきならす変異体。

間を置かずして、地上では侵入者に躍りかかっていたエイリアン数体の肉体が裂け、床や壁面にも刃の跡が刻まれる。

その一射における人間側の被害は無いが、気にした様子も見せずに変異体は短く声を上げた。

粘液に塗れた口から第二の顎が飛び出しているところを見ると、人間で言う『舌なめずり』でもしているのだろう。

「……阿呆」

その様子を一言で切って捨てた呪腕は、取り付いていた柱を蹴って宙を駆けた。

サーヴァントの脚力によって一気に加速した漆黒の影は、外套をたなびかせながら赤い異形の背後を通り過ぎる。

そして呪腕が音も無くバルコニーに降り立った次の瞬間、異形に生えていた副腕の一つが肘の辺りから取れてボトリと床に転がった。

患部を押さえて先程の数倍はある甲高い悲鳴を上げる変異体。

その無様な姿を視界に捉えながら、呪腕は白煙を上げる短刀を地に放る。

跳ねる事無く地面に転がったそれは、刀身の半ばまで溶け落ちていた。

「その腕もろとも首を落とそうと思ったのだが、初代様の様にはいかなぬな」

自嘲しながらも足音無く近づくと影に、変異体は威嚇の声を上げる。「どうした、貴様の間合いだぞ？ 自慢の武器を放ってみるがいい」

人語を解する知識があるのか、それとも挑発の意のみを汲んだのか。

変異体は咆哮と共に残された腕で頭の弦をかき鳴らした。

すると、弦が爪弾つまびかれる度に周囲の石材に次々と斬撃の跡が刻まれていく。

それを見て取った呪腕は、懐から黒い玉を取り出して素早く地面に

叩きつける。

軽い炸裂音と共に周囲を覆う黒煙。

それに紛れるように髑髏面の影は姿を消す。

突如として落とされた一寸先も見えぬ闇の中、それでも変異体に動揺は無かった。

元より彼等の種族に視覚は存在しない。

獲物を捉えるのは高度に発達した他の感覚器ならば、視界が利かぬ環境はむしろ得手と言えた。

彼らに表情というものがあつたならば、変異体は自ら死地に飛び込んだ獲物に嘲りの笑みを浮かべていただろう。

小さく喉を鳴らしながら己に傷を付けた不埒者を探していた彼は、不意にその動きを止めた。

彼の感覚器は獲物を識別する要素を何一つ捉える事が無かつたらだ。

「シイイイイイイッー」

しきりに周囲を見回しながら鋭く声を放つが、幾ら研ぎ澄まそうとも獲物は自らの感覚の網に掛かる事は無い。

普段は容易に感じられた獲物の息遣いや肉の匂い、そして体温の暖かさも。

そうして彼の脳内が混乱に埋め尽くされようとした時、自身の足に鋭い痛みが走った。

確認すると、外骨格を突き破って硬い異物が右足の付け根に深々と突き刺さっているのが分かる。

それ自体は体液によつて半ばまで溶解して地面へと落ちたが、足に負った傷が深手である事に代わりは無い。

機能不全を起こして右の足が片膝をついたところで、今度は左足の関節部分に同様の痛みが走る。

左足も殺されて跪けば右腕の関節部、間髪入れずに左腕の付け根と攻撃は次々に変異体を襲う。

「シヤアアアアアアアアアアッ!!」

感知できない敵から一方的に攻撃を食らう事に混乱した彼は、絶叫

と共に四方八方へとガムシヤラに音の刃を飛ばす。

奇しくもその行動は、彼の仲間にも襲われた人間たちの取るモノと同じだった。

しかし、間断なく放たれた攻撃も姿無き敵を捉える事はできない。それどころか、虎の子である副腕も切り落とされ、頭部のエラに張られた弦も全て断ち切られてしまった。

「……他愛なし。如何に優れた攻撃であろうとも、担い手がこの程度では宝の持ち腐れよ」

黒煙も晴れ、漸く音声という相手の手がかりを得た変異体が顔を向けると、そこには彼を見下ろす髑髏の面があった。

「視界なき貴様等に煙幕が通用しないなど、最初から分かっていた。あれはな、貴様が放つ音の刃の軌跡を見切る為の道標よ。そこに貴様等の感覚を搔い潜る我が気配遮断とこの短刀が合わされば、斯様な結果が生まれるという事だ」

言葉と共に左手で漆黒に染め上げられた短刀を見せ付ける呪腕。

しかし、変異体の注意はそこには無かった

無事である全ての器官で彼が注視していたのは、左の倍ほどの長さとなった相手の右腕だ

何かを掲げるかのように天を向いた右手、その中には大きく脈打つモノがあった。

変異体には術理も道理も分からない。

だが、相手の手の内にあるそれが、自身にとっての命脈そのものである事は本気で理解した。

「ギイシヤアアアアアアアアアアアツ!!」

絶叫を上げながら呪腕からそれを取り返そうと足掻く変異体。

しかし、黄土色の体液に塗れた彼の身体には、それを為す術は残されていなかった。

「その命、ザクロと散れ! 『妄想心音』!!」

呪腕の右腕が手の中のモノを握り潰した瞬間、変異体の胸から大量の体液が噴出し、糸が切れた人形の様に床に倒れ伏した。

「……彼奴が放つ斬撃はトリスタンの物と同様であった。未熟の内に

討てた事、僥倖ぎようつこうと見るべきよな」

そう一人ごちた呪腕は体液が付着していない部分を探して掴むと、変異体の死骸をテラスから投げ落とす。

「貴様が奪いし武具は、我が同胞の血に塗れし物。屍を晒しながら、それに手を出した己の不明を呪うがいい」

押し潰されたエイリアンの上に横たわる軀に言葉を残し、黒衣の暗殺者は音もなく姿を消した。

◇

こちらに襲い掛かろうとしていた一団を押し潰した赤い死骸に、口元が吊り上がるのがわかった。

黄土色の体液に塗れている上に、欠損している部分もあるので分かりにくい、奴がトリデリアンだろう。

どうやら呪腕さんが上手くやってくれたらしい。

彼から滲にじみ出るいぶし銀な仕事人オーラを信じた、俺の眼に狂いはなかったようだ。

「依頼は果たしたぞ、少年」

「すみません、助かりました」

音も無く背後に現れた呪腕さんに礼を告げると、彼はゆっくりと頭を振る。

「礼は不要。して、私は何をすればいい？」

「アーラシユさんと一緒に俺達の援護を頼みます。後はクイーンにどれだけ兵隊を吐き出させるかが重要になるんで」

「心得た」

短い答えの後、背後から黒く塗られた短刀がエイリアンに向けて放たれ始めた。

後列から強酸を液射しようとしている奴を優先に狙ってくれるのは助かる。

聖剣と風王結界しか遠距離手段の無いご先祖ちゃんは前線でチャンバラ中だし、俺にしても衝撃波では後列まで届かないうえに玄武剛

弾はタメがいたので速射性の欠ける。

なんてワケで、背後まで手が回らなかったのだ。

そうやって絶え間なくかかってくる奴等を始末していると、徐々にだが敵の勢力が緩まってくる。

体感的にはそんなに長丁場になっていないが、軽く四桁近くは殺つてるんだよな。

まあ、三分の一近くを消し飛ばした、ご先祖ちゃんの聖剣ブツパが効いてるんだが。

視界を覆うほどだったエイリアン達の数も減って見通しが良くなった時、俺はある事に気付いた。

あれほど目立つ姿だったクイーンの様子が無いのだ。

そういえば、さっきの聖剣で産卵場もろとも卵管まで消滅させてたっけ。

……ちよつと待て。

この状況ってアレじゃねーか！

「全員、気をつけろ！クイーンの様がない!!」

警告を叫ぶ俺の視界に映ったのは、剣を振るうご先祖ちゃんの背後に釣り針のように垂れ下がった、エイリアンの尻尾だった。

「王よー・御免ツ!!」

俺より先に飛び出したのはニンジャ先輩だ。

ご先祖ちゃんに群がる敵を空気手裏剣で始末すると、彼は空中で聖剣を持つ方とは逆の手を掴んで、彼女をこちらに投げ飛ばす。

そして入れ替わるように着地したニンジャ先輩の身体が一瞬ブレた次の瞬間、尻尾が彼の腹部を貫いた。

「グブツ!!」

「グリフレッドオオツ!!」

フックに掛かった肉のようなニンジャ先輩の惨状に、ご先祖ちゃんの悲鳴が木霊する。

徐々に吊り上げられるその先にあるのは、口から粘液を滴らせるクイーンの様子が引き

このままでは映画のビショップの様に、ニンジャ先輩の身体が引き

千切られてしまう！」

「待つてろ、今助ける！」

「無用ツツ！」

動こうとする俺達は、ニンジャ先輩当人からの厳しい声にその動くを止めた。

「……もはやこの身は助からぬ。ならば、忍として己が役割を果たすまで!!」

相手の手が届く距離まで引き上げられてなお、気炎を吐いたニンジャ先輩は、眼前まで迫ったクイーンに向かってニヤリと笑って見せた。

「拙者を喰らうか嬲るつもりだったのか……。どういうつもりかは知らんが、忍を懷まで呼び寄せるなど迂闊に過ぎたな、女王!!」

カチリという小さな音に続き、一瞬の閃光の後でニンジャ先輩のいた場所に轟音を伴った紅蓮の炎が咲く。

「あ……ああ……」

「バカヤロウ、早まった真似を……」

呆然と声を漏らすご先祖ちゃんと、小さく吐き捨てるシエーファー少佐。

次の瞬間、数十体の仲間を押し潰しながらクイーンが落ちてきた。

尻尾の半ばから先と前肢を失い、身体の前面が焼き爛れた奴は、同胞の死体を弾き飛ばしながら苦痛の声を上げる。

「あの野郎、まだ……」

「否、死んでもらっては困る。彼奴には未だやってもらわねばならぬ事がある」

「そうだ。全員、クイーンを確保してくれ！ 奴を中心にして陣を組むんだ！」

こちらの指示でクイーンを囲うように円陣を組む俺達。

「セイバーちゃん、奴の両足を斬り落として頬を串刺しにしてくれ」

「……分かりました」

噴火を待つマグマのような低く押し殺した声を返したご先祖ちゃんは、バタバタと足掻いていた奴の両足を一刀の下に切断し、刀身の

三分の一が床に埋まるほど強く聖剣を奴の頬に突き立てる。

遮られてくぐもった声を上げるクイーンを黄金に染まった目で冷やかに見下ろしていたご先祖ちゃんは、傷口が広がるように大きく捻りながら剣を引き抜く。

これで逃走はもとより、インナーマウスや酸の攻撃も封じる事が出来たはずだ。

痛みでさらに暴れるかと思われていたクイーンだが、小さく声を上げるだけで動こうとしない。

今のでダメージが限界に達したのか、それとも観念したのか。

どちらにしても、傷口から酸を撒き散らされないのは助かる。

「セイバーちゃん。悪いけど、これで堪えてくれ」

「わかっています。ここで怒りのままに奴を討つては、命を懸けたグリフレッドに申し訳が立たない」

鉄面皮に感情をまったく感じさせない声で、ご先祖ちゃんはこちらに言葉を返す。

これも努めて冷静でいようとする本人の努力なのだろうが、倒れた相手に容赦なく剣を振り下ろす様を見れば、どれだけ怒り狂ってるかは分かるというものだ。

「計画通りクイーンは確保した！ 後はこいつが呼ぶザコを始末するだけだ！ 持久戦になるから気合入れろよ！」

少佐の激を背に前を向けば、ワラワラとこちらに殺到する虫共の姿が目に入る。

そんじゃあ、もう一踏ん張りといきますか。

クイーンを確保して2時間が経った。

猛烈な勢いで襲い掛かってきたエイリアン共も一時間もすればその勢いに陰りが見え、三十分前には数は疎らに、10分前になるとついに現れなくなった。

「どうやら、打ち止めのようだな」

「やれやれ、ようやく終わったかよお……」

全身傷だらけながらも何事も無いかのように葉巻を吹かす少佐と、傷らしい傷もないクセにへたり込む美猴が対照的だ。

「それで、こいつはどうするんだ？」

アーラシユさんが指差したのは瀕死になったクイーンだ。

今までロクな治療もしていなかったのに生き残っているのは流石だが、兵を呼ばなくなったのならば用は無い。

では、速やかに次の使い方へと移行する事にしよう。

ん、外道だと？

なんとでもおっしやいなさい。

こいつ等が異常繁殖する事を思えば、その程度痛くもかゆくも無い。

「セイバーちゃん」

少し離れた場所で警戒を続ける。先祖ちゃんに声を掛けると、彼女は仮面のごとき無表情で振り返る。

「なにか？」

「ここはもう大丈夫みたいだ。こいつの始末、付けるか？」

「何故、私にいうのです？」

「今回の戦いで犠牲になったのはザ・ニン……じゃねーや、『サー・グリフレッド』だ。今はどうであれ、上司だったあんたには仇討ちの権利があると思う」

こちらの言葉に小さく頷くと、ご先祖ちゃんは聖剣を片手にクイーンの前に立つ。

「ピクト人の女王よ。虜囚りよしゆうの身となり民を討たれた事、さぞや辛いだろう。だが、これも敗れし王の宿命。その事を胸に刻んで逝くがい」

振り下ろされた聖剣は狙い違わずに地に伏すクイーンの首を薙ぎ、僅かな体液を振りまきながら首は床に転がった。

首を刎ねてこの程度だとすると、こいつは失血死寸前だったのかもしれんな。

「これで一応のカタはついたな。そんじゃ、地上に戻るぞ」

軽自動車並みの大きさはあるクイーンの首を肩に抱えて声を掛けると、座り込んでいた美猴が立ち上がって空いた肩に手を当てる。

「何をしているんだ？」

「こいつは瞬間移動が使えるんだよ。こいつに触れてれば地上まで一瞬で運んでもらえるぜい」

「ほう、そいつは便利だな。だが、そんな能力があるのなら直接ここに乗り込んだら良かったんじゃないのか？」

「この技の欠点は転移する先の様子が分からない事なんです。だから下手に使うとトラップルームや迎撃準備が完了した敵の前、って事も無いわけじゃない」

「なるほどな」

「ま、よっぽど切羽詰っていなければ、敵陣に入るのは自分の足が一番ですよ」

「違うない」

大仕事を終えて気が緩んだのだろう、話に乗ってきた少佐と言葉を交わしていると、ニンジャ先輩の自爆跡を見つめているご先祖ちゃんが目に入った。

「セイバーちゃん、地上に帰るぞ」

こちらの声にゆっくりと振り返るご先祖ちゃん。

なんか目が死んでるし、物凄い悲しそうなんだが。

「……グリフレッドは、彼の騎士は獅子王である私に召喚されたといいました。なのに、彼は私を庇った。どうしてなのでしょうか？」

ああ、原因はその件か。

思えば、ご先祖ちゃん的にはここで元部下を二人亡くしてる事になるんだよなあ。

でもさ、その手の話題を俺に振るのは止めてもらえないだろうか。

元凶の一端だから、コメントとか無理ゲーすぎます。

「今までスルーしてきたんだが、そろそろ教えてくれ。どうして彼女は、あのジャパニーズニンジャを騎士と呼んでいるんだ？」

「その辺はややこしい事情があるんです。とりあえずは円卓の騎士特有の呪いと思っただけです」

「ご先祖ちゃんには聞こえないように気をつけながら、シェーフアー少佐達を納得させる。」

「あく、なんだ。上手くは言えんが、目の前で知り合いが危ない目に

あっていたら、助けちゃうのが人間って奴じゃないか？」

「人間、ですか？」

「ああ。だから、そのグリフレッドって奴も聖都の騎士じゃなくて、人間として動く事を選んだんだろうさ。……多分な」

「……そう、ですね。そうであつたなら、私も嬉しい」

そう呟きながら、ご先祖ちゃんは微かに笑みを見せた。

答えに窮する俺に代わってアラシユさんがいい話風に持って行ってくれた。

ありがたい、本当にありがたい。

クーの兄貴に並んで『兄貴』呼びしたい人だ。

内容に関しては、ニンジャ先輩だと絶対に裏があると思うが、今は黙ってしよう。

「セイバーちゃんも気が晴れたなら俺に手を当ててくれ。色々時間が無いんでな」

「わかりました」

気まずい案件をスルーした俺は、左手に感じる微かな違和感をあえて気にせずに、ヴァーリを指標に瞬間移動を行った。

地上に戻った途端、俺達は上にいた面子に囲まれる事になった。

こっちはヴァーリに理不尽な文句を言われたり、玉藻に抱きつかれたり、とドタバタ。

ご先祖ちゃんは立香嬢やマシユ嬢、アーチャーに慰められていた。

まあ、この特異点は獅子王といいヴァーリといい、ご先祖ちゃんへのストレスがキツイからな。

カルデアの癒し枠にしっかりケアしてもらうべきだろう。

やはりというか、こちらも結構な数のエイリアンに襲われていたよ
うだが、俺の پاکリにハッスルしたヴァーリによつて全て消し炭になつたそうだ。

聞けば『覇龍』まで使つたというのだから、完全にオーバーキルである。

次にクイーンの頭だが、死ぬほど嫌そうに術を掛けてくれたメディアア女史の話では、現状では虫の生き残りは感知できないそうだ。

俺達の二時間の頑張りが功を奏したのか、それともヴァーリのハツスルのたまものか。

まあ、この土地からエイリアンの脅威が無くなったと思えば、どちらでもいいだろう。

で次の行き先だが、呪腕さんの勧めや美遊嬢が世話になつてる事もあり、山岳地帯の村落にお邪魔する事になった。

呪腕さんの案内の元、カプセルハウス等々を手早く片付けて出立する一行を俺は見送った。

ちよつとした野暮用があるから、もう少しここに残る事にしたからだ。

玉藻は特に渋ったが、用が済めば瞬間移動で追いつくと説得して先行してもらった。

来た時よりも焼け焦げた跡と破損が目立つ遺跡のお膝元、全員が完全に見えなくなったのを見計らつて、

「もうみんな行つたんで、出てきても大丈夫ですよ」

俺は物陰に潜んでいる気配に声をかける。

すると、そこに現れたのはクイーンへの自爆攻撃で果てたはずのザ・ニンジャ先輩だった。

「よくぞ見破った、というべきか。……何時から気付いておつたのだ？」

「クイーンの尻尾攻撃を受ける寸前からですね。ご先祖ちゃんを助けてすぐに、空蟬の術か何かの応用で人形と入れ替わつたのでしょうか？」

「然り。あれは特製の火薬人形でな、ああいう用途の為に作り出した。しかし、何故見破れたのだ？」

「そりゃあ、腹をブチ抜かれたのに吐血してませんでしたから。で、起爆や細かい動きは気配を絶つた上で人形繰りで対処していたと」

たしか、サタンクロス戦でもやってたよな、この人形トリック

「気配に関しては、術で人形に移しておいたのだ。しかしこうも容易く見抜かれるとは、修行をやり直さねばならんな」

「いや、俺や呪腕さん以外は気付いてなかったみたいだから、気にしな

くていいと思いますよ。ところで、どうしてあんな手の込んだ真似をしたんです？ ニンジャ先輩ならあの状況でも簡単に躲せたでしょうに」

「なに、大したことではない。こうやってお主と対峙するのに、『円卓の騎士グリフレッド』が邪魔だったのよ」

「だから、サー・グリフレッドはあそこで殺して、身軽になったと？」「本来であれば斯様な事をする必要は無かったのだが、あそこで騎士王と出会ってしまったからな。彼の者がいれば、この立合いを邪魔してくるであらう？」

「まあ確かに。なら、あんな忠臣の演技しなくても良かったのでは？」「入る時もある時も余人に違和感すら残してはならぬ、それが潜入任務というものよ。その為ならばどのような事でも行おうし、何でも利用する。忍の最大の敵とは、他者ではなく己の怠惰と妥協なのだ」

なんとというプロフェッショナルな精神だろうか。

同じ悪魔六騎士でも、偽る気すらさらさら無い輩とはエライ違いである。

腕が六本あるベディヴィエールと性別偽証のガレスには、あの人の爪の垢でも煎じて飲んでもらいたい。

「さて、そろそろ始めるとするか。お主も忙しい身、拙者と無駄口を叩いている暇はなからう」

「お気遣いどうも。けど、手加減はしませんよ」

「望むところよー」

言葉と共にニンジャ先輩は地を蹴る。

忍特有のバネでこちらの頭上高く飛び上がった先輩が選んだ初手は、急降下式のドロップキック。

巧みな体術で軌道を修正したそれは、人体を一本の槍と化してこちらの脳天へと飛来する。

だが、こちらとてその程度で食らうほど甘くは無い。

先輩の爪先がこちらの髪に触れる寸前で人一人分の距離を飛びのいた俺は、目標を失い地面に着地しようとするその腹部に横蹴りを放つ。

だがしかし、捉えたと思った蹴りはその衝撃を伝える事は無かった。

なんと相手は足刀が自身の腹を捉えるよりも早く、両手をこちらのふくらはぎについて足の上で倒立したのだ。

「チツ」

すぐさま足を引くが、一寸早く腕の力で跳躍する先輩。

「食らえ！・わんげつ彎月手裏剣刺しツ!!」

そのまま空中で前転した先輩は、回転と落下のエネルギーを込めた蹴りを放ってくる。

しかも、足袋に手裏剣を挟むというオマケ付きでだ。

「シツッ」

だがしかし、真剣相手に闘う事に慣れている身としては、この程度では怯む理由にならない。

躲すのではなく、一步踏み込んで打点をズラすと同時に腿の部分の布に手をかけた俺は、空中で体勢を崩した先輩の右手を取りそのまま地面に叩き付けようとする。

「甘ッ!!」

掛け声と共にブレる視界、その後には風切音と浮遊感が全身を包む。

順逆自在の術

超スピードで相手と体位を入れ替える事で、技の掛け手と受け手を入れ替える超高等技術だ。

軽く舌打ちをしつつ腿の裾を持った手を脚力で引き剥がし、腕を引く相手の力を利用して足から地面に着地する。

とはいえ、敵も然る者。

投げが失敗したと見るや否や、掴んでいた手を捻って関節を捕りに来る。

両腕を相手の腕に絡みつかせる事で関節を極め、そこに全体重を乗せる事で肘を破壊する『柔』やわらに派生する前の古流忍術が一つ『袖絡み』。

並の相手ならこれで腕一本だが、生憎とこっちは普通の鍛え方はしていない。

「——ふんっ!!」

両足を砂地に噛ませて捕られた右腕に力を込めると、全身で肘を挫こうしていたニンジャ先輩の動きが止まる。

「我が葛を力で破るかっ!？」

「悪いッスね。俺の骨はガンダリウム合金より丈夫なんですよっ!!」

そのまま腰の回転で空いた左のショートフックを無防備な相手の脾臓に叩き込む。

「ぐはあっ!？」

苦鳴と共に拘束している力が緩んだところで右手を引き抜くと、その掌を相手の顎に乗せると同時に足を払う。

相手の身体が宙に浮いたところで左手の氣勢で足を、右手の氣勢で首と顎を捕らえてそのまま空中を二周三周と回転させる。

そして、相手の平衡感覚が鈍ったところで、遠心力と落下スピードを込めて後頭部から地面に叩きつける。

大南流合気柔術が一つ『轟天殺』だ。

「~~~~ツ!？」

痛みにのたうちながらも距離を取るニンジャ先輩。

それを身ながら俺も再び構えを取る。

さっきの轟天殺だが、地面が砂地なので威力が半減した上に、ギリギリのタイミングで後頭部と地面の間に手を差し込んでいた。

あれでは決まり手にはほど遠い。

案の定というべきか、ヘッドスプリングで起き上がったニンジャ先輩は、こちらへ向けて手裏剣を投げる仕草をする。

空気を切り裂く音に飛びのくと、砂地に複数の刀傷が刻み込まれた。

たしか、エイリアンの時に使っていた空気手裏剣とかいう技だったな。

だが、遠距離攻撃はこっちにだってある。

「テュホン・レイジッ!」

一步踏み込みその場で大きく回し蹴りを放つと、その軌跡をなぞる様に竜巻状の衝撃波が発生する。

それは放たれた不可視の手裏剣を全て飲み込んで、ニンジャ先輩に襲い掛かる。

「抜かったな！ 疾風は忍の友よ!! 悪魔忍法『神風返し!』」

ニンジャ先輩が竜巻とは逆の渦を描くように両手を回転させると、なんと放ったはずの衝撃波がこちらに跳ね返ってきたではないか。

「チイツ!」

咄嗟にガードを固めても数十センチは後退する俺の身体。

衝撃波系の技は使えない事に内心舌打ちしていると、視界の隅を小さな鳥の羽が掠めた。

素早く辺りを見渡せば、俺の周りを大量の鳥の羽が舞っている。

水鳥の羽とザ・ニンジャ。

その二つのキーワードが脳内で合致した瞬間、背中を走る悪寒と共にその場から離れようとした。

しかし――

「逃しはせんぞ! 『忍法・業火羽輪の術』!!」

先輩が目の前に浮かぶ羽に火をつけると、まるで導火線のように周囲の羽を伝って炎が奔る。

テュホン・レイジの残滓を遡るかのように、螺旋を描いて迫る炎。

「グレートホーンツ!!」

食らいつかれる寸前、紅蓮の大蛇を拳圧で吹き飛ばすと、舞い散る火の粉の照り返しによって刹那の間、細く光るナニカが見えた。

反射的に防御を固めると同時に、全身に絡みついて食い込んでいく極細の物体。

これは……鋼糸ツ!?

「かかったな、これが忍法『蜘蛛糸縛り』の本来の姿よ」

手の内にある小さなリールから伸びた鋼の糸を引き絞りながら、ニンジャ先輩は冷ややかな眼光をこちらに向ける。

「……なるほど。最初に見た時から無茶なロープの使い方をしてると思っただけ、本来は鋼糸術だったんですね」

「左様。ルールのある超人レスリングにはそぐわぬ殺人術故、あのような歪な姿となったのだ。だが、此度は野仕合、こちらも容赦せずに

全力を振るうことが出来るわ」

先輩が糸を操る度に締め付けが強くなり、鋼糸は深くこちらの身体に食いついていく。

巧みに関節の稼動範囲を力が入らない位置に留めているうえに、拘束しているのが鍛え抜かれた鋼のワイヤーである事から、力づくで引き千切ろうとすればそれより先に皮膚や肉が裂けてしまう。

これは身の内に刃でも仕込んでいないかぎり、脱出は困難だろう。なんとか脱出方法を模索しつつ周囲に目を走らせていると、つま先が固い物にぶつかった。

こいつを使えば或いは……やってみるか！

「本来の蜘蛛糸縛りの前には、如何なる肉体も脱出は不可能！ 観念せいっ!!」

鋭い声と共にさらに鋼糸を引き絞ろうとするニンジャ先輩。

だがその瞬間、刹那の間だけ絡みついていた糸が撓たわんだのを俺は見逃していなかった。

順逆自在の術の応用で足元にあるモノと入れ替わった俺は、地を這うような体勢から思い切り地を蹴る。

「むうっ!? あれは蟲の死骸!! おのれ、空蟬か!!」

「これでも一応忍の末裔なんで、アレくらい出来ない妹にデカイ顔されちまうんですよ!!」

寸断されたエイリアンの死体に驚愕の声をあげるニンジャ先輩との間合いを一気に詰めた俺は、その腕を捕ろうと手を伸ばす。

しかし一瞬早く引かれた事により、俺の手は空を切ることになった。

「甘いな！ 拙者の技をおぬしが知るように、お主の技も拙者は熟知している。そう易々と羅生門などという大技にかかりはせんぞー!」

会心の笑みを浮かべるニンジャ先輩だが、その表情はすぐに凍りついた。

何故なら技を躲されて隙だらけの筈の俺が、瞬間移動で後方に移動した上に特大の氣を纏って突っ込んできているからだ。

「羅生モオオオオオオオンッ!!」

「その何処が羅生も——グワーーーーッ!?」

どつからどう見てもサイコクラツシャーな体勢でニンジャ先輩のドテツ腹に突き刺さった俺は、そのまま先輩の身体を弾き飛ばして十数メートルほど滑空した。

背後を見れば、氣の放出によって砂地が焼け焦げている。

『羅生門クラツシャー』

羅生門を外した恥ずかしさを誤魔化す為にサイコクラツシャーで相手を抹殺するという、どつからツツコんでいいのか迷う技である。

仕入先は言うまでも無いだろうが『羅将モン』

許されるならば永久に封印したい技であった。

「ニンジャ先輩、生きてますか?」

ボロボロの状態で横たわる先輩に声を掛けると、彼は何故か清清しい笑みを浮かべている。

「ふふっ……。よもや、拙者が化かしあいではな。認めよう、お主が將軍様の後継を名乗るに恥じぬ漢である事を……」

死亡防止措置の光に包まれたニンジャ先輩は、そう言い残してこの世界から退場した。

ありがとう、ザ・ニンジャ先輩。

ネタ技で倒してゴメンナサイ、ザ・ニンジャ先輩。

ともかく、これで悪魔六騎士の一角を崩すことが出来た。

残りが5人もいると思うと頭痛がするが、武者修行である事を思うと仕方ない。

しかし、思った以上に翻弄されたな。

流石は本職の忍者というべきか、技の起こりや殺気の隠蔽が滅茶苦茶巧かった。

同じ忍者だったサタンクロスはともかく、初見で彼に勝ったブロツケンJrは素直に尊敬するわ。

さて、あまり遅くなると不審がられるだろうし、皆と合流する事にしよう。

閑話 『獅子王・地獄変（6）』

聖杯動画大賞をご覧の皆様、こんにちわ。

動画配信初挑戦の姫島慎です。

今から10分ほど前に聖都の砦を一つ、攻め落としてまいりました。

どうしてこうなったかと言うと、集落に向かう道程で呪腕さんが『近くにある聖都の砦に仲間が捕らえられている』という情報を受け取ったのが原因。

これから世話になるんだから、と土産物を買うような軽さで救出が決定された。

関わったのはメンバー全員という過剰戦力。

害虫駆除組は連戦の疲れがあるので、心配したがそんな事は無かった。

砦は別れた場所から徒歩で20分くらいの場所にあり、大きさは小さな事務所兼住宅と同程度。

正門には二人の粛清騎士が警備に立っていた。

でもって、メンバーの役割分担は陽動でヴァーリと美猴、ご先祖ちゃん。

潜入と救出が俺・立香嬢・マシユ嬢・呪腕さん。

後詰めに玉藻とシエーフアール少佐、それにアラージュさんとエミヤのアンちゃんに決定。

作戦はヴァーリがラディカル・グッドスピードで衛兵ごと城門を蹴り飛ばすところから始まった。

バックアップ組の援護射撃を受けてヴァーリ達が暴れている隙に内部に潜入した俺達は、呪腕さんの誘導のもと地下へと降りた。

あ、床面ブチ抜きはしていませんよ？

今回は狭い建物だったから、それをやると救出対象まで巻き込みまじまじ。

さて、そんなこんなで地下に降り立った俺達が見た物は、牢に繋がれた紫の髪をもった褐色の少女に拷問を加える粛清騎士という光景

だった。

まあ、直接触れるのではなく、何故か牢屋の外から棒で突くような真似だったが。

こちらの姿に慌ててに迎撃の構えを取ろうとする騎士達。

指揮官っぽい奴曰く、現れた粛清騎士はヤヴァイ薬でランスロット並みの能力を備えてるとか。

せっかくのフリだったので、そいつも含めて全員仲良く『男殺し』で男性廃業していただいた。

この光景に呪腕さんは縮みあがり、立香嬢達は目を押さえながらも隙間から見る、というテンプレを披露してくれた。

粛清騎士の皆さん、これからは琉球唐手の奥義である『コツカケ』を憶えましょう。

まあ、俺の蹴りは鎧有りでも骨盤まで届くから、体内にタマを引っ込めても無駄なんですけどね！

泡を吹いて気絶した騎士達をふん縛っていた俺は、牢獄の隅にあるトイレの前でカリツカリに干乾びているトカゲ人間を見つけた。

言わずとも分かると思うが、悪魔六騎士の一人であるスニゲーター先輩である。

ギリギリ意識はあったので何があったのかを訊ねたところ、参謀であるアグラヴェインからの依頼で拷問を行おうとしたら、原因不明の下痢に罹って体中の水分を出し尽くしたらしい。

なんで牢屋のトイレの前でぶっ倒れていたかと言うと、下痢が止まらなかったで動けなかったからだとか。

そこまで口にして意識を失った先輩は、死亡防止の光によってその姿を消した。

まあ、あんな脱皮した後の残骸みたいな様じゃあ、闘えるワケないもんなあ。

どういふことなのかを視線で問うと、呪腕さんはそれに応えてくれた。

なんでも囚われている『静謐せいひつのハサン』は全身はもちろん体液に至るまで全て毒を含んだ毒人間なんだそうなの。

スニゲーター先輩を円卓の騎士からトイレの住人にジヨブチェンジさせたのも、彼女の身の内にある毒ということだ。

という事は、一緒の部屋にいる俺もヤバいのでは……？　なんて疑問が浮かんだ途端、視界がグラリと揺れた。

案の定、こちらも毒に侵され始めていたのだが、どっこい俺の体はそこまで柔ではない。

『聖母の微笑』を使用するとあつと言う間に耐性が出来たのだが、静謐嬢はこつちが対処している内に立香嬢が助けていた。

ヤバいと思つて声をかけようとしたら、思つたとおりに静謐嬢ともつれ合つて倒れる立香嬢。

慌てて浄化法を施そうと駆け寄つたところ、なんと立香嬢が頭を押さえながらも立ち上がったではないか。

『もしかして耐毒に特化した体質なのか？』と首を傾げていたところ、触れて死なない立香嬢に感動したのか、彼女に抱きついてポロポロと泣き出す静謐嬢。

なんとも邪魔できそうに無い雰囲気だったので、彼女の事は立香嬢達に任せて早々に脱出した。

あ、砦の方は魔物まで現れた事でテンションを上げたヴァーリの聖剣（手刀）の一撃によつて見事に真つ二つになったあと、ガラガラと崩れていきました。

その後は静謐嬢が立香嬢から離れなかったり、『一生この方について行く』という爆弾発言をしたりとのハプニングがあったが、概ね平和な旅行きだったと思う。

たどり着いた集落への道が戦火に包まれていなければ、だが。



俺、衛宮士郎は混乱する集落の人達の中を必死に駆け抜けていた。

エイリアンの巢の傍そばで体調を崩した美遊を連れて一足先に集落へたどり着いた俺達は、行方不明者の捜索に尽力したことから大歓迎を受けた。

まあ、本当のところは俵さんの持つ米俵からあふれ出す食料に感激したのかもしれないが。

空き家のベッドを貸してもらったお陰で美遊の体調も順調に快復し、広場で開かれた宴会のお下がりを食べられるようになった頃、集落に続く道から爆音と悲鳴が聞こえた。

慌てて二階部分から目を凝らすと、こちらに向かってくる聖都の肅清騎士達が爆発に巻き込まれて馬ごと吹っ飛ばされていた。

……ええつと。

こういう展開つてさ、騎士達が攻め込んだ事で村の人たちが悲鳴を上げるのが普通じゃないか？

いや、そういう風になって欲しいわけじゃないんだけど。

なんかこう、釈然としない何かを感じて……。

いったい何がどうなってるのかと首を傾げながらもさらに目を凝らしてみると、スキのような背の高い草むらの中を誰かが巧みに移動しているのが見えた。

しゃがみ歩きなのか、匍匐前進なのか。

動いている時には殆ど姿は見えないんだけど、立ち止まって弓を構えた瞬間に顔が見えた。

「……なんでや！」

全身の筋肉を漲みなぎらせながら弓を引いていたのは、ハリウッドスターのスター●ーンだった。

首まで伸びた髪に赤い鉢巻、そして爆薬が仕込んである弓を使っているとところを見ると、あれつてもしかしてランボーなのか？

というかさ、現実であんなポンポン敵を倒せるっておかしいよなあ。

引きつる顔を必死に押さええると、村全体に響くような木を叩く音が鳴った。

慌てて視線を他に向けると、ランボー（でいや、もう）が足止めし切れなかった騎士の一団が、村に向けて突進してきているのが見えた。

「くそっ!?! ここには美遊がいるのにー!」

舌打ちを漏らしながら踵を返した俺は、美遊に部屋から出ないよう
に言いつけて外に飛び出した。

英霊エミヤに置き換わりつつあるこの身体で、何処まで戦えるか分
からない。

このまま力を行使し続ければ、待っているのは破滅だけ。
力を貸した本人からの忠告なのだ、嘘偽りはないだろう。

それでも俺は妹を、美遊を護りたい。

あの世界でエインズワースに奪われた時のような気分をもう一度
味わうなんて、絶対にゴメンだ。

俺が村の入り口に辿り着いた時には、既に戦端は開かれていた。

隊伍たいごを組みながら襲い掛かってくる肅清騎士達を、俵さんや三蔵法
師、アーサーさんが必死に村の外で押さええている。

「早く加勢しないと……ッ！ 武装練金!!」

シルバースキンを纏まとってみんなに合流しようと一歩踏み出した瞬
間、総毛立つような感覚に襲われた。

真っ白になった思考はそこで機能不全を起こしてしまったが、身体
に染み付いた英霊エミヤの戦闘経験は別だった。

殆ど無意識で干将・莫耶を投影して交差するように頭上で掲げる
と、次の瞬間に身体が潰れるかのような強烈な衝撃が来た。

吹き飛ばされながらも、地面に足を噛み付かせて転倒を回避する。

あまりランクの高い宝具ではないが、頑丈さだけは折り紙付きであ
る一対の中華刀が手の中で崩れ去っていく。

「ぐう……ッ!?… なんて……バカ力……!?!」

骨格がバラバラになりそうな痛みの中で顔を上げると、赤いライン
が入った強固な銀鎧に猛牛の角を思わせる飾りが付いた重厚な兜を
被った騎士がこちらに剣を向けている。

「オレの一撃を受けるとは、少しはやるじゃねえか。褒美としてこの
モードレッド様様が直々に遊んでやるよ」

兜越しに放たれる愉悦と憤怒が入り混じった声もそうだが、俺は目
の前の騎士が放った名前に息を飲んだ。

モードレッド。

アーサー王とその姉の間に生まれた不義の子であり、アーサー王伝説に終止符を打つ反逆の騎士。

奴の言葉が本当だとすれば、今から相手にするのはクラスカードから英霊の力を借り受けた魔術師とは違う、本当の英雄という事になる。

だが、例えそうだとしても退くわけにはいかない。

後ろには美遊がいるんだ。

奴等の目的は分からないが、聖抜に選ばれてしまったあの娘も狙われる可能性は十分にある。

聖杯戦争を勝ち抜いて、あの滅び行く世界から神稚児の辛い役目から美遊を解放したんだ。

こんなイカレた世界に縛り付けられてたまるものか!!

「それはありがたいな。だったらお前の部下が全滅するまで相手をしてもらおうか!!」

両手に再び干将と莫耶を投影し、俺は一気にモードレッドの懐に飛び込んだ。

「甘いんだよッ!!」

初手である干将による袈裟斬りは、力任せに振られた奴の剣によって大きく弾かれる。

たった一合しか刃を合わせていないにも拘らず、身体の芯にまで響く衝撃。

だが、そのくらいで音を立ててはいられない。

続く莫耶の斬り上げも籠手で弾かれ、こちらは大きく隙を晒してしまふ。

「おらあ!!」

不良のようなガラの悪い掛け声と共に振り下ろされる騎士剣。

それは大きく体勢を崩した俺では対処が出来ないものだった。

もつとも、それはこちらの隙が本物だった場合だ。

勢い良く脳天に向けて降り注ぐ刃。

それを視界に納めながら、俺は弾かれた勢いを殺さずに身体を反転させ、全ての勢いを込めた干将を剣の腹に叩き込んだ。

魔術による身体能力の強化ともろもろの勢いが込められた干将は、モードレッドの剣をあらぬ方向に弾き飛ばす。

「……………ッ!?!」

「おおおおおおおっ!!」

体勢を崩し大きく泳いだ胴に、続けざまに放った莫耶の刃が食らいつく。

だが甲高い金属音と共に此方の腕に伝わって来たのは、慣れてしまった肉を断つ感覚ではなく硬い物に棒を打ち付けた時のような痺れだった。

「そんな鈍らにオレの鎧が——抜けるわきやねーだろうがッッ!!」
「がっ!?!」

モードレッドに怒りの声と共に視界がブレた。

頭が吹っ飛ぶかと思うほどの衝撃に身体が大きく弾き飛ばされたが、頬の内側を噛み裂いた痛みを気付けにして何とか踏ん張れた。

腕を振っただけで数メートルも吹っ飛ばされるなんて、やっぱり英霊ってのはトンデモない。

「まだ終わりじゃねーぞ、オラアッ!!」

全身から魔力を噴き出して、此方へ突っ込んでくるモードレッド。

俺は黒塗りの弓を投影し、後ろに跳びながら狙いを付ける。

干将・莫耶の刃が通らないのなら、並の剣を矢に変えても効果は無いだろう。

なら、打てる手はアレしかない。

脳裏へ設計図を起こすのはドリルのような形状の剣。

ケルト神話の英雄フェルグス・マック・ロイが振るった魔剣『カラボルグ』

それを英霊エミヤが矢に改造した『偽・螺旋剣』だ。

奴の鎧が如何に強固だろうと、エミヤの知識の中でも屈指の威力を誇るコレならば……………ッ!!

「投影——ッッ!?!」

投影の為の魔力を流そうとした瞬間、内部を食い荒らされるような激痛が全身を奔った。

恐らく英霊エミヤへの置換^{ちかん}が進んだ事による弊害だろう。

俺は咄嗟^{とっさ}に『偽・螺旋剣』の投影を破棄し、冬木で言峰から買った事がある黒鍵を矢として投影し、奴に向かって放つ。

狙いは兜に空いた目の部分。

「しやらくせえっ!!」

だが、それも奴の剣によって容易く打ち払われてしまう。

「小手先だけのザコ野郎がッ！ そろそろくたばりやがれえっ!!」

更なる加速によって間合いを詰めてきたモードレッドが振り下ろす刃を、ギリギリのタイミングで投影した干将・莫耶で防ぐ。

「ぐっ……はあっ!!」

刃の方は辛うじて防ぐことが出来たが、怪力によって地面に叩きつけられた俺は、そのまま数度バウンドして地面を削りながら吹き飛ばされた。

「……っほっ……」

軋む身体を起こしながら頬の内側から流れた物と喉からせり上がったもの、その二つが混じり合った血反吐を吐き捨てる。

全身がバラバラになるような衝撃だったが、シルバースキンが護ってくれたお陰で何とか戦える。

……剣を交えたのはほんの少しだが、それでも確信した。

奴と俺とでは実力が違いすぎる。

少なくとも出し惜しみをして勝てる相手じゃない。

だったら、やるしかない。

全力で無理でも、死力を尽くせば届くかもしれない。

元々、美遊を助けるために使い切るつもりだった命だ。

今更惜しむ理由なんてどこにある。

覚悟を決めた俺は、左手を肘に添えて右手を真っ直ぐに突き出す。

今から使うのは英霊エミヤの奥の手、本当の意味での彼の『宝具』だ。

『正義の味方』だった彼のコレは、『悪』である俺では扱いきれない。

だからこそ、俺が使えるように改変する。

普通ならそんな事は絶対に無理だ。

だが、平行世界の同一人物であり彼の経験と起源を譲り受けた俺ならば……ッ!!

「体は剣で出来ている……」

「あん？」

俺の言葉にモードレッドが怪訝けげんそうな顔をするが、そんな事は気にしてられない。

「血潮は鉄で、心は硝子……」

「へっ、なんだそりゃ。東洋で言うところの念仏のつもりかよ」

念仏か、言িয়েて妙だな。

奴の言う通りだ。

これは念仏になるだろう。

奴と、そして俺自身への。

「幾たびの戦場を越えて不敗……」

「いい加減、ウザってえぞ」

言葉と共にモードレッドが剣を構える。

チツ、詠唱にはもう少しかかるつてのに……っ!?

「たった一度の敗走もなく、たった一度の勝利もなし……っ!」

「黙れっつてんだよおッ!」

先程と同じく魔力を漲らせながら突っ込んできたモードレッドの一撃を、咄嗟に展開した『熾天覆う七つの円環』で防ぐ。

無茶な投影だった所為か、魔術回路が軋む音が聞こえた。

だが、その程度で音を上げてなんていられない。

「遺子いしはまた独り、剣の丘で細氷さいひょうを砕く……」

「デメエ……ッ!」

『熾天覆う七つの円環』を砕きながら、モードレッドは魔力で出来た薄紅の花弁越しにこちらを睨む。

もう少し……もう少しだ!

「けれど、この生涯ははまだ果てず……」

「ウゼエっつてんだよお、ザコがああッ!!」

ガラスが砕けるような音と共に、奴と俺を隔へだてていた薄紅の花弁が砕け散る。

『熾天覆う七つの円環』は本来は対投擲武器のものだ。
英霊の放つ斬撃を止めるには荷が重すぎたんだろう。

だが――

「偽りの体は」

「いい加減、くたばれえええつ!!」

再度振り上げられたモードレッドの剣がこちらを襲う。

だが――遅いッツ!

「それでも剣で出来ていた――!!」

最後の一節を口にした瞬間に世界が裏返った。

蒼天は光一つない黒一色に。

汗ばむくらいの気温は肌を斬る程の冷氣と吹雪に。

そして乾いた土で出来た村の入り口は、無数の剣が突き立つ雪原に。

これが英霊エミヤの『宝具』固有結果『無限の剣製』アンリミテッドブレイドワークス

術者の心象風景で現実世界を塗りつぶし、内部の世界そのものを変質させる魔法に最も近いと言われる魔術の奥義。

眼下に広がる、この殺伐とした風景が俺の心の中というワケだ。

雪に覆われた丘に突き立つ剣達が、美遊を選んだ事で滅びを免れなくなつた、元の世界の人達の墓標に見える。

そんな下らない事が頭を過ぎってしまう。

俺は空振りした剣で雪を撒き散らしているモードレッドの後ろ姿を見据えながら、傍らに突き立つ剣に手を掛けた。

「こと世界、空想と現実」

「デメエ、いつの間に……?! それにこの景色……ッ?!」

背後に立つ俺と変わり果てた周囲に気付いたモードレッドは、混乱を隠そうとせずに周囲を見渡している。

「内と外を入れ替え、現実世界を心の在りようで塗りつぶす。魔術の最奥、固有結界」

「固有結界……。母上から聞いた事があるぜ、魔法に限りなく近い禁呪だってよ」

「そういう事だ。この結界は俺を倒さない限り、解除されない」

手にした名も無き剣を引き抜いた俺は、その切っ先を目の前の反逆の騎士に向ける。

「今からお前が挑むのは無限の剣……。悪いが付き合ってもらうぞ、俺の剣が尽きるまで！」

「上等だあ!!」

三度、魔力を放出しながら突撃を行うモードレッド。

だが、そんなものはもう通じない。

「行けッ！」

こちらの意思によって、周囲に突き立っていた剣が一齐にモードレッドに向けて牙をむく。

「なにいつ!？」

驚愕の叫びをあげて足を止めるモードレッド。

周囲から矢継ぎ早に放たれる剣群を剣と空いた手で撃ち落としているが、当然の事ながら手数はこちらの方が上だ。

俺は再度弓を投影し、周辺から集まって来る剣を矢に変えてモードレッドに向けて放つ。

ここにある剣は玉石混合で、高ランクの宝具も登録されている。

だが俺が使用している所為か、数発は命中しているものの奴の鎧を抜く程のモノはない――。

いや、違うな。

モードレッドの奴、質の低い物は無視して高ランクの剣だけを狙って撃ち落としてる。

これでは『偽・螺旋剣』を撃ち出しても仕留められる保証はない。遂巡は一瞬だったが、その隙を見逃す程円卓の騎士は甘くなかった。

剣群の中に高ランクの武器の姿が消えた瞬間を狙っていた奴は、襲い来る剣を魔力を放出して弾き飛ばしたのだ。

「ザコの分際で好き勝手やってくれやがって……! 固有結界だか何だか知らねえが、纏めてブツ潰してやるッ!!」

怒声と共にモードレッドが剣を正眼に構えると、健を中心として奴が纏っていた魔力が赤い電流を帯び、兜が分解しながら鎧に収納され

て奴の顔が露わになる。

顔立ちはアーサー王によく似ているが、張り付いた寧猛な笑みの所為で酷く粗野な感じだ。

「……これこそは、わが父を滅ぼし邪剣ッ！」

モードレットが大上段に振り上げた剣に、奴が纏っていた魔力と赤雷が収束していく。

その力の膨大さに思わず背筋が凍った。

「跡形も無く消し飛びやがれッ！ 『我が麗しき父への叛逆』!!」

振り抜かれた切っ先から放たれたのは、深紅の暴虐だった。

破壊のエネルギーと化した魔力は赤雷と化し、進行方向の剣達を蹂躪しながらこちらに迫る。

「クッ……！ うおおおおおおおっ!!」

俺の叫びに応じるように剣が群をなして、赤雷に挑んでは消えていく。

幾十幾百の剣が犠牲になるがこれでいい。

神秘は神秘によつて打ち消される。

ならば奴の宝具が如何に強力だろうと、ここにある無限の剣をぶつければ威力の相殺は可能はずだ……ッ!!

「野郎、ふざけやがって！ おらあああああッ!!」

モードレットの咆哮と共に赤雷の出力がさらに上がる。

凌ごうと呼び出した追加の剣群を蹴散らして、此方を飲み込まんとする破壊の権化。

だが――

『熾天覆う七つの円環』!!」

突き出した左手を中心に花開いた薄紅の花弁が赤雷を阻む。

着弾の瞬間には手が碎けるかと思うほどの衝撃があったが、齒を食いしばってそれに耐えた。

「ぐううう……っ?! ああああああああッ!!」

次々と碎けていく花卉の音を聞きながら、俺は吼えた。

軋む身体と次第に左手へと近づいてくる熱。

限界か、と諦めの言葉が脳裏をよぎった時、ようやく赤雷は力を使

い果たしてその姿を消した。

「信じられねえ……。あの野郎、俺の真名解放を凌ぎきりやがった」

再び装着された兜越しに呆然と呟くモードレッドを睨みながら、俺は荒い息を整える。

……参ったな。

流星は本物の英霊の宝具、威力は聖杯戦争で戦ったインストールされたアーサー王の聖剣を大きく上回っている。

奴がどれだけの間隔であと何発宝具を撃てるのかは分からないが、こつちはさっきの一発を防ぐのでいっぱいいいいだ。

いくら美遊の魔力に支えられてるとはいえ、結界も長時間維持は出来ない。

その上、素の力には天と地ほどの開きがあり、むこうはほぼ無傷だがこつちは満身創痍。

さらには奴の防具に通用する武器も数少ないと来た。

状況は嗤わらつちまいそうなくらい不利だ。

けど、付け入る隙は有る。

奴にもう一度宝具を撃たせることが出来れば、このほぼ詰んでしまった盤上をひっくり返す事も可能かもしれない。

「今のがクラレントか。……大したことないな」

息を整え、此方に余裕がないのを悟らせない様に口を開く。

本当のところは全身冷や汗塗れだから、顔が見えないシルバースキンは本当に助かる。

「あゝ!？」

ヤンキーの恫喝どうかつにしか聞こえないような声を上げてこちらを睨みつけるモードレッド。

ほんとうにガラが悪いな、こいつ。

「聞こえなかったのならもう一度言つてやる。お前の剣なんて大した事は無い。アーサー王の聖剣に比べれば、鈍なまくらもいところだ」

「テメエツ!？」

激昂して襲い掛かろうとするモードレッドだが、俺の手に握られた剣を見た途端に目を見開いて動きを止める。

「それは……オレのクラレント!? テメエツ! なんだそりやあツツ!?!」

「言つたらろう、ここは無限の剣を内包する世界だと。当然、お前の剣もあるさ」

もちろん嘘だ。

このクラレントは今投影して造り出したものなのだから。

「なんなら今から真名解放を撃ち合うか? この剣は贋作だが負けな
い自信があるぞ」

「ふぎけんよ、テメエ。そんなチャチな偽物で俺に勝てるワケねー
だろ……」

「どうかな? 偽物が本物に勝てないなんて道理は無い。担い手が未
熟だつたら特に、な」

瞬間、モードレッドの周辺が弾け飛んだ。

宙を舞う剣と土の先には、帯電した紅い魔力を纏った反逆の騎士が
こちらに切っ先を突き付けている。

こちらへの怒りと憎悪に塗れた奴の顔には、例の兜は無い。

「上等だ、ペテン野郎! このクソツタレな世界諸共、跡形も無く消し
飛ばしてやるよツ!!」

よし! 乗ってきた!!

「やってみろよ、やれるもんならなあ!」

「くうたあばれええええツ! 『我が麗しき』^{クラレント}」

最後の挑発によって奴が剣を振り上げると同時に、俺は思いっきり
地面を蹴った。

魔力によつて限界まで強化した両足は、モードレッドとの間合いを
一瞬にしてゼロにする。

虚を突かれて呆然となった奴の懐に飛び込んだ俺は、右手のハリポ
テでしかないクラレントを破棄して最後の切り札を切る。

「シルバースキン”リバース”!!」

俺の叫びに応えて、全身を包んでいたシルバースキンはモードレッ
ドの身体を包んでいく。

瞬きをする間に装着は完了し、モードレッドは頭部以外はすべてシ

ルバースキンに覆われた状態になった。

「クソツ、動けねえ!? なんだこりゃあ!?」

突然の事に混乱するモードレットの声が結界の中に木霊する。

シルバースキン ”リバース”

シルバースキンのもう一つの姿で表が着用者の身を護る『防護服』なら、こちらは敵の動きを封じ攻撃を全てシャットアウトする『拘束服』だ。

「―――トレース・オン 投影、開始」

声を荒げるモードレットをよそに、俺は最後の投影を行う。

「―――トリガー・オフ 投影、装填」

天高く掲げた右手に握られているのは、身の丈以上の大きさを誇る岩を削りだして造り上げた斧剣だ。

「テメエ……ッ!?!」

こちらの持つ得物のあまりの異様と、その用途を想像して反逆の騎士は絶句する。

だが、すぐさま怒りに顔を真っ赤にしてこちらを罵りだす。

「ペテン野郎がッ! 真名解放の勝負だったんじゃねーのか、汚ねえぞ!!」

「ああ、汚いよ。―――だから?」

おそらく、何の感情も籠っていないこちらの目に二の句を飲み込んだモードレットだ。

「セツ全工程投影完了―――ナインライフズ・フレイドワークス是、射殺す百頭」

繰り出される超高速の九連撃。

その全てを無防備な顔面に食らったモードレットは、首から上を失ってその場に倒れ伏した。

奴の身体が光の粒子になるのを見届けた俺は、固有結界が解除されるのと同時にあおむけに倒れた。

身体も魔力回路も限界だ。

もう指一本動かせない。

こちらを気遣うアーサーさんや三蔵法師の声が聞こえるという事は、むこうも無事に敵を撃退できたのだろう。

その事に安心した俺が半分下がった瞼を閉じようとした時、異様なモノを目にした。

蒼穹から降り注ぐようにこちらに迫って来る白い光。

最初は点くらいだった代物なのに、今では自分の手くらいの大きさになっている。

それに感じる魔力も桁が違う。

アレに比べたらモードレッドの真名解放なんて子供のおもちやだ。

「逃げろ！ あれは獅子王の聖罰の光だ!! アレを喰らったらこの村なんて一たまりも無いぞ!!」

村の人たちの声に立ち上がろうとするが、此方の意思に反して身体はピクリともしない。

クソツ！ はやく美遊を迎えに行かないといけないのに……ッ!?

こちらがモタモタしている間にも光はどんどんその大きさを増していき、今では視界に映る空の青すべてを覆い尽くしてしまった。

絶望のまま呆然と空を見上げていると、ジェット音と共に見慣れた白い鎧が見えた。

ヴァーリ・ルシファー。

異界のトンでも超人の片割れだ。

「なかなかのエネルギーだな、アルビオン」

『ふん、卑王を葬ったという聖槍か。だが、この程度では俺達には通じない。そうだろう、ヴァーリ』

「ああ、その通りだ」

『それでどうする？ 覇龍になればこの程度容易く半減で消し去れるが』

「……いや。折角だ、あのエネルギーを頂いてしまおう」

……うん？

なんだか不穏なセリフが飛び出したぞ。

『ほう、あの機械人形から奪った能力を使うか。たしかにアレを極めれば、バアル家の『滅びの魔力』も含めて、エネルギー攻撃が通用しなくなるな』

「そういう事だ。アルビオン、準備を頼む」

『うむ』

ヴァーリの声にアルビオンが答えると、鎧の籠手の部分に変化するのが見えた。

なんというか、手の部分が大きくなって肘から身体に左右一本ずつチューブが伸びている。

そしてそのまま聖槍のエネルギーに向けて飛び立つと、接触の瞬間に両手を向けてこう叫んだ。

「吸い取ったああああああつ!!」

すると信じられない事に、ヴァーリの手にエネルギーがドンドン吸い込まれて行き、十秒も経たずに聖罰の光は跡形も無く消えてしまったではないか。

「ふん、見た目と違って貧弱だな。これでは覇龍を十分保たせるのが精々じゃないか」

『あの出来損ないを倒した程度だ。この位が妥当だろう』

理不尽極まりない事を口にする一人と一匹の言葉を聞きながら、俺は安心から来る眠気に身をゆだねた。

◇

さて、ようやくと山岳地帯の集落に付いた訳だが、そこは何ともエライ事になっていた。

なにがあつたのかと言うと、俺達が来る少し前に聖都の騎士達の襲撃があつたらしい。

騎士の多くは山に住む謎の傭兵が倒したし、生き残りも俵さんやアーサーの手によって対処したので村人に被害は無かった。

獅子王が村を壊滅させる為に放った聖槍の一撃も、ヴァーリの新必殺技である『エネルギー吸収』によって奴の糧になって終わった。

というか、あいつもそろそろ自重した方がいいと思う。

掌からエネルギーを吸い取るって、ドラゴンボールの人造人間19号・20号の技ってどうか機能じゃねーか。

白龍皇の鎧で再現ってどんな原理でやってんだ、いい加減にしろ！

ちなみにこう言ったら、『お前が言うな』と返された。

失礼な、俺は基本的に人間が習得できる技しか身に着けとらんわい。

おっと、話が逸れたな。

村に被害が無かったとはいえ、まったく問題が無かったわけじゃない。

なんと敵の首領格とである円卓の騎士モードレッドを倒した衛宮君が、危険な状態になっているという。

意識が戻らないうえに体温の上昇が著しく、内臓機能も低下しているらしい。

彼が収容されている民家の一角に向かった俺は、ベッドに寝かされた衛宮君の容態を確認する。

……刀傷や刺し傷といった物は無し。

打ち身や肉離れに近い症状は手足を初めとして全身にあるものの、内臓器官に関しても異常は見当たらない。

どう見ても危篤状態になるような怪我ではないのだが、何故こんな不調が続いているんだ？

「なんだあ、こりゃあ？」

不審に思いながらも氣脈や経絡を調べて、俺は驚きに声を上げてしまった。

衛宮君の経絡はなんというかグチャグチャだったのだ。

例えるなら、成人男性と少年のパーツをデタラメに継ぎ接ぎにしたというべきか。

しかもタチが悪い事に、継ぎ接ぎされた部分が同一人物のモノのようで、不完全ながら機能しているうえに徐々に衛宮君本来の身体を侵食している。

なんとも特異なケースに首を捻っていると、部屋に来客があった。入り口に目を向けると、そこに立っていたのは冬木のアーチャーだった。

「病人の治療中だ。用事がないなら入室は遠慮してくれないか？」

「これは失礼。治療の役に立つ情報をとお邪魔したのだが」

「……すまん。ちよつとばかり特異な症状だったんで気が立ってた。聞かせてくれ」

こちらは素直に頭を下げると、アーチャーは小さく頷いて口を開く。

「衛宮士郎は何らかの手段を用いて平行世界で英霊へと至った己へ繋がり、その力を手に入れたのだ」

「英霊って、衛宮君は未来で英雄になるってのかわ？」

「そいつがではない、平行世界の己といっただろう。衛宮士郎という人間の中には、そういった可能性もあるという事だ」

「ふうん。それで？」

「方法までは分からんが奴は英霊の座にある可能性にアクセスし、その魔術回路と技術全般を借り受けた。しかし、そんな破格の力を無償で手に入れられるわけではない。奴は力を振るう代償として、使うほどに英霊へと至った自分に浸食されていくようになったのだ」

「なるほどな」

原因は分かった、問題はその対処だ。

「どうするつもりだ？」

「今考えてるよ」

試すようなアーチャーの問いに言葉を返して、俺は頭を回転させる。

これが赤の他人からの浸食なら、呪法なり因果律操作なりで引き離れた後で『聖母の微笑』を使って回復させれば何とかなる。

だがしかし、今回は年齢差とか種族差はあっても同一人物だ。

本人と浸食先との境界は曖昧な上に、一部は癒着しているような状態で一体化している。

衛宮君本来の部分への悪影響を思えば、引き剥がすというのは使えない。

ならば、浸食部分の因果を操作して衛宮君の物と変わらない様に変質させるしか無いワケだが、果たして俺の腕でそこまでの精密操作が可能だろうか？

下手をすれば衛宮君の可能性を潰したり、最悪の場合は逆の意味で

適合しなくなるかもしれない。

そうなった場合は、障害が残るのを覚悟で引き剥がす他なくなる。さて、どうしたものか……。

「何を悩んでいるのかは分からんが、手を出すのなら早くした方がいい。小僧に残された時間は思っているより短いぞ」

「わかってるよ」

アーチャーの声に頭を掻きながら答える。

あれだけ経絡がガタガタなのだ、身体がそう長く持つわけがない。そうだとしても、自分の身体ではなく他人様の身体で博打を打つのは戸惑ってしまうのだ。

ため息と共に苛立ちを吐き出していると、再び入り口のドアが開いた。

目を向けた先には、目じりに涙を溜めた美遊嬢がベッドに寝かさされている衛宮君を見つめている。

「お兄ちゃんー」

制止する間もなく駆け込んで来た美遊嬢は、ベッドで荒い息を吐く衛宮君の枕元に囁り付いて何度も声を掛ける。

だが当然の事ながら返事は無い。

ベッドの脇にある水入り桶の中にあつた手ぬぐいで衛宮君の額の汗を拭いた後、美遊嬢は涙を湛えた目でこちらを見た。

「お願いします。お兄ちゃんを……お兄ちゃんを助けて」

彼女が絞り出した涙ながらの懇願に、俺は大きく息を付いた。

この位でオタついて二の足踏むなんてガラじゃねえな。

いつもの俺なら『失敗したならもう一回因果を弄ればいい』くらいは言いそうなのに、なにをビビってたんだか。

自嘲交じりの考えを打ち切った俺は、思い切り自分の頬に拳を入れた。

部屋の中に鈍い音が響き渡り、頭の中にジンとした痺れが走る。

「……なにをしているのかね?」

「気合を入れたただけだが」

「血がボトボト出てるよ」

「ちよつとしくツて、口の中を切っちゃったんだ」

口元を拭いながら答えるとアーチャーは呆れたような顔になり、美遊嬢からは予備の手ぬぐいを渡された。

「気合を入れるために自傷行為とは、何処の体育会系かね君は」

「MUGEN部ですが何か？」

『MUGEN部?』と首を捻っているアーチャーを尻目に、俺は再び衛宮君に向き直る。

『気合』のおかげで口の中が滅茶苦茶鉄錆臭いけど、これで気合は入った。

あとはバシツと決めるだけだ。

額に手を当てて気脈にアクセスした俺は、検査の時よりも深く彼の中心に意識を沈めていく。

経絡を通り、闇と吹雪に覆われた無数の剣が突き立つ丘を越え、魂魄の中枢にある彼の因果に辿り着くと、英霊に置き換えられた箇所を一つつつ衛宮君の物に直していく。

ただし、戻していくのは彼の健康上害がありそうな肉体部分だけだ。

経絡の方は活性化しているだけでそれ程変化していないし、こういう部分を弄ると支障が出やすい。

身体を元に戻すと、それに呼応して経絡の流れも元に戻っているところを見るに、このままでも問題はあまるまい。

そうして集中する事しばし。

全ての箇所の操作を終えた俺は術を解いて意識を浮上させた。

一息ついて部屋を見回すと何故かうちのメンツやカルデアメンバー、山岳地帯組がいた。

というか、狭いんだが。

「シン、シロウは大丈夫なのですか？」

何故か真っ先に衛宮君の安否を問うてくるご先祖ちゃん。

術が成功した事を伝えると、安心したように小さく笑みを浮かべた。

ふむ、衛宮君と知り合いだったのか？

定員オーバーなので美遊嬢に任せて病室を出ると外には月が昇っていた。

思った以上に時間がかかったらしい。

その後、みんなから俺が治療を行っている間の事を聞いたのだが、カルデア組は呪腕さんの先導で初代山の翁の霊廟に行ったらしい。

なにか用があったのか？ と聞いたところ向こうから呼ばれたように、廟の中では初代さんに操られた静謐嬢と闘ったり、アトラス院とかいう錬金術師の本拠の情報を貰ったりと色々あったらしい。

ウチの連中と山岳地帯組は襲撃の後始末と村の警護を行っており、特に異常はなかったそう。

その後、このクセのある面々で今後の予定を話し合った結果、カルデア組がアトラス院から戻ってきたら聖都に攻め込む事になった。

俺達は将軍様にリミットを切られているし、山岳組やカルデアも今回の聖槍の一撃を重く見ているようだ。

そのアトラス院とかの場所は割れているらしいので、明日の朝一で俺達が運んでやれば昼過ぎには帰ってこれるだろう。

侵攻はその後ということになる。

けっこう色々と有ったが、この世界にいるのもあと一日。

しくじることが無いように、聖杯動画大賞とはぐれ悪魔コンビ対策はしっかりしておこう。

ん、獅子王？

そっちはなんとかなるでしょ。

閑話 『獅子王・地獄変（7）』

人理焼却の災禍の中、滅び行くエルサレムに聳え立つ白亜の城。

獅子王の加護に護られたキャメロットの中を、漆黒の騎士が行く。

円卓の騎士参謀であるアグラヴェイン。

その身に背負った数多の責務から仮面の如き鉄面皮と化した眉間に深く皺を刻んだ男は、道を空ける肅清騎士達に声を掛ける事もない。

その頭にあるのは自軍と敵対したイレギュラーへ、どう対するかのみだ。

よもや、獅子王の放った聖槍の裁きすらも防いでのけるとは思いもしなかった。

あの時に聖地を覆った忌まわしき白龍の気配。

それを感じた獅子王は、現在自室に伏せてしまっている。

聖槍によって神の階位を上った陛下であっても、その身に刻まれた赤竜の因子は未だ健在という事なのだろう。

モードレッドも討ち取られた事で、こちらの円卓にあるのは自分だけのけば、ガウエイン、ベティヴィエール、ガレス、ケイの四人しかない。

最早、なりふりになど構っている余裕は無い。

自身と同僚の至らなさにギリギリと奥歯を噛み締めながら、アグラヴェインは城内にある一室の扉を開く。

その瞬間、自身の主すらも幼子に思えるような圧倒的な気配が彼の身を叩いた。

己が意思とは無関係にブルブルと震えだす身体に喝を入れながら歩を進めると、暗闇に点る燭台の光に照らされて住人達の姿が見えてくる。

一人は白い東洋の民族衣装に身を包み、山羊の角と毛皮で出来た仮面で顔の半分を隠した死の気配を纏う男。

もう一人は昆虫と爬虫類、そして人間を混ぜ合わせた異形の怪物。

「おはよう、アグラヴェイン。君がこの部屋に来たという事は、我々の

「出番という事かな？」

怪物はどこから調達したのか、ティーカップに入ったお茶にその身にそぐわない優雅さで口を付ける。

「……そうだ。敵は貴様等と同じくこの地に現れたイレギュラー。契約通り、その力を振るってもらおうぞ」

精一杯の虚勢で二つの影を睨みつけるアグラヴェインに、怪物は余裕の笑みを浮かべたままだ。

「君の様子を見るに、ご自慢の円卓の騎士とやらは討ち滅ぼされたようだな」

怪物の言葉に思わず渋面になる黒騎士。

そんな中、二人の会話など興味が無いと言わんばかりに、死を纏う男は出口に向けて歩を進める。

「出るのかね？」

「我は地獄門の番人、現世と常世の摂理を守護する者也なり。されど、生死の摂理を曲げて人も人を護らんとする、この地の王の心意気は汲む価値はある」

「人間に護るべき価値があるとは思えんがね。……まあいい、私も出るとしよう。あの小僧は超サイヤ人を超えたベジータを倒したと聞く。孫悟飯への雪辱を晴らすウォーミングアップには丁度良い」

アグラヴェインの脇を通って部屋から出て行く二人の異邦人。

彼等の姿が消えた後、黒騎士はその場に膝をついた。

獅子王を歯牙にもかけ無い程の力を持った魔人二人を相手にするには、円卓の騎士であつても荷が勝ちすぎたのだ。

「化け物どもめ……」

冷や汗に塗れた顔を蒼白にしながら、アグラヴェインは闇に覆われた床に吐き捨てる。

だが、これでイレギュラー対策は成った。

先の聖抜で奴等の存在が明るみになってから、彼は粛清騎士を総動員して対抗策を探していたのだ。

そして、荒野を彷徨っているあの二人を見つけ、食と住を餌にこちらがわへ付かせる事に成功した。

目を覚ました彼女は仰向けのまま、顔の前に自身の手を翳してみた。

視界に映るのは細いながらも皮が厚くなった掌。

「……やっぱり、昨日よりぶ厚くなってる」

只の夢のはずなのに、身体が鍛えられている事にマシユは戦慄を憶える。

教えられた技は物理的に自分には使えない。

なのに、何故か両手が疼き出すのだ。

とくに捕虜になった紫の騎士を見ていると。

「先輩……。私はどうなってしまおうでしょうか……？」

不安に揺れるその声に返事は無かった。

◇

どうも、皆さん。

臨時空中タクシーをこなしてきた姫島慎です。

立香嬢とマシユ嬢を連れて、アトラス院とやらに行ってきました。

地上の建物部分は朽ちたのか影も形も無かったけど、地下施設は生きてました。

襲い掛かってくる謎の本やホムンクルスとかいうイエローデビルのバツタモンを吹っ飛ばして進んでいると、意外な人物に出会う事になった。

恐らく世界で一番有名な探偵、シャーロック・ホームズだ。

俺達より一足先にここへ足を運んでいた彼は、カルデアのモノの姉妹機だという霊子演算器の前で自身の調べた情報を教えてくれた。

アトラス院の成り立ちと使命に始まり、この世界を蝕む人理焼却と魔術王の正体。

獅子王と聖槍の謎に加え、マシユ嬢と融合している英霊が何者かということ。

あちらの判断でカルデアメンバーに必要と判断した情報を話した後、俺も忠告を貰った。

曰く、『異邦人がこちら側につくとは限らない』

言われた時にはハツとなった。

なるほど、『無限の闘争』からこちらに來た者が良識の有る連中とは限らない。

獅子王につく者や独自の路線を行く者が現れても、おかしくは無いわけだ。

こんな可能性を思いつかなかったのは、心の何処かで『無限の闘争』^{MUGEN}由来の者は味方になるという、甘い考えがあったからだろう。

自戒し改めて気を引き締めると、それを待っていたかのようにホームズ氏は幻霊を追うと言って去ってしまった。

何と言うか、忙しない人である。

マシユ嬢と融合したサーヴァントだが、円卓の騎士の一人であるギヤラハツドだった。

將軍様の呪いに掛かっていたから円卓のメンバーだとは分かっていたが、『純潔の騎士』や『最高の騎士』と名高い人物だったとは……。

彼女がランスロットに当たりがキツかったのは、生前思いつきリネグレクトを食らったギヤラハツドの影響が残っていたからなのだろう。

さて、調べ物も終って集落に帰った俺達は、決戦に向けて各自準備に入るようになった。

立香嬢はマシユ嬢とダヴィンチちゃんを連れてカルデアからの増援を迎えに行き、ウチのメンツも思い思いの準備に入っている。

俺も道着を普通のモノからドクロ稽古着に着替えて今に至る、というわけだ。

今回は獅子王の前哨戦として、はぐれ悪魔超人コンビとの試合がある。

相手は手練の超人レスラー、常在戦場を旨とする俺も関節は良く解しておかなくてはなるまい。

という事で入念なストレッチをしていると、外から絹を裂くような悲鳴が上がった。

何事かと慌てて出てみると、こちらに背中を向けてしやがみ込んで

いる全裸と思われる女の子に、立香嬢が自身の上着をかけているのが目に入った。

「何があった——」

「姫島君はこっち来ちゃダメッ!!」

「おっと、失礼」

降りかかる立香嬢の怒声に、即座に回れ右で対応する。

うん、さすがに今のは無神経だった。

「急に怒鳴ってゴメン。もうこっち向いていいよ」

直立不動で待つ事しばし。

ようやくお許しが出たので振り向いてみると、立香嬢の他にカルデアの白い制服を来た女の子がいた。

年のころは14・5歳くらい。

赤紫色の髪に水色の瞳を持つ、並のアイドルなんてメジヤないくらいの美少女だ。

街を歩けば、十人中九人は振り返るだろう。

頭の角と彼女の後ろでプルプル震える尻尾が無ければの話だが。

「それで、何が起こったんだ？」

「この娘はエリザベっていうんだけど、誰かが彼女を気絶させて装備を剥ぎ取っちゃったの」

「装備って事は、この娘もサーヴァントなのか？」

「うん。エリザベート・バートリー」

出てきた名前が意外すぎて、一瞬呆気に取られてしまった。

エリザベート・バートリーってあれだろ？

『女吸血鬼カミィラ』のモデルになった、領下にいる処女の生き血で出来た風呂に入ってたっていう……。

立香嬢の後ろでベソかいてるお嬢さんとはまったく結びつかないのだが。

「な……なによ、人の事をジロジロと。失礼なブタね」

初対面の人間をブタ呼ばわりとは、随分と口が悪いお嬢さんだ。

とはいえ、ここで事を荒げるのはあまりに大人気ない。

相手をじろじろ見ていたのもまた事実なので、一応謝っておいた。

「しかしサーヴァントを気絶させて身包みを剥ぐとは、なかなかチャレンジャーな奴だ。時にエリザ嬢は下手人の顔は見えないのか？」

そう尋ねると、エリザ嬢は不貞腐れた顔でそっぽを向いてしまった。

「見てないみたい。どうしようか？」

「決戦前だからあまり事を大きくしたくないんだが、取られた装備ってどんなのだ？」

「勇者の鎧よ」

「……………なんだと？」

「えーと、漫画とかでよくある水着みたいな鎧なんだ」

エリザ嬢の口から飛び出したエキセントリックな言葉に思わず眉をひそめると、苦笑いを浮かべた立香嬢の補足が入る。

こんな女の子の装備をパクるような奴、か。

困った事に全く心当たりが無い。

「とりあえず、みんなが集まった時に聞いてみようとは思っただけ……………」

「そうだな。そういえば、ランスロットがこっちにつくって話はどうなったんだ？」

集落に戻ってきた時にダヴィンチちゃんから聞かされたランスロットの帰順に話をシフトさせると、立香嬢の顔が苦笑いから本来の笑みに変わった。

「うん、本人と話をしてきたけど本気みたい。虐殺や聖地への侵略に彼も思うところがあつたらしくてさ、側近のアグラヴェインが王を誑かしているんじゃないかって疑ってるみたいなの」

「こっちにつく事でそれを明らかにしたい、と。信用できると思うか？」

「私は信じようと思う。遊撃部隊で今までの聖抜の抹殺対象を匿っているらしいし。だから、ダヴィンチちゃん達には話して拘束は解いてあるんだ」

真っ直ぐにこちらの目を見て言葉を紡ぐ立香嬢。

こういった真摯な対応が英霊に好かれる理由なのかもしれないな。
「わかった。特異点攻略のメインはそっちだからな、判断はそっちの
任せる」

「ありがとう」

物凄く嬉しそうに立香嬢は笑う。

こっちはオマケみたいなものなんだから、礼なんていらなただけ
どなあ。

その後であれこれと話をした結果、犯人の目星が付かないことか
ら、盗難については皆が集まった先で話すという事に決定した。

でもって集合時刻に相成ったわけだが……ある男が現れた瞬間に
空気が凍った。

ヤバい、あれはマジにヤバい。

あれはもう視覚への暴力行為だ。

件の人物の名はランスロット。

つい先程こちらに帰順の意を示した獅子王の円卓の一人なのだが

「……ねえ、ランスロット」

「なあに、カルデアのマスターちゃん？」

「それはなんのつもりかな？」

「新たな性に目覚めた私の戦装束よ」

完全にハイライトが死んだ立香嬢の視線に、オネエキャラで返す湖
の騎士。

その姿は、今にも留め具が弾け飛びそうになっているパツツンパツ
ツンのビキニアーマーに、先っぽとか袋とか局部を隠しきれていない
ギッチギチのパンツという変態丸出しの格好だった。

無駄にキューティクルの掛かった胸毛とスネ毛、そしてギヤラン
ドウが強烈で、召喚されたロビンフッドとウチのアーサーは二人して
えずいていた。

あ、ベティヴィエールの続いて……先祖ちゃんも倒れた。

「しつかりしろ、セイバー！　セイバー!!」

「シロウ……私はもうダメです……」

アーチャーに抱きかかえられながら、光の粒子と共に薄くなつていく先祖ちゃん。

まあ、一番信頼していた腹心のあんな姿を見たら仕方がないか。

「いやあああああああつ?! 変態! 変態!! 変態!!! と
いうか、それって私の鎧じゃないのよー! 変態!!」

顔を両手で覆いながらもつそい叫びを上げるエリザ嬢。

「ありがとうね、お嬢ちゃん。貴女のファッションはね、新しい騎士装束を探していた私にとつて、まさに理想だったのよ」

「いや、おかしいでしょ!? 男の癖にそんな格好するのもそうだけど、それって私の礼装なのに呼んでも全然戻ってこないんだけど!!」

「それは私の宝具『騎士は徒手にて死せず』のお陰よん。触れた物を自身の宝具と化す効果で、この礼装はすでに私のモ・ノ♡」

ほうれ、と言わんばかりに胸を張るランスロット。

たしかにアーマーは黒く染まっているし、ところどころ赤い葉脈みtainな物まで走っている。

あと、気持ち悪いから強調すんな。

しかし『円卓最高の騎士』と言われたランスロットの面影は微塵も無いな。

いったい何があったというのだろうか?

「貴様のせいだな」

「オメーの所為以外の何物でもないだろお」

「うつぶつ……。貴方の所為に決まっているじゃないですか」

「ご主人様、罪は認めるべきかと」

ウチの面子にフルボッコにされてしまった。

新たな性とか言ってたし、去勢された勢いでオネエ系というかオカマに超進化したワケだね。

何故、だれも『B』ボタンを押さなかったのか……

突如として湧いたカオス状況だが、この騒ぎに最も怒り狂っている者がいた。

立香嬢の横に控えるマシユ嬢だ。

普段の冷静かつちよつと天然な表情は鳴りを潜め、顔は般若もかく

やと言わんばかりの憤怒の相。

さらには殺意の波動に目覚めたか、と錯覚するような殺気を全身から放っている。

エリザ嬢に装備を返すように迫る立香嬢と、それにクルクルシユピ
ンツ！ と無駄にキレツキレのステップで『NO』を突きつけるラン
スロット。

（当のエリザ嬢は、そんなバツチイのいらない!! と拒否りまくっ
ていたが）

そんな不毛な言い争いの中、マシユ嬢がのそりと前に出る。

「先輩……」

「え……どうしたの、マシユ?」

彼女の放つ剣呑な雰囲気、飲まれそうになる立香嬢。

「私、今なら本当の宝具が使えるような気がします」

「え……ええ!」

「だから、見ててくださいね」

唐突過ぎる言葉に戸惑う立香嬢を尻目に、マシユ嬢は一步を踏み出
す。

「今なら夢の影が言っていた事が分かります。憎悪と殺意！これが
あれば、あの宝具フエィバレット・ホールドは完成する!!」

乾いた土を蹴って駆け出すマシユ嬢。

その踏み込みの速度は、何時もの戦闘とは比較にならない。

「お待ちなさい、マシユちゃん！ 仲間内の事は暴力に訴えても不幸
な結果にしかならないわ!!」

「貴方がそれを言いますか、この穀潰し！」

ランスロットの説得ものの見事に空回り、彼女の怒りに油を注ぐだ
けに終わった。

「まあ、不倫がバレたからって仲間を斬り殺しまくった奴の言う台詞
じゃないですよね」

「アーサー、何気に辛らつだな」

「世界は違えど、ご先祖様の国の崩壊に一役買った男ですから」

ああ、そりゃ辛口にもなるわ。

「先輩にその薄汚い姿を見せた罪、死んで償ってください!!」

「問答無用で極刑なの!?!」

秒速判決で死刑が確定したランスロット氏の控訴を棄却したマシユ嬢は、そのまま盾を持つ手を大きく両側に広げる。

すると、彼女の武器兼防具であった盾が、中央から真つ二つに分かれたのだ。

「ゲエーーーーーッ!? マシユの盾が割れたあ!!」

何故か熟練の『ゆでリアクション』を返す立香嬢とダヴィンチちゃんの声を背に受けて、ランスロットの懐に飛び込むマシユ嬢。

「行きます!・これが私の本当の宝具——」

突然の事に対応が追いつかない変態を、彼女の殺意の籠った視線が射抜く。

そして——

「ジャンククラーーーーーッシユツツ!!」

「ウギャーーーーーッ!」

強烈な破碎音と共に、左右から放たれた盾の打撃に挟まれたランスロットの悲鳴が集落に木霊する。

というか、なんであの娘が『ジャンククラッシユ』知ってんだよ!?

「ジャンククラッシユッ! ジャンククラッシユツツ!! ジャンククラッシユツツ!!」

呆気にとられる俺達を尻目に、上へと吹き飛ばされるランスロットを追って次々とジャンククラッシユを叩き込んでいくマシユ嬢。

たしか、ジャンククラッシユの仕上げって……。

「ジャンククラッシユ・フィニーーーーッシユツツ!!」

「グワーーーーーッ!?!」

俺が脳内で記憶を思い起こすのに合わせるかのように、空中で死に体のランスロットを逆さに挟み込んだマシユ嬢は、建物の三階相当の高度と二人分の体重を上乗せして獲物を地面に叩きつけた。

激突と同時に舞い上がる土煙。

それが晴れた先には、上半身が地中に埋まり毛が濃い両足が力なくへたり込ませるランスロット。

「この相手を叩き潰す感触と血の匂い！ 久々にリングに帰ってきたという実感がしますよおおおおっ!!」

そして、天に向かって吼える明らかに形相がおかしいマシユ嬢の姿があった。

「ご主人様、あれってどう見ても憑かれてますよね」

玉藻の声に俺は是と答えを返す。

マシユ嬢の背後には、さつきまでは見えなかった影がクツキリと見えてるし。

うん、あれはどう見てもジャンクマンですわ。

「悪い、玉藻。魔除けの札を一枚くれ」

「分かりました」

玉藻から札を受け取った俺は、倉庫から取り出したお清め用の塩を手に盛って走り出す。

「くらえ、マツスルソルト!!」

「ギャアーーーーーッ!?」

その場のノリで塩をマシユ嬢に叩きつけると、彼女も背後のジャンクマンの影も顔を押さえて悲鳴を上げる。

「祓へ給ひ、清め給へ!!」

その隙に仰け反った額へ札を貼ると、力を失って崩れ落ちるマシユ嬢の体から、紫色の煙が噴き出した。

そして煙は空中で形を作り、見る見る内に両腕の先が巨大なスパイク付きの盾となった怪人へと変貌する。

彼こそは悪魔六騎士の一人、ジャンクマンである。

「この俺の悪魔憑きを解くとは……小僧、いつの間にそんな技を!」

「アンタ、俺の職業なんだと思ってんスカ」

「悪魔超人」

「神職だよー!」

……なんか知らんが、ジャンク先輩に物凄く驚かれた。

『お前のような血に飢えた獣が神に仕えるなどありえん!?』とか、いったい俺はどういうイメージを持たれているんだ？

「で、なんでマシユ嬢に取り憑いてたんスカ?」

「うむ、俺が今回与えられた役割はギアラハッドでな。最初は例の聖地で仕事をしていたのだが、ある日突然この娘の中にいたのだ」

「マシユに力を貸したのがギアラハッドだったから、その関係でそう なっちゃったのかな？」

「む、あの自我が消えた寄生体のような奴は、本物のギアラハッドだったのか。ならば、俺も名前で括くくられたのかも知れんな」

立香嬢の言葉に、ジャンク先輩は持論を展開しながら納得したように頷いた。

「で、偶然取り憑いたのをいい事に、マシユ嬢を残虐ファイトに洗脳していったと」

「そうだ。このまま上手く心を悪に染めれば、悪魔超人初の女性戦士が生まれる——って、何故俺をリバースフルネルソンに捕らえるのだ？」

「何故って、そりゃあ倒す為ですが」

ワリと本気で焦った声を出すジャンク先輩の腕を引き絞りながら、俺は立香嬢とダヴィンチちゃんに視線を投げる。

「保護者の御二方、今回の件について判決をどうぞ」

「有罪ギルティ！」

分かりきっていた答えと共に、俺はジャンク先輩を振り回しながら回転を始める。

「ぬおおおおおつ!! ちよつと待て! これっていいのか!？」

遠心力で両肩の関節がどんどん絞られていく苦痛の中、ジャンク先輩が抗議の声を上げる。

「すみませんね、今日中に六騎士あと三人と獅子王を倒さないといか んので。恨むんなら、リミットを設定した將軍様を恨んでください」
「塩対応だな、おい!! だが、ダブルアームスピソルトならば、こちら もよく知っている! 致命打にはならんぞ!!」

たしかにジャンク先輩なら背中から棘を生やす事で、マットへの叩きつけを防げるだろう。

しかし、こつちだっつていつまでも九所封じをそのまま使っているわけではない。

ジャンク先輩の体が水平になるほどの遠心力を掛けると、民家を足がかりにして大きくジャンプする。

そして、空中でさらに両肩を絞り上げると同時に肘を後頭部に当てて相手の頭を固定。

あとは遠心力と落下速度、そして二人分の体重の全てを集中させて相手の頭を地面に叩きつけるッ！

これが――

「俺式九所封じその2！ ダブルアームスカルクラッシュャー！！」

「グワーーーーーッ!?」

地響きと共に立ち昇る土煙。

それが晴れた先には、曲がるべきでは無い方向に両肩が曲がり、地面に頭を突き刺したジャンク先輩の姿がある。

それも一拍子間を置いて、死亡防止の光と共に消えたワケだが。

一呼吸置いて周りを見渡すと、何故か静まり返ってしまっている。

ウチの連中はいつもの事と気にしていないが、カルデア組は応援で現れた新規メンバーが事情について行けてないようだ。

ふむ、結託の為の足しになるかもしれないし、ここは一つ盛り上げてみるか。

「敵将、ギャラハッド！ 討ち取つたりー！ー！！」

「二二いや、それ違う!!」

『天地をくらう2』を参考に上げた勝ち鬨に返ってきたのは、追隨の声ではなく全員のツツコミだった。

解せぬ。

◇

決起の前の一発芸的な小事も終わり、集落を発った俺達は再び聖都の門の前にいた。

こちらの戦力は俺、ヴァーリ、美猴、アーサー、玉藻。

衛宮君は前回のモードレッド戦で無理をしすぎた為、美遊嬢と共に集落で留守番である。

次にカルデア組は立香嬢とマッシュ嬢にダヴィンチちゃん。

サーヴァント勢としてご先祖ちゃん、冬木のアーチャー、ロビンフット、エリザ嬢、メディア女史。

山岳地帯組は呪腕さん、百貌女史、静謐嬢、アーラッシュさん、シエーファー少佐。

ランボーは集落の護衛を勤めてくれている。

あとは三蔵ちゃんと俵さん。

相変わらずオネエだが、格好だけはまともに戻ったランスロットに率いられた反乱軍である。

これだけのメンツが揃えば、聖都の攻略も十二分に可能だろう。

だが、それは敵が獅子王と円卓だけの場合だ。

アトラス院でホームズが残した『異邦人がこちら側につくとは限らない』という警告。

それが頭の隅から離れないのだ。

こちらにきているのがどんな奴が分からないが、Sランクから上の場合は俺かヴァーリしか相手が出来ない。

俺がアッシュラ先輩たちに手を取られる事を思えば、実質的にヴァーリしか対抗手段が無いのだ。

正直言つてこれはキツイ。

最悪、先輩たちを放つておいて戻る気ではいるが、將軍様が噛んでいることを思えば容易く逃れられるとも思えない。

美猴やアーサーでも対処可能なAランクならばいいのだが……。

「総員に告ぐー！ これより我々はこれより聖都に突入する！ 目標は陛下の保護とアグラヴェインの討伐だ!! 陛下を裏で操る元凶を討ち、ブリテンを元の誇り高き姿に戻すのだ!!」

ランスロットの真面目な演説に、巡る思考から意識を戻す。

ここまで来たら、四の五の考えても仕方ない。

鬼が出るか蛇が出るか、行ってみるしかないのだ。

「総員、突撃!!」

ランスロットの号令と共に、鬨の声を上げて馬を走らせる反乱軍。俺達もその後ろについて門へと向かう。

しかし前線が城門に差し掛かった瞬間、最前列の騎馬兵数人の首が落ちたのだ。

「なんだ!？」

「一番前の奴の首が急に——!？」

「ジョン!? ジョオオオオオオン!!」

手口の分からない襲撃に浮き足立つ反乱軍、だが俺は首が落ちる瞬間にたしかに聞いた。

戦場の中で微かに流れたハーブの音、あれはフェイルノートが奏でる死の旋律だった。

「慎!」

「お前も気付いたか、美猴」

「どうなってやがるんできい。トリスタンの奴はくたばったはずだろ?」

「わからん。だが、相手はサーヴァントだ。もしかしたら、獅子王には円卓の騎士を何度も召喚できる能力があるのかもな」

美猴と言葉を交わしながらも、俺は気配を研ぎ澄まして音の刃の出口を探る。

喧騒の中を紛れるように流れた豎琴7の音、それを捉えると同時に俺は居合い拳の要領で衝撃波を放った。

空を裂いて飛ぶ衝撃波の行き先は城門の上。

そこには影法師のように全身が黒く染まった、トリスタンの影というべき者が豎琴を爪弾いている。

衝撃波は放たれたばかりの音の刃を粉碎したものの、影の右肩を掠めるに留まった。

「あれはシャドウサーヴァント!？」

立香嬢の驚きの声に合わせるように、城門の上にズラリと姿を現すトリスタンの影法師。

その数は20は下らないだろう。

「考えたね。宝具も使えず戦闘以外の思考を持たないシャドウサーヴァントは、召喚失敗と言ってもいいほどの英霊の劣化品だ。だが、それ故に召喚時における負担は少ない。獅子王に円卓の騎士を呼び

出す能力があるのなら、短期間での戦力増強としては打って付けだ！」

「ダヴィンチちゃんが考察している間に、一斉に豎琴に指を掛ける影法師たち。」

しかし、音の刃が紡がれるよりも疾く、放たれた二つの矢が影法師達を数名一度に吹き飛ばした。

対物ライフルをも超える矢を放ったのは、朱塗りの弓を構えたアーラシユさん、そして漆黒の弓を手にしたアーチャーだ。

「不完全で再登場したところ悪いが、味方を鴨撃ちにさせるわけにはいかないな！」

「マスター、ランスロット！ 上のシャドウサーヴァントは私たちが引き受ける、君達は城壁へ急げ！」

こちらへ激を飛ばしながらも次々に矢を放つ二人のアーチャー。「おちろおっ！」

アーラシユさんの放つ矢は強烈な衝撃波を伴って飛翔し、音の刃を打ち消しながら数人単位で影法師たちを吹き飛ばす。

「赤原^{せきげん}を行け、緋の獵犬！」

対するアーチャーの赤い光弾は意思を持つかのように敵を追尾し、影法師達の豎琴や手、そして急所へと食らいつく。

数の上では10対1にも拘らず五分以上に持つていくのは流石というほか無い。

しかし、それでもなお撃ち漏らしというのは存在する。

二人の魔弓から逃れた影法師の一人が、騎馬隊へ向けて豎琴を奏でようとしたその時。

下から猛烈な勢いで伸びてきた棒の先端が、奴の頭を粉碎した。

「いい腕だが、多勢に無勢が過ぎるだろお。ここはオレツチも残る事にするぜい」

そう言いながら、城壁の上まで伸びた如意棒を力任せに振り切る美猴。

十メートル以上はある鉄棍を振り回すその豪腕はまさしく、孫悟空の孫だ。

「悟空が残るなら私も残るわ!」

「オレツチはジジイじゃねえつてのツ!」

「やれやれ、三蔵が残るのであれば仕方あるまい。慎よ、こ奴らの面倒は俺が見る。お主は先に進むがいい!」

美猴に向かってくる肅清騎士を三蔵ちゃんはかつてのお供が使っていた武器で蹴散らし、俵さんは二人を援護しながらも影法師に向けて矢を放つ。

残留組の活躍によって城壁からの狙撃はほとんどが未然に防がれ、放たれた少数もランスロットの指揮で前線に入った重装歩兵の盾によって弾かれていく。

迎撃に現れた肅清騎士達も、ランスロットの部隊が食い止めてくれた。

そうして俺達が城門に辿り着いたのだが、そこにいた者に俺は我知らず舌打ちを漏らしてしまった。

古代日本の高位の人間が纏う白い着物に、動物の皮と角で作られた仮面。

仮面の中央には蒼く光る勾玉まがたまが備えられ、口元には黒い髭が生えそろろう。

「黄龍こうりゆうの力、見たいと申すか……」

こちらに気付いたその男は、小さな呟きと共に手を天にかぎす。

すると、その上を赤・黄・緑・青の四つの宝玉が踊り、何も無かった空間に一振りの青銅の剣が現れた。

鍔元に四神の力を宿した宝玉を収めた一刀、十握とつかの剣を手にした瞬間、濃密な死の匂いと共に強烈なプレッシャーが戦場を吹きぬけた。

それだけで生者は力を失い、傷を負った者は次々と命を落としていく。

「なんなんだ、あの男は。サーヴァントとは違うけど、感じる力は桁違いだ……ッ!」

「奴の名は黄龍。遙か昔に中国から伝わり、日本を守護してきた四神の長。同時に現世とこよと常世とこよを繋ぐ地獄門の常世側の門番だ」

「冥府の護り手……。しかし、日本にそんな逸話いっわがあるなんて聞いた

事がありません」

「マシユ嬢が半ば悲鳴のような声で反論してくるが、そんな事は当然だ。」

「奴は創作、格闘ゲーム『月華の剣士2』のラスボスなのだから。」

「しかし参った。」

「予測していたとはいえ『S』ランク高位、『狂』に手が届く程の実力を持つ黄龍が来ていたとは。」

「知らなくて当然。この情報は日本の呪術界の中でも、四神を奉じる守護者にしか伝わっていないからな」

「そう言えば、姫島君って神主だったっけ。君の家もその四神に関わっているの?」

「まあな。ともかく、奴の相手は俺が——」

「そこまで言葉を紡いだ瞬間、横合いから感じた膨大な氣に俺は右腕を振り抜いた。」

「不意打ちで飛んできた氣弾は、咄嗟に纏わせた『合氣鏡殺』によってあらぬ方向に飛んでいく。」

「しかし、その威力の大きさ押された俺は二、三度たたらを踏んでしまった。」

「弾かれた氣弾は、地面に着弾すると同時に光のドームを形成し、中にある物を全て原子に分解しながら天を衝く光の柱へと変化する。」

「きゃああああああああっ!」

「マスター!」

「立香ちゃん!!」

「先輩、私の後ろにツ!!」

「台風のような爆風が吹き抜け、撒き散らしたエネルギーがビリビリと震わせる中、俺は氣弾が飛んできた先を睨みつけていた。」

「挨拶代わりの軽い一撃だったのだが、少々力を込めすぎたかな?」

「それともベジータを倒したのはまぐれで、貴様の実力は私を失望させる程度でしかない、という事か?」

「爆発の余波が止んだその先には、爬虫類と昆虫、そして人を混ぜ合わせたような異形の男が宙に浮きながら腕を組んでいる。」

「……ッ、セル！」

「いかにも。さて、姫島慎。偉大なるリベンジマッチのリハビリとして、この私と闘ってもらおうか」

言葉と共にセルが白い炎のような氣勢を纏うと、それだけで世界が揺れた。

現世や『無限の闘争』ならともかく、この特異点では奴の力は世界を壊しかねないという事か!?

「いいだろう。ヴァーリ、お前は黄龍を頼む」

「断る」

意外な言葉に、俺はセルへと踏み出そうとした脚を止めてしまった。

「……今、なんつった？」

「断ると言った。俺があああの化け物と闘う、剣士はお前がやれ」

こちらを射抜くギラギラした蒼い瞳を見ながら、俺は思考をめぐらせる。

ヴァーリは空気の読めないアホだが、こういった他者の身が掛かっている場合で無謀な対戦はしない。

あのセルの力を目の当たりにしてもなお闘うと言った以上、勝算があつての言葉だろう。

あの半年の修行の間、俺が龍天昇を身につけたように、奴もまた奥の手を手に入れているのかもしれない。

「……わかった。セルの事は頼むぞ」

「ああ、任せろ。お前がベジータという男に勝った以上、俺もあの化け物に勝たなくてはな」

そう口にした後、いきなり覇龍を纏ったヴァーリはセルに向かって飛んでいった。

さて、ヴァーリを信じると決めた以上、俺もやるべき事をやらねえとな。

そう腹を決めて一歩踏み出した瞬間、視界全体がブレるような感覚と共に俺は先程とは違う場所に転移していた。

ガラス張りのボックスのような部屋の中に設置されたリング、その

赤コーナー側に俺はいる。

そして、その反対側には――

「カーカカカカカッ！ 待っていたぜ、慎!!」

「グフオフオフオフオッ！ 俺達の先約を蹴って他の奴に浮気とはヒ

デエじゃねーか」

やはりというべきか、はぐれ悪魔コンビが待ち構えていた。

「……今は闘っている暇は無い、なんて言っても無駄なんでしょうね」

「当然だ。俺達はお前の実力を測るのが使命だからな」

「テメエのお仲間がどうなろうと、知ったこっちゃねーのさ」

挑発のつもりだろうか、前回より好戦的な二人に気を配りながら、俺はボックスのガラス面に目を走らせる。

かなり厚そうな代物だが、その気になったら碎けないことはないか？

「一つ忠告しておいてやるが、俺達を放っておいてここから出ようなんて考えない事だ」

「ここは『試しの間』と呼ばれる、將軍様の力で作られた特殊な空間だからな」

クソツ、やっぱり將軍様由来の場所かよ。

そうでなかったら、窓をブチ破って飛び降りるつもりだったのに、内心で舌打ちをしながらも、俺は調息を行って頭に上りかけていた血を下げた。

しかし、状況が思った以上に拙い。

俺とヴァーリ以外で黄龍の相手を出来るのは、美猴とアーサーくらい。

それも、二人掛かりでようやく五分と言ったレベルだ。

だが、今は片割れの美猴はシャドウサーヴァントの狙撃部隊の対応で動けない。

ご先祖ちゃんを初めとしたサーヴァントたちと組めば、何とかなるかもしれない。

しかし、それでも万が一という事は十分にあり得る。

そうならない為に、いち早くこの二人を倒さなければ……!

「カカカカカッ！ ようやくその気になったか」

こちらが構えを取ると、アシユラ先輩たちもコーナーポストに預けていた背中を引き離す。

「テメエの実力、見せてもらうぜ。ゴングを鳴らせえ!!」

甲高い金属音が響き渡ると同時に、俺達は互いの相手に向かって地を蹴った。

◇

「はあっ!!」

気合と共に振り下ろされた不可視の刃は、黄龍が構えた青銅の剣に絡め取られる。

如何にブリテンの赤き竜と称された騎士王でも、左手一本では眼前の魔人を制すには力が不足に過ぎた。

精妙な剣捌きで力をあらぬ方向に逸^そらされ、大きく体勢を崩すアルトリア。

次の瞬間、腹部を襲った大砲の直撃を受けたかのような衝撃に、小柄な身体はくの字に折れ曲がりながら吹き飛んだ。

打ち下ろしの面打ちを剣を滑らせるように捌き、腹部に突き蹴りを叩き込む。

コンマ一秒に満たない間にそれだけのことをやってのけた男は、死角から放たれる矢を目を向けることもせず服の袖で払い落とす。

そして彼が矢が飛んできた方向に剣を縦にして弓を引き絞るような動作をすると、なんと十握の剣は魔力の矢を番えた巨大な弓矢になっただのだ。

「ウソだろッ!?!」

半ば悲鳴の悪態を突きながら、自身の姿を隠す宝具『ノーフェイス・メイキング顔のない王』で隠れていたロビンフッドは地面を蹴る。

「貫けいっ!」

彼がその場を離れて刹那の間を置いて放たれた矢は、進路上の巨大な岩を粉碎して虚空へと消えた。

「たくつ、どういう反射神経してんだよ、オタク!!」

姿を見せ、毒突きながらもイチイの木の加護を受けた矢を連射するロビン。

だがしかし、黄龍の放つ蒼光は貌の無い英雄を上回る射撃速度を見せた。

「マジかよ、クソツたれ!？」

自身が放った矢が全て男の物に飲み込まれるのを目の当たりにしたロビンは、降り注ぐ蒼光の雨に驚愕の声を残して宙を舞う。

「このおおおおおっ!!」

吹き飛ばされたロビンを援護すべく、ジャージ姿のエリザベートは手にした剣を力任せに振るう。

しかし、龍種のポテンシャルを頼りにしたチャンバラが黄龍に通じるはずは無く、その一撃は剛力によって弾かれた。

先程アルトリアの剣をいなした巧みさとは打って変わった剛の剣。

乾燥した地面を砕くほどの踏み込みで放たれた一刀が、無防備になったエリザベートの頭部へと降り注ぐ。

しかし、竜の娘が左右に両断される寸前、刃鳴と共に青銅の刃は聖剣によって防がれた。

ギリギリのタイミングで身体を滑り込ませたアーサーは、剛力に物を言わせて押し込もうとする刃を凌いで起死回生の胴薙ぎを放つ。

「出でよ、玄武!!」

しかし聖剣の刃が男の身体に食らいつくよりも早く、言霊と共に地面に突き立てられた剣によって吹き上がった水竜巻によって、アーサーとエリザベートは大きく吹き飛ばされてしまう。

「みんな……」

「先輩！ 盾の範囲から出では危険です！」

マシユの構えた盾の後ろで、マスターである立香は荒い息と共に一面にまで令呪が減った右手を握り締める。

礼装を通した魔術は全て使用しており、自身の魔力回路が充填されるまで使う事ができない。

アルトリアを上回るほどの卓越した剣術の腕に、言霊一つで放たれ

る大魔術。

サーヴァント4人がかりでここまで押し込まれるとは、強さで言えば第五特異点で矛を交えた聖杯によって強化されたクー・フリーンをも上回るかもしれない。

「拙いですね。あの剣術の腕に加えて、あの方は四神の力を十全に使用できるようです」

「セイバーやエリザベートの対魔力が機能していないのは、その四神というモノの力の所為なの？」

「あれは高位の神獣から直接力を借りてるものです。人間が設定した対魔力なんて通用しませんよ」

メディアとダヴィンチ、そして玉藻は、四人のサポートに徹しながら何とか打開策を捻り出そうとしている。

しかし、それもあまり功を奏していない状況だ。

せめてアルトリアの聖剣が使えれば戦況を変える一手になることができるのだが、中盤にエリザベートを庇った際に右腕を半ばまで斬り付けられた為、傷を回復させなければ使用できない。

メディアか玉藻ならば、治療魔術による治療も可能だろう。

しかし今の状況で前衛の要であるアルトリアが抜ければ、残りの戦力では奴を留める事は出来ない。

最後の令呪を使えば即座の快復も可能なのだが、後に控えた獅子王戦の為に本人からも使用は断られている。

魔術師として知識も腕も未熟な立香にとっては、八方塞がりな状況だ。

しかし彼女は諦めない。

生来の諦めの悪さに加えて、ここまでの特異点で鍛えられた精神的タフネスさが膝を屈するのを良しとしないのだ。

次々と推移する状況を猛禽の如き目で睨みつけながら、人類最後のマスターは自身にも届く一手を探し続ける。

「拙いですね……」

幾度目かの刃を交えながら、アーサーは状況の悪さに歯噛みする。最初のプレッシャーを感じた時から、『無限の闘争』でも上位クラス

の闘士である事は察知していた。

今の自分よりも数段上の腕前を持つ事もだ。

それでも英霊達と連携すれば五分以上に持つていけると思っていたのだが、回復手段が尽きた時にアルトリアの右手が潰されたのが痛すぎる。

彼女が健在ならば聖剣や自身との連携など、取るべき手段はまだまだあったのだが……。

「ぬんッ！」

「ぐうっ!？」

数メートルもの間合いを一瞬で無にしての打ち込みを辛うじて受け流し、間髪入れずに襲い掛かる飛び上がったの斬り上げを凌ぎながら、アーサーは冷徹に相手の動きを見極めようとする。

序盤に使っていた技巧よりのスタイルとは違い、今は一撃に重きを置いた剛の型だ。

一刀一刀がフルスイングに近い為、連撃の数は減っているし技の終わりの隙も増加している。

そこを突く事ができれば……

自身が手合わせした者の中で最も技巧が優れた侍。

佐々木小次郎が行っていた受け流す防御を真似ながら、アーサーは辛抱強く黄龍の隙を探し続ける。

10手、20手、50手。

時間にすれば1分掛かったかどうかだが、アーサー本人にしてみれば永遠にも感じられた苦難の刻だった。

守勢に回って百手を刻まんとしたその時、漸く待ち望んだ瞬間が訪れたのだ。

下がるのではなく、前に出ながら受け流す。

小次郎戦で辛酸を舐めさせられた防御方法が成功し、アーサーは黄龍の懐へと潜り込む事ができた。

耐えに耐えて掴んだこのチャンス、逃せば勝ちはないだろう。

鋭い呼気と共に、コールブランドの刀身に真名開放の極光が収束される。

これより放つは、未完でありながらも防御も回避も赦さない絶技。
「はあああああああつ!!」

裂帛の気合と共に放たれた一撃、そこに込められた超絶の魔技は物理法則を捻じ曲げ、振り下ろされる剣筋を逆走するもう一つの聖剣の刃を生み出す。

「あれは……アサシンの燕返し!?!」

自身が失った選定の剣の波動を感じ取ったアルトリアは、ランスロットのように聖剣の力を収束させた上にかつての強敵の絶技を再現させた青年の技量に舌を巻く。

袈裟斬りと斬り上げ、生み出された二筋の剣閃は相手を噛み千切りんとする竜の顎を思わせた。

だが――

「出でよ、白虎!!」

光の軌跡を残して迫る赤竜の一撃は、それより疾く突き出された黄龍の手によって不発に終わった。

魔人は突き出した掌からの念力でアーサーを地面に叩きつけると、続け様に生み出した不可視の爪牙を彼に叩き込む。

「ぐあああああつ!?!」

無数のカマイタチによって切り刻まれ、血煙を上げながら後方に吹き飛ばされるアーサー。

「アーサー!!」

戦線に復帰しようとしていたアルトリアは、咄嗟に彼を受け止めて受けた手傷を確認する。

気を失っているものの、受けた傷には致命に至る物は見られない。その事にアルトリアは安堵の息を漏らす、その一瞬が隙となった。

戦場から心が離れたその刹那を、常世の魔人は見逃しはしない。

「出でよ、朱雀!!」

音も無く宙を舞った黄龍の突き出した掌から放たれる紅蓮の炎。

「しまったッ!?!」

南方を守護する焔の神鳥の権能は、眼前にあるもの全てを焼き払い

ながら二人に迫る。

そして炎がアルトリア達を飲み込まんとしたその瞬間、爆音と共に吹き上がった蒼の火柱がそれを阻んだ。

朱の炎を巻き上げながら天を突く蒼き焰、それが納まった後には一つの影が立っていた。

黒のローブを纏った影。

その者を見た者は、その全てがこう呼ぶだろう。

髑髏の剣士、と。

「この世ならざる程の死の気配……何者か？」

「幽谷の淵より、常世の者があるべき場所に連れに参上した」
常世の魔人の問いに、髑髏の騎士の眼窩に紅い光が光る。

「——山の翁、ハサン・サツバーハである」

接続話 『駒王神社業務日誌』（二学期）

社務所の机の上。

普段より物が散乱しているそこに、黒い表紙の帳面が置いてある。題名には白のテプラーに黒字で『駒王神社業務日誌』の文字。

手荒に扱われたのか、以前に比べて革の表紙が少し傷んでいるようだ。

○月△日（晴れ）

『無限の闘争』での修行を終えて、体感時間一年ぶりに現世に帰ってきた。

波乱と狂気に満ちた『精神と時の部屋』だったが、参加者各々おのこのが実りある成果を出せた事はよかつたと思う。

俺としても長年の目標だった龍天昇の会得が叶ったし、ネットであつた広域殲滅技も手に入れることが出来た。

ソツチの方は色々とヤヴァイ技なので、できる事なら永久封印しておきたい代物であるのだが。

生命力操作に界王拳を混ぜて、超サイヤ人2に並ぶ戦闘力を得た事も大きいだろう。

もう地球上では敵無しじゃね？ などと調子に乗っていた時期もあったが、悪魔六騎士との戦いの後に待ち構えていた將軍様との真剣勝負で、そんな驕りは『神威の断頭台』かむいによって首の骨ごとヘシ折られました。

というか、將軍様が完全に当身投げを自分のモノにしてる件について。

上段で取られれば大雪山落とし、下段だとノーザンライト・スープレックス型の変形兜割り、中段で取られると待っているのは地獄の断頭台である。

もう隙が無さ過ぎて、打撃を放つ気にもなりません。

こつちが強くなると、それに比例して將軍様もパワーアップしているような気がしてならない。

というわけで、当面の目標は『鬼巫女に勝つ』に変更しておこう。
うん、ブローリーじゃないのかって？

試しに闘ってみたら、新形態に目覚めたヴァーリごと『とっておき
だあ』でデデーンされましたが、なにか？

まあ、あれだ。

ブローリーのムキムキ形態って超2らしいし、この結果はノーマルと
伝説の差ということなんだろう、たぶん。

……忌まわしい記憶はワキに置いておくとして。

現実世界に戻ってきて驚いた事だが、なんと背が10センチも伸び
ていた。

我が事ながら忘れていたが、今生ではまだ十五歳。

バリバリの成長期である。

そりゃあ、一年経てば伸びもするわ。

ちなみに双子の美朱は欠片も伸びていませんでした。

『合法ロリか』という不用意な一言で、ガチ泣きした美朱にイツセー
先輩が螺旋丸百連発を食らった事は忘れたと思う。

それと玉藻との婚約をウチの家族に話したのだが、驚くのはいいと
して『ギャグ』や『偽者』扱いは如何いなものか。

まあ、産まれてこれまで女ツ気なんて一ミクロンもなかった奴が、
いきなり婚約話をブチ上げればそうなくても仕方ないかも知れんが、
色々ヒドすぎるだろう。

入籍するのは大学を卒業してからと決めているので、家族のみんな
も最後は笑顔で受け入れてくれたのはよかったと思う。

こういう場合は往々にして収入がネックになるのだが、宮司のほか
に副業も軌道に乗っているのでその辺は問題ない。

過酷な修行をこなしてきたし個人的にもいろいろあったので、後数
日ほどはゆっくりと息を抜きたいところだが、生憎とそうも行かな
い。

方々への玉藻との婚約の報告に衛宮君達の戸籍作成、あとはバアル
様から神救いの依頼と、予定はてんこ盛りである。

アナト様から連絡があつたことを泣きながら報告してきたロス

ヴァイセ女史には、特別ボーナスを出そうと思う。

それと冥界と天界については、双方共に動きは無かつたらしい。

まあ、現実世界では一日しか経っていないのだから、そうポンポン事態が急変されては堪ったものではないが。

取りあえず明日は姫島本家と高天原に報告に行く予定だから、正装を用意しとかないと。

ウチに礼服ってあったっけ？

○月◇●日（曇り）

婚約報告終了！

報告するだけで4日かかるとか、どうしてこうなった!!

爺ちゃんところはまだいいよ。

孫が嫁を連れてきたんだから、一日くらい泊まっていけくらいは言うだろうさ。

けど、天照様。

いくら嬉しいからって、三日三晩大宴会するのは勘弁してください

！

天岩戸を開けた時と同等とか、どう考えてもやりすぎですがな。

まあ、慶事だしこれから親戚になるんだからと、その辺の空気を讀んだけど。

それと親戚関係は結んだが、こちらの立場は変わらず中立であるというのは確約してもらった。

でない、他の所から^{こそ}挙って嫁が送り込まれるなんて妙な事になるし。

玉藻だけでも持て余し気味なのに、一夫多妻とか絶対に無理です。

それとバアル様の依頼が一週間後で本当に助かった。

あの方相手に『個人的事情で遅れました』なんて絶対に言えん。

スケジュールを決めてくれたロスヴァイセさんはグツジョブである。

あと爺ちゃんのところに行つたついでに、衛宮君達の戸籍の手続きをやってきた。

衛宮君も美遊嬢も元々日本人だったので、カバーストーリーは『爺ちゃんの知り合いの子で、外国で両親に不幸があつた為に引き取つた』という事で口裏を合わせた。

手続きは滞りなく進み、一月ほどで戸籍は完成するらしい。

それまではウチの社宅に住んでもらつて、神社の手伝いなんかを頼む事になった。

学校に関しては戸籍と住民票が出来てからで、職に就くまではウチに住み込みで働くという事になっている。

美遊嬢たちが学校に行く頃には、ゴタゴタが片付いているといいなあ。

○月◇○日（小雨）

さて、今日は一番の上客にして怒らせてはいけないお客様N01である、バアル様のお仕事をこなしてきた。

今回依頼された神救いの法の被験者は、なんとフェニックス卿である。

フェニックスとは悪魔のほかに、火の鳥で有名な聖獣としてのフェニックスがいる。

彼らは同一の存在であり、その起源はエジプト神話で太陽神ラーの心臓から生まれ出た、太陽の象徴たる霊鳥ベンヌへと行き着くと言われている。

つまるところ、フェニックスが悪魔に堕ちたのはソロモン72柱の一つである、グリモワールによって記された所為だ。

より正確にいうなら、悪魔としての不死鳥はフェニックスではなくフェネクスなのだが、そのへんはいいだろう。

そんなフェニックス卿だが、悪魔になった当初は半ば本能でアモンをアメン様だと見抜いて、彼の派閥に居たらしい。

ところが、前大戦でアモンをムト様が回収してしまったため、主たる者を失ったフェニックス卿は途方にくれる事になった。

それに手を差し伸べたのがバアル様。

この方はムト様がアモンを拉致つたことも知っていて、『いつか神

に返り咲いて聖書の勢力を打ち滅ぼす。その時にはラーの元に返してやるから、それまでは部下になれ』と言葉巧みに勧誘。

ちやつかりフェニックス家を大王派に取り込んだんだそうなの。

そんな理由から、長年にわたる約定を果たす為に俺が用意されたわけだ。

さてフェニックス卿への施術だが、拍子抜けするほどに問題なく成功した。

というか、アメン様やバアル様はおろか、アスタルテ様よりも簡単でした。

まあ、相手は霊鳥ですし。

神様に比べれば全然軽いという事なのだろう。

ちなみに、フェニックス卿改めベンヌ氏は、貴族然としたおっさんから古代エジプトの装束を纏った褐色のイケメンに早変わりしてしまった。

あと、付き添いで来ていたレイヴエル嬢とライザー氏は、金髪が明るくなつたくらいで後は変わってなかった。

自己申告によると、純粋な悪魔ではなく霊鳥との混血になったので、聖属性への耐性が付いたり聖なる炎が出せるようになったらしい。

体の方には特に問題は無いそうなので、こちらとしては一安心である。

○月△■日（暴風）

最悪だ。

冥界の奴等、やりやがった。

今、世界各国で異形化した転生悪魔が暴れてる。

駒の除去を待っていた奴等は浄化結界で無事らしいが、それでも相当数いるのは間違いない。

各国の神話勢力達も総出で対処に当たっているが、どれだけの被害になる事か……。

兎も角、俺達もこれから出なければならぬ。

日本や駒王町の事は番所とクールの兄貴達に任せて、俺とヴァーリは海外への助っ人だ。

冥界の動きに天界がどう反応するのかが気になるが、まずはこの事態を収束させないと。

○月◇●日（雨）

正直、胸糞が悪い。

昨日から続いていた転生悪魔の暴走事件は、なんとかカタがついた。鎮圧の過程で命を落とした彼等の遺体を検死した天狗様曰く、冥界の奴等は地上に残っていた転生悪魔たちの『悪魔の駒』に過剰な魔力をつぎ込んで、意図的に暴走させたそうなのだ。

本来数日はかかるはずの異形化が数十分で完了したのは、これが原因らしい。

しかも、急激な変化は肉体に多大なダメージを刻みつけ、適切な処置を施さなければ数日しか生きられなかったというのだから、堪ったものじゃない。

事件は警察など（表）の人間では対処が出来ず、社会の裏に潜んでいた術士や妖怪、土着の神々が秘匿などそつちのけで対処に当たる事となった。

俺達も全てのメンバーを使って駆けずり回ったのだが、やはり人手が足りずに転生悪魔、人間双方に多くの犠牲者が出てしまった。

その影響は地元である駒王町も例に漏れず、真羅副会長や匙先輩を除いた生徒会の面々が巻き込まれていた。

会長に付いて行くと決めた2人は、幸いにも異形化を防止する浄化結界を施したシトリー家にいた為に無事だった。

しかし、先の『転生悪魔退去法案』の絡みでシトリー家と距離を置いていた面々は、影響をモロに受けてしまったのだ。

番所のみんなが尽力してくれたお陰でなんとか死者は出なかったものの、由良先輩のお父上が意識不明の重体。

その他にも、巡のお父上が右腕を欠損する重傷を負うなど、家族を

初めとした多くの人に多大な被害を出してしまった。

『悪魔の駒』の特性を知った後、最悪の可能性を考慮してグレモリーとシトリー家には対異形化用の結界を用意していたのだが、例の法案の影響がこういう形で現れるとは予測できなかった。

今回の件を受けて、神話勢力と各国政府は転生悪魔の拘束を決定。浄化結界で難を逃れた者や今回の事件で命を奪われずに拘束された者。

また、極少数だが異形化しても理性を失わなかった者もいたが、一切の区別無くその全てが対象となる。

彼らは某国に在る廃棄された地下シエルターを改造した特別な施設で、雪女や氷精などの手を借りたワールドスリープに入る事になる。

そして人間に戻る順番が巡ってくるまで、そのまま待ち続ける事になるのだと言う。

それと、今回の件を受けて地上に出ているグレモリー・シトリー家は、ミリキヤス経由で無限の闘争の中に避難してもらおうことにした。はつきり言って、現状でリアス姉達がいるのはデメリットにしかない。

悪魔達が攻めてきた時、相手側から彼女たちの素性を口にされたら、吊るし上げに会うこと間違いなしだ。

こつちから移住を誘っておいて申し訳ないのだが、事態が事態なので我慢してもらおう。

あと、処置が終った後に爺ちゃんから聞いた話だが、今回の件で日本政府は相当手痛いダメージを受けたらしい。

こういった事態を危惧して法案を強行に押し通したのに、まさか猶予期間の内にそれが現実になるとは夢にも思っていなかったそうだ。

さらにこうも大つぴらに異形に暴れられては、裏の事情を秘匿するのは不可能と言っている。

混乱を抑えるために段階的に行うはずだった神魔・妖怪に関する情報公開も、その予定は大きく狂う事になるだろう。

神社庁が進めていた陰陽寮の復活や警視庁が密かに結成しようと

していた霊安課など、やるべき事が山詰みなんだとか。

まあ、その辺の事は五大宗家が音頭を取って仕切るそうなので、俺はノータッチで行こうと思う。

冥界がアクションを起こした以上、天界も遠くないうちに動きを見せるはずだ。

奴等の行動如何いかんによつては、事は大きく動く事になるからな

○月◇●日（雨）

……やられた。

今日、天界を逃亡してきたガブリエル女史から密告があつた。

聖書の神は世界の警察を自認する某大国の大統領に啓示を与えたらしい。

その内容は、『地上に悪魔が蔓延はびころうとしている。彼等が悪しき行いによつて人を墮落させる前に、裁きの火によつて彼等を浄化するのだ。さすれば大破壊の後、汝が治める地は新たな樂園となり、汝は天へと招かれるであろう』というもの。

要するに自国以外を核で焼き払え、ということだ。

本来であれば、一国の代表である大統領は当然『裏』の事情に通じていなければならぬ。

しかし今の大統領は数日前に当選した企業家上がりの男で、政治経験は無い。

大統領に立候補するまでの下積みで学ぶべき『裏』の事情をまったく知らないらしい。

そんな男が就任直後に転生悪魔の異形化を目の当たりにし、その上でそんな啓示を受けた。

ダメ押しに男は企業家の癖に敬虔けいけんな一神教教徒と来ている。

彼は神の言葉を疑おうともせず、同じく啓示を受けた政府や軍の関係者と共に核発射にむけて準備をしているらしい。

今になって思えば、対立候補が圧倒的に有利だった選挙をひっくり返して彼が大統領になったのも、聖書の神の仕込みではないのか？

これはマジで洒落にならない。

多勢に無勢極まった状況を覆す^{くつがえ}為とはいえ、相手の信者を物理的に消滅させようとするとは。

へたしなくても人類滅亡コースだぞ、コレ。

あとガブリエル女史が神を裏切ったのは、天界の存続の為とはいえ、自身の都合で罪の無い人々を消し去る奴のやり方について行けなくなったらしい。

さて、とんでもなく厄介な事になった。

ガブリエル女史の話聞いたのは高天原だったから、日本神話には話は伝わっている。

こつちが動かなくても天照様から多神連合には広がるだろう。

とはいえ、北アメリカの土着の勢力はネイティブ・アメリカンが信仰していた大自然の精霊であり、それも彼等の減少と習慣や信仰の失伝。

さらには近代化や開発によって自然が大きく減少した影響で、天界の影響を押し退ける力は無い。

かといって俺達が攻め入っても、むこうの軍隊やいるであろう天使達と小競り合いをしている内に発射されては意味が無い。

こうなれば、迎撃するしかないか。

なに、大丈夫だ。

核弾頭の直撃なら食らったことがある。

一応は地上最強（笑）なんだから、このくらいの逆境はバーンと跳ね返してみせようではないか！

35話

ガブリエル女史からのリークから程なく、アメリカ大統領からの正式な声明として世界各国で多発する『悪魔病』、即ち転生悪魔の暴走に対する防疫の名目で主要都市への攻撃が宣言された。

発表当初は当選前からの過激発言もあって、『いつものマイクパフォーマンスだろう』と誰も信じていなかったのだが、各国の軍事衛星が米国の軍事基地がミサイルの発射体勢に入った事を察知した事から自体は急変。

当然、ロシアをはじめとする大国も対抗措置に出ようとしたのだが、ここで予想外の事が起きた。

なんとミカエルをはじめとした天使達が降臨し、アメリカの攻撃を『主の御意志』と認めたのだ。

これには世界各国の政府は度肝を抜かれる事となった。

何故なら各国の上層部は神魔の存在を認知しているが、彼等が人間の営みに手出ししていたのは古代から中世初期まででしかなく、近代においては国家や政治にかかわる事は無いとされていたからだ。

だからこそ混乱や宗教的暴走を防ぐ為に、主要な宗教団体の高僧は兎も角として、一般大衆にはその存在は伏せられてきたのである。

『禍の団』のような無法者は例外としても、一神話体系の上層部が公然と政治の表舞台に立つという事、それは即ち神魔が人間の上に立つのに他ならない。

そして、今回のアメリカの暴挙は一神教の神の意思であるという証明でもあった。

度重なる『禍の団』のテロによって求心力が低下していたとはいえ、世界中にはまだまだ一神教の信者の数は多い。

信じる神に見捨てられた事と核攻撃のダブルパンチによって、少ない国民が暴徒と化したことで多くの国が混乱に陥った。

この状況を看過できないと、多神教の神々もまた表舞台に立つ事を決意する。

こうして、一神教と多神連合の闘いは人間社会を巻き込んでその火

蓋を切ろうとしていた。



高天原に設けられた多神連合の本部は重苦しい雰囲気に包まれていた。

各神話の主神が集まったものの、その多くは沈痛な表情を浮かべたまま口を開こうとしない。

アメリカによる世界への核攻撃と一神教の表舞台への露出は、主神の皆様方に多大な戦慄を齎した。

かの大国が所有する核兵器の全てが世界中にばら撒かれれば、人類や動物はもちろん大半の虫や植物も死に絶え、地球が死の星に変貌する事は想像に難くない。

そうなれば、人々の信仰の他に自然現象を依り代としている多神教の神々はその存在を維持できなくなるだろう。

アメリカ政府の背後にいる聖書の神は、異教徒抹殺の他にそこも視野に入れているに違いない。

かと言って、迎撃するにしても多くの問題が残っている。

ここに集まった方々は気付いているのだろうが、神々が核ミサイル迎撃に全力を尽くせば、その間に悪魔や天界勢力が支配地域に攻め込んでくる可能性が高いのだ。

『無限の闘争』などの事情を知らない彼等は天界がここまでの強攻策を取ったことで、むこうが不転の覚悟を決めたと思っている。

女史が口にした聖書の神の復活も、決戦の為に邪法に片足どころか半身を投げ込む勢いでやらかしたモノだと考えているようだ。

だからこそ、彼等は隙を見せる事を良しとしない。

かつての魔女狩りや弾圧を受けた旧神達やそれを見ていた神々は、宗教という免罪符を与えられた者がどれほど残酷な事を成すか知っている。

日本やギリシャを始めとする現世残留組は長年護ってきた自国がその舞台となるのを懸念しているし、ローマや中東の神々は取り戻し

た自身の土地を再び失うのを恐れている。

「彼奴等め、これほどの暴挙に打って出るとは……」

「ガブリエルよ、本当に聖書の神は復活したのか!? よもや、こちらを謀っているのではあるまいな!!」

卓を取り囲む誰も彼もが口を噤む中で、そんな空気に耐えられなくなった神の石柱がガブリエル女史に食って掛かる。

八つ当たりなのは誰しもが気付いているが、止めようとする者はいない。

「本当です。彼のお方は我々の創造主、どうして間違えることができませんようか」

神氣に中てられてもなお、毅然とした態度を崩さないところは四大天使の面目躍如と言ったところだろう。

人形のように表情を変えない彼女に、「面白くないと言わんばかりに舌打ちをした神の石柱が乱暴に椅子に座り込む。

面倒な展開へ発展しなかった事に安堵の息をついていると、女史はヴアーリと共に壁の置物に徹していたこちらへ視線を投げかけてきた。

「姫島殿、一つ問いたい事があります」

『無限』と言われても若輩者である身。

ある程度方針が決まるまではダンマリを貫く気でいたのだが、問われたのならば無視するわけにもいかん。

「どうぞ」

「再び復活なされた主は、その容姿が驚くほど貴方に酷似していました。その理由はわかりますか?」

意外な事に彼女は俺のクローンについて知らないようだ。

『禍の団』から引つ張り上げた(向こうの天界勢力は、それを回収する目的で離反させたかもしれないが)技術なので、天使達を統括する四大天使は把握していると思っていたのだが。

気付けば、事前に知っているバアル様を除いて列席した主神達の間もこちらに向けられている。

バアル様との約定があるとはいえ、下手にシラを切るのは逆効果に

なりかねないか。

「それは奴の依り代に俺のクローンを使用したからでしょう」

「無限殿の複製だと？ そんな物、誰が生み出していたというのだ」

こちらの言葉にアメン様が眉を顰める。

「主導していた者は分かりませんが、製造の為の研究施設は冥界で『禍の団』に所属していた貴族の領地に有りました。どうやらオーフィスとの戦いで飛び散った肉片や血液を素材にしたようですね」

「では、奴等は第三の無限を量産しているというのか!？」

「その心配はありません。俺の強さは権能や神器のように生まれ持ったものではなく、一重に努力の賜物ですから。ただ複製を生み出しただけでは、常人より少し運動神経が良い程度のがキになるのが精々でしょう」

俄かに沸き立ちかけた議会は、俺の否定の声に安堵の息をつく。

「そ、そうか……」

「しかし、逆に言う訓練を積みさえすれば、そなたと代わらないほどの力を手に入れるという事であろう？ ならば脅威になるうるのでは?」

「300倍の重力の中で50tの重石を付けて、基礎から実戦訓練をこなせるならば、そうなるかもしれませんね。あとは核弾頭の直撃に耐える耐久力を身に着けるとか」

俺がそう言うのと神様たちは一斉に目をそむけて『ウン、ソウダネ』とカタコトで言ったり乾いた笑いを浮かべる。

おい誰だ、『やっぱり頭がおかしい』とか言ったのは。

「ふん、こんな場所でグチグチと話していても仕方あるまい。ミサイルは何時発射されるかわからんだ、迎撃体勢を整えるほうが賢明だと思うがな」

「だが、我等が離れている間に土地を攻められては……」

「それにガブリエルは彼奴に最も厚い忠誠を誓った四大天使ぞ。件のミサイル攻撃も罠に我々を呼び込むための餌である可能性もあるではないか」

ダグザ様の言葉に中東や南米の小勢力の神々が消極的な態度を見

せる。

彼等の土地は未だに一神教の影響が強い、現状では攻勢をかける事は難しいのだろう。

会議の最初に知恵の神々から提示された策は、迎撃する者が大気圏まで出張ってミサイルが目標へ向けて加速する前に宇宙空間で破壊するというものだった。

数千発というミサイルを迎え撃つからには戦鬪に長けた者が総出となる必要があり、そうなると迎撃を担当する神話の防衛力は一気に下がる。

他の勢力で穴を埋めると言ってはいるが、そのメンバーを補填する側だって最終防衛網を張る必要があるのだから、有力な助っ人を期待するのは難しい。

要するに、ミサイルを止める役は貧乏くじなのだ。

とはいえ、自分の土地が心配なのは分かるが消極的すぎやしないか？

自分の土地が心配なのは分かるが、核ミサイルが刺さったら人も物も自然も何もかもパーなのだ。

そうなつては土地だけ残っていても仕方ないだろうに。

「おい、どうするんだ？」

「そりゃ打って出るしかないだろ。俺等みたいなガキが呼ばれたのつて、それが理由なんだろうし」

煮え切らない神々へのイラつきを隠そうともしないヴァーリに俺は肩を竦めて見せる。

少し前までなら天照様の一声で事は済んだだろうが、今の俺は何処の勢力にも所属していない。

動かす事が決定事項でも、大人の事情や段取りというものが必要になるんだろう。

遠視や千里眼を総動員してミサイルを監視している神々から発射の連絡があれば、もつと話が早いんだろうが。

「天照様、バアル様。ミサイルの迎撃については俺とヴァーリに任せてください」

「……よいのですか？」

「ええ。俺達は皆様のように護るべき地を持つているわけではありません。迎撃役としては最適でしょう」

「しかし都市一つ、物によっては小国すらも吹き飛ばす兵器だ。いくら無限殿や白龍皇とはいえ、危険ではないか？」

「左様。お主達は聖書の勢力との決戦における切り札、おいそれと失うわけにはいかぬ」

俺達を気遣っているのか兵力の低下を懸念しているのか、なんとも判断に迷う言葉を吐く小規模勢力の方々。

彼等に対して、俺は不敵な笑みと共にこう返した。

「大丈夫です、核弾頭の直撃は経験済みですから。一撃で地殻を抉り取るようなブレストファイヤーよりは全然マシです」

「そうだな。ブラックホール・クラスターの威力を上回るということはあるまい」

「それを言ったらフリーザ様のデスボールの方が威力凄いだろ。幾ら水爆でも一撃で星を吹っ飛ばすほどじゃないだろうし」

「だったらセルのかめはめ波には劣ると見ていいか。うむ、少なくとも死ぬ心配はなさそうだ」

うんうんとヴァーリと共に頷く俺。

はつきり言って核ミサイルの群れなど、ゴジラやマジンガーZER Oに比べたらまだまだ温い。

神ランクは星を砕くレベルの技が出てからが本番なのである。

啞然となっている神様そっちのけでヴァーリと盛り上がっていると、観測班の神様から報告が入った。

ついにアメリカはミサイルの発射準備に入ったらしい。

「すみません、皆様。俺達はこれから宇宙へ上がります。ミサイルを打ち落とした際、高高度爆発で電磁波が出る可能性があるのです、各神話の雷神の方々はこれを地上に降らさないようにしてください」

「なんでだ？ 雷じゃないんだから問題はあるまい」

「物理的破壊は殆どありませんが、コンピュータをはじめとした電子機器が壊れます。そうなれば、今の国家は立ち行きません」

「……………『あいてー』の事はよく分らんが、民が困窮するとなれば力を尽くさぬわけには行かぬな」

「うむ。電磁波というのは雷にくっ付いてくるあれじゃろ。その程度なら幾らでも止めてやるわ」

首を傾げながらも納得してくれたトール様に、菅原道真公が同意する。

これで電磁波攻撃によるインフラの破壊は防ぐ事ができそうだ。

「行くぞ、慎。モタモタするな！」

「わかつてるよー！」

木製の引き戸を開けて外に飛び出したヴァーリを追って、俺もまた会議室を後にする。

取りあえず、玉藻には簡単な報告を入れておこう。

◇

高天原を出た俺達は全力飛行によつて大気圏を抜け、今は青く輝く地球を足元にしている。

『無限の闘争』では何度も宇宙で戦ったが、現実で飛び出すのはこれが初めてだ。

もしかしたら、何時ぞやの真空断層のように『あべしつ!?!』なんて事になるかと思っていたのだが、それは杞憂だったようだ。

生身で宇宙空間もOKとか、ある意味サイヤ人を超えたな。

さて、迎撃の配置だが俺が北半球を担当しヴァーリが南半球を受け持つ。

下では各神話勢力たちが各々の土地を防衛してくれているが、それはあくまで保険だ。

放射能汚染のことを思えば、すべてここで打ち落とすしかない。

玉藻にはマジで怒られたうえに、婚約したばかりで未亡人は嫌だつて泣かれたからな。

核爆発程度で死ぬ事はないだろうが、気合を入れねばなるまい。

氣を練りながら集中力を高めていると視界の下方、地球の方がキラ

りと煌くのが見えた。

程なくして目に飛び込んできたのは、こちら目掛けて上がってくる白いミサイルの群れだ。

「ご丁寧に天使共の護衛まで付いている。

「なんだと!?」 星の外まで迎撃の手が!!」

先頭を担っていた天使が二対の羽根を飛ばたかせて驚愕の表情を浮かべているが、それに構ってやる時間は無い。

界王拳を五倍に引き上げて氣を右手に集中させる。

放つのはもちろん――

「狂雷迅撃掌!!」

天元に向けた手を握り締めると同時に宇宙空間の黒を切り裂いて万雷が降り注ぐ。

紫電の先触れがその身を舐めると、先頭を走っていたミサイルが巨大な火球へとその姿を変えた。

人類が手にした最凶最悪の兵器はその力を遺憾なく発揮し、傍らにいた天使や同胞を飲み込んだ。

それによってドミノ倒しの様に後続のミサイルたちが次々と誘爆を初め、核の炎から逃れた天使達も雷撃によって黒焦げの羽へと帰っていく。

範囲を大幅に拡大した広域殲滅型なので威力は少々心もとなかったが、上手く言ったようだ。

爆風もこっちに届きはしたが、まったく以って問題は無い。

放射能や何やらが気になっていたが、生身で宇宙空間に出て問題ない時点でそんなの効くわけないのである。

そんな感じで滑り出しは上々だが、今の第一陣に見えたミサイルは十数発程度。

まだまだ序盤と言ったところだろう。

こちらの予測を肯定するかのようには、ミサイルの群れは次々と下から上がってくる。

そんな奴等をモグラ叩きよろしく、情け容赦なく雷撃のシャワーで天使ごと塵に還ってもらっていると、護衛の天使たちの他に妙なもの

が混じるようになった。

なんと言えはいいのか、それは赤黒い肉塊だった。

人の顔だの目のない蛇の様な頭だの、はたまた女性の裸体だの。

千変万化と絶える事無く姿を変えるその化け物の姿は、まさに醜悪の一言だ。

「ふあははははははっ!! 恐れ戦け! これこそが世界が穢れきった際に下界を地獄へ変える聖獣ケルビム——」

「どっかで見たと思つたら、アニメの『孔雀王2』じゃねーか!!」

「アツ——アツ——アツ——!?!」

先頭を飛びながら器用に胸を張っていた天使は、雷撃と核の炎によつて汚物ごとこの世から消滅した。

まったく、どうりでデザインがマッドジョージなわけだ。

つか、そんな古いアニメのネタなんて誰も覚えてねーよ!

その後もホーリー・ゴーストだのパタパタ（亀の天使と言ひ張つていたが）だのと、小ネタを挟みながら向かつてくる天使とミサイルを迎撃すること数十回。

ミサイルを放つ間隔が長くなってきたが、こちらもちよつとづつ息が上がり始めてきた。

情けないと言う事無かれ。

広域殲滅型は通常よりも氣と体力を食うのに、何十も連発しているうえに加減の程が分からなかった時は全力に近い形でぶつ放していたのだ。

情けないとは思ふが、バテもするといふものだ。

とはいえ、泣き言など口に来るような場面じゃない。

氣合を入れなおして第何陣かも忘れたミサイルの群れを待ち構えていると、背後から何かが流れるような感覚がした。

咄嗟に身を屈めながら蹴りを放つと、黒に染まった空間から紅い飛沫を上げながら天使が飛び出てくる。

三対の翼に炎の剣を手にした男。

放つ聖なる氣配から、上級天使である事は間違いない。

「どうして分かった? 認識阻害のうえに真空の中であつて氣流で光

を遮断し、音もまた完全に抑えていたはず……」

剣を持ちながらも砕けた左腕を押さえる天使。

「その気流が漏れてるんだよ、未熟者が。どれだけ僅かでも、宇宙空間の中じゃ空気なんて目立つに決まってるだろ」

「言ってくれる……。だが、ここまでの接近を許した時点で、私の目的は達成しているのだ！」

「なに？」

訝しむこちらに答えずに、奴は天元に向けて剣を掲げると声高らかに宣言を発した。

「四大天使が一人、ラファエルの名に於いて告げる！ 天軍よ、在れ！！」

それに呼応するかのように宙域のいたるところを光が奔り、次々と天使たちが生み出されていく。

「見るがいい！ ！これこそがラファエルが誇る天軍の一翼！ 万を超える上級天使を相手にして裁きの炎を止められるか！！」

ラファエルの啖呵に合わせるように、四方八方から放たれる光の槍。

なんとかそれを捌きながら、俺は予想外の事態に思わず舌打ちが漏らした。

上級天使が出張ってくるとは思っていたが、まさかこういう手で来るとは。

今回の作戦におけるむこうの勝利条件は、一発でも多く核ミサイルを地上に落とす事だ。

ならば、単身迎撃を行っている俺やヴァーリに対しては、強敵をぶつけるよりもこうやって足止めをするほうが効果が高い。

今の俺のタフネスならば、上級天使の攻撃など蚊が刺したほどにしかならない。

しかし技を放つ際に受けてしまっただけでは、スーパーアーマーでもついていない限り放出系の技は中断されてしまう。

特に広域殲滅技は通常のモノより調整がデリケートなのだ。

効かなくても数で押し込めば、封じることが可能だろう。

絶え間なく降り注ぐ十字砲火の中、視界の隅にはこれまでに無い規模のミサイル郡が上ってくるのが見えた。

その数はおそらく数百に上る。

背中に冷たいものが奔るのを感じながら無理やりに狂雷迅撃掌を放とうとするが、突如として吹き荒んだ暴風に煽られた事で、大きく体勢を崩されてしまう。

「主の裁きの邪魔はさせん！ 無重力空間の中で風がどれ程の力を持つか、思い知るがいい!!」

他の天使たちが煽られて揉みくちやになるのもお構い無しに風を放ち続けるラファエル。

舞空術の応用で流されるのを耐えていると、頭の中にあるゲージが溜まった事を教える音がした。

これは、もしもの為に習得しておいたもう一つの広域殲滅技が使用できる事を意味する。

しかし、俺はそれを使うのを躊躇した。

何故なら、あの技はヤヴァイ。

具体的に言うと、狂雷迅撃掌の数十倍は危険なのだ。

見た目もアウトだが、操作をミスれば俺でも死にかねないほどに凶悪。

その代わりに出かかりに無敵時間もあるし、威力や範囲だって狂雷迅撃掌を上回る。

使う事が出来れば天使も核も根こそぎ吹っ飛ばせるのは間違いない。

ガードを固めながら、俺は思考を巡らせる。

代替になりそうな技を探してみるが、そもそも広域殲滅が不得手な俺は狂雷迅撃掌を封じられてはこれしか選択肢は無い。

それにあのミサイル郡を逃せば駒王町が爆撃される恐れもあるのだから、迷うことは許されない。

「やるしかないか……ッ！ レイジングストーム!!」

肚を括った俺は、全力で右手を振り抜く事で吹き付けてくる暴風や光の槍を打ち払う。

そして一瞬の隙を見逃さずに足元に両手を叩き付けた。

本来ならば高圧縮された気によって生み出された衝撃波が立ち昇るのだが、今回は違う。

宙域全体に次々と小さな花火が打ちあがったのだ。

「なんだ、これは!？」

辺り一面に咲く光の華に困惑の声を上げるラファエル。

あの花火にはダメージが無いのだから、当然だろう。

だが、これでいい。

あの花火達はこれから放つ凶悪技の前触れなのだから。

「何のつもりかは知らんが大局は決した! 貴様の負けだ!!」

勝ち誇るラファエルなど意にも介さず、俺は頭上に手を掲げた。

そして――。

「来おおおおいツツ! 羅将モン・インパクトオオオオオオオツツ!!」

指が奏でた乾いた音を合図にして、背後から強大なナニカが現れるのを感じる。

チラリと視線を向ければ、ギース・ハワードを模した巨大なロボットが地球を下に仁王立ちしているのが見える。

もつとも、顔が下膨れのマヌケツラだったり、体が寸胴だったり、本物が見たらガチギレしそうなデザインだが。

「なっ!? なんだ、アレは!？」

突然現れた巨大ロボットに騒然となるラファエルを初めとした天使たち。

だが、問題はそこでは無い。

ロボットの名前で分かると思うが、この技はMUGEN屈指のネタキャラである羅将モンからパクったものだ。

そして、オリジナルではあのブツサイクなロボットにはクオブレ……ゲフンゲフン。

息子であるロツク・ハワードが乗っていた。

ならば、俺が呼び出した場合は……

『うええええ!?! なにこれえええええ!!』

『え……これって何かの操縦席なのかしら?』

シメた、この声は朱乃姉と美朱だ!

身内が召喚されるというルールだった場合、最悪赤ちゃん2人組みが呼び出される可能性があったからな。

会心の笑みを浮かべながら、俺は素早く携帯で美朱へと電話を掛ける。

「美朱、操縦席にある『羅』って書かれたボタンを押せ!」

『えっ、慎兄!? なにがいったいどうなってるのさ!』

「何時も通りの『無限の闘争』関連だよ! とにかく、ボタンを押してくれ!!」

『わかった、わかったよ! それじゃ、デッドエンドシユート!!』

「ちよっ!? なんでその台詞!!」

『言わなきゃならないと私のゴーストが囁いた!!』

ブツリと美朱との交信が途絶え、次の瞬間には羅将モン・インパクトはゆっくりと両手を胸元に上げていく。

「ラファエル様、我々はどうすれば……!?!」

「うろたえるな! あのような不細工なデカブツに何が出来る?!」

混乱を見せる天使たちとそれを統制しようとするラファエル。

そうしている間にも羅将モン・インパクトのドラえもんさながらの丸い手が、奴の胸元に寄せられていく。

見れば、核ミサイルの群れもまたこの宙域に次々と侵入を果たしていた。

クライマックスは目の前のようだ。

俺は全神経を羅将モン・インパクトに集中させながら、右の人差し指と中指を額に当てる。

勝負は一瞬。

ゲージがマックスである以上、八割の確率で躲すことが出来るはずだ。

もつとも、残り二割に針が止まればあの世逝きだが。

「ラファエル様!?!」

「クッ!? あのデカブツを破壊せよ!!」

無機物でありながらも体から漲る殺気に気圧されたのか、部下に促される形でラファエル達は羅将モン・インパクトに光の槍を向ける。

——だが、もう遅い。

『羅』

胸元に添えられた両拳の中心に紅い文字が浮かび上がると、奴を中心におぞましいばかりのエネルギーが膨張し、絶対的な破壊の波が周囲を蹂躪する。

「」

言葉を発する暇も無く、光の中に姿を消すラファエルと数多の天使たち。

そして核ミサイルも誘爆すらする事無く、そのエネルギーの奔流に飲み込まれていく。

白い死神の御手がこちらを掴もうとする寸前、俺は瞬間移動によって効果範囲外。

具体的に言うとなヴァーリの傍へと転移していた。

いきなり現れた所為で、黒龍波をブチ込まれそうになったが不幸な事故だといえよう。

「いきなりどうしたんだ、慎」

「いや、ヤヴァイ技を使ったんでな。巻き添えを食う前に逃げてきたんだ」

「お前がそこまで危険視するとは、ブロリーの技でもパクツたか？」

「俺が氣弾を飛ばせない事を知つてのセリフか、それは。もっとエゲツない技だよ。ところで、お前の方はどうだった？」

「問題ない、一発も通していないからな。途中で天使が邪魔をしてきたが、邪王炎殺剣で消し去ってやった」

そう言いながら得意げに胸を張るヴァーリ。

なるほど、見れば周囲にはミサイルの残骸や焼け焦げたり、両断された白い羽根がデブリのように散乱している。

因みにこいつの言う炎殺剣とは、山羊座の黄金聖闘士からパクツた手刀に魔界の炎を宿して斬るといふ、天使如きではどう考えてもオーバークルな技だ。

「たしかに、上手くやってみたいだな。お疲れさん」

「何処へ行くんだ？」

「持ち場に戻る。そろそろ余波も消えてる頃だし、最終点検もせねばならん。ここままでやって『見落とししました』はシャレにならないだろ」「そうだな」

「とりあえず、こつちの点検が終ったら合流するから、お前ももう一度確認しとけよ」

それだけ伝えると、俺はもう一度持ち場に向かって加速する。

こちらが持ち場である北半球に着いた時には、役目を終えた羅将モン・インパクトはその姿を消す寸前だった。

確認の為に美朱に電話したところ、無事自室に帰り着いたらしい。

朱乃姉も問題ないとのことなので、ホッと胸を撫で下ろす事が出来た。

本来ならこういった事も事前に確認しないといかんだが、あの技って二割の可能性で巻き込まれて死んでしまうので、おいそれ使う事が出来なかったのだ。

姉妹の安否確認も問題なかったところで、改めて周辺宙域を確認したところ、天使の気配はもちろん無し。

それどころか、山と有ったミサイルのデブリまで綺麗さっぱり消滅していた。

どうやらあの光はジョーク抜きで何もかもを消し去ったらしい。

流石はラッシュウ攻撃、メイオウ攻撃に勝るとも劣らない威力である。

そのあとも一時間ほど宙域で待機していたが、あれ以降ミサイルが来る事はなかった。

迎撃作戦は上手くいったようだ。

終わったと思った途端に疲れがドツと押し寄せてきたが、我が事ながら無理もないと思う。

事後処理やら置いてきた玉藻やデイルムツドへの釈明やらと問題は山積しているが、まずは羅将モン・インパクトは永久封印しようと思う。

あれで死ぬとか、マジに勘弁である。